

私の生まれた理由

hi—nya

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

R2. 12. 25 完結しました！

R2. 4. 8 タイトルを変更しています（というか、Pixiv版と同じものに戻しました）。旧「花京院典明は……」です。ややこしくてすみません。

ジョジョ三部、スターダストクルセイダースの世界……の基本では勿論なく、きつと並行世界の超片隅のひとつにオリキャラ（といいつつ実はなんやかんやあつてこの世界では生きていた某原作キャラの孫娘）のスタンド使いを介入させて、全員生還を試みた原作沿い改変小説です。

主人公は花京院。失ってしまったたいせつななにかを取り戻す旅にでるようです。

※注意※

花京院とオリキャラのベタな恋愛模様が徐々にガンガンでできます。そんなもの、3部には不要ツツ！ と、思われる方はご注意ください。

加えて、先に謝っておきます！

・ 肉の芽関係、家族関係やらをはじめとする、作者想像による独自解釈、捏造あります。すみませんツツ！

・ オリキャラ、スタンド、ともにありがちで、ご都合設定満載です。

ストーリーも既視感あふれるものかと思えます。すみませんツツ!!

・ 原作キャラ……とくに花京院……がもはや別人かも……。……すみませんツツツツ!!!

上記が許せる方のみ、で、御願致します。誰得感半端ないと思えます……すみません。

※Pixiv様でアップさせていただいております完結済みの拙作の、心残り等を大量に加筆修正したものになります。むこうとは結末に至る過程が若干異なるものになる……かもしれないですし、そんなでもないかもです。

★作者の勉強不足、理解力不足で、失礼や不備が多々あるかと思いますが、ど素人が……と思つて生暖かい眼で見守つただけだと幸いです。よろしければお気づきの

点はご指摘いただけるのもっと幸いです。ゲロ豆腐以下のクズメンタルなのでお手柔らかに御願いでできるとももっともっと幸いです。それにより、作品も作者も精進できたらと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

☆評価や感想、そしてお気に入り、メチャ嬉しいです！ 本当ありがとうございます！
す！ きちんと完結できるよう頑張ります!!

目次

第1章	Prologue	1
	わるいゆめ	6
	はじまり	24
	Still Alive	48
	ここから	68
	命名	73
第2章	Road to Egypt	117
	イツツ・シヨウタイム!	117
	Wonderland	164
	眠れないのはだれのせい?	186
	ARRIGATO	198

	OCEAN	245
	Endless Summer	285
	NO EXCUSE	343
	Stardust Train	378
	Tiny Drops	408
	いつか、また。	438
	RUN!!	491
	Eternal rainbow	520
	正面衝突	529
	ALONE	575

Good night, my de	ねがい (後)	ねがい (前)	エデン	……	It's not a dream	夢の中であいましょう	KARA KARA	SLAVE TO ……	Monster	t	King of the street	MOTEL
e	888	851	841	797	m	750	732	713	701	667	e	622

BLOW IN ☒	なんといい幸せ	となりでねむらせて	赤い糸	僕にはきみがいる	1094	Don't leave me	あなた……なら、かまわない	紅い陽炎	ara	第3章 Tea in the Sah	シラセ	ar
1258	1243	1198	1155	1136			1045	1002			953	924

第4章 The XXX before

the storm

ビリビリ

Too Young!!

(番外編) マイミライ

衝動

核心

The GAMBLER (前)

1449

The GAMBLER (後)

1473

CAGE FIGHT!

月光

第5章 Fateful Day

Blue s y morning

1543

BURN!!

それでもきみには

nightbird

guilty

THE TIME

Shooting Star

主人公

over: .

Baby, you're still

l
a
l
i
v
e

1739

1717

1690

1663

1649

1627

1604

1592

1568

1506

1526

M a n n e q u i n v i l l a g e	(前)	1947
M a n n e q u i n v i l l a g e		1936
S u r v i v e		1921
C a l l i n g		1898
B r o t h e r h o o d		1872
R O O T S		1872
第7章 B L A N K D A Y S		2042
フ メ ツ ノ フ エ イ ス		1842
B L A C K & W H I T E		1806
ヒ ミ ツ		1764
U R E !!		
第6章 C H A N G E T H E F U T		

L O V E P H A N T O M		2286
M o t h e r		2240
G O ! N U D E ! G O !!		2204
G o l d e n r o a d		2150
H E R O		2115
第8章 な が い 愛 光 芒		2084
L o v e & a m p ; C h a i n		2066
p i l g r i m	1978	
H A P P Y B I R T H D A Y		1956
(後)		

E p i l o g u e	あ い の う た (後)	あ い の う た (前)	E P I C D A Y	g h t 	M e s s e n g e r o f d e l i
24342408237223422320					

第1章 Overture

Prologue

〔I〕

カタン、という物音がひとりきりの書斎に響く。

文字の海に溺れるのにも、ちようどうんざりしてきたところだった。睨めっこをしていた、完成間近の報告書から顔をあげ、伸びをする。

「……あ

」
できるだけ物音を立てぬよう廊下を進み、リビングへと続くドアを開ける。

すると、そこには予想通りの人物の物憂げな顔がひとつ。やはりな、と、先程の物音の原因を確信する。

「……どうしたんだい？こんな夜更けに」

「……あ」

「眠れないのかい？」

「うん……」

「そうか……」

その表情には見覚えがあつた。記憶の糸を手繰り寄せるまでもない。そつくりだった。

遙か昔……毎日、見ていた。……それに。

「……じゃあ、ひとつ、『おはなし』をしてあげようか？」

「……おはなし？」

そんな、こどもじゃああるまいし……」

その反応、それこそが、まだまだきみがそうである証だろう……。我慢できずに漏れ出てしまった笑みとともに、愛すべき『こども』を説得すべく、いう。

「ふっ。まあ、そういうわずに。……いいじゃあないか。

明日は休みだろう？ すこし付き合ってくれよ」

「まあ、そうだけど……」

「それに、きみが、ぜったいに、しらない……」

きみにとつて、けつこう、興味深い内容だと思ふけれど？」

「……。どんな話？」

思惑通り、その好奇心をくすぐることに成功したらしい。隠そうとしているようだ

が、興味津々……そう顔に書いてある。

素直すぎるその様子に、またも湧いてきたものをどうにか抑える。一体誰譲りなのか……なんて考えるべくもなく、その心当たりはすぐに頭に浮かんでしまったが。

「そうだね……」。

……ある男が、失ってしまったたいせつななにかを取り戻す旅に出る……。

……そんな話さ」

「ふーん……。なら、御願いしようかな」

「よし。いいだろう。」

じゃあ……まずは、珈琲でも淹れようか」

「……ながいはなしに、なりそうだから」

【Ⅱ】

蠟燭が照らす薄明かりの中、男は闇に吞まれ消えた。

その両の腕のみを残したまま……

砂埃とともに、おびただしい鮮血をまといながら、

その小さな身体を横たえる一匹の獣……

赤く光る満月と星々に見守られながら、

冷たい水にその半身を浸し、ゆっくりと瞳を伏せる青年……

『これが、彼等の未来。このままの、未来』

「……い、やだ！ そんなの、いや！」

『そうですか。』

……あなたという存在は、小さい。

しかし、その存在は確実に周りに影響を及ぼす。

落ちた小さな石が、泉全体に波紋を起こすように……

けれども、忘れないで下さい。

加えた力は必ずみを生み、何処かへ解放を求める……

……なにかを得る為には、なにかしらの代償が、必要だということを』

わるいゆめ

僕には友人がない。

『できない』わけでも、『作らない』わけでもない。

それは存在しえないものなのだ。僕にとつて。

毎日毎日、繰り返される退屈な高校生活。楽しくも：かといつて、辛くもない。勉強も、運動も。大概のことは、器用になんでもできた。人間関係も、当たり障りのないことを言つて、笑顔を張り付けていれば事足りる。

周囲を見て、いつも思う。

くだらないことでいちいち一喜一憂。泣いたり笑つたり、忙しい連中だ。

友情や恋愛。そんな実体もないようなものに振り回されて。

そんな風に感情を動かすほど、強く何かに執着する気持ちなど、正直ちつともわからなかつた。

そこまでたいせつなものなど、とくにない。できるはずがないのだ。僕には。

だから、わからない。当然の事象、といえよう。

なぜか？

僕は『ふつう』ではないから。

かといって、勘違いしないでいただきたいが、別に自らを卑下しているわけではない。しかたのないことなのだ。

そう。これからもきつと僕の人生はこんなものなのだ。

就職の為にそれなりの大学に進学して、食っていく為にそれなりの会社に就職して、社会的な体裁の為にそれなりの女性と結婚して家庭をもち……

そうやって生きていくのだ。

それでいいのだ。希望なんてない。ずっとこの空虚で色褪せた日々を、『それなり』に送っていくのだ……そう思っていた。

……あの日までは……。

1988年、初夏。

梅雨も明けた、一学期終業目前のある休日の昼下がり。僕はケーキと珈琲を囲み、両親と談笑をしていた。

時は数時間前に遡る。

全国統一模試なる、一般的には聞くだけでアンニュイな気分をもたらす……そんなものを他校でサラリと終え、帰路に着いていた。

その道中のことだ。

憂い顔で天を仰ぐ、一人の御婦人の姿が目に残まる。

外国の方だろうか？ 綺麗な金色の髪と翠の目が印象的だった。

「……どうかされましたか？」

なぜか素通りすることができず、気がつけば声をかけていた。

「帽子が、風に飛ばされてしまつて……」

見上げると、街路樹に引っかかったそれを視認できた。

「娘がくれた帽子なんだけど。……母の日に、初めてのお給料で」

困つたように、微笑む。

たいせつなもの、らしい。

「それはいけませんね。」

……僕がとってみましょう。少しお待ちください」

背伸びをし、上に手を伸ばす……ふりをする。

「……」

すると、僅かに届かなかった帽子はふわりと舞い上がり、僕の手元におさまった……
ようにみえただろう。この方には。

「……どうぞぞ。

風とは気まぐれなもの……

時に悪戯をすることもあれば、その逆もあるようだ」

「……。ふふ、そうね。そのようね。

ありがとう」

「では、僕はこれで」

「あ！ 待つて。……お礼をするわ」

「ただいま。はい、これ。」

帰宅後、頂いたものを母に渡す。

——「そんな。お礼だなんて。……僕はなにもしていないので」

「娘がアルバイトをしている店が近くにあるの。」

その売り上げに貢献してあげると思つて。ね？」——

そして御婦人は、顔に似合わぬ押し強さで僕に箱を押しつけ、それこそ風のように

去って行ってしまった。

「あらー！　じゃあ、お茶にしましょう！」

と、これが、このティータイムに至るまでの経緯、というわけだ。

見た目にも綺麗な皿の上のそれを、フォークでひとさじすくって、口に運ぶ。

(……美味い)

―「気に入ったら、御鼻屑にしてあげてね」―

なるほど。たしかに、押す勢いと比例するかの如く、大変美味であった。

ちなみに御婦人の目論見通り、これを機に、しよつちゆう母はこの店を訪れるようになつた。

「典明、すきでしょ？　ここのケーキ」……と、毎回なぜか、そういいながら。

まあ、……まちがいではないわけだが。

「しかし、休日にも模試とは学生も大変だな。夏休みも忙しいのかい？」

「まあね。流石、高二ともなると模試や課外授業が多くて嫌になるよ」

「あら、そんなに根を詰めなくてもいいのよ？」

「やりたいことができる、行きたい大学に行けばいいわ」

こんな僕だったが、両親との仲は決して悪くはない。むしろ、(他家の事情など知るべ

くもないたため推測に過ぎないが……) 思春期の高校生男子にしては、良好な方なのではないかと思う。

そして、先程、ああはいつたが……無論、この、やさしい両親のことは、感謝とともに、それなりにちゃんと……深くおもっている。

同時に、もうひとつ、例外をおもいだしたが……それを語るのはまたにしよう。

「勉強ばかりじゃあ疲れちゃうわ。」

たまには息抜きもしなきゃ！ ねえ、あなた？」

「そうだな。おまえの誕生日もあるし、家族で旅行でもしようか。」

どこか行ってみたいところはあるか？」

*

*

*

8月某日。エジプト、カイロ市街。

「……はあ、はあ……ここ、ここまで、くれば……」

何度も何度も後ろを振り返る。全力疾走によるものだけでは決してない、冷やかな汗が全身をぐつしよりと濡らす。

「なんだ……!? 『あれ』は……! なんだったんだ……」

直感的に……本能で、察知した。

『あれ』は……やばい、と。

父の公約通り、僕の17歳の誕生日祝いを兼ねた家族旅行は実現した。

行先は、エジプト。

幼少の頃から、職業柄海外への出張が多かった、かつ旅行好きな両親のおかげで大概の国には訪れた経験があつた。ゆえに、どうせなら今まで行つたことがない国にしよう……理由などそんな些細なものだ。

クフ王のピラミッド、ギザ台地、古代博物館といった観光地はあらかじめ巡り、遙か悠久の流れを汲む、神秘的な文明や歴史に触れ……奇妙な畏怖が隙間なく僕を取り囲んだ。

そうして、忘れもしない。その、夜のことだった。

「……」

何度も寝返りをうつ。

枕が変わつたからだろうか。壁に掛かった時計の秒針が時を刻む音がやけに耳に付いた。

「はあ……」

諦めたように、溜息まじりにベッドからゆつくりと身を起こす。

そして、すでに寝息を立てている両親を起こさぬよう、ホテルをそつと抜け出した。

深夜。さすがにこの時刻になると、人つ子一人いない。

……狙い通りだった。

しんと静まり返る煉瓦造りの道をあてもなくぶらつき、日本でいうなれば歩道橋のよ
うな、眼下に広がる街を一望できる、小高くちようどいい場所をみつける。

おいおい、治安は？

夜の外国で独り歩きをするなんて……と思われる方もいるかもしれない。

御心配、御忠告には感謝する。が、言っただろう？

僕は、『ふつう』ではない、と。

「……出る」

『相棒』を呼び出す。

きらきらひかる、みどりいろ。

やはりこの漆黒の空に、よく映える。

そんなことをおもいながら、ぼんやりと闇夜に浮かぶ彼を眺めていた。
先程言いかけた、例外。

それは、こいつだ。

物心ついた時からそばにいる、僕の、分身。……半身。

僕にしか、みえない。

僕にとって唯一の……『友だち』

なにをすることもない。

いうなれば、そのように、ただ、異国の夜風に当たって、ひとり……いや、ふたりで物思いにふけりたい気分だった。そんなところだろうか。

……それが、すべての間違いだった。

「はあ……はあ……」

「ひどいじゃあないか……顔をみるなり、逃げ出すなんて」

「ハッ!？」

驚き、顔をあげると、信じられないものが己の目に飛び込んでくる。

そこには確かに振り切ってきたはずの……先程声をかけてきた怪しい雰囲気を纏つた男が不敵な笑みを浮かべ佇んでいた。

長くウェーブのかかった金髪に、暗闇に浮かび上がる陶磁器のように白い肌。その男はギリシヤ神話に出てくる彫像のように、気味が悪いくらい整った外見をしていた。

その完璧さが逆に『人でない』ことをありありと示しているようで、背中におもわず寒いものが走った。

闇夜に光る、真っ赤な二つの目が、値踏みするように僕を見ていた。

かと思いきや、奴は気づけばいつのまにか、なにかを手にしていた。それをパラパラと捲りながら、言う。

「花京院典明君……と、いうんだね」

「なッ!？」

(それは僕のパスポート!? ど、どうやって……?)

肩から下げていた貴重品を入れた鞆。それがいつのまにか消えていた。

カツリカツリ、ゆっくりと尖った靴先を鳴らしながら、奴はこちらに近づいてきた。

「え……! あ……! く、来るな! 来ないでくれ……!」

生命の危機を感じると、交感神経の働きによつて、心拍数、呼吸数の上昇、毛細血管の収縮……いわゆる鳥肌、といった具合に人体には様々な変化が生じる。……と、いっそや生物の授業で習った。

まさか、体感するはめになるなんて。

今すぐ、再び逃げ出したかった。しかし、それはかなわなかった。

全身がなにか、みえないちからによつて圧迫固定されているかのように動けなかった。

「ば、化けも……う、……ぐっ……」

胸が焼け付く不快な感覚。

こみあげてくるものを抑えきれずに地面にぶちまける。

同時に苦味、酸味……毒や腐敗したものを見分けるために発達したといわれている

……危険を身体に教える味覚が口腔内いっぱい広がる。

「おやおや、ゲロを吐くほどこわがらなくてもいいじゃあないか……」

こんな醜態を晒したのは……生まれて初めてだった。

「安心しろ。安心しろよ、花京院」

そんな僕に、本物より本物らしい……厚塗りの優しい声が届く。

「……恐れることはないんだよ。『友達』になろう」

口の端をニヤリとあげ、いう。

駄目だ。うなずいては駄目だ。

逃げろ。いますぐに、ここから逃げろ。

理性と本能。両方からの警鐘が頭に鳴り響きつばなしだった。

「あ……、……ああ……」

しかし、『死にたくない』

今の僕にとつて、他に、それに勝る感情などなかった。

小刻みに震える顎を叱咤し、どうにか縦に動かす。

すると、それを心底楽しそうに見下ろすと、男は言った。

「くくく、よかった。

じゃあ、これは、友情の証……だよ。

受け取ってくれたまえ。」

奴の指先には、鋭い棘をもつ、節足動物風の、『なにか』……

「!?」

それをゆつくりと僕の額に突きつける。

「……うわあああ!!なにをやる気だッ!!」

うねうねと蠢く、気色の悪いものが、眼前に迫る。

「……や、やめろ…ッ！ たのむ……！ やめてくれッ……!!」
「どうした？」

それが『友だち』からのプレゼントを受け取る時の態度かな？
くく……くく……くく……!!」

「……うぐああああ!!」

「……これで、『安心』……できただろう？ 花京院」

「……」

「ゆっくり、眠りたまえ……」

あとでちゃんと、おこしてやるよ。」

「『そのとき』が来たら、な……」

……くく、くくく！ ふははははは!!」

気がついたら、ホテルの両親のいる部屋だった。

ぼんやりとしか、記憶がなかった。

あれはきつと、わるいゆめでも見ていたのだ。
そう思った。

……いや、思い込もうとしていた。

僕の自尊心が、必死にあの記憶に蓋をしている……そうだったのかもしれない。

事実、それからしばらくは、なんの変哲もない『日常』を過ごした。

しかし、夏が過ぎ、秋も深まってきたある日のこと。

その日、は突然訪れた。

——めざめろ……——

——時が来た……——

——行け……——

——……殺せ……!!——

「……わかりました。かならず……」

(あ……!?!? え……!?!?)

「く、くく、くくくくく……!?!」

奴の『言葉』が、頭の中に響いて以降、『僕』の身体は乗っ取られたようにその自由を失った。

「……おはよう、父さん、母さん」

「おはよう、典明」

「おはよう。朝ごはんできてるわよ」

「ああ、……いただきます」

ちがう……。ちがうんだ。

『それ』は僕では、ないんだ……。

「おはよう。花京院」

「……おはよう」

「英語の予習やってきた? オレ今日当たるとなよな」

「花京院君、おはよう」

「…………おはようございます」

気づいて…………くれ…

どうして…………だれも気づいてくれない…………？

しかし、気づくものなど、だれひとり、いなかった。

僕の、『異変』に…………。

両親、学校の人間…………だれも。

…………報いなのだろうか…………

みえないにんげんと、心をかよわせられるはずなどない。

諦めていた、その…………。

「転校？」

「え？ こんな時期にか？ 同じ都内なのに…………」

「どうして？ 今の学校もいい学校じゃない」

「……必要なカリキュラムが、充実しているんだ。

駄目なんだ。どうしても……」

『自分』は両親に訴える。ある『目的』のために……

「……あの学校でない」と

「典明がそんなに強く希望を言うなんて、めずらしいわね……」

「そんないうなら、もちろん、かまわないが……」

「ありがとう、父さん、母さん……」

着々と計画通りに事が進む中、『自分』はひとりほくそ笑み『僕』に語りかける

「くくく……」

頭の中に、その声ざりざりと不快な振動となつて響く。

「これでターゲットの高校に侵入する準備は万端だ」

「……悔しいか？」

「おまえの身体は、すっかりわたしの支配下だ。

だれも気づくことなど、ない……だれも、な」

「通常は、元の意識など、欠片ほども残さないそうだが……

今回は特別らしいぞ。よかったな」

「あのお方の命令だ。」

お前にとくと、みせてやれ……とのこと」

「……大切な『友だち』の雄姿をな！ ククククク……!!」

「すべてはおまえが悪いのだ……」

脆弱な精神こころしかもたぬ、おまえがな」

「せいぜい呪うがいい……己の弱さを!!」

はじまり

いつもどおりの朝だった。

けたたましいアラームの音が鳴り響き、ぼんやりと目をあける。

はじまりの時間を容赦なく告げてくる……それを止めるべくベッドサイドに手をのばす。

彼（彼女かもしれない）は仕事を忠実に実行してくれているだけにもかかわらず、こうして毎朝疎まれ、恨みのこもった全力の一撃で頭を叩かれる。よく考えたら可哀想な気もするが、低血圧な持ち主のもとにきたのが運の尽きだろう。……もしかしたら恨まれているのはこっちの方かもしれないが。

しかたなく起き上がろうとするも、その寒さに身震いし、おもわず再び布団に戻る。あと一週間もしないうちに師走ではあるが、これほどだっただろうか？ そもそも冷え性で、昔から寒がりなのだ。四季のうち最も苦手な、この季節がまたやってくるのは憂鬱だった。

まだ、あたたかくやわらかなここで、ふわふわとまどろんでいた……

しかし、そんな甘い願望は叶うべくもないとわかってはいる。今日も朝一番から受講している講義があるのだ。

二度寝という、甘美な誘惑をなんとか振り切り、布団から出て、準備を始める。

「全出席なんて無駄じゃん。最低限出られるときだけ出てたらいいんだよ。だって同じなんだから」

「しかもそんなに一年のときからからがつつ単位とらなくても。来年またとれるでしよ？」

先日、同級生の女の子たちに言われた言葉を思い出す。

しかし、個人的に、その意見にはまったく同意できなかった。

講義を受けるのであれば、聴けるだけ聴いておかないと損ではないのか。という貧乏人根性がひとつ。

そして理解力も貧しい私のこと、内容も一度抜けたらわけがわからなくなってしまう。それでは意味がないではないか。

それに全出席……コンプリートという響きが、自分はけっこう好きだったりする。

……理由なんて、そんなささいなものだ。

あと、とれる単位はとれるうちにとりたかった。またとれる……なんて、未来のことがなげわかるのか。いつ、なにがあるかなんて、だれにもわからないのだから。

よく真面目、だとか言われるけれど、そんなふうにならなければ、それとはかけ離れた理由、ただ単に小心者なだけなのだ。

あとはいかなければ、楽あれば苦あり……の逆が好きなだけだ。たとえ無駄な苦勞になろうとも。

ショートケーキの苺はもちろん最後にとっておく。そういうやつだ。

ただ、そんなこと、もちろん彼女らには言わない。

自分だって、できることならこうしてずっとお布団と仲良くしていたい。元来怠け者なのだ。

ありがたいことに、仕送りの足しにと始めたバイトのシフトだって増やしてくれとも言われているし、やりかけのゲーム（ちなみに今ハマっているのは勇者が仲間たちと大魔王を倒す旅に出る、あれ、だ）だって続きが気になってしょうがない。

だから、彼女らの言い分も理解はできる。

他にもやりたいことがあるのだろう。その優先順位なんて個人の自由だ。

自分の方が少数派の意見だろうということはわかっていた。

なにより、こんなこと言ったらイイ子ぶっている……とか面倒くさいやつだ……なんて思われることは必須だ。互いに微妙な気分になるに決まっている。

じぶんのことなんて、わかってもらえないわけがない、それもわかっていた。

毎朝のことだが、同年代女子が聞いたら確実に驚くであろう、短時間で準備を終えた私。

まだ覚醒しきっていない頭をかかえつつ、部屋をでて、エレベーターで1階に降りる。マンションのエントランスを出たところで、吹き抜けていく木枯らし。

おもわずコートの前をしつかりと止める。

北風と太陽、の旅人もこんなきもちだったのだろうか、などと思いながら。

大学にむけて、並木道を歩いていると少し体も温まってきた。

春は桜色に染まっていたこの通りの木々も、今は静かにその枝を伸ばしているだけだ。

華やかな満開の時期もちろんいいけれど、厳かなこういう雰囲気もけっこう好きだった。

長い時間をかけて、再び咲き誇るその日までの準備をしているのだとおもえば一層だ。

途中、神社の境内へと続く石段のふもとあたりで、立ち止まる。

「…………おはようございます」

しゃがんで植え込みに目を凝らし、目的の黒い四つの瞳をみつける。

「にゃー!」

「今日も仲良しですねえ。……ひゃー、可愛いよおー!」
雉猫の親子だ。

先月はじめて出会ってからというものの、仲良くしてもらっている。彼らとしばらく遊んでから大学に行くのが毎朝の日課となっていた。

そつくりの毛並み、そつくりのしぐさでじゃれあう二匹。遺伝子の素晴らしさに思いを馳せていると仔猫がこちらへ寄ってきた。あごのあたりをなでてやると、ごろごろと気持ちよさそうにのどを鳴らしてくれる。

こうしていつもいつい時間忘れてしまうのだ。

そのために残りの道のりを全力疾走することになるのもしばしばだったが……本望だった。

……こんなふうに、すべていつもどおりだった。

目覚ましにたたき起こされて、しぶしぶ大学にむかうのも。

桜並木道を、ぼんやりとあるくのも。

猫の親子とたわむれすぎて遅刻しそうになるのも……。

いつもとなんら変わることのない。

なんてことない、『日常』。

しかし、そんな日常のなかに突如、現れるものだと知った。
……非日常、は。

「きゃー!? ジョジョ!?」

突然、石段の上から、学ランを着た高校生が降ってきた。
女の子たちの悲鳴とともに。

おもえば、それが、はじまり、だった。

私の、『奇妙な冒険』の……。

(あぶな……っ！ あっ!?)

アスファルトに叩きつけられる、そう思った瞬間だった。

男性は、見事に受け身をとって、着地する。すぐに立ち上がったところを見ると、それほどの怪我はないのだろう。ほっと胸をなでおろす。

ちなみにびつくりしたのか、母猫は仔猫をくわえて繁みの向こうに逃げてしまった。なごり惜しくそれを見送り、騒ぎの方をみやる。

『ジョジョ』と呼ばれた高校生は大柄で身長が190cmはありそうなのが印象的だった。

「ジョジョ！」

「ジョジョ!!」

「大丈夫!？」

駆け寄っていくたくさんの女の子たち。口々に心配する言葉を発しながら取り囲む。そこへ、ひとりの、別の男性が石段を優雅に降りてくる。

緑がかかった学生服に身をつつみ、学生鞆を持っている。ということは彼も高校生なのだろう。

ゆつくりと『ジョジョ』……さんに、近づいていく。

少し距離があるため、会話の内容まではわからないが、なにかを渡しているようだ。そしてその場を離れ、こちらへ向かってくる。

そのひとが私の横を通りすぎる。

風をからめとりながら、彼の首にまかれた長いマフラーが翻る。

一瞬のことだった。

それにもかかわらず私の心臓は、停止しそうなほどの衝撃を受けた。
おもわず立ち上がり、その背中をみつめる。

「あ、……あれは……あのひとは……」

みえた。

たしかに、みた。

彼から……きらきらした、みどりいろの……なにか、が。

そして……。

おもわず、おいかけていた。

10分ほど歩いただろうか。

たどりついた場所は近所の高校だった。

通学時間帯だ。高校生（推定）である彼の向かう先として、これほどあてはまるもの

はないだろう。

ためらいなく門をくぐる彼に少し遅れて、ためらいながらも高校敷地内に侵入する。昨年までは自分も高校生だったとはいえ、制服の少年少女に紛れて、ひとり私服。

浮いている。おもいきり、自分のほうが不審者だ。

講義にも確実に遅刻だろう。

さっきのだって、ただの見間違いかもしれない。

そうでなくても、だ。

はたして、かかわることが、いいことなのか……どうなのか。

そんなことはわかりきったことだった。

にもかかわらず……

なぜだろう？ どうしても、ひきかえすことができなかつた。

理性と裏腹に、なにかに操られているかのように、自分の脚が歩みをとめることは、なかつた。

誰かにとがめられやしないか……それ以上に、彼にみつかったらどうしようか……

どきまぎししながら、一定の距離を保ち、あとを尾ける。

しかし、彼が校舎の角を曲がったところで見失ってしまふ。

(あれ?! しまった……)

あたりを見回すも、彼の姿はみえない。

(……………つちな、気が……………)

しかたなく、勘だけを頼りに校舎を外からぐるりとまわるように探していく。すると、ある部屋から悲鳴が聞こえてきた。

(……………は……………保健室?)

「うわあーッ!! せ、先生ッ!? なにをしているんですッ!?」

「や、やめてください! ひいいーっ!?」

「まさかこれが、万年筆にみえるなんて……………」

窓から漏れる、誰かと誰かが争うような声。室内はパニック状態のようだ。

そんななか、さりげなく窓枠に腰かけて、中の様子を観察している、彼をみつけた。その表情は冷やややかで、冷徹そのものだった。

……………でも、なぜか、どこか……………。

ただひとつ。直感的に、この騒ぎは、彼が、なにか、をしているからだ……………というの
が、わかってしまった。

「それじゃあ、よくッ! 見てッ……………」

「うわあああーッ!!」

ひととき大きな悲鳴が聞こえた。

「やめてくださいッ!!」

とつさに叫んだ。室内ではなく……彼にむけて。

ほんとうに、とつさのことだった。

「?! なにイ?!」

視線が、ぶつかる。

「……」

(やっぱり……そうだ……)

きづいて、しまった。

ならば、臆するわけには、いかなかった。

私の瞳はただじっと、彼の瞳をみつめていた。

「ひ、ひいいー!!」

「に、にげろ!」

一瞬、彼がこちらに気をとられた隙に、高校生二人が私の近くにある勝手口のようなドアから飛び出してきて、屋外へと逃げていく。

「ちっ! ……やれ」

「ぐっ!」

開け放たれた扉から室内の様子をうかがうと、なんとさつききの、『ジョジョ』さんと、保険医の先生らしき女性が取っ組みあいをしているのがみえた。

「……。女、いま、わたしにやめろといったのか？　なんだ貴様は……？」
氷のような目をむけて、彼は私にいう。

しかし私が声を発する前に、それを聞いたジョジョさんが、女医さんを押さえつけながらいう。

そちらの彼の方からも、人型の、『なにか』、がでていた……。

「てめー、こそ、なんだ……?!」

石段でおれの足を切ったのも、この、女医の、変貌ぶりも……

すべててめーの仕業か、花京院！」

「……そのとおり。その女医はわたしのスタンドが憑りついて操っている。

わたしのスタンドを攻撃することは、その女医を傷つけることだぞ。承太郎」
マリオネットを手にした、花京院……とよばれた彼がいう。

「!？」

(花京院……？　す、スタンド……？　)

「てめえッ！　な、何者だ!？」

「わたしのスタンドの名は『ハイエロフアント・エメラルド法皇の緑』」

わたしは人間だが、あのお方に忠誠を誓った」

(あの……お方……?)

「だから! ……きさまを殺す!!」

彼が人形を操ると同時に、女医さんが再び暴れはじめ、承太郎……さんに飛び掛かる。その、口の中に、なにか……が潜んでいるのがみえた。

「く、口のなかに……!」

「!」

「うおおおお!!」

「なにっ!?!」

次の瞬間、承太郎さんは女医さんを押さえつけ、そして……

キスをした。

(わ、わわっ!)

そんな場合ではないが、おもわず目をそらす。

テレビ等ではなく……こんな間近でキスをしている人を見るのなんて初めてだった。変なところで戸惑っている私をよそに、次の瞬間、承太郎さんの人型の、『なにか』が、口の中から『なにか』をひきずり出した。

「この先生をキズつけはしねーさ!」

こうやってみれば、なるほどりつくしか芸のなさそうなゲスなスタンドだぜ……、
緑色でスジがあつて、まるで光つたメロンだな！」

その言葉になぜかおぼえてしまう、違和感。

(え……でも……)

「はっ!？」

(だ、だから！ そんな場合じゃないって……!)

「ひきずり出したことを……後悔することになるぞ……承太郎……」

「またも一瞬あさつてな方向に飛んでしまった私の意識は、不穏な言葉により引き戻された。」

「つよがるな。額に指のあとがくつきり浮き出てるぜ。」

「このまま……きさまの『スタンド』の頭をメロンのようにつぶせばきさまの頭もつぶれるようだな。」

「ちよいとしめつけさせてもらうぜ。気を失つたところで、きさまをおれのじじいの所へ連れていく……おまえにとても会いたいだろうよ。おれもD I Oという男のことが、すごく興味あるしな」

(じじい……? デイオ……?)

「ふたりの因縁は一体なんなのだろう……そんな疑問に気をとられていた瞬間だった。」

「はっ!？」

「えっ!？」

(なに……? あれ……)

気づくと承太郎さんのスタンドに頭を掴まれている彼のスタンドの手から、緑色の液体がボトボトと流れ落ちている。

「くらえ、我がスタンド『法皇の緑』の……」

「花京院! 妙な動きをするんじゃないやあねえ!!」

「エメラルドスプラッシュ!!」

上下に向かいあわせた両手の隙間に流れる緑色の液体。そこから、無数の宝石のような礫が発射される。

それは、凄まじい勢いで承太郎さんのスタンドを吹き飛ばした。

主も同時に保健室の壁を壊すほどの衝撃で、たたきつけられ、その口からは鮮血がほとばしる。

「エメラルドスプラッシュ……」

我がスタンドの『法皇の緑』の液体にみえたのは破壊のエネルギーの像ヴィジョン!

きさまのスタンドの胸をつらぬいた。よってきさま自身の内臓はズタボロよ。そして、その女医も……」

「あっ！」

女医さんの耳や口からだらりと一筋の血液が流れ、その身はぐらりと倒れ臥した。

「いったはずだ……わたしの『法皇の緑』に攻撃を仕掛けることはその女医を傷つけることだと……」

（そ、そんな……）

「わたしのスタンドはきさまのより遠くまで行けるが広いところは嫌いだね。

必ず何かの中に潜みたがるんだ……ひきずりだすと怒ってしま……

だから、のど内部あたりを出るときキズつけてやったのだ。

おまえが悪いのだ。承太郎、おまえの責任だ。これは承太郎……おまえのせいだ。おまえがやったのだ。最初からおとなしく殺されていればこの女医は無傷で済んだものを……」

「……」

「さ、とどめだ。……ん？」

なにも考えていなかった。

ただ、体が、勝手にうごいていた。

「……だめ……です」

* * *

なんの罪もない人たちを、相棒が、傷つけていく。

やつの『言葉』が頭の中に響いて以降、『僕』の身体は乗っ取られたように、自由を失った。

その命令に忠実に従い、己の能力を非情に奮う『自分』をなす術もなく、ただ、みているだけ。

……地獄だった。

そして、相棒の攻撃をもろにくらい倒れた彼に、なおもとどめを刺そうとする『自分』。
(……やめろ！ やめてくれ！ ……ちくしょう！)

その懇願の声は『自分』に届くことはなく、むなしく響くだけだった。

しかし、そんな僕の前に、立ちはだかるひとがいた。

「……………だめ……………です」

(え……………?)

悲痛な表情を浮かべ、そのひとは懸命に訴えかける。

「やめてください！ あなたは！ ほんとは……！」
(な!?)

先程も自分をとめてくれた、見知らぬ、あの彼女だった。

「お、おまえ……?! ……ば、かやろう。来るな……！」

倒れ臥した男から驚愕と制止の声が飛ぶ。

「先ほどから……一体なんだというのだ……本当に。」

どこの誰だかしらんが、愚かな女だ。死にたければお前から死ね」

そして『自分』が冷徹非道な言葉と視線を彼女に向けて投げると同時に、相棒が禍々しきエネルギーをその手掌に集中し始める。

(だめだ……にげてくれ……！ ……たのむからっ……！)

この至近距離からあの攻撃をそんな華奢な身体で受けたら……致命傷は必死だ。

「……くらえッ！」

(……やめろおおッ!!)

渾身の力を、意識を、集中する。

動くな、とまれ、と……。

「……な、なんだ……？ ……うごかん……！ くっ……」

「え……？」

「……ちっ……こいつまだ抵抗を……めざわりな」

「あ、あなた……！」

対峙する二人から、驚きと戸惑いの声が漏れる。

「こ、の……！……敗者はッ、おとなしくしておけッ……！」

忌々しそうに『自分』が吐き捨てた瞬間だった。

（ぐ……ああああ!!）

僕の頭を稲妻に貫かれたかのような激しい疼痛が包む。

「はあはあ、こんどこそ……死ねッ！」

（……く、くそ……）

どうにかしたかったが、限界だった。

無情にも、相棒から放たれた無数の破壊のエネルギー弾が彼女を襲う。

（くっ！）

みていられなかった。

そうだ。ずつと、おもっていた……。

もう、いつそ、みえなければ……。

(はっ……………！)

しかし、そこで気づく。

(……………よく考えたら、このひと……………。

さつきから……………

みえて、いる……………？

エメルドスプラッシュが。

……………ハイエロフアントが……………)

(みえている)

(それは、すなわち……………、まさか……………!?)

「な、なにイ!？」

「……………させない……………」

攻撃は、彼女に当たる前に、すべてはじきとばされる。

(このひと……………も??)

その身体は、綺麗な薄桃色の光におおわれていた。

「そ、そんな……?!」

そして、まっすぐに、『僕』の瞳をみすえ、いう。

「だいじょうぶです……もう、これ以上、『あなた』にだれも、傷つけさせない……！」

「おまえ!!」

「なツ!! き、きさま、スタンド使い!!」

(だいじょうぶ……だって……?)

……いま、たしかに……

……このひと……、なんで?

なんなんだ、ほんとうに……。(

僕の頭の中は、そんな疑問でいっぱいだった。

「おい……てめーの相手はおれだろう……」

「はっ……!! 承太郎!!」

『自分』が彼女のほうに気をとられている隙に、いつのまにか彼が立ち上がっていた。喧嘩の相手は病院送り……気に入らねー奴は先公だろーがぶちのめす……

この空条承太郎はいわゆる不良のレッテルをはられている……

だが、こんなおれにもはき気のする『悪』はわかる!!」

「『悪』とはてめー自身のためだけに、弱者を利用し踏みつけるやつのことだ!!」

スタンドつつーのは厄介なもんだぜ……

やられたやつにも法律にも見えねえし、何が起きたかなんてわかりやあしねえ……。

だから……」

「おれが裁く！」

「承太郎さん……」

彼女が呟く。

(……承太郎……)

空条承太郎。

DIOの宿命の相手……ジョースター家の末裔。

——この男も……『運命』に翻弄されているのだろうか……—

先程、あの石段の上で初めて彼を見た時に思った。

しかし、ちがった。

『翻弄』など、されていない。

真つ向立ち向かっている……『運命』に。

いや、そんなもの打ち破る、強さがある。この男には。

(君は……恰好いいな……。『自分』とは、おおちがいだ……)

直感した。この時。

『自分』は彼に、勝てないだろう、と。

そんな中、なおも『自分』は続ける。吐き気のもよおしそうな台詞を。

「それはちがうな……『悪』とは敗者のこと……『正義』とは勝者のこと……だ。

よくいうだろう？ 勝者が歴史を作る……そんなものだ。

勝利がすべてよ！ 敗けたやつが『悪』なのだ」

言いつつ、ふたたび破壊のエネルギーを練り始める。

「これで終わりだ！ くらえ、エメラルドスプラッシュュ！」

迫りくる攻撃。にもかかわらず、承太郎はニヤリと笑う。

「……なに？ 敗者が『悪』……それじゃあ……やっぱリイ！」

「てめーのことじゃあねーかアーツ！」

「なにイツ！ エメラルドスプラッシュュをはじき飛ばしたッ！」

刹那、ハイエロフロントを掴み、しめつける！

「オラオラオラオラオラオラ！」

裁くのは、おれのスタンドだッー!!」

無数の拳のラッシュをくらい、ふつとばされる。

「ぐはあアッ!!」

激しい衝撃。そして、頭に浮かぶおもい。

(……………よかつ……………た……………。……………これで……………。)

(……………もう、だれも……………きずつけなくて……………いいんだ……………)

『自分』とともに、『僕』の意識も……………ここまでのようだ。

薄れゆく意識のなか、僕の心のほとんどは、その安堵感で占められていた。

しかし、ひとつだけ……………たったひとつだけ、気になった……………。

「あ……………ああつ……………！」

怒涛の展開に呆然と立ち尽くしているこの女性……………。

(……………このひとは……………いった、い……………)

Still Alive

「あ……あ……あ……！」

突然の急展開になすすべもなく突っ立っていた。

「おい、おまえ……無事か？」

「はっ……は、はい……あ、貴方こそ、だいじょうぶなんですか？」

そんな私に声をかける承太郎さん。

かがんで、倒れている保険医さんの様子を見つ、続けていう。

「さつきはふいをくらってちよいと胸を傷つけただけだ。

……女医も、手当てをすれば、助かるか」

「そ、そうなんですか……よかつ……。ハッ……！」

我に戻り、激しい攻撃をくらい窓際にまでふつとんでしまったひとつのもとにかけよる。

「し、しつかり！ しつかりしてください！！」

「心配すんな……言ったとおりだ。殺してはいねえ」

「う……」

みると、傷だらけ血まみれで、しかも意識はないようだが、確かに……生きてはいた。
「ほ、ほんとだ……」

とりあえず少しだけほつとする。

「おまえ……おれたち、こいつに殺されるとこだったんだぜ？」

「そ、それはそうですけど……！」

呆れたように眩きながら、承太郎さんもこちらへ様子をうかがいに歩み寄る。

すると、私の顔を見て、なにかに気づいたようにこういった。

「……あん？ おまえ……たしか、ケーキ屋の……」

その言葉をきっかけに、自分の頭にも閃く。

「え……？ あ！ もしかして、ホリイさんの、息子さん？」

（そうだ！ 背の高い、学ランの……それに、名前、承太郎君、だった！）

バイト先の常連さんの息子さんだ。遠目にしか見たことはなかったが、その特徴的なシルエツト、および彼女との会話の端々に出てきていたその名前には覚えがあった。

承太郎君は何かを考えるように一瞬押し黙ったあと、倒れている彼の方へと顎を軽くしゃくり、私に訊ねる。

「……。おまえ、こいつの、知り合いか？」

「ううん、知らない。今日はじめてあつたひと……だけど……」

その問いに答えようと口を開いたところだった。

室外に感じる、がやがやとたくさんの人が押し寄せてくる気配、そして、誰かが通報したのであろう。パトカーのサイレンの音も聞こえ始めた。

「ちっ！ 騒ぎがでかくなつてきやがった。ずらかるぞ」

いいつつ、承太郎君は気を失っている彼をかつぐ。

「こいつにはいろいろしゃべってもらわなくてはいけないからな……」

「……おまえも、こい」

「う、うん……」

道すがら、尋ねられる。

「……おい、ケーキ屋。おまえなんであんなどこにいた？」

「え、私？」

えつと……朝、貴方が石段から落ちてきて……このひとと話しているのを偶然見かけて……

そのときに、彼のあれ、がみえて……気になつて……

こつそり追いかけて来たんだけど……」

自分でもまだ俄かに信じがたい出来事を目の当たりにして戸惑っていたが、どうか、順を追ってありのままを説明する。

「ああ。……スタンド、な。」

「おまえも、あのピンク色の……。あれは、なんだ？ 昔から使えるのか？」

「……あれは……」

一瞬、躊躇したが、なぜか隠す気にならず、話してしまっていた。

「……うん。私の命が危険な時とか、出てきて衝撃から護ってくれるんだ。意図的に、ではないし、使うっていうのはなんか違う気もするけどね」

「……命の危機ってのは？」

「え？ 車に轢かれたり、高いところから落ちたり……とか」

「そんな経験が何度もあるってのはどうなんだよ……」

「え？ い、いや、だから、今まで、えーと、そんなにないよ。うん。」

7、8回……くらいかな。たぶん」

今日のを入れずに……だが。」

「……」

十分多い。沈黙がそう語っている気がした。取り繕うように、続ける。

「母が言うには、これは私の家の女性だけに代々現れる、守護霊のようなもので……

然るべきときに、私と、私の大切なものを、護る力、だ、って」

「護る力、か……」

「スタンドっていうんだ……。この能力……」

みえるひと……もっているひと、沢山いたんだ……このひとも、貴方も……」

「沢山、じゃあねーだろうが……」

……こいつのことは、本当に知らないのか？」

「うん。むしろこつちが聞きたい。だれ？」

「……。それにしちやあ、やけに、こいつをかばうじゃねえか」

「へっ!? そ、それは……」

そうこうしているうちに、目的地に着いた。

(こ、この豪邸……承太郎君の家だったんだ……)

近所にこんなお屋敷があることは知っていたが、まさか足を踏み入れる日がこようとは。

その長身をひよいとかがめつつ入る承太郎君に続いて、自分も玄関の門をくぐる。

「お、お邪魔します……」

縁側を進む承太郎君についていく。

庭では承太郎君のお母さん……ホリイさんが洗濯物を干していた。

「あ、承太郎ったら今学校でわたしのことを考えてる。息子と心が通じ合った感覚があったわ！」

「……通じ合ってねーよ」

「きやつ！」

そんなお母さんにツツコミを入れつつ、通り過ぎようとする承太郎君。

当然だが一目みて異常な状況に気づき、ホリイさんがいう。

「承太郎！　が、学校はどうしたの……？」

それに、その人は……？　血が……！　ま、まさか、あなたが……？」

「てめーには関係のないことだ。おれはじじいを探している。どこだ？」

「ぱ、パパなら、茶室に……アヴドウルさんというと思うわ」

それ以上なにも説明しようとせず、再び歩きはじめる承太郎君。

息子はともかく、私はそういうわけにもいくまい。せめて挨拶だけでも、と、声をかける。

「あの……ホリイさん、こんにちは」

「あらー！ 『シヤンティ』の仁美ちゃんじゃない！ どうしたの!?」

「え、ええと……これにはいろいろと事情がありまして……」

しかし確かに、なんと説明したらいいものかと、口ごもっていると制された。

「……いいから行くぞ」

「う、うん。ごめんなさい……ホリイさん」

「ええ……」

俯くホリイさん。

（……でも、お母さんなんだから、もう少し優しくしてあげたらいいのに……）

そんなことを考えていると、角を曲がろうとしたところで承太郎君がいう。

「おい……今朝はあまり顔色がよくねえぜ……元気か？」

「……！ いえーい！ ファイン！ サンキューー！」

「フン」

「……ふっ……！ 」

おもわず、笑みがもれてしまう。

「……うるせえな」

（……余計なお世話だった、みたい）

ある部屋の前で承太郎君は立ち止まり、障子を開ける。そこには二人の外国人男性がいた。

初老の欧米人の方と、褐色の肌で頭にターバンを巻いた、30代くらいの方だった。

「なんだ？ 承太郎……はっ、そ、その男は?! そしてその娘は?!」

「こいつは、……D I Oの刺客だ。ぶつとばしてやったが」

「…」

彼を下ろしながら承太郎君がいう。

「で、こいつは、通りすがりのスタンド使い。……敵じゃあ、ねえ。……おそらく」

「お、おそらくって……」

「君は……?」

承太郎君と話していた、初老の男性に、じっと目をみられる。

「あ、あの……」

「ふむ。……わしは、承太郎の祖父、ジョセフ・ジョースター、じゃ。

……君の話はあとで聞こう。まずは、その青年からな」

ジョースターさんが横たわる彼の様子を確認し、いう。

「なるほどな……」。

見ろ……この男がなぜD I Oに命令に従いおまえを殺しに来たのか……

その理由が……ここにあるッ！」

いいつつ、ふわりと長い、一房の前髪をめくる。

その額には、ひくひくと動く、気味の悪いクモのような形をした肉片が埋まっていた。

「なんだ……これは……？」

「それは『肉の芽』……D I Oの細胞だ……」

(は？ ……え？ さ……細胞？ でい、D I Oって……何者……？)

私の顔全体に浮かんだ疑問符に気づいたのかジョースターさんが説明をしてくれる。

「D I Oは……簡単にいうと、4年前に100年の眠りから復活を遂げた、邪悪な吸血鬼

じゃ」

「……は、はあ……」

……が、逆に疑問は増すばかりだった。

それ以上聞くに聞けない私をよそに、ジョースターさんは続けた。

「肉の芽は彼の精神に影響を与えるよう、脳にうちこまれている……」

これによって支配して、この花京院という青年に我々を殺害するように命令したの

だ」

幽波紋(スタンド)……、それを使役する人々……、復活した悪の吸血鬼……、人を

意のままに操る細胞……。

正直、まったく話についていけなかつたが、ひとつだけ、すごく納得がいった。
(それで、か……)

「……わたしも出会つたんだ。四ヶ月まえ、カイロで……」

もうひとりの男性が、いう。たしか、アヴドウルさんといつただろうか。

「わたしの職業は占い師だね。店の階段に、ヤツは静かに立っていた……」

その異様な雰囲気……すでにジョースターさんと知り合ひだったわたしはすぐにはすぐにはわかつた。

こいつがD I Oだと……。

ヤツはいつた。

『君は……普通の人間にはない特別な能力を持っているそうだね。』

ひとつ……それをわたしに見せてくれるとうれしいのだが』

「そして、やつはわたしにむけて肉の芽を伸ばそうとした。……恐ろしかった。

わたしは必死に逃げた。闘おうなどと考えもしなかつた。

まったく幸運だった。話を聞いていて、D I Oだと気づいたから、一瞬早く窓から飛び出せし、地の利もあつて、追走からなんとか逃れることができた……」

「そうでなければわたしも……この青年のように……」

『肉の芽』でDIOに忠誠を誓わされ……『スタンド』をやつに利用されていただろう」
「そして、脳を食いつくされ……死んでいたろうな……」

「なっ!?」

(……え……?)

「この男はもう助からん。あと数日のうちに死ぬ」

(……死……?)

おもわず叫ぶ。

「ちよ、ちよつと待ってください！ このひとは……！」

……り、利用するだけしておいて？」

「……」

「……あんなに……つらいめにっ！ ……そのうえ……！」

「DIO……は、そういうやつ……なのだ。気の毒……だが」

「そんな！ な、なにか！ なにか、方法はないんですか?!」

「……ない」

首を横に振られる。

「そ、んな……」

力が抜け、その場にへたりこむ。

「……死んでいた？」

そこへ届く力強い声。

「ちよいと待ちな。こいつはまだ、死んじやあいねーぜ！」

「承太郎君……!？」

「おれがひっこぬいてやるッ！」

「承太郎ッ！」

「……こいつの脳に傷をつけず、ひっこぬく。」

おれのスタンドは一瞬のうちに弾丸をつかむほど正確な動きをする」

ぐっと掴んだ、その瞬間だった。

「やめろッ！ それは生きている！」

なんと肉の芽が新たな触手を出し、承太郎君の手の甲に突き刺さり、潜り込んでいく。

「摘出しようとする者の脳に侵入しようとするのじゃ!!」

「ぬうう……」

そのとき、意識が戻ったのか、彼の目が開いた。

「ハッ……な！ 承太郎……お、おまえ……!？」

「動くなよ。花京院。しくじればためーの脳はお陀仏だ……」

触手は、皮膚の中で承太郎君の腕をつたい、顔を這いあがっていく。脳へむけて……。

「承太郎！　まずいッ！　手をはなすんだ！」

たまらずアヴドウルさんが叫ぶ。しかしそれを制止するジョースターさん。

「待て……。わしの孫はなんて孫だ……。」

体内に侵入されているというのに、冷静そのもの……ふるえひとつおこしておらんッ

！

スタンドも！　機械以上に正確に力強くうごいていくッ！」

次の瞬間、承太郎君のスタンドが、肉の芽を見事引き抜くことに成功する。

「やったッ！」

「うおお……!!」

つづいて、自らの体内を浸食しようとしていた触手もずるりと引き抜く。

「波紋疾走！」
オーバードライブ

そして、引き抜かれた肉の芽は、ジョースターさんの攻撃で消滅したのだった。

驚きの表情をうかべながら、彼は承太郎君に問うた。

「な、なぜ……おまえは自分の命の危険を冒してまで……僕を助けた……？」

「さあ……。そこんところだが……おれにもようわからん」

「……」

「……よかった……」

少し潤んだその瞳は、たしかに『彼』のものだった。

(……もどれたんだね。……ほんとうの、『あなた』に)

つい、凝視してしまっていたらしい。視線に気づいたのか、彼と目があつた。

「……っ！ あ、あの！ ……あなたは……？」

そして、もっともすぎる質問がとんでくる。

「え!? あ、そ、その……!!」

注がれる全員の視線が、痛い……。

そのとおりだ。いったい、なんだというのだ。私は。

「よ、よかったですね！ じゃあ、私はこれで!!」

「あっ！」

いたたまれなくなり、勢いよく立ち上がる。

「お、おい、君……!!」

「あの、だいたいのは、承太郎君に話したとおりですから！ で、ではっ！」

「あっ！」

そして、どうにかそれだけ言うと、わき目もふらず、駆け出した。

*

*

*

「……ちっ、にげやがった……」

ものすごいスピードで部屋をとびだしていった彼女。残るのは風のみ。まさに脱兎の如し、だ。

あつけにとられつつも、僕は承太郎に尋ねる。

「か、彼女は？」

「……てめーの女……とかじゃあねーのかよ？」

「は!? ち、ちがう……!」

……はじめてあう……ひとだ……」

ジョースターさんも、重ねて問う。

「承太郎、なんだ? 彼女は? 何者だ?」

「……あいつは……」

そうして、承太郎は話し始めた。

なぜ彼女があそこにいたのか。

彼女のスタンドについて、を。

「……………だそうだ」

「そうか。……………わたしはきいたことがある。」

「アヴドウル？」

「昔、日本に、スタンドの力を駆使する、要人の警護が生業の一族がいたと。」

そしてその一族のスタンド使いは皆女性だと。彼女はおそらくその末裔だろう」

「ふーん。しかし、罨かもしれんことを考えて、一応あいつの身元、調べたらどうだ？」

「じじい」

「ああ、そうじゃな……………」

「……………まあ、違うだろうがな。……………おふくろも元々よく知っている女だ。」

それに……………そうだったらもつとましな嘘をつくだろうよ」

「は？ どういう……………ことだ？」

「あいつ、おまえのことを、こんなふうにいつていやがった……………」

——「……………いつのことは、本当に知らないのか？」

「うん。むしろこつちが聞きたい。だれ？」

「……………。それにしちやあ、やけにこいつをかばうじゃねえか……………」

「へっ!? そ、それは……」

「……そのところなんだけど、私にもよくわからなくて……」

「はあ?」

「ただ……」

「さっきのは、ほんとうの、このひとじゃ、ない……そんな、気がした……」

「全然知らないひとなのに……おかしなこと、言っているのは自分でもわかって……」

「……でも、そうとしか、おもえなくて……」

「なっ!?」

「……おれにはあのとのおまえは完全に敵にしかみえなかつたがな。」

肉の芽のことも知る前だぜ。意味がわからん」

「……どうして、そんなふうに……?」

「さあな……。これ以上はおれも知らん。聞きたきやあいつに直接聞け」

「……」

「よし、彼女のことは、調べておくよう言った。」

「医者も呼んだから……。花京院、君はとりあえず身体を癒しなさい」

「はい……。ありがとうございます」

「では……2、3日は安静にされてください。お大事に」

「わかりました。ありがとうございます」

治療を終えた医師が退出していく。

「……」

そうして、部屋にひとり残された僕。

「……まだ、生きているんだ……。僕は」

おもわず、呟く。

——「もう助からん。この男は、死ぬ」——

あんな醜態をさらし、罪と屈辱にまみれ……

もう、このまま死ぬべきなのだ。……そう思った。

なのに……

混濁した意識の中、はつきりと聞こえた。ふたりのこえ。

他でもない……『自分』が手にかけてようとした……ふたりの……。

「……………生かされた、んだ……………」

静寂に背中を押され、先程にじんだ……………零すまいと必死に抑えたそれが、ぼたりぼたりと布団を濡らす。

——「さあ……………。そこんところだ……………おれにもようわからん——

(……………なんて……………男だ……………)

そして……………もうひとり。

——「だいじょうぶです……………。もう、これ以上、あなたにだれも、傷つけさせない……………」

|
そうだ。たしかに彼女は、あのとき、『自分』の奥にいる、『僕』に気づいてくれていた。

きっと、承太郎にいったことはほんとうなのだろう。

(それにしても……………)

たずねたいことが、たくさんあった。

(また、あえるだろうか……)

ここから

「……朝……か」

チユンチユンと、庭で鳴く、雀の声で目覚めた。

痛み止めの影響か、疲労のためか……

昨日は丸一日ほとんど眠ってしまっていたらしい。

そして、一昨日の今日だ。

僕の傷病名は全身打撲、加えて額の…裂傷。

未だその身を貫く痛みと闘いつつ、ゆっくりと布団から起き上がる。

「おい……入るぞ」

すると、障子の外からぶつきらぼうな声でした。

「よお」

「ああ、おはよう、承太郎」

「どうだ？ 傷は？」

「ああ。だいたいいい。……が、まだ体中がガタガタと悲鳴を上げている。

誰かさんのスタンドの驚異的なパワーの賜物だね」

「ふん……てめーがひ弱なだけだ」

「フツ……繊細と言ってもらいたいな」

「チツ……ほらよ」

いいつつ、なにかをこちらへと放り投げる。

「これは……！」

あの、ハンカチだった。

——「大丈夫かい？ これを使うといい」——

自分で足を切りつけておいて……さらに石段から突き落としておいて、いけしやあしやあという『自分』。

そのとき渡した……『果たし状』代わりに文字をしたためた、あの……。

「も、もう、捨ててくれてよかったのに……」

いや、むしろ捨ててほしかった……こんなもの。

ちなみに、『幽波紋』ではない、『幽波紋』だ。

製作中にそう教えてやったら、あの例のびりびり痛いやつ……を喰らわされた。孫悟
空気分だった。

まったく、なんてプライドの高いやつだ。……つて、自分だった……。

やめてほしい。僕が馬鹿だと思われるじゃあないか。

承太郎はあの誤字に気づいているのか、どう思ったのか……恐くて聞けない……。指摘しないのは彼なりの親切なのか……なんなのか。心遣いが逆につらい。

「元通り……真っ白だ」

そんな僕の気を知ってか知らずか……口の端でにやりと、笑う。

「……！……ああ。本当だ……」

パリッと糊がかかったそれを広げると、洗い立ての太陽の香りがした。

「……ありがとう」

「洗濯したのはおれじゃあねえ。礼はおふくろにいいな」

「……」

どうか、ホリイさんが洗う前に広げて確認などしていませんように……切に祈る。

「じゃあ、たしかに返したからな。」

おれは今日こそ学校に行くぜ。

……てめーはせいぜいゆっくり養生しな」

意外と真面目なのだ……と、出ていく彼を見送りつつ思う。

(いや、『意外』でもないか……)

レッテルは所詮、レッテルにすぎない。そういうことらしい。

「ああ、そうさせてもらおうよ……」

しかし、残念ながら、そういうわけにはいなくなってしまったようだ。

「――！」
階下から聞こえる慌ただしい気配。

「……」
立ち上がり、濃碧色の学生服を身にまとう。

「ホリイの命を救う……そのためには……」

「……エジプトにいるD I Oを倒し、この呪縛を解くしかない!!」

僕の心は、決まっていた。

「……やはりエジプトか。いつ出発する？」

扉を開け放ちながら、言い放つ。

「……僕も、同行する」

(そうだ。なにひとつ、終わってなどいない……)

(取り戻す。……それだけのことだ)

こうして、僕の旅は始まった。

あの日失ったものを取り戻す、旅が……。

命名

『あれ』から3日が経った。

特にあのひとたちからの音沙汰はない。自分で逃げておいてなんだが、やはり、気になつた。

午後からの講義が休講になつてしまつたため、変な時間に帰宅することになつてしまつた。今日はバイトもなく、ぼつかり時間が空いてしまう。

(どうしよう……)

ひとつの案が、私のあたまに浮かぶ。

(……お見舞いに、いつてみようかな)

とはいえ、元々なんの関係もない人間が行つてもいいものなのか…。

しかも逃げ出してしまつたわけで。

(スタンド……。DIO……。か……)

結局、迷いつつも勇気が出ず、そのあたりをぶらぶらしていた。

そして、あの石段。その向かい側の道まできて、気づく……。

(……あ、仔猫さんだ。あれ……。お母さんは?)

「……………あー！」

瞬間、道路に飛び出る仔猫。

そこを狙い済ましたかのように、猛スピードで走ってくる一台の大型車。

「あぶないっ!!」

おもわず、飛び出て仔猫を庇う。

激しい衝撃……………などはまったく感じなかった。相棒に護られた私の身体は。

とはいえ、ふつとばされはちゃんとする。宙を舞いながら、思う。

(しまった……………。やっちゃった……………)

接地した直後、瞬時に起き上がると、慌てた様子で運転手さんがこちらに近づいてくるのが見えた。

「飛び出たりして、すみませんでした! 怪我はないので、大丈夫です!」

本当に申し訳ありませんでした!

……………では、失礼しますッ!」

頭を下げつつ、とにかくそれだけ言い放つと、仔猫を抱えたまま走って逃げだした。

「はあ、はあ、……………ここまでくれば……………」

石段をおもいつき駆け上がったため、息が切れた。ここ最近逃げてばかりだ。なん

なのだろう。下の様子をうかがうも、幸い、騒ぎになっ
ている感じはなかった。
(よかった……。もう……。御免だもんね……。)

あたまのなかに甦る。

……。あの……。黒く、暗い……。

「にやあ……」

つい呆けてしまっていた。心配そうな鳴き声で我に返る。

「あー！ そうだった。ごめんね」

そつと腕の中の仔猫を下ろす。

「……危なかったね。怪我ないかな？」

「にやー！」

「ふふ、よかった」

すると、お母さん猫が心配そうなかおで、よつてきた。

「お母さん、ちゃんと見てないと駄目ですよー」

「にやー！」

「はいはい、じゃあね。気をつけるんだよ」

繁みに消える二匹を微笑ましくみる。

「……失礼。こんにちは」

「わあっ！」

するとそこへ……そんなところへ、声をかけられる。

(し、しまった……！　みられたッ……!?)

おそるおそる振り返ると、そこには……。

「あ……！」

なんと……あの、『彼』がいた。

「……猫、好きなんですか？」

*

*

*

「調べがついたぞ。彼女の名は、保乃宮仁美。やすのみや近所に住む女子大の一年生。

確かに本人と、大学に確認もとった。

……ここ近年の海外渡航歴もない。DIOの手のものではなさそうじゃな。」

差し出される報告書を受け取り、目を通す。

「そうですか。……よかった」

(だろうな。悪いひとには、とてもみえなかった)

納得する。と同時にもう一つの情報には驚く。

(しかし……女子大生……ってことは、年上？

……みえない……。せいぜい同年くらいかと……)

おもしろいおこす。

翻る、黒く長い髪に……まだあどけなさが残るものの、整った顔立ち。

そういえば私服だったな、などとおもっているとジョースターさんに言われる。

「というわけで、わしは行ってくる。

……花京院、おまえ、一緒に行くか？」

「は？ 何処にですか？」

「決まっておる。勧・誘、じゃよ」

「勧誘!？」

「厳しい闘いになる。

アヴドウルとも話したんじやが、護る力……彼女が協力してくれたら、心強い。

もちろん、拒否される可能性が高いが……。頼んでみる価値はあるのではないかと

な

「それは……たしかに」

「こんなときに、こんなふうスタンド使いが……。なかなかないことじや。

なんというか、運命じみたものを感じると思わないか？」

「……そうですね」

「やさしそうな、いい眼をした娘さんじゃったしな」

「……はい」

——「よかった……」——

涙と微笑みを浮かべて、自分をみつめてくれていた……あの姿をおもいだす。

(あたたかい……やさしい……まなざし)

そうだ。

……きれいだった。

あの碧色がかった、宝石のような瞳。

すると、ジョースターさんがにやにやとしたかおでいう。

「おまえ、いつしよに行けたらうれしいじやろう？ あの娘と」

「……なぜ、僕が？」

まあ、たしかに僕たちの中に防御系のスタンド使い、いませんからね。

戦力のバランス的にはとてもいいんじゃないですか？」

「とぼけおつて。……ここ三日間ずーっと、気になつとつたくせに。彼女のこと」

「なんのことやら。言っている意味がわかりませんね」

しれつと微笑みを返す、が……。

「……………ごぼれとるぞ。茶が……………」

「……………」

無言で拭く。

「ぶっ、わかりやすっ！」

おまえさん意外と、そーゆーのは普通の高校生、いや、それ以下なんじゃな……………」

「ぐっ……………！ な、なにがですか!? ちょっと手元が狂っただけだッ！」

「ふーん……………。じゃあ、……………行かないんじゃな？」

「っ……………！ ……行きます……………」

「ししし……………！」

「な、なにを笑っているんですか!? ぼ、僕は少し彼女に聞きたいことがあるだけで……………」

……………」

「はいはい。じゃ、行くぞ」

大学に行ってみたが、彼女の姿はみつからなかった。

聞けば講義が急遽休講になったので、すでに帰宅したのでだろうということだった。

「しかたない、家に行ってみよう」

彼女の自宅に向かう。大学進学を機に親元を離れ、ひとり暮らしをしているようだ。その道の途中。

あの神社の石段に続く道……。

そこで僕は遠目につける。

「あッ!？」

道路に飛び込む一人の女性を。そしてそこに今にも迫り来るトラックの姿を！

「危なッ……! ……くっ!」

ハイエロフロントを出そうとするが間に合わない。トラックは勢いそのまま、無情にも女性の身体を跳ね飛ばした……が、

「な、なにイッ!!」

なんと、薄桃色の光に包まれたそのひとは、まるで何事もなかったかのように起き上がり、石段を駆け上がっていった。

「あ、あれは、まさか……!」

「あの娘……じゃな。追うぞ」

「はい……!」

「……お母さん、ちゃんと見てないと駄目ですよー」
「にゃー！」

二段飛ばしで石段を登り切ったその先で、彼女のすがたをみつける。
会話の相手は予想外なことに、猫の親子だった。

はたして本当に意思の疎通が図れているのか……それはともかくとして、事情をだいたい察する。

(猫……を、かばって……?)

みずからの危険をかえりみず、猫を……。

スタンドに護られているとはいえ、だ。

(漫画じゃあるまいし……そんなひとが実在しようとは……)

おもわず我が目を疑ってしまう。

(よし……)

ひとつ息を吸い込み、ゆっくりと彼女の方に歩みを進める。

「はいはい、じゃあね。気をつけるんだよー」

「……失礼。こんにちは」

「わあっ！」

背後からそつと声をかけると、これまた漫画のようなりアクションが返ってくる。

どうやら猫に夢中で、こちらにはまったく気づいていなかったようだ。
(し、しまった……。驚かせてしまったか……)

振り向く彼女。その瞳は僕をうつした時、さらに大きく見開かれた。

「あ……………」

「……………猫、お好きなんですか？」

「あ、あなたは！」

「……………どうも」

「こ、こんにちは」

戸惑いつつもペこりと丁寧にあいさつを返す彼女。

そこにこのひとも遅れてやってくる。

「わしもおるぞ！」

「あつ！ 承太郎君のおじいさん！」

「ぜー、ぜー……………この石段、こたえたわい……。くそ、もう若くないんかのう……………」

「……………お疲れさまでした」

「ご老公が息を整えるのを見守る僕に、おずおずと彼女が尋ねる。

「あの、あなたは……………もう、だいじょうぶなんですか？ お怪我は……………」

「あ、……はい。もう、ほとんど……」

「そうなんですね。……よかった」

「あ、ありがとうございます……」

安堵の表情のあとに浮かんだ、屈託のないその笑顔に、つい戸惑ってしまふ。

操られていたとはいえ、自分は彼女に危害を加えようとした。その事実をたしかで

……。

しかも我……を失っていた自分……ながら、あんなに、卑怯で非道極まりない姿をみられてしまったのだ。嫌悪感を示されてもしかたがない、そう覚悟をしていたのに……。

「今日は、おふたりで……どうしたんですか？」

「いえ、あなたをさがしていたら、さつき、その、轢かれたのを見かけて……。そちらこそ、お怪我は？」

「あ、ありがとうございます。だいじょうぶです。……あ……」

そこで、なにかを思いついたかのように、彼女はつづける。

「……その、この子が、護ってくれたので」

いいつつ、右手を差し出す。

(え…………?)

その矛盾したしぐさに対し、浮かんだ疑問を口に出す。

「…………右? じゃあなくて…………左手の、薄桃色の羽…………小鳥…………? のことですよね

…………?」

「…………はい!」

わあ! すごーいつ! ほんとに…………。みえてるんだ…………!」

「え、ええ。もちろん…………。」

意図がよくわからず、僕は怪訝なかおをしていたのだろう。急に縮こまって謝る彼女。

「…………はっ! すみません。試すようなことをしてしまつて…………。」

ほんとにみえているのか、しりたくて…………。

はじめてなんです! 私の、この子! みえるひと!」

しかし歓びを抑えきれないのか、再び声を弾ませる彼女。

無邪気なその様子に、さらに調子が狂つてしまう。

「そ、そうなんですか…………」

(…………でも、…………なんだろう…………。そのきもちは、すごく…………)

「それで…………その、よろしければ、お願いがあるんですが…………」

「あ……、はい、なんででしょうか？」

一瞬、そんな自らの思考に囚われていた僕は、遠慮がちにささやかれた言葉で気づく。
「あなたの、ええと、『スタンド』も……もういちど、みせてもらっても……？」

「ああ……。もちろん」

なんだそんなことか……とおもいつつ、相棒を呼ぶ。

「……ハイエロフアント！ 出ろ！」

彼をみた彼女は、目を細めながらこういった。

「……わあ！ やっぱり……」

「……すごく、きれい……！」

「っ……………」

「……人型って、どうなんですか？ 言葉を話してくれたりもするんですか？」

あ、そうだ、ジョースターさんのスタンドは……」

そこから先は、実はあまり聞こえていなかった。

気づけば、僕は、彼女の手をとり、こう告げていた。

「……あなたのようなひとを探していました！ 僕たちと一緒に来て下さいませんか？！」

「！ へっ!? あ、あわわ、わ、私？ え、ええっ!?」

そんな僕をジョースターさんが焦って止める。

「お、おい！ 落ち着け！ おまえ、ほぼ初対面のレディになんてことを！」

「はっ！ す、すみません、つい……」

「い、い、いえっ！」

真つ赤なかおのまま、しどろもどろに彼女が問う。

「え、えつと、それで……あ、あの、どういう……ことでしょうか……？」

「それが……。少々事情が、変わってな……。ホリイが……」

「えっ……?!」

「とりあえず、家に……道々で、話そう……」

空条邸に着くまでにジョースターさんは彼女におおむねの事情を話して聞かせた。

ジョースター家と、DIOの因縁。

DIOの復活と、スタンドについて。

そして、その悪影響で、ホリイさんにもスタンドが発現してしまい……。

「……抵抗力のない、娘は……このままでは、自身のスタンドに、憑り殺されて、しまう

……

「そ、そんな……！ な、なにか方法はないんですか!?」

「……ひとつだけ。エジプト、カイロにいるディオを、倒すことだ。……50日以内に

……」

「……、50日……」

「やつは、手強い……。その上、卑怯で、非道極まりない。知つてのとおり。

……「筋縄ではいかんだろう」

「……」

「そこで、だ……。協力を願いたいのだ。我々に手を貸してもらえないだろうか。

君の護る力を、我々に……」

「……私の、ちから、を……?」

「考えておいてほしい。とりあえずホリイに会ってやつてくれ。君にとっても会いたがつている」

「ただいま、ホリイ。具合はどうだい? ……お客さんがいるんじゃないが」

「あらー、パパ！ おかえりなさい。大丈夫！ ずいぶん、調子いいわー。 承太郎もい

てくれるし」

(……嘘、だな)

明るい声でそう言いつつ、布団からゆっくりとホリイさんが上体を起こす。その顔色は遠目から見ても青白い。

そしてなにより、背中から出ているスタンド……部屋中を取り巻くイバラ……がまた増えていた。

「ホリイさん……こんにちは。お邪魔しています」

彼女がそつと声をかける。きつと面食らっているであろうにもかかわらず……動揺を顔に出さないように努めている様子が見て取れた。

「あらー！ 仁美ちゃんじゃなーい！ またきてくれたのね。あ、花京院君ともお友達だったの？」

「あ……えつと……その、それよりも、ホリイさん、具合……」

「そうなの。ちよつと風邪こじらせちゃったのよお。」

やあね！ せつかく遊びに来てくれたのに、ごめんなさいね！」

「いえ、そんな！ ……そんなこと……！」

「また『シャンティ』のシュークリーム食べたいわあ！ 治ったら買いに行くわねつ……」

！」

「は、はい……」

「……」

「ほ、ホリイさん!？」

「また、気を失ったか……。気丈に振る舞ってはいるが、やはり……」

悲痛な表情で発される、ジョースターさんの嘆き……。

「……。すみません、ちよつと失礼します!」

「あつ!」

それが届くやいなや、そういつて彼女は部屋から飛び出していった……。

「……戻つて、こねえな」

かれこれ30分ほど経った頃だろうか。

しびれを切らしたような承太郎の呟きにその祖父が応える。

「うむ……。奴の力を目の当たりにして、怖くなつてしまつたんかのお……?」

「そんなこといったら、こないだの方がよつぽどだったじゃあねーか。

まあ、どちらにせよ、来たくねーなら、しかたねー」

「うむ、無理強いするわけにはいかん……。残念じゃが……」

「……」

(いや、あれはきつと……)

彼女の『なにか』を決意したような眼をおもいだす。

「……大丈夫。戻ってきますよ」

「花京院……？」

同時に、玄関の引き戸が開く音が響く。

「ほら、ね」

予想通り。おもわずにやりととしてしまう。

「はあ、はあ……。す、すみません、話の途中で！」

「おまえさん！ こ、これは!？」

息を切らせてかけこんできた彼女は、大きな箱を抱えていた。

「こ、これ、うちの店のシークリーム、です！ よかったら、ホリイさんに……！」

「……ふっ！ ……茶あ、入れてくるわ」

承太郎もにやりと笑う。

そして、続けて彼女はいつた。

「それと、ジョースターさん！」

「なんだね？」

「私、行きます！　お願いします！　私を……私も連れて行ってください！」

「保乃、おまえ……それにしても、買いすぎだろ……。おふくろ一人でこんなに食えるか、阿呆」

「ご、ごめん。勢いで、つい……」

「まあ、いいじゃないですか。みんなで食べれば」

「うむ、ただこう」

承太郎の淹れた緑茶と彼女の持ってきた山積みのシュークリームをいただく。

甘すぎず、なめらかなカスタードクリームがたっぷり詰まったそれは、たしかに美味だった。

食べながら、少しひっかかった事柄を隣の男に問う。

「……保乃？」

「やすのみや……は、なげえ。そして、いいにくい」

「で、略しちゃったわけね。わしもそう呼ばせてもらおうかな」

「あ、はい、どうぞ」

「では、保乃よ。本当にいいのかね？　かなりの危険をとまなう旅になるが……」

「はい。それはもう、決めましたから」

きっぱりと答える彼女。しかし、そのあと、少し不安そうなかおでいう。

「ただ、いくつか心配があつて……ご相談があるんですが」

「なんだね？」

「恥ずかしながら、私、海外に行つた経験がほとんどなくてですね。御迷惑をおかけするかも……」

「ああ。そんなことか。心配いらん。わしもこいつらも慣れたもんじゃ。

それに加えて今回の旅は、わしの知り合いのある財団が、資金も物資も全面的バックアップを約束してくれておる。わしらがいない間ホリイのことを引き受けてくれる医療体制もな。なにか困つたら、遠慮なくすぐに頼りなさい。助けてあげられるだろう」

「そうなんです。よかつた……。すみません、よろしく願ひします」

「うむ、安心したまえ」

「それと、あの、もうひとつ……」

「なにかな？」

「えつと、私、スタンドに関して無知ですし……本当にちゃんと役に立てるのかなと。

自分のスタンドがどんなものか、もつと知りたい。

そして、実戦で使えるように、練習……もししておきたいんですが」

(へえ……)

頼まれて参加するかたちの旅なのに、そんなことを心配しているとは。

横で湯呑をかたむけつつ、またも感心してしまふ。

一方、ジョースターさんは少し考えたのちにこういった。

「ああ、そういうことなら、うってつけの男が居る。そろそろ帰ってくるはずじゃが」

すると、玄関の方から声が聞こえた。

「ただ今戻りました」

「おお、ナイスタイムिंगー！」

そうして茶の間に現れた男性の肩を叩きつつ、改めて彼女に紹介するジョースターさん。

「保乃、アヴドウルじゃ。こないだも会ったろう？」

こやつスタンドに関する造詣の深さはかなりのものだ！

いろいろ教えてもらおうといい」

「保乃、か。君が旅に参加してくれると聞いて心強いよ。」

あらためて、わたしはモハメド・アヴドウル。よろしく」

「い、い、こちらこそ、よろしくお願ひします」

「では、早速。庭にでしょうか。承太郎と花京院もちよつと手伝ってくれ」

連れ立って庭に出る。空条邸のそれは日本庭園のような……だだっ広いのにしっかりと手入れがなされている、見事なものだった。

「君のスタンドは『物理的な衝撃を遮断する』とのこと。

先日スタンドによる力もはじきとばすことが可能だったそうだが……。

そうだな、まずは……花京院、ちよつと彼女を攻撃してみてください」

と、アヴドウルさん。嫌な予感が当たった。

「ええ？ もうそれはこないだ証明されているじゃあないですか……」

どうして好き好んでまた彼女に危害を加えるような真似をしないといけないのか。

「まあ、いいじゃないか。おさらいだよ。というか、わたしにも見せて欲しいんだ」

「はあ。……気は進みませんが、仕方ない……いきますよ」

「は、はい！」

僕はしぶしぶハイエロフロントを出し、エネルギーを練る。

「……エメラルド・スプラーツシュ！」

響きわたる爆発音。そして土煙があがる。

「……」

(……やりすぎた、だろうか……)

隣の承太郎からつつこまれる。

「……花京院、お前、わざわざ必殺技で……。」

普通にちよつと撃つ、とかでもよかつたんじゃねえのか？」

「うっ！ ……心配無用、ちゃんと手加減はしているッ！」

「うそつけ……」

*

*

*

碧色の嵐が私を包む。

彼の必殺技……その名の通り、美しい宝石たちに、そして爆風に囲まれる。

本当だったらすごく痛いのだろうなどと呑気に考えつつも、ふと気づく。

(あれ……?)

「大丈夫か？」

「はい！」

(なんか、こないだのより……威力が増してる気が……あ、ほんものだからか)

自己解決したのも束の間、アヴドウルさんがまたとんでもない課題を出す。

「うむ。よし、では次。今からわたしが、花京院を燃やす！」

「は？」

同時に疑問符を浮かべる、私たち。

「君はそれを護るんだ。」

ただし！ 自分の身を呈してではなく、スタンドを使つてだ。

承太郎は彼女が動かないように見張つといてくれ」

「おうよ」

ガシツと肩をつかまれる。

（へ!? ダメなの？）

「ええ?! 待つて下さい! そ、それ、やったことないです!」

「だからだ!」

思いも寄らない限定条件に慌てて発した私の抗議の声は、あっさりと流される。

そして、彼は彼でこんなことをいいます。

「……大丈夫です。信じていますから」

「ちよつ、わ、私は私を信じてないですつて!」

私の意思はすっかり置いてけぼりのまま、話は進んでいく。

「来い、マジシャンズ・レッド！」

アヴドウルさんのスタンドは鳥の頭をした格闘家…のような外見だった。

「いくぞー！」

その嘴から勢いよく放たれた紅蓮の炎が渦を巻き、彼にむかつていく。

必死に相棒を呼び、頼む。

「や、やらなきゃ！ 花京院さんが灰に……！」

御願い！ 花京院さんを、護ってー！！」

凄まじい勢いの紅色にのまれ、みえなくなる彼のすがた。

（う、うそ……！？）

「……死んだか？」

「いやー!! か、花京院さーんツ!!」

しかし、私の叫びとは裏腹に、アヴドウルさんはにやりと笑う。

「……ふ、上手くいったな。ちなみにわたしは手加減していないぞ」

アヴドウルさんがパチンと指をならすと、まるで魔法の様にたちまち火炎が消え、彼が立っていた。

「……ふう」

「か、花京院さん！ だ、大丈夫ですか？」

「ええ、まったく問題ありません。熱気すら感じなかった……すごいですね」
「よ、よかった……」

気が抜け、へたり込む私にアヴドウルさんがいう。

「以前、聞いたことがある。『護る』スタンドをもつ一族……」

君はその末裔だろうか？」

「え?! そうなんですか……?」

「自分でしらなかったのかよ……」

「おばあちゃんの前あたりで断絶したらしくて、私あんまり知らないんだよね……」

家系のこととか」

「と、いうわけで、これくらい君には朝飯前というわけさ」

「そっか……。はっ! それ先に言っておきよ……」

知っていたらこんなに焦ることもなかったのに。

「はい、じゃあ次!」

「……」

そしてまたもや華麗にきこえないふりをされる私。

「最強クラスの破壊力を持つ、承太郎のスタープラチナのパンチが防げるか、やってみよう」

「はい」

「オラァー！」

言うが早いのか、承太郎君がスタープラチナを出し、パンチを繰り出す。

速すぎて私の目には見えもしないものの、障壁が勝手に瞬時に形成され、私の身体を護ってくれる。

「おお！　これが防げるならガードに関してのパワーとスピードは相当なものだ。

あとは射程だな……。移動するぞ。承太郎は家の中に居てくれ」

意図がよくわからないまま、とりあえずアヴドウルさんについていく。

空条邸入り口の門をくぐり抜けて通りを少し歩いたところで、曲がり角でふいに立ち止まる。

「約100メートル。……この辺りでいいか。電話ボックスもあるし」

そう言うのとボックス内に入り、なにやら電話をかけはじめた。

「……もしもし、承太郎か。ジョースターさんと呼んできてくれ。ああ」

そして、私に声をかける。

「よし、準備は整った。

保乃、今からジョースターさんを護るように、スタンドをはなってみてくれ」

「はい。……御願い！」

ようやくなんとなくわかってきた私。言われるがまま、薄桃色の鳥を飛ばす。

「もしもし。スタンドは？ 来たか？ ……まだ？」

ふむ、やはり若干タイムラグがあるか……。お、今来た？

承太郎、じゃあ、さつきと同じで、……そうだ。

……は？ ……割れた？」

「おい——！ 痛いわ——！ イタイケなじじいにいきなりなにするんじや——！！」

「……離れると、強度も弱まる……と。スタンドのルールどおりだな。さ、戻るぞ」

「おい、コラー——！」

*

*

*

「では、最後に、どれくらい持続できるのかだ。オラオララッシュで何秒もつか……。

できるだけ粘ってみてくれ。ただし、無理はするなよ」

「は、はい！」

（承太郎の、あれ、は痛かった……）

先日、身をもってその威力を知った経験者として、僕は複雑な思いでみつめていた。

「……行くぜ。……オラオラオラオラオラ……!!」

「10秒経過……」

「す、すごい、この強烈なラツシユを完璧に防いでいるッ！」

「オラオラオラオラオラ……！」

「30秒！」

「……？」

そこで僕は彼女の様子がおかしいことに気づき、慌てて叫ぶ。

「はっ！ いけない、アヴドウルさん！ 承太郎、ストップだ！」

「……」

「き、気を失っている……」

「や、保乃宮さん！ しっかり！ しっかりしてください!!」

かの有名な武蔵坊弁慶さながら、器用にも立ったまま気絶している彼女の肩を揺さぶる。

「はっ！ 私……？ あれ？」

「……はあ、よかった……」

肝が冷えた。アヴドウルさんも驚きの表情で眩く。

「限界を超えると意識を失う……のか。にもかかわらず、スタンドの効果は続くとは……」

(どうして、そこまで……)

ぽかんとしている彼女にため息まじりにいう。

「大丈夫ですか？ 無理するなって言われていたのに……」

「す、すみません。もうちよつと、いけるかなーって思ったんですけど……」

「ふん、なかなか根性あんじゃねーか……。おい、今日はこんなもんだろ」

「ああ、この辺にしておこう」

ぞろぞろと居間に戻る。

「お疲れ様。よく頑張ったな」

「いえ、この子のこと、いろいろわかって良かったです。ありがとうございました」

「いや、こちらとしても、君の能力の把握は必要なことだ。ただ、これが全てではないが

……」

「どういうことですか？」

「スタンドというものは術者の精神力に多大な影響を受ける。

つまり君の精神状態や、成長によって、また変化する可能性があるってことさ」

「なるほど……」

僕としても、初耳だった。

(……ハイエロフアントも、いつか……『なにか』が変わったり、するのだろうか……)

「それにしても、君のスタンドは頼りになる。……助かるよ」

「ありがとうございます！ 頑張ります」

「ああ、そうだ、君のスタンドにも名前をつけなくてはな」

「名前……！」

アヴドウルさんが懐からあるものを取り出す。

先日承太郎にもやっていた、あれだ。

「わたしの本業は占い師だな。さ、このタロットを1枚引くんだ」

「はい、じゃあこれで……」

「女教皇のカード！ 直感、安心、期待、聡明、神秘……といった意味を持つ。

聖職者の女性、清らかな乙女を表していて、占星術では乙女座と関連を持つとも言われる……！

ふむ、守護……聖者……乙女……。あの日は、つと……」

言いつつ、本を取り出し、ぱらぱらとそのページをめくる。

「……よし、君のスタンドは『守護聖女の秋桜 (Guardian St. Cecil

i a x s c o s m o s) だっつ!!」

「『守護聖女の秋桜』……?」

「ああ。由来は君が初めてこの家に来たあの日を護る……守護聖人からだ。

キリスト教では守護聖人というのが365日どの日にもいてね。

あとはそのまま、見た目だ。

鳥型だが、その羽は色も形も……さながら秋桜の花のようだからね」

「なるほど。……セシリア、ですね!」

ありがとうございます! よろしくね、セシリア!」

名付け親に礼をいいつつ、うれしそうにセシリアに語りかける彼女。

「気に入ってもらえたようで、良かったよ。

さて、今日は疲れただろう。帰ってゆっくり休むんだよ」

「はい、ありがとうございます。

承太郎君、お邪魔しました。

ホリイさんとジョースターさんにもよろしく伝えてね」

「ああ」

「それでは」

言いつつ立ち上がる。そこへ、申し出る。

「あ、僕送ります。もう暗いし……」

「え!? いえ、大丈夫ですよ、家近いですし」

「駄目ですよ。あなたさつき気絶していたんだから……」

遠慮する彼女にアヴドウルさんも言う。

「そうだな。そうしなさい。花京院、頼んだぞ」

すこしまだ顔色が悪い気がする。彼女のことを心配だった。

それが半分で。あとは……。

そう。肝心なことを僕はまだ彼女に聞けていなかった。

*

*

*

外に出ると、あたりはもうすっかり暗くなっていた。

薄明りの街をふたりならんで歩く。

……少し緊張している、自分に気づく。

「すみません、お言葉に甘えてしまつて……」

「いえ、かまいませんよ。」

ところで保乃宮さん、その敬語やめませんか？ 僕の方が年下ですし……」

「い、いや、それがなんかとても年下にはおもえなくて……」

正直な感想を述べると、急に彼の声のトーンが下がる。

「……何ですかそれは？ 僕が老けている……そういうことですか？ 失敬なっ！」

「あー！ ご、ごめんなさい！ ち、違う！」

あの、落ち着いていて、しつかりしていて、大人っぽいからで！

その、決して悪い意味じゃなくて……！」

(し、しまった……怒らせちゃった……!? ど、どうしよ!!)

必死に誤解を解こうとする。すると、急にふきだす彼。

「……ふっ、嘘ですよ。わかってますって。……面白いなあ……！」

「はっ！ か、からかわれた……!? 」

「ふふ、たしかに……僕も年上にはとてもおもえないですね」

「そ、そつちこそ失礼なっ！」

「はいはい。失礼しました。じゃ、そういうわけで、以後敬語なしで、お願いしますね。

あ、『さん』も不要です」

「うーん、じゃあ、花京院、……くん？」

「……はい」

そうであれば、と彼に伝える。

「あ、なら、私のことも適当にどうぞ。実際呼びづらいだろうし……」
先程の一件を思い出す。

『保乃』。結局皆にそう呼ばれることになったわけなのだ。
が、このひとだけは、いまだ律儀に苗字プラス、さん付けだ。

「ああ。まあ、たしかに……」

「いつもだいたい、ああ呼ばれてるし」

「そうなんですか」

「で、もう、名前自体が『保乃』だって皆思ってるっていうね……」

名字に比べて、とつてもありがちな、インパクトの薄い……

そんな私の『ほんとうの名前』を知ってくれているひとなんて、家族くらいのものだ
た。

「というわけで、好きに呼んでください」

「わかりました。じゃあ……、考えておきます」

「敬語も別にいいんだけど……」

「ま、それも……追々」

「……しかし、昼間にあんなこと言った僕が、こんなこと言うのもなんですが……」

本当にいいんですか？ 危険な旅で命の保証もない。それなのに……」

「ああ、私ね、ホリイさんとはもともと知り合いだったんだ」

「ええ、承太郎に聞きました。でも、どうして、そこまで……」

「うーん……、ええと、最初、バイト始めたとき、私、本つつ当に使えなくて……」

まあ、今でもそうなんだけど、当時は今と比べ物にならないくらい。

失敗ばかりでお客さんにも店にも迷惑沢山かけて……。

恥ずかしいんだけど、実家出て独り暮らし始めたところだったから、ホームシックみたいなのもあったのかな。そんなだったから、とにかくすぐ、落ち込んでたんだ」

「そんなときにね、ホリイさんがお店に来てくれたの。だけど……私のミスで商品ダメにしちゃったんだ。

すつごく叱られて、なによりホリイさんに申し訳なくて……。

なのにな、謝りに行った私に……

『気にしない、気にしない。はい、これあげる！ 甘い物食べたなら、元気でるわ！』

さ、笑って！ あなた、笑った方が可愛いわ！

大丈夫。あなた頑張ってるもの！ そのままで大丈夫よっ！』

……って。あつたかかったなあ……。

そのあとも、店に来てくれるたびに、声かけてくれて、気にかけてくれて。

ホリイさんにとっては些細なことだったかもしれないけど、私にとっては……ね。

それ以来、もう一人のお母さんみたいに、勝手にだけど、思ってた。

……だから、助けていの。……必ず」

「そうだったんですか……」

「あとは……」

「あとは？」

「なんでもない……」

「え？なんですか？」

「い、いいの！ 秘密っ!!」

「ええ？ 気になるじゃあないですか……」

「……お、追々、ね」

「ふーん……」

不満げな彼の思考をそらそうと、自分も気になっていたことを訊ねる。

「そ、そつちこそ、どうして？」

すると、彼はにつこり微笑むところいった。

「……理由は、僕にもよくわからないんですがね。……なんて」

聞き覚えのある……ことばを。

*

*

*

「あ……………」

「……………あのととき、何故、あなたはわかったんですか？」

その、僕が、ほんとうの僕ではないと……………」

問う。彼女に、ずっととききたかったこと、を。

「え……………。なんでといわれても……………。だから、よくわからないんだって……………」

「……………ほんとにわからないんですか……………」

ぼかした、とかではなかったのかと、頭をかかえる。

しかし、つづけて、彼女はいった。

「……………ただ、ふたり、いるようにみえた。

あの冷たい目の、奥に、ほんとうの……………今の、あなたがみえた。

……………それだけ。」

「……………」

(さつき、アヴドウルさんが言っていた。

彼女のカードは『直感』を司る。だから、か……………?)

どちらにせよ、これだけは伝えておかねばならない。ゆつくりと口を開く。

「あのときは……、本当に、すみませんでした。ずっと、謝りたくて……」
「え……………」

「操られていたとはいえ、僕は承太郎や、何の罪もない人を傷つけました……。
そして、あなたのことをも……。」

謝って許されるようなことではないとはわかってはいますが……
つて、え？ ええっ!?!

彼女の方に目をやり、その様子に驚き慌てる。

「……………っ！ ……………う……………っ！ ……………？」 あなたは、なにも、悪くないッ……………！」

その瞳からは大粒の涙が溢れていた。

「ななな、なんで!?! なにを泣いてッ?!」

「ご、ごめ、だ、つて、だって……………」

「……………？」

涙とともに紡がれる彼女のことばをまつ。

「……………つらかったよ、ね？」

「え……………？」

「意思に反して、自分の……………たいせつなスタンドで、だれかを傷つけさせられるなんて

……。

「すごい、つらかったでしょう……？」

「……」

おもわず、眩く。

「……そんな、わからないじゃあないですか……」

僕は普段から、スタンドを悪用していた人間、かもしれませんよ……？」

すると、即時、返ってくる。

「そんなこと、ない。絶対、ないよ」

「っ！」

「こんな……、信憑性なんてないかもしれないけど……」

でも、絶対。それでしよう？」

そうして、まっすぐに僕を、みる。

「……か、買いかぶり、すぎですよ……まったく」

(わけがわからない……)

このひとと僕は、こないだはじめてであった。

しかもそのときの自分は最低の人間で……。

ひどいことをした。ひどいことも言った。

軽蔑されて当然だ。

なのに……。

自分でも驚くほど自然に、次のことばがでてきた。

「……僕が、この旅に同行するのは……、承太郎達への罪滅ぼしと恩返し……それにホリイさんを助けたいというのも、もちろんあります。

が、それだけではなくて……」

「……三か月前、DIOと対峙したとき、ただただ、恐ろしかった……。

そして、願ってしまった！ 助かりたい、死にたくない……と……。

僕は、屈したんです……DIOに。……そして、弱い自分に……」

「もう二度と、あんな醜態は晒さない！」

DIOを倒し、取り戻したいんです。……弱さを乗り越え、己の誇りを！

……それが、一番の理由かも、しれません」

つい、話してしまった。なぜだか、きいてもらいたかった。このひとに。

「……」

彼女はしばらく黙ったあと、またもやぼつりといった。

「……つよいよ。」

「え……？」

「……花京院くんは、つよいよ。」

だって、一度怖いつて感じたものを、克服したいつて思うこと自体、普通よりずっと、勇気がいること。

だから……、すごいよ……」

「……そんな、こと……。」

そして、強い光を帯びた瞳でいう。

「大丈夫！　できるよ！　絶対！」

「……」

すぐのことばが出なかった。その瞬間の沈黙を勘違いしたのか、焦る彼女。

「……はっ！　私つてば、またよくもしらなくせに！」

「ご、ごめんね！　でも、嘘じゃないつていうか、その……！」

さつきまでの彼女はいつたいどこへやら。といった様相だ。

「……ふふ、ふつ、ははははは！　わかつてますよ」

こみあげてくる感情が抑えられなくなる。

「……まったく、ほんとうに、おかしなひとだなあ……」

「なっ！」

「……誉め言葉、ですよ。」

……ありがとう。……『仁美』さん」

そうして、実はとつくに考えついていた、その呼び名で呼んでみた。

皆がそう呼ぶ。……なぜかそれとはちがうものにしたくなつて、おもいついた……それ。

「つ！ う、ううん！ ……あ、あの、じゃあ、わ、私の家ここだから」

すると、素晴らしいながら彼女は指さしたマンションのエントランスへと向かう。

そこからの逆光で表情はうかがえないが、なぜだかあせつた調子で。

「ありがとう、送ってくれて」

「……いいえ。どういたしまして。」

ほんとに近かったな……なんておもう。

「ええと、出発はまた三日後だよね？」

「ええ、ビザの用意にまだ時間がかかりそうですし、直行便に乗ったほうが結局到着が早いですから」

「明日は準備として……、明後日またお邪魔してもいいかな？」

いろいろまだ聞きたいこともあるし」

「はい、じゃあそう伝えておきます」

「それじゃあ、また」

「はい、また」

背を向け歩みを進める彼女。

「……」

が、ふと立ち止まると、こちらにくるりと振り返る。

「……あの、花京院くん、」

「はい」

「あらためて、これからよろしくお願いします」

丁寧な頭を下げる彼女。

(……………ふっ……………！)

「こちらもおなじように頭を下げる。」

「ええ、こちらこそ。……………よろしくお願いします」

「じゃあ、おやすみなさい！ 気をつけてね」

「はい、おやすみなさい」

第2章 Road to Egypt

イツツ・シヨウタイム！

太陽が西に沈んでいく。

日が傾く時刻の早さに冬の訪れを感じつつ、まとめた荷物をトランクに入れる。

出発の刻が、近づいていた。

空条邸の前にどっしりとその姿を構える黒塗りのロールスロイス。

ジョースターさんの手配した御抱え運転手付きのそれに乗り、僕たちは今晚発エジプト、カイロ行きの便が待つ空港に移動する予定であった。

ジョースターさん。

承太郎の祖父で、御年69歳とのことだが、そうは全く見えない若々しさをお持ちである。

頑張って見積もっても50代くらいか……40代でも通じそうである。そう伝えたら、「企業秘密があるんじゃないよ」と、ウインクとともにいわれた。

彼は、スタンドとはまた別に、『波紋』と呼ばれる、DIOたち吸血鬼に絶大な効果を誇る力を操ることができ（僕に憑いていた肉の芽を消し去ったのも波紋の力らしい）、波

紋戦士は体内の気をコントロールできる関係で、皆一様に年を取りにくい……とのことだった。

その力を用い、50年前の地球存続をかけた闘いで生き残った歴戦の勇士なのだ！とは本人談。

ひょうきんで気さくで冗談好きで……。

そして、普段はともそうは思えないが、実は彼はニューヨークに本拠地を構える不動産王で、今回の旅をサポートしてくれる財団、スピードワゴン財団とともに、音に聞こえた大富豪であった。

そう考えれば、この広々とした敷地に悠々と建っているこの家にも納得できる。およそ一週間御世話になったにもかかわらず、全貌が結局解明できなかったこの家の。

そんな空条邸の、はてしなく続くかのような石垣のむこうを見ていたら、うしろから声をかけられた。

「いよいよだな」

「ああ、アヴドウルさん。……そうですね」

「あとは保乃か」

「ええ。まもなく来るでしょう。そろそろ約束の時間ですから」

「……おっと、噂をすれば、というやつだ。」

アヴドウルさんが通りのむこうを指さしながら言う。

それにしても、このひと、日本語はべらべらだし、このように諺まで使いこなしている。

本人いわく、「日本は大好きな国だからね。」とのことだが、果たして好きだけで片付けられるものなのか。ちなみに昨日は茶室で彼の立てた抹茶をいただいたのだが、その作法も完璧だった（むしろこちらが門外漢なので正確にはわからないが。少なくとも素人目には）気がする。日本人よりもよっぽど日本人らしい。

そして、ジョースターさんのいうとおり、スタンドに関する知識は本当に素晴らしいものだった。先日、いろいろと質問していたところ、その広さと深さに驚いたものだ。いったいどこで培ったものなのか……。これできて本業は占い師、というのだから、このひともまた、謎な人だ。

「やあ」

「こんにちは」

彼女はこちらに気づくと小走りでやってきた。

「こんにちは。すみません、遅くなっちゃって」

「いえ、まだ時間前ですよ」

腕時計をみながら、いう。

五分前行動……生真面目さがうかがえる。

「荷物は、それだけですか？」

「うん。これだけ」

肩に斜めにかけて小さめのものと、手に提げているものがひとつ。

女性というものは荷物がやたらと多いもの、というイメージだったが、彼女にはあてはまらないようだ。

「頑張って減らしたんだけど……。限界だった」

昨日、彼女は宣言通り空条邸にやってきて、ジョースターさんにいろいろと旅に関するレクチャー（八割方は彼の虚構をまじえた自伝で構成されていた気もするが）をしてもらっていた。どうやらそれを忠実に守った結果らしい。

「……はい」

車に載せるのを手伝うべく、手を差し伸べる。

「え？ ……ああ！ あ、ありがとう」

大きい方の荷物を受けとり、トランクに入れる。

すると、驚いたようなかおでじっとみつめられていることに気づく。

「どうしたんですか？」

「ううん。いや、その、えっと……紳士だなあ、と」

そして、控えめに、そんなことを言つて、はにかむ。

「と、当然のことをしたままでですよ」

からかわれているのかとも思つたが、そんな感じでもない。ストレートな賛辞にやはり調子が狂つてしまう。

……このひとと話していると、そればかりだ。

振り返ると、ちょうど残りのメンバーがやつて来たところだった。

「よお」

「よくきてくれた。忘れ物はないかの？」

「ジョースターさんと承太郎だ。」

「はい」

「揃つたな。では、いくぞ」

*

*

*

「おい……」

走り出してしばらくたったころ、私は車内で隣になつた人物に声をかけられた。

十分に広いこの車も、この承太郎君にかかれれば窮屈そうにみえる。ジョースターさんもおなじくらい背が高い。この一族の特徴なのだ、と聞いていたが。

「なに？」

「……いまなら、引き返せるぜ。」

「いったでしよう？ もう、決めたって」

「ちつ、物好きやつだ」

「……ありがとう」

「ほめてねえよ」

「わかってるよ。ほめられたと思って言ったんじゃないって」

「……」

「心配してくれて、ありがとう」

「ふん……」

それ以上、承太郎君はなにも言わなかった。だから私も、黙っていた。

言葉は少なく、怖そうに見えるけれども、やさしいのだ。このひとも。

いつぞやのホリイさんとのやりとりを思い出す。

(ほんとは、すごく心配で離れたくないだろうに……)

目を閉じる。

(助けたい。……かならず)

目的地に向け、まっすぐに走る車の、エンジンの低い音だけが車内に響いていた。

空港にたどり着く。

出国に関する手続きはジョースターさんのお付きの人(財団の人……らしい)がほとんどしてくれたため、私はいわれるがまま、ゲートをくぐるだけで済んだ。にもかかわらず、審査員さんに簡単な質問されただけで、つい緊張してしまう。こんなことでは入国審査時が思いやられる。日本語だから今はいいものの、これが英語……ならまだともかく、エジプトだから……? 不安しかない。なんせ海外に出るのなんて、小学校以来、人生二回目なのだ。少ない経験を嘆いていても仕方ないが、ついため息がもれてしまう。

ゲート前で出発を待つ間、なんとなしに窓の向こうの滑走路を眺める。あたりはすでに真っ暗で、そんななか、管制塔の灯りだけがゆらゆら揺れていた。

「……なため息ついてるんですか?」

「はっ!」

そこへ、うしろからふいにこえがふってくる。

「……花京院くん」

「……不安、ですか？」

なにもかも見透かされそうな瞳をむけられ、素直に答える。

「う、うん……。その……入国審査が」

「そうでしょう。入国審査、それはかくも厳しく険しい……。

って、はあ？ 入国審査?!」

「うん。気が重い……」

「……ぷっ！ ふ、はははははは！ そ、それかよ……！」

どうやら彼のツポにはまっってしまったらしい。

「さっきからずつと深刻なおおしてるから……。僕はてつきり……く、くくく……」

彼の笑いはおさまる気配がない。

「そ、そんなに笑わなくても……」

「いや、だって……」

またやってしまったようだ。このひとには笑われてばかりだ、と、顔が熱くなる。

「……そんなの別にどうにでもなりますって。

僕も夏に行ったことあるから、助けてあげられるし。だいじょうぶですよ」

「うん……」

「というかそれ以前に、無事入国審査が受けられるか、の方が問題ですよ」

「あ、そ、そつか。そうだよね……」

敵方にも、こちらの動きはある程度察知されている、とのこと。エジプトに近づくのを阻止するべく、刺客が放たれていることは想像に難くない。あつさりカイロにたどり着けるはずがない、そういうことだ。

「……ごめん。気を抜かないようにするね」

「……すみません。逆に不安にさせてしまいましたね」

「そんなことないよ！　ありがとう」

「いい、いえ。まあ、杞憂に終われば、それが一番なんですけどね」

「そうだね……」

しかし、私たちのその希望はもろくも崩れさり、彼の予感は的中するのであった。

とうとう私たちの乗った飛行機が離陸の時を迎えた。

長い助走のあとに機体が浮き上がる。何度か乗ったことがあるが、この離陸の際の押しつぶされるような感覚にはやっぱり慣れない。ひとつ前と、そのもうひとつ前の席にそれぞれふたりずつで座っている、私以外のみんなはさすが、飛行機なんて、なれっこ

のようだ。

窓から下をながめると、星のようにまたたく街の明かりがみえた。

(綺麗……。戻ってくるときにも、また、みられるかな……)

機体は高度をぐんぐんあげ、空へと昇っていく。それにつれ、地上の星たちはやがて見えなくなっていく。

日本を離れていくのだ。それを今さらながら、実感する。

機体がある程度の高度まで上昇すると、安定飛行に移ったのか揺れも少なくなった。スチュワーデスさんたちが運んできてくれた機内食も食べ終わり、機内の照明も落ちて……。皆、到着まで束の間の休息をとろうとしていた。そんな矢先のことだった。

「！……おい、じじい！」

「あ、ああ、わしも感じた。D.I.O.に、みられておるっ！」

ジョースターの血統を引くふたりが、なにかを感じ取ったようだ。

そして機内に似つかわしくない……いるはずのないものをみつける。

「……ん？ な、なんだ？ 虫……？」

「クワガタ……？ デカイ！」

「ま、まさか！ 追手のスタンド使いか?! アヴドウル！」

「わ、わかりません……」

「とりあえず、おれに任せな！ オラア！」

承太郎君のスタンド、『星の白金』スターブラチナが虫に拳をはなつが、しかしそれはむなしく空をきる。

「ちっ！」

「！かわされた……！」

そして、反す刀で……とでもいうように、舞い戻ってきたクワガタのようなそれは、口から長く鋭い針を出し、承太郎君の口に突き立てようとする。

（危ない！）

とつさにセシリアではね返す。

「やはり敵のスタンド！」

アヴドウルさんがなにかに気づいたようにいう。

「今、舌を狙ってきたっ！」

聞いたことがある……舌を好んで捕食するスタンド……

それを使い、事故に見せかけ大量殺戮を行うスタンド使い、タワーオプクレー灰の塔！

DIOの手先になっていたのか……」

「じ、事故にみせかけて……!?」

この飛行機が、落ちたとしたら……今まさにその状況だ。私たちをまとめて始末するため、最適な相手を送り込んできたというわけか。

はね返された虫のスタンドは、反対の列の席の方に飛び去った。

「なっ！ ああッ！」

そして、何をするかと思えば、針を伸ばし、一列に並んでいる乗客の頭を串刺しにした。そのうえ、絶命した人々の舌を順番にもぎとっていく。

(な、なんてことを……)

凄惨な光景に、そして……

(……護れ、なかつた……)

おもわず吐き気がこみあげる。

「……あなたは、みない方がいい」

すると、私の視界を遮るように立ちはだかつてくれるひとがいた。

「花京院くん……」

敵を見る、その横顔は冷静そのものだった。

しかし、その瞳には燃えるような怒りを秘めているようにみえた。

虫スタンドはしたたり落ちる血を使い、壁に文字をつづる。

『massacre!』

「マサクウル……皆殺し……だど!?

くそ、やりがった! 魔術師マジシャンズレットの赤の炎で、焼き殺してくれるツ!」

そういつてアヴドウルさんがスタンドを出そうとする。それを花京院くんが制す。

「アヴドウルさん、待つてください。この狭い機内……魔術師の赤では引火の危険がある。」

承太郎の星の白金も、パワーが強すぎて機体が損傷する恐れがある……」

そこで、騒ぎに目を覚まし、こちらにやってきたおじいさんが、血文字に気づき、騒ぎ出す。

「な、なんじゃ、何事じゃ!?!」

「当て身」

素早くおじいさんの首筋に手刀を下ろし、意識を奪う花京院くん。

一介の高校生であるはずの彼が、なぜこんな技を身につけているのだろうか……不思議でならない。が、それどころではない。

「げいふ……」

彼は続ける。

「……かつ、このように他の乗客に気取られないよう、速やかに……」

「ここは僕の静なるスタンド、ハイエロフアントこそ、奴を討つのにふさわしい！」

『花京院典明か。貴様のことはDIO様からよく聞いているよ……』

虫のスタンドが不気味な声で喋り出す。

『やめておけ。自分のスタンドが静、だと知っておきながらおれに挑むとは……愚の骨頂。』

きさまのスピードではおれをとらえることはできん!!』

「そうかな……?」

いいつつ、彼はオリジナリティ溢れる構えをとる。

(き、決めポーズ!!)

ズアッ! とかいう効果音まで聞こえた気がする。

気合いやら勢いやらはこうした幻聴までも生み出すものなのか。

(はえー、すごいなあ……)

あんなのどうやったら思いつくんだら……? あとで聞いてみよう(と)

一介の高校生であるはずの彼が……以下略。

やっぱりそんなどころじゃあないのに、つい見とれてしまった。某漫画において、カッコいいポーズで周囲の視線を釘付けにしてしまう魔法があったが……まさか体感できる日が来ようとは。

(あれ……、でもよく考えたら、私味方なのにかかっちゃ駄目なんじゃ……)
そして、さらに至極どうでもいい方向に思考が逸れる。

(そ、そうだ、それどころじゃ……)

必死に状態異常を打ち消すべく、頭を振り、状況を見直す。

相手の挑発めいた言葉に彼が動じている様子はないようだ。ハイエロファントを出し、きらきらした緑色に輝くエネルギーを練る。

「……エメラルド・スプラッシュ!!」

『キエエー!!』

彼の手から放たれた、美しい宝石達。

私の目からみると十分に凄まじいスピードで、虫にむかって飛んでいく。

しかし、それを上回るスピードで、それらはことごとくかわされてしまう。

「まずい! やはりかわされたッ!」

アヴドウルさんが叫ぶ。

そして、空中で旋回した虫はぴたりと止まると、反撃の口針を彼に向け伸ばしてくる。
が、もちろん……。

「なにい!? とおらん!」

ちゃんとやるべきこともやらなければ……セシリアに彼のことは御願い済みだ。針

をはね返す。

(ふう……よかった。ひきつづき、御願いな)

『ちっ、なんだそれは……バリア……か？』

まあいい……そんな強い力、長くはもつまい……』

(う……)

しかし、あつさり弱点が看破されていることに、密かに動揺する。

『おまえの攻撃はおれには通用せんのだからなあ！』

隙について、きさまのスタンドの舌にこの塔針を突き刺してひきちぎる！

それになんのかわりもない！』

「エメラルド・スプラッシュ！」

反撃よろしく放たれたそれも、再び空を切る。

ぶんぶん和不快な羽音をたてながら、虫はあたりを飛び回りながら言う。

『ファハハハ！ 下手な鉄砲は数撃つても当たらんのだよ！』

スピードが違うんだよ、スピードが！ ビンゴにはのろすぎるウウウ!!』

「エメラルド・スプラッシュ！」

そこへ、さらにもう一撃、彼が攻撃を放つ。

『わからぬか！ハハハハハッ！』

おれに舌をひきちぎられると、くるい、もだえるんだぞツ！ 苦しみでなア！
『いかんツ！』

「まずい!!」

「またかわされているツ！」

「花京院くん！」

次々に焦りの声をあげる私たち。

しかし、窮地に立たされたかに思われた彼の表情は、それと対称的に涼やかなものだった。

「なに？ ひきちぎられると、悶え苦しむ……？」

そして、にやりと笑う。

「……僕の法皇ハイエロファントグリーンの緑は……」

（あ……!!）

『グエツ！』

瞬間、周囲の座席のシートから、無数のハイエロファントの触脚が飛び出し、虫に突き刺さる！

『な、なにイイイ！』

「……ひきちぎると、くるい、もだえるのだ、喜びでな!!」

無数に絡み付いた触手は締め付けを強くし、一気に虫をひきさいた!

「…すでにシートの中や下に触脚を潜ませ、張り巡らしておいたのだ。」

気がつかなかったようだな! スプラッシュはその罠に追い込むためのおとりにすぎなかったことに」

「「「おおーッ!」」」

今度は皆で揃って歓喜の声をあげる。

「……」

「……? どうしたんですか?」

そして、遠巻きに彼を囲む仲間たち。

「……花京院、おまえ……」

「……ドMさんだったのね……」

「え!?!」

「だって……『喜び』なんじゃろ? ちぎられるの」

「ちよ! ちがう! あ、あれは言葉のイヤというか……」

可哀想に、殊勲者に浴びせかけられる冷ややかな視線。たまらず助け舟を出す。

「そ、そうですよ!」

「ひ……、や、保乃宮さん……!!」

「いいじゃあないですか。世の中広いですから！」

そりゃあいろんな趣味が、ありますよ！ うん!!」

「……はあ?!」

「そうか。日本の男性は皆、シャイで受け身であると聞いていたが……本当だったのだな」

「アヴドウルさん！ そう！ そうなんですよ！ きつと!!」

「……おれは違う」

「おまえハーフじゃろ……?」

「ぼ、僕だつてちがつ……」

「……いい、いつでも言つて。私でよかつたら、その、ちぎるから……。」

はっ！ でも、ちぎれるのかな？ 素手で……。」

あ！ そうだ！ 承太郎君に……スタープラチナに頼んだ方が、こう、ブチブチブチツと……」

「……やんねえよ。頼まれても。誰がやるか……」

「えー?」

「……もうやだ、このひとたち」

「ぐええッ!!」

そんな私たちをよそに、先ほどのおじいさんが急に苦しみだした。彼に当て身をくらわされた、あの……。その舌にはくつきりと、虫の刻印が記されていた。

「さっきのじじいが本体だったようだな……」

「しかし……こいつの額には肉の芽がうめ込まれていないようだが……?」

気絶している敵を覗き込む花京院くんの質問にアウドウルさんが答える。

「この灰の塔は旅行者を事故にみせかけて殺し金品をまきあげている、根っからの悪党スタンド。金に目がくらんでD I Oに利用されたんだろう。」

そのときだった。明らかに異常な機械音が、機内に鳴り響く。

「!? 変じや、さっきから機体が傾いて飛行しているぞ……まさか!」

コックピットに急ぐ。

「あ、ここから先は立ち入り禁止で……」

「知っている」

ジョースターさんが華麗にスルーして操縦室へと消える。

「は!」

「す、すてきな、方……」

「どけ」

「きゃつー！」

そして、自らの姿に見惚れていたスチュワードさんたちを押しつけ、続いてコックピット内に入っていく承太郎君。

そのフォローをする花京院くん。

「申し訳ありません。」

女性を邪険に扱うだなんて、許しがたい奴だが……。

今は緊急事態なのです。許して頂けますか？」

「……はい……」

「……」

（……やっぱり、紳士だ）

というかフェミニスト、というやつなのだろう。世の女性みんなに優しいのだ。

一瞬にしてスチュワードさんたちを虜にしてみました。

甘いマスクにこの性格……当然だろう。

モテるんだろなあ、なんて、おもう。

……いや、私には関係ないうえに、やっぱりそれどころじゃあないのだけれども。

「……仁美さん」

真後ろでそんなことを考えていたら、急に彼が振り向く。

(わっ!)

こころの声もれたのだろうか、一瞬焦る。

が、そうではないようだ。

「……あなたはここにいてください」

「あ、うん、……狭いもんね」

狭いコックピット、私まで入れれば邪魔になってしまっただろう。

「いや、それもそうなんです、

……見なくていいもの、また見なきやいけないだろうから……」

「……」

(……ほら、ね)

彼を見送る。その直後のことだった。

「……なっ!？」

倒れたかにみえた悪党スタンド使いの老人が、なんと起き上がった!

「ひっ!」

(い、いけない!)

動揺しつつも、スチュワーデスさんたちに危害をくわえさせぬように立ちはだかり身構える。

そのとき、異常に気付いたみんなが出てきてくれた。

「だいじょうぶですか!?!」

「どうした!?!」

「なにい!?!」

そして、敵は断末魔の如き、叫びをあげた。

「ブワロローベロォー! わしの『塔』のカードの暗示は、事故と旅の中止!

たとえこの機の墜落から助かったとて、エジプトまでは一万キロ!

その間、DIO様に忠誠を誓った刺客が次々と貴様らに襲い掛かるのドアツ!

DIO様はスタンドをきわめ、それに君臨できる力を持ったお方!

きさまらは決してDIO様のもとへたどりつけるわけがぬあーいのどあああ!!」

それだけいうと、ふたたび老人は、倒れた。

「い、い、こうしちゃおれん!」

再び操縦室に入っていく皆。

花京院くんが残って状況を説明してくれた。

「やはり、パイロットが、もうすでに……!」

「そう……なんだ……」

(……また、護れなかった……)

拳を握りしめる。

「しかも自動操縦装置も破壊されてしまっていて……」

やむを得ず、ジョースターさんがこの機体を胴体着陸させる、とのことです」

「え?! そんなことできるの?!」

「……プロペラ機なら経験あるんじゃないかのお……とか言っていました……」

「ぶ、プロペラ……」

飛行機の不時着。そんなドラマで見たようなことを体験することになるうとは……。

(あのシーンでは、たしか、上手く着陸したのに……それにしたって、たくさんの人が……)

スチュワーデスさんたちの指示で、緊急体勢をとる乗客たち。

その顔は皆一様に、不安に満ちていた。

「うわーん、こわいよ、ボクら、死んじゃうの?!」

「大丈夫、大丈夫よ……」

(……)

覚悟を、決める。

*

*

*

(やはり、こうなったか……)

すんなりことが運ぶとは思えなかった。なんらかの妨害を受けるだろうと予期はしていたが、いきなりこのような大惨事を引き起こしてこようとは。自分たちが襲撃を受けるのは覚悟していた。しかし、わかっていたことだが、まったく無関係の人達に危害を加えることを少しも厭わない。たまたま乗り合わせただけの人が大多数だというのに。敵の残虐性を再確認し、齒噛みをする。

しかし、こうなつてはもはやジョースターさんの腕にかけるしかない。せめて、犠牲が少なくあるよう、祈るような気持ちになる。

(……不安、だろうな……)

隣に座る仲間の女性をみやる。と、そこでふと思ひ出す。

このひとの場合、なにもしなければ、自身の安全は確保されるのだ。そういうスタンダードなことから。

そう、なにもしなければ……だ。

そして、気づく。

彼女がやたらと思ひ詰めたような……。そんな表情をしていることに。

(もしや……)

高度はどんどん下がっていき、地上が見えてきた。

今にも接地せんとする寸前、彼女が申し訳なきように、こちらをみる。

「……花京院くん、ごめん。いきなり迷惑かけるかも……。あと、よろしく……！」

「ひ、仁美さん!? やはり、あなたッ……！」

制止する間もなかった。

左腕から、彼女の鳥型スタンドが飛び立っていく。

次の瞬間、ズゴオオーン、という、とてつもない轟音のみが聞こえた。

そう、『音』のみが……。

急ぎ外壁にハイエロファンを伸ばし、様子をうかがうと、予想通りの光景が目

映った。

田んぼにポツンと佇むジャンボジェット機。

それは必要最小限の範囲で薄桃色のドーム状の障壁にすっぽり覆われていた。

本来、どれほどの衝撃があるか、なんてわからない。ただ、すさまじいものだという

ことだけは想像に容易い。しかし、それを、ほとんど感じさせないほどだった。

(すごい……！)

こんな、巨大なものを、こんな衝撃から……。そんなことまで可能なのか……。でも……。！）

先日、このひとのスタンド能力を検証していたときのことをおもいだす。

他のスタンドの一般的なルールと同様、その力は、距離や時間、範囲に比例して小さくなる……。

逆に、瞬間的でもこの大きな機体を多大な衝撃から護ろうとすれば、莫大なスタンドパワーが必要だろう。

使いすぎると、意識を失う。ならば、当然、今は……。

「ひ、仁美さん！ 仁美さん!!」

「……」

声をかけて、揺さぶってみるも、予想通り、返答はなかった。

（ま、まさか……。!?!）

限界の限界を超えたら、命まで……。ありえないことではない。現に今、ホリイさんの命は危険に曝されているのだから。

焦って彼女の腕をとり、脈を確認する。

すると、しっかりとした拍動が指先に感じられた。

（……い、生きている……）

とりあえずほっとするが、この間のようによく意識が戻ることは、なかった。スタンドは精神がかたちになったもの……とすれば、スタンドのパワーの源は精神力なのだろう。

それを使い果たす、ということとは……どういうことになるのか……。

自分の顔が、青ざめていくのを感じた。

「……ほとんど衝撃がなかったから、わしの腕前、すぐくね?!」

って、思ってたの!!」

「じじい、おまえだけだ。それは……」

声に顔を上げると、いつのまにかジョースターさんと承太郎がいた。

「保乃……やはりこいつのしわざか……」

「と、とりあえず、いつ爆発するかわからん! 逃げるぞ!」

「しかし、なんて無茶をする娘だ……」

アヴドウルさんの眩きに心底同意しながら、僕は背負っていた彼女をベッドの上にとつと降ろす。

あのあと、僕たちはジョースターさんの権力（要は天下で回っているあれだが）を使

い、最速で、面倒ごとに巻き込まれる前にその場を離脱した。

そして、深夜、最寄りの街……香港のホテルにたどり着いた、というわけだ。「まったくだ。あんな力を一気に……」

ジョースターさんが顔をしかめる。

彼女の目はいまだ覚めない。

傍目にはただ、眠っているようにしかみえなかった。

「……起きんのか？こいつ……」

承太郎の言葉に、また心臓が嫌な風に波打つ。

「わからん……」

「……」

沈黙が部屋を包む。

「……とりあえず、朝まで、様子をみよう。目覚めなければ、医者……」

たまらず、申し出る。

「……では、僕がついていきますよ。」

「そうか……では頼む。彼女の目が覚めたら教えてくれ。何時でもかまわん」

「はい」

そうして、三人は出ていき、部屋には僕と彼女が残される。

ベッド脇に置いた椅子に腰かけ、ため息をつく。

(どうして、こんな……)

それにしても、この華奢な身体のどこにあんな力を秘めているのか。不思議でならなかった。

先程ここまで運ぶため、彼女をおぶったとき、その軽さに驚いた。女性というものは男よりもか弱い。ゆえに優しく大切に扱うべきもの。頭では理解していたが、それを実感したのは初めてだった。

それほど、彼女のからだは細くて、でも、やわらかくて……頼りなくて。

乱雑に扱えばすぐに壊れてしまいそうな、そんな感じだった。

ふつうの、いや、……やさしい、ひとなのだ。残酷な光景からは、おもわず目をそらしてしまう。誰かが傷つけば、心を痛める。

(それなのに……)

思い詰めたような表情のなかに、強い意思のこもった瞳をみた。

今おもえば、彼女は気に病んでいたのかもしれない。

乗客がやられたときも、パイロットがやられたときも……

悲痛なだけでなく、悔やむような表情がうかがえた。

彼らの命を、護れなかったことを、だろう。

彼女に責任など、ありはしないのに。

なぜ、そこまで、不思議におもう。

一般人として、ずっと生きてきたであろうに。

護る一族に脈々と流れる血の影響なのか、それとも……。

(そもそも、あのときだつて……)

あの、出逢いのおきをおもいだす。

(それに、したつて……)

だめだろう……!! そんな……)

ぐるぐると堂々巡りをしながら、延々と考えていた。

どれくらい時間が経つただろう。

「……。ん……」

ゆつくりと、彼女の目が、ひらいた。

*

*

*

目をあけると、映つたのは知らない天井。

(……………?)

そして、いまやもう見知ったひとのかおだった。

「気がつきましたか!」

「花京院くん……………? あれ、私……………?」

起き上がるうとしたら、彼および部屋が回転した。

……………と思つたが、どうやら回つていたのは私の目および頭の方らしい。

たまらず、ふたたび枕の上に軟着陸する。

「だめですよ! 無理しないで!」

一瞬状況がのみこめなかつたが、すぐに思い出す。

また、使い過ぎで、意識を失つたのだろう。私は。

しかし、そんなことはどうでもよかつた。

「……………っ! ひ、飛行機は!? みんなは、無事!?」

必死にそう問いかけると、彼はため息まじりにこう言つた。

「……………はあ。機体は無事、香港の田園地帯に不時着しました。奇跡的に負傷者はなし。

約一名を除いて、ですけど」

「え! だ、大丈夫なの!?!」

一人でも負傷したなら、なしじゃあないじゃないか……………と、おもう。

焦る私に、彼は含みをこめ、こんなことをいう。

「どうでしょうね？ まあ意識は取り戻したみたいですけどね。たった今」

「……。それって……私のこと？」

「おや、わかりましたか？」

さすがにピンとくる。

自分のことか。ならばかまわない。瞬時に、つい安堵の声がもれていた。

「そっか……。なら、よかった！ ジョースターさん、すごいね！」

素直な感想だったのだが……また私はやってしまったようだ。

「……よかった、だと？ ……ちつともよくないっ！」

その瞬間、彼の表情が一転した。

いや、ほんとは最初から、だったのかもしれないけれど……。

「はっ！ っ、ごめんなさい……。

お、怒ってるよね……いきなり迷惑かけて……」

意識を失った私を落ちた飛行機から運びだしてくれたのは、きつとこのひとなのだろ

う。

しかも、今が何時かもわからないが、ずっとついていてくれたのだろうか……。

本当にいきなり多大な迷惑をかけてしまった。申し訳ない気持ちになる。

すると、あきれたような、……それがより一層怒気をはらんでいるようにおもえる
……そんな声がきこえた。

「……ふーん、そうですか。この期に及んでそんなことをいいますか……」

「え……?」

「迷惑だど? 迷惑をかけられたから僕は怒っていると。」

あなたはそう思っているわけですか、そうですか」

「……っ!」

「あれだけの力、使ったらどうなるかなんて、わかっていたでしょう。」

もう、目覚めないんじゃないかと、みんな、どんなに……」

「……」

「……もう、あまり、無謀な真似は慎んで下さいね」

「……はい……」

「……さ、まだ夜中だ。もう少し休んだほうがいい」

ふわりと、ふたたびやわらかな毛布をかけられる。

するとすぐに、意識が遠のいていくのを感じた。

このままでは、だいたいなことを、いいそびれてしまう。

薄れゆくおぼろげな意識の中、必死でそれを口にする。

「……花京院くん……。ごめんね……。ありがとう、とう……」

「……」

なにやら彼が呟いたような気がしたが……私の耳には届かなかった。

*

*

*

「……まったく、あなたってひとは……」

やはりまだ回復しきっていないのだろう。すぐに寝息が聞こえてきた。

安心しきったかおで、すやすやと。

(よかった……)

ジョースターさんたちの部屋に内線を入れ、報告をしたあとにふとおもう。

(……ありがとう……か)

それは、あなたがいわれるべきことではないのか、と。

そして、つい、強い、責めるような口調になってしまったことを反省する。

本来、自分たちを含む、乗客全員の命を救う大手柄なはずなのに、称賛することも忘

れて……

でも、どうしてだろうか。褒める気になんてなれなかった。これっぽっちも。

自分以外の人間に……しかも女性に、声を荒げるなんて……。ほんとうに、らしくない。

*

*

*

目を覚ます。

泥のように眠る、とはこのことか。

「……。ん……。あれ？ ああ……」

映ったのはやはり知らない天井だったが、今度はすぐに状況を思い出した。

香港のホテルの一室、だろう。気絶した私はそこに運び込まれたのだ。

起き上がり、まわりを見渡す。

広い部屋だった。自分の下宿の1.5倍はあろうか。テレビやソファ、テーブル……高級そうな調度品が立ち並び、今自分のいるベッドもふかふかだ。きつととてもいいお部屋なのだろう。さすがジョースターさん。

そして、もうひとつのベッドには、こちらに背を向け眠るひとがみえた。

(そっか……。そうだった)

おもいだす。昨晩のことを。

脇にある時計を見ると、朝の9時すぎだった。墜落したときから計算すると、ほぼ半日近く私は眠っていたようだ。……眠っていたという表現がはたして正しいのかはわからないが。

そつとベッドから出る。

寝すぎたせいか、力を使いすぎたせいか……、なんだか身体中が痛いうえに、汗でベタベタしていきもちわるかった。迷ったが、今のうちのほうがむしろよいかと思ってお風呂場に移動する。

さすが高級ホテル、ひととおりの必要なものが揃っていることを確認し、さつとシャワーを浴びる。

当然、着替えはないが、それでもかなりさっぱりした。

音をなるべく立てないように気を付けていたつもりだったのだが……
バスルームからでると、彼が起きていた。

*

*

*

目を覚ます。

浅い眠りから……というか、結局ほとんど眠れなかった気がするが。

ぼんやりとした頭を抱えつつ、隣のベッドをみて、青ざめる。
彼女がいなかった。

(ど、どこへ!?)

しかしすぐに、かすかな水の音がバスルームから聞こえてくることに気づく。

(ああ、……なんだ)

ほつとすると、同時にまた、なんともいえないきもちになる。

落ち着かない気分を誤魔化すかのように、無意味にテレビをつけたり消したりしていた。

少しすると、ドアが開き、彼女が洗い髪をタオルで拭きながら、出てきた。

「あー! おはよう」

「おはようございます」

「ごめん、起こしちゃったね」

「いえ。そんなことは……」

平静を装いつつ、いう。

「そ、それよりも! もう、だいじょうぶなんですか?」

「うん。もう、なんとも」

元気にうなづく。顔色もいいようだ。

「そうですか。よかった……」

すると、僕をじつとみつめる彼女。

「花京院くん……あの、ほんとうに、……ありがとう」

そして、ペコりと、頭を下げる。

ふわりと、シャンプーのいい香りがした。

「……昨日、もうききましたよ。それは」

「……そっか」

「というか、僕はべつに、なにもしていないじゃあないですか」

「え?!」

なにか驚く要素なんてあったらだろうか、とおもっていると、彼女はこういった。

「……そんなこと、ないよ」

そして、これまたふわりとほほえむ。

「う……あ、ええと、……では、僕も、シャワー浴びてきます」

「うん。ごめんね、お先に」

「いえ」

逃げるようにバスルームへ飛び込む。

あの笑顔には、どうやらみた者の体調に変調をきたす効果があるようだ。

よく考えたら、さっきの自分の台詞は、恋人同士のそれ…のように聞こえなくもないんじゃないだろうか……とか。そんなことをうっかり考えてしまったためだろうか。僕の血液を循環させる器官は余計におかしくなってしまったようだ。ほんとうに、どうかしている。

「で、勝算があつたわけなんですか？」

シャワーを浴び終わり、幾分冷静さを取り戻した僕。

部屋に備え付けのコーヒーを淹れてくれるという彼女の言葉に甘えることにする。待っている間、気になっていたことを聞いてみた。

「え？ なにが？」

お湯を注ぐ彼女に問い返される。

「もちろん、墜落のときですよ。」

確かに皆の命の危機だったかもしれませんが、あんな無茶をして……」

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

カップを僕の前に置き、対面の椅子に座りながら、彼女は答える。

「……勝算、といわれれば、もちろんなかつたけど」

コーヒーにミルクを入れ、かき混ぜながら、ばつが悪そうなかおをしていう彼女。黒い中に落とされた白は中間色におちつく。

「そりゃ、完全に護れるとは思ってなかったよ。

でも、少しくらいクツションになればと思つて。ちよつとはましかなくて」

事実、怪我人すら0なわけなのだから、ちよつとどころではなかったのだろうが。

しかし、そういう問題ではない。まったく自覚の無い彼女に告げる。

「いや、そうじゃなくて。……あなたが無事な保証ですよ」

「へ？」

「あんな莫大なエネルギー……」

一気に消費したら、意識どころか、下手したら命まで……。

とか、思わなかったんですか？」

「ああ。それは、ないかな」

しかし、予想に反して即答されてしまう。

「どうして？ わからないじゃあないですか」

思い付かなかったのであろうか？ そんな浅はかなひとにはおもえなかつた。

意外とよっぽど楽観的なのか？ などと、思っていたら、こんなことをいう。

「わかるよ。だって……セシリアはそんなことしない」

きっぱりと言い放つ。

「あ……」

「それだけは、確信あったかな」

猫舌なのか、珈琲の湯気を吹き冷ましつつ、いう彼女。

（そうか。自身のスタンドへの……）

「……信頼、しているんですね」

すると、彼女は一瞬目を見開いたあと、すぐくうれしそうなおをする。

「もちろん。というか……」

そして、ちらつとこっちをみる。

「……自分だって、そうなくせに」

「……まあ、ね」

「ふふ……」

「ふっ……」

カップ越しに、彼女と笑い合う。

そうだ、彼女にとつてのセシリアは、僕にとつてのハイエロフロントなのだ。

少し、納得がいった。

それにしても、ハイエロフロントについて、こんなふうにだれかと話す日がくるなん

て。

(昔の自分にいったって……信じやしないだろうな……ぜったいに)

「そうだ、素敵な名前だね」

「え？」

「ハイエロフアント……グリーン」

「気付いていましたか。」

……ええ。改名しました。……あのときの己と、訣別するために。」

「……そっか」

そういつて、目を細める彼女。

「それにしても、昨日、本当に凄かったね！　ひとりでやつつけちゃったもんね」

「まあ、あの状況下では僕が一番適任でしたからね。能力的に」

「それにしたってだよ。あんな風に先陣切って……」

「……。それは……僕が……」

……一番信頼されていないはずだから。

「……」

嘆いていてもしかたがないことだ。例えばマイナスからのスタートだとしても、ひとつ

ずつ行動で取り戻す。それしか術はないのだから。

「ん？」

「いえ……」

なのに、つい、この人にはぼろつと言ってしまいそうになる。危なかった。

ふしぎそうな彼女に誤魔化しがてらい返す。

「そんなの、あなたには言われたくないな」

「いや、だからセシリアは……」

「それこそ、それにしたって使い過ぎでまた気絶するのはわかっていたでしょうに……」

「ああ。うん。わかってたけど……だいじょうぶだとおもったから」

「は？」

「あなたが隣にいてくれたから。」

ちゃんと連れ出してくれるだろうって……信じていたし」

「……ッ！」

びっくりした。

……わかつているのかとおもった。

「はっ……！……ごめんね！ すっかり頼り切っちゃって……」

もちろん、この借りは必ず……！」

……のは気のせいかもしれない。

「あ！ そうだ！ それこそいつでも、ひきちぎるから!!」

「……」

そうだった。すっかり失念していたが、そんなあらぬ疑惑も払拭しなければならなかった。

「……」
「だいたい、自分はたぶん比較的、いじめられるよりいじめたい方……いや、なんでもない。」

「もっと腕力つけねばちぎれるようになるかなあ……修行？ 筋トレ……？」

「……ふっ！」

まあ、気のせいだとしても……。

「……ふくくくくく……!!」

「はっ！ ま、また笑われてる……な、なんで……？」

「……さあ？ なんででしょうね」

ほんとうに、おかしなひとだ。

集合時間になり、ロビーで皆と合流する。

すぐさま、凄いい勢いで頭を下げる彼女。

「おはようございます！ 昨日はすみませんでした！」

「目覚めたと聞いて安心してたよ。体調に問題はないかい？」と、アヴドウルさん。

「こいつめ！ わしの腕が信用出来んのか！」

「そ、そういうわけでは！ す、すみません！」

ジョースターさんがからかう。どうやら本気になっているようで、必死に謝っている。素直すぎるのも考えものだ。

「無事でなにより、じゃ。心配しとつたんじゃぞ。……約一名、特に……なあ？」

「うっ!？」

それは、誰のことだ……。

「ふっ……!？」

「ふん……!？」

にやにやする他二名。

僕か？ 僕のことか？

たしかに、心配だったが……。なんてこというんだ。

「へ？ だれですか？」

「にしし……さあのう。まあ、お説教は心配性なそいつに散々されたじやろうから……

いいか。

あまり無茶はせんようにな」

「はい……」

しかし、彼女はどうかやらさっぱりわかっていない様子で、かおには疑問符が浮かんでいる。

よかつたような……。しかし、この様子ではまた無茶をするのではないか……。ともおもう。

「さて、では飯を食いながら、今後どうするか話し合おうかのう」

Wonderland

乗客の中に紛れ込んでいた敵スタンド使い『灰の塔（タワーオブグレー）』の策略によつて、僕たちの乗った飛行機は墜落させられてしまった。そこで今後の方針……ここ、香港からエジプトのカイロまで、どのようなルートで、何を利用して行くか……と、ということ話を話し合う、兼、早めの昼食をとろう、ということで行きは繁華街までやってきた。

「さて……。で、何が食べたい？」

「そりゃあ、香港といえば……」

「……中華だろう」

「ええ。本場ですもんね」

「やっぱり？」

そして、ひとり発言のなかった彼女に声をかけるジョースターさん。

「保乃も？ いいのか？」

「はい。私はなんでも」

そういつてにっこりと微笑む。

「なら、……どこかいいい店知ってる？ アヴドウル？」

「いや、それはさすがに……」

「ここは例の、『わたしはきいたことがある…』とは、いかなかったようだ。

「じゃあ、……あそこでもいいか。でかいし」

そして、結局適当に決まったそこへ、そろそろと入っていく。

(……ん？)

そのとき、ふいに視線を感じ、振り返る。

が、すでにその気配は消えていた。

(気のせい……か？)

そんな僕に声をかける彼女。

「ふふ、本場の中華かあ……！ たのしみだね。

……つて、あれ？ どうしたの？ 花京院くん」

「いえ……なんでも」

「そう……？」

「ええ、行きましょう」

「……」

* * *

「うむ、なかなか綺麗な店じゃあないか」

「そうですね」

なんやかんやで決定した昼食会場。案内されたテーブルに、皆で腰を落ち着ける。

「あ、すみません。ちよつと失礼します」

今のうちにお手洗いに行っておこうとひとり席を立つ私。

(……さっきの、もしかして……)

急に深刻な表情で振り返る、彼の様子を思い返す。

次々と……ということとは、ここにも刺客がいたりするんだらうか……

そんなことを化粧室そばの洗面台で手を洗いながら、鏡にむかつて考えていた。すると、どこからともなく……こえが、きこえた……突然。

——……を……けて……——

「……え……？」

振り返る……が、だれもない。

(? 空耳……?)

もちろんそう思った。しかし……

——……たすけて……——

「へっ……？」

また、きこえた。今度ははつきりと。

そうして、気づく。

鏡に映る……じぶんではない……女のひと。

「……ひいやあああああ——！」

「……どうしました!？」

「え!?! あ! か、花京院くん! あ、あれ……! か、鏡つ! 鏡のなかに……」

「……鏡?」

腰を抜かしている私に代わり、それを調べる彼。

「……普通の、鏡のようですが……」

「あ、あれ? ほんと?」

そういわれ、おそるおそる見る。

すると、映し出されているのは彼と私。実像の虚像。ただ、それだけだった。

「で、でも、さっきたしかに、女のひとが……『たすけて』って……」

「……はあ？ そんな、学校の怪談じゃああるまいし……」

「う、うん……そ、そっか。そうだよね……」

「まあ、無事ならいいんですが。立てますか？」

「うん。ご、ごめんね。……ありがとう」

「……いえ」

「あれ？ でも花京院くん……なんでここに？」

そして、ふと浮かんだ疑問をぶつける。

「……。ぼ、僕もトイレに……と、通りすがったところ、あなたのあのへんてこりんな悲鳴が聞こえたもんだから、慌てて駆け付けた。……それになにか不審な点が？」

「ああ、そうなんだ」

「そうです。それだけです。さ、戻りますよ」

「うん」

「……」

去り際に、もう一度だけ覗いてみた。

でも、やっぱりそれはしかめつつらの見慣れた顔しか映してはくれなかった。

「たしかに、我々はもう空路を利用するのは不可能だ。」

あんな多数の他人を巻き込む大惨事を引き起こすわけにはいかん……」

花京院くんとともに席に戻ると、本題……今後についての話し合いが始まった。旅慣れているふたり、ジョースターさんとアウドウルさんが会話の中心である。

「しかし、あまり悠長なことをしていると、ホリイさんの命に危険が……」
「わかつている。しかし案ずるのはまだ早い。」

飛行機でなくとも、50日あればエジプトまでわけなくいけるさ。

そこでルートだが、わしは海路を行くことを提案する」

「わたしもそれがいいと思う。」

陸路は国境が面倒だし、ヒマラヤや砂漠は足止めの危険がいっぱいだ」

「僕はそんなところ行つたことがないので、御二人に従います」

「同じ」

「私もです」

意思を統一し、皆で領き合う。

「だがやはり一番の危険はDIOが差し向けてくるスタンド使い……だな」

ジョースターさんのその言葉に、『灰の塔』のいまわの際の叫びを思い出し全員ため息をつく。

「いかにして、みつからずにエジプトにもぐりこむか……だ」

そのとき、花京院くんが、おもむろに空になった茶瓶のふたをずらした。そしてそれに気づいて不思議な顔をしている承太郎君と私に説明してくれる。

「フフ、これはお茶のおかわりをほしいのサインだよ。」

「香港ではこうするとおかわりを持って来てくれるんだ」

「へえー！」

「また、人にお茶を茶碗にそそいでもらった時は、ひとさし指でトントンと二回テーブルをたたいた。これが『ありがとう』のサインさ」

物知りなんだなあ、と、おもう。一介の高校生であるはずの……以下略。承太郎君もそうだが、このひとの規格外さにいちいち驚いていたら身がもたない……と、いうことはもうわかってきたので、素直に感心するにとどめておくことにする。

そんな会話を聞きつけたからか、私たちのテーブルに、オーダー表を持って話しかけてくる男性が現れた。

「すみません、ちよつといいですか？

わたしはフランスからきた旅行者なのですが、漢字が読めなくて……」

年の頃は20代前半くらいで、身長は……。花京院くんと同じくらいなのだろうが、いかんせん髪を上方に長く逆立てているためよくわからない。それを含めると承太郎

君くらいの高さだった。

「やかましい、あっちへいけ」

あいかかわらず、うつとーしいことが嫌いな承太郎君に邪険に扱われるが、それを祖父がかばう。……性格は一見正反對の、この祖父と孫。

「まあまあ、承太郎、いいじゃないか。どれ、わしに任せなさい。

香港にはもう何度も来ておるから、これくらいたやすいことよ」

そうして、ジョースターさんが、頼まれた料理を選択し、ボーイさんにつげる。

しばし待っていると、料理が運ばれてきた。

「お待たせしましたー」

テーブルに次々に並ぶ、色とりどりのお皿たち。

(……あれ? ……これも……?)

違和感に、気づく。

(……ひとつも……合っていない……)

どれもこれも、旅行者さんのリクエストしたものはてんで違うものだった。

「……」

しらけた空気と沈黙がテーブルを包む。出来立ての温かい料理となんて対照的な

だろう。

「ま、まあいいじゃないか。わしのおごりだ。

何を注文してもまあ美味しいものよ。ワハハハハ」

そんなわけで、旅行者さんをまじえての食事が始まった。

「あ、美味しい」

「ええ、ほんとうにどれでも『まあ、美味しいもの』ですね」

たしかに、ジョースターさんの言うとおり、どの料理も美味しかった。

カエルも、まあ、鶏肉のようで……みかけに目をつぶれば、だが。

それを花京院くんと私が告げると安堵の表情を浮かべるジョースターさん。

「じゃろおー！これを見越してのことじゃよー！」

「……嘘つけ、このじじい。……おまえらも甘やかすな」

孫というものはかくも厳しいものなのだろうか。

「ふーんだ！承太郎のアホー！ いじわる!!」

それにひきかえ君らはいいいじやのう……うう……」

「……黙って食え」

「はは……」

完全に立場が逆転している……この祖父と孫。

そんな中、旅行者さんが、何気なく、飾り切りをされた人参を箸でつまむ。

「しかし、どの料理も手がこんでいますなあ……」

ほら、この人参なんて……星の形。

なんか見覚えあるなあ」

「はっ！」

一瞬にして空気が張り詰める。

「そういえば……『知り合い』が、同じ形のアザをもっていたなあ……」

いうと、表情が、目つきが、一変する。

……ほとぼしる、殺気。

ジョースター家の一族の首に必ずあるという……星形の、アザ。

「この気配……さっきの！ やはり、きさま……新手的！」

花京院くんその言葉に対し、首筋に人参をあてる真似をする旅行者。

そして、それとほぼ同時に、卓上の御粥がぼこぼこ泡を立てはじめた。

「危ない！」

出てきたのは、なんと、銀色の、細身の剣……レイピアを握る、銀色の、腕。

刹那、近くにいたジョースターさんに切りかかる。

「スタンドだッ！」

ジョースターさんがそれを、左手を貫かれつつ、受け止める。

「ああっ！」

「だいじょうぶじゃ！」

「……じじいの左手は、義手だ」

承太郎君が補足してくれる。

「そ、そうなんだ……よかった……」

「くっ、マジシャンズレッド！」

アヴドウルさんがスタンドを出し、応戦する。真つ赤な火炎がうねりをあげて銀色のスタンドに放たれる。

『ケッ！』

しかし敵はレイピアをくるくると回すと、まるで飴細工のように炎を巻き取ってしまう。

「なにっ!？」

そして、それをそのままひっくり返ってしまったテーブルにむけてぶつける。

「な、なんとという剣さばきっ」

「おれの名はジャン・ピエール……ポルナレフ。」

スタンドは戦車のカードをもつ『銀の戦車』！」
シルバーチャリオッツ

(……『銀の戦車』……!?)

敵の後ろにスタンドの全身がみえた。

銀の甲冑をまとった西洋の騎士のような外見で、手には先ほどジョースターさんを攻撃した細く長いレイピアをもっていた。

「アヴドウル、貴様から始末してほしいようだな……」

「か、火事だ、火事だーッ！」

「な、なんの火の気もないところから炎が!？」

事態に気づいた店員さんたちが騒ぎ出す。こういうとき、あらためて、ふつうの人にみえないのだ、ということを実感する。

そんなパニック状態の中、敵は入り口のところに立っていた。

「はっ！ いつの間に……」

『戦車』のカードのもつ暗示は『侵略と勝利』。

そんなせまつ苦しいところで始末してやってもいいが……

アヴドウル、おまえの炎の能力は広い場所の方が真価を発揮するだろうか？ そこをたきのめすのがおれのスタンドにふさわしい勝利……」

「表に出ろ！ 全員切り裂いてやる……！」

(……ハッ！)

敵が言い放った、その瞬間、気づく。

隣のテーブルに座っていた、一人の幼い少女……

……騒ぎによって、今にもその上に崩れようとする、中国らしい、陶器の調度品の数々に。

「あぶないっ！」

咄嗟にセシリアを放つ。

「あッ！ あ、あなたこそ！」

「……え……？ ……にやつ!？」

彼のその声が聴こえたのと同時だった。

私の後頭部に激しい衝撃が走り、目の前が一瞬で真っ暗な闇に包まれたのは。

*

*

*

「……ねえ？」

「……ねえ」

「……ねえってば!!」

幾分乱暴に呼びかけられる声と揺さぶられる感覚。

「ん……。こ、こころは……?」

「もう、やっと気づいた!」

「え……? あ、貴女!!」

目の前にはひとりの同年代の女性。その顔を見て、驚いた。

「さ、さっきの!?!」

それは先程鏡に映った人物と同一のものであった。

「……。そんな、幽霊でも見るようなかおしないでよ……」

「あ、ごめんなさい……」

おもわず謝る。さっきからこんなに驚いてしまって……確かに失礼だった。

状況的についオカルト扱いしてしまったが、鏡のなかにこんなに綺麗で可愛い青い眼のお嬢さんが……どつちかというと、まるで不思議の国のあれじゃあないか。時計を抱えて走るうさぎや、にやりと笑うしまのしっぽの猫がいたら完璧なのに……。

「まあ、実際……」

そんな、もういつそのことならと、ありえないメルヘンな現実逃避をしていた私。そこになおも驚くべき言葉が飛んでくる。

「幽霊なんだけどね。わたし」

「は!?!」

「そんなこと、どうでもいいから。時間ないし」

「い、いや、こつちにはどうでもよくな……」

反論しかけるも、こちらの質問には答えてはもらえそうもなかった。彼女は続けた。彼女と波長が合ったのは幸運だった。ごめんね、頭……。

おねがい……! たすけて!」

「……あ……」

——……たすけて……——

さつき聞こえた、それは、このことだったのだ。と今さら気づく。

「いいから! あの闘いを今すぐ止めてくれればいいの!」

「え……?」

「……わたしの、せいなの……」

「え……? ど、どう……?」

「……」

彼女の白い頬を伝わり、こぼれおちる雫……

(あ……)

それをみて、心を決める。

「わ、わかりました……なんだかさっぱりですけれども……。一応善処してみます」
すると、ぱあつと輝く、彼女の顔。

「よかった！　じゃあ、お願いね！」

そして、視界が、今度は眩い光に包まれる。

「え!?　ええー……!?」

*

*

*

「ハッ！」

そうして、目をあけたその先には……

「重ねて言うが、占い師のわたしに予言で闘おうなどは……10年は早いんじゃないかな?」

ブスブスと煙を立て燃えながら倒れ臥す、あの男性……ポルナレフ、さんの姿があつ

た。

「あーッ!!」

(し、しまった! 遅かったーッ!?)

善処する、そんな大口を叩いたのに、彼女に合わす顔が……

つて、また会えるのかわからないけれど……

幽霊……たしかにそういったときの、彼女の憂いを帯びた顔が思い浮かぶ。

「あ! お、起きた!! だいじょうぶですか?!」

「か、花京院くん……?」

「あなた、変な風に落ちてきた壺で頭を打って気絶して……」

「そ、そうなんだ……あ……!」

アヴドウルさんは燃えゆくポルナレフさんを見やり、懐から短剣を出し、近くに投げ落とす。

「……炎に焼かれて死ぬのは苦しかろう……それで、自害するといい」

そういつて、背をむける。

短剣を取る、その手は震えていた。

勝者の背中に投げつけようと、かまえる……

しかし、それが放たれることは……なかった。

代わりに首筋に、あてがう。

「……………うぬぼれていた。」

炎なんかにわたしの剣さばきが負けるはずがないと……………」

短剣が、カランと音を立てて、落ちる……………」

「フフ、やはりこのままいさぎよく焼け死ぬとしよう……………」

それが君との戦いに敗れたわたしの君の『能力』への礼儀。

……………自害するのは、無礼だな……………」

「だ、だめ！ 止めなきや！ あの、敵だけど……………えっと、悪い人じゃあない……………らしくて……………」

「は……………」

怪訝なかおをする花京院くん。

「さっきの、鏡のひとが……………、今……………」

当たり前だ。こんな荒唐無稽な話。

おかしいことを言っている。頭を打ったせいか……………そう思われるに決まっている。普通なら。

が、他に思いつかなかった。ありのまま、話す。それ以外に。

「し、信じてもらえないと思うけれど……」

しかし、彼は真剣に耳を傾けてくれた。そして……

「……。よくわかりませんが……それならだいじょうぶですよ。ほら」

「……え……？」

「……」

アウドウルさんがパチンと指をならす。と、炎がフツと消える。

「あくまでも騎士道とやらの礼を失せぬ奴！

しかも背後から攻撃してこなかった……！

DIOからの命令をも越える誇り高き精神！」

「……」

(……あ……)

静かに目を伏せる、その様子に気づく。

(……花京院くん……)

そして、向き直り、彼は言う。

「アウドウルさん！ その額の額、調べてもらっていいですか？ おそらく……」

確認しながら、アウドウルさんはいう。

「花京院、ああ、そのとおりのようだ。……承太郎！」
「おう！」

以前と同様に、承太郎君が額の肉の芽に手を伸ばす。それを見たジョースターさんが顔をしかめる。

「うええ、またあれか……はやく！ はやく抜いて！ 承太郎ツ!!」

「ハッ！ あ、ちよつと待つて下さい！」

「あ！ 保乃!? おまえさん、大丈夫なんか?!」

「はい。大丈夫です！ ……セシリア！」

承太郎君を触手の侵入から護つてもらうよう御願ひする。

「……これでよし。さ、御願ひします」

「よし……」

そうして摘出作業が再開される。

それを見守る私にむけ、ジョースターさんが呆れたようにいう。

「しっかし、おまえさん、よく気絶する娘よのお……本当に大丈夫か？」

「は、はい。すみません、また御迷惑を……」

「いや。わしゃあ、なーんもしとらん。またな。ししし……」

意味深な含み笑いをするジョースターさん。

「? どういうことですか?」

「……さあおう」

問うも、その疑問には答えてもらえず話を逸らされる。

「そして、意外と肝がすわつとるよな。このうねうね、わしでも気持ち悪いのに……」
 「ああ。それは、私、見慣れているからじゃあないですかね? 大学の講義で。」

一応専攻、生物学分野なので。まだ教養に毛が生えた程度……入門したてですが」

「え!? こ、こーゆうのに、興味が……?」

「い、いや、こーゆうのじゃあなくて……その、遺伝学に」

「ほう……?」

「スタンド使って……一体なんなんでしょうね?」

うちの家系のスタンドって代々……要は女性のみで遺伝しているわけじゃあないですか。

ということとは、なにか遺伝子に突然変異を起こして……

とかいうのが発現要因だったりするのかな、と。

興味があるのは、そーいうの、ですね。

ジョースター家もそーうな方が多いと聞いて、尚更そう思うようになったんですよ

……

まあ、それにしたって、どうやってそんなの研究するんだって話ですが」
苦笑する。

「…………ふむ」

「…………おらあ！」

そんな間に無事引き抜かれる肉の芽。

「あ、ジョースターさん、出番みたいですよ」

「おっと！ そうじゃな。また孫に怒られちまう……」

「ふふ、そうですね」

「波紋疾走!!」

…………これで肉の芽がなくなっていくめない奴になったわけじゃな！ じゃんじゃん

！」

「花京院！ 保乃！ オメーらこーゆーダジャレいうやつつてよーつ、ムシヨーにハラ
が立ってこねーか！」

「はは…………」

(…………結局、怒られてる…………)

やっぱりこの、祖父と孫は…………。

眠れないのはだれのせい？

香港繁華街。ざわつく街角から少し外れた通りにある公園。

その一角にあるテーブル付きのベンチで、おれは読書に勤しんでいた。

アヴドウルがああ刺客、フランス人電柱頭……ポルナレフを退けたあとのことだ。

予定通り、今後は海路を行く、ということになり、じじいとアヴドウルが船を手配している間、残ったおれたち三人は墜落時に捨て去ってしまった荷物の分その他の買い出しに行くことになった。

何件かの店を回り、じじいたちに頼まれたものは買いそろえた。あとは個人で必要な物を……ということ、待ち合わせ場所を決め、別行動することになったわけだ。

今読んでいるこの本をはじめとして、さっさと買い物を終えたおれは、残りの二人を待っていた。

そこへ、片方が戻ってきた。

「あれ？承太郎君ひとり？花京院くんは？」

「見てのとおりだ」

「そっか」

言いながら、むかしの椅子に腰かける。

「……」

おれは読みかけのページに再び目を落とす。

たいていの女はこういうとき、べらべら話しかけてきてうつとーしいものだ。しかしどうやらこいつは違うらしい。

ぼーっと黙って、過ぎ行く人波をながめていた。

ちようどいい。ふと思つた疑問をぶつけてみることにする。

「おい、保乃……おまえ、今回もわかつたのか？」

「え？ なにが？」

「あのフランス人は、だ。ほんとうのこのひとじゃない……。つてな」

「へ？ いや、今回は私がわかつたわけじゃあなくて……」

「は？」

「……ううん。なんでも。」

……わかんなかったかも。そういえば。自分では……」

そういつて黙りこむ。

「……なんでだろう？」

「……。おれに聞かれても、しるか」

「……だよ。……前よりも勘が鈍くなっちゃってるのかな……。うーん……」

ひとりでなにやら考え込みだしたようだが、放っておく。

「…」

個人的な見解はあるが、根拠もなにもない。推測の域を出ない。

そんなことを、わざわざ教えてやることもない。

気づいているが、他人にはばれないように振る舞っているわけでもなさそう。深刻な顔で、「直感を鍛えるって、どうすれば……。……修行……。？」とかなんとかぶつぶつ言っているところを見ると、だが。

（自分ではそーいう発想にならないんだな。こいつ……）

鋭いのやら鈍いのやら……。……どんだけボケているのか、なんなのか。

そこへ、もうひとりが戻ってきたようだ。

「お待たせしました」

「ううん。全然」

手に湯気の出ている紙袋を持って。

「どうしたの？ それ」

「美味しそうだったので。つい買ってしまいました。餡饅です。食べませんか？」

「いいの？　ありがとう」

「いえ」

「いただきます。……おいしい！」

「そうですか？　よかった。承太郎も、どうぞ」

「ああ。……」

「……ん？　どうした？」

「……なんでもねえよ」

（……こいつは、とくべつな相手だから。……なんてな）

我ながら、なんてらしくねえ発想だ。

「どうだい、味は？」

「美味しい。が……、すこし、……甘えな」

「そ、そうか」

「……。ひとにばつか食わせてねえで、おまえも食えよ」

「そうだよ。せつかくじぶんが買ってきたのに。美味しいよ！」

「……そうだな」

「ああ、そうだ」

「ふふ、じゃあ私、あそこの自販機でお茶買ってくるね」

(つつたく、やれやれだぜ……)

「さ、食い終わったら、とつとと戻るぞ」

「ああ」

「うん」

*

*

*

連れだつて歩く、ふたりの後ろをついていく。

承太郎君に問われた疑問。

たしかに、言われてみれば、今回はわからなかった。

鏡の中のお嬢さんに言われるまで……。

彼女のことは、結局私は何も出来なかったわけであるし、言わずにおいたが。

そもそも信じてもらえないわけでもない。

(……よねえ。ふつう)

よく信じてくれたものだ。と、目の前のみどりいろの背中をちらりとみる。

(……そつちだつて、じゅうぶん、『おかしなひと』じゃない)

気づかれないように、心の中でだけ、そっと、いいかえしてみる。
であつてまだ数日にもかかわらず、すでになんども宣告を受けているその評価を。

(それにしても……)

(……。そんなわけ、ないよね)

*

*

*

「おはよう。花京院くん」

翌朝、集合場所にて、彼女の挨拶に迎えられる僕。

「お、おはようございませ……」

なんだか朝陽によく似たそれを正視することができず、どうにか、返事をする。
すると、すぐさま僕の変調を察してくれる彼女。

「あれ？　なんか疲れてない……？　もしや体調悪い?!」

その察しの良さは今の僕としては若干困りものなのだが……。必死に誤魔化す。
「だ、大丈夫です。ちよつと昨日眠れなかつただけなんで……」

「ほんとに……？」

心配そうなかおに、余計に胸が痛む。

「ええ、船で寝ますから……」

「よし、じゃあ出発するぞー」

そこで全員揃ったのか、ジョースターさんから声がかかる。

「はい！ じゃあ、その……無理しちゃ、駄目だよ」

そう念を押して、前に行く彼女。

そして、うしろからぼそつとこの男がいう。

「……くく。誰のせいだと思ってるんだよ。……なあ？」

「……お前のせいだよ！」

そう。……昨晚のことである。

買い出しから戻り、皆で夕食をとった後、ホテルの部屋に戻ってきた。そんなときだった。

ちなみに、前日は緊急事態ゆえ彼女と僕が同室だったわけだが、元気になった今や、当

然そういうわけにはいかない。ということ、承太郎と彼女が部屋をチェンジしている。念のため言っておこう。

ひと心地ついたところで、急激な睡魔に襲われた僕。抗う気力も必要性もなかったため、さっさと休むことにした。

そんな僕をみて、承太郎がいう。

「もう寝んのか？ 早えな」

「ああ、ものすごく眠い。……お先に」

「そうか。昨日お前大変だったんだっけな……」

それを聞き、納得したように、やつはとんでもないことをサラツといつてのけた。

「……惚れかけてる女が横で寝てりや、そりや眠れんわな」

「はああー?! な、な、な、何言つて！」

「ああ。訂正だ。もう惚れている、か。

……なおさらおまえ、よく耐えたな」

「ぬあツ!!」

思い出す。この男はそうだった。いくら法皇をひきずりだすためとはいえ、『自分』が操っていたあの女医に、ひとかけらの躊躇もなく、あんな……いわゆる、その、ディーブな接吻をぶちかましたのだ。それがすべてを物語っている。

「そ、そそ、そんな真似するか！ 君と一緒にするな!!」

そ、そもそも、僕はべつに保乃宮さんのことをそんなふうになど……」

「ふーん……。」

『保乃宮さん』……ね？ いいんだぜ？ ふつうに呼んで。……くく……」

「……ぐ、っ！」

やはり聞かれていたか。

このような邪推を招かぬよう、皆の前では気をつけておこうと思ったのに……。

うっかり叫んでしまったのだった。昨日も今日も。なんてことだ。

苦し紛れ、誤魔化しがてら、反撃の狼煙をあげてみる。

「き、君こそ！ 他の女性と明らかに扱いが違うじゃあないかつ！

ど、どうなんだよ、そっちこそっ！」

「ああ？ ……」

しかし、にやりと挑発的な笑みをうかべる承太郎。

「……はん！ だったら？ お前どうするよ？」

「っ！ べ、別にどうも……」

（そ、そうさ……べつに……）

そんな僕の様子に、やつは心底楽しそうに笑う。

「……くく、安心しろよ。」

あいつのことは人間的には、まあ、気に入っている方だが、それだけだ」

「そ、そうなのか……」

（よかつ……て？ え？ あれ……？）

明らかにほつとしてしまった自分にとまどう。なぜだ。

すると加えてこの男はまたもとんでもないことを言う。

「……付き合うなら、俺はもう少し、男に慣れていて、乳がでかい女がいい」

「わああああー！ も、もう何もうなあー……」

これ以上の会話を拒否するかのように、ベッドにもぐりこみ布団をかぶる僕。

（まったく、何を言いだすんだ！

……彼女は……信頼できる大切な仲間だ。

そんなひとに、そんな感情もつなんて……ありえないだろう！）

ねがえりをうつ。

（……そりゃあ、彼女は、ひとを護る、という素晴らしい能力を持っていて……

しかもその能力を、自分より他人のために使うことを厭わない……

強くて、尊敬すべき心の持ち主だ……）

(でも普段は、なんかふわふわしてて、素直で、だまされやすそうで……
こつちが護ってあげなきゃって……)

控えめで口数は少ないけれど、くれる言葉は……。

不思議なひとだ……)

おかげで、いつも調子が狂ってしまうのだ。

今日だってそうだ。

超常現象の類いなど、大概がトリックや錯覚にすぎない。

メルヘンやファンタジー……そんな類いのものの中だけのお話。

そんなことはわかりきっていた。

彼女のあの話。

正直、非現実的すぎる。都合のいい夢でもみただけにすぎない

……そんなふうと思うはず、だった。いつもの僕ならば。

なのに、どうしてだろう。

きつと、事実如何、ではないのだ。

『鏡の中の少女』とやらのために、一生懸命訴えかける彼女の瞳をみていたら……

疑う気にならなかった。なぜか。

まったく、自分らしからぬ……。

「……」

——おれはもつと……——

そして、浮かぶは、先程の奴のとんでもない発言。

(……なにが男慣れだ。そんなの、していい方が……いいじゃないか。

外見だって、……可愛い、よ、な……)

そして、あの笑顔……あれは……なんだ……)

(……スタイルだって、スレンダーな方が僕は好きだ。

そもそも、胸だって……たしかにそんなに大きくはないかもしれないけれど……

昨日おぶつた感じでいくと、こう……じゆうぶん……

……つてえ!?)

「うわああーッ！　ぼ、僕は一体何をおおーッツ!!」
「……。うるせえな……」

ARIGATO

波止場に着くと、ジョースターさんがひときわ目立つ帆船を指さし言った。

「あれが、わしらがチャーターした船じゃ。なかなかカツコイイじゃろ」

確かにカツコイイ……そして、大きい。はたして何人乗れるのだろうか。飛行機での反省により無関係の人を巻き込まぬため、そして、刺客がもぐり込みにくいようにするため、乗組員と私たち以外の人間は乗せないとのことだったが。

しかも大きいだけではない。甲板には日光浴ができるようなスペースもあり、さすが大富豪のチャーター船、という様相であった。若干こんなに目立っていいものなのか……とも思われないが。まあ、どちらにせよ、ジョースター家の血のつながりを感じ取られ、ある程度の居場所は敵に筒抜けなのだから、関係ないのかもしれないが。

そんな風に船を前に目を丸くしていると、ジョースターさんにある人が疑問をぶつけていた。

「ジョースターさん、ものすごく奇妙な質問をさせていただきたい」

「なんだ、ポルナレフ？」

昨日のあの人……ポルナレフさんだ。肉の芽の影響はないようで、元気な様子だった

が、表情は深刻そのものだった。

「あなたのその手袋の下……そのあなたの『左』腕は『右』腕ではあるまいな？」

「左が右……？ 確かに奇妙な質問じゃ……一体どういうことかな？」

「……妹を殺した男を探している。顔はわからない。だがそいつの腕は両腕とも右腕なのだ」

無言で、返事の代わりにともいうように、ジョースターさんが手袋を外す。

「50年前の闘いによる、名誉の負傷じゃ」

「失礼な詮索だった。許してほしい」

しばしの沈黙のあと、理由を語るポルナレフさん。

「……もう3年になる。」

おれの妹は、雨の日に学校からの帰り道をクラスメートと歩いていた。

すると、道に男が立っていた。

不思議なことにその男のまわりは雨がドーム状によけてとおっていた……」

「すると突然、クラスメートの胸がかまいたちにやられたかのように裂けた……」

そして、次に妹が辱しめを受け、殺された……男の目的はただそれだけだった」

（そ、んな……！　なんて、こと……）

息をのむ。同じ女性として、胸が掻き乱される。重苦しい、許せない……なんともい

えない感情になる。

「おれは誓ったッ！」

我が妹の魂の尊厳とやすらぎはそいつの死でもってつぐなわなければとりもどせんッ！

おれのスタンドがしかるべき報いをあたえてやるッ！」

(……妹？ ……まさか……)

あたまにうかぶ。あの、青い大きな瞳から零れ落ちる、なみだ。

「……そして、1年前おれはDIOに出会った。

『君の苦しみを取り除いてあげよう……この男を探し出してやるよ……』と。

そうして、君らを殺してこいと命令された。それが正しいことと信じた……」

それを受け、沈痛な面持ちで、口々に考えを述べる仲間たち。

「肉の芽のこともあるが、なんて人の心のすき間に忍び込むのがうまいヤツなんだ……」

「しかも話から推理すると、DIOはその男を探し出し仲間になっているな……」

(そんな人間を……)

あらためて思う。私たちの敵は、なんて非道なのだろう……と。

どこかの船から汽笛がきこえた。出発の合図なのだろうか。

ポルナレフさんは叫ぶ。

「おれはあんたたちとともにエジプトに行くことに決めませう！」

DIOをめざしていけばきっと妹のかたきに出会えるッ！」

「……」

固い決意を感じた。止める人は誰もいなかった。

そんなシリアスな空気を、明るく高い声が切り裂く。

「すみませーん！ ちょっとカメラのシャッター押してもらえませんかあ？」

女性二人組の旅行者さんだろうか。承太郎君に甘えるようなしぐさでお願いをしていた。

(……またモテてる。……あ、まずそう……)

話しかけられた御仁の機嫌がどんどん悪化していく様がありありとわかった。

「おねがいしまーす！」

そしてとうとう爆発する。

「やかましい！ ほかのヤツにいえ!!」

そこに割って入るのは、新たな仲間、だった。

「まあまあ。写真ならわたしがとってあげよう」

でれでれした本性を隠しきれない……きりつとしたふりをした顔で女性たちをさっさとつれていく。

「君、キレイな足しているから全身入れよーね。（ほんとにはフトモモだけアップでとりたいな）」

（こ、心の声が漏れて……）

「つてか、シャッターボタンのように君のハートも押しつけて押しまくりたいなー！」

（……か、かるい……）

さきほどまでの感慨はいつたいどこへやら、だった。

「なんか……わからぬ性格のようだな……」

「ずいぶん気分の転換が早いな」

「というより、頭と下半身がハッキリ分離しているというか」

今度は苦い表情で口々に感想を述べるみんな。

「……やれやれだぜ」

そして、船は出港の時をむかえた。

波をかき分け、しぶきをあげて、大海原を進みはじめる。

はたためく帆の周りを、ウミネコたちがにやあにやあと鳴きながら羽ばたいていた。

（ああ……この潮の香り。実家を思い出すなあ）

しがない田舎の港町……我がふるさとをふと思い出す。

甲板で、ひとり青い海とよせる白波をながめていると、声をかけられた。

「やあ、シニヨリータ、いい航海になりそうだね」

「あ、ポルナレフさん」

「おお！ 名前を覚えていてくれたとは光栄だ。

実は君のことがずっと気になっていてね……でかくてムサイ男どもの中に可憐な一輪の花！

これからは旅を共にする仲間だ！ よろしく頼むよ。名は、なんというんだい？」

「は、はあ。よろしくお願ひします。名前はやすのみ……」

「ほう！ ヤスノ、か！ よい名だ！」

「いや、ええと……」

またもや、である。まあ、どうせフルネームを名乗ろうとも同じだろう。

(もういいか……)

諦めていると矢継ぎ早に質問がとんでくる。

「君も出身は日本かい？」

「はい」

「歳は？」

「19歳です」

「19!?! ……そうか……」

「？」

（あれ？ ……あ、そうだ……）

浮かんだ表情が気になった、が、それは一瞬のことだった。そして、自分もこのひとに聞きたいことがあるのを思い出したが……。初対面で聞くには些か、いや、かなり重い質問になってしまいうるか。しかもどう説明したらいいかもわからない。そんな理由で躊躇っていると、うって変わって、またかるーい口調になってしまう。

「……19といえば、女学生かい？」

いいねー！ 青春まっさかり！ 恋人は、何人？」

「な、何人って！ 一人もいません！」

私のその返答に目を丸くするポルナレフさん。

「いない!? 一人も!? 嘘だろ！」

それはもつたない、人生損をしているよ！ ヤスノ!!」

「……」

（別に、そんなことない……）

そんな私の感情をおかまいなしに、ひとつ咳払いして、またとんでもないことを言い

だす。

「オホン！　じゃあ、オレと付き合おう！」

「はあ?!」

「いいじゃあないか！　後悔はさせないよ！」

急に手を取られる。

「ひゃっ！　は、離して下さい……」

ここのうのは、正直……あまり得意ではなかった。冗談だとわかってはいるけれど。いや、だからこそ。

（うう、でも仲間になったからには、手荒なことしちやまずいよね……）

おもわず飛び出そうになったセシリアを必死に抑える。

「やあ、可愛い反応だなあ、これがヤマトナデシコというやつかあ〜！」

（……こ、困った……どうしよう……）

途方に暮れている私のもとに、降臨したのはやっぱりこのひとだった。

「失礼。……保乃宮さん、ジョースターさんが呼んでいましたよ」

（神様、仏様、花京院さま!!）

「うん、あ、ありがとう！　じゃあ私、失礼しますっ！」

言いつつ、ふりほどいて、船室の方に走る。

勢いのまま走っていくと、キッチンのついた食堂のような場所で、山積みの段ボールに囲まれてなにやら思案している目的の人をみつけた。

「いたいた、ジョースターさん！　なんですか？」

「おお！　ナイスタイミング！　ちょうど頼みがあつたんじゃ」

「あれ、私のこと呼んだんじゃ……？」

「いや、わしは呼んぞらんが……？　すごいもう、わし超能力あるんかのー」

「あれ？　そうなんですか??」

ハーミットパープルも波紋も、超能力みたいなもの……というよりよっぽどすごいのは……？　と思いつつも、ふたりして首をかしげる。

「まあいいか。」

で、頼みつていうのがだ、この食料品の整理と管理をお願いしたいんじやが」

「あ、はい、いいですよ」

「足りないものは財団に頼んで補充するからリストを作っておいてくれい」

「はい。了解です！」

「うむ、助かるよ。ではゆっくりでいいから、よろしく頼む」

そういつて出ていく、ジョースターさん。

早速、ひとつずつ段ボールを開け、物品を確認し、種類と数を記入していく。こういう単純作業は好きだった。どうせ目的地シンガポールにつくまで、三日間は海上とのこと。暇を持て余すよりも何かしていたい。そのほうが時間も早く過ぎるというものだ。ひとり黙々と作業をしていると、いつのまにか、さつき言われたことを思い出してしまった。

(……人生、損してるかあ……。

……私は、ただ……。

でも、私なんかには、そんなの無理……だ、もん、ね……)

急に部屋が暗くなった気がした。雲で太陽がかげったのだろうか。

「あー、いけない。雑念は捨てて、作業に集中しなきゃ……」

自分に喝をいれる。考えてもしようがないことを考えてしまうのは、私の悪い癖だった。そして、もうひとつ思い出す。

(そういえば……)

ジョースターさん、自分で呼んでおいて忘れちゃったのかな？

なんだったんだろ……?)

そこへ、入り口の扉が開く音がした。入ってきた人物は、カウンターテーブルの影で

段ボールに囲まれている私のことに気づいていないようだ。誰かとおもいつつ、ひよこつと身を乗り出す。

「あれ？ 花京院くん？」

「うわああっ！ や、保乃宮さんッ！」

こんなに驚くとは……いつも冷静な彼にしてはめずらしい気がした。

「ご、ごめん……びつくりさせちゃった……？」

「し、しましたよ……。何しているんですか……？」

「ジョースターさんに頼まれて、食料品の整理してるの。」

花京院くんこそ、どうしたの？」

「ちよつと喉が渴いて……」

「そうなんだ。ええと、ちよつとまって……」

冷蔵庫を開けながら、問う。

「何がいい？」

冷たいのなら、お茶にコーラにオレンジジュース。サイダーとかもあるよ」

「コーラと、じゃあ、サイダーを」

「了解！」

（なんで二つ？ ……ああ、承太郎君のか。気が利くなあ……）

などと考えつつ、栓を開け、冷えた瓶をふたつ渡す。

「はい」

「ありがとうございます。……いただきます」

「はい、どうぞ」

まるでお店屋さんごっこでもやっている気分だ。なんだか楽しくなってきた。

「……って、私のじゃないけどね」

喉を潤しつつ、彼はあたりを見回しながら、いう。

「それにしてもすごい量ですね。手伝いますよ」

「ううん、大丈夫！」

こういう作業けっこう好きだし、それにのんびりやっていいって言われてるから。

それよりも花京院くんは、昨日の分ちゃんど休んでなきや」

そうなのだ。本今朝一番の会話を思い出す。寝不足……彼はそういつていた。

(はあ。もう、そんなときにまで周りに気をつかわなくてもいいのに……)

もどかしくおもう。

「そう……ですね。じゃあ手伝いが必要なときは呼んでください」

「うん、ありがとう！」

そのやさしさに甘えて、つい、ひとつ気になっていたことを聞いてしまっていた。

「あ、そういえば……ちよつと不思議でさ。

ジョースターさん、私を呼んだの、知らないって言つてて……。

忘れちゃったのかな？」

「そ、それは……」

「？ あれ??」

なぜだか明らかに狼狽している彼。その様子を見て、ひとつの考えにたどり着く。

「！ あー！ ……違つてたらごめん。」

もしかして、さっきの、私が困っていたのをみかねて、助けてくれた……？」

「うっ！」

そうだ。なぜ気がつかなかったのか。よく考えたら、とつてもこのひとりではな
いか……。そもそもあれくらい自分でなんとかしなければいけないのに、と、情けなく
申し訳ないきもちになる。

「ごめんね。」

あんなの社交辞令なんだから、上手くかわせないといけないのにね」

「……」

「でも、本当に助かつちやつた！ ありがとう……」

「……違うんです。僕は……」

私のことばをさえぎり、うつむいて、つぶやく彼。

「……？ 花京院くん……？」

不思議におもい、問う。

そのときだった。

「密航だ——！」

甲板から騒ぎ声が聞こえてきた。

「！ 上で何かあったみたい！」

「！ ええ、行きましょう！」

「離せ！ 離しやがれ！」

「静かにしろ！ ふてえガキだ!!」

私たちが甲板にたどり着くと、見知らぬひとりの少年が船員さんに捕まえられているところだった。

「おい……どうした？ わしらのほかには乗客は乗せない約束だぞ」

「すみません、密航です。このガキ、下の船倉に隠れてやがったんです」

密航者の少年に厳しくあたる船員さん。

「海上警察に突き出してやる！」

「え？ ……み、みのがしてくれよー。」

シンガポールにいる父ちゃんに会いに行くだけなんだ！」

「だめだねっ！」

その言葉に、強硬策に出る少年。

「あつっ!! このガキ噛みつきやがった!!」

そして、捕らえた腕がゆるんだ隙に、青く暗い海へと勢いよく飛び込む。

「おほーっ! ……元氣いーっ！」

「陸まで泳ぐ気か……？」

「どうする……？」

「た、助けた方がいいんじゃない……」

しかし、うつとーしいことが嫌いなこの方の返答はやはりこうだった。

「けっ、ほっときな。泳ぎに自信があるから飛び込んだんだろーよ」

そこへ青い顔をして船員さんがいう。

「ま、まずいっすよ……この辺はサメが集まっている海域なんス……」

「なっ！」

ならば話が違えばかりに、皆（承太郎君除く）で叫ぶ。

「おい小僧！ 戻れ！」

「危険だツ！」

「サメだぞオ、サメがいるぞオ！」

「ああつ！ あ、あれ……!!」

言うが速いか、獲物のおいをかぎつけたのか、海面に三角の背びれが現れ、少年にゆつくりと近づいていく。まるで映画さながらの光景だった。

「え？ ……うわあああ！」

気づいた少年が叫び声をあげる。その瞬間だった。

「……オラオラオラオラオラー！」

「え？ サメが、いきなり……ふつとんだ??」

驚きの声をあげる少年のそばに、いつのまにか承太郎君がいた。

（ほつとけ、とかいつたくせに……）

スタープラチナでサメを一気にふつとばし、少年の身体を掴んでいたのだ。

「やれやれだぜ、くそガキ。……ん？」

そして、承太郎君はなにかに気づいたようで、少年の帽子をとる。

現れる長い黒髪。

「……てめー、女か……それもまだシヨンペンくせえ……」

「よ、よくもオレの胸を……！　ちくしょー！」

「やれやれだ……」

そのときだった。彼らの下から猛烈なスピードで近づいてくる大きな黒い影がみえた。

「じよ、承太郎ッ！　下だ！　海面下から何かが襲ってくるぞッ！

サメではない！　す、すごいスピードだ!!」

「承太郎、早くッ！」

「早く船まで泳いで！」

「と、遠すぎるッ！」

「あの距離なら僕にまかせろッ！　『ハイエロフアントグリーン法皇の緑』！」

花京院くんが伸ばしたハイエロフアントの触手が、ふたりを掴み、甲板に引き上げる。

「やったあ！　ナイスキャッチ!!」

同時に、黒い、なにか、の影も消えた。

「スタンドだ！　今のはスタンドだッ!!」

「海底のスタンド……このアヴドウル、噂すらいいたことのないスタンドだ……」

スタンド……ということとは、その主……スタンド使いが、当然、いる。

「はあ、はあ……」

海から助け上げられ、息も絶え絶えの少年改め、少女に視線が集中する。

「この女の子、まさか……」

「今のスタンドの使い手か……？」

「サメの海に承太郎をわざとさそいこんだか……？」

皆の視線に気づいた少女が、威勢のよい啖呵を切る。

「な、なんだ、てめえら！ 寄つてたかつてにらみつけやがって。

なにがなんだかわかんないけどやる気かア!! 相手になつたるツ！ タイマンだ

ゼッ！」

「……とぼけてやがるぞ。もういつペン海へつきおとすか……？」

「早まるな。本当にただの密航者ならサメに食われるだけだ……」

「しかし、この船の他の船員の身元はチェック済み……」

この少女以外に考えられん……なにか正体をつかむ方法は……」

アヴドウルさんがさぐりをいれる。

「……おい、D I Oの野郎は元気か？」

「は？ なんだそりゃ？ バイクの名前か？」

てめえら！ おれと話かしてーのか？ それとも刺されたいのか？

どつちだ？ ああ？

この妖刀が、えっと、340人目の血をすすりてえって、慟哭しているぜ！」

「ぷっ！」

我慢しきれず、つい、ふきだしてしまふ花京院くんと私。

「ああ？ なにかおかしい！ このアマ！ ドサンピン!!」

「ドサンピン……なんか、この女の子は違うような気がしますが……」

「私もそんな気が……ぷぷ、妖刀……」

「うーむ……」

思案にくれる私たちの前に、ひとりの男性が現れた。

「この女の子かね？ 密航者は……」

「船長……」

海の男のイメージそのまま、マドロスルックの大きな、厳つい人だった。

「わたしは密航者には厳しいタチだ……女の子とはいえ、容赦はしない。

下の船室に軟禁させてもらうよ。ところで！」

船長が向き直り、承太郎君が火をつけた煙草を奪い取る。

「甲板での喫煙はご遠慮願おう……」

君はこの灰や吸殻をどうするつもりだったんだね？

この美しい海にするつもりだったのかね？

君はお客だが、この船のルールには従ってもらうよ。……未成年君」

なんと船長は承太郎君の帽子に火のついたままの吸殻をぐりぐりと擦り付けた。

「さあ、来い」

「うっ！」

そして、少女の腕を乱暴に掴み、去ろうとする。

当然、それに黙っているこの人ではない。

「……待ちな。」

口で言うだけで素直に消すんだよ。大物ぶんじゃねえ、このタコ!!」

「お、おい、承太郎！ やめるんじゃ！」

焦つてとめる祖父。

「フン！ こいつは船長じゃねえ！ 今わかった！ スタンド使いはこいつだ！」

「な、なにイーーー」

全員で叫ぶ。

「スタ……ンド?! なんだね、それは、いったい……」

船長はきよとんとしている。

唐突すぎる承太郎君の発言に、皆で驚きと、抗議と、疑問の声をぶつける。

「それは考えられんぞ、承太郎。この船長の身元は確かだ」

「いいかげんな推測は惑わすだけだぞ、承太郎！」

「証拠はあるのか?！」

ゆつくりと答える承太郎君。

「……スタンド使いに共通する見分け方を発見した……」

スタンド使いは、たばこの煙を少しでも吸うとだな……

鼻の頭に、血管が、浮き出る」

「えっ！」

そろって、鼻に手をやる。承太郎君、そして……少女を除いた全員、が。

「うそだろ、承太郎！」

「ああ、うそだぜ！　だが……マヌケは見つかったようだな……！」

「おまえらみんな、なにやっつてんだ……?」

怪訝な表情の少女をみて、気づく。

「あっ!!」

「あっ!!」

船長の雰囲気、変わる……。

「なぜ、わかった？」

「いや、全然わからなかったぜ……」

ただ全員にこの手をためすつもりでいただけのこと……だぜ」
 「シブイねえ……まったくおたくシブイぜ。確かにおれは船長じゃねえ……

本物は今頃海底で寝ぼけてるぜ」

「くっ！」

（この人、本物の船長さんを……！）

「それじゃあてめーは、地獄の底で寝ぼけな!!」

先手必勝とばかりにスタープラチナの拳が放たれる。しかし、その前に相手は卑怯にも海面から出したスタンドで少女を捕まえていた。

「きゃあああ!!」

「しまったア!!」

「またも全員で叫ぶ。」

「水のトラブル! 嘘と裏切り!」

未知の世界への恐怖を暗示する『月』のカード……『ダークブルームーン暗青の月』!」

偽船長のスタンドは鋭くとがったひれが無数についた、青緑色の鱗に覆われた大きな半魚人のような外見だった。

少女を掴んだまま偽船長はいう。

「この小娘が手に入ったのは運がいい。今からこの小娘とサメの海に飛び込む……」

当然てめえらは海中に追って来ざるをえまい。

水中はホームグランド……5対1でもおれは相手できるぜ、ククク……」

「人質なんかとつてなめんじゃねーぞ。

この空条承太郎がビビりあがると思うなよ」

「なめる……？　これは予言だよ。

とくにあんたの『星の白金』すばやいんだつてなあ。

おれの『暗青の月』も水中じゃ素早いぜ……

ひとつ比べっこしてみないか……フフフフ。

ついてきな。海水たらふく飲んで死ぬ勇気があるならな」

「きゃあああ」

その瞬間だった。

「オラオラオラオラオラ！」

容赦ないラツシュが突き刺さる。

たまらず投げだした少女をつかみ、船べりに掴まるスタープラチナ。

そして、ひとり、海に落ちていく、敵。

「げぼ……ら、落下するより早く攻撃してくるなんて……」

「海水をたらふく飲むのはためーひとりだ。アヴドウル、なにか言ってやれ。」

「ふっ！ 占い師のわたしをさしおいて予言するなど……」

それに続く、ポルナレフさん。

「10年早いぜ！」

偽船長が流されていく。

「散々自分のスタンドの能力自慢をしていたわりには大ボケかましたヤツだったな」

「承太郎、どうした？ さっさと女の子をひっぱりあげてやらんかい」

しかし、承太郎君の顔には汗と苦悶の表情が浮かんでいた。

「ち、ちくしょう……ひきずりこまれる……」

「え?!」

「な、なんだと!」

よくみると、スタープラチナの腕にビツシリと、なにかがはりついているのがみえた。

「こ、これはフジツボ! 甲殻海生動物のフジツボ虫だ」

物知りな彼が解説を入れる。ちよつと見ただけでよくわかるなあ……とかおもうが、

感心している場合ではなかった。

「やつは……まだ闘う気だ。殴ったときにくつつけやがった……」

どんどん増えて……

スタンドからパワーを吸い出して、海中へひきずり込もうと、して、やがる……!!」

「承太郎、スタンドをひっこめろ！」

「それができねーから……ぬうう、かきたくもねー汗をかいているんだぜ……」

そして、承太郎君の身体が宙を舞う。

「ううっ！」

「承太郎ツ!!」

「承太郎！ ハイエロフアントツ！」

花京院くんが再び相棒の触手を伸ばすも、今度は女の子しか掴むことがかなわなかった。

海に落下して、みえなくなる承太郎君の姿。

「く、しまった……!!」

「まずい……!!」

*

*

*

船の上から身を乗り出し、全員で様子をうかがう。

「お……遅い！ 浮かんでこないぞ!!」

「渦だ！ 巨大な渦ができてるんだ」

海面に鳴門海峡の渦潮のようなものが発生していた。

「どこだ？ 承太郎はどこにいるんだ!?!」

「きつとあの中心にヤツととともに……助けに行くぞ！」

僕はハイエロフアントを出し、海中に差し向けようとする。

「ううっ！」

しかし、相棒が水面に触れた瞬間、手に鋭い痛みが走った。

「か、花京院くん!?!」

みるとなにかが刺さって、スパッと切れていた。

「こ……これはウロコだ。」

やつのスタンドのウロコだ……カッターのようなウロコ……

「渦の中に無数のやつのスタンドのウロコが舞っているッ！」

「飛び込めば全員皆殺しにされる可能性大だッ！ 承太郎！」

「まかせてください！ セシリア！ 承太郎君をッ！」

瞬間、彼女の左手から美しい薄桃色の鳥が羽ばたいていった。

「はっ!?!」

そこで思い出す。昨日の……幼女を護つて、自分は頭をしたたかに打って気絶していた彼女の姿を。

(もしかしくなくても、このひとは他者に己のスタンドを使っている間、まったくの無防備なのでは……?)

考えるより先に身体が動いていた。

「僕の後ろに！ あなたのことは、敵にバレない方がいい……！」
彼女の前に立ちはだかる。

「う、うん……！」

すると、予想通り海中から何かがこちらめがけて飛んできた。

(やはりか……)

エメラルドスプラッシュで迎撃する。

「ご、ごめんね……！」

「いえ、こちらに攻撃をしてきたということは、上手くセシリアが機能してくれていると
いうことでしょう」

「よかった……。でも承太郎君、そろそろ息が……」

「ええ、どうすれば……」

「あつ、承太郎だ！ 渦の中に承太郎がみえたぞ！」

「いかん、ぐ、ぐったりしていたぞ……」

「ぐったり……？ フーム、そりゃひよつとしたらナイスかもしれんな」

「えっ？」

孫のピンチに、にやりとする祖父。首をかしげる皆。

「抗おうとしていない……必要がない。」

……無駄に力が入っていない……それはすなわち……」

その瞬間だった。

大渦が消え、幾分静けさを取り戻した波をかき分け、ザパツと承太郎が海面に姿を現す。

「ほらなー！」

「おおっ!!」

「さすが、わしの孫よ」

「……やれやれ。」

なんでじじいが自慢気なんだよ……」

*

*

*

「承太郎君、無事？ 大丈夫？」

船べりを乗り越え、戻ってきた功労者に私は声をかけた。

「ああ、無傷だ。助かったぜ。おかげで制服が切れずにすんだ」

「せ、制服……」

そんなに大切なのか、とある意味感心する。そして、同時に浮かぶ、どうでもいい疑問……

(制服といえ……帽子……なんで脱げてないんだろう……?)

普通に乗っかっていただけにみえるのだが。

(もしや頭と一体化を……?)

若干、いや、かなり好奇心を刺激されたが、そんなことは聞けるべくもなかった。

「ま、まあ、よかった、怪我がなくて」

そして逆に問われる。

「お前こそ、おれにスタンド使つてるときに攻撃されただろう。……無事か？」

「ああ。……うん、大丈夫、……だったよ」

おもいだす。あのときを。

碧色の、おおきな背中。

「そうか。フン、……だろうな」

「え？ な、なにが……？」

「さあな。……ちゃんと礼をいってやれよ？ いろいろなぶんの、な……」

「っ！ わ、わかっているよ……！ な、なんでしって……」

ああ言われたから、ではない。けっして。

と、誰にでもない言い訳をしつつ、もうひとりの怪我人のところへいく。

「花京院くん、手、みせて？ 切られたところ……」

「ああ、かすり傷ですよ。大丈夫です」

にっこりと笑ってそんなことをいう彼。

予想通りだけれども。

(……嘘だ)

けっこうな深さで、すっぱりぎっくり切れていたのを私は見た。

「みせてっば！」

「あ！ ち、ちよつと!?!」

若干強引に彼の手を掴む。

「こんな海の上で傷が化膿でもしたら大変でしょ？」

しっかり手当てしといた方がいいよ」

「……すみません」

彼の手のひらには見るからに痛そうな切り傷がいくつもあった。

「やっぱり……。ちよつとそのまま……」

傷に両手をかざして深呼吸する。

不思議そうなかおの彼。当然か。と思い説明する。

「我が家に伝わる『おまじない』だよ。気休めだけど……」

でも意外と効くのだ。祖父から教えてもらったものだが、効果のほどは自分でよく知っていた。

あとは普通にポーチから消毒薬と包帯を取り出す。

「ごめんね、しみるかも……。よしつと。はい、おわり」

「ありがとう、ございます……」

てのひらをまじまじとみながら、そう呟く彼。

不格好で申し訳なくなる。あまりじつくりみないでほしいものだ。

そしてそれは、私の台詞だ、とも。

「こちらこそ……さつき、ありがとう」

「……」

「あとその前も。なんか今日も、助けてもらってばかりだね……」

そうだ、毎度毎度……。申し訳ない。

すると、またも悲痛な面持ちで、うつむき、首を振る彼。

「……違う！ 僕は……！」

違うんです！ ありがとう、なんて、言ってもらっちゃいけないんです……！」

「……？」

よく、わからなかった。

でも、ひとつだけ、はつきりしていることがあった。

それを伝えたくて、考えつつ、ゆっくりとことばを発する。

「……確かに、どういう思いで行動したのかっていうのは、本人にしかわからない……。」

けどさ、実際に私はすごく助かった、よ？

だから、いいんじゃないかな。

やっぱり……ありがとう、だよ」

「仁美さん……」

呟く彼。その性格を考慮すると、なぜこんなことをいつているのかわかった気がした。

「戦術や戦況的に……ってことでしょ！ わかってるって。ほんと真面目なんだから

……」

だからって自分の手柄じゃあないとか。そんなはずはない。

(それに……)

おもいだす。

つい、素直なきもちがぼろつと出てしまう。

「……でも、それでも……護ってくれて、……嬉しかった、から」

「うっ！」

「はっ！」

驚いたような彼の反応で我に返る。

(しまっ！ 私、なにいつて……！)

体温が急激に上がっていくのを感じた。

「な、なんでもないっ！ じ、じゃあ、私、あの娘の様子、みてくるね！」

かおをみられたくなくて、……みることができなくて、急いで背を向ける。

(ああ、もう……また、やっちゃった……)

そういう個人的感情でやったことじゃないって言われたそばから……。

なに言ってるんだってかんじだよ……。

わかってる！ わかってるから！ そんなの!!

ごめん！ごめんなさい!!

ああああ……！ は、はずかしい……)

おねがいだから……ふかいいみに、とらえないで……と願いつつ、駆けていく。

*

*

*

走っていく彼女の背中をぼんやりみつめながら、ひとり、呟く。

「……まったく、現金なやつだな……僕は」

そう。昨晚、爆弾を承太郎から落とされた。そのあとだ。

それからなんとも眼が冴えてしまい……おかげで一睡もできなかった。

そして、今朝彼女と顔を合わせた時の、あのなんともいえない一方的な気恥ずかしさと申し訳なき。気にする方がいかん。おかしい。そもそもありえない……心の中で念仏のように唱えていた。

(いかんいかん……読書でもしつつ寝よう……寝るべきだ)

頭をよぎる爆弾の存在を必死に忘れるべく、船が出港後、宣言通り、僕は不足している睡眠を回収しようとしていた。

甲板におかれたカウチに寝そべり、本を開く。

ちなみに隣のカウチでは承太郎も同じ様に読書に勤しんでいた。

照り付ける太陽の下、学生服（冬服）で過ごす高校生男子二人。

「おまえら……その恰好で旅を続けるつもりか……う？ 暑くないの？」

などとジョースターさんに途中いわれたが、学生は学生らしく、ですよ。……なんて理由を述べておいた。

しばらくたつたころだろうか。向こうからとぎれとぎれに会話が聞こえてきた。

「……よい名だ！ 歳は？」

（ん？ ああ、仁美さんとポルナレフ……か）

互いに自己紹介でもしているのだろう、とたいして気にも留めていなかった……はずだった。

「恋人は？」

（ぬあ?!）

が、変なワードが聞こえてきてしまい、おもわず本が手からぶつとんでいってしまう。

（……いいいや、僕には関係ないし……）

平静を装いつつ、本を拾い、再び読みはじめ。

関係ないことだ。彼女の恋人の有無など。僕には。

（そうだ、気になりなど……してな……）

「花京院……お前、本さかさままで読めるのか？　すげえな……くく……」

無言で本の向きを戻していると、再び衝撃的な言葉が聞こえた。

「……オレと付き合おう！」

（はあ!?!）

今度はおもわず自分がカウチからひっくり返ってしまう。

「いって……」

「おまえ……。今、新婚さんと呼ぶ番組の司会の人みたいだったぞ……」

「……」

そして、極めつけに小さくだが、確かに彼女の悲鳴がきこえた。

（……あー、もう!!）

耐え切れず、立ち上がる、僕。

実に楽しそうににやにやしている承太郎の姿を視界の端にとらえながら。……なんと腹立たしい。

「失礼。……保乃宮さん、ジョースターさんが呼んでましたよ」

「う、うん、ありがとう！　じゃあ私、失礼しますっ！」

「またも脱兎の如く走り去る彼女。」

「ちえつ、逃げられたか〜」

「パチンと指を鳴らしつつそういうと、じつと僕を見るポルナレフ。」

「……。お前……」

「な、なんですか……」

「さ、さすがに露骨すぎたか……?」

「しかし返ってきたのはこちらの内心とは裏腹に、実にあっけらかんとしたものだつた。」

「花京院だよな！ 噂は聞いてたぜー！ よろしくな！」

「あ、ああ、よろしく」

「しっかし、お前も承太郎も女にモテそーなツラしやがつて！」

「日本じゃ女とつかえひつかえしてんだろー！ ちくしょー！ うらやましいぜー！」

「」

「……」

「つ、疲れた……」

「ようやく解放され、カウチのところに戻る。」

「おー、長かったな」

「あいつのどうでもいい、真偽もわかりかねる女性遍歴自慢につき合わされて散々だったよ……」

エリーは胸がよかっただけのジェシーは脚が最高だっただけの……。
本当にどうでもよかった。

そして、ふと自分の喉が渴いていることに気づく。

「飲み物とつてくる。承太郎、君も何か飲むかい？」

「ああ、じゃあ……コーラ」

「わかった」

飲み物等は、ダイニングの冷蔵庫にたくさんあるから、勝手に取って良い。という、先ほどのジョースターさんの言葉を頼りに船室内へと降りていく。

(はあ、しかし、とっさだったとはいえ……後でなんて言おう……)

いくらそういうことに鈍そうな(ときにびっくりするくらい鋭いくせに、だ。やっぱりよくわからないひとである)彼女といえど、さすがに変におもっただろう。気が重くなる。

そんなことを考えていたら目的地に着いていた。

入り口を開ける。

室内を見渡すと、真正面のテーブルの向こうに冷蔵庫を発見。近寄ろうとしたとき

だった。

「あれ？ 花京院くん？」

「うわああっ！ や、保乃宮さん!？」

「ご、ごめん……びつくりさせちゃった……？」

「し、しましたよ……」

考えていた、まさにそのひと本人がひよこつととびでてきたわけなのだから。

「何してるんですか……？」

「ジョースターさんに頼まれて、食料品の整理をしてるの」

（ほんとに用事があったのか……）

僕にはもしかしたらなにかしらの超能力でもあるのかもしれない。

……スタンド能力ならもっているが。

などと考えていたら、彼女に尋ねられる。

「花京院くんこそ、どうしたの？」

「ちよつと喉が渴いて……」

「そうなんだ。ええと……ちよつとまって……」

そういうと、冷蔵庫を開け、のぞきこむ。

「何がいい？ 冷たいのなら、お茶にコーラにオレンジジュース……サイダーとかもあ

るよ」

「コーラと、じゃあ、サイダーを」

承太郎のオーダーと自分の好みを伝える。

「了解！」

開栓された瓶をふたつ渡される。冷たさが手に心地よい。

「はい」

「ありがとうございます。……いただきます」

「はい、どうぞ」

我慢できず、カラカラの喉を潤す。

「……って、私のじゃあないけどね」

なんていつてなんだか楽しそうにくすくす笑う。

そして、彼女が段ボールの山に囲まれていることに気づく。

(ん……これ、みんな……?)

「それにしてもすごい量ですね。手伝いますよ」

純粹にこれは大変な作業だろう。しかも自分が差し向けたことで、こんなに多くの雑務をたのまれてしまったのだとしたら……とおもうと、たまらず申し出ていた。

が、しかし彼女にはにっこりところ返される。

「ううん、大丈夫！」

こういう作業けっこう好きだし、のんびりやっていいって言われてるから。

それよりも花京院くんは、昨日の分ちゃんとは休んでなきや」

どうやら朝の会話を覚えてくれていたようだ。その気遣いが嬉しくもあり、余計に罪悪感が増した気もした。

「そう……ですね。じゃあ手伝いが必要なときは呼んでください」

確かに、有事の際に備えて体調を整えておくべきではある。……というのは建前で、これ以上胸の重りが増してしまうのが恐かった。おことばに甘えて退散することにする。

「うん、ありがとう！」

今のじぶんにはやはりまぶしすぎるそれから目をそらしたくて、振り返ろうとする僕に、疑問を投げかける彼女。

「あ、そういえば……ちょっと不思議でさ。」

ジョースターさん、私を呼んだの、知らないって言ってる……。

忘れちゃったのかな……」

「そ、それは……」

ぎくりとする。

「? あれ?」

そんな僕の様子から、なにかに気づく彼女。

「! あ! ……違ってたらごめん。」

もしかして、さっきの、私が困っていたのをみかねて、助けてくれた……?」

「うっ!」

「ごめんね。」

あんなの社交辞令なんだから、上手くかわせないといけないのにね……」

心底申し訳なさそうに、彼女がいう。

「……」

それに、押しつぶされそうになる。

「でも、本当に助かっちゃった! ありがとう……」

「……違うんです。……僕は……」

おもわず、眩く。

(……ちがう……そうじゃ、ない……僕は!)

「……? 花京院くん……?」

そのときだった。

甲板から騒ぎ声が聞こえてきた。

「密航だー!!」

我に返る。

「! 上で何かあったみたい!」

「! ええ、行きましょう!」

そして、さつきも、だ。

「花京院くん、手、みせて? 切られたとこ……」

「ああ、かすり傷ですよ。大丈夫です」

こんなのたいしたことはない。と、笑ってみせた。

……つもりだったのだが、どうやら容赦してはもらえなかったようだ。

「みせてってば!」

「あ! ち、ちよつと!?!」

めずらしく強い口調で……でも、やさしく、手をとられる。

「!?!」

おもわず心臓がとびでそうになる。

そんな僕をよそに、深刻なかおで、彼女はいう。

「こんな海の上で傷が化膿でもしたら大変でしょ？」

しつかり手当てしていただいた方がいいよ」

「……すみません」

まったく、そのとおりだった。反省し、おとなしくしたがうことにする。

僕の傷をみると、彼女はまるで自分が痛いかのようにかおをしかめた。

「やっぱり……。ちよつとそのまま……」

そして、そういうと目を閉じ、僕の手のひらに両手をかざしはじめた。

(……………？ 痛みが……………ひいた……………？)

すると、切り傷特有の、あのじくじくとした痛みが急に和らいだ……………気がした。不思議

におもっている、彼女が説明してくれる。

「我が家に伝わる『おまじない』だよ。気休めだけど……………」

さすが、護る一族、なのだろうか。これも。

「ごめんね、しみるかも……………」

などと感心していると、携帯救急セットから必要なものを取り出し、手当てを続けてくれる。

そのきれいな指先が時折ふれるたび、鼓動が早まるのを感じた。
気づかれぬよう、平静を装うのに必死だった。

「よしつと。はい、おわり」

鮮やかな手つきで、あつという間に治療は完了してしまったようだ。
綺麗に巻かれた包帯をみつめながら、眩く。

「ありがとうございます……」

すると、彼女はじつとこちらをみつめ、こういった。

「こちらこそ……さつき、ありがとう」

「……」

「あとその前も。なんか今日も、助けてもらってばかりだね……」

そういつて、苦笑いを浮かべる彼女。

……もう、耐えられなかった。

「……違う！ 僕は……！ 違うんです！」

ありがとう、なんて、言ってもらっちゃいけないんです……」

（そう、あなたのためじゃない……僕が、許せなかった……）

……そして、僕で、ありたかった……

それだけ、それだけなんだ……！ ぜんぶ……僕が……。僕の、エゴで……）

「……………」

そんな僕に、彼女は不思議そうなかおをしたあと、ゆつくりと…………でもはつきりと、こういった。

「…………確かに、どういう思いで行動したのかっていうのは、本人にしかわからない…………。けどさ、実際に私はすごく助かった、よ？」

だから、いいんじゃないかな。

やっぱり…………ありがとう、だよ」

「仁美さん…………」

今日の空とおなじ。曇りのない、まつすぐなそのことばに、まなざしに…………心にのしかかっていた、重苦しいなにかが、すつと取り除かれていく、そんな気がした。

「戦術や戦況的に…………ってことでしょ！」

わかってるって。ほんと真面目なんだから…………」

若干、勘違いもされているようだが…………そんなこと気にしている余裕などなかった。そして、ほうけているじぶんにとどめをさすかのようなことばがふってくる。

「…………でも、それでも…………護ってくれて、…………嬉しかった、から」

そのことばを体言するかのような、ふわりと花が咲くような笑顔とともに。

「うっ！」

「はっ！ な、なんでもないっ！」

じ、じゃあ、私、あの娘の様子、みてくるね！」

そうしてきびすを返して駆けていく彼女。

「まったく……現金なやつだな……僕は」

ひとり、おもう……。

(……そうか……。いいのか……)

この気持ち、なんなのか、なんて、僕自身もわからない……。

……だけど、あなたが、喜んで、くれるなら。

その、笑顔や、いろんな表情が、みられるなら……)

(……それで、いいのかもしれない、な……)

OCEAN

(はああああ……、……あ、あつい。……今日こんなに暑かったつけ……)

先ほどすっかり大発生してしまった熱量(何かに利用できたらしいのに)。加えて、最速であの場から離脱するためにした全力疾走がまた効いた。ぱたぱたと手でおおを扇ぎ、熱を逃がしつつ、私はあの密航少女のもとにやってきた。

「なにがなんだかわからないけど……」

あんたたち、いったい何者なの……？　ち、近寄らないで……」

「うーん……」

すると、その警戒度は著しく上昇してしまっているようだった。当然といえば当然か。

頭を抱えているジョースターさんに様子を尋ねる。

「どうですか、あの娘？」

「ああ、すっかり嫌われてしまったわい。……ここは女の子同士、任せてもいいかね？」

「

はい！　話してみますね」

もちろん、そのために来たのだ。一応私も女である。こういうとき、同性、いうのはやはり大きいはず。それでよく皆に気をつかわせたり迷惑をかけてしまったりしているぶん、これくらいは役に立たなければ。

とりあえず少女に声をかけてみる。

「こんにちは。」

私は保乃宮仁美。えっと、保乃って呼んで」

「やすの……さん？」

「そう。あなたは？」

「……。保乃さん……も、この人達の仲間、でしょ……？」

「うん、そうだよ。心配しないで。みんな、いい人だから」

「……」

反応なし。無理もないか、と、思いつつ、とりあえず冷静に客観的な事実を伝えてみることにする。

「ふふ、忘れちゃった？　じゃなきや今頃貴女ここにいないって。」

サメの海に飛び込んでまで助けてくれる人、そうそういないよ」

「う……」

「大丈夫。私たち、エジプトに向けて旅をしているだけで……」

そのときだった。

船内を見回っていた船員さんと仲間たちの焦った声が聞こえてきた。

「うわー!!」

「や、やはりあの船長、爆薬を仕掛けてやがったッ!」

「ちくしょう!」

「……ただ、ちよつと厄介な敵に狙われているけど、ね」

またかあ……と、さすがにうんざりしてくる。

「はあ……。さ、こつちに!」

「う、うん」

呆然としている少女の手を取る。

「みんな早く、ボートに乗りうつれッ!」

「近くの船に救助信号を出せッ!!」

間一髪。全員が救命ボートに乗り移ったところで船は爆発、炎上……ゆつくりと沈んでいった……。

「これは今日の分の食事じゃ。

「どれだけの間、漂流するかわからなので少ないが、我慢してくれ」

先ほどの作業、非常食をまとめるところからやって正解だった。もちろん、まさかこんなすぐに脚光を浴びることになるとは思わなかったけれど。

隣の少女に回されてきた食料と水を渡しつつ、声をかける。

「はい。……きつとすぐ助けがくるよ」

「う、うん」

「何歳？」

「じゅう、よん……」

「へー！すごいね。私、中学生で一人旅とかしたことなかったなあ」

（……しかもわけわかんない現象が目の前で起こりまくった上に、この状況……漂流つて……）

そりゃあ不安だよな……）

そんなことを思っていると、逆に問われた。

「あの……、あのひとなんて名前？ 海に飛び込んで、私を助けてくれた……」

「え？ ああ、承太郎君？」

「……承太郎、かあ……」

そんなふうにはっきりと名前を呟く彼女の様子をみて、あることに気づく。

(あらー！ 承太郎君ったら、こんな年端のいかない女の子の心まで掴んじゃって。

罪な男だなあ、まったく！ ふふ……)

おもわず、にやにやしてしまう。

人の恋路……そーゆうお話は実はけっこう大好きだったりする。

あくまで他者の、だ。

……じぶんのことは、からつきしなくせに。

とか、そんな至極真つ当なつつこみは受け付けない。聞こえない。

こっそりとにやけている私に、なおも少女は聞きたいことがあるようだった。

「どうしたの？」

「や、保乃さんは、もしかして……」

しかし、その言葉は響き渡る低音にかき消された。

「あ」

音源はどうやら彼女のお腹のようだ。見るととつくに彼女の分の食料は消えていた。

「ああ、あれじゃ足りないよね。これ、食べる？」

「え、それ保乃さんのじゃない……」

「私、今まだお腹空いてないから。よかつたら食べて」

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして」

「……アン。だよ」

「え？」

「私の名前。アンっていうの」

「っ！ そっか！」

ちよつとだけ、心を開いてくれたのだろうか。嬉しくなる。

(可愛いなあ。妹いたらこんな感じなのかなあ……)

そんなふう悦にひたっていると、自分を呼ぶこえがきこえてきた。

「……保乃宮さん、ちよつと！ いいですか？」

「はい！ じゃあ、またね、アンちゃん」

「うん」

そこまでぎゆうぎゆうというわけではないが、決して広くはない、このボート。しかも動くたび揺れる。人を避けつつ、ゆっくり進み、彼のもとにたどり着く。

「どうしたの？ 花京院くん」

「……！ 座ってください」

となりにくるよう、いわれる。

「は、はい……」

この感じ。幸いにも、さっきの自分の失言はそーゆうふうにはとられていないようだ。ほっとする……と同時に、彼の声色から、要件を察する。

(……私、なにかしたっけ……?)

思い当たらぬまま、腰掛ける。なんだか飼い主に叱られる前の犬のようだ。

「……まったく、あなたってひとは……」

そんな私に、彼は小さめのボリウムで……やっぱりお説教をはじめた。

「な、なに……?」

「なに? じゃあないですよ。見ましたよ! あなたあの女の子に食料あげていたで

しょう?」

「うツ……。だつて……」

(め、めざとい……)

「自分の分はしっかり食べとかないと! 倒れても知りませんよ!

あなた細かいけど、食は細くないでしょう! ここ2、3日でそれぐらい把握済みです」

(さ、さすがの洞察力……の、……なんて無駄遣いなんだろう……)

心配性で気がききすぎる彼に若干困ってしまいながらも、いろいろな感情がまじり

あつて、なんだかわけがわからなくなってくる。

そして、結局でてきたのは薄っぺらい虚勢と嘘八百だった。

「だ、だいじょうぶだよ！ わ、私さっき台所にいたでしょ。」

いろいろつまみ食いたから、お腹空いてないの！」

「ふーん、そうですか」

「そ、そうだよ」

100%バレてしまっている……そんなことはわかっていたが、あとにはひけなかつた。

……が、そんな私に追い打ちをかけるかのように、じぶんのお腹から、いまましい音が響く。

「あ……」

「……ふっ……！ ……身体は、正直ですね……くく……」

笑いを必死にこらえている彼。いや、若干漏れ出ているが。

恥ずかしくて、もう死にそうになる。

「うう……こ、これは……そう！ 消化の音だか……」

すると、なおもむなしい誤魔化しを発そうと開けた口に、なにかがとびこんできた。

「むぐっ!!? ……? 」

「……とりあえず、それ、どうぞ」

どうやら彼の仕業らしい。

「っ！……ひふんはってひふんの……」

咀嚼するたびに口腔内にひろがる、やさしい甘みに戸惑いつつも、必死に反撃を試みる。

が、それは十枚くらい上手な彼に、あっさりと返されてしまう。

「はい、もぐもぐ言われてもわかりません。」

僕は配給された分はちゃんと自分で食べましたー。

これは僕が香港で買ったおやつなので、誰にあげようが自由です。残念でした」

「ぐっ……」

(しっかりと通じてるじゃない……いじわる……)

口内に入っているぶんをぐくりと呑み込んだタイミングで、もう一度、今度はゆっくりとやさしく唇にそれがおしつけられ、くわえさせられる。

「はむう……!?!?」

「はい、もうひとつ。」

今はこれで我慢してくださいね。

シンガポールに着いたら何かもつと美味しいもの、食べさせてあげますから」

「……」

「おーい！ 花京院、ちょっと来てくれー！」

「はい！ ……じゃ、何がいいか、考えといてくださいね」

「……う、うん……」

どうにか、うなづく。

そうして、軽やかに呼ばれた方、ボートの先頭に向かう彼。

ひとり呆然と残される、クツキーを啜えたじぶん。

(ううう……なんなのあのひと……あああ……！)

徐々に沸々と湧きあがってくる羞恥心。激しく鳴り響く鼓動。心の中で悶える。

なんだか通り魔に心臓を一突きされたような……そんな気分だった。

もちろんそんな経験はないけれど。

唇が、やたらと熱を帯びていた。直接触れられたわけでも、なんでもないのに。

……そう。きつと彼にとつては、なんでもない、ことなのに。

(……ほんとに……。やさしいんだから……)

意識する方が間違っている。そんなことはわかっていた。恋愛経験、というものが人並みにあれば、こんなふうにはいちいち動揺しないですむのだろうか？ わからない。残念ながらそんなものは皆無なのでこのぎまだ。なさけないったらない。

悶えつつも、ふとひとつ疑問が浮かぶ。

(……あれ、……そういえば……)

なんか、いつのまにか、いつもの花京院くんに戻ってる気が……いや、むしろ元気になつて……？ 睡眠不足、解消したのかな？ いや、いいことなだけど……)

寝る時間なんてあつたかな……とか不思議におもいつつ、一枚目はそんな余裕などともなかつた、口の中のそれを味わうことにする。

(もつと、美味しいもの、かあ……)

(これももう……じゅうぶんすぎるほど、おいしいんだけど……)

そして、なごり惜しくもそれをのみこんだ後で、またお礼をいいそびれたことに気がつき落ち込む私だつた。

*

*

*

(まったく……)

お人好しもほどほどにすべきだ。ましてやこんな状況なのに。

先が読めない、とか考えていない、というわけでは決してないはずだ。だんだんわかつてきた。

「……」

包帯が巻かれた右手をじつとみる。

(ひとのことは、あんなに……なのにな)

にもかかわらず、なぜか、無頓着なのだ。……自分のことに関してだけ。不思議にもう、と、ともに、もどかしく感じた。

それにしても、すこし、強引すぎただろうか。

心配だった。どうにかして食べさせておかねばと、おもった。それだけなのだが。

……なぜそうおもうのか、そこは深く考えるまい。そう決めた。

(これは、そうだ。その、……使命感だ)

仲間の健康を維持し、旅を円滑に進める(漂流している時点で円滑には程遠いが)……
そのためだ。

「……」

指先が、やけに熱い。

いつそのこと偶然を装って、ふれてしまえばよかった……。

などと、一瞬浮かんだありえないそれには、もちろん気づかないふりをした。

(いかんいかん……)

回想および反省にふけりかけていた頭を切り替える。この状況を打開すべく、できることに集中せねば。

「ん……？」

ハイエロファントでボートの周囲を探索すること数十分。相棒のレーダー網に引っかけたものがあった。

「なにか見つけたか？」

「……あちらの方向に、なにか……」

「よし」

双眼鏡を持った承太郎がスタープラチナで確認する。

「……あれは……貨物船だ！」

「おお！ 救難信号を受けて助けにきてくれたのか！」

「やった！」

発見した、貨物船……タンカーは徐々にこちらへとむかってきた。

至近距離で見ると、それはかなり巨大なものであった。

「おおおおーッ！」

「助かった！」

さしのべられた救いの手に、歓喜の声を上げる船員たち。

誘うかのようにタラップもおりている。

(……これは歓迎の印か、はたまた……)

多数が安堵の表情を浮かべる中、僕と同様、難しい顔をしている人間がふたり。

そのうちのひとりに、祖父が疑問を投げかける。

「……承太郎、なにを案じておる？」

「いいや……なぜ誰もこちらへ顔をのぞかせないのか考えていたのさ」

「！」

そのとおりだった。船はシーンと静まり返ったままだ。

しかし、そんな中、先陣を切つてボートからタラップに跳び移るものがいた。ポルナ

レフだ。

「せつかく助けにきてくれたんだ！ たとえ罫でもおれはこの船に乗るぜ！」

それに続いて、この機会を逃してなるものか、とばかりに、どこどかと皆階段をのぼつていく。

たしかにこの状況ではやむをえまい……。そう思い、重い腰を上げる。

そこで、もうひとり、渋い顔をしている彼女に声をかけられる。

「……やつぱり……行くしかない、よね……？」

「まあ……。行かざるをえない、が正しいでしょうね」

「だよねえ。……逃げられないもんね」

「ええ、たとえ罠でも……ね」

ボートとタンカーを交互に見る。例えるなら蟻と人……といったところであろうか。その気になれば踏みつぶすことなど容易だろう。

「……気が進みませんか？」

「うん。なんか……。なんだろ……？ お化け屋敷に入る前みたい……？」

「はは……。なんだそれ。まあ、だいたい同感ですけど」

不気味にたたずむ鉄の塊。冷ややかなそれからは全く熱を感じなかった。

背筋が薄ら寒くなる印象を自分も受けた。

「というわけで、十分警戒しながら……行くとしましょう」

「……うん」

頷くと元気にむこうに跳び移る彼女。

「よつと」

あとに続く。後ろでは承太郎が少女に「掴まりな……」なんて言っているのが聞こえた。そう言われると、一般女性にはやや抵抗がある距離な気もする。目の前のこのひと

は軽々と跳んでいたが。運動神経がいいのだろう。ここ数日で幾度となく感じたことだが。それにしたって、気遣いが足りなかっただろうかと、反省する。

「どうしたの？」

立ち止まる僕に、段上で不思議そうなかおで振り返り問う彼女。どうやら当人はまったく気にしていない御様子だ。

「……いいえ。なんでも」

……まあ、『一般』ではないのかもしれない。このひとは。

「そう？　じゃあ、行く……」

そういうと、向きなおり再び一段踏み出そうとする。そのときだった。

「……ひゃ……!?!」

「うわつと！」

降ってこようとする、彼女の背中をなんとか支える。

「……き、気をつけてっていったのに……!」

「ご、ごめんね……。す、すべっちゃった……」

しつかりしているのか、そうでないのか……はつきりしていただきたい……。

(ほんとうに……こまったひとだ)

*

*

*

甲板に上がるも、人っ子一人みあたらなかつた。

操舵室にはさすがに……と向かうもその思惑はずれに終わる。

「なんだ、この船は……誰もいないッ！」

それなのに計器や機械類は正常に作動しているぞッ！」

「おいッ、誰か！ いないのかッ！」

その問いに返事は、やはりないままだった。

人を見つける。まずはそこからだ。

皆で船室を調べてまわっている最中、アンちゃんがある部屋の前で立ち止まる。

「ここは……なにかな？」

ためらいなく扉を開けて、中へと入っていく好奇心いっぱい少女の後を慌てて追う私。

「あ、アンちゃん、あぶないよ！」

そこは物が雑然と置いてある、倉庫のような場所だった。

「ああッ！」

「い、これは！」

その奥には檻と、そして……。

「みんな、来てみて！ こっちよ、こっちの船室」

アンちゃんが声をかける。

集まってきた仲間で檻の中を確認する。

「……オランウータンだ……」

そう呟くのは、やはり物知りな花京院くん。

よく瞬時にわかるなあとまた感心しつつ、しっかりと見るべくもう少し歩みよろうとする。

「……ストップ。あまり近づきすぎないほうがいいですよ。

力が人間の5倍以上はあるらしいですから」

「そ、そうなんだ……」

そういわれ、遠巻きにじつと見る。

(……? ……なんか、この猿……)

しかし、浮かびかけたその思考はジョースターさんの一声によって霧散する。

「猿なんぞ、どうでもいい、こいつに餌をやってる奴を手分けして探そう」

(……うん、そりやそうだよね)

言ったのち甲板の方向へ向き直るジョースターさん。

『なにか』に気づき、叫ぶ。

「! アヴドウル、その水兵が危ない!」

甲板に残っていたアヴドウルさん。見ると、そのすぐ後ろにいた水兵さんに恐ろしい悲劇が迫っていた。

「ああつ!!」

そばにあったクレーンが、動いた。

だれもさわらないのに……ひとりで……。

「いけない! セシつ……!!」

相棒を放とうとするも、距離があだとなった。

クレーンは、勢いよく水兵さんの後頭部に直撃、突き刺さる。

さらにメキメキと音を立ててそれを粉碎、貫きながらその身体を釣り上げた。

「うおおつ?!」

「きや……」

あまりにも残酷な光景に小さく悲鳴を上げるアンちゃん。

その視界を手で遮りながら承太郎君が言う。

「やれやれ……こういう歓迎のあいさつは女の子にやあ、きつすぎるぜ……」

「くつ……」

(しまった……もう少し早く……)

口惜しい、苦い思いが胸いっぱいになり、拳を握りしめる。
皆で、駆け寄る。

「間に、合わなかった……すみません……」

「いや、わたしこそ……一番近くにいたのに敵の気配を感じさえしなかった……」
と、アウドウルさん。ジョースターさんがいう。

「気をつける……やはりどこかにいるぞ。」

「どうやらこの貨物船は我々を救出するためではなくて、皆殺しにするために来たらしい！」

敵はひとりか……それとも複数か……？

……だれか、今スタンドをチラツとでも見たか……？」

「いや……」

「……」

肯定的な返事をするひとは誰もいなかった。

「よし、僕の法ハイエロフアント皇をはわせて追ってみるッ」

そういうと、花京院くんの相棒はするりと排水パイプの中に入っていった。

ジョースターさんは船員さんたちの方に向き直り命ずる。

「いいか、命がおしかつたらわしの命令に従ってもらおうッ！
機械類には近づくなッ！」

全員いいというまで下の船室内にて動くなッ！」

「な、なんだよ……くそ……」

口々に文句を言いつつも、先の一件が効いているのか、しぶしぶぞろぞろと移動する。
「君に対してひとつだけ真実がある」

続いて怯えて警戒しきっているアンちゃんにむけて言う。

「我々は、君の味方だ。」

さ、行きなさい。……保乃、頼んだぞ」

「はい。行こう、アンちゃん」

「残りは二手に分かれて探すぞ！」

*

*

*

「見つからんな……」

「ええ……。ありえない……」

相棒を船内、スミズミまで這わせてみたが、人の気配はどこにもなかった。パイプの

中にもあらゆるスキ間にも、どこにも……。

(おかしい……そんなはずは……)

くまなく探し回った。この広いタンカーといえど、『探索』、そこは僕のこの法皇の得意分野だ。見逃すはずはない。

……本当に、ないのだ。全く。

そう。……ヒトの、気配は……。

(……まさか……!?! はっ!!)

気づいたときには、沈み始めていた。

自分の身体が。……船床に。

*

*

*

窓から見える水平線に、ゆっくりと夕陽が沈んでいく。あたりも暗くなってきた。

待機し始めてからすでに数時間が経っていた。

(なにかみつかったかな? みんな、だいじょうぶかな……)

ちなみに一度ひよっこりハイエロファントが様子を見に現れてくれた。

シンクの排水口から。可愛かった。

そのときにこそつと尋ねたところ、進展は残念ながらまだない、ということだったが。そんなことを考えているとアンちゃんから声をかけられる。

「ねえ、保乃さん」

「どうしたの？」

「なんか、水、出るんだって。……シャワー、浴びたい」

「え？ でも今はひとりにならない方がいいよ。危ないから。もう少しここにいて」

一緒にいる、というのも……。船員さんたちがその間危険だ。

しかし、彼女的には既に我慢の限界だったようだ。

「えー、でも、海に落ちたりしたから、気持ち悪い！」

もう！ さつきからそういつてずーっとこのままじゃん！

大丈夫だって。すぐそこだし。ササツといつてくるからさあ」

この船室……食堂のようなここに船員さんたちと待機しているわけだが、入って右奥に行くとしゃワールームがあった。その出入口は確かにここから見える。

スタンドは壁をすりぬけられる。すぐにアンちゃんのもとへセシリアを飛ばすことも可能か……と思ひ、しぶしぶ了承する。

「うーん、しかたないなあ……じゃあ、ここで見張っておくから。」

十分気をつけて。なにかあつたらすぐ叫んでね」

「うん！ わーい！」

そうして、嬉しそうに駆けていく少女。

ここなら……と、思い思いに過ぐす船員さんたちを背に、食堂とシャワールームへの入り口との分岐点あたりで、壁を背もたれに腰掛ける。

(まあ、たしかに、シャワー浴びたい気持ちはわかる。私もそれはそうなんだけど……) 潮風と汗でべたべたする。彼女は海水に浸かってしまったのだからなおさらだろう。加えて承太郎君……ちよつと気になる男性がいる……という乙女心もあるのかもしれない。

それもまあ……わかる……気がする。

なぜだかふつと浮かびそうになったかおには、気づかないふりをした。

(け、……警戒警戒。集中しなきゃ……)

周りを見渡す。

(……でも、なんかこの船、やっぱり気持ち悪いよね……)

この船を最初に見たときの感覚……そして、足を踏み入れてから、今までに起きたことを思い返す。

(……そういえば、あの猿の目……)

人間みたいだった。あの値踏みするような、冷たく澱んだ、目……。

背筋が寒くなるような、船を見たときと同じ感じがした。

(……スタンド使いつて、もしかして、ヒト、じゃあなくても……?)

その考えに達すると同時だった。

入り口のドアがバキバキと激しい音を立てて破壊される。

「う、うわああ！」

響き渡る船員さんの悲鳴。

そこには、あの『オランウータン』が、にやにやとした顔つきで立っていた。

「!? さ、猿ッ！」

そして、大きな拳を私の方めがけて振り下ろして来る。

「くっ！」

それをどうにかセシリアで受け止める。

「ぐ、っ……す、すごい力……！」

5倍……彼の言葉を思い出す。まさか実感する羽目になろうとは……。

ちらりと後ろを見やると、皆一様に恐怖に怯えきった表情を浮かべていた。

(駄目だ！ 私が突破されたらきつと……！)

先ほどの無残な光景が頭を過ぎる。

「っ！ ……ま、けられないッ!!」

何度も繰り出される攻撃に、なんとか耐える。

「ウキキキキ!!」

「はあ、はあ……」

（ま、まずい……そろそろ、限、界……!）

「キキーツ!!」

そこへ運悪くも繰り出される痛恨の一撃。

激しい衝撃に相棒の障壁が砕け散る。

「あっ!」

「ウキキ……!」

再び振り上げられた剛腕がもの凄い勢いで眼前に迫ってくる。

「……っ!」

殴られる……そう覚悟した瞬間だった。

「ウギヤツ!!」

悲鳴を上げながら急に仰け反る猿。片方の臉を押さえ、そこからは鮮血がしたたり落ちていた。

「……え?」

（……今、後ろから……?）

不思議に思い、振り返るとそこには……
(……………あ……………)

「グギイ……………」

「ハッ!!」

その声に正面を向き直すと、顔をゆがめ、別方向へ逃げて行こうとする猿の様子に気づく。

(いけないっ!! そっちはアンちゃんが……………!)

相棒を彼女のもとへと送ろうとした、そのときだった。

猿がこちらをちらりと見る。

「セシリ……………!? ええっ!?!」

(か、体が沈んでいくッ!?!)

急に床が泥沼になったかのような感覚を覚え、半身が船底にめり込んでしまう。

(これは! や、やっぱり、あの猿がスタンド使い!?! まずい、動けない!

うそ……………!?! セシリアも……………!?!)

がっちり捕まえられてしまっているようで、全く動かさなかった。

「うぎやぎやぎやぎや……………!?!」

勝ち誇った笑い声(?)を発しながら、猿は再びアンちゃんの方へと悠々と歩を進め始める。

どうにか抜け出そうともがいてみるも、さっぱり効果がなかった。

シャワールームへと消えていく、猿。

(ど、どうしよ!?! どうしたら!?! ……なにか、なにかできることは!)

「……だ、誰かーっ!」

かくなるうえは……助けを呼ぶ……それくらいしか思いつかなかった。

もしかしたら近くにいる仲間が、気づいてくれるのではないかと。

必死に叫ぶ。

すると、その願いが通じたのか、走ってくる足音が聞こえた。

「……おい! どうした?! 大丈夫か?!」

「じよ、承太郎君! て、敵が!」

あ、あの猿がスタンド使いで、アンちゃんのところ……そっちのシャワールームに!!

私は、大丈夫だけど、うごけないッ……セシリアも。ごめん……。

早く行ってあげて!」

「チッ! やっぱりあのエテ公か……わかった!」

敵の方へ駆けていく承太郎君。

身体を締め付ける強さはどんどん強くなっていくようで、身動きすらできなくなってきた。

もう、いよいよできることがない。ただ、信じて、祈るのみだった。

(……みんな、どうか、無事で……)

「……ぎやあああああー……」

すると、少ししてから、敵の断末魔の叫びのようなものが聞こえてきた。

「さ、さすが承太郎君……」

同時に身体が自由になる。

そしてむこうから承太郎君とアンちゃんが駆けてきた。

「終わったぞ。この船は消える……ボートに戻るぜ」

「え?!」

「スタンドは、この『船』だったわけだ」

「ええっ!？」

「……行くぜ」

「う、うん……!」

驚きはしたが、そんな場合ではないことに気づき、走る。

甲板に続く階段を登り切ると、こちらに走ってくる花京院くんがみえた。

他の仲間もみんな無事なようで、ほっとする。

「保乃宮さん！ 承太郎！ 無事ですか?!」

「うん、そつちも、だいじょうぶ!」

「だから話はあとだつてーの。急ぐぞ」

「ああ！」

「うん！」

またも間一髪、ボートに乗り込む。

「これでまた……漂流か……」

誰かのつぶやきが聞こえた。……全員のため息も。

再びボートで海を漂う。

その間、花京院くんと一緒に、承太郎君に闘いの詳細を教えてもらう。猿がスタンド使いだったのも驚きだが、まさか船自体がスタンドとは。一般の人にも見えるし触れる……なんというパワーなのだろう。さすが『ストレンジス力』の暗示を持つだけはある、といったところだろうか。それを退けた承太郎君はいわんや、というものだが。

「……さすがだな、承太郎」

「ほんと。さすがだね、承太郎君」

口々に賞賛の思いを伝える。

「フン……。確かに使われ方によつてはやべえスタンドだったが……。本体がああで、助かったつてところだな。」

たしかに、上手くやられていたら、あつというまに全滅だったはずだ。スタンドの闘いとは、精神力の闘いだ。スタンド自体の能力ももちろんだが、使役する本体の能力……知力や冷静さ、判断力が非常に重要になってくる、ということだろう。改めて実感する。

そして、本体もスタンドも有能なこの方。

「……。疲れた。おれは寝る。助けが来たら起こせ」

と言つて帽子を深くかぶりなおす。

「助け、かあ。今度は、本物がくるといいね」

「ええ。本物のね……」

なんて、眠れる獅子の睡眠の妨げにならぬよう、ひそつとふたりで話していると声をかけられた。

「あの……」

船員さんたちだった。

「……。ねえちゃん、……。一体、あんた……?」

「はっ……。!?」

(しまつ……。!。 そうだった……)

護ろうと必死で、そんなことを気にしている余裕がなかったことを思い出す。

(……………また……………?)

ふるえだす、じぶんの身体。

(……………また、な、の……………?)

「……………? 仁美さん……………?」

俯き、ぎゅつと目を閉じる。

しかし、続いて私の耳に入ってきた言葉たちは、覚悟したようなものとはてんで違うものだった。

「……………さつきは、本当にありがとうございました!」

「すげえな! なんの格闘技やってんだ? そんな細っこいのに、筋肉、半端ねえんだな!」

「あのでけえ猿に負けてなかったもんな! しびれたぜ!」

「へ……………?」

普通の、セシリアがみえない人にとっては、私が素手でオランウータンと闘い、その剛腕を何度も受け止めていた……………ように見えていたはず。それが可能であったのは、私がかんでもない馬鹿力の持ち主ゆえ、と、どうやら思われているようだ。明らかにそんな範疇を超えていると思うが。

(……なんだ……)

ほっとして力が抜ける。

「オレ、ボクシングやってたんだけどよ、あの重そうなパンチをなあ……。

どんだけのヘビー級だつてんだよなあ」

「おれも空手、柔道あわせて五段なのによお……ねえちゃんにはかなう気がしねえな！

」

しかし、名誉なのか不名誉なのか、少なくとも女としては哀しい勘違いをされてしまった気がする。

「……プツ！」

そして隣には、またも笑いをこらえているひとが約一名。

「え、ええと、……あの、あれは……」

恥ずかしいやらなんやらで私が返答に困っていると、にやにやしながらも助け船を出してくれる。

「……それはきつと、火事場の馬鹿力つてやつですね。

やあ、すごいなあ。ひとはみかけによらないものですね。ふっ、くく……ふはははは

！」

「ぐっ……」

そういつてまた、堪え切れなくなつたのか笑いだす。

前言撤回。出されたのはべつに助け船ではなかつたらしい。

「も、もうっ！」

からかわれてばかり……いつか仕返しを目論んでやる……とか思うだけで、くやしいことにいい方法はちつとも思い浮かばずじまいだけれども。

しかし、そんな私の代わりをしてくれたのも船員さんたちだった。

「笑つてる場合じゃねーよ！ にいちゃん、もつと身体鍛えねーと！」

いざ、ねえちゃんにエツチなことなんてしようもんなら、ぶつとばされちまうぜ！」

「ぬあッ!? なッ、なにを!？」

「ちげえねえ！ がんばれよ、にいちゃん！」

「がはははは！」

「ぐぬう……」

皆に笑い飛ばされる彼。

とりあえず、復讐は果たせたらしい。

……誘爆した私にも、十分被害がおよんだが。

散々からかわれた後、当然のごとくしばらく互いに無言だったが先に沈黙を破つたの

は彼だった。

「……ちよつと、まだ怒ってるんですか？」

「……。ふーんだ、どうせ馬鹿力女ですよーだ」

ほんとうは、もう全然怒ってないなかつたが。……恥ずかしいだけで。

でも、すぐ許してしまうのはちよつと癪だったので、そんなことをいつてそっぽを向いてみる。

「まったく、冗談が通じないなあ……こどもなんだから」

「はあ!？」

抗議の声をあげようと振り向く。

「まあ、でも……」

すると、頭にぼふつとのせられる彼のでのひら。

そのまま、こどもにするかのように、よしよしと撫でられる。

「にやつ!？」

「……よく、頑張りましたね」

「えっ……?？」

「あの人たちが、今ああして笑っていられるのは……あなたの……セシリアの、おかげかもしれない。……だから」

そして、悔やむような、つらそうなかおでいう。

「……助けに行けなくて、すみません。もう少し早く、気づくべきだった……」

「……」

(……また……)

「うそ。……そんなことないくせに」

「え……?」

気づいていないとでもおもっていたのだろうか?

目を丸くする彼に、いう。

「ちゃんと……きて、くれたじゃない」

あのととき、振り返る私の目に飛び込んできた……

排水口からのびる、きらきらとひかる、みどりいろ。

「……どうにか、一本だけ、ですけどね」

そういうと、彼は照れくさそうに、やっぱいいわけを始める。

「べ、べつに嘘じゃあないですよ。」

あれが精一杯で、あのあとまた動けなくなっちゃったし……
あんなの助けに行つたうちに……」

(もう……)

どれだけ自分に厳しいのやら。あきれつつ、……尊敬しつつ……
そのことばをさえぎってやる

「……はいるよ。じゅうぶん。……ありがとう」

「仁美さん……」

するとふたたび、あたまにふわりとやさしい感触。

「……無事で、よかった」

「花京院くん……」

「……だから、もう少し鍛えてから出直せっていつてんだろおー！」

「こんなところですんな！ 陸でやれ！ 陸で!!」

そこで、やっぱり飛んでくる野次。

「う、うるさいなっ！」

真つ暗闇の海の上、このボートだけやたらと明るい笑い声が響いていた。

そして、間もなく、本物の明かりに照らされて……

私たちは今度こそ、通りかかった漁船に無事保護され、シンガポールへと降り立つことができたのだった。

*

*

*

漁船で与えられた部屋のベッドに横になり、思う。

それにしても散々だった。僕がそんな破廉恥な真似をするような男にみえるというのか。失敬な。

(くそ……あいつらめ……)

今回はちやんとほめてあげたかっただけなのだ。それだけなのに。

(……。鍛えるか……)

しかし、彼らのいうことにも一理ないわけではない。スタンドに直接攻撃は通じない……といえど、肉弾戦にも強いことにこしたことはないだろう。本体は生身なのだから。そういうことだ。

……いつの日か彼女にそーゆーことを……とか目論んでいるわけでは決してない。全然おもってない。そんなこと。おもうわけない。

そんな己への暗示を唱えながら床で腕立てをしていると、ふと、気になったことをお

もいだし。

(あのとき……)

一瞬間間見えた、彼女の、あの怯えたような表情。

(なにか……?)

しかし、思考はそこで、途切れる。

「はっ！」

生温かい視線を感じた。

「花京院、おまえ……」

「ただだけ素直なんじゃ……」

「ち、ちがう！これは……ただ己を高めるための……」

「……がんばれよ」

「今度また同じ部屋にしてやろうな……にしし……」

「う、うるさいっ！も、もう寝る！」

急ぎベッドにもぐりこむ。

連日の睡眠不足がたたっていたのか、緊張の糸が切れたのか……

すぐに襲ってきた睡魔に抗うことができなかつた。

僕は深い眠りの淵へとゆっくり落ちていった。

E n d l e s s S u m m e r

救命ボートで漂っていたところを通りすがった漁船に拾われ、どうにか遭難を回避した私たち。

二日間の航海ののち、シンガポールの港に無事たどり着いた。

船員さんと漁船の人達に謝辞を述べ、別れを告げる。

「……にいちちゃんには手加減してやれよ！」なんて、最後までからかわれてしまったのは秘密だが……。

なんだかんだ……いい人達だった。

それからまず、滞在中お世話になる宿を確保した。今回も私たち庶民には本来ご縁がないような、とつても素敵なりゾートホテルだ。見上げると首が痛くなってしまう高層階があるタワーのような建物で、中庭には宿泊者専用のプールなんてものまであった。

部屋に落ち着く。だいぶ回復したものの、まだ船旅特有の、あの揺れているような変な感覚がする。漁船では食事の準備の手伝いをするくらいで、あとはほとんど泥のように寝ていたので船酔いはずに済んだが。

「ふう、よかったね、無事に着いて。」

「うん、一時はどうなることかと思っただけど。」

今日はアンちゃんと同室だった。

到着したものの行くあてがないとのこと。ジョースターさんのはからいで、ならば私たちがここに居る間までは、ということになったのだ。

「5日後に来てくれるんだっけ？ お父さん。早く会えるといいね」

「あ、ああ。そうなの！ うん」

なぜだか気まずそうに目をそらす。そして、思い出したようにいう。

「そ、そうだ！ 承太郎に聞いたんだけど……」

保乃お姉さん、わたしがあの猿に襲われたとき、助けを呼んでくれたんでしょ？ あ

りがと！」

「ああ……。ううん、私は何もできなくて……。ごめんね」

無力感を思い出し唇を噛みしめる私に届く、明るい声。

「そんなことないよ！ 承太郎に助けてもらえて……。嬉しかった。お姉さんのおかげだよ」

そのときを思い出すように、うつとりとした表情を浮かべる彼女。これが恋する乙女のかおなんだなあ……。なんて、またにやりとしてしまう。

「そっか。ふふ、なら、よかった。」

さ、お茶でも入れよっか？」

「うん！」

そして、お湯を沸かそうと準備をしているところへ、おずおずと声をかけられる。

「あの、それで、その……お姉さんに聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ なぁに？」

ポットのスイッチを入れつつ返事をする、とんでもない質問がうしろから飛んできた。

「お姉さんは、あの中の誰かと恋人同士なの？」

「はあ?! いきなり何を……」

おもわず振り向く。すると、アンちゃんの口から仲間たちの名前と勝手な推測が次々に飛び出す。

「ポルナレフさん? ……は面白いけど軽くてお姉さんの好みじゃなさそうだし……」

アヴドウルさんは真面目そうだけど年上すぎるかなー。

ジョースターのおじちゃんは……もっと年上かあ」

「そんなはずないでしょ……って、聞いてない……」

言っても無駄そう。しばらく放っておこうとカップを並べているところへ爆弾が投げ込まれる。

「……じゃあ花京院さんだ！」

「ふえっ!？」

おもわず手にしていたカップがすつとんでいってしまった。なんてことだ。同時に
お湯が沸いた。それを知らせるピーっという間抜けな音が部屋に響く。

(な、なななな、なにゆって……そんな……まさか……ないない……ないってえー!!)

「なッ、あ、うー!!」

残念ながら、その心の叫びは言葉にはなっていないかったらしい。少女にはそれを肯定
と解釈されてしまったようで、満足そうな声があがる。

「やっぱりー! そうじゃないかと思っただよねえ!」

「ち、ちがっ……!!」

「ねーねー、いつから? どっちから告白したの?」

どンドン膨らんでいく彼女の想像。なんとか歯止めをかけなければ。必死に否定す
る。

「だーかーら! ちがうって!!」

「えー?」

「そんなこといったら花京院くんに、し、失礼でしょ! 私なんか……」

「あ! つてことは、お姉さんは好きなんだ!」

「うっ!? いや、いや、そんなことは……」

(あれ……なんだか今すごく痛いところを……いい、いやいやいや! 痛くないっ!!) かぶりをふりつつ、ふっとんでいったカップを拾う。なかなかの飛距離である。よく割れなかったものだ。震える手で作業を再開する私になおも問う彼女。

「ねっ、そうだよね! 花京院さんだよね。……承太郎じゃ、ないよね……?」
「はっ!」

そんな少女の様子から、ようやくその意図に気づく。

(この娘、ただ承太郎君と私がそうじゃないことを確認したいだけなのね。

しまった。無駄に焦っ……いい、いや、焦ってないし!!)

お湯に急いで沈めた紅茶のティーバックをあげ、最後の一滴が落ちるのを待つ。

そうして淹れた紅茶の片方のカップをアンちゃんの前に置き、自分も一口いただき、深呼吸。落ち着きを取り戻したのち、事実を伝えることにする。

「コホン。アンちゃん、安心して。私はあの中の誰ともそういう関係じゃないよ。仲間。みんな大事な仲間なの」

「……ほんとに?」

「そうです」

しかし、ちっとも伝わらなかったようだ。追撃をくらう。

「えー、でもボートでラブラブっぽかったじゃん、花京院さんと！」「かはっ!?」

勢いよく紅茶が間違った方向に入っけいき、おもわずむせる。

(らっ、らぶ……!?)

咳き込みながらも考える。

(……ど、どれだろう? どれのことだろう……?)

クツキーか? それとも階段か? はたまた、あたまをなでられた、あれであろうか……思い当たってしまう節が思いの外多いことに余計に混乱する。

(ち、ちがうちがう! ど、どれにしても……!!)

「あ、あれは、やさしき、だよ! 彼は仲間想いなもの! とつても! みんなにやさしいの! わかった?」

それをうけて、その意得たりと、大きく頷く。

「……わかった! つまり両想いだけど、まだ恋人同士ではないってことかあ!」

「ぜんっぜん、ちがうよおー!!!」

そのときだった。ピンポン。と、私の叫びとともに今度は来客を示すインターホンが鳴る。

「あ、誰か来た。はい!」

楽しそうにドアの方に向かう少女。

「た、助かった……」

これ以上この戦闘を継続することは不可能だ。だれとも知らぬ援軍の到来に心の底から感謝の意を唱える。

「あつ！ うん、ちよつと待ってて」

「……ないない、ありえないし。まったくもう……」

平静を取り戻すべく、呪文のようにそう唱えながら、おもわず一気に飲みほしてしまった紅茶のカップを片付けるべく立ち上がる。

しかし、続く少女の言葉に、その呪文の効果はあつさりかき消されてしまうのだった。

「お姉さん！ 未来の旦那様がお迎えにきたよ！」

言うまでもないが、盛大な物音を立てながら私は躓き転び、カップが再びふつとんていった。

打ちつけてしまい、痛む肘や膝をなでつつ（ちなみにセシリアはこれしきのことではわざわざ出てきて護ってくれない。当たり前だけど）、ドアを開けると、申し訳ないことに話題の人となってしまうそのひとが心配顔で立っていた。

「ちよ、大丈夫ですか？ さっき、ものすごい音がしましたけど……」

「う、ううん……なんでもない、なんでもないの、なんでもないから……」

「い、一体なにがあつたんですか……？」

再びぶつぶつと呪文を唱える私に訝しげな表情で問う彼。

『なにが』など、言えるわけがない。誤魔化そうと、あせって問い返す。

「そ、それより！ そっちこそ、どうしたの？」

「ああ、元気で暇なら出かけないかなーと思ひまして。晩御飯まで自由時間だし。

約束したでしょう？ 美味しいもの食べさせてあげるって」

「えっ!？」

「ほら、デートじゃん!？」

「(ち、ちがうって!)」

うしろからアンちゃんに小突かれ、あわてて否定する。

その様子を不思議そうなかおを試してみている彼に言う。

「あ、えーと、あの、でもアンちゃんを一人には……」

「ああ、そういうと思ひましたよ。

もちろん、アンちゃんも一緒に。どうかかな？」

「あ、そ、そっか、そうだよね！ そうしよう！ ねっ!？」

つい意識しすぎていたことに恥ずかしさを感じつつ隣を窺うと、なにやら思案顔の少女。

これは、(おいしいものは魅力的だけどふたりのおじやまになるのはなあ……)などと考えているに違いない。

「あ、そういえば、承太郎は？」

そしてアンちゃんが問う。彼らも同室であつた。

「うん、誘つただけけど、おれは寝る。……つてさ。フラれちゃつたよ」

首をすくめる彼。すると、しめたとばかりにこう言う。

「じゃあわたしも！ 疲れてるから承太郎と部屋で休んでる！ それならいいでしょ!!」

「

「は!?!」

彼と私の声が重なる。

「そ、それは、どうだろう……?」

「うん、それは……怒られそう。……私たちが」

「大丈夫！ 大丈夫！ さ、行こう！」

そうしてアンちゃんに押されるようにして私たちふたりは彼らの部屋の前までやつ

てきた。

「承太郎？ 僕だ」

花京院くんがインターホンを押し声をかけると、しばらくしてゆっくりとドアが開く。

「……ああ？ どうした？ 財布でも忘れ……」

「わつと！」

ぶつきらぼうなその顔が見えた瞬間、花京院くんを押しつけ、少女が承太郎君に飛びつく。

「承太郎！ わたしここにいてツ!! 一緒にいさせてツ!!」

「うおっ！」

そして、閉まる扉。

「……………」

中からは喧噪の音が聞こえる。

「わーい！」

「やかましい！ うつとおしいぞ！ ……！」

顔を見合わせ、眩く私たち。

「……やっぱり、一緒に連れていきましよう」

「……うん、そうだね」

ドアを開ける。

「すまない、承太郎」

「アンちゃん、やっぱり私たちと一緒に行く」

「……そうしろ」

しかし、承太郎君からアンちゃんを引きはがそうとするもなかなか離れない。

「ええー！ やだやだ！ ここにいるー！！」

「……離れろ」

そんな混沌を仲裁するかのよう、部屋中に電話のコール音が鳴り響き始めた。

「おっと、誰だろうか……」

言いつつ対応する花京院くん。その表情がみるみるうちに険しいものになる。

「はい。……なんだって!? ではすぐに向かいます。」

え？ そうなんですか……。はい、わかりました。

あ、彼女もここにいます。はい、一緒に……。では」

受話器を置いた彼に承太郎君が問う。

「なんだ？」

「ポルナレフの部屋に敵が出現したらしい。」

ジョースターさんたちの部屋に集まって対策を練ろうって」

「なに？ やれやれだぜ……。行くぞ」

「ああ」

「うん」

そして思い出し向き直り、少女に告げる。

「お前は……ここにいろ」

「えー」

「すぐ戻ってくるから、ね」

不満げなアンちゃんを部屋に残し、しっかりと鍵をかけ、三人でエレベーターへと歩く。

「……で、だ。敵が出たのはポルナレフの部屋なんだろう？ そっちに行かなくていいのか？」

「僕もそう思ったんだが、どうやらポルナレフ自身から5分後にジョースターさんの部屋に行くって電話が来たみたいなんだ。すれ違ってはいけないということだが。大丈夫だろうか」

その言葉に思いつき、提案する。

「あ、じゃあ私せめてセシリアをポルナレフさんのところに送っておくよ。ちよつとでも役に立てば」

「そうですね。直線距離にすればそんなに離れていないし、それがいいかもしれません」
「じゃあ……セシリア、御願い！」

*

*

*

ジョースターさんの部屋で待機していたが、なかなかポルナレフは現れなかった。

「遅いですね……」

「もうとつくに五分過ぎているが……」

「……見に行った方がいいんじゃないかねえのか？」

そのときドアが開く音がし、一斉に振り返る。そこには待ち人が立っていた。

「あ、きた！」

「遅いぞ。ポルナレフ」

「よし、みんな、それではさっそくだが、呪いのデーボにおそわれたときの対策を練るとするか」

「……つ、つかれた」

しかし、よくよく見ると、彼はやたらと疲弊しているようだ。ジョースターさんが問う。

「どうした、ポルナレフ？」

「……もう、終わったってんだよおー！ツ！」

「え……?!」

怒りに打ち震えながら叫ぶヤツを前に、皆の間に驚きと気まずい空気が流れる中、慌てて弁解をするジョースターさん。

「……そ、そうなの？ す、スマンスマン。お前がこつち来るっていうからさあー」

「それにしたって、ひでえぜ、ちくしょう！」

そうしてひとしきり嘆いたのち、標的を変える。

「保乃、お前だけだー！ おれを助けてくれたのは！」

「え!? い、いや、あれは花京院さんと承太郎君との相談の上でのことで……」

迫りくる男に対し、とつさに隣にいた僕を盾にする彼女。

「それでも、だ！ 感激した！ お礼に今からどうだい？ オレと……」

なんとも懲りない男だ。ひとこと言っただけでやるかと口を開こうとしたときだった。

背中からこんなこえがきこえてきた。

「わ、私、今からは……、だいじな先約があるので」

(……え……?)

「えー? そうなのか?」

「はい。すみません」

「ちえーつ、じゃあまた今度な!」

「はい、またぜひ、みんなで」

「ええー?」

「……」

二人のやりとりを聞きつつ、おもう。

(……断るのに適した理由がちょうどあった。それだけさ)

律儀な性格の持ち主である彼女は、ちゃんと先にした約束を優先するひとだということも。

それはわかっていた。

しかし、どうしても、ゆるんでしまう。

(……だいじな、か)

こんなかつこわるい顔をみられるわけにはいかない。さりげなく隠すのが精一杯だった。

*

*

*

気付かれる間もなく終了していた孤独な闘い……それを気まずいながらも私たちは皆で労っていた。

しかしポルナレフさんの悲劇はそれで終わりではなかったのだ。

部屋のインターホンが鳴る。

「? はい」

「警察だ! ここに殺人事件の容疑者が逃げ込んだという情報がある! 貴様だな!

」

荒々しくドアが開けられると共に、どかどかと雪崩れこんできてポルナレフさんを指しつつ言う。

「はあ?! おれも被害者だつーの!!」

「詳しい話は署で聞く! とにかく御同行願おう!!」

「そ、そんなあ!」

あつという間に有無を言わさぬ勢いでしょつぴかれていってしまう。

((……ど、どうしよう……))

皆一様にあぐりと口を開け途方に暮れる中、ジョースターさんがため息交じりに言う。

「ええい！ ポルナレフのことは、わしがなんとかしておく！」

とりあえず予定通り、夕食まで自由行動じゃ。はあ……」

そうしてひとまず解散となった。

「こんどこそ、おれは寝るぜ」と、承太郎君。

「ああ。アンちゃんを引き取りに僕らも行くよ」

「……こいつ……」

「むにや……承太郎〜」

しかし、彼らの部屋に戻ると、ベッドにはすやすやと眠る少女の姿があった。寝床を奪われた承太郎君が、諦めたように言う。

「……チツ、お前ら行ってきていいぜ」

「え!?!」

「仕方ねえ。こんだけ静かなら……置いといてやる」

「いいのか？」

「……起きて煩かったら叩き出す。花京院、おまえのベッド借りるぜ」

「それはかまわないけど……。じゃあ、行きましようか」

「う、うん！」

こうして私たちは図らずして……ふたりでシンガポールの街へとくりだすことになったのだった。

*

*

*

ふたり連れ立ってエレベーターに乗り、一階に降りる。

「……で、何が食べたいですか？ 考えてくれました？」

途中、僕は出していた宿題の答えを彼女に聞くことにする。

「えーとね、……うん。なんでもいい、かな」

すると出てきたのは何か意見を求められたときによく彼女から出る言葉だった。

ぼやーつとしていて何も考えていない。

何を隠そう最初は僕もそうなのかと疑っていたが、実はそういうわけではないようだ。

性格がそれぞれ四方八方に散っている（まあ、僕もそのうちのひとりなわけだけれど

も、まだマシンな方だ……たぶん）あの濃い面々の中で、唯一遠慮がち、かつ、自己主張するタイプではない、というののもちろんあるのだろうが。それだけではなく。

……本場に『なんでもいい』のだ。おそらく。

決して投げやりなわけではない。食べ物にしろ何にしろ、彼女はこう言うからにはそれをきつちり楽しんでるようだった。例えどういふものに決まろうとも。

許容範囲が広い、というか、それが何であれ、与えられたものの良さをみつけることができる……と、そういう表現がしつくりくるだろうか。

「……けど？」

しかし、今回はせつかくふたりなわけだし、彼女の意見を尊重したかった。それに、なにやら思うところがないわけではなさそうだと気づき、答えをゆつくりと促してみる。「……じゃあ、せつかくだから、なんかご当地ものと、……甘いもの、とかでもいい？」するとやつぱり控えめにそんなことをいう。なんだかんだ、やつぱり女の子なのだなどと、微笑ましいきもちになる。

「ふつ、いいですよ。了解しました。じゃあ行きましょう」

*

*

*

外に出ると、いい天気だった。このあたりはオフィス街のようで、スーツ姿の人が多いが、普通に、Tシャツにジーパンといった出で立ちの人もちらほら垣間見えた。時折サリー姿の女性もいて、それが私に外国にいることを実感させてくれた。

街並み自体も、雑然としているという他の東南アジア諸国の街のイメージと異なり、きつちりと整備されている印象を受けた。というのも、ごみを捨てたら罰金…等、管理が厳しいことに一端があるのだろう。この国に到着直後、ポルナレフさんが地面に荷物を置いた途端、勘違いされ警察が飛んでくる……という事態が発生したことを思い出し、眩く。

「ポルナレフさん、大丈夫かなあ」

「うーん。まあ、ジョースターさんがなんとかしてくれるでしょう。」

「それにしても、なんてこの国の警察に縁のあるやつなんだ……」

（あ……）

「ふふ……」

おもわず笑みがこぼれてしまう。

「どうしたんですか？」

「あ、ごめん。同じこと考えてたなあ、つて」

「あ、ああ、そうなんですわね」

大丈夫か、といえば。だ。

「アンちゃんも。追い出されてないといいけど」

「心配いりませんよ。承太郎、なんだかんだでやさしいですから」

きつぱりとそう言う。高校生同士、もうすっかり仲良しなんだな、なんて、微笑ましくおもってしまふ。

「そっか。……そうだね」

「それにしても、アンちゃんはずいぶん承太郎のことを気に入っているみたいですね」

「うん、やつぱりわかる?」

「勿論。まあ、彼は格好良いですからね、いろんな意味で」

「ああ。クールだけど、いざってときは……つて、ああいう感じが女の子にはたまらないんだらうなあ。モテるのもわかるよね」

「そうです、ね……」

そして、なにやらぼつりと呟く彼。

「……は、どう……」

「ん?」

「……いえ」

「え? なに?」

「なんでもないです」

よく聞こえなかったので問い返すも、答えてはもらえなかった。

「もう、言いかけてやめるなっていうたの自分……」

気になってしょうがなかったので、そんなうらみごとをいいかけた、そのときだった。

「……ほら、見えてきましたよ」

「え？ あつ！ 本当だ」

なんだか上手いこと誤魔化されてしまったような気もするが、実際私の注意は完全に逸らされてしまった。

彼が指さす先には市場のようなアーケード街があった。

「ホーカーズセンター……集合屋台街、というやつですね。シンガポールでは現在路上屋台が禁止されているんですが、以前路上で商売をしていた屋台を集めてできたものがこれだそうです。ここだけでなく、人が集まるような場所にはだいたいあるみたいですよ。」

さらに続く、彼の解説。

「そもそもシンガポールは他民族国家なので、中華料理、マレー料理、インド料理から、フランスやイタリア、スペインなどの西欧料理に、はては我が日本料理まで『世界中の料理が味わえる国』と言われているんですよ。国民の方々も食べるのが大好きで

『もうご飯は終わった？』があいさつ代わりだったりするほどです。歴史的な事情などから、外食も盛んで、こういうところが多く存在するわけですが……ここに来れば大概の御当地グルメは味わうことが可能だそうです」

「へえ……！」

「あ、すみません。冗長でしたね」

「ううん！ いや、すごいなあって……」

尊敬の念を込め、返事をする。内容も興味深かったが、それよりもなにより、彼の博識さには毎回驚かされてしまう。

「ごめん。よかつたら、その……もつと教えてもらってもいい？」

加えて、訊ねる。自らの物の知らなさに恥ずかしさはおぼえるが、知りたいという知識欲の方が勝っていた。

「へ？ は、はい。僕の知っている範囲であればもちろん……」

「……マレー料理ってどんなのがあるの？ 歴史的事情って？ それと……」

「……ふっ！ それはですね……」

彼を質問攻めにしつつ、選んだ一つの店で、お勧め……サテーという見た目は焼き鳥のような、お肉の串焼きをまずはいただくことに。

「いただきます。……わあ、これ、美味しいー！」

「うん。美味しいですね。しかし、あなただって、何でもちゃんと食べますよね。逆に苦手な食べ物とかないんですか？」

「うーん、食べられないほどっていうのはあんまりないかなあ。出されたものは、感謝して食べましょう、が、我が家の掟で。小さい頃は結構好き嫌い激しかったんだけど、叱られ続けて直った。厳しくて……兄が」

「へえ、お兄さんがいるんですか」

「うん、両親が共働きだから、兄さんが教育係みたいなかんじで。厳しかったなあ……今では感謝してなくもないけど」

「仲良しなんですね」

「うーん、どうなんだろうね。自分ではわからないなあ……。花京院くんは、兄弟いるの？」

「僕は一人っ子ですよ。……まあ、物心ついた時からコイツと一緒にですけど」

そういうと彼の相棒がひよこつと顔をのぞかせる。可愛い。

「あ、そっか！」

そして、問われる。

「……そういえば、ふと思ったんですが、セシリアを誰かに飛ばしたときって、あなた自

身の感覚つてどんな感じなんですか？」

「え？ ごめん。というと？」

「ええと、セシリアが見たものはあなたにも見える、わけではないんだなと。さっきの様子では」

ポルナレフさんを護りにいつてもらった時のことだろう。

「うん。全く……。というか、ハイエロフアントはできるの!?」

「はい」

「へえー！ すごいねー！ そっか、じゃないと偵察とかできないか。

セシリアは、離れると勝手に頑張ってくれる……。みたい。

どのあたりにいるか、ぼんやりわかるくらいかなあ。私の修業が足りないのかもしれないけど。」

「半自立型スタンド……。つてことなんでしょうね。

いや、十分すごいですから。……。ただ、」

「ただ？」

「……。他人に使っているとき、あなた自身は無防備になってしまう……

くれぐれも気を付けてくださいね」

「うん……。ありがとう」

*

*

*

サテー、そして、搾りたてのフルーツを使ったジュースをぺろりとたいらげてしまった僕と彼女。

「ごちそうさまでした！ おいしかったー！」

気に入ってもらえたようでよかったとほっとしつつ、もうひとつ提案をする。

「まだ余裕ありますか？ お腹」

「え？ だいじょうぶだけど」

「じゃあ、次いきましようか」

「うん。なに？」

「デザート、です」

「わあ！ すごーい!!」

続いて連れてきたのはこの屋台街の名物と言われているかき氷の店。

色とりどりのシロップやフルーツのソースがかかったそれは、見ごたえも食べごたえも十分、といった様相であった。

「どうしよう！　どれもきれいで美味しそう……！　こんなを選べないよ！」

めずらしくはしゃいでいる彼女。こんなに喜んでもらえるなら連れてきた甲斐があつたというものだ。しばし店の前のレプリカとにらめっこをしたのち、断腸の思いで、どうにか彼女はひとつを選んだようだ。

「……うん、ほどよく甘くて、美味しい！」

「これもさっぱりしてて美味ですよ。食べます？」

「あ、ありがと。じゃあこっちもよろしければどうぞ……」

「……」

「……」

「……しかし……あつい、ですわね」

「……うん。あついから……ちようどいいわね」

冷たく甘いかき氷が喉を通っていく感覚が、とても心地よかつた。

シンガポールは年中、日本の夏くらい、そもそも気温が高い。そしてこの屋台街、なかなかの人の多さだ。それがより蒸し暑さを助長しているのだろう。

……それ以外の理由など見当たらない。なにかあるだろうか。

そしてつともなことを言いかける彼女。

「あの……なら、学生服……いい、いやなんでもないです」

「普段、暇なときって、何してます？」

先ほどからずっと、我ながら長めな蘊蓄を、にこにこ興味深そうに聞いてくれた彼女。

自分ばかり喋っていることに反省し、かつ、せっかくの機会なので、いろいろ聞いてみることにした。

「うーん、……バイト？」

思った以上に日々勤労に励んでいるようだ。が、それはもう知っている。

「……も、休みなとき。です」

「うーん、家でのんびりしてるかな。本とか漫画読んだり……」

「へえ、けっこうインドア派なんですね」

意外だった。ではあの運動神経はどこで培われたものなのだろうか。と、思っていたら続きがあった。

「体動かすのも好きなんだけどね。最近はめつきり。素振りくらい？」

「す、素振り……？ なんの?? 野球……？」

女子大生がひとり、部屋で……。なんともシニールな映像が浮かんでしまう。

「テニス。両親と兄がやっていたから実家にいた頃は時々やってて。

あ、野球も好きだよ。観るの」

「そうなんですネ。サークルとか入っていないんですか？ 大学ってそういうのたくさんあるでしょう？」

「う、ん……。あるけど……。考えてもなかった……」

「え？ なんで？」

「え、ええと、バイトしなきゃいけないし、レポートとかも大変だし。

ほ、ほら、私、要領悪いから」

「ふーん……」

(要領、か。ちつとも悪くなんてなさそうだけれども……)

軽い気持ちで聞いただけなのだが、予想外の反応をする彼女。なぜだろう？ 理由は

わからないが……

必死に言い訳をしているようだった。

「花京院くんは？ 趣味とか。あ、何か部活入ってるの？」

気になって聞いてみたかったが、先に問われる。

「僕は、転校する前の学校では美術部でした。」

「へえー！ すごいね!! 絵、上手いんだ！」

「上手くはないですが、描くのは、好きですね」

「いいなあ。私本当に絵心ないから、うらやましい。どんな絵を描くの？」

「風景とか、人物とか、気分によっていろいろですね。デザインとかも好きですが」

「そうなんだ。今度見てみたいな。花京院くんの絵」

「お見せするほどのものではないかもしれませんが……いいですよ」

「ほんと？ 楽しみ！」

「そのときはあなたの、絵心のない絵も見せてくださいね」

「……うっ……！ ……じゃあ、諦める……」

「はあ？ どんだけ苦手なんですか。むしろすごく見たくなっただけ……」

言うつと、誤魔化すように話を変える彼女。

「ほ、他は？ 暇なときとか何してるの？」

「そうですね、僕も本読んだり、ゲームしたり、ですかね」

「え！」

「あ、今、根暗だと思ったでしょう？」

「全然思っていない。まあ、私は根暗だけれども」

「は？」

「……私もけっこうやるんだよね、ゲーム。下手だけど」

「え！ そうなんですか？ 女性はあまりやらないものかと……」
「やるよお！ 私が特殊なのかもしれないけど……。」

父さんや兄さんがやってたから、そのまま私もやるようになって。うち、ファミコンあるし」

意外な共通点が発覚する。いろいろ話してみるものである。本当に。嬉しくなり、つい、矢継ぎ早に質問する僕。

「そうなんですか！ どんなのやるんですか？ 今なにかやっています？」

「RPGが多いかな。でもアクションやらシューティングとかシミュレーションとか、いろいろやるよ。実家にいた頃は父さんや兄さんとマリオとかレースゲームとかでよく対戦してたなあ」

「へえー！ そうなんですね」

「今はドラクエ3やってる」

「おお！ 僕もやってますよ。どこまでいきました？」

「それがね、私、バラモス城でつまってるの……回転床がクリアできなくて。なんなの？ あの落とし穴とのコラボは！ 階段目の前なのに、何度も落ちて無駄にレベルばかり上がってるし……」

「ふっ！ そうなんですか」

「またも珍しく熱く語る彼女の姿におもわず笑みがもれる。

「花京院くんはどこまでいった?」

「僕はもう、一通りクリアしちゃいましたよ。」

「回転床ね。確かに、あれは若干コツが要りますね。言葉で言い表すのは難しいんですが……」

「え! そうなの?! に、日本に帰ったら教えて! そのコツを!」

「いいですよ。帰ったら、……一緒にやりましょうか」

「うん!」

「ただし! 僕は助言として、口は多少出しますが、手は出しませんよ。自力で頑張ってくださいね」

「うん! もちろん! やったー!!」

*

*

*

「……というか、2のあの洞窟の方が大概、鬼じゃあなかったですか?」

「ああ。私、あれ、やっと抜けた! ってところでザラキかけられて全滅した嫌な思い出しかない……」

熱狂冷めやらぬまま、その後も夢中で（おそらく一般的にはコアな）話をしていると、あの巨大なき氷がいつのまにか胃袋に収まってしまっていた。

「おっと、そろそろ出ましようか」

「あ、そうだね」

混雑もさらに増してきたようなので、席を空けるため立ち上がり、屋台街と別れを告げる。

「さて、これからどうしましょうかね」

腕時計を見る。時間はありそうだが、如何せんさすがにお腹はいっぱいに近かった。これ以上食べると晩御飯が入らなくなることは確実である。

「なにか見たいものとかありますか？　せっかくだし」

「あ、じゃあ、あれ見たいな。マールライオン。ここから近いよね？」

「ああ、あれね。でも、あれは……」

「知ってる。三大がっかり……でしょ？」

さすがに私も知っていた。デンマークの人魚姫、ブリュッセルの小僧小僧とならぶ、世界三大、行くのがつかりする観光スポットの一つであるということ。

「でもなんか、面白いわねと……」

「……逆に見たい、でしょう？　わかります。僕もそうでしたし」

「あ、でも、付き合わせちゃうの悪いし。やっぱりいいや」

この口ぶりから察するに、きつと彼は見たことがあるのだろう。人生二回も同じこと
でがっかりさせるのは僥びないというものだ。

しかし彼はこんなことをいう。

「いいですよ。別に暇だし、腹ごなしがてら散歩もしたいし。お付き合いします。

もう一回見たら意外と新たな発見があるかもしれないし……それに」

「それに？」

「……がっかりするあなたのかおをみるのも、また一興かな、と」

「っ！ ……いじわる」

「フツ……」

「……。ありがとう」

「……いいえ」

そうして見に行った実物の白いライオンは、確かに、これだけかあと感じないことも
なかったけれど……

なぜだか、とても楽しくて。

申し訳ないことに、期待されていたがっかり顔は、たぶん提供できなかつた。

帰り道、ショッピングモールの前を通りかかったので、ついでに買い物をしていくことになり、例によって互いに買いにくいものもあるだろうということで、彼とは少し別行動をしていた。

待ち合わせ場所の屋上に、約束の時間よりかなり早くに到着してしまった私。設置されている遊具にはしやぐ子どもたち、それを微笑ましそうに眺めるご老人、愛をささやき合うカップル……。そんな様々な表情の人々をベンチに座ってぼーっと見ていた。

そのときだった。

ふと目にとまる、みるからに悲壮な……。いや、それを通り越して、もはや無表情な女性がふらふらと端にむかって歩いていく。

(…………ま、まさか!?)

その悪い予感的中し、彼女は安全のための柵を乗り越え、すれすれに立つ。

「落ち着いて、ください……。やめましょう」

どうにか思いとどまってもらうべくそつと刺激しないよう声をかけると、はつとした表情を浮かべる彼女。

「っ！……もう、いいの……」

「よくないです」

気をとられている隙に、自分も柵を越え、ゆつくり近づく。

「……こないで!!」

「……」

周りの人々も気づきだし、騒ぎ出す。

反射的に脳裏に鮮明に浮かぶヴィジョン。

(させない……もう二度と……)

なんとか気を引こうと必死だった。

「おいしいもの、すきですか？」

「は？」

「いいですね。この国。おいしいもの、たくさん……」

彼に聞いた、シンガポールの人は皆、食べることが大好きだと。というか、思いつかなかった。それくらいしか。

「もう、食べられなくなっちゃう。そんなこと、したら……」
ゆつくりと、問いかける。

「もったいないですよ。そんなの」

「……ない……」

「…………え？」

「もったいなくなんて、ないっ！」

彼女の目から、あふれる涙。

「だって…………！ もう、いっしょにたべてもらえない！ あのひとは、わたしじゃない

…………ほかの…………っ…………！」

その悲痛な叫びに事情をだいたい察する。

「もう、いいの。あのひとのいない世界なんて…………生きている意味なんて、もう…………」

「…………また、いますよ。ちがう…………。ちがったんですよ」

「っ！」

(あと…………すこし…………！)

彼女との距離をじわじわとつめる。

「ほんとうのひと…………きつと、またいっしょに食べてくれるひと、現れますから…………だか

ら…………」

「…………死なないで」

「…………あ、あなた…………」

「…………だから、ね？ 戻りましょう？」

手を伸ばした瞬間だった。

けたたましいサイレンの音が聞こえ、地上にはパトカーや消防車の、回転する赤い光がたくさん集まってきていた。

「はっ！ ……わ、わかったようなこと、言わないでっ！」

もう、いいの!! わたしなんて……離して!!」

「あっ！」

（しまっ……）

彼女に振り払われ、バランスを崩した私は、まっさかさまに、落ちた。

（どうしよう……）

落ちながら、考える。

おそらく私は大丈夫だけれども、どうやって誤魔化すか。それが問題だ。

（まあ、彼女が落ちるよりは……って!?）

呑気にもそんなことを考えていた天罰か。目に飛び込んできた。衝撃的なものが。落ちてくる。彼女も。いよいよ絶望してしまったのか。

（そ、そんな……!）

「セシリアっ！ 御願い、彼女を!!」

飛び立って行く、相棒。

（……。こんなことになるなんて……）

まさかスタンド使いとか、そういうのとまったく関係ない……こんな事態に陥るなんて。

死ぬ前には走馬灯というものがみえる、とはよく言ったものだ。けれども浮かんだのは、なぜか……

(……また、叱られちゃうな)

そんなことだった。

(……ごめんなさい)

目を閉じた、その刹那。

「ハイエロフアントツ!!」

私の身体は受け止められていた。

相棒の触手を、ロープのように木に巻き付けて、横から飛び出てきた彼に。

*

*

*

屋上へ向かおうと思ったところだった。

やたらと階下に警察やらが集まっているので、なにかあったのかと思っただけ。吹き抜けから見える屋上を皆が見ているので、自分も見上げた。その矢先……

降ってきたではないか……彼女が。

しかもなにを考えたかセシリアがどこかへ飛び立つのも見えた。

状況はさっぱりわからなかったが、とにかく受け止めねば……それだけだった。重力加速度的に、そのままでは力に耐えられないとつぎに判断し、振り子のようにしてベクトル方向をかえてみたが、上手くいってよかった。

目を瞬かせる腕の中の彼女に必死に問う。

「か、花京院くん……？」

「だいじょうぶですか?! けがは？」

「う、うん、だいじょうぶ……」

「よ、かった……」

おもわず全身の力が抜ける。

「ご、ごめんね。ありがとう……」

「敵でも出たんですか? 一体何が?」

「いや、それが……」

曰く、自殺願望者を助けようとしたが、その人も自分も一緒に落ちてしまった、と。

それにしても、だ。僕が言葉を発そうとした。そのときだった。

「貴方たち! 大丈夫ですか!」

「無傷だ！　すごい！　奇跡だ！」

救急隊や、警官、レポーターなど大勢に囲まれていることに気づく。これだけ目立っただのだ。そりゃあそうだろう。

そして、警官に問われる彼女。

「貴女、突き落とされましたよね？　あの女性に」

「!?　い、いえ、あの……。彼女が飛び降りようとしたのを止めようとして、足を滑らせた。それだけです！」

「いや、しかし……」

「目の錯覚です」

頑として言い張る。

（それはさすがに無理がある気がするが……）

加えて僕も、こんなことを言われてしまう。

「すごいですね！　貴方も！　恋人のために自らの身を挺して……！」

「は!?!」

「い、いえ、僕は……」

返答に困っていると、彼女がいう。

「ち、ちがいます！　その……えっと、彼は……！　……と、友だち……です!!」

(え……!?)

しかしそんな場合ではなかった。

「……僕たちは大丈夫です。お騒がせして申し訳ありません。では、これで」

それだけ言い残すと、彼女の腕をつかみ、脱兎の如く駆けだす。

去り際、彼女も叫ぶ。

「あつ！ あの女性に、私は無事だと伝えてください！ それだけ！ 御願います!!
すみませんでした!!」

*

*

*

「まったく、あなたってひとは！」

追手をまいたところで、彼に詳細を聞かれ、お叱りを受ける。

「なんでその状況でセシリアを放つなんて真似を！ あのままじゃあなたが……」

「……。助けなきやって、思って……」

「はあ、勘弁してくださいよ、もう……。それは、あなたの美徳かもしれないけれど……」

「花京院くん……」

「……今度やったら、本気で怒りますからね？」

「う……。ごめんなさい……」

(すでに、とつても、怒っている気がするけれど……あたりまえか)

またやってしまった。と、ともに、私にはもうひとつ、謝らなければいけないことがあった。

「……あの、あと……さつき、ごめんね。」

友だちだなんて、私勝手に……」

恋人なんて恐れ多い、と、つい発したことばだったが、それだって十分凶々しい。しかもこんなことをしでかしてしまったのだ。なおさらだろう。

(……なりたかったな。いつか、ほんとに……)

が、しかし、どうやらその言葉は火に油を注いってしまっただけのようだった。

「……そんなことよりもっと反省することがあるでしょう！」

「は、はい……」

「人にスタンド使うときは考えろといったそばから！」

「ごめんなさい……」

「まったく、無茶ばかりして！ 目が離せない……」

「うう……」

耳が痛い。が、事実なのだから仕方がない。せめておとなしく叱られることにしよ

う。

「ほんつと、苦勞しますよ。僕は……」

と、そんな私に驚くべきことばがとびこんでくる。

「……こんな……友だち、をもつと」

(……え!?)

「い、今なんて……ひやつ!」

たしかめたくて、踏み出した。

しかしそこには段差があり、また転びそうになる。

「おっと!」

……のをまた支えてもらってしまふ。

「ご、ごめんね。ありがとう」

「……はあ、もう、どれだけのうっかり屋さんだよ……」

「う、うっかり?!」

事実なので仕方がないのだが、恥ずかしさが頂点に達し、つい反論してしまふ。

「こ、これでも昔はしっかりしてるって言われてたんだよ!」

学級委員とかしてたんだから! ……小学校のとき」

「……ぶつ、ふはははは! そうなんですか。それはすごい……ははははは!!」

彼の笑いはしばらく納まることはなかった。

「ちよつ！ 馬鹿にしすぎでしょ!!」

「ふふふ、すみません。馬鹿になんてしてないですよ。僕も、やっていました。学級委員」

「え、そうなんだ！ あー、でも、なんかすごくそれっぽい……」

「そうですか？ あなたと同一年で、同じクラスだったら、どんな感じだっただろう？」

「

「あはは、一緒にやってたかもね。学級委員。」

「うん、それいいな！ だったら、……楽しかっただろうなあ」

「……そう、ですね。きつと、すごく、ね」

「……さ、そろそろ行きましようかね」

「そういつて向けられた彼の背中をみつめる。」

「……」

「たくさん、反省をしなければならぬ。もちろん。」

「申し訳ないともすごくおもっている。なのに……。」

「世話がやけると叱られ、うっかりものだと笑われて……」

「にもかかわらず、どうしてこんなにうれしいのか……」

そんなの、わかりきっていた。

「……はい」

こんな顔見られたら、また叱られてしまう。

悟られないように、そのまま少し後ろを歩く。

ちよっぴりいいじわるで……

でも、すぐくやさしくて、あたたかい……

私の『友だち』の。

「はっ?!」

急に振り返る、彼。

「ど、どうしたの?」

後ろでしつこくにやにやしていたのを隠しながら問う私に彼はいう。

「いや、なんか視線を感じて……」

「敵?!」

緩みきっていた気持ちを引き締める。

「……いえ、もう去ったようです」

「そっか」

「気のせいだといいますが」

「うん。ごめん、私のせいで目立っちゃったから……」

「……。じゃあ、罪滅ぼしに、ひとついいですか？」

「も、もちろん！ なに？」

「……付き合ってください」

「は!? へ!? え!? あ!? なっ……!?!」

「……このカフェに。」

僕、喉渴いちゃいましたよ。騒動で焦ったし。走ったし」

(な、なんだ。びっくりした……)

「あ、ああ、そうだよね。うん。そんなことでもいいなら……」

*

*

*

そうして入った喫茶店は、客も僕達意外にはおらず、静かで落ち着いた雰囲気だった。席に座り、注文後、うつむき黙り込む彼女。何かを考え込んでいるようだ。

「……」

「どうしました？」

声をかける。

「ん……？ あの人、大丈夫かな、って」

「……ああ」

飛び降りた女性のことだろう。彼女に少し遅れて落ちてきた。が、さすがセシリア。完璧に護っていたのを僕は横目で見た。救急車に収容されていたが、あれは……。

「大丈夫でしょう。外傷はないはずですよ。ショックで気絶していただけですよ。おそれなく」

「そっか。なら、それはいいんだけど」

「あなたが無事であることは、たぶん警察か病院の人が伝えてくれるでしょうし」

「それも、だけど……」

「……。また、繰り返ししてしまったら、ですか？」

頷く、彼女。

「あの人ね、すきな人が、ほかの人のところにいつちやっただって」

「ああ……」

「私、間違えたかもしれないな、と思って」

「なにをですか？」

「言っちゃったの、私。その人は『ちがった』だけだからって。ほんとうの人がまた現れるからって……」

「え？」

その通りではないだろうか。現に想いが実らなかつたわけだろうから。

「すごいよね。すきなひとのために、ある意味命を懸けたわけだから……」

「まあ、そうかもしれないですね」

「そこまで想える相手だったなら……彼女にとっては、ほんとうの人だったのかもかもしれないって。」

……たとえ実らなくとも。でも……」

少しの沈黙のあと、ふたたびぼつりと呟く。

「赤い糸って、信じる？」

「……小指の？」

再び頷きながら、ゆつくりと言葉にする。

「……いるといいな。彼女に、現れてほしいなって……」

その深い愛情がちゃんと報われてほしいなって……思つて。だから……」

「わかりません。どう思つたかも、これからどうするかも、あの人次第です」

「うん……」

しゅんと俯く、彼女。

「でも、これだけは言える」

「なに？」

「あなたが助けなければ、そんなこと考える余地もなかった、ということだけは」

「あ……」

「なので、あなたが、救ったことは、伝えたことは……無駄では決してない。……はずです。」

たとえ、また同じ結論に達してしまっただとしても」

「……」

「まあ、個人的には、立ち直って、誰か別のほんとうの人に出逢って、あのと看死なくてよかったです、そうならいいとは思いますが」

「でないとなんが何のために……まったく」

「……。……ありがとう」

いいつつ、彼女はまた、例のふわっとした笑顔を浮かべる。

タイミングがさっぱりわからない。

いつもこうだ。この不意打ちをくらい、すっかり調子が狂ってしまう。

「だ、だいたいですよ。正面きって止めるより、落ちたらそこをセシリアで助ける、という方がスマートだったと思います」

「あ、そっか」

「まあ、とつきにであれば、しかたない。

声をかけずにいられなかったんでしよう？ どうせ。あなたのことだから」

「むう……」

そのときちようど注文したものが運ばれてきた。

「さ、いただきましようか」

「うん」

*

*

*

(なんでもお見通しなんだから……)

そんなことを考えつつ、唐突に気づく。

「はっ！ そういえば、花京院くんは好き嫌い無いの？ 甘いものとか、大丈夫だった？」

「

先程のかき氷も普通に付き合わせてしまったが、男性は甘いものが苦手な方も多いの

では、と今さらながら心配になる。現に今、彼の前に置かれているのはブラックのアイスコーヒーだ。

「ええ。だいじょうぶです。好きですよ、甘いもの」

「そう？　なら、よかった」

ほっとする。

「中でも、そのさくらんぼとか、大好物です」

そして、私の頼んだクリームソーダに乗っかっている可愛い果実を指さしながらいう。

ちなみにこれはショーケースを見て、どうしても飲みたくなつたのだ。

透きとおった綺麗な緑。それに浮かべられた氷と次々に湧き出る小さな泡が光を反射して煌めいていて……

なんだか、すごく似ている。

なんておもつてしまったからというのは秘密だ。

「そうなんだ。あ、じゃあこれあげるよ」

「いいんですか？」

「もちろん。より好きな人に食べてもらった方がさくらんぼも幸せだよ、たぶん」

「ありがとうございます。なんか催促したみたいで、すみません。」

……ではお礼に、ちよつとした特技があるんですが、見てもらえますか？」

「なに？ 見たい見たい！」

「では……、……はい」

「うッ！ さ、さくらんぼの茎が、あたかも花びらのようにッ！」

す、すつごーい！どうやってるの！ めっちゃ器用！」

「フフ……コツと慣れ、ですよ」

絶対違う。とか思いつつも、本当に凄い。また彼の規格外さを目の当たりにしてしまった。

そして、ふと思い出してしまふ。下世話なひとつの噂を。

「でもさ、それってよく……、い、いや、なんでもないっ！」

恥ずかしくなつて、飛び出かけた質問をあわててひっこめようとしたが、遅かったよ
うだ。

「……わかりません」

「……はい？」

「今、あなたの頭に浮かんでいるであろう質問に、お答えしたんです。

あれでしょう？ さくらんぼの茎が結べる人はキスが……つてやつ」

「う、うん」

「そう言われるとは思いましたが。わかりません、としか言いようがないんですよ。経験ないので」

「えっ!? そ、そうなの? ほんとに……?」

意外すぎて、つい驚きの声をあげてしまう。

「僕まだ高校生ですよ。そんなに変ですかね?」

「い、いや、ごめん! 全然変じゃない!」

だつてすつごくモテるだろうし、てつきり日本に彼女の三人や四人……」

「……ポルナレフに毒されすぎです」

「……ごめんなさい」

そして逆襲の時が来る。

「そーいう、あなたはどうなんですか?」

華の女子大生……さぞかしたいそうなご経験がおりなんでしょうね? ええ?」

「うぐ……」

見栄を張つても、嘘についても通用するまい……なにより、彼はちゃんと話してくれたのに自分だけ誤魔化すのは嫌だった。恥を忍んで真実を告げる。

「……ないよっ! 笑いたいなら笑えばいいよ……」

生きる化石とでもシーラカンスとでも好きなように罵るがよいよ!」

「落ち着いてください。誰にいわれたんですか？ それ。言いませんし、笑いませんよ。」

いいじゃないですか。それで。むしろそれがいい！ ……。

……という男も、世の中にはたくさんいます」

「……そうなの？」

「……信じて、まっっているんでしよう？ ……これ」

そういつて小指を指さす彼。

「うっ！ ……うん」

(やっぱり、お見通しだし……)

「大事にとつといたらいんですよ。」

初めてのキスは、だいすきなひととちゃんとしてくださいね。

……僕も、そうしますから」

「は、はい……」

「……」

「……」

「あー、もう、まったく、なんでこんな話になったんでしようね」

「う、うん、ほんとにね……」

やっぱり、今日のシンガポールの気温は特に高めらしい。

そして、私は再び、人知を超えた：神がかった動きを目の当たりにする。

「……じゃあ、これ、いただきますね。レロレロレロレロレロレロレロ……。」

「うツ!!」

赤い実を舌で転がす。凄まじいスピードで。

あまりのその速さに、私の目には果実が無数にあるようにみえた。

「あはははははは！ すつ、すごいッ！ はやいッ！ 舌の動きが見えないッ!! すつ

づーい！ あはははははは！ 」

「レロレロレロレロ……。」

「すごい!! もう一回やって！ あははははは!! 」

「ねえねえ、どうだった？ ……デート」

「あはは、デートじゃないよ。でも楽しかったよ！ ……すつづく」

部屋に戻ったのち、アンちゃんに問われ、答える。

そして、どうしても報告したいことを思い出す。

「そうだ！ あのね、アンちゃん！ 私たちね、友だちなんだ！」

「へ……？ 告白したの？」

「はあ？ そんなわけないじゃない！」

「そ、そうだよね。でも、それって、ふつう……」

「ふふ……！」

「……？ なんでそんなにうれしそうなの？」

「は？ 友だちだよ？ うれしいに決まってるじゃない！ ふふふふふ！」

「……へんなの」

ベッドに潜り、おもいだす。

（ああ、たのしかったなあ……ふふ）

ついにやにやしてしまいが、こんなことではいけない。

（ちゃんと反省しなきゃ）

こんなんじゃないめだ。もつと。

花京院くんみたいに、セシリアを生かしてあげられるようにならなきゃ……

そのためにはどうしたらいいんだろう？

今度お師匠様（アヴドウルさん）に相談してみようかな）

そして、おもう。

(……ふさわしいひとに、なりたいな)

(はっ！ い、いや！ 友だち！ 友だちとして！)

(……そういえば、昼間の視線の主はやっぱり敵、だよ。気を引き締めないと。
明日また花京院くん聞いてみよう)

NO EXCUSE

一行が宿泊しているホテルの一室。

薄暗い室内。唯一煌々と光るテレビ。その画面を固唾を飲んで見守る男がふたり。次々に切り替わる映像の音声が言葉を紡ぐ。

「……………」

「……………!!」

「か」

「きよー」

「いん」

「に」

「きを」

「っ」

「けろ」

「……………!」

「……………!!」

「なにい!? こ、これは……」

「ど、どういふことでしょうか、ジョースターさん……?」

「……わ、わからん、が……」

「……」

「アヴドウル、あいつは……今どこに？」

「承太郎たちと列車のチケットの手配に出かけたはずですが……」

「し、しまった……!」

ほとんど同時だった。

「ジョースターさん! ジョースターさんつ!!」

激しいノックの音と、悲痛な呼び声がドアの外から響いてきたのは……。

*

*

*

「ごめん、お待たせ!」

「わーい! 承太郎ー!」

待ち合わせ時間ぎりぎり。出かける準備を済ました私とアンちゃんは、集合場所のホテル入り口で花京院くん、承太郎君と合流した。

ちなみに昨日無実の罪で警察に連行されてしまったポルナレフさんは未だ勾留中だ。ジョースターさんが莫大な額の保釈金をポンと支払ったので、今日中にはなんとか出てこられるだろうとのことだが。

4人でホテルの外に出る。

「じじいとアヴドウルは列車でインドへ向かった方がいいと計画している……明日出発だ。

シンガポール駅へチケットを予約にいくぜ」

「はーいー」

承太郎君の号令に元気よく返事をするアンちゃん。おつかいといえど、一緒にお出かけできるのが嬉しくてしかたがない様子だ。そのままぴったりとくつついて、何やら話しかけている。

空を見上げると、今日も昨日と同様、快晴で日差しがまぶしい。気温も真夏同然で、たまらず半袖シャツ（昨日買った）に衣替えした私ですら暑い。

……にもかかわらず、高校生男子二人はやっぱり学生服（冬服）だった。みているこつちが暑い。なぜだかつつこんではいけない雰囲気なので、未だつつこめずにいる。勇気

のない私をどうか許していただきたい。

歩きながら、昨日から気になっていたことを尋ねようと声をかける。

「ねえ、花京院くん。例の視線、今日は……」

振り向く彼。そして、その口から発された一言によって、聞きたかったことなんて私の頭からぶっ飛んでいってしまう。

「……なんだい？ マイ、ハニー!!」

「へっ!!? ……はっ、はあっ!!」

つい素っ頓狂な声をあげてしまう私。

一体全体、どうしてしまったというのか。新種の方法を編み出したのだろうか？ 私をからかうための……。それとも暑さで彼のどこかになにかおかしなことになってしまったのだろうか？ それなら大変だ。やはりさっさと夏服に着替えろと進言すべきだったのだろうか。

「か、花京院くん……?」

おそろおそろそう呼びかけるので精一杯だった。おそらく鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしているであろう自分。すると『彼』はそんな私の肩に腕を回しながらこんなことをいう。

「今日も可愛いよ……」

「ひっ!!」

この気温にもかかわらず、全身をぞわつとした感覚が駆け巡る。

「嫌っ!!」

我慢できずに、おもわず押し返してしまふ。

「……………どうしたんだい? 今日はやけにご機嫌斜めじゃあないか。

もしかしてあの日かい?? はははははは!」

「っ……………!?!」

そうして興味を失ったかのように承太郎君達のもとへ行つてしまふ。ひとりうしろで呆然と佇み、その背中を見遣る。

(……………ちがう……………!)

気づく。……………確信する。

いや、こんなの、気づかない方がどうかしていると思う。

(姿形も声も、そっくりだけど……………全然ちがう!)

あの目つき、雰囲気……………、花京院くんだったら、こんなこと言わない、絶対にツ!

……………それに、何より)

そして、一つの結論に達する。

(……………に、偽物だ……………)

前に彼が肉の芽で操られていたときとはまた異なる印象を受けた。根本的に『違う』。……そんな気がする。

加えて、もうひとつ重要な事実に思い至る。

(……ちよ、ちよつと待つて！ ってことは、本物は……？)

心臓が嫌な風に早く激しく脈打ち始める。

(お、落ち着いて。悟られてはいけない……)

私が気づいたことを、気づかれてはいけないッ!!

じゃないと、本物の花京院くんが……!!)

深呼吸し、拳をぐつと握りしめる。

どうにか心を鎮め、努めて明るい声を出す。

「……ごめんっ!! 私、忘れ物しちゃったから、一回部屋に戻るね！」

先に行つてて！ すぐ追いかけるから！」

すると皆一斉に振り向き、その視線が集中する。

「あん？ 何やってんだよ……。なら、みんなで……」

そう言いかけた承太郎君を慌てて制す。

「じ、承太郎君っ！ 実はジョースターさんに他に買い出しも頼まれたの！ それ先に

探してて！ 今メモするから……」

震える手でメモとペンを取り出し、どうにか文字を綴る。

「……………はい……………」

《この、かきよういんくん、ニセモノ。わたし、ほんもの、さがす》

「!! ……わかった」

「『こつち』……………よろしく、ね。気をつけて……………」

「てめえも、な」

*

*

*

女と承太郎がなにやら意味ありげに喋っている。

そもそも急に態度が……………明らかにおかしい。

(チツ、この女……………もしや、気づきやがったか……………? ならば、こいつから……………)

来た道を戻ろうとする女に声をかける。

「一人では危ないよ……………。僕も一緒に……………」

「ううん、大丈夫! ありがとう、……………ダーリン!」

「……………」

その表情は堂々としており、挙動に不審なところはなかった。何より、この笑顔にこ

の台詞。

(……気のせいか。しかし、地味な女だと思っていたがよく見ると……。へっ、せつかくだ。こいつは後回しにして、あとでこのまま花京院のフリして、2、3回やってから殺るか。散々可愛がってやったあと、惚れた男じゃねえってわかって絶望したところを……。けけ、たまんねえ……。お楽しみが増えたな)

走り去る女の後ろ姿を舐めまわすように見やり、舌なめずりをする。
(やはりまずは承太郎。油断したところを、こいつから、殺すッ！)

*

*

*

(ひいつー！)

再び得も言われぬ悪寒が背中を駆けめぐる。しかし、そんなものにかまっている場合ではない。ひたすら走り、角を曲がったところで敵の視界に入っていないことを確認する。

(……よし)

「セシリア、花京院くんのところへ！ 御願い！ 急いで!!」
羽ばたいていく相棒を祈るような気持ちでみつめる。

(…………。捕まってるのかな…………、また肉の芽とか、ケガとかしてたら…………。さ、最悪の場合…………)

考えたくもない想像が頭を占める。

(い、いや…………!!)

目のまえがぼやけそうになるのをぐっとこらえる。そんな暇があつたら出来ることに集中しなければいけないのだ。

(いやだ…………!!)

それでも浮かんでしまう。滲んでしまう。

(御願ひ、無事で…………!)

そして、その願ひに呼応するように、相棒が情報を届けてくれる。

(はっ! ホテル内にはいるみたい!)

そうだ、ジョースターさんとアヴドウルさんに…………!

エレベーターを待つのももどかしく、非常階段を一気に駆け上がる。

そうしてたどり着いたジョースターさんの部屋のドアを力まかせにノックする。

「ジョースターさん! ジョースターさんっ!!」

「や、保乃!？」

扉が開くと同時に二人に叫ぶ。

「はあはあ、ジョースターさん、アヴドウルさん！」

「ど、どうした!？」

「か、花京院くんがっ！ 花京院くんじゃなくて、敵の偽者でっ！」

「なにいつ！」

「今、承太郎君が気づいていないふりをして引きつけてくれています！」

「は、はやく本物を探して、承太郎君も、一人では……助けに行かないと!!」

「……あれは、そういうことか」

「ええ」

「……え？」

なにやら思うところがあるようで、そう呟くジョースターさん達。

「とにかく今は、急がねば。わたしは承太郎の方に行きましょう」

「うむ、アヴドウルよ、頼んだ。では、ハーミットパープル！」

スタンド『隠者』の茨を出し、念写能力を発現してくれる。

テレビの出演者が指をさす。これが方向を示しているとのこと。

「……近いぞ。こっちじゃ」

「はい！」

そのまま慌てて部屋をとび出し駆けだす。

しかし、いきなり廊下の角で誰かとぶつかってしまった。

「わっと！ 失礼！」

「ご、ごめんなさ……」

「か、花京院！」

二人の発するその声に、おもわず詰め寄り夢中で問いかける。

「か、花京院くん!? 花京院くん知らない? 花京院くんが花京院くんじゃなくてニセ

モノの花京院くん、本物の花京院くんの身が危険で危なくて……!!」

「お、おい、保乃……」

「お、落ち着いてください、僕です。僕が花京院です……」

「……え……?」

そういわれ、目のまえにいるひとをじつとみる。

そこには探し求めていたそのひとが、たしかに、いた。

*

*

*

「かきよういん、くん?」

「はい。そう、ですけど……」

「お、おでこ! おでこ見せて!」

「わっ!」

そう言うやいなや、僕の前髪を捲る。

「な、ない! あ、あとっ、ケガとか! してない?!」

腕を掴み、必死に僕の様子を確認しようとする彼女。

「は、はい」

「……ほんとに?」

不安そうに問いかける。その瞳には涙が浮かんでいた。

(な、なにがなんだかわからない……けど……)

安心させてあげたくて、今にもこぼれてしまいそうな彼女の雫をそっとぬぐう。

「……ええ、大丈夫ですよ。僕は、大丈夫ですから。……ね?」

「……っ!」

すると、驚いたように僕の眼をじっとみつめ、いう。

「……ほ、本物だー!」

そして飛び込んでくる。勢いそのまま、僕の胸に。

(わ、わわ……………！)

「……………ちよ、ちよっ……………!!」

「つく、……………よかった……………よかったよお……………！」

(……………え、つと……………)

「……………なにかあつたら……………どうしようって……………」

(よくわからない……………けど、こんな……………?)

「……………」

(……………あたたかい……………)

彼女の体温が……………なみだが……………とても。

(……………)

躊躇いつつも、泣きじやくる彼女の背中に腕をまわ……………

「はっ！」

……………そうとしたときだった。視線に気づく。

「よかったのう。にやにや」

「ええ、ほんとうに……………ふふ……………」

「はっ！ わ、わわ、私ッ!? ご、ごめっ……………！」

二人の声に我に返り、パッと離れてしまう彼女。

「い、いえ！ え、えーと、なんですか？ その、僕の、偽物？ が出たんですか？」
「そ、そうなの！ は、早く承太郎君のところに行かないかきや！」
「うむ、行くぞ！」

承太郎のもとへ皆で走る。

途中、ジョースターさんに尋ねられる。

「ところで、花京院、お前さんはどこにおつたんじゃ？」

「僕ですか？ 承太郎にホテルの中庭集合と言われたのでずっと待っていたんですよ。

でも誰も来ないので、おかしいと思っていた矢先にセシリアが来て……。

何かあったに違いないと御二人に報告して探しに行こうと戻ってきたんですが……

今思えば、『あいつ』は承太郎ではなく偽物だったんですね……」

「なるほど。なにはともあれ、君が無事でよかったよ」

「しかし、今度は承太郎が危険だ。保乃宮さん」

「それがセシリア、飛ばしたんだけど、ちよつと離れすぎてるからか帰ってきてちやつて

……」

「そうか……。急ごう」

走り回ったのち、街の端、公園に張り巡らされた水路。その向こうにようやく見つかる。

承太郎と、そして、もうひとり……

「いたぞー！」

「ちっ！」

橋を渡ろうとしたその瞬間、偽者の僕が何かを地面に投げつける。すると爆音とともに、辺りが煙に包まれた。

「くっ……煙幕か!？」

そして、即座に僕に掴みかかってきて投げ技を狙ってくる敵。それをなんとか食い止める。

(ぐっ……しかし、聞いてはいたが、本当にそっくりだな……)

組んだまま、睨み合う。

……気味が悪い。まるで鏡を見ているようだった。

膠着状態のまま徐々に煙が晴れ、視界が戻ってくる。

そこには驚き戸惑う仲間たちの姿があった。

「しまった！ 奴のねらいは……！」

「僕が本物です！ この偽物め！」

「な、なにをいうんだ！ 本物は僕の方です！ こいつこそ偽物だ！」

「その気持ちの悪い変身を今すぐやめろ！」

「貴様こそ、その化けの皮をはがしてやる！」

「ちっ……」

「ど、どつちが……?! 本当に声も姿も全く同じだぞ！」

困惑の空気の中、アヴドウルさんが言う。

「そ、そうだ！ 花京院、ハイエロファントを出すんだ！ スタンドはひとり一体……。」

な、なにい!？」

「な、なぜだ!? ハイエロファントは僕の……」

「お、おまえこそ……！」

奴の背後にもいた。相棒に、そっくりな『もの』が。

「だ、だめだ。これではわからん……」

すると、承太郎が彼女に問う。

「……おい！ おまえどつちだかわかんねーのか？」

「……。たぶんあつちが本物……だと思うけど、ちよつと遠すぎて自信が。もう少し

……」

僕の方を示しながら彼女がいう。

(……正解！ その通りですって！)

しかし、危険だ。言い当てたとき、偽物の憎らしげな視線が彼女に向けられるのが見えた。おそらく近づいた瞬間、彼女が僕、もしくは両方に攻撃を仕掛けてくるに違いない。そうなれば、彼女の性格上、まずいことになる。それは昨日証明済みだ。必死に叫ぶ。

「いかん！ 近寄っては駄目です！」

「え？」

その言葉に偽者が僕に向け、言い放つ。

「近づかれたら困る……それはおまえがやはり偽者だつてことだ！」

「はあ!? ち、ちがうっ！」

それを皮切りに再び始まる不毛な押し問答。

「大丈夫。まかせ……」

埒があかない。そう思ったのか、歩みよろうとする彼女。それを制しながら、ジョースターさんが高らかに宣言する。

「……その必要はない。おもいついたぞ。本物の花京院を見分ける方法をッ！」

「え?! ほ、ほんとうですか?」

「ああ。おい、どちらも! よく見ておけよ!」

僕と敵に言う。次の瞬間彼はとんでもない行動に出た。

「……ほれっ!」

彼女のシャツの裾に手をかけ、おもいきり捲りあげるといふ暴挙に。

「きゃ……!」

「ぬあっ?!」

晴れ渡る空の下、すきとおるような白い肌……おなかとおへそ……が曝される。

非常に惜しい。もう少しでその上の……い、いや、なんでもない……なんでもないっ

!

反射的に、彼女と共に抗議の声をあげる。

「な、な、な、なにするんですか、ジョースターさんっ!!」

「……ほれ。こつちじゃ。本物は」

僕の方を指さしながら、呆れたように言う。

「あ……」

「?」

一体どういふことか理解が及んでいない敵に承太郎がすかさず攻撃を叩き込む。

「よし！ オラアツ！」

激しい衝撃に、僕の姿をしていた『もの』はふつとび、縦に割れて……。

「……ちっ！」

敵本体が姿を現したのだった。

*

*

*

スタープラチナの強烈な一撃に正体を現した敵の男が言う。

「……ちっ！ そうさ。これがオレ本来のハンサム顔よ!!」

「は……？」

(ええ？ いままでの方が断然……。っ！ いや、いや、それどころじゃなかった……)

つい、変なところに反論してしまう私。自分を諫める。

そして、横でもなにやら関係ないところで争いが起きていた。

「ちよつと！ なんてことするんですか、ジョースターさん！ 貴方って人はっ！」

「いやあ、スカートじゃつたらもつとよかったんじゃが。にしし」

「なっ！ 言うに事欠いてっ！ この！」

「……おまえも今そうおもったくせに」

「お、おもうかーっ！」

「つてか、この程度でそんな……。予想通り思惑通りだし、よかつたけどさあ……。

花京院、おまえ、これから先、大丈夫か……？」

「なっ、なにがだよっ！ 余計なお世話だっ！！」

「……」

「ふ、二人とも、そんな場合では……」

「恥ずかしいやらなんやらで、言葉が発せない私に代わって、アウドウルさんが仲裁に入る。」

「は、はっ！ そうだった！」

「そんな私たちをよそに、睨み合う承太郎君と敵。」

「スタンド……？？ しかし、生身の拳で殴れた……？？」

「おれのは喰らった肉と同化しているから一般人にも見えるし触れもするスタンドだ。」

スタンドの名は『節制』のカードの暗示をもつ『イエローテンバランス黄の節制』……！」

黄色くブヨブヨとした、ゼリー状のスライムのようなスタンドだった。

「親切に、解説ありがとよ！」

「今度はスタープラチナで殴る。しかし……」

「ちっ、手応えがねえ……」

ぐにやりと包み込まれるその拳。

「黄の節制に弱点はねー！」

そして、自らの全身を包み込む。

「オレのスタンドはいうなれば！ 『パワーを吸い取る鎧』！ 『攻撃する防壁』！

エネルギーは分散され吸収されちまうのだッ！」

「フン……」

「それだけだと思おうか？」

「……なに！」

「右手を見てみな！ おまえの手にもさつき殴ったところに一部が喰らいついているぜ

！」

「!!」

敵の言う通り、承太郎君の右手にもアメーバ状のものが付着していた。

「言っておく！ それにさわると左手の指にも喰らいつくぜ！」

じわじわ食うスタンド！ 喰えば喰うほど大きくなる。そしてぜったいに取れん!!

「

確かに、じゆるじゆると、それは少しづつ大きくなっているようだ。

「てめーのスピードがいくら早かろーが、パワーがいくら強かろーが『黄の節制』の前に

は無駄だッ！ おれを倒すことはできねーし、その右手は切断するしか逃れる方法はないイイー！」

「……ちっ！」

次に、近くに転がっていた棒で殴るも、やはり攻撃は通らないようだ。

「弱点はねーって言つとるだろーが！ ドゥーユウーアンダスタンソンドウ！」

勝ち誇つたように気味の悪い笑みを浮かべる敵。

そのときだった。花京院くんが叫ぶ。

「……承太郎っ！ 下だ!!」

「あん？」

一瞬の間の後で、にやりと笑う。

「……なるほどな！ オラアッ！」

地面にむけて放たれた攻撃の衝撃により、橋がガラガラと激しい音をたて、崩れる。

そして……

「な、なにい?! う、うわあーっ！」

激しいしぶきを上げて水路に落下する敵。大人の腰ほどの深さしかないが、アメーバと一体化して寝そべっているような状態なので、敵の身体はすっかり沈み込んでいる。すぐさま足で踏みつけるようにして敵を水中に押さえつける承太郎君。

「ガベ！」

「ソーだな……」

「ガボガボガボ……！」

「いくらスタンドが無敵でも、本体のおまえに酸素は必要だよなあ……！」

「ぶはっ！」

呼吸をするためにスタンドをひっこめて、必死に水面から顔を出す敵。

そこを見逃すこのひとではない。

「……Do you understand? 理解したか？」

そういうと強烈な一撃を顔面にお見舞いする。

「ぐはっ！」

「さて……」

一発KO。その首根っこを間髪入れず承太郎君が掴むと敵は言う。

「ひい！ ゆ、許してください！ 鼻が折れました！ 歯も何本かぶつとんじまいました!! もう再起不能ですよ！ おとなしく入院しますから！ おれはD I Oには金で雇われただけなんだ！ 命をはってまでアンタらを狙うつもりはねえ！」

それに敵かな低音が響く。

「……では、しゃべってもらおうか」

「へ？」

「……これから襲ってくる『スタンド使い』の情報だ」

「そ、それだけは口が裂けても言えねえぜ。『誇り』がある。

殺されたって仲間のことをチクるわけ……」

「……なるほど、ご立派だな」

振りかぶる承太郎君およびスタープラチナ。

「お、思い出した！」

『死神』『女帝』『吊られた男』『皇帝』の4人がおまえらを追ってるんだった！」

「ふーん、で、どんな能力だ？」

「いや、こ、これは本当に知らねえ！」

スタンド使いは能力を他人には見せない……

たとえば味方でも弱点を教えることにほかならないからだ」

「それだけか？ いいたいことは……」

「ひいつ！ ただ、DIOにスタンドに関してを教えた魔女がいて、その息子が4人の中にいる。」

名前はJ・ガイル……カードの暗示は『吊られた男』。目印は……両手とも右手の男！

「

「なっ！」

「そ、それは！」

（ぼ、ポルナレフさんの妹さんの……!?）

「そいつの能力は少しだけ噂で聞いたぜ……『鏡』……だ。鏡を使うらしい。

実際見たことはねーがポルナレフは勝てねーだろう……死ぬぜ」

「……鏡、か……」

「……そして、おまえも、今死ぬっ!!」

その刹那だった。敵背後から黄色いスライムが飛び出し、承太郎君を包み込もうと襲い掛かる。

「おまえを殺せば一億ドルもらえることになってる……ヒヒ！ たったこれだけでそれだけ稼げるなんてよ！ おれってほんとラッキーツ!!」

「！ 承太郎！ 後ろだ!!」

「……わかつている」

その前に、目にもとまらぬ速さで本体に非常に重いパンチが入る。

「ぐはあっ！」

たまらず、消えるスタンド。そして、敵の髪を掴んで釣り上げる承太郎君。

「じよ、じょうだん！ じょうだんだってば！ ほ、本気にした？」

ま、まさか、これ以上殴るなんて……そんな、酷いこと、しないよね？ ねっ？」

「……もうてめーにはなにもいうことはねえ。とてもアワれすぎて……」

「……何もいえねえ」

「オラオラオラオラオラオラオラオラ……オラア!!」

ぷかりと水面に浮かぶ敵。

これこそがまさに再起不能。完治にはどれくらいかかるのやら。見当もつかない。

自慢のハンサム顔ももはや、見る影もない。……気の毒だなんて、まったく思わないけれど。

*

*

*

「お疲れ、承太郎」

スライム野郎を叩きのめしたおれに労いの声をかけてきた花京院。こちらも労いが
てら、からかいがてら、いう。

「よお、まぎれもない……本物」

「なんだよ……。それ」

「冗談だ。なかなかいいアイデアだったぜ」

「ふつ、君なら上手くやってくれと思うたさ」

「フン。しかし、よくあんな策がすぐ思い付いたな」

「まあ、弱点のないものなど、ないってことさ」

「ああ」

「ああいうタイプのスタンドの弱点っていうのはシミュレーション済みだったからね。

……だれかさんのおかげで」

「そうか……。そうだな」

「まあ、あのひとには別の弱点があるからね。そっちのほうが大問題なんだけどさ……」

「……おまえ……」

「……わかつている。みなまで言うな。すまない」

「あ？」

「成り代わられて、迷惑をかけた。

僕だって、ひとのことを偉そうに言えたものではないからな」

「……」

(そういうことをいいたかったわけではないんだが……。まあいいか)

「自分が本物だ、って自分で証明するのは意外と難しいものだね。」

本当に。……まいったよ」

「……そうだろうな。まあ、しかし……」

「なんだい？」

「……いいじゃねーか。てめーには、わかってくれるやつがいるんだから」

証明など、せずとも、だ。

「……え？ ……ああ、そうか。……そうなのかな……」

「ただ……」

同時にそういう存在は……。

「……てめーも、自分の、弱点……には、まあ、せいぜい気を付けてやれや」

「？ あ、ああ……」

*

*

*

その後、無事チケットを買い終えた私達。

翌朝、シンガポール駅へ向かう。ホームで列車の到着を待っていると、裾を引っ張ら

れた。

「お姉さん、ちよつと、ちよつと！」

「ん？ どうしたの？」

アンちゃんだ。見送りをする、というこゝとでついてきてくれたのだが。

「わたし、こゝとで一回消えるから。お姉さんには言つておこゝと思つて……」

「一回……？ つて？」

少女の台詞に首をかしげる。

「あ、なんでもない！ それじゃね！ みんなによろしく！」

「え、あ、アンちゃん!!」

「今度会うときまでには花京院さんにちゃんと告白するんだよ！」

あと承太郎に変な虫がつかないか、見張つといて！」

「はあ!? ちよ、ちよつとー!!」

「ぜつたいだよー!!」

それだけ言つと、少女はあつという間に駆けていつてしまい見えなくなつた。

(今度、つて……)

こゝの広い世の中、一度別れてしまえば、また会えるかどうかなんて、わかりきつたことだ。現実的に考へて、無理な話と。頭では。

しかし、淋しさはまったく感じなかった。予感があった。

元気な少女の言う通りになる……そんな予感が。

「……『また』、ね。アンちゃん」

*

*

*

予定通り、僕達はシンガポールからタイ、バンコクへ向かう寝台列車に乗り込んだ。

その車中、皆で食堂車にて昼食をとっていたときのことだ。昨日の敵スタンドの一件が話題に上った。

「へー！ オレがいない間にそんなことがあったのかあ。すげーな、変身できるスタンドか……」

あの場になかったポルナレフは特に驚きを隠せないようだった。

「うむ。変わったスタンド使いだった。わたしの知らないスタンドも世の中にはたくさんいるものよ」とアヴドウルさん。

「そうですね。まったくいやな気分だったよ。僕そのものに化けるなんて……」

するとジョースターさんがにやにやしながらいう。

「しかし、この娘が血相変えて部屋に来たときは驚いたぞ。か、花京院くんがーっ！

……つてな！」

「え!? だ、だつて! しょうがないじゃないですか。」

友だち……が、あぶないかもつてなつたら! ……あわてますよ、そりやあ!!」
必死に訴える彼女。

(そりやあ、まあ、そうだろう。うん)

仲間……もとい、友人(……にやけてなんかいない)の危機に瀕したら、そりやそうなるだろう。ひとり納得する。

しかし承太郎はなにやら疑問を持っているようだ。彼女にそれをぶつける。

「……しかしお前、初見で、よくあんなにすぐわかったな。あいつが偽者だつてよ」

「え、それは……、……っ!」

一瞬の沈黙。そしてさつき以上の必死さでいう。

「……な、何言つてるの! ぜんつつぜん似てなかつたじゃない!」

「そつくりだつたぞ。顔も声も……」

「ええ。我ながら、そつくりでしたね……」

「う……。そ、そんなことないつて」

追撃をくらい、しどろもどろにいう。そんな彼女に承太郎の容赦ない追究は続く。

「……瓜二つだつたがなあ。なんで確信できたんだ?」

「な、なんでって……なんとなくだよ！　なんとなく!!」

しまいには半ば投げやりにそう言い放つ。

「じ、じゃあ、私、部屋に戻りますね！　ごちそうさまでしたっ!!」

「あー!」

そして立ち上がると、逃げるように出ていってしまう。

「……?　どうしたんでしよう?」

「まあ、そつとしておいてやりなさい。女の子には独りになりたい時があるんじゃないし。」

……承太郎も、あまりいじめてやりなさんな」

「……ふん」

「はあ……そんなものでしょうか」

そこへ占い師らしい助け舟(?)を出すアヴドウルさん。

「まあ、彼女のタロットの暗示には『直感』もある。そういうものにも優れているのかもしれないな。……と、いうことにしておこうじゃないか。なっ!」

「?　そうですね」

ポルナレフまで、吐き捨てるように言う。

「なーんだ。そーゆーことなわけね。けっ!　ったくよお!!」

「どういうことですか？」

「はあ？ 知るか！ てめーで考えろ！」

「考えてもわからないから聞いているんじやあないか」

「ぜってー教えてやんねー!! ずっとそのまま考えてやがれ！」

「なんだと！」

「……………」

「……………!!」

そのままポルナレフとの口論はしばし続いた。誰が天然色ポケ朴念仁だ。まったく本当に失敬なやつだ。

舌戦が終了したのち、ひとり、おもう。

(……………しかし、そうか。)

そんなにすぐに、わかって、くれたのか……………)

「何今さらにやにやしてんだよ……………ったく」

「ん、……………なんでもないよ」

そして、承太郎の食べ終わったお皿に残されているものに気づき、声をかける。
「ところで、承太郎、そのチエリー食べないのか？」

「ガツつくようだが好物で目がなくてな……………くれないか？」

「ああ」

その言葉に感謝しつつ、有難くいただくことにする。

「サンキュー。レロレロレロレロ……」

「……………」

いつもどおり、好物を転がし滑らかな舌感を楽しんでいると、承太郎が怪訝な表情を浮かべているのに気づく。

「どうした？」

「……………なんでもねえ……………」

「そうか？ ……レロレロレロレロ……………」

「……………お前、あいつに、それ、見せたか……………？」

「ん？ これ?? ああ、こないだ見せたな。そういえば。」

特技の一環と思われたのか、やたらウケてたけど、すごいって。

ただの癖なんだけどなあ、これ。何回もやってつてせがまれて、困っちゃったよ」

「……………てめえら……………ほんとに……………」

「あつ！ 承太郎！ 見ろ、フラミンゴが飛んだぞ」

「……………やれやれだぜ」

*

*

*

(……いい、言えない。……言えるわけない！)

自分に与えられた部屋に駆け込み、おもう。

(……確信した理由が、〃触れられて気持ち悪かったから〃とかっ……！

だって、つてことは、それって……本物には……)

「わああー！！！！」

(……ふ、深く考えちゃ、ダメだ！ うん、やめよう。やめよう！

友だちと敵なんだから！ そりゃ違うよ。うん)

無理矢理、納得する。

(こういうときは……寝るっ！！)

秘技、現実逃避。ベッドに潜り、布団をかぶる。

(だ、だいたい、そんなこと考えてる場合じゃないし！

そんな暇があつたら自分の能力磨きなさいってもんだよね。

昨日もちつとも役に立ってなかったし。

起きたら、師匠(アヴドウルさん)のところにセシリアのこと、相談に行こう……)

S t a r d u s t T r a i n

心地よい振動で自然と目が覚めた。

ガタンゴトン、という列車特有の規則的な音と揺れが、まだ覚醒しきっていない自分に己の居場所を教えてくれた。

しかし寝すぎた。結局、昼食会場から逃げるように飛び出したのち、ずっとだから……昼寝というには長すぎだ。窓の外にみえる景色はすでに茜色に染まりかけていた。

時計を見ると16時すぎ。

(今の時間ならどうだろ。大丈夫かな?)

思案と共に目的の部屋の前までやってきた。ノックとともに言う。

「アヴドウルさん、いらつしやいますか？」

しばしの間のあと、目的の人物が顔を出す。

「はい……おお、保乃。どうしたんだい？」

「ちよつとご相談がありました……今お忙しいですか？」

「ああ、いいよ。ちよつとそろそろ休憩にしようと思っていたんだ」

ドアの隙間から見える室内のテーブルには、筆記具や、たくさんの本、地図などの資

料、メモやノートが広がっていた。きつとこれまでの旅の記録をまとめたり、これからの計画を立てたりといったお仕事の途中に違いない。

「え!? すみません、せつかくの休憩時間に……」

そんなに急ぎなわけではないので、出直しましょうか?」

「いや、大丈夫だよ。君は本当に遠慮しいだなあ。まさに『日本人』だな」

笑いながら言われる。

「え? そ、そんなことは!」

「どうぞ、入りましたまえ。散らかっていてすまん」

「いえ、では、失礼します」

ソファを勧めてくれつつ、アヴドウルさんが言う。

「ではお茶を淹れてくるよ」

「あ、じゃあ私が……」

「いいよ。お客様は座っていなさい。」

「というか実はけっこう得意なんだ。よければ飲んでいってくれ」

「そうなんですか? じゃあ、お言葉に甘えて」

「チャイにしようか? ミルクティーは好きかな?」

「はい。好きです」

「では少し待っていてくれ」

「さ、お待たせ」

「ありがとうございます！いただきます。……わあ！ 美味しいです！」

やさしい甘みとミルクのまろやかさ。そして、紅茶と香辛料のいい香りがマッチして
いて絶妙だった。

「ふっ、それはよかった。」

絶品の紅茶に舌鼓を打ちつつも、本題に入る。

「で、相談とは？」

「はい、セシリアのことなんですけど」

「ああ、どうした？」

「皆ちゃんとスタンドをちゃんと制御しているのに、私はセシリアのこと生かしきれ
いなくて……どうしたらよいものかと。あと以前スタンドは成長することもあると
おっしゃられていますでしたが、具体的にどうすればいいのか、ご存知ないかと思
いますよね？ だから……」

「ふむ。君や皆のスタンドについて、一度、まとめてみようか」

「……と、いうわけで、君のスタンドは自立型の側面が強いようだ」

そういうえばあのひとにも言われたな、とおもいだす。

「当たり前だが、スタンドには個人差がある。

セシリアはハイエロフアントより周辺把握や精密な動作は苦手なのかもしれない。が、制御という点では、できているのではないかな。

スタンドが命令をきいて、遂行してくれているわけだから。」

「そうなんでしょうか……」

「まあ、そもそも、君は今までの戦闘において、よくやってくれていると思うがね」

「え!? 私、全然、何もできていないですよ?!」

「そんなことはないよ。」

これだけ次々と敵の襲来があるにもかかわらず、目立った負傷者はゼロ。

せいぜいかすり傷程度だろうか? 十分だよ」

「あ、ありがとうございます。でも、まだまだです……」

「ふっ、やっぱり日本人、だな」

「い、いえ!」

私のせいで日本人のイメージを破壊してしまったらどうしよう、と心配になつてくる。

「あと、成長性についてだが、残念ながら、わたしもスタンドを成長させる方法は知らない。

本体の精神の成長が鍵になるのは確かだが、なにがきっかけになるのかまではわからない。

そもそも「成長性」自体があるかないかもスタンドによるしな」

「そうなんですか……」

「それよりも、状況判断等を鍛えるほうがまだ現実的かもしれないな。

実践経験が必要になるから、なかなか難しいところだが」

「そう、ですね。みんなすごいですもんね……」

瞬時に適切な判断を下し、ベストな使い方をする。私に足りないと感じ、かつ、先日お説教してもらったものだった。

「ジョースターさんは闘いの経験自体が豊富だし、花京院やポルナレフは生まれつきのスタンド使いだ。歴の違いというのものもあるから仕方ないところはあさ。

承太郎はスタンドが発現してからまだ日は浅いが、喧嘩のエキスパートだから……それに天性のものもあるのだろう。やつは特別だ。

一方君は闘いにおいてセシリアを使い始めたのはついこないだだろう。焦ることはない。自分のできることを伸ばしていけばいいのではないか、とわたしは思うが。」

「……」

「ただ、……そう、たとえば花京院。あいつはよく考えているそうだよ。」

「こういうスタンドにもし対峙したらどうするか、と。」

仲間の能力的に、どういう状況を創れば有利か、逆にこうなってはまずい……とかかな。あと弱点を補うにはどうすればよいかってことなども。そういうった習慣は大事かもしれないな」

「なるほど……」

「さすがだ。見習わなければ、とおもう。」

「あまり答えになっていないな。すまない」

「そんなことないです！ 十分参考になりました。」

「いつも聞いてもらってしまってますみません！」

「構わないよ。わたしもスタンドの研究は趣味のようなものだから」

「ありがとうございます、師匠！」

「し、師匠……？」

「あ、すみません……アヴドウルさん、私にとってスタンドのお師匠様なので……つい」
「はは、光栄だ。そもそも、古い師のわたしにとっては相談されるといのは嬉しいことだからね」

「そう言っていたらと……助かります」

そんなふうにはつとする私に、ぎよつとするようなことを言いだすお師匠様。

「他にも悩みがあったらいつでも言いなさい。……恋愛相談とかでもいいぞ」

「ふえっ!? な、なな……! ないです!」

「フフフ……」

「そ、そもそも今はそんなことを考えてる場合じゃないでしょう!」

にやりと笑う師匠に言う。しかしあつさりところ返される。

「そんなことはないよ。それとこれとは別さ。」

むしろプラスにはたらくことだって多いんじゃないか?

言っただろう? スタンドの強さは心の強さ。本体の精神的な成長がスタンドの成

長だと」

(……ここころの、成長……?)

「そうなので、しょうか……」

つい納得しそうになる。

「はっ! い、いや、それでも、不謹慎です! つか、ないですつてば!!」

「……そうやって思っただけでも、いつのまにかおちている。」

それが恋、というものさ……」

「……面白がってます……?」

「心外だな。至って真面目なんだが」

「……」

その言葉に、おもわず顔をだす、本音。

「……。……んです」

「?」

「……よく、わからないん、です」

「……そうか。まあ、焦ることはない。そのうちわかるさ。嫌でも。そんなものさ」

「そうですかね……」

「ああ。自然な気持ちにまかせるのがいい。

答えは……いずれ出るさ。

占い師の私の予言を、信じなさい」

微笑みを浮かべ、いう。冬の雪山で遭難したときに、山小屋で暖炉を見つけたら……きつとこんな気持ちになるのではないか。なんだかそんな風に思った。

(さすが『魔術師の赤』……だなあ)

「ふふ、そうですね。そうします。すみません、師匠」

そういう私にポロツと師匠も本音を漏らす。

「いや、こちらこそ、からかって悪かったね」

「はあ!? やつぱりからかってたんじやあないですか!!」

「あ……。ごほん。時にはこうして本心を引き出してやるのも占い師の務め……」

「……」

「ははは、許せ。君のことを応援したいという気持ちは本当だよ」

「はあ……。まあでも、少し気が楽になりました。ありがとうございます」

「ふふ、だろう? 本職だからな。まあ、いつか答えが出たら、ぜひ教えてくれよ」

「……そうですね。いつか、答えが、出たら……」

*

*

*

来たときよりかは幾分気が晴れたような表情で、丁寧すぎるともいえるお礼をいい、自らの部屋に戻って行く『恋する戦乙女（本人に自覚はない）』を見送り、さて、そろそろ作業を再開しようかと思つた時だった。再びノックの音が響く。

「今日は千客万来だな。……はい」

「失礼します、アヴドウルさん。今よろしいですか？」

「今度は君の方が。花京院」

「今度？ ……方？ 誰か来ていたんですか？」

「ああ。迷える子羊がね」

「はあ。よくわかりませんが……。出直しましょうか？」

「いや、構わないよ。むしろ君の意見も聞きたかった。ちようどいいよ」

「そうですか？ では……。『鏡』を使うスタンド使いについて、なのですが」

「……ああ。わたしもそれが気になっていた」

ひとしきり、花京院と話をしていると電話が鳴った。

「ジヨースターさんだ。そろそろ、夕飯にしようとのこと。」

ちようどいい。今の話は皆にも伝えて注意を喚起しておいた方がいいだろう。」

「そうですね。しかし、ポルナレフ……」

「ああ、思い詰めすぎなければいいのだが……」

「あ、師匠！ さつきはありがとうございます！」

食堂車に着くと、またも彼女ににこやかに礼をいわれる。

「いやいや」

律義さに感心していると、気づいたように花京院が訊ねる。

「ああ、なるほど。あなたが『子羊』さんだったんですね。というか、『師匠』……？」
 「うん。お師匠様だから」

それではまったく彼の疑問の答えにはなっていないだろう……と思うが。

「ですよ？ 師匠！」

「ああ。そういうことらしい。謹んで拜命させていただくことにしたよ」

「ふーん」

「あれ？ 花京院くんも師匠と？」

「ええ。……で、子羊さんはなにを迷っておられたんですか？」

「……それ、私のこと？ えーと、セシリアのこと、と……」

しまった、という顔をするうっかり乙女。それを目ざといこの男が見逃すはずはない。

「……と？」

「……なんでもない。お、己を高める方法について、かな」

その返しにおもわず笑ってしまう。

「ふっ！ ふふ……たしかにそうだ。その通りだな」

「はあ……そうなんですか？」

なら僕も興味ありますね。己を高める方法。どうしたらいいんですか？」

「うっ！ え、えつと……」

困り果てている弟子に助け船を出す。

「だいじょうぶだ、花京院。」

おまえはすでに実践している。いや、しつつある、かな。おそらくな。ふ、ふふ……
「こちらには自覚があるのか否かは不明だが。」

「えっ!? そ、そうなの!？」

「なんです? そのリアクション。だから、もう少し具体的に……」

そしてまたも素直な反応をみせ、つつこみを入れられる弟子。

「も、もういいんだって! あ、そ、そうだ! 師匠のチャイ、すつつごく美味しいよねっ
!!」

苦し紛れにそんなことをいう。

「はあ? チャイ!? ちょっと、アヴドウルさん! 僕飲ませていただいてませんよ!

」

おかげで矛先がこちらを向いてしまう。

「ああ、ええと、弟子特典、というやつさ」

「ふふ、やったー!」

「ええ? ずるいなあ。そんなに美味しいんですか? いいなあ……」

「うらやましかつたら花京院くんも弟子入りしたらいいじゃない」

「……なんか、そういわれると非常に癪です。」

「だいたい、そんな不純な動機で弟子入りなど……けしからん」

「すなおじゃないなあ」

「うるさいな。アヴドウルさんの弟子というのはいいんですよ。」

しかし、今入門するとあなたが姉弟子になってしまう。それが納得いかないんですー」

「なっ！ ひどい！」

そうして小競り合いを始めるふたり。

「わ、私の方が年上なんだよ！」

「精神年齢は僕の方が上です。圧倒的に」

「はあ!？」

傍からみたら犬も食わない『あれ』にしか見えないが……一応止めてみる。

「あーもう、わかったわかった。あとで作ってやるから」

「ほんとですか！」

「あ、じゃあ私も！ もう一杯飲みたいです」

「ふっ、いいよ。では、準備しておくから、食べ終わったら来なさい」

「はいー!」

仲良く返事をする。

「美味しいんだよ。ほんとに」

「それは楽しみだ」

さつきまでしていた口論は何だったのか。現金なものだ。

「おい、保乃、あまり言うな。ハードルが上がるじゃあないか……」

苦笑いするわたしに満面の笑みでいう。

「だいじょうぶですよ。だって絶品ですから。師匠の紅茶!」

「……」

(ふっ……!)

その横顔から、ひとつ気づいてしまったことを隣の男に囁く。

「……はて? おまえがうらやましかつたのは……紅茶だけかな?」

「っ! ……な、なんのことでしょうか?」

すると、普段は大人顔負けのこの男が年相応の表情をみせる。

おかしくてしかたがない。

「どうしたの?」

「なんでもないです!」

「えー？」

そんなふたりの様子をながめつつ、思う。

(まったく、なんて可愛い友人たちだ……)

部屋に戻ったら、とっておきの茶葉の封をあけてやろう。

……そんなことを考えながら。

*

*

*

(ああ、しまった、昼間に寝すぎた。眠れない……)

ベットからもぞりと起き上がり、部屋をそつと出る。

深夜の寝台列車は人気なくシンと静まり返っており、車輪の音だけがゆつくりと響いていた。

最後尾の、景色を楽しむためだろうか。夜風に当たりたいと思い、幌で囲まれているだけになっているこの車両までやってきた。

(ん？ あれは……)

するとそこに見慣れたシルエットが浮かんでいることに気づき、声をかける。

「……ポルナレフさん？」

「ん？ ああ、保乃か。どうしたんだ、もう夜中だぜ」

「ちよつと眠れなくて。散歩です。ポルナレフさんこそ」

「オレは……ちよつと考え事をしていてな」

いつもの陽気な表情とはうって変わったその様子から内容を察する。

(……妹さんのこと、だよね……)

「承太郎が敵から得た情報……鏡を使うというスタンド使い」

ポルナレフさんはポツリポツリと話してくれた。その心の内を。

「おそらく、近々、対峙することになるだろう」

「……はい。」

「やつとだ！ やつとこの時がきたんだ……！ 妹の……、シエリーのかたぎが、やつと

うてるッ!!」

小さく、しかし、力づく、叫ぶ。そのためなら……と考えていることが、痛いほど

伝わってきた。

「妹さん、シエリーさんっていうんですね」

「ああ」

「どんな方……か、聞いてもいいですか？」

そんな様子に、つい、今なら……と、ずっと気になっていたことを尋ねてしまってい

た。

「……シエリーのこと、か。」

しばしの沈黙のあと、ゆっくりと言葉を紡ぐポルナレフさん。

「……そーだなあ。歳は、……生きていればお前と同じ、19だ」

(ああ、それで、あのとき……)

先日、自己紹介をしていた時のあの一瞬の表情の意味を理解する。

「兄のひいき目を抜きにしても器量良しでなー、オレに似てモテモテだったぜ。

ハイスクールでは毎日のようにラブレターもらつてきてな！

……ま、オレが全員ぶつとばしてやってたけど！」

「な、なんてことを……」

「な、なんだよ！ 可愛い妹にふさわしいかどうか、テストしてやってただけだ！

オレの眼にかなわねえ奴なんかに大切な妹をやるかよ！」

記憶の筆笥の引き出しが開けられた、そんな気持ちだった。ため息を漏らす。

「はあ……。世のお兄さん方っていうのはみんなそういう感じなんですか」

「あれ、お前も妹なのか？」

「はい、私はシエリーさんほどモテモテでも可愛い妹でもないですけどね。

兄が、似たようなことをしてくれたことがあります」

「へえ……どんな？」

「ええと、前に……私と、その……お付き合いをしたいという奇特な方がいまして……」

不思議に思いつつ、お断りしたのですが、ちよつと困った事になってしまった……」

「困った事？」

「電話が毎晩かかってくる、手紙とか花とかが下駄箱やポストに入っていたりとか

……ですね。

家族に迷惑がかかりますし、資源やその人の労力や時間も無駄だし……」

やめてほしいと言ったんですが、そうしたら今度は朝や放課後、待ち伏せをされ始めまして」

「まじか……。なんてしつげえやつだ。男らしくねえなあ……」

「別の道を行ったりして気をつけていたんですが、ある日うっかり見つかってしまっています。」

逃げたんですが、あつちは自転車だったから、追いつかれてしまつて」

「はあ?! 大丈夫だったのか？」

「はい。ちょうど通りかかった兄が、おもいつきり、こう……ガツンと……ぼこぼこに……」

「そ、そうか……。まあ、そりゃ、殴るわな。しゃーないわ。オレでも殴るわ」

「それが最たる例ですね。

以来、似たようなことが起こりそうになるたびに兄が脅してくれました。

……まったく、過保護なんですよ。

しかも、そのたびに、おまえに隙があるからだ！ とかいつて叱られるし……」

「そうか……」

「まあ、ほんとは……すごく感謝してはいますけどね。……本人には言っていないけど。それに……」

「それに？」

「……申し訳なくて。……私なんかのために、いつも。

これも……ちゃんといえていないんです。……ずっと。

だめな妹ですよ。ほんとに」

「……。いいんだよ。きつと兄さんはわかってるさ……兄さんだからな。」

「……そうなんですかね？」

「ああ」

「……そっか。そうだと、いいなあ……」

おもいだす。実家を出てからは、とんと会っていない。兄の顔を。今度会うときには、勇気を出して、言ってみようか。

いままでごめんね、と、そして、ありがとうを。

そうしたら、どんな顔をするだろう？ また「なにいつてんだ」なんて叱られるのは
確実だろうけど……でも……。

ちよつと楽しみになってきた。その日が。

いつになるかは……わからないけれど。

*

*

*

きつと愛しい兄さんのことを思い出しているのだろう。夜風を楽しみつつ、やさしい
表情を浮かべる横顔を微笑ましく……そしてすこし羨ましく見る。

するとそれに気づいたのか、あわてたようにオレに言う。

「はっ！ すみません。私の話なんていいんですよ！ つ、続きを聞かせてください！
」

「ああ……」

今夜は、語りたい気分になっていた。なんだかんだいって、おそらくとてもブラコン
なこの娘につられてしまったのだろう。最愛の妹のことを。

「続きか。そうだな……。性格は、外では優等生で誰にでも優しいんだ。

でも、オレにだけはわがままで、扱いひどくてな……」

「へえ……」

「小さい頃とかもひどかったんだぜ。」

オレの飼ってた金魚を砂まみれにして、天ぷらーって……泣けたぜ……」

「ふふ……」

「バレンタインは毎年、試作品の黒焦げチョコ食べさせられるしな。」

ああ、そうだ。こんなこともあった」

「なんですか？」

「オレが中学のときかな。初めて彼女ができたんだわ」

「わあ！すごい！早いですね！」

いや、おめーがおさえただけだろ。というつつこみと、こいつモテるくせになんでだ

……という疑問。同時に湧いたそれはとりあえず横に置いておく。

「で、すつげえ浮かれてたんだよな。オレ」

「そうでしょうね」

「でもあいつは、すつげえ不機嫌でき。ずっと」

「……そうでしょうねえ」

「で、聞いたでしたら、『もう、シエリーのこといちばんじゃないんですよ！ そんなお

兄ちゃんなんて、嫌い!!』つてさ」

「あらら。やきもち焼きいちゃつたんですね」

「笑いごとじゃねえよ。しばらく口も聞いてくれなかつたんだぜ。まいったなあ、あのときは。」

そのくせ、自分に彼氏ができた日にゃ『お兄ちゃんには関係ないでしょ!』だぜ?

ひでーよなあ」

「ふふ……」

「ほんと、困った奴だよ」

「でも、それがまた可愛いんでしよう?」

「……そうだな」

「……可愛い妹、……だった」

「……ポルナレフさん……」

気づいていた。この娘が敢えて、『過去形』を使っていないことは。そして……

「……おまえが、そんな顔するなよ」

「す、すみません……」

おひとよしなやつだ。本当に。

「いーや……、ありがとうな」

「……私も、全力で、お手伝いしますから」

「サンキュー、でも、それは……オレがやる。」

オレがやらなきゃいけないんだ。気持ちだけ受け取っとくよ」

「……駄目です！ たとえ、かたき討ちがうまくいったつて、ポルナレフさんになにかあつたら……！ ぜつたい……！ 絶対に、そんなのシエリーさんは……！」

「……ストップ」

「……っ！」

「わかっている。……だいじょうぶだ。そんなに心配すんな」

「……」

「さ、冷えてきたし、そろそろ戻ろうぜ」

「……はい」

まだなにか言いたげなの様子に気づいて、軽口をたたいておく。

「また眠れなかったら呼びな。お兄ちゃんが添い寝をしてやろう！」

「そっ!! け、けっこうです!!」

「ははは、おやすみ」

「……おやすみなさい」

*

*

*

列車生活も二日目を迎えた。

三泊四日をこの列車で過ごすわけだから、ちょうど折り返し、といったところか。皆で朝食を摂った後、ずっと部屋で読書をしていた僕。しかしさすがに少し疲れてきた。ひとつ軽く伸びをし、時計を見る。昼食までもまだ時間がありそうだ。

読み終わってしまった小説をテーブルに置き、立ち上がる。

外の空気が吸いたくなり、最後尾の観覧スペースのある車両までやってきた。

すると、まばらに見られる観光客らにまじって、見知った顔を発見する。

そのひとは手すりに頬杖をつき、流れ行く景色を眺めていた。考え事でもしているのか、その表情はどことなく憂いを帯びている。

鬱蒼とした森林を駆ける異国の列車。物思いにふける横顔はそれと絶妙にマッチして……。

なぜか急に思い出した。シンガポールでスケッチブックを買い忘れたことを。

「はあ……」

さらにため息までつきだす始末。いい加減、こちらに気づいてくれないものかとおもいますが、その気配はまったくくない。相変わらずのこの警戒心の薄さはなんとかならないも

のか。もう少し観察していたい気もしたが、訓戒として……という建前の、妙案をおもいつく。

むくりと湧いてきた悪戯心に抗えず、僕はそれを実行に移すことにした。

*

*

*

「はあ……」

(……どうしたらいいんだろう……)

うつすらだが嫌な予感がしていた。しかし、それを阻止するための対策はいつこうに出てこない。出るのはなんの役にも立たないため息くらいだ。そのまま特に建設的な考えは浮かばぬまま、しばらく森の木々とにらめっこをしていた。

そんなときだった。

「……わっ！」

「うひやあうっつ!!」

思いもよらない突然の刺激に今度はへんてこりんな声が出る。ついでに心臓も飛び出るかとおもった。

「な、なに?!」

しかし、声が出た、および肩をつつかれた方向をみるも誰もいない。というか、壁だ。「あれ？ 今、たしかに……」

首をかしげていると、また声が聞こえる。

「……はずれ。こつちですよ」

「え……？ あつ！」

そう言われ、振り向くとそこには満足そうにやりと笑う彼のすがたがあつた。

「か、花京院くん!?」

「ふふ、また驚かせちゃいましたかね。」

しかし、なんて声出すんですか……こつちがびつくりしましたよ」

「うつ！ そ、そりや驚くよ！ しかもハイエロファントまでつかつて！」

「おつと、タネはバレていたか。僕もまだまだだな……」

「犯人がわかればさすがにそれくらいわかるよ！」

というか、そんなことよりもつと別のこと反省してよ！ もう！」

「ふつ！ はいはい、ごめんなさい」

「……。ちつともおもつてないでしょ……？」

「いいえ。おもつてますよ。……ちよつとは」

「ちよつとお!!？」

「で、どうしたんですか？　ため息なんてついちゃって」

「むう……」

必死の抗議もやはりさらっと流されてしまう。若干釈然としないながらもさっさと諦めることにする。

「ん？　あれ？　みてたの？」

そして、またそんなところを見られてしまっていたのか……と、浮かんだ疑問を口にする。

「え、ええ、まあ。たまたま、目に入ったんで。

まったく、あなたってひとは全然気づかないんだから。

一応、敵がどこに潜んでいるやらわからない状況なんですから、注意してくださいよ？

ひとりのときは特に」

（ああ、なるほど）

そういう意図でのことか、と理解する。きつと私にそれを戒めさせるためにやってくれたことなのだろう。まったく心配性なのだ。このひとは。反省しつつも、そういうれくなってしまう。

「……うん。そうだよ。ごめん。……ありがとう」

「い、いえ。……それで？」

「あ、そっか」

すこし考えたのち、おとなしく相談しておこうと思い、ぽつりと呟く。

「昨日の夜中にね、ポルナレフさんと会ったの」

「はあ?! 夜中?! なんで?!」

「へ……? いや、なんで、って特に理由は……。昨日私、夜眠れなくて散歩がてらここ

に来たら、ポルナレフさんが先客だった、ってだけなんだけど」

「な、なんだ……。それだけか……」

「？」

「……なんでもないです。つづき、どうぞ」

「……? うん」

「それで、話してくれたの。……いろいろ。妹さんのこと……」

「ああ……」

「……ポルナレフさん、大丈夫かな……?」

「……」

目を閉じ、一瞬の沈黙のあと、彼は言う。

「……そうですね。僕もそれは危惧していたところです。」

思い入れが強ければ強いほど、足元をすくわれ易い。

冷静さを欠き、視野も狭くなる。

ましてや敵はポルナレフのことを知り尽くしている。能力も、性格も……。

その感情を利用して襲ってくるであろうことは目に見えていますからね」

「……だよね」

「しかし彼の意思は固い。他者がどう言っても、詮無き事でしょう。

僕らができるのは……みまもること。それしかないでしょうね」

「うん……」

やはりそうか。わかってはいたけれど……とおもっていたら、違ったようだ。

「……わかってないでしょう？」

「え……？」

「みまもるって……『視て』、『護る』、ですよ。

僕とあなたの得意分野じゃあなかつたですか？」

「あ……」

「だいじょうぶ。みすみすやつらの思い通りになどさせやしない。……ね？」

そういつて、そつと頭に手をのせられ、ぽんぽんとなでられる。

「……っ！」

(も、もう……また、このひとはっ！)

高鳴り出す鼓動。かおが、あつい……。

(……やっぱり……ぜんぜん、ちがう……)

偽者には、ちよつと肩を触られただけであんなに気持ち悪くてしようがなかったのに。不思議なものだ。

(……いやじゃない……んだよね……)

からかわれたって……

……ふれられたって。

まいつてしまう。

それどころか、おおきな、あたたかいてのひらは、とても心地よくて……。

「……うん」

不思議……だけど、なぜなのか……なんて、もういいやという気になるくらい。

(……自然なきもちに、まかせる……かあ)

ならば……許してもらえらるうか？

もうすこしだけ、こうしていたい。

……そう、おもつてしまうことも。

Tiny Drops

「アヴドウル……いよいよインドを横断するわけじゃが……その、ちよいと心配なんじゃ。」

いや、敵のことはもちろんだが。インドという国はこじきとか泥棒ばかりいて、カレーばかり食べていて熱病かなんかにすぐにでもかかりそうなイメージがある……」

「オレ、カルチャーギャップで体調を崩さねえか心配だな」
「ふつ、それはゆがんだ情報ですよ。心配ないです。」

みんな、素朴な国民のいい国です。わたしが保証しますよ」

一行は列車、そして船の旅を経て……シンガポールを発つて約一週間。ようやくたどり着いた。

「……さあ、カルカッタです。出発しましょう。」

インド。この新たな地に。

一層苛烈な闘いの幕明け。そんな予感とともに。

「めぐんでくれよう！」

「ドルチェンジ、レートいいよ」

「ハロー、友達、マリファナ、安いよ……」

「女の子、紹介するよ……ばあじやないよ。べりいヤングね」

「いらん！ は、はなせ！」

「うええ、牛のうんこ踏んずけちまった……チクショー！」

「僕はもう、財布をすられてしまった……」

「恵んでくれないと天国にいけないぞ」

「歌上手いだろ、駄賃、駄賃くれ！」

(……予感、当たっちゃった)

一歩足を踏み入れた瞬間からこれだ。地元の人々だろうか。身動きがとれないほどの数、どこからともなく集まって来て囲まれてしまう。予想通り、激しい闘いが私達を待っていた。村人たちとの。……なんか違うか。

「た、たまらん雑踏だ。アヴドウル、これがインドか？」

嘆くジョースターさん。

「ね、いい国でしょう？ これだからいいんですよ。これが！」

そして余裕の師匠。さすがは師匠？ ……いや、やつぱりなんか違う気もするが。

「要は慣れですよ。慣れればこの国のふところの深さがわかります」

「なかなか気に入った。いいところだぜ」

「マジか、承太郎！マジに言ってるの？おまえ」

「ふっ……！」

さすがに一般人をブチのめすわけにはいかない。逃走、そして昼食を兼ね、大通りに面した一軒の料理店に辛くも飛び込んだ私たち。

毎度の孫と祖父での掛け合いを楽しみつつ、食後のチャイをいただいていた。すると隣の席から溜息が聞こえてきた。

「ふう、インドか、驚くべきカルチャーショック……。なあ？」

「はい。『世界は広い』、ですね、ポルナレフさん」

「ああ。さて、……頃合いだな」

「ど、どうされたんですか？」

正直な感想を述べると、深刻な表情で頷く。驚き、何事か訊ねると一転おどけた調子になる。

「ちよつとトイレ行つてくらあ！」

「な、なあんだ。いつてらっしゃいです」

拍子抜けしつつ、普通に見送ってしまった、この時の私。

「……………はっ！」

ワntenポ遅れてたどり着く、『虫の知らせ』。

あの情報の通り、『鏡』には念の為、注意を払うべき……………そんな風に皆で話していた。
トイレ。もちろん、そこには……………。

「……………」

おもむろに立ち上がる。

「……………保乃宮さん」

……………のを、そつと制される。

「あ……………」

*

*

*

同じくなにかしらの予兆を感じ取ったのだろう。手洗いへと立ったポルナレフの後を追おうとした彼女。しかし場所が場所である。女性に行かせるわけにも……………と代打を申し出た僕はトイレの傍でやつが出てくるのを待っていた。

「……………ぎいにやあー!!」

(むっ!!)

すると、ほどなくして聞こえてきた絹を裂くような(？)悲鳴。

「ポルナレフ!? 大丈夫ですかッ!?」

すぐさまドアを激しくノックすると、飛び出てくる、男。

「か、か、花京院!? う、うわーん!」

「うわッ! だ、抱きつくくなッ!」

そして、とりあえずなによりもまず、パンツをあげろおおッ!」

「あ……そつか。失敬失敬。てへ!」

「てへ、じゃあないッ!……まったく」

彼女に行かせなくて本当によかった。代わりに見たくもないものを拝む羽目になつてしまったが。

「どうしたんですか? いったい……」

「あ、あれ……!」

「あれ?」

怯えるポルナレフの指す方向に目をやる。

「べ、べべべ便器の中に、ぶ、ブタ! ……ブタがッ!」

「はあ?」

すると確かにいた。洋式の……その穴からブヒブヒと鼻を鳴らす生物が。

「なんだ……豚か。てつきり敵かと。紛らわしいなあ。慌てて来て損しましたよ」

「は?! ぶ、ブタだぜ!」

「ええ。……豚ですね」

「……。おまえ、顔に似合わず意外と男前な性格なんだな……」

呟く男を放置し、さらつと現場を観察する。

「ふーん。珍しい方式のトイレですね。エコだなあ」

「! ー、このブタはそのためにいるのか!」

「おそらく。ん? 待てよ。ということ……」

水洗でも汲み取りでもなく、豚に。すなわち、先程食べた豚肉は……いや、考えるま
い。

見たくもないものについて、知りたくもないことまで知ってしまった。なんてこと
だ。おもわず漏れ出たため息とともに、八つ当たりがてらいう。

「はあ、なんならチャリオッツで突いてみればいい。そしたらひっこむんじゃあないで
すか?」

「はあ!?! おまつ?! 自分がやるんじゃあないからって適当なこといなよ!

あ、そーだ! なら、おまえのハイエロファントで……」

「……それじゃあ。ごゆっくり」

加えて、したくもないことをさせられるのは御免だ。聞かなかったことにしてきつさとドアを閉める。

「ま、まて！　ひとりにするなッ！」

慌てて僕に続いて飛び出てくるポルナレフ。

「おや？　続きはいいんですか？」

「ホテルまで、ガマンする……」

「ふっ、それは賢明な判断ですね」

すっかり汗をかいてしまったらしい。彼は廊下に出たところにあつた洗面台で手のついでに顔を洗い始めた。

「フー」

そのときだった。

「!?　はっ！」

急に振り返る。

「いない……き、気のせいか……」

「ポルナレフ？」

「いや、今、窓の外に、なにか異様なものがいたような気がした、が……」

「なに!？」

しかし、窓の外は雑踏に曇り空。ただそれだけだった。

「なにも……、いないが……」

「だ、だよな。スマン。無理もねえか。便器の中にブタがいたんだからな。そりゃあ窓の外に怪物の幻でもみるか……」

いいつつ、向き直るポルナレフ。が、またも叫ぶ。

「な、なにい!？」

再び振り返る。鏡を見る。を繰り返す男。

「い、いない、やはりいないッ! い、いや! ……いる……!」

「お、おい……?」

「な、なんだ?! こいつは?! 鏡の中だけにッ! 見えるッ!」

「か、鏡……だと? まさかッ!」

見ると、本当に、いた。包帯を巻いた、ミイラ男のような『怪物』が。鏡の中のその姿はゆっくりと窓を開け、近づいてくる。

「なにイッ!!」

そして『それ』はナイフを取り出し、こちらへ向ける!

「な、なにかやばいッ! 『銀の戦車』!!」

シルバーチャリオッツ

すぐさまスタンドを出し、刺突を繰り出すポルナレフ。
バラバラに碎け散る、『鏡』。

「ち、ちくしょう！」

急ぎ窓を開け、改めて二人で外を見る。……現実の。

しかし、雑踏は行き交う人の波であふれていた。

「ほ、本体は、どいつだ……？」

「こ、この人の数！ く、くっそおー！」

「ま、待て！ ポルナレフツ！！」

飛び出て行くこうとするポルナレフをなんとか諫める。

「どうした!? ポルナレフ、花京院」

「何事だ!?」

そこで音を聞きつけたのか、皆が駆け寄ってきた。

「今のがッ！ 今のがスタンドとしたなら……ついに！」

男は叫ぶ。

皆に、そして自分に言い聞かせるように。

「ついにやつがきたぜッ！」

「承太郎！ おまえが聞いたという、鏡を使うというスタンド使いが来たッ！」

「！」

「オレの妹を殺したドブ野郎ーッ！ ついに会えるぜ！」

*

*

*

すぐに全員で店外に出る。しかし、件のスタンドの本体らしき人間は見あたりなかった。というか人が多すぎてわからない。

辺りをうかがっていると、しびれを切らしたかのような不穏な声が響く。

「……ジョースターさん、オレはここで、あんたたちとは別行動をとらせてもらうぜ」

「！」

「妹のかたきがこの近くにいるとわかった以上、もうあの野郎が襲ってくるのを待ちはしねえぜ。」

敵の攻撃を受けるのは不利だし、おれの性に合わねえ……こつちから探し出してブツ殺すッ!!」

「……相手の顔もスタンドの正体もよくわからないのか？」

ジョースターさんが眉間に皺を寄せる。

『両腕とも右手』とわかってれば十分！ それにヤツの方もおれが追っているのを知っている。

ヤツもおれに寝首をかかれねえか心配なはずだぜ」

そう息まくポルナレフさんにむけて、一步踏み出したのはこのひとだった。

「こいつはミイラとりがミイラになるな！」

「!？」

「ポルナレフ、別行動はゆるさんぞッ！」

「なんだと？ ……アヴドウル、おめー、オレが負けるとでも？」

「ああ。敵は今！ おまえをひとりにするためにわざと攻撃してきたのがわからないのか！」

正論。それが常に万人にとって正しく、受け入れ易いものであるならこの世に争いなど起きないのかもしれない。吐き捨てるようにいう。

「……いいか、ここではつきりさせておく。オレはもともとDIOなんて、どうでもいいのさ。」

香港でおれは復讐のために行動をとるとするとことわったはずだ……

ジョースターさんも承太郎もそれは承知のはずだぜ。

オレは最初からひとりき。ひとりで闘っていたのさ」

「……」

(そんな……)

全員が息をのむ中、師匠が叫ぶ。

「かつてな、男だ！ D I O に洗脳されたのを忘れたのか！

D I O がすべての元凶だということを、忘れたのかッ！」

「てめーに妹を殺されたおれの気持ちちがわかってたまるかッッ!!

……以前D I Oに出会った時恐ろしくて逃げだしたそうだなッ！

そんなこしぬけにおれの気持ちちはわからねーだろーからよオ!!」

「! ……なんだと?」

逆に返された挑発的な言葉に、おもわず掴みかかる。

「さわるな……香港で運よくオレに勝ったってだけで説教はやめな！」

「きさまー！」

「ほおー、プツンくるかい！ だがな、オレは今のてめー以上にもっと怒ってることを

忘れるな。あんたはいつものように大人ぶってドンとかまえとれや！」

「(い)っ……!」

振り上げられる拳。しかし、それは横から制止される。

「ジョースターさん……」

「ふん……。あばよ……」

そして、去っていく。振り返ることもなく。

「もういい、やめろ。……行かせてやろう。こうなつてはだれにも彼をとめることはできん……」

首を振るジョースターさん。目を伏せる師匠。

「いえ、彼に対して幻滅しただけです……。あんな男だったとは思わなかった……」

「……」

残された私たちを、重苦しい空気と沈黙が包む。

思い出す。列車で妹さんのことを話していたときのポルナレフさんの様子を……。あの、強い意思を。

そして……

——たすけて——

——わたしの、せいなの——

「……」

(たしかに、わからないかもしれない。でも……！)

躊躇いつつも、口を開こうとしたときだった。このひとが先に口火を切る。

「……しかし、ほおっておくわけでは、ないんでしょう？」

花京院くん。そして、ジョースターさんはいう。

「ああ。手分けして彼を探して、見張るんだ」

「……やれやれ」

言葉とは裏腹に、にやりと笑う承太郎君。

「……はいっ！」

負けじと、つよくうなづく。

「バレたら反発は必至じゃろうからなあ……あやつの性格的に。こつそり手助けするしかないじゃろ。」

どう分かれるか……能力のバランス的には……

「……この町はわたしの庭のようなもの。わたしはひとりで大丈夫です。先に行きます！」

「お、おい、アヴドウル！」

思案するジョースターさんの傍ら、抑えきれない焦燥に押し出されるかのように、言うが早いか、あつという間に路地裏を駆けて行く。

またも嫌な予感がした。師匠の、あの思い詰めた表情に。

(……いけない！)

すると、また彼に先を越される。

「……この状況ではアヴドウルさんも心配です。僕、追いかけてもいいですか？」

「わ、私も同感です！ 師匠と言えど……」

「……うむ、そうじゃな。じゃあ頼んだ。わしと承太郎は逆から探す。

君らもくれぐれも無理をするんじゃないぞ！」

「はい！」

*

*

*

いつのまにか雨が降っていたようだ。

地面がぬかるんでいて走りにくい。しかしそれをまったく意に介さぬように、隣を全力で駆けつつ彼女から僕はひとつの相談を持ち掛けられた。

「セシリア、飛ばしといたほうがいいかな？ でも……」

セシリアは同時に二人は護れない。ポルナレフか？ アヴドウルさんか？ 確かに

どちらが適切なのか、今のところわからなかった。

「いえ、どういう状況に陥るかわからない。むしろ待機状態のほうがいいかもしれませ
ん。」

いつでも誰にでも使えるように。とりあえず方向はわかりますし」
「そうだね。了解！」

迷路のような路地の角をいくつもまがり、比較的大きな通りに出た。

「いた！」

みつけた仲間たちの視線の先。西部劇のガンマンのような男の手に握られている、銃。あれは、本物ではない……スタンダードだ。と気づくと同時にふたりに向け銃弾が放たれる。

「どけッ！」

それを焼きつくさんとし、ポルナレフをかばうように押しつけ魔術師マジシャンズレッドの赤を構えるアヴドウルさん。

しかし、続いて僕達の目に、あまりにも衝撃的な映像が飛び込んでくる。
後方にある大きな水たまりにナイフを構えたミイラ男のような怪物が現れ……

「……あッ!!」

「しまった！　せ、セシリア!!!」

……アヴドウルさんの背中を、刺した。

「ぐっ……………」

たまらずよろめくアヴドウルさん。護ろうと放たれた鳥の羽ばたきもむなしく……
「だ、弾丸がッ!!」

その眉間に、無情にも凶弾が直撃する。

「な………にい………?!」

「アヴドウルさんッ!」

「ま、間に………合わ、なかつ、た………し、師匠っ!」

ほんの一瞬の出来事だった。

倒れ臥す彼の額からは、夥しい真っ赤な鮮血がとめどなく流れ落ちていた。

「ほお! ……こいつはついてるぜ!」

このおれ『皇帝』エンペラーホルホースの『銃』……

そして『吊られた男』ハングドマンJ・ガイルの旦那の『鏡』はアヴドウルの『炎』が苦手ですよ。

一番の強敵はアヴドウルと思ってたから……ラッキー! もうこわいもんはねえ

ぜッ!」

「アヴドウルさんッ! ば、バカなッ!」

「師匠っ!」

急ぎ、彼女とともに倒れた彼のもとへ駆け寄る。

対称的に、こちらに背を向けるポルナレフ。

「……ちっ！ 説教好きだからこーなるんだぜ。なんてザマだ」

その台詞に、つい頭に血がのぼる。

「な、なんだと？ ポルナレフ……」

「だれが助けてくれとたのんだ。」

おせっかい好きのしゃしゃり出のくせにウスノロだからやられるんだ……。

こういうやつが足手まといになるからオレはひとりでやるのがいいといったんだ」

「な、なんてことをっ！」

「た……助けてもらっておいて……なんてヤツだ。」

が、次の瞬間、ふたりして気づく。

「はっ！」

雨はもうとつくに上がっている……にもかかわらず、だ。

「……迷惑なんだよ。」

男の足元に降り注ぐ、大粒の雫に。

「自分のまわりで死なれるのはスゲー迷惑だぜッ！ このオレはッ！！」

振り返る、その眼は、頬は……溢れ零れる涙で濡れそぼっていた。

「し、ししよう……?」

「け、けがをしているだけに決まっている……かるいけがさ……ほら、しゃべりだすぞ……」

今にきつと目をあける……アヴドウルさん、そうでしょう? ……起きてくれるんでしょう?

お……おきてくれ! たのむ……アヴドウルさん!!」

「……」

しかし、返事はなかった。祈るような気持ちで腕をとる。

「……脈が……、ない……」

「そ、そんな。……そんな!!」

「バカな……! か、簡単すぎる……あっけなさすぎる……」

「う、そ……?」

「……くっ……!」

項垂れる僕らの耳に届く雑踏を踏みしめる足音。

(……はっ! ポルナレフ……!)

まっすぐに敵を見据え、歩みを進めていく。

(いかん！)

あまりのことに放心してしまっている彼女に声をかける。

「……仁美さん、今は気を、しっかりもって」

「はっ！ う、うん。ごめん！」

「あなたは……アヴドウルさんを護つて。そしてジョースターさんたちにこのことを。

いいですか？ 必ず、『あなた』が、ふたりに伝えてください。……意味、わかります

よね？」

「……。花京院くんは？」

「僕は、ポルナレフを連れて、敵を引き付けます。

そして、奴らのスタンドの秘密を暴いて、必ず……！」

「ッ！ でも！」

「だいじょうぶ。……僕を、信じて。

そして、頼みます、アヴドウルさんを。

……僕も、あなたを信じていますから」

「……。

わかった。……信じる。

だから……、ぜったい……気を、つけて……」

*

*

*

「ま、人生の終わりつてのはたいてーの場合、あつけない幕切れよのおー。

さよならの一言もなく死んでいくのが普通なんだろーねえ。

ヒヒ、悟ったようなことをゆーよーだがよおー」

「……………」

敵のへらへらと舐めきつたその態度と台詞に血液が沸騰しそうになる。

そんなオレに矢のような一言が突き刺さる。……………花京院だ。

「ポルナレフツ！ ……相手の挑発にはのらないでください。まだわからないのですか？

アヴドウルさんは言った……………『ひとりで闘うのは危険だ』と。

しかし貴方はそれを無視した……………。

……………貴方は相討ちしてでもかたきを討つと考えているなツ!!」

「……………オレに、どうしろというのだ……………」

「アヴドウルさんはそれを心配して、貴方を追って来てこうなった……………

勝てるみこみが見えないうちは戦うな！ こいつらのスタンドの性質がよくわから

ない……

「ここは一時ひくんだッ！」

(……な、んだと……)

「……アヴドウルは背中を卑劣にも刺された。……妹は……無抵抗で殺された……

この『無念』を！ おさえて逃げろというのか!?」

「……自分も死ぬような戦いはやめるんだッ！ アヴドウルさんはそれをいつているのだッ！」

(ぐっ……)

頭では、とつくに理解していた。しかし……。

「カモオーン！ ポルポルクうーん！」

(……どこまでも瘤に障る……)

「ポルナレフ！ ゆっくり僕の所までもどつてくるんだ！ あのトラックで、逃げる！」

「野郎……！」

「ポルナレフ！」

「……はあ、はあ……お、おさえろと、いうのか……。ち、ちくしょう、わ、わかっ……」

「クク……おい……ポルナレフ……」

どうにか抑えきろうとした、そのときだった。

傍の建物のガラス窓……そこに、最も許せぬ人間……そのスタンドの姿が映る。

「！ またヤツが!! ポルナレフ!!」

振り返るが、またも実際には見えない。

近寄ってくるスタンド。

そして最も聞きたくない相手から最も聞きたくない言葉を聞かされる。

「……アウドウルはおまえのために死んだ。アウドウルに借りができたってことかなあー。」

おまえがいなけりや、死ななかつたかもなあ。ククク、ククククク!

「や、野郎ー! 本体はどこにいやがるツ!」

「ヒヒ……」

「ポルナレフ、おちつけッ!」

なおも、ヤツは吐き続ける、卑劣極まりない、台詞を。

「でも、悲しむ必要はないな。喜ぶべきだと思うぞ……すぐに面会できるじゃないか……」

おまえも死んで、あの世で……マヌケなふたりといっしょにな……クク……」

「ぐっ……」

「おまえの妹はカワイかったなあ、ポルナレフ……妹にあの世で再会したなら聞かせてもらおうといい……。どーやってオレに殺してもらったかをなあああーッ！」

「!!」

「ポルナレフ、挑発にのるなアーツ!! さそっているんだアーツ!!」

花京院の必死の叫びは耳に入ってはいしたが、届いてはいなかった。

無理だった。限界だった。抑えることなど……不可能だった。

「野郎オツッ!!!」

チャリオツツで窓ガラスをバラバラに砕く。

しかし無駄だった。破片の中でヤツが不敵に笑う。

「ククク、お前のチャリオツツにわが『吊られた男』は切れない……おれは鏡の中にいる。おまえのスタンドは鏡の中に入れない……だからだッ! クク、くやしいかあー、くやしいだろーなああー!」

「ぐうっ!」

「おい、ホルホース、撃て……このアホをしとめるとしよう!」

「アイアイ! サー!」

背後から弾丸がオレに向かってくる。

軌道が変わる、スタンド銃の弾丸。

そして、ナイフを構えたガラスの中のヤツも同時に襲い掛かってくる。

「死ねッ、ポルナレフ！」

（くそっ!!）

ここまでか、と思いかけた瞬間だった。

「エメラルド・スプラッシュ！」

あの男の声と、きらりと輝く緑色のしぶきが目の前に広がる。

「!!」

「なに!？」

激しい衝撃。ふつとぶ、オレ。

「うぐあッ！」

「なんとッ！ポルナレフを！」

「うちやがったッ！」

敵とともにあつげにとられた、ぶっ飛ばされたオレのそばに軽トラが滑り込み、車内にひきあげられる。

「ポルナレフの命を助けるためかッ!! 花京院とやら、やりおるぜッ！」

勢いそのまま猛スピードで走り去り、辛くもその場を逃げ切ることができたのだつた。

*

*

*

小さくなっていく車ターゲットに照準を合わせつつ呟く。

「ちっ、射程外だ。逃がしたか……」

そして、気づく。『相方』がいないことに。

「ん？ 旦那……追ったか。とことんポルナレフを始末する気だな……ヒヒ」

(さ、おれはアヴドウルに一応とどめをさしてから、旦那を追うか……)

万一のことがあつたらD I Oの野郎に何を言われるかわからない。念には念を……
 というやつだ。

エンペラー
 皇帝を、構える。

しかし、倒れ臥したアヴドウルのまえに、立ちはだかるひとりの女がいた。

「……お嬢さん、どいてくれないか」

「嫌です」

「おれは世の中の女性すべてを尊敬している……手荒な真似はしたくない……さあ
 手を伸ばした瞬間だった。」

「……アヴドウルさんに、触らないで!!」

眩い桃色の光にはじきとばされそうになる。

「チツ、君もスタンド使いか！ 仕方ない……気絶だけしてもらおうか」
出力を弱めた弾丸を発射する。

「……させない……！」

だが、それはすべて女の身体を包み込む障壁にはじかれてしまう。手加減したとはいえ……という驚きとともに理解する。

「なに!? ……そうか、お嬢さんが噂のジョースター一行の『守護者』か！」

やつらの中に、そのような能力者がいるらしい……という報告は受けていた。

おもわず心中満面の笑みを浮かべる。

女……それは便利なものだ。

愛してる。そんな適当な甘い言葉を少し吐いておくだけでいい。

手懐けておけばなんでもしてくれる。命もおしくないって風に。

こいつもだ。この能力……。

利用するのに、ここまで適した女はめったにいないだろう。

猫なで声でいう。

「こりゃあいい。この出会いにおれは運命を感じたよ！」

……君、あいつらなんて裏切って、おれと組まないか？」

「!」

目を見開く、女。ゆっくりとおれに問いかける。

「……貴男、自分が何をいつているのか……理解していますか……?」

貴男は、私たちから、アヴドウルさんを……、大切な仲間を、奪った……。

許さない……許せるわけがないツ!!

そんな人間の誘いに、私が耳を貸すと、そんな可能性が少しでもあると、思うんですか?!

ありえない! なめるのもいいかげんにして下さい。

……二度と、言うなツ!!」

燃えるような瞳でこちらを睨みつけてくる、女。

(ちっ、さすがに今は無理、か。まあいい)

「おっと、そんなに怖い顔をしないでくれよ。

とはいえ、護るしか能のない、攻撃性皆無の君のスタンドなど、恐るるに足らないがね」

「!!」

牽制しつつアヴドウルの様子を横目で確認する。あの出血量、とても助かるまい。ほおっっておいて問題ないだろう。

「まあ、考えておいてくれ。君とおれは相性がいい！ 最高にな！ ではまた、お嬢さん」

「くっ……!!」

*

*

*

荒野を走る、一台のトラック。

(……なんて、ことだ……)

オレの頭にのぼりきっていた血液もようやく下におりてきた。

ずっと無言を貫いている、運転席の男に言葉を発する。

「……すまねえ、花京院」

「……」

「お、オレは……オレは、妹のかたきをとるためなら、死んでもいいと思っていた……」

「……」

「でも、わかったよ。アヴドウルの気持ちがあわかったよ……。奴の気持ちが無駄にはしない。

……生きるために闘う……！」

すると、やつとこちらをちらと窺い、男は言う。

「……、ほんとにわかったのですか？」

「ああ……。ッ!？」

その瞬間だった。顔面に衝撃が走る。

(ひ、肘鉄ッ……!?)

「……それは仲なおりの『握手』のかわりだ、ポルナレフ」
容赦のない一撃に、くらくらしながらも、こたえる。

「ああ、サ、サンキュー。花京院……ブ……」

「今度やつらがおそってきたら……」

そして、力づよく、言い放つ。

「……僕たちふたりが倒すッ！」

その瞳に、熱く、光るものを浮かべながら……。

いつか、また。

鼻をつまむ。

(まだ、いてえ……)

悠々とハンドルを操作する、運転席の男の容赦ない『仲直りの肘鉄』によって、しばしの間だくだくと流れ続けていた鼻血。それがやつと止まったことを確認しながら、オレは気がかりを口にする。

「そういえば、保乃、おいてきちまったな。大丈夫だろうか……」

「だいじょうぶです。彼女にはアヴドウルさんのことを任せてきましたから」

(お……?)

きつぱりと言い切る、その横顔をつい凝視してしまふ。その視線に気づいたのか、訝しげに問われる。

「なんですか?」

「いや、意外だと思って」

過保護な(あの娘に関する)ことへのみ度が過ぎるほどの、だ。ちなみに当初、隠しているわけでもなんでもなく本当に恋人同士はおろか、つい最近知り合ったばかりだと聞

いたときには耳を疑った)この男が。めずらしいこともあるものだ。

「……うるさいな。なにがだよ。だいじょうぶだつて言っているだろう……!」
前言撤回。どうやら自分にも言い聞かせているようだ。やむを得ず、で、やはり心配なのだろう。

「そうか……そうだな。すまん。あいつにもあとで謝つとかにやいかな」

「そうしてください。まあ、その前にやつらを何とかするのが急務ですがね」

「ああ、もちろんだ」

先程の襲撃を思い返す。

「しかしオレはたしかに……たしかにヤツを剣で突いた。だが命中はしなかった。

手ごたえはなかったんだ」

「……」

「やつスタンド『吊ハングドられた男』……」。

鏡が割れても小さくなった破片の中からまた攻撃してきた。やつは鏡の中で鏡の中のオレをおそう!

オレのスタンドは鏡の中には入れない。鏡の世界なんてどうやって攻撃すればいいのだ?」

バックミラーが目に入る。これも鏡かと思った瞬間、おもわず捻りちぎって窓の外に

投げ捨てていた。

「……………くっそおー！」

そんなオレに向け、隣から冷静極まりない回答が返ってくる。

「ポルナレフ、鏡の中とか鏡の世界とかさかんにいつてますが、鏡に『中の世界』なんてありませんよ。

……………ファンタジーやメルヘンじゃあないんですから」

「なに言ってるんだ。おめーも見ただろ。鏡の中だけにして、振り向くといねーんだぜ」

「ええ。しかし鏡っていうのは『光の反射』。ただそれだけです」

「おしえてもらわなくなっちゃって知つとるぜーッ。いいか！ この場合だぜ！ 今の場合をいつとるんだよ！

『スタンド』があるなら『鏡の中の世界』だってあるだろ！」

「ないです」

きつぱりと言い放つ。なんて頭の固い……………というか、これまた意外とロマンのない男だ。

「おめーなあ……………」

それを言うならオレたちスタンド使いの存在自体、ファンタジーだろうという話なのだ。

そんなんじや女の子にモテねーぞ……なんて言ったら再び肘鉄が飛んできそうなのでやめておく。

まあ、そういうところがいい！　なんて、変わった女の子もいるかもしれないけれど。

……いや、いるようだけれども、か。なんか腹が立ってきた。

半ばあきれているオレをよそに、この唐変木は続けた。

『吊られた男』の謎はきつとその点にあると思うんです。

スタンドはスタンドで倒せるのなら！　われわれにはまだ知らぬヤツの謎……はっ

!!

「そこで、なにかに気づいた様子で、後ろと前を見比べつつ、叫ぶ。

「ポルナレフツ！　ハンドルのメッキにヤツがいるツ！　ヤツは追いついているツ！

」

「なにツ！」

言うやいなや、荷台と運転席を仕切っているガラスが音を立てて破壊される。

「あぶないツ！」

ヤツを振り払おうと、急ブレーキを踏む花京院。車体はバウンドしたのち一回転してしまい、激しい衝撃がオレたちを襲う。

「うぐ……」

命からがら、ふたりとも横転した車体から這い出る。

「だ、だいじょうぶか！　花京院！」

「う、む、胸を打ったが、だいじょうぶだ」

「ハッ！」

キラリ、キラリとと光るものに目がいく。そこには……

……ナイフを構える、ヤツの、姿。

「うおおああーッ！　チャリオッツ!!」

あわてて、切り刻む。

「ちっ、ちくしようッ！　花京院ッ！　映るものから逃げるんだッ！」

車から離れ岩陰に身を隠しながら、恐るべき事実を報告する。

「わ、わかった……いい、いま、見えたんだ」

「な、なにがだ？」

「やつは鏡から鏡へ！　映るものから映るものへ！　飛びうつって移動しているッ。

反射を繰り返してここまで追ってきたんだ……！」

「反射？　つまりやつは『光』かッ！　やつの正体は『光』のスタンドということか?！」

「花京院！　やつは今車のバンパーにいた！　バンパーからなにかに反射して移動するにちがいない！」

映るもののそばへは行くなッ！ 体からも映るようなものははずせ！ 制服のボタ
ンもとれッ！」

慌ただしく対策を講じているところへ、一人の少年が近づいてくる。

「お兄ちゃんたち、車の事故はだいじょうぶ？お薬もつてこよーか？」

「おい小僧！ 向こうへ行けッ！」

親切心からなのだろうが、かまっている暇はない。なによりも危険だ。追い払おうと
する。

「はっ！ ま、まさか……………」

なおも近寄ってくる、少年。

「ねえ、車めちやめちやだし……………血がでてるけど……………けがは……………」

「えっ?!」

その澄んだ、瞳……………

「だいじょうぶ？」

そこに、ヤツが、いた。

「ククク」

「や、野郎ッ！」

「子供の目の中に……………」

「ククク、どうするね！　まさか、このカワイイ子供の目をその剣でつぶすといふのかね？　ポルナレフ。」

ククククク……」

奴の手が迫る。なす術もなく、首を掴まれ、締め付けられる。

「うぐぐ」

「ポルナレフッ！」

「ついにとらえたぞ。もうのがれられん……子供の目をつぶさんかぎりなあ！　ククククク……」

絶体絶命。そんなオレの頭にひとつの考えが、浮かんだ……。

*

*

*

「なんて卑劣な男だ！　アヴドウルさんをひきようにもうしろから刺し……
そして今！　子供を攻撃できないのを知って利用する……ゆるさん！」

「ククククク……」

勝ち誇ったかのようにほくそえむ敵に齒噛みをする僕。しかし、首を絞められている

ポルナレフはその状況と対照的に、にやりと笑うとこんなことを言い出す。

「おい、花京院……この場合！　そういうセリフをいうんじゃないか」

「……は？」

「いいか？　こういう場合、かたきを討つ時、というのは今からいうようなセリフをはいてたたかうんだ。

『我が名はジャン・ピエール・ポルナレフ。我が妹の魂の名誉のために！』

我が友アヴドゥルの心のやすらぎのために……この俺が貴様を絶望の淵へブチこんでやる』

J・ガイル……

……こう言つて決めるんだぜ！」

「！」

それとともに、チャリオッツを出すポルナレフ。

「許せ小僧！　あとでキャラメル買ってやるからな！」

蹴り上げる。地面の、砂を。

「うああーッ、目がーッ！」

たまらず目を閉じる少年。次の瞬間、ヤツの位置に気づき驚愕する。

「ほ、ポルナレフの瞳に！」

「……原理はよくわからんがこいつは光なみの速さで動く。普通ならとても剣では見切れねえスピードさ。だが子供の目がとじたなら、こいつが次に移動するのはおれの瞳だろうということとはわかっていたのさ。だからこいつがおれの目に飛び込んでくる軌道はわかっていた……」

レイピアをしまう、チャリオッツ。

「その軌道がよめれば、剣で切るのは……」

瞳の中の、ヤツの姿が……

「……たやすい!!」

二つに割れる!

「ギイヤアアあ!」

そして、悲鳴が聞こえてくる。少し離れた、村の集落から。

「あそこにいるな! 本体! J・ガイルの野郎……なぶり殺してくるぜ!」

「野郎! ついに! ついに会えたな、J・ガイル……」

「はあー、はあー、はあー……」

村の入り口には、傷を負って苦しそうにうめく男の姿があった。

「おれの名はジャン・ピエール・ポルナレフ。」

「はあー……」

「貴様の鏡のスタンドの秘密は見切った！」

ここにいる花京院と、保乃、そして……アウドウルが来てくれないければ……

それがわからずためーにやられていただろーがよ」

（ポルナレフ……これでようやく、か。積年の相手、両手が右手の……仇討ちを果たせるのだな……）

そんなことを考えていた。

「はあー、はあー……」

（ん……？ はっ！ ち、ちがう!!）

一手遅れて、重要なことに気づく。

目のまえの、この男の左手は……『左手』だ、と。

「ポルナレフ！それは両右手の男じゃあないぞ！ J・ガイルじゃあない！」

その一瞬の隙を突かれた。

「ぐっ！」

ポルナレフが小さくうめくと共にうづくまる。見るとどこからか飛んできたらしいナイフがポルナレフの背中に刺さっていた。

「な、なにー！ー！」

「ポルナレフ！」

「ククク、ここだ……」

「うう……」

「うツ、これは！」

嘲るように笑いながら物陰から一人の男が出てくる。

「バアカめー、おれがJ・ガイルだ！」

その手は、まさしく両方が、右手だった。

*

*

*

「ククク。そいつは、ただのこの村にいたこじきだよ！」

おれのキズと同じところにちよいとナイフで切れ目をいれておいたのさ。まんまと

ひっかかったな」

（やられた……くそっ！）

背中への傷も確かに痛いですがそれよりも敵の術中に嵌ってしまった、その憤りの方が遙かに勝っていた。

「く……うう！ きさまツ！ くらえ！ 僕のエメラルド……！」

どこまでも卑劣な男に、花京院がハイエロフアントを出し、エネルギーを練る。

「へっ、待ちな！　まわりをよくみる！　……おおい、集まれ！　この方たちがお金を恵んでくださるとよおー！」

「なにッ！」

その声に呼応して、ぞくぞくと集まってくる。この村の乞食たち。

「そして……またまた！」

「!?」

「これがどーいうことか理解したか？」

あつという間に大勢に取り囲まれる。

「おお！」

「ありがてえ！」

「めぐんでくださいえ！」

オレたちを見る、目。……たくさんの……目……。

「ハッ！」

（そうか、しまったッ！）

ヤツの意図に気づくも遅かった。

「おれのスタンドを見切っただとお？　バカめッ！　おれは自分の弱点はとつくに知っ

ていたわ！

映るものを多くし、軌道がわからなくなればもはや弱点はないッ！」

「くっ、お、オレたちをみつめるな……！」

「ククククク、ポルナレフ……青春を犠牲にしておれを追い続けたのに。

ああーあ、途中で挫折するとは、なんとつまらない、さびしい人生よ……。

そしてこのJ・ガイル様はおめえの妹のようにカワイイ女の子をはべらせて楽しく暮らしましたとき。

……ククク、なきわめくのがうまかったな。おめえの妹はよ。へへへ……」

下卑たその言葉に、　　またも血管がプチ切れそうになる。

「や、野郎おー！」

「ククク、死にな……」

しかし、それを制される。この男に。

「ポルナレフ、そのセリフはちがうぞ。」

「！」

「あだを討つ時というのは『野郎』なんてセリフを吐くもんじゃあない。こう言うんだ。

『我が名は花京院典明。我が友人アウドウルの無念のために。』

左にいる友人ポルナレフの妹の魂のやすらぎのために……」

つい先ほど聞いたようなその台詞とともに、おもむろにポケットから取り出す。

「『死をもってつぐなわせてやる』」

キラリと光る、一枚の……

「拾った者にこの金貨をやるぞッ！　顔が映るほどピカピカの金貨だ！」

「！」

「え?!」

「おおおおおーッ！」

「なああーるほど、花京院！」

「ヒッ！」

高く舞い上がる、金貨。

「ポルナレフ！これでみんなの目が一点に集まったようですよ……」

「ありがとうよ花京院……」

「こいつの目にいるな！映ってる目に砂をかけて閉じさせると……！　瞬間！」

相棒で、その軌道を縦に切り裂く！

「ぎにやあーあああ！」

「泣きわめくのがうまいのはてめーの方だなJ・ガイル！」

……これからてめーは泣きわめきながら地獄へ落ちるわけだが……

ひとつだけ地獄の番人にやまかせられんことがある……それは……」

『針串刺し』の刑だッ!!　この瞬間を長年待ったぜッ!」

「ヒエヒエヒエ!!」

鉄柵に逆さ釣りにし、突きの嵐をくらわせる。

「あとは……閻魔様にまかせたぜ……」

「これが本当の『吊られた男』か……真底クズ野郎だったな」

*

*

*

「待ちな!　追ってきたぜ!」

目的は果たした。ポルナレフとともに、村から立ち去ろうとしたときだった。

「ホルホース……」

『皇帝』のカードの暗示の、……もう一人の、クズ野郎。

「観念しな……てめーらの人生の最期だ!　最期らしくオレたちにかかってこいよ!

コラ!

なあ、J・ガイルの旦那!」

「おめでたい男だ。J・ガイルが死んだことにまだ気づいてないでヤツのためにガラス

をまいてますよ……」

暫く長々と口上をたれながら、そのスタンドの銃で、周辺のガラスを砕いていた。が、しかし、ようやく異変に気付いたようだ。

「あ、あれ……？」

冷や汗を浮かべつつ辺りを見回す。

「聞いているのかい……?!」 J・ガイルのだんなよお！」

しびれを切らしたポルナレフが親切にも教えてやる。

「野郎ならもう聞いてねーと思うぜ。ヤツはとつてもいそがしい！」

……地獄で刑罰を受けてるからなあ！」

「お、おいおい、ハツタリかますんじゃねーよ。ポルナレフ。じょーだんきついで、ヒヒ

……」

「2〜300M向こうにあのクズ野郎の死体がある……見てくるか？」

「……。……よし、見てこよう！」

「あつ！ 野郎！ 逃げる気か?！」

一人ではかなわないとみるやたちまち逃げ出す男。

「ぎゃひい!!」

それが、再びこちらへとふつとんでくる。

「ああつ！」

そこには頼もしい、三人の仲間の姿があった。

「ジョースターさん！ 承太郎！ 保乃宮さん！」

「……アヴドウルことは彼女から聞いた。遺体は、簡素ではあるが埋葬してきたよ
！」

悲痛な表情のジョースターさん。目を伏せる、ふたり。

（……駄目……、だったのか……）

一縷の望みを抱いていたが、それがもろくも崩れ去る。

「……ちくしょう……。」

奥歯を噛みしめるとともに、元凶を皆で取り囲む。

「卑怯にもアヴドウルさんを後ろから刺したのは両右手の男だが、直接の死因はこの男の弾丸だ。」

「こいつを、どうする……?」

僕の問いかけにポルナレフが言い放つ。

「おれが判決を言うぜ。……死刑!!」

チャリオッツがレイピアを構えた。そのときだった。

「……なっ!？」

「お逃げください！ ホルホースさま！」

見知らぬ一人の女性が飛び出してきて、攻撃させまいと必死にポルナレフにしがみつく。

「な、なんだあ、この女!? どこからでてきた!？」

「私は愛するあなたのことが生きがい！ あなたのためなら……。お逃げください！

はやく!!」

「は、離せ……!!」

すると、このホルホースという男、クズかつまさにゲスの極み、といったところであった。

「よく言ってくれた、ベイビー！ おめーの気持ち、ありがたく受け取って生き延びるぜ！

逃げるのはおめーを愛しているからだぜ、ベイビー！ フォーエバーにな！」

言いながら、馬に飛び乗る。

「……最低な男ですね」

それを見て、珍しく、吐き捨てるように呟く彼女。このひとが他人を悪し様に言うのを聞くのは初めてだった。敵といえど。

そこに聞き捨てならない捨て台詞が聞こえてくる。

「おっと、そうだ！ 『守護者』のお嬢さん！ おれのものになれって話、考えといてくれよ！！」

「はあ!?」

（……な、ななな、なにイイ!?）

やはりひとり残してなど行くべきではなかったと、激しく後悔しつつ、恐る恐る彼女の表情を窺う。

「……ありえない。二度と言うなって、私、言いましたよね……?」

「……!」

（ほ、本気で怒っている……）

冷ややかなのに、燃えるように熱い。いつも僕がからかったときにみせる、それとはまったく異なるものだった。

無理もない。

師と慕う人を手にかけた、その張本人なのだから。

（くっ……!）

「はっはあー! おれはあきらめないぜー! じゃあなー!!」

「野郎! 待ちやがれッ!! ちくしょう、はなせ! この、アマッ!」

「ああッ!」

引きずられ、女性から悲鳴が上がる。その腕からは血がにじんでいた。

「ポルナレフ、その女性も利用されているにすぎん……逃げる奴にかまっている暇はない」

なだめるとともに、シャツの袖を破り女性の傷の手当てをしてあげるジョースターさん。

「……アヴドウルは、もういない。しかし我々は先を急がねばならんだ。

すでに日本を出て15日が過ぎている……」

「……」

全員で、空を見上げる。

雲間から光が差し込んでいた。

(……アヴドウルさん……)

「さあ、エジプトへの旅を再開しようぜツ!!」

湿り気を帯びた空気を吹き飛ばそうとポルナレフがいう。

「いいか！ みんなの心をひとつに！」

ひとりでも勝手なことをするとよ！ やつらはそこにつけこんでくるからよ！」

おまえがいうなよ……と、つつこみをいれる気もはや起きない。

……というか、もう、わかっていた。こいつはこいつなりに、すごく気にしている、ということは。

「いいなッ！」

「……」

他のメンバーも黙っている。

(……ん?)

が、彼女がなにかいいたげな、微妙な表情をしているのに気づく。

「……どうかしましたか？」

「う、ううん！ な、な、なんでも……」

たずねてみるも、そういつて黙り込んでしまう。

なんでも、ない………ことはない。それだけはわかったが。

「先をいそごうぜッ！」

ポルナレフが再び叫ぶ。

「はい！ ……あのね、その……」

「？」

「……また、あとで」

「……は、はあ……。」

こそつとそれだけ言うと、彼女は走って行ってしまった。
非常に気になる……そんなことだけを言い残して、

*

*

*

「こつちじゃ。行くぞ」

わしらの次の目的地は聖地と呼ばれる都市、ベナレス。

ここカルカツタからはバスでの移動となる。郊外にぼつんと佇む最寄りの停留所まで皆を誘導するしている途中だった。

『チュミミーン』

「……ん？」

へんてこりんな声が聞こえた……ような気がした。

「ポルナレフ、なんか言ったか？」

「別になんも言ってるねーぜ、ジョースターさん。」

ハエの羽音じゃね？　ここら辺多いぜ、ハエが」

「たしかに……」

見渡すと、ブンブンと不快な音を立て飛び回る様子が多く見られた。そして、腕にふ

と、痒みを感じる。見るとぶくつと小豆大の膨らみがあった。

「多いのはハエだけではないようじゃ。いつの間にか虫に腕を食われちゃったらしい」
それを聞き、覗き込む保乃と花京院。

「あ、ほんとですね」

「かかないほうがいいですよ。」

ほどなく到着したバスに皆で乗り込む。幸いなことに客は少なく、ほぼ我々だけだった。

が、先程、敵のチャラ男……ホルホースをかばった哀れなお嬢さんもどうやら向かう場所が一緒のようでその姿が見えた。

なかなかのべっぴんさんである。ゆえに、例のごとく車内でひたすら話しかけていた。……味方のチャラ男が。

「いいか？　オレはね、普通は説教なんてしない。でもな……え、えーと名前きいてなかったな」

「……ネーナ」

「ネーナ、君はこれから通るベナレスの良家の娘なんだろ。美人だし、すごく頭のいい子と見た。」

おれは人を見る目があるしな。だから説教するぜ。

ホルホースはとつても悪い、嘘つき野郎なんだ。君は騙されてる。親が悲しむよ」
「……」

「あのね、こーなつちやいけねーぜ。恋をするとなりやすいけどよ。冷静に、広く見ることが大切だぜ……」

ジェスチャーを交え、必死に語りかけるポルナレフ。ほとんど反応はないようだが。
(懲りんやつじゃな。まったく……)

街にたどり着く頃にはすでに陽が傾く時刻になっていた。宿も無事確保でき、夕食後、解散となった。

「よし、では皆、ゆつくりと休むんじやぞ」

「はい」

すると保乃に気づかれ、つつこまれる。密かに自分でもすごく気になっていたことを。

「あの、ジョースターさん。腕……さつきより腫れてませんか？」

実はまったくそのとおりで、小豆だったその大きさがそら豆程になっていた。

「う……」

「一度、医者に見せた方が……」

花京院のそのひとことにきくりとする。

「い、いやだ！も、もう夜じゃしな。病院開いてないじゃろ！」

……あ、明日になつても治らんかつたらな」

極めつけにやつぱり憎たらしいことに鋭すぎる孫がいう。

「……じじい、いい年こいて医者が怖いのかよ」

「そ、そんなことないわい！　ではな！」

逃げるように部屋へ飛び込む。

薬でも塗つて、今夜はさつさと寝よう。そしたらすぐに治るさ。

そんな可哀想なわしの希望的な目論見はもろくも崩れ去るのだが……

それはまた、明日の話であつた。

*

*

*

「くつ、アヴドウルさん……」

部屋に入る。荷物を放り投げ、ベッドに座り、頭を抱えこむ。

「はあ……」

やりきれない思いでいつぱいになる。

……自分もつと何か出来なかったのか。

そうすればあんな最低な結果、回避することができたのではないのか。

「……ちくしょう!!」

行き場のない怒りを抑えることができず、自らの掌に拳を叩き付ける。

素晴らしい戦士だった。

そのスタンドが表すとおり、まつすぐで、熱き、正義の心をもった……。

そして、いいひと……だった。とても、あたたかい……。

決して長い期間ではなかったが、ともに過ごした日々が教えてくれた。

「……」

ずっと我慢していたものが込み上げてくる。

そんなことをしても、もう彼は……。

それは、よく、わかっていたはずなのに……。

そのときだった。部屋の扉をひかえめに叩く音がした。

(……はっ！)

あわてて目尻を拭い、返事をする。

「……はい」

「花京院くん？ ……私だけど」

(仁美さん……?)

ドアを開けると、そこには声の主である彼女が立っていた。あたりまえだが。「ごめんね。ちよつと、いいかな？」

「ええ。どうぞ」

ソファを勧め、自分も対面に腰掛ける。

「さつきは、その、お疲れさま……」

「いえ、あなたこそ……」

(目が、赤い。自分もつらいだろうに、様子を見に来てくれたんだろうか……)

そして、おもいだす。

(さつきのあれ……か?)

——また、あとで——

意味ありげにそうささやいた、あの姿を。

すると、相変わらずなにかを言いたげに、しかし、言いにくそうに口ごもる彼女。

「ええと……」

「どうしました？」

「そ、それなんだけどね、実は……、あの……」

きよろきよろとあたりを見回し、いう。

「ちよつと、その、……扉を、閉めてもらつてもいいでしょうか？」
「えっ?!」

女性とふたりきりのときには部屋のドアは開けておく。当然の紳士のたしなみ、というやつだ。

（それを、閉めろ、だと……？）

「……だめ？」

戸惑う僕をよそに、上目遣いでさらにそんなことをいう。

「い、いえ、だ、だめではないですが……いいんですか？」

「え？ なにが？」

きよとんとしたかおで逆に問われてしまう。

（なにがって……）

そういわれてしまうと非常に困る。

「わ、わかりました」

しかたがないのでドアを閉めに立ち上がる。

戻ろうとしたところで手招きをする彼女。

「ちよつと、こつちにきてくれる？」

「……は、はい」

いわれるがまま、隣に座る。

(なんだ? 一体、なんだというんだ……)

「ごめんね、……秘密で、どうしても、伝えたいことがあって……」

(ひ、秘密……!?)

そんな普段ならどうってこともないようなワードにすら過剰に反応してしまう。

「な、な、なんでしよう……?」

必死に平静を装いつつ、問う。

「驚かないで、聞いてね。ちよつと耳貸して……」

「は、はあ……」

ふわりと耳および心をくすぐる甘い香りとともに囁かれた言葉は……期待、いや、してない。そんなの。

……予想していた事柄とは全く異なるものであった。

……が、最高の知らせ、だった。

「……あのね、実は、師匠、無事なの」

「ええっ?! ほ、本当に!?!」

おもわず大きな声を出してしまう僕を彼女があわてて制す。

「しーっ!」

「あ、すみません」

気づき、自分も声をひそめる。

「……………どういふことですか？ さつきジョースターさんが……………。しかもあの時、確かに脈が……………」

「あれね、お医者さんが言うには、ショックによる一時的なものか、それか、出血によって血圧が下がりますと、ここ、手首の脈は触れなくなるんだって」

「そうなんですか……………」

「あのあと……………ふたりが車で走って行って、あのホルホースとかいう人も追いかけていったあと、ね……………」

*

*

*

——「……………行つたみたい。……………花京院くん、ポルナレフさん、気を付けて……………」

憎い敵をただ見送ることしかできないことに歯がゆさを感じながら、ふたりの乗った車の走り去った方向を祈るようにつめる。

「……………」

視線をおとす。そこには、ただ、硬く目を閉じたまま、静かに横たわるひとがいた。

「師匠……」

なにもできなかった。無力さに押しつぶされそうになり、その場にへたり込む。目のまえが一気にぼやけて、かすむ。

「ううつ……」

そんなことをしてもどうにもならないのに、とめどなくあふれてしまう。

「……起きて、ください。まだ、私、師匠に教えてもらいたいこと、たくさん……っ！」

無駄だとわかつてはいたが、揺さぶり、声をかけた。そのときだった。

「う……」

「……えっ？」

（見間違い……？ いや、でも、確かに……今……!!）

「……う、動い……!!? いや、生きてる?!」

ちやうどそこへ、救世主たちがやってくる。

「おーい！ ……保乃！ と、アヴドウル!? どうした!?」

「ジョースターさん！ て、敵の攻撃を受けて！ でもまだ息はあります！ 早く病院

につ!!」

「なんだと!? 承太郎、財団に連絡してくれ！ とりあえず……波紋の力よ!!」

「……セシリアが、ぎりぎりのところで銃弾を逸らすことができていたみたいで、眉間をえぐっただけで済んだらしいよ。ジョースターさんの波紋で応急処置して、財団の病院にこっそり運んだの」

「そうだったんですか……アヴドウルさん、無事で……。生きているんだ……！」

確かめるように、噛みしめるように、つぶやく彼。その様子をみて、おもわず自分の目も潤んでしまう。

「……よかった」

「うん、本当に……」

「でも、入院は必要ですよ？ 傷は、どうなんですか？」

「背中も眉間も、傷自体は幸いどちらもそんなに深くはなかったから、治るまでだいたい10日くらいらしいよ。ただ、ジョースターさんが、この際だから師匠とはしばらく別行動で、移動手段の手配をしてもらおうって。敵はもう死んだものだと思っっているだろうから、動きやすいからって」

「なるほど。それでさっきの……」

「うん、そう。花京院くんにはあとでこっそり伝えといてくれって。」

ほんとはもっと早く言いたかったんだけど、敵がどこで聞いているかわからなかったから……ごめんね……」

あれからここに辿り着くまでの道中ずっと……このひとがとても心を痛めているのがよくわかった。努めて冷静に、態度には出さないようにしている様子がむしろ痛々しくて、みているこつちがつらかった。

「いいですよ。敵を欺くには……つてことでしょうか？　それに、……逆よりよっぽどいい」

そういつて、微笑む彼をみて、ようやく肩の荷が下りたおもいだった。

ほつとしながら、もうひとつ相談しておいてくれと言われていたことを伝える。

「あと、ポルナレフさんにはどうしようかってことなんだけど」

「ああ、そうですね。あいつに言うとか敵にもすぐバレそうだな……」

秘密にしておいた方がいいかもしれませんね」

「やっぱり？　……二人も、そう言ってた」

そつくりな表情で同じことを言う、祖父と孫の顔を思い出し、やっぱり遺伝子つて……などと考えていると彼が思いだしたかのようにいう。

「あ、そういえば、ポルナレフがあなたにも今日の謝罪をしたとか言っていました」

「え？　なんで？　私なんにもしてないのに……」

「また……。すぐそんなことないのにそんなことをいうんだから……」

まあ、ともかくそういうことなので、あとであいつあなたのとこに来ると思いますが、

くれぐれもバレないように気を付けてくださいね」
「う……………」

「あなたのことだから、ちよつと可哀想、とか思つてそうですが……………」

アヴドウルさんが養生に専念するためでもあるんですからね。頑張つてください」

「……………はい、十分承知しております」

「はあ、あなたも嘘がつけない性質だからなあ……………」

「だ、大丈夫だよ！ 師匠のためだし！ 頑張ります……………」

「ふつ、頼みますよ。まったく」

*

*

*

決して得意ではないであろう事柄を、自信なさげに、だが頑張ると頷垂れる彼女の様子におもわず笑みもられる。そんな彼女は、かおを上げたのち、ぼつりとこういつた。

「ポルナレフさん、できたんだね。……………かたきうち」

「ええ。これで妹さん……………というか、あいつの気持ち少しでも救われると、いいんですか……………」

「そう、だね……」

「はい……」

新たな一歩を踏み出せば……。ふたりに頷き合う。

「ところで、あんなスタンド、どうやって倒したの？　鏡のスタンド」

「聞きたいですか？」

「うん！」

元氣よく頷く彼女。その拍子にふと気づく。

「はっ！」

（……ち、近い……）

夢中で内密な話をしていたので無自覚だったが、けっこうな至近距離であることに。どうやら彼女も同時に気づいてしまったらしい。かおが赤い。……おそらく自分も。

あわてて立ちあがる。

「そ、その前にお茶でも入れましょうか。珈琲でいいですか？」

「う、うん。あ、私やるよ！　座ってて」

「……というわけで、心底クズな奴でした。

まあ、ポルナレフの言う通り、今頃閻魔様が地獄で刑の続きをしてくれているでしょ

う」

「うわあ、大変だったんだね……」

彼女の淹れてくれた珈琲を飲みつつ、詳細を話す。

鬨みの激しさや相手の卑劣さに顔をしかめつつ、熱心に耳を傾けてってくれる彼女。ひとしきり唸った後こんな感想を呟く。

「……でもやつぱりふたりともすごいなあ」

「何がですか？」

「とつさの機転とか、洞察力とか判断力とか！

とくに！ 視線を集めるために金貨使うとか、私だったら絶対思いつけない！

どうやったたらそういうのって鍛えられるのかな？ いいなあ……」

「……お誉めに預かり光栄です。まあ今回はたまたま、上手くいって良かったですよ」

「そんなこといって、タワオブグレーのときとかもすごかったじゃない。あ、偽者の人のときも！」

こどもストレートに褒められると照れくさくてしかたがない。が、素直に、やはり……嬉しいものだ。

裏表がまったくといいっていいほどない、このひとにいわれているからだろうか……特

「そ、そんなに褒めても何も出ませんよ。ハイエロフアントは単純な力が強いわけではないので、足りない分は他で補わないといけない、というだけです」

「ええ?! ハイエロフアント、凄過ぎなのに!!」

エメラルドスプラッシュ強いし。遠くにも行けるし、攻撃もできるし、敏感だし、器用だし、忍び込めるし……（中略）……可愛いし、綺麗だし、それにあのデザインは……」

「あ、あの……もう……」

眼をきらきらと輝かせながら紡がれる無限に続きそうな賛美の言葉。

このままでは褒め殺されてしまう……必死に止める。

「も、もう、わかりましたから! ありがとうございます!!」

「えー?」

まだ言い足りないのか、なぜか不満げな彼女。たまらず話題を変える。

「あ、あなたこそ、大変だったでしょう? あの、ホルホース……」

「……」

「……何があったのか、聞いても?」

実は相当気になっていたことをさりげなく聞くことに成功する。

すると、暫し黙ったあと、彼女は僕に予想外の質問をした。

「……私って、恐くない……かな?」

「は？ ……全然」

おもわず即答する。普段の彼女はほわーっとして『怖い』というイメージとはかけ離れている。からかわれたと気づいて、むきになった彼女もなんだか毛の逆立った仔猫のようで可愛……いや、なんでもない。

(それに……)

先程をおもい返す。

敵をまつすぐに貫くような鋭い、冷たい視線。熱く燃える瞳。

あの怒りの表情は怖いというより、むしろ……

……すごく、綺麗だとおもった。

いや、造形的に、だ。深い意味はない。

もちろん、あんな風にこのひとに軽蔑されたくない。

そういう意味では、怖いけれど。

「うう……、そうかな……？」

そんなことを考えていたのだが、なぜか明らかに落ち込んでいる彼女に気づき、驚く。

「ええっ?! 恐いって言うってほしかったんですか？ ……なんで？」

「確かにそれはそれで嫌だッ！ ……けど！ 実はあの人に……」

そうして話してくれた。あのあと何があったのかを。

「なるほど……」

「悔しいけど、確かにひとりじゃあ私、何もできないんだよね。……護るだけで。攻撃とか全然……」

もつとなにか、できればいいのに……」

そういつて、俯く。

理解した。あんなに怒っていたのはアヴドウルさんを傷つけられたこと、それはもちろんとして……

（護るだけ、攻撃性、か……）

いくつもの考えや感想が、浮かんた。

しかし、これだけは伝えなくてはいけないとおもった。

ゆつくりと口を開く。

*

*

*

「……なにを言っているのか。

まあ、あいつはあなたの心を乱そうとわざと、でしょうけど。

だいたい相性っていうなら……いや、それは今はいいや。とにかく、見当違いもはな

はだしい」

「そうかな？　でもあの人の言う通り……」

「ちがいます。あいつが、ではない。あなたが、です。わかっていない」

「え……？」

「護る『だけしか』って、なんですか？　いいじゃあないですか。護れるのだから」

「あ……」

「『護ること』がどれだけ尊いものか、あなた自身、自覚すべきです」

彼は続けた。

「僕にも、承太郎にも……誰にもできないことなんですよ。

さっきあなたは僕の……ハイエロフアントをあんなに褒めてくれたけれど……。

セシリアだって負けてはいない。素晴らしいスタンドなのだから。

もつと自信と誇りをもって、たいせつにしてください」

（……そっか、私……）

「う、ん……」

（……セシリアを、ほめてほしかったんだ）

「……ありがとう」

「……事実を述べたまです。礼を言われるようなことは、なにもいつていない」

そういうと、また優雅に珈琲をすすする。

(どうして、わかっちゃうんだらう……)

目のまえのひとをみる。

不思議でしかたがなかった。

「それに……」

カップをテーブルに置くその姿についみとれていると、ふいにこちらをみあげ、微笑みながら、いう。

「人を傷つける力を求めるなんて、らしくない。あなたには、『護る』方が似合っている」

「!!」

瞬間、沸騰した。私の血液が。たぶん。

おもわずうしろを向きソファにかおをうずめる。

(つつ!! ……また! このひとはこんなことをしれつと!! 反則だよ……)

「? どうしました? 」

「……なんでもないっ! 」

このひとだって、自分の何気ない言動が、女心をどれだけ乱すのか……ちよつとは自覚してほしいものだ。まったく。

*

*

*

この際なので、僕は危惧していた事柄を伝えておくことにした。

「しかし、敵の言うこと鵜呑みにして……。まあ、それもあなたらしいけど。

素直すぎるのも考えものだなあ」

「うう……」

「より己を高めようとする、その向上心や、よしですが。今できることを確実にするの
も、大事ですよ」

「そうだね。本当に、そう。気を付けないとなあ……」

真剣なかおで頷く彼女。言ったそばから、である。

「また素直に聞いている……」

指摘する僕。焦って反論する彼女。

「あ！ い、いいじゃない！ これはべつに！」

そして、またもやこんなことをいいだす。

「だって……、花京院くんのことだもん」

（うッ！）

おもわず伏しかおを隠す。

「? どうしたの? 」

「なんでもないです……」

(……そうだよ。他意はないんだよ。もうやだ、このひと……)

男心をくすぐるような言動……しかも無自覚。余計たちが悪い。

なんと危ういのだろう。やはりしつかり見張っておかねばならないようだ。

「あれ?! もうこんな時間! 」

「本当だ。気づかなかった……」

その後も雑談をまじえつつ、とりとめもなく話をしていたら、いつのまにか時計は日付が変わるような時刻をさしていた。

「ごめんね、すっかり長い時間お邪魔しちゃって」

「かまいませんよ」

「疲れてるだろうから、ゆっくり休んでね」

「はい。ありがとうございます」

「こちらこそ。いろいろ聞いてくれて、ありがとうございます」

「……いえ」

「じゃあ、おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい」

ドアが閉まったあと、ひとり、おもう。

(……攻撃性、か。ああは言ったけど……)

でも、それは……。まだ、言わずにおいた方が、いいだろうな……)

(ああ、そういえばそうだった……)

(……しかたないな)

*

*

*

彼の部屋から出る。

とりあえず早急に伝えたかった極秘ミッションをこなすことができ、軽くなった心とともに自らの部屋に戻ろうと歩き出す。

するとそこで角を曲がってきたそのひととばったり出会う。

「おお、やっぱりここにいたのか」

「あ、ポルナレフさん！」

彼から聞いていた通りだった。もう一つの極秘ミッションを思い出す。

が、当の本人は思わず身構えてしまった私に、軽ーい口調でこんなことをいう。

「部屋にいなかったから探してただけ。……逢引きか？　お兄ちゃん許しませんよ！」

「なっ！　ち、違います！　た、ただ、話！　話をしていただけですっ！」

「はいはい。わかってるよ。お前ら真面目だからなあ……。色気ねえなあ」

「もう……」

そして一転、自分も真面目な表情になる。

「……さつきは、すまなかったな。お前らが来てくれなかったら、危なかった」

「いえ、私は、何も……」

「そんなことねえよ。」

おかげで、本懐が、果たせた……。ありがとう」

「……おつかれ、さまでした」

「ああ。……でも、なんだろうな。もつとこう、スカート！　とするかと思っただが

……

いや、するにはしたんだけど……。はは、複雑な、気分だけ……」

「……」

目を伏せるポルナレフさん。

「シエリーは、どう、思っているんだろう……。？　喜んで、くれているかな……。？」

なあ、お前だったら、どうだ？　こんな兄ちゃん、さ……」
 （……私だったら……？）

*
*
*

積年の恨みが解消され、すつきりした。しかし、同時に確かに感じてしまっていた虚しさ。それを埋めたくて、ずっと誰かに聞きたかったことをつい目の前のこの娘に聞いてしまっていた。同じ歳、同じように兄をもつ妹。やはりどこか重ねて見てしまっていたのかもしれない。

少し黙ったのち、妹代理はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……嬉しいですよ。もちろん、とても。でも……」

「でもっ？」

『ずーっと、いつもいつも私のことばかり考えて!!　もう、ちよつとは、自分のことも考えてよ!!』 ……って、言いたくなっちゃうかな」

「!？」

（……そうか？　そうなのか？……シエリーよ……）

『これからは、ちゃんと自分のやりたいことやって。幸せに……なつてよ』 っ……」

「……」

「はっ！ な、生意気いつて、すみません！」

「……うおおー！ やっぱ、お前、いいやつだなー！」

感動した。少しだけ、だが確かに心が軽くなった。そんな思いだった。感謝の意を伝えようとその手を取る。

「へええっ!？」

「どうだい？ やっぱり、オレと……」

加えて、あわよくば、と口を開いた。そのときだった。

「……はッッ！」

ゴゴゴゴゴゴ……

激しい殺気を感じた。

見上げると、やっぱり……いた。壁に張り付いた、あいつの『相棒』が。

メロンチツクなその両手から、必殺の一撃が今まさに解き放たれんとするところだった。あわててその本体に向けて弁解をする。

「じよ、冗談！ 冗談だ！ 頼むから、エネルギーを宝石状に変換するのやめてえ!!」

昼間の、あの激しい衝撃を思い出す。一日に何回もアレをくらうのはたくさんだ。

「え？」

オレの様子を不思議に思い、彼女が振り向くと瞬時にヤツは引っ込んでいった。
「……あ、あいつはストーカーか。はあ……」

あきれつつも、続きを話すことにする。

「まあその……ありがとうな」

「いえ……」

「……これからは、自分のしたいことを、か」

息をひとつ吸い込み、すぐに浮かんだ、それを口に出す。

「じゃあ、まずは……、DIOを、倒す!!」

「!」

「お前や、花京院みたいに。」

……承太郎とジョースターさんのために、そして、このおれの誇りのために、な」

「ポルナレフさん……。……はい!」

につこりと微笑み、頷く。

満足し、そして思う、……友のことを。

「……アヴドウルの、分まで、さ」

「うっ、そ、そう、ですね……」

「ああ。というわけで、これからもよろしくな!」

「はい、こちらこそ」

「じゃな」

*

*

*

部屋に戻るポルナレフさんを見送りつつ、恨めしいきもちを込め彼の部屋のドアを睨む。

「しつかり休んでって言ったのに……」

すると、ゆっくりとそれが開き、ひよつこりとスタンド、そしてその本体がかおを出す。

「……ばれていましたか」

「当たり前でしょ！　もう！」

詰め寄ると小声で猛抗議をする。

「(……心配しなくても、バラしたりしないよ！)」

「……とかいつて、さつきちよつと危なかったでしょう？」

「うっ……そんなことないよっ！　じゃあ、今度こそ、おやすみっ！」

「はいはい、おやすみなさい」

*

*

*

その日、私は夢をみた。

ううん、夢だったのか、ほんとはよくわからないけれど……。

「……ねえ……」

「……ねえ……」

「……ねえつてば!!」

「ん……?」

いつかの如く、幾分乱暴に呼びかけられる声と揺さぶられる感覚。

目を開けると、そこにはやっぱりいつか見たあの顔があった。

「……あ! 貴女は!」

「……また、会えたね」

「しえ、シエリーさん……?」

「うん。……そう」

「伝えておきたくて。ありがとうって。」

　これでやっと、『次』のところにいける……

　ずっと、囚われていたの。……あいつのせいで。……鏡の中に」

「ぼ、ポルナレフさんに！　せ、せめてッ！」

「ううん。すごく、あいたいけれど……」

　それは……だめなんだって。

　だから……このまま、いくね。」

　伏せられたながい眉毛が揺れる。

「おにいちゃんに……ううん。やっぱりいいや。」

　貴女がちゃんと代弁してくれたから。わたしのきもち」

「そんなこと……」

「あーあ、仁美にだったらおにいちゃんをあげてもよかったのになあ……だめだよね。」

　ラブラブだもんね。……残念。

　でも、お似合いだから、許してあげる。

　あの、前髪の長い彼氏にも伝えておいて。

　おにいちゃんのこと、護つてくれてありがとうって。これからお友だちでいてあげてねって」

「は!? え!? か、彼氏!? か、花京院さんと私は、そ、そんなんじや……」
「ふふっ! 可愛いなあ。」

……おにいちゃんにも早く運命のひとが現れたらいいのに」
柔らかな微笑みを浮かべる。

「こんな形だけど……あなたと会えてよかった。」

でも、贅沢かもしれないけれど、生きているうちに、会えたらもつとよかつたなあ。
こんなふうにつきなひとの話したり……、きつと、すぐく、たのしかつただろうな。
おともだちに、なりたかつた……」

「……シエリーさん! ……私も……っ!」

ぼやけていく視界の中、差し出された手を取る。その手は、とてもあたたかかつた。
「……時間みたい。……ああ、もう、そんななお、しないで?」

大丈夫。いつか、また、あえるから」

「わたし、次の人生でもおにいちゃんと家族になりたい。」

それで、仁美ともう一度友だちになって、すつごく素敵なひとと恋をして……」

「神様って、やさしいんだ。いじわるすることもあるけど、そのぶん、ぜつたい……」

「だから、ね? 約束……。まっつて」

「う、ん……!」

「じゃあ、またね」

そうして、まばゆいほどの光に包まれて……彼女の姿は、消えた。
「……『また』ね。シエリーさん……」

RUN!!

『吊られた男』そして『皇帝』の襲撃から一夜が明けた、翌朝のこと。

ホテルのロビーに続々と集合する仲間たち。最後に登場したのはこのひとだった。

「おはようございます。ジヨースターさん」

「おはよう……」

「あれ？ どうしたんですか？」

「じじい、元気ねえじゃねーか」

普段とは異なるその沈んだ様子に皆で声をかけると、彼は渋い顔で腕を掲げる。

「例の、虫に刺されたと思っていたところに、ばい菌が入ったらしい……」

見ると確かに人のこぶし大の腫脹があり、それは赤黒く変色していた。明らかな異常に、たまらず僕は顔をしかめ進言する。

「昨日よりさらに腫れている……」。

やはりそれ以上悪化しないうちに医者にみせたほうがいいですよ」

「そうかのう……」

「これ、なんか人の顔に見えないか？」

「おい、冗談はやめろよ、ポルナレフ！ しかたない。病院に行くか……」

僕たちの説得に、しぶしぶだが、ようやく重い腰を上げる気になったようだ。

「へへへ、ついていってやろうか？」

「年寄あつかいするな！ ひとりでいけるわ！」

ポルナレフの軽口にむきになるジョースターさん。そこへ彼女が飛び跳ねるほどの勢いで手を上に挙げる。

「あ、はいはい！ じゃあ私一緒に行きたいです！」

えっと、海外の病院ってどんな感じか興味あるので」

「……そうか？ じゃあ、一緒に来るか？」

「はい！！」

「ふっ！」

すつかり、『おじいちゃんと孫娘』である。その微笑ましい様子におもわず笑みがもれてしまう。

「やれやれだぜ……」

その横でため息をつく本物の孫。

「では、僕らは適当にこのあたりで待機していますね。お気をつけて。」

「ああ」

「さっ、オレはネーナのところに行こーっと！」

*

*

*

足取り重くホテルを出発し、歩き出す。

「……すまん、保乃。つきあわせて」

道中、隣の彼女に声をかける。

「え?! な、なんでですか? 私が行きたいって言ったんですよ!」

「あいかわらず嘘が下手じゃのう。まったく、わしをだまそうなんざ100年早い!」

「す、すみません! ついてきちゃって……迷惑でしたか?」

冗談めかして凄んでやると、どうやら本気にしてしまったらしい。本気でおろしているこの単純娘。しかたがないのでちよびつとだけ本音をこっそり教えることにする。

「……いや。ほんとのほんとはちよびり心細くてな」

「よかった。ですよね! 私だったら一人で病院とか絶対嫌ですもん! しかも海外の。あ、でも……」

すると、ほっとした表情を浮かべながらこんなことをいう。

「私が『来たくて』来たので。『つきあわされて』来ているんじゃないです」

「……君は、いい子じやのう。ほんとうの孫よりもよっぽどわしのことを……うう！」

真摯なその様子について感心してしまう。

「そうじゃ！ ippそのこと孫の嫁に……！」

そうすればこの娘がほんとうの孫になるではないか。我ながらいい案だ……と思つたのだが、すぐに気づく。

「あ、そうだった。ダメじゃな。ちえつ……」

「え、なんですか？」

どうやら本人はさっぱり意味がわかっていないようだ。そーいうことに関しては何んでもぶいのが玉に瑕、といったところか。

(あいつも、苦労するのお……)

*

*

*

「ふえつくしよおおい!!」

「……。風邪かい？ 承太郎？」

「……。花京院、お前こそ」

ふたり揃ってくしやみをする。体調には全く問題がないはずだが……と、首をかしげる。

「それにしても……」

「なあなあ、ネーナ、考え直そうぜ……」

ホルホースなんかよりもさ、オレの方が絶対にいい男だぜ。

オレはよ、過去にはこだわらない広い心の持ち主さ……。

昔どんな男と付き合ってたって気にしないしな！」

僕は朝食がてら、何か食べつつジョースターさんたちを待つていようということになり、ホテル隣接のカフェにやってきていた。

そこへ、どこからかやつかりポルナレフが例の女性を連れてきて、昨日同様、必死に口説いていた。性懲りもない、下心丸出しのその様子に呆れてしまう。

「こんなときに……しかも敵方の女性だぞ。まったく、色ボケも大概にしてほしいね」
「……」

*

*

*

「ハハハカ」

歩くこと数十分。ジョースターさんと私は病院にたどり着いた。

受付を済まし、待合室にて待つ。朝一番で来たためか、どうやら患者さんは私たちだけで、すぐ診てもらえるようだった。

「ああ、ヤブじやつたらどうしよう？ 逃げていい？」

「っ！ ……ええ。ヤブだったら、逃げてください。いい先生だといいですね」

そこに響く受付嬢の爽やかな声。

「ジョセフ・ジョースターさん、どうぞー」

「はあ、呼ばれちった……。では、いつてくるよ」

「がんばってくださいー！」

診察室に向かう不安気な背中を見送りつつ、考える。

（そうだよ、敵がお医者さんに化けてたりするかもしれないよね。

……セシリア、ジョースターさんを）

今までの旅での出来事を鑑みると、いつ何時、どんな方法で敵が襲ってきたとしてもおかしくはない。備えあれば憂いなし。ということ、相棒を飛ばしておく。

（うーん、ハイエロファントほどでなくとも、せめて攻撃を受けた、とか、もつといういろろわからないかな？ やってみよう……）

待っている間、せっかくなので全神経を相棒に集中させてみた。

「……あつ！ い、今!？」

意外とやればできるものらしい。暫しの後、微かな異常を察知した。はじかれるように立ち上がると白い廊下を駆け抜ける。

「失礼します！ ……ああつ!？」

診察室へ続く扉を引き開けると、そこに大変不似合いな惨劇が繰り広げられていた。あんぐりと口を開ける私の目に飛び込んで来たのは、血まみれで倒れ臥した医師の死体とメスを片手に闘うジョースターさんの姿。

その対戦相手は信じ難いことに、自らの腕だった。

「や、保乃！ た、助かった！ この痣が、敵のスタンドだったんじや！」

『ちゆみみーん！ あたいが女帝^{エンプレス}よツ！』

女あ！ アンタが来たのは誤算だけれど……問題は無い！

順番に血祭りにあげてやるよツ！」

敵スタンド……ジョースターさんの腕の痣は、今や完全に人の顔になっていた。いわゆる人面痘、というやつだろうか。目に鼻、口までついていて、おまけに流暢に喋っている。

「……先生、次の患者さんなんですが。はっ！」

そこへ間の悪いことに看護婦さんが入ってきた。

「……きやー！ー！　せ、先生が！」

「あつ！　こ、これは……！」

『……わしはジョセフ・ジョースター。アメリカ人！　ホテルクラークスに泊まってる！』

わしがこの医者を殺つた！』

口を開きかけたその人とそっくりな声が飛び出した。その人の口ではなく、腕から。

「な、なにいッ！」

『わしは君のような若いおなごが好みでなあ……次は看護婦！君の番じゃあ〜！』

「ひ、ひい！　人殺しッ！！　け、警察を！！」

「あつ！　待っててください……！」

弁解など聞く耳もたず。悲鳴をあげながら脱兎の如く踵を返す女性。

「ま、まずい、コイツ、わしの声真似を……！」

「と、とりあえずここから離れましょう！　みんなに知らせないと……！」

スタンドは、スタンドでしか、倒せない。

だとしたら、まずいことに私にもジョースターさんにも、これといった攻撃手段が……ない。

急いでその場からから逃走を図る。

「はあ、はあ……あつ!？」

しかし、窓から飛び出し通りに出ようとした途端、くるくると踊り狂う赤色灯が目に入る。病院からホテルに続く道は、沢山のパトカーや警察官で溢れかえっていた。そこから中であつたたましく鳴り響くサイレンの音に混じってジョースターさんの腕から不快な笑い声が漏れてくる。

『ヒヤハハハ、これであんたはインド警察に追われることになったわけだわねッ！』

ホテルに戻って応援を呼ぶってわけにはいかなかったねえ!』
「くっ!、ここのッ! たたきつぶしてやるッ!」

業を煮やし、ジョースターさんが、壁に腕……疣を叩きつけようとした。そのときだった。

「なにッ!」

「て、手が生えた!？」

『へイツ! 自分の腕なんだよッ!』

もつと大切にあつかいなよ、くそじじいッ!』

なんと顔だけだったスタンドから腕が生え、つかえ棒のようにその身が激突するのを阻止した。

「ど、どんどん成長しているのか……?」

したくもない想像をしている私達をよそに、近くにあったポールをぐつと掴む。

「おい、はなせ……なにをする? はなさんかい!」

『やだわよッ!』

言うなり、騒ぎ出す。

『おまわりさーん、犯人はここよッ!!』

「こつちか!」

「急げ!」

それを受け、近づいてくる怒号。迫り来る人々の気配。

「ううッ、こうなったら……『波紋疾走』オーバードライブ!!」

たまらず、ジョースターさんが『波紋』で攻撃する。

『……トンチキイイ!自分の腕に自分の『波紋』が通じるかいッ!』

「くっ!」

空振りに終わるも、それしきでめげるこのひとではなかった。

「……ならば!」ハーミットパール『隠者の紫』!!」

『ぐうっ、し、しめつけられる……』

「ハーミットパールにはこういう使い方もあるのじゃ!」

「や、やった!」

その茨を巻きつけ束縛し、動きを抑えることができたようだ。

「よし! 今のうちに! 保乃、ホテルに戻って承太郎たちを呼んできてくれ!」

「は、はい! ……あつ!」

駆け出そうとするやいなや飛んでくる、ドラマ等でよく聞く警告の文句。

「警察だ! 逃げるなよ! 動くと、撃つぞ!」

「か、囲まれておる……」

いつのまにか前後の道をパトカーを盾に拳銃を構える大勢の警察官によって塞がれてしまっていた。

(ど、どうしよう!? そ、そうだ!)

「……きやー! やめてください! 撃たないで! 私、人質です!」

とつさにジョースターさんの腕をとり、捕まっている演技をする。

「うツ……」

躊躇の色を纏った張り詰めた空気が周囲に流れる。

「(い、今のうちに……)」

「ぬはははは! そうだ! この娘の命が惜しくば道を開けるツ!」

そのままじりじりと後ずさり、包囲網を越える。

「……………スマン」

「……………いえ」

当座の危機を脱し、無我夢中とにかくジョースターさんと街をひた走っていると、市場のような場所にたどり着いた。雑踏に紛れ、建物の影に姿を潜める。

「こ、このあたりまでくれば！ わ、わしは隠れとるから……」

「はい、いつてき……、え……？」

「ん……？」

今度こそ。そう期待した私たちの耳に届く。目立たぬよう布で覆っていたジョースターさんの腕から、ゴリゴリ、バリバリ……と、不審な音が。

「?! な、なにを……」

布を捲ると、敵はリンゴや、キャベツ……そして、鶏までもを丸呑みにしていた。

『……………食事中さッ！でつかくなるためにねッ！』

瞬間、二倍くらいの大きさに膨れ上がり、その身を締め付けていた『隠者』の紫の茨が無惨にも引き千切られてしまう。

「そ、束縛がッ！」

『パパ、ありがとう！ おかげでこんなに大きくなれたわ！』

これこそ親のすねかじり！いや腕かじりかしらねえー！』

腹立たしいことに少々上手いことを言いつつ、太くなつた腕でジョースターさんの顔面に重いパンチを繰り出す。

「危ないッ！」

それをなんとかセシリアが防いでくれる。

『ちっ！……動くんじゃないよ！このくそアマ！アンタが助けを呼びに離れたら、すぐにでもこのジジイを殺してやる！アタイの力は見ただろう？もう頸動脈にも手が届く！ここをブツツとやっちゃったら、どうなるだろーねえ！！ヒヤハハハハ！』

「ううっ！」

（ホテルまで、まだ、300m以上は優にある。ダメか……）

セシリアでジョースターさんを護りつつ、知らせに走る……というわけにはいかない距離だった。

『でも、そうになると、先に……アンタを殺らなきゃいけないね！』

「……！」

ぎろりとスタンドの目が鋭くこちらを睨む。

同時にジョースターさんが叫ぶ。

「もういい、保乃、自分にスタンドを戻せ！」

「嫌です……こいつの狙いはそれなんですから！」

『ヒヤハハハ！ じゃあ、女、おまえから、死ねええーッ!!』

「くっ！」

*

*

*

食後の珈琲をすすりつつ、おれは花京院と適当に駄弁りながらじじい達を待っていた。

相変わらず、女の気を引こうと無駄な努力を続けるポルナレフの野郎は当然ほおっておいて、だ。

すると突然……本当に突然のことだった。

「……はっ！」

「どうした？ 花京院」

ポツリと、眩く。

「……あのひとが……、あぶない」

「はっ！」

「すまない、承太郎。僕に行く……！」

それだけ言い残すとすぐさま立ち上がり、勢いよく窓から店を飛び出していく。

「お、おい……！」

外を見やるも、すでにそこに在るのは立ちのぼる砂煙だけだった。

「……はええよ」

おもわず心の底からの感想を零す。

「……っか、おまえにだけはぜってー、色ボケとか言われたくねえ……」

*

*

*

『死ねええー!!』

「くっ……！」

繰り出される拳に私が身構えた。その瞬間だった。

『ぐええっ!』

「……お嬢さん方、わしの存在をわすれてもらっちゃ困るな！」

「あっ！」

『隠者の紫』で再び、敵の腕、首を拘束し、その攻撃を阻止してくれるジョースターさ

ん。

「おい！ もう助けを呼ぶ案はやめじゃ！ ふたりでコイツをなんとかするぞ！」

「は、はいッ!!」

私に促したあと、敵に向け高らかに宣言する。

「このジョセフ・ジョースターが、闘いにおいてきさまなんかとは年季がちがうということを、これから思い知らせてやる！」

決まった！ と思った。

「……いたぞ！ 殺人犯だ!!」

「!?」

しかし、残念なことにまたも警官隊に囲まれる。

「……と、とりあえず、逃げるぞ!!」

「はいー!!」

*

*

*

「とはいえ、どうしましょう」

「うむ。ハーミットパープルの遠隔視能力を使って、こいつの本体がどこにいるか見つ

け出したいが、カメラがない……」

路地裏を逃げまどいつつ、わしらは作戦を立てるべく話し合っていた。その隙をついて、またも敵が暴れ出す。

『ほあちよー！ こんな束縛効かないっていったわよねッ！ なめるなッ!!』
茨が引きちぎられるとともに、鋭い手刀が繰り出される。

「オー、ノオー!!」

叫ぶも、予期した衝撃が我が身に降りかかることはなかった。

「させないッ！」

セシリアがその攻撃を見事はじきとぼしてくれたようだ。

「おおっ！」

すぐさまその主がまっすぐな言葉を敵にぶつける。

「……あなたこそ、なめないでください！」

私がいる限り、ジョースターさんを傷つけさせはしないッ!!」

「！」

普段は朗らかなこの娘の凛々しい姿に感動と、そして……

(この、瞳……この感じ……は……)

古い記憶が、呼び起こされた……そんな気がした。

だが、そんな感慨も束の間、そこには低俗な争いが発生していた。

『キイイー！ イライラするツ！ 本当に邪魔くさいねっ！』

この……ブス！ 地味！ ずんどう！ ペチャパイ!!』

「はあああー?! ペ、ペチャパツ……!?!」

『このブラジャーいらす〜！ アタイなんて肩が凝つて凝つて……』

そんな悩み、アンタにや縁がなさそ〜でうらやましいかぎりだわさ！ けけけ!』

「きいーツ！ た、例えば事実でも、いや、だからこそツ！ 世の中には言つていいことと

悪いことがあるんですツ!!」

「お、おい、おちつけ……」

つい、そんなキャットファイトに気をとられてしまつていたときだった。

『すきありい!』

「ぐう……ツ!」

飛んできたパンチをかわそうとバランスを崩し、そばの露店に倒れ込んでしまう。積んであった箱や並んでいた灰壺がひっくり返り、ガラガラと音を立てる。

「!」

これぞまさに『転んでもただでは起きない』というやつだろうか。待ちに待った光明が、わしの脳裏にとうとう訪れる。

(これだ！)

「す、すみません！ ジョースターさん！ 大丈夫ですか!？」

「おい……………」

眼で、合図を送る。

「……………? はっ!」

「……………いくぞ!」

「はいッ!!」

「はあ、はあ……………」

『へい! どんどん承太郎たちから離れていくよッ! ふへへへ!』

「はあ、はあ……………わしらがただやみくもに走り回っていたと思うのか?」

さらに駆け回ること十数分。とうとう辿り着く。目的の場所に。

「きさまを……………」

『!?!』

「これの中につっこむためじゃー!」

なみなみと注がれた黒い液体……………その中に腕を漬ける。

『がぼ、ごぼ……!!』

上手くいっただけ……そう思った矢先だった。液中から急にギラリと光る何か飛んできた。

「!!」

それをかろうじてセシリアがね返す。

「っ! あ、あぶない……!!」

「く、釘?」

『ヒヤハハ! さつき拾っておいたのさ! これであんたの頸動脈を搔つ切つてやる!』

アタイをこんな中につっこんで、窒息でもすると思つたのかい! しねーよ! 忘れ

たのかい!?

スタンドはスタンドでしか倒せない!

おいぼれのスタンドもペチャパイのスタンドもアタイをぶつたおせるよーなもの

じゃない!

このまま持久戦に持ち込めばアタイの勝利は確実さ!!』

「……」

『ヘイツ! さつき……戦いの年季がどうのとか言つてたねッ!』

今のどろが闘いの年季なのさッ! どろが作戦なのさッ!

てめーはただ年齢をとっただけのおいぼれジジイだろーがあッ!」

「……………」

『あんたらにや、この女帝を倒す方法など何ひとつ……………ん?』

「……………ふふ……………」

『何ひとつ……………ウウツ!』

遅まきながら、なにかがおかしいことに気づいた、哀れなヤツに言っただけ。

「え? 何ひとつ……………なんじゃと?」

年をとって耳が遠くなったかの! よおききとれんかったのオ!」

黒く固定され、ひび割れていく……………自らのその身体の変化から、ようやく液体の正体に感付いたようだ。

『こ、これは……………まさか!? コールタール!』

「よくわかったのう! この辺、道路の舗装工事をしとるようでお!」

『つ、つっこんだのは、窒息させるためではなく……………アタイをかためるためだったのか?』

し、しかしなぜ、コールタールの場所など……………』

「いひひひひ、我がスタンド、『隠者の紫』の能力は……………」

先ほど倒れ込んで散乱した、箱、壺……………その中であつた灰は、舞い落ち、地面に降り

積もる。

『はっ！ お、おまえ、念写したなッ！ は、灰をこぼして利用して……位置を……?!』
「ま、これで闘いの年季の違いというのがよおくわかったじやろう。

……相手が勝ち誇ったときそいつはすでに敗北している……。

これがジョセフ・ジョースターのやり方。老いてますます健在というところかな」
そのほとんどが黒い塊と成り果てた、ヤツの身体に茨を巻きつける。

「……そして、スタンドはスタンドでひきはがせる！」

『え！ あ！』

「……おまえは『やめてそれだけは』という」

『やめてッ！ やめてそれだけは！ ……はっ!!』

「にやり。……だめだな、わしだって痛いんだ！ 子どもというのはいつまでも親のズネをかじってちやいかん！ 大きくなったら……」

『！』

「ひとり立ち、せんとなあ!!」

そのまま一気に千切りとるように、引き離す！

『ぐはあー!! ……』

寄生していた宿主を失ったそれは、苦悶の叫びとともに、動かなくなつた。

「やれやれ、なんとかなったわい……」

「やりましたね！」

歡喜の表情で駆け寄ってくる孫娘。

「あつたりまえじゃ！ わしを誰だと思っておる！」

「ふふ、さすがです」

「ふつ、助かったよ。おまえさんがおらんかったらどうなったことやら」

「いえ！ 私また何にもできなかつたし……」

そういつて、苦笑いを浮かべる彼女にいう。

「……さっきの台詞、シビれたぞ。」

50年前に出逢つておればのう。惚れちやつてたかもしれんな！」

「ま、また、そんな……お上手なんですから！」

「にしし……！」

「もう！」

からかいつつも、天を仰ぎ、心の中で呼びかける。

(……なぜだろうな。

あの時、おまえのことを思い出したよ。……シーザー……
懐かしき、友に……。

*

*

*

た。
ジョースターさんの鮮やかな作戦勝ちにすっかり気が緩んでいた私は気づかなかつた。

敵の身体がゆっくりと蠢いていたことを。

『……ゆ、る、さん！ゆるさんぞお！』

「なにッ！」

怨念めいた声が地を這うように響く。

『こうなったら、せめてアンタを道連れにしてやんよ！』

死ね……くそアマああ……！』

「いかん！」

「しまっ！ セシリア、戻っ……！」

私の顔面めがけて、鋭く尖った釘が勢いよく飛んでくる。

（くっ、間にあわない……！）

……ダメ、かな? ……か……!)

覚悟をし、目を閉じ歯を食いしばる。

すると、ききなれたこえが、きこえた。

「……スプラーツシュ!!」

『ぐべらッ!! ち、ちくしょう……』

(! ……えっ……?)

恐る恐る臉を持ち上げると、そこには、撃ち落とされた釘と、バラバラになり、今度こそ動かなくなった敵。

そして、振り向いたその先には、彼が、いた。

「か、花京院!」

「だいじょうぶですか?!」

いいながら駆けてくるその姿に目を疑いつつ、どうにか応える。

「……う、うん」

「……こ、こやつ、また、いいところで!」

今回はわしの見せ場回じやあなかつたんかい!」

その後、案の定、ふたりそろってお説教を受ける。

「まったく……ダメでしょう! ふたりとも! 油断したら!」

「ご、ごめんなさい……」

「スマン……」

「……間に合ってよかった。さがしましたよ」

一通り叱つたのち、そうして微笑む。

そんな彼にジョースターさんと口々に疑問をぶつける。

「し、しかし、花京院おぬし……どうしてここに?!」

「そ、そうだよ! なんで?!」

すると、なにやら勘違いしたのか、どこかズレた答えが返ってくる。

「だから、頑張つて探したんですって……」。

街中にいた警察から、

『殺人犯のアメリカ人が、東洋人の娘を人質にして北東方向に逃走中』

……つて無線をハイエロフアントで傍受したので、これだ! と思つて。

それを頼りに……あとは走りました」

「いや、そうじゃなくてだな。」

おまえさん、なんでわしらがスタンド使いに襲われとるかわかったんじゃ……?」

呆れ顔で、改めて問い直すジョースターさん。

「……はっ。」

「そうだ。根本的に、だ。」

しかし、彼はすこし考えたのちにこんなことをいう。

「……なんとなく、です。なんか嫌な予感がしたので」

「まじか、こいつ……」

「……」

その裏でこつそりと頭をかかえていた私。

(び、びっくりした！ 呼んだら、ほんものが……！)

心臓がまだ激しく高鳴り続けていた。

これは、そう、驚きで。そうだ。突然のことに驚いたから。そのはずだ。

(……って、あ、あれ？ ……私……呼ん……?! えええー!)

幸いなことに密かにとまどう私には気づかず、ふたりは敵スタンド使いを検分しつついう。

「……そんなことより、なんですかこいつは。本体は？」

「ああ、目星はついておる。今頃ポルナレフがおったまげとるだろ……」

*

*

*

「またも、突然だった。」

「花京院が、何の力だかしらん……謎の電波を受信して店を飛び出して行った。」

「それから少し経った頃だ。」

「なあなあ、ネーナあ……」

「ポルナレフが囁いた。」

「……オゴエツ！ ぶええー!!」

「刹那、女が口から黄緑色の液体を勢いよく吐き出す。」

「!？」

「ゲゲエーツ!! な、なんだツ？ どうした、ネーナ……ああッ?!」

「さらに驚くべきことにその女は縦に割れ、そこから相当なダメージを受けた様子の、既に血まみれで意識がない別の女が現れる。」

「なっ！ なんだーツ！ こいつは!」

「フム……よくわからんが、こいつもスタンド使いか」

「それを観察しつつ、考察する。」

「……で、今、じじいか、……あの色ボケがやつつけた……ってところだろーな」

「うそおー!?!」

驚愕の表情で叫ぶポルナレフ。信じられないのか、はたまた信じたくないのか。おそらく後者だろう。

「ふん、本当はこんな醜女なのをスタンドでカモフラージュしていたのか……危なかつたなあ、ポルナレフ！」

「そ、そんなあ……」

塩をかけられたナメクジの様にしおれる男に、慰めにもならない慰めの言葉をかけておく。

「とりかえしのつかないことになる前でよかったじゃねーか！　くくく……」
「うわぁーん!!　もうオレ、女なんて信じねえッ！」

E t e r n a l r a i n b o w

オレが花京院と保乃と、三人で必要品の買い出しにいった日のことだ。

帰り道、突如降り出す天気雨。きつとすぐに止むだろう、と雨宿りがてら、かつ喉の渇きを潤そうと一軒のカフェに立ち寄った。

各々のドリンクを楽しみつつ雑談をしていると、予想通り、いつのまにか雨は上がったようだ。

「よかった。止みましたね。あ……」

すると、窓から外の景色をみていた保乃が、なにかに気づく。

「見て！ あの山あい！ 虹です！ 虹が見える!!」

「ん？ ああ、ほんとうだ」

それを見た男は女に問う。

「あなたは虹って、何種類の色で構成されていると思いますか？」

「え？ 七色……じゃあないってことだよ？ そういうってことは」

「ふふ、そういうことです。七色ではないんですよ。」

ひとことという虹というのは赤から紫までの光のスペクトルが並んだ円弧状の光

ですが……。

なぜそんな現象が起きるか、に、答えのヒントがある」

「虹のできる理由？　太陽の光と雨とか霧とか、水が関係しているってくらいしか詳しくは知らないかも」

「そう。その詳細をいうと……虹は太陽光が空気中の水滴によって屈折、反射されるときに、水滴がプリズムの役割をするため、光が分解されて、複色色の帯に見えるんです。ちなみにプリズムとは、光を分散・屈折・全反射・複屈折させるための、周囲の空間とは屈折率の異なる透明な媒質でできた多面体のことですね。」

「へえー！　だから、今みたいな雨の降ったあととか、滝とか、ホースで水まきした時とかにみえるのか」

「そうです。ということとは？」

「無限……ってことかな。グラデーション……本当は境目なんてないわけね」

「正解。正確にいうと無数にある空気中の水滴の数と同じだけの色……というところですかね」

「はあ……」

「この男の講釈が、また始まったようだ。」

「つたく、この唐変木め。女の子はそういうことが聞きたいわけじゃねーんだってーの」

……)

そんなふうに、ため息まじりにであきれていた。が……

「はい！ 質問！ スペクトルって、厳密にはなに？ よく聞くけど、ぼんやりとしか……」

「物質の屈折率というのは光の波長によって異なるため、プリズムを出る光の方向は波長によって変わる。この現象を分散といいます。

光を分散させることによって、スペクトルを得ることができんです。

もともと『スペクトル』とは、複雑な情報や信号をその成分に分解し、成分ごとの大小に従って配列したもののことです。分野によってその使われ方に違いはあるんですが、分光学では、電磁波……ようは光ですね。これをプリズムや回折格子といった分光器を通すことにより得られる波長ごとの強度の分布のことをいいます」

「ふむ、ふむ……」

「虹について、もう少し詳しく説明しましょうか。」

あ、主虹と副虹……というのがあって、それでまた違うんですが……まあ、理屈はほとんど一緒なのでそこは端折ります。

観察者が見ることができると、無数の雨粒のうち、高い角度にある雨粒からは赤に近い光が、低い角度にある雨粒からは紫に近い光が観察者の目に届く

ため、赤……波長が長く屈折角が小さいので屈折しにくいものが一番外側で、紫……逆のものですね。それが内側という構造に見えている。

それぞれの雨粒は多色の光を反射していますが、1つの雨粒からはそのうちの1色のみが観察者の目に届きます。

たくさんの雨粒から「太陽」——「プリズムとなる水滴」——「観察者」……のなす角度によつて異なる色の光が見えて初めて虹となる。

副虹の場合には色が逆ですが、同じように説明できるわけです。

厳密には、虹はプリズムの分光と同じではなく、もつと複雑な現象なんですけどね」

「……とうとうと？」

「ええと、平たく言えば、水滴を固定して太陽光……これを入射光とします。

これを水平に入れ、入射光の高さを水滴の中心方向から徐々に上げていくと、太陽光が水滴から出る方向も次第に下向きになる。

しかし、入射光がある高さ付近になると、太陽光が水滴から出る方向の変化が小さくなり、今度は逆に上がり始める。

この高さ付近から入る太陽光はみなほぼ同じ方向に出て行くことになり、この部分だけ強い光が出て行くことになる……」

「なるほど……それで、『太陽』と『プリズムとなる水滴』と『観察者』のなす角度が、特

定の角度になつたときに虹が見える……色が分かれるわけね」

「御名答です」

「やった！物理選択じゃなかったし、光の波長とか理屈がいまいちわかつてなかったんだけど……。なんかちよつと理解できた気がする！ そのあたりわかると楽しいね！」

「ええ。自然科学、実に興味深い。」

すべての現象には理由があるのです。ひとつひとつの事象が重なり……」

「……」

(なんだ……？ こいつら……)

男の方がこういうやつ、ということはすでによく知っていたが問題は女の方だ。

驚くべきことに、嬉々として耳を傾けている。しかも、ちゃんとこの、小難しく長つたらしい話についていっているようだ。

やはり『そういう』、風変わりな娘だったらしい。この娘は。

「じゃあ……、……つてことは……」

「それはですね……」

完全にふたりの世界である。まあ、入っていく気も、興味もないが。

もう、ほおつておこう……と、中身のとつくに無くなってしまったコップに刺さつているストローをくわえながら、雨上がりの空に見事にかかる橋をみやる。

(こんなの、見ての感想なんて、ひとつだろ……)

「それにしても、ひさしぶりにみたなあ……」

とか思っていたら、ほっとするような言葉がきこえてくる。一応この娘、一般的な感性もちゃんと持ち合わせているようだ。

「ふふ、やつぱり、綺麗」

そういつて、微笑む。

「……ええ。ああ、……でも……」

そして、そこで、黙りこくる男。

首をかしげる、女。

「どうしたの？」

「……いえ、なんでも」

(ふっ……!)

どうでもいいことにはあんなに饒舌なこの男が……おかしくてたまらない。

つついっ口を挟む。

「……虹よりも、君の方が綺麗だよ。……つてな!」

「なっ!?!」

「はあ? また、ポルナレフさんは……」

誰にでもそんなこと言っていたら、本当に伝えたい時に困りますよ？　もう……」
くすくすと笑いながら、言う。

「……まあ、お世辞でも、ありがとうございます。」

じゃあ、そろそろ行きますか？　私、お会計してきますね」

そうして、スポンサーから預かっている財布をとりだしつつ、立ち上がる彼女。

レジにむかう背中を男二人で見送りつつ、問い詰められる、オレ。

「おい！　おまえ……っ！」

「へへ、おめーがさっさと言わねーからだ。代弁してやったんだっつーの」

「はあ!?　ぼ、僕はそんなこと……っ！」

「うわ！　……かわいいやつだな、おまえ。ほんと意外……」

「う、うるさいな！　なにがだよ！」

「ふたりともー！　どうしたんですかー？」

そして、店の入り口からはそんなことは露知らず、な、弩級に鈍い女の呑気な声が聞こえてくる。

「ほら、いこーぜー！」

「……くそー！」

立ち上がり背中をひとつ叩いたのち、肩を組みつつ言う。

「あ、そうだ」

「なんだよ？」

「こまつたときは言いな。いつでも相談に乗ってやろう。この、お兄ちゃんかな！」

「誰がおまえに……つてか、誰が誰のお兄ちゃんだ！ まつたく。ふっ……！」

「へへ……」

「あ、出てきた」

「……お待たせしました」

「ううん。じゃあ戻りましょう」

「おう」

平静を装い歩き始めようとする男に対し、とどめとばかりに、こそつと耳打ちする。

「(……アレが必要になつたらすぐ言え。」

いつでもオレが常備しているやつを分けてやるからな)」

「ぬあ!!? ……い、言うかあーッ!!」

「かっかっか！ 紳士のたしなみ、というやつだぞ！」

「黙れ、この変態がッ！」

そんなオレたちを見て、眩く彼女。

「? ほんつと、ふたりつて仲良しですよ。いいなあ……」

「はあ!? どこがだ! あなたの目は節穴か?! 節穴ですわね!!」

「ええ? ひどい! ……ポルナレフ兄さん、花京院くんがいじめる!! ……なんちやつて」

猛抗議を受け、そう訴えてくる妹代理。ひとつ訓戒を授けてやることにする。

「いいか? 妹よ、よく覚えておきなさい。」

男という生き物はだな、好きな女の子ほど……」

「……エメラルドスプラーツシユ!!」

「ぐはあ!」

「えええー!? にいさあーん!!」

雨はとつくに止んだはず……

……にもかかわらず、オレの身体には躊躇なき緑色の豪雨が降り注ぎ、そして頭には鮮やかな虹がかかったのであった。

「……ちゃんちゃん。……ぐふ……つ」

正面衝突

乾いた砂埃を立てながら、ごっごつした岩で構成された荒野を一台の四輪駆動車がひた走る。

移動用にランドクルーザーを調達した僕達一行。聖地ベナレスからデリーを經由。そこから北上し、現在はインドとパキスタンの国境付近の山岳地帯を移動していた。

「インドも北部に來るとヒマラヤも近いせいかさすがに肌寒いな」

ハンドルを握るポルナレフが身震いをする。上着なしのタンクトップ一枚ではそりやあ寒いだろう。真夏ばりの気温の際も我慢をして冬の学生服を着続けてきてよかった。

「パキスタンへの国境も近いからな」

ジョースターさんが応える。

国境……その言葉から浮かんだ思いを口にする。

「しかし……インドとも、もうお別れですね」

思い出す。この国に降り立った時のあの衝撃。自分たちを取り囲む大勢の乞食や物乞い。財布もすられ……散々だった。

しかし、なぜだろうか？　今やあの雑踏が非常に懐かしく感じられた。

——これがいいんですよ！　これが!!——

彼の言っていたことを、今更ながら少しだけ実感した気がした。

(……アヴドウルさん……)

怪我の具合はどうだろうか。完治には10日ほどと聞いた。まだ入院中だろう。

闘いの最中にある仲間たちと離れ、回復をただ待つしかない……それはどんなにもどかしいことか。

熱き正義の心をもつ、彼のことだ。なおさらだろう。

すると、同じ人物に対しての感慨を抱いたのか、ポルナレフが決意をこめた言葉を発する。

「オレは帰ってくるぜ……アヴドウルの、墓をきちつとと作りにな……」

「……」

だれもなにも言わなかった……余計なことを口走らないように。とくに隠し事が大の苦手である彼女は、複雑なかおでただひたすら窓の外を眺めていた。事情を知っているものからみればバレバレなその表情に、ついこぼれそうになるものを押し込める。

そんな僕らに乗せ、なおも車は走り続ける。針葉樹の林を抜け、曲がりくねった峠道

に差し掛かっていく。

ふと隣を見ると、彼女がうつらうつらしているのに気づく。

このひとも寒いのか、今後、街で使うこともあるうかと用意したチャドル（これから入るパキスタンはイスラム教……すなわち女性が肌を露出することは禁止されている。そのためにつつぽりとかぶる黒いローブのようなものだ。しかし、当の本人は呑気な調子で、「だいじょうぶだよ、私、帽子かなんかで髪さえなんとかすれば女にみえないと思おうし!」とかなんとか、本気なのか謙遜なのか……そんなすつとぼけた、非常に理解に苦しむことをぬかしていたが）を毛布がわりにし、くるまつている。

冬は苦手。と、以前話していたのを思い出す。寒いから。という至極わかりやすい理由らしいが。

ミラー越しにポルナレフもその様子に気づいたようで、声をかける。

「おーい! 眠いなら寝てていいぜ。」

「ハッ! す、すみません。だいじょうぶです。」

必死に頭を振りながら答える。変に古風で真面目なこのひとのことだ。運転してもらっておきながらそんなわけにはいかない……などと考えているに違いない。

しかし、抗おうとするその心意気も虚しく、あざ笑うかのように強烈な睡魔が彼女に襲いかかっているようだ。数分も経たないうちに、再びこくり……こくり……と彼女の

頭が上下し始めた。まさに、舟を漕ぐ。ほんとうに先人はよくいったものだ。次第に首が正常ではありえない方向へ傾いていく。

(……。すごい角度になってきだが……)

彼女が移動中にうたたねをするのは初めてではない。というか、実は割とよくあることだ。このままではまた、あとで首が痛いだのなんだの言いだすことは過去の事例からも明らかである。

というかそもそも、なぜ僕がこんなにハラハラしなくてはならないのか……釈然としない。

「……………う、……………ん……………」

車自体の揺れが強いことも相まってか、その動きはガクリと大きくなっていき、非常に寝にくそうだ。

(ああ、もう……)

傍観することに限界を感じた僕。

チラリ……と仲間の様子を見る。

運転手は前をみている。当然ながら。その他二人も窓の外の景色に目を向けているようだ。

(……………今だ!!)

気取られぬように、かつ、速やかに……。

静の動きで彼女のあたまにハイエロフアントを伸ばし、そつと自分の肩に寄せる。

「すや……」

「ふう……」

幾分か安らかな寝息が聞こえてきたことに満足する。

山の澄んだ、冷たい空気に……肩に感じる彼女の重みと温もりが、ほのかにとどく彼女の香りが……なんだかやたらと心地よかった。

が、うっかりその感覚に集中しきっていた。そんな僕は気づいていなかった。

「……ふっ……」

「くくく……」

「おい、笑うな……みてないふりをしてやれよ。ぷっ」

一様に、なにかを言いたげに、にやにやと薄笑いを浮かべている仲間たちに。

「……な、なんだよッ！ みんな、言いたいことがあるなら言えよッ！」

僕のその抗議の声はあつさりと無視され、ランドクルーザーはさらに進む。

「しかしこの辺りは道幅の狭い山道が多いな」

すぐ横は切り立った崖に囲まれ、ぎりぎり離合できるかできないか。その上、どこま

でも続く悪路。そんな道だ。

にもかかわらず、行く先を一台の車が遮っていた。

「前の車チンタラ走ってんじゃねーぜ……」

確かに、安全運転を越えた、ノロノロ運転だった。

それが出す排ガスにむせつつ、不快感を露わにするポルナレフ。

「追い抜くぜ！」

我慢しきれなくなったのか、いいつつ、無理矢理急ハンドルで狭いスペースから追いつ越しを図る。

その乱暴なアクセルワークと急ハンドルは激しい揺れを引き起こし、同時にスキール音が鳴り響き、土煙が舞い上がる。

「……………?」

(ハッ！ いかん！)

今の刺激によって、彼女が目覚めます気配を察した僕。瞬時に、何事もなかったかのように、肩の上のあたまを素早く押し戻す。

「お、おい、ポルナレフッ！ 運転が荒っぽいぞッ！」

「……………そういうおまえは、顔が赤っぽいぜ。花京院」

「ぬあ!?! じよ、承太郎!?! 気のせいだ！ それか寒いからだ!!」

「……むにや……。……?」

上手いこというな。当人は幸いまだ寝ぼけているのか、よくわかっていないようだが。

「そうか? やたらとあつたかさを堪能していたように見えたがな。くくく……」

「……目の錯覚だ」

一方徐々に覚醒してきたらしい彼女は焦った様子で前方にむかって叫ぶ。

「……あれ? 私、寝てた!? ご、ごめんなさい、ポルナレフさん!」

「いーよ、べつに。それは枕に言つてやりな。へへ……」

「まくら……?」

「いらんじやろお! やつは自ら枕となることを選んだんじやからな……にしし」

(ぐっ……こいつら、そろいもそろつて余計なことばかり……!)

そしてやつぱりさつぱりわかっていないひとが約一名。

「? どういうことですか? 意思のある枕……? 前世が人間の枕……? そんなのあるんですか? ……スタンド?」

「さあのう」

「くくく……花京院に聞いてみろよ」

「はあ!」

キラーパス、再来す。

「え？ 知ってるの？」

「しりませんよ！ そんなのあるわけないでしょう！ も、もう！ そんなこといいんですよ！

ポルナレフ！ おまえ、ちゃんと前見て運転に集中しろ！」

「ぶっ！ へいへい。オレにあたんなよなあ。」

大丈夫、大丈夫。しっかし、さすがの四輪駆動よのオー！ 荒地でもへっっちゃらさつ！

若干調子に乗っているドライバー。それを諫めるジョースターさん。

「おいおい、ポルナレフ……ほんとに頼むぞ。」

さつきだつて、あの車へ小石はね飛ばしてぶつけたんじゃないのか？

事故やトラブルは、今、困るぞ……。

わしはベナレスで医者殺しの無実の罪で指名手配されてしまっているんじゃないからな……。

無事に国境を越えたいわい……」

その台詞が終わるか終わらないか……といった時だった。

「ゲッ！」

悲鳴とともに急ブレーキを踏むポルナレフ。

「ひゃっ!」

「……………うわっ!」

慣性の法則にのっつってなだれこんでくる彼女の身体を受け止める。

「……………ごめんっ……………!」

「い、いえ……………!」

真つ赤なかおをして謝りながら、あわてて離れる彼女。

重ね重ね、今日、隣がじぶんでよかった……………なんてことおもって……………ない……………

……………はずなのだが。なんだ、さつきからこの動悸は。

そんな僕をよそに、何故かあつけにとられていているポルナレフに向けて皆が叫ぶ。

「ど、どうしたんですか?」

「なんだ? いきなり?!」

「ううっ、事故は困ると言っただそばから! よそ見してたのか?!」

「ち、ちがうぜ! み、見ろよ! あそこに立ってやがるッ! し、しんじられねえッ!」

分岐点の立札にもたれかかり、佇む一人のヒッチハイカー。

「あ、あれは……………!」

「……………やれやれだぜ」

全員がそちらを注目する。そして驚きの声とため息とが入り混じる。

「よっ！ また会っちゃったねッ！ 乗っけてつてくれるーッ！」

「アンちゃん!？」

*

*

*

「な、なんでここに！ どうやってここまで……??」

「君はシンガポールでおとうさんに会はずじやあなかつたのか？」

「うそにきまつてんじやん、そんなの。ただの家出少女よ。あたしは！」

それが当然かの如く、流れるような動きで車に乗り込みながらアンちゃんはいった。

「おい待て！ 誰が乗せるといった！」

「ダメだ！ おろせ！ 足手まといだし、この子の身が危険だ！」

「いいじゃない、これインドでかつぱらったエロ写真。ほしいでしょ？」

「コラ！ 子どもがなんちゆうもん持つとるんじや！」

「早くつまみ出せ！ ……あ、ちゃんと写真は没収しとけよ！」

「それにしても、ひとりでよく……すごい生活力のある子だなあ」

「いいから、降りなさいっての!!」

「やだやだー!! 一緒に行くー!!」

「だめじゃ!」

「おねがいよお! つれてつてー! いっしょに、つれてつてえー!!」

「だめじゃだめじゃだめじゃ……!!」

「つれてつてえー!!」

「ダメダメダメ……ッ!!」

もはや混沌の渦と化した車内。

とても収集がつきそうもないところへ、このひとの一喝が入る。

「……やかましいッ! うつとおしいぜッ!! おまえらッ!」

それは絶大な効果を発揮。一気に場が静まり返る。

「カッコいい! しびれるう……!!」

アンちゃんには逆効果だったようだが。

「近くの飛行場まで乗せてやれ。」

そこで国に……香港だったか。送り返せばいいだろう」

全員を差し置いて、最も影響力、発言力を持つ……そんな高校生の鶴の一声で、今後の方針があつさり決まったところで少女はずいっと私の隣に腰掛ける。

「お姉さん! ひさしぶりっ!」

「……………あはは、ひさしぶりー……。一回消える、って、そういうことだったんだね……………」
「てへ。大成功っ！」

ぺろりと舌を出したあと、こそつと耳元で尋ねられる。

「(……………ところで、ちゃんと承太郎のこと見張っててくれた?!)」

「え？ ……全然」

「えー！ ひどい！」

「いや、だって、無理でしょ……………」

霸王の行動を掌握するなんて。あいにくそんな能力は持ち合わせていない。

「もうー！」

そんなやる気のない私に、不満の声を上げた後、またもこの娘はごによごによとんでもないことをいいます。

「(……………あ、じゃあさあ、花京院さんとは？ なにか進展ないの??)」

「はああ?! な、なななな、ないないないないない!! あるわけないでしょー!!」

「(もうキスクらいした?)」

「するかッ！ するわけがないッ!!」

周囲に、特に本人に聞こえていないことを祈りつつ、全力で否定する。

「ちえっ、つまんないのー！ まったく、お子様なんだから」

「……。14歳にお子様言われた……」

道中、終始このように車内の中心に陣取り、相変わらずの調子で彼女はぺらぺらと語り続けた。

「だってあたし女の子よ。」

もう少したてばブラジャーだってするしき。男の子のために爪だってみがくわ。

そんな年ごろになって世界を放浪するなんてみつともないでしょ。

今しかないのよ、今しか！」

(よくしゃべるなあ……もはやみんな聞いてないし……)

アンちゃんワンマンショーをぼーっと聞きつつ、景色を眺めていた。

しかし、そんな中にも、気づかぬうちに、不穏な気配は確実に近づいてきていたのだった。

「ん……う？」

いつのまにか一台の車が、私たちの車の後ろにピッタリ張り付いている。俗に言う、煽られている……というやつである。

「さつき追い越した車だ……。急いでるよーだな」

「ボロ車め！トロトロ走りやがったくせに……ピッタリ追いきりやがって。何考えてんだ？」

するとさすが年長者、落ち着いた様子でジョースターさんという。

「ポルナレフ、片側によつて、先、行かせてやりなさい」

「ああ……」

走行ラインを道の端ぎりぎりに寄せ、窓から手を出し『お先にどうぞ』の合図を出すポルナレフさん。しかし……。

「……おいおい！どういうつもりだ？ またトロトロ走り始めたぞ。」

ゆずつてやつたんだからどんどん先行けよッ！」

またもや先ほどと同じく行く手を阻む。

まるでいやがらせみたい……なんて思っていたら花京院くんがこんなことをいう。

「……ポルナレフ。君がさつき荒っぽいことやったから怒ったんじゃないですか？」

たしかに。運転していると気が荒くなったり大きくなったりする人はけっこういるそう。交通マナーを巡つてのトラブルが原因で暴行事件に発展……といったニュースもよく耳にする。さつきの車の人も、そういう性質のドライバーだったのかもしれない。

承太郎君がポルナレフさんに尋ねる。

「……運転していたヤツの顔は見たか？」

「イヤ、窓がホコリまみれのせいで見えなかったぜ」

「お前もか……まさか追手のスタンド使いじゃあないだろうな」

「気をつけろ、ポルナレフ」

そのときだった。前方の車の運転席の窓ゆつくりと開いた。

そして、腕……いかにも腕つぶしに自信があります……といった風貌のそれが出てきてクイクイツと前後に動く。

「プツ、先に行けだよ。」

どーやられてめーの車のスピードが長続きしねーのを思い出したらしいな。

初めっからおとなしくこのランドクルーザーのうしろ走ってるや！ イカレポンチがッ！」

「ポルナレフ、おまえが悪いんじゃないぞ。挑発するからじゃ」

先に行け。そういわれて横にはみ出た時だった。

「なにイ!!」

対向から大きなトラックが猛スピードで走ってくる！

「うわあああ!! トラック！バカな！」

「だめだッ！ ぶつかるッ！」

とつさに相棒を呼び出す。

「セシリア!!」

双方の車の間にシールドをはる。

間一髪、どうにか間に合った。

反作用……コマのようににはね返しあい、道路外の壁にぶつかりお互い停止する。

しかしこちら全員、そしてあちらのドライバーにもだれも怪我人はいないようだ。胸をなでおろす。

「あぶねえ……あのままぶつかってたら即死だったぜッ！」

あわてて皆で車から降りる。

「野郎! 何者だッ! あの車はッ!」

「どこじゃ? あの車はどこにいるッ!」

先ほどの車を探すも、すでに影も見えなかった。

見果てぬ道の先をながめつつ、承太郎君がいう。

「どうやら、あのまま走り去ったらしいな……。」

どう思う? 今の野郎……

『追手のスタンド使い』か……それとも、ただの悪質な難癖野郎……か……?」

「追手に決まってるだろーがよおー! オレたちは殺されるところだったんだぜッ!」

ポルナレフさんが怒りを露わに、叫ぶ一方、疑問を浮かべる花京院くん。

「だが、今のところ『スタンド』らしい攻撃はぜんぜんありませんでしたよ……」

結局答えは出らずじまいだった。

「エンジンは異常なさそうだけ。どうする?」

「とにかく、用心深くパキスタン国境へ向かうしかないじやろう。」

もう一度あの車がなにか仕掛けてきたら、そいつが追手だろうと異常者だろうとブチのめそう」

警戒しつつも、しばらくまた山道を走ったところで、一軒の小さな出店を発見する。

「街道の茶屋か……少し休んでいくか。」

ゆっくりいけばあの車にも会わんで済むかもしれない」

車から降り、ひとつ伸びをする。

ずっと同じ姿勢でいたため、どうしても身体が凝り固まってしまっていた。申し訳ないことに、うっかりうたたねなんてしてしまったのでなおさらだろう。

(あれ……?)

ふと気づく。

車のみならず、列車にしても船にしても、何かしらに乗っているときに眠たくなって

しまうのは自分にはよくあることだ。が、その欲望に身を任せてしまうと、必ずあとで痛い目にあう……寝違えて、首が回らない……というのはしよっちゆうだ。

しかし、今回は平気だ。なぜだろうか……。

短時間だったからか？ それにしてもやたらとぐっすり寝てしまった気がする。

うやむやにされてしまったが、みんなが言っていた、スタンド枕（仮）のおかげなのか……。

疑問は果てなかった。

「どうしました？」

立ち止まって考え込んでいる私にこえをかけてくれるのはやっぱりこのひとだった。

「あ、花京院くん。いや、さつき、よく寝ちやったなあつて。

乗せてもらってる身で……駄目なんだけど。」

人に運転してもらっておいてなんて無礼な……と、再び反省をする。

「でもね、……なんか、すごく、きもちよかったんだよね。」

しかし、あのふわふわした感覚をおもいだし、つい笑みがこぼれてしまう。

「そ、そう、ですか……。それは、よかった……。です、ね」

「あ、そうだ！ しかも、今回首が無事なんだよ！」

いつも、性懲りもなく首の痛みを訴え、そのたびこのひとから、変な姿勢で寝るから

だ……と、心配、かつお叱りの言葉をうけていたため、きちんと歓びを報告しておいた。「ふふ……私もとうとう、うたたねレベルがあがったのかな？」

「なんですか、その上がってもしよーもなきそうなレベルは……。」

まあいいや。なら、そうなんじゃあ、ないですか？」

そういつてふつとわらう。

(うつ……)

それを見た途端、これまた性懲りもなく上がってしまった、心拍数。

それを誤魔化すため、ちやうどいいので、もう一度聞いてみることにする。

「で、でさ、あの、さっきのまくらの……。」

「……さあ、いきますよ」

「ええ!」

が、しかし、いかけた矢先にその言葉は遮られ、急にさっさと歩きだしてしまう。

「ま、まって! なんて……?」

なんとか彼に追いつく。

皆がのぞいていた店先を自分もみてもみると、そこでは何かを絞った汁を売っていた。

その正体を疑問に思い、眺めていると店員のおじさんが教えてくれた。

「サトウキビジュース、飲む？ おいしいよ！」

「……うむ、そうじゃな。……はっ!! なにッ！」

財布を出しかけたジョースターさんがなにかに気づき振り向く。

「や、やつだッ！ あの車がいるぞッ！」

その声に驚き振り向くと、確かにあの、先程から尽く私たちの行く手を阻んでいた車が あった。

「おやじッ！ あの古ぼけた車のドライバーはどいつだ?！」

「さ、さあ……」

私たち以外のお客さんは三人の男性……さつき見たのは腕だけで、これでは区別がつかなかった。

「どうします? 名乗り出てきそうもありませんね……」

「フザケやがってッ！」

「しょうがない、どいつがああ車のドライバーか。」

そしてそいつが追手かどうかはつきりせんことには安心して国境を越えられん……

この場合、やることはひとつしかないな? 承太郎……?」

「ああ、ひとつしかない……無関係の者とはばつちりだが」

「……全員ブチのめすッ！」

「えっ？」

とんでもない言葉が聞こえてきて、おもわず耳を疑う。

そしてそれを忠実に実行に移し、お客さんたちに掴みかかる三人の仲間。

あわててそれを止める花京院くん。

「お、おいッ！ 無茶なっ！ 承太郎、やめろ！」

ジョースターさん、あなたまでッ！ やりすぎです!!」

私も必死に、どうにか思いついた案を提言する。

「あ、あのー！ そんなことするより、まだ車自体を攻撃した方がいいんじゃない？」

「……あー！ そ、そうだ！ そのとおりだ！」

おい！ みんなやめろ！ ほら！ 撃つよ！ エメ……」

緑色の礫が放たれようとした、そのときだった。

「えッ！」

急発進し、走り去っていく、例の車。

「お、オレたち、ひよつとしておちよくられたのか……？」

あんぐり口を開けたまま、皆で唯一残された、立ち昇る排気ガスを見つめる。

「や、やつはいつたいたいというつもりだ?！」

奇襲してくるでもなく……戦いをいどんでくるわけでもない……

頭のおかしいドライバーのようでもあり、追手のようでもある……」

「おいかけてとつつかまえるぞ！ さっきのトラックとのうらみもあるしなッ！」
頷き、皆で車に乗り込む。

追いかけて始めてからもの数分。再びあの車を見つける。

「野郎ッ！ ……次のカーブでぜつたいとらえてやるぜッ！」

「あッ!!」

「ば、ばかなッ！ 行き止まりだッ！」

しかし、その先に道はなく、崖。それしかなかった。

「やつがいない！ 曲がったとたん消えやがった?！」

「まさか、墜落していったんじゃねーだろーな……」

「はっ！」

すると、急にドォーンという大音量とともに、後方からなにかがぶつかってくる凄まじい衝撃をうけた。

「なにイイッ！」

振り向くと、またもあの車だった。

「やつだッ！ やつがうしろから！」

「し、信じられん……も、ものすげー馬力で押し来やがるツ!!」
じりじりと押し出され、すでに崖は目前だ。

「つ、突き落とされるぞツ!」

前輪が落ち、どンドン車体が傾いていく……。

「うおおっ! もうだめだ! みんな! 車を捨てて脱出しろツ!」

「あッ!」

いち早く車外に飛び出ようとドアを開けるポルナレフさん。あつけにとられる皆。

「ポルナレフツ! ドライバーがみんなより先に離れるか……普通……?!」

誰がこのランクルをふんばるんだ?」

「えっ……ごっつ、ごめーん!! わあーッ!!」

花京院くんのツツコミとポルナレフさんの絶叫とともに、寄り切られた私たちの車

は、崖を落下していったのだった。

真つ逆さまに、落ちてゆく、車。

「うわあああああッ!!」

(……全員、護つてみせる……!)

衝撃に備え、セシリアを構えたときだった。

「……ハイエロファント!」

花京院くんが相棒を上方に放つ。

「花京院ッ！やめろッ！」

おまえの『法』ハイエロフアント皇』は遠くまで行けるが……

ランクルの重量をささええるパワーはないッ！ 体がちぎれ飛ぶぞ！」

「……ジョースターさん、お言葉ですが。僕は自分を知っている……バカではありませんせん。」

すると、ハイエロフアントはガチャリと、こちらを見おろすかのように崖の上に佇んでいた例の車に何かをひっつけた。

同時に、停止する私たちの車。

「止まった！」

「おおッ！ この車のワイヤーウインチをつかんで飛んでいたのか！」

「フーン！ やるな……花京院。」

ところでおまえ、相撲好きか？ ……とくに、土俵際のかげひきを！」

そして、近距離。パワー型、承太郎君のスタープラチナがワイヤーを掴み……

「手に汗にぎるよなあッ！ ……オラアッ！」

反動をつけ、思い切り引き上げる！

『ギャオーッ！』

「着地！」

見事崖の上に復帰を果たす。

ついでに強烈なパンチをお見舞いし、今度はあつちの車を崖下に突き落とす。

「ええ……相撲、大好きですよ。」

……だけど、承太郎。相撲じゃあ拳で殴るのは反則ですね」

「……ふっ」

（ふふ……）

絶妙に息の合ったふたりのやりとりに、おもわず笑みがこぼれてしまう。

「しかし、スタンドらしき攻撃は全然なかった。頭のおかしい変質者だったらしいな

……」

「ああ、どつちにしろこの高さ。もう助かりっこねーぜ。ま、自業自得だ」

あの車が落ちていった崖下を皆で窺う。

そして、先程からずっと抱いていた疑問を口にする。

「でも、一本道でしたよね？ 私たちの先を走っていたのに、いつの間にか後ろに回られ

ていました。なぜでしょう……？」

「不思議だよね……」

頷く、アンちゃん。

すると、聞こえてきた。どこからともなく……。

『……少しも……不思議じゃあ……ないな……』

「え？」

「く、車のラジオから?!」

開放したままの私たちの車の中から、確かにその音声は聞こえてきた。

『スタンド、だから、できたのだッ! ジョースター!!』

「なにイ!!」

「わしの名を! ……ということは、スタンド使いの追手!!」

「どこから電波を?! 今落ちていった車じゃあないだろうな?!」

「バカな! メチャクチャのはずだぜ!」

「いや、車自体が『スタンド』の可能性がある。

前に出会った『ストレングス力』……

オランウータンのあやつる船それ自体がスタンドだった。

その同類ということは大いにありうる」

『ホワイールオブフオーチュン運命の車輪』これが……我がスタンドの……暗示』

『ホワイールオブフオーチュン運命の車輪』?!』

ゴゴゴゴゴゴという音とともに地面が振動し始める。

「なんだ……この地鳴りは？」

「なんか、やばいぜ……」

「みんな車にのるんじや……」

「いや！乗るなッ！車から離れろッ！」

「……地面だッ!!」

その言葉と同時だった。

私たちの車を上空に吹き飛ばしながら、地中からあの車が飛び出す！

「うおおおおああつ！ オレらの車が！」

「バカな！地面を掘ってきたアーツ!!」

「承太郎の言うとおり、これで完全に車自体がスタンドということが十分わかったぜッ！」

「本体のスタンド使いは中にいるようだッ！」

「これからは我々をひとりひとり順番に殺すつもりだぞ……」

「こいつが我々を今までトラックにぶつかけたり、ガケから突き落とすのは、全員一挙に殺すためとみたほうがいいッ！」

続けざまに驚くべき光景が目に入る。

「めッ！ メチャクチャの車体がッ！」

「なおっていくッ!!」

「まるで、生物だ！」

唸るようにエンジンをふかしながら私たちを威圧する、その姿はまるで巨大な闘牛のようだった。

「変形したッ！ ……襲ってくるぞッ！」

「君たちは下がるんだ！ アンちゃんを頼むぞ。」

「はい！」

今にも突撃してきそうな車スタンドと睨み合うスタープラチナ。

「フン！ パワー比べをやりたいというわけか……」

「やめろッ！ 承太郎！ まだ闘うなッ！」

やつの『スタンド』の正確な能力が謎だ！ それを見きわめるのだ!!」

ジョースターさんが諫めようとする。

その瞬間だった。

「……ガフッ！」

「えっ!？」

なにかしらの攻撃を受けたのか、承太郎君の口から苦悶の声と鮮血がほとばしる。

「くっ……何だ今のは……何をどうやって撃ち込んだできた……？ み、みえなかつた!」

『ヒヤホアハア! 今にわかるさ! きさまがくたばる寸前にだけどなあ!』

「承太郎ツ!」

かばおうと前に出るふたり。

そんな三人に再び、あの見えない攻撃をしかけようとしてくるのがわかった。

「承太郎ツ! ポルナレフ! 花京院!」

ジヨースターさんが叫ぶ。

瞬時に相棒を飛ばす。

「! セシリア! 三人の前に! 盾になって!!」

『ちっ!』

謎の攻撃……みえないが弾くことができたようだ。

「大丈夫か、承太郎!」

「ああ、心配いらん。……が、どんな技かしらんがコントロールはいいぜ……」

「セシリア、戻って!」

相棒を呼び戻す。

すると敵のヘッドライトが、ギロリと睨みをきかすかのようにこちらを照らす。

『……女……邪魔だな……お前から、ひき殺してミンチにしてやるわ!』

「! いけない!!」

「くっ……」

どうやら私から仕留めることにしたらしい。こちらへ体当たりを仕掛けてくるつもりのようなのだ。

(こ、これは盾じゃ防ぎきれそうも……)

いろいろ試してみたところ、シールドモードは形態や範囲が自由に設定できるものの、だれか一人を指定し護ってもらおうオートガードほどの防御力はない。それでも大概の衝撃からは護れるのではあるが。

今回は普通の車ならばともかく……巨大なこのスタンドの車だ。先ほどの押し合いの際のパワーを鑑みると、おそらく突破されてしまうだろう。

(セシリアの対象を『私』にして私がアンちゃんを……)

……ダメ、だ……もしも、また……)

背筋が凍る、あの感覚を思い出す。

「……」

腹を括る。

「……セシリア、アンちゃんをよろしく……」

「えっ!?!」

アンちゃんをセシリアでむこうへと押しやる。そしてそのまま護るよう御願いする。
猛スピードでこちらへとむかってくる、敵。

狙い通り。

「なっ!?!」

「だいじょうぶ、私は……」

『死ねえーッ!』

(……今だ!)

ぎりぎりまでひきつけ、勢いよく回転レシーブのように転がりながらなんとか攻撃をかわす。

伊達に何度も車に轢かれているわけではない。そのスピードには多少慣れていた。

そんなこと自慢にもならないと思っていたが、なにが役に立つかなんてわからないものだ。

(よし!)

『チッ!』

しかし、かわせたことで、すっかり油断してしまった私は、やっぱり甘かった。
「……って……あれ? ……しまっ……」

立ち上がろうと踏み込んだ崖つぶちの足場は、もろくも崩れ去り……

「きゃ……」

私の身体は勢いよく転がり落ちていった。

……底のみえない崖下にむかって。

*

*

*

(あ……?! え……?)

何が起こったのか、一瞬よくわからなかった。

ふらふらと歩み寄り、小さな悲鳴とともに彼女が落ちていった先をみる。

そこは、ただ黒く、しんと静まり返っているだけだった。

「お、お姉さん、わ、わたしをかばって……!」

「「な、なにイツ! や、保乃!」」

仲間たちの彼女を呼ぶこえだけが、虚しく響く。

そして……じぶんも……。

「……仁美さああんツ！」

「か、花京院ツ！」

気がついたら、飛び降りていた。

『フン、まずは、ひとり！ ヒヤーツハツハ、次は……どいつだ！』

相棒を命綱にして降りつつ、ひたすら探す。

（ど、どこだ?! どこまで転がり落ちて……ちくしょう！ どうか、どうか無事で……！）

そして、ようやく、みつける。

（い、いたツ！）

幸いなことに、少し平坦になっている場所で、どうにかひつかかり止まったようだ。

「……」

「ひ、仁美さん……仁美さんツ！」

「……………う……………」

呼びかけ、揺さぶると、顔をしかめ、わずかに反応があった。

「…………よ、よかった…………」

痛々しいことに、その身体には至る所に擦り傷と青あざと…………こめかみから血がしたたり落ちていた。

そんなの当然だ。この高さ。生きているだけでも奇跡だろう。

しかし、意識がない。頭を打っているようだ。油断などできるはずもない。

(とりあえず早く上に…………!!)

彼女を抱え、相棒に引き上げてもらう。

元々の場所まで登ってきたが、皆も敵も、その姿はなかった。

(上か…………? うっ…………!)

見上げると、衝撃的なものが入ってきた。

なんとあの車スタンドが、ゆっくりだが、縦に…………崖を登っているではないか。

(くそ…………なんでもありか。あの車…………)

敵にみつからぬよう裏側からまわり、自分たちも絶壁をさらに登っていく。

「ジョースターさん!」

ようやく頂上へとたどり着き、仲間と合流する。

「花京院！ 彼女は?!」

「……息はあります……が、意識が……」

そつと彼女をおろす。その様子をうかがい、ジョースターさんは言う。

「波紋で応急処置をしたいところだが……頭か……」

……できるだけ動かさず、医者に診せたほうがいいな……」

ただの傷ならばよいのだが、頭部……脳や神経は繊細なもの。他者の波紋により悪影響を及ぼすこともあるため、その場合は迂闊に手をだせない……と前にも聞いていた。

「……やつは？」

「も、もう、すぐそこに……!」

反対側の崖下を見おろしつつ、ポルナレフが言う。承太郎がそれのため息をつく。

「やれやれだ……。やり合うしかなさそうだな。みんな、さがってる。

……やつはここに登り上がる時、車のハラをみせる……」

そこでひとつやつとパワー比べをしてやるぜ」

「なるほど……」

彼の意図を察する。

「ヤツがなにを飛ばしているか正体不明だが、

ハラをみせたときならこつちから攻撃できるかもしれん……」

全員固唾を飲んで見守る。

「来たッ！」

宣言通り、車のハラに殴りかかる承太郎。

「おおおおおー!!」

しかし、敵はそれをあざ笑う。

『フヒャホハッ！ 元気がいいねえ！ 承太郎君！ ……だがシブくないねえ！』

冷静じゃあないんじゃないのか？

まだ自分の体になにか臭っているのに気づかないのか……？』

その言葉から、あることに、気づく。この臭い……そして……車……。

「ああッ！」

「と、飛ばしていたのは……ガソリンだッ！」

先刻、承太郎を射抜いた見えない攻撃の正体は、ガソリン……それを超高压で少量ずつ、弾丸のように発射していたのだ。

「ま、まさか……ヤツの攻撃の意図は……！」

『気づいたか……しかしもうおそいッ！ 電気系統でスパーク！ 発火!!』

「ううっ！」

放たれた火種は引火し、承太郎の全身を包んでいく。

「承太郎ッ!!」

「だ、だめだ! ジョースターさん! 貴方まで!!」

孫を救うため近寄ろうとする祖父を必死に止める。

その瞬間だった。

「え!?!」

薄桃色の鳥が現れ、炎の中へ飛びこんでいく。

「せ、セシリアが?! ひ、仁美さん……?」

気がついたのかと彼女に呼びかけるも、やはり返答はないままだった。

「……………、な……………い……………」

謔言のように呟く。ただそれだけで。

(い、意識がないのに……………!?)

燃え盛る炎は勢いを増していく。

『ヒャホアハア! 勝った! 第三部完!』

浮かれて勝ち名乗りを挙げる敵。

しかし、そこに聞こえてきた。

「ほーお、……………それで、だれがこの空条承太郎のかわりをつとめるんだ?」

学ランを燃やし尽くし灰にしながらも、あの男の、声が。

「まさか、てめーのわけはねーよな！」

「承太郎！」

その身はやはり薄桃色の光で護られていた。

『あ、あの女のスタンド!? な、なんで!?』

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッ!!」

そんな疑問に答えるべくもなく、間髪入れず、ラッシュを叩きこむ!

「ぐはあ!!」

そして、本体とおぼしき男が反対から飛び出した。

同時に、ポンという音を立て、スタンドの車が普通の車に変わる。

男は情ないその姿で、必死に命乞いをしてきた。

「……………」、殺さないでッ! 金で雇われただけなんですー!」

「……………」貴、様……………それで、許されると……………思うのか……………」

目のまえが、あたまのなが……………すべてが朱色に見えた。

「ひ、ひいいいい!」

「よせ、花京院! こいつの相手をしてもしようがない……………」

早く彼女を医者に診せねば……………」

「……………っ……………!」

「コイツはふんじばつておいて……。ぶつ壊れた車の代わりにこの車で行こう……」

煮えくり返っていたはらわたをなんとかおさめ、急ぎ、車に乗り込み山を下っていく。腕のなかの彼女の意識は、依然戻らぬままだった。

どれくらい走つただろうか……。遠目に承太郎がみつけ、アンちゃんに言う。

「町だ。ちようど飛行場もある。おめーはあそこから香港に帰すからな。」

「えー！ やだ！ やだよ！ あたし帰らない！ いっしょに……」

「……いい加減にしてくれ！」

聞いた瞬間、叫んでいた。我慢の限界だった。

「……君、まだ、そんなことを言うのかい……？」

「か、花京院!？」

「お、おい、おちつけ……!」

「……もう、わかつていると思うけれど、

僕たちには……人と異なる力があり、敵に常に狙われている……。

彼女には、自分を護るだけの力は、ほんとは十分にあつて……。

本来、こんなことには、ならないはずなんだ……。

だけど、このひと……こういうひとだから。

君がいたら、余計に、こうなっちゃうんだよ。

わかるだろう……?」

「……! ごめんなさい……! ごめんなさい……!!」

「……」

(くそ!)

苦々しい思いでいっばいだった。

……許せなかった。

アンちゃんが? あの、敵が?

いや。ちがう。

わかっていた。

僕が心の底から怒りを抱いている……それはだれか、なんて。

再び、目を落とす。

その先にあるひとの瞳は、やはりかたく閉じられたままだった。

*

*

*

目を閉じて白いベッドに横たわっている。

そんな彼女の横顔をながめつつ、ただ目覚めるのをひたすら待つ。既視感でいっぱいだった。

いや、デジヤヴというのは語弊がある。つい先日、実際におなじようなことがあったばかりなのだから。

違うのは今いる場所と彼女に巻かれた包帯の量、それくらいだろうか。

そうだ……。それに……。

「……う、う……」

「……」

「ん……。こ、こ、は……。？」

「気が、付きましたか……」

立ち上がり、備え付けの電話の受話器をとる。

「……。はい、目を覚ましました。お願いします」

「花京院くん……。？」

「ここは、病院です。あなた……。自分がどうなったか覚えていますか？」

「えつと、……。いつ……。ああ、そうか……。私、崖から落ちて……」

ベッドから身を起こし……。当然だが、痛むのだろう。

一瞬かおをしかめるも、しかしそれを意に介さないかのように、やはりこんなことを

いう。

「ハッ！ アンちゃんは？みんなは……?!」

「……無事ですよ。」

「今みんなは買い出しやらホテルの手配やらで、ここにはいませんが」
「そうなんだ……よかった」

「噛みしめるように呟く彼女。」

「……」

室内にノックの音が響く。

ドアが開き、そこから担当の医師と看護師が入室してくる。

「ああ、目が覚めたようだね。どこか、痛むところは？」

「ええと……」

「いえ……なにもしなければ。動かすと右足が、少し痛いくらいです」

「そうかね。ちよつと診せてもらおうよ」

「はい」

「……ふむ。これは？」

「少し、痛いです」

「簡単な診察と、問診をしていく医師。」

「……よし。手足の捻挫と全身の打ち身、擦過傷は、処置を先ほどしていますので。頭も意識が戻ればもう大丈夫でしょう。

ただ、今日は念のため入院してくださいね。では、お大事に」
そう告げて、医師たちは退出していく。

「え!？」

「ありがとうございます」

礼を言いつつ見送る僕にまたも彼女はこんなことをいう。

「ちよっ! 入院って! 私だいじょうぶだよ。早く先に進まないと……!」

「……今夜だけでしよう。どちらにせよもうすぐ日没です。」

くだらないこと言っていないで、おとなしくしててください」

「……は、はい……」

椅子に座りなおす。一呼吸し、努めて冷静に、尋ねる。

「……で、聞かせてもらいますでしょうか。なんで、あんなことをしたんですか?」

「え……?」

「崖から落ちる……前です。」

セシリアにアンちゃんを護らせて、あなたはどうする気だったんですか?」

彼女の顔色が、変わる。

「え、だ、だって……とっさに、あれしか……。わ、私はよければかなって……」
「……違いますね」

思い返す。あのとときの彼女の、かすかな逡巡。

「あのとときあなたの頭には様々な選択肢が浮かんだはずだ」

そして、そのあとの、覚悟を決めたかのような、あの表情。

「しかし、あなたはアンちゃんだけが確実に助かる方法を選んだ。

例え自分はどうなろうとも……ね」

「そ、そんなことない！ わ、私にはそれしか思いつかなかっただけだって、言っているじゃない！」

「……あなたのその、へったくそな嘘が……この僕に通用するとしても……？」

「う……」

「……」

無言で圧力かける。

すると、俯き、黙ったのち、開き直ったかのように、呟く。

「……それが、当たり前じゃない。何が悪いの？」

「な……！」

しかし、僕の二の句は、つづく彼女の言葉によって阻まれる。

「……だって、私は……！　そうしなきゃ、私なんて……！」

震える腕を交叉させ、その身を自分で支えるように抱きしめながら……まるで泣き叫ぶように、発されたそれに。

「……え……？」

「はっ……！」

すると我に返ったのか、目を伏せ、笑顔をつくりながら、いう。

「い、いや、だって、そうでしょ？」

ね！　ほら、アンちゃん、女の子だし！

女の子の顔にキズでもついたら大変じゃない！」

瞬間、僕のなかのなにかが、きれた音がきこえた。

立ち上がり、彼女のうしろの壁を叩く。

「……っ!？」

みひらかれる、その瞳。

それをまつすぐにとらえ、告げる。

「……あなただって、おなじだろう!!」

「ッ！」

「……もう知りません。勝手に、すればいい」

「あ……。まっ……」

ALONE

——あ……。まっ…………——

かすかにきこえたそのこえに振り返ることなく、僕は部屋を出た。
ドアの前で、ため息をつく。

「はあ…………。」

「…………花京院さん」

するとそこには、珍しくしおらしい様子で少女が立っていた。
「アンちゃんか。」

彼女、目を覚ましたよ。行ってあげるといい」

微笑みながらそういうと、躊躇いがちに、こう尋ねられる。

「喧嘩、したの…………？」

どうやら聞かれてしまっていたようだ。苦笑いを浮かべる。

「…………まったく、困ったひとだよ。」

ちよつとはあのひとにもお灸をすえなきやね。じゃ、また」

「……」

なにか言いたげな、複雑な表情を浮かべる少女にそれだけ言い残し、僕は長い廊下を歩きだした。

*

*

*

(あーあ、怒らせちゃった。しょうがないよね。私が馬鹿なんだから……)

彼が出て行ってしまったドアを、ほんやりとみつめる。

はじめてだった。ほんとうに……怒っていた。

(……あとで謝っておけばいいよ。今まで誰かと衝突しかけたときみたいに。

それで、きつと支障はないし)

(……せっかく、少しだけ仲良くなれたのかなっておもったのにな。

また、同じ失敗して……そりゃあそくだよね)

(……友だちって……いつてもらえたのに……)

「……」

(やっぱり、私……駄目なんだ……)

(そっだよ。無理なんだよ。

ひとと本当に、心から接するとか……私なんかには)

(……仕方ない、よ。諦めよう。)

今までとおなじ。何も変わらない……、……だいじよ……)

「……。あ……、れ……？」

手の甲が、つめたい。

ぽたりぽたりと、こぼれ落ちてくる、雫のせいだった。

「……う……っ」

気づいてしまうと、もう止めることなどできなかつた。とめどなくあふれて流れるそれを。

(……いい、やだ！ やだよ……！ そんなの……)

(この旅では、違うって……！ そんな自分変えたいって……！)

「つく……、う……」

(……でも、もう、遅いのかな……)

そのときだった。コンコンとノックの音が響く。

「は、はい！」

あわてて涙をぬぐいつつ返事をする。

ドアが開くと同時にノックの主は飛び込んできた。

「お姉さん！」

「アンちゃん！」

「……泣いてたの……？」

少女はこわごわ、尋ねる。

「う、ううん！」

「隠してもバレバレだよ……。花京院さんに怒られたんでしょ？」

「……」

どうやら聞かれていたようだ。恥ずかしく、そして彼に申し訳なく思いつつも、もう否定する気力がなかった。

「……あはは。私が馬鹿だから。とうとう、呆れられちゃった……」

事実なのに。口に出すのがこんなにつらいとは。

また浮かんできた涙を堪え、隠すようにうえをむきつつ、努めて明るくいう。

「はあ……、なにいつてるのさ……」

すると椅子に座りつつ、アンちゃんも、呆れたようにため息をつく。

「……お姉さんが崖からおちたあと、すごかったんだよ！ 花京院さん」

「え……？」

「名前絶叫したかと思えば、自分も飛び降りていつて崖の下からみつけてきてさあ……」

かつこよかったよ！ お姉さんにも、みせてあげたかった」
「そ、そう、なんだ……」

「それに……病院に着くまで、ずーっと壊れ物扱うみたいに抱きかかえてたし……。
……すつごく心配してた。

花京院さん、本当に大切なんだね……お姉さんのこと」

「……！」
胸が……ぎゅうつとしめつけられる。ざわめいて、とまらなかつた。

「あーあ、うらやましいなあ。あたしも好きなひとに、あんな風に想われてみたい」
「！ い、いや、だから、そんなんじや……」

「はいはい。もう、いいかげん素直にみとめればいいのにさー」

「……」
うつむいている私に、アンちゃんは続ける。

「……あたしね、明日の便で香港に帰ることにしたの」
「え!? ……そっか」

顔を上げる。さみしいが……しかたがない。たしかにその方が、彼女のためだ。

「あたし、みんなに会えてよかった！ またいつか、会えるよね？」

「もちろん！ 日本にも遊びにきてね」

「うん！ 楽しみにしてる！」

「私も……アンちゃんに会えてよかった」

「うん！」

立ち上がる少女と、握手を交わす。

永遠の別れなどではないはずだ……きつと。

「……あ、ケガしてるのにごめんね！ ゆっくり休んでね」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

「あ……」

そういうと、思い出したかのように、少女がいう。

「お姉さん、あの……」

「なに？」

「あのとき……あたしを庇ってくれて、……ありがとう！」

「……！！ うんっ！！」

その笑顔が、言葉が……とても、うれしかった。

「……ほんとだ。……すごい……」

すると、なぜだか驚いて呟く彼女。

「？ なにが？」

「あのね、実は……病院に着いて、検査が終わったあとね……」

——「花京院さん。さつきは、ごめんなさい……」

「いや、僕こそ。ひどい言い方をしたね。すまない」

「ううん」

「……正直に言うよ。……少し、八つ当たりをした」

「ううん、ほんとのことだし。」

それに、気持ち、わかるから……」

「……ありがとう」

「わたし、香港に帰るね。」

「ああ……」

「でも、もう少しだけ。お姉さんが目を覚ますまで、一緒にいてもいい……?」

ちゃんと、謝りたいの」

「……。……『ありがとう』で」

「え……?」

「言うなら、『ごめんなさい』じゃあなくて、『ありがとう』のほう、言ってあげて。」

「このひと、そのほうが、きっと喜ぶから」

「! ……うん!!」——

「……………」

「なんでもわかつちやうんだね。早く仲直りしなよ! じゃあね!!」

そういつて、部屋を出ていく、少女。

「……………」

もう、抑えられなかった。

再び頬を、一筋の涙がつたっていった。

*

*

*

「はあ……………」

(なんなんだ……………! あのひとは!)

自らを自らで蔑む言葉と行動の数々。いかげん耐え切れなかった。

(まったく、自分は頬に擦り傷作つといてよく言うよ。傷痕が残ったらどうするつもり

だ!

まあ、僕は全く気にしな……………)

「つて、ちがうツ！」

なぜか浮かび上がってきた変な思考に、あわててかぶりを振る。

(……だ、だいたいだ！ 何度も、あんなに言っているのに……)

そうだ！ 僕は言つたはずだ。次に同じ事をしたら本気で怒る……と。くそ！)

ひとり、考えたくて、やってきた病院の屋上。

(どうして伝わらないんだろう？ ……どうしたら、伝わるんだろう……)

彼方に臨む山稜も、日が傾いているためか、はたまた霧でもかっているのだろうか……ぼやけていてみえなかった。

(そもそも、なぜあのひとはあんなに他人のことばかりで、自分のことはなおざりなんだ？)

手すりにもたれ、おもいかえす。

(……「そうしなきゃ、私なんて」、か。何か、あるんだ……きつと。

そういうえば、あのときも……。あのときも……。か。なんだっていうんだ……いつたい……)

「あ……」

はたと、気づく。

(知りたい……のか？ 僕は……)

(そうだ、僕は……知りたんだ。彼女のことを……もつと)

しかし考えても考えても、わからない……掴めない。

……まるであの雲のようだ……なんてありがちな表現が浮かんで、おもわず苦笑する。

(それにしても、この僕がこんなに人間関係で悩むことになるなんてな。

今までは、当たり障りのないことを言っているだけで、問題なくやってこれたからな。というか、そもそも……)

「……」

(……しかし、ちよつと言い過ぎただろうか。

……泣きそうな……かおをしていた……)

ずきりと胸がえぐられる思いがした。

あんなかおなんて、させたくなかったのに。

(はっ！ いや、少しは反省してもらわないと！)

必死に打ち消す。

(この先もつと危険が増える。というか、あんなんじやあ僕の胃がもたん！

いいんだ！ しばらくはほつとくんだ！)

つい、ほだされてしまいそうになる、自分をどうにか叱咤する。

そのときだった。

ふわり……と美しい鳥が僕の眼前に舞い降りる。

「……せ、セシリア!? どうした!? まさかあのひとの身になにか!?

……あ……」

あわてて、そう問いかけている自分に気づき、呆れてしまう。

「い、いやいや! ほっとくんじゃあないのかよ!! なんなんだよ!!」

頭をかかえる。本当になんだというのだ。

こんなに自分以外のだれかのことが気になってしょうがないなんて……

こんなに自分以外のだれかのことで頭がいっぱいになるなんて……

こんなこと……はじめてだ。

「……」

かおをあげる。

夕陽が眩しい。

「……あーもう! ほっとくとか、できるかッ!!」

振り返り、駆けだそうとした矢先だった。

「はっ!」

階段への出入り口。

その重い扉が、激しい音を立てて開かれていく。

「はあ、はあ……いた……」

そこには、この綺麗な鳥の主が、息も絶え絶え、立っていた。

*

*

*

「……。いかなきや……！」

(どうしよう……私、やっぱり馬鹿だ。全然、わかってなかった……)

「セシリア！ ごめん、どこにいるのか探して！」

相棒を窓から放つ。

(もう、行っちゃったかな……？ ……でも……！)

ベッドから降りる。

「いった……！」

接地した瞬間、右足に鋭い痛みが走る。

「っ！ ……それどころじゃあ……ないって……！」

そんなこと気にしていられなかった。

さつきから別のところの方が、よっぽど痛い。

(もう、遅いかもしれないし……傷付く、かもしれない……)
ドアを開け、廊下に出る。

(けど……それでもいい……！　このまま、なんていや！)

(……逢いたい！)

そのきもちに呼応するかのように、相棒が届けてくれる。

「……屋上だ！」

*

*

*

(ずっと……恐かった。ひとと深く関わるのが……)

おもうように、動かない足が、もどかしい。

ひきずりながら、手すりを頼りに、階段を上がる。

(わかつてもらえる、はずなんてないと……思っていた)

おもうように、動けない、臆病な自分が、情けなかった。

……ずっと、大嫌いだった。

一度の失敗で、すべてを諦めていた。

ひとを、……そして、なによりも自分を……信じられない。

……そんな弱い自分が。

(でも……。それでも……。私は……！)

諦めたく、なかった。今度ばかりは。

そして、近付きたかった。少しでも。

乗り越えようと、取り戻そうと……

まっすぐで、強い……彼に。

たどりついた、屋上への扉を、開ける。

傾きかけた陽の光が一気に差し込んでくる。

まぶしさに、おもわず目をそらしそうになる。しかし、そのなかに、たしかに、みつ
ける。

「はっ！」

「はあ、はあ……いた……」

「仁美さん……」

*

*

*

「花京院くん、あ、あの……」

「……どうしたんですか？」

大人しくしてろって、言ったでしよう」

「う、……えっと、その……」

(ど、どうしよう……今まで、喧嘩したこと、ないから……)

どうしたらいいのか、わからないよ……)

「……ご、めんなさい……私、私……！」

「……」

(わからない……けど、これだけはちゃんと、言わなきゃ……)

このひとは……私の、ほんとうの……！)

「私……。今までずっと、こんなだったから……。わからない……。わからなくて……」

「……」

「あんな風にしか、できなくて……。ごめんなさい。私には、それしか、ない、から……」

でも……！

「……心配かけて、ごめ……」。

ううん……心配してくれて……ありがとう……。うれしかった……」

「それだけ……です。じゃあ……」

(ああ、上手く、言えない、よ……)

これでは結局、謝っているだけではないか。

ちがうのに。全然、それだけではないのに。

また、涙がにじんでくる。

俯きながら、振り返り歩き出そうとした。

「……まって!! まつんだ!!」

瞬間、その言葉とともに、腕をぐっと掴まれる。

「あ……」

驚き、振り返る。

「……どうして、ですか……?」

「え……?」

「なぜ、あなたはそこまで……」

自分を犠牲にしてまで、他人を護ろうと、するんですか……?」

「……」

「それに、なんですか？」

……私にはそれしかない……つて。

なにか、……あるんですか？ 理由が……。」

「!？」

(り、ゆう……?)

あたまにうかぶ。

冷たい視線、蔑む視線、拒む視線……

(そんなの……)

いいたく……ない……

きらわれたく……な……い……

こわい……いやだ……)

「……仁美さん？」

「はっ！」

我に返る。

いま、めのまえにあるのは……ちがった。

心配そうに、真剣にこちらを見据える……

あたたかくて、やさしい……ひとつのまなざし。
 それだけ……いや、それが、あった。たしかに、あるのだ。……ここに。
 深呼吸をする。

「……私……、護れなかったんだ……」

*

*

*

小学校の、五年生……セシリアが初めて出てきてくれて、三年くらい経ったある日のこと。

「おーいー!」

「まってえ!」

ひとり帰路に着く、私を呼ぶ声に振り返る。

「ああ、二人とも、どうしたの?」

クラスメイトだった。

しっかりもののA子ちゃんと、そのお友だちのおっとりしたB子ちゃん。

「一緒に帰ろーよ!」

「もう！　なんでいつもひとりで先に帰っちゃうのよ？」

「…………ごめんごめん」

この仲良しコンビは、なぜか、ありがたいことに、私のことをいつもよく気にかけてくれていた。

「また蝶々追いかけてたらつい……。とかいうんでしょ？」

「あはは…………バレた？」

「ほんと、わけわかんないんだから……。クラスでいちばん頭いいくせに……」

「まあまあ、そこがこの子のおもしろいところじゃない」

「まあねー。はあ、あたしたちも大概かあ……」

「…………」

絶対に知られてはいけない…………わかってもらえるわけのない、秘密。

それがある私には、彼女たちを友達だなんて思う資格はない。

しかたのないことなのだ。

そのぶん、自分にはかけがえのないものがあるのだから。

それでいいのだ。

そう、思っていた。

…………はずだった。

でも、私は馬鹿だったんだ。

きつと、どこかで、思ってしまったんだ。

ふたりだったら……。いつか……

……わかってくれるんじゃないかって。

「どうしたの？」

「……ううん」

「じゃ、行こー」

三人で歩き始めて、すぐだった。

「よっしゃー!!」

「次、おれな! おれ!」

「あれは……。」

「うちのクラスの馬鹿男子どもじゃない。またあんなところで……。」

下校途中にある、踏切。

そこから線路に入り込んで、なにやら悪ふざけをしながら遊んでいるようだった。

「ちよつとひとこと注意してくる!」

そんなA子ちゃんのことを、B子ちゃんはなんでもおみとおし。

「……とかいっちゃって、あいつと話したいだけでしょー？」

「そ、そんなことないもん！」

「わかりやすいんだから……ふふ」

「ふふ……！」

(……いいなあ)

好きな男子、とか、それをからかう親友、とか……。

そんなことを思いながら、羨ましく、微笑ましく二人のやり取りを見ていた。

……それが……あんなことになるなんて。

「ちよつと！　こんなところで遊ぶのやめなよ！　危ないよ！」

「なんだよ！　いつつもうるせーな！」

「なによ！」

そんなふたりに飛びかう、野次。

「ひゅー！　いつつも熱いな、おふたりさーん！」

「う、うるせえな！」

「あっ!」

照れ隠しのためか、突き飛ばす。

よろけて、倒れる彼女。

「ふ、ふん……!」

「逃げろ!」

そのまま線路の外へ皆逃げていく男子たち。

「なにをするの!」

私とB子ちゃんはA子ちゃんの元に慌てて駆け寄る。

「だいじょうぶ?」

「いたた。うん、……大丈夫……。」

そのときだった。カンカンという音が鳴り響き、ゆっくりと遮断機が降り始める。

「あ、電車来ちゃう……早く出なきゃ。」

彼女の手を取り起こそうとした……が、大変な事態が発覚する。

「あれ……。あ、足が……抜けない!!」

「な!」

(う、嘘!?)

「ど、どうしよう……! ちょっと、あんたたちも手伝ってよ!!」

B子ちゃんが男子たちに向け叫ぶ。

「え……………」

「お、おまえいけよ！」

「お、おまえだろ？ 悪いのは！」

しかし、彼らは一様にこんな調子だった。

「…………ちよつと、痛いかも…………ごめん！」

「い、いたたたた！」

まずいことに彼女の足はがっちりとレールの切り替え部分のくぼみに填まってしまっていた。

思いきり引つ張るも痛がるばかりで、抜けそうもない。

(くっ！)

「…………遮断機の横にあるボタン押しして！ 早く！」

「う、うん……………」

B子ちゃんに言いつつ、必死に考える。

(そうだ、靴を脱がせば…………！)

「ふ、二人とも!!」

緊急停止ボタンを押し終えたB子ちゃんが叫ぶ。

「はっー！」

カーブの向こうから、列車の姿がみえた。

焦ると余計に思うようにいかない。

悪戦苦闘する私にたまらず、A子ちゃんがいう。

「も、もう、いいから……あんたも、逃げて！」

「……いやー！」

「！」

「もう……すこし……！ がんば……って！」

「ぬけ……！ あ……！」

でも、もう、……おそかった。

ブレーキが効ききらず、突っ込んでくる……。

目の前に迫る、列車。

「きゃー!!」

(いけないッ！)

咄嗟に、彼女を抱えるようにして、かばう。

「ッ!!」

……が、あまりの衝撃にふきとばされ、離れてしまう、私の手。

離してしまった……彼女の手。

「うわあー!!」

「い、いやあー!」

轟く、悲鳴。

しかし私の耳には入ってこなかった。

血まみれで、びくりともしないA子ちゃんの姿を映し出したあと、私の眼は、急速に、闇に覆われていった――

*

*

*

「……私は、護れなかった」

「こんな力を授かったくせに、自分だけのうのうと……。

しかも、いろんな人が見ていたから……」

——なんであの子だけ無傷なの？ しかも庇ってたって――

——おれ見たよ！ あいつ化け物だ！——
——何かに憑りつかれてるんだって……近づかない方がいいよ——

「まあ、……当然の、反応だよね。

で、転校する羽目になって……。

私は、自業自得だけど……家族にも、迷惑かけちゃった……。最低だよ……。」

「……その方は？ そのあと……。」

「一命は、とりとめた……らしいけど……。

詳しくは、だれもおしえてくれなかった……。私も、きけなかった……。」

「でも、転校する前に、どうしても、会いたかった。

たとえ自己満足でも……謝りたかった」

「だけど、会えなかったの……。」

*

*

*

——病院の入り口で、躊躇っていた私。

「……あんた……！」

「……あ……」

そこへ、声をかけられる。

「……なにを、しにきたの？」

彼女の『親友』だった。

「どうしてよー… どうしてあんただけ無事なの!？」

あの子だけあんな……どうして……」

「あ、あの……」

「ツ!! こ、こないで……!」

「……あ……」

振り払われる……私の手。

怯えきつた……その娘の眼。

急に、理解した気がした。

護れない自分には、存在価値など、ないのだと。

そして、こんな自分を、わかってくれる他人（ひと）なんて……
 ……やはり存在しないのだ、と……—

*

*

*

「……そのまま、私は、逃げたの」

「……今も、ずっと」

「あのとき……セシリアにこんな能力もあるって……知っていたらなあ……。
 ううん、そうでなくても……」

「……ずっと、伝わってきたこの力を、私は……」

「……護れなかったなんて……ご先祖様たちも、きつとがっかりしてるよ」
 「せめて……罪滅ぼしにもならないけど……」

そのぶん、だれかを護らなきゃ。

私には、それしかない。できること、それくらいは……。

だから、私にとつては……、もう二度と……自分だけ、助かるなんてありえない……
 「……こわいの。こわくて、たまらない。」

誰かが傷つくよりも……自分が傷つく方が、よっぽどいい」

「……」

「……ごめんね、こんな話、聞かされても困るよね……」
いたたまれなくなり、背を向ける。

「……まったく……黙ってきいていれば……」

すると、ずっと無言で聴いてくれていた彼のこえがふりそそいでくる。

春の、こもれびのように。

「ほんとうに……馬鹿なんだから……」

そして、うしろから、ふわりと、包み込まれる。

「……つらかったですね……」

「……あなたのことだ。」

自分のことはともかく、セシリアが、……伝わってきた誇らしき力が……

そんな風に言われた方がこたえたはずだ」

「！　っ……」

（な、なんで……？　なんでわかるの……？　どう……して……？）

「またもこぼれはじめる雫たち。しかし、先程のそれとは……明らかにちがう種類のものであった。」

「そもそも、どうしてあなたが悪いと思いきんできてしまっているのか。」

「あなたは、最善の行動をした。気に病むことなどない。」

「あなたのせいなんかじゃあないのに……」

「！ち、ちがうよ……そんな……」

「あなたのせいじゃない。」

「自らを責める必要など全くない。」

「……もう、いいんですよ。もう、じゆうぶんです。」

「うっ、そんなことな……！」

「あーもう、頑固だなあ。」

「まあ、無理もないか。……じゃあ……」

「そういつつ、くるりと向きを直される。」

「……う？」

「そして、私の瞳をじつとまっすぐにみつめながら、彼はいった。」

「少なくとも……『僕は』、そうおもっています」

「あ……」

「それは、わかってくれましたか？」

「う、ん……」

「よし。ならばとりあえず、今はそれでよしとしましょう」

「わかるまで……いつでも、何度でも言っておけますから。

ゆっくり、わかってくれればいい」

「っ！……う、……っく……ひっく……うああー……！」

そこで、私の涙腺は決壊してしまったようだ。

彼の胸で、まるでこどもみたいに、ひたすら、泣いた。

こんなに泣いたのはいつぶりだろう？

もしかしたら、はじめてかもしれない。

そのあいだ、彼は私のあたまを、ずっとやさしくなでてくれていた。

少し落ち着いたところで、そつと離され、代わりにハンカチを渡される。

「……まったく……。そのところ、忘れないでくださいね」

「……ぐす……はい……」

「……そのうえで！　ひとつ思い出してほしい！」

そして、高らかに言い放つ彼。

「……………」

きよんとしている私に背をむけつつ、ぼそりと、いう。

「僕……まだ怒っているんですよ……？」

「はっ！　そ、そうだった……」

それとこれとは話が別だ。当然だ。

「あ、あああ！　……あのっ！」

焦って必死に手をのばし、学生服の裾を掴みながら、おおきなその背中に、問いかける。

「そ……の、……どうしたら、ゆるしてくれる……？」

「……………」

すると彼はこちらを振り返り、人差し指を立てながらいう。

「じゃあ……ひとつ、約束してください」

「……………」

「だれかを護るのは、自分のことを護ってからにしてください」

「そ、それは……」

「……と、ただこういっても、あなたはききやあしない、ということはまだ重々わかつて

いる。

「……だから、」

「……？」

「これは、あなたのためじゃない……僕……たち、のために」

「え……？」

首を傾げている私に彼はゆっくりと説明をしてくれる。

「あなたはいつも、敵の攻撃から僕たちを護ってくれますよね？」

「それはなぜですか？」

「……？　なぜって……あたりまえじゃない……。」

怪我とか、してほしくないもの……」

「怪我してほしくないのは？　なんで？」

「え？　だって……仲間でしょう？　いやだよ……そんなの……」

「はい。じゃあ、わかりますよね？」

「……あのとき……僕……たちがどんな気持ちだったか。」

「あ……」

「もう、二度と、御免だ……あんなの」

「じぶんのこと、もうすこしでもいい……だいじに、してあげてください。」

あなただって、その、僕たちの、たいせつな……仲間、なのだから」

「……！……！……ごめん！ごめんなさい……！」

……本当に、私は、馬鹿だ。

その表情に、ようやく、理解した気がした。

「わかりましたか？」

「は、はい……！」

「ほんとうに、わかったのですか？」

「はい！」

「じゃあ……！」

眼の前に差し出される、彼の右手。

瞬間……

……べちいつ!!

……という音とともに、おでこに激痛が走る。

「い、いたっ……！」

「……これで手打ちにしてあげます」

「……ううう、……痛い……！」

「そりゃあそうでしょうよ」

込み上げてくる。それを、もう、我慢できなかった。

「……ふふ、ふふふふふ……。いったーい!!あははははは!!」

「な、なに笑ってるんですか! ほんとうにちゃんとわかってるんでしょうね!」

「……わかつてるよ! ……でも、うれしいんだもん」

「……これ、……仲間おりの、デコピン……でしょ?」

「ぐっ!う……」

「ふふ……仲間おりってこんなに、うれしいんだね」

「……ころがおどる。最高に素敵に、舞い上がって、そして……」。

(それとも……)

この一撃は、私の頭と、このころの中を整頓する効果までもあったようだ。

頭のなかにかかっていた霧を吹き飛ばして……

このころをがんにがらめに縛っていた、鎖を壊してくれた。

晴れやかで、すぐくすつきりした気分だった。

わかつてしまえば、びつくりするくらい簡単で。いままで悩んでいたのが、嘘みたい

(……ああ、きつと、そうだ。わかつちやった……。

もう、誤魔化せないなあ……)

「あーもう！　しょうがないな！」

「ふふ……」

茜色の綺麗な空をみあげて、その色がぴつたりの……そのひとがくれた言葉を思い出
す。

あせらなくてもいい。今日、この日がいつかくる……と、そう論してくれた……あの
方の言葉を。

(……師匠、予言、当たりましたよ)

「まったく、あなたってひとは……！」

困ったようにそっぽを向いてそう呟く、目の前の彼の背中を、じつとみつめる。

そして、想う。

(……私、このひとのこと、……すきなんだ)

*

*

*

「ふふふふふ……！」

「ちよつと！　いつまで笑ってるんですか！」

「だって……」

そういうわれても、にやにやが止まらないのだから仕方がない。

だいたい責任の一端はあなたにもあるのだ、といたい。……いえないけど。

「さ、いいかげんにしといてください。」

「こけつこけつ寒いでしょう？　そんな、格好じゃ……」

病室に帰りますよ」

「うん」

うなずく私にさしだされる左手。

「……はい」

「？」

「……つかまってください。さっき走ったから……足、痛いんでしょう？」

「あ……」

自分でも忘れていたが、じつはそうだった。

無理をさせてしまったせい、右足はなにもせずとも、じわじわだが鈍い痛みを発す

ようになっていた。これこそ完全に自業自得なので、かまわないと思っていたが。

「！だ、だいじょうぶだよ……！」

「また……。無理したら、いつまでも治りませんよ」

「う……」

たしかに、治らなければ結局また迷惑をかけてしまう……と、そういう考えを諫められたばかりなのだった。

それもそうなのだが、それだけではなく……自分のことを、きちんといたわってあげなさい、と。

……それをゆるしてくれたのだ。このひとは。

「じゃ、あ、えっと……失礼します」

「……はい、どうぞ」

お言葉に甘えて、彼の左腕にそっと掴まる。

（こ、これは……）

ゆつくりと歩き出す。

（は、はずかしいッ!! し、心臓が！ き、聞こえちゃったらどうしよう！

あああー！ お、おちついて！ おちついてば!! 私！

このひとにとつてはただの……親切なんだから！ 意識しちやダメだって!!）

「？」

(……つて、無理いいい！ ちかいいー!!)

恋心を自覚してしまったばかりの自分には、いささか刺激の強い……地獄のような……いや、やっぱり天国のような……そんな時間が過ぎていく。

「……はい、着きましたよ」

「あ、り、がと……」

(こつちの方がよっぽど心臓に悪い気がする……)

ふらりふらりとベッドに座り込む。

そんな私をみて、深刻そうなかおで問う彼。

「だ、だいじょうぶですか？ 顔赤いですけど……」

はっ！ もしや傷が化膿して熱が!？」

「たぶん、(いや、絶対……) ちがうから。だいじょうぶ……」

一応つつこんでおく。ポケたつもりは本人には皆無だろうけれども。

とかおもっていたら、やっぱり本人はいたって大真面目だったららしい。

「ほんとうですか……?」

いいながら、すつ……とおでこに手を当てられる。

(ひゃああ——!)

「はっ！ ……た、たしかに、今のところだいじょうぶそうですね」

もうことばにならない。必死に何度も頷く。

「じ、じゃあ……僕はそろそろ戻りますね。」

ジョースターさんたちに、あなたが起きたって報告もしたいですし」

（ああ……そっか）

「うん……よろしくおねがいます」

つい、浮かんでしまう。

（そうだよね……でも、ちよつと……さみしい……

って……ああー！ 何考えてるの……私……）

身勝手なじぶんを心で諫めていると、滲み出てしまっていたのか、こんなことをいわれる。

「……心細いなら、また、戻ってきますけど？」

「だ、大丈夫だよ！」

うれしいけれど、そんなわけにはいかない。このひとだって疲れているはずだ。

……疲れさせたのはお前だろうとかいわないでいただきたい。ごめんなさい。そのとおりです。

「また明日の朝、迎えにきますから。ゆっくり、休んで」

「うん……」

「あ、そうだ。ホテル、すぐ隣らしいので、何かあったら遠慮なく……
さつきみたいにセシリアを寄越してくれていいですからね」

「……うん」

「……じゃあ。」

立ち上がる彼に、呼びかける。

「……花京院くん……」

「はい？」

「その、いろいろ……ごめんね。……ほんとうに……ありがとう」

「いえ。……僕こそ……。……すみません」

「……もう、泣かせませんから」

（はうあーッ!!）

おもわずベッドに倒れ臥す。

「ひ、仁美さん!? ちよ、ちよつと! どうしたんですか?!」

「ななな、なんでもない……。です……」

（もう、やだ、このひと……）

「……やっぱり、僕ここにいましょうか?」

「だ、だいじょうぶ!! そっちこそ! 戻って、ゆっくり休んで! ねっ!!」

(そんなことされたら……心臓……もたない……)

「……はあ、今日はほんとうに……いろいろあつたなあ……」

眠りにつく前、めをとじて、想う……。

(……不思議なひと。なんで、わかっちゃうのかな……。

……何度でも、か……うれしかった……。ほんとうに、うれしかった……。

こんなに、あたたかいきもち、はじめて……。

デコピン、痛かったなあ……ふふふ……)

「……」

(……すき……なんだなあ。私)

「わああああー!!」

(ああー!! お、思い出したら、は、恥ずかしくなってきた……! 明日から、どうし

よう……。

すきだからって、べ、別にどうもこうも……今までとなにも変わりないんだけどさ。

ば、ばれないようにしないと!

迷惑かけるわけにはいかない! し、気まづくなりたくないっ!)

(……ほんと、私、幸せ者だよね……)

仲間っただけで……あんなに、す、すきなひとに気にかけてもらえて……。

そうだよ！ そのためにもっ！ 今まで通り……今まで通り……頑張れ、私……)

*

*

*

普段とはなんだか異なる様子が気がかりではあったものの、確かに男がそばでうろろしてはゆっくり休むことができまい。

後ろ髪を引かれながらも、僕はホテルに戻ってきた。

「……よお。やっと帰ってきやがった」

エントランスのドアをくぐると、ロビーのソファにこの男が座っていた。

「承太郎。待っていてくれたのかい？ すまない」

「いや。かまわん。大変だな、あいつのお守りも」

「……まあね。」

「ふっ。これが、おまえの部屋の鍵だ。じじいから預かった」

「ああ、ありがとう」

そして、各々の部屋に向かおうと立ち上がる。

先程トレードマークが灰と化してしまったため、イメージの異なるその服装。どうしても違和感を覚えてしまう。

「どう？ 学ランの代わり、みつきりそうかい？」

「ああ。注文中だ。明日には仕上がる」

「おお！ よかったね。しかしパキスタンでよく仕立ててもらえたなあ……」

「ふっ、ウール100%よ」

素材の問題ではないだろう。

そんなことを思っていると気づいているのかいないのか。エレベーターに乗り込みつつ、承太郎は続けた。

「……ところで、あいつ、どうだ？」

「ああ。目を覚ましたし、だいじょうぶだ……おそらく」

「そうか」

そして、自分もずっと気になっていたことを尋ねられる。

「が、しかし……あのとき……あいつ、意識なかったよな？」

「ああ」

どのときか……なんて決まっていた。承太郎が炎につつまれた、あの瞬間。

「……にもかかわらず、セシリアが君を護った」

頷く。同時に僕の部屋のある階に到着。一步踏み出す。

承太郎は、『開ける』のボタンを押しつつ、僕の背中に問う。

「覚えてんのか？ そのへん、あいつは」

振り向きつつ、正直に答える。

「……それが、ききそびれた」

「はあ？なにやってんだよ」

「こつちにも、いろいろあつたんだよ……。いろいろ……。ろ……。」

「……うわああああー!!」

（い、いかん！ お、思い出したら……。また動悸が……。!!）

……だいたい、なんだ！あの表情……。反則だッ！）

（……ほんとうに……。なんだったのだろうか、今日は……）

（なんだかんだで、たくさんふれてしまったし……。抱きしめて、しまった……）

（ち、ちがうんだ！ あのととき……。彼女のきもちが、痛いほどわかってしまって……）

な、なんとか、なんとかしてあげたくて……。つい!!）

（ずっと、長い間、じぶんを責めて……。苦しみ続けていたんだな……）。

……僕は、少しでも、楽にしてあげられたんだろうか……。彼女の心を……）

（でも最後はわらってくれた……。な。……。うれしかった……）

さつきまであんなに泣いていたのに、若干笑いすぎだろう……とおもわなくもなかったが。

……いいのだ。やたらとうれしそうだったから。それで。

(そうだ！ そんなわけで、やましい気持ちなどこれっぽちもないツ!!

すごくやわらかかったなあとか、いい匂いがしたとか……思つてないツ……!

……入院着が薄いのがまたいかんだ……けしからん!

……おかげで……感触が……もう……こう、……ダイレクトに……つてえ!!)

(ちがうんだ！ うがあー!!)

「……なんか……大変だな、ほんとうに……」

悶え苦しむ僕に承太郎はすべてを察したかのように言う。

「承太郎、……僕はもう、長くないかもしれん……」

度重なる頻脈……動悸、息切れ……熱発……

「……へんな病にでもかかってしまったのだったら、どうしよう……」

「ふーん。そりゃあ、医者でも草津の湯でも無理なやつだ。あきらめろ。……じゃあな」

苦悩する僕を尻目に、エレベーターの扉は無情に閉まる。

「……なんだよ、それ……」

重症だ。

火照った身体にはそんな冷たい返答が、すこし心地よいくらいだった。

MOTEL

「うー……」

時計を見る。

そわそわと落ち着かない。

パキスタン山地の街の病院に私が担ぎ込まれてから、一夜が明けた。

今日はアンちゃんを見送ってから、次の目的地にむけて出発することのこと。

その前に彼が迎えに来てくれると聞いていた。

(もうすぐ、かなあ……)

そぞろな意識でいっこうにページが進まなくなってしまった、読みかけの小説を閉じ

バッグにしまう。

やたらと早く目が覚めてしまったため、すでに準備は万端……なはず。

が、また不安になり、壁にかかっている鏡で確認してみる。

そこに映し出される、じぶんのすがた。

(……変じゃあない……だろうか……)

そんなに何度ながめても、鏡なんて所詮光の反射なのだ。実像以上のものが映し出さ

れはしない……そんなことはわかっていた。

しかし、たとえ悪足掻きでも、すきなひとの目に映る自分は、すこしでも可愛くありたい……と。そんな乙女心が、生まれて初めてわかってしまった。

睡眠最重要視……朝起きて30分足らずで家をとび出る生活を送っていた自分の中にも、ちゃんといっぱしの、こんな女の子らしい感情がうずまっていたとは……なんともむずがゆい感覚がする。

(……絆創膏が、情けない。)

そして、やっぱり、目が、腫れているよね……。ああ、さっさと冷やしとけばよかった……)

昨日泣きすぎた代償である。しかたがないというものだが。

(はっ！ ああーっ!!)

そしてそれをきっかけにまたおもいだしてしまった。あの……

(わ、私、よく考えたらなんてことを……！)

胸にかおをうずめて、あんなに泣いて……

(は、鼻水つけちゃったりしてないよね!? ああああ……)

恥ずかしさと申し訳なさでいっぱいになる。

(でも……)

やさしく包んで、あやすようにあたまをなでてくれていた。あのあたたかい感触。おもいだすだけで、また胸が高鳴ってきてしまう。

(ふああ!?! ど、どうしよう……!?)

こんなことでは実物の前では一体どうなってしまうのやら。

そもそも浮かれるのもほどほどにしておかねば。敵がまた迫っている可能性だって高いのだ。

(……公私混同はいけない。きっちりけじめをつけなきゃ!)

気をひきしめるべく、キツと鏡の中の自分をみつめ直す。

「……なに百面相しているんですか?」

「きゃあああー!」

瞬間、不意打ちまがいにきこえてきたそのこえに、ついけつたいな悲鳴をあげてしま
う。

「うわあ! な、なんですか?! そんなに驚かないでくださいよ……。」

「か、花京院きゅ……っ!?!」

振り返ると、そこには『実物』が心外極まりない……そんな面持ちで立っていた。

そして……囁んだ。

「だ、だって！ 急に……」

「いや、開いてたから。急につて……一応ノックはしたんですが」

ドアを指さしながら、いう。

「あ、ああ、ほんとだ……。」

たしかに間抜けにも開けっ放しだ。そういえば、さつき空気の入れ替えをしてからそのままだった。

しかし、一体いつからみられてしまっていたのか……は考えないことにした。消えてなくなりたくなりそうなので。

「相変わらず不用心なんだから……まったく」

「はい……気をつけます……」

「はい、素直でよろしい……のはいつものことか。頼みますよ、ほんとに」

なんていって微笑む彼。

「っ！ ええと、……おはよう」

「ああ……おはようございます。って、なんともいまさらですね。ふっ……」

再び存在感を主張してきた心臓の音を誤魔化そうと、よく考えたらまだしていなかった挨拶などをしてみた。

……また笑われてしまつて逆効果だったけれど。

「で……どうですか？ 体の調子は」

「あ、うん。だいじょうぶだよ」

事実だった。全身痛くない、といったら嘘になりそうだが、骨折には至らなかつたところが幸いしたのか体調的にはすこぶる良好であつた。個人的極まりない、他の問題はあれど……。

さらに幸いなことにそんなことは露知らず、な様子で心配症な彼はさらに訊ねてくれる。

「足は？」

「歩くくらいならなんともないよ。走るのはまだやめといた方がいいかもしれないけど」

「ええ？ 昨日の今日で？ ほんとですか？」

「ほんとだって。前にもいったでしょ？ 結構丈夫なんだって、私。」

あれから例のおまじないもしたし……」

「ああ、あれか。あれ、捻挫にも効くんですか？」

「うん。鯛の頭にもなんとやらつてやつじやあないかな？」

「ふーん。まあ、回復が早いのはいいことですが……。」

無理しないで、つらいときはちゃんと教えてくださいね」

「うん。……ありがとう」

「……いえ」

「……あ」

「つらかったこと、といわれ、はたと、おもいだす。

「ん？　なんかあるんですか？」

「い、いや、そんな、たいしたことじゃ……」

「いいから！」

勢いに押され、答える。

「あ、あの、ええとね……シャワーが、つらかった、かな」

朝、先生の許可が下りたので、シャワー室をお借りしたのだ。

非常に気持ちよかった、のだが……。

「……お湯が、もう、擦り傷にしみてしみて！　ちよつとした苦行だったよー。つて、そ

れだけ。

ね？　たいしたことないでしょ？　……あれ？」

「あ、ああ……そ、そうですか。……そうですよね、……そうか……」

すると、なぜかうつむいてなにやらぶつぶつと呟く彼。

「？　どうしたの？」

「な、なんでもないです！

で、では少し早いですが、ぼちぼち行きましようか。

足に負担を掛けたくないし。準備はできていますか？」

「うん」

そうして当然の如く、さりげなく荷物を持つとうとしてくれる彼。

「あー、だいじょうぶだよー自分で……」

「もう、また……。なに言っているんですか。」

それじゃあ僕が来た意味ないじゃないですか。

これくらい軽いものです。

……そもそもは、あなた自身をはこぶつもりで来ていたんだから……ね？」

「ぐっ……。」

瞬間、顔が熱くなる。

その視線に……しぐさに……ことばに……

彼にしてみればなんでもない、ちよつとしたことなのだろうが、こちらとしてはいちいち一大事だ。

(……もう……、ほんとに……このひとは……)

この短時間に何度ドキドキさせれば気が済むのか。こっちの気も知らずに……こ

まったひとだ。

まあ知られても困るのだけれども。

お世話になったお医者さん、看護師さんたちにお礼を伝えたのち、車へと移動する。昨日からずっと、普段通り話せるだろうか……とか、おもっていたが、そんな不安は杞憂に終わった。

彼との会話は、いつものように……たのしくてしかたがなかった。

おもえばはじめからこうだった。元来口下手であがり症で人見知りなじぶんが……不思議なものだ。

終始この調子で、幾度となく心臓を壊されかけたことはいうまでもないけれど。

*

*

*

「はい、これ、日本の私の住所！」

「これ、あたしの！」

彼女を迎えに行ったのち、空港へ移動。

僕らはふたり、皆を代表して、故郷に戻る少女を見送りにやってきた。

住所交換をしたり、時間まで名残を惜しむ彼女たちを微笑ましくみる。それにして

も、いつのまにか、すっかり仲良くなったものだ。おもえば道中、よくふたりでこそそこそと話していた。まあ女の子同士の秘密の話……というやつなのだろう。……気になつてなどいない。

「……手紙、書くね！ そつちもちようだいね！ うふふ、いい報告、待つてるから！」
「うん。旅が無事終わつたら報告するね！」

「またも含みを込めたいいい方をするアンちゃん。必殺の天然で華麗にスルーされていくようだが。」

「ちつがーう！ もう……。花京院さん、ちよつと！」

そして、なぜか指名を受ける、僕。

「なんだい？」

「彼女……、びつくりするくらいにぶいんだから。」

「はつきりズバツと言わなきゃ、いつまでたつても伝わんないよ！」

「……なにを、かな？ 僕にはさつぱり、意味がわからないね。」

「負けじと柳の如し微笑みで流す。」

「……もおお！ なんなの、このふたりー！！」

「いつのまにかすっかり仲なおりしてるしき。アホらし……。」

「……もう、泣かせたりしちや、ダメだよ！」

「フツ……心配なく」

無論いわれるまでもない。本人にも昨日宣言済みである。

が、しかし、こまつたことに、ひとつ、僕は気づいていた。

彼女の……わらったかおをみるのがすきだ。……それはもちろんそうなのだが。なきがおも、こう、けっこう、……すきだったりするかもしれないことを。

いや、違う……すきというのは語弊があるかもしれない。

伏せられた目に、濡れそぼった睫毛……その隙間にみえる大きな瞳……

そこからこぼれた白い頬をつたう涙の筋が美しく、輝いていて……

すごく、きれいだと、おもった。

そして、涙のあとの、あの笑顔がまた、ひとしお、というやつで……。

……念のためいっておくが、そういう意味合いでいっているわけではない。

くどいようだが造形的に、だ。

あくまで、彼女は仲間……友人なのだから。

友人のなきがおをみてよろこぶって……なんだそれは……。

我ながら人としてどうなのか……と思わなくもないが……知らん。

「……ところで、承太郎は……？」

「うーん、連れてきたかったんだけど……ごめんね……。」

——おれは忙しいんだよ。学ランの受け取りもあるしな——
とかなんとかいって、やつは結局どこかへ行ってしまった。

まあ、こちらも友人として弁護するなら照れ臭いのだろう。あいつのことだ。
アンちゃんも、残念そうながら、そのあたりはちゃんとわかっているようだ。

伊達に彼に恋をしているわけではない、ということか。

「そつか……でもその方が、承太郎っぽいもんね。」

じゃあ、伝えといて！」

「『お母さん、助けられるように祈ってる！ がんばれ!! いろいろありがとう!!』って

や」

「フン……」

そうして、元気に旅立って行った少女を見送ったのち、仲間たちの待つ車に合流。
僕達も次の目的地にむけて走り出した。

預かっていた言葉を伝えるも、そっけない態度で帽子をかぶり直す承太郎。

しかし、予想通りだった。

あとから聞いたら、この男は飛び立つ機体を離れたところからちゃんを見送っていたらしい。

「あれ？ 承太郎君、もしかして……ちよつと、寂しい？」

「うるせーな。ねーよ」

「……ふふ……」

わかりにくい男のわかりやすい態度に、おもわず彼女とふたり、かおを見合わせて笑ってしまう。

「チツ、うつとーしいやつらだ……」

そして昨日からの疑問をぶつけられる。

「おい、花京院、あれ、聞いたのか？」

「ああ。保乃宮さん、さっきの話ですけど、もう一回、いいですか？」

「ああ、さっきの話？ うん。信じてもらえるかわかんないけど……」

彼女は話し始めた。耳を疑うような事実を。

「あのとき、なんか、夢みたいなのを、みていて……」

承太郎君が燃えそうになってたから、いけない！ って思ってセシリアにお願いしたんだけど……」

「……まじか……」

「はい。私も、まさか現実に起こっていたことだとは……」

僕は先程すでに驚き済みであったので別として、初耳の他の仲間たちは皆それを隠せないようだった。

「まだ、セシリアには僕らの知らない能力が、あるのかもしれないですね」

と、感想を口にする。それに対しお気楽な調子で、しかしある意味もつともなことをいうポルナレフ。

「まあ、偶然でもなんでも、よかつたんじゃね？ 燃えなくて」

「まあな。助かったぜ」

そんな承太郎に彼女はいう。

「今回は、制服は助けられなかったけどね」

「フン……」

「かなり霧が濃くなってきたな……。運転は大丈夫か？ ポルナレフ？」

本日もひたすら山岳地帯をひた走る。

しかし、正午を過ぎたあたりから、生憎の悪天候である。周囲を霧に包まれ、視界はかなり悪くなっていた。

「うーん、ちよつと危ないかな……。なにせこの道幅で、ガードレールもない。」

「ちよつと間違えば崖の下に真つ逆さまだからなあ……」

「仕方ない、まだ時間は早いが……次の町で早めに今日は宿をとるとしよう」

「ここで無理をして事故でも起こし、また車を失つてしまえば、より時間をロスしてしまうことになる。着実に先に進むために、安全策をとることになった。」

「なかなか大きな町じゃねえか」

「そうしてたどり着いた町は、霧のために全貌があまりはつきりしないが、レンガ造りの建物が整然と立ち並んでおり、山間の町にしては栄えている……そんな印象だった。」

「とりあえずホテルを探すか」

「あその人に聞いてみようぜ」

「ポルナレフが壁にもたれて座り込んでいる一人に目をつけ、声をかける。」

「おっさん、すまねーがホテルをさがしてるんだがよ……」

「が、しかし、そこで異常に気付いた彼女が言う。」

「ぼ、ポルナレフさん！ そ、その人……！」

「なにイ！ し、死んでるッ！」

「その男性は、既にこと切れていた。その顔に恐怖の表情を浮かべたまま。」

「全員で駆け寄り、注視する。」

「拳銃を握っている……しかも発砲したばかりみたいだ……」

「しかし、ざっとみたところ傷もなにもないぜ……どういうことだ……う？」

とりあえず、こういう時にまずすべきこと……と思い、通りすがった女性に向けて叫ぶ。

「おい、その人！ 人が死んでいる……警察に通報を！」

「はあ……なんでしようか……」

しかし、その反応は思いがけず……鈍いものだった。

戸惑いつつも、隣にいた彼女も強めの口調で言う。

「い、いや、だから！ 人が死んでいるんです!!」

「はあ……それで？ わたしになにを……?」

「警察を呼べと言っているんだ！」

「……はいはい……警察ですね……」

そうして無表情のまま、ふらふらと通りのむこうに歩いて行ってしまった。

その様子を、ふたりで呆然と見やる。

それはその女性だけの話ではなかった。

通行人はいるのだ。幾人も。

しかし、その中で、こちらを少しでも気に留めるものは、誰ひとりとしていなかった。

「な、なに……？　この町の人たちは？　人が死んだというのにいくらなんでも無関心すぎない？」

「ええ……しかも銃も発砲されているというのに。誰も気づかないのか……？」

「なにかおかしいよ……。霧も……ますます濃くなってきたみたい……」

「うす気味悪いな……」

深い霧はすでに町全体をすっぽりと覆っていた。

不穏な空気が充滿する中、承太郎が、死体の前でしゃがみ込みながらいう。

「じじい、やはり気になる……もう少しこの死体、調べようぜ」

「あ、ああ」

死体を検分し始めてからまもなく、ジョースターさんが気づく。

「……あつ！　傷だ！　喉に丸い穴があるぞッ！　これが死因か……？」

「しかし、なぜ血が流れ出ていないんだ？」

こんな深くでけー穴があいているなら、大量に血はでるぜ。普通ならよ」

承太郎がもつともな疑問を口にする。

「とにかく、もう少し調べてみよう」

男性の荷物から、この人がインドからの旅人であることなどがわかった。

が、それどころではない事実が判明する。

「なッ！ こいつ……体中に……！」

傷をよく見ようと、ジョースターさんが上着を脱がせると、驚くべきことに男性の上半身には、直系15cmくらいだろうか……数え切れないほどの黒い穴が開けられていた。

「うげっ！ ボコボコじゃねーか！ トムとジェリーのマンガに出てくるチーズみてーに……！」

「それにどの穴からも一滴も血が出ておらん！」

「どういう殺され方なんだ!? どんな意味があるのだ!?」

その疑問の答えはなくとも、全員の頭に浮かぶ。

（追手、か……）

「こんな芸当、できまい。……スタンド使い以外には。

「気をつけろ……とにかく、これで新手の敵が近くにいるという可能性がでかくなっただけ……！」

「みんな！ ジープにのつてこの町をでるんじゃッ！」

そういうやいなや、レンガ塀を飛び越えようとするジョースターさん。

「あっ！ なにイ！」

「あ、あぶないっ！」

しかし、壁の向こうにあるのは鋭く尖った鉄柵。それだけだ。

「ばかなッ！ おおおおッ！ 『隠者の紫（ハーミットパープル）！』」

茨をロープ代わりに絡めぶら下がり、何とかそれが突き刺さるのを阻止する。

「ひいひいひい！」

「おい……じじい、ひとりでなにやってんだ？ アホか？」

そう。傍目には、今の彼の行動は謎だらけだった。

自ら壁を乗り越えた先にある針地獄につっこんでいった……そうとしか見えなかった。

「オーツノオー！ 今ここにジープがあったじゃろツ！」

「え？ ジープならさつきあつちにとめただろーが。」

「で、でもたしかに……ん……？」

そのときだった。

霧の中から、ヒタ、ヒタ……とゆっくり、歩いてくる。

一人の老婆が。

僕達一行のまえで、ぴたりと止まると、ペこり、とお辞儀をする。

ペこり……とこちらもそろって返すと、老婆はこんなことを言い出す。

「旅のおかたのようじゃな……この霧ですじゃ。」

もう町を車で出るのは危険ですじゃ……ガケが多いよつてのオ……

わたしや民宿をやっておりますが……

今夜はよかつたらわたしの宿にお泊りになりませんかのお……

安くしときますよつて」

「おおーっ！ やつと普通の人間に会えたぜ！」

「ささ、参りましょう……こちらですじゃ。」

歩き出す、老婆。

嬉々としてそれに続くポルナレフ。

「……ん？」

その様子を見てみると、裾を引かれる感覚がした。

「(ねえ、……だいじょうぶかな？……こんな中まともつて……逆に……)」

彼女だ。僕に小声で囁く。

「(ええ……いかにも……ですね。」

この霧では車を出すのは確かに無理なので……ありがたい話ではありますが……。

さっきの死体の件といい……この町のどこかにスタンド使いが潜んでいる可能性が

強い……。

この濃すぎるほどの霧もやつらにとっては絶好のチャンス……今夜はもうずっと油断は禁物ですね……」

*

*

*

「しかし、だれが襲ってくるわけでもねーが、不気味な町だぜ……」

案内してくれるというお婆さんの後を全員でついていく中、ポルナレフさんがあたりを見回しながら言う。

「ささ、ジョースター様、これがわたしのホテルですじゃ。

小さいですがけっこういいホテルだと自負しておるのでござりますですよ。

今、他にお客はおりませぬが……」

目的の建物に到着し、お婆さんがそういった瞬間、このひとの目がきらりと光る。

「……待ちな、婆さん、あんた……今ジョースターという名をよんだが。なぜその名がわかった？」

「はっー！」

承太郎君の鋭い質問に、皆で息をのむ。

振り返りつつ、ポルナレフさんを指さしながら答えるお婆さん。

「……いやですわねえ、おきやくさん。今さつきそちらの方がジョースターさんって呼んだじゃありませんか。」

「え？ オレ?! そういやあ呼んだような……」

「言いましたよお！ 客商売を長年やっているとお客様の名前はパツと覚えてしまうもんだんですよ〜！」

「……」

訝しげな表情ながら、口を閉ざす承太郎君。

そして、ポルナレフさんも気づいたように尋ねる。

「あれ？ おかみさん、ところで、その左手はどうしたんだい？」

お婆さんの左手には、包帯が分厚く巻かれていた。

「あ、こ、これ？ これはヤケドですじゃ……歳のせいかわツカリ湯をこぼしてしまつてのオー！」

「歳？ 何をおっしゃる！ こーしてみると40くらいに見えるよお！ デート申し込んじやおーかなあ。へへ！」

「ひゃひゃ！ からかわないでくだしやれよ、ぽ……お客さん♪」

「ははは……うふふ！ ヒヤハハ……」

樂しそうに笑い合う二人。

(！…今……気のせい……？)

しかし、私は一瞬間見た気がした。

能面のような笑顔の隙間に……ポルナレフさんを鋭く捉える、ぎらりと光るお婆さんの視線を。

「……」

ちらりと他の仲間たちを窺うと、やはり高校生男子二人組も、なにかを考え込むようにその様子を見守っていた。

「さ、宿帳にご記入を……わしは部屋の鍵をとってきますよって」

フロントにて、テーブルの上の宿帳にむけて、順番にペンを走らせる。

「はいよー……。ほい、ジョースターさん」

「ああ。……。ほれ、次」

祖父から孫へ。

「おう……。……ほらよ」

残る私たちに。

「……」

一瞬目を見張る。そして、頷きあい、自分たちも、綴る。

「こちらとその隣のお部屋になります。どうぞごゆっくり」

少しして、鍵を手に戻ってきたお婆さんは階段を登った先の奥の部屋まで案内してくれた。

先程言っていた通り、他のお客さんは誰もいないようで、ホテル内は静寂に包まれていた。

長い廊下に整然と同じような扉が立ち並んでいる。ただそれだけであった。

「夕食の用意ができましたらまた呼びますよって」

「サンキュウ、おかみさん」

そういつて、またヒタ、ヒタと階段を降り、消えていく……。

とりあえず、一つの部屋に集合する私たち。

そこで承太郎君が皆にある注意を促す。

「……ひとつ言つとくことがある。ふたりはわかつてると思うが……」

このホテルにいる間、おれの名前は呼ぶなよ。いいな?」

花京院くんも言う。

「ええ。このひとの名前もね。お願いします。あと僕の名も。苗字はかまいませんから」

「そうなのか？ わかった」

「よくわからんが？ いいぜー」

頷く、仲間たち。

「しかし……やはり、どう考えてもこの町は異常です」

「ああ。あの死体といい、追手のスタンド使いが近くに潜んでいる可能性が高い」

「うむ。単独行動は避けるべきだろう。で、今日の部屋割りだが……」

本日の作戦会議を再開する。ジヨースターさんの言葉を受け、何かを思いつくポルナレフさん。

「あつー！ そうだ……そうだよ！ なあ、や……あ、そうか。」

ええと、おほん……妹よ。こんなところで一人になるのは不安だろう？

お兄ちゃん、今夜は同じ部屋で……ぐはッ！

「……下心が見え見えだ……！」

いい終わる前に隣から入る、鋭すぎるツツコミ。

「いつて！ くそ、なんだよ！ 実際問題あぶねーだろ!?」

「……まあ、それは……たしかにそうだが……」

それにめげることなく、こちらへと向き直る。

「だから！ な？ なっ！」

「い、いえ、大丈夫ですよ……私。いつも通り一人で。セシリアがいてくれますし」
その勢いに若干押されつつも丁重にお断りを入れる。

が、さらなるポルナレフさんの追撃は止むことはなかった。

「だ、め、だ！ おまえの存在と能力はあのホルホースのやつが報告しているはず。
敵もなんらかの対策を講じてくるだろう……」

例えれば！ 危害を加えられずとも、寝ている間に拐われたりしたらどーすんだ！

「う……」

「大丈夫だつて。お兄ちゃんを信じなさい！ なっ！ ぬふふふ……！」

「うう……」

そんな私の前にまたも立ちほだかってくれる、このひと。

「……信じられるか！ おまえと同室な方がよっぽど危険だ。」

「ああ？ 花京院、さつきからてめー！ じゃあどうすんだよ？」

「は？ ど、どうするって……」

「なら、おまえが一緒の部屋になるか？ え？」

「ぐっ！ ……そ、それは、その……」

ま、まずい、だろう……、そんなの……」

「ええー？ なんでだよ？ なにが？ どーしてまずいのかなあー？ 言ってみろよ。」

ほら、お兄ちゃんに言つてごらん！」

「う、うるさい！ 黙れッ！ この全身下半身男がッ！」

「ああ?! なんだと！ このチェリー野郎ッ！」

取っ組み合いを始めんとする彼らの間に割つて入つたのはジョースターさんだった。

「まあまあ。じゃあ、ここはわしが一緒に……」

「……」

「……却下で」

「……じいさん……顔がエロい……」

戦争が勃発寸前のはずだった、ふたりの意見がぴつたりと重なる。

「なんじゃと? この娘はわしにとつちやあ孫みたいなものじゃぞ! 失敬な!」

「そのふぬけた、にやけづらをなんとかしてからいえや……じい……」

加えてやつぱり辛辣な孫。そしてポルナレフさんが茶化す。

「つてか、じいさんくらいの大富豪なら、こいつくらいの歳の若い愛人とかたくさんい

だろ? いいなあ。おい」

「お、おるか! わ、わ、わしやあ、神に誓つて嫁さん一筋じゃ……!」

「汗、ふけよ……はあ……」

何故か挙動があきらかに怪しい……そんな祖父が、ため息をつく孫にどうか言い返

す。

「な！じよ……！　つと！そうだった。

お、おまえ！何ひとりで涼しいかおしとんじや！なら、おまえが……」

「ああ？　おれは別にかまわんが……。それならまた、ひとつ言っておくことがある
……」

「？」

「……おれはすきでもなんでもない女でも……抱けるぜ？」

「ぬあー!!　……だめだ!!　絶対にだめだ!!　僕が許さんツ!!　許されるか、そんなこ
とツ!!」

「うるせーな、冗談だ。つてか、花京院、なんでおまえの許可がいんだよ……」

「……」

(うう、なにこれ……)

……師匠……はやく帰って来て……。はっ！)

残念ながらこの場にはいない……こういうときの唯一の常識人のお早い復帰を心か
ら願っている、痛くなってきた頭に光明がおとずれる。

「そ、そうだ！　よく考えたらなんで二人の方に私が……！　三人の方でいいじゃない
ですか！」

私たちの人数は5人なのだから……一人を作らないとすれば2：3で分かれることになる。

「ハッ！ た、たしかに！ それなら安心……」

「ねっ？ でしよう？ よし、そうしましょ……」

そう言いかけた彼と私に、承太郎君とポルナレフさんが言う。

「ああ？ なんで三人なら安心なんだよ？」

「そうそう、逆にアブノーマルだろ。そーいうのがしてみたいのか？ へへ……」

「……はあ？」

「……はっ！」

わけのわからない私。一方、なにかに気づく彼。

「……さんび……ぐあ！」

にやにやとなにかをいいかけた、ポルナレフさんの顔面に再び彼の正拳突きがめり込む。

「だ、駄目だ……こいつら!! はやくなんとかしないと……!!」

「え？ あの……。なに？ どういうこと？」

「あ、あなたは黙っててください！ そんなこと知らなくていいッ！」

頭を抱える彼にそう訊ねてみるも答えてはもらえず、さらに横からよくわからないこ

とを言う承太郎君。

「教えてやればいーじゃねーか……実地で。おまえのスタンドならふたり一役可能だろう？」

「なんならおれが手伝ってやってもいいが……くくく……。」

「がああツツ！ 誰が頼むか!! もう、なにも言うなあーツツ!!」

「そうして、しまいにはジョースターさんが匙を投げたかのようにとんでもないことを言い出す。

「ええい、埒が明かん！ もう、おまえさん、自分で選べ」

「はあ!? わ、私がですか!?!」

「いいじゃねーか。そうしろ。」

「この中から、共に一夜を明かしたい男をな……くくく……。」

「ち、ちよつと、承太郎君！ そんな言い方やめてよ……!」

「……いつしよにすごしたいひと……なんて、そりゃあ、きまつて……」

「……ツツ!!」

「……にぎやああああ!!」

とんでもなく破廉恥な想像をしてしまい心のなかで絶叫する。

(ご、ごめんなさい、ごめんなさい……!!)

選べない。……逆に。……ぜったいに……。

というか、なぜ私はこんな公開処刑を受けるはめになっているのだろうか。

だいたい、もしも彼と同室になったとしても、絶対にそーいう展開になるはずはない。西からお日様が昇るよりも天地がひっくり返るよりもありえないことだ。それはわかっているが……。

自らの心にたしかにある、このきもちに気づいていなかったらよかつたのかもしれない。……

(……うん、だつたらたぶん平気でおねがいしていただろうなあ、彼に。だつていちばん安心だし。)

あちらにはすぐく気を遣わせてしまುದろうから、その点は気が引けるが。

そもそも実績もある。あの初日の夜の。

……が、今は生憎自覚したてのほやほやで、意識するなという方が無理だ……死んでしまう。

なにより、彼をえらんだら、気づかれてしまうのではないか……こんなきもちを抱いていることを。

悟られるわけにはいかないのだ。ぜったいに。

かといって、他のひとなんてもつと選べない。

言っておくが本気で貞操の危機を感じているわけではない。

皆、そんなひとたちではない。冗談なのは当然わかっている。

でも……へんな誤解をされたくはなかった。すこしでも。

しかし、なんだろう……？ ちらつとみたところ……気のせいだろうか……？

(……視線が、痛い……)

さつきからそちらを正視できていないので正確にはわからないが。

(なんで……？ そんな目でみないで……！ ああああ……!!)

答えなど、出るはずがない。が、出さねばこの場は収まらない。それも痛いほどわかっていた。

(ど、どうしよう……。……あ……！)

口を、開く。

「……じ、じゃあ……その……、……お願いします！」

*

*

*

「……残念だったな。選ばれなくて。くくく……」

「……なにがだよ」

「いえばよかつたじやねーか。おれをえらべ、つてよ」

「いえるか！ つてか、おもつてないし！」

「まあ、かおに書いてあつたがな。しかし、あのときのおまえの劍幕……くくく……」
「うるさいな！ いつまで笑つてるんだよ！」

すつたもんだあつたが、部屋割がやつと決定し、承太郎と僕は荷物を置きに隣室にやつてきた。

議題の中心、本日の彼女の同室となる相手……。

そう。結局、誰が選ばれたのか、というと、だ。

「ああ、そうか。選ばれなかつた、つてえのは語弊があつたな。」

「は？ なんでだよ？」

僕はここにこの男という。そういうことだ。

がっかりなんて、していない……するわけがない。

たしかにちよつと、選んでくれるのではないか……そんなふうにおもつてしまつたじぶんがいなければ。

だいたい、選ばれても……こまる。なんでだ……といわれてしまうと、もつとこまる。
(ええい……！)

打ち消すように、ついなぜか乱暴な口調になつてしまいつつ疑問を返すと、やつはこ

んなことをいう。

「スタンドと本体は一心同体……だろう？」

「……あ……」

そうなのだ。

赤くなったり、青くなったり……

激しく悩みぬいた果てに、なにかを思いついたように、彼女の口から発された名前、それは……

『(うふふふふ！ よろしくね、ハイエロフロント！)』

「……」

相棒を通じて、さらに隣の部屋に居る彼女のこえがきこえてくる。

「そうなの、かな……？」

「……ふん、知るか。ちつ、ほんとにうっとうしいやつらだぜ」

『(……きやー！ やっぱり可愛いツ!!)』

「ぬあつ！ ちよ、ちよつと！」

これもまた相棒を通して伝わってくる……いい香りとともに、あたまを包み込まれる、あたたかくて……ふにやつとした……やわらかな感触。

(こ、これはッ、も、もしや……!?)

「……うわあーッ！」

「……うるせーな」

「はあ、はあ……あ、あのひと……わ、忘れてるな……」

相棒が感知したものは僕も感じるができる、ということ……。

『（くんやはいつしよにねようね。えへ、たのしみー!!）』

「……か、勘弁してくれーッ!!」

「……やれやれだぜ……」

「ってか……感じないよーにもできんだろ？　そうすりゃあいいじゃねーか」

「うっ！」

「……駄目だ。そんなことをしたら彼女の危機をすぐに察知できないじゃあないか

……。

「ふっ。ふっ……」

「……」

*

*

*

「ふふっ……」

我ながらとつきにいい案が浮かんだものだ。

おまえのスタンド。ふたり一役。承太郎君の言葉で閃いた。

宿泊客が他に誰もいない……すなわちもう一部屋借りることも容易だった。

これなら怪しくない。角も立たない。安全。安心。

なにより大好きなハイエロフアントといられる。

一石何鳥だろうか。

「ねえ。やったね！」

静かに私のそばにいてくれる彼の相棒に問いかける。

(あ、でも……)

立ち上がり隣の部屋へと向かう。

「……いいこと、し放題だな。今夜はあいつに。よかったな」

「す、す、す、するかーッ！」

部屋の前までくると、なにやら叫び声が聞こえてきた。

(……また叫んでる。いいなあ、なんかたのしそうで……)

とりあえずノックをする。

「はい……あ……」

「どうしたの？　なんか叫んでたけど……」

「な、なんでもありません。気にしないでください……」

「で！　どうしました？」

「あの、……ごめんね。よく考えたら……ずっとハイエロファント出しておくの、花京院くん、疲れちゃうんじゃないかって……。だから、最小限で済むように、……その、できるだけ、いっしょにいてもいい？」

「そうなのだ。自分にとっては最高の案だが、彼にとってはほとんどばっちりだ。申し訳ない。」

「そして、なんて台詞だろうか。……恥ずかしい……」

「他意はない、とおもってくれると非常にありがたい……と願いつつ、訊ねる。」

「あ、ああ。もちろん……。どうぞ」

「ありがとう。承太郎君、お邪魔してもいい？」

「ああ……」

*

*

*

彼女がこちらの部屋に来て、しばらく経ったところ、ノックの音が聞こえてきた。

「おおい、いいか？」

ジョースターさんだ。

「お、皆ここにおったか。ちようどいい。

わしはちよつと町をみてこようと思う……できたら買い出しもしたいしな。

だれか一緒に来ないか？」

「ならおれが行くぜ。……つーか、ポルナレフはどうした？」

「それがトイレに行つてくると言つたまま、なかなか帰つてこんのじゃ……」

「……ついでにヤツの様子もみてくるか……」

「じゃあ、僕は留守番しています。くれぐれもお気をつけて」

「ああ。そつちもな……」

「うーん……。どう思う？ やっぱりあやしいよねえ……」

出かけるふたりを見送つたのち、ソファに座りながら、しかめ面をした彼女がぼつりと呟く。

「まあ……。ね。あの策が、うまくいくといいんですが」

「あれ、ね……あの名ま……」

ふたりの頭に同時に浮かぶ、宿帳に記された、あの……

「……ふ……く……あははははは！」

そして、決壊する。さらにつられて巻き起こる、連鎖反応。

「ちよ、やめてくださいよ！……ふ、ふははははは！……が、我慢してたのに！は

ははははは！」

「ひー、あー！……もう、お腹痛い！……だつて！」

もう私……さつきから、あのおばけのテーマソングが離れなくて……

頭の中でキュツキュツ言ってる……」

「はあ、はあ……奇遇ですね。僕もですよ……」。

しかもなんか……合成してしまって……おばけが学ラン着てるし。

……あの厳つさと、あのおばけのコミカルさのコラボレーション……」

「ぶはあー！……や、やめてー！……あははははは……!!」

「はあ、……笑った……。それにしても、みんなおそいな」

「ええ……見に行ったほうがいいのかもれない」

「うん」

立ち上がろうとする彼女を制す。

「おっと、あなたはここにいてくださいいね」

「え！ いやだよ！ 単独行動、ダメ、ゼツタイ！ でしょう。私も行く！」

「それこそダメですよ。あなたはまだ万全の状態じゃあないでしょう……」

まあ、確かにひとりここに置いてくのもなあ……」

「はっ！」

そのとき、同時に気づく。

ノックというにはあまりにも乱暴な……なにかが激しく扉を叩く音に。

「……どうやら議論の余地はないようですね」

「そうみたい……」

「仕方ない……きますよ!!」

「うん!!」

耐え切れず、決壊する扉。

そこにひしめき合う、多数の人間の姿。

「……なに?! 街の……? 操られているのか? いや、生気を全く感じない……」

「ゾンビってこと……? それってなんて……」

(バイオハザード……)

閉じ込められた洋館……迫りくるゾンビ……

以前意外なことにかなりのゲーマーであることが判明した彼女との話題に上ったことがある某ゲームが思い浮かぶ。おそらく彼女も同じことを考えていることだろう。

しかし、それどころではなかった。

「うがー!」

我先に、とばかりに侵入してくるゾンビ共。

「……!?!」

しかし……

「ここから先は……立ち入り禁止……です」

その行く手を薄桃色の障壁が阻む。

「お引き取り願おう……。エメラルドスプラッターシュ!!」

「うが!」「がはっ!」「ぐおッ!!」……

「すごい! 眉間に一発ずつヘッドショット! さつすが! 針の穴をも通すコント

ロール!!」

「フツ! ゲームで培ったこのテクニック! 我が力の前にひれ伏すがいい!!」

……つて、のせないでください。あなたが上手く集めてくれましたからね。しかもあの穴……」

足止めのために結界の如く張られた壁……にはいくつかの小さな穴が開けられていた。

「うん、攻撃用にあけてみた。狙ってくれると思ってたよ。ぼっちりだったね！」
「フツ……」

嬉しそうに微笑む彼女。またもつられて笑みがこぼれてしまう。

そんな中、廊下の向こうから、聞こえてくる、うめき声。

「……うがー……」 「……うがー……」

さらに大勢が押し寄せてきているようだ。ため息まじりにいう。

「やれやれ、ですね。まだまだ、いらっしやるようで……」

「ほんと、やれやれだね。みんなはだいじょうぶかな……」

「……よし、これで全部やつけたみたい……かな」

戦闘開始からおよそ10分。部屋の外には堰き止められたまま動きを停止したゾンの山ができていた。

「ええ。だいじょうぶですか？」

「うん、そつちもだいじょうぶ?」

「もちろん。では、下にいきましよう。……?!」

瞬間、ゾンビたちの姿がすべて、ふっと消える。

「き、きえた……?」

おそらく当たっているであろう推測を述べる。

「こいつらを操っていたスタンド使いを、倒したんでしよう。」

「ああ……」

かおを見合わせて、声を揃える。

「Q太郎(君)が!」

「……ぶふあっ!! あははははは!!」

再び巻き起こる笑いの渦。

そんな僕らの腹の如く、周囲の空間が振れ始めた。

「ふはっ!? わ、笑っている場合じゃない! 館が、消える!? 急いで出ましよう!」

「ふ、ふあいつ!」

彼女の足をかばいつつ、外に向かう。

そこには殊勲者とおぼしき男が、項垂れるものとそれを慰める仲間とともに立ってい

た。

「お疲れさま。怪我はない？ Q太郎君ツ??」

「さすがだな、Q太郎ツ！」

「てめーら……。それはもういいつつーの。気に入らすぎだろ……。」

「だってなあ。ふっ……。」

「ねえー。ふふふ……。」

「やれやれだぜ……。」

「で、どんな敵だったんだ？」

「霧のスタンドで、傷をつけられると操られる……生きていようが死んでいようが……な」

「なるほど、それであるの、ゾンビの群れを……。」

「そういうことだ。」

やはりあの婆さんがスタンド使いだったぜ……すっかり罠にハマってくれたがな」

「ああ！」

『おれの名は承太郎じゃなくQ太郎だって書いてあんだろ？ なぜ知っているんだよ大作戦』ね。

ふ、ふふ……。」

まんま、かつ奇天烈な作戦名が自分でツボにハマったのか、再び笑いだす彼女。そんな彼女をもう放っておきつつ、承太郎は続けた。

「しかもあの婆さん、ポルナレフの妹のかたきだった……あのJ・ガイルの母親なんだと。」

「な……?!」

卑劣極まりなかった、あのインドで出会った敵を思い出しつつ、承太郎が指さす方を見やると、そこには捕縛されたあの老婆が目に入った。

「気絶させてある。あとでじじいの能力で、DIOや敵のスタンド使いたちの情報を引き出すためにな」

「なるほど。じゃあ早いところ念写に使えるテレビのある町まで行かなければならんな」

「……そういうことだ。なんせこの町はこのありさまだから……」

周囲を見回しながら、彼女がいう。

「この町、本当はお墓だったなんて……」

「もうこの旅では驚きの連続で……なんでもありませんからね。」

今度は町全体がスタンドかよ……みたいなかんじですが」

「……『正義』……恐ろしいスタンドだったぜ」

そして、やっと戻ったシリアスな空気をぶち壊す言葉がまた聞こえてくる。

「やーい！ ポルナレフ！ 操られて、何舐めさせられたって?!

……べ、便器？ ……ふぷーっ！ えんがちよー!!」

「ち、チクシヨー！ あのばばあー!!」

「ゴクリ……」

(た、確かに恐ろしいッ……)

ふたり、息をのむ。

「あつ！ おまえらまでオレのことを軽蔑すんのかー?!」

「い、いや、大変だったな……」

「な、なんてこと……! は、早く消毒しましょう! ……迅速に、念入りに……」

「うわーん！ 優しさが逆にツライー!!」

King of the street

「ひゅうー！ けっこう大きな町だな。」

私たちはパキスタンの都市、カラチの街までやってきた。

山岳地帯の霧の街で捕らえた『正義』……ジャスティススタンド使用のお婆さんを馬車の後ろに乗せて。

敵の情報を得るためだ。どうやら意識はまだ戻っていないようで身動きひとつしな
いが。

街を進む。路肩には様々な露店が並んでいる。

道中、腹ごしらえをしようと馬車を止め、ジョースターさんがそのひとつでなにやら
買って来てくれた。

「ケバブじゃ。とつてもお安く買えたぞ。みたか！ わしの交渉術！」

焼いて薄切りにした肉をはさんだ、ハンバーガーのようなものらしい。

いい匂いが鼻孔をくすぐる。

「わあ！ ありがとうございます。いただきまーす！」

「はっ!？」

しかし、口を開けたそのときだった。

私たちの後ろに目をやった、ジョースターさんが叫んだ。

「おいッ！ みんな、そのバアさん、目を覚ましておるぞー！」

「えっ！」

振り返って見ると、お婆さんの眼はカツと見開かれ、その顔は恐怖にゆがんでいた。

「わ、わしは何もしゃべっておらぬぞー！ なぜ、おまえがわしの前に……!?」

「このエンヤがDIO様のスタンドの秘密をしゃべるとでも思っていたのかッ!?」

「えッ！」

その視線の先にはさきほどの露店商の姿がある。

そちらに気を取られたほんの一瞬のことだった。

「ぬああああー!!」

なんと、お婆さんの目、鼻、口……あらゆる穴から細長い触手が飛び出した！

「な、なぜ、きさまがこのわしを殺しにくるッ?!」

息も絶え絶え、お婆さんが叫ぶ。

「DIO様は何者にも決して心を許していないということだ。口を封じさせて………いただきます。そして、その5人……お命ちょうだいいたします。」

ターバンとサングラスを外し、露店商………だった一人の男が言った。

「ギギギギギ……！」

「ばあさんッ！」

「うばわあー！」

触手はどんどん大きくなり、とうとうお婆さんの顔面を引き裂いた。

「わたしの名はダン……ステイリー・ダン。」

スタンドは『恋人』のカードの暗示。

君たちにも、このエンヤ婆のようになっていただきます。」

良心。そんなものはまるつきり存在しないかのように、敵は倒れたお婆さんを意にも介さず、こちらに自己紹介をはじめ。

「なんてことを！ このバアさんはテメーらの仲間だろーが!!」

ポルナレフさんが叫ぶ。

同時に、花京院くんは何か気付いたようだ。

「おばあさんの体から出ているのはスタンドじゃあないぞ！」

実体だ！ 本物の動いている触手だ!!」

「……あの方が、このわしにこんなことをするはずが……『肉の芽』をうえるはずが……
DIO様はわしの生きがい……信頼し合っている……」

「肉の芽!？」

「……バアさんー！」

その言葉を受け、ポルナレフさんがチャリオッツのレイピアで触手……肉の芽を切り離す。

それは日光に当たると、シューシューと音を立てて、溶け始めた。

「これは！ ……『肉の芽』！ 吸血鬼……、D I Oのやつ細胞だ!!」

「いかにも。よく観察できました。それはD I O様の細胞、『肉の芽』が成長したものだ。今、このわたしがエンヤ婆の体内で成長させたのだ。」

敵の男はお婆さんに冷たく言い放つ。

「……エンヤ婆……あなたはD I O様にスタンドに関しての知識を教えたそうだが……

あなたのようなちっぽけな存在の女に心をゆるすわけがないのだ。

それに気づいていなかったようだな。」

「ぐ、ぐ……」

「ばあさん！D I Oのスタンドの正体を教えてくれっ！」

「！」

ジヨースターさんが、必死にお婆さんに問いかける。

「言うんだッ！D I Oという男に期待し信頼を寄せたのだろうか……」

これでやつがあんたの考えていたような男ではないとわかっただろう!!」

「ハア、ハア……」

「わしは、D I Oを倒さねばならんツ！たのむ！言ってくれツ！」

「で、デイ、オ……様……は」

「！」

「……このわしを信頼してくれている。いえるか。……ぐふ……」

「！OH！GOD!!」

「おばあさん！」

それだけを言い残して、お婆さんは息を引き取った……。

「くつくつくつ……悲しいな……どこまでも悲しすぎるバアさんだ。」

だがここまで信頼されているというのもD I O様の魔の魅力のすごさでもあるがな

……くつくつく」

「……！」

（……許せない……!!）

敵スタンド使いは舐めきつた態度で、いつのまにかオープンカフェのテーブルに座ってコーヒーなんて飲んでいる。

ザツ！と、それを取り囲む、私たち。

「オレはエンヤ婆に対しては妹との因縁もあつて複雑な気分だが……てめーは殺す」

「5対1だが、躊躇しない。覚悟してもらおう」

「立ちな」

しかし、それでも敵は、その態度を崩すことはなかった。

「おいタコ！カツコつけて余裕こいたふりすんじゃねえ……てめーがかかってこなくてもやるぜ」

「どうぞ……だが君たちはこのステイリー・ダンに指一本さわることはできな……」
「オラアッ！」

敵のセリフが終わるのを承太郎君が待つはずもない。

「うが早い、敵はスタープラチナのラッシュでふつとび、壁へと激突した……」

「ぐふっ！」

「……ぐえっ！」

同時に、なんとジョースターさんの身体も『敵とおなじように』後ろにふつとんだ!!

「なに!?!」

「!?!」

「ど、どうした? ジョースターさん! こいつとおなじようにとんだぞー!」

「なにもしてないのに?!」

ふつとんだ敵がよろよろと立ち上がり、口の端の血を拭いながら言う。

「このバカが……まだ説明は途中だ。もう少しできさまは自分の祖父を殺すところだった……。」

「いいか？ このわたしがエンヤ婆を殺すだけのために姿をあらわしたと思うのか……？」

「き、きさま、『恋人』のカードのスタンドとかいったな……いっただい、それは……?!」

「……もうすでに、戦いは始まっているのですよ……ミスタージョースター」

「！」

私たちはあたりを見まわし敵のスタンドを探した。が、みつからない。

「おろかものどもが……探してもわたしのスタンドはみつきりはしない……」

おい小僧、駄賃をやる。その箒の柄でわたしの足を殴れ」

近くで掃除をしていた少年に、敵は言う。

「ハッ！ まさか！」

「殴れ！」

「え、えいっ!!」

躊躇いながらもその少年は思い切り男の足を殴る。その瞬間……

「うげっ！」

「じ、ジョースターさん!」

「い、痛い！わけがわからんが足に激痛が!!」

「くくく……気がつかなかったのか？ ジョセフ・ジョースター。」

わたしのスタンドは体内に入り込むスタンド！

さつきエンヤ婆が死ぬ瞬間、耳から貴男の脳の奥にもぐり込んでいったわ!!」

「なにっ!!」

「スタンドと本体は一心同体。スタンドを傷つければ本体も傷つく……逆も真なり！

このわたしを少しでも傷つけてみるッ！

同時に脳内でわたしのスタンドがわたしのいたみや苦しみに反応してあばれるのだ

！

同じ場所を数倍の痛みにしてお返しする！

もう一度いう！きさまらはこのわたしに指一本ふれることはできん!!」

!!」

「しかも『恋人』はDIO様の肉の芽をもって入った！ 脳内で育てているぞ!!

エンヤ婆のように内面から食い破られて死ぬのだ!!

「な、なんてことだ……!!」

「ま、はつきり言つてわたしのスタンドは力が弱い。」

髪の毛一本動かすことさえできない史上最弱のスタンドさ。

だがね！ 人間を殺すのに力なんぞいらぬのだよ！ わかるかね、諸君！
もしわたしの身に何かあれば……そのダメージはあなたの身に何倍にもなつてふりかかる！

……そして、10分もすれば脳が食い破られ、エンヤ婆のようになって死ぬ」

「……！」

瞬間、承太郎君が敵に掴みかかろうとする。

「じよ、承太郎！ おちつけ！ バカはよせ!!」

花京院くんがそれを制止する。

「いいや……こいつに痛みを感じる間を与えず、一瞬で殺してみせるぜ……」

それに対し、挑発めいた言葉を発する敵。

「一瞬か……いいアイデアだ……やってみろよ。」

ほら。どこをぶつとばすんだ？ 顔か？ のどか？ 胸か？

それとも石で頭を叩きつぶすつてのはどうだ？ ほら、石をひろつてやるよ」

「……あまりなめた態度をとるんじゃあねーぜ。おれはやると言つたらやる男だぜ

……」

「うッ……」

そんな敵を承太郎君は鋭い眼光をむけ、首をしめあげる。

「うぐぐ……」

「！ ジョースターさん！」

同時に苦悶の表情を浮かべるジョースターさん。

「はやまるなツ！ 承太郎ーッ！」

再び、花京院くんが承太郎君を、そしてハイエロフアントがスタープラチナを必死に抑える。

「こいつの能力はすでに見たろう！ 自分の祖父を、本当に殺す気か!？」

「や、やると言ったら本当にやりかねねーヤツだからな……」

ポルナレフさんも加わりどうにか止める。

「ぐっ……」

歯噛みをする承太郎君。

「なめたやろーだ……!？」

その隙に敵は、承太郎君のみぞおちを思い切り殴った。

「う……ぐぐ……」

「承太郎！」

「オレをなめるな……」

ジョースターのじじいが死んだらその次はきさまの脳に『恋人』をすべりこませて殺

すッ！」

「な、なんてことだ……孫が殴られてわしが助かるとは……」

「これでは……だめだ！ ジョースターさん、ポルナレフ！」

「！ うむ！」

「わ、わかった！」

八方塞がりな状況をどうにか打開すべく、花京院くんが言うと二人が走り出す。

同時に彼は承太郎君に向けて叫ぶ。

「承太郎、そいつをジョースターさんに近づけるなッ！」

僕らはそいつからできるだけ遠くへ離れる！」

そして、私にそつとこう告げた。

「あなたはまだ走れない……隠れながら承太郎を援護してやってください。

ただし、くれぐれも無理はしないこと。いいですね？」

「……うん！ わかった。そつちも、気を付けて」

「こつちのことは、考えがあります。任せてください」

*

*

*

「おい！ この堀を渡るための、橋になれって言ってる？」

（あつ！）

花京院くんたちが駆けていくのを見送ったのち、私は建物の陰に隠れて二人を尾行していた。

街を歩きながら、敵は調子にのつて、承太郎君に次々と無理な命令をしているようだった。

「てめー、だんだんガラが悪くなつてきやがったな。それが本性か……」

「……いいのか？ ……そんな態度だと……おら！」

敵は自らの足で電柱を思い切り蹴る。

（あつ！）

同じ場所を数倍の痛みにして……ということは今頃ジョースターさんの足が……!?)

「ちつ……」

「そうそう、それでいいんだよ！ くくく……」

仕方なく寝そべる承太郎君を、敵の足が踏みつけようとする……。

（いけない！ セシリア！ こっそり！ 承太郎君を御願い！）

「……」

「硬い……？　気のせいかな。まあいい……」

無事、向こう岸に渡り終えた敵。

どうにかバレーずに済んだことに胸をなでおろしつつ、再びあとを尾ける。

しかし、二人に追い付いた途端、またも聞こえてきた。敵のとんでもない注文が。

「おい、承太郎。背中がかゆい。かけ」

（ひえっ！　あの承太郎君になんてことを！　ファンに殺されちゃうよ！　あの人!!）

取り巻きのお嬢様方（ゆりかごから墓場まで）の顔を思い浮かべる。

（いまここに召喚できたら……いや、だめか。）

敵が袋叩きの刑に処されるのは確実だ。そんなことになったらジョースターさんが

……。

（あれ？　そういえば……痛み以外の感覚も……？）

そこで、ふと思う。痛覚以外の触覚……それも倍になって伝わるのだろうか？……

と。

背中を搔かれる感覚を強調……想像がつかなかった。

ちなみに、「死ぬかとおもったわい……笑いすぎて。」……と、あとで訊ねてみたところ、

ため息まじりにジョースターさんが語ってくれたその苦労。

……それをまさか自分も後に嫌になるくらい実感する羽目になろうとは……。

このときの私は、露ひとしづくほども知らない……。

電柱の影に隠れて、引き続き二人の動向を見守っていると、今度は何処からともなく、ブラシと布と靴クリームを出す敵。どうやらこれで靴を磨けと言っているようだ。

渋々従う承太郎君。……なにかを物語る背中が怖い。

そして、さらに、なにかあつたのか、突然高らかに言い放つ敵。

「ふはははは！ほれっ！なにやつてんだッ？しつかりやれ、承太郎。

わたしは今すぐく機嫌がいいッ！この今の気分と同じように晴れた空が、くつきり写りこむくらいピカピカにみがいてもらおうかな！」

(……も、もうやめてー！)

肉体的な仕打ちはともかく、こういった精神的な攻撃に出られると何もできない無力な自分に歯噛みをする。

(ぐ、ぐめんね……)

「……」

やはり黙々と従う承太郎君。その静けさがやはり逆に恐い。

この状況……いつプツンしてもおかしくはないだろう。

……見ていただけの私ですら、いいかげんキレそうなのだから。
が、そんなことになったらジョースターさんが……。

(くっ……た、耐えて！ 承太郎君……！)

「……」

靴磨きを終えた承太郎君は、手帳を取り出し、なにやら書き込んでいるようだ。

「きさま！ 何を書いている!？」

それを取り上げ、読み上げる、敵。

「……」
「ハラを殴られた、財布を盗られた、時計を盗られた、

どぶ川の橋にされ踏まれた、背中をかかさされた、靴磨きをさせられた……」

なっ、なんだこれはッ!？」

「おまえに貸してるツケさ……必ず払ってもらうぜ……忘れっぽいんでな。メモつていたんだ」

「っ、の!!」

敵の平手打ちが承太郎君の頬に入る。

(あっ!しまっ……! 間に合わなかった……ごめん、承太郎君……!)

「オレを、なめるなど言っているだろおが!!」

敵が恫喝する。

それでも承太郎君は、不敵にほほえんでいた……。

その後、何かを思いついたかのように、敵スタンド使いは承太郎君を連れて宝石店に入っていった。

少し遅れて、私も追いかける。

「ふはは、なあ、見ろよこの金の腕輪。

一流ブランドのデザインもいいが、まれに無名の逸品つてやつはこういう店で出会えるものさ。

喜ぶぜー。女の子にこういうものをプレゼントするとなあ。

承太郎……ガラスのすきまがあるだろう……そこからスタンドで、それを盗れ」

「……」

「……盗れ、とっているんだぜ、ボケっ！早くしろ。

それともなにか……このわたしがガラスをぶちやぶつて盗つてもいいんだぜ……

わたしが捕まってぶちのめされてもいいのか？ ジョセフのじじいは確実に痛みで死ぬぜ」

「……」

「早くやれッ！ 今店の女は向こうむいてる！」

承太郎くんのスタープラチナが、腕輪を掴む……そのときだった。

「あぁーっ！ こいつ万引きしてますよぉー！」

（なっ!? 自分がやれって……!）

「てめえ……」

「くくく！」

「なにー、盗人だとお！」

「こいつか！」

「この東洋人の若僧か!？」

「オレの生まれた田舎では、盗人は手の指を切断される!!」

承太郎君が店の人達に取り囲まれる。

「フツフツ……」

（いけない！ セシリア！ また、こっそり!!）

店の外に連れ出され、袋叩きにされる承太郎君。

その隙に、敵の男はなにか別の物を盗んで懐に入れていた。

（ほ、本当に……なんて、卑劣な……!）

「早く俺たちの国から出ていけ！」

「指は切らねーでそれくらいで勘弁してやるぜ。」

倒れている承太郎君に、にやにやと敵の男は近づいていく。

「ふはははは！でかしたぜ。よくやった。」

おまえのおかげでドサクサにまぎれてもつとでかいもの手に入れたからよ」

「……」

「……ん？ あれだけ殴られておいて、なんでおまえそんなに平気そうなんだ？

まさか!？」

「!？」

(し、しまった、気づかれた……!?)

「誰かいやがるな！出てこい！……さもなくば！」

敵は自らの首筋に、ナイフをあてがう。

「……チツ……。」

「……くっ！ やめてください……！」

「何かおかしいと思つたら……てめーか！ 女あ……こつちに来な！」

「……わかりました」

仕方なく姿を現し、その命令に大人しく従う。

……

「……フン、なめた真似しやがって……」

このおとしまえばきつちりつけてもらおうからな」

下卑た笑みを浮かべ、私をジロジロと見てくる、敵。

「へへ……なにをしてもらおうか……」

……とりあえず！」

「……ッ!!」

腕を掴まれ、引き寄せられる。

「おまえもうれしいだろ?こんなハンサムが相手だよ……!」

「……。……どこにいますか?そんななかつこいい人。」

花京院くんはここにいないし……あ、承太郎君のことですか?」

「ああ!」

「……今、私の目の前にはいませんね!

性格のねじ曲がった、卑怯で、卑屈で、気持ち悪い!最低のクズ男しかッ!」

「くっ!このアマ!」

「ふ、ふん!」

せめてもの抵抗……込み上げてくる寒気と吐き気をなんとか誤魔化したくて、精一杯の虚勢を張る。

「へ、へへ、無理すんなよ……震えてんじやねーか！」

「そ、そんなことありません！」

ら、乱視なんじやあないですか？ 眼科行ったらどうですか？」

そして、そんな最低な男は、最低な男らしい……最低の行動を思いついたようだ。

「……わかった！ そのうるさい口、今、塞いでやるぜ！」

「なッ!？」

「……もういい!! やめろ！」

承太郎君が叫ぶ。

「へへ……」

(さ、最悪！ で、でも……がまんしなきゃ……)

じわじわと近づいてくる男の顔。

(……。まさか、こんな形で……)

脳裏に浮かぶのは、あのひとの、ことば。

——初めてのキスは——

(……ッ！ ……嫌……)

逸らした私の顔を向き直そうと、男の手が伸びてくる。

(いや!! ……やっぱり無理ッ!!)

歯をくいしばる。

(……この人じゃあないッ!! ……やだーっ!!)

「うぐおっ!」

そのときだった。

まばゆい桃色の光の壁が私の前に現れ、敵をもものすごい勢いではねとばした!

「あッ! ちよっ! せ、セシリア!」

(し、しまった! 嫌すぎて無意識にでちゃった……!?)

「いけない!」

そのままセシリアでふつとんだ衝撃から敵を護る。

「あっ!」

……瞬間、私はようやくやく閃いたのだった。

(そうだ! そうだよ……!!)

「てめえええ、このアマあ!!」

鬼のような形相で起き上がった男に言い放つ。

「……おあいにく様！」

私のファーストキスは貴男なんかにあげるために、とつてあるんじゃないんですうー

！

んべえー!! 嫌がる相手に無理矢理とか! やっぱり最低な男ですな!」

「ああー!? くそ! もうゆるさん!! 刺すぞ! コラ! 後悔しな!」

「はい、どうぞ。できるものなら……」

にこやかに頷いてやる。

「なめんな! うらあ!」

キーン、という金属音が辺りに響く。

その刃は敵の男の皮膚にくい込む前に薄桃色の障壁にはじかれていた。

「な、なにィ!」

「……私って、ほんと馬鹿。どうしてもっと早くに思いつかないかなあ……」

「フン! なるほどな」

承太郎君もにやりと微笑む。

「ひつじよーにッ、不本意ですが……」

私が『貴男』から『貴男』を護らせていただきます……!」

「あッ！ く、くそッ！」

チイツ！ ……つ、が、しかしッ！ 忘れたのか！

肉の芽がジョースターの脳を食い破るまであと一分もない！ そんな状況なんだぜ
！」

「フッフッフッフッフッフッフ……」

「ふふふふ……」

「な、何を!? 貴様ら何を笑っているッ!?

口々にいう、私たち。

「……残念ですが、それはありえないですね。向こうには、花京院くんがいますから」
「フッフ、きさまは、おれたちのことをよく知らねえ。」

……花京院のやつのことを知らねえ」

「な、なんだと……? はっ!」

「うわあああ!」

瞬間、敵の男の頭から、血が噴き出した。

「おやおやおやおや……そのダメージは花京院にやられているな。」

残るかな? おれのお仕置きの分がよ。」

「い、イテーツ！ イテエよお!! あ、あ……!!」

「……どうした？なにをあとずさりしている？」

おれのじいさんの方では何が起こっているのか、話してくれないのか？」

形勢が不利になったとみるや、敵は踵を返し逃げ出そうとした……が、しかし、がつちりと承太郎君に髪を掴まれる。

「おいおいおいおい……なにをあわてている？ どこへいこーつてんだ。」

まさかおめー、逃げようとしたんじゃあねーだろーな……いまさらよ」

「ヒイヒイヒイーツ！」

ゆっゆっゆっ、ゆるしてくださあーい！ 承太郎様ーツ！

わたしの負けですツ！ 改心します！ ひれ伏します！ 靴も舐めます！」

土下座をし、そういつて男は本当に承太郎君の靴を舐め始めた。

「命だけは、助けてくださいいいい!!」

「なさけねーやろうだ……消えな」

心底呆れかえった顔で承太郎君が背をむける。そのときだった。

「きやー！」

「!?!」

なんと（というか、正直予想通りというか）敵は近くで遊んでいた無関係な少女を捕まえ、その首筋にナイフをあてがった。

「承太郎！　ぐははははは！　バカめえーッ！　この女の子を見な！」

「!」

「今この女の子の耳の中にわたしのスタンド『恋人』が入った！」

脳に向かっているッ！　動くんじゃねー！」

「……」

「聞いているぜえ！　そのピンクのスタンドは一人の人間しか護れねーんだってな！」

この巻き込まれちゃったカワイソーな女の子を助けたければ……

まず、そのクソアマを承太郎、てめーのスタンドでぼこぼこに殴って再起不能にしな

！

うぬあはははは！」

その姿を見て、おもわず漏れ出る率直な感想。

「はあ、やつぱり……最低な男ですね」

「早くやれーッ！　やらんと、直接この女の子を刺すぞ！」

血走った目で喚く男に、承太郎君も溜息まじりに告げる。

「やれやれだ……いいだろう、やってみろ」

「ほ、本性を現したな！ や、やるぞ！ ちくしよ……?! あ、あれ……う？」

しかし、その威勢とは裏腹に敵のナイフを持つ手はピクリとも動くことはなかった。

「どうした……？ ブツリと突くんじゃねーのか。こんな風に……」

そして、にやりと笑うと、承太郎君は動けない男の手を掴み、その頬へナイフを突き刺した！

「ギャアーツ！ か、からだが動かないツ！ なぜ……!?!」

「……自分のことは知ってんじゃねーのかよ。よく見ろよ」

そこで、ようやく気付いたようだ。

「ゲツ！ 『恋人』になにかが、巻きついてるツ！ な、なんだ、これはツ！」

「気づかなかったのか？ 花京院はハイエロフアントの触手をおまえのスタンドの足に結びつけたまま、逃がしたようだな。風の糸のようにずーっと向こうからのびてきているのに気づかかねーとは……よほど無我夢中だったようだな」

「あつ！ わつ！ ゆるしてくださーいっ！」

「……ゆるしは、てめーが殺したエンヤ婆にこいな」

「！」

「おれたちは、はじめっからてめーをゆるす気は……ないのさ」

「でい、DIOから前金をもらってる……そ、それをやるよ！」

「やれやれ。正真正銘の史上最底の男だぜ」

「……てめーのつけは……金では払えねーぜツ!!」

「ひいひい!!」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラ……」

（な、長い……。さすがにちよつと気の毒……）

「……」

そう思いつけた瞬間、浮かぶ、数多の敵の、許し難い行い……

（……でもないか。これぞ『自業自得』ってやつだよね！ うん！）

と、素直にすつきりすることにした。

「……オラアツツ!!」

そして、承太郎君はさらさらとなにやら手帳に書き、ページをやぶると、投げつけた。それはひらりと、もはやとても受け取ることができないであろう男の上に舞い落ちた。

「つけの、領収書だぜ……」

「よし。ヤス……御苦労」

「そちらこそ、お疲れさま。

……というか、うん、それじゃあもう私、完璧、承太郎君の舎弟だよね？

まあいいんだけどさ、どう呼んでも……」

敵スタンド使い……だったものを転がしたあと、承太郎君は私にいった。

「どうやら、もはや『乃』すら、つけるのが面倒くさくなつたようだ。全国のヤスさんごめんなさい。」

「それはともかく……気づくのが遅くてごめんね」

「そうなのだ。私が最初から敵を護る案を思いついていれば、数々の……あんな嫌な思いをさせずに済んだのだ。」

「……まったくだ。あとでなんかおごれ」

「えー!? ……はあ、もう、しょうがないなあ……」

すると、承太郎君はうなだれかけた私に言う。

「……冗談だ。……すまん。うちのジジイのために。」

怖え思いを、させちまったな。」

「……ううん」

なんだかんだ、やはり口は悪いが優しいのだ。

……とか、思ったのに……。

「しかし、なかなかいい啖呵だったじゃあねーか。……間抜けでな。」

にしても、おまえ……キスすらししたことねーのかよ……」

「あ!? し、しまっ……!」

前言撤回。うっかり勢いで口走ったことを後悔する。

「くくく……、心配すんな。あいつはむしろ喜ぶだろうよ」

「ぐっ! な、なによッ! 馬鹿にして……! あ、あいつって誰のことよッ!」

「さあな。自分の胸にきいてみるよ。」

ほら、噂をすれば……戻ってきたぜ」

わかりづらい……が、このひとにしては大変楽しそうな表情で指をさす。

その先には、たしかに……砂煙を上げて駆けてくる……ひとつの影がみえた。

*

*

*

「ふたりともー！ 大丈夫ですかー?!」

心配で一足先に戻ってきた僕は、承太郎たちを見つけ、声をかける。

「おう。なんとか、な」

「うん」

「よかった……。」

「が、しかし！ ……あなた、見つかったでしょう！」

「ぎくう！」

二人の無事な姿にほっとしつつも、僕は気づいていた懸念事項を口に出す。

「まったく！ 隠れてって言ったのに！ ほんとに大丈夫だったんでしょね？」

「まあ……うん、一応……」

「……ん？ なんですか、歯切れの悪い……。」

はッ！ ま、まさか！あの男になにかされたんじやあ!？」

そうして問い詰めると、彼女はとんでもないことを言い出した。

「だ、だいじょうぶだよ！ちよつと……キス……」

「はあああー!?」

(……あの男、殺す……)

……あのまま、ひきちぎってやればよかった……

……承太郎に譲るんじゃないかなかった……)

「ち、違う! されてないっ! されそうになっただけ!」

すると、僕の燃え上がるような憎悪及び殺気を感じたのか、必死に否定する彼女。

「ほ、ほんとでしようね!? 承太郎ッ?!」

すがるような思いで承太郎に問う。

「ああ。……みごとな拒絶っぷりだったな。

セシリアが勝手に飛び出て、はねとばした。

……滑稽だったぜ……よく飛んだな、あいつ……。10mくらいか? くくく……」

「そ、そうか……」

(……よ、よかった。ありがとう、セシリア。

というか、やはり、か。そういう使い方もできるんだな……)

安堵とともに、以前からの僕の推測はどうやら正しいらしいと思に至る。

……あえて本人には伝えていない彼女のスタンドに関する推測が。

(それにしても……)

仁美さんにちよつかいをかけると、そんなにぶつとばされるのか……。

……つて、なんでそんな心配してるんだよ……僕……)

そんなことを考えていると、承太郎のやつが、もうひとつ爆弾を落つこととしてきた。

「おい、しつてるか？ 花京院。」

こいつのファーストキス、やるやつは、もう決まってるんだとよ。」

「……ぬあッ!!」

「あ、ああッ！ ちよ！ なに言ってるの!!」

「な、なにイツ!! それは聞き捨てならん！」

だ、誰だ!! 誰にだーッ!!」

「い、言つてないッ！ そんなことは一言もー！ ちよつと！ 承太郎君!!」

「くくく……同じようなもんじゃねーか」

「ぜんっぜん、ちがうよおー!!」

「……じゃ、あとはふたりでやんな」

「ま、待ちなさいよ! このQ太郎おー!!」

「いいや……待つのはあるだ! そんなので誤魔化されるとでも?」

さあ、吐け! 吐いたら楽になれますよ……」

「や、やめてー!!」

「……だから、そう言ったただけだって。

……前に花京院くんがいったでしよう？ あれだよ」

「ああ……なるほど……。あれか……」

「うん……あれ」

以前シンガポールにてふたりで話した。そのときの自分の言葉をおもい出す。

あの……我ながら、なかなかこつ恥ずかしい台詞を。

「……」

「……」

「……で？」

「……ん？」

「……あなたは、そんな……」。

その……、あげたいと、想う相手が、いる……わけですか……？」

「！ うツ！ ……そ、それは、その……あの……」

「？」

「しらないーツ!!!」

「あつ！
まだ走つちやだめです！
つて……行つちやつたよ……」

M o n s t e r

「オレさー、ちょっと思うところがあるんだが、いいだろうか？」

カラチの宿にて、ポルナレフが言い出したことを皮切りに、事件は起こる。

夕食後、全員で歓談をしていた一行。

「ふふ、もう、ジョースターさんったら……」

いつもの如く、ムードメーカーのジョースターとポルナレフが場に笑いを誘いつつ、和やかな時間が過ぎていく。

すると、しばしの後、柱時計が、ボンボンという響きと共に、時を告げる。

「あ、じゃあ、私はそろそろ。」

すみません、お先に失礼しますね」

それをきっかけに立ち上がる彼女。

「ああ。お疲れ」

「おやすみなさい」

(……珍しいな)

その背中を見送りながら花京院はおもう。自分から彼女がこう言い出すのはあまりないことであつたからだ。

(まあ、昼間のあのクズ野郎との戦いで、疲れたのかもしれないな……)
今日も彼らは卑劣な、敵の刺客を退けていた。

その直後のことだ。ポルナレフが、何となしに、そんなことを言い出したのは。「思うところろ? ……なんだよ?」

さりげなさを装いつつ、気になつて仕方がない……そんな様子を隠しきれない花京院が続きを促す。それにゆつくりと答えるポルナレフ。

「最近……あいつ、可愛くなつたよな……」

「は、はあ!? な、なにを言い出すんだ! 真面目な話かと思つたのに!」

「オレは大真面目だ! お兄ちゃん代理としては見過ごせん」

いつのまにそんなものになつたのか。ポルナレフは続けた。

「なにかあつたんじゃね? はっ! まさか大人の階段を!」

「ぶふおー!!」

スプラーツシユ! 食後のコーヒーがその必殺技の如く、動揺を露わにした男の口から盛大に吹き出される。

「落ち着け……。それは……ないだろ。(こいつがこの様子じゃあな……)」
あきれつつ、そこにおしほりを投げ渡す承太郎。

必死に彼が平静を取り戻そうとした矢先、年長者のジョースターまでもがこんなことを言い出す。

「まあ女の子は恋をすると綺麗になるというからのう……。というのが妥当じゃろ」

「な、なにイ!? だ、誰に!？」

恋……。聞き捨てならないそのワードにまたも動揺を隠しきれない男。

「……」

そこに一斉に、集まる、視線。

「な、なんだよ! みんなして、なぜ僕を見る!？」

「いや、だつて、……。なあ? (めんどくさい野郎だぜ……)」

「ああ……。 (普段はあんなに洞察力があつて頭もキレるくせに、なんで気づかないんじゃないか……)」

「気にするな。ただの憶測だ(ほっとけ。面白いから)」

「? よくわからんが……。そうなのか?」

空中で会話をする仲間たち。知らぬは本人ばかりなり……。とはまさにこのことだろうか。

しかし、そんな朴念仁にも、思い当たるふしがないわけではないようだ。

(でも確かに……最近、以前よりも、くだけた感じのおおをみせてくれることが増えた気がする。)

緊張感が薄れたというかなんというか。ハッ、それに！そういうえば、今日も……)
その脳裏に浮かぶのは、昼間の彼女のすがた。

想う相手がいるのか。そう問うと、逃げ出すように駆けて行ってしまった、あの。

(もしかしたら本当に、いるのだろうか……。いや、ちよつとまで、それ以前に……)

「そ、そもそも、あのひと……に、日本に恋人とかいるんじゃないのか!」

(そうだ……! キスは、その、未経験だということは、前に話の流れで聞いていたが……。)

それとは必ずしもイコールではないのではないか……)

「……花京院おまえ、自分で言っというてそんなに落ち込むなよ」

「う、うるさい! 落ち込んでないない!」

自覚なく項垂れる男に、承太郎がまたもあきれた声を出しつつも、ポルナレフと共に慰めの言葉を差し伸べる。

「安心しろよ。オレ、それ前に聞いたけど、いないっていつてたぜ」

「いたらこんな旅についてこねーよ。今どころか今までずつといねーな。あの感じは」

「そうだな。いねーと思うぜ。」

このポルナレフ様に負けじとも劣らねえ、怖え兄ちゃんもついてたらしいしな」

「な、なんだそれ？」

「えー、なんか、あいつにつきまとして困らせてた男を端からぶん殴って、護ってたらしいぜ」

「そ、そうなのか……」

その情報に、男の胸中に複雑なおもいが走る。

（それは……安心……なような、明日は我が身な……って、なんで!? ちがうだろ！ 僕は関係ないッ！）

「おなじお兄ちゃんとして感動した！」

だからこの旅ではオレがあいつのお兄ちゃん代理としてだな……」

「……と、いうわけだ。安心しろ」

「そ、そうか……。いないか……。い、いや別に安心とかしてないし！」

「はいはい」

「な、なんだよ！ふたりして！」

その男の抗議は当然のように流され、本題に戻る。

「まあ確かに、ポルナレフの言わんとすることはわかる」

「だろだろ！」

「な!？」

「可愛らしいお嬢さんだったのが、すこーし最近大人になったかのう」

「そうそう。すこーしな!ふと色っぽいときがあつてだな」

そんな一同に耐え切れず声を荒げる男。

「や、やめろツ! み、みんなして!」

だ、だいたい仲間のことを、そーゆー目で見るとか! ありえないだろう!」

そこに年長者から鋭い突っ込みが入る。

「ほーう……じゃあ、花京院。おまえさんは、そーゆー風に見ていない、と?」

「む、無論だツ!」

「うっそっけー! あんだけ世話焼いといて! それはないわ!」

「そ、それは……。なんか、気にな……。し、心配なだけだ!」

あのひと、ほつとくと平気で自分を犠牲にしようとしたり……。危なっかしいからだ
!」

「まあ、それはわかるけどなあ。……。じゃあ、オレ、ホンキで狙っちゃおーかなあ!」

「ぬあツ!？」

普段は……。とくにあの娘の前では……。知的で冷静な男を気取っている彼の、傍から見

れば大変わかりやすい必死の抵抗におもわず悪戯心が止まらないポルナレフ。

「(ぷぷぷ、おもしれー！　いつもの仕返しだよっと！) 承太郎は？」

「おれは、前にも言ったが、興味ねえ。もう少し男慣れしてる女の方が楽でいい」

「まーなあ、それは確かに……。でも、一から自分の好みに……。つてのもよくねえ!」

「おつ！　ポルナレフ！　おまえさんなかなかわかつとるじゃあないか！　育てる欲び

！　ありやたまらんぞー！　承太郎もまだまだお子ちゃまだな！」

「……このエロジジイ。おばあちゃんにいうぞ。……ちつ、それもめんどくせえな……」

「じいさん、あんたいくつだよー」

「はあ!?　わしはまだまだ現役じゃぞ！　ししししし！」

いつのまにやら、結局、自分たちの趣味嗜好の暴露に夢中になっていた。

そんな彼らは気づいていなかった。

ゴゴゴゴゴゴ……

すぐ傍で、いつもよりも確実に多めに練られている強大なエネルギーの塊に。

「「ハッ！」」

「……あくまで……あくまでだ！」

彼女の……、『仲間』として……

そして、『友人』……、として……」

「そのようなこと、この僕が許さんツ!! 決してツ!!」

くらえツ!! 天誅ーツツ!!」

チュドーン!!

「オーノオー!!」

緑色の嵐に吹きとばされながらもポルナレフの脳裏に浮かぶ思い……。

「ぐふっ! また……かよ……。

もう二度と……あんな馬鹿真面目なヤツ、からかわないと、誓うぜ……」

*

*

*

「まったく! なんてやつらだ!

あのいかがわしき獣どもの毒牙から彼女を護らねば! なんとしてでも!」

(そもそも、『最近』ってなんだ! あのひとは最初から、かわ……。

……あ、あれ?)

何故か自分でも思わぬ方向に思考が向き、焦る男。その瞬間だった。

「あ！ 花京院くん！」

「うわああー!!」

彼の脳裏に浮かんだ、まさにその本物が現れた。問題の張本人が。

「そ、そんなに驚かせるつもりは……。ごめんね」

「い、いえ」

「なんかさつきそつちからすごい音がしたから、何かあったのかとおもって……」

「……。だいじょうぶです。」

「……どこかの狼どもが正義の狩人に仕留められでもしたんじゃないですかね？」

「？ なにそれ?? そうなの?」

「ええ。安心してください」

しれつとそんなことをいったのち、ちらと彼女の様子を窺いつつ、訊ねる。

「それより、あなたは……?」

「ああ、私? 私はお風呂行ってきた帰り。」

大浴場、広くて素敵だったよー! さつすが、最高級ホテル!

ジョースターさんに今日も感謝だね!

「そ、そうですか……」

にこにここと上機嫌な彼女。なるほどよく見ると、お風呂グッズを手にしている。そ

う、よく……みると……。

(風呂上がり……か。どおりで……)

いつもは下ろしている髪を、まとめていて……。

(新、鮮だ……)

少し上気した頬……白い首筋にうなじ……そこにはらりと流れる一束の髪の毛……。

(色っぱ……いい。……つて)

「うおおあぁー!」

(こ、これじゃあ、あいつらとおなじじゃあないか!)

自らの浅ましさに耐え切れず、うずくまり頭を抱える男。

「え!? な、なに?! どうしたの? 気分わるいの? だ、だいじょうぶ……?」

明らかに『おかしな彼』を心配するあまり、前のめりに様子を窺う彼女。

「だ、だいじょうぶです! だいじょうぶですから!」

(い、いつもにもまして、なんかすごくいい匂いするし……!)

というか、近い! うれしいけれど近いツ!!)

純粹で真面目な彼女の親切心が生み出したこの状況も、どうやら今の彼には裏目かつ

限界なようだ。

「ちよ、ちよつと離……あ!」

そして極めつけに、とんでもないものがその目に飛び込んでくる。

「ぐふあッ！」

「??」

「す、すみません！ すみません！ すみませんー!! うわあああー！」

「か、花京院くーん?!」

すぐさま、立ち上がり駆け出す男。

（すみません！ すみません！ ……あとは寝るだけ……それはそうだろう！ しかし！）

（……そんな胸元がゆるい服で迂闊に屈んだりする、あなたも悪いんだーッ!!）

*

*

*

「い、行っちゃった……どうしたんだろ……?」

彼の去った方向をみつめながら、残された彼女は呆然と立ち尽くしていた。

「……ちつ、あいつ、マジでぶっぱなしやがって……」

そこへ、見知った顔が現れる。

「あ！ 承太郎君！ いいところに！ ど、どうしよう！ 花京院くんが！」

「ああ？ あの馬鹿がどうしたよ？」

(？ 馬鹿……？)

不機嫌極まりない様子でそんな風に吐き捨てる承太郎に首をかしげつつ、彼女は答える。

「いや、なんか、調子悪そうで……」

顔色も青くなったり赤くなったりだし、

聞いてもだいたいぶつて言うけど、全然だいたいぶそうじゃなくて……。

で、なぜか謝りながら絶叫して、走り去って行っちゃった……。

何かあったの?? ど、どうしたら……?!」

「……」

承太郎は彼女の様子を一瞥し、ただひとこと、こう呟く。

「……ほつといてやれ」

SLAVE TO ……

ここはペルシャ湾を渡るフェリーの中。翌日にはサウジアラビアに到着する予定である。

夕食を取り終え、各々に割り当てられた部屋でシャワーも浴び、あとは寝るだけ。

そのはずだったのだが、ふと、喉の渴きを覚える。

(確か食堂に自販機があったな)

そう思い立ち、僕は財布を持って、部屋を出る。

(そういえば同室である承太郎はどこにいったのだろうか……)

などとぼんやり考えながらドアを開けたところで、よく知った顔とぼったりであう。

「あ、花京院くん」

「仁美さん。どうしたんですか？」

「なんか喉渴いちゃったから、飲み物買いにいこうと思って」

「奇遇ですね。僕もです。ではご一緒してもいいですか？」

「うん、もちろん！」

「うーん、味の濃いめな食べ物が多いからかな……。やたら喉渇くんだよね」

「そうですね。浸透圧が上がっちゃうんでしよう」

「なるほど。細胞自体が水を欲しちやうわけね」

「そうそう。それがセンサーの役割をして……。ん？ あれは……」

たわいもない話をしながらふたりで食堂に向かうと、さらに見知った顔を見つける。

「よお！ おまえら！ いい夜だな！ なはははー！」

「はっぴー、うれびー、よろびくねー!!」

「なははははー！」

「う……」

「酒臭いなあ……」

「すっかりできあがって……」

どうやら酒盛りの真つ最中らしい。大人二人でと、思いきや……

「なあ？ これしきで。弱ええよなあ……」

「つて、承太郎君もいるし！」

「未成年だろう……君……」

「かてえこというんじゃねえよ。日本じゃねえんだぜ。ここは」

「そりゃあそうだけど」

「そういう問題じゃないだろう……」

国は関係ない。声をそろえてつつこみをいれる。

「おまえらもちよつと付き合えよー！」

「遠慮しておきます」

またもそろつて丁重に断りを入れる。

「はあ！ てめえら、オレの酒が飲めないってーのかよ」

「酔っ払いに関わるとロクなことがない。さ、いきましよう」

これ以上からまれる前に退散するのが吉だ。

……そんなのは、わかりきっている、はず、だったのに……。

「またまたー！ そんなこと言つてー！」

花京院おまえさん、自分、飲めないからなんじゃないのかあー？

うちの承太郎と違つてよおー！」

「ツ！ そんなことはないツ！」

聞き捨てならないことを言われ、つい、反応してしまう。

「うししー！悔しかつたら飲んでみろー！」

まあ、まだまだお子ちやまのおまえさんには無理かろう！」

「……今、なんと……?」

「あッ! ちよっ!? だ、ダメだよ! そんなやつすい挑発にのっちゃあ!」

「……だいたいようぶです。これぐらい……!」

彼女の制止を振り切り、目の前にある、なみなみと酒の注がれたグラスを一気にあおる。

「おおー! おまえすげえじゃねーか! さき、もう一杯いけー!」

*

*

*

なんだかんだ、結局酒盛りに参加する羽目になった私たち……というか、花京院くん。かなりのペースでグラスを空にし、そのたび注がれるお酒を律儀に飲み干していた。なんとも彼らしいといえそうだが、なにもこんなところでまで生真面目さを発揮しないでいただきたい。

転がっている空瓶を一本手にとりラベルをみる。あまり詳しくない……というか未成年の私ですら知っているこのお酒は……。

ひとり涼しい顔で杯を傾けている、未成年なのにやたらと詳しそうな人に聞いてみる。

「ねえ、承太郎君。これってたしか、ものすごく強いお酒なんじゃあ……？」

「ライター、貸してやろうか？ 飲んだら、たぶん息で火が吹けるぜ」

「……」

「……もう一杯……」

「お、おい、そろそろやめとけ……」

「だいじょうぶらつて、言っているらろう……よこせよ……」

いいかげんまずいと思ったのか、さすがのジョースターさんも止める。が、聞かないようだ。

もはや呂律がまわっていない。これ以上は本気で命にかかわる気がする。たまらず私も必死で止める。

「ちよつと！ もうやめといたほうがいいよ！」

「ひとみさん……？」

「ね？もう部屋に帰ろ……？」

どうにか、説得を試みた。……つもりだったのだが。

「……あなたまで……」

「え……？」

どうやら様子がおかしい。

「……あなたまで、そんなことを、いうんれすか……!?!」

なんだか私は逆に、彼の中のかなにかの引き金をひいてしまったようだった。

しゆる……

「!?!」

ゆつくりと彼の背後から美しくうごめくものが現れる。

きらきら……と、なんか気のせいかな、いつもより、……ぬらぬら、した、ものが……。

「は、ハイエロフアント……!?!」

(……相変わらず綺麗だな……とかおもってる場合じゃない、よね? これは……)

おもわず現実逃避をしたくなってしまったがそうもいかないようだ。

「……」

するするする……

(触手……じゃあなくて、ハイエロフアントの脚が変化しているものなんだから、正確には『触脚』だよな。……はは……)

またもそれどころではないがおもわず……以下略。もう逃げ出したい。

しかしまわりこまれた! ……とはまさにこのことか。長く伸びた触脚はこちらにむかつてきて、うねうねと私のまわりを取り囲む。

「や、やめっ！ し、正気に戻って！」

しかし、嘆願する私の声はむなしく響くだけだった。

完全にいつもとちがう、妖しい光を帯びた彼の瞳に射抜かれる。

「……いけないこだね。そんなこには……」

「……?!」

「おしおきだよ……！」

「……きやーっつ!!」

「ひゃっ！ あはははは！ や、やめて！ く、くすぐった……あはははは！」

ハイエロファントが私の服の中を這いずり回る。しかも手足に絡みつかれて身動きがとれない。

「……じぶんがわるいと、みとめますか……？」

そんなときは……どうしたら、いいのかな？」

「ふあっ！ あっ、ははははは！」

「やっ！ やめて！ し、しぬ！ 死んじやうー！ ご、ごめんなさい！」

——死ぬかと思っただわい——

笑い死に……先日ラヴァースの敵スタンド使い『恋人』との戦い後聞いた、ジョースターさんの

ため息まじりの言葉が頭に響く。それつてある意味かなり幸せな死に方なんじゃあ……なんて他人事にも思った自分に肘鉄をお見舞いしてやりたい。

まさに地獄……。くすぐったがりなのでなおさらなのか。自分の体質を恨む。

そもそも、なんで私が謝らねばならないのか……。一瞬頭をかすめたが、そんなことはもうどうでもよかった。この地獄から解放されるなら、私の誇りなど安いものだ。

「……」

謝罪が効いたのか、攻撃（？）が止んだ。

しかし、ホツとしたのも束の間、この閻魔様、そんな生易しくはなかったようで……。

「おや……。？　なんですか、それは……」

「……へ……。？」

さらなる、とんでもない要求を突き付けてきた。

「……ごめんなさい、ご主人様……。でしよう？」

「はぁー!?」

（な！　ななな、なにを?!　そ、そんなこと言えな……）

「……」

躊躇っている私にまたものびる、魔の手。

にゆる……

「ひ、ひゃ！ はう！ わ、わかったからっ！ やめっ……！」
「……ふふ……ふふ……」

天使のような悪魔の微笑みを浮かべ、私をみおろす彼。逆に怖い。腹をくくり、叫ぶ。

「ご、ごめんなさいー！ ご主人様あー！」

「ふふふ……よく、できました」

「へにゃ……」

そうして私は解放された。脱力感でその場にへたり込む。

(……終わった……)

なんだろう……いろんなものを失ってしまった気もするけれど……

とりあえず終わった……)

しかし、それはやっぱり甘い私の思い違いだったようだ。

「……。いいこだ……。ごほうびをあげなきやあね……」

「は!?!」

「……よつと」

「ひゃん!?!」

ご主人様……じゃあなかった……彼はまたもんでもないことをつぶやくと、まだう

まくからだに力が入らない私を軽々と抱えあげる。

「つづきは、部屋でゆっくり、ね。……じっくり可愛がつてあげるからね」

「!? ちよっ! な! なにゆつて! え、えええええー!!」

(あわわわわ!! なにこれ!? ど、どうしよう! どうしよ! なんてこんなことに!?)

怒涛の展開に頭がついていかない。私はお酒なんて一滴も飲んでいないはずなのに。

「では、失礼」

そんな私をよそに、みんなにこやかに挨拶をする彼。

「わわ! ま、まって!」

(こ、これつてやつぱり、そ、そーゆーことかな?! だよね?! そーだよね?! ま、まず
いって! そ、そりや、すきだよ。私はこのひとのこと、すきだけど……でも、や、やつ
ぱり……)

「ふふ、いこうか」

「……ダメー!!」

ゴン!

「ぐあ……!」

「はあ、はあ……。ごめんね……」

相棒を、すきなひとにぶつけるためにとばす。……まさかこんな風に使う日がこようとは。

崩れ落ちる彼と、もはや放心状態の私。

「終わりだな。よつと……じゃあ、連れて帰るか」

そこへ承太郎君が近寄ってきて、気を失った彼を肩に担ぐ。

「よろしく……つて、ちよつと！ 見てないでもつと早くとめてよ！」

抗議の声をあげる私に対し、にやりと楽しそうな笑みを浮かべる。

「とめる？ ……そんな必要あったか？」

『ダメ！』ねえ……『嫌！』じゃあなくてな。ククク……」

「はっ……！」

「じゃあな」

「ううー……」

「ブラボー！」

「ひゅう！ いいぞお！」

「……」

そうだった。傍観者は承太郎君だけではなかった。というか、そもそも……

「それにしても、面白……いや、ひどい男じゃなあ！」

「普段、真面目なやつほどつていうけど、ほんとなんだなー！」

よかつたじゃねーか！ 本性がわかって！ ギヤハハハハ！！」

「……もとはといえは……」

ゴゴゴゴゴ……

「はっ！」

「ふたりが悪いんでしょー！！」

ゴスツ！ ガン！

「ぐはあ！！」

「……」

『元凶』を成敗したのち、ふらふらと部屋に戻る。

(ああ、つかれた……なんて目に……)

ベッドに倒れ込み、先程の惨劇を思い返す。

(……でも、いつもの、が、もちろん、いいんだけど……)

ごろりと寝返りをうち、かかえた枕をぎゅつと抱きしめる。

(……あんな、花京院くんも、かつこいい……とか、おもっ?!? ま、まだ、ど、どきどきしてるし！)

なんで?! どうしよう……私、変態なのかな？
しかも、なんか承太郎君に見抜かれてる気がするし！)

(……あー！ もう、お嫁にいけないーッツ!!)

*

*

*

「う……あ、頭が痛い……」

「よお、起きたか」

「承太郎？ ここは……？ 僕は、一体……？」

たしか、うつかり挑発に乗って酒を飲んで、それから……？ 記憶がない。
「覚えてねえのか？ ……ククク、見ものだったぜ……」

「は？」

(見もの？ なにが……？ なんかしたのか？ 僕は……)

意味がわからない僕に対し、承太郎は続けてとんでもないことをいう。

「……ハイエロフアント、やっぱり便利だな。変態プレイに」

「はぁー!? な、なにをしたんだ! 僕!? ちよっ! 教えてくれよ!!」

「くくく、おれの口からはとても言えねえ……あいつ本人に聞きな」

「なツ!? なんだってえー!」

（彼女にツ!? 変態……ツツ!?）

衝撃的すぎるワードに頭が真っ白になる。

（ま、まさか、彼女にあんなことやこんなことを?!）

「……う、うそだろおー!」

*

*

*

結局ろくに眠れず朝を迎えた。

昨日の余波も相まって、激しい倦怠感に襲われる。

（いたたた……しかもなにこれ? 筋肉痛? そりやそうか……）

なんだかいろんなところが痛い。あれだけ身をよじったのだ。普段出番のない筋肉が悲鳴をあげるのは致し方ない気がする。

もぞもぞと起き上がり、けだるいからだをひきずりお風呂場に向かう。

熱いお湯を頭から浴びると、しだいに意識がはつきりしてきた。

(……よく考えたら、今日どんな顔して会えば……って、そっか。

私が気にしちやったら、その方がまずいか……

あつちが酔っぱらっていたわけだし、……なかつたことにしよう。

うん。無礼講だよ。無礼講。なんかちがう気もするけど……)

心の方針も決まった。身支度を整え、朝食をとるため食堂にむかうべく部屋のドアをあける。

と、なんとそこには、彼が……いた。

「あ、……おっ、お、おはよ……う……」

気にすまい、そうはおもえど、無理でした。

……おもわず心で一句詠んでしまった。

だいたい片想いの相手にあんなことをされて、翌朝平気でいられる人がいたらお目にかかりたいものだ。

(いや、それでも! がんばらねば! がんばれ、私!)

「……すみませんでしたっ! 」

そんな私の心の葛藤をよそに、彼はいきなり深々と頭を下げてきた。

「え! 」

「昨晚、とんでもないことをしたみたいで……!」

「い、いや、あの、頭上げて?」

私こそセシリアおもしろいつきりぶつけちゃったし……だいじょうぶ?」

「……? お、怒ってはいないんですか……?」

(へ……? 怒る……?)

彼に対してそんな感情を一切持ち合わせていなかったが、よく考えたらそれが正常な反応な気もする。私の場合、とある感情にさえぎられてか、まったく浮かばなかったけれど……

(ハッ! いけない、ば、ばれちゃう!)

「え?! だ、だって、そもそもの原因はあの二人でしょう! ちゃんとおしおきしとい

から!」

うん、そうだ。だからです。自分にも言い聞かせるように彼に伝える。

すると、他にもっと気になることがあるようで、彼はその点についてはそれ以上触れずにこういった。

「はあ。あの、それでその、僕はあなたに、一体、なにを……?」

「え!! お、覚えてないの?!」

「はい……。承太郎も、ハイエロフロントを、へん……。い、いや、その……。悪用した

としか、教えてくれず……。あとはあなたに聞けと」

「はあ?!」

（あ、あのQ太郎、他人ごとだと思つて……!! 私からなんて、余計言えないつてーの！）

昨晚のめずらしく楽しそうな姿を思い出す。

今もきつとこの状況を作りだして、密かにほくそ笑んでいるに違いない。

「い、いや、もういいよ、忘れてて……」

世の中、知らない方がいいこともあると思う。ほんとうに。

「そ、そういうわけには！ お願いですから！ 教えて下さい！」

しかし、彼に引きさがる気配はなかった。

しかたがない。考えに考えた末、私は重い口を開く。

「じゃあ、……その、……」

「ごくり……」

「……くすぐり、地獄」

「……は？」

「だからー！ ハイエロフロントに縛られて、全身くすぐられたの！」

「……へ？ ……それだけですか？」

「そ、それだけってなに!? 私、死ぬかと思ったんだよ!」

「そ、そうですね。すみません……」

「……」

「……はい、そうです。……ご主人様……」

「は?」

「い、いや、なんでもない! なんでもないッ!!」

(厳密には、『それだけ』ではないけど……言えるかー!!)

「そ、そうか……僕はてつきり……」

「? ……てつきり?」

「……」

「……」

「な、なんでもありません! なんでも!! ほ、本当にすみませんでした! で、では
 そういうと、彼はそそくさと部屋へと戻って行ってしまった。

*

*

*

部屋へと逃げるようにとび込んだ僕。

(そうか、よかった。もつとまずいことをしでかしたのかと思ったが……)
彼女の言葉を思い出す。

(……くすぐった、だけか。全身、縛つ、て……う？ ……)

「……よく考えたら……それだけでも……十分、まずいつて!!」

ああ、なぜ僕は覚えていないッ！ 惜しいことを……」

「……じゃないってえー！ ああ、もう、お酒、怖い……」

KARA KARA

僕達一行はカラチから無事、船でペルシャ湾をわたり、アラブ首長国連邦のアブダビへとたどり着いた。

「しかししたまげたなあ、この国は！　どの家もこの家も全部豪邸だらけじゃあねーか！
」

車のハンドルを操るポルナレフがいう。

「本当。花が咲き乱れていて、きれいな家ばかりですね」

窓の外を眺めながら、彼女が同調する。

「うむ、東京なら30億40億はしそうな家ばかりだ。これがこの国の普通の人々のくらしぶりらしい。ほんの20年前までは砂漠だったのが、オイルショックによる莫大な利益のせいで夢のような都市に成長したのだ」

ジョースターさんが年長者らしく博識なところをみせる。さすがはニューヨークの不動産王、というところか。

「ハッ！」

そのとき、僕はなにものかの視線：気配を感じ、後ろを振り返る。

それをミラー越し、目の端にとらえたポルナレフはいう。

「どうした、花京院？ また誰かに尾けられてる気がするのか？」

現在走っているのは一本道の直線道路で、この車以外の車両は見当たらない。

「い、いや、こんなに見はらしのいい場所だ……追手がついていればわかるのだが、つい……誰かに見られているような気分がしてふり返ってしまふ」

「ああ。無理もないぜ。オレだつてそーさ。いろんなスタンド使いが次々といきなり襲ってくるもんでビクビクになつちまつてる……」

全員の頭にこれまでの怒涛の襲撃が浮かび、うんざりした表情になる。

「うむ、それでじゃ。考えた。これからのルートだが……」

地図を広げながらジョースターさんがいう。

「ここから北西へ100kmのところにヤプリーンという村がある。

砂漠と岩山があるので道路がぐるつとまわり込んでいる。車だと2日はかかってしまふらしい。だから村の住民はセスナ機で移動している、ということだ。

まずこの村へ行きセスナを買ってサウジアラビアの砂漠を横断しようと思う。

今まではスタンド使いによる攻撃のせいで墜落したり、他の人々を犠牲にしたくなかつたので飛行機には乗らなかつたが……セスナならわしも操縦できるし、旅行日程の短縮にもなる」

「……生涯に3度も飛行機で落ちた男といつしよにセスナなんか、あまり乗りたかねーな」

承太郎がぼそりと、しかし辛辣な意見を放つ。

「……きつ！」

そんな孫をじろりとにらんだのち、あえて意に介さぬように、ジョースターさんは続けた。

「さっ！ それでじゃ。その前にこの砂漠をラクダで横断してヤプリーンの村へ入ろうと思う。」

ラクダだと一日でつく」

「ラクダ?! ラクダに乗れるんですか!？」

「や、保乃宮さん……」

彼女の目が密かに輝くのを僕は見逃さなかった。

前々から思っていたが、やはりこのひと、少し普通の女性とは違うようだ。

スタンド使いだ、とか、例の、過去のことがあるから……とか、そういうことが一因ではあるのかもしれないが……それ以前に。根本的に。どこかずれているというか、浮世離れしているというか、なんというか。

(まあ、そうでなければこんな旅についてきてはくれないか。それに……)

僕の視線に気づき、小首をかしげた彼女に訊ねられる。

「……………ん？ どうしたの？」

「……………いいえ」

（……………そこがまた、こまったことに、おもしろい、……………なんてね）

「おい、セスナはいいがちよつと待ってくれ！ ラクダなんか乗ったことねーぞ！」

抗議の声をあげるポルナレフに対し、ジョースターさんは不敵に笑う。

「フッフッフ、まかせろ。わしはよく知ってる。教えてやるよ。」

リラックスした気分で安心しておれ」

「バフー！」

「うお！」

「……………でけえな」

ラクダだ。動物園などで本物を見たことがないわけではないが、こんな至近距離で見るのは生まれて初めてだ。ましてや乗ることなんて。

「か、かわいい！ つぶらな瞳！ まっげ長ーい！ うらやましーい！」

「……………」

その迫力に引ききみな男どもをよそに、うちの紅一点は楽しそうにラクダと戯れている。

(そういえばこのひと、はじめて出逢った時にも猫を助けたり話しかけたりしていたんだっけ……)

どうやら彼女の動物好きは筋金入りらしいと思に至る。

「ど、どうやって乗るんだ？ 高さが3mもあるぞ」

「あのじゃな、ラクダっていうのはな。まずすわらせてから乗るのじゃー！」

ジョースターさんが手綱を下に引く。が、ラクダはぴくりとも動かない。

「まずすわらせてから……のるんだよ。……すわらせてから……乗るッ！」

ちよ、ちよつとまっておれ！今すぐすわるからな！」

悪戦苦闘するジョースターさん。しかし、ラクダがいうことをきく気配はまったくなかった。

「……」

「おい、じいさん、本当に乗ったことあるんだろーな……？」

ポルナレフが僕らの頭に浮かんだ疑問を代弁してくれた。

「……わしゃ、あのクソ長い映画、『アラビアのロレンス』を3回も観たんじゃぞッ！」

乗り方はよくしつとるわい。2回は半分寝ちまったが」

「映画ー?? なにー?! ほんとに乗ったことはねーのかッ!」

「……ひゃー! たっかーい!!」

「あ……」

そんなジョースターさんを尻目に、いつのまにか彼女は見事にラクダに乗っていた。

「あつ!? お、おぬし!? どうやって!?」

「え? 目を見て、敵じゃないことを確認してもらって……」

で、お願いしたら座ってくれた……ので、乗らせていただきましたー!

わー! 気持ちいいー!」

「……ナウシカか、おまえは……」

「……ジブリ、好きなのか、承太郎?」

意外なような、……それっぽいような。つつこみどころがもはや行方不明なおはおいておく。

「そ、そうじゃ! 動物なんてもんは気持ちを理解してやるのが大切なんじゃ」

すると、ジョースターさんはどこに準備していたのか一個のリングを取り出した。

グーしか出せないあの有名な、青い狸型ロボの如く。効果音まで聴こえた気がしたの

は幻聴か。

「ほおーれ、うまそーじやろ！ おいしいよーっ！」

そして素晴らしき効果を発揮するリンゴ。

「見ろッ！ すわったぞッ！ ラクダの気持ちを理解してやればすわってくれるのじゃ。けっけ！」

そんなこんなでようやく乗ることのできたジョースターさんは、さらに語る。

「やったー！」

……いいか？ ラクダというのは馬とちがつて『だく足歩行』といって、片側の前足と後ろ足が同時に前に出て歩くので、けっこうゆるる……

だがな、そのリズムにさからわずに乗るんじや、こっとうふうに！」

手本を見せてくれようとする（ちなみに、ちよつと離れたところでは、楽しそうに『ナウシカ』はラクダを操っている）が……

「さて、こっら！ ……は、速いッ！ おおっ！ いったッ！！」

振り落とされるジョースターさん。

確かに痛そうだ。ああはなるまい。

「よーし、みんな予定どおり、うまくのれたようじやのー。」

それでは砂漠をつつきるぞ！ みんな！ 北西に向かって出発進行じゃー！！」
しかし、威勢のいい号令と裏腹に、全員のラクダはてんでバラバラに動き出す……
「おいおいおいおいおい……！」

なんとかラクダを制御しつつ、砂漠を進む。

じりじりと肌が焼ける感覚。激しい熱気が僕たちを包む。

「……？」

そんな中、再び僕は振り返る。……あたかも太陽光線の如く、さすような視線を感じて。

「おかしい。やはり、どうも誰かに見られている気がする……」
振り返る。

しかし、誰も、何もない……見渡す限り、砂漠しかない。

「花京院、少し神経質すぎやしないか？」

ヤシの葉で足跡は消しているし、数十キロ先まで見わたせるんだぜ。誰かいりやあわ
かる……」

と、ポルナレフ。そこへ彼女がおずおずと手をあげる。

「あの、実は私も、なにかに見られている気がする……」

「おれもだ。さつきからその気配を感じてしようがない」

さらに承太郎も。ふたりもそう感じていたらしい。

「承太郎、調べてみてくれ」

ジョースターさんが承太郎に双眼鏡を渡し、驚異的な視力をもつスタープラチナの眼で確認する。

「どこかに不審なものでも……?」

「いや、見えない。何もない……しかしなにか妙だ……なにか……が……」

「おい、行こうぜ。陽が暮れたらテントをはろう。……それにしても暑いぜ。見ろよ、気温が50℃もあるぜ」

温度計を指しながら、ポルナレフがうんざりとした調子で言う。

「砂漠の最高気温はそれくらいにまではなるからな、今の時刻が一番暑い……って、えッ!?!」

時計を確認したジョースターさんが声をあげる。

「承太郎! おまえの時計、いま何時だ?」

「……20時10……!?!」

「う、うっかりしていたが……ど、どういうことだ! 午後8時を過ぎているというのに!」

「!?」

「なぜ太陽が、沈まないッ！」

「ばっ、ばかなッ！ 温度計がいきなり60℃にあがったぞ！」

うねりをあげ燃え盛る太陽。

「し、沈まないどころか！ 太陽がッ！ 西からグングンのぼってきているぞッ！」

そして、たどり着く。ひとつの結論に。

「ま、まさか、あの太陽がッ！ ……スタンド!!」

*

*

*

『太陽』はますますその勢いを増し、私たちを照らす。

「このまま1日中……いや、一晩中だったな……」

オレたちを蒸し照らしてゆでダコ殺しにする作戦か……あのスタンドはッ！」

「いや……そんなに時間はいらぬい。」

サウナ風呂でも30分以上入るのは危険とされている……」

「どうやって闘うッ！ くそつたれの気温が70℃に上がったぞッ！」

それにあの太陽のスタンド、遠いのか近いのかもわからぬーぜ……

距離感がまったくねーッ！」

「てつとり早いのは…本体をブチのめすことだな」

「うむ……。本体が……。どこか近くにいるはずだ。探すのだ……」

敵は何らかの方法で我々に気づかれないように潜んで、尾行してきていたのだ……」

「ちよつと待て!!パキスタンで出会った『恋人』^{ラグァーズ}のように、遠くから操作できるやつかも

しれなかつたらどーする!？」

「それは考えられん!。力の弱いスタンドなら遠隔操作できる……」

しかしこの『太陽』のエネルギ―は今……体験しているとおり!

本体は絶対近くにいるはずッ!」

そんななか、ラクダが……。倒れた。

「あっ!!」

「やばいぜ、暑さでラクダが倒れ始めた……」

「じつとしていてもしょうがないッ! 僕のハイエロフロントでさぐりをいれてみるッ

!」

「花京院ッ!」

「敵スタンドの位置をみるだけです。」

どの程度の距離にいるのかわかれば……。本体がどこにいるかわかるかもしれないッ

！
」

「まって！ いっしょにつれて行って！ セシリア!!」

相棒を呼び出す。

「ありがとうございます。ではいきますよ!!」

「20 m……40 m……60 m……80 m……」

ハイエロフロントとセシリアはぐんぐん上空の『太陽』に近づいていく！

「100……!!」

すると、急に『太陽』の様子が、…パワーをためているかのように、さらにうねりをあげはじめた。

「!? なにかやばい！ ふたりとも、スタンドを戻せ！」

「なにか、しかけてくるぞッ！」

「そのまえに、エメラルド……」

「ッ！ セシリア、ガード!!」

次の瞬間、『太陽』から放射状に、私たちにむけて強烈なレーザー光線が発射された！

「うぐっ！」

「きゃあ！」

そのエネルギーを防ぎきれずにはじきとばされるハイエロフロントとセシリア。

さらに光線はラクダたちをも貫いた。

「ラクダがッ！」

「うおおおおお！ 野郎ッ!!」

ポルナレフさんがチャリオッツで必死に光線をはじき返す。

「おらあ！」

その隙に承太郎のスタープラチナがその剛腕で地面に穴をあける。私たちはその中へ、辛くも逃げ込んだのだった。

*

*

*

「だいじょうぶか？花京院」

わしは敵の攻撃をくらった花京院に声をかける。

「どれ、みせてみる。治療してやろう。」

『波紋』で、傷を治す。

「ありがとうございます、ジョースターさん。」

「ごめんね、防ぎきれなくて……」

その様子を見て、心配そうに、かつ申し訳なさに保乃がいう。

「いえ。……すみません、僕がうかつでした。

すさまじいエネルギーだ。もろにくらっていたらどうなっていたか……」

「しかし今の攻撃、おそるべき命中度！ やはり敵はどこからかこつちを見ているぜ！

どこだ！ どこなんだ、敵はッ!?」

ポルナレフが焦りの声をあげる。

さらに気温は上がり続ける。もう頭が茹だつてどうにかなりそうだ。

なんとか敵の位置を探ろうと、わしは双眼鏡をそつと穴の外へのぞかせる。

その刹那、光線で打ち抜かれ、双眼鏡は無残にもバラバラになつてしまう。

「シット!! どこにいやがるッ! どーやってこつちを見てやがるんだッ!」

透明人間かッ! 敵本体はッ!」

わしが叫んだ。

……そのときだった……。

「ウツ! クッククッククッククック……。

フツフツフツ……ホハハハ、フフフフ、へハハハハ、フホホアハハハ」

すると、突然。本当に突然……花京院が奇妙な笑い声をあげはじめた……

「おい、花京院……どうした?」

「ハハハハ、フフフ……」

「おい、気をしつかりもてッ！」

こんな苦しい時こそ冷静に対処すれば必ず勝機はつかめるはずじゃッ！
孤立無援とはまさにこのこと……ここはわしがなんとかせねば……。

しかし、そんなわしに、気が触れてしまったかに思われた花京院が笑いながら言う。

「ウク、ハハハハハ……勘違いしないでください、ジョースターさん。」

あそこの岩を見てください。人が隠れられるほど大きくありませんか？」

花京院が指さす方には、確かに……岩が見える。

「？ なんのことだ？」

「こんどは反対側にある、あそこの岩を見てください」

「？」

「まだ、気がつきませんか？ 反対側にあの岩とまったく同じ、対称の形をした岩がある。」

影も逆についている。ということとは……？」

ポルナレフが笑う。

「ウヒヒヒヒ、ハハハハ、アホらしい！」

そして、スタープラチナが岩を掴み、投げつける！

「オラア!!」

「ドギヤース!!」

岩は、なにかが割れるような音と何者かの悲鳴とともに、何も無いところに穴をあけた。

「な! く、空間に穴が!!」

「やれやれ、情けねーじじいだ。てめー、暑さのせいで注意力がにぶったことにしてやるぜ。」

とても血のつながりがあるおれの祖父とは思えねーな」

割れた『空間』に皆で駆け寄る。

「こいつは、鏡だ!」

「あーあ、砂漠の景色をうつしながら鏡の後ろにかくれて尾行していたとは、気づかなかったぜ」

「見てください! 鏡の死角のこのメカを! 快適ですよ。エアコンまでついてる」

「え!?! ……ということは、こいつ、もうやつつけちまったってことかあ? もう、終わり?」

こいつの名前も知らないのに! 『太陽』のスタンドはきれいにかたづいたのか?」

「『太陽』^{ザ・サン}のカードのスタンドか……なかなかすごい敵だったが、タネがばれてみりやあ、アホらしいやつだったな。フッフッフ」

「ふっふっふ！ つ、ツポにはまって……笑いがまだ……ふふふ……」

「はいはい、それくらいにして。次の目的地に行きましょう。砂漠の夜は冷えますね」

「ハックシユン！」

ポルナレフのくしやみと皆の笑い声が、静かな砂漠の夜にいつまでもこだましていた。

「なあ……花京院。正気だったってことは、……おまえさん、その……笑い方……」

「ん？ なんですか？ 僕のエレガントな笑い方がなにか？」

「……。なんでもないわい……」

夢の中であいましょう

♪

(……音楽が聴こえる……幼い頃よく聴いたような……どこでだろう？　この、コミカルな……)

(……でも、どこか、なぜか不安を覚えるような……)

オギャアー……。オギャアー！　オギャアー!!

(赤ん坊……?)

「……はっ！」

BGMはポップで不気味なメロディーと赤ん坊の泣き声。そして不快な振動を感じながら僕は目覚めた。

なにか乗り物……ゴンドラ、のようなものの椅子に自分は座っているようだ。正面と背中側にはくりぬかれた窓がある。

「なんだ……？」

窓からは青い空が見えた。警戒しつつ顔をのぞかせ、下を眺めてみる。ここは……

「遊園地? ……の観覧車か……?」

(どこの遊園地だろう? なぜ観覧車なんかのにのんきに乘っているんだ?)

僕たちはラクダに乗ってサウジアラビアの砂漠を旅していたはず。

みんなは……? いない……。僕一人か……)

「クウーン」

自分の心の声に呼応するかのよう、鳴き声が聞こえた。驚きながらもそちらをみると、そこには一匹の犬がいた。

「犬……知らない犬だ。……ん?」

ふと見上げると空にひとつ赤い風船が浮かんでいるのに気づく。それはフワフワとこちらへ漂ってきた。よく見ると何かがくくりつけられているようだ。窓から手をのばし、それをつかむ。

「これは……ッ?!」

「タロットカード! 『死神^{デス}』のカード!! ハッ!」

カードには大きな鎌を持ったピエロのような外見の死神の絵が描かれている。

その、絵が、なんと……!

「う、動いているッ!?!」

カードの死神はみるみるうちに大きくなり、3D映画さながらに飛び出し実体化し

て、こちらに襲いかかってきた。

「うわああー!!」

死神はためらう様子もなく、大鎌でこちらを横一文字に切りはらってきた。

僕はとっさに後ろに倒れこみ、手を切られながらも間一髪攻撃をかわす。

「きやいん!!」

そして空を切るかに思われたそれは、無残にも犬の頭を横まつぶたつに切り裂いた。

飛び散る鮮血、つぶれた眼球、はみ出る脳……

衝撃的なそれは、僕に叫び声をあげさせるには十分すぎた。

「うわああああー!!」

*

*

*

「…………うあああー!!」

「花京院! おい! 花京院!」

「ハッ!!」

「どうしたんだ? エクソシストみてーにベッド揺らしながらうなされてんじやねー

よ。びつくりするわ……」

「()、()は……?」

「()は? じゃねーよ。この村でセスナを買って、それで砂漠を越えるんだろ。まだ寝ぼけてんのか?」

「そ、そうだな。そうだった……」

「早く起きろよー。みんなはもう飛行場にいる。今日これから500キロは飛ぶ予定らしいぜ」

(……ゆめ。夢だったの、か……)

「今日もいい天気だ! 暑くなりそうだな」

ポルナレフはカーテンを開けながら、いつものように陽気な調子でそう言った。朝日がまぶしい。

しかしそれとは裏腹に、まだ悪夢の余韻で僕の心は暗く、重かった。「ふう……。恐ろしい夢をみた。……本当に、恐ろしかったんだ……」

君に起こされて、助かったんだよ……」

「恐ろしい夢? なになに? どんな夢?? おせーておせーて!」

(……どんな……?)

そう言われ、先ほどの夢を思い浮かべようとすると、どうしても思い出せない。

「……それが、忘れて、しまったみたいだ。とにかく恐ろしかった……」

「ふーん。ま、よかったじゃん。夢で。さ、早く支度しろよ」

「ああ。……ん？」

ふと手を見ると、切り傷がある。しかも切つてまだ間もないようで、傷口からは血がにじんでいた。

(どこかで切つたのか？ いったいどこで……？)

「おい、早く！ みんな待ってるぜ」

「あ、ああ、すまない」

身支度を済ませ、ポルナレフとともに宿の外に出る。すると一人の少年の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。

「うわー！ ぼ、ぼくの犬が！ こ、殺されている！ なにかに切り裂かれて、殺されて

いるッ！ うわーん！」

「！」

「……ありやー、かわいそうに。ひどいことするやつもいるもんだぜ。

しかし、オレたちにはかまっている時間はねえ。気の毒だがな」

(……犬？ 犬の死体をつい最近もみたような……。どこでだっただろうか！)

(……思い出せない……)

「ほれ、行こーぜ」

「ああ……」

飛行場に着くと、なにかトラブルでもあったのか、ジョースターさんとセスナの持ち主がもめているようだった。

「話が違う！ 昨日わしらにそのセスナを売ってくれと言っただろうが！」

「状況が変わったよ。この赤ん坊が熱出した。39℃もある。早く町の医者連れて行かないといけない。村の他のセスナは出払ってるから、これで行くね。あんたらにはこれが戻ってきたら売ってやるよ。明後日まで待ちな。」

「なんだと！ その赤ん坊も大変なのはわかるが、こちらも人命がかかっておる！ こんなどころで2日も足止めを食うわけにはいかんだ！」

「どんな理由か知りませんが、それを優先してこの赤ん坊を見捨てるというんですかい？」

「うっ……」

(……………？ 赤ん坊……………赤ん坊の泣き声も、どこかで……………。あ)

「またも頭の片隅に、なにかひっかかるような感覚を覚える。

すつきりしないそれを抱えながらも周囲に目をやると、少し離れて諍いを見守っている仲間の姿が目に入った。

「ふたりは僕に気がつくと言をかけてくれた。

「おせーぞ。やつと来たか」

「おはよう、花京院くん。……………？」

「承太郎、保乃宮さん。おはようございます。すみません、遅れてしまつて。……………何かあつたようだね」

「ああ。聞いてのとおりだ……………」

「言い争いは平行線のように、収束する気配がない。

「そこへ一人の女性が割つて入つていった。赤ん坊の母親だろうか。

「あの、このセスナは5人乗りですが、赤ちゃんくらいは乗せることが可能です。

「どうでしょう？この人たちに赤ちゃんをお任せして、お医者さんのところへ連れて行つてもらおうというのは……………」

(赤ちゃん……………)

「理由はわからないがどうしても赤ん坊に向かつてしまふ、そんな僕の目は捕らえた。

（はっ！ い、今この赤ちゃん、笑ったような……？）

しかも牙のような……もう歯が生えているのか……？）

もつとよく見ようとカゴに手をのばす。

「オギヤーオギヤー！」

その瞬間、烈火の如く赤ん坊は泣き声をあげ始めた。

「うっ！ ……すみません……」

セスナの持ち主が呆れたように母親に言う。

「いいのかい？ こんなやつらに任せて。あんたはそれで……？」

「ええ」

「ちよ、ちよつと待て！ それは困る！ この赤ちゃんが危険だ！」

慌てるジョースターさん。

「いいじゃねーか、ジョースターさん。オレは大賛成だぜ。上空を百キロ以上のスピードで飛ぶセスナに追いつけるようなスタンドなんかいねーだろうし。車とか船がスタンドってこともあつたけど、この飛行機がスタンドってことは……ほら、なさそうだぜ！」

ポルナレフがセスナに蹴りを入れながら言う。

「他のみんなはどう思う？」

それを受け、ジョースターさんが意見を求める。

「赤ん坊の母親の意見をとるしかなさそーだな。……おれはスタンドよりじじいの操縦の方が心配だがね。人生で2度も墜落するのは御免だぜ。……じじいは4度目か……」

と、承太郎。

「……それはたしかに、不安かも。でも逆に、さすがに4度目はないんじやあ……」

「や、保乃まで！ う、うるさい、うるさい！ だいじょうぶじゃ！」

「花京院は？」

「僕は……」

ポルナレフの言葉をきっかけに、皆の視線が、僕に集まる。

（ひっかかる。……何が。……しかし、反対する明確な理由もない……）

「……しかたがないと、思います。連れて行ってあげるしか……」

（なぜ……なぜこんなに、不安なのだろう……？）

「……」

「よし、決まった！」

「……だいじょうぶ？？」

皆でセスナに乗り込む準備をする中、心配そうな面持ちで僕にこう尋ねるひとがいた。

「……仁美さん」

「いや、体調悪いのかな、って。顔色もよくない気がするし。」

それとも……なにか、あつた？」

「！ いえ、だいじょうぶですよ……」

(……気づいてくれていたのか……)

心遣いが嬉しい反面、そんなにも自分は憔悴しているのだろうかと不安にもなる。

彼女はそんな僕のかおをのぞきこむと、眉間にしわを寄せながらいう。

「……ほんとに？ 嘘ついて、無理したら……怒るよ！」

「……ふ、それは、嫌だなあ」

(怒られても、全然怖くなさそうだが……)

おもわず笑みがこぼれそうになる。そんなことは露知らず。彼女は続けた。

「だったら、ちゃんと言うこと！ で、どうしたの？」

普段は、僕の方が無理をしがちな彼女を諫める方が多いのに、今日は逆だ。めずらしくお姉さんらしいことを……と微笑ましい気持ちになる。

そういえば彼女は二つ年上であることを久しぶりに思い出した。

「いえ、本当にたいしたことではないんですが……」

こんなことを気にするなんて、気の小さい男だと思われるだろうか？ という不安が一瞬よぎったが、彼女の真剣なまなざしに、そんなふうに思うようなひとではなかったな……とすぐに打ち消す。

それに、もう言わねばこのひとはひいてくれないであろう。それも確定であった。

「今朝、ひどく嫌な夢を見てしまったよう……それで」

「夢？ そっか、それでかあ……いつも朝、早い方なのにめずらしいなって思ってたんだ。

嫌な夢みると起きたとき相当疲れてるもんね」

自らも経験があるのか顔をしかめつつ、しかし得心がいったとばかりに頷く彼女。

「……どんな夢だったの？」

そしてやはりというか、先程のポルナレフと同じ疑問をぶつけられる。

「それが……。全く思い出せないんですよ。内容を。ただただ、すごく恐ろしかったということしか……」

「全然？ それだけ恐い夢なら印象に残って、少しは覚えていそうなものなのにね。不思議だね」

「はい……」

「夢……。夢かあ……」

「おい！みんないいぞ。乗れ！」

そのとき、ゴーグルをつけて、準備万端な様子のジョースターさんが声をあげた。

「……はい！では、いきましようか」

「うん。……ごめんね。無理矢理聞き出したのに、ぜんぜん役に立てなくて……」

「そんなことないですよ。話したらけっこう楽になりましたから」

「そう？ だつたらいいけど……。くれぐれも無理しちゃダメだよ。」

なにかあつたらひとりで抱えないで、ちゃんと行ってね？」

「……はい、ありがとうございます」

*

*

*

セスナは轟音をあげながら、大空へと飛び立った。

なかなかの振動だ。三半規管に自信のない私は少し不安になる。

（酔わないといいなあ……って考えたらダメなんだよね。なにか別のことを考えよう）

と、膝に乗せたカゴの中にいる赤ちゃんをみる。

（何か月くらいかな？ まだ、熱が高いみたいだけど……）

うつむいていると、余計酔いそうだ。操縦席や助手席、自分の前方の席にいる仲間たちを見る。

「ふふふー！ 腕がなるわーい！ 昔を思い出すのー。わしや、パイロットになるのが夢だったんじゃない！」

「……いいから。たのむから。集中しろ……」

ご機嫌で操縦桿を握るジョースターさん。一方、助手席の承太郎くんはやれやれといった表情で祖父を監視している様子だ。

（確かに、もう墜落はごめんだもんね……。船は沈むし、車は大破。

……この旅、乗り物に縁がなさすぎでしょ……）

「あー。なんか眠くなってきた。ジョースターさん、すまんが、30分くらい寝かせてくれ」

ポルナレフさんはそういうと、背もたれと窓に身体をあずけ、居眠りをはじめた。その隣の席にいる彼も、眠そうだ。

（……花京院くん。……夢のせいで眠れなかったみたいだもんね。

ほんとにだいたいぶかな……？

さつき、ああは言っていたけど……）

先程の会話と、いつになく、力なく微笑む彼の様子を思い出す。

(なにかあつても、きつと自分で、なんとかしようとしちゃうからなあ……)

器用なんでもできちゃうから、余計にそうなのかも……)

(……でも……、いつか、なにか、あつたら……?)

「……ッ!!」

背筋が凍りつくような感覚に身震いする。

想像だけでこのざまだ……もしも、もしも、そんなことになってしまつたら……

……いつたい自分は、どうなつてしまうのだろう……。

「はっ!」

(なっ! なにを、縁起でもない! もう!)

自らのうしろ向き極まりない想像を必死にかき消す。

(……はあ。もつと力に、なりたいたいになあ……)

無力さとはがゆさを感じながら、眠っている彼の横顔をみつめる。

その彼が今まさに現在進行形でとんでもない目に遭っているなんて、これっぽっちも知らずに……。

*

*

*

♪

「ハッ！」

「なんだー？　ここは？　うわ！」

僕は再び目覚めた。いや、目覚めたという表現は正しくない気もするが……それどころではない。

「ここは……！　続きだ！　今朝の、夢の続きだ!!　僕らは夢の中にいるんだッ！」

この音楽。遊園地……例の観覧車のゴンドラに僕は戻ってきてしまったようだ。あの犬の死体もそのままだ。

「夢？　なーんだ夢か。ならいいや。夢ならこんな死体、怖くないもんねー！」

夢つてのは怖いと思うから怖いんだぜ。リラックスしろよ、リラックス！」

先ほどと異なる点として、今度はポルナレフも一緒だった。

が、なぜこいつはこんなにも呑気なのか……。

「ちがう！　夢だが、ただの夢じゃあない！　ふたりして同じ夢をみるか?！」

「それもそうだな……でも夢だし。そんなこともあるんじゃないの？」

そのとき、ポンツという軽快な音と煙とともに、ポルナレフの手に、ソフトクリームがあらわれた。魔法のように。

「おおっ！ これは便利！ ほら、このとおり！ 夢つてのは楽しいと思えば、楽しくなるんだよお」

「なるかッ！ ……この犬が今朝、宿の外で死んでいるのをみただろう！

あの犬は僕と同じ夢をみていて、夢の中で殺されたんだ！ そして実際、現実でも……。

「この手の傷も、そのときにつけられたんだ！」

「あー？ 誰にだよ？」

「敵のスタンド……『死神』^{デス}の暗示をもつスタンド使い……。

「ここはきつとそいつの創り出した夢の世界なんだ！」

「はあ？ おまえスタンド使いに襲われる夢なんてみてたのか？ もっとリラックスしろ

よ」

「ちがうッ！ 『スタンドの夢』じゃあなくて、『夢のスタンド』なんだ!!」

ポルナレフは変わらさず呑気に、ソフトクリームなんか舐めながらこう言った。

「そうだよー。だから、これは夢なんだろ」

「……わからんやつだな!!」

我慢しきれず壁を殴る。

「くそっ！ どうやったらいかに理解してもらえるんだ……僕の説明がわるいのか?!

)

すると、どこからともなく、声がした……

「……ラリホー！ ……ほんつと、頭の悪い野郎ダゼ……」

「!? なんだと?!」

「！ 違う、僕じゃあない！」

「……理解の遅い脳みそだ、こう言ったんだよお！ ポルナレフ!!」

「い、犬の死体がしゃべ……?!」

不気味な声の発信源はなんと犬の死体だった。

頭の切り口がグチャグチャと嫌な音を立て始め、何かが出てくる！

「か、拡声器?!」

「花京院のいうとおり！ おまえたちは、コノ『死神13』の創り出した、『悪夢世界』デスサーティーンにいるんだヨ〜！」

犬の頭……だったものから、さらに何かが出てくる！

「なんだ！ なにが出てくるんだ?!」

ナイトメアワールド

「ポルナレフ！ 闘いの姿勢をとれッ！ そいつがデスサーティーンだ!! 出てくるぞッ!!」

瞬間、ポルナレフの持つソフトクリームが、ミミズの大群に変わった。

「ぎゃー!! ペッペッ!!」

「ラーリホおー!!」

それと同時に……僕を今朝襲った、大鎌を携えたあのピエロが、姿を現した。

「うわあー!!」

やつはポルナレフの首を掴み、釣り上げる!

「ポルナレフ! チャリオッツで闘うんだ! ハイエロファント! 出てこい!」

「う、ぐ! チャリオッツ……!」

しかし、呼び声むなしく、僕らの相棒は、姿を現してはくれなかった。

「チャリオッツが……出ねえ……」

「ハイエロファントが出てこない! 出せない……!? ここが夢の世界だからか?!」

「ラーリホー! ……夢の中で死ねるなんて……ロマンチックだと思わナイかい?」

ポルナレフの口に大鎌をあてがい、デスサーティーンは言った。

鎌が一気に引かれようとする!

「ぐっ……」

「ポルナレフーツ!! ……?!」

その刹那……ポルナレフの姿が、煙のように、消えた。

「チツ……誰かポルナレフのやつを起こしやがったな……運のいいヤツだ。

……まあいい。起きたところで記憶は消えているんだカラな。また眠ったところを殺ればイイのさ……」

「さて……」

こちらへと振り向き、死神が不気味に笑う……。

「……おまえからだ……花京院!!」

*

*

*

飛び立ってしばらく経ってから、私は赤ちゃんから異変を感じた。

「……なんか、臭いますね。」

「ああ、赤ちゃんじゃな。ポルナレフ! おい、ポルナレフ!! 起きろ!」

「ん? ……あー?」

そして、ジョースターさんはまだ寝ほけまなこのポルナレフさんにむけ、こう言った。

「おまえにやることができた。赤ん坊のオシメを替えてやってくれ」

「え！ ジョースターさん！ わざわざ起こさなくても……。私、やりますよ」

おもわず申し出ると、言いくそうちにこんなことを言われてしまう。

「いやー、その子は坊っちゃんじゃろお？ レディに頼むのもなーって。

おまえさん、その、見たことないじゃろ？ ……あれ」

「なっ！ な、ないですけど……。こんな小さい子ですよ！ だ、大丈夫ですよっ！ も

うっ！」

「やっぱねえのか……」

「うッ！ ちよつとその隣の孫!! うるさいっ!!」

「あーもう、わかったよ。オレがやりやいいんだろお」

「お、お願いします……」

ポルナレフさんに赤ちやんを渡す。

「うひゃー、すつげえしてる……。つたくよー。」

……ほい、ほら、これでいいだろ？」

「ポルナレフさん、布の巻き方めちやくちやじゃあないですか……」

「だつてよくわかんないんだもん。別にいいだろ。巻けてりゃ」

そんな私たちのやり取りを見かねたのか、にゅつと前方から伸びてくる、手。

「…貸せ。」

「え？ ……はい」

すると、承太郎君は鮮やかな手つきであつという間にオシメを巻きなおした。

「すごい……」

「おまえ、なんでそんなに上手いの……？」

（……あ！）

なんとかさつききの仕返しをしてやれないものか……ということ、ひとつ思い立った私は軽い気持ちでこう言ってみた。

「承太郎君……もしかして、どこかに隠し子とかいるんじゃないの？」

「ぎくう!!」

しかし思いがけない所から思いもよらない反応が返ってくる。

「え？ ……なんでジョースターさんがビクツとするんですか？」

「ななななな、なんでもないわい！ 承太郎！ おまえ高校生のくせに……!」

「……んなわけあるか。ポルナレフがほどくのをみていたからな。元に戻した。それだけだ……」

なんでそれぐらいできねえんだよ……」

「できねえよ、ふつう……」

「あと、ヤスに言っておく。おれはガキができるようなヘマはしねえ……。てめーこそ、うっかりだれかさんのガキ、孕まねーように気をつけな！」

「!? くあwせdrftgyふじこip!?」

（は、はら……ッ!?）

「なななな!! あるわけないでしょおー！」

「ってか、だ、だ、だれかさんって誰よおー！」

「なんてやつじゃ……」

「フン！ にやり……」

（しまった、完全に喧嘩を売る相手を間違えた……）

がっくりと項垂れる。なんと浅はかだったのだろうか。例えるなら絶対無敵のイージス艦に近所の公園の池に浮かんでいるアヒルさんボートで立ち向かうようなものだ。速攻撃沈することなんてわかりきっていたであろうに。

（それにしても……）

だれかさん……自分の頭にうっかり浮かんでしまった相手を、なんだか申し訳ない気持ちでこっそりみる。さきほどの会話を絶対に聞かれたくはなかったのだ、その点は良いのだが……。

（……こんなにいるさい中、まだ寝てる。なんか変じゃない？ ……って、えっ!?）

「うわあああー!! やめろッ! やめてくれッ!!」

突然、花京院くんが暴れ始めた。……眠ったまま。

まるでなにものかと、争っているかのように。

「か、花京院くん!？」

「どうした、花京院!」

「な、なんだ?!」

「うわあー、やめろおーッ!」

「お、おちつけ! か、花京院ッ!」

ポルナレフさんが必死におさえようとする。……が、如何せん狭い機内である。暴れる花京院くんの足が、とうとうジョースターさんにクリーンヒットした。

「いてっ!! あっ! し、しまった! 操縦桿が!」

制御を失った機体はあっという間にきりもみ回転を始め、みるみるうちに高度をおとします。

「お、おい……ひよつとして、墜落するの? ……このセスナ」

「花京院! いったいどうしたんだ! またうなされてるぜッ! 今朝もこうだったんだ!」

「ポルナレフ、早く花京院をおとなしくさせろッ!」

「ジジイ！ それより早く操縦桿を何とかしろ！」

*

*

*

追い詰められ、必死に抵抗する僕だったが、『スタンドは、スタンドでしか倒せない』。通用するはずもなかった。

「デスサーティーンはそんな僕の体を掴み、壁に押し付けていく！」

「か、身体がめり込んで……!!」

「おい、花京院、おとなしくしろッ！ テメーが暴れるせいで墜落しそーだ。」

墜落したらボクの本体もいっしょに死んじまうじゃあねーか。ねぞーの悪いヤツだ」

「なッ！ き、きさまの本体は、あの赤ん坊だったのか!？」

し、信じられん！ 生後半年くらいなのに……」

「11か月だ！ イレブンマンズ!! 天才なんだよ、天才!!」

オシメの中にうんこはするが、おまえらよりずっと物は知ってるぜ。ラリホー!!」

そう言うのと、やつは空虚な眼窩から無数の眼球を零し、押さえつけている僕の口を、塞いだ。

「うぐぐつ、おうええ……!!」

「これで、叫び声を出せなくなっただナ！」

(夢の中のスタンド……！ 目が覚めても記憶は消えているし、ここではハイエロファントは出せない……。しかし、なんとかしてこのことをみんなに知らせなければ……)

「!?」

僕は、護身用の……持っていたナイフを取り出し、自分の腕に刃を立てた。

夢だなんてとても信じられない……リアルな痛みが僕を襲う。

「ぐうう！」

*

*

*

「なにをやってるんだ、ジョースターさん！」

「早く立て直せ！」

「おちつけ！ さわぐな！ わしはパニックを知らん男！ 今やつとるだろーがツ!!

」

「ううううう……」

*

*

*

「ううう、目が覚めないッ！」

「ラリホー！ そんな小さいナイフで切っても誰も気づくどころじゃないようだな……」

「それに、夢の中ではいくら自分で自分を痛めつけても決して目は覚めない！」

外で誰かがお前を起こしてくれんかぎり、この世界から逃れるコトはできない！

眠っているかぎり、おまえの精神エネルギーはこのデスサーティーンの支配下なのだ」

「つまりデスサーティーンは眠りという無防備の精神の中に入り込むスタンドなのさ！」

*

*

*

「お、おちる！」

「もうダメだー！」

「おおおおおー、『隠者の紫』で操作するッ!!」

ジョースターさんが操縦桿に向けて自らのスタンドを発現させた。

すると機体は急に安定し、地面すれすれをかすめながらももう一度舞い上がり始めた。

「あ、あぶねー」

「やったーっ！ 間一髪、立て直しましたッ！」

*

*

*

「フウ、あぶねーやつらだ。どうやら墜落はまぬがれて、助かったようだな」

死神はおどけた調子で汗をぬぐう真似をする。

そして、僕の左胸を指さし、うって変わって低い声色でこういった。

「……さて、きさまはコノ心臓をつぶして殺すとするか……」

ジョースターたちに怪しまれず、心臓マヒだと思われるようにな……」

「……死ねッ、花京院！」

「くッ!!」

……ここまでか……そう思った瞬間、意識が、切り替わった。

*

*

*

「みんな見たかーッ！　どんなもんですかいイイ！　わしの操作はよおー!!」
「ふう、よかった。……つて、ちつともよくないっ！」

（こんな騒ぎになつても起きないなんて、ぜったいおかしいよ！　な、なにかあつたんだ、きつと!!）

「花京院くん！　花京院くんっ！　起きてッ!!　お願いっ!!」

この状況で起きないのに、自分がゆすつたくらいで起きるのだろうかとも思うが、やらないよりしました。半泣きになりながらも祈るような気持ちで後ろから彼の身体を揺さぶる。

「ハッ！」

「お、起きた……！」

「ひ、仁美さん……？」

「よかった……！　だいじよう……！」

ほつとしたのも束の間。承太郎君が叫ぶ。

「おい、ジジイっ！　まえ見ろ、まえッ!!」

「あっ！」

ゴシャツ……!!

「な、なんで、こんなところにヤシの木があるの……？」

セスナは砂漠にポツンと、しかし立派に生えていたヤシの木とみごとに正面衝突した。

「やれやれ……やはりこうなるのか……」

そして機体は、みるみるうちにまたもや急降下し始めた。

前方不注意。ジョースターさん、……そして、私も。

（しまったー！ 全っ然、前みてなかったっ！）

「せ、セシリアーツ!!」

こうして、私たちは人生二度目（……ジョースターさんは四度目……）の墜落を経験する羽目になったのだった。

*

*

*

「どうにか死なずにはすんだが……」

こうなったのはおまえのせいだぜ、花京院！ どうなってるんだ！」

砂漠のど真ん中に僕たちは墜落した。

仁美さんのセシリアの力で、全員無傷ではあるが、セスナは衝突の影響で前方が大破。とても再び飛び立てる状態ではなかった。

「す、すまない……。わからない、わからないんだ……」

（恐ろしい夢をみたような気もするし……目が覚めたとき死ぬほど疲れているし……。

……僕は、おかしくなったのだろうか……？）

「元気を出せ！ きつと疲れすぎているんじゃない。日本を出てすでに約一か月がすぎてる。」

敵はその間連続で襲ってきているのだからな……」

ジョースターさんはそういつてくれた。しかし異常事態なのは明らかだった。

「花京院くん……」

「……」

今は、彼女と顔を合わせるのが、つらかった。

……これ以上、軽蔑されたく、なかった。

「すみません。少し、ひとりにしてください……」

「……」

*

*

*

(気にしてるなあ。……そりやあそうだよね。なにか気の利いたことが、言えたらいいのに……)

(でも、なにを言っても、逆効果な気がして……)

今は、そつとしておくしかないのかな？あーもう、私、なんでこんな役立たずなんだろう……)

泣きそうになるのをぐつとこらえる。今一番つらいのは、自分なんかではないのだ。彼のことは心配だが、せめてなにか他に自分のできることをしようと思いたち、赤ちゃんの様子をみてる。

「……赤ちゃん、熱は下がったみたい」

「おお。無事でよかったわいッ！ この無関係の赤ちゃんに何かあつたら、わしはつぐなつてもつぐないきれんことになったんじやからな……」

そういうとジョースターさんは慣れた手つきで赤ちゃんをあやし始めた。

「よちよーち、いいこでちゆね〜！」

……ふつ、ホリイの小さい頃を思い出すのお……」

そのとき、壊れたセスナを調べていた承太郎君があいかわらず冷静にこう言った。

「じじい、無線機は壊れてないぜ。どうする？ SOSを打つか？

DIOのやつらにもここが知られることになるが……」

「やむをえん、この赤ちゃんのためだ。救助隊をよぼう」

*

*

*

(ああ……)

どうしていいかもわからないまま、皆と少し離れ、適当な大きさの石に座って僕は途方に暮れていた。

「はあ……。……ッ！」

すると、ふいに、腕に痛みを感じた。

(……腕に切り傷があるぞ。墜落のときに切ったのか……？ はっ！)

「……なんだ……？ キズが、文字になっている……?!」

まだ生々しい腕の切り傷は、二つの英単語をつづっていた。

(いったい、いつ……？ どこで……？ 『BABY』『STAND』と読めるぞ!!)

「ど、どういふことだ？ 僕の筆跡だ……！ おぼえていないッ！ 自分でキズをつけ

たのか!？」

ポケットからナイフを取り出し、傷と照らし合わせてみる。

「血はついていないが、このナイフで切ったキズのような感じだ……」

「……僕は、ものすごく大事ななにかを忘れてしまったのか?!」

「……BABY……。はっ!」

見ると、赤ん坊がものすごい形相でこちらをにらんでいる!

（なんだ、あの赤ん坊の今の目つきは……!）

それに今……僕と目があつたとたん、意識的に目をそらしたぞッ!）

「『赤ん坊』『スタンド』……!」

（ああ、僕の精神は、ほんとにどうかしてしまったのだろうか……）

「……僕は、この赤ちゃんが『スタンド使い』と思い始めているッ!」

赤ん坊に近寄り、掴みかかる。とたん、また赤ん坊は大声で泣き叫び始めた。

「びええー!」

「おい、花京院! 何をしている!」

「ハッ！」

「おいおい、いきなり乱暴だぞ……首を絞めるように抱くなんて……どうかしている！」

「

言いつつ、泣き声を聞きつけたジョースターさんは僕から赤ん坊を取り上げた。

「ぐっ……」

「けけけ……」

その死角で赤ん坊はほっとした表情をし、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべ始める。

「さあ、みんな、もう今夜は早く夕食を食べて寝るぞ。疲れをとろーじやないか。寝袋で野宿だけど」

「うう……」

「おい、承太郎、保乃……。花京院のやつ、かなり精神がまいっているようだぜ……」

「これからの旅をつづけられんのかな……？」

「……」

「……」

*

*

*

(……おかしい、ぜったいに……)

(いや、おかしいのは……そう思ってしまう僕の頭の方なのだろうか? ……はあ……)

与えられた夕食……非常食のスープを口に含むも全く味がしない。元からそういうものなのか、……それとも、自分はとうとう味覚を感じる器官すらも異常を起こしてしまったのか。

もはや自分で自分が信用できない。

疑心暗鬼に脳内を占領されつつ、そもそもの元凶の方を見やる。

「あ、あれは!？」

すると、通常なら有り得ないものが、己の目に飛び込んでくる。

おもわず立ち上がり、声を荒げる。

「ジョースターさん、ポルナレフツ! 今のを見ましたか?! やはりこの赤ん坊普通じゃないツ！」

「え?」

「今、サソリを殺したんです! あつという間にピンを使ってサソリを串刺しにしたんですツ！」

「花京院、ちよつと待て……何を言つとるんじゃ?」

「この赤ん坊はただの赤ん坊じゃない！ 一歳にもなっていないのにサソリのことを知っていて、そして、その小さな手で殺したんです!!」

「サソリ……? どこに?」

「そのカゴの中です! この中にピンで刺したサソリの死骸があるはずだッ!」

僕はカゴの中をひっくり返して探した。

しかし、確かに存在するはずのそれは見つからなかった。

「い、いない……」

二人の僕を見る視線は冷たい。

「ほんとうですッ! どこに隠したんだ! 服のどこかかッ!」

「わかった! 花京院! もういい、やめなさい!」

「ジョースターさん!」

「やめるんだ……さつきも言ったが君は、つかれている!

ゆつくり休んであしたの朝、また落ち着いたら話をしようじゃないか……」

(……眠る? ……そんなことを、したら!!)

「……ダメです! 眠ったら、みんな殺されてしまう!」

「!」

「今! ぼくは確信したんです!

どこにサソリの死体をかくしたか知らないが、そいつはスタンド使いなんですッ！」

全員、ひきつつて青ざめた顔をしている。

（ダメだ！ ……どうしたら、どうしたら信じてもらえるんだ？ ……こ、これだ！）

「見てください、この腕の傷を！ この文字を！」

「これは警告なんです！ きつと夢の中でついた傷なんだ！」

「!!」

「か、花京院、おまえ……ついに……」

「オーマイゴッド！」

「……花京院……その腕の傷は、てめーが自分で……切ったのか？」

「え……？」

「ゴクリ……」

場が、凍り付いたかのように静まり返る。

（ハッ！ しまった！）

ま、ますます誤解されてしまったのか……!?）

「もうダメだ。コイツ……完全にイカれちまつてるぜ。」

そんな話、信じられるやつなんて、いねーよ……」

（そんな！ 信じてくれ……！ 信じてくれよ！！

くそっ……！！ こうなったら、強行手段だツ！！）

ハイエロフアントで赤ん坊を攻撃する……みんなを護るにはもう、それしかない！

……そう思った瞬間だった。

「え？ ちよつと待っててください!!」

ずっと沈黙を保っていたひとが、口を開いた。

「待ってください！ ここにいます！」

「……は？」

そのひとは懸命にその手を空の方向に伸ばしながら、いう。

「あの、はい！ 私。……『そんな話信じられるやつ』、ここにいますけど」

*

*

*

「お、おぬし、今なんと……？」

「え？ はい。私は、花京院くんのことを信じています。って、言いましたが……」

「おいおい、まじかよ！」

「はい、まじですけど……。なんでですか？」

ポルナレフさんとジョースターさんはそれこそ信じられないものでも見たかのよう
な表情を浮かべ、私を取り囲むと、ひそひそ声でこういった。

「ひそ……お、お前、ダメだよ。いくら惚れた男の言うことだからって、なんでも鵜呑み
にしたら……。思い込んだらしくになっっちゃあいかんよ」

「ひそ……そうじゃぞ。ときには間違いを正すことも愛情ってやつじゃぞ……」
「!?」

「はあーッ!? なにそれ!! ち、ちがうつ!」

た、確かに私がすきなのは、事実だけど……つてか、なんでバレて!?

い、いや、今はそれどころじゃあない! それとこれとは話が別だしっ!

すきだからっていうわけじゃないし!

信じないとか……どうして? なんで……??

意味わからないしツ!! むがーっー!!)

正直、凶星な部分もあった……が、しかし、本当にそれだけではなかった。

そっちこそ何を言っているのか。私たちは仲間ではないのか……。

腹が立ってしかたがなかった。

(……だ、ダメ、落ち着いて。ここは感情的になつてはいけない。

それこそ恋に溺れた女の戯れ言と思われてしまうッ!)

(……………ここは退けない。……………退かないッ!!)

自分はともかく、花京院くんの名誉のために!

ぜったいにッ!!)

頭の上った血液を逆に利用して、フル回転させようと試みる。

(考えろ、……………考えろ! みんなを説得するために、合理的に、考えるんだ!)

[……………]

可能な限り冷静に。深呼吸をしてから、私は再度、皆にこう問いかけた。

[……………すみません、みなさん。もうすこし、聞いていただいてもいいでしょうか?]

[あー? なんだよ? もういいよ]

[ふたりとも疲れているんだよ。早くゆっくり休みなさい]

[……………まあ、いいじゃねえか。聞いてやれば。なんだ?]

承太郎君に感謝しつつ、続ける。

[これまで、私たち……………長い時間と、距離を旅してきましたよね。

その間、たくさんのスタンド、たくさんのスタンド使いと、出会いました。

飛行機の乗客に本体がまぎれこんでいたタワオブグレー。

チャーター船の船長に成り代わっていたダークブルームーン……………]

「そうじゃな……」

「その次はエボニーデビル……あの人形にはひどい目にあわされたぜ！」

「ひとり、ぬけてるぜ……ひとり、と、言っているのかわからんが……」

「そう！ そのとおり!! ストレンクス……」

船全体がスタンドというのにも驚きましたが……なにより！」

「はっ！」

「猿でしたよ！ 本体！ 猿ツ!! だとしたら……」

「赤ちゃんがスタンド使いでも、なにも不思議ではないはず……人間、ですからね。」

生来のスタンド使い、この場にすら二人もいるんですよ」

「小さいからってというのは、敵でない理由にはなりえません。本人にその気はなくても、スタンドの力が暴走しているのかもしれないですし、あるいはDIOに力を見出されて上手く利用されているのかもしれない。私はDIOのことを直接知らないですけど、みなさんのお話を聞くと、それくらい簡単にできそうなイメージですが。肉の芽とかありますし。逆に、無垢な赤ちゃんを支配下に置くのなんて、文字通り、赤子の手を捻るようなものなのでは？ もしくは超天才児……ってこともあるかもしれない……いずれにせよ、どの可能性も否定できないと思います」

「それは、……たしかに」

「加えてツ！ スタンドについても！」

花京院くんには化けていたイエローテンパランス。

光のスタンドで鏡の世界にいるかのように思えたハングドマン。

霧で町をまるごとつくりだしてしまおうジャステイス。

脳の中にまで入り込める、ラヴァーズ……もうなんでもありじゃないですか。

夢……睡眠時の人の意識に関与するスタンド能力があっても、まったくおかしくはないですツ!!」

カラカラな喉を叱咤しつつ、私はさらに続けた。

「この赤ちゃんに対して危害を加えるかはともかく……敵である可能性を考えて、注意、警戒をしておく意義は十分あると思うんです。花京院くんのいうとおり。気をつけ過ぎてもなんの損にもならないです。逆に、本当なのに、このまま無対策、無警戒だった場合……私たちきつと、全滅ですよ」

「うツ……！」

「……そもそも今まで私たち、この旅で幾度となく花京院くんの洞察力や機転に、助けられているじゃあないですか！ 全員、思い当たるふしが、あるはずですよ」

「……」

「そ、それは……」

「そうだが……」

「今回も、いち早く危険に気づいてくれたのかもしれない……」

そして、……たったひとりで、何度も、襲われて、闘っているみたい、なのに……、

……すごく、苦しそうな、のに……っ！」

「……どうして、助けてあげないんですか!? どうして……信じてあげないんですか!?

おかしいですよ……私には、その方がよっぽど信じられないッ!!」

「……仁美さん……」

「……」

「……」

一気にくましく立てすぎて、上がってしまった息を整える……それ以外の音は消え、シ
ンと静まり返ってしまった場を、このひとの一言が切り裂く。

「……わかった」

「承太郎!？」

「半信半疑だったが……気が変わった。確かにこいつの言う通り、警戒しといて損は
ねえしな。」

そもそも、おれたちは狙われている……救難信号を出した以上、敵にも居場所がバレ

ているとみていい。そんな中、全員同時に寝るのは襲ってくださいと言っているようなものだけ……」

「承太郎君……」

「三人交代で見張りすりゃいいだけの話だ」

「あ、そつか！ なにか異常があつたら、すぐみんなを起こせばいいんだよね」

「ふたりとも……」

「わ、わかつたよ！ オレも見張ればいいんだろ。正直とても信じられはしてねーが……」

「そう、いわれちやーな……」

「そうじゃなあ……」

「いや、ふたりはまたなにかしらの運転があるかもしれないから。むしろしつかり寝ろ」

「そうですね。私たちはいざとなれば昼眠れますから。ここは未成年組に任せてくださ
い」

「そうか……じゃあ、お言葉にあまえて、オレは寝かせてもらうぜ」

「では、わしも寝かせてもらおうぞ。年寄りには運転で疲れたわい。若いもんには任せる」

そうして場に残った私たち三人は話し合いを続けた。

「それじゃあさつさと、順番決めるか。」

すると花京院くんが手をあげる。

「……最初は僕が見張るよ。そもそも言い出しつぺだ。」

それに、昼間寝ていたから適任さ。……皮肉なことだね。」

「……わかった。任せる。」

そうだな……三時間経つたら起こせ、花京院。その次おれがヤスを起こす。いいな」

「ああ」

「うん」

「よし、じゃあおれは寝る。」

首尾よくまとまったところで、承太郎君も寝袋へ向かった。

とりあえず丸く収まったことにほっとしたのか、私も少し眠くなってきた。早朝の任務を達成するためにも今のうちにしっかりと睡眠をとっておくべきだ。早朝の任

「私も寝よつと。じゃあお願いね、花京院くん！」

「はい」

そう伝え、寝床を作ろうと立ち上がる私。

「あ、……仁美さん、あの……」

そこへ、もう一度声をかけられる。

「ん？」

「ありがとう、ございました……」

「え？　なにが？」

「……なにがって……」

彼は驚いたような、不思議そうなかおをしたあとこういった。

「その、さつき、……僕のことを、信じて、くれて……」

「！　え、と、いや、その……わ、私もそうした方がいいと思つたから……それだけ、それだけだから！」

半端なく優れた洞察力を持つこのひとに、自分の感情……秘めた心のうちが看破されるんじゃないか……ひやひやしながらもそう答える。

すると、彼はうつむいて何かつぶやいた。

「……そうだとしても、うれしかった。本当に、うれしかったんだ……」

「……？　ごめん、聞こえなかった」

「いえ、……いいんです」

かおをあげると、彼はそういって、ふわりと微笑んだ。

そのやさしい表情に思わず胸が高鳴ってしまう。

「ツ?!……じ、じゃあ、寝るね」

これ以上話しているとぼろが出てしまうことは確実だ。踵を返そうとする私に彼はいう。

「あ、そうだ。ひとつ、試してほしい『おまじない』が、あるんですが……」

「……おまじない？」

「ええ……。『いい夢』をみるための、ね」

「……耳貸してください。」

そつと囁く彼。低くて心地好い、よく透る声が耳をくすぐる。

うるさい自分の心臓の音に邪魔をされながらも、なんとかその声に耳をすませます。

「……」

「……!! ……わかった。やってみるね。おやすみなさい」

「ええ。おやすみなさい」

「……また、夢で……」

It, s not a dream……

♪

「はっ!!」

「(ハ、ハ)は……?」

目覚めると、そこは遊園地の真ただ中だった。

……寝袋に入っただけ。

「はて? なんでわしら、こんなところで寝ておるんじや?」

首を傾げる私達をよそに、驚愕の表情を浮かべ叫ぶひとが一人。

「(ハ、ハ)は!!? ……ここはッ!! お、思い出したーッ!!」

「ポルナレフさん? 知っているんですか?」

「いいか!! か、花京院の言っていたことは本当だ!

わ、忘れていた……。忘れさせられていたんだ!! ここは夢の中なんだよ!」

それを受けて、再び寝袋に滑り込むこの方。

「夢え? んじやあ、もっかい寝ようつと!」

「……じじいー! オレと同じ反応してんじやねーよ!!」

ちがう！ 夢だけど、ただの夢じゃねえ！

ここは敵スタンドのつくりだした世界で……ここで殺されたら現実でも死んじゃう！

「なに!?」

「やべえ！ どうしてオレはあいつのこと信じてやらなかったんだ！

花京院に、謝らなければ！ ……おまえも、すまない……」

「そ、それはあとで本人に！」

「ちつ、早く起きている花京院に知らせねーと……」

「そうだ！ 身体に傷をつけて……なっ!?」

そのとき、ポルナレフさんの髪が……急の上に伸びた。まさに電柱のように。

「ポルナレフ！ お前、髪が！ どうしたあ!? デッサンが狂ったのか!?」

「！ な、なんじゃこりやー!! オレの髪が10m以上に！ お、重い……」

たまらずその場に倒れ伏すポルナレフさん。

「ぼ、ポルナレフ!! なにいッ！」

続いてジョースターさんの左手がポンという軽快な音と煙とともに、花に変わった。

「!? ぎ、義手が!? うわー！」

花はどんどん怪物のように大きくなり、そのつるでジョースターさんを締め上げはじ

めた。

「ぐっ……!!」

「じじい! ちっ、!」

「た、ダメだ、承太郎! ここでは自分のスタンドが出せないんだ!」

反撃するべくスタンドを出そうとする承太郎君にポルナレフさんがどうにか伝える。

しかし……

「……。出たぜ……?」

「……あ、あれ? そんなはずは……」

『オラオラオラオラオラオラー!』

「ぐっ!」

ところが、スタープラチナ(?)は、にやりと笑うと、主にむけてラツシュをたた

き込みはじめた!

「に、偽物……!?! うぐ!」

「や、ばい!! ここはやつの世界! だから、なんでもやつ思い通りになっちまうんだ

……!」

「ぐぐ、ぐ……こんなところで、どうやって闘えというんじゃ……!」

「み、みんな！ いけない！ は、早く、花京院くんに知らせて起こしてもらわないと！」

「……させないヨ……」

「……えっ!?」

私が動こうとしたときだった。耳に不気味な声が響く。

「…お、おい…！う、うしろだー!!」

「ラリホー！」

「!? くっ！」

(び、ピエロ……いや、大鎌を持った、死神……!?)

大鎌を私の首にあてがい、死神はふざけた調子で言った。

「けっけ、まんまとはまっつけてくれたナア〜！」

ボクをつくりだした世界、ナイトメアワールド悪夢世界にヨウコソ〜！

デスサーター死神13のお送りする、地獄の世界への入口さ！

テメーらはみんな、ここで死ぬのだあ！」

「で、死神13……!?!」

「……ただーし！キミを除いてネツ！」

「えっ!？」

煙に包まれたと思った瞬間、気づくと私は鳥籠のようなものの中に捕らえられ、しかもその服装は、まるで童話に出てくるシンデレラやラプンツェル……といったお姫様さながらのドレスに早変わりしていた。

「なにこれえー!？」

「喜びたまえー！ キミはボクのママにチビっと似ているからね！ トクベツさー！」

ずつとずつと、この世界で、ボクの、108番目のワイフとして暮らすのサーー!!」

「はあー!？」

（108番目って……煩惱か！ 多いよ!! 貴方は始皇帝か!? ファアラオか!? 徳川将

軍か!?)

もう何からつつこめばよいのか。もちろんそんな後宮……大奥に入るのはごめんだ。

いやそれ以前の問題か。

「だ、出してー！」

なんとか脱出しようとして鉄柵を掴んで必死に揺らすもびくともしない。

そんな私の様子を眺め満足したのかにたりと薄笑いを浮かべると、くるりと皆の方へ

振り返り死神は言う。

「よーし、ではその他は切り刻んじやうゾー！」

それで、あの忌々しい花京院のヤツはそのうちやつて来る仲間にかかせるとシヨウ！
アイツははじめてボクの正体に気付きやがった、油断ならんやつダカラな！

敬意をひよーして、袋叩きの刑ダ！！

「くっ！」

「それでは、爽やかで余裕ある勝利を象徴した叫びをあげさせてもらおうカナ！

……ラリホー！！

なんとも表現し難い、不気味な高笑いを始める死神。

「なめやがって……」

「さ、ではまずこの中でいちばん賢そうな承太郎からだく！」

「ちっ……！！」

おどけつつも無機質な視線がじろりと向けられる。

「けけけ……そおーれ！」

「い、いかん！」

「承太郎ーッ！」

見定められた標的へ死神の大鎌が横一閃に迫る！

しかし、その瞬間だった。

「……させないっ！」

私の左手から羽ばたき舞い降りた鳥が、薄桃色の障壁となり承太郎君への攻撃をはじく！

「なに!?!」

「せ、セシリア!?!」

「え、おまえ……?」

「な、ナゼだ!?! ボクちんのこの世界には……!?!」

「……なぜって?」

全員に向けて、ゆっくりと、答える。

「こんなことを思いつけるのは、その、油断ならん彼、だけですよ……!」

「ま、まさか!?!」

「……『セシリアをこっそり出したまま眠ってみてください』、か。

……おまじない、ね。理由はわからなかつたけど、こういうことか。

そうすればスタンドも衣服や寝袋と同じように、この世界に持ち込める……みたいですね」

「やはり、アイツの入れ知恵かー!!」

憎々し気に死神が叫んだのと同時だった。私のいる鳥籠が壮大な爆発音と白い煙に

包まれる。

「きゃー！ ……っ!!」

「なにイ!?」

「……らりほー!」

「ぐえっ!」

その一瞬の隙に、なんと、ハイエロフアント法皇が死神13の背中に回りこみ、その首を絞めていた。

そして……

「……デスサーティーン……、悪いけど、このひとはキミのお姫様じゃあないんだ……」

「ああっ!」

「……返してもらおうよ!」

その主である彼は、私を抱えて鳥籠の中から連れ出してくれたのだった。

「か、花京院くん……!」

「……お迎えにあがりました、姫。……なんてね。」

ふふ、そーゆーふわっふわした格好も似合うじやあないですか」

「なっ!?!」

悪戯っぽく笑う彼。体中の血液が顔に集中するのを感じた。

「な、な、なにいつてんの！　ってかこれ、お、お姫様抱っこ!？」

わー!?!　なにこの状況!?!　なにしてくれんの!?!

こ、この……王子様め!!　私の心臓壊す気かな……?!　わああ!!　)

フルパニック状態の頭の中を、なんとか悟られまいと声を荒げる。

「も、もう!　それどころじゃないでしょ!!」

「フツ、そうですね。」

……デスサーティーン!　キミはちよつとオイタが過ぎたようだ……」

パチンと花京院くんが指を鳴らすと、法皇がさらに絞める力を強くする!!

「ぐー!　うつがあー!　くるちい!　た、たしゆけてえー!　……!」

「さあ、お仕置きの時間だよ、ベイビー!」

「ちくしよー!　ハナセ!!」

「無駄だ。ハイエロファントは完全におまえの死角に入り込んでいる。

その大鎌で切るのとは不可能だ」

「ぐっ!」

「諦めて降伏するんだな。」

これ以上抵抗を続けるなら、いくらおまえが赤ん坊といえど、本当にその首をへし折るぞ！」

死神にそう勧告しつつ、花京院くんは私を束縛が消えた仲間たちのもとへ連れて行つてくれた。

「花京院！」

「花京院、すまない。オレは……」

「わしもじゃ……すまん……」

一斉に謝罪の言葉を口にする皆に告げる。

「いえ、あの状況では無理のないことです。気にしないでください。むしろ……」
そして、何かを言いたげにこちらを見る。

「ん？ なに??」

「……いえ、なんでも」

視線に対し疑問を投げかけるも、そうはぐらかされてしまう。

「いや、なんでもないって感じじゃあ……」

「あーもう、はいはい、またあとで……しっ！」

すると、真剣な表情の彼に制される。

「花京院くん？」

「……どうやら、まだのようですし」

「え？ ……ハッ！」

その言葉をきつかけに、自分と仲間も空に立ち込める不穏な雰囲気気づく。

「く、雲が集まっていく！」

「妙なことをするんじゃないぞ、デスサーティーン!!」

「なにかやばい！ 花京院、ハイエロファントを離れさせろ！」

「もう、遅いヨー！」

集まった雲が巨大な『手』を形作り、死神の大鎌を掴む。

「あっ!!」

その刹那、己の胴体ごと、大鎌はハイエロファントを水平に切り裂いた!

「な、なんだと……ぐ、ふ……!! そんなことをしたら、おまえも……!!」

「花京院ー!!」

「ヒヤーツハー! わがデスサーティーンは……ジャーン！」

そういつつ、真つ黒なマントをバツと捲る。

「頭! 両腕! 大鎌!! ……ってデザインでしたー! マントの中は空洞なのさ! 残念

!!」

「なにイ！」

「ひやはははは！ 今ごろ本体の花京院もシユラフの中でまっつぶたつさあ！」

「ぐあああー！」

「か、花京院！」

苦悶の声を上げ、うずくまる彼を皆で囲む。しかし……

「……なーんちゃって！」

「……ナニイ!？」

「よく見てください。おとなしく輪切りにされるほど、ハイエロファントはのんきして
ませんよ」

ケロツとした顔で空を指しながら言う。

「あっ！」

見ると、ハイエロファントがそのからだを紐状に変え、器用にデスサーティーンに巻き付いていた。

「言っただろう……完全に『死角』に入りこんでいるから大鎌では切れないと。」

僕のハイエロファントは紐状になれるんだよ。誰かに聞かなかったのかい？ ……

そして！

その細長い紐状の触脚が死神13の耳の穴に滑り込んでいく！

「ギャー！ み、耳から！ ボクの体内に入ってきたやがッター!!」
「こんなこともできちやうのさ……!」

さて、内側から破裂させちやおうかな。ぼーん！ ってね……」
「や、ヤメテー！ ボクの負けですウー!!」

「……コナゴナになりたくなかったら、この世界から僕たちを解放するんだ」

「だ、大丈夫です！ 普通に目が覚めたら、元に戻れマスから！」

「ふーん……。じゃあそれまでは、このまま監視させてもらうよ。」

あ、もちろん僕の目が覚めたら、いつでも、キミ『本体』をくびり殺せるってこと、ゆめゆめ忘れないようにね」

「ひい！ わ、わかっておりマスー！」

（く、くびり……全開の笑顔でなんて恐ろしいことを……!）

……まあ、そりゃあ、怒るよね）

「というわけで、もう大丈夫。目が覚めるのを適当に待ちましょう」

「そうそう。この腕の傷、消してもらおうかな。できるだろう？ それくらい」

「は、ハイッ！」

落ち着いたところで、死神に詰め寄る花京院くん。そこに便乗する私。

「あつ！ ちよつとまったー！ 私も!! 私の、このけつたいな格好も元に戻して！」

「えー？ ここにいる間はもうそのままでもいいじゃないですか」

「やだよ！ 動きづらいし……なにより、は、恥ずかしいっ！」

「そもそも、みんな元に戻ってるのになんで私だけ……！」

「しかたがないなあ……。じゃあ頼むよ」

「ワ、ワかりました！」

すると、再び、私のからだは煙につつまれ、気づくといつもの格好に戻っていた。

「ふう……やっぱ落ち着く。……あつ！ ほんとに傷消えてる！ よかったね！」

痛々しかった彼の腕の傷も、跡形もなく消えていた。

「ええ。……さて。では、姫……？」

「も、もう！ それはいいって！」

「もしよろしければ……少し、僕にお付き合いますか？」

中世の騎士のように、恭しく礼をする彼。

「？ 何に??」

「あれ、です」

自分たち仲間以外は誰もいない無人の遊園地で、ひとときわ存在を主張するそれ、を彼の指はさしていた。

「……あれって、観覧車?」

「はい。このままでは、あれが恐怖の対象になってしまいそうなので……払拭しておきたいんですよ」

「……」

(……かわいそうに。よっほどのことをされたんだね……)

「……だめですか?」

「いいえ。……ええ、わたくしでよろしければ。よろこんで。」

ガラでもないのはわかっているが、せっかくなので、私も彼を真似てみる。

「ふっ……!　じゃあ行きましょう」

*

*

*

いつのまにか日は沈み、夜になっていた。

(……時間の概念とか、あるのだろうか。そりやあ適当か、夢の世界だもんな……)

などと考えながら、観覧車に向かって歩く。

メリーゴーラウンドにコーヒーカーップ。

ライトアップされ、きらびやかな園内はなかなか幻想的で美しく、見ごたえのある

ものだった。あいかわらず、どことなく不気味な部分に目をつぶれば、だが……。

一方、そんなことはまったく意に介さないかのように、隣を歩く彼女の足取りは軽やかだった。

「ふふふ！ 楽しみー！」

「なんだか、ごきげんですね」

「えへへ、実は私も乗って見たかったんだ！ あの観覧車！

というか、遊園地自体いつぶりだろ。小学校のとき家族で行った以来かな……」

「僕も何年ぶりだろう……」

あれ？ 上京してからとか行っていないんですか？

かの有名なネズミの夢の国なんて近いじゃあないですか」

「ああ、うん。いまだに行ったことないんだ、私。……非国民ってよく言われる」

「非国民って……もともとあれはアメリカ発祥でしように……」

すると、逆に問い返される。

「花京院くんは？」

「僕は昔、両親と行ったことがありますよ」

「そうなんだ！ どうだった？ 楽しかった？ すごいんでしょう？ パレードとか！

」

矢継ぎ早に飛んでくる彼女の質問に答える。

「ええ。楽しかったですよ。」

「なんというか、あの独特な雰囲気は一度体験しておいてもいいかもしれませんね」

「へえー！ いいなあ！」

「そんな彼女に、ひとつ訊ねる。」

「……もしか、しなくても、実はあなた、すぐく行つてみたかったりしますか？」

「え?! なんてわかったの……?」

「いや、その様子でわかんないわけじゃないでしょう……」

「うっ……ほ、ほら着いたよ！ 近くで見ると一層大きいね！」

「さ、どうぞ」

ゴンドラのドアを開け、彼女を中にいぎなう。

「ありがとう！ わーい！」

はやる気持ちを抑えられないかのように、中に入っていく彼女。

(……) こともみただな、まったく。ふっ、ほんとうに好きなんだな、こういうの)

「早くー！ 乗らないのー？」

「はいはい」

彼女の催促に応え、自分も乗り込む。

ゆったりとした動きでゴンドラは上に登っていく。窓から入る風が心地よい。

「ふふ、わくわくするね！」

「ええ、さつきとは大違いですよ……」

先ほどのスプラッタ……

輪切りの犬、赤黒いミミズソフトクリーム、一斉にこちらを見る無数の眼球……

あの血生臭い惨劇を思い返し、同じ乗り物でも状況でこうも違うものかと思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「あ、ごめん、なんか浮かれちゃって。大変だったのに……」

「いえいえ。それでいいんですよ。むしろそれがいいんです」

「あ、そっか。そうだったね。じゃあ遠慮なく楽しんじゃうね！」

「ええ、そうしてください」

にこにここと楽しそうな彼女の顔を見てみると、先ほど頭に浮かんだ一つの案、を、どうしても伝えたくなくなった。

緊張を悟られないよう、口を開く。

「……と……ここで、さつきの話ですけど、……行きます？」

「ん？」

「日本に帰ったら……、一緒に。現実の、夢の国」

「え?! い、いいの?!」

「よくなかったら言いませんって……」

「やったー! ふふふ、また日本に帰る楽しみが増えちゃった!」

パツと花が咲いたかのようだった。

「……あ、でも……」

しかし、それは束の間で、そういうと、満開だった彼女の表情が一転して曇ってしまった。

「ん? どうしたんですか?」

「……私、忘れちゃうんだよね? ここでの記憶、消えちゃうんでしょう……?」

「……わかりませんが、おそらくは」

「そう、だよね……」

うつむいてしまった彼女にいう。

「大丈夫ですよ。少なくとも現実で奴のことに気づいた、僕の記憶は残る。」

さっきのヤツのあわてぶりから察しても、そこは確実です。

また折をみて僕から誘いますから」

「本当に!? よかった……! ぜったいだよ!」

「ええ、約束します」

「うん、……約束……」

嬉しさとともに湧き上がってきた気恥ずかしさを誤魔化すかのように窓の外を眺めると、いつのまにか頂上近くまで僕たちの乗ったゴンドラは上昇しているようだった。

「わあ、ずいぶん高くなってきたね！ 気持ちいい！」

くりぬかれた窓からかおをのぞかせ、風を楽しむ彼女。

……かと思いきや、ふいに訊ねられる。

「あ、そうだ。さっきの、『またあとで』って、あれは……？」

「ああ。……そうですね。」

まるでガツンと頭を殴られたかのような……相当な衝撃だったわけなんですよ。僕にとつて」

「……え？」

法皇を出して、攻撃しようとした……諦めていた、その瞬間。

まさか、あなたに信じてもらえるなんて。

あのまま、気絶してしまいかとおもった。それくらいに。

……実はそれで、閃いたわけだけでも。

この世界にも自分たちのスタンドを持ち込めるかもしれない、ということに。

ずっと考えていた。どうしたらヤツを倒せるのか、その糸口を。

「……いえ」

そして、これぞ、こちらこそ、だ。

疑問符を浮かべている彼女に問いかける。

「それで、仁美さん、ひとつ……いいですか？」

「うん」

「どうして……僕の話を、信じてくれたんですか？」

不思議でしかたがなかった……目を覚ます前にどうしても聞いておきたかった、『本題』を。

「え……？」

「……」

彼女にとって予想だにせぬ質問であったのだろう。

幾分怪訝な表情のなかの、その目をじっとみる。

「どうしてって……、さつき皆の前で言ったじゃない」

「いや、そうじゃなくて、根本的に……です。」

あれは、皆を説得するために、あとから必死に考えてくれたように、みえたので……自分で言うのもなんですが、そもそもとても信じられた話じゃないですし……」

「……もう、花京院くん本人までそんなこといわないですよ」

「……すみません」

眉根を寄せ、困ったようにそういうと、彼女はゆつくりと、自身も確かめるように言葉を紡ぐ。

「まあ、そうだね……。」

確かにあれは……あとから考えたことだから、後付けの理由になるのかな……。

あ、もちろん嘘じゃないよ！」

「あれが本心っていうのはもちろんわかっていますよ。」

ただ、もともとの理由がなんなのかわからなくて、気になって……」

「もともと？ うーん……」

すると、しばし考えたのち、彼女はただひとつこと、こういった。

「……ない」

「……はい？」

「ないよ。理由なんて。うん、ない」

「え？」

「だって、信じるもなにも……」

もともとって、あの赤ちゃんが夢を操るスタンド使いだ、
って花京院くんが気づいて言い始めた時ってことでしよう？

私普通に、え!?! そんな敵とどうやって闘えば、って思ってた……

ごめん、ちつともいい案は浮かばなかったんだけど。

そうしたら、いつのまにかあんな話の流れになっちゃってたから、あわてて、まって
ください！　って言って……」

「そ、そんな……」

あつけにとられていると、きよとんとしたかおで、訊ねられる。

「どうして？　そんなに、おかしいかな……？　そもそも、理由なんて、必要？」

「……はっ！」

「……きつとあたりまえだったんだよ。私にとっては。それだけじゃない？」

べつに特別なことじゃないよ。だから、理由もない」

澄み切った一点の曇りもないまなざしをむけ、自然に……柔らかな笑みを浮かべながら彼女はそう言い放つと、またこちらに背を向け、楽しそうに外を眺めはじめた。

(なんだ、このひと……。ほんと、なんなんだよ……！)

(どうして? いつから……? なんて、いつもいつも、こんなにも……)

「もうすぐ頂上だね。……あっ!」

そんな自分にむけて、彼女がなにかに気づいたかのように叫ぶ。

「ちよつと、こつちにきて! みてみて! あそこ!」

「?」

いわれるまま、となりにならんで座り、空の向こうに目をやる。

すると、彼女が指し示すほうには、きらきらと輝く、エメラルドグリーンの帯状の光があつた。

まるで、これは……

「……ハイエロフアント、みたいだ……」

「でしよう?」

「……すごく、きれい……!」

「はっ……!」

——「……わあ! やっぱり……、すごく、きれい……!」——

(……そうか。そうだった……)

はじめから、そうだったな、このひとは……)

すっと、なにかが自分の中におちてくる感覚がした。

ばらばらだったピースが、あるべきところにすべておさまった。そんなかんじが。

かおをあげる。

美しいこの夜の景色が、なぜだかいつそう、輝いてみえた。

「はあ、そうだよ。……そうだったんだ」

「? どうしたの? 」

「……もう、無理です。限界だ……」

「えっ! 」

(……こんなきもち、抑えろって?)

(……無理な話だ)

わずかに震える手で彼女の頬に触れる。

とまどいの色を隠せない彼女の瞳をのぞきこむと、そこに映る自分のすがたがはつき

りとみえた。

「……花京院くん……?」

「……すみません、いやだったら、はねとぼしてください……」

(……あのときからもう、ずっと、僕は、あなたのことを……)

(……恋に、落ちていたんだな……)

そうして、そっと、僕は、彼女の唇に自分の唇を、重ねた。

*

*

*

(うそ……私、キス、してる……?)

「……」

「……」

(……夢みたい……あ、そうか、夢だったつけ。いや、あれ? ちがうんだつけ……?)

もう、なにが、なんだか……)

名残惜しそうに唇が離れる。

おそるおそる目をあけると、そこには微笑みを浮かべた彼のおお。

「……よかった、とんでいない」

「え？ な！ あ、あの……！」

「ハッ！」

しかし、私の言葉を遮るかのように、彼の体が淡い光に包まれ始め、次第に薄らいでいく。

「……どうやら、僕の方が先に目覚めてしまうみたいですわね」

「！」

「……僕は、忘れない。」

たとえ、あなたが忘れてしまおうとしても……」

「ま、まって！」

「……また起きたらすぐにあえますよ。そんなに心配そうなかおしないで」

「花京院くん！」

「……では、またあとで」

そういうと、彼の姿は煙のように消えてしまい、あとに残るのは困惑しきった頭を抱

えた私だけだった。

「あ…………!? う…………? えええええ!?」

津波のように押し寄せてくる羞恥心と戦いながら、必死に思考をめぐらせようと試みるも上手くいくはずがない。ますます混乱は深まるばかりだった。

「なんで…………? なにが起きたの? ……どうして? ……? どういうこと…………?!」

ぐるぐるとまわっている脳内に、いつかの彼の言葉が響いてくる。

——「…………初めてのキスは…………、…………僕も、そうします…………」——

「…………そう言ったの、自分じゃない。

なにしてんの…………? なんで私なんか…………? 意味がわからないよ…………」

様々な色合いが混じり合ってマープル模様な頭と心。とうとう涙までこみあげてくる。

「なんで泣いてるんだろう…………私…………」

もはや、自分の感情すらよくわからなくなってきた私は限界を感じ、考えることを放棄した。

すでにオーバーヒートしてしまった頭と心を冷やそうと、窓から空を眺めてみる。

「星、見えないな…………。ないのかな? この世界には」

下を見ると、ずいぶん降りてきたのか、地上が近くなっていた。
「もうすぐ、終わっちゃうんだ……」

再び、空を見上げる。

真つ暗な闇をみつめていると吸い込まれそうになり、思わず目を閉じた。

「……」

目をつぶれば、否応なしに思い出してしまう……近づいてくる彼のかお、唇の感触
……

「あああああー！ は、恥ずかしいー!! ふああああー!!」

今ひとりきりであることに感謝しつつ、思うがまま身悶え、叫んでいると、少しずつ
落ちて着いてきた。

（気まぐれ……? いやいや、そんなことをするひとではない……。）

誰かと間違えた……とか? って、誰とよ!!

……はっ! そうだ! 偽者!?! ……って、何回目よ!!（

自分で脳内の自分にツッコミを入れることに虚しさを感じつつも、どうしても考えて
はいけない方へと思考は向いてしまう。

（……もしかして、もしかしてーだよ……? ）

(……花京院くんも、私の、こと……、……)

(はっ！ だ、ダメ！ そ、そんなこと、あるわけないじゃない！)

なんておこがましい!! 恐れ多い！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ 今のなし！)

誰ともなしに全力で謝る。

(……そうだよ。だって、いつも、しあわせなきもちを私はもらってばかりで、なにも……)

……返したい、のになあ……)

胸が締め付けられる感覚とはこれなのか、また涙がこみあげてくる。

(……でも、もし……もしも、そうだったら、どんなに……)

「……うれしかった、な……」

(……そりゃあ、そうだよ！ だって、好きだし。だい好きだし!!)

もういい！ なんだっていい！ すなおに、しあわせをかみしめることにする！
そうしよう！)

一周まわったところで、もう開き直ることにした私。

「あ……」

そんな自分の体が淡い光を帯び始めていることに気づく。
夢のおわりは、近いようだ。

しかし、目覚めて顔を合わせたときに、果たして自分はどんな顔をすればよいのか

……

そこに考えが至るにあたつてふと思ひ出す。

「そっか。そんな心配、いらないんだった。

……忘れちゃうんだ……私」

自分の姿が消えていく。それはなんともいいがたい、不思議な感覚だった。

(……やだな)

(……忘れたく、ない……な……)

*

*

*

「はっ！ ……戻ってきたのか」

寝袋の中で僕は目覚めた。

まだ夜明け前だ。砂漠の夜は冷える。……はずだが、ちっとも寒さを感じない。

それも無理のないことだ。理由はわかりきっていた。

「ふ、ふふふ……」

（……やってしまった！ やってしまったーッ！ ）

「うわあー！」

（なんてことだ……大切にしろとか言ったくせに、言ったそいつが奪うとか……

ふ、ふはは、……ありえんな……）

（いや、僕は公約は果たしたけどね……本当にすきなひととした！ ちゃんと……！

だってしかたがないだろう！ あの状況……）

おもい起こすと、また体温が上がるのを感じる。

つい、ゆるんでしまう口元をなんとかおさえる。

「そ、そうだ、いかん！ 反省はやることをやってからにせねば……」

「おい！」

「ひええ！ スミマセンでした！」

赤ん坊…、デスサーティーンの本体の首根っこを掴み、抱え上げる。

「いいか、予定通りおまえは町まで連れて行ってやる。母親のもとに帰るんだな。」

ただし、以後僕達に近づいたら……わかつているな……？」

「わ、わかつています！」

「あと、敵の増援はいつ、どこへ、どんなやつらが来るのか、教えてもらおうか？」

「し、知りません！　つてか言えません！」

「いいのかな？　そんな態度で……」

「ひえー！　町まで来て待機しているとしたか……」

異常があれば迎えに来ると言っていたのでこちらに向かっているかも……

あー！　そうだ！　来るとしたら……って噂のやつらしいです！　ほ、ほんとです！

」

「……嘘だったら、どうなるか……わかつているな？」

「も、もちろんですうー!!」

脅しをかけつつ、皆の様子を見て回る。

承太郎に、ポルナレフ、ジョースターさん。異常はないようだ。胸を撫で下ろす。

(……あとは……)

鼓動が早まるのを感じつつ、おそろおそろ彼女の眠る寝袋へとむかう。

眠っている女性に無断で近づくなんて、とも思うが（無断でキスをした男の思うことではないな……などと、自虐するのも忘れずに）、非常事態だ。仕方がない。なにかあつてはいけないからな……。と、もはや誰あてかもわからない言い訳をしつつ、そつと顔をのぞきこむ。

「……よく、眠っているみたいだ。よかった」

すぐ無茶をするがゆえ、このひとの寝顔をみるのは初めてではないはずだが……

(……)

己の想いを自覚してしまうと、またちがつてみえるものなのか。

だいたい今までの場合、心配でそれどころではなかつたからである気もするが。

すやすやと眠る顔をみつめていると、なんともいえない愛しさが込み上げてきた。

(……あの唇に、僕は……)

……ハッ、いかん！)

もう一度それにふれたくなる欲求をなんとか抑えるため、急いでそこから離れる。

(だ、ダメだダメだ！ 現実でまで襲う気か……！ しゃれにならん……)

「はあ……」

(ああ……、これが、恋、というものなのか……)

なるほど。感情も行動も制御不能。心中は一喜一憂、いちいち大わらわだ。

自分はまるでわかっていなかった。誰それに告白して上手くいったあの、いかなかったあの……教室で騒いでいた級友達に平身低頭、陳謝したい気分だった。

自嘲と共におもわず独りごちる。

「ふっ。……この僕が、まさかこんな、なあ……」

蜃気楼の中にのみ存在すると思っていた美しい夢物語は現世の出来事で……

遙か遠くで響いていると思っていた清らかな鐘の音は、意外とすぐそばで鳴っていたようだ。

気持ちの切り替えがてら、朝食の用意でもしよと準備を始めてみる。

それでもどうしてもそちらを向いてしまう思考。

(……拒絶されるかと思っただけ。セシリアに何mぶつとばされるか、覚悟していたんだが……)

いや、ただ油断していただけかもしれない……)

自問自答、自責を繰り返しながら、はたと気づく。

「ちよつと、待てよ……」

(てつきり、記憶は『現実で事実気付いた者』に残る。と、思い込んでいたけれど……、

実は『スタンドを持ち込んだ者』とかだつたら……？

……わ、忘れていない可能性が……?! そ、それは……!)

「おい、死神13……の本体!」

慌てて背中の中の赤ん坊に問いかける。

「は、はい? ま、マニツシユボーイ、とおよび下さ……!」

「そんなことはどうでもいい!」

「……そ、そんなことつて……!」

「それよりさっきの、お前の創つた『悪夢世界』の中での記憶……残るのは、僕だけなのか?」

「え? そうだと思えますが……しよ、正直よくわからないです。」

なんせ、ボクのスタンドに現実で気付いた人間なんて、貴方様が初めてですし……!」

「そうか……!」

(いや、別に忘れるからいいと思つてしたわけでも、勢いだけのいいかげんな気持ちでしたことでも、断じて、ない。いずれ……この想いは伝える。……が、今は、まだ……)

いえるわけがない。

今は。そんなこと。

やつを、倒したら……。

乗り越えて、ふさわしい男になれたら……。

日本に、……帰れたら。

(……)

はたと、先程かわした、『約束』をおもいだす。

できるのだろうか、僕は……

まもることが……

……つたえることが……

来るのだろうか……いつか、そんな日も、自分に。

たき火がぼちりと音を立てる。

炎に温められた空気が、むこうの景色に陽炎を創り出していた。

ふいに自分の中のかなかが揺らぎそうになる感覚。

……そんなこと、あるはずはないのに。

……そんなこと、あつてはならないのに。

「……じゃあ、なんでやったよ……。あー！　もう、こんなはずじゃ……！」

「ど、どうなさったんですか？」

「うるさいッ！ そうだ！ 元をたどれば、おまえのせいだッ！！

あとで、あらためてお仕置きだからな！！」

「え?! ええー!? な、なにがですかッ!?」

「……やつあたりだ。心配するな」

「ひ、ひどい……」

(はあ、本当に、我ながら信じられん……。自分があんなことをするなんて……)

ぐだぐだと答えの出ない思考を巡らせていると、いつのまにか空が白んできたよう
だ。

(考えていても、もう、やってしまった事実は消えない。

覚えていない場合は、いつか必ず正直に話して謝ると……。

覚えている場合は、……今のこの、ありのままの気持ち、伝え……)

「おい……」

「うわあー！」

ふいに声をかけられる。

「もう、夜、明けんじゃねーか。ちゃんと起こせよ……」

「あ、ああ。おはよう。承太郎。」

「ずっと起きていたのか？ すまんな」

「いや、いいんだ……。ちようどよかったからね。頭を冷やすのに……」

「あん？」

承太郎は寝起きとも相まってか少し不機嫌気味に、意味がわからないといった様子で首をかしげる。

(……やはりあの、『夢の中』での記憶は失われているようだな)

「赤ん坊、どうだ？」

「ああ、大丈夫だ。このまま町に連れていけばいいだろう」

「……。そうか」

「ただ、やはりここからは早く移動すべきだろうな」

「ああ。じゃあ、早いところ皆を起こすか」

*

*

*

「……おい、起きろ」

「はっ！」

承太郎君に起こされ、私は目覚めた。

(……。あれ? ……あら??)

「起きたか?」

「う、うん! ありがとう、承太郎君。……」

(……はて……)

「……なんで?」

(忘れて、ない、よ……?)

ぼつちり、覚えてるんですけど!? えええー!!?)

忘れているはずの夢を鮮明に思い出せるという戸惑いと共に。

(あれ、は……? 現実だったの……?)

き、聞いてみるしか……。い、いや、ちよつとまって……!)

「……聞けるわけない……」

(……。「あなたとキスをした夢をみたんだけど、あれつて現実?」

とか、言えるか! ……あー、もうっ!)

皆に気づかれないように寝袋の中で、往生際悪く、じたばたと悶える。

「はっ!」

そして、至極もつともな結論に達する。

(よく考えたら、全部まるごと私の夢だったんじゃないか……確かに、あんな夢みたいなこと起こるわけないし。しあわせすぎるし……。そ、そうかも……)

「なーんだ……」

(それはそれで……なんて夢を……)

やたらリアルだったし……って、したことないからわかんないけどさ……。

私の、えっち……。あー、恥ずかしい。って……あ?!

「もう朝じゃん!! やばっ!」

昨晚の計画では私が明け方にかけて見張りをする予定であったことを思い出し、青ざめる。

(やっちゃったよ! ……しかもあんな夢! 私、最低……)

「お、おはよう! 承太郎君!」

「おお」

寝袋からとび出て、近くにいた承太郎君に話しかける。

「ごめん! 私、起きなかった? 見張り……」

「いや、ちがう。実はおれも起きたのはついさっきだ。

花京院のやつが結局ずつと見張っていてくれたらしい。

頭を冷やすためとかなんとか言っただけだ」

「え?! そうなんだ……」

「責任感じてんのかしらねーが……。ったく、無理しやがって」

「そっか……」

責任感の強い彼のことだ。それはおおいにあり得るだろう。

しかし、同時にもうひとつの可能性が私の頭をよぎった。

この様子からして、昨晚は無事、事なきを得たようだ。それはつまり……。

「あるいは……」

「あるいは？」

承太郎君も、どうやらまだ思うところがあるようだった。思案顔から疑問が投げかけられる。

「おまえ……昨日夢みたか？」

「！ み、みたけど……」

「覚えているか？ 内容」

「お、お、覚え、てる……」

「？ ……なに赤くなってるんだ？」

まあいい。そうか。おまえが覚えてるんだったら、違うか……。いや、もしかすると……」

すっかり『刑事コロンボ』モードに入ってしまったようだ。

承太郎君の気になることは徹底的に追求しないと気がすまない性質。

敵にとつては脅威でしかないこの性質、味方としては非常に頼りになるわけだが……

とりあえず、今はその追求の対象が自分の夢の内容にならなかったことに安堵する。

こうなると話しかけても無駄なことはわかつてるので、邪魔にならぬよう黙って自

分の考えをまとめておく。

「……正解は、あいつにしかわかんねーな。聞いてもごまかしやがりそうだが……」

珍しく結論は出なかったようだ。

一応自分なりに出した意見を言ってみる。

「結局ひとりで、なんとかかしてくれたのかもね。どうやったのかは、わからないけど。

みんな無事なんでしょう？」

「……あいつのこととなると鋭いな、おまえ。……いや、そうでもなかったか。」

「？」

「なんでもねえ。まあ、おれもそこは同意見だ。詳細はわからんがな。

また本人に聞いてみるか」

「そうだね……」

(聞く、なんてできるのだろうか……)

思い出しただけでこのざまである。

顔を合わせたときに平静を保てるか……私にはその方が急務だった。

「朝ごはんですよー！」

「びくう！」

彼の声だ。

「おお。今行く」

「わ、私、顔洗ってからすぐ行くね！ ごめん！」

(だ、ダメじゃん！ あやしいって！)

オアシスの小さな泉。冷たい水で顔を洗いながら、思う。

(そうだよ。ただの……夢、なんだから……)

おもいだす。やさしい、あたたかい感触……彼の、えがお。

(……そうだね。素敵な……素敵すぎる夢だった。わすれない……)

私のこのころのなかだけに、こっそりと、だいじにしまっておこう……)

「……おはよう！ ……花京院くん!!」

エデテン

セスナが墜落したあの翌朝。私たちは救助隊と無事合流を果たし、近くの村まで送ってもらうことができた。

聞けば紅海がもう比較的近いらしく、それを渡るのがエジプトへの最短コースだということだった。そこで、船を手に入れることのできる海辺の街まで、サンドバギーで移動をしていた。

その道中に、悲劇は起きた。

「……おい、オアシスがあるぜ」

もうすぐ日没といったところで、承太郎君がスタープラチナの視力を使ってオアシスを発見。今夜はここで野宿をすることになった。

大きな泉があり、その水は澄んでいても綺麗だった。

「やったーっ！ オレ水浴びしてこよーっ！ みんなも行こうぜ！」
ポルナレフさんの発案で、男性陣は水浴びをすることにしたようだ。

「おまえもいこーぜ！　いつしよに！　ぐふふ」

「い、行けるわけないでしょう！　私は荷物番をしていますから！　ごゆっくり！！」

（とはいったものの、たしかに、うらやましいなあ……。

砂埃で身体中ジャリジャリだし、髪の毛ばさばさだし、汗でべたべただし……。

いいなあ、男の人は。まあ仕方ないんだけどさ）

性別というどうしようもない壁に対し心の中で独りぼやきつつ、お湯を沸かしお茶の準備をしながら待っていると、みんなが戻ってきた。

「ああー、さっぱりした！　すごく！　とっても爽やかな気分だ！！」

「……」

ポルナレフさんがこれみよがしに爽快さをアピールしてくる。いったいなんなのか。

「いいぞ、保乃。水浴びは！　すごくいい！　おまえも行って来たらしいと思うよ、うん

！」

「うっ……。いいです。誰が来るかもわからないですし。私は街まで我慢します」

「誰もいなかったぜ。大丈夫だ！　心配ならオレが見張ってやるから！」

「……余計に心配です」

自分の貧相な身体を見て喜ぶ、特異な趣味の殿方がいると思っっているわけではない。

しかし当然ながら誰かに見られるのは嫌だ。いや、貧相だからこそさらに絶対見られたくないというのもある。……おわかりいただけだろうか？ このかなしみが。

そんな乙女心が理解できるべくもないくせに、ポルナレフさんはそのスタンドよろしく痛いところを的確に突いてきた。

「ひそ……そんなにジャリジャリ、ベタベタだったら、嫌われちゃうぜ〜！」

「ツ！ ぐっ！ な、なにがですか！ だれに!?」

その質問はあつさりスルーし、どこ吹く風のポルナレフさん。続けて言う。

「ちよつと浴びるだけでも全然違うぜ！ サツと行って来いよ！ なっ!!」

（うう、どうしよう。そうしたいのはやまやまだけど……）

頭を抱えていると、見かねたような声がかかる。

「行つてきなさい。熱中症になつてもいかんしな」

ジョースターさんのこの一言で私の心は決まった。

「……じゃあ、すみません。少しだけ、いってきます」

*

*

*

なにやら逡巡していたようだが、結局彼女も水浴びをしにいくようだった。この砂埃

に照り付ける熱波。男でもつらい。そりゃあ女性にとってはなおさらだろう。

「さーてつと♪」

そんな彼女を見送ったあと、ポルナレフが不審な動きをするのを僕は見逃さなかった。

「おい……！ ポルナレフ！ どこに行く気だ!!」

「なはは、ちよつと、トイレだよ、ト、イ、レ！」

「嘘つけ！ おまえ覗きに行く気だろう！」

「……てへ。バレたか」

「バレたか、じゃあないツ!! 許さんぞ！ そんなこと!!」

「目の保養だつて。そーだ花京院、おまえも行こーぜ、一緒に！」

「行くかーツ!!」

そして、どこまでも悪びれない男はこんなことを言う。

「えー、おまえだつてほんとは見たいくせにー。好きな女の裸だぜ？」

「……ぐツ！ ぼ、僕は……」

そりゃあ見たい。僕だつて健全な高校生男子だ。当然だろう。

しかし……

「……僕は、そんな卑怯な真似をせずとも、いつか正々堂々と見るツ!!」

「……………！」

「!?」

「!!」

シーン、と、場に訪れる静寂。

「あ……………」

「こ、こいつ……………とうとう……………」

「……………やっとめやがった。」

……………しかも、ククク、なんだそりや……………男らしすぎるわ……………！」

「プツッ！ ぶはははは！ そうだな！ そのとおりじゃな……………！」

そして、爆笑。

「う、うるさい！ 悪いかッ！」

その瞬間の動揺が、仇となった。

「へへへ……………スキあり！ じゃあなー!!」

「ああっ！ ま、待て！」

*

*

*

「……誰も、いないよね……？」

あたりを見回し、誰もいないことを確認してから、素早く服を脱ぎ、泉につかる。

「き、気持ちいい……!!」

さっきのポルナレフさんに若干イラツとしたことを心の中で謝罪する。これはたしかにたまらない。冷たい水が日焼けで火照った肌にとても心地よい。潜ってみたり、少し泳いでみたり。水の中を堪能する。

「ああ、生き返る——！ ふう……！」

ずっと浸かっていたいが、そもいかなことを思い出した。誰も来ないうちに、さっさと退散しなくては。

「タオル、タオルと……」

そして、立ち上がり泉から出ようとした私の目に、信じられない光景が、映った……。

*

*

*

「……待て！ この！」

「待てと言われて待つやつはいねーよお〜！」

「ハ、こいつッ！」

いかげんイラツとして、もういつそエメラルドスプラッシュをぶちかましてやろうかと思つたときだった。

「しっ！ 隠れろ！ いたぞ……！」

「！ な、なんで僕まで……！」

僕らは匍匐前進のような格好で草叢に身を窺した。

「静かにしろつて！ ……くツ、後ろ姿しか見えん……！」

「……ぐくり……」

頭を少し上げると、こちらに背を向け泉に浸かる彼女の姿が目に入った。

「ハツ!! も、戻るぞ！ おい!!」

「もういいじゃん！ 自分に正直になれよおー!!」

「僕は正直だ！ ……おまえなんかにみせてたまるかツ!!」

「いつてツ！」

あたかもカメのように伸びようとするポルナレフの頭。それを僕は思い切り地面に押しつける。

その瞬間だった。

「あッ……！」

彼女が立ち上がり、その肢体があらわになる。

湿った黒髪が流れる細い肩、白い背中、長く伸びる手足にくびれた腰……

……残念なことに木々などが邪魔をして、完全には見えないが。

(……おもったとおり……、いや、想像以上だ！ う、うつくしい……！)

ああ、今すぐ……しやせいしたい……

つて、ち、違う！ 写生だ、写生！

綺麗なものをキャンバスに残したいという美術部魂だツ！

……写生してどうするつて？ ……結局のところ同じ？ うるさいなツ！)

どこからともなくきこえてきた気がした天の声と争いながらも、その奇跡を目に焼き付けつつ感動とともに感謝の意を唱えていた。

(なんだ？ こころは、楽園か……？)

ああ……、神様……、ありがとう……)

「……おい……」

「ハッ！」

そんな僕に低くドスの効いた声が届く。

「……なんだかんだで、結局てめーが一番しつかり見てんじゃねーか!! うらア!!」

「……ぐあつ！」

そうして、すっかり油断していた僕は怒れるポルナレフに巴投げをくらい……

「!? か、かきよ……!? ……きやあーっ!!」
 彼女の前に転がり出たのだった。

*
*
*

「うわーん！」

（みられた……よりによつて……いや、他の人になんて死んでも見られたくないから幸い……？）

うう、でもつ、でもおー……！

「どうどう……うーむ、ここまでおもしろいことになるとは思つてなかつたわい……」

「ぐすん……ん？ 今、なんかいいませんでした？」

「い、いや、なんでもないよ！ よ、よしよし、災難じゃつたのう」

「……災難……ほんとですよ！ ふええーん……！」

「し、しまった、逆効果じゃつた……」

慌てる祖父。見かねてうんざりした声をあげるその孫。

「うるせえな……。もういいじゃねーか、別に。時間の問題だろ……どうせ」

「よくないっ！ なによ、それ……。うえーん！」

「チツ、わかってんだろ？ あいつはポルナレフのやろうを……」

「……とめにきてくれただけなんですよ？ そんなのわかってるもんー！」

「わかってんなら、許してやれよ……」

「……別に、怒ってるわけじゃないし……」

「え？ そうなの？」

「じゃあ、なんだよ……」

「はずかしいよお!! ……それに……がっかりされた……」

「はあ？」

「ぜったいがっかりされたよ！ もうやだー!! わーん！」

「……」

「やれやれだぜ……」

ねがい（前）

海辺の街にてクルーザーを手に入れた僕達一行は、エジプトに向けて紅海を渡っていた。

紅海は透明度が高く、とても綺麗な海だった。

最近ずっと、見渡す限り砂、砂、砂……という、緑のない砂漠を旅してきたからだろうか。

急に出てきた一面の青。

そのコントラストからか、より一層、僕の眼には美しく映った。

海上を進む中、コンパスと地図を眺めていた承太郎が何かに気付いたのか、舵輪を握る祖父に言う。

「おい、じじい……方角がちがうんじゃないか？ まっすぐ西……エジプトに向かうんじゃないのか？」

その問いに対しジョースターさんは普段と明らかに異なる、重々しい口調で答える。

「……少し、寄り道をする。今回の旅に重要な関わりを持つ男に会うためにな……」

「重要な関わり……？ 誰ですか？」

「ああ。花京院、そうじゃな……」

僕がそう尋ねると前方に見える島を指した。

「あの小島に住んでおる……と、わしはインドで、彼に聞いた」

「なにになに？ インドでカレー？」

「インドで!!? まさか！」

ポルナレフの寒いギャグをかわしながらも、インドと聞いて、僕の脳裏にはある人物が浮かんでいた。

「(一)(一)じゃ」

降り立った島はさほどの大きさではなく、一時間も歩けば簡単に一周できそうなほどであった。めぼしい建物も見えず、あまり人が住んでいるようには思えなかった。

「ここは……無人島に見えますが」

ジョースターさんの先導で島の奥へと進んで行くと、一軒の小屋が見えた。

「煩わしいことに巻き込まれるのを嫌い、一人でここに住んでいるようだ。

来るかどうか迷ったんじゃが……」

小屋の前では一人の男性が鶏の世話をしていた。

「あの、後ろ姿は!!」

見覚えのあるそれに、つい声をあげてしまふ僕を制止し、ジョースターさんが言う。「わしが、話をする。彼の死を……伝えないわけにはいかん」

「！」
全員、『なにか』を察し、神妙な面持ちで男性に近づいていくジョースターさんを固唾を飲んで見守る。

「突然の訪問、失礼する。わしはジョセフ・ジョースターと申します」

「……帰ってくれ！」

この島に誰かが来るときは、決まって……悪い知らせを運んでくるときじゃ！」
しかし、声を荒げそう言い放つと、男性は勢いよく扉を開け小屋に帰っていつてしまった。

その姿はまさに、あの、『彼』そっくりだった。

「し、師匠!？」

「……の、父親、じゃ。息子の死を伝えることは、つらいことだ……」

しかし、言わぬわけにはいかんしな……」

「……アヴドウル……」

それを聞いたポルナレフが悲痛な面持ちで目を閉じる。

「……彼の死は君のせいではない……ポルナレフ。」

「いいや、その責任……。それを、オレは背負っているんだ……」

「わしに任せてくれ。もう一度話をしてみる」

そう言つてジョースターさんは、小屋に入つていった。

「……すこし、ひとりで考えたい。あつちの浜辺にいるから、また、呼んでくれ……」

そして、ポルナレフはそう言い残し、行つてしまった。

「ポルナレフさん……。ねえ、まだ黙つていなきやいけないの？」

と、彼女。優しさからか、はたまた黙つているのに限界を感じたのか……。砂浜の方へと消えて行く男の背中を見やりつつ、僕らに問う。何をかつて、無論、アヴドウルさんに関する真実を、であろう。

ポルナレフといえ、あの例の……。オアシスの一件から、彼女は奴にほんの少しだけ、冷たくなつた気がする。いや、辛辣というほどではないけれど、遠慮がなくなつたというかなんというか。

なぜか僕にはお咎めはなく（物凄い剣幕で、「可及的速やかに！ 迅速に！ 記憶から抹消して!!」とだけ言われたが……。そんなことできるわけない。やる気もない）変わらぬ態度で接してくれている。……。おそらく。そう願いたい。

結果的に共犯……。では決してないが、類い稀なる幸運がふりかかつてきた僕にとつて

は、ほんの少し罪悪感を覚えるような……いや、そもそもの発端がヤツの下心にあるのは違いない。やはり自業自得だと、思い直す。

「まあ、それは彼らに聞くとしましょう」

そんなことをこつそり考えつつも、目の前の建物を指さし、彼女の問いに返答する。

「行くぞ」

承太郎がノックをして、小屋に入る。それに僕らも続く。

すると小さめのドアをくぐりぬげようと少しかがんだところで背中からこんな泣き言が聞こえてきた。

「……あぶなかった。ポロつと言っちゃうとこだった。もう限界だよ……」

(やっぱり……)

先程の僕の推測の正解はどうやら後者の方らしい。一応つつこんでおく

「……というか、普通にあなた、言っちゃってましたけどね。『師匠』って……」
「うっ……」

*

*

*

扉の向こうには懐かしい顔があった。

「師匠!! ……のお父さん! は、はじめましてっ!」

またもつい感激からぼろっと出てしまった一言を慌てて取り繕う私に対し、やっぱりこのひとからあきれた声でつつこみが入る

「……今はいいんですよ、保乃宮さん……」

「だ、だって、一応……」

「にしたってバレバレすぎませんか?」

そんな私と花京院くんを見て、我が心の師匠、アヴドウルさんは微笑む。

「ふふ、君ら相変わらさずのようだな」

「師匠ー!! お久しぶりです!!」

それを皮切りに次々と皆再会の挨拶を交わす。

「約2週間ぶりか……もつと長く感じるな」

「承太郎も変わらん。その学ラン、暑くないのか?」

「アヴドウルさん! 傷はもう大丈夫なんですか?」

「ああ。少しつつぱるがな。大丈夫だ。ありがとう、花京院」

それがひとしきり終わつたのち、ジヨースターさんが私達に問う。

「ポルナレフのやつは、どうしとる?」

「一人で考えごとをしたいと、海岸に……」

窓の向こうにかすかに見える青色の方向を指さしながら花京院くんが答える。

私もここぞとばかりに、ずっと悩まされてきた、そろそろ放棄してしまいたい問題を相談することにする。

「あの、もうポルナレフさんにも言っちゃ駄目ですか？ 師匠のこと……」

「そうじゃなあ……」

ジョースターさんは少し考えて、こういった。

「せつかくじゃ！ あとで潜水艦と一緒に盛大にバラそう！

と、いうことで、まだ黙つといてくれ。今日はまだもう少し準備がある。

ここに一泊して、明朝出発じゃ」

「わ、わかりました」

どうやらもう少し抱えておかねばならないようだ。なんとも、楽しいことが好きなこの方らしいが。

「さて、積もる話もある。昼飯でも食べながら話そうか」

時計を見ると、確かに、もうとうにお昼時は過ぎた頃だった。急に空腹を覚える。

「そうですね。なにか作りますか？

食材は財団経由でけっこう揃っているんですよ。この通り」

キッチンの冷蔵庫を開けて見せる師匠。確かに、そこにはぎゅうぎゅうとなにやら

入っているようだった。

「本当だ。ではそうするか」

頷くジョースターさん。そこで何かを思いついたように師匠が言う。

「そうだ！保乃、せっかくだから君に何か作ってほしいな。最近、日本料理に飢えていてね」

「わ、私ですか!?!」

急に降ってきた白羽の矢……御指名に戸惑う私。

「そうしろ。おれも久しぶりに味噌汁が飲みてえ」

「確かに……和食が恋しいですね。カレー率高すぎて。美味しいんですが、さすがに飽きてきましたし」

しかし、高校生男子たちからも同調の意を示されてしまう。私も本来和食大好き派なので、その点は同感ではあるが。

「おまえさん、料理はだいじょうぶなんじゃろう？」

「え!?! そ、それなり、でしょうか……?」

一応一人暮らしで自炊はしていますが……人様に食べていただいたことなんてないので、なんとも。

ですので、過剰な期待を寄せられると、困りますが……」

「じゃあ決まりだ！」

と、いうことで、なぜか私がキッチンに立つことになったのでした。

「わあ、調味料とか、道具もかなり揃っているんですね！」

まずは……と、戸棚を検分したところ、その充実っぷりに驚く私。師匠が応える。

「わたしが日本料理好きだと言ったら送られてきてね。使い方がわからんものも多くな。

せつかくなのであとで教えておくれ」

「はい。了解です。じゃあ適当に、何か作りますね。

取り敢えずお米炊こ……わあ！ 炊飯器も最新式！ これ欲しかったやつですよ！

すごーい！」

なんでもいい、と実は最も困ることを言われてしまったため、あまり時間をかけずに作れるもの……と、いうか、単に私が食べたかったので、はて、和食……？ とか思いつつも、チキン南蛮、豚汁、豆腐サラダ……を作ってみた。

鍋の容量的にいっきに全員分仕上げるのは無理だったので、まずは、食べ盛りのふたりと、用事があるというジョースターさんの分から。

「はええな……」

「急いでもん」

一秒間に数百発のパンチを放てる（スタープラチナが……いや、もしかしたら本人もその気になれば可能かもしれない）人が何を……と思いつつながらその眩きに応える。

「あと茶碗蒸しがもうすぐできます……ので、よ、よろしければ、先に食べていてくださいませ」

そして、タイミングよく炊き上がったほかほかと湯気の立つ御飯をこんもりとよそった茶碗を各々の前に震える手で置きつつ言う。

「おお。いただきます。」

「……いただきます。」

「いただきます。」

「……」

蒸し器の中身を確認しつつ、意気揚々と箸をつける彼らの様子をハラハラと見守る。

（だ、大丈夫かな？ そこまで壊滅的ではないと思うけど……どうだろ……？）

味見しすぎてもうよくわかんなくなっちゃったし……）

「……」

ひたすら場に流れる沈黙。碗や箸がぶつかる音、汁をすすする音だけがやけに響く。

(み、みんな無言だし！ ああああああ！ しまったー、やっちゃったよ！ ごめんなさいーツ!!)

「す、すみません！ お口に合わなかったら、無理しないで……」

しかし、脳内で叫びつつ、慌てて頭を下げた私にポツリと聞こえてくる声。

「……うまい」

(へ……?)

それに続く、陽気な声。

「うん、こりやうまい！ 日本食が嫌いなわしでもこれはイケる!!」

目を瞬かせつつ、問い返す。

「ほ、ほんとうですか？ も、黙々と食べてるから不味いのかと……」

「すまんすまん。つい、夢中で食べてしまつてのー!!」

にしし、いつものように朗らかに笑うその顔を見て、ようやく少しだけほつとする。とりあえず、食べられるものは作れたようだ。

胸を撫で下ろしつつ、先程よりも幾分かは軽くなった心で出来上がった茶碗蒸しを出していると、まるで苦行にひたすら耐える修行僧のような……このひとには珍しい、まさに『仏頂面』で、ずっと押し黙ったままの(……それがまた私の心をずっしりと重くしていたわけだけでも……)彼の肩を叩きつつ、軽いノリでジョースターさんが問

う。

「なあ、うまいよなあ? 花京院」

(ひいッ! や、やめてーッ! 藪を蛇でつつかないでーッ!! 沈黙は金なりーッ!!)

明かな誤用にも気づかない程、錯乱する私。おもわず耳を塞ぎたくなるが、にげちゃダメだ、にげちゃだめだ……忌憚なき意見を頂き、次回に生かさなければ。どうにか己を奮い立たせる。

「……」

すると、私にとつては時間が止まったかのような錯覚を覚えるほどの沈黙ののち、彼はひとことだけ、こういった。

「……はい、……とても」

にっこりとほほえんで、かみしめる様に。

「えッ! あ、……あの、……あ、ありがとう……」

その表情に、瞬時に顔が熱くなる。

「もう、いつでもお嫁にいけるのおー。ししし!」

「や、やめてくださいよ!」

えつと、ちよつとポルナレフさんにご飯どうするか聞いてきます!」

そうしてなんだか居たたまれなくなつた私はその場から逃げるように外へ出たの

だった。

*

*

*

「いやー。食った食った。うまかったなー！」

「わたしも食べるのが楽しみだよ」

「ああ。……期待していい」

彼女が勢いよく飛び出ていったのち、口々に料理に対する感想を述べる男たち。

そんな中、なおもひとり言葉を発せずにいる僕は承太郎からこんな疑問をぶつけられる。

「それにしても……花京院、おまえ、やけに静かじゃあねえか。

この展開……もつとうるさいだろうとふんできていたんだが。

おまえ的にはいまひとつだったのか？」

「……ふ、そんなわけないじゃあないか。

おいしかった。……ものすごくおいしかったよ。

とても僕好みの味で、びっくりした……」

まだ余韻の残る、舌のとろけるような幸福な感覚をおもい返しつつ、正直な感想を述

べる。

すると、矢継ぎ早に呆れたような声が飛んでくる。

「じゃあなんだってんだよ。その苦虫を噛み潰したような顔は……」

「美味かったなら、もつとそういつて褒めてやればいいのに」

「まったくだ。乙女心のわからんやつちゃのう……」

それに対し、どうにかゆっくりと釈明をする。

「そう、したかった……しかし、下手に、口をひらくと……」

「ひらくと？」

「……おもわず、プロポーズしてしまいそうな自分を抑えるのに必死だったんだ！」

「……」

無言で視線を逸らすジョースター家のふたり。

それを意に介すことなく、先程までの反動も相まって感情を爆発させる僕。

「あのひと料理も上手いのかよ!?」 「反則だろ！」

仕事から疲れて帰ってきたら、このおいしいごはんと……

そして、なによりあのひとが家でまってるわけでしょ!?

おかえりなさい、あなた(はあと)……とかいわれちゃうんだぞツ!

相手うらやましすぎだろツ! くそツツ!!」

「はいはい。そーだな」

「……」

嘆く僕を承太郎があっさりと流す。慣れたものだ。もう少し聞いてくれてもいいのに。

「おやつ！ 君ら、やつぱりくつついたのか?! よかったなー！」

一方、アヴドウルさんからはにこにここと新鮮な反応が返ってくる。

「……いえ、ちがいますよ。僕のしがない、片想いつてやつです」

そんな彼に、ほろ苦いきもちで事実を告げる。

「え?! そうなのか？」

「はい」

そうだ。前に互いに宣言済みだ。

僕たちは仲間。ただの……友人、なのだから。

「ひそ……そうなんですか？ ジョースターさん？」

「ひそ……こやつはそう言つとる。」

……あやつもそう思つとる、おそろく。ま、そーゆーかんじじや」

「なるほど……」

*

*

*

あまり誉められるのも居心地が悪いものだ。

逃げるように小屋を出た私は海岸沿いに出ると、すぐにひとり物思いにふけるポルナレフさんを発見した。

「ポルナレフさん！」

「おお、保乃か。……アヴドウルの親父さん、どうだ？」

（あ、そうか、まだ黙ってないと駄目なんだった……えーと、とりあえず……）

「……今夜は、お宅に泊めていただけることになりました。

で、キッチンをお借りしてお昼ご飯を作ったんですが、ポルナレフさんもそろそろ食べませんか？」

「そうか……」

ああ、オレはまだいいよ。もう少し考えたいんだ」

「つ………そ、そうですか。」

……じ、じゃあ、すぐ食べられるようにしておきますから、また戻ってきてください
ね」

「ああ、ありがとうな。」

なんだかさびえ立つ髪の毛がいつもより二割くらいへこんで見えた。

そんな姿に、いい加減、喉元までせり上がってきて飛び出かかった『それ』を必死に呑み込み、サクサクと砂を踏みしめながら元来た道を引き返す。

「戻りました」

「おお。ポルナレフ、……どうだった？」

小屋に戻ると開口一番。なんだかんだ、やはり師匠はポルナレフさんのことが気にかかるようだ。

「まだいいそうです。もう少し考えたいって」

「そうか……」

そして、影が一人分減っていることに気づき、問う。

「あれ？ ジョースターさんは？」

「潜水艦のところに行っちゃ。懐かしい知人が来ているらしい。」

「ごちそうさま、うまかったぞい！ ……とのことだ」

見ると、みんなのお皿は空になっていた。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさん。……アヴドウル、この島、釣りとかできんのか？」

部屋の隅に置いてある釣りグッズを吟味しながら、承太郎君がいう。

「ああ。そのへんの釣竿、使つていいぞ」

「……行つてくる。ヤス、夕飯はブリの照り焼きな」

「あ！ ず、ずるいぞ、承太郎!!」

「……お前も付き合え。行くぞ」

承太郎君にひきずられる最中、花京院くんが叫ぶ。

「保乃宮さん！ 僕はッ、あなたとけっ……！」

じゃあなくて、あ、あなたの結構な腕前が作り出す、肉じゃがが食べたいですーッ！

「

「……！ うん、わかった。いつてらっしやい！」

紅海で、はたしてブリが釣れるのか……それはさておき。

(……ふふ、がんばろーつと！)

すつかりやる気がでてしまったようだ。われながら現金なものである。

「じゃあ、今度は師匠と私の分を作りますね！ お待たせしてすみません」

「ああ、たのむよ」

下味をつけた鶏もも肉を衣にくぐらせ、ほどよく熱した黄金色の油の中にゆつくりと沈めていく。シユワシユワと特有の音を立て、次々と表面に細かな泡が浮かぶ。

それを見届け、浮き上がってくるのを待つ間に、青々と瑞々しいキャベツの葉っぱを数枚むしってぎばぎばと洗い、まな板の上に重ねてリズミカルに刻む。

(チャリオーツ！ なーんてね。……うーん、大丈夫かなあ、ポルナレフさん……)

そのスタンドよろしくふわふわと次々に千切りの山を築いていると、同時に本人の先程の思い詰めた様子が浮かぶ。うつすらと嫌な予感が頭をよぎったところで、後ろから声をかけられる。

「いやあ、しかし本当にいい手際だな。何か料理の学校とかに行っていたのかい？」

手を動かしつつも、あわてて否定する。

「い、いえ！ 自己流で適当なだけですよ！」

すべて母の真似でそんな大層なことは……」

「へえ。逆にすごいな。どれ、わたしも手伝おうか？」

「だめです。師匠はのんびりしててください。まだ病み上がりなんですから」

私その断固たる丁重なお断りを受け、ポリポリと頬をかき困ったように微笑みながらいう。

「もう大丈夫だよ。君たちのおかげでな。そうだ。まだきちんと言つてなかったな

……。

「おかげで命拾いましたよ。本当に、ありがとうございます」

「そ、そんな……私はないも。」

「むしろ私がもう少ししっかりしていれば師匠に怪我をさせることもなかったのに……」

「ふふふ。やっぱり、変わっていないな。君のその向上心は。」

「そんなことはないよ。ありがとう」

「い、いえ、本当に！ 私なんかより二人の方が」

「いいつつ、鍋の様子を確認する。こんがりときつね色に揚がったそれを取り出し、一口大に切っていく。いい具合に仕上がったようだ。サクツサクツという感覚が心地よい。」

「ポルナレフさん、あれから見事に仇討ちを果たしたんですよ。」

「花京院くんはそれを普通じゃあとても思いつかないような機転でばっちりサポートして……」

「そうなのだ。先日、自分で旅の振り返りを口に出して改めて感じたことなのだが、彼の戦果は実は相当なものだ。縁の下だったり、矢面だったり、その種類は様々だが。」

「飛行機でも、崖でも、街でも、砂漠でも、脳の中でも……そして、あの、夢の中でも。」

「そうか、そうだな。ポルナレフのやつはまあともかく、花京院にも礼をせねばな
「はい……」

（あ、そうか。ちがった。……あれは、夢、だった……）

そして、また、ついおもいだしてしまふ。あの、しあわせなときを……

「……ふむ」

すると、なにかに納得したかのように頷く師匠。こんなことを言いだす。

「……で、だ。例の答えは出たのかな？」

「へえっ!？」

そのぶつとんだ質問により、おもわず、タルタルソースになりつつあった……刻み
きゆうりとゆで卵を酢やマヨネーズで和えていたポウルがすっぽぬけてぶつとんで
いつてしまった。

「わ、わわわ!？」

「おいおい。気をつけなさい」

「し、師匠が急に变なこというからじゃあないですか!？」

「ははは。すまんすまん。」

で、どうだい？ わたしの予言は。当たっただろう?？」

「……」

ふっとんだそれを片付けつつ……ためらいつつ、でも正直に、答える。

「はい。……当たりました。」

師匠、すごいですね」

「そ、そうか！ そうか!! めでたいなー！」

「い、いえ、めでたくは、まったくくないですよ！」

その、す、……すきだなあ……って気づいただけですし」

「で、花京院のどんなどころがすきなんだ？ まあ、いいやつだからな！ わかるけどな

！

なんで、いつ、どうやって気づいたんだ？ 師匠に言ってみなさい。さあ！ さあッ

!!
」

それにしても、この師匠、ノリノリである。

勢いに押されつつも、重要なことを聞き流さなかった自分を褒めたい。

「な!? あれ? 私、相手の名前言いましたっけ……?」

不思議に思い訊ねると、苦笑いでこう返される。

「そりゃあ、なあ……」

「ええ!? そ、そんなにわかりやすいのかな……」

そういえばいつのまにかみんなにもばれてたし…。

はっ！ まさか本人にも!?」

「いや、それは大丈夫だと思うが……気持ち伝えたりはしないのかい？」

「そ、そんな大それたこと!? お、おそれ多い！」

おもわずブンブンと、それこそふつとんでしまいそうになるくらい首を振る。

「……そんなことはないと思うがなあ。あいつも……おつと。」

ええと、やつは君のことをいつもあんなに気にかけているじゃあないか。

十二分に、いわゆる、『脈アリ』というやつだと思うが？」

にやにやとそんなことをいう。

一体どこでおぼえたのだろうか？ 日本人以上に日本語が達者なこのひとはやっぱり

不思議なひとだ。

それはさておき、またも必死に否定する。

「な、ないですよ！ 彼は、やさしいから。」

私……迷惑ばかりで、なにも、返せていないし……」

「……」

「いいんです。そばにいられるだけで。」

すきなひとといっしょにいるってこんなうれしいんだって、初めて知って……びつくりです。

そんなことよりも、共に闘えて、その背中を護ることができたら……
 それで、充分すぎますよ」

「……そうか」

「……はい！」

おおきく、うなづく。

やっぱり不思議なひとだ。このひとを前にすると、ついぼろぼろと素直な気持ちを吐露してしまう。それを伝えたら、また、「本職だからな」なんていわれてしまいそうだけど。

そんなことを考えていると、ふいに師匠がふつと笑う。

「……いやはや、変わっていないと言ったが、そんなことはなかったな」

「え？」

「……綺麗になったね。恋の力！ ……やはりすばらしい！」

「うッ！ は、はい！ で、できましたから！」

この話はここまででっ！ さっ、食べましょうっ！」

*

*

*

僕たちは岬で腰をおろし、海に向けて釣り糸を垂らしていた。

眼下にはゆつたりと寄せては返す白波。晴れ渡る青い空を見上げると、上昇気流に乗ってトンビたちもその翼を広げて気持ちよきそうに滑空を楽しんでいた。

ブリが釣れるかはともかく、久しぶりにこうしてのんびりする時間はなかなか悪くないものだ。

「おい、花京院」

そんなふうには汐風を楽しんでいると、隣の承太郎から声をかけられた。

「なんだい？」

「……悪かったな。あのとき、すぐ、信じてやれねーで」

「え!? あ、ああ。いや、いいんだ。……仕方ないことだよ。」

僕が逆の立場でも、正直信じる事ができたかどうかかわからないさ」

夢の世界を支配する…死神13。デスサーターン

出会ったことすら忘れてしまう、変わったスタンド。手ごわい相手だった。
(気にかけてくれたのか……)

承太郎はさらに問う。

「お前がなんとかしたんだろう? 結局」

「……どうだろうね? ま、想像におまかせするよ」

「ちつ、カツコつけやがって……」

「ふつ……そんなことはないさ」

「敢えて言う必要もない。僕が覚えていれば、それでいいことだ。」

すると、こんなことをいいます。

「……ま、お前が一番わかってほしいやつはちゃんとわかってるぜ。よかつたな」

「え?!」

頭に浮かぶのは彼女のこと。と、あの夢での出来事を思い返すとどうしても浮かんでしまう、あの……。

(ま、まさか記憶が!?)

驚き、不安、期待……心臓の高鳴りとともに噴出する様々な感情を入り混じらせながら、承太郎の言葉を待つ。

「よくわかんないけど、きつと、なんとかかしてくれただろうね。……だそうだ。」

「あ、ああ。そういうことか……」

(覚えているわけでは……ないんだな……)

じわり広がる落胆。マールブル模様な僕の心の内訳は、思っていたよりも期待の占める割合が大きかったらしい。自分でも初めて気づく。

「いつもと違ってたな。あのとき。あいつ」

「ああ」

「普段あんまり強く意見を言うやつじゃねーからな」

「ちよつとびつくりしたよ。あんな一面もあるんだなつて……」

「……惚れ直したか？」

「ふつ、そうだな。……そうなんだろうなあ」

「ちつ、惚気てんじやねーよ。」

「……もう、さつさとてめえの女にしちまえよ。まどろっこしい……」

「そうしたいのは、やまやまだけど……」

やるべきことを、果たしてでないと、ね」

「ちつ、やれやれだぜ。めんどくせーやつらだ……おつ！ かかった！」

「おお！ やった！ がんばれ！ 承太郎!!」

*

*

*

「ごちそうさま。評判に違わず、だな。本当にうまかったよ。晩飯にも期待だな！」

「ありがとうございます！ ご期待にそえるよう頑張らせていただきます」

かなり遅い昼食を終えた師匠と私だったが、それでもまだポルナレフさんは帰ってこ

ない。

「どうやら師匠も同感だったらしい。

「しかし、遅いな……ポルナレフのやつ」

「はい……私、もう一回様子みてきます」

立ち上がる私に声をかける師匠。

「ああ、わたしも行くよ。食後の散歩もかねて。

「ジョースターさんはああ言っていたが、もういいだろう。驚かせてやるとしよう」

「ふふ、そうですね。じゃあ、いきましよう」

「そうして、先程会話を交わしたあの場所に師匠とやってきた。

しかし探しびとの特徴的なシルエットはどこにも見当たらなかった。

「……あれ？ どこへ……？」

「手分けしてぐるっと探すとしようか。その方が効率的だろう」

「はい」

「というわけで海岸沿いを師匠と分かれ、反対回りで探すことにする。

「あ、そんなことしなくてもいいんだった……」

歩き始めて数分後、ようやく気づく。

「……セシリア！ ポルナレフさんのところに！」

いつも閃きが遅い自分を情けなく感じつつ、相棒を呼び、頼む。「いた!」

すると、海岸から少し入り組んだ場所ですぐに目的の人物をみつけることができた。しかし声をかけようとしたところで、そのひとが草陰でしゃがみ込んでなにかしているのに気づく。

(ハッ! しまった! 御手洗い中!)

ポルナレフさんといえば……と、つい連想してしまった。

「し、失礼しました! ご、ごめんなさ……って、あれ?」

「や、保乃か!? い、いいところに!」

が、どうやらそれは杞憂であつたようだ。

よく考えたら、トイレにうるさいこのひとが野で……というのはありえない。逆に。

……と、妙な納得をしつつも、訊ねる。

「どうしたんですか?」

「ご、これを見てくれ!」

慌てふためいた様子で指し示されたその場所はキラキラと黄金色に輝いていた。

まさに、宝箱に入った金銀財宝……そこから放たれる光で。

「な、なんですか? これ? ほ、本物!」

「これなんてナポレオン時代の金貨だ！ 相当のお宝だぜ……」

「す、すごいじゃあないですか！ ……なんで？」

「どうやってこんなのみつけたんです？」

「い、いや、ちがうんだ！ へんなランプみたいなのを拾ってよ……」

「こすつてみたら、こうボヨヨヨーンって……」

「これまたへんなのがでてきて……」

「はあ？ そんな、アラジンの魔法のランプじゃあるまいし……」

「いや、まさに、そうなんだって！ そんなで、そのでてきたやつがよ……！」

『娘よ！ おまえの願いもかなえてやろう！』

3つ！ 3つだッ！ 願い事をいえ!! 』

「へえっ!？」

その瞬間、頭上……遙か上から機械的な声が降ってくる。

驚きとともに見上げると、ヤシの木の上に、なるほどたしかに『へんなの』がいた。

「あ、あれスタンドですよね？ 敵じゃあ……？」

「ああ、オレもそう思った……」

で、チャリオツで攻撃してみた。なかなかにすごいパワーのスタンドだった……

しかし、攻撃し返してくるでもなく、やっぱりおかしなやつなんだ。ただひたすら

……」

『おれの名はカメオ。ランプから出してくれた札をしたい。』

願い事を言えといっているのだ！』

「ほ、ほら！　こうなんだよ。」

で、そんなのできつこないって思つて、『今すぐオレをお金持ちにしてみろ！』つて言つてみたんだ。そしたら、あの財宝が……!!』

「ええーッ!!』」

『どちらからでもよいぞ！　さあ、願いをいえ！　叶えてやろう』

「きつ、きさま何のたくらみがあつて……!!?』　敵なら敵らしくオレと闘えッ！

……本当にこのお宝もらつちまうぞ!』

「そうですよ！　やるなら正々堂々、真つ向勝負です!』

……落とし物つて半年経つたら見つけた人のものですよね?』

残念ながら、この場にはツツコミ不在を嘆く人間すらいらないようだ。

そして謎のスタンドからはさらにとぼけた発言が出てくる。

『……闘いたい?　そんなものが貴様らの願いか?』

べつにこちらは構わんが。せつかくなんでも叶うのだぞ?』

その言葉にいいよしびれを切らす、ポルナレフさん。

「こ、この野郎ー！ よ、よおーし、そんなら……」

「ぼ、ポルナレフさん！ い、いったいなにを!?」

息を？む。するとその口からとびでてきたのは……

「……このオレを、マンガ家にしてみるッ！」

子供の頃からなりたかったんだ！

デイ○ニーより有名なやつだ！ みじめなヤツはやだぞッ！

『ポルナレフランド』をおっ立てるんだ！」

「ぼ、ポルナレフランド……。ちよつと行ってみたいですけど……」

例のテーマパークのエレクトロカルなあのテーマが頭を駆け巡ってしまう。

「いや、ちよつと待て！ ちよつと待て！」

しかし、直後そういつて悩めるポーズをとるポルナレフさん。

そして、お次は案の定の台詞。

「……やっぱりガールフレンドがいいなアーツ!!」

「……」

(やっぱり……)

「富や名声より愛だぜッ (力説)！」

すげーカワイくって、こう小指と小指が赤い糸で結ばれてる……

って感じで、フィーリングぴったしの女の子に出逢いたいな！」

「……いや、まあ、（力説）のところは同感ですけども……」

そんなあきれ半分の私の呟きを受け、じろりとこちらに視線をむけるポルナレフさん。

「ああ？　なんだよ。じぶんはもう出逢っちゃってるからって……」

「は？」

そして、首を傾げる私を見て思いついたかのようにいう。

「あ、そうじゃん！　おまえこそ、かなえてもらえよ。」

わかってんだぜえ！　おまえのねがいなんて！」

「な、なんのことですか？　わ、私の、ねがい……う？」

にやにやとんでもないことを言い出す

「いえばいーじゃねーか。」

あいつのカノジョになりたいっ！　って、しよーじきによおー！」

「はあーッ!？」

な、なななな……！

そ、そんな大それたこと、おもってないっていつてるでしよおー！」

全身全霊の、我が魂のおたけびがこだまする。

それを耳ざとく聞きつけ、すかさず『へんなの』は言う。

『なんだ？ 娘よ、それがおまえの望みか？ ポルナレフ、あいつとは？』

「決まってんじやねーか。かきよー……」

「……わあーっ！ わああー!!」

必死にかき消そうとわめくも無駄だった。

「……ああ、そうなのか。では叶えてやろう。少し待て。……呼んでやる」

「ちよ、ちよつとおーッ!？」

「へへ、よかつたな。」

「よくないー!! 撤回！ 撤回しますッ!!」

「もう遅い。呼んだ」

「えええ!？」

頭を抱え、うちひしがれる私をよそに、魔人は続けてポルナレフさんにむけていう。

「さ、その間に……おまえは女の子でいいんだな？」

「い、いや、待て……やっぱりちよつと待て……」

「……」

ながれる沈黙。

「……ポルナレフさん……?」

生温かい風が吹く。

太陽はとつくに沈み、辺りが暗くなってきたことに……今さら、気づく。そして、ようやく零された、うってかわって深刻な声……。

「……死んだ人間を、生き返らすことは、できるのか？」

「!? ま、まさか!?!」

私の予感的中してしまったようだ。悲痛な慟哭に似た叫びがあたりに響く。「おれの、殺された妹を生き返らせてみろッ！」

友人のアヴドウルを生き返らせてみやがれッ！」

「ぼ、ポルナレフさん！ そ、それはッ!!」

発された禁忌の言葉をあわてて止めようとした。

瞬間、私の背中にそつと囁かれる声。

「……おまたせしました」

「きゃー!?!」

「呼ばれたので。来ました」

振り返ると、そこには『彼の姿』。

「で、でた!?! でちゃった!!」

腰が抜けそうになるのを必死に堪える。

「……ちよつと。人を呼んでおいてそんなお化けみたいに……。失敬な」

「……か、花京院くん……。？」

あまりに『それ』らしい、『それ』に、つい戸惑ってしまう。

（え？ ほ、ほんもの？ ……な、わけないでしょ!？」

でも、ほんものも神出鬼没だしなあ……）

急に出てきてくれる。いつも。くしやみなんてしなくても。

ほよよよーんと。……ではないけれど。

「で、……なんですか？ あらたまつて、お話とは」

「ふえっ!? あ、あの……」

確信に迫るそれに戸惑う私。

それをみて、ふつと微笑む。

「……なーんて、わかつてますよ。そんなの」

「え!? あ……」

「……すみません、いじわる、いいました」

「にやっ!？」

「……さあ、夢の続きを……」

「……にぎいやあ——!?」

ねがい（後）

ねがい。

オレの、真に心から望んでいること。

……そんなもの、決まっている。

「おれの、殺された妹を生き返らせてみるッ！

友人のアヴドウルを生き返らせてみやがれッ！」

オレの叫びが周囲の空気を震わせる。

「……いいだろう、ポルナレフ。君の願い、叶えよう。

ひとつずつ、順番に……

まずは、妹からだ」

無機質な声で魔人が告げる。

「H a i l ^{君に} 2 ^{幸あ} U!! ^れ」

いうやいなや、ドローン、と煙の中に消える。

すると、すぐに……どこからともなく、きこえてきた。

「な、なんだ……？」

ザクツザクツ……とまるで土を掘り返しているかのような音。

そして、それだけではないことに気づく。

「……ハッ！」

「しくしく……しくしく……」

「お、女の、泣き声……」

意志とは無関係に、全身の肌が粟立ち、汗が噴き出す。

「だれだッ！そこにいるのはッ！」

オレは感じていた。得体のしれないものへの、『恐怖』を。しかしそれに比例するがごとく、たしかにこの胸は抱いてしまっていた。……膨れ上がる期待を。

カラカラの口腔内、呑み込める唾もなく、しかたなく空気をゴクリと空嚙下しながら、鬱蒼と生い茂る草を一気にかき分ける。

「ッ、これはッ！」

すると、己の目にとびこんできたのは地面にぽっかりと開けられた、穴。

その大きさは、ちょうど一人一人が横たわったほどのもので、それは否が応にもオレの頭に連想させた。……『墓穴』というものを。

さらに、傍にはばらばらと髪の毛が落ちていた。ウエーブのかかった長い長い、女の髪の毛が……。

「ば、ばかなッ！」

「しくしく……しくしくしく……」

恐る恐る、すすり泣きの方向に視線を向けると、暗がりにはひとりうずくまり泣きじゃくる女の姿に気づく。

「うそだ！ うそだ!!」

オレの妹は……フランスの、オレの故郷の墓の下にいるはずだ！

だれだ!? だれなんだ？ おまえは！

オレのその泣き叫ぶような問いに、答えは返つてこなかった。

「しくしく……来な……いで。苦しいの……まだ、完全にはからだか……できてなくて……しくしく……」

代わりに、なおも女の嗚咽が漏れてくる。

同時に、とぎれとぎれに、微かに聞こえてくるそれを確かにこの耳でとらえていた。

「その声は……」

間違えるはずなどない。最愛の人間のその声を。

「……シエリー!!」

「……」

しかし、驚愕と歓喜の入り混じったオレの呼びかけに応じることなく、その姿は無言でガサガサと草の中へと消えていく。

「どッ、どこへ行くんだ!？」 シエリー、オレだよ！

待ってくれッ！ なぜ逃げるんだ、シエリー！」

自らも草の海を泳ぐように……溺れるように追いかけていく。

「泥まみれなんですもの……髪の毛だってバサバサだし……しくしく……」

「なに泣いているんだ？ なにが悲しいんだい？」

「しくしく……」

涙声にそう問いかけた瞬間、月明かりが差し込み、オレたちを照らす。

そこには美しい、オレが求めてやまなかった、いとしい横顔がみえた。

「おお！ おお！ シエリー！ おまえだッ！ まさしくおまえだ！」

しかし、感激に乗じて歩みを進めようとしたオレを『妹』は鋭く制す。

「だめ！ こないで！」

「な、なぜだ……?」

「だって、あたしの事きらいになるわ」

「きらい!? 一度だっておまえのこと嫌いだって言ったことあるか?」

「あるわ……こどものとき、お兄ちゃんの飼ってた熱帯魚をネコにあげたとき、すごくおこって嫌いだっていったわ」

「!」

なつかしい記憶が甦り、おもわず歓びでうちふるえてしまう。

そんなことを知っている……それこそが、まぎれもない『証拠』であるのだから。

やさしく、囁く。

「ああ、あの時は怒ったけど……」

いつでもおまえのことは愛していたさ。今でもさ」

「ほんと? いつでもあたしのこと愛してくれていた?」

「あたり前さ」

「どんなことしても、愛してくれる?」

「どんな時でも愛してる。」

……でもなぜ泣いているんだ? なにが悲しいんだ?」

「悲しい?」

……いいえ、お兄ちゃん、あたし悲しくってないてるんじやあないわ」

「……え……?」

やけに明るいその声音に、悪寒とともに胸中に粘っこい不安が広がる。

「……あたし、お兄ちゃんを……」

しかし、もはや、時すでに遅し、であった。衝撃の一言がオレの鼓膜に突き刺さる。

「……食べられるから、うれしいのよッ！」

爛々と不気味に濁った光を放つ双眸がオレをを捕らえるやいなや、『それ』は、とびかかって来た。

「うわああああああ!! あああああああ!!!」

何が起きたのかわからなかった。

ただ、激しく脈打つ心臓の鼓動とそっくり呼応して己の脳に伝わる、ドクンドクンと燃えるような灼熱感、そして、勢いよく吹き出し視界の端を真っ赤に染めていくそれによつてどうにか理解した。

オレは『ここにいる妹』に、肩の肉を千切りとられたのだ、と。

心臓までめぐりとられた思いだった。あまりのシヨックに痛みすらよくわからない。脳内を駆け巡る混乱の嵐のなか、本能的に相棒を呼び出す。

「うぐっ！ チャ、チャリ……オーツツ……」

すると、またも妹(?)は四つん這いの動物的な動きで、すぐさま草叢にダイブし逃げ込む。

「シエ、……リイ……!! はあ、はあ……」

「かみついてごめんね、お兄ちゃん」

聞こえてくる。周囲を駆け回る、ガサガサと草を揺らす音と声。それは、オレの脳を、心を、さらにぐるぐる掻き乱してゆく。

「まだ体が完全にできてなくて……お兄ちゃんの肉を食べれば元に戻るわ。

……ねえ……いいでしょ？ 食べても。

いつもシエリーの言う事、なんでもきいてくれたじゃない」

「か、カメオーツ！」

その名を呼ぶと、すぐにドローンと魔人は姿を現す。

「なんだ？」

「き、きさまーツ!!」

「なんだ？ おれはおまえの願いをききいれた……」

『願いをきく』それだけがおれの能力……あとはおまえ次第さ」

「うう……な、ならば3つめの願いをいっげ……」

必死にそれを口に出す。

「い、妹を消してくれ！ 土にもどしてくれ!!」

「いやだよおオオオオオーんンン!!」

「……は……？」

あつけにとられるオレに対し、魔人は至極楽しそうに、非情な現実を告げる。

「まだわからんのかッ！ ポルナレフーツ！」

おれは『審判』^{ジャッジメント}のカードの暗示をもつ『スタンド』さ！」

「な、なにイツ！」

「能力は……その人間の心からの願いを『土』に投影して願いを作つてやること！」

おまえは『自分の心』で妹を作つたのだッ！

姿も、言動も、記憶ですら……『本物』そのままで驚いただらう？

……くくく、当然だ。おまえの頭が望み、描く『相手』そのものなんだからなあッ！

」

「……な、んだと……？」

「すごいシヨックだろうなあー！ そんなにも大事な存在に食われて死んでくんだから

なあ」

もはや放心状態のオレに対し、なおもヤツは心を躡るような言葉を流し込んでくる。

「……人間は心の底から願うことに最大の弱点全てがあらわれる！」

『死んだ人間が生き返るのが不自然なこと』とはこれっぽっちも考えない。

愛する者がいつまでもこの世のどこかに生きていると思いきこんでいる……

明日にでもひよっこり目の前にあらわれて……

『おはよう』とあいさつしてくれるのを待ち望んでいるのさ！

そんなはずはない、などと口では言いながら、信じているのだ。

……そんなはずなど、本当に、有るはずが無いのにな」

「……そ、んな……」

「クク、この勝負、このおれの勝ちだ！ ……やれ！」

「うふふ、いただきます。」

「くっ！」

「……ありがとう、……おにいちゃん！」

ぎらりと鋭い牙がオレの喉元に突き刺さる……かに思われた瞬間だった。

「ぐっ！」

「はっ！」

「なにい!？」

それはオレの身体を包む、見慣れた薄桃色の障壁に阻まれる。

「……いいじゃあないですか。そのどこが悪いんですか？」

加えて、ゆつくりとオレの耳に届く。

「……『どこか』で、わらっていてほしい……

……『いつか』、また、あいたい……」

聞き慣れた、まっすぐな声が。

「そう、ねがってしまふことの、なにが!?」

普段とは少し異なり凜とした……そして、普段とはかなり異なる怒気をはらんだ、その声が。

「……そんなおもいを利用して、許せない……!」

振り返ると、草原の中、声とスタンドの主である彼女が立っていた。

「や、保乃、おまえ……!」

「うう……うっ!」

しかし、その姿を確認すると、一転、うずくまり、それは涙声になってしまう。

「……お、おい! おまえまで!?! な、なに泣いてんだよ……?」

あわてて駆け寄り訊ねると、ぽそりという。

「かきよういんくん……」

「……は?」

「……花京院くん、はねとぼしちやった！」

「ごめん……ごめんなさい!! うわーん！」

「……いや、わかるけどさ。泣かんでも……」

「慰め半分、呆れ半分の言葉を投げかけると、なおもこぼす。

「わかってた……わかってたもん。」

「……がっかりなんて……してないもん……」

「……ああ、そうか。うん。なんつーか……ドンマイ……。」

「おれも、泣きてえよ……」

「そんなオレたちの耳に、聞こえてきた。

「やっぱり聞き慣れた、あいつの声が……。」

「……ひどいなあ……仁美さん……」

「はっ！」

「あんなふう……はねとぼすなんて……」

「ひややあああ！ またでたあ!!」

「おかげで……身体が少し、壊れてしまったじゃあないですか。」

……どうしてくれるんですか？」

いつも通りの碧色の学生服から伸びる腕が脚が……憎たらしくも整った顔が……へんてこりんなあの前髪が……精巧にあいつを形作るそれらが、たしかに所々ボロボロと崩れていた。

「あ………！ ……か、花京院く……ッ！ ぐ、ごめ……」

悲哀がこもったその言葉とその姿に、彼女の表情があたかも己の身体が傷つけられたかのように、歪む。

「食べればなおるんだよ！ そうだよね？ お兄ちゃん!!」

「し、シエリー!？」

そこに無邪気な妹の声が割って入る。

「……そうなのですか？ ……それはよいことをきました」

それをうけたあいつは、熱っぽい視線とともに、彼女に投げかける。

……本物そのままの、その声で。

「……食べてもいいですか？ いいですよね？」

ああ、もう、がまんできない……！

……食べたい！ ……いますぐに、……あなたを!!」

「……」

「お、おい！　こら！　おまえ、ちよつときめいちやつてんじやねーよ！」

「はっ！　と、と、ときめいてなんて……ッ！」

「……じゃあ、いただきます（はあと）」

「……きやああああー!?」

そして、につこりとそういうやいなや、彼女に飛び掛かる花京院（土）。

この彼女の悲鳴がどういふ種類のものなのか、もはや正直よくわからないが。

「や、保乃！　や、やめ……はっ！」

……しかし、ひとの心配をしている場合ではなかった。

「しんぱいしないで。」

おにいちゃんは、わたしが、ゼーんぶたべてあげるから……ねっ！」

「うわああああ!!」

「い、いけない……ポルナレフさん! ……セシリ……ぐっ!?」

再び牙を向けられたオレを助けるべく、己のスタンドを差し向けようとするも彼女は地面に抑え込まれてしまう。

華奢なその身体に覆いかぶさりながら、あいつの姿をしたものは囁く。

「……だめだよ。……他の男なんて、みないで……。くく、くく……!」

「っ！　ううっ……!」

「……ちや、チャリオーツ！」

このままではふたりして食われてしまう。

やぶれかぶれに突きを繰り出し、どうにか妹の姿をしたそれを振り払う。オレ……庇う相手がいない方が逆に彼女は安全なはずだ、と考え至り、体制の立て直しも兼ね、勢いそのまま駆けだす。

「あれ？ ……お兄ちゃん、おにごっこしたいの？ ふふ、ひさしぶりだね……」

ゆったりとしたその台詞と対称的に、物凄いスピードで迫ってくる足音。

うしろを振り向くことなど、とてもじゃあないができなかった。どれくらい走ったかもわからないくらい脇目も振らず走る、そして、叫ぶ。

「……た、たのむ、もう！ ……き、消え……！」

そこに届く、調子は軽いのに、冷徹な声。

「……だめだよーん。」

貴様はすでに『第3の願い』をいつている……」

「はっ！」

残酷な事実気づき心臓をひゅうつと、冷たい手で鷲掴みにされたような感覚に陥る。

「『アヴドウルを生き返らせてくれ』と!!」

「あ、あああ……!!」

「H a i l 2 U!!」

「うっ、うわあああああ!! やめろおー!!」

オレの懇願をあざ笑うかのように、やつの言葉と共に、ザアつとなまぬるい風が草の海をかき分ける。

「……」

すると、そこには恐れていたものが立っていた。

インドで別れた……友の……すがたをしたもの、が……。

「あ、アヴドウルッ!」

「……」

『それ』は凄まじい勢いで突進してきて、鋭い爪でオレの肉をえぐる。

「ぐわあああッ!!」

「……ポルナレフ……」

「っーかまえた♪」

あれ……お兄ちゃんのおともだち?

しょうがないなあ、……じゃあ、はんぶんこ、ね」

「よ、寄るなツ！ おまえたち……もういい！ 土にかえつてくれ！」

あとずさるオレを、友と妹が取り囲む。

「来るなあ！ お願いだ！ こないでくれえ!! ……チクショーツ！」

せめて抗おうと、チャリオッツを出す。

「ハッ!? ……しまっ!!」

「……お願いだと？ もう、願いはない！ 3つともすでにかなえてやった。

ククク、4つ目の願いはありえないよーん！」

が、抵抗虚しく、残酷なセリフを吐くカメオに相棒は抑えつけられてしまう。

「ぐっ！ や、やめろ！ やめてくれ!!」

「くはははは！ 死ぬ前におもいきり泣き叫ぶがいい……ここは島の奥地。

海辺まで声はきこえん。誰も助けに来てはくれん。クキキキキ……」

ザツザツと迫りくる、脅威の足音に取り囲まれる。

(もうだめだ……オレはもうおしまいだ。

……死ぬんだ……やられちまうんだ)

出血のためか、朦朧としてきた意識の中、嘆く。

(……え?)

そんなオレの目に、ありえないものが映る。

アヴドウルの腕を、後ろから掴み抑える、アヴドウルの姿が。

（なんだ……？ 目がかすんで、焦点がぼやけてきたか……）

アヴドウルが二人に見えちまつてるぜ……

幻覚をみるとは……本格的に死が迫ってきたってことか……）

「ん……!?」

だが、次に映し出されたさらなる衝撃的な映像により、オレの頭にかかっていた霧は一気に晴れる。

「……ふっ！」

うしろのアヴドウルがにやりと笑う。

「ギニャアアア!!」

「な、なににい!? ば、ばかな！」

瞬間、カメオの驚きの声と同時に、砕け散る土人形の腕。

「やっぱりもうひとり、アヴドウルがいるッ！」

目の錯覚じゃねーっ！ 土人形じゃねえ……アヴドウルがいる!!」

懐かしい声とともに吹き荒れる熱風が生温い空気を吹き飛ばす！

「『魔術師の……!』」

「赤^{レッド}」!!」

そして、燃え盛る紅蓮の炎が、土人形の方の『友人』を跡形もなく灰と帰した。

「バカなッ! 死んだはずの! 『吊られた男』 J・ガイルに背中を刺され……」

「死んだはずの……おまえはッ……!」

「チッ♪ チッ♪」

人差し指をゆらす……その人物の名を、オレは歓喜と共に叫ぶ。

「モハメド・アヴドウル!!」

「YES I AM !!」

「アヴドウル! おまえなのかつ? ほ……本物のおまえなのかつ!?」

奇跡のような展開を俄かには信じがたく、おもわず何度も問いかける。

「ポルナレフ……成長しとらん……」

いまだに相変わらず、後先考えず『妹』『妹』といってるんだからな」

すると返ってくる、それこそ相変わらずのにくつたらしいお節焼きの言葉。

不覚にも胸のまんなかあたりがジーンと熱くなるのを感じていると、オレと共通の疑

問をカメオが投げかける。

「バカな一ツ！ 生きているはずがないッ！」

情報では背中を刺されたあと、脳天をホルホースに撃ち抜かれ即死したはずッ！」

「ああ、たしかに撃たれたさ……この眉間をな……」

だが……ホルホースの弾丸は、わたしの皮膚と頭蓋骨をちよつぱり削りとつてかすめていっただけで脳まで達する致命傷ではなかったのだ……。逸れたのだ。ほんのわずか」

ゆつくりと眉間の布を取りながらその問いに答えるアヴドウル。

「……この娘の……セシリアの能力でな!!」

そして、極めつけに、バーン！と後方を指し示す

そこには、またしても彼女が立っていた……

「……おもいきり、とばしたら……」

……ばらばらに……

ばらばらに……なっちゃった……

かきよういんくん……ばらばらに……っ……」

うつむいて、なにやらぶつぶつと呪詛のように言葉を紡いでいる、彼女が。

「……」

「い、」
「ホーン！」

じゃ、『審判』のカードのカメオとかいったな。
とりあえずこいつをやつつけるのが先決だ！」

見なかつたふりをして、必死に気を取り直す友人。カメオに向け、高らかに宣言する。
「地獄を！ きさまに！ HELL 2U！」

対峙する、カメオとアヴドウル。睨み合いに、火花が散る。

「……モハメド・アヴドウルが生きている。」

このバッドニュース、早いとこDIOの奴や仲間のスタンド使いどもに知らせなければいけないんじゃないか？ え？ カメオよ」

「ああ……3つめの……第3の願いだけは本物だ……かなった……!!」
（知らせなくては！ 本当に、知らせなくては！

ジョースターさんに！ 承太郎に！ 花京院（本物）に！）

それを見守りながらもオレは感動に打ち震えていた。

一方カメオはアヴドウルのその言葉を受け、変わらず飄々という。

「たしかに、驚くべきニュースだ。」

だが、ニュースの文面はこう変更されて伝えられる……

『審判』カメオは、ポルナレフと『ガーディアン守護者』の娘と……

ついでに生きていたアヴドウルをぶち殺しました。

そんなグッドなニュースにな!!」

「『魔術師の赤』!」

それを開戦の合図とばかりに、先手必勝。アヴドウルが火炎を放たんとする!

「ふん……貴様らに、幸あれ!」

「ああッ!」

しかし、卑劣にも、やつは妹の土人形を放り投げ、こちらにぶつけてくる!

「なにッ!」

逆流して炎と共にこちらに襲い掛かるマリオネット。

しかし、それはおれたちの身を焦がすことはなかった。

「……させないッ!」

すかさず、彼女がセシリアでシールドを張る。

どうやらようやく精神攻撃から立ち直ったらしい。

しかし、投げられ、ぶつけられた衝撃でばらばらになってしまふ……妹。

「や、野郎! 土人形で偽者とはいえ……オレの妹を! オレの妹を! ちくしよお!

」

「……心中お察しします、ポルナレフさん……うう……」

前言撤回。心の傷は深いようだ。……オレのも。たしかにこれはトラウマものだ。

「く、こいつ、相当のパワーがあるスタンダード……」

「気をつける、パワーだけじゃあねー。スピードもかなりあるぜ」

呟くアヴドウルに助言を送る。

「くくくく……」

すると、やつはまたもふざけたことを言い出す。

「アヴドウル……3つの望みをいってみろ！」

かなえてやろう、今度こそ本当にお前が死ぬ前にな……」

「!?!」

「さあ！ ためしに言ってみろ！ 願いを3つな」

「て、てめー、ふざけやがって！」

頭に血がのぼる、オレ。しかし反対にしれつとこんなことをいう、友。

「……4つにしてくれ。」

「なに!?!」

「願いだよ、願い……」

3つの願いを4つにしてくれというのが願いだ……

チツ、チツ！」

「またもリズムよく、指を左右に振りながら。」

「きさま、そういう冗談は……！」

「いやだというのか！ カメオツ！」

「!?」

「きさまが言い出したのだ！ 約束は守ってもらおうぞ!!」

一転、威厳と怒気をはらんだ言葉とともに、炎をまとった蹴りを放つ。

「……アウドウル！ また無駄なパワーくらべをしようというのかッ！」

……クヒヒヒヒ、やわな蹴りだぜ……」

舐めきった様子でそれを受け止めようとする、『審判』。

「あぎ!? ……ひっ！」

が、次の瞬間、その腕は、バラバラになっていた

「やった、すげえ!!」

「さすがですっ！ 師匠っ!!」

彼女とともに歓びの声援を送る。

「チツ、チツ……」

第一の願いはきさまに『痛みの叫び』を出させること……かなったな」

「バ、バカな！ 強い!! さっきより断然強いぞ!!」

「『吊られた男』に刺された背中がまだ完全に治ってなくてな。

さつきはそのキズをかばっていたせいでパワーを出し切っていなかったのだよ。

インドでやっと立てるようになったのも、つい3日前……

ここまでは飛行機に乗れたから旅は楽だったがな」

驚き慌てる敵に解説するアヴドウル。完全に彼のペースだ。なおもそのターンは続く。

「そして、第2の願いはッ！」

魔術師が、両手から出した炎でカメオの首を絞める!!

「ムギヤアアア!!」

「……『恐怖の悲鳴』をあげさせること。

さらに第3の願いは！」

「ヒイイイイーツ！」

追い打ちとばかりに豪快なジャンピングキックが決まる!

「『後悔の泣き声』だッ!!」

「ヒイ……!」

そして、ふっとんだヤツは、そのまま、ボフンと煙を出して……消えた。

「ああっ！」

「や、野郎！ 逃げたぞツ！ 待ちやがれツ！ チクショーツ!!」

「しっ、二人とも、静かに……」

慌てるオレと彼女に向け、人差し指を口に当てつつ、いう。

「あのパワーとスピード……」

本体は、かなり近くにいないではならないのが『スタンド』のルール。

……どこか、ものすごく近くにかくれているはずだ。……どこかな……」

こつそりと、さがす。

すると、すぐにみつかった。

不自然極まりなく、地中からひよっこり出ている、竹筒が……。

「あっ！」

「……忍び……？」

彼女が呟く。ジャパニーズニンジャ……噂には聞いたことのあるそれを、いつか日本に行つて見てみたいものだ。

「……」

アヴドウルがそつとその筒の上に、葉っぱを乗せる。

「プーッ！」

すると瞬時に上空に舞い上がる、木の葉。確信とともに心の内で叫ぶ。

(ヤロー、この地面の下に本体が隠れてやがるのかッ！

おのれ！ どうしてくれようか！ 妹まで利用されたのだ！

地獄をみせてくれるぜツ！ HELL 2 U！)

「いろんな物、入れてやるぜ。泥、砂、クモ、蟻……！」

思いつくまま、とりあえずその辺にあるものをつつこんでみる。

「(ぼ、ぼ……！)」

地底からむせ返る音が聞こえてくる。

「まだまだあー！」

こんなもので腹の虫がおさまるはずがない。

そんなオレに、アヴドウルがとんでもないことを言い出す。

「……おい、ポルナレフ。なんか、もよおしてきたのお。

「いっちょよ！ ひさしぶりに、男の友情！ ツレションでもするかあッ！」

「は?!」

「チツ、チツ」

一瞬意味がわからず、首をかしげるオレに、下を指さす。

「(、これに!?)」

そして、彼女にいう。

「少々失礼するよ。すまんが、君は……」

「あ、はい。私は、むこう向いていますね。ごゆつくり」
につこりと送り出される。

「ほれ！ 笑え、ポルナレフ！」

「大声で笑いながらするのが作法だぞ！ 笑え、笑え!!」

「……アウドウル……おまえ性格かわつたんじやあねーか？」

前はこんな下品なこと思いつくやつじやあなかつたのに……

うへへ……へへ……頭撃たれたのが原因じやあねーだろーなあ」

つられて笑っていると、たしかに本当に、非常に楽しくなってきた。

「ワツハツハハ！ ワツハハハハ!!」

オレ達の笑い声が草叢に響き渡る。

「アガガガガオゲゲーツ!!」

そして、地上と対照的に、下からは、苦悶の音が聞こえる……

しかし、飛び出では来なかった。

敵ながら、天晴……なかなか根性のあるやつだ。

……まあ、出て来たら待っているのは地獄だからだろうが。

「あの……私も、実は『いいもの』を持っていらっしゃるんですが……」

ひと段落したタイミングを見計らって、彼女がいう。

「なんだ？」

すると、彼女は天空高らかにそれを掲げる。

「醤油です」

「……おまえ……」

「なんでそんなもん持ってんだ……」

おもわず友とそろってツツコミの声を上げる。

「え？ ……肉じゃがとブリ照りを作るためにきまつてるじゃあないですか」

「……」

あつけらかんと返ってきたのは、そんなふうになんともズレた答えであったが。

絶句しているオレ達をよそにさらに彼女はおどろおどろしく、語り始めた……。

「……じつはこれ、けっこう危ないんですよ……」

別に毒とか薬じゃなくても、身近なもの……水とか砂糖とかなんでも……『致死量』

……って、あるんですって……醤油の場合……個人差はあれども、それが実はたったのコップ一杯で……数時間後には嘔吐、下痢、口渇、頭痛、発熱などを発症。および尿管壊死による腎障害、体内水分の貯留によって脳浮腫、肺水腫をきたし……呼吸停止に

至る……。

まあ、要は……死んじやう人は死んじやうんですって……。有り得ないくらい壮絶に苦しんで。

ここにあるのはーリットル入り……。実際どれだけいけるのか……。ためしてみたいなあ……」

黒い液体がなみなみと入った容器。赤いキャップがなんだか尚更一層デンジャラス感を引き立てていた。それを片手に、にこにこ満面の笑みを浮かべる彼女。

すべてがシユールで不気味極まりないその光景に、こちらまで身の毛がよだつかのようだった。

「さ、たーんと、召し上がれ……」

「ぎゃひいーツ!!」

たまらず飛び出てくる、男。

「なーんて。ほんとにやるわけないじゃあないですか。冗談ですよ」

しれっとそう言ったのち、またもぶつぶつと呟く。

「……土人形とはいえ……花京院くんにあんな……」

そりゃあ、もう二度とそんなこと考えつきもしないように、お仕置きですよ……

あたりまえじゃあないですか……ふふ……ふふふふ……」

「お、おまえも……あいつのためってなったら、けっこう性格変わっちゃうのね……」
「……恋のちから……やはり恐ろしい……」

「ヒイイイイ!! ゆるしてくださいああイイイイーツ!!」

そうして、姿を現した必死に命乞いをする敵に対し、この男が言い放つ。

『4つ目の願い』それは……おまえの願いはまったくきかないこと……

『魔術師の赤』はゆるさん……だめだね」

瞬間、そこには、黒焦げの男が出来上がっていた。

「チャンチャン! とくらあ!!」

*

*

*

「アヴドウル……」

「ふっ。……幽霊ではないぞ。ちゃんと足もある。ほら」

「ふっ、……わかつてるよ。バーロー」

「がっちり、握手を交わす二人。」

それを見守る私。安堵と感激で眼頭が熱くなる。

（……………よかった）

「……………おかえりなさい！ 師匠……………!!」

「おっと、そうだ！」

じゃあ、オレ、ひとつ走り先に帰って、みんなに知らせてくるわ！

ベリーグッドなニュースをなっ!!」

そして、うがははいか、駆けだしていく。

「あつ！ ちよつと！ ポルナレフさん！」

……………しまった！ 言いそびれちゃった……………」

「まったく、しょうがないやつだ……………」

*

*

*

「ポルナレフ！ 心配したぞツ！」

「どうした、そのキズは？」

「敵に襲われたのか？」

僕と承太郎は大量の魚（さすがにブリはいない。というか結局ちつとも釣れなかった

ので、直獲った。そのすがたは鮭を狩る冬眠明けのクマの如し……さすがスタープラチナ。そこにしびれ……以下略）を抱え、小屋に帰ってきた。しかし、明かりは灯つておらず、中は無人。首を傾げていると、これまたちょうどタイミングよく用事を終え、戻ってきたジョースターさんとともに、さすがに遅い。なにかあつたのではないか……と、嫌な予感に圧され、残る三人を探しに行こうと外に飛び出たところだった。

そこに、肩や腕から血を流しつつも、嬉々として駆け寄ってくるポルナレフの姿が見えたというわけである。

その様子に驚き、口々に疑問をぶつける僕達にむけ、興奮気味にいう。

「ああ。『審判』の暗示のスタンド使い……。」

なかなか手ごわかったが、ばっちりやつつけてやったぜ！ オレと保乃と……

そう！ そんなことより！ 聞いてくれよ！ 誰に出会ったと思う!!」

「たまげるなよ、承太郎ッ！」

「？」

「驚いて腰ぬかすんじゃないやあねーぞ、花京院！」

「？」

「だれに出会ったと思う?! ジョースターさん！」

「ほ、ポルナレフさん！ 待って！」

そこへ彼女もやってきた。

ジョースターさんがしれつという。

「うん。アヴドウルじやろ？ 知ってる知ってる」

「え!? ま、埋葬したって……じいさん、あんた……」

「ああ。すまんかったな。ありやあウソだ」

「はああ!? み、みんなしってたの？ 保乃も？」

「はい……」

「ど、どおりで全然驚いてないと……!! か、花京院、おまえも!」

「ああ。というか……」

敵にバレないように、おまえには内緒にしとこうといったのは、この僕だ」

「はあー?!」

「おかげで無事に傷を治すことができたよ」

「ちくしよう! 仲間外れにしがって!」

「まあまあ、この娘の美味いメシでも食って、機嫌なおせ。なッ!」

「ちえー!」

「あ、そうだった! すみません、すぐ作りますね!」

なんやかんやで一件落着。

『おいしいごはん』のちからは本当に偉大であるということか。

そうして、一同ぞろぞろと家の中にむかう。

その途中、僕は彼女に声をかけられた。

「……。あの、花京院くん……」

「なんですか？」

「……ごめんね」

「は？ なにが？」

「う、ううん。ちよつと、謝りたくなっただけ」

「なんですか、それは……また、藪から棒に。へんなひとだなあ」

「……そ、そうだよね。……はあ……」

そして、気づく。

「……ん？ よく見たら……、」

保乃宮さん、あなた……なんでそんなに土まみれなんですか？」

「はっ……！」

「まるで、犬かなにかにじゃれつかれたみたいですけど……」

「え、ええと、その……あの、これは……」

あわあわと口ごもる彼女の代わりに、この男がいう。

「あー、あぶなかつたんだよなあ！ おまえ！

たべられちやいそうだったもんなあ。

かっこいい『狼さん』に！」

「ほ、ポルナレフさんッ!？」

「まあ、うれしそーだったけどな。おまえ。へへ」

「ちよー！ そ、そんなこと……な……ッ！」

なぜだか真つ赤なかおで誤魔化そうと必死な彼女に僕も溜息まじりにいう。

「……はあ？ もう、動物好きなのはよく知っているけど……

ほどほどにしといてくださいよ。……怪我は？」

「な、ない……です……」

「ほんとうですか？」

「ほ、ほんとだつて！」

「まったく……、やっぱり目が離せないんだから……」

「うぐう……」

「けつ、……かなえてもらおう必要なんで、ねえんじやねーか。

……あほらし。なあ、アヴドウル」

「ふっ、まったくだな……」

「は？ どういう意味だ、ポルナレフ？」

「い、いいの！ 気にしないでッ!!」

「……くそお、……オレも赤い糸の女の子に早く逢いてえよおー！」

Good night, my dear

『審判』のスタンド使いを無事撃退。

皆で夕飯をいただいた後、片付けをしていた私と律儀にその手伝いを申し出てくれた花京院くんは、ふたりダイニングに残っていた。

「すぐに終わるからだいじょうぶだよ」「いえ、作ってもらっておいてそういうわけには……などといったもの『譲らぬ譲り合い』をしているうちにあれよあれよと作業は終わり、さて、各自部屋に戻ろうか、というところでかけられる「ふたりとも、ちよつといいか？」という声。振り返るとそこには師匠がいた。

「はい。かまいませんが、なんででしょうか、アヴドウルさん？」という彼のもつともな問いに対する返事に代わり、まあ見ておくとばかりに師匠が壁のボタンを操作すると、機械的な音を響かせ本棚がスライドし、壁かと思われていたその場所にぽっかりと人ひとりが通れるほどの空洞が出現した。

おもわず駆け寄りおっかなびっくりふたりで顔を覗かせると、目に入るの是一片の黒。

息を呑むと同時に肺に入ってくる空気。埃っぽいかという予想に反し、思いのほか澄

んでいたそれを意外に感じているとパツと明かりが灯り、視界が開ける。どうやらこれも師匠の仕業らしい。ついておいで、と勝手知つたる調子で現れた階段を下りていくそのひとは、目を丸くしつつ後に続く私達に説明してくれた。

この小屋は一見すると何の変哲もない島の一般家屋だが、実は財団が建造したいわゆる『セーフハウス』というものらしく、不測の事態に対しての備えは万全で、軽く半年は引きこもり可能な非常食、飲料は勿論のこと、小型ミサイル程度なら防衛可能なシエルター、世界各国の情報をチェック可能なコンピュータルーム、最新式マシン搭載トレーニングルーム……etc、地下の広大な敷地を利用して様々な施設が完備されているそうだ。ちなみに暇つぶしのための娯楽用具も一通り揃っている、こつそりとバカンスを島で楽しむ財団の重鎮の方もおられるとか……

そんな島の秘密に驚いているうちに目的地に到着したようだ。ここだ、と案内された部屋の扉にかかる札には『やどり木』の意を示す英字が筆記体で滑らかに刻まれていた。師匠がそれを押し開けると、まず、カランカランというベルを皮切りに、ゆつたりと流れてくる低音の効いたジャズミュージックに迎えられる。

湧き上がってくる好奇心とともに一歩足を踏み入れると、そこは別空間だった。

部屋の隅に所々置かれている花を模した間接照明から漏れる薄明りの中、道しるべのように床に延びる真っ赤なベルベットの絨毯をふわふわと歩いていく。

たどり着いたカウンター。師匠に促されるまま丸い革張りの椅子に花京院くんとならんで腰かける。なんだか二重に落ち着かない気持ちできよろきよると周囲を見回すと、ウイスキー、ブランデー、ワイン、リキュール……古今東西、様々な種類の酒瓶が壁の棚を鮮やかに飾っているのが目に入った。上流階級の方々がお忍びでやってくる隠れ家的なバー……まさにそんなところだろうか。そんな場所を貸し切り状態である。予想だにしなかった状況とそこはかたなく漂う大人の雰囲気には圧倒されていると、いつものまに移動したのかテーブルの向こう、私たちの対面に立った師匠がかしこまった様子で切り出す。

「あらためて、ふたりはわたしの命の恩人、というやつだ。ありがとう」

「いえ、そんな……」

「そうですよ。水臭い……」

声を揃える私たちに目を細めつつ、少し照れくさそうにぼりぼりと頬を掻きながら師匠はいう。

「何か礼を、と思つてね。」

……ということで、僭越ながらわたしがカクテルを作つてあげよう」

「え!? アヴドウルさん、紅茶だけじゃなく、カクテルも作れるんですか!?!」

「師匠、すごいです!!」

師匠の淹れた紅茶……あのチャイの絶品さを思い出す。

インドへの道中ふたりよくねだって作ってもらっていた、あの香りを。あの味を。

「久しぶりの再会だ。あれから今までであったことを、教えてほしい。

今夜は飲みながら語り合おうではないか！」

「あの、我々、未成年……」

「かたいこというなよ。いいじゃないか。たまには」

「またも揃って常識を口にする私たちをあつさりと流す。

しかし、そんな師匠に、苦々しい面持ちで花京院くんはいった。

「いえ、それも勿論なのですが……加えて、僕は残念ながら酒があまり強くないようです。て。

先日とんでもないことをしでかしたので、自粛しておきます」

それを受け、おもわず驚きと否定の言葉を返す。

「え!? あれはものすごく強いお酒をたくさん飲まされちゃったからでしょう？」

「そんなに気にしなくても……」

（まだ気にしていたのか……そりゃあ、するか……）

ペルシャ湾での惨劇……主たる被害者である私（彼および元凶たちに対しては頭部殴打の加害者でもある気はするが、そこは正当防衛およびこちらの精神的損害に対する妥

当な仕置であつたと声高に主張したい)がいうのだから、もう水に流してもいいのではないかとも思うのだが……やはり気真面目なこのひととしてはそうもいかないらしい。

「ダメです。同じ失態を繰り返すわけにはいかない……」

もう飲まない！　そう決めたんです！　」

かぶりをふる。決心は固いようだ。それを見て、諦めたように首をすくめて師匠がいう。

「そうか……ではノンアルコール・カクテルを作つてあげよう。保乃は？」

訊ねられ、考える間もなく答える。

「あ、じゃあ私もノンアルコールでお願いします」

「……だろうな。わかつた。ちよつと待つていてくれ」

そういつて笑うと、師匠は瓶を何本か選び、慣れた様子で氷や道具を用意しはじめた。その鮮やかな手つきを敬服の念を込め眺めていると、花京院くんがこんなことをいう。

「あなたは別に、僕に付き合わなくてもいいんですよ？」

それに、応える。……少し視線を逸らしながら。

「ん？　……だつて、明日から潜水艦でしょう？」

二日酔いで船酔いとかいやだもん」

すると、なぜかくつくつと肩を震わせる彼。

「……まったく……、わかりやすい……」

「な、なに笑って……もう！ それに師匠の作るものなら、絶対なんでも美味しいもん！」

「ふっ、それはたしかにそうですね」

「待たせたね」

「おおっ！」

ほどなくしてコルク製のコースター上にスツと差し出されたそれを感嘆の声とともに迎える。

「ふたりのスタンドをイメージしたものにしてみたよ」

隣り合わせで並ぶふたつのカクテルグラスには、それぞれ私たちの相棒そのままの色。各々透明感のあるエメラルドグリーンおよび薄桃色の液体で満たされていた。

「すごい！！ ハイエロフアントとセシリアだー！！ 綺麗ー！」

零してしまわぬよう慎重に。グラスをそつと持ち上げ柔らかな光を透かしてみると、ゆらゆらと浮かぶ氷が得も言われぬ美しい煌めきを創りだし、一層それらしさを際立たせた。

「ふふ、気に入ってもらえて光栄だ」

満足そうな師匠に彼もまた違った方向から感銘の意を示す。

「本当に素晴らしいな！　こんなの自分で作れるんですね！　作り方をぜひ教えていただきたい！」

「いいぞ。慣れたらこうしてオリジナルを作ったり、なかなか楽しいよ。

いろいろなリキュールが部屋にあふれて整理が大変だけだな。

さ、飲んでみてくれ」

「いただきます。……！」

ひと口含んだ瞬間、鼻孔を優しくくすぐるふんわりとした桃のかおり。それに続いて微炭酸の絶妙な刺激とともに爽やかな甘さが口腔内いっぱい広がる。

「美味しいー！」

「うん、美味しい！」

「それはよかった。おかわりすぐできるから遠慮なく言いなさい」

ここにこのこという。そんなこと言われたら、本当に何杯でもお願いしてしまいたい……なんて、遠慮も吹き飛ばすほどの美味しさに目を輝かせていると、師匠は労うように私たちに問うた。

「ここに辿り着くまでも、大変だったのだろうか？　何人くらいの刺客と戦ったんだ？」

(ええと……)

その解答を私が頭の中で数えているうちに、先に花京院くんが答えてくれる。

「吊られた男と皇帝のあとだから、6人ですね。ああ、いつものタロット大アルカナの暗示でいえば、ですが。あとは小者が間にちらほらと。です」

(……ん?)

気づいてしまい、つい口を挟んでしまう。

「あれ? 5人じゃないの? ……女帝に、運命の車輪、正義、……」

「恋人、太陽、と、デ……」

……そうですね。間違えました。5人ですね」

あっさりとは訂正する彼。その横顔のすこし伏せられた瞼のながい睫毛をみつつ、おも
う。

(めずらしいな。花京院くんがそういうの間違うとか……)

その違和感には私にひとつの考えをもたらしした。

(……もしかして、『あれ』は……やっぱり、夢じゃなくて……)

い、いやいやいや! そんな、はずは……だって、ねえ……現実だとしたら……

あー、もう! お、おもいだしちゃうダメだって!!)

『例のあれ』が頭にうかびそうになるのをおさえるため、テーブルに頭突きをする。

痛い。が、どうしようもなく火照ってしまう頬とゆるんでしまう口元を戒めるにはこれくらいがちょうどいい。

(……あ、そうか。あれが夢かどうかはともかくとして、このひとがああ赤ちゃんスタンダード使いをなんとかしたのは確かなんだから……やっぱりほんとは6人でいいのか。なんで隠すんだろ?)

まあ、らしい、といえぱそうだけど。などと、じんじんと鈍い痛みを発する額を撫でつつ考える私。隣と対面から一斉にこちらに向けられている訝し気な視線に遅ればせながら気づく。

「な、なにを急に……?」

「ど、どうした?」

(はっ! い、いけない、不審すぎる……)

当然のリアクションであろう。傍から見たらどう考えても奇行にしか見えない。

窮地を脱するため、そして、本音でもある。せつかくなので、師匠の御言葉に甘えてしまうことにしよう。

「い、いえ! あの、美味しすぎて! おかわりいただいてもいいですか?」

「もちろん。花京院もかい?」

「あ、はい。お願いします」

「……………美味しいです。うん、とつても！」
(……………あれ?)

一気に煽ったグラスの中身。

氷で零下近くまで冷やされているはずのそれが喉を通る……………その感覚が熱を帯びているのはきつとそのせいだ。

そんなことを呑気にも考えていた。

*

*

*

ここ……………『バーテンダーアヴドウルさんの秘密のお店』に僕と彼女が招かれてから、これこれ三時間経つただろうか。

短いようで、長い、2週間ぶりの再会。

道中の出来事やスタンドの話、別行動後の潜水艦を手に入れるまでのアヴドウルさんの苦勞話……………と、やはり話題は尽きることなく、僕達は時間を忘れ語りあった。

彼の作る特製カクテルもその美味しさと飲みやすさでどんどん進み、卓上をかなりの数のグラスが埋め尽くしている。ずらりと居並ぶそれらに目を遣り、アヴドウルさんがほつりと零す。

「やあ、すつかり話し込んでしまったな。

……しかし、かなり飲んだな、君ら。

やっぱり、いけるほうじゃないか、十分……。にやり……」

「? どういうことですか?」

「……ふ、ふふふ! あははは! なんか、たつのしいー!!」

すると、暫く静かににこにこ話を聞いていた……はずの彼女が突然バツと立ち上がり、からからと笑い声をあげはじめた。

「ち、ちよつと、どうしたんですか!? 途中から、なんかおとなしいなと思っていたら

……!」

「んー? ……あれえ、立つとくるくるするー」。

あは、地球ってほんとに回ってるんだねー! うふふふ……!」

明らかに異常だ。というか、これは……

「あ、アヴドウルさんツ!? まさかツ!!」

「うん。入っているよ。アルコール。けっこう強いのがな。

甘くて飲みやすいけど酔いやすい……よくある女の子は気をつけなきゃいかんやつだ。

正気に戻ったら、よく言っておかねばいかな」

したり顔で頷きながらそんなことをいう。どうやら確信犯らしい。

「ふにや……ねむい。……すや……」

そして、彼女はそういうやいなや、今度はテーブルに突っ伏して眠ってしまった。

「な、なにをしれつと言っているんですか！ なぜそんなことを?!」

「……ちなみに、花京院。勿論君のにも入っている。」

ベースの酒は同じだから、同等の強さ……むしろ割る酒の都合上、君のものの方が若干強いくらいだ」

「え!? ぼ、僕はまったく問題なく正気ですが。」

言われてみれば確かにちよつと体が熱いくらいで……」

「ま、要するに君の方が断然酒に強いわけだ。」

……そこでつぶれている、君の好きな娘よりもな。よかつたな」

「うっ!？」

アヴドウルさんの意図がさっぱりわからない。そのうえ、実は凶星……男のささやかな矜持……をもらいつかれ、余計に混乱してきた。

「そもそも、もっと早くこうなるかと思つたのに。この娘も常人より強い方みたいだな。」

とつておきがほら、このとおりだ……」

苦笑いを浮かべつつ、蓋を開け放つたままのボトルを逆さにする。

「すなわち……」

そして、一滴も落ちてこない瓶をテーブルの上に置きつつ、バーンと高らかに言い放つ。

「……安心しろ、君は酒に弱いわけでは決してないッ!!」

「!?!」

「……君に酒を嫌いになってほしくなかったんだよ。」

酒はいいよ。もちろん、溺れるのはいかんが。

人を素直にさせる……心をひらく。

最初は失敗しながらでも、自らの限界を知って上手く楽しめばいいんだ。

なにをしたかは知らんが……一度やらかしたくらいで拒絶するなんて、もったいない

「よ」

(……アヴドウルさん、それを僕に伝えるために……)

若干やり過ぎなうえ、無関係な彼女を巻き込む必要が果たしてあったのか、とも思うが。

「それならそうと、普通に口で言うてくださいいよ……」

「言ったって君は聞かないだろう?」

「荒療治だよ、荒療治!! がはははは!!」

豪快に笑うアヴドウルさん。先程ポルナレフがため息混じりに言っていたことを思い出す。

「……ほんとに、性格変わりましたね。」

「……。そうかもな。」

人生、いつどうなるかわからないものだど、あらためて思い知ったからかな。

だれしも悔いのないよう生きねばいかんと、な……」

「アヴドウルさん……」

達観した物言いの中、その表情には一抹の寂しさが浮かぶ。

きつと真の意味では彼以外が知る由はないそのおもいの果てを慮っていると、そつとその空気を逃がすように僕に促す。

「さ、お開きにするでしょう。この娘を部屋まで連れて行ってやってくれ」

「……は、い」

そして一転、立ち上がる僕にとんでもないことをいう。

「……襲つてもいいぞ。そうなったのはその娘の自己責任だからな。」

なにをされても文句は言えない……ふふふ」

「そ、そんな真似しませんッ!! ま、まったく! なんて大人だッ……!」

冗談とわかっているものの、発されたそのワードのせいでドツと吹き出してきた汗や

らなんやらを誤魔化すべく、なぜだか非常に楽しそうな悪い大人に一喝し、彼女を揺り起こす。

「や、保乃宮さん!! ほら、起きて! 部屋に帰りますよ!!」

「むにや……ふあい……」

「それでは、おやすみなさい。ごちそうさまでした。

そして、……ありがとうございます、アヴドウルさん。」

「ああ。おやすみ」

「おやすみなしやい……」

「あ、こ、こら! ここです寝ないでってば!! で、では……」

「ああ、よろしくな!」

すきあらば夢の世界へと逃走を試みる彼女の意識をどうにか繋ぎ止め、連れていく。

部屋を出るとき、なにかアヴドウルさんが呟いたような気がするが、その声は僕には届かなかった。

「……ふたりの関係にも荒療治が必要ということ……これが、君たちへの『礼』さ……」

ながいながい階段を上り地下を抜け、小屋から出る。

吹き抜けていく、昼のものと一転して、涼やかさをまとった風が火照った身体に心地よい。日本の夏を連想させる、鈴のような虫の音や、木々の枝で身を寄せ合う鳥たちの静かな鳴き声が耳を賑わせる。

しかし、そんな夜の風情を楽しんでいる余裕は今の僕には到底なかった。

「もう……、ちよつと、しつかりしてくださいよ……」

ゆらゆら、ふらふら、覚束ない……まさにいわゆる千鳥足。そのくせやたらテンションだけは高い彼女にハラハラしつづつ、島に点在する（らしい）、集落を装った財団管理下の客室であるバンガローのうち、彼女にあてがわれたそれへと向かう。

「えー？ わたし、しつかりしてるよお？ うふふ！」

「どこがだよ……」

酔いが顔に出ないタイプ、というやつなのだろうか。顔色はちつとも変わっていないので油断した。しかし、よくよくみるとその眼はとろりと所在ない。ちなみに言動はもはや通常と比較するまでもない。

「でもなんか、ふわふわしてて、いいきもちー！ なんだろ……？」

ハッ！ 重力を操るスタンド使いがもしや近くに!? まさかあのひとが!?

「いないですって……」

（今一瞬、戦闘モードに……。だれだよ、あのひとって……）

しかし真剣な表情は3秒ともたず、再び、へらりとわらう。

「あは！ それでね、なんかねー！ すっごく、たーのしいー!!」

「はいはい。それはもうききました」

「わあ。おほしさまも、きらきら、きーれーい……」

伸びをするように大きく手を広げ、空を仰ぐ。

(……………うっ……………)

露わになつた白い首元から鎖骨への流れるようなライン。

反らされ、上向きにその綺麗なかたちが強調されたふたつの膨らみ。

目に飛び込んで来ようとする刺激的なそれらから、急ぎ視線を逸らす。

「はっ、はいはい！ そうですね!!」

その動揺がもとで、気づくのが遅れた。

「……………あれえ……………？ さかさ……………」

「……………つて、あぶなっ!」

段差に足をとられたのか、なにかにすべつたのか定かではないが、急激にぐらりとかたむく彼女の身体。天を見上げてばかりいたらそのうち足元をすくわれる、とはまさにこれか……………とか、そんな訓戒めいたことを悠長に考えている余裕も当然あるはずもなく、咄嗟に支えようと彼女と地面の間に割って入る。

「うわっ！」

「きゃ……」

が、勢いは殺せず、ふたりして後ろに倒れこんでしまう。

「いつて……」

「……えへ、ごめんね」

「ああもう、だいじょうぶですか？」

「うん……ありがとう」

「はあ……」

したたかに打ち付けた臀部辺りが痛む。が、僕の体がクッションになり、彼女は無傷のようだ。

ならばよい。

(あ……)

しかし、図らずも、座ったまま背中から抱きしめてしまう形になる。

……役得だ。とか、思っていない。

……なんてのは、嘘だ。

ふわりと、花のかおりがした。

やさしい、感触。

「……」

こみあげてくるなにかに押され、気づかれない程度に、ほんの少しだけ、回した腕に力をこめる。

「……。ねえ、かきよういんくん……」

「な、なんですか……?」

それに浸っている間もなく、小首をかしげつつ、こちらを向く腕の中の彼女。

そのしぐさに、そして、いつもより舌つたらずで甘ったるく僕を呼ぶその声に、不覚にも鼓動はますます早まってしまう。

しかも本気で僕の心臓を壊しかかかってきたのか……さらにとんでもないことを言い出した。

「……まえみために……して?」

「は?! な、な、なにをツ……?!」

(なにをだ!?! ま、まさか、あ、あれか!?! い、いや、前みたいにつてことはあつちか!?!)

自らの発言が『星』の暗示のあのスタンド並みの拳の弾幕を僕の胸に叩きつけている

なんて、これっぽっちも思っていないようだ。彼女はあっさりと続けた。
「……もう、わたしあるけないよ。」

まえにだっこしてくれたじゃない、おひめさまみたいに。

あれ、もういつかい、してほしいなあ……」

「な、なんだ、それが……。……はあ。し、しかたないな……。！」

「わあい！ ふふふ、やったあ」

がっかりなんてしていない。……やっぱり嘘だけど。

リクエストにお応えし『お姫さま』を抱えあげる。

「まったく……。……なんて世話の焼ける……」

(なんかいつもとちがって……。……やたらと甘えん坊だし……)

「……ほ、ほんとうに、あとで重々気を付けるように言っておかねば……。！」

普段はまわりに気を使い過ぎて、遠慮がちで、我慢強くて、頑張り屋で……。

なんということだ。このギャップ。やっぱり反則だ。

……もう勘弁してほしい。

そこでふと浮かびそうになる。

(……あれ？ 前にこうしたのって……。……たしか……)

が、へべれけ酩酊状態なお姫様を抱えたこんな状態で思考がまとまるわけもなく、

結局霧散してしまう。

「……………すや」

「つて、また！ ねないで！ ちよつと、着いたよ！」

声をかけると寝ぼけまなこをこすりながらこんなことをいう。

「んー？ あれえ？ もうついちやつたの？ ざーんねん！」

「ぎ、残念つてなんだよ！ ……こ、この酔っ払い……………」

深い意味などないのだ。今このひとはしょうきではない。そうだ、考えるな……………そんなふうには必死に己にいい聞かせるとともに、振り払うように彼女にいう。

「ええと、か、鍵！ 鍵出して」

「かぎ？ ……んーと……………」

「……………あーつた。はい」

鍵を受け取り、ドアノブの穴に差し込み、回す。ちなみに両手が塞がっていたため相棒に頼んだ。浮かんだ「僕があけるんかい」というツツコミは無駄打ちに終わることが明らかだったので、呑み込んだ。「すーい！ ハイエロフアントじようずーつ！ あれ？ なら、かぎ、いらなかつたんじゃあ？」……………とかいう腹立たしいことに意外と的を射た彼女のツツコミは無論聞かないふりをした。

「よいしょつと……はい、降りてください」

紳士がみだりに女性の部屋に侵入するわけにはいくまい。木製の扉を開け、框のところで立ち止まり、降りるよう促す。しかし、彼女に動く気配はなく、代わりに寄せられる不満げなこえ。

「えー、……もうすこし。ベッドまで……」

「はあ?! もう……わ、わかつたよ……」

何故かそれははねつけることができず、躊躇いながらも室内へと足を踏み入れる。

自分にあてがわれた部屋と構造も調度品も同じ様なものはずなのに、未開の土地に足を踏み入れるような感覚に陥る。

長いような短いような……そんな旅路のあと、たどり着いたベッドの上におろして座らせる。

「……」

「……」

(……ハッ……! い、いかん……)

「……じゃあ、僕はこれで……」

どう考えてもこれ以上ここにいとまずい。

さっさと退散すべく背を向ける。

しかし、裾を引かれる感覚。後ろ髪が……とかそういうのではなく、実際の。

「……いつちやうの……？」

「うっ……！」

驚き振り向くと、そこには切なげに僕をみあげる潤んだ瞳。

「……やだ。もうすこしだけ……」

おねがい、……そばに、いて……ほしいの……」

「は!? ちよ、ちよっ、な、なにを……」

そして、僕の背中にかおをうずめ、彼女はさらにとんでもないことを言い出した。

「だってね、わたしね、かきよういんくんのこと……」

「ッ!?」

「……」

「……？」

どきまぎしながら待つも、続く言葉がいつこうにやってこない。おそるおそる様子を伺う。

「……すー……」

「ね、寝てるし……」。

……お、思わせ振りのことだけ言い残して……。なんてお姫様だよ……。」「いいかげん可愛さがあり余り、若干憎たらしくなってきた。腹いせに、すこしだけおざなりに、ベッドに転がす。

「はあ……くそう、なんでこんな……」

心拍数も血圧も呼吸数もさつきから上がったり下がったり、急変動が激しすぎて、いかげんにしろと心臓、肺、血管、その他諸臓器から苦情が来そうだ。それを一番訴えたいのはこつちの方なのに。

何度人の心にオラオララツシュ（僕の方に効果を発する）を叩き込めば気が済むのか。そんな耐久力僕にはない。もうすこし己の破壊力が特Aクラス（僕に対してのみ）であることを自覚していただきたいものだ……。などと、溜息まじりに悪態をつきつつも、元凶のそのあどけない表情をみていると、つい、どうでもよくなってきた。元

（まあ、でも、たまには、こんなあなたも……。悪くない……。かな）
はじめてみた。

そして、ぼくだけしかみたことのない、そんな彼女。

—わたしね、かきよういんくんのこと……—

先程の言葉が頭をリフレインする。

（人の心を素直に……。か。酔っぱらいの戯れ言なのか……。それとも……）

ゆつくりとかぶりをふる。

(このひとのことだからな……。あまり期待はしないでおう。うん)

「すー、すー」

きもちよさそうに……。しあわせそうに眠る、彼女。

「まったく、人の気も知らないで……。無邪気な顔しちやつてさ……」

そつと手を伸ばし、さらさらとした髪を指で梳く。

「……。ほんとに……。襲つて、やろうかな……」

てのひらで頬をつつみ、親指の腹で唇にふれる。

「ん……」

「なんてね！」

そのまま、鼻をおもいきりつまんでやる。

「むぎゅ……」

「……現実ではちやんと、『本人の同意を得てから』って決めてるからね。

つたく……。覚悟しとけよ！」

いいつつ勢いよくバサツと毛布をかけてやる。

……今にも暴れ出しそうな、なにか、を塞ぐために。

「すや……」

「……おやすみ」

*

*

*

目を覚ますと、ベッドの上だった。頭が重い。

(あれ……？ 私……昨日花京院くんと師匠と一緒に話していて……そのあと？)

朧気にしか記憶がない。なんだかやたらと楽しくてふわふわしていて、しあわせ……だったような……。

(も、もしかして……！)

まだ少しぼんやりしている頭をかかえつつ、飛び起きダイニングスペースに向かうと、優雅にコーヒーカーップを傾けている彼がいた。

「お、おはよう！ 花京院くん！」

「おはようございます。」

今日もいい天気ですね。実に航海日和だ」

まあ一度深海に潜ってしまえばあまり天候は関係ないのかもしれませんが……なん

て、普段とちつとも変わらないその様子にすこし安堵、かつ若干拍子抜けをしつつ、相槌をうちながらも、おそるおそる訊ねる。

「そ、そうだね。」

「えっと、そ、それで、あの、昨日のことなんだけど……、あれ、お酒……だったの？」

「そうらしいですよ。飲みやすいけど、酔いやすい……よくあるやつ、だそうです」
彼のあつさりとした答えに、自分の朝の状態を得心する。

「そ、そうなんだ。どおりで……」

「ごめんなさい。あの、お、お手数を、おかけしたんですよ……？」

そして、先に謝っておくことにする。昨夜自分があのまま酔い潰れてしまったのであれば、その後の展開など予想に易いものだ。おそらく……というか確実に、このひとが後始末をしてくれたに違いない。夢現で臍気な自分の記憶とも合致するわけで。

すると、私の謝罪を受け、ぴくりと眉根を寄せる彼。

「おや、覚えているんですか？」

「ほとんど覚えてない……。ど、どんな感じだったの？ 私……」

「ふーん……」

私の質問に、一瞬宙を仰ぐ彼。

「そうですね……いつもとちがって、なかなか新鮮でしたね」
「!? ど、どういうこと!?」

そのあと、非常に意味深なことを言い、少し意地悪く、にやりと微笑む。

「まあ、これでおあいこ、ということ。……ただーッ！」

「な、なんででしょう……？」

高らかに言い放つ彼に『お説教モード』に入る予感を瞬時に察し、それ以上の追及を諦め佇まいを直す。

「以後、ああいう甘いお酒には気をつけて！」

昨日はアヴドウルさんの策略だったから仕方ないけど……

悪い人もこの世にはたくさんいるんですからね！」

「は、はい。ほんとだね……。気をつけます……。」

あ、そっか、師匠はそれを教えてくれたんだね！」

ぐうの音も出ぬ正論に深く反省する。加えて、ようやくすべて納得がいった。さすがは師匠。身をもって己の弱さを知れ。そういうことか。

しかし、ひとり頷いている私を横目に、彼は眉間に手を当て、ため息混じりにこういった。

「……はあ、まったく、ほんとうに、素直すぎるんだから……。」

余計心配になったんですけど」

「だ、だいじょうぶだよ!」

必死で弁解する私にジト目をむけ、あきれたような表情をうかべたあと、ふつと笑い、彼は私の耳元で、そつと、こうさきさきやいた。

「……いいかい?」

「……あんなふうになっていいのは……僕といるときだけ、だよ」

「へっ!?! あ! え?! は、はいっ……!」

同時に感じる、あたまにぽふつと乗せられる、彼のてのひらの感触。

「頼みますよ。じゃ、またあとで」

それだけいうと、彼は、軽やかに、爽やかに、部屋へ戻って行ってしまったのだった。

(……。全つ然、航海日和じゃあないんだけど……)

……私の心に激しい波風を立てておきながら。

シラセ

「うおおおー！」

「すっごーい！！」

潜水艦だ。本物なんて初めて見る。師匠がアラブのお金持ちを装って調達してきてくれたものがこれだ。それにも多種多様、散々な目に遭ったらしいが……

「これで紅海を渡るんですね！」

「追手から姿を消せるかもしれないが」

「ずいぶんと金のかかる旅行だな……この旅はッ！」

皆で感想を口にしつつ、艦内に乗り込む。

本当に、ポンとこんなものを買ってしまえるあたり、不動産王のジョースターさんとスピードワゴン財団、さすが世界有数の企業はスケールが違うようだ。

「アヴドウル、操縦できるのか？」

承太郎君がたずねる。

「わしもできるよ。わしも」

そこへ、ジョースターさんが名乗りをあげる。

「……アヴドウル、よろしく」

「たのむ、アヴドウル」

「アヴドウルさん、お願いします」

「師匠、がんばってください！」

「……おい、おまえら……」

満場一致。今回の操縦士は師匠にお願いすることとなった。

艦はゆっくりと海底にその身をひそめ、進んでいく。

艦内は地上に比べると若干蒸し暑いくらいで、想像していたよりは快適である。平衡感覚にあまり自信がない私は、気圧の変化で耳がキーンと詰まってしまったかのようになるあの特有の感覚や乗り物酔い……それを覚悟していたのだが、流石は最新鋭の潜水艦。内部環境は一定に保たれているようで、不安は杞憂に終わった。この壁を一枚隔てると海中だなんて、とうてい思えない。

しかし、そんなことよりも何よりも、気がかりは勿論敵方の放った追手であろう。

が、師匠の苦勞の甲斐あって、この潜水艦の存在は敵に知られていないのか、航行は順調であった。

……今のところ。

この旅の『乗り物運』のなさを考えると、つついネガティブになってしまう。
「どうしたんですか？ 神妙なかおして」

そんな私に気づき、花京院くんが声をかけてくれる。

「ああ、うん。順調だなと。……めずらしく」

「ええ、めずらしく、ね……。何事もないのも、逆に落ち着かないですね」

どうやら似たような心境らしい。ふたりで苦笑いを浮かべる。

「まあ、あと少しの辛抱ですよ」

腕時計に目をやる彼。つられて、自分も見る。

「上陸予定時刻まで、あと一時間くらいですから」

「ほんとだ」

その短針と長針は合わせて『L』の字を形作っていた。

「あ、それにちようどお茶の時間だね。珈琲でも淹れようか？」

「ああ、いいですね」

この潜水艦、備品も大抵のものは揃っていると聞いた。

ジョースターさんに詳細を訊ねると、どつかその辺にあるじやろ、とのこと。

花京院くんと艦内を搜索して、コーヒーメーカー、ミルと豆を発見した。ついでにお

やつのクッキーも。

「あ、これ豆から挽くやつだよね？ やり方知ってる？」

「フツ、もちろん。任せてください」

そうなのだ。この彼、実は本来、珈琲にはなかなかのこだわりがあるひとなのだった。ということで、そちらはおまかせすることにする。

「あとは……カップはどこかな？」

引き出しを探すとすぐ目的のものは見つかった。

(1、2、3、4、5、6……あ、ちょうど6つある)

「おい、早くコーヒー入れてくれ！ のみてーよおー」

「自分で入れろ！ 自分で！」

(……ぷっ！)

ポルナレフさんの催促を一蹴しつつも、花京院くんが機械にセッティングした水の量はちゃんと6人分。

そんな様子におもわず吹き出しそうになる。

(なんだかんだで、ポルナレフさんともいいコンビだよな)

そのとき、望遠レンズで海上の様子をうかがっていた師匠が叫ぶ。

「ん！ ……おい！ アフリカ大陸の海岸がみえたぞ！ 到着するぞッ！」

どこから取り出したか、地図を広げる師匠。それを皆でのぞきこむ。

「このサンゴ礁のそばに自然の浸食でできた海底トンネルがあつて内陸200mのところの出口がある。そこから上陸しよう」

皆で頷き合う。

「いよいよエジプトだな」

「ああ、いよいよだな」

「エジプトか……」

「……」

「……はい……」

「ああ。いよいよだ」

珈琲とクッキーをならべ、テーブルを囲む。すると承太郎君からもつともな指摘を受ける。

「おい、なぜカップを7つ出す？ 6人だぞ」

「あれ？ ごめん……うっかりしてた。6コのつもりだったんだけど……」

おかしい……たしかに6コ数えたはずなのに。嫌な予感がした。

そのときだった。

ジョースターさんのカップから急に腕が生え、その鋭い爪が手首を切断した。

「なっ、なにイイツ！」

「ぐっ！」

「じ……じじいッ！」

「ジョースターさん!!」

「うぐ……！」

「ドギヤアース！」

「バカナッ！」

「スタンドだッ！ いつものまにか艦の中にスタンドがいるぞッ!!」

大きさは大人の掌程度で、アステカの部族の仮面のようなたてがみに覆われた大きな顔に、バランスの不釣り合いな大きめの腕がついている……そんな容貌のスタンドだった。

「オラアッ！」

「ブギヤアーツ!!」

承太郎君のスタープラチナが先制の一撃を入れる。が、しかし、それは空を切り……

「き、消えたッ！」

「いやちがうッ！ 化けたのだッ！ この計器のひとつに化けたのだッ！」

「コーヒーカップに化けたのおなじようにッ！」

師匠が指した操縦席付近の壁には艦の様子を表すメーターがずらりと並んでいる。速度、水圧、エンジンの回転数……どれがどれを示しているのかわかなくて私には到底わからないほど、たくさんの数のものが。

「この中の、ひとつにツ!!」

敵スタンドは計器と完全に同化しているようで、まったく見分けがつかない。

フロントガラスの外を見て、ポルナレフさんが嘆く。

「もうサンゴ礁だ。あと数百mでエジプト上陸だつていうのによッ!」

「ジョースターさん!」

すぐさま花京院くんと、攻撃を受けてしまったジョースターさんにかける。

「……傷はあさいが、気を失っている……。義手でよかつた」

「ほ、ほんとだ。よかつた……」

そうして、艦内は一瞬シン、と不気味に静まり返る。嵐の前の静けさ、とはまさにこのことなのだろうか。その静寂を破るかのように、師匠が教えてくれる。

「……この、スタンド使いの名は、ミドラーという女だ」

「知っているのか?」

「ああ。聞いたことがある。」

能力は金属やガラスなどの鉱物なら何にでも化けられる……

プラスチックやビニールはもちろんだ。

さわつてもたたいても、攻撃してくるまで見分ける方法はないという……

かなり遠隔からでも操れるスタンドだから、本体は海上だろう」

「し、しかし、どこから、この潜水艦にもぐり込んで来たんだ？」

すると、ポルナレフさんの問いに応えるかのごとく、壁に穴があき大量の水が入ってきた。

「な、なるほど、クーユーこと？」

単純ね。穴をあけて、入ってきたのね……」

「浮上システムを壊していやがった。どんどん沈んでいくぞ！」

「いつの間にか酸素もほとんどない。航行不可能だ！」

「つかまれッ！」

同時に、潜水艦はものすごい衝撃と音とともに、海底に激突した。

「ああ……」

「やっぱりクーなるのか」

「オレたちの乗る乗り物ってかならず大破するのね……」

緊急事態を知らせる警報音がけたたましく鳴り響く中、いつものポーズ……帽子に手をかけ溜息をつきながら承太郎君はいう。

「やれやれだぜ……花京院、スタンドのやつ、どの計器に化けたか目撃したか？」
「た、たしか……この計器に化けたように見えたが」

問われた彼がひとつを指さす。

「おれもだ……よし」

承太郎君も頷き、敵が化けたとおぼしき計器の上で拳をかまえる。

(ハッ！)

しかし、そのとき、花京院くんの背後の壁で、何かが動くのがみえた。

師匠が叫ぶ。

「ちがうッ！ 承太郎！ もう移動しているッ！ 花京院のうしろにいるぞッ！」

同時に私もスタンドを放つ。

「セシリア！」

敵のスタンドは花京院くんに飛び掛かりその鋭い爪で首を抉ろうとする。

が、その攻撃はすんでのところでセシリアの障壁にはじかれる。

「あ、あぶない……。ありがとうございます」

「だいじょうぶ!? よ、よかった、間に合って」

やられてばかりはいられないとばかりに、スタープラチナが鋭いパンチを入れる！

「オラア！」

「ムツギイーツ！」

しかし、敵の姿は機械に同化して、再び見えなくなってしまう。

「みんな、ドアの方に寄れ！」

い、いつの間にか機械の表面を化けながら移動しているんだッ！

この部屋にいると全員狙われる！ となりの部屋に行くんだッ！

言いつつ、隣室への扉を開くハンドルを掴む師匠。

「密室にして、閉じ込めるんだ！」

だが、『それ』はハンドル、ではなかった。

現れる。

太い、腕が。

不気味な顔が。

「ば、ばかな！ すでに移動してドアの取っ手に化けてやが……」

「アヴドウルさん！ 手をはなすんだッ！ こいつの爪はジョースターさんの義手をも

切断するッ！」

「しまっ……！ セシリア！」

（いけない！ 間に合わない！）

「ゲッ!? アギヤース！」

が、その瞬間、スタープラチナが敵の腕を掴んでいた。

さすが、『弾丸をつかむほどの正確な動き』は伊達じゃあない。

「やったッ！ 捕まえたぞッ！」

「あ、あぶなかつた……」

歓喜とともに一同胸を撫でおろす。

「スタープラチナより素早く動くわけにはいかなかったようだな。こいつをどうする？」

「承太郎！ 躊躇するんじゃないやあねーッ！ 情無用！ 早く首をひきちぎるんだ！ 早く

！」

「アイアイサー」

ポルナレフさんの言葉を受けて、承太郎君がすぐさま敵を握りつぶす。

しかし……

「！ うぐう!!」

スタープラチナの、そして承太郎君の……握りしめた拳から血がしたたり落ちる。

「けけけ」

「や、ヤロー……カミソリに化けやがった……！」

「きやはははははー！」

「ば、ばかなッ！」

「コイツ……強い！」

「承太郎にいつぱいくわせるなんて……」

「なんて敵だ……」

そんな暗澹たる状況の中、唯一の吉報が訪れる。

「う……」

気絶していたジョースターさんがゆつくりとその目を開いた。

「ジョースターさん！ だいじょうぶですか!？」

「あ、ああ……」

「よかった……」

「ヒヒヒヤホホ……」

「……」

敵スタンドの勝ち誇ったような不気味な笑い声が艦内に響き渡る。

その元凶を睨み付ける承太郎君。

そこに師匠が声をかける。

「かまうな承太郎ッ！ また化けはじめるぞッ！

浸水しているし、とにかくヤツを閉じ込めるんだッ！

闘う作戦はそれからだ！」

「ムツキヤア！」

「……」

それを受け、移動する。扉の向こうへ。

「……てめーは、この空条承太郎がじきじきにブチのめす」

蔵かで静かな怒りを秘めたその言葉を確かに刻み付けながら。

全員が隣室にとびこんだところで、鍵をかける。

「これからどうします!? ヤツか、我々か……閉じ込められたのがどちらかわからんが

……

いずれ遅かれ早かれあの部屋から何かに穴をあけてここまで来るぞツ！」

と、花京院くん。それに対し師匠はいう。

「この機械だらけの密室の中では圧倒的に我々の不利！」

この潜水艦はもうダメだ！ 捨てて脱出するのだ。

とにかくエジプトに上陸するのだ」

せつかく苦勞して買ったというのに……自らその発言をせざるを得ない師匠の気持

ちはいかばかりか。しかし確かに、命には代えられない。

そこにポルナレフさんがもつともな疑問を口にする。

「しかしここは海底40m……そんなに深くはないがどうやって海上へ!?」

「それは……これじゃ!」

ジョースターさんが部屋の隅の倉庫をあける。

備えあれば憂いなし。本当にこの艦には備品も大抵のものは揃っていたことが証明された。

「……今度はスキューバダイビングかよ」

「やれやれ……」

酸素の入ったタンクを背負いながらジョースターさんという。

「義手を切断しているから装備をつけるのがしんどいわい。」

「この中でスキューバダイビングの経験のあるものは?」

「ない」

「ない」

「ありません」

「ありません」

「となりの部屋からヤツが襲ってくる! 早く潜り方を教えて下さいッ!」

「あわてるな、アヴドウル」

師匠を制し、唯一の経験者、ジョースターさんは説明を続ける。

「いいか、みんな。まず、決してあわてない……。これがスキューバの最大 注意だ。

水の中というのは水面下10mごとに一気圧ずつ水の重さが加圧されてくる。

……海上が一気圧……ここは海底40mだから5気圧の圧力がかかっている。

いつきに浮上したら肺や血管が膨張破裂する。

体をならしながらゆっくりあがるのだ……

エジプト沿岸が近いから、海底に沿ってあがっていこう」

ジョースターさんが傍のコンピューターのスイッチを操作すると、バルブから水がでてきた。

「水を入れて加圧するぞ」

さらに解説はつづく。

「これがレギュレーターだ。

中が『弁』になっていて息を吸ったときだけタンクの空気がくるしくみになっている。

吐いた息はこの左のところから出ていく」

逆流しないようになっていっているらしい。心臓の弁と同じか。よくできているものだ

と感心する。

「それと、当然のことながら、水中ではしゃべれない……」

ハンドシグナルで話す……簡単に2つだけおぼえろ。

大丈夫のときはこれ。OKだ。……やばいときはこうだ」

てのひらを下にむけ、振る。なるほど。

それを受け、師匠が提案する。

「我々ならスタンドで話をすれば？」

「それもそうだな」

「なあーんだ。ハンドシグナルならおれもひとつ知ってるのによ」

そういうと、ポルナレフさんはなにやらジェスチャーを始めた。

なんだかバラエティー番組のクイズゲームのようだ。

手を一度たたく。

ピースサイン……いや、2？

オーケーサイン……。

そして額に手を水平にあて、遠くを眺めるようなしぐさ。

すぐさま花京院くんが答える。

「パン ツー まる 見え」

「Y E A A A H !!」

歓喜の声をあげるポルナレフさん。

ぱしっ！ピシガシググッ!!

ふたりは、ハイタッチのあと、固い握手を交わす。

息ぴったりだ……なんだこのコンビ……。

「襲われて死にそーだっていうのに、くだらんことやつとらんで行くぞッ！」

「……」

「……」

そんなふたりに承太郎君とともに冷たい視線を投げかける。そして、心から思う。

（よかった……私。今日スカートじゃなくて、ほんとうに、よかった……）

本当に、そんな場合ではなかった。急いで装備をつける。

気を抜くと後ろにひっくり返ってしまいそうなほどずっしりとした重みを背中に感じる。酸素を供給してくれる存在ではずであるのマスクがむしろ息苦しい。が、そんなことにもかまっている場合でもない。

部屋が水に覆われたところで次々に皆ハンドシグナルを出す。

全員オーケー……かと思いきや、ちがった！

ポルナレフさんが、手のひらを下に向けて振っている。

「これは……やばい、のしるしだ！」

よく見ると、ポルナレフさんの口元に敵が張り付いている！ 確かにやばい！

「!!」

「ポルナレフッ！」

「いつの間にッ！ や、やつがすでにレギュレーターに化けていたッ！」

「口の中から入って体内をくいやぶる気だ……やばいぜ！ この部屋を排水しろッ」

「もう遅いッ！ ヤツめ！ この時をねらっていたのか!!」

「おらあ！」

スタープラチナが掴もうとするも、すんでのところで一步間に合わない。

敵スタンドはポルナレフさんの口にスルツと入っていつてしまった。

「し、しまったッ」

「体内へ入っていったぞ！ く、くいやぶられるぞ！ どうするッ！」

師匠が嘆くと同時に、ふたりが動いた。

「ハーミットパープル！」

「ハイエロファントグリーン!!」

細長いふたりのスタンドが鼻からポルナレフさんの中に入っていく。見ているこつちが痛くなってきた……。

「ハッ！ お、オゲッ！」

「のどの奥へ行く前につかまえたぞッ！ 花京院！」

「僕もですッ！ 変身する前に吐き出させるッ！」

「オガー！」

□から排出される敵のスタンド。

「やったッ！」

「いや、倒したわけではないッ！ 別の物に変身するぞッ！」

「またもや形を変える……これは！」

「水中銃に変身したッ！ 早く脱出しろっ！」

「急ぎ、全員で艦から海中へと飛び出す。」

「だいじょうぶだ。OK……助かったぜ。ありがとうよ……」

「ポルナレフさんは承太郎君に掴まり、体勢を整えることができたようだ。泳ぎながら、周りの景色をみてつぶやく。」

「なんて美しい海底だ。ただのレジャーで来たかったもんだぜ……」

「ほんとですな……」

「すきとおるコバルトブルーの海に色とりどりの魚やサンゴ礁。思わず目を奪われて

しまう。確かに、こんな状況下でなければどんなによかったか……。

後方を確認する師匠に承太郎君が問う。

「追ってくるか？」

「いや、見えない！ ヤツは金属やガラスなどに化けるスタンド……魚や海水には化けられない」

ジョースターさんが続ける。

「後ろに注意して泳ぐのだ。」

追ってくるとしたならスクリューのあるものかなにかに化けて追ってくるはず。

動く石ころや岩に注意するのだ」

いうとおり、あせらず、ゆっくりと後方に注意しながら進む。

「見ろ！ 海底トンネルだ……深度7m」

「ついにエジプトの海岸だぞ！」

もう少し。そう思った瞬間だった。

そんな油断を、敵も狙っていたのかもしれない。海底全体が激しく震動し始める。

(な、なに？ 地震!?)

そして海底にパツクリと大きな穴があらわれる。よくみると、これは、口だ!!

「なッ！」

「なにッ！」

「スタンドだッ！ この海底に化けていたッ！ こんなにでかくッ！」

「く、食われるッ！」

「うわあーッ！ す、吸い込まれたッ！」

全員が海底の巨大な口の中に呑み込まれてしまうと同時に、あのスタンドの甲高い声が聞こえてくる。

「ムキヤッ！ ナハハハ……頭のトロイやつらよのーッ！」

石や岩も鉱物なら海底も広く鉱物ということに気づかなかったのかッ！」

「ばかなッ！ この巨大さはッ！」

「なんだ!? このスタンドのパワーは!? 今まであんなに小さかったのに!？」

「！ それはきつと、私と同じなんですよ！」

私の足りない説明を、花京院くんがわかりやすく補足してくれる。

「そうだ！ セシリアと同じで、パワーが距離に比例しているんだ。そもそも基本的にそうです！」

スタンドのパワーが大きいのは本体が距離的に近くににいるせいだ！ きつともものすごく近いぞッ！」

その時、女性の声が聞こえてきた。スタンドの本体、の声のようだ。

「あたしはそこから7 m上の海岸にいるよッ!

しかしお前らはあたしの『テフヌト神』の中ですりつぶされるから、あたしの顔を見ることはできない!」

「……『テフヌト神』!?」

「……確かエジプトの女神様の名前ですよね? ……タロットじゃあないんですね」

「もう全部出てきたからじゃね?」

「そうでしたっけ?」

「タロットの起源は古代エジプトに……という説もある。それでかもしれないな」

「まあ、それはここを脱出したあとゆつくり考えましょう。まずはヤツを倒さなければ」

全員で頷く。

「ここはやつの……体内のどこだろう?」

周囲を見渡して花京院くんが言う。

「まだ口の中じゃ。のどの奥にはのみこまれていない……」

と、ジョースターさん。

皆で様子を探っていると、再びあの女性の声が聞こえてきた。

妖艶な雰囲気、おとなの女性の声。

「承太郎！ おまえはあたしの好みのタイプだから心苦しいわね……

あたしのスタンドで消化しなくっちゃあならないなんて」

（わあ……泣く娘もホレる、さすが承太郎君。敵の女の人まで……）

おもわず感心してしまう。

そんな敵の女性の声を聞いて、ポルナレフさんがなにやら承太郎君にひそひそとささやいている。

「ひそ……やれやれ……言うのか……」

「ひそ……言え。ホレ、いいから、早く言え」

「……一度あんたの素顔を見てみたいもんだな。」

おれの好みのタイプかもしれないしよ。……恋におちる、か、も」

（……。なんとという棒読み……）

「……♡」

（でも……効いてる……）

ただしイケメンに……とはこのことか。ちがうか。

それに味をしめたのか、男性陣が口々に敵の女性を褒め始めた。

「お、オレはきつとステキな美人だと思うぜ。もう声でわかるんだよな、オレは」

（ポルナレフさん……重みがなあ。……みんなに言っつてそう）

「うむ。なにか高貴な印象をうける」

（わあ！ 師匠が女性を……！）

師匠の恋の話も聞いてみたいなあ……私ばかりいろいろバレてるし。ずるい！ よし、今度聞いてみよっと）

「わしも、もう30歳若ければなあ」

（ジヨースターさん、若い頃ってどんなだったんだろ？

超絶イケメン波紋戦士……とか言ってたっけ……）

「女優のオードリー・ヘプバーンの声に似てませんか？」

（ツ!? ほ、褒められているツ……！）

いいなあ……

……そういえば私、褒められたことって、あれ……？）

彼との会話を思い返してみる。

（あ、あった……？ いや、あれは……セシリアが褒められたのか……）

「……」

(……いつも、なんかおかしい、とか、へんだ、とか、世話が焼ける、とか、しょうがないひとだ、とか……そんなのばつかりじゃない……? ……事実だけ……)

これは作戦。そんなこと、頭では理解している、が……。

(しかも、オードリーへプバーン、か……)

自分とは似ても似つかない、あの大女優の姿を思い浮かべる。

「……」

そんな私の視線に彼は気づいたようだ。

「な、なんですか? そんなに睨んで……」

「……べつに。なんでもないもん」

「え? な、なんで……? なんで怒ってるんですか?!

ちよつと、保乃宮さん!」

(……ふーんだ)

またもそんな場合ではなかった。

敵の女性の怒鳴り声が響く。

「きつさまらーッ! ……心から言つとらんなああ! ぶつ殺すッ!」

「や、やっぱあーい!!」

その怒りはまずい事態を引き起こしたようだ。

赤く、縦横無尽に、激しく、不規則な動きをするものが私たちに襲い掛かってきた。
「な、なんだこれ？」

「舌だ！ スタンドのペロだッ！」

「あぶない！ 気をつけろ！」

可愛さ余って……というやつなのか、大きなスタンドの舌はまず承太郎君をはじきとばした！

「ぐはっ！」

そして、とばされた先には……

「じよ、承太郎ッ！」

「は、歯だッ！ 奥歯だッ！」

「！ セシリア!!」

臼歯は咬み合わさって承太郎君を押しつぶそうと迫ってくる！

「承太郎！ この歯の硬度はダイヤモンドと同じ……きさまからつぶし殺すッ！」

「あぶない！ ……ぐ、うう……」

必死にガードするが、途轍もないプレッシャーをセシリアを通じて感じる。

「いけない！ 人間の咬む力はその体重、もしくはそれ以上といわれている……」

この馬鹿でかいスタンドのそれなんて……!!」

「チツ！ このアマ！ おまえもいっしょにつぶしてやる！」

敵はそんな言葉とともにさらに圧力をかけてくる！

「く、す、い……でも……」

折れるわけにはいかなかった。

少しでも気を抜けば承太郎君が……というのは勿論大前提。

(まけられ、ない……)

それに加えて私を支えていた。

それに比べたら本当に……

(……この、女性に、は、まけたくないツ!!)

……本当につまらない、ささやかな意地、が。

「させないツ！ つああああああ!!」

「きいッ！ この……!!」

「……っ!!」

私の意識は、そこで途切れた。

*

*

*

セシリアが消えた瞬間、敵スタンドの白歯は、がっちりと咬み合わさってしまった。

「じよ……!?!」

「承太郎ッ！」

「承太郎が歯ですりつぶされたーッ！」

「ひ、仁美さん！ しつかりしてください！」

叫びつつも僕は崩れ落ちる彼女に気づき、受け止める。

「……だ、だいじょうぶ……」

すると、気を失ったかに思われた彼女がぼそりとつぶやいた。どうやら意識を手放したのはほんの一瞬だったらしい。

「はあ、はあ……。もう、だいじょうぶだ……。だそうです。

スタープラチナが、セシリアに、もういい、と……」

「!?!」

「よく、聞いてください……」

「……? ハッ！ なにか聞こえるぞ……」

「遠くから、聞こえるような……」

「だんだん近づいてくるような……!」

「こ、この声は!?」

「……オラオラオラオラ……」

「は……歯だ! 歯の中から聞こえるぞッ!」

「みんな身をかめろーッ!」

「オラオラオラオラオラオラ!!」

破片が飛んでくる……歯のかけらが。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ……!!」

「ダイヤと同じ硬さなのに、歯を掘って出てきたッ! オーマイゴッド!

ついでに! ヒーッ! 他の歯もへし折ってるぞーっ!」

どこからともなく、歯医者さんで聞く、『チュイーンツツ!!』という、あの反射的に身の毛がよだつ音が聞こえた気がする。空耳なのはわかっているが。自分もなんだか歯が痛くなってきた。

「おい、みんな、このまま外へ出るぜッ!

おおおお、オラア!!」

承太郎の号令とともにスタープラチナが前歯を破壊。僕たちはそこから脱出した。

「やれやれ。ま、たしかに硬い歯だが、たたき折ってやったぜ……

ちとカルシウム不足だったようだな……」

あとには宣言通り、『直々にぶちのめした』……そんな有言実行の頼りになる男の言葉がこだましていた。

そのまま岩づたいに泳いでどうにか海岸に上陸すると、倒れている一つの人影が見えた。

「おい、女が倒れているぞ」

「本体の、ミドラーだ」

「どうします？ 再起不能でしようか……」

「美人かブスカ、みてこよーぜ……」

全員で近寄る。

「は、歯が全部折れてる……ひいー!!」

若い女性が、総入れ歯か……不憫だが、せめていい歯医者さんと出会えますように、そっと祈る。

そして、敵は最後の力を振り絞るかのように叫んだ。

「ち、くしょう……!」

く、くくく! し、かし、あたいはしよせん、前座!

……これからエジプトの神々が、貴様らを次々に襲うのさ……!」

「なんだと!？」

(……エジプトの、神々……)

僕達の心に、まるでバケツの水に垂らされた一滴の墨汁のような発言を残しながら、敵は意識を失った。再起不能、だろう。これは。

皆で砂漠の方を見やり、感慨にふける。

「しかし、ついにエジプトへ上陸したな」

「ジエツトなら20時間で来る所を30日あまりもかかったのか」

「いろんなところを通りましたね。脳の中や……ゆ……」

(あぶない、皆知らないのだった。夢の中を通ってきたことは)

それを聞き咎めたのか彼女が訝しげな顔をする。

「ゆ……?？」

「……いいえ、なんでも」

「?」

誤魔化してしまおうと、話題を変える。

「ゴホン。……それより! なんであんなにムキになってたんですか?」

「っ! ベつに、ムキになってなんか……うっ……」

立ち上がり反論しようとするも、まだ先ほどの疲労が残っているのかふらつく彼女。「ほら、無茶するから、まだフラフラして……。……。あ!？」
支えようとした、そのとき、僕は、気づいてしまった……。

*

*

*

勢いよく立ち上がると、瞬間、視界がぐにやりと歪んだ。

確かに少し能力を使いすぎたのかもしれない。少し経てば回復するので問題ないが。しかし、心配性で、……。やさしい、このひとを、またやきもきさせてしまったのだろうか。いつもこうだ。

(……。なのにさつきはあんな……)

自分の態度を省みて、落ち込んでしまう

「あ……。!？」

「え……。?」

反省とともに回転していた視界がゆっくりと安定してきた。

すると、目の前に写る彼の様子がおかしいことに気づく。

なにか言いかけたかと思えば、口元に手を当てたまま黙りこんでしまった。

「? どうかした?」

「い、いや……!」

「?」

「……そ、その、それ……」

彼の目線をたどる。

「ハッ!?」

さっきまでそのままの格好でスキューバダイビング。当然服はずぶ濡れた。

濡れたシャツがびったりと張り付き、内部が透けてみえる。くつきりと。

「あつ、わわっ……!」

後ろを向き、必死に胸元を隠す。

（し、しまったー! ど、どうしょ!）

着替えなんて、全部海の底だ。

今からとりあえず近隣の町や村に向かうことになるのだろうか、それまでずっとこのまま恥をさらし続けなければいけないというのか。

（つていうか、みられたー!）

「恥ずかしさとこれからのことを考え、途方に暮れていた。

(…………え?)

すると、ふわりと何かが被さってくる感触。

「……………」

…………彼の、学生服だ。

「それ、……………」

「か、花京院くん……………」

「は、早く! とりあえず着て!」

「はっ、はいっ!」

おずおずと袖に手を通す。

「……………」

ぶかぶかだ。そりゃあそうだ。

…………どきどきする。そりゃあそうだ。

「あの、……………」

「……………」

「……………」

「……………」

なんだろう……恥ずかしさは確実に増した気がする。

「おーい。出発するぞー」

何とも言えない空気が流れる中届く、天の助けのような声。

「は、はいっ！」

「い、いきましよう」

2、3時間ほど歩いただろうか。いつもの如く、神様、仏様、スタープラチナ様の御力で、発見した町にたどり着く。

「ご、ごめんなさい、私、とにかく、とりあえず部屋に行かせてくださいッ！」

宿をみつけチェックインするやいなや、その叫びを残し、部屋に駆けこむ私。

とにかくお風呂に入りたかったので、浴槽にお湯を張ろうと、蛇口をおもいきりひねる。

勢いよくあふれ出てくる温かいそれを眺めつつ、その間に洗濯をしまおうと思いたつ。

（学生服って……洗ったら縮むよね……？ でも海水につかっただままっていうのも……）

悩んだ末、結局手洗いでやさしく軽く洗って干しておくことに。

洗濯を終えるとちよūd良いタイミグでお湯が溜まったので、そのまま入ることにする。

「ふわあー!」

(気持ちいいよう! やっぱりお風呂サイコー!)

さっぱりしたところで、考える。

(さて、着るものがないんだった……)

物資は明日、財団が届けてくれるよう手配することだったが。

しかたないので下着だけはなんとかドライヤーで乾かし、部屋に備え付けの、パジャマ代わりとおぼしき長めのシャツを発見したのでそれを着ておくことにした。

(乾くまで、今日はもう部屋から出られないなあ……。服のこともあるし、花京院くんに言っておこう)

と、電話の受話器を持ち上げたところで気づく。

(しまった……部屋番号、わかんないや……)

彼のどころか、全員分わからない……。焦って部屋に来たためでもあるが。

(どうしよう……。あ、そうだ)

机の上にあった備え付けのメモに手紙を書く。

「セシリア、御願い！」

*

*

*

ふわりと美しい鳥が僕のもとにやってきた。

「セシリア……?!」

何事かあったのか、一瞬どきりとしたが、よくみると何かをその嘴にくわえている。

「……手紙？ 僕にかい？」

開いて中身を見る。

「服が乾くまで部屋から出られないので、今日はみんなと夕食に行けません。ごめんなさい。」

みんなに伝えておいてくれると、助かります。

追伸・上着、もう少し借りていても大丈夫ですか？」

「フツ、了解です」

返事を書くべく、ペンを走らせる。

しかしどうやって渡すか。それが問題だ。

ハイエロフロントに行ってもらおうかとも思ったがやめた。

着るものがない……すなわち、彼女は今……。

(うつー！ い、いかん！ なにを、考えて……！)

そんなところに我が相棒を送り込むのは非常にまずい。

律儀に待っていてくれることでもあるし、セシリアに返事を頼むことにした。

*

*

*

【わかりました。伝えておきます。しかし、お腹すくんじやあないですか？

何か買って後で部屋に届けてあげますね。

その他、何か必要なものがあれば遠慮なく教えてください。

追伸・返却は明日でかまいませんよ。御心配なく】

「……やさしいんだから……」

彼からの返事に思わず心がほっこり温かくなる。

(なんとかこの恩返しをしたいけれど……)

学生服を乾かしつつ、頭を捻る。

(そうだ！ ボタン！)

そうであった。先程この町に来るまでの道中のことだ。

——「あれ？ 保乃おまえ、なんで花京院の服なんて着てんの？」

「ぎくく！」

「……うるさいな！ 察しろ！」

ポルナレフさんの相変わらずの無駄に鋭いツツコミに戸惑う私と若干理不尽な助け舟を出す花京院くん。

「はあ？ ……」

その言葉を受け、考え込む。

「……ああ！ わかった！ ブラジ……」

ガン！

瞬時に彼の容赦ない裏拳が顔面にきまる。

「いってえー！」

「……デリカシーのない男だな！ 本当に！」

「くっそ……！ あっ！ よく考えたら、てめー、またひとりでいい思いしやがって！」

「」

「うっ！」

「いや、むしろお目汚しでしょう……って、聞いてないし……」

「……何色だったか教える！ ほれ、お兄ちゃんに言ってみろ！」

「だ、誰が教えるかッ！」

何度も言うがお前のようなお兄ちゃん持った覚えはないッ！」

どこかの猫とネズミの如く、いつものように仲良く喧嘩を始めるふたり。

それを傍観しながら、所在なく腕を見て、ふと、気づく。

（あれ？ ボタン外れてる……ここも？ あれ……？）

私の様子に気づいたのかポルナレフさんの頬をつねりながら、花京院くんがいう。

「ん？ ああ、ボタンでしよう？」

『吊られた男』と闘った時に取っちゃったんですよ。

一回つけたんですけど、腕のところとかがまた取れちゃって……」——

（そうと決まれば、善……でもないけれど、急げ、だよな）

フロントに電話をかけて、ソーイングセットをポストに入れてもらうように頼む。

裁縫は正直あまり自信がないが、ボタンつけなら、なんとかだいたいようぶだろう。

恩返し、というほどのことではまったくないけれど、せめてなにか自分ができること

をしたかった。

「終わったー！」

無事作業を終える。すると部屋のチャイムが鳴った。

「はーい」

「僕です。……あ！ で、出なくていいです！ そのままで！！」

（あ……そ、そうだった……）

うっかりこんな格好で出ちやうとこだった……）

「遅くなつてすみません」

「ううん！ わざわざごめんね」

「いえ、これしきお安い御用です」

「今夜はなにを食べにいったの？」

「エジプト名物、コシヤリです。アヴドウルさんおすすめのもの」

「へえ、いいなあ！ おいしかったです？」

「ふっ……」

「どうしたの？」

「いいえ。……やっぱりつてね。そういうとおもいました。」

まあ、それは食べてのおたのしみ……ということだ

「えっ？ も、もしかして……」

「……置いておきますから、あたたかいうちにどうぞ」

「あ……」

（……やつぱり、おみとおし）

「……ふふふ」

「？ そつちこそ、どうしたんですか？」

「ううん。」

……うれしいな……って」

扉を背に、もたれかかりながら……これは、おみとおされてしまわないように……すこしだけ、ほんとうのことをいってみる。

「……ああ。おそらく、期待は裏切らないかと。」

なんせ、あの承太郎を喰らせるほどですからね」

「ほんとに!? それは……!……余計お腹空いてきた……」

「ふっ、それは加えて、最高のスパイス、というやつですよ。よかったですね」

「うん! たのしみ!」

「ほんと、美味かったんですよ。けどね……」

また、調子に乗ってポルナレフが注文しすぎるから……

「アヴドウルさんの忠告を無視して」

「あらら。それはまた、なんていつもどおりな……」

「ええ。あいかわらずですよ。ほんとに。」

で、メインは即刻食べつくされ、残ったのを食べるのはやっぱり何故か 僕の役目なんですよ？

ほんつと皆、協調性というものが欠片もないんだから……

おかげさまで、しばらくは豆は見たくないですね」

「ふふ、おつかれさまでした。」

「あー！ だからといって、残りをあなたに……というわけではないですよ？」

「もう、そんなのわかっているよ。でも、別に残りでも全然かまわなかったのに。」

むしろちょうどいいじゃない？」

「そういうわけにはいきませんよ……またそんなことを……」

まったく、少しは理解していただきたいものですね。

部屋で退屈、かつ、お腹を空かせて、ひとりまっただけであるうあなたに、せめて美味しいものをたべさせてあげたい……という、僕の深い、……友情を」

「はいはい。いつもひしひしと感じております」

「ふっ、……ほんとかよ」

「ふふ、……ほんとだよ。」

「……ありがとう」

そのまま、つい、とりとめのない話をしてしまう。

「そういうえば、明日にでも、エジプト上陸記念に写真を撮ろうといっていました」

「写真?! へえ、いいね! 撮りたい!!」

「でしょう? 僕もじつはけっこう楽しみにしていたりします」

「あ、でもカメラって、こないだまたジョースターさんが壊しちゃったんじゃないかなかったですか?」

「……それだけ聞くとなんか誤解を招きそうな発言ですよね……」。

ジョースターさんが触る機械はみな故障……超機械音痴、みたいな」

「ち、ちがう! そうじゃなくて……!」

「ふっ、わかっていますよ。」

明日財団に持って来てくれるよう頼んでいるらしいですよ。カメラ」

「あ、そうなんだ」

「ええ」

「そっか。ほんと……いいなあ。撮りたいね。……みんなで」

「……はい」

「……」

「……」

一瞬の、沈黙。

「……仁美さん？」

「……ん？」

「……とうとう、ですね」

「うん。……とうとう、だね」

「……もうすぐだ。」

「もうすぐで……」

「……、うん……」

(……そうだ。もう、すぐ……)

おもいだす。旅立ちの前、あの日の……あの、ことは。

このひとの、強い、意思を。

「……」

「……おっと、すみません。お腹空いているところに……」

「……ううん、こちらこそ」

「そうそう、忘れるところでした。明日は9時にロビー集合とのことです」

「うん、わかった」

「ゆつくり休んでくださいね。今日は疲れたでしょうし。……だいじょうぶですか？」

「

「うん、もう、なんともないよ。平気」

「……よかった」

「うん、……ありがとう」

「……いえ。……じゃあ、おやすみなさい」

「……うん、おやすみなさい」

ドア越しに彼を見送った後、置いていってくれた晩御飯をありがたく食す。

「……いただきます。」

わ、ほんと、おいしい！」

（……けど……）

なぜだろう？

「……あれ？」

（……さみしい……？）

旅にでてから、ずっと、さわがしい晩御飯で……。

こんなに静かな晩御飯、ひさしぶりだった。

(独りで)飯……が、さみしいだなんて。……私がああ)

おもわず苦笑いを浮かべてしまう。

(……むしろ、楽だったはずなのに、ね……。)

みんなのかおを思い浮かべる。

ジヨースターさん。

承太郎君。

師匠。

ポルナレフさん。

(……護りたい。……皆を。)

……そして……。

もう今日は彼のいうとおり、早く休もうと思い、寝る準備をする。

その前に彼の服の乾き具合を確認してみる。

(よかった。もうほとんど乾いているみたい……)

「……」

みつめながら、想う。

(どうしよう。……すき……だなあ)

言葉をかわすたび、彼を知るたび、ともに過ごすたび……
どんどん彼にひかれていく。自分でも驚くほどに。

しかし、それにともなって、ふくれあがってくる、不安……。

……わきあがってくる、『予感』。

己に流れる『血の……

(……いや、やめよう。……そんなこと……)

気づかないふりをする。

そう。考えたくない。……まだ今は……。

(……だいです……きだよ)

(……つよく、なりたい。
あなたの、ために……)

(ううん……)

(あなたを、まもりたい
……ただ、じぶんの、ために……)

第3章 Tea in the Sahara 紅い陽炎

「……美。……仁美……」

「……ん……」

「……目を覚ましなさい。いつまで眠っているつもり？」

「はっ！ え？」

呼ばれる声に驚き、目を開ける。

すると、私をさらに驚愕させる人物がそこにいた。

「か、母さん!？」

「……」

しかし、相手から返事はなかった。

目を瞬かせながらも改めて彼女をよく見ると、ふたつの事実気づく。

とてもよく似ているが、母ではないこと。そして、似ていること。

……自分にも。

「あ、あなたは？ それに、ここは……？」

私達一行は昨日、秘密裏に手に入れたはずの潜水艦が敵の襲撃を受ける、という哀しいかなほば全員が予期していた通りの展開を迎えつつもどうかそれを受け、とうとう目的地のエジプトに上陸。最寄りの街にたどり着き、宿にて一泊していたはずなのだ。

しかし、周囲を見渡すも、目に映るのはそれを閉じる前にみつめていたはずのものの色とはてんで異なる白一色。大理石でできた壁、床、柱。例えるならばまさに、ギリシアのパルテノン神殿、というところだろうか。とはいえ、私が持っているのなんて歴史の教科書で得た知識くらいのもので、実物なんて見たこともない。よって所詮はイメージにすぎないが。

頭の中身を疑問符でいっぱいにした私に向け、目の前の人物はゆったりとした口調で、しかし辛辣に言葉を放つ。

「……あなたが、あまりにもふがないから、きちゃった」

「は……？」

「セシリアがないてる。」

だつてあなた、あまりにも彼女をうまく使えていないんだもの……」

「なッ!?!」

凶星だった。

仲間たちは、皆、いいひとばかりだ。

だから、そういわれたことはなかった。たぶん、思われたことも。

でも、自分のことだ。自分で一番よくわかっていた。心の内で気に病んでいた。スタンドを生かすも殺すも、スタンド使い次第。

どんなに優れたスタンドもスタンド使いが無能であれば……これまでの闘いで痛いほど身に染みていた事実だった。

ずっと、考えていた。

セシリアには、本来、もつと力があるのではないかと。

皆を護るための、能力、が。

「しりたい？」

「……え？」

「またも見透かされる。」

「……つよく、なりたいたいでしょう？」

「眠りにつく前、つよく、心で願った……こと。」

「ツ！ どうして、そんなことを……？ ほんとうに、あなたは、一体……？」

混乱の中、どうにか訊ねると、彼女はくすくす笑いながら、いう。

「わからない？ けっこうヒントあげてるのに。にぶいのね」

……衝撃的な一言を。

「……わたしの、子孫にしては。」

「ご、ご先祖様!?」

「……もう一度だけ聞いわ」

「……あなたは、つよく、なりたい?」

*

*

*

「……来ない……」

ホテルのロビー。

待ちぼうけを食う男衆。

エジプト上陸後、二日目の朝。

約束の刻限をとうに過ぎてても彼女は現れなかった。昨日、時間と場所は確かに伝えたはずなのに。

「どうしたんだろーな? めずらしいな。あいつが遅刻とは。寝坊か?」

と、ポルナレフ。そう、こんなことは初めてだ。ぎりぎりなことはあっても、いつもちゃんと時間前に来る。彼女はそんなひとだった。

言いようのない不安が胸の中に広がる。

「おい、花京院。電話は？ 出ねーのか？」

「ああ……。何回も、したよ。出てくれない……」

承太郎の問いに、苦々しい気持ちで答える。

「なにかあったのでは……？」

「考えていても仕方がない。とりあえず、部屋に行ってみよう」

アヴドウルさんの眩きに皆で眉間に皺を寄せつつ、ジョースターさんの建設的な意見により彼女の部屋の前に移動する。

ドアチャイムを鳴らすも、やはり応答がない。

「ダメか……。しかたがない、保乃、開けるぞ！」

ジョースターさんが声をかけ、フロントで借りてきた鍵でドアを開ける。……が、

「……チェーンがかかっている」

「やれやれだぜ。まあ、外国での女の対応としては、正解、だがな」

少しだけ開いたドアのすき間から覗くも、室内の様子はよくわからない。

「……よし……」

次の瞬間、僕を除く、全員のユニゾンがホテルの廊下に響く。

「「「花京院……いけ」」」

「……よしッ、わかった！ 女性の部屋に無断で侵入なんて、けしからんが、やむをえんッ！」

やむをえんからだ！ もう一度言うけどしかたなくだからな！」

「わかった。わかったから。早く行け」

力説を軽くあしらわれつつも、言うが早いか勢いよく相棒を出す。

「ハイエロフアントツ！」

「気をつけろよ。敵が潜んでいる可能性もある」

「わかっていきます……」

紐状にしたハイエロフアントを隙間からすべりこませ、十分に警戒しながら、室内を
探る。

（彼女は……いたッ！）

ベッドの上に、彼女はいた。普通に眠っているようだが。

（よかった……無事だったか。）

しかしこれだけ呼んでも起きないなんて……まさか具合が悪いのか……？）

もつとよく様子を確認しようとする。『機法皇』の目にとんでもないものが飛び込んでくる。

（ハッ！ こ、こ、こ、こ、こ、これはッ！！）

シャツ一枚だけ、というあられない姿で横たわっている彼女。

脚が、白く滑らかなふとももまであらわになっている。

(もう少しで……見え……。だ、ダメだつて!)

ポルナレフとのブロックサインを思い出す。

昨日は上、今日は下……。なんだこれは。何かの前触れだろうか……。

しかもよくよく見ると、なにかを抱きしめているようだ。

(……これは、僕の……? ま、まさか……!)

ものすごい勢いで脳内の妄想機構(仮)が働きます。

そんな場合でも、そんなわけもないのはわかっている……が、そこは哀しき男の性だ。

ご容赦いただきたい。内容は、御想像にお任せする。だれにもいえない。自主規制だ!

「ぶはあつ!!」

「ど、どうした!？」

「は、鼻血が出てるぞ、花京院! だいじょうぶか?!」

「敵か!? 攻撃を受けたのか?!」

「よし、ドア、壊すぜ……」

「ち、ちがう! 待て! ちよつと待って!!」

鼻を押さえつつ、スタープラチナをかまえた承太郎をあわててとめる。

「なんだよ……。あいつは無事なのか？」

「あ、ああ」

「寝てんの？」とポルナレフ。

「たぶん……」と、曖昧にしか返せない、僕。

「じゃあ、さっさと起こすか、開けるかしろよ……」

「わ、わかったって！」

承太郎の催促に急かされつつも、彼女のこんな姿を他の男にみせるわけにはいくまい。学生服をそつと回収し、シャツでぐるぐる巻きにする。

「……ハッ！」

そのときだった。

彼女のスタンド、セシリアがふわりと現れる。

「ひ、仁美さん!?!」

「……」

慌てて本体に呼びかけるも彼女は変わらず眠ったままだった。

薄桃色の鳥はくちばしでペンを持ち、ベッドサイドのメモに文字を綴っていく。

僕は急ぎハイエロフロントにチェーンを開けさせ、皆と室内に飛び込む。

「うおー！ びっくりした！ なんてこいつツタンカーメンみたいになってんの？」

この際どうでもいいことにツツコンでいるポルナレフは放っておき、彼女の相棒がはらりと落とす紙片を受け取る。

メモには、たどたどしく、こう書かれていた。

『夢の中でご先祖様とスタンドの修行をしています。』

もう少し時間がかかりそうなのでお手数ですがそのまま連れて行っていただけると幸いです。

迷惑をかけて、本当にごめんなさい』

*

*

*

「はあ、はあ……」

「ダメよお……まだまだだ。そんなもの？」

「くっ！」

修行……というか、ご先祖様は厳しかった。非常に。そして毒舌……。

「今、わたしの悪口いったでしょう？ はい、形態変化300回追加ね〜」

「そ、そんなあ！ わ、悪口なんか……」

（悪口というか、事実じゃあ……）

そんなこと思ってしまったがゆえか、またノルマが増えた。

「あ」

恨めしく思いつつも課題をこなしていると、ご先祖様が唐突に呟く。

「ん？ どうしたんですか？」

「いけない、あなた、このままだと置いていかれちゃう」

「えッ!？」

ご先祖様曰く、ここは一応私の夢の中、らしい。

スタンドとはそれを使う者の精神がかたちになったもの。

眠りによって精神は剥き出しで、無防備な状態になる。

よって、スタンドを鍛えるにはこの世界が一番適している……とのこと。

この世界の時間の概念が不明だが、現実同様時が流れているということか。

「もう朝!!? みんな待っているんですか!!? ど、どうしよう!!?」

「……彼氏も心配してるし」

「か、彼氏? だ、誰のことですか?」

っていうか、現実世界のことわかるんですか?! 今どんな状況なんですか!?!

「」

矢継ぎ早に問うも、相変わらずこちらの質問にはまともに答えてくれないご先祖様。けたけたと笑いつついう。

「ふ、ふふ、ふふふふふ！ 可愛いーっ！

あなた、男の子の趣味だけはいいいじゃない。そこはちゃんと遺伝したのね〜」
「……」

一体何をみているやらさっぱり不明、かつ、彼氏云々は残念ながら誤解であるけれども、言葉から察するに（私のきもちなんてどうせご先祖様にはお見通しなのであろう、という推測からであるが）彼女の言及の対象はどうやら彼のようだ。褒められているやらけなされているやらなんとも複雑な気分だが。

（まあ、だんだん慣れてきたけどね。この言動にも。

母さんも、優しいとみせかけて結構毒舌だしなあ……。

私もそうなのか、もしくはそうなるのかな……気を付けよ）

そんなふうにごを省みつつ将来に思いを馳せていると、ご先祖様は新たな課題を付きつけてきた。

「ちようどいいわ〜。精密動作の訓練にもなるし。セシリアに手紙書かせて。はい」

そういうと、ポン！ という軽快な音とともに紙とペンが現れる。おもわず、問う。

「え!? できるんですか? そんなこと……」

「頭がかたいわねえ……その発想の貧困さが、セシリアを檻に閉じ込めてるのよ。本当にダメな娘ね。」

「できる……って思いなさい。それでもできないことはたしかにあるけれど……できないって思ってしまったことは、絶対に、できない」

「あ……」

「スタンドの力の源は、精神の、意思の、つよき……心のありかたで大きく変わる。」

「よくも……わるくも。」

「あなたの自由な発想で、セシリアはもつと羽ばたく。……さあ」

「……はい」

「やってみた。が、思った以上に難しかった。そして、けっこうなスタンドパワーを消費するらしい。ずっしりとした頭重感と疲労感が私を襲う。」

「以前ハイエロファントが物を持ってきてくれたり、お茶を淹れてみてくれたり、それこそ伝言をしてくれたりしたことがあったが……あらためて彼のすごさを知る。」

「くっ……」

「へたくそねえ……。まあ、伝わったみたいだから、よしとしましょう。」

「これは本当にコツと慣れだから。よく練習しておきなさい」

「コツと慣れ。確か前に彼もそんなことを言っていたような気がする。」

「さて、基本はこれぐらいにしときましょう。あなた全く……なつてなさすぎで、キリがないし」

「め、面目ないです……」

「根気よく努力を積み重ねること。いいわね？」

「はい」

「で、本題。大事なことを教えるわ。」

あなたがおそらく、これからすぐ必要になる、セシリアのちからのこと……」

そうしてご先祖様は、またも驚くべきことを教えてくれた。

「でも、それって……」

「そう、あなたがポンコツだから今までできなかつただけ。そして、これからもポンコツなままじゃあ無意味」

「ぐっ……」

「まあ、だいじょうぶよ。腐っても私の子孫だけあつて、あなたにはその才能がきちんと受け継がれているようだから。経験あるでしょう？ あの要領よ」

「……あ……」

脳裏に浮かぶのは、あの、真夏の気温の下で感じた『寒気』。

「さあ、……やるわよ」

「はい！」

「……全神経を研ぎ澄まし集中なさい。セシリアの囁きに耳を傾けて……」

どれくらい時間が経っただろうか。

教えてはもらったものの、なかなか上手くできない。呑み込みの悪い自分を恨めしく思いつつ、必死に修行を続ける。

「あ……いけない!!」

そんな最中、またもご先祖様が急に声をあげる。

「え!?!」

「まずいことになってしまったわ……ここまでにしましょう! 急いで戻りなさい」

「ま、まずいこと!?!」

「最低限は教えた。あとは実戦でなんとかしなさい!」

「は、はい!」

「最後に……伝えておく。

うすうす、にぶいあなたも感じていると思うけれど……

『そのとき』は近い……」

「!？」

「……かもしれない。

わたしにも、わからないのよね。正直。

まあ、いつでも……覚悟はしておくべきね」

「……」

「……そんなかお、しないの」

いいながら、あたまをそつとなでてくれる。

「たいせつなものを護る……わたしたち一族に与えられた……

それは、『しあわせ』、なことだと、おもわない？」

「……はい！」

(もちろん……！)

迷いなく、頷く。

「……ふふ。だったら、いいわ。自信をもちなさい。

あなたはこのわたしの子孫なんだから。

だいじょうぶ。できるわ。」

そして、彼女はふわりと抱きしめてくれた。

「自らに誇りをもって運命に立ち向かいなさい。そして悔いのない選択を……

あなたが、『しあわせ』であるように、いつでも、見守っているわ。
わたしの可愛い、仁美……」

「ご先祖様……」

「さあ、いきなさい」

「はい、ありがとうございます！」

*

*

*

「ハッ！」

目を開けると飛び込んで来たのは、黒い革張りのシート、運転席、ハンドル。ウイン
ドウから臨む、青い空に浮かぶ太陽。

どうやら、私は車の後部座席にいるらしいと悟る。しかし他には誰もいない。
加えて、動けないと思つたら何かで身体がぐるぐる巻かれていた。

(なにこれ？ ……シート？)

もぞもぞとなんとかそれから脱出すると、自分がシャツ一枚なことに気づく。
あたりを見回すとちゃんと靴と服が置いてあつた。あわててそれを引つ掴み、身に着
ける。

ご先祖様。修行。教わったこと。セシリアの、ちから……。

全部まるごと、ただ単に、強さを求める自分の願望がみせた儂いものだったのだろうか。

いや、ちがう。確信があった。あれは夢は夢でも『ほんとうの夢』だった、と。

(急がなきゃ！)

きつともうみんな……敵と闘っているんだ！ まずいことつて……)

あのマイペース極まりなさそうなご先祖様の本気で焦った様子を思い返し、嫌な予感が全身にまとわりつく。

(お願い、みんな……どうか、無事で……！)

祈りつつ、ドアを開け外に飛び出す。

むせ返るような、熱気。

見渡す限りの砂漠。

そこで互いに距離をおいて、散り散りになっている仲間たち。

揺らめく陽炎……そのむこうに……

私の目がおもわず映すのを拒むような……あまりにも凄惨な光景が、そこにはあった。

両目から血を流して倒れている、愛しきひとの姿が。

*

*

*

「……かきよういんくん……？」

「や、保乃！」

「……う、そ……？ ……あ……あ、あ……」

（……ひとり、ふえた。車にまだ乗っていたのか。女の声……）

「……いやあーああああーツツ!!」

広大な砂漠に轟く、悲鳴。

「だ、だめだ！ 敵は、『音』を感知して襲ってくる！ 声を……物音を立てるな!!」

動こうとする女をジョースターが制す。

「……て、き……？」

（もう遅い……死ねッ！）

砂漠にしみこませて潜ませていた自らのスタンドを操り、女を襲う。

小さいが、何ものをも切り裂く、水のスタンド。

その殺傷能力は十分であることは先ほど証明済みだ。

（このおれ、ンドウールのスタンド『ゲブ神』。

一度補足されたらその攻撃からは逃れられない。

これで、2人めだ……）

「……」

（なに……ッ！）

しかし攻撃がはじかれる感覚がし、女の声が聞こえてくる。

「……だいたいじょうぶです……」

（そうか、この女が例の『ガーディアン守護者』……か。ならば）

情報は得ている。そのガード能力は優れたものではあるが、それしかできない。

また範囲も一人のみ。ごく限られている、と。

（ならば、位置がわかってしている他のやつらからしとめるまでよ）

女が現れたときの反応と今までの行動で、承太郎以外の位置は補足している。まずは

……

（死ね、アヴドウル！）

「うッ！」

「……」

（!? なにい!?）

　　またもや攻撃がはじかれる感覚。

（偶然……か？　ではこれで、どうだ！）

「……させない」

　　しかし攻撃はすべてはじかれてしまう。

　　ランダムに、タイミングもずらし、異なる相手を次々と襲っているにも関わらず。

（な、なぜだ……なぜ防がれ……!?）

「や、保乃……!?」

「す、すげえ……！」

　　仲間すら驚いている。どういうことだ。

「大丈夫です……」

　　静かな声が聞こえる。

「ぜんぶ……わかりますから……」

(く、くそっ！)

「……悪意と殺意に満ち溢れている……そんな攻撃なんて」

「ぐっ！」

寒気を感じた。

(こんな女に、恐怖……？ このおれが……？)

「……よし！」

女に気をとられていた間に、誰かが走り出す。

(……承太郎だ。何かを掴んで……。あの場所にあつたものは……)

必死に平静を取り戻し、思い出す。

(犬か!?)

「ぎゃわん!？」

「……防御は、あいつに任す。さて、協力してもらおうぜ……イギーよ!!」

てめえ、鼻で奴の位置がわかってんだろう……案内しな！ じゃねえとテメーも死ぬぜ」

「ぐうう……」

（……なんだ？ ジャンプしたあと足音が消えたぞ。……どこへも着地していない。バカな……いったい!?!）

*

*

*

承太郎がああのカソ犬……砂を操るイギーのスタンドを利用して、敵スタンドの本体が
いると思しき方角へ向かっていく。

「あいつ空中に浮くこともできるのか！」

アヴドウルが叫ぶ。

イギーのスタンド、『愚者』ザ・フールは背中にハングライダーのような羽を作り、滑空している。

「こいつはいい。承太郎のやつ、あのまま空中を進んで犬に本体を見つけさす気だ。」

本体さえみつけければあの恐るべきスタンドも倒せる可能性大だ！」

「花京院……」

ジョースターさんの言葉を受け、オレはそばで倒れている、その、恐るべきスタンド
の攻撃を受けてしまった仲間をみる。

「……ポルナレフさん」

そこへ保乃がやってきた。

先程のこの娘のスタンドさばき……そのあまりの変わりぶりには正直、度肝を抜かれた。

夢で修行……にわかには信じがたい話ではあったが、信じざるを得ない気持ちになっていった。

しかし、その顔には表情がまったくない。

普段は思っていることがすぐ顔に出る、わかりやすいやつなのに。

(……それも、当然、か)

惚れた男のそばに跪き、ぽそりと問いかける。

「かきよういんくん……？」

「……」

苦々しい思いで、伝える。

「……命には別状ない。気を失っているだけだ。」

……しかし、眼を、……失明の危険がある……」

「し、つめ、い……っ？」

伏して、呟く。

その様子に、もはやこいつを本当の妹のように思っている身としては胸が痛む。

そんな中でも戦況は刻一刻と変化していく。承太郎達を見守っていたアヴドウルとジョースターさんが気づく。

「ジョースターさん、承太郎とイギー……だんだん高度が落ちてきていませんか？」

あの『愚者』、あまり長距離は飛行できないらしい……。」

「紙飛行機のように舞っているだけか……！」

承太郎たちはいつの間にか、かなり遠くまで進んでいた。目測に過ぎないが約一キロ少しといったところか。

しかし確かに、遠目に見ても承太郎の身体的位置は低く、地面すれすれを飛行していた。

今まさに地に触れる……その瞬間だった。

「おおッ！」

承太郎が地面を蹴り、跳躍。『愚者』は再び大きく空に舞い始めた。

「アッ！」

しかし、今ので位置が割れてしまったようで、敵のスタンドが砂中から姿を現し、承太郎を追い始めた。

「……！」

気づいた保乃がセシリアを放つ。それに対し、アヴドウルが叫ぶ。

「だめだ！ 君のスタンドはあんなに遠くのものには護れないッ!? なぜ!?」
「……………」

*

*

*

承太郎たちの位置を捕捉した。そのときだった。

何かが物凄いスピードでこちらに向かってくることに気づく。

おれは『ゲブ神』ですれ違いざま、撃ち落とそうと攻撃する。

しかし、またもやあのはじかれる感覚。

(女か…………。承太郎を護りに向かっているのか。

しかしこのひび割れるような感触…………)

この距離ならガードを貫ける…………ほおっておいてかまわんな。

今は、承太郎をしとめる！)

しかし、それが結果として間違いだった。

ふいに両耳に、『なにか』が触れる。

(な、なに!? み、耳が…………急に!? なにも…………!!)

*

*

*

「……セシリアで塞いで、聴覚を、奪いました。」

塞ぐのには、硬さも大きさも、必要ない」

「……といつても、もう、聴こえていないですよね」

「貴方……目が不自由な方なんですネ。」

頼りにしている耳を奪われて、さぞ、恐ろしいでしょうけれど……」

「ゆるせない。……逆に……。」

目が見えないつらさ……貴方は人より、わかっているはずでしょう……？」

(……なのに、うばった……)

私のだいすきな、あの、まなざし。

「……ゆるさない……」

セシリアを耳から、耳管を通じて、喉へ。

「ゆるせ、ないッ!! ……絶対にッ!!」

そのまま、……空気の通り道、気道を塞ぐ。

「かはああっ!!」

敵の男の苦悶の声が聞こえる。

しかし、やめることなく、今の私にはできなかつた。できるわけがなかつた。

私の頭の中は、鮮やかな緋色一色に染められていた。

(……ゆるせない、貴方のことを)

(そして……じぶんのことも……)

*

*

*

「なッ!」

急に男がもがき苦しみ始めるのをスタープラチナの目が補足する。

おれは犬のスタンドから手を離し地上に降り立ち、すぐさま敵に駆け寄る。

(途中セシリアが飛んでいったが……)

よく見ると、男の耳に何かが嵌っているのに気づく。桃色のヘッドフォンのようなもの、が。

「これは……セシリア、か？」

男の顔色はもはや土色で、唇は真つ青だった。

「……ヤス！ おい、やめろ！ まだこいつにはいろいろ聞きたいことがある！ 殺すな！！」

呼びかけるも、そのスタンドは消える様子がない。

「チッ！ あいつブチ切れてやがるな……。オラア！」

仕方がないのでスタープラチナで引き抜く。

驚くほど簡単にそれはとれ、男は意識を取り戻した。

「ガッ、ハッ！ ハア、ハア……じよ、承太郎、か!?」

「これでタイマンだ……来いよ……」

「うおおおお！」

「……オラア！」

むかつてきた男をブチのめす。

「……ぐはあっ!!」

「安心しな……急所は外してある」

「……ニヤリ……」

しかし、あろうことか、不敵に不気味な笑みを浮かべる男。

「!? なッ!」

瞬間、男は自らのスタンドで、自分の頭を貫いた。

「きさま、なんてことを……」

「承太郎……おまえ、このンドウールから仲間の情報を聞き出そうと考えてたろう？」

ジョースターの『ハミットパブル隠者』は考えていることまで感知してしまうからな……。

しゃべるわけにはいかないよ。あの方にとって少しでも不利になることは……。

くく、くくくく……」

「……DIO……!」

*

*

*

全員車に乗り込み、病院のある街に急ぎ向かう。

応急処置はほどこしたものの、花京院の意識はまだ戻らない。

わしの波紋で治療してやればよかったのだが、視神経は繊細なもの。下手なことをするわけにはいかなかった。

車内には重苦しい雰囲気漂う。だれも言葉を発せようとしない。

保乃は、なにかを思い詰めているような……そんな表情でうつむいたまま、自分の膝

を枕に横たわっている男をみつめていた。

「う、……あ……？」

沈黙を戸惑いの声で切り裂く。花京院が意識を取り戻したようだ。

「!? 花京院くん!!」

「……え！ な、なんだ……目が……!?!」

わしは落ち着かせるべく、花京院にゆつくりと状況を説明する。

「……君は敵から目に攻撃をうけたんだ。固定してあるが、動かさない方がいい。わかるか？」

「……。そうか。……そうでしたね……。わかります」

「今、車で病院に向かっている。痛むとは思いますが、大丈夫か？」

「大丈夫、です。ありがとうございます、ジョースターさん」

「うむ、もう少しの辛抱じゃ。がんばるんだぞ」

「……はい」

「……仁美さん？ そこに、いますか？ さつき、こえがきこえた……」

「う、うん……」

躊躇いつつも発された返事にその存在をたしかめると、男は唇を綻ばせる。

「よかった……。ちゃんと目が覚めたんですね。

なにも異常はないですか？ だいじょうぶですか？」

「…………ツ！」

「…………仁美さん？」

「…………ばかつ!!」

「…………え…………？」

「…………こんな、ときに…………わた、しなん、かの…………!!」

…………そんなことより、自分のツ…………!!」

ずっと我慢していたのだろう。堰切ったように、彼女の瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

「…………つく、ごめんね…………ごめんなさい…………!!」

私が、遅くて…………! 私の、せいで…………ツ!!」

車内に響く、痛々しい彼女の慟哭。

それを柔らかな声音がやさしく包み込む。

「…………ないているんですか？ まったく、なきむしだなあ。

しかも、なにを謝っているんですか。

これは単に僕が間抜けだっただけなんですから、あなたが気にする必要なんてないの

に」

「でも……!」

「……だいたいようぶだから、なかないで。」

……その方が、僕は、つらい……」

「……あ……」

「今ちよつと、拭つてあげられないし、ね。……ほら」

そういつて、空をきる、男の手のひら。

それを彼女は両手で掴み、いとおしそうにとじこめる。

「……わかりましたか?」

「うん、……うん。わかっ、た」

懸命に涙をとめ、なんとか微笑もうとする彼女。

「……。すみません……。だいたいようぶ、なんです、すが、すごく、眠い。……少し、寝ます」

「花京院くん!」

「……」

「……眠つたか?」

「はい、……そうみたいです」

「鎮痛薬が効いたんじや。心配いらんよ」

「はい……」

目尻を拭う。その様子を見て、わしはある決意を固める。

「よし、急ぐぜ！」

「急ぎつつ、ゆっくりだぞ！ 振動で負荷をかけんようにな！」

「わーつてるよ！ 難しいこというな！ おまえこそしつかりナビしてくれよ！」

運転席と助手席で、ポルナレフとアヴドウルが騒ぎ出す。

きつとやつらも少しだけ、安心したのだろう。

*

*

*

「次を、右だ」

「あいよ」

ハンドルを握るポルナレフにわたしは助手席から道の指示を出す。

ともかくにも、一刻も早く病院に到着するべく……だ。

「ところで……保乃。おまえさん、修行というのは……本当なのか？」

そんな中、わたしも同じく非常に気になっていたことをジョースターさんが彼女に問

いかける。

「はい……。信じてもらえるか、わかりませんが……」

「……あんなもん見せられたら信じざるをえねえよ。なんだ、あれは？」

承太郎も疑問を口にする。

「夢に、ご先祖様が現れて……」

そうして、彼女は話し始めた。

占いのわたしですら、なお信じがたい、事柄を。

「おそわったんです。」

セシリアは、敵の『殺意の波動』……殺気とか悪意とかそういうもの、でしょうか……。

それを感知しあらかじめ教えてくれるそうなんです。

そして、願えばその場所を瞬時に護ることができると……と」

「なんと！ 攻撃を『先読み』して護ることができると……そういうことか?!」

『予知防御』。そのあまりの神秘性に、つい、おおきな声を出してしまふ。

「はい。とはいえ、私が未熟なのでそのシグナルを受け取るのにすごく集中力とスタン

ドパワーが必要なんですが……」

頷き、彼女は続ける。

「しかも、どういうかたちで、とかまではわからないんですけどね。」

『攻撃がくる』ということだけで」

「……いや、じゆうぶんだろ」

「ああ。本当にさっきの護りはすごかった。

すごいスピードで、次々と……」

承太郎とともに率直な感想を呟くと、彼女は首をすくめ、遠くをみつめる。

「……さっきのは、正直でいきすぎです。

自分でもびつくりするくらいに……。

頭の中が、真つ赤で、でも、冴えわたっていた……」

先程のこの娘の様子を思い出す。

たしかに、なにやら神がかっているという感じはあった。

「おまえ、完全にプツツンしてやがったからな……」

「……ごめん。あのときは、もう、きこえてなかった」

「……まあ、無理ねえ、な」

「……ありがとう。」

形を変えたりといった応用のことも習いました。

護りにしか使えないわけでは決してなかった。

そもそもよく考えたら、ぶついたり、はね飛ばしたりはできていたわけですもんね

……」

(そうか！ ……したのだな。『成長』を！

まさか目の当たりにできる日が来ようとは……)

感動を感じる。と、同時に……思う。

(……しかし、それは……もしかしたら……)

男を目の端にとらえる。

スタンド……精神の、成長……とは……かくも……。

(……いや、やめよう)

新たな能力の開花。……めでたいことなのだから。

(……水をさすようなことを考えるべきではない、な)

「そっかー！ すげーじゃねーか！ なんでもできんじゃん」

そして、己とは対照的に、横からポルナレフの能天気な声が飛んでくる。

「ふっ……！」

(今回は、わたしがこいつを見習わなければならんな……)

「いえ、もちろん限界はありますし、今までの制限はそのままなので、うまく考えて使わ

ないと」

「そうだな……」

そこでようやく、街が、そして、待望の病院が見えて来た。

「おまえたちはホテルの手配を頼む。

あとで迎えに来てくれ。また連絡する」

「わかりました」

ストレッチャーで運び込まれる花京院。

付き添うべく歩き出したジョースターさんが我々に向けいう。

と同時に、不安そうに、なにかを言いたげにその様子みつめる彼女に声をかける。

「保乃。……君も、ついておいで」

*

*

*

「本日は眼科の担当医が不在でして……」。

申し訳ありませんが詳しい検査や治療は明日の朝になります。

応急的に抗生物質と痛み止めの点滴、裂傷の処置をしています。

今晚は薬の影響で目は覚めないでしょうが、どちらにせよ、しばらく入院ということになるかと思えますので……」

「わかりました。よろしく頼みます」

「ありがとうございます」

担当してくれた先生にジョースターさんとお礼を言う。

（しばらく、入院……か）

そばにいたい。こんな状態の彼を置いて、離れたくない。

しかし、私にそれが許されるのか。

そもいかなんことは、頭では理解していた。

「……さて。君が眠っている間に、財団と接触ができてな」

改まった様子でジョースターさんが切り出す。

「ホリーの容態も、聞くことが、できた。

……もって、あと、2週間、だそうだ……」

「に、2週間……!」

短い。あまりにも。時間がないのはわかっていたことではあるが……心臓が嫌な風に脈打つ。

「我々は先を急がねばならん。

だから、……視力が戻るかどうかはともかく……、

……花京院はここに、置いていかざるをえない。

……わかつてくれるな？」

「……はい」

やはり、そうか。ぎゅつと、眼を閉じる。

そんな私にジョースターさんは、やさしく、こう問いかけた。

「……どうしたい？」

「えっ？」

「君は、どうしたい？」

「……わ、私は……」

自分もここに残りたい。しかし、言うのは憚られた。

完全なる私情であるし、それに、敵の本拠地真ただ中にこれから皆向かっていくの

だ。

先程の闘いからもわかるが、これからもつと敵の攻撃は熾烈になっていくに違いな

い。

そんなところで不在でまた皆を護れなければ、私が日本からついてきた意味がない。

「……」

言い淀んでいると、ジョースターさんはニカツと笑い、こういった。

「……わかった。では言い方を変えよう。君に、お願いしたいことがある」

「おねがい？　なんですか……？」

「……ここに残って、こいつのそばに、いてやってほしい」

「え!？」

「オホン！　護衛だ!!　このことをかぎつけて、敵の刺客がやってくるかもしれん。

そいつらから、花京院を、護ってやってほしいのだ」

たしかに、その可能性は否定できない。

目の見えない……こんな時に敵に襲われたら、いくら手練れの彼といえども……背筋に冷たいものが走る。

「……それに、こいつは決して自分からは口にしないだろうが……、

きつと、すごく不安だと思うのだ」

「あ……」

まっすぐに私にむけられる、穏やかで慈愛のこもった瞳。

「それを、君に……支えてやってほしい」

打たれた部分に手を当て、深く、息を吸い込む。

「……。私に、できるんでしょうか……。？ そんな……」

「……。君にしか、できません」

ポンと肩を叩かれる。

その手は、とてもあたたかかった。

「……わかりました。……そうさせて、もらいます。

ありがとうございます……ジョースターさん」

熱くなった眼頭から零さぬよう、どうにか、返事をする。

「うむ。決して無理をさせぬよう、監視もな。頼むよ」

「はい！」

「おそらくこいつは遠慮すると思うが……。気にせずしっかり世話を焼いてやってくれ。

嫁さんのごとくな。にしし」

「……。う、は、はい……」

ウインクをしたのち、真剣な顔つきに戻り、ジョースターさんは続けた。

「……。そしてもうひとつ。考えたくはないが……」

万一、彼の視力が、もどらなかつたら……。そのときは……」

「……」

「……。ふたりでいっしょに、日本に帰りなさい」

「なッ！」

「……わしは、少し、後悔しておる……。」

君たちを、わしらの血統の因縁に、巻き込んでしまったことを……」

「そんな！……巻き込むだなんて、そんなこと……！」

他人みたいなこと、言わないでください！

私は、もう……ただ、みんなのこと、たいせつで……、護りたくて……。

だから……！ 闘うのは自分の意思で、自分のためなんです！

……花京院くんだって、きっと……いえ、絶対に、そうです！」

「わかっておるよ……ありがとう。」

わしも君たちのことは、もう、本当の孫のように思っておる。

……だからこそ、じゃ。君たちの身に、これ以上なにかあるのは……

わしにはとてもじゃあないが耐えられん……」

「ジヨースターさん……」

「こやつは、目が見えずとも闘うと、いいかねん男だ。」

しかし、それが通用するほどDIOは甘くはない。

無理やりにも、連れて帰ってくれ。頼んだぞ」

「……」

「ああ……頼むからそんなかおをせんでくれ。

もちろん、万一の時の話だ。今は回復を祈ろう。な？」

「……はい」

「では、わしは迎えを呼ぶ。君は？ 今晚はもう目が覚めんようだが……」

「……。ここにいても、いいですか？」

「もちろん。」

では君の荷物も持ってくるように言っておこう」

あなた……なら、かまわない

「……い。わ……した」

(……誰かの、話す、声がする……)

「ハッ！」

意識が、覚醒する。

しかし、普段通りの目覚めの瞬間とはかけ離れたそれが僕を襲った。
(真つ暗だ。……何も、みえない。いや、目が、開かない……?)

困惑の中、まだぼんやりとする頭で必死に思考を巡らせ、思い出す。

(ああ、そうか。僕は……あのスタンド使いに、目を、やられたんだった)

「……」

(今は？ 朝……なのか？ それとも……?)

(……は……どこだ……?)

(……わから、ない、なにも……)

闇が、自分に迫ってくる。そんな感覚に押しつぶされそうになる。

「……花京院くん」

そこへ、声が、ふつてきた。一筋の光が指すように。

「仁美、さん……？」

「……うん。おはよう」

おだやかで、あたたかな。

「おはよう、ございます」

「気分はどう？ 気持ち悪いとか、そういうの、ない？」

「……はい。だいじょうぶ、です」

身体の調子を確認しつつ、それを伝えつつ……ゆつくりと、起き上がる。

「よかった」という安堵の声とともに、彼女は僕の頭に渦巻いていた疑問の解答を述べてくれた。

「ここは、アスワンの病院だよ。」

昨日あれからここに着いて、今は翌朝の、7時すぎ」

まるで、実はテレパスなんじゃあないかと疑うくらいの確に。

……肝心なことにはてんで鈍感なくせに。

そんなふうには不思議におもっていると、シャツとカーテンを開ける音。同時に太陽の光が降り注ぐ感覚を肌を受けた。

「今日も、いい天気だよ」

「ええ、そうみたい、ですね。」

日差しを、……ぬくもりを、感じる」

「……そっか」

彼女がふつと微笑んだ……ような気がする。みえないけれど。きつと、そうだ。

（昨日、あれから……ずっと、ついていてくれたのだろうか）

よく考えたら、この場にいるのは彼女だけなのだろうか？ それすらもよくわからない。

い。

「他の皆は？」

「街のホテルに泊まっているよ。あとで来ると思う」

「そうなんですか」

「あ、そうそう。さつき看護師さんから連絡があつて、財団の派遣してくれた眼の専門のお医者さんが到着したから、今から診てくださるつて」

「！ わかりました……」

（そう、か。……僕の目は……）

もしかしたら……、このままずっと……)

つい、再び薄暗い闇に囚われてしまいそうになる。そのときだった。

「はっ！」

「……寒くない？」

彼女がふわりとシヨールのようなものをかけてくれた。心地よいやわらかさに包まれる。

「……は、はい」

「あれ？ もしかしてむしろ暑い？」

「いえ。ちょうど、いいです」

「そう？ また寒かったり暑かったりしたらおしえてね」

そんなやり取りの中、室内にノックの音が響く。誰かが入ってくる気配とともに、聞いたことのない声がした。

「失礼するよ。遅くなって、すまないね。」

……患者は、君か。

傷以外の体調はどうだい？」

「はい、それはなんとも」

「そうか。では傷の方をみせてもらおうよ。包帯を外す……が、目は閉じたままだ。いい

ね?」

「はい」

診察を受ける。

「……………ふむ」

拍子抜けするほどあっさりとはそれは終わったようで、再び僕の目には包帯が巻かれる。

「終わったよ。君の眼は……………」

「……………」

「……………」

固唾を?んで答えを待つ。

傍らで見守ってくれている彼女もどうやら同じようだ。

「……………大丈夫だ。幸い切れたのはまぶたと眼球の一部。瞳に傷はついていない。

切り傷がふさがれば、元通りだ」

「つ! ほ……………」

「ほ、ほんとうですか!!ほんとうに!?

彼の目は……………ちゃんとみえるように、なるんですね!?!」

僕が言葉を発そうとする前に彼女に先を越された。めずらしくすごい勢いでドク

ター詰め寄っているようだ。

「あ、ああ、大丈夫だよ。安心したまえ。」

「ほんとうですか！ ……よ、よかった！ ……よかった……」

「仁美さん……」

声をつまらせる。なきむしなこのひとは、きつとまた……。

じわりと胸の中、いっぱいひろがる。

「……ええと、それで、退院まで、何日くらいかかりそうでしょうか？」

その想いを噛みしめながらも抑えつつ、僕は、ドクターに問う。

「一週間、といったところかな。」

安静にすればするほど早い。とにかく、動かさない。これに尽きる」

（一週間……）

脳内で行われる瞬時の計算。

あのとき聞いた、ホリイさんの命の期限は、2週間。

きつとD I Oの奴と対峙するのも……

（ぎり、ぎり、間に合うかどうか、ぐらいか……）

「……今は考えないで、しっかり治そう。ね？」

「はっ！」

「またも心を読まれてしまう。そして、それに賛同する声が医師からもたらされる。

「その通り。焦りは禁物だ。ゆっくり傷を癒しなさい。いいね。」

「……はい」

大人しく返事をする僕。それ以上は何も言われず、医師の注意の対象は隣の彼女に移る。

さりげない爆弾とともに。

「わかつていようだけれども、奥さんも、くれぐれも彼に無理をさせないように。よろしくね」

「へっ!? お、奥さつ?! わ、私のことツ?!

わ、私は、そ、そのツ! ち、ちがうんです!」

「そ、そうです。僕たちは……」

僕たちの否定をまったく意に介さず、あっさりと言わす医師。

「……そうなのかい? まあいい。どうせ似たようなもんだらう?」

ではまた明日。消毒と傷の様子を診に来るから。

しつかり食べて、抗生物質はちゃんと服用しておいてね」

「あつ、ありがとうございます。」

そうしてドクターは去り、部屋にはなんともいえない空気が漂う。

「な、なんか、ごめんね……」

「いや、その、こちらこそ……」

「じ、じゃあ、私、ジョースターさんに電話してくるね！」

「は、はい、お願いします」

*

*

*

「おお！ そうか！ それはよかったのー！」

「はい、本当に！」

「ご苦労さん。今からわしらもそっちに向かう。またあとの」

「はいー！」

先程もたらされた朗報。失明を免れた、ということをはじめとする彼の怪我についての医師の診断や治療の見込みをジョースターさんに伝え、電話を切り、彼の病室に戻る。

(……セシリア、お疲れさま)

部屋に入る前に忍ばせておいたセシリアを戻す。今のところ異常はないようだ。

「おかえりなさい」

ドアを開けるやいなや、向けられる微笑みとひとこと。

「……た、ただいま」

そういうのじゃあないなんてわかつているのに、こんな些細なことについて意識してどきどきしてしまう。さっきの先生のあのとんでもない単語のせいだ、なんて責任転嫁をしつつ、それを悟られないように誤魔化すべく、いう。

「今からみんな来るって。目のこと伝えたら安心してたよ」

すると、うつむき、彼はこんなことをいう

「そうか。皆にも、迷惑をかけてしまった。申し訳ないな……」

「……。今……なんと？」

聞き捨てならない（半ば予想通りでもあったが）その台詞についてピクリと反応してしまふ。

「え？ 皆に謝らないとなつて……」

どうやらまつたくの無自覚のようだ。……これも予想通りだけれども。ちようどいい機会なので、そっくりそのままお返しをすることにする。

「……私たちは、あなたが怪我をして、迷惑だと、謝つてほしいと……？」

そんな風に、あなたは思っているわけですか。そうですか」

「あ………！」

「ふふ……いつかの仕返し！」

「ふっ……。」

「そうか。……そうでしたね」

「そうだよ！ もう。謝るだなんて……」

「……私たちを、みくびらないでいただきたい！」

「それも僕の真似ですか？」

「に、似てない……！ ぷっ！ ふ、ふはははは！」

「ええー？ けっこう自信あつたのになあ……。……ふふっ！」

そこへ再びノックの音が響く。

「おはようございます。朝御飯ですよ」

看護師さんが朝食を持ってきてくれたようだ。

トレーを置き、私をみると、

「あ、大丈夫ですね。ではまた終わった頃に下げにきますね」

「え？」

何が大丈夫なのか、私はさっぱりわかっていなかった。

「わあ、美味しそうだよ」

「ええ、いい匂いですね」

「……」

「……」

暫時のあと、ようやく気付く。

（あー、そ、そつか！ そりゃあ、そうだよね……）

手探りでなんとかしようとしている彼。

（無理だよ……ど、どうしよう……）

それこそお嫁さん……はおろか、恋人でもない自分が、はたしてそんなことをしてもいいものか。勇気がでない。

（今からでも看護師さんと呼ぶほうがいいのかな……？ いや、でも……！）

——あいつはきつと、遠慮……——

昨晚のジョースターさんの言葉が頭に響く。

おまえは何のためにここにいるんだ、という己からの叱咤とともに。
意を決し、震える手をスプーンへと伸ばす。

「あの、じゃあ、その、……はい」

「え？」

「……口、開けて？」

「っ！は、はい……」

（こ、これはッ……！）

「……」

（……わぁーッッ！！）

表面的には無言であるが、其の实、私の心中はまさにもはやてんやわんやの大騒ぎだった。

（……は、恥ずかしい……とてつもなくッ！！）

「……」

（い、意識するからダメなんだよね。そ、そうだ。うん）

「……」

（……無理）

「え、えつと、次はどれがいい？メニューはね……」

「では、……で」

（恥ずかしい……けど、なんか……）

「おいしい？」

「……はい、とても……」

（……うれしい、かも）

じわりと、胸によろこびが広がる。

(しかも、どうしよ……なんだか、可愛……。ハッ！なんてことを！)

「……」

(……恋人でも、奥さんでも、ないけど……。今だけ、ゆるしてね)

「あとはデザートだよ。プリン。今食べる？」

「はい」

「じゃあ、はい、あー……」

瞬間、悲劇は起こる。

「よおー！花京院！ おまえ、よかったなあ！」

彼の口とともに、ドアが開いた。そしてよく知る陽気な男性の声が響く。

「……あッ！」

「あ……ッ……」

部屋の時が、止まった。

「……。すまん。邪魔したな」

「わあー！」

「ち、ちがうんです！ ま、まって、ポルナレフさんーッ！」

*

*

*

「しかし、本当によかったなあ！ 失明せずにすんで」

「まったく。安心したよ。」

ポルナレフとアヴドウルさんの声。

「ええ、幸い瞳のところを切られたわけではなかったらしいからね。

数日したら包帯もとれる。

そうしたらすぐ、君たちのあとを追うよ」

「ああ」

(間に合わせる……必ず！)

そんな僕の決意をよそにポルナレフがいう。

「あれ？ そういえばイギーは？」

「え？ あいつも来てるのかい？ 病院に犬つて……」

「勝手についてきたんだ。車に飛び乗ってきてな」とアヴドウルさん。そこに承太郎が

答える。

「犬なら中庭だ。子供のおやつ奪って泣かしてんの見たぜ」

「……なんてやつじゃ。承太郎、おまえも見たなら止めるよ……」

孫のあまりの傍観者っぷりを祖父が嘆く。

すると、犬と聞いて我慢できなくなつたのか、そわそわとした口調で仁美さんがいう。

「……イギーさんつて？ 犬？ 犬がいるんですか？」

説明するアヴドウルさん。

「ああ、そうか。君は初対面のあのとき眠っていたんだつたな。

新しい仲間……と聞いていいのかわからんが……助つ人だ。人じゃあないが。

スタンド使いの犬だよ。

しかし、助つ人になりえるのか……性格に、難がありすぎるんだがね」

昔、イギーを捕獲したのはアヴドウルさんらしいが、そのときの苦労はいかばかりか。

今のセリフにも重みがあつた。

「つていうか、おまえ、気づいてなかつたのかよ……」

「車に乗つてただろ……」。

しかも昨日の鬨いの時、おれがどうやって空飛んでたのかとか疑問に思わなかつたの

かよ……」

ポルナレフと承太郎があきれたような声を出す。

それに対しやっぱりとぼけた返答をする彼女。

「……え？ あつ！ あれがイギーさんのスタンドなんだ……。」

い、いや、なんか新しい能力なのかなーって。

スタープラチナって、その気になれば空ぐらい飛べそうだし……」

「んなわけあるか……。」

天然は修行後も相変わらずのようだ。

まあ、スタープラチナがなんでもできそう、というのはわからなくはないが。

そんな彼女にアヴドウルさんが助け舟を出す。

「まあまあ。それだけ必死だったんだよな！」

「あ、そつか！ そうだな。それどころじゃなかったもんな！ おまえ」

「そうじゃなあ。にしし。」

「？」

（うん、そりゃあ、そうだよな。戦闘中だし。集中しているだろう）

「う……あ、あの、じゃあ、私、イギーさんに挨拶してきますっ!!」

しかし、彼女からはあわてふためいたような声が出る。なぜだか、この場から逃げ出

そうとしているようだ。

「それならこれを持っていきなさい。」

そんな彼女に、シユツとアヴドウルさんが物を投げる音がした。

「コーヒーガム。イギーの好物だ」

「そうなんですか。ありがとうございます。いつてきます！」

パタパタと彼女の足音が遠ざかっていく。

それとともにポルナレフやジョースターさんが思い出すかのように口々にいう。

「でもすごかったな。あいつ。あのとき」

「ああ。一晩でなあ。見違えた」

「そうなんですか!?! あれから、どうなったんですか?!」

「ああ……」

そして、僕が攻撃を受けたあとの戦闘の概要を皆が教えてくれた。

「……と、いうわけだ」

「素晴らしいスタンドさばきだった。美しかったよ」

「そう、か。それは、見たかったな……」

（そんなに……強く、なっただんだ……）

いいことなのに。嬉しいはずなのに……

なぜか、胸中に一抹の寂しさを感じている自分が居た。

知らない間に起こった彼女の変化に戸惑っているのだろうか。

そんな複雑な想いを馳せていると、ポルナレフがまたいつもの調子でいう。

「べつに、またいつでも見れるだろー」

「……ああ。そうだな」

今はなんだかこいつの軽口が心地よかった。

「しかも聴覚に頼っているという敵の弱点を的確に突いてな」

「うむ。見事じゃったわい。」

孫の成長を見ているようで、じじいは感激してしもうたわ」

「ほんと、冴えっ冴えで……すげー怒ってるのに冷えっ冷えだつたもんな……」

「ああ。ぶちきれていた」

「そ、そうなのかい？ どうして……そんな……」

「……」

そこで、全員が急に黙る。

「どうしたもこうしたも……」

「……ええ？」

「おまえの目がやられたからに決まってるだろーがつ！」

ポルナレフにヘッドロックをかまされる。

「！ああ、そ、そうか……。そうなのか……」

いわれて、ふと思いが当たる。

(そういえば、以前彼女が真に怒っているのを見たのは、アヴドウルさんが倒れたときだったつけ……)

「……そうだな。彼女はそういうひとだ。

仲間が傷つけられるのを、なによりも嫌う……」

「……」

再び、すこしの沈黙。そして、あきれたような声が次々とあがる。

「ああ、まあ、うん、そうじゃよ。そうなんだが……」

「こいつ、わかってねえよ……。しんじらんねー！」

「もうほつとけ……」

「なんと！ 麗しい！ 青春だな！ がはははははは！」

「え？ なに？ なんだよ！ おい、どういう意味だ!? ねえ？」

結局その後何度問うも、みんなはそれに答えてはくれなかった。

そんな中、珍しいことに、承太郎が驚いたような声を出す。

「うおッ……！ ……ムツゴロウさんか、あいつは……」

続いてポルナレフ。

「なになに？ 中庭になにかあんの？ ……って、うわ！ うそだろ!？」

イギーが、保乃の膝で寝てるー！」

どやどやと窓とおぼしき方向に詰め寄る残る大人たち。続々と驚きの声をあげる。

「な、なにい！」

「ほ、ほんとうだ！」

僕もおもわず叫ぶ。

「な、なんだと!? 膝あ!? うらやまけしからんっ！ あの、犬ー！」

すると承太郎からまたもあきれた声が聞こえてくる。

「……そつちかよ。……おまえだつて乗つてただろ……」

「は？」

「ここに来るまでの車で、おまえ、あいつの膝枕で寝てたんだぜ」

「な、なんだつてえ！ そーいえば、やたらやわらかかった……！」

し、しまった！ ほとんどおぼえていないっ！

くそっ！ もつたいないことをッ！

悔やむ僕にポルナレフがいう。

「この、むつつりめ……」

「はあ!? 失礼だな! 僕は非常にはつきりしているツ!!」

「またもやそこかよ……。開き直んなよ……」

そんな僕たちにむけられる、大人ふたりの眩き。

「ふふ……。いつもどおり、ですね」

「ふっ! ああ。そうじゃな」

「さて、名残惜しいが……。そろそろ我々は出発せねばならん」

「……はい」

「花京院、また君と合流する日を楽しみにしている……」

が、焦らず、しつかりと傷をなおすんじやぞ」

「はい」

「くれぐれも無理しないように。気を付けてな」

「はい。ありがとうございます、アウドウルさん。そちらも気を付けて……」

「ついでにスケベなところも治してもらいな! けけけ!」

「うるさい。だったらまず誰よりも入院すべきはおまえだ、ポルナレフ」

「へへ、じよーだんだよ。……またな」

「フツ。またな」

「……じゃーな。……早いところ治して、戻ってきな」

「……ああ」

「よし、では、お大事にな」

「はい」

「……いって、しまったか。」

とうに閉まってしまったドアに向け、独り、呟く。

信頼している、大切な仲間たち。そして……。

(……離れてしまう前に、なにか言葉を交わしたかった、な。

……って、そんなに長い間、離れるわけでもないじゃあないか……)

不思議なものだ。出逢ってまだ、たかだか1ヶ月ほどなのに。

それだけ、自分の中で彼女の存在が大きくなっているということなのか。

(もつと、気を付けろとか、無理するとか、念を押しておけばよかった。

みんなと一緒になのだから、そんなに心配することも、ない……か。でも……)

「……」

そばにいられない我が身を、もどかしく思う。

よく考えたら、今朝の礼すら、言いそびれてしまったことに気づく。

「ふふ……、後悔ばかりだな」

すべては怪我なんかをしてしまった自分が悪いのだ。

自嘲めいて笑う。そのときだった。

「ただいまー！」

「……。……は？」

「イギー先輩、かわいいね！ いや、カッコいいって言わないと、また怒られちゃうか！」

「……はあー！ ツ！」

*

*

*

「へへ！ 今頃あいつ、たまげてるぜ！」

「つたく、しょーがないやつじゃ……」

「いつもの仕返しだよ！」

「まあ、面白いからすべてよし！ にしし」

「はあーあ、でもいいなあ、あいつ。」

オレもすきな女の子にアーンとかさされてみてーよお！」

*

*

*

「……な、なんで？」

（ただいまって、どういうことだ？ みんなと一緒にいったのではないのか……？）

「え？ どうしたの？」

首を傾げ、きよとんと丸い瞳をこちらにむけているであろう台詞を僕にいう彼女に重ねて問う。

「そちらこそ、どうして……？ 忘れ物ですか？」

「あれ？ もしかして、ジョースターさんから聞いてない……？」

私、ここに残ることになったんだけど……」

「は!? な、なぜ？」

「……護衛じゃ！ ジョースター一行で唯一の遠隔操作型スタンド使いを葬り去るチャンス……」

それを敵が見逃すわけがない！ ……だそうです」

またも似てない物真似を披露する彼女。

最近の彼女の中の流行りなのか。が、やはりちつとも似ていない。

「あと、見えないあいだ不便だろうから、身の回りの手伝いと、無理しないように監視も頼む。」

「……………だつて」

「そ、そんな！ 僕は……………大丈夫ですよ！」

「……………やっぱり……………めいわく、かな……………？」

瞬時に彼女の声のトーンがさがる。

（ハッ！ い、いかん！ 明らかにしゅんとしているッ！）

見えなくてもわかる。つい、僕は叫んでいた。

「そんなはずない！ うれしいに決まつて……………っ！ あ……………」

「！ ほ、ほんとに……………？」

「う、あ……………、は、はい」

「よかつた！ じゃあ！ なんでも！ なんでも遠慮なくいつてね！」

「……………」

（……………なんでそつちが、そんなに……………うれしそうなんだよ……………）

「……わかりました。では、まず……。いろいろ教えてもらいたいんですが」

「はい！　なんででしょう？」

気を取り直してそう告げると、大変元気な良い返事が返ってくる。

それにまた戸惑いを感じつつ、訊ねる。

「こ、この部屋って、個室ですか？　構造が知りたいんですが」

「そうだよ。個室。ジョースターさんがさすがの太っ腹で、一番いい個室にしてくれたみたい。」

今花京院くんがいるベットがあつて。その右背中側に窓。

左背中側に棚があるのでそこに荷物置いてます。あ、でも何かいるときは教えて。取るから」

「はい」

「右手側、もう少し行くと洗面台、そのとなりにトイレがあります。」

わお、水洗じゃん！　ってポルナレフさんが羨ましがってた」

「あの、トイレフェチめ……。しかし部屋の中にトイレあるんですね」

「ふふ、しかもシャワーまであるんだよ。すごいよね！」

「へえ。本当にいい部屋なんですね……。なんか申し訳ないな」

「ちなみに位置はトイレ、洗面台の対面にあるよ」

「ふむふむ」

「あと出入口はそこから右手にずっといったところで、あ、あと中央にソファアールとテーブルがあります。……ごめんね、こんなのじゃあわかりにくいよね」

「いえ。充分です。今度は、実際歩いてみるので。できれば解説をお願いします」

「了解。つて、あぶなくない？」

「大丈夫ですよ」

立ち上がる僕。

「……じゃあ、手かして」

「だ、だいじょうぶですって……!!」

「ダメ! 怪我したら意味ないでしょう!! いいから!」

「は、はい……」

またも珍しい強めの口調とともに手を取られ、肩に乗せられる。

「はい、じゃあ気を付けてね。ゆっくりだよ!」

部屋の中を歩き回って、実際の位置や物のありかを確認していく。

「……ありがとうございます。これでこの部屋についてはだいたい把握しました」

「ほ、ほんとに?! もうおぼえちゃったの?」

「やってみましようか？」

そういつて立ち上がり、洗面台にむかい、手を洗ってみせる。

「ほ、ほんとは……できてる」

「さすがに細かいことは無理ですけどね。これくらいなら」

「すごいなあ。あ！でもダメだよ！無理したら！」

(ふう……)

密かに心からの安堵とともに溜息を洩らす。

(よかった……。トイレが習得できたのは大きい……)

……手伝ってもらえて……できるか！

まったく、ジョースターさんめ……！)

恨み節をこの場に向ける。

「……」

(……ありがとうございます)

素直な感謝のきもちとともに。

休憩とおやつがてらに、といって、みんなが持つてきてくれたオレンジを彼女が剥い

てくれた。

甘酸っぱくておいしい。

「それにしても、すごかったそうじゃあないですか」

食べながら僕は昨日の戦闘について、尋ねてみることにした。

「？ なにが？」

「昨日の闘いで、目を見張る活躍だったんでしよう？ 修行の成果ですね」

「そ、そんなことないよ！」

「殺気を感じとって防ぐ……方法を身に付けた、と聞きましたが」

「うん。『殺意の波動』……口で言うのは難しいんだけど。なんかぞわつとする感じ……」

「？」

「ぞわつと……ですか」

わかるような、わからんような……。彼女は続けた。

「しかもまだ全然完全じゃなくて……練習中」

「まあ、そんなすごいことが一朝一夕でできるほうがすごいですから」

さらに、嬉しそうに報告してくれる。

「あ、そうだ！ あのね！ セシリアもほんとはいろいろできるんだって！ 形かえた

り……」

「ええ、それもききました。……どうとう、気づいてしまったのですね」

「え？ どういうこと？ 知ってたの？」

彼女が怪訝な声を発する。

僕は、迷っていた。

（でも、こうなったら、もう話したほうがよいか……）

「いえ、なんとなく……そういうことも本当は可能なだろうかと」

「な！ なんで?! だったら教えてくれたら……」

「言っただでしょう？ 他のことに使うってことは、あなた自身を護る機能はその間失われるわけですよ。危険が増してしまう。だから言わなかったんです」

「あ……」

「これからも……ほんとにはあまり使ってほしくない。正直」

「……」

「とはいえ、知ったからには使ってしまうでしょう？ あなたは……」

「う……」

「だから……『約束』、覚えてます？」

「……『誰かを護るのは、自分を護ってからにしてください』……？」

「そのとおり。」

なによりもまず自身の安全を確立したうえで、にしてくださいよ。

絶対。いいですか？」

「……うん。わかった」

それだけではなかった。実は密かにずっと考えていたことがあったのだ。

「そう、約束してくれるなら……。……やってみたいことがあるんですが」

「？ なに？」

「……、つていうRPG、やったことあります？」

「もちろん！ エンディングも全部みたもん！ ……あつ！」

「やってみませんか？ ……『連携技』」

そんなわけで、いろいろやってみることに。

もともと互いにゲームや小説が好きなのはある。ポンポンとアイデアが出てくる。

それを話し合うのは想像以上に楽しかった。

「ふう……。まあ、あとは実戦でつてところですかね」

「そうだね！ でも私はやっぱり基本的に練習が足りないなあ……。自主トレしよ」

「……前からおもってましたが、あなたって、考え方が意外と体育会系ですよね……」

「あつ！ もう夕方!？」

そんなことをしていたら、いつのまにか日が傾く時間になっていたらしい。彼女がいう。

「せっかくだし、ゆっくりしてもらおうと思ったのに……全然してない！」

「なんか訓練めいたことばかり……」

「フツ、まあ、いいんじゃないですか。けっこうのんびりしましたよ。僕は」

夕食……本日三度目のうれしくも恥ずかしい時間が終わったのち、のんびりと彼女が淹れてくれたコーヒーを飲む。

「ごめんね、インスタントじゃなくて……」

「いや、これはこれで僕は好きなんですよ」

「……ちがう飲み物と認識しているから、でしょう？」

「おお、なぜわかったんですか？」

「父が、言ってた。父さんも好きなの。珈琲」

「へー、そうなんですか。でもあなたはカフェオレ派ですよね」

「そう。……牛乳入れる派です。ブラックも飲めるけど、飲んでて楽しいのはカフェオレかな……。あ、今わかってないと思ってるでしょ？」

「いや、そんなことは……ありますけど」

「やっぱり！ 通のひとはすぐにそう言うんだから……」

「いいいえ。いいんですよ。好みなんだから。好きなように飲んだら。」

ただ僕は何でもかんでもミルクを入れたら、せっかくの香りやコクがぼんやりしてしまつてわかんなくなるんじゃないか、と考えているだけです。もちろんカフェオレに合うものにはいいと思いますけどね」

持論を述べる、と、こんな台詞が返ってくる。

「ほーら、すぐそうやって馬鹿にする……。やっぱり父さんと一緒」

「う……そうなんですか？」

「そうだよー。よく母さんをそうやってからかつてる……。」

なんかほんと、ちよつと似てる！」

そういつてカツプを片付けに行く彼女。

……よく聞く。

娘は父と似た男を選ぶ、と……。

まあ、このひとはそんなこと自覚なくいつているのだろうが。

(しかし、そうなると、いつか挨拶におうかがいする際には自分と対決するわけか……。

……つて、また、なにを考えているのか僕は。

「ただ先の話だよ……いや、それ以前の問題だろ……」

「さて、あとはどうする？」

「シャワー……はさすがに無理……というか傷にさわるからダメだよね」

「我ながら、見えないくせに器用に歯磨きをし終えた僕に、彼女がいう。」

「そうですね」

「でも日中暑かったし、タオルで拭くくらいはしたいよね？ 看護師さんにもらってくるね」

「はい、ありがとうございます」

「戻ってきた彼女からほかほかとした蒸しタオルが渡される。」

「はい、どうぞ。」

「……」

「……」

「……あの、そ、そこに居られると、やりづらいです……」

「はっ！ あっ、そ、そうだよね！ ご、ごめん!!」

「そうして彼女の気配が遠のく。と、思いきや再び声をかけられる。」

「ついでに着替えるよね。着替え、ここ……ここね。わかるかな？ 置くね」

「あ、はい。ここですね。わかりました。ありがとうございます」

「……じゃあその間に、私もシャワー浴びてきてもいいかな？」

「ええ、もちろん」

そうして僕は服を脱ぎ身体を拭く。

彼女の方かというと、なにやらごそごそしているようだった。

……が、そのあと、なんとも艶かしい音が聞こえてきた。

ファスナーを下げる音、衣擦れの音、脱いだ服を置く音まで。

慌てて声をあげる。

「ッ!? ちよつ、ちよつと待った！」

も、もしかして、もしかしてですが、あなたそこで着替えてませんか!?」

「!? なっ! なんで!? もしかして見えてる!？」

あちらからも焦った声が返ってくる。

「そ、そんなわけないでしょう! 音! 音で……」

懸命の弁解にあっさりとほっとしたような返事が返ってくる。

「そ、そうだよね。見えてないよね……よかった!」

「はあー!？」

(ちつともよくない！　いいわけあるか！)

そんな僕をよそに、準備を終えた彼女はシャワー室へ移動したようだ。水音が聞こえてくる。

(このっ……！　……このひとほんとに、全然、わかってない！　男というものを！　うおあー！)

最近やたら続いた眼福……水浴びやら透けていたりやら、生足やら……。

今思えば、やはりそれらはこの目に降りかかる災難の予兆だったわけだが……。

おかげで、リアルに現在の様子が想像できてしまう。

いや、むしろ音だけというのがより妄想を掻き立てる……。

しかも、視覚が遮られているせいか、音がやたらクリアに聴こえる……気がする。

(これ、は……このままでは、いかん……)

なんだこの生き地獄……いや天国。非常にまずい。

このままではもつとまずいことをしでかしてしまうことは確かだ。

見えないが……したこともないが。できてしまえる、そんな自信があった。なんてことだ。

(うおあああー！　誰か！　誰か僕をとめてくれ！)

*

*

*

「はあーあ、あいつら今頃とうとうやってんのかなあ……いいなあ」

「おまえ、そればつかだな……」

「おいおい、見えないのに……それはないだろう。」

「こないだ、わたしがあれだけお膳立てしてやったのに意味をなさなかったんだから……チツ」

「アヴドウル……おぬし、いつのまにそんなことを……」

「えー、でも、あいつが主導でがんばりや……いけるんじやね!？」

「……無理だろ……。……いや、花京院が教えりやいけるか……。」

「でもあいつも初めてだしな……ふーむ」

「やべー! いいなあ、初体験が病院で、年上の彼女がたどたどしくリードして、とか……」

「そそるなあ……!」

「わしゃ、ナースさんのコスプレがええのう……」

「おい! じじい! ……気が、合うな……!」

*

*

*

僕は助けを呼んだ……しかし、仲間はまだここにはいない。

いや、たとえいたとしても、まったく役に立たない。そんな気がした。今すぐくした。
(あああああ……！ どうしたら……！)

*

*

*

「……じゃあその間に、私もシャワー浴びてきてもいいかな？」

「ええ、もちろん」

彼の清拭中、目のやりばに困った私はそうすることにした。

(ええと、自分のパジャマと着替え……とタオルか。あとお風呂セット)

この部屋、シャワーがついてはいるが、実は簡素なもので、脱衣場がついているわけではない。

しかたがないので、部屋の中央。ソファアールのところで着替えることにする。

「……」

服に手をかけながらふと思う。

(見えていないとはいえ……。すきなひとの前で脱ぐって……。しかも相手も半裸……。)

……なんかいけないことしてるみたい……。父さん、母さん、ごめんなさい……。つて、そんな風に考えるのがまずいんだって！ もう！)

そんなやましい考えを必死に打ち消していると、後ろから声がとんでくる。

「ツ!? ちよつ、ちよつと待った！」

も、もしかして、もしかしてですが、あなたそこで着替えてませんか!？」

(う、嘘!?)

慌てて隠し、叫ぶ。

「なっ! なんて!? もしかして見えてる!？」

「そ、そんなわけないでしょう! 音! 音で……」

「そ、そうだよね。見えてないよね……。よかった!」

(びっくりした……。実は見えてるのかと思つた……。ならいいや)

シャワーの前に移動し、蛇口をひねる。

焦って体温が急激に上がったからだを冷ますように水を浴びる。少しぬるめでちよ
うどいい。

(……。だいたい……。こんなの……。見てもねえ。

……あ、もう一回見られたんだっけ……ああああ……！

先日の泉での苦い経験を思い出し、悶える。しかし過去は変えられない。全身を順番に洗いながら、胸にさしかかったところで思う。

（やっぱり……男のひとつて、みんな大きい方が好き、だよね……）

……花京院くんも……そうなのかな……。そりやそうだよね。はあ……）

（うちの家系、みんな貧乳らしいもんなあ……そんなとこまで代々伝わんなくても……。……今からでも努力したらなんとかなるんだらうか……。努力つて、何……？）

「ごめんね。自分だけ」

「いえ……」

シャワーと着替えを終え、ベッド上に佇む彼に声をかける。

心なしか焦燥したようなその様子に首を傾げつつ。

「あれ？　なんか疲れてない？　なにかあった？」

「……いいえ。まったく。僕もさっぱりしましたよ」

「？　そう？　あ」

そして、ぱっちりお召し替えも完了している……かと思いきや、あることに気づく。

「ボタンかけ違えてるよ。ちよつとまって……」

さすがに完璧とまではいかなかったようだ。

逆になんだか微笑ましくてほっとする。

そばに寄り、手を伸ばす。そこでさらに気づく。

(こ、これは！ は、はずかしいッ！)

彼のパジャマのボタンを外していく……。

(ちよっ！ なんか、これ、私、脱がしてるみたいじゃない……!?)

ひとつ外すたび、ちらちらと、厚い胸板や腹筋がみえてしまう。

(わあああ!?! どうしよ、見えちゃった！ 見ちゃった！ ぐ、ごめんなさい！)

今なら、かの魔術師様のスタンドに負けないのではないか……そんな業火を顔から出しつつ、正しい位置で今度はボタンをとめていく。

あつちは見えてなくて本当によかった……そう思いながら。

*

*

*

すぐそばに、彼女の、気配。

(こ、これは！ は、はずかしいッ！)

胸元に手がのびてきて、ボタンがゆっくりと外されていく……感覚。

(うつ……)

間接的に触れられている、この何ともいえないくすぐったい感じ。

そして、それがひとつひとつ外れるたび、揺らぎ、感じる。シャンプーの香り。

(……この腕を、少し、伸ばせば……)

抱き寄せ、とじ込めてしまいたくなる衝動を必死に抑える。

僕の脳内ではまたも理性と本能の戦争が始まった。

(だ、ダメだ！ 堪えろ!! いかん！ ダメだつて!! うおああ!!)

……結果から言うと、理性がかるうじて、辛勝を収めた。

「も、も、もう、あとは自分で！ 自分でできますから！」

「ハッ！ そ、そうだよね！ 軌道にのればもう大丈夫だよね！」

「……」

「……」

「も、もう寝ましようか」

「そ、そうだね！ そうしましょう」

「……つて、あなた、どこで寝るんですか？」

まさかこの隣に……そんなわけはさすがにないか。

「え？ その、……ソファア」

「……そんなとこじゃなくても、この病院、仮眠室とかあるんじゃない？」
僕が言いかけるとぴしやりという。

「……駄目。夜中に刺客がくるかもしれない」

「……ッ!?!」

さつきとはうって変わって発された静かで厳かな声。

どきりとしてしまう。

いつたいなんなのか、このギャップは……。

「そ、それはそうですが……」

「だいじょうぶ！ けっこう寝心地よさそうだよ！ 毛布もあるし。じゃ、おやすみ」

「！」

「お、おやすみなさい」

しかし、自ら提案したものの、眠れる気などまったくしなかった。

昨日今日で、思いも寄らない怒涛の展開……心安らかに受け入れろという方が無理だろう。

本拠地エジプト上陸。新たな強敵達の存在の発覚。旅の制限時間の再確認。

……この、目のこと。

極めつけに、こんなときにこんなところで、彼女と……ふたりきりで。

(いや、だから、そんなふうに考えるのがいかんのだろう……)

このひとは目の見えない僕を護るためにここに残ってくれているのだから。

ほんとうにけしからんな……我ながら)

頭に浮かぶ。

(……『護衛』、か……)

「仁美さん、……もう、寝てしまいましたか？」

ふっとおもったその瞬間、僕は声をかけていた。

*

*

*

「……もう、寝てしまいましたか？」

「ううん。起きていますよ」

ベッドから聞こえてきた彼の声に返事をする。

「……『セシリア』って、もともと、僕らが出逢った日の守護聖人じゃあないですか」

「うん、師匠が言ってたね」

「知ってます？ 他にも……」

目の見えない人を守護する聖女でもあるんですけど」
「あ……」

「ふふ、今の状況にぴったりのかなあ……なんて、ね」
「……」

思い出す。

あの人……たしか、ンドウール、といっただろうか。
苦悶の声を。

自分の中に、確かに存在した。
どす黒く、膨らんでいた……。
殺意を。

後悔など、していない。

そうだ。……かまわない。厭わない。

ただ……、隠したくはなかった。このひとに。
そんなじぶんを。

誤解されるほうが、嫌だった。

……例え、軽蔑されてしまうとしても。

「……そうなんだ。」

じゃあ、この名前、返さなきゃ、いけないなあ……」

「は？ どうして？」

「昨日の敵の……あの人が、目が不自由な人だったの」

「……そう、なんですか……。それで、あんなに聴覚が……」

「あの人のことを、私は、……殺めようとした」

「……」

「盲目の人を守護する聖人……『セシリア』、かあ。

……私、本体失格だもの。そんなの。

だいたい、『女教皇』……聖女様だなんて、笑っちゃうよ。

私、そんな綺麗な心、持ってなんかいない」

(でも……。それでも、いい。なんだって、かまわない。……私は……)

「……。すみません。すこしこっちにきてもらって、いいですか？」

「？ うん。……どうしたの？」

「何かと立ち上がり、ベッドサイドにむかう。

「手、貸してください。」

「え？」

「いいから」

「……………？ はい」

彼が差し出したてのひらのうえに、自分のものを重ねる。

「……………ハイエロフアント」

透きとおるような声音で相棒をよぶ、彼。

まっくらな部屋のなか、きらきらとひかる、きれいなて。

私のでのうえにそつとのせられる。

「……………」

「花京院くん……………？」

「……………かわっていいない」

「……………え……………？」

「あのとときのままで。出逢ったときと、おなじ。」

あなたの心は……………あたたくくて、やさしい……………」

「……………そんなこと……………ないよ。」

やさしい、のはあなただ。

わたしなんかじゃあない。

「僕の、ハイエロフアントは……………触れればすべてわかる。疑うんですか？」

「う……」

「……むり、しなくていい」

「あ……」

「いや、そうさせてしまったのは……」

……ごめん」

「っ！……ちがう！ いいの！ 私は……ッ！」

（護りたいの……！）

ただ、それだけなの！

「……。かわっていない……というのは間違いか」

「……え？」

「本質はなにも。……でも、……つよく、なりましたね」

「美しく、まっすぐに、かがやいている。まえよりも、もっと。」

「みえないけれど……いや、みえないから、よけいに……かな。……感じる」

「そのままでも、いい。むりしなくていい」

「でも、かわったっていいんだ。」

どちらだって、かまわない。

だって、かわらないから。あなたは」

「……っ！」

ああ、どうしよう、やっぱり……

「……ふふ、ふふふふふ……！ むずかしいこと、いうなあ……」

「そうかな？ かんたんなことだとおもうけど」

ほんとうに、このひとは……

「……ありがとう」

「……なんのことやら」

「ふふ……ううん」

「フツ……」

「おやすみなさい」

「ええ。……おやすみなさい」

Don't leave me

(……なんだろう？ ……あたたかい、感覚……)

「う……」

(……。ああ、そうだった)

目覚めとともに迫り来る闇。しかし、昨日よりはそれを落ち着いて迎え入れることができた。

「あ、起きた？ おはよう」

今朝もふりそそぐ、彼女のこえ。

「おはようございます」

「まだ6時だよ。もう少し寝ててもいいよ。先生来られたら、ちゃんと起こしてあげるから」

「……そうですか？ では、お言葉に、甘えて……」

今までの旅の疲れか、薬の副作用か、それとも……。

(……ああ、そうか。きつと、そうだ……)

僕の意識はあつという間に、再び眠りの世界に吸い込まれていった。

*

*

*

眠ったようだ。規則正しい寝息が聞こえてくる。

(よく、眠れるといいな。……さて)

起こさないように細心の注意を払いつつ、先程と同じように手のひらを彼の眼の上にかざす私。

(……この『おまじない』、ただのおまじないじゃなかったんだなあ)

ご先祖様の言葉を思い出す。

——「そうそう、あなたの、あの『おまじない』なんだけど」

「え？ おじいちゃんが教えてくれた『傷が痛いときには手をかざして深呼吸』って、あれですか？」

「ええ。あれには治癒促進効果がちゃんとある。まあ、微々たるものだけど。

誰かが怪我をしたらやってみるといいわ。あ、ただ、神経系の損傷にはだめよ」

「そうなんですか!? いたいのいたいのとんでけ〜! 的なものかと思ってた……」

「一体なんなんですか? これ」

「えーと、うん、まあ、そのあたりの理由はそのうちわかるから。」

「だまされたとおもってやってみなさいな。」

「それにしても代々、なんて面白いのかしら……まあ、わたしもひとのことはいえな
いけれど」

「?」

「気にしないで。こつちの話。」

「……ああそうね。」

「困ったことに顔なんかだけじゃあなくて、心意気が格好いいのよね……」——

「(こんなに早く、その機会が来るなんて……来てほしくなかったけど)」

「(彼が寝ているときなど、昨日から隙あらばやってみているが、効果はいかほどのものか。)」

「(きつと彼女がそういうのなら、必ず意味があるのだろう。そつと祈る。)」

「(……すこしでもいいから。……痛く、ないように。つらく、ないように……)」

「(早く治りますように……)」

(……ハッ！)

暫くの間それに集中しきっていたが、部屋に響くノックの音で気づく。

「やあ、おはよう」

「あ、先生。おはようございます」

「おや？ 旦那様は、今日はまだ眠っているようだね」

「はい。つて、だ、だから！ 私たちは夫婦じゃ……！」

「ふふ、そうだったっけ？ 忘れてしまったな」

「もう……！ か、花京院くん、起きて。先生来られたよ」

「ん……あ、ああ。すみません。おはようございます」

「ああ、おはよう。よく眠れたかい？」

「はい、今日はとても」

「それはよかった。では、傷を診せてもらおうよ」

「……はい、終わり。順調だね。」

「というか順調すぎるよ。君、回復力すごいな。何者だい？」

「え？ そうなんですか？ そこはいたって普通の人間……のはずですが」

診療を終えた先生の問いに、とつても真面目に答える彼。ちよつとおかしくなる。

ほんとは『普通』ではない気がする。

スタンド使いとかそういう意味じゃなくて。こういうところが。

こつそりとにやにやしている私をよそに先生は続けた。

「まあ、いいことだけどね。この調子なら、あと2、3日で包帯がとれるかもしれない」

「ほんとうですか!？」

声を揃える私たち。

(よかった!。もしかして……ちよつとは、効いたのかな)

自分の手のひらをそつとみる。

(ありがとう、……おじいちゃん)

そんなことを思っていると、先生がまたとんでもないことを言い出した。

「いやー、すごいな!。若いからかな?。それとも、彼女の愛情のこもった看護のおかげ

かな?」

「う!?。そ、そんなことつ!」

顔が熱くなる。そんな私をみて、なにかを彼に囁く先生。

よく聞こえないが、熱を逃がすのに必死で、私はそれどころではなかった。

*

*

*

「……君のいいひとは、可愛いね。からかうと、反応が実におもしろい」
「でしよう？」

今もどんな様子なのか、目に浮かぶようだ。

「でもドクター？」

「なんだい？」

「……それは、僕の『特権』ですから」

そういつて笑ってみせる。

「ふふ、そうか。そうだね。それは悪かった。」

「フツ……」

「じゃあ、蹴られないうちにわたしは退散するでしょう。」

順調だからといって、油断してはいけないよ。引き続き安静にね！」

「はい。ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます！」

*

*

*

「ごちそうさまでした」

今日も壊れそうな心臓をかかえ、なんとか彼の朝食を終えた私。

彼がお茶を飲み終えたところで立ち上がる。

「さて、じゃあ私も自分のごはん買ってくる。あと、洗濯機回してくるね」

「わかりました」

「洗濯物、これ？」

「え?! い、いや、いいですよ」

「え? なんで? ついでだし」

「だ、大丈夫ですって!」

「……嫌?」

「い、いえ。あ、あなたこそ! 嫌ではないんですか!? お、男物をとか!」

「え? ベつに。だって、うち父も兄いるし。そりゃ、もちろん知らない人の嫌だけど

……」

「そ、そんなもんですか」

「そんなもんです。だから気にしないで。じゃあ、いつてきます」

「はあ……」

「……あ、でも……!!」

「わあっ!」

「嫌だつたり、余計だつたら、言つてね。あ、あと逆も……。」

私、ほんとうに、気が利かないから……ごめんね」

「……わかりました。そういうときはちゃんと言います」

「うん……」

「……洗濯、助かります。よろしくお願いします。」

「うん!」

「ただいまー」

「おかえりなさい。つて、なんか台車みたいな音がしましたが……」

「ふふふ、届いたよー!」

ランドリーに洗濯物を入れ、売店でパンを買い、戻ってくる途中で看護師さんから呼び止められた。何かと思えば財団にお願いしておいた物資が届いたとのことなので、一緒に持つてきたのだ。

「なにがですか?」

「じゃーん! 財団から。まずは、コーヒーマーカーと豆! 早速淹れるね」

「ほう、それはそれは……お手並み拝見といきましようか」

「ぷ、プレッシャーかけないでよ、もう！ まったく、これだから通のひとは……！」
「ふふ……」

説明書のレシピ通りにセッティングする。ほどなくして、珈琲のいい香りが漂いはじめた。

「あとね、ラジカセ！ これでラジオも聴けるんだって。かけておく？」

「おお！ お願ひします」

「はーい。ぽちつとな、つと」

スイッチを入れると、ラジオから声が聞こえてくる。

「どうやらこの辺りであった、ニュースを報じているようだ。」

『続いては先日発生したバス事故についての続報です』

「あ、これ、おとといの……。ここに来る途中に横を通つたよ。」

トラックとバスがぶつかっていて、大変な事故だったみたい」

「そうなんですネ……」

車の事故といえば、思い出す、スタンド、『運命の車輪』……。

「「皆は大丈夫」かな……。」「だろうか……」

「……かぶつちやつたね」

「かぶりましたね」

ふたりして笑う。

「今頃皆はどの辺かな？」

「ナイル川を北に登り、コム・オンボ経由でエドフに向かうといっていましたから……」

今頃は船の中でしょうか」

「手強い相手に出会っていないといいけど」

『『エジプトの神々』ですか」

「うん……」

「またポルナレフあたりが、ひとりでふらふらしているところを襲われていたりして

……」

「なんかそれ、あたってそう、すごく……」

「で、結局承太郎が撃退する、と」

「オラオラオラオラオラオラア！ ……やれやれだぜ。……つてね！」

「ええ。……どうでもいいけれど、なんて迫力の無いオラオラだ……」

*

*

*

「ふえつくしよいつ！ うー、誰か噂してやがるぜ……。」

さては、さつきすれ違ったキートなお嬢さんか!?

あの異国の方、素敵！ なんちやつてー！ ……ん？ てめえは……」

*

*

*

……あとで聞いた所によると、彼の予想は本当にずばり的中していた……らしい。

*

*

*

「ごちそうさまでした」

私も朝食を終える。

ちなみに、私の淹れた珈琲の総評は、

「まあ、なかなかですね。いい豆だ」

「……豆、ね」

「……いやあ、素晴らしい腕前だ！ さすがだなー！」

「わかるよ！ ぜんっぜん、心がこもってない！ まったく、これだから通の……以下略

!

もういい！ もう淹れない！」

「ぶつ、冗談ですよ。拗ねないでください。ほんとに、美味しいですって」

「……ほんと？ じゃあまた淹れたら、……飲んでくれる？」

「ええ。もちろん」

「でも、私はやつぱり花京院くんの淹れたもののほうが好きだなあ……。くやしいけど」

「そ、そうですか？」

「うん！ ブラックで飲んで美味しいと思ったの初めてかも……。また今度飲みたいなあ」

「し、しようがないな！ 特別ですよ！」

「うん！」

（はっ！ 洗濯物、忘れるところだった！）

話やらなんやらに夢中で意外と時間が過ぎてしまっていた。このままではシャツがしわだらけになってしまう。

「じゃあ私、洗濯物干してくるね」

「はい」

「あ、そうだ。音楽ね、前に好きって言ったシンガーさんのものをいくつか持ってきて

もらったんだけど、どれか聞く？」

「本当ですか！　お願いします。どれでもかまわないので」

「了解。じゃあ入れときます。そうだ、再生ボタンがこれね、で、これが……」

操作ボタンを簡単に一通り説明する。

「はい。わかりました」

「じゃあまた、いつてきまーす」

洗い上がった洗濯物を回収し、私は屋上にやってきた。

「いい天気だなあ」

見上げると真っ青な空。日本と同じだ。

一瞬自分がエジプトに居ることを忘れてしまいそうになる。

「空は、つながっているんだもんなあ……」

なんだかそんなことを急に実感する。それにしても綺麗な青空だ。

（早く見られるようになるといいのにな……）

そんなことを想いながら洗濯物を干す。

（うッ!?　……気にしない、そうはいったけれど……）

違った。やはり父や兄のとは違う。私はわかっていなかった。

異国の晴天の空の下、ひとり赤面しながら、すきなひとのトランクスを干す。

……いったいなんなのか、この状況。

(1か月前の自分に言っても、とても信じられないだろうなあ)

そうなのだ。まだ彼と出逢って1か月少しなのだ。

(それなのに、こんなに……)

世の中の恋とはどれもそういうものなのか、それとも……。

そんなことを考えていたら、ふいに声をかけられた。

「あら！ こんにちは。貴女、あの、眼を怪我されてる方の奥様ですよね？」

「こ、こんにちは！ お、奥様ではないですがっ！」

「じゃあ、恋人……」

「でもないですっ!! と、友だち……友人です」

看護師さんだった。自分でもいい加減慣れるとは思いますが、やはり照れてしまう。

「あら、そうなんですか？ てつきり……ごめんなさいね」

「い、いえ……」

「じゃあなおさら、いろいろあなたに、お任せしてしまつてすみません」

「え？ いえ！ それはまつたく」

（私はそのためにここにいるんだし。……むしろ、うれしい、し）

「バスの事故、知ってますか？」

「あ、はい」

「ここにも大勢搬入されて。」

そのうえ、別の爆発事件もあって、二人……ご兄弟で入院しているんです」

「爆発事件……ですか」

「そう。それで、もうぜんぜん、人手が足らなくて。正直本当に助かっているんですよ」

「そうなんですか……大変ですね。私たちは大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。でも困ったことがあったらいつでも言ってくださいね」

「はい、ありがとうございます」

優しく微笑みながらそういうと、看護師さんは去っていった。

（バスの事故に、爆発事件か……。なんか物騒だな）

ふつつつと嫌な予感が胸中に湧いてくる。早く干して戻ろうと思った、その瞬間だった。

——（「やめろと、言っているだろう！」）——

「!？」

頭の中に声が響く。

彼のもとに置いてあるセシリアが異常を知らせてくれたのだ。

掴んでいた洗濯物を放り投げ、慌てて駆け出す。

(しまった！ は、離れるんじゃないかった！ お願ひ、無事で……！)

「花京院くん!!」

息せききつて病室の扉を開ける。すると衝撃的な映像が私の目に飛び込んで来た。

「……ッ!!」

見たことのない看護師さんにびったりと寄り添われている、彼の姿が。

*

*

*

「じゃあまた、いつてきまーす」

「いつてらっしやい」

今度は洗濯物を干してくる、と彼女が出ていき、ドアが閉まる。

「……セシリア、おいで」

そう僕が呼ぶと、しばらくして肩にふわりとなにかがのる感触。

「まったく、君の御主人さまは心配性なんだから」

ここを離れる間はいつも置いていつてくれている。気づかれていないと思っ
ているようだが。

(そつちになにかあつたらどうするんだよ……)

そう思い、実はハイエロファントの触手をこつそり彼女のそばに伸ばしている僕も大概か。

もちろん僕の眼が見えないので、ハイエロファントの眼も見えない。

だが彼女の危機を察知したら、すぐに攻撃に移れるようにしてある。護身用にはなるだろう。

(なんだか本末転倒な気もするが、彼女の好意を無下するのもなんだしな……)

「のんびりしていいよ」

セシリアに声をかけ、自分も音楽でも聴こうと手探りでラジカセのスイッチを入れ
る。

イントロだけでそうとわかる、日本で何度も繰り返し返し聞いた、耳慣れたバラードが
ゆつたりと部屋を包んでいく。彼女の煎れてくれた珈琲とともにそれをのんびりと味
わう。

そんな至福の時を満喫していたときだった。

それを妨げるかのように、ドアを叩く無機質な音が響く。

「おひるごはんの時間ですよ」

「あ、はい。ありがとうございます。置いておいてください」

ノックの主は昼食を持ってきた看護師のようだ。が、返事をしつつも、ふと頭に浮かぶ違和感。

(ん? ……やけに早いな。気のせいかな)

「いいえ。待たせてしまうので、と仁美さんにそこで頼まれたんです。

なので今回はアタシが食べさせてあげますわ」

(そうなのだろうか……。いや……)

何かをお願いしたときの彼女の弾んだ声を思い出す。

(……ないな)

同時に入室してきた女に対する疑惑と不審の念は確信に変わる。

(しかも、彼女の名前をなぜ知っている? あやしい……。明らかに……)

「では、お口を開けて下さるかしら? ……うふふ」

しかし、僕に疑われているとは夢にも思っていないのだろう。女は近寄ってきた。

「いえ、必要ありません。御退出頂いて結構です」

「そんなこといわないで。アタシ、怒られちゃう……」

身を寄せてくる女。きつい香水の匂いが鼻をつく。

「……やめろと、言っているだろう！」

「え？ いいじゃない。ね……？」

そして、何か……まあ、おそらく胸……が腕に当てられる。

この僕がこんな手にひつかかるとでも思っているのか。ポルナレフじゃああるまいし。虫酸が走る。

「無駄だ。離れろと……」

跳ねのけようとした瞬間だった。

「花京院くん!!」

扉が開く音と同時に彼女の声があった。

「仁美さん！」

「あら、もう戻ってきちゃったの？ いいところだったのに。ねえ？ ……ほら」

さらに強く胸を押しつけられる。

「ツ!？」

「お、おい！ 離れろ！」

「彼のお世話はアタシがするから、お嬢ちゃんはどこかにいっていいのよ」

「……。……おじやま、しました」

「あつ！ちよつ、ちよつと！」

眩かれたそれとともに、勢いよくドアが閉まる音が室内に無情に轟く。

「そんな！ 違うツ！ 違うんだ！ 戻ってきてください！ 仁美さんーッ！」

懸命に叫ぶ僕に敵の女は言う。

「いいじゃない。あんな貧相なちんくりんより、アタシの方がいいでしょ？」

「うるさい！ 黙れ！ 完全に誤解されたじゃあないか！ どうしてくれる！」

「ええ？ ふふ、本当は嬉しいくせに」

「そんな脂肪の塊を押しつけられても全く嬉しくないわ！ この年増！」

見えないが、おそらく。敵とはいえ女性にこんな暴言を吐くのは主義ではないが、それどころではなかった。

「な、なんだと!? ふ、ふん！ まあいい、これで邪魔者は消えた。

……ふたりきりよ。く、くくく……」

「!? 貴様、やはり！」

「アタシのスタンドの暗示は夜を司る『ネフティス女神』。

花京院、さあ、『アタシのしもべとなりなさい』……そして、おとなしく死ねッ！」

むせかえりそうな甘ったるい香り、および邪気かつ殺気を感じた。そのときだった。

「なにいつ!?」

キーンツという金属音とともに、敵の女の驚きの声が聞こえた。

「……ですよねー。……そうだよね」

加えて再びドアが開く音。

「明らかに怪しいもんね……わかってた。わかっては、いたんだよ……?」

同時に、耳慣れた声があった。

「ちっ! あと少しだったのに」

「仁美さん!」

すると今度は横から驚きの声上がる。

「え!? か、花京院!? アンタなんで正気なの?!」

「は? ……なにがだ?」

ヒステリックに喚かれるその言葉の意味が理解できず問い返す。

「なにイ!? アタシの『テンプレーション誘惑』が効かない男なんて……。どうして……!?」

どうやらいつのまにか僕は『何か』をさけていたらしい。しかし、まったくもって僕は正常だった。

すると考えあぐねた女はとんでもない結論を投げる。

「……わかった! アンタ、ゲイね?!」

「はあ!？」

その言葉を受け、味方のはずのこのひとからも聞き捨てならない一言が零される。

「…………え!？　そ、そうなの?!　やっぱり…………」

「そんなわけあるか!　おい、そこ!　やっぱりつてなんですか!　ちよつと!」

「え?　だつて承太郎君とすごく仲良しだし。ポルナレフさんとも」

「どつちもないわ!」

そして、なんかしらんが本気で相手を考え始めた彼女。

「…………じゃあ、師匠…………?　はっ、もしや、ジョースターさん?　年上が、好みなの…………」

「?」

「…………そろそろ、本気で怒りましょうかね?」

*

*

*

「ちくしよう!　アタシを無視すんな!」

すつかりその存在を忘れられていた敵が私たちに向け叫び、狐に似たそのスタンドが鋭い鞭のような九つの尾をふりまわす。

「無駄です」

それをまたもやセシリアで跳ね返す。

「くそっ！ こうなったら一時撤退だ！ 今の貴様らにはアタシを攻撃することはできません！」

窓へと逃走を図る敵。ここは！ と、思った瞬間、彼が私にいう。

「ふっ、それは、どうかな？ 行きますよ、仁美さん！」

「……………うん！」

「……………エメラルド、スプラーツシユ！」

敵の声の方向に、ハイエロファントが攻撃をはなつ。

「ふん、目の見えないアンタの攻撃なんて簡単にかわせるわ！」

ん……………？ な、なにイ!? ぐはあ！」

舐めきった発言の直後、うって変わるその声音。

かわされたかにみえた無数の碧色の宝石達は、戻ってきて敵の後頭部に命中した。

「……………リフレクション」

昨日考えて、練習した『協力技』のひとつだった。

「かわされるのは計算のうちさ」

「な、女のスタンドで跳ね返した……………!? だと……………！」

「ふふ、跳弾攻撃……………跳ね返されたものって、軌道が読みにくくて避けにくいでしょう？」

残念でした」

「くツ、ちくしょう……」

「よいしょつと」

さしあたりセシリアをロープ状にし、倒れた敵の女を拘束する。

「さあ、いろいろ話してもらいましょうか」

「ふん！ だれがお前なんか」

「……あら、いいんですか？」

「は……？ ひ、ヒイツ！ ひえ……ひゃーつはつは！ し、死ぬ！」

これで口を割らない人間なんて存在しないと思う……と、経験者（私）が語る……そんな誰かさんに教えていただいた、くすぐり地獄の刑を執行する。

「ひ、仁美さん、あの、その位で……ぶ、武士の情けというやつを……」

狂気じみた笑い声がこだまする中、見かねたように（見えないのに）彼がこわごわ進言する。

「……なにかな？」

「いえ、なんでもございませぬ。すみませぬ」

それを一蹴しつつ御仕置きを慣行していると、ようやく観念したのか敵は言う。

「わ、わかった。わかったわよ！」

「はい、じゃあまず、貴女の能力は？ 『誘惑』 っていうことは相手の心を奪ったりするんですか？」

「そ、そうよ！ この『ネフティス女神』は嗅いだ男の心を操る霧を出す……はずだったのに！」

「……なるほど。では他の仲間は何人？ どんなスタンドですか？」

「し、知らないわよ！」

『九栄神』といって幹部が九人いるけど、隠れた実力者がまだほかにもいるって話だし。

能力なんてみんな隠してるからわかんないわよ！

アタシはDIOさまに惚れて忠誠を誓っただけなもの。

あーあ、これが終わったら抱いていただけのはずだったのに、あんたらのせいで台無しよ！」

「抱っ……！」

おもわず赤面する私に一層の暴言を喚き散らす女。

「なにさ！ カマトトぶんじゃないわよ！ あんただって、この男に抱……！」

「わあー！ ストーツプ!!」

「むぐー！」

どうにか阻止すべく、あわてて敵の口を塞ぐ。

「？」

間一髪。どうやら彼はわかっていないようだ。胸をなでおろしつつ、誤魔化すように訊ねる。

「し、知らないなら、しょうがないよね！ 花京院くん、あと何か聞きたいことはある？」

「」

「うーん。ジョースターさんがいませんから……。嘘を吹きこまれても真偽の判断ができません。」

もういいんじゃないですかね」

「はい！ じゃあ、あとは財団の方々にお任せするということで！」

何かを聞き出すどころか、余計なことを言われてはたまらない。

そのへんにあったシートで縛り直して、連行することにする。台車があつてよかった。

市場に向け、子牛をのせた荷馬車がゆれる……。ではないが、院内の電話ボックスコーナーに向け敵の女性をのせた台車を押す。財団に連絡を取り、引き渡し場所の裏口に向

かう（ちなみに途中看護師さんに見つかったが、不審者が出て捕まえた。このまま警察に突き出す方が安全だから、といって半ば強引に押し切つて逃げた）。

「ふん、とどめをささないのかい？ 甘ちゃんだねえ……」

真つ白い廊下をがらごろと輸送されていく道中、すまきのまま憎々し気な表情で吐き捨てる女性に返す。

「貴女の能力や弱点は把握したので問題ないです。お迎えも女性をお願いしておきましたし。」

一応言つとききますけど、私たちの前にもう一度でも、同じように敵として姿を現そうものなら……そのときはどうなるか、わかりますよね……？」

「ふ、ふん！」

「もう悪だくみなんてせず、おとなしくしておいた方がいいですよ。」

財団の皆さんいい人達ですから、悪いようにはされなれないと思いますし。

そもそも任務に失敗しちやつたからDIOから逃げないといけないんでしょう？

大変な職場ですね。転職をおすすめします」

「おまえが言うなツ！ ……おまえなんかアタシの気持ちがわかってたまるか！」

「そうですね。でもまあ……理解したくもないけれど、ほんのすこしだけ、わからなくもないところがあるかもしれないですけどね」

「は？」

「いえ。なんでも。……それより、貴女、こんなに綺麗なものもつたいないですよ。利用しようとする人より、愛してくれる人をちゃんと探してください。」

「貴女なら、簡単に見つかるでしょう？」

「……ちつ」

「……余計な、お世話だ。このお人好しめ……」

「目的地に到着。やってきた財団職員女性に引き渡しておいた。」

「ではよろしくお願いします」

「その背中を見やりながら、おもう。」

「……。すきな人のためなら、なんでもしたい……そのきもちだけは、わかる……かな
……」

「こうして一件落着……なはずなのだが、私の心は重苦しく、ひっかかる『なにか』の存在を感じていた。」

「その正体はよくわからないまま、溜息をつきつつ、部屋に戻る。」

「おかえりなさい。大丈夫でしたか？」

「うん……」

「はあ、しかし、まいりましたね。」

「……」

自分でも驚いた。彼の言葉を受けて、次の瞬間、思ってもいないことが口をついて出てしまう。

「ま、まいってたの？　ほんととは……その、う、うれしかったんじゃないの？」

「はあ？」

どろどろと濁流のように決壊し、勝手にあふれでてくるそれらを止める術はなかった。

「そ、そうだよね。だってすごく美人さんだったし、その……ナイスバディで……む、胸、大きかったし！　セクシーで女の人ーって感じでさ。男の人はみーんな、あんな女性が好きだもんね！　よかったね！」

「……」

（ち、ちがう！　こんなこと、言いたいわけじゃないのに……でも……）

つい、思い出してしまう。じぶんとはちがう、大人で、美人で……

女の自分からみても魅力的な身体……豊満な胸を押しつけられている先ほどの映像が浮かぶ。

（思い出すと余計に……わかってる。わかってるけど……！　）

「……」

(なんか心なしか、うれしそうだった気もしてきたし……。否定、してくれないし……。)
じわじわと広がっていく、醜い靄が心の中を占めていく。

こんな感情、はじめてだった。

戸惑っている、ようやく彼が口を開いた。

「……もしかして、怒ってるんですか？」

「お、怒ってなんか……ないもん!!」

「やっぱり怒ってるじゃあないですか……」

「そ、そんなことないっていつてるじゃない! ……もういい!」

己の制御不能な言動に困惑する。恥ずかしさと情けなさとし訳なさ……分類不能のそれらがぐちゃぐちゃに入り混じっていてもうわけがわからない。

「あつ! 待って!」

頭を冷やしに行こうとドアノブに手をかけた。そこで止められる。

「……待ってください。ちよつと、ここ、座ってください。ここ。」

そういつてベッドサイドを指される。

「? ……?」

「そう。」

釈然としない思いを抱えつつも、いわれたとおり腰掛ける。

「……座ったよ。なに？」

「……」

「ひゃっ！」

瞬間、背中になにかが触れる感触。

彼の、あたまだった。そして、うでをそつと回される。

「か、花京院くん……!?!」

「……なにか、しゃべって」

「は、はい?!」

「……いいから」

「そ、そんなこと急に言われても……!!」

(ど、どきどきしてそれどころじゃあ……!!)

「しかたないな……。じゃあ……仁美さん？」

「え、な、なんで？ いまさら……?」

「……返事は？」

「は、はい?!」

「仁美さんですよね？」

「そ、そうだよ！　そうに決まってるじゃない！」

「……ですよね。よかった」

「？」

「……あー、落ち着く。安心する」

「え？　な、なっ！　わ、わわ……！」

（わ、私はちつとも落ち着かないですーッ！）

*

*

*

「ま、まいつてたの？　ほんとは……その、う、うれしかったんじゃあないの？」

「はあ？」

またなにを言い出すのか、このひとは。そんなわけないだろうに。彼女は続けた。

「そ、そうだよ。だってすぐく美人さんだったし、その……ナイスバディで……む、胸、大きかったし！　セクシーで女の人ーって感じでさ。男の人はみーんな、あんな女性が好きだもんね！　……よかったね！」

「……」

（あれ？　……これ、……もしかして……。もしかすると……！）

彼女のこの様子。明らかに、これは……

(……妬いて、いるのか？ あの、女のせいで？)

「……」

嫉妬。そんなもの、うつとおしいだけだろう。とか、想像していた……が、ちがった。全くちがった。すきな女性が自分に向ける……そんなやきもちは、かくもうれしいものだとは。

おもわず僕は訊ねていた。

「……もしかして、怒ってるんですか？」

「お、怒ってなんか……ないもん!!」

「やっぱり怒ってるじゃあないですか……」

(どうしよう……!! ……か、可愛い……!!)

つい、にやにやとしてしまい、口元をおさえる。彼女のおがみえないのが残念すぎる。

「そ、そんなことないっていつてるじゃない! ……もういい!」

「あつ! 待って!」

(いかん、にやけている場合じゃあなかった)

僕がそんな風に想っている間に、彼女の誤解はますます深まっているようだった。そ

こはなんとかせねば。

出て行こうとする彼女を制止する。

「……待つてください。ちよつと、ここ、座ってください。ここ」

そういつてベッドサイドを指さす。

「? ……?」

「そう。ハハ」

無然とした様子ではあるが、どうやら、いうとおりしてくれるようだ。

「……座ったよ。なに?」

「……」

「ひゃっ!」

彼女の背中にあたまをもたげ、そつとうしろからうでをまわす。

「か、花京院くん……!?!」

彼女の困惑の声。そして、心臓の鼓動が伝わる。速い。

(……すごく、どきどきしている。……いや、させている、のか。……僕が)

なんともいえないよろこびが心にじわりと広がる。

それをかみしめつつ、呼びかける。

「か、花京院くん……!?!」

「……なにか、しゃべって」

「は、はい?!」

「……いいから」

「そ、そんなこと急に言われても……!」

「しかたないな……。じゃあ……仁美さん？」

「え、な、なんで? いまさら……?」

「……返事は？」

「は、はい?!」

「仁美さんですよね？」

「そ、そうだよ! 決まってるじゃあない……!」

「ですよね」

「？」

「……あー、落ち着く……安心する」

「え? な、なっ! わ、わわ……!」

「どうやら、ちつとも意図が伝わっていないようなので説明する。」

「……今、お願いして、あなたに、ここに座ってもらいました。で、僕は、こうしています」

「だ、だから?!」

「一方、あの女は勝手に近づいてきて、僕は無理矢理、胸を押しつけられていたわけですよ」

「う、うん……」

「さて、どちらが、僕の望む状況でしょうか？」

問題になっていない、クイズを出す。

「う!？」

「まったく……。僕、今、目が見えないんですよ?」

あんな不審で、怪しい、見知らぬ女の胸になんて興味ないですって。

ああ、たとえ見えていようが、興味ないのは同じか……。

まあ、いずれにせよ、あんなことをされて僕が嬉しいはずがない。

むしろ不快感と嫌悪感でいっぱいですよ。わかってるでしょう?」

「……うん。……わかつては、いる……。けど、その……つい……」

ぼつりと呟く彼女。愛しさが膨らむ。

「……あなたが出ていったとき……。ほんとに、どうしようかと思った」

「……ごめん……」

「もう、あんなふうに……。どこかにいったり、しないでほしい」

「……う、ん」

「……」

「……」

「あ、あの、もう、わかったから。怒ってない……から。その……」

「……だめです。もうちよつとだけ。不安にさせた罰です」

「そ、そんなあ……！」

「ふっ……！」

ふいに、どうしても、もう少しからかいたくなってきた。のと、伝えておきたくなかった。

「そうそう。さつき、興味ないって言いましたけど……」

「ん……？」

耳元でそつと囁く。

「……すきなひとの胸にだけは、もちろんとっても興味ありますよ、ちゃんと。……すごく」

「!? え! な!? あっ!! か、花京院くんの……えっち!!」

あわてて離れる彼女。

「えー? だつてそうじゃなきや、あいつのいったとおりになつちやうじゃあないです

か。

「僕が健全な証拠ですよ」

「う……………！　　そ、そつか……………それもそうか……………。うーん……………」

真面目に考えこむ彼女。思わずふきだしそうになる。

（……………やめられないな。ほんとうに。僕だけのこの、『特権』は……………）

「でも、どうして、あの人の能力が花京院くんには効かなかったのかな？」

「そうですね……………逆に目がみえなかったのが幸いしたのかもかもしれません」

「……………なるほど。あの人も自分で気づいていなかった、心を操る条件として、目を合わせる……………とか、そういうのも、実は必要だった、ってことかな？」

「はい。それが一番考えられるかと。もしくは……………」

「もしくは？」

「……………いえ。なんでも」

（……………僕の心は、もうすでに、誰かさんに囚われているから……………だったりして、ね）

「へっ？　　なんで笑ってるの？」

「さあ？　　なんででしょうね」

「？　　おかしな花京院くん。まあでも、操られたりしなくてよかった……………」

「ほんとうですね」

「……あつ!!」

「な、なんですか?! どうしたんですか!？」

「……洗濯物……忘れてた! まだ干すの途中だった! もうぜったいしわしわだよ……
洗い直してきます!」

「ああ……なんだ。了解しました」

そこへドアを開ける音。そこへ本物の看護師が昼食を持ってきてくれたようだ。

「お昼です……あら、どこかへ行かれるんですか? わたしがお食事の介助、しましょうか?」

「……いえ! すぐ戻ってきます! 置いておいてくださいー!」

ごめんね、花京院くん! ちよつとだけ待つて!」

そういつて駆けていく彼女。

「いいですよ、ゆつくりで! 病院で走っちゃだめですよ! ……って、もういないか」

「……元気ですね。彼女」

それを見やり、くすくす笑いながら、看護師がトレーを置いてくれる。

「ええ。あ、どうもありがとうございます」

「あの……不審者が出たそうですね。おふたりに怪我がなくてよかったです。すみません、病院の警備が不十分で……」

「いえ……」

（どつちかというと僕らが呼び寄せているんだしな…。）

逆に申し訳なくなる。

「他の方に被害はなかったですか？」

「ええ。今のところそんな報告はありません」

「ならばいいんです」

ほっと胸をなでおろす。

「優しい方ですね。貴方も、彼女さんも……。あ、さつき少し屋上で話したんですけど」

「いえ、そんなことは……」

「おふたりとも自分より他人のこと。いまだき珍しいですよ。やっぱりお似合いですね」

「そ、そうですか……？」

「本当に恋人同士じゃあないんですか？ ナースたちの間で噂になっていますよ」

「ええ、残念ながら……」

「……ふふ、『残念』なんですね」

「ふっ、ええ。……『残念』ながら」

そんなことを話していると、パタパタと駆けてくる音が戻ってきた。

「ただいまっ！ ごめんね、お待たせしました」

「おかえりなさい。あんなに急いで……転びませんでしたか？」

「え？ だいじょうぶだよ！ もう！」

「ふふ、じゃあ、わたしはこれで……」

「はい。ありがとうございます」

退出する看護師に礼を言う。と同時に訊ねられる。

「なに話してたの？」

「ああ、……不審者のこと、すみませんって。でもやつらの狙いは僕らだから……」

「ああ、私もさっき謝られたけど、逆に申し訳ないよね……」

あ！ 結局他の人とか大丈夫だったのかな……？」

「ふっ。……大丈夫みたいですよ」

「？ また、なんで笑ってるの？」

思考回路がまったく同じだ。おかしくなってしまう。

「いえ。僕も看護師さんにおんなじこと聞いたので。つい」

「あ、ああ。そうなんだ。よかった。他の人が怪我とかしなくて」

「そうですね」

確かに……僕らは、似ているのかもしれない。

あのときも、思ってたけれど。

「じゃあ、食べよっか」

「ええ……」

僕は自分の中に、あるひとつの感情が渦巻いてくるのを自覚していた。

僕にはきみがいる

昼間、案の定というのもなんだが、敵方から差し向けられた刺客……看護師に化けて病院に潜入し襲い掛かってきた女性のスタンド使いをどうにか無事退けた私達。

ほっとしつつも、まだまだ油断など出来るべくもない。気もちを新たに引き締め直したその夜。互いに寝る準備を終えた後、ふいに、彼にこんなことをきかれた。

「そういえば、あなたは家族にこの旅のことを伝えているんですか？ 連絡とか、してます？」

「……？ うん」

ほんのすこしだけ、いつもとちがう声音で。それに私は僅かなひつかかりを覚えつつも答える。

「出発前に実家に電話したよ。もちろん、そんなに詳しいことは言っていないけど。しばらく旅行してくる、って。」

うちは、母さんが、いろいろわかってるから。

どんな事情か、たぶん、なんとなく察してくれていると思う。

父さんはちょっと心配性だから、母さんに上手く言ってもらってる。

男のひとと旅してるなんて知れたらひっくり返っちゃうかも。ふふ……」
「そ、それは僕的にはあまり笑えませんが……」

なんとなしに窓から外を見上げる。夜空は広く薄雲で覆われていた。どうやら昼間よりも天気が崩れ出しているらしい。それでも、うつすらとかかる雲、無限に続くかのようなまっくらやみのなか、ぼんやりと、でも確かに星々は煌めいていた。

今はずいぶん遠くにいる家族に思いを馳せる。

「元氣かな？　言われてみればここしばらく電話してないなあ」

「してきたらいいじゃないですか。あ、でも今は夜明け前ですね。日本」

「そうなんだよね。時差でいつもタイミング逃しちゃって。また明日かな。……そっちは？」

実は、密かに気になっていた。

彼がどこかへ電話をしているのを見たことがなかった。この旅の、一ヶ月の間、いちども。

もちろん私が知らないだけだと思っていたのだが。

「僕は……、実は何も言わずにきたので。たぶん今頃大騒ぎです」

「ええっ!?　な、なんで!?　ご両親、すごく心配されてるんじゃない？」

彼の口から発された衝撃の事実につき、大きな声になってしまう。

「その、無用な心配をかけたくなかったんですよ。

そもそも、うちの親はスタンド……僕のハイエロフロントのことも知らないんですから」

「そ、そうなの!？」

（じゃあ、今まで……このひとは、ずっと……?）

手元にあつたタオルの端をおもわずぐつと握りしめる。

「まあ、僕には普通とは違う。なにか秘密がある、ということには気づいているでしょうけれど。」

「今までも散々それで心配をかけてきましたから」

一方、彼は淡々と語る。押し殺したその静かな声が部屋の空気を震わせる。

「……心配、って?」

おそるおそる、訊ねる。

「……小学生のときの、教師と母の会話で……」

——花京院さん。お宅の典明くんは友だちをまったく作ろうとしません。

嫌われているというより、まったく人とうちとけないのです。

担任教師としてとても心配です——

——それが、恥ずかしいことですが……

親である、わたしにも……なにが原因なのか……——

「……それからは、目立って孤立しないよう適当に周りとは付き合ってきました。しかし『友だち』は、やはりひとりもいなかったもので……。」

両親は心配していた……いや、今もしていると思います」

「……」

すぐにことばがでなかった。でるわけがない。

……原因。……そんなの、きまつている。

でも、ひとつだけ、ききたかった。

わからないわけでは、たぶんなかった。

きかなければいけない。

なぜだろう。そんな気がした。

「……ハイエロフアントのこと、ご両親に、話そうと思ったことはないの？」

「あるわけないでしょう。みえないんですよ？」

みえないものを信じろつてというのが無理な話ですよ。

そんなことをしても、また無駄に、変な心配を増やすだけだ」

「でも、家族なのに……」

「……たとえ血が繋がった家族であっても、わかりあえないものはわかりあえない。

仕方がないことなんですよ」

彼はいう。すべて諦めているように。

……いや、ちがう。

彼は、『あきらめたい』のだ。きつと。

仕方がない……まるでじぶんに言い聞かせているようだった。

(ちがう……。ちがう！)

「……そんなこと、ないよ！ 花京院くんのご両親は、そんなことない！

ちゃんと話したほうがいいよ。全部じゃなくても、少しでもいいから。

みえなくても、ご両親はハイエロファントのこと、わかってくれる……信じて、くれ

るよ！」

おせっかいかもしれない、余計なことかもしれない……彼を、傷つけてしまうかも、しれない……。でも、とまらなかつた。いいたかつた。つたえたかつた。

「……そんなわけ、ない……」

「あるよ！ だって、花京院くん、ご両親のこと……」

お父さんとお母さんのこと、すごく、すきでしよう？

大切に、おもっているじゃない！」

「っ?! そんなこと、あなたになんてわかるんですか!？」

彼が息を呑むのがわかった。口調が変わるのも。

「前に言っていたよね？」

——将来は……そうですね。父とおなじように……——

——まったく、母はおつちよこちよいなところがあつて目が離せないんですね——

ありありと想いうかべることができた。両親のことを語る、彼の姿。そして、容易に想像もできた。

「……あのときの、花京院くんのおお、やさしかったもん。それくらい、私にだって、わかる！」

だつたらきつと、いや、ぜつたいに……

同じようにご両親も、あなたのことを深くおもっている！

それなのに、信じてくれないわけ、ないよ！」

「……ッ！」

彼の動きが止まる。

まるで時が止まったかのように、静寂が夜の部屋を包んだ。

*

*

*

永遠に感じられる沈黙の時……実際は一瞬だったのだろうか。
それを経て、僕はようやく重い口をひらいた。

「……そうですよ。僕は、彼らのことを、大切に、おもっている……。

でも！ だから……だからこそ！ 言えない！ 言いたくないんだ……。

……ふたりに拒絶されてしまったら……僕は……！」

(そうだ。……僕は……こわかったんだ。……それが……)

津波の如く押し寄せ、喉をせり上がってくる言葉を……感情を抑えることなどもはや不可能だった。

そんな僕に、なにかもを見透かすかのように彼女はいう。

「……でも、わかって、もらいたいんでしょう？」

……ほんとうのじぶんのこと、知ってほしいんでしょう？」

じゃないと、あなたが……！」

彼女の言葉はどこまでもまっすぐに、僕の心を貫いていく。

そこに僕が創り出した、頑強な、なにか、が剥がれて崩れていく気がした。もはや継ぎはぎだらけになってしまったそれに、なおも必死に縋りつく。

「……ほんとうの僕なんて、誰も知らない。」

……わかるわけが……わかってもらえないはずがない！」

「そんなことない！……ないよ！」

そして、言葉とおなじ、曇りのないまつすぐなまなざしで、僕を今、彼女はみつめているにちがいない。閉ざして、隠しておいたのに、むき出しになってしまった……

こんなに臆病で、卑屈で、醜い……僕を……。

(や、めてくれ……みないでくれ……あなたに、だけは……)

みられたくなかった。こんな、どうしようもない自分の姿なんて。

もう、耐えられなかった。

おもわず、僕はさげんでいた。

「くっ！……あなたには……ぜったいにわからない！」

僕と、あなたは、ちがう!!

あなたには、もともとすべてを受け入れてくれる……

やさしい、家族がいるのだから……」

「僕には……誰も、いない。」

僕は……ひとりだ。

今までも、そして、きっと……これからも……」

「……か……」

「……もう、この話はおしまい。寝ましょう。おやすみなさい」

チクタクと時計の秒針が時を刻む音だけが闇夜の部屋に響く。

どのくらい時間が経ったのだろうか？

……僕が背をむけてから。

(……どうしてこんな……。あんなこと、いうつもりなんてなかったのに……)

凶星だったからかもしれない。

彼女に言われたことが。

自分でもわかつている。

そうすればいいんだ。……そうしたいんならば。

うらやましかつたのかもしれない。

似たような境遇なのに、彼女にはすべてをわかってくれる、あたたかい、家族がいる。苦しくて、目をそらしたかった。眩しいくらいにまつすぐな彼女から。

そしてなにより……弱い自分から。

……もしかしたら本当は、わかっていたのかもしれない。こうなることなんて。だつて、そもそも、だつたらどうして……

僕は彼女に、あんなことを尋ねたんだろう？

僕は彼女に、なんていってほしかつたんだろう？

そうだ。そんなの本当は、わかりきっている。

背中を、押してほしかつたんだ。

打ち明ける、勇気をもらいたかつたんだ。

そして彼女はちゃんと、そうしてくれた。

僕のことを心底おもって、いってくれた。

……なのに……。

僕は、それに、甘えたんだ。

ひどいことをいってしまった。取り返しのつかないくらい、ひどいことを。

また泣かせてしまっただろうか？ もう、許してくれないかもしれない……。

（あたりまえだ。 あんな……）

ぐるぐると渦巻く螺旋階段を鍋底まで降りていく、そんな気分だった。

真っ黒で深い、それにすべて呑み込まれていく……。

その、寸前だった。

「……花京院くん？ もう、寝ちやった？」

ガシツとその腕を掴み制止されたような感覚。

僕の耳にふいに、ささやくような、こえがきこえた。

「！」

（ダメだ！ 今は、まだ……。きつとまた、傷付けてしまう）

罪悪感を抱きつつも、寝たふりをすることにする。

「寝てる、か……」

「……」

「……ごめんね。あなたの気持ち、わかってないくせに勝手なことばかりいつて……」

そして彼女は独り言のように、寝ている（と彼女は思っている）僕にぼつりぼつりと

話しかけ始めた。

「……でも、私はやっぱり、ご両親とちゃんと話した方がいいと、思うんだ。」

ぜったい、わかってくれると思うんだよね。

だって、……あなたの、だいすきなひとたちだから」

「……」

(僕だって……。できるなら……)

「……でも、もしも、もしもだよ？」

あなたの恐れているような、そんなことに、なつたとしても……」

(……？ ……はっ！)

瞬間、気づく。

僕の手の上に零れ落ちる、ひと粒のしずくに。

(な、みだ……？)

「……『だれもない』なんて……、そんなこと、ないよ」

「みんなが、いる……」。

ジョースターさん、承太郎君、ポルナレフさん、師匠、イギー先輩……。

あなたには、みんなが、いるじゃない」

(……そ、れは……)

「……もし、みんなの気持ちだって、おまえにわかるのか、って、思うなら……」

「……？ 」

「……………私が、いるよ」

「私は、私だけは……………」

……………たとえば、世界中の誰があなたのことを拒絶したって……………。

……………たとえば、あなた自身に、私が拒絶されたって……………。

「あなたのそばにいたい、あなたと心から、わかりあいたいと、おもってる」
「ずっとずっと、ひとりで、かかえて、過ごしてきたんだね。」

……………すごいよ。

でも……………つらかったよね……………。

もう、そんな必要、ないんだよ」

「あなたは、もう、ひとりじゃあないから。」

寝たふりをしていることなんて、いつのまにか頭からすっ飛んで消えていた。

僕は、おもわず、起き上がっていた。

*

*

*

「わあっ!?! お、起きて!?! ええー?!」

「はい……」

「ど、どこから、きいて……?!」

「……最初から」

（ぜんぶーッ!?!）

寝ていると思い込んで、好き勝手なことをいった。

偉そうに、わかったかのような……。しかも……

（わ、私、なんてことを……!?! ああー!?!）

とらえようによつては愛の告白にきこえる。いや、むしろそれ以上のことかもしれない。
い。

そうとしか思えないような……そんなこともいった。たしかにいった……。いつて
しまった。

「ち、ちがつ! あっ、あ、あれは、その……」

「……ちがうん、ですか?」

「!?!」

一瞬、目の前にいる、そう眩くこのひとが、儚く、消えてしまうかのような錯覚に襲われる。

(……いや！)

心臓を死神に掴まれたかとおもった。必死にかぶりをふる。

(だめ……。にげちや、だめ！)

私がこのひとにもらったもの……。私もこのひとにかえしたい！

いいじゃない……。どう思われても……)

(私は……。たしかに、そう、おもっているのだから！)

振り絞るように、声を出す。お腹の底から。心の底から。……魂の底から。

「っ！……ちがわ、ない。

ちがわないよ！

……勝手なことばかり、いって、ごめん……。

でも、あれが、私の、そのままのきもち、だから」

言葉とともに、また涙があふれてくる。

「……私なんかじゃ、たりないかもしれない……。それでも……。」

泣きながら、必死に、手をのばす。

「……もう、ひとりだなんて、いわないで……!」

消えてしまわないように、繋ぎ止めておきたくて……彼をだきしめた。つよく。

「わたしが、いる。……わたしが、いるから……」

この想いが、どうしたら、届くのか。どうしたら伝えられるのか。もうわからなかった。

ただひたすら泣きじやくっていると、ゆっくりと彼の口が、動いた。

「……やめて、ください……」

「……っ! ……ごめん……」

(……そう、だよね……)

全身のちからが抜ける。

しかし、離れようとした、その刹那、腕を掴まれ、引き寄せられる。

今度は私が、彼にだきしめられていた。

「!? か、花京院くん……?」

「……塩水って、傷に、悪いんじゃないだろうか……」

「……え?」

「……でも、まいったな。」

とまらないんだけど……。どうしてくれるんだよ……」

「！」

見ると、包帯でもおさえきれないほどの涙が彼の頬をつたっていた。

「……まったく……悪化したら、あなたのせいだ」

ゆびで、そつと彼の涙を拭う。

「……えー？ 花京院くんがなきむしなのがいけないんだよ」

「……ふつ、あなたにだけは、いわれたくないな」

「ふふ……」

「……。……仁美さん？」

「……ん？」

「ごめん、さつき、僕は、あなたに……ひどいことを……」

「ううん。私こそ、余計な、おせっかいなことって、ごめんね」

「そんなこと、ない。」

すぐにすべては、無理かもしれないけれど……帰ったら、話したい。両親と。

僕のこと……。いままでの、こと……」

「うん……！」

おせっかいついでに、もうひとつ言ってしまうおう、そう思ったつ。

「でもそのまえに、とりあえず、無事だつて連絡してあげなよ。」

「ご両親、きつと心配で眠れぬ夜を過ごしてよ。」

「それで具合悪くなったりしたらいけないじゃない」

「う……。それはちよつと……。ぬか喜びさせたくは、ないから……」

すると彼には珍しい、歯切れの悪い返答。理由はわかつていた。その上で質問を投げる。

「……。どういうことかな？」

「……。まだ無事に帰れるかなんてわからな……。痛っ！」

予想通りのその答え。言い終わる前におもいつきリデコピンをかましてやった。

「帰れるに決まつてるじゃない！ ……怒るよ！」

「っ！」

（そうだ……。このひとは『帰らない』覚悟で……）

改めて、想う。

（でもそんなこと、させない……）

「あなたは私が護るから。」

だから、安心して、無事だつて……。もうすぐ帰るからつて、伝えたらいいの！」

「……ふっ！ ……はあ、もう、かなわないな、まったく。」

わかりました。そうします。」

「今すぐ！ はい！ 思い立ったら、ほら！」

「だから、まだ今あつちは夜中でしょうが。明日ね。またあした」

「もう、ぜったいだよ」

「はいはい、ぜったい、ね」

（そう。 ……ぜったいに、させない……）

（私が……必ず、護ってみせる……）

赤い糸

「……うん。また、必ず連絡するから。……じゃあ」

受話器を置くと同時に、軽やかに足音が近づいてくる。

「どうだった？」

「叱られました。父に」

「……だろうね」

少し離れて僕の様子を見守っていてくれた彼女。

「いつぶりだろうな。あんな風に父に叱られるのは。」

母には……泣かれてしまうし。

親を泣かすなんて、はじめてですよ、こんなの」

「そりゃあそうだろうね。」

「……やーい、この親不孝息子」

しかし、その声音は台詞にまったくそぐわない、明るく弾んだものだった。

「ちよつと、さつきからなんでそんな嬉しそうなんですか……」

発されたそんな僕の苦言に応えることもなくなおも彼女はいう。

「……ばんかい、しなきやだね」

「……え？」

「帰ったら、たくさん。……親孝行」

「……ふっ！ そうですね」

「あ、そろそろ時間だ。じゃあ、戻ろっか」

「はい」

「まったく、ひとの気もしらないで……」

『どこにいるんだ！』『今すぐ迎えに行く！』

……つてふたりとも凄い剣幕なのをなだめて誤魔化すの、大変だったんですからね」

「そうだろうね。自業自得だね。……よかったね」

「いや、だから……」

「じぶんがいちばんうれしそうじゃない」

「う……」

*

*

*

電話を終えた彼とともに部屋に戻ると、ちょうど今朝の回診の時間がやってきた。懸念とともにハラハラとそれを見守っていると、案の定、医師からこんなセリフがもたらされる。

「あれ？ 君、昨日……泣いた？」

「……すみません」

「腫れちやつてるじゃあないか……。どうしたの？」

あきれ顔の医師。おもわず割って入り、自首する私。

「すみません！ わ、私が悪いんです！」

「君が？ ……離婚届でも突き付けたのかい？」

「そ、そんなわけではないでしょう！ もう……」

しかし、ある意味惜しい。むしろ逆だ。うっかり勢いで（……本音だけど）プロポーズまがいのことをいいました。……いろいろすつとばして。と、ありのままを伝えたら、このけつこうおちやめな先生はどういう反応をするだろうか。

幸いなのか、なんなのか、どうやら彼にはそういうふうにはとられなかったようである……。

昨晩あのあと今朝も、まったくもって、いままでどおりの態度で接してくれている。（友だちとして、ってことにしてくれたのかな。たぶん。

……気まずいから、そこはきづいてないことにしてくれてるんだっただらどうしよう
(……)

そして、医師から続いて朗報ももたらされる。

「まあ、経過は順調だけど。もう傷はほとんどふさがっているよ。

明日の朝辺り、外そうか? 包帯」

「ほ、本当ですか!?!」

「ああ」

「じゃあ、明日退院ですか?」

「いや、さすがに一日くらいは様子をみたいから、明後日だな。そのつもりでいて」

「はい」

「よかったね!」

「ええ。思ったより早く合流できそうだ」

「うん! いろいろ準備しないとね」

「今どの辺にみんなはいるんだろうか……」

そのとき、看護師さんが知らせにきてくれた。

「失礼します。ジョースターさんという方からお電話がかかってきていますよ」

「あ! ちょうどよかった! じゃあ、いつてくるね」

「はい、お願いします」

教えられた電話機の受話器を上げると、聞き慣れた明朗な声が聞こえてきた。朗報を伝える。

「そうかそうか！ 明後日だな。わかった。

こちらはおそらく、明日ルクソールに入り、一泊するようになると思う。そこでおち会おう！

財団に連絡して、ヘリを頼むといい。わしからも伝えておく」

「わかりました。ありがとうございます！」

「しっかし、やたら治りが早いな……。いいのか？」

「ええ。お医者さんもびっくりしていました。だいじょうぶみたいです」

「まあ、だいじょうぶならいいんじゃないが。」

「なんじゃ？ 花京院のやつ、あいつ実は波紋戦士か？」

「いや、それは……ないんじゃないや……あ」

(波紋……。……まさかね)

てのひらをみつめる。

「それはそうと、刺客とか来とらんか？」

「あ、昨日一人きました」

「はあ!? 保乃、おまえそんな、出前みたいに……。」

「だいじょうぶだったんか!?」

「はい。無事撃退できたので」

「そうか! よかったのお、残っておいて」

「はい!」

「引き続き頼むよ。君も無理をせんようにな」

「ありがとうございます。そっちは、だいじょうぶですか?」

「うむ、昨日承太郎が一人倒した。なかなか手強かったようじゃが……。」

「まあ、こちらのことは心配するな。問題ないよ。みんな無事だ」

「そうですか。よかった」

「ではまた明後日な」

「はい! また」

部屋のドアを開けると同時に、身乗り出すようにした彼から詳細を訊ねられる。

「おかえりなさい、どうでした?!」

「うん、ルクソールで合流することになったよ。財団のヘリがここまで迎えにきてくれ

るって」

「なるほど。……みんなは、無事ですか？」

「うん、だいじょうぶみたい。向こうにも強敵が現れたそうだけど、承太郎君がやつつけたって」

「そうなんですね……。早いところ合流しなければ」

「うん」

「でも、そのまえにこっちにまた誰か来たりしてね……」

「……やめようよ。あなたの予想、よく当たるんだから……」

「はい、まずは、スープ。で、つぎは、ごはん……でしょ？」

「おお！ よくわかりましたね。新しいスタンド能力にでも目覚めました？」

「もう、そんなわけないじゃない！」

「わかってますよ。ふふ」

「つぎはおかずだね。はい」

「……三日間の成果か、彼の食事パターンはだいたい把握できるようになっていた。

我ながらちよつと誇らしい気持ちになる。……と、同時に、すこしだけ、寂しくなる。

(そっか……こうして、食べさせてあげられるのも、今日まで……かあ……)
「!」

(ハッ! なに考えてんの!? 回復するのはいいことなのに!

ごめんなさい! ごめんなさい! いまのなしで……!)

だれにかわからないが、心の底から謝る。そして、祈る。

(どうか、なにごともなく、無事、彼の眼が治りますように……)

「どうしたんですか?」

そんな私の様子に気づいたのか、食後のお茶を飲みつつ、彼が訊ねる。

「ううん。じゃあ、私、ごはん買ってくるね」

「はい、いつてらっしゃい」

(さあって、今日はどれにしようかなあつと)

院内の売店にて、様々なパンを前に考える。

併設の食堂にて手作りされているものらしい、総菜パン、菓子パン、サンドウィッチ
……どれもおいしそうで魅力的だ。

しかしずつと気になってはいたものの、いつも売り切れていたアレが今日はまだ残っていた。

(あ！ やった！ ちよつと奮発しちやおう。ふふつ)

「すみません、これください。……ん？」

すると、食堂の片隅に少年たち……一人が大勢に囲まれているのに気づく。皆で遊んでいるのかと思つたが、よく見るとそうではないようだ。

「おい、うまそーなもんもつてんじやあねーか」

「ちよつと貸してみろよ。オレが食つてやるから……へへ……」

「だ、ダメなのです……」

「これは入院中のお、お、おにいちゃんにあげるものなのです……」

「うるせえっ！」

「よこせつつつてんだろ！」

「あつ！」

袋を取り上げられ、殴られる少年。

「うわあん、い、痛いつ！」

「へへ……おお！ うめえ！」

「……」

(……子どもの喧嘩にしゃしゃり出るのもなあ……うーん)

動物は好きだ。

こういうと何故かセットで子どもも好きだろうと思われがちだが、実はそうでもない。

嫌いなわけではないが、好きでもない。というか、比較的苦手かもしれない。

あまりふだん関わり合いにならないからかもしれないが、正直どう接していいのかわからない。

——あんたもいつか母親になったら変わるわよ——

……なんて昔、母さんにいわれたことがある。そんなものなのだろうか。

そつとしておこう……

そう思ったはずなのだが。

「……」

しかし、『集団だからといって全てが許されると思っている人達』というのはもつと好きではない。それに、なぜだかやっぱり気になって、見過ごすことができなかった。

「……こんにちは」

「ああ？　なんだよねーちゃん？」

「なんか言いたいことでもあんのかよ」

「これはオレたち子どもの問題なんだよ」

「大人はすつこんでろよ。ああ？」

(……。この歳でこれかあ……将来が心配だなあ)

若気の至りといつか思う日がくるといいのだが。

そんな風に思いつつ、持っていた物をスツと前に出す。

「まあまあ。これ、あげますから」

「こ、これはッ！」

「この売店名物、幻の、DXコロツケパンツ!!」

「く、くれ！」

「欲しいっ！」

群がってくる少年たち。ひよいと袋を高く掲げる。

「おっと……勘違いしないでいただきたい。

ただで差し上げるなんて、一言も言っていないですよ」

「かけっこで……一等賞になった人に、これを差し上げましょう……!!」

「さあ、中庭に出るがいい！ 正々堂々、勝負したまえッ！」

「うおおおー！」

「いくぜ、やろうどもー!!」

一斉にとび出ていく悪ガキさんたち。

前言撤回。こういう単純なのはそんなに嫌いではないかもしれない。

「おっと」

「わっ!？」

そして、その隙にこっそり逃げ出そうとしていた殴られた方の少年の首根っこを掴まえる。

「君も参加に決まっているでしょう。」

逃げられるとでも思っているんですか……?」

「ひ、ひいい! だ、駄目なのです。」

ぼ、ぼくは文化系で……かけっこなどからつきしなのです!」

涙ながらに訴える少年にこそっと耳打ちする。

「……だいじょうぶ。ふつうに走ればいいだけだから。ね?」

「……え?」

「位置について……よいい、どん!」

かくして、コロツケパン争奪、チキチキ中庭レースはスタートした。

(……。なんでこんなことしてんだろう、私。

って、自業自得か……)

ゴールにて、むこうから駆けてくる少年たちを見やる。

先頭はリーダー格と思しき大柄な子。

その後も舎弟の皆さんたちが続き、例の少年はひとりかなり遅れていた。

(……しかたない)

芝生だし、たいした怪我はすまい。そう確認しつつ、密かに呼び戻しておいた相棒をロープ状にして、こっそり罫を仕掛ける。

「あー！」

「わっ！」

「ぎゃっ！」

「え？ あ、あれ？ なんで……?!」

「はい、ゴール。君が一着ですね。」

……どうでもいいけど、走る時はうつむいてないで、前をみて。

で、目は開けといた方がいいですよ。危ないし。

運動が苦手な子どもさんに多いらしいけど」

続いてそこからここで倒れ臥している悪ガキさんたちの方を向き直る。

「あら、他の皆は転んじやいましたね。」

そろいもそろって、なにもないところで……不思議ですね。残念でした」

「いい、いたいよお！」

「痛いですか？ そうでしょうね。」

……知っていますか？

殴られたら、もつと痛いんですよ？

だいいじなものなられたら、もつともつといたいんですよ？

……いいお勉強になりましたね。よかったですね。では」

「お、お、お姉さん……！」

そして、狐につままれたような表情で問いかけてくる少年に約束の物を渡す。

「おめでとう。はい、賞品。」

……お兄さん、お大事にね」

「あ……」

「もつと堂々としていてもいいんじゃないかな？」

君は、きつと、お兄さん思いの……いい弟さんなんだから。

……自信もってください。

つて、また、よけいなお世話かな。

……じゃあね。」

「……」

部屋に戻る。

「ただいま」

「おかえりなさい、っ……！」

すると、私の顔をみた途端、なぜか急に俯く彼。

「ぶっ！……くく、くく……」

そしてそこから漏れる笑い声。

「な、なに笑ってるの？」

「いえ……」

「……けっこう、子どもには厳しいんだな、と」

「っ！ え!? み、みてたの?!」

「そんなわけではないでしょう？」

「何度もいいですけど、僕いま見えませんって」

「そ、そうだよね」

安心しかけたところに、しれっと彼はいう。

「…………『聞いて』は、いましたけど」

「…………」

「『勝負したまえッ！』…………つて、一体何者だよ。あなたは…………。」

く、く…………、ふははははは！」

「う、…………ちよ、わ、笑い過ぎでしょ！」

「ああ、面白かった！ いやあ、楽しませてもらいました」

「ぜんぜんおもしろくないよっ！」

あーもう！ やっぱり子どもなんて好きじゃあないッ！」

「ふっ！ まあまあ、そういわずに。」

いいことしたんじゃあないですか？

ああいうお子様方には早めのお仕置きと躰が必要だ」

「そうかなあ…………」

「ええ。」

…………あなたはいつか、いいおかあさんになりそうですね」

「…………っ…………！」

またもしれつと…………そんなことをいわないでいただきたいものだ。

(どきどき…………しちやうじやない)

「ああ、またおもいだしてしまった……！」

ふ、ふふふ、フハハハ……、フホホアハハ……ノオホホノオホ……」
「……むう……」

まあ、あいかわらず、そんな意味も自覚もちつともないのだろうけれど。

「ふう、笑った笑った。」

しかし、残念でしたね。コロツケパン」

「そうだよ。あーあ、私の愛しのデラックス様……」

「もう一個買えばよかっただけじゃあ……？」

「もうなかった……」

「そんなに人気なのかよ……」

「……くっ！ 明日こそは!!」

「はいはい、がんばって。」

……僕の方も、ふたつで、御願いますね」

スタンド使い同士はひかれあう。

のちに知ることになるこの文句はこんなところでもやっぱり正しかったわけで……。まあ、そんなことを私を知るのは……本当に、ずっとあとになってからなのだけれども。

*

*

*

昼食が済み、午後からは音楽やラジオを聴いたりして、のんびりと過ごすことができた。

「あ、終わった。次はどのテープにしようか？」

「今度はあなたの好きなのでいいですよ」

「いや、それが私、恥ずかしいんだけど洋楽って今まであまり聴いたことがなくて……」

だからそっちの聴きたいので」

「そうなんですか？ ……じゃあ……で。」

ついでに自分の好きなものも持ってきてもらえばよかったのに」

「だいじょうぶだよ。私は精密動作の練習で忙しいんだから。なんてね」

そういつて笑う彼女。ほんとに自主トレをしていたのか。

「……ああ、でもやっぱり上手くないかない」

「なにをしているんですか？」

「ん？ セシリアに文字を書いてもらってます……。」

へったくそだったでしょう？ あの時き」

「ああ。あの時き。」

でも初めてにしては上出来だったと思いますが……読めたし」

「……」先祖様にもそういわれた。

うーん、あのとときに比べたらましになつてきたかなあ……」

「すぐ上手になりますよ。まあ、焦らずに」

「うん、ありがと。がんばる」

「ええ」

「スタンドつて、修行でどれくらいつよくなるもののかな？」

「どうなんでしょうね？ おそらく個人差が大きいとは思いますが……」

「そっかあ。まあ、でも、するにこしたことはないよね！」

「ええ。それだけは確実ですね」

「そういえばポルナレフさんもしたって言ってたね。」

『フフフ……理由あつて、修行をした』……つて」

「……。肉の芽つきの方で来ましたか」

「ん？」

似てないモノマネ、ポルナレフ編、肉の芽つきver。

うん……やっぱり……。

残念ながらこちらはあまり上達が見込めないようだ。

「……いえ。似てないな、と」

「ぐっ……！」

「まあ、それは置いとくとして、意外とああみえて、あいつ努力家ですからね」

「ふふ、そうだね。見習わなきゃ」

「……ちやりおーつつ!!」

「うわ！ なんですか。いきなり……」

「……どう？」

「……27点」

「100点満点の？」

「もちろん」

「だめかあ……」

「勢いしか似ていない。かるく赤点ですね」

「ひ、ひどい！」

い、いつか似てるって言わせてみせるんだから！」

「はいはい。……いつか、ね」

「むう……………」

「あー！ ふふふ……………」

何かを思いついたように、不敵に笑う彼女。

「どうしたんですか？」

「いいえ？」

そんなにいるなら、さぞかしあなたは上手なんだろうなあ……………つて！

ちよつとやってみ……………」

「チャリオッツ!!」

「へ!? え? あれ? ほ、ポルナレフさん!? いつのまに? ど、どこ?」

「……………オレの名はジャン・ピエール・ポルナレフ。」

スタンドは……………戦車のカード、シルバーチャリオッツ……………」

「に、似てる……………! 本物かとおもつた……………」

「ふふふ、まあ、ざつとこんな感じですか?」

「えええ?! なんでそんなに上手いの!? 実はこつそり練習……………?」

「……なわけないでしょう。意外とできるものですね。はじめてやりましたが」
「く、くやしいー！」

「いいもん……天才は99%の努力と1%の才能だもん……」

エジソンもそういつていたもん……」

「またなにをぶつぶついつているんですか……」

「なんでもないですー！ ええと、次のこれだったよね」

カチャリという音のあと、ゆるやかに聞き慣れたなつかしい曲が流れだす。

「……イギリスのシンガーさん、なんだね。」

このひとのうた、はじめて聴いたけどいい曲ばかりだね。

もっと聴いてみたいかも……。日本に帰ったら買おうかな」

「でしよう!? ふふ、よかった。」

買わなくても、これ持って帰ればいいじゃないですか。

僕ここにやつ全部持ってますし」

「あ、そっか」

「他にもおすすめがあるので、よかったら貸しますよ」

「ほんと？ ありがと！」

『オレより上手に歌うやつはたくさんいるが、オレのように歌えるやつはいない』

これは数多くある彼の名言のうちのひとつなんですが……凄いですよね。どのようなジャンルでも、自分より優れた人間はたくさんいるもの。にもかかわらず、自分の持ち味を自分自身で理解し、それを『何ものにも恥じない』気持ち、それが生涯を貫く自尊心であり、揺るぎない自己への信頼がある。実際、彼の声も歌い方も、ハスキーな中に不思議な透明感があり、聞けば一発で分かる個性があります」

「彼は数年前に組んでいたグループを解散し今はソロで活動しているんですが、グループ時代に彼が作った曲もまた名曲揃いです。これがまたすごいところなんです、彼の曲には似通ったところがまったくない。どれも曲調、雰囲気ガラツと変わるんです。一曲一曲、異なるスタイルを打ち出してくる。パンク、レゲエ、ジャズ、正統派ポップス、ついにはスタンダードなラブバラード……と、非常にバラエティに富んでいるんです。新しいものがリリースされる度に、新たな彼らの音楽との出会いがある。これは誰にでも出来そうで、真似できるものではない」

「彼はけっこうエゴイスト……やんちゃなところもあつたりするんですが、一方とても知的で繊細で、作る曲にそれが如実に表れている。ちなみに大変な読書家で、飛行機など移動の際にはいつも本を読んでいるそうです。……だれかさんみたいですね。やれやれだぜ。つてね」

「今流してもらったこれ……表題曲の『シンクロニシティ』とは、精神科医ユングの提唱

したもので、いわば『意味のある偶然の一致』のことで、日本語訳では『共時性』などといえます。それを歌詞で彼は見事に表現しています。一般的にはちよつとわかりづらいかもしれませんが」

「そんなふうに社会派な一面や哲学的な表現もまた魅力的なんです。彼の歌詞は、陰鬱とした心境を描いたものが多くて……それがまたいいんですよ」

そこへ一つの曲がちょうど流れてきた。

「あーこれ！」

「この曲……どう思います？」

「ん……？　ちよつとまってるね」

そういうと黙りこくる彼女。おそらく熱心に曲に耳を傾けてくれているのだろう。

「……うーん……、甘いメロディラインに、綺麗な歌声がマッチしてて……」

素敵なラブソングだと思うけれど」

「そうなんですよ！　表向きは！」

でも実はこの曲、恐い曲なんです。

一部訳してみると……

……お前の仕草、そのたびに

……お前が歩く、その一歩ごとに

……俺はお前をじつと見ているからな……ですよ？」

「うっ！」

「この曲、実は最初の奥さんと離婚する時に作った曲らしいですよ」

「えっ!?!」

「当時のインタビューで彼は、

『この曲はゾツとするほど不快でちつぽけな曲。むしろ悪い歌だと言ってもいい。嫉妬や監視、所有権のことを歌った曲だから』と発言したそうです。『悪意を持って監視している人間』、つまりストーキングの歌。このように彼の書く歌詞は、一筋縄ではいかな
いところが魅力的で……」

「……」

彼女がほうつと息をはくのがきこえた。

「はっ！ すみません。また長々と……」

「あーううん！ちがうの！」

本当にすきなんだなあって。おもって。

……いいよね。そういうの。

すきなことって、ついいっぱい語っちゃうもんね。

だいじょうぶだよ。よく知っているでしょう？

あなたがそういうふうに話をしてくれるのをきくの、私すきなもの」
「それに……」

ふふ、なんだか……あなたらしいよね。

すごく、あなたがすきになりそうなのとんだなああって、よくわかつちやつた。

おすすめ貸してもらうの、たのしみだなあ」

くすくすとても楽しんでそんなことをいう。

(……ぐっ……)

不覚にもそんな様子に、そして、いま、彼女がしているであろう表情を想像するだけで、うるさく胸の鼓動が高鳴ってきてしまうのを感じる。

しかも、その……二文字……を、そんなふうに何度も連呼しないでいただきたい。

そういう意味じゃあない。

なんて、そんなことはよくわかつてはいるけれども。

(くそう、あいかわらずだな……。はっ！)

「……そうだ。日本に帰ったら、なかでも、ぜひあなたに聴いてほしい……とくにおすすめの曲があるんですよ」

「ん？　なんていう曲？」

「邦題は『マジック』といいます。おぼえておいてくださいね」

「うん。でも……帰ってからの？」

気になるし、はやく聴きたい……。

このテープの中のどれかに入っていないの？」

「うっ！ ……ええと、僕の渡すものを、聴いてほしいので……

あとのおたのしみ、ということで」

「そうなの？ じゃあ、しようがないかあ。」

仰せの通り、我慢して、おたのしみにとっておきます」

「……おねがいます」

(……あぶないところだった……)

聴いてほしい……が、いまはまだ……まずいのだ。

どうやらいうとおり、まっついていてくれるらしい彼女の様子にほっと胸をなでおろす。

安心すると急に反動か、睡魔が襲って来た。

「ああ、なんだか、一気に話したら眠くなってきました……」

「いいんじゃない？ 少しお昼寝したら？」

「……じゃあ、すみません。おやすみなさい」

「おやすみ」

目を閉じ、微睡みの中、おもう……。

こんなふうには穏やかな時を、すきなひとと過ごすことができるなんて。

(怪我也、すべてが悪いものではないのかもしれない……なんてね)

(まったく……本当に、けしからんな……)

そうして、あつというまに日は暮れて、夜がやってきた。

「眠れないの？」

「あ、はい……。昼寝しちゃったからですかね」

(それもあるけれど……)

明日包帯が外れる。僕の目は果たして本当に見えるようになっていたのか。

先生もああ言っていた。そんなに不安があるわけではないはずだが……。

やはり心の底では気になっているのかもしれない。

「……。じゃあさ、むかしばなし、してあげよつか？」

すると、唐突に彼女がそんなことを言い出した。

「むかしばなし？ そんな、子どもじゃあるまいし……」

「まあ、いいじゃない。うちに代々伝わるやつ。けっこうおもしろいよ」

「……あなたのうち、代々伝わっているもの多すぎじゃあないですか……？」

しかし、ちよつと興味がわいたのも事実だった。

「ふーん……。じゃあ、お願いしようかな」

「了解いたしました。では、僭越ながら……」

ひとつ咳払いをし、彼女は話はじめた。

「むかしむかし、あるところに……」

とつてもビューティフルでプリチーでワンダホー、

かつ、性格もよく、冷静沈着聡明な、少女がいました」

「ぶっ！ なんですか、それ……」

「いや、冒頭、ほんとにこんななんだって……。私が考えたんじゃないんだよ……」

「……ほんとに代々伝わってんですか……？ それ」

とてもじゃないが、そんな由緒正しきは感じられない。

「ちゃんと伝わってます。失敬な。続けるよ！」

少女は旅のちゆうでした。たいせつなものをさがす旅でした。

いくつもの海を渡り、いくつもの国を巡りました。

でもさがしているものはなかなかみつからず、いたずらに時は過ぎていくばかりでし

た。

まっしろに雪のつもった、ある日、ある国でのこと。

たまたま迷いこんだ森のおくに、大きな洋館がありました。

しんと静まり返っており、誰も住んでいないようです。

今夜はここで眠らせてもらおう。

そう思い、少女は中へと入っていききました。

好奇心でむずむずした彼女が館を探検してまわっていると、突然の、大きな地震。

くずれゆく館。

はやくにげなければ。少女は外へと急ぎます。

しかし、その途中で……

運命はふたりをひきあわせました。

だれもいない……。そう思っていたのに、そこには、二人の男がいました。

一人は大地を揺るがすこともできそうな大男。

もうひとりの男のひとは……

血まみれでした。

「……は？　なんかいい感じになつてきたかと思つたのに……。なにそれ？　バイオハ
……」

「ちがう！」

少女はおもわず柱のかげに隠れ、そつと様子をうかがいました。

倒れた血まみれの男のひとは、今にも息絶えてしまいそうなほどの大怪我をしている
ようです。

そんな彼に追い討ちをかけるかのように、瓦礫の雨がふつてきました。

おもわず彼女はとびだして、その身を挺して彼を、庇いました。

もちろんそんなこと、大男は知りません。無言でその場を立ち去りました。

いや、気づいていたけれど、助かりっこない……。そう思つたのかもしれない。
けれど、ふたりは生きていた。

彼女には、誰も知らない、秘密の力があつたのです。

どれくらいの時間がたつたでしょう。

男のひとは意識を取り戻しました。

みると、ひとりの少女が瓦礫の下敷きになりそうな自分を庇ってくれているではないですか。

不思議なことに少女と瓦礫のあいだには隙間があり、おかげでつぶれずにすんでいるようです。

しかし、本人にはすでに意識がないようでした。

彼は渾身のちからを振り絞り、彼女を抱えて瓦礫の外に脱出しました。でも、それが精一杯。彼の意識もそこで、また途切れてしまいました。

彼がふたたび目覚めるとベッドの上でした。

痛みでまだ起き上がれなかったけれど、傷には手当がしてありました。

そして、傍らにはあの少女が眠っていました。

自分を助けてくれた、あの少女が。

あの不思議な出逢いのお返しを思い返します。

でも、思い出せませんでした。

それ以外のことは、なにも。

じぶんはなぜ、あそこにいたのか……
いったいじぶんは、なにものなのか……
なにもわからなかったのです。

それから奇妙な共同生活がはじまりました。

少女の看病の甲斐あって、彼の傷は徐々に癒えていきました。
しかし、失われてしまった彼の記憶だけは、戻ることはありませんでした。

ふたりで過ごす日々はつつましいながらも、とてもしあわせなものでした。
たわいもないことで喧嘩をするのはしよっちゅうだけど、それすらも楽しい。
いつしかふたりは互いのことがなくてはならない存在になっていました。

そして長い時をかけて、男のひとはすっかり元気になりました。
しかし、そんなある日、少女が塞ぎこんでいるのに気づきます。
問いただすと、彼女はこういいました。

「わたしは、かえらなければ、いけないの」

少女の家は代々不思議なちからをもつ一族で、それを生業としている。

その血を絶やさないうため、二十歳で相手がいなければ、許嫁と結婚するならわしである。

それが嫌で、そもそもそんな決められた人生を過ごすのにならずと疑問を感じていた少女は、家をとびだしてきたのでした。

しかし、その期限は限界まで迫っている。

かえらなければ、ならない、と。

「こんな血……大嫌い。どうしてこんな家に生まれたんだろう……」

彼女は彼にいました。

彼はしばらく黙りこんでいましたが、やがてこう、いいました。

「……おまえがそんな家に生まれていなければ、おれは今頃あの世にいるんだぜ。」

その方がよかつたっていうのかよ……。まったくひどい女だぜ」

「血の絆つてのは、まずいちばんに大事にするべきものだ。絶対にだ。」

自分の血統に……代々受け継がれてきた魂に誇りをもて」

「……記憶がないくせに、おかしいこといつてるって思うか？」

でも、なんでだろうな？ ……それだけは……

ゆるぎないものとして、この心にたしかにあるのを感じるんだ……」

「……帰りな。世話になった。ありがとうな」

夜が明けました。

彼が目を覚ますと、彼女の姿はありませんでした。

家中。どこにも。

「いって、しまったか……」

彼女のいない、家。

そこで彼はひとり、立ち尽くしていました。

自分には、なにもない。記憶すらもない。

彼女をしあわせにできるわけが、ない。

だから、みずから、てばなした……。

これでよかったのだ。

心からそう思っている。

なのに、なぜこんなに……。

そんな彼の耳に、ききなれたこえが届きました。

「ただいま！」

「今日は市場でイカが安かったから買ってきた」

「……あなたの得意なパスタ、また作ってよ」

「……わたしは、ずっと、さがしていた。そしてやっとみつけたの」

「ただひとつ、唯一無二の護りたいもの。つまりは自分が生きる理由」

「……あなたの、いうとおりだったの」

「あなたを護ることができて、わたしははじめて、じぶんの血を誇らしくおもえたの」

「そしてあなたと過ごす日々で、わたしははじめて、じぶんらしく生きているっておもえたの」

「わたしのたいせつな血、誇り高い魂……」

「それをいっしょに繋ぐのは、……あなたであってほしい」

「……そしてふたりはいつまでも幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし。ちゃんちゃん」

「……。めでたい。……うん、そうだね。……けれども！

……えっと、それで、おわり……？」

「うん。そうだよ。あれ？ いまいちだった？」

「いや、……よかった。」

実はけっこう感動してしまった自分があるッ！ ……が、しかし！」

(もはやどこからつつこんだらいいのかわからんが……)

「……むかし、ぼなし……？」

「うん。まあ、実はこれ、私のおじいちゃんとおばあちゃんのなれそめ話らしいんだよ

ね」

「はあ!! 全然伝統じゃないじゃあないですか」

つつこみどころはつつこむたびに増える一方だ。

「え？ 一応伝わってるじゃない。まだ2代目だけど。これから伝えていくもんね！

」

「なんだそれ……。まあ、どおりでなんかリアルな……」

「小さい頃、私を寝かしつける時におばあちゃんがよく話してくれたから覚えちゃった

んだよね」

(自分の恋の話を孫の子守唄代わりに……いいのか、それ……?)

……ん? つてことは……)

「この話の中の『家』つてあなたのうちのことですよね?」

「うん、まあ、そうだね」

「そ、そんなならわし、あるんですか?」

仁美さん、あなた19ですよね……来年?! い、許嫁が、いるんですか……!?!」

「い、いないツ! いないよ! そんな人!」

「そ、そうなんですか」

「ええと、正確にいうと話にでてきたのは本家で、そことは断絶ぎみというか……」

「ああ、そういうえげば言ってみましたね。あなた最初の頃」

「うん。補足するとね、一応帰ったんだって。おばあちゃん、おじいちゃん連れて。

でもなんか本家の親戚たちが、やいやいうるさかったから、結局、なんていわれようと結婚します、とだけ言つて出てきたんだって。」

「や、やいやい……」

「そもそも、おばあちゃん、本家のそういうところが嫌いだったんだって。

お金をもらつて誰かを護るつてというのが、あまり。」

だから母さんや私にあまりちからのこと、詳しくは伝えてくれないんだよ。

じぶんと、じぶんのたいせつなものを護るちからだって。それでじゅうぶんだって」
「なるほど……。おふたりは、えっと、今もご健在なんですか？」

「うん、日本で元気に暮らしてるよ」

「おじいさんの記憶は……。今も？」

「うん。記憶を取り戻そうといういろいろ探ってはみたらしいよ。」

でもその途中でへんな人たちに襲われて……。例の大男の関係者なのかわかんないけど。

おばあちゃん、そのときお腹に母さんがいて……。

セシリアに護られて母さんは無事だったけど、おばあちゃん大怪我したらしいの……。

それからおじいちゃん、もういいって。ふたりのほうがだいじだからって……」

「それは……。そうなりますよね、……。男としては」

「そうだよね……。自分が何者なのかとか、なんでその人と闘っていたのかとか、ほんとはすごく知りたいだろうけど。故郷とか家族のことも」

「なにか手がかりはないんですか？」

「うーん、ふたりが出逢ったのはスイスなんだけど、生活習慣から察するにイタリアなん

じゃないかって。おばあちゃん言った。おじいちゃんの Pasta おいしいし」

「そ、それだけでイタリア出身っていうのは……」

「い、いや、別に根拠はそれだけじゃないって」

「……あれ、つてことは……あなた……」

「あれ？　いつてなかつたつけ？　私一応クォーターなんだよ。推定イタリア人の

……」

「初耳ですよ！　へえー。全然……」

「みえないでしょ？　兄さんはおじいちゃんそっくりだからけっこうそれっぽいけどね」

意外だ。彼女に関して、知らないことがまだまだたくさんあるものだ。

「他には何かないんですか？　出逢ったときの服装とか持ち物とか……」

「えーとね、頭にけつたいな飾りつけて……」

あと、なんか、服、洗濯したら泡だらけになったって。

……おじいちゃんの正体つて、ほんと、なんなんだろ……」

「あ、泡……？　なんで……？」

しかし、けつたいって……なんて言い草だ。おじいちゃん泣きますよ……？」

「だつておばあちゃんがいつてたんだもん。」

派手でけつたいな格好で、きれいな金髪で……

いつも眉間にしわが寄ってて、素直じゃあなくて……

でも、ほんとはすつごくやさしくて……

今まで出会ったどの男のひとよりも、比べようがないくらい、かつこよくて……

こんな素敵なひといるんだって、おもったって。

けつきよくそうやって……」

「……惚気話をされるわけですね」

「そう。今でもふたりラブラブなんだよ。

でもそういうの、いいなあって。

ずーっとかわらない……いや、つよくなっていくきもちって、やっぱりあるんだね」

「……運命の相手、ってやつなんでしょうね。だれにでもきつと、ひとり、いる……」

「……」

「……」

「ろ、ロマンティックだよね！」

「そ、そうですね！　す、素敵な話を聞かせてもらいました……」

「よ、よかった。そういつてもらえて……」

（そういえば当初の目的は……。むしろ眠れなくなってしまった気がするが……）

「いつかおじいちゃんとの記憶、取り戻させてあげられたらなあ……」

「探しにいったらいいじゃあないですか。この旅が終わったら」

「あ……そつか。そうだね！ うん、そうする！」

「……そのときは、僕も付き合っただけですから」

「え!？」

「だって気になりますもん。大男の正体とその後」

「あ、ああ、そうだね。たしかに私も気になる……」

「それに……」

「？」

「あなたひとりじゃあ、あぶなっかしい。」

「しょうがないから、僕がちゃんと、……ずっと、そばについてあげなきゃあね」

「っ!!」

「むかしばなし、ありがとう(ご)ございました。じゃあ、おやすみなさい」

「お、お、おやすみな、さい……」

(……昨日の仕返した。)

昨晩はあれから一睡もできなかった。あたりまえだろう？

……胸がいつぱいで。

……このころのなかで、あなたへのきもちで、あふれていて。

(……すこしは、伝わっただろうか?)

——あなたのそばにいたい——

(……そんなの、そっちだけじゃあないんだと……)

となりでねむらせて

とうとう、この時をむかえた。

「じゃあ、外すよ」

僕の眼の包帯を外す時が。

「……よし、ゆつくりと、眼を開けて」

「はい……ぐっ……」

瞼を動かそうとするも鉛のように重い。それに抗うように持ち上げる。

「うっ！」

(真っ白だ……これは……)

瞬間のフラッシュバン。眩しくて思わず眼を閉じそうになる。

そこへ、落ち着き払った医師の声が聞こえてくる。

「大丈夫だ、だんだん明るさに順応してくるから」

そのとおり、少しずつ視界が安定してくる。

自分の手、先生、看護師、そして……。

「……」

不安そうな面持ちで僕をみつめる彼女の姿。

「ど、どう？ みえる……？」

「……はい」

噛みしめるように、頷く。

「ほ、ほんとに?! じゃあ、これは?! 何本？」

手を後ろに隠して、そういう彼女。

「……指の本数のことを聞いているならば、手を出してくれなきゃあ、数えられませんよ？」

(こういうひっかけめいたことが、意外と好きだよなあ……このひと)

出逢いのおきを思い出し、おもわず笑みがもれる。

「み、みえてる! ……みえてるんだ!」

「だから、だいじょうぶだって……」

「だって、あなたならほんとは見えなくなつて、お医者さん簡単に騙せちやいそうだもん!」

「なんていいぐさだ……ひとを詐欺師みたいにいわないでくださいよ」

そんな掛け合いをしていると、みるみるうちに潤みだす、碧色の瞳。

「よ、よかった……よかったよ……!」

「もう、また……ひさしぶりなんだから、泣いてないで、わらってくださいよ」
「……！ うん……！」

こうして数日ぶりに、無事、僕の眼はふたたび光を取り戻したのだった。

「おほん。邪魔をしてまことにすまんが、もう少し診せてもらってもいいだろうか……」
「わっ！ す、すみません！」

「……うん、問題ないようだ。」

傷跡はまだ目立つけど、だんだん薄くなってくるから心配しなくていいよ。

あとは今日一日、一応様子を見て、大丈夫だったら明日の朝、退院していい」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、また夕方くらいに確認しにくるから。」

それまで別に外出とかもしていいよ。ふたりで出かけてきたら？」

診察を終えた医師が言う。にやにやと、とんでもないことを。

「あ、でも、見えるようになったからって、彼女と激しすぎる運動はやめてね」

「し、しませんよ！ そんなこと!!」

「？」

一方、彼女はちっともわかっていないようで……。

どうせ「そっか！ 戦闘はまだ避けろってことね！」……とか思っているにちがいない。

まあ、それでいいんだけども。

「はは、ではまたね」

「よかったですね。じゃあ、朝食を持ってきますね」

そうして去っていく医師。入れ違いに、看護師が笑顔でいう。

「お願いします」

「あ、そしたら私もごはん買ってくるね」

「はい」

軽やかに部屋を出る彼女。その背中をみつっ、おもう。

(……そうか、もう、食べさせては……)

いや、あたりまえじゃないか。なにを僕は……)

「ただいまー！ 買えたよ！ 今日こそは！」

にっこりという彼女。例の『コロツケパン』のことだろう。

「ふっ、おかえりなさい。よかったですね」

「うん。はいこれ、花京院くんのぶんね」

「おお！ ありがとうございます」

「じゃあ、いただきます」

「はい、いただきます。……って、それだけ？」

「うん」

「もつといろいろ食べなきゃ駄目でしょう……」

「ええ？ デラックスだよ？ だいじょうぶだよ」

「あ！ ここしばらく、ずっとそんなだったんじゃないでしょうね!？」

「う……。いや、そんなことないよ！」

ぜったい嘘だ。このひとは、何故こうも自分のことには適當かつ無頓着なのか。

(ひとのことには、あんなに一生涯命なくせに……。……そうだ)

ひとつ思いついた僕は、自分の皿からひとさじすくって彼女の口元に差し出す。

「？」

「はい。けっこう美味いですよ。ここの食事」

「えっ!？」

「いままで食べさせてもらっていたお礼です。さ、口あけて」

「うっ！ そ、それはっ！」

「いいから。冷めちやいますよ」

しばらく真つ赤なかおをして拒んでいた彼女だが、やがて観念したようで、遠慮がちにくちをあける。そこへそつとスプーンを差し入れる。

「……」

何とも言えない、甘酸っぱい感覚が全身を駆け巡る。

「これ、なんというか……すごく、はずかしい、ですね……」

「……でしょ？ 私の三日間のきもち、やっとわかつてもらえたかな……？」

「はい……。すみません」

「あ、違うよ！ はずかしかっただけで……。い、いや、なんでもない！」

「？」

「でも、ほんと、おいしいね。ありがとう！」

なにかを言いかけつつも、そう笑顔でお礼をいわれる。

気にはなつたが、そんなかおをみると、つい、どうしてもよくなってしまう。

そして自分もいただこうと、口を開けかけて、気づいてしまう。

「はっー！」

(こ、これはいわゆる間接……)

い、いや、やめよう。意識してはいかん)

そんな僕の葛藤も露知らず、呑気な彼女。

「わあ！ さすがデラックス！ おいしいー！」
「…………ふっ」

*

*

*

「準備できた？」

「ええ」

先生のお許しも得たことであるし、明日からの旅に備え、私たちは街に買い出しに行くことにした。久しぶりにいつもの格好、碧がかつた学生服に身をつつんだ彼。

「じゃあ、いきましようか」

「うん」

病室をでて、まずはバス停に向かうため、ならんで歩きます。

(やつぱりこの格好がいちばん似合うなあ。パジャマ姿もよかったけど。

って、私、なんておっさんくさいことを……)

そんなことをこつそりおもっていると、彼が急にこんなことをいいだした。

「そういえば、ありがとうございます」

「え？ なにが？」

訊ねると、袖口をこちらに掲げる彼。太陽の光を反射し、金色のそれがきらりと輝く。「ボタン。つけてくれたんでしょ？」

「あ……………」

自分でも忘れていたが、そういえばそうだった。

「すごいな。裁縫も上手なんですね」

しげしげと様々な角度で眺める彼。たまらずいう。

「あ、あんまりみないで！　ほんと、つけたただけだから！」

ゆがんでるかも。しかもすぐにまたとれちやったりしたら、ごめんね！」

「そんなことないですよ。助かりました」

「よかった……………」

少しは、役に立てたのだろうか。ほっと胸を撫で下ろす。

「料理も…………、あなたのつくるものはどれも美味しいなあ」

「そ、そんな！　た、たまたま！　たまたまだよ」

いつか、ほめてほしい、とかおもっていたけれど、これははずかしい…………が、やっぱり嬉しい。

「とくに、あの味噌汁とか。あれを僕は毎朝…………はっ！」

「？」

「い、いえ。なんでもないです。」

「そ、それにしても、ささっとあれだけのものがつくれるってすごいですよね」
「い、いえいえ！ほんとうにお粗末様でした。」

家族以外のひとに食べてもらうの初めてだし、緊張した。

みんなのおなかを破壊したらどうしようかと……」

「ふっ、だいじようぶ。誰のおなかも壊れてなどいけませんよ」

「いつもとちがってたくさんの量作ったからとくに心配だったんだよね。」

でも……、楽しかったかな」

（じぶんのためじゃなく、だれかのためにつくる、っていうのは）

思い浮かべる。仲間たちの顔。そして……

「ん？ どうしたんですか？ なにか顔についてます？」

「ふふっ！……ううん、なんでも」

きつと、それが、たいせつなひとたちだったから、なおさら。

バスにゆられること、約15分。たくさんの店が立ち並ぶ、商店街のようなところにとどり着いた。

「さて、なにかから見ようか？」

「まず、ひとつほしいものがあるんですが、いいですか？」

「もちろん。なに？」

「サングラスです。傷跡、結構まだ目立つちやつてるでしょう？　人前ではかけておこうかと」

「そう？　私は気にならないけど……」

（これはこれでワイルドでいい……とか、重症……私……）

「そ、そうですか？　い、いや、あなたとふたりでいるときはいいんですけど。一応ね」「そっか。了解。じゃ、いこう」

*

*

*

その後、薬屋、衣料品店、雑貨屋、本屋などを巡っていき、必要なものを順番に買いそろえていった。

「こんなものですかね」

「買い忘れ、ないかな？　えーと……」

メモを取り出し、確認していく彼女。

それを目の端に置きつつ、考える。

僕は、今、悩んでいた。

(どうしたのか……。つい、買ってしまっただが……)

ポケットに入っているものの存在を確認する。

(こういうことをするのはなんて、初めてだしな……)

恋人でもない男がこんな……。困らせてしまっただろうか)

*

*

*

「うん、だいじょうぶそう。……あれ？ どうかした？」

なにかを考え込んでいる様子の彼。

「いえ。じゃあ、そろそろお昼にしますか」

「うん」

ちなみに、今日の病院のお昼の分は、夜に出してもらって、私が片方食べる。そういうふううに彼がしてくれたのだ。

(過保護なんだからなあ。もう……。あ、そうだ)

お昼御飯を注文して待っている間に、先程つい買ってしまったものを渡しておこうと

思い立つ。

「あの、これ」

「？」

「おまもりなんだつて。よかつたら……はい」

「え!?! ……ぼ、僕に？」

「うん」

あたりまえだろう。他にだれがいるというのか。

「……」

すると、彼はまたも、なにかを考え込むように黙りこんでしまった。

(はっ! しまった! め、迷惑だった!?)

——(……これ……)

別行動中、とある露店で、ひとつの首飾りが目にとまった。

黒い革紐に通されたひとつの天然石。

シンプルなデザインのそれが、なぜかすごく気になった。

「そこのお嬢さん。この石が気に入ったのかい？」

ついじっと見つめていると、店主さんらしき綺麗でかつこいお姉さんが声をかけて

くれた。

「買い物、ぼーっといろいろなものをながめて歩くのは好きだ。が、店員さんに話しかけられると走って逃げ出したくなってしまう。気になるくせに、いえ、やっぱりいいです……と、つい本当に逃げてしまうこともぎらだ。そうして、あとで、もつとみておけば……とか、よかれと思つて声をかけてくれたであらうに……とか、自己嫌悪に陥る、と。いつもはそうなのだが、今日は少し違った。

「あ、はい。なんというか……とても心を魅かれてしまいました」

「だろう？ それは御護り、さ。」

自分で身に着けてもいいが、たいせつな人間にあげるともつといい。

そばにいないときでも、あんたのぶんまで、いつでもそいつを護つてくれるはずさ……」

「……買います」

「……だろうね。しかたがない。特別に安くしといてあげるよ。」

この石も、あんたのここに行きたがっているようだから——

なんだか不思議な雰囲気を纏った女性だった。そう言われ、即、買ってしまったわけだけども……。

(そ、そうだよね。

よく考えたら、友だちからもらうには、お、重すぎるよね……。

あ、あああ……しまった!!)

「あー! あの! い、いやだったら、無理しないでいいから! ぐ、ごめん!」
あわててひっこめようとする。

と、あちらからもあわてた様子で答えが返ってくる。

「い、いえ、ちがう! そうではなくてですね……」

そう言つて、覚悟を決めたかのように、ポケットから何かを取り出す彼。

「……では、僕も、これ。……どうぞ」

「え? なにこれ?」

「……あけてみて、ください」

「うん。……あ!? こ、これ……!」

差し出された包みを開けると、そこには一对のイヤリングが入っていた。
結晶のような綺麗な石で表された、薄桃色の小さな花がモチーフの……。

(い、これは!)

先ほど立ち寄った雑貨屋さんでみかけたものだった。

「さつき、可愛いつて、みていたでしょう?」

だから……、その、よかったら……」

「い、いいの？」

「ええ。かなり遅くなったけれど、クリスマスプレゼント、ということにでもしてください」

「う、うん……」

（どうしよう……うれしい……）

「……つけてみても、いい？」

「もちろん。……つけてほしくて、あげたんだから」

どきどきする。なんでこうもこのひとは……。

「えっと、これでいいのかな？」

たどたどしくも、なんとかつけてみる。自分の不器用さが恨めしい。

「……どう、かな？」

「……いいね。すごく、かわいい。……似合うよ」

「あ、ありが……とう……」

（いけない……はずか死ぬ、いや、うれ死ぬ……かもしれない。私）

それって、ある意味一番幸せな死因かもしれないけれど。

「僕も、これ、つけていいですか」

「うん、もちろん」

そうして、私の渡したおまもりをかけてくれる。

石をつまんで、ながめる彼。

「いい色だ。深めの赤。僕の好きなアレに似ている」

「でしょう？　じつは私もそうおもって。」

あ、でも、だからって、レロレロしちやあ、ダメだよ？　……なーんて」

「……っ！　さ、さすがにしませんよ……！！」

「ふふ、じよーだんだよ」

「ま、まったく……」

ああ、でもたしかにすぐくよさそうだ。舌触りも。

すぐく手によくなじむ」

そういうって掌にそつと包み込む。

「それ、お護りの効果のあるパワーストーンなんだって。

古代エジプト、ローマ時代から持つ者を護つてくれると信じられてきたもので、昔からエジプトで破邪の護符として用いられているらしいよ。

あの『クルセイダース十字軍』も、これを身に付けて戦いに臨んだとか。

情熱と、揺るぎない信念のもと、努力が実る、成功と勝利をもたらす……

そんな意味もあるんだって」

あのあとお姉さんに教えてもらった逸話であった。

「へえ！ そうなんですな」

「御利益があるといいんだけど……」

「ありますよ。きつと。……ありがとうございます。たいせつにします」

いいつつ、石をそつと胸元にしまつてくれる。

なんだか、くすぐつたい。

「……うん。私こそ、これ、……ありがとうございます。」

すぐく、うれしい……。ずっと、たいせつにするね」

「……はい」

食事が終わり、お腹も、そして、こころも……なんというか満ち足りたところで、店から出る。帰りのバスまでまだ時間があつたので、もう少しぶらりとすることにした。

たわいもない……。のに、なぜかたのしい……。話をしながら、歩いていると、公園らしき場所にたどり着いた。

平日の昼下がりがらしく、人気は少なく静かだった。

そんな中、端にある大きな木の根元で、たくさんの絵画を売っている露店をみつけた。
「あ、絵がたくさんあるよ！」

風景画、人物画、動物画、抽象的なものまで、その種類は実にさまざまだった。
「本当ですね。ふーん、構図がどれも変わっているなあ」

と、彼。さすが美術部。着眼点が私とは違うのかもしれないなあなどと思う。

(……すごい。どれも上手だなあ)

どの絵も綺麗で、細かく描き込まれていて、じつと見ているとおもわず……
(……吸い込まれて、しまい、そう……)

*

*

*

「ひ、仁美さん!? どうしたんですか!? ちょっと!!」

絵をみていたと思ったら急に崩れ落ちるように倒れた彼女。
(息は……あるが、意識が……ない? 眠っている……?)

「ふ、ふはははは……かかったな……」

露店商の男が不気味な笑い声をあげる。

「!? き、貴様!? まさか！」

「そのとおり！ わたしのスタンドの暗示は芸術を司る、『プタハ神』のカード！

DI O 様のために、貴様らの命、頂戴する！」

（やはり敵か！ しまった、迂闊だった……！）

「……貴様！ 彼女に何をした！」

「くくく、その絵をよく見るがいい」

「!? こ、これはッ……!?」

彼女が見ていた絵をみる。するとそこには驚くべきものが描かれていた。

「……仁美さん!?」

緻密に描き込まれた風景画……その中にいるのは確かに彼女だった。

「絵に心を奪われたのだよ。その女は。」

わたしの『プタハ神』は、その絵に感動、感心したものの心を捕らえ、閉じ込める。

『守護者』ガーディアン……厄介な存在と聞いていたが……この女が素直な性格で、助かったよ」

「くっ……！」

「予定では、花京院、おまえも絵にしてやるはずだったのだが……」

「……僕はこの程度の絵など、見慣れているからね」

「ふん、まあいい」

敵が指を鳴らす。すると、絵の中の虎が、なんと実在化した。

「グルルルル……」

「くくく、とらえる、だけではない！ 描いた『実在する生物』を取り出すこともできるんだよ！

そいつは今腹がペコペコでね。さあ！ エサの時間だ！！ くくく……」

「……。貴様を倒せば、彼女は元に戻るのか？」

「無論。倒せば、の話だがな！ 死ねッ！！」

虎が鋭い牙をむけてこちらへ襲い掛かってくる。

「……それだけ聞ければ、十分だ」

敵上方の木に張り巡らしていたハイエロファントの触手から、無数のエメラルドスプラッシュを発射。雨のように敵に浴びせかける。

「な、なにイ！ ……ぐふああ!!」

敵が気を失うと同時に虎も消えた。

「……すでに、いつでも貴様を攻撃できるようになっていたのだ。

『プタハ神』……厄介な能力だが……きさまが迂闊な性格で、助かったよ」

「はっ！」

ほどなくして、彼女が意識を取り戻した。

「……あ、あれ？ 私……？」

「だいじょうぶですか?!」

「う、うん。なんだったんだろう……。なんか気がついたら変なところにいる」

目を瞬かせる彼女の様子を確認しつつ、状況を説明する。

「よかった……。あなたは、敵の能力で絵の中にいたんですよ」

「絵?! あ、あれ、絵の中だったんだ……。」

向こうから、こつちが窓みたいに見えるんだけど、動けなくて……。気持ち悪かった

……

「もう、心配いりませんからね」

「あれ？ ほんとだ。もうやつつけちゃってる。すごい！」

「……」

(たしかにこんなに素直なもの、問題だよなあ。……でも)

自分には厳しく謙虚なのに、他者に対しては、よいところを素直にみとめ、尊重する

……

そんな彼女を僕は尊敬している。

「ごめんね……」

返事の代わりに、微笑んで頭を撫でる。

頬を染め、はにかみながら彼女はいう。

「……たすけてくれて、ありがとう」

これから先も、このひとのそういうところにつけこむ輩が現れるかもしれない。でもそんなときには、こうして僕が護ってみせよう。

だから、どうか願わくば……

「ああっ!!」

「うわっ! な、なんですか……」

我ながら、こっぴどくかしいことを考えているときに急に声をあげられ、焦る。

「……はげしい運動、戦闘とか、ダメだった! 先生にいわれていたのに……!」

どうしよ! だ、だいじょうぶ?」

(やっばりか……)

前言撤回。すこしくらいは、かわってくれないと、そのうちまずいことになるかもしれない。

(まったく、こまったひとなんだから……)

*

*

*

夕暮れ時。干していた洗濯物を回収し、部屋にもどる。

「ただいま、花京院くん……。あ……」

(寝てる……)

どうやら彼は本を読みながら、眠ってしまったようだ。

(久々に歩きまわったし、闘いもしたし、疲れたよね)

街から帰って、先程先生の診察を受けた。敵スタンド使いとの戦闘になってしまったので心配していたが、どうやら傷の様子は問題ないとのことではと胸をなでおろした。

(よっと)

起こさないようにそっとタオルケットをかける。

(それに、昨日やっぱり眠れなかったのかも。『むかしばなし』、失敗だったかなあ……) そういえば、自分もあの話をきいた後はむしろ眼が冴えておばあちゃんを困らせていたことを思い出す。

(でも、他にきもちを紛らわせる方法が、思いつかなかったんだよね……はあ)

「ごめんね」

(せめていまはゆっくり……)

そう、明日からは、また、激しい戦いに身を投じることになるのだから。

(それにしても……)

あらためて、こうやって無防備なところをみせてもらえると嬉しくなる。

(……かわいいなあ。ふふ)

だいすきなひとの寝顔をこうして堂々と眺めていられるなんて。

(うー、なんて役得なんだろ。ジョースターさん、ありがとうございます……！)

そのとき、一陣の風が吹き、開け放された窓から一枚の葉が舞い込むと、彼の髪の上
にひらりと落ちる。

(あ、葉っぱが……)

とつてあげようと、手を伸ばす。

「……」

(……さつき、かわいい、とかおもったけど。……そう、なんだけど……)

まだ傷跡が痛々しいが、端正なかおは寝顔もやっぱり端正で……

(……どうしよう。……かつこいい……)

ときどきしながら葉っぱをとる。

髪にふれてしまった、ゆびが熱い。

(ねてる、よね……？ 今度こそ、また、実は起きてるとか……ないよね？)

目はなせない。もっと、ちかくでみたい。

長いまつげ、すつととおる鼻筋。うらやましくなるくらい綺麗な肌。大きめの口……。

「……」

(……くちびる……)

あの『夢』を、思い出す。

忘れられるわけがない……あの。

(……夢と、おなじなのかな……)

たしかめたい。ふれて、みたい……

彼の頬にそつと、手を添える。

(……こんなこと……ダメ、だよ、ね……でも……)

まるで魔法にでもかかったかのように、とめられなかった。

(すき、だ、よ……花京院くん)

吸い込まれるように唇を近づけていき、……眼を閉じる。

……そのときだった。

「いらつしやいますかー？」

「はっ！」

ノツクの音と看護師さんの声に、すんでのところで我に返る。

「は、ははははは、はいっ!!」

「お電話かかってきてますよー」

「は、はい！ 行きます！ ありがとうございます！」

（わ、私っ!? い、いま、なにを、しようと……!?）

己の行動が信じられなかった。

（わああああ！ 私の、ばか！ えっち！ 変態ーッ!!）

*

*

*

（……。いまのは……なんだ？ なんだったんだ……？）

ゆめうつつ。僕はまだ覚めきつていない頭で、ぼんやり考えていた。

いや、ぼんやりしているのはそのせいだけではないかもしれない。

（……キス……してくれるのかと、おもった……）

頬にやさしくふれられ……彼女のかおが、近づいてきて……

(……夢か。……そうだな)

僕はふたたび、まどろみの中に身を投じた。

(つづきがみられたら、いいのに、な……)

夕食も終わり、彼女の淹れてくれた食後の珈琲もいただいた。

カップを洗う彼女の横顔を気づかれないようにみつめる。

髪の間からのぞく耳には、昼間僕があげたイヤリングが揺れていた。

とてもうれしそうなおで、わらってくれた……それがすごく、うれしかった。

ずっと、考えていた。

一昨日の『あれ』は、そういうふうにとってよいものなのか。

彼女も、僕のことを……想ってくれていると。

わからなかった。

心底おもってくれているのは事実だとして、それははたして……

ただの、友人としてなのか。

……それとも、男として、なのか。

わからなかった。

たとえば、もし、ここにいるのが、僕じゃあなくて……承太郎やポルナレフだったとしても……

怪我をしている相手には、こうやって、面倒をみてくれていただろう。

孤独にさいなまれた相手には、ああやって、あたたかい言葉をくれていただろう。

きつと、そうだ。

……そんな風に想像するだけで、くるしくて、しかたがなかった。

彼女は、やさしいひとだ。そんなところもすきだ。

でも……、いや、だから、わからなかった。

わからないなら、きけばいいじゃあないか。とも思う。

だが、きいてどうなるというのか。

もしも望むようなことえだとしても、自分は中途半端なことしか、今はいえない……
なのに。

おもつてくれるだけでも十分じゃあないか。なにをつまらないことを……。とも思う。

だけど、我慢できなかった。

そんなふうにみるのは、僕だけであってほしかった。

僕だけを、想っていてほしかった……。

(なんてやつだ。僕は……)

自分でも驚いていた。こんな独占欲の塊が自分のなかにあるなんて。

しかもどんどん大きくなってきている気がする。

(……ぼくのもの、なんかじゃ、ないのにな……)

「花京院くん？ どうしたの？ そんな難しい顔して……」

そんな僕の気もしらずに、また、このひとは、笑顔をくれる。

「……いいえ。なんでも」

そういえば、今日はほとんど一日中(……)といってもわかるのは僕の眼がみえるようになってからだ(が)ずっと、こうだった。にこにここと、楽しそうで、嬉しそうで……。

可愛さ余って、ちよつと意地悪を言いたくなってしまう。

「そういうあなたは、ご機嫌ですね。明日、やつとみんなに会えますもんね」

「え？ そう？ あ、そっか！ またイギー先輩をもふもふできる！ やつた……！」

(もふもふ……。くそ……。よく考えたらあいつもオスか……)

犬に嫉妬……というのも情けないが、自分にも毛皮があればって、馬鹿か、僕は……。

「そういえば、こないだから気になっていたんですが、なんですか？ イギー『先輩』つて……」

「というか、よく彼を手懐けましたね。いったいどうやって？」

「手懐けるなんて人間きの悪いッ！」

「チツチツチ！ そんなだから怒っているのだよ、先輩は」

「そ、そうなんですか……？ お、怒られた……。」

「つてか、アウドウルさん？ ……やっぱり似てない……」

彼女の似てないモノマネ、アウドウルさん編。

これで一応コンプリートか。

……見事に全員似てなかったけれども。

「そうだよー。あのときね……」

——「イギーさん、ですよね」

「……」

「御挨拶が遅れてすみません……私、保乃宮仁美と申します。以後、宜しくお願い致します」

「……」

「お近づきのしるしに、これを……」

コーヒーガムを差し出す。

「フン……（……ちつとはわかってるじゃねーか、新人）」

「いえ、まだまだにございます」――

「……つて」

「……。それ、ただ、モノで釣ってるだけじゃあないですか……」

「ち、ちがう！ 続き！ 続きがあるの！！」

――「グウ……（なんでおれの言ってることがわかんだよ……変な女だな）」

「そうですかね？ よくいわれますが。最近」

「クウ……（……おまえの、どんなんだ？）」

「ああ、はい」

セシリアを出す。

「キュウ……（ふうん。まあまあだな……）」

だが、まだまだだ。精進しな。ちゃんと扱えるようになってきたのは最近だろ？」

「すごい！　なんでわかるんですか？」

「ワン（ふん、俺がこの道何年だと思っついていやがる。キャリアがちがうんだよ）！」

「わあ！　じゃあ、イギー先輩、ですネ」

「……（……ちつ、まったく……本当に変な女だな……）」

「……？」

「ふああーあ……（眠くなってきた。膝貸しな、後輩）」

「はい、どうぞ、先輩。……もふもふですネ！　きやー!!」

「……（あんま、なれなれしくすんじゃねーよ。……まあ、少しだけなら……ゆるしてやる）」

「ふふ！　やったあ！」

「ぐう……（まったく人間どもめ。ちつともわかっちゃいねー。）

まあ、俺のことを道具としか思っついてねーからな。あいつらは」

「……そんなことないですよ。」

たしかに人間の中には、嫌な人もいますけど、あそこにいるみんなは、……いいひとです。

先輩にも、そのうちわかりますって」

「フン……（後輩のくせに生意気だぞ。ったく……）」

まあ、この寝心地の良さに免じて、ゆるしてやるか……」――

「なるほど……。たしかに、僕らの勝手な都合で、彼は連れてこられているわけですね」

「そうだよ。ほんとは先輩、男気のある、面倒見のいいひと……。じゃなかった。犬なんだから」

「しかし……。あなた、なんで犬の言葉がわかるんですか……？」

もういつそ、つつこむまいかと思っただが、一応聞いておく。

「え、いや、なんとなく……」

「なんとなくって……。ふつうの犬とか猫のもわかるんですか？」

「そんなわけないじゃない。メルヘンやファンタジーやあるまいし」

「……」

「だから、たぶん、先輩がすごいんじゃないかな。うん」

ということはスタンド能力の一環なのか、なんなのか。

「しかし本当に好きですよね……。動物。」

「そっういえば実家では何か飼っているんですか？」

「ううん、今はなにも。昔、一度だけハムスター飼ってたけど」

「へえ……なんか意外ですね」

「飼いたい気持ちはあるんだけど、父さんが駄目っていうんだよね」

「お父さんは動物が苦手なんですか？」

「ううん、父さんも好きなんだよ。すごく」

「じゃあどうして？」

「ん？ ……動物つてさ、どうしても……いつか、先に、いなくなっちゃおうでしょう？」

「ああ、そうですね……」

「そのときに、私が、泣くのをみるのが、もう、いやなんだつて。」

ふふ……過保護でしょう？ ……まったく……」

「そうか。ああ、なんとなく、わかる気がしますよ……」

（おとうさんの、そのきもちも、とても……）

「明日、朝早いから、今日こそ早く寝ななきゃね」

「そうですね」

「じゃあ、先に、シャワー、どうぞ」

「いえ、あなたが先に……レディーファーストで」

「そう？　じゃあ、お先に」

そうして用意をはじめの彼女。

「……あ、あの……、えつと、ごめん。

しばらく……、あつちむいててね」

「ハッ！　あ、ああ。はい……」

（そ、そうだった……）

この部屋、見えるようになってみると、想像とちがつて意外と簡素だったのだ。

シャワーあれども脱衣所はない。そりゃあ、そのへんで着替えざるもえないことが、

自分にもやつと理解できたのだった。

（し、しかし……、これはまた……）

毎晩の苦しみ（と悦び……）、プラス、今は、少し振り向くだけで……。

（「みちやえよ！　気づかれやしないって！」）

（「うるさい！　そんな破廉恥なことできるか！」）

僕のなかの天使と悪魔が言い争いを始めたことはいうまでもない。

争いはこう着状態のまま、声がかかる。

「ありがと！　もうだいじょうぶだよー」

(は、はあ、はあ……疲れた……)

僕は、己に勝った。勝ったのだ。そう思った。

……が、しかし、こんなの、長い……僕にとつては本当に長かったこの夜の、ほんの序章に過ぎないことを僕は後に痛いほど知るのであった。

(とりあえず、彼女のシャワーが終わった後、また同じように耐えねばならんのか……
てか、今だつてその気になれば……つて、や、やめろ……ぐああああ……！)

「……はい、オレンジでよかった？」

交代して、僕がシャワーを浴びている間に彼女はジュースを買ってきてくれたよう
だ。

それも飲み終え、ふたりならんで歯磨きをしつつ、思う。

(そうだ……よく考えたら、僕もどこかに行つていればよかつたんじゃ……)

思いつかなかつた……いや、実は僕の深層心理があえて思いつかないふりをしてい
んだつたらどうしよう。

(……というか……)

ちらりと彼女をみる。

(ば、パジャマ、か……)

あたりまえだが、目にするのははじめてな……。

(……かawaii、すぎるだろう……)

おおきめのパーカーを羽織っているとはいえ……ちらちらと見え隠れする、ストラライプの、それ。

いや、その取り合わせがまた、いい。

(ハッ！ いかん！)

だ、だめだ！ ……ちよ、直視しては！ ……危険だッ！)

そこかしこに容易に理性のコントロールを奪われかねない、魅惑のトラップが張り巡らされている。ここは一体いつから紛争地帯の激戦区になってしまったのだろうか。

しかし、結局、このすぐあと、僕は自ら進んで一面の地雷源に足を踏み入れてしまうのだった。

「さ、さて、では寝ましようか」

これ以上、エマーゼンシー極まりないきもちを抱いてしまっまえに、寝てしまっ前に限る。もう手遅れである気もするが。

(そうだ！ いっそ、彼女のことを他のだれかだと思っのだ)

(よし……)

……ポルナレフ……

……承太郎……

……アヴドウルさん……

……ジョースターさん……

（……）

ええい！ 無理がありすぎるわ!!）

心中、密かにそんな徒労を僕がしているなどは夢にも思っていない彼女。

「うん。そうだね。じゃあ、おやすみなさい。」

そういうつつ、毛布を持ってソファアに座る。

「は、はい。……つて、え？」

そして、またもようやく気づく。

「……そこです？ つていうか、三日間、そうやって寝てたんですか？」

この部屋、想像とちがって……以下略。

（ソファア……？）

あるのは堅そうな椅子がひとつだけ。

「え？ うん、そうだけど……」

彼女は少しバツが悪そうに頷く。

「そんなんじやあ身体、休まらなかつたでしょう……」

「い、いや、だいじょうぶだつて。意外と寝やすいんだから、この椅子……」

「じやあ、今日は僕がそつちで寝ます。あなたはベッド使ってください」

「はあ?! ダメだよ! 怪我が治りたてのひとはゆっくり寝てください!」

「ほら! そつちじやゆっくり寝られないんじやないですか」

「うつ! あ、あげ足とらないですよ!」

「事実でしょーが。いいからあなたがベッドで寝なさい!」

「い、や、だ! そのベッドは花京院くんのもでしょー!」

「病院のだ! 僕のではないツ!」

「そ、そつか……じやあ、えつと、今はお金を出してるジョースターさんの……?」

い、いやいや、やつぱり、患者さんの、花京院くんのですーツ!!」

「そうであれば、逆に所有権をもつ僕に使用者を決める権利があるツ!」

「ならば私は私の好きなどころで寝る権利を行使しますツ!」

なんだかもうよくわからなくなってきた。

そうしてそのまましばらく譲り合いの精神から成る不毛な言い争いが続く中、ついに僕はぼろつととんでもないことをいってしまう。

「……じやあ、もういつそ、一緒にベッド使いますか?!」

「……ッ!?」

目を見張ったあと、うつむく彼女。

(し、しまった!)

「……いい、いや、いまのは……!」

慌てて取り繕おうとする僕に衝撃のことばが飛び込んでくる。

「……。……いいよ」

「え……?」

「……その……えっと、そっちさえ……よければ……」

「ぼ、僕は、そりゃあ……で、でも……そ、それは!」

……その、あ、あなたは嫌じゃないんですか……?」

「わ、私は……その、い、いやじゃ……ないよ……」

真つ赤な顔でそう呟く彼女。

「うッ!」

(そ、それは……僕と、そう……なってしまっても、よいと……

そ、そういうこと……)

「だ、だって、あなたが私なんか……」

その……へ、へんなこと、するわけないし。ねっ?」

(……では、ない……か……。やっぱり……)

「へ、へんなことなんて、しませんよ！」

「う、うん。だいじようぶ……信じてるから」

「……」

(……すみません。僕には、じぶんがとても、信じられません……)

そんなわけで、いま、壁のほうを向いて寝ている、僕の背中側には、彼女がいる。

どうしてこんなことになってしまったのか。自ら蒔いた種ではあるものの……。

(やっぱり、このひと、僕のこと、男と違っていないんじゃないだろうか……)

信頼されているのは嬉しい気もするが……この状況は……つらい。

「はあ……」

今夜もまた、眠れない夜になりそうだ。

*

*

*

「じゃあ、おじやまします……」

「ど、どどどぞ」

ベッドの端にそつと入り、横たわる。

どうしてこんなことになってしまったのか。

……すきな男性と同じベッドで……なんて。

(と、父さん、母さん……ご、ごめんさい！　ち、違うんです……)

そう、違うのだ。

わかってしまった。いや、わかってはいたはずだったんだけど。

彼は、私のことを、異性として……そんな風にはみていない。まったく。

じゃなければ、いえないだろう。

ひとつのベッドでいっしょに寝よう、だなんて……。

字面だけみると、語弊があるが、実際はまったく逆だ。哀しくなる。

(いいんだ。わかってたもん。そんなこと……)

仲間として、友だちとして、すごくたいせつにおもってもらえている。

それは、わかっていた。それで、十分すぎるとも。

そう、おもっていた……はずだったのに。

でも、これを、『哀しい』と、確かに感じている自分がある。

(……そんなふうにみてもらいたいのかな、私)

ひとりの女性として、自分をみてほしい……と。なんてことだ。おそれ多い。

今日の彼のお昼寝中の出来事といい、自分で自分にあきれてしまう。

こうして一緒に過ごす時間が増えたせいなのか、まったく、いつのまにこんなにも欲深くなってしまったのだろうか。

(そばにいられる。それだけで、いいじゃんね……)

そうだ。こうしていま、いちばんちかくにいられる。それは、やつぱり……うれしかった。

だったら、逆に、とことんこの状態を、幸せをかみしめてやる。そうおもった。

……半ば、やつぱりちだったことは認める。それでこそ、この状況だ。

(はあ。卑怯だな……私。

でも、いまは、もう少しだけ、そばにいたい……だつて……)

そして、すっかり聞き流してしまっていたが(聞きたくなかったからかもしれない)、先日の偽看護師さんの一件で、とうとうはつきりしてしまったことがある。以前、インドへ向かう列車の中で師匠が言っていた、それが確信に変わってしまったのだ。

彼にはやはり、だれか想うひとがいる、と。

それを考えると、また鉛を飲み込んだようなきもちになる、わけで……。

(あー! もう! それは考えないって決めたじゃない! 関係ないって……)

(……彼がだれをすきでも……私は、すきなんだから)

(しようが、ないよね……)

迷惑にはなりたくないけど、許してもらおう。……いまだけは。

しかし、いったいどんなひとなんだろうか。

きつと、性格もみためもかわいくて、やさしくて、あたたかくて……

ビューティホーでワンダホーでスマートで非の打ち所のない……。

そんな、私には逆立ちしたってかなわないうような、素敵なのひとなんだろう。

……彼が選んだひとなのだから。

彼に想われて、うれしくない女の子なんて、いるわけがない。

きつと、そのひとも彼のことを……。

どうしてだろう？ なみだが、にじんできた。

しあわせになって、ほしいのに……。

それはほんとな、はずなのに……。

せめて零れないよう必死に抗っていると、ふいにこえがきこえてきた。

「起きていますか？」

「起きています……」

「なんか、その……もしかして、泣いてませんか？」

「……泣いてなんか、ないよ。……そんなわけないじゃない」

背を向けて、声もだしてない。なのに、なんでこのひとはわかってしまうのだろう。可愛さが余りすぎて恨めしくなってきた。

「……ねえ？」

「なんですか？」

「いや、やつぱりいい……」

「はあ？ もう、ほんと、かわんないな……途中でやめないでくださいよ。」

気になるじゃあないですか……」

「じゃあ、その……」

よせばいいのに。馬鹿だつてわかつてるけど、聞きたい衝動に勝てなかった。聞けば、諦めもつくかもしれない。……無理に、決まってるけれど。

今夜はとことん、自虐めいたことをしたくなった。そうなのかもしれない。

「……すきなひとつで、どんなひとつ？」

なんとという幸せ

——……すきなひとつって、どんなひとつ？——

「……は？」

「いるって、いつてたじゃない。」

その……、胸に、興味があるひとつ。どんなひとつ？」

「あ、ああ……。そ、それは……」

(またこのひとは唐突になにを……)

しかも、そんな覚え方しないでくれ……。

それじゃあまるで、胸にしか興味がないみたいじゃあないか……)

なにが哀しくて本人に本人の説明をしなければならぬのか。

肩越しに、すこし恨めしい気持ちで、彼女をみる。

むこうを向いているため、その表情はうかがえないが。

天井をみつめながら僕が途方に暮れていると、さらに検討違いなことをいいます。

「その……高校の、同級生……とか？」

「はあ？」

(ほんとうに、ちつとも気がついていないのか？ もしかして……)

我ながら、おさえきれないものが態度やことばにかなりあふれでてしまっていると思うのだが。

彼女ととても仲良しだった、あの家出少女が国に帰る時に言っていたことを今ごろ思い知る。

とりあえず変な誤解をされるのはまっぴら御免なので、むなしさを感じつつも一応ちゃんと否定しておく。

「言ったでしょう、友だちいないって。」

それなのに、そんな人間、存在するはずがないでしょう……」

「う……。い、いや、いないんじゃないかって、つくらなかつただけでしょう？」

それに、それとこれとは別かなーって。

ほら、よくあるじゃない。

ずつとひとりで生きてきた少年の心にひとりの少女が飛び込んできて、恋に落ちて

……

………みたいなの？」

「………」

(それは、僕をその少年とするならば、少女は……まさにあなたのことだろう……)
内心、盛大にため息をつきつつ、いう。

「……ないですよ。」

僕は子供の時からずっと、こう思っていた。

『法皇の縁』の見えない人間などと真に気持ちがかよはずがない。

……つてね」

「……」

彼女が振り向く。

「……軽蔑しましたか？」

「……そんなわけではない」

「え……？」

「私も……ずっと、友だちいなかったから……」

「……ああ……」

おもいだす。

それは彼女のこころの奥深く、ずっと刺さっていた……

いや、今もなお刺さり続けている、忌々しい、棘。

「だから……すこし、かもしれないけど、わかる気がするよ」

「……そう、なんですかね……」

「……」

そして、目を閉じ、嬉しそうにつぶやく。

「……でもね、この旅で……」

「……そう。あなたの、いうとおりで……」

ジョースターさん、承太郎、ポルナレフ、アヴドウルさん、……イギーも。

みんなに、であえたんだ……。……僕も」

「……うん」

「あー！ 本人たちには秘密でおねがいますよ？」

「ふふ……」

そして、躊躇いがちに彼女は続けた。

「……実はね、ジョースターさんに言われていたんだ。

もし、あなたの視力が戻らなかつたら、ふたりでいっしょに日本に帰りなさい、って」

「なッ！」

おもわず大きな声が出てしまう。

「ジョースター家の血統の因縁に、これ以上巻き込またくないって。

私たちの身に、これ以上なにかあるのは耐えられないから、って……」

受けた衝撃。それをそのまま返すように思いを吐露する。

「そんな……！　巻き込むだなんて言わないでくれ！」

目が、みえようがみえなからうが、そんなの関係ない！

たとえ、なにがあらうとも……僕は皆とともに最期まで闘う！

それは、自分の意思だ！」

するとぽそりと彼女はいつた。

「……そう、いうとおもった」

「え……？」

「だから、そういっておいたよ。

……まあ、私たちのきもちにはジョースターさんには、お見通しだったんだけどね。

目が見えなくても闘う……

あなたは、そういうだろうから、無理矢理にでも連れて帰れって」

「そうか。そうなのか……。まったく、あのひとは……」

眼頭が熱くなるのを感じた。あわてて彼女に背をむける。

「……護りたいね。みんなを」

「……はい、かならず」

「明日からまた、がんばろうね」

「ええ」

「じゃあ、おやす……」

そういいかけて、彼女は考え込むように黙り込んだ。

そして、こちらを向く、音がした。

*

*

*

「じゃあ、おやす……」

(そうだ。ひとつ、どうしてもいっておきたい……)

いや、おかなきやいけないことがあったんだつた)

「あの……」

彼のほうをむく。

「どうしたんですか？」

彼もこちらをむいてくれる。

「……あなたの、眼がみえるようになって、よかった。ほんとうに……」

そう私がいようと、彼は目を閉じて、なにかを決意するかのように力強く頷く。

「ええ。皆と、また、ともに闘うことができる。」

奴との決着を、つけることができる……」

それをきいて、心の中でため息をつく。

(……また。このひとは、ほんとうにまったく……)

器用でクールそうにみえて、実際も、そうなんだけど……

でもほんとのほんとは、そうでもなくて……

まじめで、ひたむきで……まっすぐで……

そんなところに、すこしあきれつつ、とても心配になりつつ……

(まいった……なあ。ほんとうに)

……でもやっぱり、そんなところがすごくすきだ、と、思う。

そんな複雑にからんだ想いを抱きつつも、たりなかつた言葉をおぎなうことにする。

「いや、そうじゃなくて。

あ、まあ……それもそうなのか。

あなたがしたいと望むことが、ちゃんと、できるわけだから……。

私がいいたいのは、単純に、これからさき、みたいもの、もちろんたくさんあるでしょ

う？

あなたがそれをちゃんとみられる。

それが、よかつたといっているの！ 私は」

「ツ!？」

「あのとき、あなたが倒れているのをみたとき……心臓が、つぶれるかと思った。もう、怪我なんて、しないでね。」

ううん。そんなこと、ぜったいさせない、けど……

でも、万一なにかあったらって、おもうと……」

込み上げてくる、それを彼の瞳をみつめ、懸命に訴える。

「おねがいだから、あなたこそ……じぶんを、いちばんたいせつに、してね。」

あなたのためじゃないの……私の……ために、だから……」

(はっ! ……こ、これって、また、私……)

気付いてはるかしくなつて、ふたたび背を向ける。

「そ、それだけ! じゃ、おやす……」

「……」

そのときだった。

「ひゃっ!？」

うしろから、ふわりと抱きしめられる。

「ありがとう、ごこぎいます。」

この、入院中……。

身の回りのことはもちろん、なんですが。それ以上に……。

その、僕の心を、支えてくれて」

「……あ……」

「……実は、やっぱり、こわかった。もう、一生みえなくなるんじゃないか、って、ね。でも、そんな不安に襲われそうになるたびに、あなたのこえがきこえて……。

そういうふうには、ずっと、気をつけていてくれたんでしよう？」

「！」

「あと、僕が目覚める瞬間は、必ずこえをかけるようにしてくれていたでしょう？」

おかげで……暗闇に、とらわれずにすんだ」

ひとつ息を吸い込み、彼は続ける。

「それに、なにより……あの、ことばも……」

かみしめるように紡がれていく。

「……ありがとう。ほんとうに」

それらが、静寂の夜の部屋に……私の全身に、しみわたっていく。

「そ、んな……。私なんて……」

おもわず、彼の方に向き直る。

「……そんなこというなら、私なんて、ずっと……だよ？」

この旅をつづけてこられたのは……

あなたがいつも、気にかけてくれて、支えて、くれて……だから

……あなたがいてくれたから、だ、から……。私こ、そ……」

(だいすき……。だいすき、だよ)

ことばにならなかった。

このひとと出逢えて、よかった。

さつきまでくだらないことで悩んでいたじぶんは、いつのまにか消しとんでいた。

(もう、なんでもいい。あなたがいる……。それだけで……)

胸がいつぱいで、耐え切れず零れた熱いものが頬をとめどなく伝っていく。

そんな私の耳にさらに届く。

「……そんなの、僕だって！ 僕のほうだ……！」

潤んでぼやけきった視界を必死に見開く。

からみあう視線。無意識にあふれでた想いを口にしていた。

「ありがとう……」

「ふっ……」

「ふふ……」

微笑み、抱きしめあう。

すごく、ドキドキする。けど、それはとても心地のよい、穏やかなもので……。
しあわせなきもちで、こころがみたされていく。

(……あたたかい……)

*

*

*

このうでのなかに、彼女がいる。

しあわせ、だ。しあわせ、すぎる。

(……もう、いいじゃあないか。はつきりいつてしまおう。

中途半端でも、意味がなくても、いいじゃあないか。

このきもちを今、伝えたい。……それだけで)

「仁美さん……」

自分の胸にかおをうずめている、愛しきひとにささやく。

「……僕のすきなひとは……」

ほかのだれでもない……」

「……あなただ」

「……」

「……？ あれ？」

(なんか……)

あまりになさすぎなその反応に、確信めいたある予感を胸に恐る恐る訊ねる。

「あ、あの……仁美さん？」

「すー、すー……」

「……やっぱり。寝てるし……。またかよ……」

すやすやと、安心しきったかおで。

(前にもこんなこと、あったような……。はあ……)

デジャヴと脱力感が全身を包む。

(あー、もう、なんだよ。ひとがせっかく意を決して……)

「というか、なんで寝るかな……。この状況で……」

と、届きもしない恨み言を呟きながら、はたと気づく。

彼女のことだ。どうせ、ここにきてからほとんど眠っていなかったのだろう。

敵を警戒するため、僕を護るため。気を張りつめて……ずっと。

そして、僕の眼がちゃんと治るのか、彼女も……ほんとうは不安だったのかもしれない。

やっと、安心して、気が緩んだのだろう。

(まったく、しかたがないな……)

「心配かけて、ごめん。」

……お疲れさま。……おやすみ」

気づかれないよう、そつと、おでこにキスをする。

「ふにゃ……」

ゆるみきつたかおで、しあわせそうなほほえみを浮かべ眠る彼女。

(……あー、もう……かわいいな……)

それをながめているだけで、しあわせなきもちがあふれてくる。

(……)

が、しかし同時に……少しずつ、ふつふつとその延長線上にある、べつのきもちも湧いてくるのを感じる。

困ったものだ。愛しさと比例して増加するくせに、それとは矛盾した性質をもつ、この欲求。

(……って、ちょっとまで……！　もしかして……)

そして、とんでもないことに気づく。

(……………あ、朝まで……………この、まま……………?)

ふたりきり、ベットのの上、眠るすきなひとを抱きしめたまま、一晩中、なにもせず、堪えろ……………?

(うわあああー!)

なんだ、その難易度・地獄のミッションは!! 無理ゲーだろ、そんなの! 拷問か!?

)

……………やはり、今夜はながい夜に、なるようだ。

「……………」

鳥のさえずりとともに、カーテンの隙間から朝日がさしてきた。

長かった。しかし、堪えた。僕は、こんどこそ、己に勝ったのだ。

彼女が身じろぐたび、うわごとのようなこえをあげるたび、へんなどころに目がついてしまひ……………、幾度となく押し寄せてくる衝動に寄りきられそうになりながらも、堪えきったのだ。

さすがのあの好角家も感嘆の言葉を発してくれるに違いない。

この僕の……手に汗握る、土俵際の駆け引きに。

ぶつちやけ、キスぐらいしてしまえ。それぐらい、もう、許されるだろう……

とは思ったが、やめた。

そんなことしたら、それだけで終わるはずがない。それは自明の理だ。

そう思い、ひたすら素数を数えて耐えた。我ながらたいした自制心だと思う。

自分で自分をほめてやりたい。

……だって誰にも言えやしない。こんなこと。

だいたいなんなんだ。いくらなんでも無防備すぎるだろう。

いつか、こんなに我慢させたぶん、必ず……

「……おぼえとけよ……」

無邪気なかおをして眠る彼女にむけて、そう誓うのだった。

BLOWIN☒

(……きもち、いい……)

(あったかい……)

(どうしてこんなに……? ここ、どこだっけ……?)

(ああ、でも……わかってる……)

(……もうすぐ、おきなきやいけないんだよね……)

(やだな……)

(めを、さましたくないなあ……)

(……このまま、ずっと……)

「……さん、……仁美さん？」

ふわふわとした微睡みのなか、降り注ぐ、やさしくじぶんをよぶこえ。

「……ん……」

「たいへん気持ちよさそうなところ、非常に心苦しいのですが……。」

そろそろ、起きましようか？」

「え……？ ……あ！ ふえっ!?」

そして、目を開けると……

だいすきなひとのかおが、間近にあつた。

*

*

*

「っ！ ……きゃあああー!!」

目ざめとともに、部屋に轟く悲鳴。

飛び起きると、瞬時に素晴らしい瞬発力を生かしたバックステップでベッドから距離をとる。

「……きゃーつて……。はあ……もう。落ち着いてください」

「あ、え!? な、なんで……？」

「ええ。なんで、でしょうねえ？ ほんとうにねえ……!」

「……はっ！ そ、そっか！ そうだった……」

そして、状況を思い出したのか、しゅんと縮こまる彼女。

「……おはようございます。」

よくおやすみになられたようで。よかったですね」

「お、おはようございます。あ、あの、そちらは……？」

「……ご心配なく。」

まあ、たいへんでしたけどね。僕はデリケートなもので。

あなただったら、いびきはかくわ、歯ぎしりはするわ、寝相は悪いわ……」

「……う、うそ!？」

「はい。嘘です」

「……」

腹いせに意地悪をいってやった。昨晚の報復だ。

「ずーっと、すやすや静かなもんでしたよ。」

……まあ、何度もけつとばされそうになったのは、うそではないけれど」

理性および心のタガ……まあ、そういう部類のものを、だが。

「え!？」　そ、そうなんだ。ごめんね……」

しかし、やっぱりそのまま額面通りに受け取る彼女。

「……ええ。僕の驚異的な耐久値と回避率と精神力に感謝していただきたい」

「は、はい。ありがとうございます。……ん？ 精神力？」

「……気にするな、言葉のアヤだッ！」

「は、はい、すみません。あ、あの……おこってる……？」

「……若干」

「だ、だよね！ あああ……ご、ごめんなさい……！」

必死で謝る彼女。本気でおろおろしているその様相が、ついおかしくなってきた。う。

「……ふっ」

(……もう、いいや)

どうせ、ほんとうはなにに僕がおこっているかなんて、てんでわかっちゃあいないだろうし。

……わかってもらっても、こまるし。

「まあ、しかたがない。許してあげましょう」

ついでにからかってやろう、と本心とをこめていつてやることにする。

「……かわいい寝顔に免じて、ね」

「ぐっ……！」

瞬間、焦って青ざめていた彼女の顔色が、補色のそれにぱつと変わる。

効果は抜群、のようだ。

満足感とともに、彼女の頭に手を乗せつつ、いう。

「さ、早いとこ準備して、出発しますよ」

「……は、はい……」

*

*

*

「では離陸します」

パイロットの方のはつらつとした声が機内に響く。

今朝早朝、お世話になった先生や看護師さん方にお礼をいい、彼は無事退院を果たした。

——『ゆうべはおたのしみでしたね』——

激励の言葉とともに先生の口からにまにまの意味深に発されたそれが気にはなつたが。

ゆうべ。あんな、嬉しすぎることをもらえて。

それでももう、じゆうぶんすぎるほどだったのに……

(……っ！ す、すきなひとのうでのなかで、とか……。なにあの展開……)

おもいだすだけで窓から今すぐ飛び出したくなる衝動に襲われてしまう。

(しかし……三日間寝てなかったとはいえ、よく、私……)

なんで寝ちやつたんだろ……。

ああああ……！ も、もつたいないことを……)

まあ、こんな具合で……いうまでもないくらい、たしかにすぐくたのしかつたわけだけれど。

が、私の個人的極まりない、そんな感慨を先生が知っているはずもないし……

また、その言葉を聞いて、やたらと彼があわてふためいていたのも不思議だった。

しかしどういう意味か聞いても彼はおしえてくれず、結局謎は深まるばかりなり、だ。

そんな私の疑問は置きざりにされたまま、ヘリは大空へと飛び立った。

ジョースターさんたち仲間と合流をはたすべく、アスワン空港からルクソールへと空路を進む。

小型のヘリで、乗っているのは私たちふたりと財団から派遣されたベテランのパイロットさんがふたり。

(……ヘリ、かあ……)

フライトは順調なようだ。……例により、『いまのところ』。

「また、多分同じ事考えていると思えますが……」

渋い顔をして、彼がいう。おそらく自分も、おなじような表情をしているのだろう。

「うん、考えているよ……」

「ジョースターさんが、あれで人生四度目……でしたっけ？」

「うん……。もし万一これがあれになったら……」

私たち三度目だから、おいついちゃいそうになるね……はは……」

「……やけにならないでください」

「そつちだつて、考えたくせに……」

「……はは、そのとおりですよ」

「まあ、なんとか、どうにか、みんなの命は護れるように頑張るよ」

「落ちないって可能性は頭にないんですか？　ねえ？　……ないか」

「……ないねえ」

そんなんだつたらなぜヘリで行くことにしたのか、といわれると困ってしまうが。

「まあ、本来、めつたに起こらないことなはずなんですから」

「そ、そうだよね！　やめよう！　不吉なことを考え……」

そのとき、操縦席から案の定、というのもなんだが焦ったような声上がる。

「な、なんだあれは!!？」

「トルネードか?!　そんな……突然!!？」

「!?」

彼とともに競うように窓の外を見ると、竜巻のような渦の柱が地上から上空天高く立ち昇っていた。

「あれって……」

「ええ。十中八九、スタンドでしょうね……。敵の」

「……ああ、やっぱり……」

予想通りすぎる展開を嘆く私に彼が冷静に状況を分析しながらいう。

「本当に墜落させられるわけにはいかん。なんとかしなければ」

「うん！」

「定石通り、ああいうタイプのスタンドは本体を叩くべきでしょうね」

「……インハイの速球で仰け反らせた後はアウトローに逃げる決め球を。」

「……みたいなの？」

「はい。……よく知ってますね。」

ああ。そういえばあなたも野球好きって言ってたっけ。

巨人フリークの僕にそんな話題をふつてくるとは、いい度胸だ。

今度、投球論について朝まで語ってあげましょう」

「ほんと!? た、たのしそう……! ぜひ、お願いします!」

「……。ま、まあ、今はこの状況を打破するのが先ですけどね」

「あ、ああ。うん、もちろん」

それにしたって『対スタンド戦、セオリーのすべて』そんな本あったらいいのに。ほしい。

「ええと、本体を狙う、と。」

攻撃しても通りそうもないもんね。あんなスタンド……というか竜巻に」

「ええ。そもそも竜巻とは、積乱雲の下で発生する……」

その正体は地上から雲へと細長く延びる渦巻き状の高速上昇気流。

突風の一種で、規模が小さく寿命が短い割に、猛烈な風を伴うのが特徴です。

あんなものが直撃すれば、この機体はひとたまりもない」

「……さすが。あいかわらず、ほんと、ものしりだよね……」

幅広い知識。そして、パツと出るのがすごい。

またおもわず感心している私をよそに、解説および考察は続く。

「竜巻の水平規模は平均で直径数十メートル。」

あれは、自然発生するものよりは規模が小さいようで、直系10m足らず、というところのようですが。それにしたって、あれだけの、しかも一般人にもみえるものを発生させるといふことは……」

「うん、本体は必ず近くにいるはずだよね。『太陽』の時と同じパターンで」
 「はい。さつきも言いましたが、竜巻……その名のとおり、あたりまえですが、渦を巻いている。」

すなわち、本体の居場所が一番可能性が高いのは？」

「はいはい！ 先生、わかりました！」

「どうぞ、仁美さん。答えは？」

「はい！ 中心部です！」

「正解。よくできました。」

……では、行きますよ！」

「うん！」

*

*

*

（ここは竜巻の中心。なんびとも近寄ることすらできない……わたしの聖域。

（ふふふ……東風をつかさどる『ヘヌキセスウイ神』の暗示。

（このわたしに近づけるものなど存在しない……）

「DIO様の敵！ ヘリごとグシャグシャにして、ふつとばしてやるわ!!」

「……ん？」

気づくと、いつのまにか自分の身体がピンク色のガラスの水槽のようなものに閉じ込められていた。

「……え？」

そして、真下の地面にあつた割れ目から、触手のようなものが現れる。

「……？　なんだこれは……」

おもわず、それに触れる。

「……うぐおあッ!!」

すると勢いよく、エネルギーの塊が発射される。

それは自分に当たったあとも、勢いを増しながら、ガラスに跳ね返され……

ピンボールのようにわたしに攻撃を繰り返す……なんども、なんども……。

「ちよ、ちよつとまって……まだ……」

『くらえ、わたしの秘技、ダウンバースト！』……とかあつ……

あぐわっ……！」

そして、何度目かの直撃のあと、わたしの意識は、失われることとなった。

(……わたしは……わたしの聖域……何人たりとも侵入するこ、とは……なぜ、だ……)

*

*

*

ハイエロフアントとセシリアを放ったあと、しばらくしてから竜巻が消えた。

「うまく、……いきましました」

触手を通じて状況を確認、操作していた僕はいう。

「よかった！ 作戦大成功、ですね！ 先生？」

「ああ、そうだね。ふふ、優秀な生徒をもつと助かるよ」

それどころではないが、つい、先生と生徒ごっこに興じてしまう僕ら。

いや、どつちかかっていうと博士と助手か……

(……うむ。どつちのシチュエーションも、い……。)

……そんなことよりも解説をしよう。

まず、彼女がセシリアで相手を囲み、動きを止める。

僕はこの荒れた大地に無数にある地割れを通じてハイエロフアントの触手のみを送

り込む。

そして、エメラルドスプラッシュを一発。

やることは以上だ。あとは跳ね返りで何度も当たり、敵はいつか倒れる。といった寸

法だ。あのような閉鎖空間では効果的だったはず。

「スプラッシュ・クリスタル・クラッシュ……略してSCCってどこですか？」

「あ！ いいね、そのネーミング！ カッコいい！」

しかも略まで！ CFHS……師匠のクロスファイヤーハリケーンスペシャルみた
い！」

「ふふ、もつとほめても、いいんですよ……」

「さすが！ 素敵！ 頭脳明晰！ 冷静沈着！ イケメン！ センスフル！ 高額納税
者！」

そこにしびれるう、あーこがれるう！」

「やっぱやめて……。しかも変なの混じってるし……」

「ふふっ！」

「まったく、ひとをからかって。あとでおしおきだな……」

「いつものしかえしですー！ 怖いことをサラッといわない！」

僕たちにとっては三度目の正直。

どうやら今回は無事、フライトを終えることができそうだ。

「……なら、やっぱりあって、ジョースターさんの……」

「しっ！」

ニューヨークの不動産王あらため墜落王……

そんな不敬な二つ名がふたりの頭に浮かんでしまったことはいうまでもない。

(……ジョースターさん、すみません……)

敵の襲撃を退け、無事、再び穏やかさを取り戻した真つ青な空。

その中をゆつくりとへりは進んでいく。

離陸時の不安気な表情が、ほっとしたのか、これも幾分晴れやかになった……

そんな隣の席の彼女に僕は先程気になった事柄を聞いてみることにした。

「しかし、セシリア、なんか少し桃色が濃くなってませんか？ 修行の後からですか？」

「え!? ほんと?! ……セシリア、来て」

いいながら、相棒を呼ぶ彼女。

僕の差し出す指に止まる、その綺麗な鳥をあらためて眺める。

「うーん、久々に見るからかもしれないが……。気のせいかな」

透きとおる桃色。光の加減でも微妙に変わるので、わかりづらいが。

比較できれば話が早いがそれも無理なので余計に。

正直確信があるわけではなかったのだが、彼女はこんなことをいう。

「ううん。あなたがそういうからには、そうなんだとおもう。」

「自分では気づかなかったなあ」

「毎日みていると逆に変化に気づきにくいといえますからね」

「なんでだろう……？」

「そんな彼女に推測を伝える。」

「『成長』したからじゃあないですか？」

「さしずめ、セシリア a c t. 2つてどこでしょうか」

「こ、これが!? ……やった!」

「そしてまたもやネーミングセンスフル……!」

「はいはい。それはもういいっての」

「そっか……! もつとがんばらなきゃなあ……本体にふさわしいように」

「だいじょうぶですよ。」

「ふさわしいから、成長したんでしょうが」

「……そうかな？」

「そうですよ」

「ふふ……」

とても嬉しそうな彼女。自分もつられて素直な感想がもれる。

「しかし、いいなあ、『成長』……正直かなりうらやましい」

「ええ？ それは、もうじゆうぶんあなたは強いからじゃ……」

「……そんなことはない。……足りない。」

もつと、強くならなければ……。やつには……。」

「……。……そっか」

「うーむ……一体なにがトリガーなのか。」

「ご先祖様の夢をみたといっていましたよね？」

「うん」

「それにもきつかけがあるはずだ。」

心当たりがあれば教えてほしいものですが。

『精神的な成長』、なにかありました？」

「へっ!? ええと……、それは……っ！」

「？」

なぜか頬を染め、言いくそうに口をつぐむ彼女。

そしてしばらく考え込んだのち、ぽつりぽつり語り始めた。

「エジプト……敵の本拠地に、到着して、改めて思った。」

護りたいと……。

そうしたら、夢に、ご先祖様が……」

「……なるほど……」

(護りたい、か。そうだな……)

それが、このひとの、アイデンティティ、だものな……)

「そうか。『あなたらしい』、な」

(……『じぶん』、か……)

そんなことを考えると、いつも思い出してしまう、あの……。

「……どうしたの？」

僕の様子に気づいた彼女が心配そうにかおをのぞきこむ。

そのまなざし押され、つい、ほつりと眩く。

「僕のなかには、きつといるんですよ。」

……最低な……」

「……え……？」

「……『あのとき』に、証明されていますから」

肉の芽で操られていたときの、あの、『じぶん』。

きつと、それも僕の一部なのだ。

あんなふうに、残忍で。卑怯で。自分本意な……。

目をそらしたくなるような。……みたくも、ない……
しかし、彼女はやっぱりきつぱりとこんなことをいう。

「あたりまえだよ。そんなの」

「……え？」

「誰にだって、私にだって、皆いるよ。そういう、『じぶん』

……でもね、ちがうよ。

だって、私にはみえたもの。あのととき」

瞼を閉じ、おもいだすように、いう。

「そんな『じぶん』を、止めたいって、くるしそうなあなたが。

実際、止めてくれたもんね。あんななかで。

……あの『花京院くん』、びつくりしてたよ？」

「あ……」

「そして、逃げずに、たちむかおうと……」

……とりもどしたいとおもっている」

ゆつくりと目を開き、僕の瞳をとらえ、届ける。

「ぜんぶ、あなた。

だけど、それが、……ほんとう」

まつすぐなことばを、……心を。

「だから、それで、いいんじゃないかな？」

そして、ふわつとほほえむ。

「……………」

(……………ああ、まただよ……………)

なんなんだよ……………ほんとうに……………)

「? ……花京院くん？」

「……………いいえ。」

「そうだ。そうですよね」

「つよくおもう。……………あらためて。」

「……………これからだ。『本番』は……………」

「!」

窓の外、雲間から眼下に臨む、迷路のような街……………ルクソール。

「……………見えてきたようですよ」

「……………うん」

「さあ……………さらなる闘いの、幕明けだ！」

第4章 The XXX before the st
orm

ビリビリ

(……あいつらは！)

あたしの視線。その先にあるのは、一組の男と女。

(もう退院しやがったのか……)

話が違う。あと二、三日は出てこれまいと、そのはずではなかったのか。

役立たずの情報屋共に対し、齒噛みをする。

(チツ、まあいい……)

例えば何人を相手にしようが、あたしのスタンドに敗北などありえないのだから。

(……まとめて、片付けてやる)

文字通り“まとめて”。

(この、『バステト女神』のマライアが！)

* * *

例のお方の不在が功を奏したのかは定かではない。

しかし、どうにか墜落をまぬがれ無事に空路でルクソールに到着した僕と彼女。パイロットたちに礼をいい、仲間の皆が宿泊しているというホテルへと向かう。

しかし、名前と住所は聞いているものの、さすがに方向も距離もさっぱりわからない。「あー、花京院くん、あそこにお巡りさんがいるよ」

そこで、彼女が見つけた飛行場最寄りの交番で尋ねてみることに。

その親切な警官によると、距離は3キロ程度。

だが、地元の間人でなければ道が入り組んでいて迷いやすい。

そして、ここから直通のバスがちょうどある。

……以上の理由により、それで行くよう勧められた。

ということ、ふたり街の中心部へ向かうためのバスを待っていた。

「ねえねえ」

「おにーちゃん、おねーちゃん」

そんなときだった。

「一緒におままごとしよー」

「人数が足りないの。おねがーい！」

停留所の近くで遊んでいた少女たちに声をかけられたのは。

「ごめんね、お兄ちゃんたち、ちよつと急いでいるんだ」

お誘いをやんわりとお断りする。しかし……

「えー？ だめなの？」

「ちよつとでいいからさあ」

「配役にこだわりたいんだよねー」

不満げな顔に取り囲まれる。どうやら付き合うまで解放してくれる気配はなさそう
だ。

「困りましたね……」

そういうと、彼女からはこんな一言が返ってきた。

「うーん、バスが来るまではどうせ暇だし……」

まあ、いいんじゃない？ 童心に返るといいうのも」

「ええ？ 本気ですか？」

はあ、まったく、お子様なんだから。返る必要あるのやら」

高校生にもなっておままごとは……と、難色を示すついでに軽くからかってみる。

「ふーんだ！ わかってますー！ どうせ私はごどもですよーだ！」

すると予想を超えた、やたらと過剰な反応が返ってくる。

「え……どうしました？ なにをすねているんですか？」

「し、知らない……！」

えーと、じゃあお姉さんたちもちよつとだけ、いつしよに遊んでもらおうかな！」

不思議に思い問うも答えてくれず、誤魔化すかのように彼女。

それを受けて、少女たちから歓喜の声があがる。

「わーい！」

「やったー！」

そして、神采配をみせる、少女A。

「じゃあ、ふたりは近所に引越してきた新婚夫婦の役ね」

(……なん……、だと……!?)

「……しかたがないツ！ やってやろうじゃあないかツツ！」

「へあつ!? な、なに急に!? どこから出たの？ そのやる気……」

「よし……、やるからには、もう、これでもかというくらいリアルを追求……」

「しないのツ！ もう……へ、変なところ真面目なんだから……」

「いいじゃあないですか。」

「……はひとつ、おとなの実力というものをみせつけてやらねば……！」

「……なにそれ？」

「はあ、ほんと、なんだかんだでノリがいいよね……典明だけに」

「彼女があきれたようにつぶやく。そちらこそ大概な、お寒いギャグとともに。」

「それらを無論、まとめて敢えて華麗にスルーする僕。」

「さて、……じゃあ、練習。」

「呼んでみて。僕のこと。……ね、奥さん？」

「はあ!? ……そ、そんな……なんで……」

「瞬時に耳までまっかにならぬ、ぶんぶんと首及び手を振り、全力で抵抗の意を示す彼女。」

「ふっ。おままだことなんだから、気楽にやればいいんですよ。」

「ほら！ 待ってますよ、みんな」

「う……。ぐぐ……」

「あ、あ、あな……」

「……あなた……？」

「(うああーツつしやー!! ……かーわーいーいーツ!!)」

「はずかしそうな、上目づかいがもうたまらない。こんなに可愛すぎる生物がこの世の中に存在しているものか。平静を装いつつも、心の中でガッツポーズを決める。」

「ううう……。どうしてこんな……」

「ふふ……よく、できました」

煙が上がつている彼女のあたまをなでつつ、悦に浸っていた。

そんな僕たちに、冷やかな声が届く。

「ねえねえ……いちゃいちゃしているとこ悪いんだけど、

『妻の妊娠中、寂しくなった夫。』

近所に住む未亡人の誘惑に負け、一夜の過ちを犯してしまう！

罪悪感にさいなまれる夫……疑惑を深めていく妻……。

しかし！ それはすべて、未亡人の狡猾な罠であった！！』

……つという設定だからね。気合い入れてよろしく！」

「……は、はい……」

「あ、バス来た」

「本当だ。では僕たちはこれで。じゃあね」

「うん！」

「ありがと！」

「バイバイ！」

到着した車内に入り込む。窓越し、小さくなっていく少女たちにふたりで手をふりな

がら、ぼつりつぶやく。

「……最近の女の子って……」

「……うん、そうだね……」

「しかし、あなただつて十分ノリノリだったじゃあないですか。典明じゃあないのに。

本気で殺されるかと……」

痴情のもつれの果ての愛憎劇。なんだあのシナリオは。

おままごと……？ そんな範疇は軽く超えていた気がするが。

あれを齡4〜5歳の女の子が考えたのであれば……世も末だ。

そして、意外なことになかなかの演技力を発揮していた彼女。

「え？ い、いや、やるからにはね、ほら。せっかくだし」

「嘘はからつきしなくせに……不思議だ」

「えー？ 演技はまた別でしょう？」

いい？ ……仮面をかぶるのよ、花京院くん……あなたのもつ、千の仮面を……」

「……仁美さん……おそろしい子ッ！」

「……。まさか返してくれるなんて……」

「……こちらの台詞だ」

そして、急にくすくすと思ひ出し笑いをはじめた彼女。

「そういうあなたこそ、意外と上手だったよ？」

苦悩する駄目な夫……ふっ、ふ、くくくく……！」

「……うるさいな。理解は到底できませんがね。」

あのような不貞行為に走る輩になりきるなど……」

「ふふ、わかつてるよお。でも、……いや、だからかな。」

非日常というか、自分と違う人を演じるのって結構楽しいね」

「……まあ、ね」

たしかに。意外と楽しめた。

それにしても、やるからには密かに何事も全力で楽しむ……という、このひとのスタ

ンスはあいかわらずのようだ。

(しかし、こう、もうちよつと、甘い新婚生活の予行演習的な……)

こんなはずでは……くそ……)

「……御一行様でしたら、朝食をとりに行くということ、出かけられましたよ」

「そうですか……。ありがとうございます」

バスに揺られることおよそ10分。僕たちは目的地にたどりついた。

しかし一足遅かったようだ。受付嬢に皆の居場所を尋ねると、こんなふうに爽やかに言われてしまった。

ちなみに建物内に土産物屋やブティックまで完備してある、なかなか綺麗で大きい高級ホテルのようだ。だいたい見積もって一人一泊200ドル……というところだろうか。さすがジョースターさん。人気も高いのか、ロビーにそこそこの数みられる宿泊客も身なりの良い上流階級出身と思われる人間がほとんどだった。

「入れ違いになっちゃったね」

「ええ。でもチェックアウトしたわけではないようです。そのうち戻ってくるでしょう」

「そうだね。じゃあ私たちもごはんにする？ お腹すいたでしょう？」

朝一番で病院を発ったため、僕達も朝食すらまだであった。そういわれると急に空腹を覚える。

「そうですね。その辺で食べられそうなところ探しますか。もしかしたらそこで皆に会えるかもしれないし」

「うん」

飲食店を見つめるべく一旦外にでようと、エスカレーターにのる。

が、しかし、動いていない。止まってしまっているようだった。

「あれ？ 故障かな？」

「上りのときは気つきませんでした……。下りだけ壊れたんですかね？」
しかたがないので歩いて降りる。

エントランス付近まで来ると、なにやら騒がしい様子に気づく。

「あれ？ ……なんだろう？ あの人だから」

「何かあったんでしょうか？」

見ると、ご婦人方がホテル従業員にこう訴えかけていた。

「痴漢！ 痴漢が出たんです！」

「わたし、スカートめくられたんですッ！」

「のぞきもよッ！ 女子トイレに出たのッ！」

「ど、ドアの下から！ のぞいてきたの！ へ、変態よ!!」

「……………」

彼女とかおを見合わせる。

「……………痴漢に、のぞきかあ……………」

「ありえん。破廉恥な。またも理解に苦しむ……………」

「……………だね」

しかし、そんな僕たちに耳を疑うような情報が飛び込んでくる。

「は、犯人は外国人を含む二人組だったわ！」

トイレの窓を割って、外へ逃げていったの！」

「え!?!」

(が、外国人……? ……も、もしや……)

彼女も同じ想像に至ったらしい。かおがひきつっている。

「ね、ねえ、花京院くん？」

ま、まさか、そんなはず、ないよね……?」

「そ、そうですよ。まさか……」

そこへ、とどめの一撃が入る。

「……なかなかイカした欧米人の初老のナイスガイと、

占い師みたいな格好した、変わった髪型の地元の男だったわよ」

(……確ツツ実に、関ツ係者ですツツツ!!)

「……」

「……」

ふたりして内心大声で叫びながらも無言で、光の速さと紛うほどの勢いでホテルの外

に出る。

「……ど、どーゆーこと!？」

ふ、ふたりにそんな趣味が……ってそんなわけないよね!？」

「ええ。そんな趣味があるとは考えられない……考えたくない。

きつとなにかあつたんだ」

「だよね!？」 そうだよね!？」 そうに決まっているよね!？」

ふた리를探さなきゃ! 窓から逃げた、ということとはこつちかな?」

「おそらく。では、いきま……ええ!？」

彼女が指さす方向に同意を示し、走りだそうとした瞬間だった。異変に気づく。

「……あ、あれ?」

彼女がびつたりとその身体を僕によせていた。

「な!？」 な、なな! ど、どうしたんですか?!」

「え?! ちよつ!？」 な、なにこれ!？」

あわてて離れようとする彼女。

が、逆にその勢いは徐々に増している気がする。

「ち、違うの! からだが勝手に!」

吸い寄せられるみたい……! な、なんで!？」

「えええええー!!」

(ち、近い! 近いって!!)

ほぼ零距离にある、彼女のかお。僕の肩と顎のあいだにすっぽりとおさまってしま
う。

首筋に感じる、なめらかな頬、まばたきするたびにふれる睫毛がくすぐつたい。

「ご、ごめんっ……か、きょう、いんくんっ……!」

いまにも接してしまいそうな、つややかなくちびる。そしてそこから漏れる声と吐
息。

シャンプーやせっけん。否、それだけではない……

彼女自身から立ち昇る、あまい、いい、かおり……

以上が相乗効果を発揮しつつ、総攻撃として、容赦なく僕を襲う。

(うおおおあぁー! こ、これはっ! い、いかんッ!)

昨晚あれだけがんばって、ふれるのを我慢したというのに……なんということだ。

「あ、あぶない!」

そんな最中、前方(……ぜんぜん見ていなかった。それどころじゃあないに決まっ
ているだろう? こんな状況……)から、釘や、ハサミ、ナイフやフォークがすごい勢
いで飛んできた……らしい。それを彼女がセシリアで迎撃してくれる。

「ええっ!？」

しかし、はじきとばされたそれらが、再び宙を舞いこちらへ向かってくる。

「スプラーツシュ！」

それもなんとか撃墜する。

「くっ!」 飛んで、いや、吸い寄せられてきている……?」

「これらはすべて、……鉄か?!」

「え?」 そ、それって……もしかして、私たち、磁石に……?」

「ええ。磁力を操るスタンド……でしょうか?」

敵の術中にまんまとはまってしまったようですね……」

「ど、どうしよう……」

「……すみません! ……失礼します」

「きゃっ!」

勢いよく彼女を片手でかかえあげ、走り出す。くびれた腰の感触。そして、その上

……まわしたこの腕が否応なしに感じとってしまふ、やわらかな、あれ……の存在感。

(だ、だれだ、ちいさいとかぬかしたやつはッ! いますぐでてきて僕に謝れ……!)

それらが容赦なく僕を……以下略。

やむを得ず、だ。決して故意ではない。それだけは強く主張しておく。

「そうだ。いつでもおもいだせるよう、ふかくここにきざみつけたりなんて、していない。」

「……わけはない。きざみつくにきまつているだろう。こんな。無理いな。
(そ、それどころではないだろう！ 自分よ！

こういうときこそ心頭を滅却……ああ、もう、できるかーっ！)

僕の心中は、もはやてんやわんやの大騒ぎである。しかしそれを彼女に悟られるわけにはいかない。どうにか抑えつつ、口に出す。

「と、とりあえず、ジョースターさんたちを探しましょう。」

「敵の本体もきつと近くにいるはずだ！」

「う、うん！」

真つ赤なかおで頷く彼女。どうやら見当違いの心配をしているらしく恐々申し訳な
さげにいう。

「ご、ごめんね。重いでしょ……？」

「いえ、全く。もともとあなた軽いし」

「だいたい、このひとを抱えるのは、もはや何度目になるのだろうという話だ。それにしてもこんなに密着するのは初めてだが。なんとおいしい……いや、まずい。これはまずい。」

（いかん、そうだ！ 考えるな、感じるんだ……！）

……いや、感じちや駄目だろ！ 逆だ、逆!!（）

必死に、冷静に。できるかぎり血液を脳に分散するべく考察を進めてみる。

「……えーと、加えて多分磁力……引きあう力のおかげで、体重……重力方向のベクトルの力は相殺されてほとんど0に近くなっているみたいですよ。

支えているだけで、ほぼ僕の腕力は使っていません」

「そ、そうなんだ。よかった……」

「ただ、非常に……走りにくい……」

「あ、そりゃあそうだよね。ごめんね」

「……いや、ぜったいわかってないでしょう……」

「え？」

「いえ、なんでもありません……」

（……わかって、たまるか……）

「でもなんで？ いつのまにこんな……いったいどこで攻撃されたんだろう？」

「うーん、もしかして、あのときじゃあないですかね？」

ほら、おまままととのとき……」

「あ！ あの怪しいコンセント?!」

最近のおもちゃとは、かくもリアルなものなのか……などと、ふたりして呑気に感心してしまっていたことを思い出す。

「そうだ！ なんかバチつときたもん。ただの静電気かと思ってたよ。しまった……」

「まあ、今さら嘆いてもしかたがない。敵を倒せば元に戻るはず。」

とりあえず、状況を整理し、今できることをしましょう」

「うん！」

「僕らが足止めされているこの隙におそらく二人は直接敵と対峙しているはず。援護せねば。」

鑑みると、どちらかを、ですが……」

「……なるほど。セシリア、……御願い！」

そして、彼女の飛ばしたセシリアを追う。

「いたっ！ あと500メートルくらい！」

成長……修行と自主トレの成果か、彼女の探索範囲は以前よりもはるかに増していた。

「了解。とばします。しっかりつかまって」

「うん！」

「……じゃあなかった！ 駄目でしょーッ！」

「ああっ！ そ、そうだった。ご、ごめんっ！」

(……ぬわああああー!!)

そうして、僕らはより一層くつつくことになり……走りにくさが、倍増した。

*

*

*

「ジョセフ・ジョースター。」

貴方、けっこう、わたしの好みのタイプなのだけれど……残念ね。

その機転のきく頭のよさといい、ユーモアのセンスといい、お顔もチャーミングで……。

少し歳上すぎるのが難だけど、お付き合いしてもいいかなーって、思っちゃうくらいなのに」

「じゃ、じゃあ、あの、助けてくれてもよくない？ ねっ！」

「ダメ。だって、DIO様の魅力には遠く及ばないもの。ふふ」

わしは今、追い詰められていた。

うかつにも、敵……今この目の前にいる、超ミニなスカートを履いた、脚がグンバツ

のお若いレディ……その術中にはまってしまったのだ。

思い起こせばそのため、あんなコンセントなんてうっかり触ってしまったがために、朝っぱらから、いや、昨日からか……

義手は壊れるわ、いろんなもんがとんできて痛いわ、エスカレーターに挟まれそうになるわ、

痴漢に間違われるわ、やけに若作りをしたばばあに惚れられるわ、しまいにはぶち殴られるわ、

電車に轢かれそうになるわ、アヴドゥルと密着してチークダンスを踊るはめになるわ、

あまつさえ禁断の関係を誤解されるわ……

……ろくなことがなかった。もう、涙がでた。

なぜこんな目に。なんてかわいそうな、わし……。

そして、今、ボルトで壁にはりつけにされて動けない。

絶賛、絶体絶命真っ最中……そういうわけだ。

『バステト女神』のマライア、というこの女。DIOのはなった刺客。磁力を操るスタンド使い。かなりの実力者だ。このままではまずい。

「じ、ジョースターさん！」

アヴドウルも、同様に罠にはまって車の下敷きになり動きを封じられている。援護は期待できそうもない。

「……さようなら、ジョセフ。」

来世では、御縁があるといいわね」

そういつて、女の手からはなれたナイフが磁力と相まって、物凄いスピードでこちらへと飛んでくる。

鉄を火炎で燃やし尽くせるアヴドウルと異なり、現状わしの能力ではこれを防御するのは不可能だ。

これまでか、……と思いつながらも、あきらめるわけにはいかない。なにか逆転の一手はないかと思考を巡らす。

「ぐっー！」

しかし、そんな都合のよいものは思いつかず、無情にも鋭い刃の切っ先がわしの喉に突き刺さろうとする。

その瞬間だった。

「なにイ!?!」

見知った鳥型のスタンドが、体当たりでナイフを遙か彼方に弾き飛ばした。

「ま、まさか!」

「こ、これは、……セシリア!?」

旋回して戻ってきた桃色の鳥が舞い降りる場所……そこにはよく知るふたりの姿があった。

「よかつた……! 間に合つて」

「無事ですか!?! ジョースターさん、アヴドウルさん!」

「花京院! 保乃!」

「……え……?」

幾日かぶりの、再会……なのだが。

「おい……」

「おまえらなあ……」

ふたりは、べつたりと密着していた。

横から首元に腕を回して抱きついている保乃を花京院がかかえ上げている。どうがんばっても、恋人同士がイチャついているようにしかみえない。

「いや、気持ちはわからんでもないよ、うん。

付き合いたての頃は片時も離れたくない……そうだろう。

でも、戦闘中だよ? すこしは我慢しなさいよ……」

「そうだぞ。人前で……はしたない。」

秘すれば花、そういうものだろう」

「ち、ちがいますッ！」

声を揃えて否定するふたり。

「僕たちもあのコンセント、触っちゃったんですって！」

「そ、そもそも、私たち、つ、つ……付き合ってたんで！」

「なーんだ。わしやてつきり」

「ええ、てつきり」

まあ、本当はそんなこと、もちろんわかっていたけれども。

*

*

*

（チイツ！ こいつら目障りな……いちやいちやしやがって!!）

「このビチグソどもがあ！ 死ねイツ!!」

あたしは仕込んでいた武器をすべてぶちまけ、やつらを攻撃した。

「……甘いな。いまの僕たちに、そんなものは通用しない！」

「まかせて！」

「な、なにイイ！」

しかし、それははねかえされるでなく、ふにやふにやとした壁に変化した女のスタン
ドにすべて吸収されてしまう。

「くらえっ！」

そして、同時に男に反撃をくらう。

「ぎゃっ！」

まさに攻防一体といった形だ。厄介極まりない。

「ふふ、はねかえしても、また飛んできちゃいますからね。

と、いうことで反省を生かして表面性状をベタベタにしてみました」

不敵な笑みを浮かべ女がいう。

「……その名も、セシリア・とりもちスターイルツ!!」

「……。まんま。な上、ださい……。」

ほんつと、名付けセンスないなあ……。

……はっ！ いかん！ このままいくと、僕の双肩に、こどもの……」

「ん？ さつきからぶつぶつなにいつてるの？ 花京院くん」

（くっそ、こいつらいちいちイチャイチャと……！）

くつつけたのは失敗だった……いろんな意味で……）

「キイツ！ こ、ここは一時撤退だ。さすがに分が悪い！」
(だが、あきらめん！ 必ず全員ぶちのめしてやる……ッ！)

*

*

*

路地裏に姿を消す、敵。

同時に少し磁力が緩み、動けるようになる。

このあたりはスタンドの基本ルール通り、本体が離れると……ということか。

「あー！ また逃げた！ 追いましよう、ジヨースターさん！」

保乃にガードしてもらいつつ、花京院に車を破壊してもらい、こちらも動けるようになったアヴドウルがいう。

「さて。逃げたのではない。

あやつは付かず離れずで戦うタイプのスタンド使いのようだ。

近づきすぎると捕まるし、離れすぎれば『磁力』が消える……」

「では、磁力が効かなくなるところまで、逃げますか？」と、アヴドウル。

「いいや。時間が経つにつれて磁力は強くなると言っておった。

それに、それではあやつを倒したことはない。

このジョセフ・ジョースター、若いころから作戦上逃げることはあつても闘いそのものを途中で放棄したことは決してない……」

目を見開き、言い放つ。

「無論……このまま、ガンガン……闘うツ！」

「はいつ!!」

それに呼応し、一斉に良い返事をする三人。

「そのためにも、まずは作戦会議といこう」

しかし、そこで、じりじりとあとずさりをしつつ花京院がいう。

「さ、作戦会議はおおいにけっこうなんですが……あんまりこつちにこないでください。

四人でくつついちゃったりしたら、しやれになりませんよ」

「なんじゃとお？ 花京院、おまえ、とかなんとかいつつちやつて……」

ほんとうは『ひとりじめ』したいだけなんじゃないのおー？」

「はあつ!! なつ、な、なな、なにをいうんですか!？」

そ、そんなわけないでしょう!!」

「はあーん？ 何日か、おまえずーっと、ひとりじめしてたくせにい〜！

まだ足りんのか？ ほんつと、独占欲の強い男じやのーう！

あんまりそんなだと、いつかきられちゃうよお？ ししししし!」

「ぐぬぬぬ……」

面白いので、すこしからかかってみると、思ったとおりの反応を示す男。

「へ？ ひとりじめ……？ なにをですか？」

それにひきかえ、やっぱりさっぱりわかかっていない、この超絶鈍感娘。

(……おまえをだよ。あいかわらずだな、このふたり……)

そして言つといてなんだが、この男のそーいうところを、嫌うどころか、むしろよることになってしまうような娘であったことを思い出す。

「ねえ、花京院くん、どうしたの？」

「な、なんでもないですッ！」

(なのに、なんでじゃ……。このかんじ。

もしかして、ほんとうになーんも進展しとらんのかなかろうか……)

自覚なくじゃれ合うふたりを遠い目でみる。

(わしの若い頃なんて、惚れちまった女には即アプローチ、即ゲットしとったもんじやがのう。

まったく最近の若いもんは……)

そして、今はそれどころではなかったことをようやく思い出し、真面目な話をすることにする。

「まあ、でも、確かにそうじゃな。

またくつついてしまうのはいか、ん……？」

瞬間、わしの頭に光明がおとずれる。

「……よし！ 挟み撃ちといこう！ ハーミットパープル！」

わしはスタンドを出し、この街の地図を地面に念写、描き出す。

「……この三方向の分かれ道をそれぞれいくのだ。

すると、同じところにつながっている」

指で、道を、なぞる。

「……だ！ ……ここでやつを追いつめ、倒す！

いいか？ 作戦はこうじゃ……！」

迷路のように仕切られて、入り組んでいる道を、壁沿いに進む。

(ぐうう……か、身体が、重い！)

わしの身体に帯びている磁力は先程よりもさらに、もうすでにかなり強くなつてしまつていようだ。歩くたびに街中の物が飛んできてくつついてくる。

プロポーズ中のカップルの指輪、ビールを飲もうとしている親父の栓抜き、店の軒先

にピラミッドの如く積み重ねていた空き缶……そんな軽いものはもちろん、電気屋のテレビや出前を運んでいるラーメン屋の自転車といった重いものまで。そして、靴には砂鉄がくつつき、ジャリジャリと地面と引き合い、またこれが地味に歩きにくい。

引きずるようにして、とにかくがむしやらに進む。

(……が、しかし!)

とうとう目的の場所にたどり着く。

すると、女が右手方向の道から現れた。

「お、追い詰めたぞ! はあ、はあ……」

そして、わしの前方、つきあたりの曲がり角からはアヴドウルがきた。予定通りだ。

「ふん……そんな鉄で着ぶくれしたような恰好でよくいうよ!」

それを追いかけるように、女の後方から花京院のエメラルドスプラッシュが飛んでくる。

「チツ! あのバカツプル、ほんつとうに、うっとおしいねツ!!」

そちらに敵が気をとられた瞬間、すべての条件が整った。

「よし! 今だ!! いくぞ、アヴドウル!」

「はい、ジョースターさん!」

「!?」

「そーれ！」

「いよおいしよー!!」

わしら二人が壁から手を放すと、その瓦礫にまみれた身体は宙を舞い、ものすごいスピードで引かれあう。

「ぎゃあーッ！」

そして、中点で敵の女を押し潰した！

「ビチ、グソ………が………」

「まさに挟み撃ち………じゃよ。」

その場所がわしとアヴドウルの直線上にあることに気づかなかったようだな」

「もう聞こえていませんよ」

瓦礫の山に埋もれる女。

そこからはみ出た痙攣するグンバツの脚だけがみえる。

「このぶんじゃ、全身骨折で再起不能ですね」

「うむ」

「ジョースターさーん！ 師匠ー！！」

そこへ、馬鹿ツプル………ふたりが到着する。

「フツ。どうやら、目論見はうまくいったようですな」

「ああ。おまえたちが後ろから追いかけ、牽制して、この道に誘導する。が、しかしそれは囿にすぎん。」

「実のところ、本命はまわり込んできたわしら……。」

「……ということに、気づかなかったようじゃ。ナイスじゃったな！」

「はあ、しかしとんでもない目にあいましたね。やれやれ」

「朝っぱらから疲れたわい……」

「疲労困憊。アヴドウルとともに、おもわずその場にへたり込む。」

「そんなわしらに花京院たちはいう。」

「お疲れ様でした。御二人は少し休んでください。」

「私たち、承太郎君たちを探してきますね」

「あっちにも敵が来ている可能性もあります。」

「早いところやつつけて合流して、みんな朝ごはんとしましょう」

「……ふつ。ああ、頼むよ。……ところで……」

「あることに気づいたわしは、アホらしいが指摘することにする。」

「どうしました？」

「……いつまでおぬしら、そーやってくつつかいとる気じゃ？」

「あ……」

「もう、やつの術はとつくに切れとるはずなんじゃがのう……？」

「す、すみません！」

あわてて彼女を下ろす花京院。

「こ、こちらこそ、ごめん！」

お互い真つ赤な顔をして謝りあうふたりに心の底からの感想を投げる。

「もう、おまえら一生くつといとけよ……」

「がはははは、美しい！ まさに青春だな！」

「じゃ、じゃあ、いつてきます！」

「気をつけてな——」

そして気を取り直して、元気に走っていくふたり。

「しかし、アヴドウルよ……」

「なんですか？」

「花京院のやつ、あの娘を片手で抱えてこの街をずっと走り回ってたんじゃろお？」

なんであんなに元気なんじゃ？ まだ若いといえど、すぐくね？

あいつやつぱり波紋戦士なんじゃあ……？ 修行させてみようかな……。

もしくはポパイか？　ホウレン草でも食ったのか？」

「たしかに。不思議ですね。」

「……ふっ、ですが、素晴らしきかな。」

それが、恋のちから、というやつなんじゃあないですか？」

「また……。そーいうのがほんと好きだなあ、おぬしは」

「ふっ、覚えがあるでしょう？　ジョースターさんだつて。」

なつかしき、あの甘酸っぱい感覚を。」

すきな娘を抱えるくらい、どうつてことないんでしょう」

「……むしろ元気になつちやうか。そうじゃな」

おもいだす。あの、なつかしき、青春の……

「もうとつとと、ほんとにくつついちまえばいいのに……」

「甚だ同感ですが、まあ、それもまた、いいんじゃあないですか？」

「こういうときは今しかないのですから」

（たしかに。まどろっこしいが、そんな関係もまた、いいのかもしれない……）

などと、可愛い孫たちのほほえましい姿を見送りながらおもう。

（からかいがあつて、こつちも楽しいしな。ししし！）

Too Young!!

(あいつらは！)

オレの視線、その先にあるのは、一組の男と女。

(ち、ちくしょう、もう退院してやがったのか！)

は、話が違う！ せつかく今、ポル……)

情報屋の話ではあと二、三日は出てこれまいと、そのはずではなかったのか。

(お、落ち着け！ 落ち着くん……)

そうだ、ある意味、好都合だ。自分に言い聞かせる。

また礼金の値を釣り上げることができるではないか、と。

(……やつらは、強いッ……！)

ひとりずつ、ひとりずつだ。

殺ってやる。

たとえば、どんな卑怯な手を使ってでも。

(この、『セト神』のアレッシー様が！)

「ハハフフフフ……！」

オレって、ほんつつと、えらいねえ〜！」

*

*

*

「承太郎君たち、どこへ行ったんだろう……」

磁力を操る女性スタンド使いを御老公お得意の機転で見事撃破した水戸の黄門……ならぬ僕達一行。しかし朝から散々振り回され尽くしたせいも、ジョースターさんとアヴドウルさんの疲労は相当なものようだった。よって、お二方には少し休んでもらうことにし、その間、僕と彼女は残りの仲間、承太郎達を探すことになった。

かといって、頼みのセシリアも範囲外。他にあてもなくとりあえずホテルまで帰ってきたが、二人を見つけたことはかなわなかった。

「反対方向に行ったのかもかもしれませんね。そっちを探してみましよう」

「うん」

うなづく彼女にもう一つ思い立ち、提案する。

「あ、そのまえに、ちよつとトイレに行ってきたいいですか？」

「あ、なら私も行っておこつと。じゃあまたあとで」

「はい」

先刻、のぞき（冤罪）事件のあった（起こしたのは身内だが……）御婦人用トイレに入つていく彼女。自分もその向かいにある紳士用のそれに入り、壁に居並ぶ白磁の便器達のひとつを選び小用を足す。なかなか綺麗な水洗式トイレなのが有難い……などと考えていた矢先だった。よりにもよつて、だ。そんなときに限つて、事件は起こる。

（……!? 殺気!!）

首だけで振り向くと、背後に男がいた。

「……へへ、花京院典明だな」

「貴様!? 刺客!!」

（こ、こんなときを狙うとは！ なんて奴だ！）

おかしい。トイレでの災難は……。先程ポルナレフまがいのことを考えてしまった報いであろうか。ここ三日間御無沙汰の電柱頭が脳裏をかすめる。

「ちよ、ちよつと待て！ 今動けん！ ひ、卑怯なつ！」

「くくく、だからだよ。なんとでも言いな」

なんたる外道。悪役の風上にも置けない。武士が名乗りを上げる間は待つ。戦隊シリーズだろうが仮面ライダーだろうがヒーローが変身中は黙つて見守る。そんなもの暗黙のルールであろうに。ちなみに当然、そんなことを呑気に考えている場合ではない。が、生憎わかつていても止められるものではない。今動いたら間違スラッシュいなく大惨事

だ。

「……死ねッ！」

そんなこちらの深刻な事情などお構いなしに、武士道も騎士道もヒーロー道（どちらかというところ）も（シヨツカー道かもしれない）もへつたくれもない攻撃が容赦なく僕に迫る。

「……くっ！」

*

*

*

「ふう、さっぱり。おまたせしましたー、つて……あれ？」

トイレから出て周囲を見回してみるも、彼のすがたはみえなかつた。こういうとき、大概自分の方が後なのに……と、いつもと異なる状況に少しひっかかりをおぼえる。

（いや、そりゃあ、そんなこともあるでしょうよ……何考えてんの。）

……でも……）

頭をもたげる、嫌な予感。

（けど、さすがに男子トイレに入っていくわけにはいかないしなあ。

それこそ痴漢じゃん……いや、一応女だから痴女か。どうしよう……）

しかし、躊躇しているその間に異変は起こる。

(ハッ!?)

相棒から届く『殺意の波動』のシグナル。それに反応するのが少し遅れた。

(いけない! セシリア!!)

「ギャッ!」

トイレ内を光源として発される見慣れた碧色の閃光が辺りを眩く照らす。と、同時に、一人の見知らぬ男が悲鳴と共に転がり出てきた。

「あッ!! 貴方まさか!?!」

「……ちいっ!」

こちらに気づくと舌打ちをし、逃げていく男。

(て、敵!?)

変態だろうが痴女だろうが、なんとでも言うがいい。緊急事態だ。男子トイレに飛び込む。

「す、すみません、失礼しますッ!」

花京院くん! だいじょうぶ!?!」

ところが、私の目に映ったのは予想など遥かに超えた光景であった。

「……え……?」

そこには『男の子』がひとり、いるだけだった。

「ひ……………あ、あれ？ おねえさん、は、えっと……………」
ぶかぶかの緑色の制服に身をつつみ、だいすきな彼に、とつてもよく似た、『男の子』が。

（ま、まさか、この子?!）

そんなわけではない、と通常なら思うのかもしれないが、状況的……………他に誰もいない。服装、そして、赤い果実の揺れるあのピアス。幼くしただけでそっくりな顔立ち、プラス髪の色や髪型……………というか、あの前髪。および、なにより直感的にもなぜか確信があった。

おそるおそる、『男の子』に問いかける。

「か、花京院くん……………」

「え……………？ おねえさん……………は？」

どうして？ なぜ、僕の名前を知っているのですか？」

（や、やっぱり！ で、でも……………）

「わ、私のこと、わからないの?!」

驚きと衝撃に押され、つい語勢を強めた言葉が飛び出てしまう。

「ごめんなさい……………わからない。……………しってる、はずなのに！ どうして?!」

うつむき、泣きそうなこえで嘆く彼。

(しまつ…………… 私の馬鹿!!)

おもわず駆け寄り、そのちいさな震える肩を抱きしめる。

「ごめんね、びつくりしたよね。だいじょうぶ、……………だいじょうぶだよ」

「お、ねえさ、ん……………」

(さつき逃げて行ったあの敵の男を倒せば、きつともとに戻れるはず。

……………こういうときくらい、私がしつかりしなきゃ……………!)

かぶりを振り、自分を叱咤すると改めて少年に声をかける。

「花京院……………典明君、だよね? 私は保乃宮仁美」

「ひとみおねえさん?」

「うん、そう。怪我とかしてない? 痛いところとか、ないかな?」

「はい、だいじょうぶです」

「よかった。変な人がきて怖かったね。でも、もうだいじょうぶ。安心して。」

私は、あなたの……………味方だから」

といつても、記憶がないのに信じてくれるものだろうか。でも、自分には他にどうい
えばいいのかわからなかった。

「……………僕の、味方……………?」

「うん」

向けられる視線をしつかりと受け止める。

「……。はい……！」

そのまま暫くこちらをうかがうようにみていた少年だが、やがて頷くと、少し、笑ってくれた。その様子にほっと胸をなで下ろす。

（あ、とりあえず、出なきや。ここ男子トイレだった……。

あと、彼の服どうにかしなきや）

「これで、よし……つと」

とりあえず、ホテルのブティックで子供服を購入しそれを着てもらう。

子どもは苦手、とかそんなことは言っていられまい。というか、なぜか、この子に対してはそんなふうにはまったくおもわなかった。まあ、当然といえば当然なのかもしれないが。それどころか……

「……服、ありがとうございます」

につこりと微笑む、彼。

「っ！ じゃ、じゃあ、行こっか」

「はい！」

そして、私の手をきゅつとにぎってくれる。

(ちよつ！ ど、どうしようつ！ か、かわいいツ……!!)

なにこれ!? て、天使!? 天使様がこの地に御降臨をツ!!)

すっかり心を奪われてしまっていた。さらに……

(……いつか、しようらい、こどもができたら……)

こんな、かんじだったり……?)

なんて、とんでもない想像までしてしまう始末。

(はっ！ ……な、なんてことを私！)

「あああ……ツ！ ご、ごめんなさい！」

今の無し！ 今の無しツ!! ごめんなさいーツツ!!

「お、おねえさん……?」

まったく、本当に現金なものだ。

(さ、さて……)

どうにか平静を取り戻して、これからどうするべきか、考える。

(うーん、とりあえず、当初の予定どおり、

承太郎君たちを探して合流すべきかなあ。でも闇雲に動くのも……)

おそらく、あのスタンド使いは人を若返らせるのだらう。下手をしたら『産まれる前』にまで。恐ろしい相手だ。彼の身の安全を最優先するならば、ジョースターさんと師匠をここで待つ方がいい気がしてきた。それに、そういうスタンド使いがうろうろしているということを伝えておいた方がよいだらう。少し休んだらこちらに戻ると言っていたふたりの顔を思い浮かべる。

(うん、そうしよう)

痴漢の一件のせいで入りにくいだろう、ということ、ホテルの外辺りにいることにした。

待っている間、だいたい彼も落ち着いたようなので、いろいろ聞いてみる。

「ええと、か……、典明君、いま、何歳？」

「6歳です。おねえさんは？」

「私は19歳だよ」

「そうなんですか？ 若くみえますね。高校生くらいかと思いました」

「そ、そう？ ありがと……」

(……。昔からしつかりしてたんだなあ……)

三つ子の魂百まで、とはこのことだろうか。そんなことを考えていると、ぼつり彼が呟く。

「……僕、おねえさんのこと、とつてもよくしつてる気がする。

でも、思い出せないんです……。ごめんなさい」

しよんぼりと頭を垂れる少年。

「典明君……。だいじょうぶ、そのうち、おもいだせるよ。

……そうじゃなくても、私はあなたのこと、すごくよくしつてる。

ちゃんと、そばにいるから、安心して。ねっ！」

「おねえさん……」

「はっ！」

そのとき、またしても嫌な気配を感じる。

(そうだ。こんなチャンスが敵が見逃すわけないか。

そりゃ、くるよね。また……)

「おねえさん！うしろ！」

(いつでも来たらしい！ はねかえしてみせるッ！)

身構えた私に、典明君が叫ぶ。

「だめです！ 影が捕まったら、おねえさんも……！ 逃げて！」

(影……?)

「……もう、おそいよ。女、おまえもガキになりなッッ！」

「おねえさん！」

背後から影踏みのように私の影に土偶のようなスタンドを差し向けてくる、敵の男。
「……おそい？ そんなことはないですよ」

それに向けて、言い放つ。

「なッ、なにイツ!?!」

典明君の声を聞いた時点ですでに、自分の『影』はセシリアでつつみ、ガード済みだ。
「からくりがわかっていれば、そんなの通用しません。」

「ありがとう、典明君」

「ち、ちくしょう！　せめてガキの花京院を！」

敵のスタンドが手にする斧。その凶刃が彼にむけて降り下ろされる。

「……そんなこと、私がさせると思いますか？」

もちろん、させない。セシリアでそれをはねかえす。

「……お、おねえさん！　おねえさんも!?!」

「典明君、あぶないから、私のうし……」

彼をかばうべく一歩前に出ようと、そう言いかけたときだった。

「……いつけーっ!!」

「えっ!?」

「ぐはあっ!」

敵にむけてキラキラと綺麗な碧色の水しぶきが浴びせかけられる。

無論、普段よりは粒が小さいが、それでも十分痛そうだ。ふつとぶ、敵。

「僕だって、たたかえるッ!」

子どもだからって、なめないでいただきたい!

おねえさん! 僕のうしろにつ!!」

「っ!」

「………僕の後ろに!」

鮮やかに蘇る、いつかの船の上での……凛々しく逞しい、碧色のおおきな背中。

(……ああ、やつぱり、本人なんだなあ……)

そんな場合ではないのに、つい口元が綻んでしまう。

「く、くそっ!」

一方、旗色の悪さを察したらしく、再び逃走を図る敵。それを追い、少年は駆けだす。

「まてっ!」

「あ! まてっ!」

*

*

*

逃げ出した敵の男を追いかけたが、やはり大人の方が足が速い。悔しいが見失ってしまった。

「典明君、まって！」

追いかけてきてくれたおねえさんにいう。

「すみません、逃げられてしまいました」

「いいよ、そんなの。……あなたが無事でよかった」

するとそういつて、おねえさんはふわつとわらう。

(あ……)

「……はっ！　そ、そうだっ！」

あたたかなそれについていみとれてしまいながらも、とつてもだいじなことをおもいだす。

さつき僕を護ってくれた、あの薄桃色の光を。

「ん？　どうしたの？」

「お、おねえさん、あの、『これ』、みえます……？」

みどりいろの僕の『友だち』。

僕にしかみえない、僕だけの、友だち。

祈るような気持ちで彼を呼び出す。

「え? ……あつ?!」

友だちをみた途端、瞬時におねえさんの顔色が変わる。

(しまった……。やっぱり、だめなのかな……。?)

落胆しかけた、そのときだった。

「きやーッ! ハイエロフアントもッ! ちっちゃいつ! かわいいーッッ!!」

「わっ!」

そういつて、おねえさんは僕と友だちをぎゅつと柔らかな胸の中に包みこむ。

それにすぐくどきどきしながら、どうにか訊ねる。

「み、みえるの?」

「え? もちろん……。あ、そうか」

しつかりとうなずくと、おねえさんはやさしいまなざしをむけ、僕にいった。

「……うん、みえるよ。典明君のだいじな『友だち』でしよう?」

私にもいるから。ここに……」

そして、左手を掲げ、みせてくれる。

「ね? ……あなたにはみえるでしょう?」

おねえさんの『友だち』は、花みtainな小鳥で……とても綺麗だった。

*

*

*

「ハッ！ ぐ、ごめんね！」

いつもはとでもできやしない……彼がちいさいのをいいことに、またもやそんなセクハラ（シヨタハラ？）まがいの行為をうっかりしてかしてしまった私。それに猛省しつつ腕の中の少年を解放する。

「さ、さあ、戻ろつか。きつとそろそろジョースターさんたちも……つて、あれ？ 典明君？」

歩き出そうと促すもその場にたたずんだままの少年を不思議に思い、呼びかける。

しまった、うっとーしすぎて嫌われてしまっただろうか……と慌てふためき始めた私に対し、押し黙っていた少年は意を決したかのように口を開いた。

「おねえさん、……いや、ひとみさん」

「へっ!? な、なに？」

急に名前を呼ばれ、ちよつとドキツとしてしまった。すきなひとがちいさくなっているだけなわけだから、ゆるしてもらえるだろうか。それにしても……さすがに犯罪か。

(どうしよう、これを機にへんな趣味にめぎめたら……。ぜんぶ花京院くんのせいだ)
そして、そんな私の心をさらにどきどきさせるようなことを少年はいいだした。

「あなたには……。恋人が、いるんですか？」

「はえっ?! な、なにを!? 突然!？」

「そ、その反応は……。やはり心にきめたひとが!？」

「……」

(恋人ではないけれど、心にきめたひと、というならば……)

それは、『あなた』なんだけど……。うーん……)

どう返したのか、考えあぐねているうちに彼はいった。

「……。すこしだけ、待っていてください!」

どこのだれだか知りませんが、そいつよりもぜったいに、いい男になってみせます!

だから、……。そうしたらっ!」

「……。僕の……。お嫁さんになってください!」

(ひ、ひいやああー!! わああー!?)

どうしてくれよう。もう私の心中はてんやわんやの大騒ぎだ。

(い、いや、おちついて、おちつくのよ！ ほ、ほら、彼はいま、こどもで……)
必死に心を鎮めようと己に言い聞かせながら少年をみやったところで、きづく。
「あ……」

彼は、とても真剣なまなざしでこちらをみている。
まつすぐに。とてもきれいな瞳で。

(おんなじ……だ……)

はじめて出逢ったときの、あの、彼の瞳と。

「……ありがとう」

じぶんでも驚くほど自然に、素直なきもちがことばとなつてあふれてくる。

「……うれしいな。すぐく、うれしい。」

典明君が……『おおきく』、なつたときに……

もしも、いまとおなじきもちだったら……そうしたら……」

「……私を、あなたの……、お嫁さんにしてくれる？」

「はいっ！ もちろん！ すぐ、おおきくなりますから！」

元気にうなづく彼に、こみあげてくるものをこらえつつ、どうにか伝える。

「……うん。たのしみに、しているね」

「よし、じゃあ、あいつを早くやつつけにいきましょう」

そういうと、満面の笑みで私の手をひく少年。

「あ、ちよつと！」

「だいじょうぶ！ 僕とあなたなら、無敵ですよ」

「もう……！」

*

*

*

（くそ、誤算だった。花京院もスタンドをあんなガキの頃から操っていたとは……

しかも、あの女、セト神の技まで防ぎやがるなんて……）

辛くもひとまず逃げおおせたオレ。

改めてやつらを殺る算段を考えていた。

（しかし、所詮はガキと女。なんとかもう一度隙をついて……）

そこで、気づく。

「げ！ あいつらは！」

こちらへと歩いてくるふたつの影に。

(じ、ジョースターと、アヴドウル！)

ま、マライヤは？ やられてしまったのか?! くそッ！)

焦燥を抑え一旦それとなくやり過ごした後、こつそりと尾行しつつやつらの会話を盗み聞く。

「……ジョースターさん、よく考えたら我々ホテルに戻るのまずくないですか？ 痴漢

冤罪……女子トイレに侵入したのは事実なのだから、冤罪とは言えないのかもしれないかもしれませんが」

「うー！ そ、そういうえばそうじゃった」

「仕方がない。わたしが少し変装して、……といってもターバン外して上着脱ぐだけだけだ。けど。」

様子を見えます」

「ああ。頼むよ」

そうして、アヴドウルはホテルに入っていく、ジョースターが独りになる。

(……今しかない！ いけ！ いくんだッ！ オレ！)

「ん……？ なんだ君は……え!？」

「もらった！ 死ね、ジョースター！」

『セト神』で、影を捕らえる。

「な、なにイツ!?!」

成功だ。みるみるうちに若返っていく。

「な、なんじやこりやあぁー!?!」

灰白色の髪はまつ黒く、刻まれていたシワも消えていく。

「やった！ やったぞ！ ジョースターを、やつ……え？ あれ？」

飛び上がったのも束の間だった。

「……?」

「げっ！」

そこには、ひとりの青年が立っていた。

「し、しまった！ 歳の吸い取り方が足りなかった!!」

「うお！ すっげー！」

なんか超、身体が軽い！ 絶好調！ ありがとな！」

気安い言葉と人懐っこい笑顔をオレにむける青年。

「でも、さっきおまえ……おれに死ね、とかいつてくれたよな？」

「ってことは、よくわかんねーけど……」

一転、にやりと、不敵に笑う。

「……敵、確定、だよな？」

「ひ、ひいいいいー！」

「あつ！ お、おい、まちやがれツ！」

オレは、またも一目散に逃げ出した……。

*

*

*

死ぬ、とかぬかした癖に、すたこら逃げた怪しい男を追っかけてきたおれ。

スピードは比べるまでもないが、如何せんこの街の地理に詳しいらしい。巧みに曲がり道を利用し男はまんまと行方をくらませてしまった。

「きゃっ！」

きよろきよろとその姿を探しながら駆け回っていると、うっかり道行くひとりの女性にぶつかってしまった。

「わお！ 大丈夫かい？ すまねえ」

「いえ、こちらこそ。すみません！」

「……ッ!？」

その姿を見た瞬間、息が止まりそうになる。

「……し、シーザー?!」

「え……?」

きよんとした顔で首を傾げる女性。その反応に我に返り、自答する。

(い、いや。そんなはず、ないよな。あいつは……もう……)

おれを生かすため、己の誇りを貫いて、散っていった……親友、に思いを馳せる。

(しかもこの娘は、女の子なのに……)

なんでそう思ったんだ……? でも、この、纏っているオーラ……)

微かにだが感じる、波紋の……魂の発する体内エネルギーの『色』。

不思議とそれが瓜二つにみえた。

たまらず、問いかける。

「き、君、もしかして、お兄さんとかいるかい?」

「え? はい、いますけど……」

「まじか!?! も、もしかして、イタリア人かい?」

し、シーザーとかいう名前では!?!」

ごくりと息を飲む。しかし返ってきたのは『当たり前』の答えだった。

「いえ、『義経』という名の、日本人です。」

あ、おじいちゃんはイタリア人、……かもしれませんが」
「そ、そうか……。」

それでかな……。そうだよな……。」

そりゃあそうだ。

そんな偶然、そうそうあるはずがないのだから。

「ごめんな、急に。人違いだった。」

知ってるやつ……。に、とつてもよく似ていたんだ。

君の、……。その、雰囲気が」

「……。そうなんです。……すみません」

おれの言葉を受け、その娘は何故かそういつて心底申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「い、いや！ 君が謝ることじゃあないじゃん！」

……。変な娘だな。ふっ！」

慌てて否定するも、そのあまりにも生真面目な姿におもわず笑ってしまう。

すると、なおも真剣な表情で彼女はいった。

「あれ、そうですか？」

でも、なんだか……。、すぐくがっかりさせてしまったみたいなので」

「え……？ ……そんなにがっかりしてた？ おれ」

「はい、……とても」

戸惑いとともに訊ねると、そんなふうにいわれてしまう。

「そっか……」

自分はまだ、あきらめきれていないのだろうか。

あいつが……生きて、いると。

——……J O J O！ ——

響く。いけ好かないとばかりおもっていた気障なああの声が。

ふわりふわりと浮かびあがる。虹色の球体たちが。

そんな影にすつかりとらわれていたおれの耳に、ふいにうしろから声が届く。

「……ひとみさんからはなれろっ！」

裾を思い切り引かれた勢いそのまま振り返ると、目に飛び込んでくるちいさな影。

「うおっ！ なんだ？ このチビっこ！」

「チビじゃあないっ！」

きさまこそなんだ！　ひとみさんにへんなことしたら、ゆるさんぞ！」

「おつ？　こいつ、チビのくせにいつちよまえに！　へへ……」

投げられるのはあんまりな台詞だったが、毛の逆立った、あまりに必死で健気なその様子にまたも笑みがこぼれてしまう。

「ち、ちがうよ。だいじょうぶだよ、典明君。このひとはね……」

そんな少年に対し、彼女が弁解をしてくれる。

「……おともだちにね、私がすごく似ていたんだって」

「……それはナンパの常套句ですつ！」

「まったく！　あなたってひとは！　少しも目がはなせないんだから！」

「ご、ごめんなさい……」

「あ、あれ？　なんかこれ、いつもといつしよじゃない……？」

「が、しかしそれは火に油を注いだだけに終わつたようだ。アンバランスなはずなのに何故か非常にしっくりきている……そんなふたりのやりとりが見ていて面白い。その関係性に興味が湧いてきたおれは、好奇心に押されるまま、からかいがてら訊ねることにした。」

「弟かい？　へへ、頼もしい騎士くんだな。」

「ねーちゃんのこと、しつかり護つてやるんだぜ、少年」

「弟じゃあないっ！ 貴方なんか言われなくても！」

心外だ、といわんばかりに憎まれ口を叩きつつパイッとそつぽを向く少年。

「あ、そうなの？ ……じゃあなに？」

「え!? ええと……その、あの……と、友だちですっ！」

「……『いま』は、ですけどね」

「にやッ!? の、典明君っ!？」

「ふーん……? あー、でも、まじで、気を付けてな。」

今この街、変なやつがうろついているからなあ」

奥歯に何かが挟まったかのようにもごもごと答える彼女。懽然とした表情で付け加える少年。余計にわけがわからなくなりつつも、思い出し、老婆心ながら彼女に伝えると生意気な横槍が入る。

「ふん、貴方以上にあやしいひとなんているんですかねえ？」

「はあーん？ そーいうこといっちゃうわけ？」

「そんな可愛いおくちはこれかな？」

戒めがてら、ほっぺたをひねってやる。

「いひゃい……くっ、まけるかっ！」

「いってッ！ この……！」

ほんとーにナマイキなおぼっちゃんですねぇッ……!!」

「なにおうっ!」

「ちよ、ちよつと! やめてください!」

典明君も、やめてっ!」

ヒートアップしていくおれたちを見かねて彼女が止めに入る。

それをみて、少年がいう。

「ふん……しかたがないな。ひとみさんに免じて、だ。

今日は僕からひいてやる。次はないと思えよ?」

「……。キミ、いまからそんなんでだいじょうぶかな?」

先がすごくおもしろいやられるよ?

やあ、おおきくなつたらいつたいどうなつちやうのかなあ?

ぜひ一目見てみたいものだなあ……!!」

「御心配なく。貴方のような大人にだけはなりませんから」

「にやにおうッ!!」

「……え、ええと! それで、変な人が出たんでしたっけ?」

雰囲気を払拭すべく話題の転換を図ろうと、彼女が再び割つて入る。

「あ、そうそう。おれ、そもそも、その悪いやつを探していたんだよ。

なんかこーんな二又で鈴のついた、へんてこりんな髪型で、たらこ唇の……、
おどおどした、変な男」

身振り手振りをまじえて説明する。

「そ、それは！ まさか!？」

するとなにやら心当たりでもあるのか、驚愕の表情を浮かべる彼女。

「え？ 知ってんの？ ひでーんだぜ、いきなりおれに死ねつつてさ。」

なんかしたかと思えば、失敗したのか逃げていきやがった。

だから、こつちからやつつけにいつてやろうと思つてさ」

「……そ、それつて、もしかして……。」

ハッ！ よく見たら、その服装はつ……!!」

そして、なにかを察した様子の彼女に、しどろもどろに問われる。

「え、ええと、あの……し、失礼ですが、お名前をおうかがいしても……?」

それについて、軽口をたたく。

「おつ！ 君、もしかして、おれに惚れちまったりなんてしちやつた?」

「……え？ 全然ないです。ありえません」

「ちよ！ そこは即答ツ!! ……ハッ!」

「……」

冷水をぶっかけるような彼女の塩対応。にもかかわらず、それすらお気に召さないのか、おれたちを見るチビの視線が刺すように痛い。気のせいか、今にもなんか飛んできそうな……

「ま、まて!! わかった、わかったって!」

なんて可哀想な、おれ……しかたがないので真面目に答える。

「おほん! おれの名は……」

超絶イケメン波紋戦士、ジョセフ・ジョースター!

……なんちて!」

きまつた! そう思った瞬間、うなだれた彼女が半ばやけつぱちに呟く。

「ああ……やっぱり……」

昔からこのひとも、ちつともかわってないんだなあ……はは!」

*

*

*

「あれ? ひとみさん、この軽薄そうなお兄さんのことを知っているんですか?」

「うん……よく知ってる、おじいちゃんだった!」

(いわれてみれば、承太郎君に似てるや……ノリが違い過ぎて気づけなかったけど)

納得する私に対して、首を傾げる典明君。

「……………？ 意味がわかんないんですが」

そして抗議の声を上げるジョースターさん（若）。

「おいッ！ 君たち、失敬だぞ！ だれが軽薄だ！ だれがおじいちゃんだッ！！」

「ええと……………うん。」

もうとにかく、あの敵を倒せばすべてわかりますから……………うん」

頭が痛くなってきた私は、説明を放棄した。

「？ まあ、そういうなら……………」

じゃあ、いきましようか。たぶんこつちだと思えます」

「うん」

「え？ キミたち危険だぜ。そういうのはおれにまかせときなつて。じゃあな！」

「あ、まっつてください！ つて、ああ、行っちゃった……………」

制止虚しく、風の如きスピードで駆けて行ってしまった若いジョースターさんを典明君と追いかける。

若い頃は現在よりさらに、とつても強かった……………とのこと。大丈夫だとは思うが、でも『スタンドはスタンドでしか倒せない』。あのジョースターさん、今はスタンドが使い

ないはず。やはり念のためついていった方がいいだろう。

「あっ！」

街路を進んでいくと、とある家屋の二階から人が落ちてくるのが遠目に見えた。

「あそこだ！ 行きましよう！」

その家の窓からは若い男の子が顔を出して、なにやら叫んでいる。

「ハッ!! あの髪型は……！」

まさか、いや、絶対、ポルナレフさん！」

そして、その窓の真下でスタンド使いの男と対峙しているのは、やはりというか、このひとだった。

「……承太郎君!! いけない！」

「!? な……!? うッ……これはツツ！」

禍々しい『影』に承太郎君の影がとらわれてしまう。

「くっ! しまった! 承太郎君まで……！」

承太郎君の身長はみるみるうちに小さくなり、典明君とおなじくらいの年齢の少年になつてしまった。

勝ち誇った敵がいう。

「ふはははは! 承太郎！」

おまえが『スタープラチナ』を使えるようになったのはつい最近と聞く！
つまり、今はスタンドを使えない！ ただのガキになったのだ！

うはうはうは！ オレの、勝ちだツ！！ D I O様！ オレが承太郎を殺します！
札金をたつぷりはずんでももらいまっせー！ 死ぬエー！ 承太郎ーツ！」

「あぶな……あ！」

「あ！」

「あ！」

「ぐほっ!! ……えっ?! ええ!？」

何が起こったかわからないまま、気がついたら敵がぶつとばされていた。

「……やれやれ。子どもだからって、なめんなよ」

天高く突き上げられたその拳を見て、全員初めて事態を悟る。

「な、殴った！ 生身の子どもの拳で!!」

「ひ、ひいいいいー!!! いてえー!!」

「じよ、承太郎君は……」

「子どものころから、やるときはやる、性格の人だったのか……」

「強い……!」

「う、うわぁー、に、逃げ……!!　ハッ!」

「またも敵前逃亡を図ろうとした敵に、立ちほだかるひとがいた。

「おいおい、こんなところにいたんだ……探しちゃったよ」

若ジョースターさんだ。

「よくも、卑怯な手ばかり使って……」

典明君。

「好き勝手してくれたな!　あの家のおねえちゃんにも、ボクにも……」

ちびポルナレフさん。

「覚悟は、とうに……」

少年承太郎君。

「出来ているよなあ?　……にひひ……!!」

そして、青年ジョースターさん。

「「「オラオラオラオラオラオラオラオラオラア!!　「「」

腹に据えかねていた四人が、一斉に総攻撃をかける。

はるか彼方にふつとぶ、敵。『再起不能』決定だろう。

(……。あれ？ なんかちよつぱり……気の毒……？)

ちつちやいみんなや、若い頃のジヨースターさん。

本来決してであうことができないはずの姿とであえて……

(私、また、なにもしないで見てただけだしなあ。それに……)

——僕の、お嫁さんに——

……ぷろぼーず、なんて、されてしまつちやつた、わけで。

あんなにすてきな『ちいさな騎士さま』に。

(ふふ、なんか私だけ、ほんとと得しちやつた。

つて、い、いやいや、不謹慎不謹慎……！ すみません……)

「……あつ！」

こつそり誰に向けてでもなく懺悔をしていると、ほどなくしてみんなの姿が元に戻り始める。

「ふう、よかつた……つて！ ああッ！」

承太郎君とジョースターさんはいいが、花京院くんとポルナレフさん……

「き、きやーっ！」

「わ、わあッ！」

「す、スマン！ 服、服ーっ!!」

「は、はいーッ！」

こんなこともあろうかと持っててよかった。

あわてて花京院くんに服を投げ渡し、うしろをむく。

「す、すみません。ありがとうございます……」

「いえ……、あの、その、こちらこそ……すみません……」

(……ちよ、ちよつとみえちやった……ご、ごめんなさい……)

ちなみにポルナレフさんは家の中に服を取りに走っていった。全裸で。

「はあ、疲れた。なんなんじゃ、本当に今日は……」

「重ね重ね、おつかれさまでした」

そんな中、ジョースターさんに声をかけられる。

「ふふ、どうじゃった？ ナウなヤングじゃった頃のわしは？」

「ふふ！ ……そうですね、たしかに『超絶イケメン波紋戦士』でしたね」

「じゃろおー！ あーあ、戻っちゃった。

あれ？ わし、そのままのほうがよかつたんじや……？」

「い、いや、それはまずいですよ……」

「ふっ、それはそうと……」

そして一転、真面目な顔になったかと思うと、くしやりと笑う。

「あらためて……よく戻ってきた。……おかえり」

「……！ はい！ ただいま、です」

「よお。やつと……帰ってきやがったか」

「承太郎……」

「……ふっ」

無言で交わされる、固い握手。

（よかつた……）

「花京院！ こいつめ！ おぬしもよく戻ってきたのーう!!」

そんなふたりを温かいきもちでみつめていると、すぐさま駆け寄っていくジョースターさん。後ろから彼にヘッドロックをかます。何を言っているかはわからないが、手

荒い歓迎の後なにやら小競り合いを始めたようだ。それを横目で冷やかに眺めつつ入れ替わりに承太郎君がこちらへやってくる。

「よお。おまえも、ひさびさだな」

「うん」

そして私の様子を一瞥し、いう。

「……おまえだけ、まだ元に戻ってねーのか？」

「……ぐつ！ こ、こどもっぼいのは元からですよーだ！」

「ふっ、冗談だ」

「真顔で冗談言わないでよ……」

「花京院！ 保乃！ ひさしぶり！」

そこに、慌てて服を身につけつつも、このひとが戻ってきた。

「ポルナレフさん！」

「ポルナレフ！」

「もう目は大丈夫か？ 花京院」

「ああ」

積もる話をしている中、ふと気づいた私は訊ねる。

「……あれ？ ポルナレフさん。ピアス、片方、どこかに？」
「あ……」

想い出すかのように耳に手を当てたそのとき、家の中からひとりの女性が出てきた。なにかを探しているようで、こちらに気づくとポルナレフさんに声をかけた。

「あの、おたずねしますけど……」

わたしの家から男の子が出ていくのを見ませんでしたでしたでしょうか？

あなた方と同じ、外国人の子どもなのですけれど……」

「……」

ポルナレフさんは何も言わなかった。

普段と違う、真面目な表情で……ただ、女性をみつめていた。

(あ……、もしかして……)

「……」

でも、みんなも、なにもいわない。

「……？ 失礼ですけれど、前に、どこかでお会したような……」

「……。いえ、こ、子どもなんて……見ませんでした。い、いくぜ、みんな！」

そうして、背を向ける。

瞬間、女性が、なにかに、気づく。

「！ あ……………！ あの耳飾りは！ 待って！ まさか！」

その声に、ポルナレフさんは振り返る。

「一度も会ったことがないぜ……………会うはずがない。オレたちは旅人なんだ。

初めて来た場所だし、もう出発しなくてはならない。次の街へな……………」

それだけいうと、振り返ることなく歩いていく。

「……………夢だったんだわ。やっぱり……………」

女性が見えなくなってしまってから、立ち止まる。

「……………」

全員で、ポルナレフさんを囲む。

「ポルナレフ……………」

「……………なにもいうなよ。……………なにも、な……………」

「……………」

返事の代わりに、その肩をみんなでたたく。そして、微笑む。

「さ、出発……………つていうか朝食おうぜー！ 腹へちまったよ！」

「……………あれ？ そういえば、アヴドウルさんは？」

*

*

*

「……信じられないッ！ のこのこ戻ってきたわ！」

「こいつよッ！ ちかーんッ！！」

「止まれ！ 止まりなさい！！」

「待ちなさい！ この変態ーッ！！」

「うわわあー！」

「こ、これもわたしのキャラではないッ！ けっしてーッ！！」

「み、みんな!? どこだ!? 助けてくれーッ!!」

(番外編) マイミライ

ここはいつたい、どこなんだろう？

毎日、家から出た時に見る近所の風景とはまったくちがう街の雑踏。延々と続くかのような石畳と、行きかう人々が横を通り過ぎていくたびにからからの砂が舞い上がる。その顔は見たこともない……それどころか日本の人ですらない。飛び交う言葉はまるで魔法の呪文みたいに私の耳に響いた。

ああそうか、夢なんだ。

きつとほんとうは、あたたかい布団の中にいるんだ。もしくはいつもみたい漫画を読んでいる途中で炬燵で眠ってしまったのかも知れない。

あれ？ そもそも、さっきまでなにをしていたんだっけ？

気付いたら、ぽつりとただここに立っていた。そして目の前で尻もちをついた変わった髪型をしたおじさんがびっくりした顔を翻して逃げて行った。すぐに、『鳥さん』が追い払ってくれたんだとわかった。私の唯一の友だち。はじめて出逢ってからまだ半年くらいだけど、いつも彼女は私を護ってくれる。

そのまえのこと、かすかに頭の中に残っていた映像を一生懸命手繰り寄せようとした

けれど、それは逃げていくばかりだった。

あたりを見渡しても、人、人、人……知らない人。

これは現実じゃあない。そう思いたいののに、邪魔するみたいに不安の風船が私の胸いっぱい膨らんでいく。

そうだ、さがさなきや。

破裂しそうなそれにおされて走りだそうとしたけれど、自分に纏わりついている布につまづきそうになる。懸命にそれを飛び越え呼びかける。

「……父さん！ 母さん！ おじいちゃん！ おばあちゃん！ 義経お兄ちゃん！」
家族を。

「……みんな！ ……どこ!？」

臍げに浮かぶ、やつとみつけた、家族以外のたいせつな、信じられるひとたちを。

「か……あれ?」

そして、いたはずだったのだ。私には。

「だれだっけ……」

それがだれかもわからないまま、だれよりもそのひとをさがしていた。

「どうして、おもいだせないの……?」

さらさらと掴もうとしても消えていく。ぱっくりと口を開けた黒い怪物に、だいじな

記憶をむしやむしや食べられていたみたいだった。

じわりと視界が滲む。雫といっしょにこれ以上たいせつなものがこぼれてしまわないように、俯いて唇を噛みしめていた。

「あの……ねえ、きみ？」

すると、ふいに躊躇いがちにふつてきた、やさしい雨のようなそれに顔をあげる。

「……どうか、したの？」

そこにあつたかおをみて、私は心からおもった。

ああ、やつぱりこれは夢なんだ、つて。

*

*

*

「反対方向に行ったのかもしれないね。そっちを探してみましよう」
「うん」

磁力を操る女性スタンド使いをジョースターさんお得意の機転で見事撃破したあとのこと。疲労困憊のお二方には少し休んでもらうことにし、その間、僕と彼女は残りの仲間、承太郎達を探すことになった。

元来た道を辿りホテル前まで帰ってきたものの発見できずじまいであったため、逆方向へと足をのぼそうとした。その前にかすかに感じた憂いを排除すべく、僕は彼女にいった。

「あ、そのまえに、ちよつとトイレに行つてきていいですか？」

「うん、もちろん。じゃあ……私はここで待っているね」

旅慣れしている方はおわかりかと思うが、結構これは重要な事柄なのだ。たかがトイレ。されどトイレ。チャンスの神様は前髪しかないのだ。機会を逃してスタンド使いだけでなく尿意という強大すぎる敵とも闘う羽目になったら目も当てられない。

「ごゆつくりー」とにこやかに手を振る彼女にひらひらと自分も振りかえし、ホテル内の紳士用のそれに入る。

大概こういう時、単純な（注、褒め言葉である。だが、それがいい、だ。いわせないでいただきたい）彼女は「自分も行つておこうかな」となるのだが、今回は違つたらしい。珍しいな、などとぼんやり考えつつも、無事用を足し終え、トイレ及びエントランスから出る。

「お待ちせしました。では行きま……あれ？」

だが、そこに在るはずの彼女の姿はなかった。

僕が入った後にやはり自分も行つておこう、となつたのだろう。きっとそうだ……と

胸騒ぎを抑えつつも待つていた。

しかし待てど暮らせどその姿はみえない。もういつそ御婦人用のそれに法ハイエロフアント皇で突入してしまおうかとも思ったが、一日にそう何度ものぞき事件をやらかすのは不味すぎる。しかも仲間内で。どんな変態集団だ……とすんでのところで思いとどまつていると、ふと目にとまった。いや、惹き付けられた、といった方が正しいのかもしれない。

街路樹の傍に佇む、ひとりの女の子に。

小学校低学年くらいだろうか。唇を噛みしめ、健気にも必死に泣くのを堪えているように見えた。

僕は仁美さんを探さなければならない。そのはずなのに、吸い寄せられるようだった。

そもそも大の男が幼女に声をかけるなど、それこそちよつとした事案ではないか……そう理性が謳うにもかかわらずだ。

「あの……ねえ、ききみ?」

通報されたらどうしよう。ためらいながらも気がついたら声をかけてしまっていた。

「どうか……したの?」

すると女の子は大きな瞳を殊更大きく見開いて、こういった。

「あ、あの……さがして、いて」

そこでなぜか口をつぐむ彼女にしゃがんで目線を合わせ、問いかける。

「なにを？ ああ。お父さんとお母さんをかい？」

「……わからないの。でも……」

首を横にふつたあと、じつと僕の目をみる。

「うッ！ そ、そうか、わからないか……」

きよるとうるんできがやくまんまるな瞳に小動物のように愛らしいそのしぐさ。おもわず感じてしまった謎のときめきに心の底から戸惑いを覚える。

（え……？ ちよ、ちよつとまで?! な、なんだこれは……）

胸に手を当てる。おかしい。僕は断じて彼女ひとすじであつて……というかそれ以前にそもそもそんな趣味はない。これではまるで幼女趣味のロリコン野郎ではないか。

戸惑いとともに、乗り掛かった舟だ。今さら降りるわけにもいかない。どうしたものかと懸命に頭を巡らせていると、天は我を見放さなかつたらしい。一筋の光明が訪れる。

「あ！ そ、そうだ！ なら僕といっしょに来るかい？」

「……えっ?!」

またも少女の顔に浮かんだ驚きの表情に焦つて取り繕う。

「ち、ちがうんだ。あの、僕はけつして怪しい者ではなくて……その、僕の友だちにおも

しろいおじちゃんが出て、そのひとはとつても探し物が得意なんだ。きつと、きみのさがしているものもみつ付けてくれるから……」

我ながら怪しすぎる……と、冷や汗をかきつつもしどろもどろにどうか提案をする。

『ハーミットパープル隠者の紫』なら仁美さんの現在地もわかるだろう。そしてジョースターさんならば僕なんかより、このいたいけな幼女に対する扱いもお手のものに違いない（なんとも誤解を招きそうな発言であるが……褒め言葉だ、たぶん）。一石二鳥、いや三鳥とはまさにこのことだ。

承太郎達を探すはずが予想もつかない展開に陥ってしまった。でもどうせここに彼女がいたら、ほうっておくなんてとんでもない！ などと、世話を焼くに決まっている。そしてなによりも、だ。僕は思ってしまったのだ。

長く艶やかな黒い髪に碧の瞳。健気でかわいい。この女の子……

だれかさんにとつてもよく似ている、と。

だからだ。きつとそうだ。いいわけのように心でそらんじていると、少女が呟く。

「ありがとう……おにいちゃん」

ふにやつと浮かべられた天上からの遣いが発したかのような笑顔に、またも僕が盛大に悶絶かつ苦悩する羽目になったのはいうまでもない。

「あ、ありえない……そんなはずは……いくら似ているからといって……なんてことだ……なんてことだ……不埒な……ああ、仁美さん、すみません……」

「お、おにいちゃん、だいじょうぶ……?」

ふらふらとジョースターさん達とわかれた方向へとむかう。道中、精神的な衝撃を受け、ぶつぶつと疑心暗鬼や困惑や自責の念やらなんやらと闘っている僕に、ドスンと今度は物理的な衝撃が走る。

「お、おっと、失礼」

「す、すまない! 匿ってくれツ!」

「ええツ!」

言うが早いかその青年は表通りに僕を押し出すとともに路地裏にその身を隠す。

「きゃー! すてきいーツ!! わたしも占ってえーツ!!」

「わたしが先よ! あら、どこに行かれたのかしら?」

「ちよつとその個性的な前髪の……あら、貴方もなかなか……」

暫ししてやってきた、ゆりかごから墓場まで……御婦人方の大群に取り囲まれ、代表者にズイッと詰め寄られる。

「こちらに素敵な占い師の殿方が走ってきたでしよう? どちらの方向に行つたか教えてくださらない?」

(ああ、なるほど)

先程の青年の言葉の意味を理解するとともに、にこやかに逆方向を指さす。

「あちらですわね! それーっ!」

遠ざかつていく黄色いそれに心で謝罪をしていると、うしろから青年の感謝の弁が届く。

「いやはや、助かったよ。ありがとう。乙女の力、かくも恐ろしいものだとは。道を尋ねようと声をかけたただけなのに……」

ぼりぼりと頬を搔く。改めてその御尊顔を目にする、なるほど。たしかにお嬢さんが騒ぐのも無理はない。黒い長髪に褐色の肌。男らしいきりつとした眉毛……彫りが深く目鼻立ちがハッキリして整っている、いわゆるソース顔、というのだろうか。承太郎とはまた違った方向の相当の美丈夫であつた。

「いえ、なんのこれしき。お安い御用です」

困つた時はお互い様である。2月の某『聖なる日』に煌びやかに裝飾された黒い物質を手にしたお嬢さん方の群れに追いかけてまわされる恐怖を知る身としては他人事ではない。

「是非、礼をしたいのだが」

どうやら氣真面目で実直な性格らしい。律儀なその申し出を丁重にお断りしている、彼はポンと手を打つ。

「そうだ、君たち何か困っていることはないか？ さきほど聞いての通り、わたしは占い師なんだ。まだ駆け出しだが、けっこう当たると自負している」

「ふつ、そうなんですね。では……」

自らの仕事に誇りを持っているのだろう。僕より少し年上くらいであろうに、素晴らしい心意気だ。と、そこにまたも好感を抱き、僕の制服の端をきゅつと握りしめ、その影からこそつと様子をうかがっている（若干人見知りらしい。それもまた可愛らしすぎる）『迷子の仔猫ちゃん』を拾った経緯を話す。

「フム、いつもはタロットで占うのだが、それならこっちの方がいいな」

彼はこそこそと懐から手のひら大の水晶玉を取り出すと、その透明な球体に向け何やら呟き、強く熱い眼力を送った。

「……あちらだ。この娘の『さがしもの』の鍵はあちらに……ん？ どういうことだ？ 君も、そして、わたしのさがしているものもすべて……だと？」

眉間に皺を寄せる彼。自分もつられて怪訝な表情を指し示された方へと向けると、曲がり角から見知った顔がのぞく。

「おや、花京院じゃあないか。おまえさん戻ってきたんか。なら途中でアヴドウルと会わんかつ……」

「じよ、ジョースターさん!？」

すごいな、ほんとうに当たった。などと呑気にもその占いの実力に感心していた次の瞬間、僕の目にとんでもない光景が飛び込んでくる。

「死ねッ！ ジョースターッッ!!」

「な、なにイツ」

「う、うわーっ!？」

彼の背後から変な髪型の男がバツと現れ、そいつが放った土偶のような黒い影……スランドにジョースターさんの影が呑み込まれてしまう。

「くっ！ しまった！ エメラルド・スプラッシュユ!!」

「ぐべらっ!？」

すぐさま僕が放った攻撃にふつとび、もんどりうって転がるも、その勢いを利用するかのよう逃げ出す。

「いってえー！ へ、へへ、でもこれでジョースターも子どもにしてやったぜーッ！ けけ、花京院、テメーも首洗って待ってろーッ！」

「ま、待てッ」

残された捨て台詞が非常に気にはなったが、それどころではない。慌てて謎の攻撃を受けてしまった彼に駆け寄る。

「ぐッ……」

「じよ、ジョースターさん、大丈夫で……ええッ?！」

「な、な、なんじゃこりやーッ!」

それは正直こちらの台詞だろうと思つた。叫ぶその姿がみるみるうちに若返つていく。

灰白色シルバークレイの髪はまつ黒く、刻まれていたシワも消えていく。

「……?」

変化がようやく落ち着いたそこには、自分と同年代くらいの青年が立っていた。

「うお! すっげー! なんか超、身体が軽い! 絶好調!」

「じよ、ジョースターさん……?」

「ん? なんでおれの名前知つてんの?」

首を傾げつつも気安い言葉と人懐っこい笑顔をむける青年。

「あの変なヤツとは知り合いか? ぶつとばしてくれたのおまえみてーだけど……どうやったの? あれ。手品?」

「ッ!? わ、若返らせる……歳を吸い取る、スタンド、なのか……?」

「き、君たち、大丈夫か!」

遅れて、『駆け出しのイケメン敏腕占い師』の彼もこちらにやってきた。

「さっきわたしもあの男に『なにか』されたんだ。炎で迎撃してやったが……途中で逃げられたので探していたんだよ。というか、君たちもスタンド使いなのか？ スタンド使い同士は引かれあう……あれは真実なのだな」

あまりにも『らしい』台詞にすぐさまピンとくる。というか、何故今まで気づかなかつたのか。服装やら身に着けているものが全く同じにもかかわらず、だ。髪型以外。

「……あ、アヴドウル……さん？」

「YES, I AM ! ……ん？ どうして、わたしの名を……」

「と、いうことはッ……!」

瞬間、走り出していた。その娘のもとへ。混乱の中、もつれそうな足を必死に前に出す。

「き、きみは、も、もしかして……もしかしなくてもッ!」

ズザアアーツ! と滑り込みながら、かがみ込んで訊ねる。

「ひ、仁美、ちゃん……かい？」

「……うん」

こくりとうなずく少女。

(やつぱりか……それで、か……)

「よかった！ よかったツ!! 僕は……ツ」

いろいろ懸念すべきことなんて山ほどある。けれどもなによりも先に、強く思った。
虚空に双手を挙げ叫ぶ。

「……変態なんかじゃあなかつたんだーツ!!」

不可解な自身の感情にすべて納得がいき、心の底から安堵の息を吐く。

よくよく見ると、少女が身に着けている大きめのワンピースだと思っていたものは彼女の着ていた長めの半袖シャツであることに気づく。スニーカーがやたらとオーバーサイズなことにも。あとで現場にスカートその他を回収しにいかねば……とか思っていたらおずおずと少女にきかれる。

「あの、おにいちゃんは……だあれ? どうして仁美のなまえをしっているの?」

「僕は花京院典明。きみの未来の、こい……と、友だち、さ」

つるつと願望が滑り出そうになるのを抑えつつ改めて自己紹介をする。

「……仁美の、おともだち?」

「あ、ああ。そうだよ」

「おともだち……」

そうつぶやくと、少女はすぐくうれしそうにふわつとわらう。

「ぐはうッ！」

彼女の『天使のほほえみ』(僕限定発動の即死攻撃)の破壊力は大人でもこどもでも変わらず、の模様。案の定、もはや僕はすっかりメロンぱんなのメロメロパンチ(錯乱)。

少女はじつとそんな僕をみつめると、ぽつりともらす。

「典明おにいちちゃんって、やつぱり、にてる……」

「え? に、にてるって、だれに? 」

「えっ!? えっと、……えっとね」

ぽつとほおを赤らめ、いう。

「……ひみつ」

「む、昔からそういうところも、かわらないんだな……気になるじゃあないか」

しかしそれがまた、まじぷりてい、である。いかん、このままでは犯罪者一直線だ。それはわかっている。でも可愛いもんは可愛い。可愛いは正義だ。いたしかたがないというものであろう。なんせ、ただでさえ愛しい彼女のちいさい頃なわけなのだから。そりゃあ可愛さも爆発するに決まっている。

咎めるものもなくなり(むしろ逆に己の『仁美さんセンサー』の精密さにある意味誇

らしさすら抱いていた)、開き直つてこの状況をせつかくなので堪能することに決めた僕に白々とした視線が突き刺さる。

「あ、あのさ、邪魔してゴメンね。君、ちよつとこつちにおいで」

ててて、とジョースターさん(若)の手招きに応じる少女。その耳を塞ぎつつ、彼は僕に深刻な表情で問うた。

「た、ただならぬ雰囲気なんだけど……やっぱあれなの？ おまえつてそういう趣味……」

「あつ！ ち、ちがうツ！ これは、その……ちがうんだ！」

いわれなき非難を払拭するべく釈明の言葉を叫ぶ。

「これはただ、僕の愛する女性がこの女の子だって、それだけなんだツ!!」

「……!!」

衝撃と共にシーンと凍てついた空気が場に流れ、沈黙のあとジョースターさんがぼやく。

「……うん。それ全然ちがわないよね？ おまえ、まごうことなきロリコンだよな？」

「ハッ！ し、しまったツ!! ま、ますます誤解を……!!」

失言(真実を述べたにすぎないのに)に頭を抱えている僕に横からフォローが入る。

「い、いや、いいんじゃないか？ そ、双方の合意さえあれば、恋の力は歳の差なんて

……

わたしの占いでも君たちの相性はピタリと吸い付くようで、大吉なんてかろく天元突破したところにあると出ている。ただ、その……し、然るべき時までにはちゃんと清きお付き合いをするんだぞ?」

「あ、アヴドウルさん!!? 今はその優しさがつらいッ!!」

熱く語りかける彼をよそに僕をイジるのにもすぐに飽きたらしいジョースターさんがけるつという。

「まあ、なんでもいいや。ロリコン君、占い師君、君らの名は?」

「ロリコンじゃあないッ! ……か、花京院典明だッ!」

「わたしはモハメド・アヴドウルだ」

「そっか。なら花京院、アヴドウル……」

にやりと笑う彼の、眼の奥の光が強いきらりと輝く。

「……おれと共闘といきますか!」

「!?!」

目を見開く僕とアヴドウルさんにむけ、胸を張る。

「だってさ、結局は全員、あいつを懲らしめちやいたただけなわけだろ? 目的の一致つてやつよ。じゃあもう、仲間でもいいじゃん? さっすがおれ! ナイス提案じゃね?!」

「……ふっ！ 面白い男だね」

「ふふっ！ では、そうするとしましょうか」

変わらぬそのカリスマ性に思わず笑みもれる。

「おにいちちゃんたち、もうみんななかよしのお友だちなんだね。ふふ、いいなあ」
「ここにこと少女もいう。それにほっこりと心が温かくなる。」

「よし、そうと決まれば占いではこっちに……」

いい具合にまとまり、気持ちも新たに歩き出そうとしたところだった。

ドドドドド……と舞い上がる砂煙。

「キヤーツ！ いらしたわーツ！」

「うわーツ!!」

戻ってきたお嬢様方の洪水に呑み込まれ、あつという間にみえなくなってしまう色男。ある種壯観ともいえる光景に少女が感嘆の声を上げる。

「わあ、すごい。だいにんきだね」

「ああ。そうだね」

「アウドウルお兄さんも、カッコいいもんね。テレビにでてくる仮面レンジャーのホシレッドみたい」

それならば幼少のみぎりに僕もしっかり視聴していた。現在も日曜朝に脈々と続く

由緒正しき戦隊ヒーロー物、仮面レンジャーシリーズ。その記念すべき第10番目の作品『十字戦隊☆星レンジャー』だったか。

「ひ、仁美ちゃんもすきなのかい？ ホシレッドのこと」

「仁美？ 仁美はね、ホシピンクのお姉さんが好き。だってかわいくてつよいんだもん。それにすごく健気で一途なの。ちよつと苦労性なホシグリーンのこと、こつそりずーつとだいすきなんだよ」

「そ、そうなんだね……」

ひよんなことから地球の平和を護る羽目になってしまった若者たちの友情やら恋愛やらなんやら悲喜こもごもを描いた、という王道のあれである。にもかかわらず、とても幼児番組とは思えないドラマ性と高クオリティの映像技術で、かつ、子供そっちのけでママ達のハートをも虜にしたイケメン主人公のホシレッドが最終回一話前に退場してしまうという斬新な展開がお茶の間の涙と話題を呼んだ……とかなんとか。

あれは確かに子供心にも衝撃的であった……と懐かしい映像に僕が邂逅していると大人気なくも少女に詰め寄る男がひとり。

「えーっ、確かにカッコいいけどさあ……おれの方がイケメンじゃね!？」

「う、うん。ジョースターのお兄さんも、カッコいいよ」

「へへ、サンキュ！ いいこだな！ それに……」

わしわしと頭を撫で、その顔をじつとみる。

「うん！ 君もおつきくなつたらかなりの美人さんになるな。このジョセフ・ジョースターの目に狂いはな……うわあッッ！」

ゴゴゴゴゴゴ。

法皇を呼び出しエネルギーを宝石状に変換する。今はみえないはずだが、流石波紋戦士。僕の発するドス黒い殺気には気づいたらしい。

「……ああ、その通りだ。この娘はすぐに他に類をみない絶世の美女になる。

そしてなにより今すぐ即その手を放せ」

「ニヤッ!? お、おちつけ！」

その際にスポンと彼女を無事保護回収し、しっかりと言い含める。

「駄目ですよ、仁美ちゃん。こんなトップイ、スケコマシなお兄さんのお話なんかにつき合つてあげちゃあ」

「す、スケコマシいーッ!？」

「だって、貴方いかにも、軽く40位年下の女性に平気で手を出しそうな感じじゃあないですか」

「お、おまえ、自分のこと棚に上げて……なにその、いやに具体的な……予言?」

「率直な感想です」

「ちえっ！ スケコマシっていったらこんなもんじゃあねーっつーの！」

「おや、真のスケコマシにお知り合いでも？ 一度お目にかかってみたいものですが」

「まあな。……紹介してやることは、もう、できねーけど」

陽気なその顔に、一瞬おちる、暗い影。

「……？ ジョースターさん？」

「なんでもねーよ！ ふーんだ、このロリコン！ 変態！ ストーカー予備軍！」

「なッ！ 言うに事欠いてっ!! やはり貴方にはお仕置きが必要なようだ……そこにな

おれーッ！」

そんな調子で小競り合いをしている二人のもとに、渦の中心から悲鳴に似たSOSが寄せられる。

「お、おいッ！ おまえら！ 遊んでないで、いいかげん助けてくれえーッ!!」

「あ、忘れてた……」

「あっ！」

一悶着ののち、ようやく本来の目的地向け街路を進んでいくと、とある家屋の二階から人が落ちてくるのが遠目に見えた。

「あそこだ！ 行きましよう！」

その家の窓からは幼い男の子が顔を出して、なにやら叫んでいる。

「ハッ!! あの髪型は……！」

まさか、いや、絶対、ポルナレフツ！」

そして、その窓の真下で敵スタンド使いと対峙しているのは、やはりというか、この男だった。

「……承太郎!! いけない！」

「!? な……!!? うツ……これはツツ！」

禍々しい『影』に承太郎の影がとらわれてしまう。

「くっ! しまった! 承太郎まで……!」

承太郎の身長はみるみるうちに小さくなり、仁美ちゃんとおなじくらいの年齢の少年になってしまった。

勝ち誇った敵がいう。

「ふははははは! 承太郎！」

おまえが『星の白金』スタープラチナを返えるようになったのはつい最近と聞く!

つまり、今はスタンドを使えない! ただのガキになったのだ!

うはうはうは! オレの、勝ちだツ!! D I O様! オレが承太郎を殺します!

礼金をたっぷりはずんでもらいまっせー! 死ねエー! 承太郎ーツ!

「あぶな……あー!」

「あー!」

「あー!」

「ぐほっ!! ……えっ?! ええ?」

何が起こったかわからないまま、気がついたら敵がぶつとばされていた。

「……やれやれ。子どもだからって、なめんなよ」

天高く突き上げられたその拳を見て、全員初めて事態を悟る。

「な、殴った! 生身の子どもの拳で!!」

「ひ、ひいいいいー!!! いてえー!!」

「じよ、承太郎は……」

「子どものころから、やるときはやる、性格の人だったのか……」

「強い!」

「う、うわあー、に、逃げ……! ハッ!」

「またも敵前逃亡を図ろうとした敵の四方に、立ちほだかる。」

「よくも、好き勝手してくれたな! あの家のおねえちゃんにも、ボクにも……」

ちびポルナレフ。

「覚悟は、とうに……」

少年承太郎。

「出来ているよなあ？ ……にひひ……！」

青年ジョースターさん。

「己が優位に立てる幼子にのみ攻勢に出るとは卑怯千万！ 地獄の業火に焼かれその性

根を叩き直すといいい！」

そして、『魔術師マジシャンズレッドの赤』を構える、若アヴドウルさん。

「「「オラオラオラオラオラオラオラオラア!!」」」

腹に据えかねていた四者四様、一斉に総攻撃をかける。

僕が手を出す余地などミクロンもあるはずがない。派手に燃え上がりながらはる

か彼方にふつとぶ敵をただ臨む。

「たーまやー、つてね」

『再起不能』決定だろう。合唱とともに若干同情しつつも胸を撫でおろす、僕。

「さ、これで全員元に……あれ？」

「……で、なんでこいつだけ元に戻んねーんだよ」

「作者の陰謀……いや！　だ、男女で差があるとかそーいうかんじじゃあないのか、きつと」

その後、ポルナレフと現地女性のなんとやらを無事見守り、ホテルにて夕食も囲み終えたにもかかわらず、未だ彼女の姿は子どものままだった。

「どうするよ？　こいつ、ずっとこのまんまだったら」

「うーむ……」

溜息と共に僕の膝の上に遠慮がちにちよこんと乗った少女に視線が集中する。重苦しいそれを振り払うように私見を述べる。

「そんなもの考えたって仕方ないじゃあないか。なるようになるさ。」

「そもそも別に僕はかまわないけどね。いくつだろうが彼女は彼女だし」

「あれ？　花京院おまえ意外と冷静……」

「……それに万一そうなたら僕の手元でじっくりとその成長を見護ることができるとじゃあないか。これこそまさに、かの光源氏も行った夢の計画ッ！　……くっ、くっ、くくくく……！」

「ぜ、全然冷静じゃあなかった……」

「いや、ある意味冷静すぎるだろう……」

「まあ、たしかにかわいいけどな。へへ、シエリーのちっちゃー頃思ひ出すわ」
「しやがみ込んで、そのふかふかのほつぺたをぶにぶにとつつくポルナレフ。そこから
必死に引き離す。」

「……や、やらんぞ！ く、くそッ、どいつもこいつも油断ならんッ……!!」
「とうか、別にそもそも花京院、まだおまえのもんじやあねえだろ……」

「いいつつ、僕が電柱頭をどついている間にさりげなく彼女をひよいつと担ぎ上げ肩に
乗せる。」

「あッ！ じよ、承太郎！ おまえもか……!! 返せ！ 返せよッ!!」

「高さ勝負ではこちらが分が悪いとわかつてのことか。天空そびえる塔の上、捕らえられたラプンツェルを迎えに行つた王子の気持ちで必死にその絶壁の如き青い背中に飛び掛かっていると楽しそうに横槍が入る。」

「にしし！ 承太郎おまえ、ちっちゃいころ『妹が欲しい』ってよくホリイにねだつて
おつたものなあ……」

「……そんな昔のこと、しらん」

「ジョースターさんに次いで、アヴドウルさんもいう。」

「ふつ、将来娘ができたら、承太郎はわかりにくく溺愛しそうだな」

「……そんな先のことも、しらん」

収集がつかなくなってきたところへポルナレフがぼつり呟く。

「しかし、さしあたってどうすんの？ こいつの世話。風呂とか着替えとかさあ……」

「……よしッ!! おふろなら、この典明おにいちやんがいつしよに……」

スッパーン! と四方から一斉に強烈なツツコミが入る。

「だ、だめだ、こいつ! 完全にイカれちまつてるぜ……」

……べつに今にはじまったことでもねーけど」

「た、たのむから、いい加減しようきにもどれ、花京院ツ!!」

「このロリコン野郎……マジで通報するぞ」

「明日には元に戻るじやろ。今日一日くらい風呂は我慢しなさい。」

さ、こんな変態☆おにいさんはほつといてとつと寝るぞい」

こいつら揃いも揃ってどこでスリッパを……。

薄れゆく意識の中、僕はただ、それだけが不思議でならなかった。

「だがこいつ、今晚ほつとくと何やらかすかわかんねー……」

「ベッドに縛つとこーぜ。すべてはこいつのためだ」

「しかし……」

「ん? どうしたんですか、ジョースターさん。わたしの顔に何かついてます?」

「あの、アウドウル? おまえさー、その、か、髪型さ、変えてみたらどうかかな?」

「は？ 突然何を言い出すんですか。

わたしにはこの髪型がベリーベスト！ 一番似合っているでしょう？ がはは！」

「……気になる」

深夜、意識を取り戻した僕は当然のことながら彼女の様子が気がかりで仕方がなかった。

こんな異国の地で幼い少女が夜ひとりぼっち……どれだけ心細いことだろう。それでも奥ゆかしい彼女のことだ。だれかに頼ろうとせず、我慢して枕を濡らすに決まっている。

「が、くそ！ う、動けん……あいつらめ！」

奴らが御丁寧に施した予防措置に歯齧みをする。何故わかったのか、僕の行動パターンが。

「あつ！ そうだ!!」

そこで気づく。僕にはいるのだった。こういうこまったときに頼りになる『相棒』が。そつと彼を呼び出す。

*

*

*

これからどうなるんだろう？

みんな、すごくやさしいけど……このままじゃあ迷惑かけちゃう。

でも、どうしたらいいのかなんて、ちっともわからなかった。

ぐるぐるぐるぐる、考えていると、どうしても込み上げてきてしまう。

せめて心配ぐらいはかけたくなくて、みつからないよう、きこえないように声を殺して泣いていた。

「……つく、……ひつく……、……え……？」

すると、あたまにふれるあたたかい感触。顔をあげると飛び込んでくる。

「わあ、……きれい」

まっくらななか、きらきらひかるみどりいろ。

「……仁美ちゃん、泣かないで」

「典明おにいちゃん……？」

「僕が、ちゃんと、そばにいるから」

「……うん！」

あたたかくてやさしいうでのなかに包まれた途端、すぐにうとうととしてきて……。

ふわふわと、まどろみのなか、想う……

……やっぱり、そっくり。典明おにいちゃんは。

ゆめのなかで、いつも私をむかえにきてくれる、だいすきなみどりいろの王子さまに。そんなの、はずかしいから、いまは、いえないけど……。

いつか、いえるかな？

いいいな。

私が、いつか、おおきくなったら……

*

*

*

ちなみに余談になるが、彼女がすやすやと寢息をたてはじめてからほどなくして、無事その姿は淡い光に包まれ元のおとなの姿に戻った。

「……典明、おにいちゃん……」

ハイエロフアントをぎゅつとだきしめ、しあわせそうに眠る彼女。

子どもの彼女に抱いたそれとともに、加えてそれとはちよつぴりちがう、いけない感情がむくむくと湧いてきて……押し寄せてくる激しい衝動と闘いながら、僕がまたして

も眠れぬ夜を過ごす羽目になったことなんて、もはやいうまでもないことだろうか？

衝動

『痴漢およびのぞき魔』……そんな甚だ不名誉な罪状（勿論冤罪）で危うく逮捕寸前であったアヴドウルさんを回収し、またも逃げるようにルクソールを脱した僕達一行。列車を乗り継ぎ、とうとうたどり着いた。

旅の終着点……カイロの街へと。

しかしすでに空に浮かぶは宵の明星。この明るさではDIOの館を見つけ出すのは不可能であろう、と本格的な搜索は断念。明日に備え英気を養うべく、宿に赴き夕食後ロビーで各々のんびりしていたところだった。

「それはそうと、綺麗な方でしたね！」

目を輝かせながら、彼女がポルナレフに言う。

「あん？ なにがだよ？」

「もちろんさっきの女性、ですよ」

「あー？ ……まあな」

そうなのだ。意外と好きなのだ。彼女はだれかのこーいう話が。そのあたりは一応いっぱしの女の子であるということか。

(なのにな何故己のことにはああなのだろうか……。解せない。……。わけでもないか)

そこはかとなく浮かび上がる心当たりに思いを馳せている僕をよそに彼女のポルナレフへの追及は続く。

「で、なにがあつたんですか？」

「……なんもねーよ」

「えー？ いいじゃあないですか、教えてくれても。

ききたいなあ。ポルナレフ兄さんのそーいう話！」

所詮『妹』という生物に『兄』は弱いものらしい。なんだかんだ結局リクエストに応じる男。

「ああ？ ったく、しつけーなあ。

まあ、かくかくしかじかで、少し、な。

純粹に親切な女性だった……。ただ、それだけさ」

「へえ……。いいなあ！」

『……たたずむ耳飾りだけが、ふたりをみていた……。』

「みたいな感じですね！ 素敵!!」

「なんだそりゃ。センスねえひと昔前の三文小説か……。』

「ふふ、兄さんもスミにおけないなあ」

「うるせえ。あんま兄さんをからかうもんじゃありません」

そう言いつつも実はまんざらでもない様子である。そんなポルナレフに対し自分も感想を述べておく。

「確かに、めずらしいものをみせてもらったよ。おまえ、あんな表情もできるんだな。

僕はてつきりまた肉の芽でも刺されたか、もしくは偽者かと思ったが……明日は確実に雨だな」

「……あのさ、花京院?　ずーっと思ってたけど……」

おまえ、なんでオレにだけそんなに厳しいの?」

「ええい!　いいんだよ!　オレのこたあ!」

そして訪れし、逆襲のポルナレフのターン。

「へっ!　そーいうおめーだつて……どうしたよ?」

似合ってるぜえ、そ・れ。可愛い耳になっちゃつて」

「ハッ!?!」

あわてて、ズバツと指さされた『それ』を髪で隠す彼女。

「気づいてないとも思ってたか?」

へへ……どこで、だれにもらったのかなあ?」

さあ、お兄ちゃんに白状なさい！」

「うっ……………」

完全に形勢は逆転したようだ。困窮した彼女はしどろもどろに言い放つ。

「こ、これはっ！」

い、いいじゃあないですか！　だ、だれでもっ!!」

(……………また、なんでそんな、ばか正直に…………)

自分で買った、とでも言っておけばいいものを。

しかし…………

『えへ！　これ、花京院くんにもらったんですよ〜！

いいでしょう？　私にはもったいないくらい可愛いでしょっ！』

……………などとあっさり言われてしまうよりはまあ、こーいう反応を示してくれる、というのは、すこしうれしい……………かもしれない。

「ふーん、じゃあ、こっちの彼の方に聞いてみよーかなあ？」

なあ、花京院？　しってる？」

「……………ノーコメント」

「またまたあ！　すました顔しちゃってえ！」

じゃあ……………兄さん、おもいきって、もつと気になってたこと聞いちゃおつかなあ〜！

「向きが変わった予先を一蹴する僕にめげることなく、わざとらしくひとつ咳ばらいする。」

「オホン。えー、で、キミたち……どうだったのかな？」

「あつちの方は。無事に、できましたか？」

「え？ なにをですか？」

「はあ？ なにをだよ……」

意味がわからない。ふたりに首を傾げる。

すると男は普段よりも二割増しに垂れ下がったまなじりで、にまにまと答える。

「なにつて……そんなの決まってるじゃーん」

（はっ……）

その調子にすべてを悟るも遅かった。

「……せつ……」

「うおおおー！」「わあぁー!!」

「デリカシーのかけらもない男の口から飛び出かけた禁断の単語をかき消すべくとつさに叫ぶ。どうやら同じ考えに至ったらしい彼女とともに。」

「うおー！ びっくりした。なんだよ、急に……」

「な、ななななな！ そんなわけないでしょーッ！」

加えて見頃の紅葉を散らしたかのように頬を染め、ものすごい勢いで否定しにかかる彼女。

「え？ してねえの？」

「し、しししし、しますかつ！」

「えー、だつてさあ、若い男女が同じ部屋で一夜……どころか何夜も明かしたんだぜ。

やることなんて、ひとつだろ！」

「ひ、ひとつじゃあないですっ！」

「……」

言い争う二人を一步引いて眺めつつ、密かに掌で顔を覆う。

(同じ部屋で、どころか、同じベッドで、しかも抱きしめあつて寝た……だけ。

とか、とても言えない……言えるわけがない……)

というか言つたつて信じてなどもらえまい。あの『死神』の一件の方がまだ真実味がある気がする。……泣いてなどいない。

「か、花京院くんはポルナレフ兄さんとは違うもんっ！」

兄さんの、兄さんの……変態ーッ!!」

しまいにはそんな捨て台詞を残し、彼女は走つてどこかへ行つてしまった。それをし

たり顔で見やりながらポルナレフがこぼす。

「へへ。『変態』って、女の子にいわれるの、なんかいいよな」

「……本当に変態だな」

(ちよつと、わからんでもないが……)

彼女をからかつて「えつち！」と、罵られたときの、あのなんともいえない……いや、やめよう。

そんな回想をしていると肩に回される太い腕と野太い声。

「しっかし、ほんつと、なにやってんだよ、花京院おまえ……」

それを慥然と払いのける。

「うるさいな。聞いている通りだ。」

僕は下半身だけで生きているおまえとは違うんだよ、ポルナレフ」

「ああ？　なんだと？　このへたれ！　どーせてめー、ひよったんだろ！」

「はあ!?　人の気も知らないで勝手なことを！」

あのひと無防備で、大変だったんだぞ……。

僕が己を律するのに、どれだけ苦労したと思っっている！

何度僕のハイエロフロントがスプラッシュしそうに……って、やかましいわ！」

「……下ネタかよ。つーか、そんなにやりたきやあやりやーよかつたじゃねーか」

すかさず横から入る厳かなツツコミ一声。

「じ、承太郎まで……。僕たちは夫婦はおろか、恋人同士ですらないんだぞ」

「おまえ、まだ……。いいかげん言えよ……」

あきれかえった声音のユニゾンが響く。息がぴったりなのがまた腹立たしい。

「うるさいっ！ こつちにもいろいろ事情があるんだッ！」

反論する僕になおもありえないものを見るような視線を向けるふたり。

「しかもちよつと待て、おまえ今夫婦っていったか……？」

「今時どんだけ古風なんだよ……」

「な、なんだよ……！」

互いの気持ちを確認しあつたのち、交際をスタート。手をつなぎ頬を赤らめるところから順調に愛を育み、社会的にも、高校卒業後一流大学を出て、しかるべき職に就き安定した稼ぎを得て、責任をとれるようになってから満を持して給料の三ヶ月分の指輪を渡しつつプロポーズ。そして晴れて結婚……。いや、せめてご両親に許可をいただいて婚約をする……

……そのときまではきちんと節度を護つた清い交際をするべきだ！あたりまえのことだろう！？ まあ無論、その後はお察しくくださいがな！……ふっ、ふふ、フフフフ……」

「……妄想がなげえ」

「このムツツリはつきりチェリー野郎……」

「はあ？ ものすごく努力してまとめてやったのに！ 三行で!! ……多少はみ出たが、そこは御愛嬌というやつだろう！ 本気を出していいなら『第一章・出逢い〜運命の名の下に〜』から始まり、誰もが辟易して途中でついてくるのを諦めるような壮大なストーリーから成る感動巨編を執筆するためのアウトラインはすでに構築済みだ！」

「しらんわ、そんな努力」

「そして、いらんわ、そんな小説。誰が読むか」

「ふん！ 不純、かつ、不埒な！」

「まったく最近の若者は、けしからんことこの上ない！」

「こらえ性が足らんのだ！ 軟弱者どもめがッ！」

「あの、おまえですよ？ この中で一番若者……」

「憎たらしくも的確なことをぼやくポルナレフの傍ら、きらりと鋭いその目が光る」

「つーか、なんでそんなにムキになつてんだよ。」

「その口ぶり……さてはなんかあつたな？」

「ぐっ……な、なんにもないっ！」

「コロンボの恐るべき観察眼。身に染みてわかつていたことではあるが、敵にまわすと

かくも厄介なものなのか。その追求から逃れるべく必死に視線を逸らす僕に憐みと嘲りの心を見せる。

「フン……まあ、聞かんでおいてやるか。いいんじやねーか。できるもんならやつてみればいい。せいぜい頑張れや。耐えるのは他の誰でもない、てめーだしな。ま、おれ個人としては、どーせやるならいつからやつても同じだと思ふが」

「いいやー！ けじめだ、けじめ!!」というか、そもそも前提からして間違いだ。僕だけの、男側の欲求だけで、そんなことをしていいわけがないだろう！」

至極真つ当な主張をする僕に対し、ポルナレフの奴がまたもニヤニヤという。「いやー、わっかんないぜー？ 実はいつ、まつてるんだつたりして。

無防備……それって、誘つてたんじやねーのく？」

「そ、そんなわけあるかッ！ 彼女にかぎって……」

「……花京院、おまえは女に幻想を抱きすぎだ。

女だって、すきなやつとはやりてーもんなんだぜ……」

そこへ降り注ぐ、帝王承太郎様の宣旨。

「そ、そーいう、ものなの、か……？」

「そーいうもんだ。

まあ、男とちがつて、きもちがどうの……とか女はいろいろめんどくせーがな」

其れ將に悟りの極致の如し。淡々と語る孫の姿にため息をつく祖父。

「……おまえは一体いくつなんじゃ、承太郎。さすがは、わしの孫……？」

「フン、ちようどいいから、いろいろ教えといてやる……」

こうして、『承太郎センパイ』の有難い講義が始まったのだった。

「へえー……！」

「……ほおー！」

「マジで!? すっげーッ！」

「う、嘘だ! ……そ、そうなの？」

「……おーい、花京院くーん! って、あれ? まだみんなで話してたんですか?」

「ぎくう!!」

そのまま密やかに承太郎とポルナレフと男同士の……とてもじゃあないが聞かれるわけにいかない話をしていると、いつのまにやら彼女が戻ってきたらしい。話に没頭していた僕を背後から清く明るい声が貫く。

「どうしたの? そんなにびっくりしちやって」

「ひ、仁美さん!?　ち、ちがう!　ちがうんです!」

あなたはちがうと、信じて……

いや、ちがってなくとも、いつこうにかまわんツ!

……むしろ、それはそれで……いや、そのほうが……

ああ、いったい僕はどうすれば……!

……なんて、うそだ!　ほんとうはそんなことわかりきっているツ!

あなたが望んでくれるというのなら、僕のこのちっぽけなポリシーなどツ!

すぐさま、かなぐり捨ててみせましょうツツ!!」

「え?　あ、あの……?」

ごめん、私にはわけがわからないよ……」

「はっ!　わ、わからなくて結構です!」

「?　そうなの?」

僕の怒涛の勢いに目を瞬かせ疑問符を浮かべる彼女。我に返り誤魔化しがてら訊ねる。

「そ、それはそうと、あなたこそ何事ですか?」

「ん?　えーと……」

ちらと、周囲をうかがうと、こそつと耳打ちされる。

「(……ちよつと、話したいことがあつて。あとで部屋にいつてもいい?)」

「は、はい……」

「……よかつた。じゃあ、皆さん、おやすみなさい!」

ふにやつと僕に微笑みかけたあと、皆に向けペこりと御辞儀をし鼻歌まじりで再び軽やかに階段をのぼっていく。

奴らの反応など、もはや言うまでもないだろう。忌々しい……。

「おめでとう! ……がんばれよ!」

「もうひとつ助言してやる。」

あせるな。むこうから求めてくるようにしむける。以上だ」

「卒業式に赴く、孫を見送るきもちじゃのう……」

「フアーア……(けつ、この万年発情期どもが……)」

「いいか、花京院。わたしの好きな日本の諺に、こういうのがある。

据え膳食わぬは……」

「う、うるさいうるさい! うるさいよつ! うわあー!!」

「てめーがいちばんうるせーよ……」

(……遅い)

時計を睨む。

なにをしても落ち着かない、

チクタクと、時を刻む針の音だけが部屋に響く。

「……」

頭の中に思い浮かぶは先程の、奴らの……

「ふ、ふん、ばからしい。そんなわけ……」

(そうだ。そんなわけ、ない……そんなはず、ない……だろう)

——あとで、部屋に——

(……。もしか、して……もしかしたり……?)

建前とは裏腹に、哀しいかないつのまにか明後日な方向に飛んでいた僕の意識。

それはコンコンという軽快なノックの音により引き戻された。

「こんばんはー。いるー?」

「はっ! はい」

呼吸を整えつつ、ドアを開ける。

「ごめんね。ちよつといいかな?」

「ど、どうぞ」

「おじやましませう。わあ、部屋の感じおなじだね。逆なだけ。

……つて当たり前か。ホテルつてそんなものだよね」

「そ、そうですね……」

部屋を見回しながらくるりとまわり、くすくすとわらう彼女。

そのしぐさに、表情に、否が応にも胸が高鳴つてしまう。

一体何故そんなにも、たのしそうなのだろうか……

なにを目的として彼女はここに……

そんなことをうっかり考えてしまったからか、よけいに。

(い、いかんいかん！)

どうにか平静を装いソファを勧め、自分も椅子に着席しつつ、気になって仕方がなかった本題を訊ねる。

「……で、そ、その、お話というのは……？」

ごくりと唾をのみ込む。

「ああ、うん。えつと……花京院くんと、私ね……」

そうしてゆつくりと、つややかな薄桃色の唇が紡ぎ出したのは……とんでもない一言だった。

「……合体、してみるのはどうかかって」

「!? あ a g 区 t m る p r 7 t a ……!? 」

「ど、どうしたの? 」

「な、な、な、な、な! なにをいつて……」

衝撃で椅子から半分転げ落ちそうになっている僕と対称的にあっけらかんという。

「え? いや、今日私たち、磁力で合体ロボみたいになつてたじゃない? 」

あれ、なんかいい感じじゃなかった? 無敵要塞みたいで! 」

「あ、ああ……そ、それか。そうでしたね……」

勘弁して頂きたい。そんなことをいわれたらあの素敵な感触をおもいだしてしまうではないか。

「で、思いついちゃったの! 新しい技!! ハイエロフロントと、セシリアをね……」

無邪気に嬉々として語る彼女。

「……」

僕はあらためて思い知る。

『天然』

それは自覚がないぶん、余計性質が悪い、と。

「……つていうのはどうかなくて。試してみない？」

つて、あれ？ もう今日は疲れた？ やっぱり明日にしようか？」

「……だいじょうぶ。だいじょうぶですよ……。わかつてた。

そんなこつたらうと、おもっていたさ……。はあ……」

「え?! な、なんか、怒ってる？」

「怒ってなどいないっ！ さあ、やりますよ！」

「う、うん！」

「……ふう。実戦で使えるといいなあ」

「そうですね」

「わっ！ また遅くまで、ごめん！ じゃあ、私はこれで」

一通りの実験および鍛錬が終わった後、腕時計に目を落とすとはじかれるように彼女はいつた。

（はあ……。そりゃあ、そうだよな。あいつらの戯言にまんまと踊らされるところだった……）

内心の盛大なため息とほんのすこしの安堵と共に、扉の前まで彼女を見送りにいく。

「おやすみ……。なさい」

「おやすみなさい」

「……」

しかし、そこで不思議と立ち止まる彼女。その何かをいたげな横顔に気づく。

「どうかしたんですか？」

「ん……。いや、その……」

促すと、困ったように微笑みながらぼつりとつぶやく。

「最近ずっと……いっしょにいたでしょう？」

「なんだか、べつべつの部屋に帰るの、さみしい……なあって」

「……ッ！」

「ハッ！ な、なんでもないっ！ ごめんね！ おやすみ！」

あわててドアノブに手をかける彼女。

その背中に、投げかける。

「……じゃあ、今日も、ここで……いっしょにねますか？」

「へっ!? ……も、もう！ またこどもあつか……」

「……ただし」

逃がさないとばかりに、振り返りかけた彼女の背後の壁に手をつく。

そして、あいかわらずの見当違い。

そんな彼女の言葉をささえぎり、耳元でささやいてやる。

「……へんなことなんてしない。あれは、撤回します。」

今夜は、なにもしない、なんていいませんよ？

僕になにかされても、いいなら……ね」

「え?! あ?!」

真つ赤なかおをして、懸命に言葉をしぼりだす彼女。

「う……! あ! え? な、なにかつて? なに?!」

「さあ? なんですかね……」

……そんな顔が、余計に男の嗜虐心を煽るといのがわからないのだろうか。

「……あなたがいま、考えていること、じゃあないですか?」

「つ!! かつ、花京院くんの、えっち! い、いじわるつ!!」

「そうですよ。しらなかつたんですか?」

「なっ?! ど、どうしちゃったの?!」

「どうもしていない。ありのままをいつているだけだ」

「え?! う、うそつき!

……す、すきなひとにしか、興味ないって……いった、のに……!」

今にも泣きだしそうな、彼女の瞳。

「……そうですね。たしかにそういった」

それをまつすぐにとらえ、告げる。

「でも嘘なんて……これっぽっちもついていない。僕は」

「……え、つ……？」

見開かれる、ふたつの美しい碧玉。

「……っ!? も、もう、わけわかんないっ! おやすみ!」

一瞬だけ訪れた静寂の後、ただそれだけ言い放つと僕の両腕の包囲網をくぐり抜けて部屋から飛び出ていく。

「……」

閉まる、扉。

遠ざかっていく、足音。

「……これで、なんで、わかんないんだよ……」

全身を覆う脱力感に抗うことができず、おもわずその場にしがみこむ。

「はあ……」

衝動的。すべてはそれに尽きる。

あとのことなんて、まったく考えていなかった。

彼女のあたまのなかも、僕のことではいっばいにしてやりたかった。

……ただ、それだけだったんだ。

しかし、こんなことがきっかけで、翌日あんな事件が発生しようとは……

このときの僕は、夢にも思っていなかった。

ましてや、結局すべてがおわるまで……

いや、すべてがおわっても、ついで本人の口から語られることのなかった『彼女が抱えているもの』の存在になど……

愚かな僕は、これっぽっちも気づいていなかったのだ。

核心

昼間でも、なお真つ暗な部屋。

外部から、完全に隔絶されたその空間。開かれています様を見た者がいない、堅く閉ざされた、あかすの門。来るものすべてを拒絶するかの如く、周囲を取り囲む、高く頑丈な壁。天から降り注ぐ光すら届かぬ、打ち付けられたすべての窓。

そんなある館にそびえ立つ塔の最上階。

燭台の蠟燭の炎だけがぼんやりと照らしていた。天井の隅から縦横無尽にのびる、埃にまみれた蜘蛛の巣を。きらびやかな宝石のついた壺や、剣、古代の神々を象つた像……ぎらぎらと輝く、いわくつきの秘宝たちを。

そして、そこかしこにむごたらしく、無造作にうち捨てられた女の死体……うず高く積まれた、その山を。

その首筋にはどれも、二つの穴。血の滴る、二つの穴……。

「……マライヤ、アレッシーもやられたか」

あつらえられた玉座に腰を沈める、王の風格と邪心をその身にたたえた男。その『食事』のあとだった。変わり果てた女たちの顔に一樣に浮かぶのは、恐怖でも苦悶でもな

く恍惚、それそのもの。それが逆に、この場の底の知れぬ不気味さを醸し出していた。「かまわん。わたしが新たな身体に完全になじむまで、あとすこし。そうなれば、すぐに終わる。」

……皆殺しだ。ジョースター家の一族。そしてそれに加担する、愚か者はすべて」その傍らには畏怖に覆われたぎこちない笑みを張り付けた男がもう一人。

「あ、貴男様のお力なら、できますとも！ 簡単に！」

それを鼻であざ笑うと、鋭い牙の垣間見える深紅の唇が獲物を定めるかのようにその名を羅列する。

「アヴドウル、花京院、ポルナレフ……」

一度我と会いまみえる幸運に恵まれておきながら、何故理解できぬのだろうか。

このわたしに逆らう者の末路など、唯、一つであるということをしる

熟れた葡萄酒が揺れるグラスを一気に傾ける。

「あとは犬と……」

「ど、どうされましたか？」

急に押し黙った『邪王』。男が嫌な予感を覚えた次の瞬間、不興を纏った地をほうよくな低音が彼を包む。

「ンドウールがやられたというあの小娘のスタンド、決して脅威ではないが、少々目障り

だ。

「そこで、おまえに勅命を与えてやる」

「わ、わたしに、ですか？」

「あの女、こちら側に引き入れることができればベストだが……」

「どうせ簡単には従わんだろう。逆らうようなら殺しておけ」

「……!?!」

「わたしの役に立ちたいと真に思っているならば『最低限の仕事』くらいはしてくれらるだろう？」

「さもなくば……わたしがお前を殺すぞ？」

「は、はい、DIO、様……」

「くくく、そんなに怯えなくてもいいじゃあないか。わたしとおまえの仲だろう？」

「あんな小娘ひとりどうにかするくらい、簡単な事だ。」

「そんな簡単なことで、おまえには手に入るんだ。」

「何事にも代えがたい『一生の安心』が。」

「悪くない話だとは思わないか？」

「なあ……ホルホースよ」

*

*

*

(一睡もできなかった……)

眠れるわけがなかった。一晩中、私のあたまのなかは昨夜の映像が何度もぐるぐるとかけめぐり、もう、ぐちゃぐちゃだった。

(……おとこのひと、なんだなあ)

彼は決断力も行動力もあつて男らしいひとだ。もちろんそんなことわかっているつもりだった。

でも、きっと本当は、ちつともわかっていなかったのだ、私は。

そういうふうな意味で、彼はおとこのひとだ、ということ。

(あんなかお、はじめて……)

熱く燃えるようなまなざし、こえ、体温……どきどきした。すごく。

ほんとうは、もつとみていたかった、ききたかった、ふれてほしかった。

……はなれたく、なかった。

もしも、あのまま、感情のまま、あそこにいたら……どうなっていたのだろう。

(……私、甘えすぎていたのかな)

いつも、やさしい彼。やさしすぎる、彼に。

いっしょにいられるのがうれしくて。

ただただ、うれしくて。

彼のきもちを、考えていなかったのかもしれない。

「……」

(嘘なんて、これっぽっちも、ついてない、か……)

そして、どうしても考えてしまう。彼のことばの意味を。

論理的に思考の矢印を進めていくと、ひとつの結論に達してしまう。

(……そんなわけ、ないよ)

(……そんなの、あるわけないよ)

必死に打ち消そうとするも、何度も何度も津波のように押し寄せる。

考えまいとしていたこと。

憧れて、懼れていた、こと。

しあわせと、そして……。

この血の運命^{さだめ}。

間近に迫ってくる。

その圧力に、押しつぶされそうだった。

(もういやだ。考えたくない。逃げ出したいよ……)

そんなわけにもいかない。朝になればまた彼と顔を合わせるのだ。合わせなければならぬ。

あいたいののに、あいたくない。

(このまま夜が明けなければいいのに……)

しかし、窓の外、彼方の地平線。月は私を置き去りにし、昇る太陽が私を追い詰める。

「そうだ！ ちょっとからかってみただけ。それか……」

諷めてくれたのだ。きっと。いつものように。考えなしな私のことを。

「そう、きつとそう、だよ」

(意識したらだめ。いつもどおり、ふつうに……)

(きに、しない……)

*

*

*

とうとう戻ってきた。我が街、カイロ市。

この街の何処かにいるDIOを捜し出し、そして奴を撃つ。

現在の奴の居所を突き止めるべく、陣取った宿の部屋でもう一度念写をする、と、ジョースターさん。おそらく各方面への連絡もしたのであろう。全員それが終わるまで少し待機しておいてくれ。とのこと。

支度を終え、ロビーに降りる。そこには既に仲間がほぼ揃っていた。

「おはよう。皆」

「……よお。アヴドウル」

「おはよー、アヴドウル！ ……んでさあ！」

煙草を啜え、新聞を読んでいる承太郎、

懲りずに近くにいた旅行者と思しき女性たちに声をかけているポルナレフ。

そして、珈琲を片手に窓の外を眺める、昨日戦線復帰したばかりのこの男の姿があった。

「おはようございませす、アヴドウルさん」

「やあ。花京院。目の調子はどうか？ よく眠れたかい？」

荷物を床に置きつつ、声をかける。

「ええ。ありがとうございます。……目は、問題ありません」

すると、珍しく齒に物が挟まったかのような物言いをする。

「と、いうことは眠れなかったのかい？」

「……。病院のベッドに慣れちゃった所為でしょうかね」

苦笑いを浮かべつつ、そんなことをいつて首をすくめる。その普段とは異なる消沈した様子が気になり尋ねようとしたときだった。

「……はっ！」

何かに気づいた男の視線を辿る。そこにはこれまた昨日、幾日かぶりに合流を果たした彼女の姿が見えた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

普段通り、丁寧なぺこりと朝の挨拶をする彼女。その様子が彼の一声で一転する。

「……仁美さん」

「はっ！ か、か、か、花京院くん！ おおおお、おはようっ！！」

「お、おはよう、ございます。あの、きのうは……」

「っ！ そ、それ以上いわないで！」

「い、いや、でも……」

「……やだ!! ききたくないっ!!」

「……っ！」

「あ……、ごごめ……！ あの……」

わ、私、さ、散歩してきます!! すみません！ すぐ戻りますから！」

「お、おい！」

そういつて踵を返し、外へと駆けていく彼女。

「どうした？ めずらしいな……喧嘩でもしたのか？」

「……」

本当に、めずらしいことだった。このふたりの仲睦まじさは、今さら言うまでもないことである。加えて別行動……彼の目が回復するまで、彼女が護衛をする、という、ふたりで支え合った期間を通じて、その気真面目さゆえか、晴れて恋人に、とかそういう具体的な進展はなかったにしても、その絆はより強く固いものになっているように感じた。

そもそもが思慮深く互いを想い遣る、穏やかな性格をもつふたりのこと。じゃれ合う程度の小競り合いはよく見かけたが、このように本気ですれ違っている様をみるのは初めてだった。

ポルナレフも気づいたのか、首を傾げつつ問う。

「おいおい、どうしたよ。あれ？ しかも花京院おまえ、追いかけてねーの？」

「……いや、いいんだ。

まだ、時間がかかりそうだね。じゃあ、一旦僕も部屋に戻るよ」
それだけ言い残し、立ち上がるとふらりと階上に消えていく。

「あー、おいつ！」

そんな男の背中を呆然と見送りつつ、承太郎までもがこの異常事態に目を丸くする。

「どうしやがった？ いつもだったたら、すごいスピードで……

あいつのことほっとくとか、また偽者か？」

「さあ……？」

「いや、偽者だったらまたあの娘が気づくだろう」

「それもそうだな」

「あ！もしかして昨日の夜なんかあったんだつたりしてっ!？」

はっ！ ま、まさか、あいつ無理矢理!？」

「……ねーわ。あいつがそんな真似、するわけねえだろ」

「へっ、わかってらー。冗談だよ。」

ほんと、ドーしたんだろーな……」

腕を組み思案顔の男二人。そこへ心当たりを口に出す。

「まあ、昨晚と言えば、全員であいつをからかい過ぎた感は否めないが」

「……ありや？　もしかして、間接的にオレたち、やっちゃった？」

「……かもしれん。が、知るか。あいつらの問題だろ」

冷たく言い放ちつつ、新たな煙草を一本箱から取り出し火をつける承太郎。

その、ある様子に気づいたポルナレフ。あきれたようにいう。

「承太郎……。煙草、さかさまだぜ……」

「……うーむ」

会話の感じから、昨日あれからふたりの間になんらかの事案があったことは確かだろう。

「しかたがない。ここはわたしがひとつ、あの娘の様子をみてくるかな」

腰を上げる。

「あん？　ったく、あいかわらずおせっかいが好きなの野郎だぜ！」

「ふっ、アヴドウル。そんなこといいながら、おまえ自分が気になるだけだろう？」

待っていました。そんな心の声が聞こえてくるかのようだった。

「おいおい、おまえらだって、だろう？　代表して行ってやるんだよ。わたしは」

背中にそう投げかけつつ、手を振りながらわたしはエントランスへと向かった。

外に出て久方ぶりの懐かしい街並みを眺めつつ、彼女の走り去った方向に目をやる。すると遠目に、川べりにひとり、こちらに背をむけて佇む彼女の姿を発見した。

(おお、いたいた)

まったく世話の焼ける弟子だ。まあ、ときにこうしてすれ違うのもまた青春。

なんと声をかけようか。本職の腕のみせどころだな。

……などと? 気にも考えていた。その矢先だった。

「な、なにイツ!？」

わたしは目撃することとなった。

比ベ物にならない『緊急事態』が発生する、その瞬間を。

*

*

*

ひとりになりたくて、部屋に戻ってきた。

ベッドに横たわり、天井をみつめる。

原因は雨漏りか。濃淡さまざまのくすんだ染みが、元々のデザインでは決しないであろうマール模様を創り出していた。

(昨日の『あれ』で、僕のきもちに気づかない……わけはさすがにないだろう)

自らに対する自らの評価が驚くほどに低い彼女。元々の謙虚な性格に加えて、あの過去の辛い体験が重なって、というのが根底にあるからに違いない。それ故に、他人の心の機微にはとても敏感なくせに、信じられないくらい、そういうふうな……己に向ける想いには鈍感なのだ。

そう、おもっていた。

実際、それは正しいのだと思う。

しかし、本当に、それ「だけ」なのだろうか。

「……」

周囲の部屋にはもう誰も残っていないのだろう。しんとした静けさが、我が身を包む。

(……『わけわかんない』そして『ききたくない』か)

わかってしまった……気がした。

彼女は気づいていないふりをしている……

いや、気づかない、ようにしている……

知りたく、ない……

……のかもしれない、と。

僕のきもちに。

なぜかって？

そんなの、簡単なことだ。

困るから。

迷惑だから。

彼女の想うひとは……

僕ではないから。

(……そういうこと、だよな)

もしや自分は、どこか別の惑星にでも瞬間移動してしまったのだろうか？
そんなありえない考えが浮かぶくらい、息苦しく、全身が重苦しかった。

このままベッドに、地面に、沈みこんでしまうかと思う程に。

いつそそうなれば、もうなにも考えなくてよいのか。

(そうだ。もう、考えるまい。そもそもが、間違っていた。

こんなことなどに、心を乱されている場合ではないのだから……)

「……」

それでも、目を閉じれば浮かんでしまう。

もう、自分には二度とむけられることなどないのかもしれない。

あの、花のような……。

「ハッ!？」

荒々しくドアが叩かれる音で我に返る。

「おいつ! 入るぞ！」

言うが早いか部屋に駆け込んでくる男。

「なんだよ、ポルナレフ。」

返事する前に開けるんじやあノツクの意味ないだろう……」

「うるせえ! それどころじゃねえ！」

「た、大変だ! ……あいつが！」

「な、に……?」

*

*

*

(どうしよう……かおが、みれないよ……)

彼の顔をみた途端、舌が応なしにおもいだしてしまう。浮かんでしまう。

昨日のこと……これからのこと。

(いつもどおりって、どんなのだっけ……?)

もう、どうしていいのかわからなかった。

いつのまにかホテルをとび出て、川沿いにまで来てしまったようだ。さらさらと澄んだ水が、とめどなく流れていく。

川べりに腰を下ろし、うつむいて水面をながめる。そこには情けないかおをした自分のすがたが映っていた。

(……。それにしても、なんて、態度を……)

彼に一瞬うかんだ、あの、かなしそうな……

(……最低だ、私……)

水面の自分のかおが、ゆがんで、にじむ。

「……………」

一粒の雫が、水の中のみたくもない、自分を消してくれた。

しかしそれは一瞬で、消えても、また、すぐに現れる。

まるで、こういつているかのようだった。

『逃げても無駄だ』と。

(……。そうだ。だめだ、こんなの、ありえない。

早く、戻ろ……)

「!? ……えっ!?」

しかし、立ち上がろうとした私の視界は唐突に……
一面、真っ白なものに覆われてしまった。

*

*

*

(いた！ ほ、本当に『予言』どおりだ！ しかも都合よく、独りじゃねーか)

「……わりいな、お嬢ちゃん」

「!? ……えっ……!?」

背後から気配を消して近寄り、持っていた大きな袋をかぶせる。

「えっ!? な、なにこれ!?」

ちよつと！ 誰ですか!? 出してッ！ 降ろしてーッ!!」

(へへ……これで、オレは……!)

*

*

*

袋のようなものに入れられ、車で運ばれていく私。

いつ何時攻撃されてもいいように、ガード姿勢をとっていたが、幸いそれはなかった。およそ10分くらい揺られていただろうか。どこかに下ろされる感覚がし、袋の口が開く。

「ぷはっ!」

すぐさま顔を出し袋から出ると、そこは殺風景な部屋のベッドの上。

そして、一人の、見覚えのある男が私を見下ろしていた。

「……よお。お嬢ちゃん。久しぶりだな」

「あ、貴男は!」

忘れもしない、あの、師匠を傷つけた男だった。たしか、ホルホース、といっただろうか。

「い、ここは!」

「ここはオレの隠れ家さ。誰にもみつかりはしねえ。絶対にな」

「ど、どうして私を?」

「DIOの命令でな。ジョースターたちを殺るにはちとあんたが邪魔なんだとさ」

「!?!」

予想通りの解答ではあったものの、こころもはつきりと宣言されると一瞬たじろいでしまう。

「で、だ。お嬢ちゃん。聞いてやって言われたんでな。一応聞くぜ。

あんたもDIOの、配下になら……」

「御断りします」

「……はええよ。長いものに巻かれるのが人生成功の秘訣だぜ？

ちつとは考えてみりゃあいいのによ……」

「そうなんですか？ だったら私、失敗人生でいいです」

「けっ！ まあ、わかりきってたことだけだよ。じゃあ、こうも言われている。

従わなければ、殺しておけ、ってな」

銃。スタンドのそれを出現させ、こちらへと向ける。

「……そうですか。

でもまだ、私はこんなところで、むぎむぎ殺されるわけにはいかない」

「おいおい！ そんなこええ顔すんなよ。可愛い顔が台無しだぜ？

話は最後まで聞きなつて。オレはお嬢ちゃんと敵対する気なんぞ、これっぽっちも

ねーんだ。

前にも言ったが、オレは女を傷つけない主義なんだよ」

「……貴方にはなくとも、必要ならば、私は闘います」

一刻も早く、ここから脱出する。その算段を立てるべく、頭をフル回転させる。

相手の動向を警戒しつつも、周囲を観察する。部屋には、開け放たれた窓がひとつ。しかし、それは御丁寧に鉄格子で覆われていて、とてもではないが人が通れるとは思えなかった。そして、扉が、ひとつ。この人がここにいるということは、まだ鍵はかかっていないのかもしれない。

(とりあえず、隙をみて逃げるふりするかな。)

そのまま逃げられたらそれでいいし、撃つてきたら……)

あのスタンダード銃。弾丸の軌道が変わる、と聞いた。

(なら、対応は……)

「……」

そんな話もしたな、と、ふと思う。

そのかおをうかべると同時に先刻を思い出してしまい、胸の辺りをずきりと痛みが走る。

また心配をかけてしまっているだろうか。いや、さすがに、今度ばかりは愛想をつかされているかもしれない。当然だ、あんな……

(……いけない)

そんなことを考えるのはこの局面を切り抜けてからだ。にじんできた何かを必死に振りはらう。

「はは、威勢がいいな。お嬢ちゃんが闘う？ 一人で？」

さ、笑えねえ冗談はそこまでしておきな。

「ここでやつらの闘いが終わるまで、しばらくおとなしくしていってもらうぜ」

「……」

「なに、たかだか3、4日だ。

お嬢ちゃん、こりやおまえさんのためでもあるんだぜ？」

いいことを教えてやる。ジョースターたち、ありやあ、ぜつたいに勝てねえ。

DIOの野郎、あいつは化け物だ。誰も勝てるやつなんていねえ。皆死ぬぜ」

相変わらず、癪に障る物言いをする人だ、と思った。しかし、それはおそらく、敢え

て。わざと、だ。すなわち『挑発』。彼のきびしくもやさしい、あの忠告をおもいだす。

そんなものに乗って冷静さを失うわけにはいかない。必死に乱されそうになった呼吸

と気持ちを整える。

すると、会話の端から、あることに気づく。

（ん……？ この人もしかして、DIOの能力を知っている？）

自らが軽率な行動をとったが為に敵にみすみす捕まってしまうなど、皆に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。だからこそ、このせつかくの状況。せめて情報くらい何か持ち帰れないものだろうか。

「ここは、館の中なんですか？ D I Oは近くに？」

とぼけたふりをして、聞いてみる。

「おいおい。さつき、オレの隠れ家っていったらどう？」

残念ながら館はまったく逆。「反対方向さ」

「そうなんですか。では会えないんですね。」

私はD I Oを実際に見たことがない。だから想像がつかない。

一体どんな、『化け物』、なんですか？」

私の質問を受けて、答えが返ってくる。

「……ちがうんだ」

「は？」

「スピードが、とか、パワーが、とかそんなもんじゃねえ……」

おもわず聞き返してしまうような、今までとは打って変わった消え入りそうな弱々しい声音で。

「そうだ。……『次元』が、違う。」

上手く言えねえが、そんな感じを、肌に受けた……」

常に不遜な態度を崩さなかった、その顔に明らかに怯えの色が見えた。

「そ、そんな。お、大げさじゃあないですか？」

「……気づかなかったんだ。オレは。ちっとも」

「え？」

「オレは確かに隙だらけの奴の後頭部に銃口を向けていた。

だが、次の瞬間、奴はオレの後ろに立っていた。

しかも、そこらかしこに張り巡らされた蜘蛛の巣を一つの糸も壊さずに、だぜ？」

「な!?!」

「奴の能力がなんなのか、なんて見当もつかねえ。

……が、そのときにこれだけはわかった。痛感した」

それが、全てを物語っているようだった。

「完敗だ。こいつには逆らっちゃあなんねえ。絶対に、つてな」

啞然としていて、すぐに取り繕うかのように饒舌になる。

「はん！ ジョースター家のやつら、本当に運のねえことだぜ

一族の因縁だか何だか知らねーが、あんな最低最悪の野郎に先祖代々付け狙われるなんてよ。

偉大なるひいおじい様？ だっけか？ 殺されて身体まで乗っ取られたんだってな。

勝てるわけがないんだから、せめてこそこそ隠れてりやいいのによ。

真っ向、むかつていくなんぞ、頭悪いんじやあねーのか？」

「…………ぐ…………っ！」

奥歯を噛みしめる。こらえろ。そう必死に理性が本能を抑えつける。残りの連中はもつと、だがな。

少し考えりやあわかるだろうによ。どっちについた方がいいかなんて。

ポルナレフ、アウドウル、花京院……そろいもそろって、馬鹿ばかりだ。

プライド？ 笑わせるぜ。たいした力もないくせにイキがりやがって。

まあ、近い将来この世とおさらばする瞬間に後悔するだろうぜ。己の浅はかさってやつをな」

「…………っ！ ……そんなこと、あるわけがない！」

みんなは、まけないッ！ 決してッ！！」

が、それも長くは続かなかった。限界だった。

気がついたら、叫んでいた。

「お嬢ちゃんもだ。もう、やめとけよ。

アンタこそ、そもそも、そこまでして闘う理由なんてないだろう？

今なら間に合う。賢く生きなよ。その方が楽だぜ」

息巻く私に向けられる……すぐにわかった。同情を装った、その実、街角に打ち捨てられた塵でも見るような熱の無い冷やかな視線。

「これも前に言ったが、もう一度いう。

お嬢ちゃん、オレと組もうぜ。オレのものに……なりなよ」

飾りだけの言葉に便乗して、男はその手をこちらへ伸ばしてくる。

「！ 嫌!!」

それをセシリアではじきとばす。

「うげっ！」

「……触らないでください」

「いつてえ！ フン、いつまでそうして強がつていられるかね」

（……今だ！ あの扉から、逃げる!!）

しかし、足を踏み出そうとした瞬間、制される。

「……おっと！ 動くなよ。動けば撃つぜ？」

あんたを、じゃあねえ。あのタンクローリーを、だ」

窓から眼下に見える、鉄格子越し、雑踏の中、圧倒的な存在感を示しながら佇むそれを銃で指す。

「どうなるか、なんて、わかるよな？」

あたりは火の海。まわりの人間、皆死ぬぜ？」

「……。どうぞで」

「は？」

「撃つていいですよ」

「な?! 正気か？」

「はい。……どうぞ」

私の反応が予想外だったのだろう。しびれを切らし、いらついた調子でいう。

「お嬢ちゃん……オレをなめんなよ。本当にやるぜ？」

「だから、撃てばいいと言っているでしょう？」

「後悔すんなよ？」

あーあ、かんけない善良な一般市民の方々が、優しい優しい嬢ちゃんのせいであ。

気の毒に。ま、あんたをびびらしとくのも、わるかねえか」

男が引き金に指をかける。

(……セシリア! 御願い!!)

「……おら! ……っ!? なにイツ!? 」

そのタイミングを見計らい相棒を勢いよく銃口に飛び込ませる。

「うあっ!! 」

発砲されるはずであった行き場を失った弾は、銃の暴発を招きはじけ飛ぶ。

巻き起こる小規模な、爆発。

(……『軌道が変わるなら、変化前にたたけばいい』)

これも野球の、変化球打ちのセオリー、だったよね。花京院くん……)

——野球じゃあ、投げる前に投手ごと打つのは反則ですけどね。いうまでもないけれど——

……そんなこえが、きこえてきてくれたらいいのに。

「ぐわあッ!!」

(今度こそ!)

すぐさま扉に駆け寄り、ノブをひねる。

「なっ!?!」

しかし、それは開くことはなかった。外側から施錠されてしまっているのか、押しても、ひいても。セシリアをぶつけてみても、パワー不足かびくともしない。

「あ、開かない!?!」

「……残念だったな。その扉は開かねえよ。手順があつてな」

モタモタしている間に、男が立ち上がってきてしまう。

「くっ!?!」

「ちっ、やりやがったな。もう、容赦しねえ。」

これを……見な」

鬼のような形相で男が取り出したのはライターと香炉のようなものだった。「今から、これに、火を点す。」

中には特別な香油が入っていてな。その煙を吸えば、あつというまだ。日本でぬくぬくと育ったお嬢ちゃんでも、聞いたことくらいあるだろう？

まあいわゆる、媚薬……催淫剤……そういうやつだ」

「……なっ!？」

おぞましいこと極まりないその薬を私に見せつけるように掲げる。

「正常な判断なんてもうできやしねえ。理性なんざ、雲の彼方にすつとぶ。」

すべてが、どうでもよくなつて……残るのは、快樂だけだ。

そのうえ、即効性、常習性はお墨付き。アンタはこの薬とオレの、虜になるのさ。

もう、離れられないぜ……」

淡々と語る、ざらざらと耳障りな男の言葉が流れてくる。

背中に寒いものが走る。嫌な動悸がする。

「しかたねえよな。あんたの『能力』が、オレはどうしても欲しい。」

それさえあれば、オレは、ずつと『安心』して、生きていられるんだ……」

遠くを眺める狂気に囚われた濁った瞳。

「オレだって本当はこーいというのは趣味じゃねえ。

だからさ、おとなしく従えよ。

そしたら薬なんかなくなつて、十分イイ思ひさせてやるからよ。

せつかくだから、ゆつくりここでオレと楽しもうぜ？ ……なあ？」

にたにたと下卑た薄笑いを浮かべる男。

「……嫌です！ 寄らないで！ 嫌だ……ぜつたいに、嫌！」

「……いいじゃねーか。優しいぜ、俺は」

「触るなどいつているでしょう！」

再び、今度は男の身体ごとセシリアで思い切り弾き飛ばす。すると舌打ちとともに思
いも寄らぬ質問が飛んでくる。

「ちっ！ つーか、なんでそこまで頑なかね？」

どこぞに想う男でもいるのかい？

ああ、もしかして、あの連中の中に行たりなんて……」

「……!!」

「……凶星かよ」

「……。そのとおり、です」

大きく息を吸って、吐き出す。

「私の、ここにいるのは……たったひとり……！
彼以外の男の人になって、ふれられたくない……」

「……それくらいなら……死んだ方が、ましだ!!」

唯一絶対の、その存在をつよく心に抱きながら。

「……そうか。じゃあ残念だが、力づく、だな」

「嫌！ 近寄るなど……え……？」

発された不穏で冷酷な言葉を負けじとはねつけようとしたときだった。
突如自らの身体に訪れた異変に気づく。

「……あ、れ……？」

（う、そ……）

急激に下がった目線に、自分が床に崩れ落ちたのだとどうにか理解した。

手足の感覚が、薄れてゆく。力が入らない。

まるで他人のものかのように。

「やれやれ、ようやく効いてきたみてーだな」

「……………え？」

「こつちは時間稼ぎのフェイクだよ。」

そんな便利な薬なんざもつちやあいねーが、袋の中にじわじわ効いてくる痺れ薬を少し、な。

保険かけといて、よかつたぜ」

戸惑っている私をよ所に例の香炉をあつさり投げ捨てる。無機質な金属音が辺りに響く。

「身体を自由を奪いつつも、感覚の方は残る。効果は半日つてとこだ。ちようどいい薬だろう？」

「アンタみたいな純情可憐なお嬢ちゃんに、いろいろ教えてやるにはな……………」

ギラギラした悪意。迫り来るそれをこんなにも身近に感じたのは初めてかもしれない。かかった。

「スタンドで抵抗しようつたつて無駄だぜ。いつまで続けていられるだろうな？」

知ってるぜ。そんなに『持続性』は高くなかったはずだよなあ？

諦めなよ。オレはしつこいぜ……………」

「ぐっ……………」

嫌悪感でいっぱいになり、涙と吐き気がこみあげてくる。

(きもちわるい、きもちわるい、きもちわるい、きもちわるい、きもちわるい……!!)
「へっ、そんなに怯えるなよ。傷つくねえ。」

ま、終わる頃には気も変わる」

一歩一歩、こちらへとにじり寄ってくる、男。

「……さ、お楽しみの、始まりだ」

(……い、や……!! たすけて……!! か……)

この場にいるはずのない、くるはずのない、彼のことを、思う。

その刹那だった。

「……エメラルド・スプラーツシュ!!」

「ぐげー!!」

「え……?」

激しい勢いで突然開いた扉。

そのむこうには、私のところから、とびでてきたかのように……
彼が、いた。

*

*

*

御膳立ては全て整った。

捕らえたお嬢ちゃんを追い詰め、ようやくだと舌なめずりをした瞬間だった。

開くはずのない扉が開け放たれ、その先にいたのは決しているはずのない男だった。

「え……………？ あ……………？ か、かきよういんくん……………？」

「なッ！ な、なんでここに、おまえが……………!?!」

「……………黙れ。一生寝ていろ」

静かながら焼き尽くされるかのような怒りに満ちた言葉と視線と共に、至近距離から緑色の集中豪雨を浴びせかけられる。

「ぐふああっ！」

（ち、ちくしよう……………ちくしよう！）

なぜだ!? なぜ……………？ こいつがここに!?

……………あと少しで！ そんな……………こんな、はずじゃあ……………!）

完全に油断していた。全身に激痛が走り、薄れていく意識。その胸中は疑問、焦燥、狼狽、悔恨、苛立ち、憤怒……………あらゆる負の感情が混じり合ったもので満ちていた。

（……………そうか。……………おまえ……………が、か……………よ……………）

しかし不思議なことに、どこか妙にこの不測の事態に納得している自分がいた。
花京院典明。

そうだ。この男だ。

思い出す。インド、カルカッタでの出来事を。

あのときも思った。

こいつはそうだ。……そうだった。

(けっ、お嬢ちゃん……)

アンタ、なかなか……お目がたけえじゃあねえか……)

「……やり、おる……、ねえ……」

*

*

*

病院で、ぼくを助けてくれた、不思議なコロツケパンのお姉さん。

まさか、と思った。

DIO様の、敵。

そんなの、ちつとも、しらなかつたんだ。

だって、あのときには、いなかった……。
につくき承太郎たち。やつらの仲間だったなんて。

あいつ……ホルホースにつれてこられて、ぼくのスタンド、トト神の予言の書を見せた。

大きな袋をもって川に行けば、お姉さんを簡単に捕まえることができる……そんな予言。

(やつらは、オインゴおにちゃんのカタキなんだ！ しかた、ないんだ……)

——「ほ、ホルホース……さん……、

お、おお、お姉さんを捕まえてどうする気ですか？

ひ、ひどいことは……」

「ああ？ ガキはそんなのしらなくていい。大人の時間だからな。

てめーも邪魔すんじゃないぞ。へへ……」——

「……」

いいからどこかへ行っている。そう言われて……

重苦しい気分を抱えたまま、町の片隅で箱の中に隠れてじっとしていた。

そんなときだった。

通りの向こうから、あわただしい様子の集団がやってくるのに気づく。

「くそ、どこだ!？」

「だめだ、闇雲に探しても……。一度落ち着……」

(ハッ! あ、あいつらは!)

忘れるはずもない顔。お兄ちゃんをひどいめにあわせた敵。承太郎に、ポルナレフに

……

しかし、その中に、一人だけ、それとは別の理由でしつている顔があることに気づく。

(あ、あ、あのひとはッ……!)

お兄さんだ。あの、緑色の服の。

あのあと、病院で、みかけた。

お兄さんと、お姉さん、いっしょで。

とてもたのしそうに、わらっていた。

ふたりは、きつと……。

ぼくにでもすぐにわかった。

だって、本の中の恋人同士が飛び出てきたのかと思うくらいだったから。

「……落ち着いてなどいられるか!」

こうしている間にも、彼女が……!」

「……あ……」

お兄さんの、くるしそうな、かお……。

胸の辺りが、ずきずきと痛くなる。

——だいじなものとられたら、もつともつといたいですよ? ——

お姉さんのことばが、あたまのなかに、ひびく。

——自信、もってください——

「……」

がたがたと震える足を、一歩だけ、まえに踏み出す。

「……お、おお、お兄さんツ!!」

「……? 君は……?」

*

*

*

(どうして、あんな……! なにを、つまらないことを!)

(彼女がだれを想っていようが、そんなの、どうでもいい! 関係ない!

いいじゃあないか、それでも……)

(……僕は……だれよりも……!!)

「ちくしょう、無事で、いてくれ!!」

(それだけでいいんだ! それだけで、いいから……!!)

アヴドウルさんが目撃してくれた……彼女が連れ去られたという方向だけを頼りに街を駆け回るも、居所なんて見当もつかない。焦りで余計に頭が回らなくなっていた。

「くそ、どこだ!」

「だめだ、闇雲に探しても……。一度落ち着……」

「……落ち着いてなどいられるか! こうしている間にも、彼女が……!」

そうだ、この瞬間にも……

そんなふう想像するだけで頭がどうにかなりそうだった。

おぞましいそれを必死に振り払おうとかぶりを振る僕におずおずとかけられる声。

「……お、おお、お兄さんツ!!」

「……? 君は……?」

見たことのない、少年だった。

そう。『見た』ことは……。

なにかがひっかかった。

そんな僕に、少年は続けた。

「お、お、お姉さんの居場所を、僕は知っています！ 教えるのです！」
「な、なんだつてえッ!?」

衝撃的なことを言い出した彼を、ポルナレフと承太郎が囲む。

「あーん? ガキンチョ、おめー。知ってるつて……もしやDIOの!?
けっ! そんなうめえ話信じられつかよ!

もうオレは女でも子どもでも騙されてやんねーからな!!」

「その本……てめー、スタンド使いだな。」

ノコノコ出てきやがるとはいい度胸だ。殴られてえみたいだな……」

「ひいひいっ! ほ、ほ、ほくを殴るなら、あとでいくらでも殴ればいいのです!

で、でも今は、は、はやく行ってあげてほしいのです!

お姉さんが、あ、あぶないのです!」

「……」

「おねがいです! ……し、信じて!!」

「……わかった。案内してくれ! 早く!!」

「は、ははは、はいーっ!!」

「あ、あそこなのです! あの、黒い屋根の……!」

「……あそこだな！ よし!!」

　　急ぎハイエロファントの触手を伸ばし窓から彼女の姿を確認した瞬間から、あまり記憶がない。

　　気がついたら僕自身も突入していた。

　　どうして彼を信じる気になったのか。

　　藁にもすがる、それもあつた……が。どこかで聞き覚えのある声……というか特徴的な口調だと思つた。

　　そして、ようやく思い出した。

　　病院で彼女が助けた、あの虐められていた少年、だ。

　　まさか、スタンド使い、しかも敵方の、だったとは。

　　情けは人の為ならず。それをこれほど実感したのは初めてだ。

　　間一髪。

　　ハイエロファントを通じてとらえた会話。

　　ここにたどり着くのがもう少し遅かったならば……

　　……考えたくもない。吐きそうさだ。

「仁美さん！ だいじょうぶですか?!」

「う、うん。だいじょうぶ……。」

ちよつと、薬でしびれている、だけ、だから……。」

へたり込んでしまっている彼女。急ぎ駆け寄り様子をうかがう。

笑顔を無理矢理作りながらも、その顔色は真っ青だ。そして、小刻みに震えている。

(……ああ……)

薬のせい……それだけな、わけがない。

(いったい、どれだけの……)

つよく抱きしめたい。そんな衝動がこみあげてくる。

(……っ！ だめだ！)

が、しかし、思い出す。

彼女のつよいことばを……意思を。

これも、さつき聞こえてしまった、あの……

——私の……こころにいるのは……たったひとり……——

(……そうだよな。)

なのに、何度も、僕は……。

もう……ゆるされない、よな……（

拳を握りしめ自分を抑えていると、うつむいたままぽつりと、彼女が零す。

「……だけど……」

かおをあげ、僕をじつとみる。

その瞳が徐々にうるんでくるのがわかった。

「……っ！」

それがあふれこぼれると同時だった。僕の胸に、ためらいがちに飛び込んでくる。

「……え？ あ……!？」

「……こわ、かった……こわかったよ……」

「仁美さ、ん……?」

（……ゆるして、くれるのか……?）

僕は、あなたに……ふれても、いいのか……?）

震える腕をまわし、おそるおそる、彼女を包み込む。

「……もう、だいじょうぶ。だいじょうぶだから」

「う、ん。うん……!」

そつと。壊してしまわないように、だいじに。

「つく、こわかったよ……」

ぜったい、いや、で……

なんかいでもはねとぼすって、きめ……

でも、もう、だめなのかなって、やっぱり、ちよつと、おもっ……

そしたら……

どうして？ ……いつも……

たすけてつておもったら、ほんとに……

……私、あんなに……

あなたに……さつき嫌な、こと……。

ごめんね……」

ことばにならないことばが、彼女の口から次々とあふれてくる。

「……もう、いいから。」

僕こそ昨日は……ごめん。

無事で、よかった」

抱きしめる力をつよくする。

「あなたになにかあつたら、僕は……！」

なみだでぐしやぐしやのかおをあげ、また僕をじつとみる彼女。

吸い込まれそうなその瞳から目がはなせなかった。

「……花京院くん……」

「……仁美さん……」

「……す」

次のことばを僕が発そうとした、まさにその瞬間、ドアが開いた。

「花京院！ いたか!？」

「あいつは？ 無事か!？」

「はええよ、おまえ……」

「あ、ホルホース！ またこいつか！

うお、ボコボコじゃねーか。白目むいて泡ふいてる……。今度こそ再起不能だな」

「グウウ……（チツ、またいちやついてやがる。後輩のくせに生意気な……）」

次々となだれ込んでくる仲間たち。

「……あつ！」

「あつ……!？」

「やー！ スマンスマン。じゃ、どうぞ続きを……」

そういつて、後ずさっていくみんな。

扉が閉まり、取り残される、僕らふたり……。

「……」

「……」

(続き……つて……できるか!!)

「……も、もどりましたようか」

「う、うん」

「あ、そ、そうか。歩けない、ですよね？」

あの……、し、失礼します」

いつかのように、彼女を横抱きに抱え上げる。

「ご、ごめ、ん……」

遠慮がちに体重をあげける彼女。

あたたかい、心地よい重みを感じる。

「花京院くん……」

ようやく実感した安堵。それを噛みしめながら歩きだそうとしたところで、そつと、名まえをささやかれる。

「……ん？　なんですか？」

訊ねると、こういって彼女はすこしはずかしそうに……でも、僕にくれた。

「……たすけてくれて、ありがとう」

花のような、満面の笑みを。

(……ああ、そうだ。そうだった。僕は……)

おもいだす。

いつか、あの船の上、おもったことを。

好きとか、恋とか、いったいなにか。そんな定義など、わからなかった。

でも、いつともう、どうでもいいんだ。そんなこと、と。

「どう、したの？」

「……いいえ。さ、いきますよ」

「……うん」

……ただ、あなたがわらってくれるなら、僕は……

それで、それだけで……。

*

*

*

(……)

あたたかい、彼の腕の中で、おもう。

(……ほんと、ほか、だな。私)

なにをうろたえていたのだろう。

こんなにも、この心にははつきりとしたこたえがあつたのに。

(……もう、懼れたり、しない)

やるべき、こと。

なによりたいせつな、もの。

つらぬきたい、想い。

……私の、すべてをかけて。

The GAMBLER (前)

彼女を連れて部屋から出ると、そこには仲間たちが僕らを待つてくれている。

「あ、出てきた」

「……はやかっとな」

「おうおう、また大事そうに抱えちやつて」

「またも一様にニヤニヤした顔で。いいかげんこれにも慣れてきた。もういい。事実だ。かまわん。そんな気持ちで受け流す。」

「ち、ちが……わ、たし、くす、りで、まふいし……」

「しかし、そういうしているうちに麻痺は彼女の全身にかなり広がってしまったているよ。舌ももはや回っていない。」

「ああ、あなたは喋らなくて大丈夫ですから。無事ではいてくれたのですが、このとおりどうやら痺れ薬らしきものをかがされてしまったようで……」

「そ、そうなのか……」

「というわけなので、このひと、休ませてきていいですか？」

「ああ、もちろんじゃ」

「皆は館の搜索を開始していただきます」

「ごめ、……さ……、……あ……」

「ん？」

「……やか、……こ、じゃ……ぎや……」

必死に言葉を振り絞っている様子に気づく。何かを伝えようとしているようだ。

「……え？」

「は？」

「なんだ？」

「……館？ 逆？」

もしかして、あいつがそう言っていたんですか？」

「……ん……」

僕の問いかけに、どうにか少しだけ首を縦に動かす彼女。

「花京院おまえ、すげーな……」

「なんでわかんだよ、こいつ……」

「そりゃあ……決まっているだろう。例のちからだ」

「逆、か。起点がはつきりしませんか……ホテルか？ だとしたら、もつとD I Oの館は南にあるのかもしれない。ホテルをはさんでこちらは北側ですし」

「おお！なるほど。参考にさせてもらおうよ」

そういつてジョースターさんはニカツと微笑み、彼女に語りかける。

「保乃。恐かつたろうに、よく聞きだしてくれた。がんばったな。」

無事でよかつた。なにも心配しなくていいから、君はゆつくり休んでおいで」

「……、い……」

張り詰めていた彼女の表情がわずかに緩む。

「ではとりあえずホテルまで皆で戻ろう」

「はい」

彼女の部屋に到着し、ベッドの上にそつとその身体を下ろす。

「眠つたか？」

「ええ。動けないだけかもしれませんが、おそらく」

「花京院、おまえはこの娘のそばに……つて、言うまでもないか」

「……すみません」

「いや、頼むよ」

「はい、そちらも気をつけて」

「うむ」

閉まりゆく扉とともに、ジョースターさんを見送る。

ふたりきり。おもわず漏れ出るため息とともに、彼女のおおをじつとみつめる。

「はあ……。ほんとうに、もう……」

「……」

臆気に、だが、確かにずっとこの心に存在していた、『矛盾』。それがかたちとなって膨らんで僕のあたまを占めていく。そんな感覚がした。

(……。僕は……)

*

*

*

「わしらはこの写真の建物を探している。どこか知らんかね？」

花京院たちをホテルに残した後、わしらは早速DIOの館の搜索を開始した。

カイロ。この街の人口は600万人、建物だけでも200〜300万戸あると言われる。その中から写真だけを頼りに館を探し当てなければならぬのだ。この写真は念写した現在DIOがいる館だ。DIOはアジトを変え財団の調査から行方をくらませてしまったらしい。まさに『蘆山の中から針を探す』。途方もない不可能な話に思

えてくる。しかし、やらないわけにはいかないのだ。

財団から、緊急の連絡が入った。娘ホリイの体調が、いよいよ芳しくないらしい。もって4、5日……時間が無い。

写真を片手に、街を歩きまわる。しかし、なかなか成果は得られず空振りばかりであつた。

「またハズレ……か」

「しかし、必ずどこかにいるはずだ。この建物に関しての情報を持つ人物が……」
全員、頷く。

「行くぞ。聞き込みを……続けよう」

*

*

*

「わしらはその写真の建物を探している……どこか知らんかね？」

オレたちはくたくただった。

ジョースターさんのこの台詞も、もう何度目だろうか。太陽はすでに西に傾きかけており、オレのナイスな髪型がさらに長い影となつて伸びていた。

結局今日は一日ずっと写真の建物を探していた。にもかかわらず、屋根の修繕をして

いた大工の親父から（保乃がインチキカウボーイから得た情報通り）確かにこの屋根の感じから、写真の建物はカイロの南の方にある……と、有力な情報と言えばそれくらいのものであった。探し物の難しさを改めて知る。

「外国のお客人……ここはカフェですぜ？　なんか注文してくださいよ」

巡り巡ってたどり着いた砂漠の中の一軒のカフェバー。ジョースターさんの出会い頭の質問にバーテンダーが顔をしかめる。

「それもそうだな……アイステイーを4つ」

「あいよ」

オーダーの通り並べられる琥珀色の液体で満たされたグラス。今度はこちらの番とばかりに期待に満ちた視線がバーテンダーに集中する。

「……やっぱり知りませんや。」

またハズレだ。商売上手と褒めるべきか。無言で男四人、一気に紅茶を飲み干す。喉を潤す効果はあったが疲労感はずばかりであった。

しかし、その直後、肩を落とすオレたちの耳に朗報が届く。

「……その建物なら、知っていますよ。間違いない、あの建物だ」

「えっ!?!」

声のした方向を一斉に見やる。

そのテーブルには一人の男が座っていた。カジノのディーラー、そんな風体の男が。外見の表す通りトランプを手に取ると、その腕を誇示するかのようにそれをシャツフルし鮮やかな手つきで並べてみせた。

「き、君か……!?! 今、『知っている』と、聞こえたがッ!」

「はい。確かに。知っているといいました」

「なんだと……!」

「そいつはありがたい!」

「よっしや、オレたちラツキーだぜ!」

「ど、どこだ!? 教えてくれっ!!」

ざわめくオレたちを尻目に、カードを再び弄びつつ、男は言う。

「タダで……教えろと?」

「……!」

（なんだよ、コイツ……）

その物言いに、癪にさわるものを感じる。

「それもそうだな……」

自分とは異なり、さほどそれを気にしたふうでもなく、ジョースターさんが10ポンド紙幣を差し出す。すると何処からか一枚のカード……スペードのエース……を取り

出す男。

「貴方は……賭け事が好きですか？」

「……は？」

「わたしは大好きでね……スリルに目がなく、病みつきってやつでして」

「……なにをいいたい？」

「だからね、わたしとちよつとしたつまらない賭けをしてくれませんか？」

貴方が勝つたら、タダで教えますよ。館の場所をね……」

「賭け？ 賭けなら自信あるが、急いでいてね。わしらにはそんな時間は……」

「若い頃からわしは……」そんな武勇伝を道中彼から何度も聞いたことがあったが、流石に勿論それどころではない。意外な提案に目を丸くしながらもジョースターさんが断りの文句を口にしかけると、男は大袈裟なりアクションを伴いつつ、反論する。

「おや？ 賭けなんてもんは何でもできるんですよ。時間などかけずとも。」

たとえば……あその扉の上を見てください」

指し示す先には、一匹の猫がいた。それに向け男は卓上にあつた肉の燻製を二つほど取り放り投げる。

「さあ、今から、あの猫はどっちの肉を先に食うか、賭けませんか？」

右か、左か……！ どうです？ つまんないけど、スリルあるでしょう？」

(……ああん?)

とうとう我慢しきれなくなり、おもわず会話に割って入る。

「おい! めんどくせえ野郎だぜ! さっさと金受け取って教えろよッ!」

「……ポルナレフ! 教えてもらうのに、そんな口をきくんじゃあない!」

ジョースターさんの制止を振り切り、叫ぶ。

「OK! オレが賭けてやるよ! 右の肉だ! 右イ!!」

「……グッド……! じゃあ、わたしは左に賭けましょう……」

(ふふ……気づいてねえのか、この野郎。

右の肉の方がわずかにデカイ。オレがああのニヤンコなら迷わず右を選ぶね。

オレの勝ちだ! つと、そういやあ……)

感情の赴くまま、まさに勢いで奴の興に乗ってしまったが、あくまでこれを『賭け事』
というのならば自分は肝心な条件を確認していないことに気づく。

「ところで、オレが負けたら何を払うのかね? 100ポンドぐらいかよ?」

「金は要りません。魂なんてどうです? 魂で……フフフ……」

(けつ、フザケやがって。キザな野郎だ。早く終わらせて立ち去りたいぜ)

「猫が燻製に気づいたようですよ。ククク……。さあ……」

「Open the Game……!」

*

*

*

「……はっ!」

「あっ! 目が覚めましたか」

重い瞼を持ち上げる。私の目に映ったのは、窓辺の椅子から立ち上がりこちらへ駆け寄る、満面に心配顔を浮かべた彼のすがただった。

(ああ、そうか。私……)

霧がかかったように朦朧とする頭の中、すぐに状況を理解する。大間抜けにも敵にまんまと一服盛られて行動不能になってしまった私はホテルの自分の部屋に担ぎ込まれたのであろう。

「花京院くん……」

すぐさま込み上げてきたものをぐつとのみこみ、どうにかひとことだけ、伝える。

「……ありがとう」

「……」

彼もなにもいわず微笑を浮かべ、ただ首を横に振る。

なにもかも見透かされてしまいそうな、透きとおるようなまなざし。悟られないようにその向こうにある一晚中睨んでいたのと同じはずの天井を昨夜とは全く異なる気持ちでみやる。

「痺れはどうですか？」

「えつと……」

訊ねられ、ゆつくりと自らの全身の動きを確認する。抹消を中心に、部分的に触れるとまだもやつとした違和感があったり、びりびりと長時間正座をしたあのような感覚を受ける箇所もあるが、大勢は問題なさそうだ。

「うん。まだ少し手足とか変だけど……でも大丈夫。動くし」

ありのままを口にしつつ起き上がろうとするも彼に止められる。

「ああ、まだ寝ていていいですから。……気分は？」

「それは全然、なんともないよ。平気」

「そうですか……よかったです」

そこでようやく遅まきながら重要なことに気づき、青ざめる。

「……あつ！ い、今何時!？」

「ええと、もうすぐ15時、ですね」

「え？ もう!？」

腕時計に目を落とす彼。確かに窓の外から差し込む日光は茜色を帯びていた。

「ご、ごめん！ 私動けないからって、いつのまにか眠っちゃった……みたい」

「ああ、それは仕方がないですよ。薬に傾眠作用も含まれていたのかもしれないですし」

「みんなはもう館を捜しているんだよね？ はやく私たちも！」

「そうだ。私はともかく、彼はこんなところにてはいけません。『みつける』……それはこのひとの得意分野だ。皆きつと待っているだろう。加えて、実は漠然と胸に不安めいたざわめくものを感じていた。浅い眠りの中、みてしまったそのせいかもしれないが。」

「は？ だめですよ。あなたはもう少し休まないと」

しかし、案の定というのも何だがびしやりと却下されてしまう。

「もう十分休ませてもらったよ。だいじょうぶだって。ほら。セシリアに誰かを探してもらって、その後についていく方が早いじゃない。ねっ！」

「しかし……」

しぶい顔で難色を示す彼。いまいち押しが足りないらしい。しかたがないので、とっておきの説得材料を繰り出すことにする。

「それに……なんか嫌な予感がするんだよね。さつきやたらとリアルで変な夢見ちゃって……」

「へえ。どんな？」

「……笑わない？」

「笑いませんよ。……たぶん」

「ポルナレフさんとジョースターさんがコインチョコレートになっちゃって、猫にペろつと食べられちゃう夢」

「ぶっ!!」

「う、嘘つき! やっぱり笑った……」

「ちゃんと『たぶん』と僕はいったはずですよ。うーむ、たしかにそれは……奇妙な夢だ」
「でしよう? よし! というわけで、早く行こう、さあ行こう。いざ出発!!」

「あ! ちよつと! ……まあ、ひとりここに置いとくよりはいいか。無理しないでくださいよ、ほんとに……」

しぶしぶだがどうか無理矢理同行許可を得た私。彼の気が変わらぬうちに……とひらりとベッドから飛び降り廊下に出て、階段をリズミカルに駆け降りると勢いそのままホテルを出る。

「みんなは今どのあたりにいるのかな?」

「おそらく、南。あなたをみつけた場所と逆の方角に……で、よかったですか?」

「あ、そ、そうなの！ ……たぶん。あの人が『館はまったく逆。反対方向』だつて言つてた。どこからかがわからなかつたんだけど、たぶんホテルかなと」

「ええ。おそらくね」

「……ありがとう。わかってくれて」

「ツ！ あ、あれぐらい、当然ですよ」

「ふふ、そつか。じゃあ、行こう。セシリア……来て！」

左手を掲げ相棒を呼んだところで、彼がひとつ提案をする。

「あ、ちよつと待つてください。せつかくだからメッセージも……これを承太郎に渡してもらつていいですか？」

「そつか。すれ違つてもいけないもんね」

そうして彼の書いた手紙を啜えた相棒に御願いをする。彼女が飛び立ち暫く経つて、その位置情報を感じ取ることができた。

「……。ほんとだ。南、こつちに1kmほど……だつて」

それを受け、彼はそちらの方向を遥か臨みながら感想をもらす。

「しかし、本当に広くなりましたね。セシリアの探索範囲」

「まあ御存知のとおり、本来の……強度はこんなに離れてたら薄ーいガラス並み、紙みたいにぺらっぺらだけどね」

苦笑いをする。歩きながら、スタンドといえば、と、もうひとつ報告事項があることを思い出した。

「あ、そうだ！ あとこれも、あの人が言っていたんだけど……」

「……蜘蛛の巣にふれることなく……!?!」

「うん」

「そうですか。DIOのスタンド……一体……」

「普通のスタンドとは次元が違う、って……」。

「ごめん、これだけで、見当もつかないんだけど」

「いえ、いいヒントにはなる……と、思います。実際、体験しなければ結局のところ正体を掴むのは難しい。けれどもこういうふう事前に情報を積み重ねていけばきっと……」

「……次元、か……」

*

*

*

「どうするんです？ ビビッて帰ってもいいんですよ。このポルナレフをおいてね。フ

フフ……」

そういつて一枚のコインをわたしたちにみせつけてくる敵スタンド使いの男。

コイン……奪われた『魂』。その成れの果てを。

ポルナレフは、こいつとの魂を賭けたギャンブルに敗北した。卑怯極まりない、こいつの仕組んだ『イカサマガャンブル』で。その代償としてこのような変わり果てた姿に……。

(あ、悪魔のような男だ……)

博打に負けた人間の魂を奪うスタンド『オシリス神』の暗示……ダービー、というこのギャンブラー。

奪った魂はコインにしてコレクションにしている、とのこと。先程嬉々として、胸糞の悪いそれを我々にひけらかしていた。

今すぐ我が『魔術師の赤』マジシャンズレッドで、こいつを灰にするのは造作もない。しかし、そういうわけにもいかなかった。そんなことをすればポルナレフは二度と元に戻れない。まさに魂の人間、だ。この状況、口惜しいことにわたしの幽波紋は、何の役にも立たない。「ま、一杯やりながらよく考えてください。チョコレートはどうです？」

板チョコがぱきつと奴の口内に放り込まれ、ポリポリとこれまた場違いともいえる軽快な音と共に咀嚼される。

(く、くそ……ハッ！)

「……」

歯噛みをしていると、突然、ジョースターさんが動いた。奴の対面にドカツと腰掛ける。

テーブル上のものを薙ぎ払ったかと思えば、そこにグラスを置き、なみなみと酒を注ぎ始めた。

「……『表面張力』というのを知っているかね？ バービー君」

「ダービーです。わたしの名は、ダービー」

不快感を露わにしつつも男は揺れる液面を指しながら答える。

「その……酒の表面が盛り上がって、あふれるようであふれない力のことだろう？ 何をしようというのかね？」

「ルールは簡単。このグラスの中にコインを交代で入れていく。酒があふれた方が負けじゃ」

「おい、いじい……」

「ま、まさかッ！ ジョースターさんッ！」

その決意を秘めた目から、彼が何をしようとしているのかを悟り、承太郎とともに声を震わせる。

「……賭けよう。わしの『魂』を！」

「グッド！」

「ば、バカな！ や、やめてください！ こいつはイカサマ師なんですよ!!」

「イカサマはさせん！ この賭けの方法はわしが決めたのだ」

「承太郎、念のため、こいつを見張っている」

「おう。……ん？」

そのときだった。薄桃色の一羽の鳥が、承太郎のもとに舞い降りる。

「……なんだね？ それは」

「せ、セシリア?!」

くわえていた手紙を承太郎が受け取り、一瞥する。

「ああ。あいつだ。……まあ、今は、かんけーねえな。目は覚めたらしい。ここに来ると

か言い出したがやはりもう少し休ませる、って、あの過保護野郎がよ」

「そ、そうか……」

『わかった。ゆっくり休めと伝えろ。こっちは気にすんな』……と。

……よし、いいぜ。……戻りな」

承太郎がサラサラとしたためた返事を託すと、セシリアは再び中庭から空へと羽ばたいていった。

『ガードイアン守護聖女』のスタンドか。噂には聞いている。この場には本体はいないようだが……たしかに関係ないな。いてもいなくても。ククク、わたしの能力にはなんの影響もない……」

『ギャンブラー賭博者』が空を見上げ嘯く。確かにこういつた『条件付きで強制発動するスタンド攻

撃』を防ぐというのは、流石のセシリアも専門外だろう。

「そういうことだ。……続ける」

「そうじゃった。で、どうするんじや？ ファービー君？」

「ダービーだ！ ……OK！ いいでしょう。この賭け、受けましょう。」

だがその前にコインと酒、グラスを調べてもかまいませんかね？」

「当然の権利だ。君にもイカサマを調べる権利がある」

ダービーがテーブル上のものをひとつひとつ手に取り、調べていく。それも一通り終わったあと、ジョースターさんが相手に鋭い視線を向ける。

「ひとつ、こちらも確認しておく。君が負けたらポルナレフを必ず返してくれるという保証は？」

「わたしはバクチ打ちだ。『誇り』がある。負けたものは必ず払います。」

……負けんがね」

「いいだろう……君からだ。コインを入れたまえ」

「ジョースターさん！」

「まかせておきなさい、アヴドウル……」

「フフ……では……」

「Open the gameだ……!!」

*

*

*

「……あそこみたい」

相棒の示した先は、砂漠の傍にある一軒のかなり大きなカフェバーだった。近くにはいくつものピラミッドが立ち並んでいる。

開かれたオープンカフェのようなお店であるため、遠距離から、足を踏み入れる前の中の様子を窺うことができた。盛況なようで、沢山のお客さんがグラスを傾けながら思いの時間を過ごしているようだ。

「あ、いた……」

カウンター近くの中庭に面した端っこのテーブル席。そこに遠目にも目立つ仲間たちの姿をみとめた。

「……え……？」

しかし、そこにある雰囲気は、ピリピリとしており、明らかに異様だった。

真剣な顔つきでのジョースターさん。その対面には一人の見知らぬ男が座っていた。両者の視線はテーブル上のひとつのグラスに注がれている。その後ろで彼らの様子を息を凝らして見守っている承太郎君と師匠。

「……あ、あれは!？」

そして、ぐったりとした様子で椅子に腰かけているひとりの男性。

「ぼ、ポルナ……!」

「……しっ」

焦って駆け寄ろうとする私を彼が制す。

「……?」

(……あ……)

彼のうしろから伸びていく、煌めく『手』。

意図を察し、頷く。ほどなくして、自分の相棒からも通信が届く。

「花京院くん、承太郎君からのお返事です」

「はい、ありがとうございます。」

お疲れ、セシリア。……ッ! なんだと……?」

それに目を落とした途端、黙りこくる彼。

「どうしたの？　なんて書いて……」

そう言いかけたところで、やめる。考え事に水をさしたくなかったからだ。真剣なその横顔をこつそりみつめてみると、暫しの沈黙を経て彼からぼつりとただひとつが零される。それは、おもわず聞き返してしまうほどに意外な単語だった。

「……二人羽織」

「……、はい??」

*

*

*

「……ああッ!」

その身体がぐらりと揺れる。背後にぬつと現れた『オシリス神』により、無慈悲にそこから引きはがされ、太い両腕で成形されるジョースターさん。

「ジョースターさんッ!」

「じじいッ!」

承太郎とわたしの叫び虚しく、ころりと転がり落ちる『成れの果て』。

「2個だ!　さて、ギャンブルを続けよう。君らがこのふたりをあきらめて尻尾を巻いて勝負から逃げ出さん限りね」

「……きつさまああああッ!!」

激情をもちや抑えることなどできなかった。眠るように静かに目を伏せたふたつのコインからは、その表情とは対極にある強い無念の思いが滲んでいた。

おもわずダービーに掴みかかり、テーブル諸共床に押し倒す。巻き添えをくらいひっくり返ったそれからグラスやコインが派手な音を立て散乱する。

「わからんヤツだ。わたしを殺せば今度は二人の魂が死んでしまうんだよ」

「くっそおー!」

「やめろ、アヴドウル!」

振り上げた行き場のないこぶしを握り締めるわたしを諫めながら、冷静にその場を検分する承太郎。ぶちまけられた例のグラスを手にし、目を見張る。

「……これは!? ……なるほどな。これが、もう一枚入った理由、か」

「え……?」

顔全体に疑問符を張り付けたわたしに、彼は淡々と説明をしてくれた。

「ちよ、チヨコレートが……!? そんな……」

まさに悪魔の所業の如き、そのからくりの全容を受け絶句する。

「フフフ。くだいようですが、イカサマとは……見抜けなかったその人間が悪いのです。

人間関係と一緒に。騙される方が悪いんですよ」

「ぐぐぐ……」

不快極まりないダービーの発言にまたも血液が逆流および沸騰しそんな感覚を覚える。

「……ふーん。そうなのか」

「ハッ！」

「ハッ!?!」

すると、突如場を切り裂くように降つてわいた声。それが聞こえてきた方向を全員が注視する。

「お、おまえは……!?!」

「じゃあ次は……僕の番、かな」

ゆつくりと柱の影から姿を現す。その正体は大変よく知る男だった。

「……花京院ツ!!」

The GAMBLER (後)

ジョセフ・ジョースターとジャン・ピエール・ポルナレフ。

敗北者である彼らの魂はこのダービーの『オシリス神』によって手中に収めた。

残るはあと二人。波に乗って次のゲームを持ちかけようとしたときだった。細やかな事件が起こる。

突如、相手側に増援が現れたのだ。

とはいえ、今さら一人増えようがこちらとしては全く問題はない。青天の霹靂の様な登場の仕方にいささか驚いたのは事実ではあるが。不覚にもその存在に少しも気づかなかった。どうやらジョースターとの勝負に夢中になりすぎてしまっていたらしいと反省する。

「な!? か、花京院! いつのまに……」

「つい先程到着したばかりです、アヴドウルさん。が、少し前から『視て』いましたので、状況は大体把握済みです」

「おまえ……」

「ああ、承太郎。言葉の通りさ。勝負はまだついていない。今度は僕がいこう」

そう仲間に宣言すると、我が新たなコレクションにむけ語りかける。

「ジョースターさん、ポルナレフ……待っていてください。すぐに助ける」
物言わぬ、ましてや聞こえているはずもない『もの』に向けて。

「くくく、花京院か。いいだろう。何で勝負する？ ポーカー？ それともルーレットかね？」

『法皇』^{ハイエロファント}の花京院典明。その頭脳は敵ながら称賛に値するともつばらの噂であった。このような相手こそ勝負のしがあるというものだ。興が乗ってきた。

しかし、そんなわたしの問いかけに花京院はかぶりを振る。

「うーん……生憎、僕は本来、勤勉かつ真面目なフツのガクセーなもので。そういった類いの賭け事は本分じゃあないんですよね」

両掌を天の方向にむけ首をすくめる。そうだとしたら何故しやしやり出てきたというのか。落胆と相混じって、小馬鹿にしたようなそのしぐさと口調に多少のイラつきを覚える。

「……ならば、どうするといふのだ」

「そうだな……では、こういうのはどうだろう？」

すると少し考えた後、花京院はわたしの背後のカウンターを指さした。

「次に入店し、あのバーテンダーにドリンクをオーダーするのは、男性か、それとも女性

か

「!？」

「提案したのは僕だ。選択する権利はそちらに譲ろう。その方がフェアだろう？ それとも貴様に有利過ぎて、逆に恐ろしいかい？」

聞き捨てならないその言葉に表情筋が反射的にぴくりと収縮する。

「……わたしがビビっているとでも？」

「違ったか？ そいつは失礼したね」

不遜な態度に、はらわたが煮えくり返りそうになりながらも内心ほくそ笑む。

「わかった！ それでいこう」

愉快でたまらなかった。『それならば、わたしの勝利は揺るがない』。この気障ったらしい顔を恐怖でゲドゲドに歪ませて敗北に追いこみ、我がコレクションに加えることが可能なのだから。

「僕が勝つたら……わかっているな？」

漏れ出そうになる高笑いを必死に堪えつつ、敗北が決定している憐れな挑戦者の質問に答える。

「勿論だ。わたしはこのコインを賭けよう」

『ポルナレフ』を摘まみ上げ掲げてみせる。

「ならば、花京院。そちらもなにかいうべきことがあるんじゃないのかね？」

「ああ。……賭けよう。僕の『魂』を！」

「グッド！」

「ば、バカナ！ やめろ、花京院！ こいつはジョースターさんよりも上手うわての男なんだぞッ！ 勝てるわけ……」

「勝てるわけがない……と？ どうしてですか？ これはギャンブル。100%なんて存在しないはずでしょう？ やってみないと……ね」

「しかしッ！ き、危険だッ！」

「ありがとうございます。アヴドウルさん。……大丈夫です」

「花京院……！」

「ククク、そのとおりだ。やってみないとわからない、ククク……」

「決まりだな。では、どちらに賭ける？」

「フム……この店の客層は全時間帯で鑑みると老若男女偏りがない。とはいえ今は圧倒的に男が多いようだな……かといって、次にやってくるのが女ではないとは限らない……さて、どうしたものかな」

店内を見回し、悩み苦慮する『ふり』をしてみせる。

「能書きはいい。考えて答えが出るものではないだろう？ さっさと決めたらどうだ？」

「

その物言いにまたも若干ムツとしつつも抑えて答える。

「いいだろう……男だ。男に賭ける」

「わかった。ならば、僕は女性ということになるな」

(ククク……その通り。考えなくても、答えは出ている)

疑うこともなくあつさりとそれを？む。浅はかなことだ。すべてこのダービーの計画通りに事が運んでいるとも知らずに。しかし、そう思った矢先に花京院は少々思いも寄らないことを言い出した。

「あ、そうだ。ハンデとして、僕が勝ったらD I Oの館の場所も教えてもらおうかな」

「な、なんだと……？」

「何度も言うようだけれども、僕は所詮ただの高校生だ。断るはずがないよな？

『賭博者』^{ギャンブラー}さん？」

「ぐぬぬ……」

冷静になれ。挑発だ。乗るな。自分に言い聞かせる。そうだ。この勝負、負けなどありえないのだから。

花京院が賭けの内容を提示した瞬間、奴ら三人の死角となる場所から一人の男が立ち上がり、こちらに合図をするとともに密かに店外へ消えた。

(……残念だったな、花京院)

この店内のみならず、視界にいる全員がこのダービーの仲間だ。店員も、客も、辺りで遊んでいる少年達ですら。

『100%』……あるのだよ、それが)

新たな入店者など、来るはずがない。来るのは関係者。それだけだ。頃合いを見計らって先程の男が戻ってくるだろう。

そこで思い立つ。ゆさぶりをかけたつもりのこの青二才の冷静な態度をくずし、鼻つ柱を逆にへし折ってやろう、と。それに加えて、一石二鳥。奴らを一気にカタにはめるための策を。

「その手には乗らんぞ。それを言うなら『魂』が足りないんじゃないのか？ わたしは今回の勝負にこのコインを賭けると言った。花京院、この勝負万一小前が勝つたとしても、戻るのはポルナレフの魂だけだ。それ以上を望むのならば、その分の上乗せレイズをしてしかるべきだと思うが……くくく、どうするね？」

「……いいだろう。おれがのるぜ」

するとすかさず、厳かな声が場に響く。

「この勝負……花京院が勝つ方に、おれの魂をかけよう」

「承太郎……！」

「……ならば、わたしも賭けよう。……魂を」

そして、もうひとりも続く。

「フツ、わたしだけ、のらないわけにいくまいよ」

冷や汗を浮かべながらも、男はまっすぐに言い放つ。

「それに、わたしは賭け事向きの性格をしていない。けっこう熱くなるタイプだからな。ダービー、おまえと勝負すればわたしは確実に負けるだろう。しかし、わたしは信頼している。花京院を、承太郎を。」

……信じて賭けよう。わたしの魂だろうが、何だろうが」

「アヴドウルさん……」

「アヴドウル……」

「仲間に運命を委ねる……か！　なんと麗しい！　到底理解なんぞできんがな。する気もないが。ククク、いいだろう。花京院、おまえが勝てば、ポルナレフもジョースターも元通り！　そしてお前たちの知りたがっている館の場所も教えてやる……ク、クククククク！　フハハハハハ!!」

もう止まらない。くだらぬ友情ごっこ。アイソレーシヨニズムの欠片もない。こんなにもあつけなく全滅するのだ。ジョースター一行が。まとめて。このダービーの手によって。

「いや、まだだ……」

「なんだね？ ククク、今さら降りるなど……」

背負うはめになったものの重圧にさぞかしすくみ上っていることだろう……そんなわたしの予想と次の花京院の発言は180。異なるものだった。

「そんなわけないだろう。レイズするのさ」

「ふん、もうレイズするものなど……」

どこからともなく取り出した真つ白なハンカチをピツと広げ、こちらにみせつける。

「信用ならないだろうからね。ほら一筆かいてやったぞ」

「な、なにを……」

『僕、花京院典明は友人保乃宮仁美の魂を賭けに負けた場合、さし上げます』

「な、なにイッー!! こ、この場にはない、女の魂をツ!?」

おもわず息を呑む。繊細かつ神経質そうな外見からは到底想像ができない、その大胆さに。

「お、おい、花京院おまえ……一体どうした!? そ、それだけは！ おまえにとつて、その魂だけはッ……!」

「……いいじゃあねーか、アヴドゥル。どうせ『同じこと』だ」

「じ、承太郎……! それも、そうか……」

奴らのやり取りの中で察する。男にとってのこの魂の『重み』を。

「……そういうことだ。その代わりダービー、貴様にも見合ったものを賭けてもらおうぞ」
その、覚悟を。

「喋ってもらおう。D I Oのスタンドの秘密を」

「な……なんだと」

「到底、釣り合うとは思えないがな。貴様の下衆な魂などと、彼女の魂は……」

一見冷静なようだが、完全に目がすわっている。その有無を言わさぬ胆力に……そして、やつの言う通りだった。何よりも、その代償の途轍もなさに一瞬怯みそうになる。もしも負ければ、自分は破滅だ。D I O様の秘密を洩らす……すなわち裏切者。それが迎える結末には、死。それしかない。想像するだけでも奥歯がちがちと音を立てるのがわかる。しかし、そもその前提として、負けるはずがない。負けるはずがないのだ。そんな自分の背中を押したのは、皮肉にも見透かしたかのように鼻で笑う男の一言だった。

「ふっ、まさか……今さら降りるなどと、言わないだろうな？」

「な、なめやがって……いい、いいだろうッ！」

「Open the Gameだッ……！」

まさに、雌雄を決する……その時はすぐにやってきた。

「あ、あれはッ……!?!」

正規の入り口に設置されているウエスタンドアが勢いよく押し開けられ、『客』が店内に入ってくる。帽子にサングラスを身に着け、口元を覆い隠すように首にぐるりと巻かれたスカーフが揺れていた。くるぶしまでおよそ180cmの身の丈のほぼ全てを包み込むほどの長い外套を羽織った、その上からでもわかるほど筋肉質で体格の良い……先程目配せをして出ていった男に相違なかった。

「ッ、ッこれまでか……」

「……」

底の厚いブーツをカツカツと鳴らしながら、一步一步カウンターに近づいていく。それを見とめ、がっくりとうなだれるアヴドウル。目を伏せ、帽子を目深にかぶりなおす承太郎。

(うぶぶぶ……!)

込み上げてくる。まだだ。もう少し我慢しろ。高らかに勝利を宣言するにはまだ少しだけ早い。

男が丸椅子のひとつを選び腰を下ろすと、すかさずバーテンダーが声をかける。

「いらつしやい、ご注文はなんにしやす？」

固唾を？んで見守っていると、くぐもった低い声で待ちに待った一言がもたらされる。

「……アイステイーを、ひとつ」

「……勝ったツツ！ みたかツ！ 花京院!! わたしの勝ちだツ!!」

飛び上がり吠えたあと、敗者の顔を覗き込む。が、しかし、コインにする前にその絶望面を心行くまで拝んでやろう……と、そんなわたしの思惑は、大きく外れた。

「どうした？ 何を喜んでいる？」

涼しい顔をして男はいう。

「お前こそ何を言っている！ ふはは！ そうか！ あまりのショックで気が触れ……」

「落ち着いてもう一度よく見てみたらどうだ？ いったい、あのひとのどこをどうしたら男性にみえるというんだい？」

「……え……？」

言われるがままその方向に首を回す。すると次の瞬間、己の目に信じられないものが映った。

「な、なにイイイイッ!」

「あー、暑かった。もう、喉渴きすぎて死にそうです!」

『男』だったはずの人物が立ち上がり外套を脱ぎ捨てると、現れたのはさつきまでと一転、細身で華奢な姿。帽子とスカーフを取ると同時に長い黒髪がさらりと流れ、そしてとどめとばかりに、サングラスを外しながら発されたその声は、男のものとは到底思えない高い音でその場に響いた。

「バーテンダーさん、すみません、ミルクもつけて下さいますか? 私、いつもミルクティーなので。あつ、ちょうどおやつの間だし、このメープルパンケーキも追加しちゃおっかなあ。えへ、デザートはベ・ツ・バ・ラ、ですよねっ」

「お、おとおお、女あッーッッ!」

「なッ!! や、保乃ーッ!」

「く、くくく! やっぱりか。やりやがったなッ!」

「あ……あ……!」

腰を抜かして叫ぶアヴドウルも腹を抱えて笑う承太郎も、ぐにやりと歪みはじめた視界には、もはやまともに映ることはなかった。

「……どうやら賭けは、僕の勝ちのようだね」

ただ、目の前の男が静かに勝利を謳う声だけが、ワンワンという耳鳴りとともにわたしの頭に響き渡っていた。

*

*

*

「くくくく……！ ほら、捕まりな、アウドウル」

「す、すまない。ありがとう、承太郎」

未だ収まらないらしい笑いと共に差し伸べられた仲間の手の助けを借りて、あまりの衝撃に抜けてしまった腰を叱咤しどうにか立ち上がる。

「まさかあれが保乃だったとは……たまげたな」

「ふっ、そうだな」

確信していたはずの勝利がするりとその手から逃げていき、楽園から急転直下まっ逆さま。待ち受けている地獄への道筋に顔面蒼白の男は幽霊でも見たかのようにカウンターをわなわなと指さしながら嘆く。

「が、『守護聖女』!? あれは、か、花京院、おまえの女じゃあないかッ！」

「ふ、ふふ、ふふふふふ……」

それに対し返ってきたのは若干ずれた反応であつたが。

「僕のか……ふふ、いいね。素晴らしい響きだ」

「……そこかよ。花京院、おまえさてはさっきの誓約書の『友人』、自分で書いた癖に本当は否定してほしくてしかたがなかつたクチだな……?」

「う、うるさいな、承太郎! 心を読むな! そして可哀想なものを見る目でみるなッ!」

「すまん、ツツコミが遅れて。……なんでやねん。よし、これでいいな」

「おごなりすぎるだろうッ! もうええわッ!」

もはやどちらがボケかツツコミかもわからない、息だけはやたらとびつたりな漫才もどきのあとに、ようやく本題に戻る。

「何故だ!? そんなはずが……! か、花京院ッ! お、おまえ、まさか、わ、わたしの……ッ!」

「……当然だ。『少し前から視ていた』といっただろう? 誰も彼もが貴様の一挙手一投足に注目している、貴様の会話ひとつひとつに聞き耳を立てている……そんな異様な状況から、気づかないわけがないじゃあないか」

切り替えが早すぎて正直ついていけない。さっきまで漫才をしていた人間と同一人物とはとても思えない厳しい口調で、敗者から絶え絶え発された疑問に勝者が答える。

「……グルだな。この場に在る者、全て。有視界内の全員が、な」
「な、なんだとツ!?!」

店内の人間ならまだしも、そんな、まさか……と否定しかけたところで、よく考えたら先の猫すらこいつの仕込みだったことを思い出し、納得せざるを得ない気持ちになる。それにしたつて現場に立っていたはずの自分は全く気付かなかつたが。

「まあ、おかげで思いついたただけだね。それを逆手にとつた、この『100%勝つことのできるギャンブル』を」

しかもあの短時間でだ。『法皇』の、そして花京院の観察眼および発想力に改めて舌を巻く思いだつた。

「ひ、卑怯だぞ! い、イカサマじゃあないか! だましやがつたなあツ!」

往生際悪くも血走つた目で男が訴えるお門違いのそれを花京院はにっこりと一蹴する。

「おや? 貴様の言を借りるならばイカサマとは見抜けなかつたその人間が悪いのだらう?」

言つていたじゃあないか……騙される方が悪い、と」

「う、うとうぐぐぐ!! ……はあーつ、はあーつ!」

二の句も継げず、男の唸りが喘鳴ともに発され、その額に尋常ではない量の脂汗が浮

かぶ。

「もつとも、借りはしても個人的には甚だ同意しかねるがね。まったく理解に苦しむ……」

とどめとばかり、まっすぐに花京院は言い放つ。

「……騙す方が悪いに、きまつているだろう？」

「うぐうツツ!!」

「さ、もういいだろう。約束は果たしてもらおうぞ。

ふたりの魂を解放し、館の場所、そしてDIOのスタンドの秘密をおしえてもらおうか……!」

「あ……あ……うわああああああー!!」

花京院が凄むと、ダービーは断末魔のそれかのように叫び、よつぼど恐ろしかったのだろう。後ろにひっくり返り、泡を吹いて気絶した。

「……おおっ!」

同時にコインがボフンと音を立て、『ポルナレフ』と『ジョースターさん』が各々の身体に滑り込む。

「ん? あれ? オレ……?」

「わしは……いったい?」

途端、彼らはその意識を取り戻した。

「ダービーの奴、あまりの緊張で気を失ったな。心の中で負けを認めたから二人の魂が解放された、というわけか」

「イヒ、イヒヒヒヒ……ポヘエーッ！」

かと思いきや、飛び起きた男から奇妙な笑い声が聞こえてきた。

「イヒヒ、そおーれえッ！ みんなあーいっしょにマージャンやろーよおー！ バックギヤモンもたのしーしサイコロもスリルあるよお！ ぼくがいちばんだろーけどさあーッ！」

どうやら正気も失ってしまったらしい。その眼はここではないどこかを見ているようで、もはや何の光も映し出しては居なかった。わけのわからないことを喚いたかと思うと、放り投げられたバインダーから無数の光の柱が立ち昇る。

「奴のコレクションもあの世に放されたようだ。しかしこの様子ではもうDIOの秘密は聞き出せないな……」

「しかし、強敵だった……」

「ああ。たった一人でおれたち全員を倒そうとしたんだからな。たいした奴だぜ……」

「みなさーんっ！ やりましたねっ！」

彼女がちやっかりというかしっかりというかアイスマルクティーを片手に（あっけにとられつつもバーテンダーはきちんと仕事をしたらしい。最初にこの店でガツクリ感と共にアイステイーを一気飲みしたときにも思ったが、なかなか天晴な商売魂である）嬉々としてこちらへ駆け寄ってくる。

「ん……？」

「おや、保乃……？」

「うめけけケケ……それ、当たりッ！ ロ——ンッ！」

「うわ！ だ、ダービー……？ どしたの？ あれ」

「か、勝ったんじゃないッ！ い、いったいどうやって!？」

彼女の方を見やる過程で徘徊している亡者を目の当たりにしてしまい、たまげるポルナレフとジョースターさん。

「そうなんですよ。花京院が、みごとに！ そ、そうだ！ あれはいつたいどういうことだ？ 入ってきたコートの客はどう見ても男だったのに……」

二人に状況を説明しようとするも、自分でもさっぱりわからないことが多すぎることに気づき、疑問を投げかける。

「いやちよつと待て。そのまえに……」

すると、真面目な表情でジョースターさんが横槍を入れる。

「保乃おまえ……なんでおるんじや？」

「え？ あ、あの、その言い方はあんまりでは？ いてはいけない存在ですか……？ 私

……」

「いや、そうじゃあなくてだな……だって、なあ……」

「はい……」

同意をもとめられ、首を縦に振る。ジョースターさんに同感だった。『彼女はホテルで休んでいる』。そのはずであったのに。その証言者に全員の視線が移る。

「ああ。ありや嘘だ」

承太郎はしれつと答える。祖父顔負けの調子で。

「でなきやあ、花京院がこの場にいるわきやねえだろ。こいつをひとり置いてよ」

「……たしかに」

「そうじゃな……」

「……」

「な、なんですか！ みんなして……！」

謎の説得力に当事者以外が心の底から頷く。

「まったく、承太郎、君ってやつは……どれだけの無茶振りだと思ったよ」

それを皮切りに始まる『種明かし』。手始めに苦笑いとともに『密書』かつ『指令書』が公開される。

「! ああ、承太郎がセシリアに渡した『手紙』か!？」

花京院と承太郎が頷き、彼女が代表で音読する。

「『おまえらまだ来るな。イカサマ賭博師、賭けに勝つたら魂を奪うスタンド使いと交戦中。時間をかせぐ。絶対に勝てるギャンブルを思いついたら来い』……ね」

「ああ。伝書鳥、ご苦労だったな。」

バレにくいよう日本語で書いたが、それでも気づかれんかひやりとしたぜ……

それにしても……鳥、賢いな。ちゃんとおれの意図を察して、あいつにバレんように大回りしておまえのところに戻っていた」

「でしよう!? セシリア、すごいでしょ!」

相棒への称賛に珍しくも鼻高々の彼女。しかしその鼻はすぐにぺきつとへし折られる。

「ああ。本体よりいいんじゃないか? ……頭」

「ぐう……! お、おっしゃるとおりですよ……!」

その反応を楽しげにくつくつ笑う影の策士。

「くくく、冗談だ。スタープラチナで遠目におまえらが近づいて来ているのが見えたか

らな。おれは裏方に徹することにした、というわけだ。うまくいったな」
「ああ」

「ぜ、絶対に勝てるギャンブル……」

「そんなのあつたら皆やつてるだろう」

「ええ。考えましたよ。そりやあもう、必死に……」

花京院がその時を思い出すかのように眉間に手を当てる。

「が、あちら側も迷惑は一緒です。100%……勝利を確定的なものにするために何らかの策を弄してくる。ならばそこを返り討ちにするのが一番手っ取り早いと思ひまして。要は僕が勝負として提示する二択が、①どちらか一方の選択肢をヤツに『明らかな正解である』と思ひこませ、そちらに誘導することが出来る。②それを最終的に覆してやる事が出来る。……以上が可能であればよいわけです。まさに言うは易し、ですけどね、本当に」

行方は難い、それこそ魔法でも使わなければ不可能そうなそれを現実のものにした男はその秘訣を語る。

「しかし、こういう時こそ急がば回れ、です。まずは利用できる環境や条件を洗い出すべく、周囲を観察し、情報を収集、分析しました。で、先程も言いましたが場の全員が奴の仕込みであることに気づいた。これを利用しない手はない」

『魔法使い』はにっこりと笑う。

「次に現れるのが男性か女性か」という賭け自体は割とよく聞くベタなものであるかと思いますが、そこは別にシンプルで構わない。こちらには彼女がいる。彼女を『仲間の男』だとヤツに思いこませることさえできればいい。その方法はすぐに思いつきましたし」

「それが『二人羽織』……だよね！」

「その通り」

そこで彼女の合いの手が入る。これまた息びつたりだ。

「まずはヤツがジヨースターさんとの勝負に熱狂している間に、最も素肌が出ていない格好の男をハイエロファントで密かに操り、手洗いを装い僕達の元に来させて外套、帽子、スカーフ、ブーツを拝借する……」

「ちなみにその方自身は花京院くんの秘技『当て身』で気絶させて、裏の物置に丁寧に放り込ませていただいています」

あつけにとられつつも狐につままれたようでいまいち腑に落ちず、わたしは重ねて問う。

「し、しかし、それらをこの娘が着たとしても、ぶかぶかで一発でバレるだろう……あれはどうみても男の体格だったぞ？」

「もちろん。ですので……」

肯定しつつおもむろに『法皇』を出す花京院。

「こやあって、ぐるぐるぐるつとね」

まるでヒーローものの変身シーンを見ているかのようだった。キラキラした緑色の触手が彼女の身体に巻きついていく。

「こんなふうには、それらを身に着けても不自然でない程度にハイエロフアントで彼女の身長および骨格や肉付きの量増しかさましをしていたんです」

「よつと」

彼女が外套その他を拾い上げ、身に纏う。

「おおっ!!」

まさしく彼女とハイエロフアントの『二人羽織』。あつという間に『あのとときの男』の出来上がりだった。

「知つての通り、そのサングラスだけは僕の私物ですがね。変装が完了したら、隙をみてそつと承太郎とアヴドウルさんの死角に当たる、ヤツにしか見えない位置に移動する。これで仕込みは完了です」

首をすくめつつ男はこちらをみる。

「とはいえ、『隙をみる』……実はここが地味にかなりの難関だったのですが、アヴドウ

ルさんがヤツに飛び掛かっていつてくれたでしょう？ あのおかげで悠々彼女は配置につけたんですよ」

「な、なんと……！」

直情的な己の失態だと思っていたあの行動が意外な形で役に立っていたらしい。なんと複雑な気持ちだった。

「これで準備は万端。ヤツの前に僕が登場し、賭けの内容をあたかも今思いついたかのように提案する。あとは彼女が、はいはい！ 私行きます！ とヤツと周囲にジエスチャーでアピールし、一旦店から出て頃合いをみて戻ってくる……と、以上が全容です」
あんぐりと口を開けたままの我々に向け、花京院は続ける。

「あからさまな罠に奴が喰いついてくれるかどうか最大の胆だったのですが、まんまと嵌ってくれました。ジョースターさんを見習って奴の平常心を揺らがせて注意力や判断力を鈍らせるべく、ひたすらに煽った甲斐があつたというものです」

「あ……」

目下繰り広げられていた、手に汗握る心理戦を思い出す。

——(さ、さすがジョースターさん。わざと名前を間違つて、怒り……精神的動揺を誘っているッ！)——

「何も考えず完全にただ運を天に任せている短慮な若者を演じ油断を招いた甲斐も。」

『相手が勝ち誇ったときそいつはすでに敗北している』……そうでしたよね、ジョースターさん？」

「ふつ、その通り。おまえ、人の十八番を……まったくほんに生意気な奴じゃ！」

言葉と裏腹にジョースターさんは心底愉快そうにからからと笑う。

「そして、承太郎が『彼女がこの場にいるはずがない』という前提を作ってくれていたのも大きい。途中のあの誓約書のくだりもそのアピールです。まあ実は、あそこを考えたのは彼女自身なんですが」

「あ、ちゃんと賭けてくれたんだ。私の魂も。実は単純に大きな賭けにしちやつた方がいいかなって思っただけなんだけど。その方が引くに引けなくなるでしょう？ それにいっぱい賭けといた方がいいじゃない。せっかく『ぜったいに勝てる』んだから」

あつげらかんと言い切る。意外と大胆なのは彼女も同じらしい。加えて、なんという絶大な信頼感だろうか。この娘のことだ。「しかたがない。では、あなたの魂を……僕にあずけてもらえますか？」とか、せつなげかつ情熱的に花京院に囁かれて密かに鼻血吹きそうになっていたに100ペリカ……この勝負こそ、100%勝てる。間違いない。どれだけこの男のことがすきなのか。

そんなゆるぎない彼女に逆に動揺の色を隠しきれない様子で花京院が補足をする。

「え、ええ……。それに、奴ほどの相手に同じ手は二度と通じない。一発で全て取り返す

必要がありましたから。承太郎とアヴドウルさんもそれに乗っかってくれたので、さらにプレッシャーが増しました。というか……」

そこで花京院は一呼吸し、こちらへ向き直る。

「……うれしかったです。単純に。ふたりとも、信じてくれて……ありがとう」

「フン……しかたがねーからな」

「ふっ、そうだな」

見せてくれた年相応の表情に、寄せてくれた素直な感情に、こちらも口元が緩む

「そんなわけで、結局のところこれは、全員で掴んだ勝利、というやつなんですよ」

だが、いい感じにまとまりそうだった所へすっかりその存在を忘れられていた男が哀し気に呟く。

「……お、オレは？　なあ、花京院、オレの役割は……？」

「ぼ、ポルナレフ？　……は、ええと……」

「……」

シーン、と場に流れる沈黙。

「……それはともかく、だ」

「……おいッ！」

それを鮮やかに聞かなかったことにする花京院。

「ひでえぜ……」

「ま、まあまあ。どんまいですよ、ポルナレフさん。その悔しさがきつと明日へのレッスンです！」

「……どこのスポ根漫画だよ。そりゃあ……」

いじけてしまったポルナレフに隅で彼女が慰めにもならない言葉をかける。その間に気を取り直して改めてまとめに入る花京院。

「おほん。……ヤツは仲間に運命を委ねる……それをあからさまに見下していたようだけれどね。」

その癖、自分は所詮金でしか繋がっていない『仲間』しかこの場にいなかった。そしてそんな人間に自らの運命を委ねて美味しすぎる選択肢に飛びついてしまった……」

「それが奴の敗因……か」

*

*

*

「いやはや、それにしても助かったわい！」

「ちつ、てめーはあっさり目論見にハマりすぎだ、じじい……」

説明会の後は反省会へ。そういう流れらしい。危うく難を逃れた祖父は孫に手ひど

い叱責を受ける。

「ま、ポルナレフはそれ以前の問題だがな。あの変な刀に操られてひでえ目に遭ったの、もう忘れたのかよ……つたく」

そして、まとめて怒られるオレ。ハブられた上にこの仕打ち。天中殺か。まあ實際やらかしちまつたのは事実だが。

「へへ、面目ねえ……」なんて頭を掻いていると横で「おまえちつとも反省してないだろう……？」と、アウドウルが呆れたように呟いていた。

だつてめげていたつて始まらない。性分じゃあない。勿論『明日へのレッスン』にはちやんとするつもりだが。

「じじい……てめー、おれが小さい頃から自慢してやがつたくせによ。

『わしは真のギャンブラー。わしが通つた後にはぺんぺん草一本も生えん』とかいってよ。なさけねーな……」

「ふうんだ！ たまにはこんなこともあるものよ！ 猿も木から落ちる……だもんねーっ！」

冷やかな承太郎の視線を敢えて意に介さず、ジョースターさんはなおもいう。

「そうだ！ いいことおもいついたっ！ 花京院、わしとベガスにいかんか？」

おまえとわしのコンビならガツポリ稼げちゃつてウハウハじゃぞ！

にしし……! 一生遊んでくらせちやうよ? 豪邸も、キレーなおねーちゃんも買い放題じゃ!」

「にやツ!!? ……き、き、きれいなツツ?!」

「……焦りすぎだ。おちつけ」

承太郎に諫められる、大変わかりやすい様子の彼女とは対照的に、冷静極まりない返答をする花京院。

「はあ? また何を言い出すんですか。まったく。僕まだ高校生ですよ?」

ああ、でも成人しても変わらないだろうな。ギャンブルには、あまり興味ないですね。

さつきも言いましたが僕は堅実な人間なので。……ただし……」

熱き闘志を秘めた流し目とともに。

「……やるとしたら、負ける気はまったくありませんが?」

「……けつ、こいつもじゆうぶん気障な野郎だった……あーやだやだ……」

「……」

「つて、ええ!!? や、保乃? お、おい! しっかりしろ!!」

「はっ! わ、私……?」

「……。おまえ、奪われてたぞ。今」

「え? だれに? なにをですか?」

「……………花京院に。……………魂」

(まあ、今にはじまったこつちやあねえけど、つてか)

*

*

*

ずっと考えていたことがふたつある。

ひとつ。

僕は……………。

間違っているのかもしれない、と。

いや、本当は……………。

わかっていたんだ。

頭の片隅に、いつもあつた。

迷っていた。

でも、わかっていた。

なのに……………。

「……おい」

「はっ！」

だれもない、ホテルの屋上。

薄く広く夜空を覆う雲の下、物思いにふけていた僕は、後ろからふいに掛けられたこの男の声で我に返る。

「……承太郎」

「なにしてんだよ、こんなところで」

「……いや。なんでもないさ」

「ふん……」

そして、もうひとつ。

煙草に火をつける男に、告げる。

「なあ、承太郎？」

「あん？」

「君に、たのみたいことがあるんだ」

「……なんだよ？」

「……決戦で、もしも僕に……」

「しらん」

「は？」

「おれはしらん。御免だ。……ほうっておく」

「ま、まだ何も言っ……」

「ああ。まあ、気が向けば取り巻きの一人くらいにならしてやってもいい」

「はあ!? だ、駄目だ、そんなのッ! そ、そうじゃないッ! そういう意味ではなく……!」

ただ……その、きつと、泣くだろうから、なぐさめてあげてくれ……、それだけで……」

「……いやか? あいつが……ほかのだれかのもんになるのは」

「っ……! あ、あたりまえだろう……!」

「……なら……」

ピン、と空気が張りつめる。

「……死んだって死ぬな」

「……っ!」

「……じゃあな」

「……」

去り行く背中に向け、眩く。

「……ありがとう、承太郎……」

CAGE FIGHT!

人間なんて、クソくらえだ。

勝手なもんだ。不味い飯ばっか食わせるわ、嫌がつてんのに変な服着せるわ、気が向いた時だけやたらとベタバタしてきやがるくせに、飽きたらポイ。

馬鹿じゃあねえ、賢いおれは勿論こつちからさつきと見限つてやったが。

金金金……ギラギラした金ピカに目がなくて、『メイセイ』とかいうなんの腹の足しにもならないものに縋つてる。そのためになら他のやつを踏みにじることなんて屁とも思つちやいねえ。どうしようもねークズばっかだ。

こいつらだつてどうせおんなじだ。娘の為とか仲間とか誇りとか口じゃあカツコイイことばっか言つてやがるが、イザつてなつたら自分可愛さに尻尾巻いて逃げるんだろ？

だいたいおれはNYの領域テリトリーで舎弟どもと自由気ままに楽しくやつてたんだ。それなのに卑怯な罫にかけてとつ捕まえて狭い檻の中にぶち込みやがつて。そのうえ、無理矢理こんな暑いところに連れてきて、やべえ奴らと闘え？ 寝言は寝てから言うもんだぜ

？

毎日毎日、見つかりもしねえ敵のアジト探して、ウロウロ、ウロウロ。
(けっ、つきあつてらんねーぜ……)

*

*

*

「あれ……？ 先輩、どこ行っちゃつたんだろう」

ＤＩＯの館を全員で捜索中のこと。いつのまにかその姿がみえなくなっていることに気づく。こういうとき、ひとりでお散歩にいつてしまうのはいつもどおりではあるのだが。

空を仰ぐ。視界に広がるのは昨日と変わらない、どこまでも果てなく続くかのような、深めの青。

しかし、何故か今日に限っては、なにか背筋が薄ら寒くなるような、嫌な予感が胸を占めた。

「仁美さん？ どうかしたんですか？ しかめつつらして……」

それに圧され、そしてそれを払拭したくて、眉間に皺を寄せつつ周囲を見回しているど、おなじみの声が私の耳に届いた。

「花京院くん。いや、イギー先輩がいなくなっちゃつて……」

「え？ ……ほんとだ。さっきまでいたのに」

私の言葉を受け、彼も辺りを窺う。すると少し離れたところでそのやりとりを見ていたらしい。木陰に腰を下ろしながらポルナレフさんがシツシツと空中で手を振る。

「あー？ イギーがふらつといなくなるのはいつものことじゃねーか。そのうち戻ってくるって。ほつとけよ」

確かにその通りなのだと思う。普段ならば、私もきつとそう思っていた。

「でも……」

だが、どうしても胸中に拡がるもやもやが拭えず、無意識に言葉を発していた。

「やっぱり、「……私少し捜してきます」

「え？」

が、それは途中で遮られる……というか、続きを言われる。

「……と、次にあなたはいう。なんてね。ジョースターさんの受け売りですが。」

なんか気になってしょうがないんでしょう？ 僕も行きます」

「う……」

あいかかわらず千里眼でも携えているのではなからうかという彼は、ふつと微笑んだあと叫ぶ。

「ポルナレフ、そういうことだから、ちよつと行ってくる。」

すぐ戻るよ。みんなにも伝えておいてくれ」

「しゃーねーなあ、気をつけろよー」

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「いえいえ」

ふたりで、先輩を探すよう頼んだ相棒セシリアの後を追いながら、元来た道を歩く。

「そんなことはいいいから、くれぐれもひとりにはなつちやだめですよ。」

あなたこないだ、それで、攫われたばかり……なんだ、から……」

「う……っ、は、はい……」

悟られないようにうつむき、気を抜くとすぐに頭をもたげようとするそれと頬に集まってしまった熱を必死に霧散させる。

「……ま、まあ、全員もう単独行動は控えるべきですね。やはり、敵の本拠地。油断なら
ない」

「そ、そうだね!」

「イギーにもみつけたら言っておかねば。いうこと聞いてくれる可能性は限りなく低い
ですが……」

「うーん……。あれ？ セシリア？」

突然のことだった。相棒がふっと、地面に消えた。

「……え？」

立ち止まる。確かに感じた。

悪意を。殺気を。凍てつくような、殺意の波動を。

「どうしました？ セシリアも……」

「花京院くん、下、から……」

照り付ける太陽光を吸収し、じりじりと熱を発する、黒いアスファルト。

それが不思議と冷たく感じた。

「下……？」

揃って見おろした、そのときだった。

コンクリートを隔てたむこうから、微かに聞こえた。

「今のは……爆発音?! まさか?!」

*

*

*

おれは今、絶体絶命、大ピンチだった。

いつもどおり、退屈凌ぎに気の向くまま歩いてた。それだけだったのに。
(ちくしよお！　なんでおれがこんな目に……!!)

かび臭い下水道の中。悠然とその翼を広げ、地上へ続く道をふさぐようにホバリングをする一羽の隼。

ひとたびヤツが不快な声で嘶くと、瞬く間に永久凍土のそれのような冷気が発せられ、地面がみるみるうちに薄く白く霞んでいく。

氷を操るスタンド使い。関わるつもりなど毛頭なかったのに……。

「ギャウツ（しまったッ！　足がとれないッ！）」

足の裏が凍り付いてしまい地面から離れない。間髪入れず機械のようにパカツとヤツの口が開き、おれの身体ぐらいでかくて尖った氷塊が生み出されると、まるでミサイルみたいなその弾頭が、身じろぎできないおれの方に寸分違わずロックオンされる。

(やべえ！　死ぬ……！　くそ、人間のガキなんざ、ほつときやよかつたぜ)

どうしても見殺しにできなかつた。

馬鹿で、おひとよしで……犬好きの、ガキ。

(……ちっ！　脚を、捨てるしか……)

命には代えられない。断腸の思い（切ると決めたのは前足だが……なんてシャレにもなりやしねえ）で覚悟を決める。

そのはずなのに、すこしだけ、思ってしまった。

おれとしたことがありえねえ、なんて自嘲する。

一瞬浮かんだ、人間のくせに、おれを犬扱いしやがらない……へんな女の間抜け面。

——先輩にも、そのうちわかりますって——

(ファン……よくわかつてるさ、後輩。人間なんて、皆おなじ。勝手なもんだってな)

頼れるのは己のみ。だれもおれをたすけになど、くるわけがない。わかつていた。そんなこと。

無意味な感傷に浸っている暇も、躊躇っている暇もあるはずがない。『愚者』^{ザ・フル}の鋭く磨き抜かれた自慢の爪をあてがい、一気に引こうとした瞬間だった。

「……エメラルド・スプラーツシュ!!」

地上と下水道をつなぐ出入り口。そこから聞き覚えのある声とともにきらきらした緑色の宝石が飛んでくる。それが足元を拘束していた氷をねらいすましたかのように粉々に砕いたかと思うと、そのままおれの身体は間一髪、触手からめとられて空中に難を逃れていた。

「イギツ!!(き、……気障男!?)」

梯子に足をかけるのもどかしそうに、途中で飛び降りこちらへ駆け寄ってくる。あたりに舞い散る氷のかけらと水煙をかき分けて現れたのはへんな前髪……もとい、いつ

もスカしたあの男の必死の形相だった。

「イギー！ 大丈夫か!？」

「グウ……（あ、ああ……）」

「よかった、どうにか間に合ったようだな」

いいつつ、そつとおれを地面に下ろす。信じ難い光景に目を瞬かせるも、そんな場合ではないことを思い出し、かぶりを振り気合を入れ直す。

見上げると、突如出現した増援に敵は警戒を深め、ゆっくりと旋回しつつ様子を窺っていた。

「あの『鳥』が敵……スタンド使いか」

「ワン（ああ。かなりやべえぜ）」

「クケエーッツ!!」

威嚇するような高い音が壁や天井で反響し聴覚を攻めるとともに、射殺されそうな鋭い眼光がギリリとむけられる。並のやつならこれだけでもすくみ上つてしまいうだろう。まさに獲物を狙うときの猛禽類といったところか。

「くるぞッ!」

再び、ヤツの口から続けざまに大量生産された氷のミサイルが放たれる。

「させないっ!」

「ガウツ!? (こ、後輩まで!?)」

それを、男に続いて梯子を下りて来た女が自らのスタンドで次々と迎撃する。

「グウ…… (ふん、なかなかやるじゃあねーか、後輩。けど、このままじゃ……)」

「ああ。残念ながら、まさにジリ貧、というやつだね」

「花京院くん! 先輩! 早くこっちに! 師匠の炎とか、あの鳥苦手なんじゃ……」

ふたりに戦況を憂いていると逃走経路を護りつつ女がいう。

「よし、致し方ない。戦略的撤退だ」

「パウ (しゃーねえ、一旦ずらかるか)」

しかし、そうはいかないとばかりに鳥公がジロリとおれたちと女とを交互に睨む。

同時にそのスタンドがまたもや絶対零度の如き冷気を吐き出し、広範囲を凍りつかせる。

「セシリア!」

「あつ! ちよつと、なにを!」

それに対し後輩は、あろうことか、おれたちにむけてスタンドを放つ。

ピンク色のドーム状のものが、冷気を遮断してくれるが……。

(この、ばかやろうツ!)

「きゃーツ!!」

ひとり凍気に取り囲まれる、後輩。

「仁美さんッ！」

「だ、だいじょうぶ！　だ、だけど、あ、足が凍っちゃって……う、うごけないっ！
そして、……さ、寒いッ！　冷たいッ!!　あ、あれ？　しまった、セシリアも!!」

しかもスタンドを元の形に戻し自分の所に飛ばそうとするも、できないようだ。

「ギョロロロロ……」

勝ち誇り悦にでも浸っていやがるのかゴキゲンに咽を震わせながら、鳥公が女に照準を定め、とどめを刺すべくその口を開く。

「いかん！　ハイエロ……あ……!」

(……うおおっ!!)

それより速くおれは動いていた。

(つたく、人間ってやつは、ほんつとうにッ……!)

「先輩ッ!？」

「……グワアウツツ!! (……めんどくせー、ほつとけねえ奴ばっかりだぜーッ!!)」

ヤツの嘴に噛みつき、ミサイルが発射される直前のそれを塞いでやる。行き場のないエネルギーが逆流してどんどん膨れていくヤツの身体。

「ぎ、ギョギヤアアアーツツ!!」

それがとうとう限界を迎えて破裂する！

(うおっ！)

「おっと！」

爆発の勢いで吹っ飛ぶおれを男ががしつと受けとめる。

(はあ、はあ、はあ……。やった……。ざまあ、みる……。！)

「せ、先輩、すみません……。！」

「あ、危なかった……。無事かい？ イギー」

「グウ（チツ、なんとか、な）」

「だいじょうぶそうだな。よかった」

「フン（けつ、まったく、とんでもない目にあつたぜ）」

男は傷をざつと見分して安堵の息を吐いたのち、改まった様子でおれの目をまっすぐに見つめる。

「……彼女のこと、護ってくれて、ありがとうな。助かったよ」

「ガウ！（まったく、あぶなっかしい女だ。ちゃんとてめーがしつかり首輪つけて見張つてけー！）」

「ああ。ほんとに。僕もそうしとけるものならそうしたいよ。

……首輪か。それいいな。買ってくるかな」

「……。 (そろいもそろって……。、こいつら……)」

半ば呆れて絶句していると、むこうからも女ののんきな声が聞こえてくる。

「ふたりともー！ だいじょうぶですかー？ とりあえず早く戻りましょーつ。ここ、ほんとに寒い……。その前に、ごめんなさいーつ！ この氷、なんとかして！ 動けないー！ ……それに寒い！ なにより寒いッ!! 重要な事なので何回もいますが、寒いー!! 助けてー！ しもやけできちやう！」

「ふつ……。 さ、いこうか」

「……。フキユー (……。本当に、変なやつらだ)」

「まったくもう！ あなたってひとは！」

忌々しい地下下水道から命からがらな気分で這い出ると燦々と清々しい眩しさに迎えられる。お天道様がこんなに愛しいと思ったのは初めてだ。

その暖かみを満喫しているおれの横で、気障男にガミガミとめちやくちや怒られる後輩。

「ご、ごめんなさい……。…」

「何度いえば……。!! あなた、広範囲攻撃に弱いんだから！ ああいう場合は……。…」

「い、いや、動けなくなるだけなんだったら私の方が、いいじゃない？ ふたりが動けない方がまずいかなって、思つて。ただちよつとセシリアも動けなくなつちやつたつていうのが誤算だつただけで……」

「言い訳しないツ！」

「うぐ……」

欠伸をしつつ、口を挟む。

「キュウ（無駄無駄。言つたつてこいつの馬鹿はなおんねーよ。諦めてしつかりおもしろるんだな）」

「ひ、ひどい！ 先輩まで……ちゃんと気をつけるもん！」

余計な事はするもんじゃあなかつた。飛び火がこちらへと向けられる。

「というか、イギーもだ！ これに懲りたらひとりでふらふらしらないこと！ 危ないだろう!!」

「ガウ（ああ？ほんとに口うるせー野郎だ。きにくわねーのは前髪だけじゃねえな。この気障男改め、説教男が）」

「はあ!？」

「ぶっ！ くくく……!」

「失礼な！ 僕は好きで説教ばかりしてるんじゃないんだよ!! しかも、僕のこの洗

練された前髪の良さがわからんとは……!」

「あ! はい、はい! 先生! 弾性率および柔軟性に富んでおり、スキューバや墜落もなんのその! 大渦も爆風もへっちゃら! 型崩れしない! 完全なるウォータープルーフかつ形状記憶! そして仲間との位置関係やカメラアングルによって、自由自在にたなびき、空気まで読めるツツ! 審美的には言うまでもなく、機能的にも完成された、この世にふたつとない、素敵な前髪だとおもいますっ!」

「……。一応、ありがとうございます。」

「……うん。なぜだろう? 褒められたはずなのにあまりうれしくない……」

なおも男がぶつぶついつている隙に、後輩がこっそりおれに耳打ちする。

「ね、先輩? 私のいったこと、すこしだけわかってくれたでしょう?」

「イギツ! (ふん、なんのことだよ。つーか、てめーは後輩のくせに、いつつも生意気な

んだよ! ばーか!!)」

「ふふ、すみません」

しらばつくて悪態をつきながらも、おれは思い出していた。

前に葉臭い建物の庭で、こいつの膝の上、聞いたセリフを。

——あそこにいるひとたちは、いいひとです——

(まあ、……ほんのすこしだけ、な)

「なんですか？ ふたりでこそこそと……」

「なんでもないです。というか、花京院くんも先輩の言っていることわかるようになったんだ。よかったね！」

「そういえば……。って、さつきからあなたは！ そんなことで僕は誤魔化されませんよ！ ちゃんと自分の反省をしなさい！」

「も、もう、してるもん……」

「……でもよかった。なんだって。先輩が無事で」

「……ふつ。まあ、そうだね」

「そういつて、そつくりなかおを並べておれをみるふたり。

（ちつ、『つがい』つてのは、こうも似るもんなのかね。

まったく、調子くるつちまうぜ。くそ……！

おれはただ、気楽にのんきな生活を送りてえだけなんだよ。

厄介ごとになんざ関わりたくねえ。それなのに……）

「……」

（こいつら……こんな馬鹿なやつらを見てると……）

頭に浮かぶ、迷い。その原因どもに目を遣る。

「それにしても、あなた寒い寒い言い過ぎでしょう。」

それよりもあの状況下ではもつと気にすべきことが……」

「だって嫌いなんだもん。寒い……」

「どんだけ嫌いなんですか……。言ったら余計寒くなりませんか？」

「古来から、我慢はからだに毒、といいまして……」

「はいはい、そうですね。へんなどこ我慢強すぎるくせになあ。」

まあ……たしかに、寒かったけど……」

ぶつくさいいながらも男はおれでいう前足の肉球で後輩の頬を包み込む。

「……ほんとだ。あーあ、もう。こんなに冷えちゃって」

「……っ！」

瞬時に茹でた、おれには食べられないアレ……のようになる後輩。

「あ、う……、も、もう、だ、だいじょうぶ……！」

す、すぐくあつたかく……なった、から……っ！」

「そ、そうですか？」

（……けっ!! まじでつきあつてられつか! こんなやつらに!

とつとと帰って、おれもかわいー雌犬、たくさんはべらして楽しく暮らしてやる!)

心に誓う。と同時に独り言ちる。脳裏に鮮明に刻み込まれている、先程の映像。

おれが襲われた、場所

(……あーあ。……どう、すっかな……)

*

*

*

「おお、やっと戻ってきたか」

「おせーぞお。なにしてたんだよ……」

自業自得な耳の痛いお説教を頂きながらも、私が花京院くんと先輩とともにポルナレフさんと分かれた場所へと戻つてくると、残りの4人がすでに待ちくたびれた様子で佇んでいた。

「いや、それが……」

代表して先程の顛末を報告および説明してくれる花京院くん。

「はあ!? イギーが敵に!」

「はい」

「た、大変だったんだな……」

「ご、御苦労さん……」

驚きと労いの言葉をかけられる中、承太郎君がぼつりと呟く。

「……猿の次は鳥か。ん？ 犬も合わせたらあれだな」

「ああ。鬼退治？ 私もちよつと思つ……」

「いや、おれが言いたいのは、エキセントリックな方だ」

「……」

「ああ、そういえばカウボーイもいたな。

敵かな？ 味方かな？ くくく……」

「……意外とお笑い好きなんだね、承太郎君」

（もはやあんまり意外でもないか……）

ジブリが好きでお笑い好き。取り巻きのお嬢さん方にその事実を声高に伝えたい気分だった。

……結果その数が激増するであろうことは想像に難くないけれど。

「まあ、何はともあれ全員無事でよかったわい」

「ええ」

「で、だ。揃ったところで……折り入ってひとつ提案があるんじゃないか」

かしこまった真剣な表情で、ジョースターさんがいう。

「なんですか?! 僕達がああ鳥と闘っている間になにか進展が!？」

それに身を乗り出す、真面目な彼。

「いや。全然」

「……」

「おいおい！ そんなジト目で睨むな！ カリカリしたって目的のものがみつかるわけじゃあないじゃろ？」

「そりゃあ、そうかもしれないが……」

「ちようどいいから、延ばし延ばしになっとった『あれ』をな、しておこうと思うんじゃないよ」

「なにをですか？」

「……写真を、撮ろう。……皆で」

「……よし、では現像しておくからな。楽しみにしとつてくれ！」

「はい！」

（うん……楽しみ。）

もう、たからもの、だよな）

うれしかった。なによりも。

このひとたちと、ともにあるいた……その想い出はこうしてちゃんと、残るのだ。かたちあるもの、として。

「つーか、ほんと、なんでじじいそんな呑気なんだよ」

「まあ、見つかる時はぼろつと見つかるもんよ。あせらないあせらない」

「…………グウ…………」

（…………先輩？）

足元をみると、思い悩むように唸る、ちいさいけれど大きなその背中に気づく。でもその内容が『なにか』を私が知るのは…………もうすこしだけあとのこと。

…………この日の、真夜中になってからだった。

月光

「ふう……」

溜息と共にベッドからむくりと起き上がる。

氷塊舞う地下下水道でイギーと彼女ともに僕達が鳥のスタンド使いを撃退したその夜のことだ。

流石は敵の本拠地。連日に渡り絶え間なく敵の襲撃がある中、無論疲労も蓄積している。休めるときに休んでおかねばと早めに横になったものの、神経が昂ってしまっているように到底眠れる気などしなかった。少し外の空気でも吸おうと思いい立ち、部屋を出る。

世界中に自分しか存在していないのではないのか。そんな壮大な勘違いをしてしまうほど静かな、物音ひとつしない廊下を僕の足音だけが響く。それでもまつしろい螺旋階段を上りきったところでカーテンの揺れる硝子窓のむこう、バルコニーにたたずむひとつの影をみつけた。

「……仁美さん、どうしました？ 眠れないんですか？」

そこへと続く扉をゆっくりと開け放ち、その背中に声をかける。流れ込んでくる清廉

で神聖な香りを纏った空気に心が洗われていく気がした。

「あ、花京院くん。うん、そうなの。だから……」

はにかみ、うなずいたのち、上を向く。

「星、みてたんだ。きれいだよ」

「……ほんとうだ」

自分もみあげると、まさに一億の星。それが今にもこぼれおちてきそうな圧巻の夜空だった。深い藍色の空一面に様々な光度、様々な光彩で散りばめられた無数の星が煌めいている。

そんな美しい星空の下でカイロの街が眠っていた。ほのかな光をいっぱいに浴びて石畳は星明りに白々とのびている。街灯なんていらぬ。夜道を星の光だけで歩けそうなのだ。

「それに、ほら」

「ああ……」

輝く星々。これだけでも既に充分絢爛で眩暈がするほどなのに、なおも続きがあるらしい。

彼女が指したそれは空の高いところでひとときわ明るい光を放ちながら、星と雲の間をゆつくりとあるいていく。

溶けてしまいそうに柔らかく、しかし星影が霞むほどの鮮やかな月光を放つ満月。きもちよさそうに空を泳ぐそれに導かれ僕の頭にもぼんやりとひとつある考えが浮かぶ。それを口に出そうかどうかしようか。豪華な夜空に気を取られているふりをしながら、ちらりと隣をうかがいみると、躊躇しているその隙に僕はまんまと先回りをされてしまう。

「……『今夜は、月がとても綺麗ですね』」

月の光が彼女の綺麗な黒い髪を伝い、白く滑らかな頬を、つややかな唇を、滑る。

「えッ……?」

「……」

「い、いまのは……?」

「……ん? ことばのとおり、だけど?」

すこしだけ顔をのぞかせたかと思うと、それはすぐに微笑と共に雲のすき間に隠されてしまう。

「それは、もしかして……っ!」

しりたくて、つかみたくて、しかたがなかった。

しかし、月明かりの下にさらそうと投げかけた僕のことばはかき消されてしまう。

「あ、流れ星!」

「あ……」

視線の真つ直ぐ先、流星が長く輝く光の尾をたなびかせながら、虚空を斜めにおりていく。

瞬間の儂い発光は月明かりにも勝るほどだった。目を凝らすと、細かく、でもたしかに存在する星屑が周囲にきらきらと舞っていた。

「御願い！ 願いごとしなきや！ ほら、もういつかい来そう！」

促され、彼女にならない、目を閉じる。

願えば叶う、そんなのおとぎ話だけの世界だ。そんなことはもちろんわかっていた。けれども心に決めた、確固たる想い。それをかたちにしたくて、一心不乱に祈った。切なる、心からの願いを。

静寂がとおりすぎたのち、ゆっくりと瞼を持ち上げ、問いかける。

「……なにを御願いしたんですか？」

「もちろん、ひとつはみんなが無事、目的を達成できますように。」

それと、もうひとつは……秘密。そっちは？」

「おなじですね。一個目は。もうひとつは……僕も秘密です」

ふわふわとくすぐったい感覚を胸にひそかに忍ばせながら、こたえを告げ合う。

「叶うと、いいな」

「叶いますよ。叶えて、みせる」

「……………うん。かならず」

淡くまわりを取り巻くすべてに背中を押され、僕は彼女にひとつ提案をすることにした。

「ああ、そうだ。御願いいえば……………」

僕、あなたにずっとまえから御願いいたいことがあったんですよ」

「そうなの？ なに？」

そう切り出すと、なぜかとてもうれしそうに、空のそれらに負けなくらいその瞳を輝かせる彼女。

「……………僕の……………」

息をすいこむ。僕のそれにつられるかのように、天でも星がもうひとすじ、ながれる。

「絵の……………モデルになつてくれませんか？」

「……………ツ!!」

「そ、そんなに緊張しなくても……………。別に動いても喋つてもだいじょうぶですから。

はい、とりあえず、ちゃんと息はしましょう」

「……………ぶはあつ！ は、はい……………」

「いいんですよ、僕が描きたいのはそのままのあなたなんだから。意識しないで、リラックスしててください」

「そ、そういわれましても……」

「ふっ、まあ、それもそうか」

「こういうことにはんで不器用な彼女を微笑ましくおもいつつも、対策に頭を捻らせる。このままでは2ビットな彼女に仕上がってしまうのは確実だ。それはそれで、らしくていいのかもしれないが。」

「では……、そうだ」

「そして、ほどなくして僕はおもいついた。最高の名案を。」

「なにかすきなもののごとでも考えてみてください。」

「もふもふな犬や猫と戯れている、でも、」

「発売したてのシリーズ最新作のゲームをプレイしている、でも、」

「休みの日の朝に二度寝をする瞬間、でも」

「推理小説の犯人当てに見事成功した、でも」

「極上の巨大苺パフェを目の前にしている、でも……なんでもいい」

「すきな……もの？」

「ええ」

「……わかった」

目論みは、どうやら成功したらしい。

彼女はうかべる。

僕の描きたくてしかたがなかった、その表情を。

闇に包まれた夜だなんて、到底思えない。

だって僕の目に映るすべてが、あまりにもまぶしくて、あまりにもあざやかに彩づいてみえるから。

けれど、きつとそれは、月のせいでも、星々のせいでもなくて……

しあわせ、だとおもった。

こんなふうに、

ひとりじめをして……

ただ、みつめて……

……ずっとこの瞬間が、続いたらいいのに。

「……っ、くしゅん！」

「ご、ごめん」

「おっと！ 寒いですか？」

「ううん。昼間のアレにくらべたら、全然」

絶対零度に包まれたあの瞬間を思い出すみたいにしん震いしたかとおもうと、あつげら
かんとそれを吹き飛ばす。

「そりゃあそうでしょうけど……。もう戻りましょうか」

「だいじょうぶだよ。どっちかというと、空気が澄んでてきもちいいから」

「そうですか？」

改めて空を見やると、澄みきった空気が冴え冴えとした星を幾分近くに感じさせてい
た。

「まあ、たしかに。だから……星もくつきりとみえるのかな」

「うん」

星空に彩られたしんしんと冷たい空気は吸い込むたびにどこか晴れやかな気分をも
たらしてくれるようだった。頬にぴりりと吹きつける風ですら何故かすこし心地よい。

「日本も今寒そうだね。真冬だもんね。今日……1月の15日か。

そういうえば、ジョースターさんが言っていたんだけど、承太郎君、誕生日らしいよ。もうすぐ」

「へえ、そうなんです」

「その日はサプライズパーティーしようって。皆で」

「おお！ それは実にいい案だ。あいつのびつくり顔なんてめったにお目にかかれませんからね」

「ふふ、そうだね！」

驚きといっしょに彼の顔に浮かぶにちがいない。

ぶつきらぼうなそれでも到底隠しきれない、満面のよろこびが。

その瞬間を想像してこちらまで笑みが漏れてしまっている僕に彼女がにこにここと訊ねる。

「花京院くんは夏だっけ？ 誕生日。たのしみだね」

「はい。まあ、まだまだ先ですけどね。

というか、この歳にもなって……。もう別にそんなにたのしみでもないですよ」

「ええ？ そうかな？ 私はたのしみだけ」

「やっぱり。こどもなんだから。」

ふっ。それも、とてもあなたらしいけど」

ほほえましさにおもわずさらに表情が緩む。

「ち、ちがうよ。『自分の』が、じゃあなくて、その……」

しかしそれに対し首を振ると、彼女はたどたどしくも懸命に訂正する。意外な箇所を。

「……『あなたの』が」

「あ……」

「お祝い、するね」

「……そうか。なら、僕も……すごく、たのしみになってしまったかも、しれない」

こちらが逆光でよかった。そう心から感謝し浮き立つように湧き出る想いを覆い隠している、彼女はさらに僕に対してとんでもない宿題をだそうとする。

「じゃあ、なにがほしいか、考えておいてね？」

「え……?」

(……僕が、ほしいもの……?)

「っ！ そ、それは、僕ではなく、あなたが考えることでしょうか!」

考える余地なんてあるはずもなく瞬時に浮かんでしまったこたえ。

それを悟られないよう、どうにか誤魔化す。

「うん。でも……ちゃんと花京院くんの『ほんとうにほしいもの』を、あげたいから」
真剣すぎるそのまなざしから、すこしだけ視線を逸らして、心でそらんじる。

(いったら……くれるというのだろうか)

ならば、いつか、いつてみようか。

僕はほしい、と。

世界中のほかのだれでもない。

あなただけが僕にあげることができる『それ』が。

「けど、それもそっか。じゃあ、がんばって考えるね」

「……はい。そうしてください。ちゃんとお返ししますから。数倍にして。」

しかし……あれ？ あなたの誕生日は……いつでしたっけ？ そういえば聞いたこと
とがなかったな……」

僕その疑問に対し、よくわからないことをいう彼女。

「ほんと？ うれしいな。」

でも、もう、もらっているんだよね。私、実は」

「え？」

「あの日だったの。私の誕生日」

「あの日、つて？」

「……みんなと、はじめて出逢った日」

「は!?! ほんとに?」

「うん。ほんとに。?みたいでしょう? でもほんとなんだ」

そういつて僕に背をむけ、バルコニーの手すりをぎゅつと握りしめる。

「……だから、もう……じゆうぶん、かな」

まっくらな夜に呑み込まれてしまいそうなほど掠れた、今にも消え入りそうなその声を僕はあわててすくい上げる。

「……だめです」

「え?」

そして、跳ねのけてやる。

「全然足りない。そんなのじゃあ。」

たのしみに、しておいてください。『自分の』も」

「……そっか。」

っ…………… たのしみ、すぎるかも……………」

「……………もう、なんで泣くかな」

「ふふ、なんでだろ? ……おかしいね」

「さ、わらって。

じゃないと、そのなきがお、描いちゃいますよ？」

「……うん」

目尻の雫を指先で拭い、月夜を仰ぐ。

それをみているとふと思ひ出した。虚空にぽっかりと浮かび、冴え冴えとした青い光を放つ満月故郷を愛しくも切なく見上げる御姫様の話を。

言いようもない焦燥と不安に駆られ、気付いたら僕は口にしていた。

「……帰っちゃわないでくださいね」

「……え？」

「月に」

輝夜姫なんかより、きっと、もっと、ずっときれいだけど。

もちろん実物を見たことなんてない。けれども僕には確信があった。

なぜなら僕にとってこれ以上にうつくしいものなんて存在しえないからだ。

「ふふ、もう、急になにいつてるの？ 帰らないよ、そんなところに。だって……」

おだやかでやさしい碧の瞳が静かに、まっすぐに強い光をはなつ。

「私は、日本に帰るんだもん。」

ちやんとぜんぶ終わってから。みんなでいつしよに……ぜったい」

まん丸の大きな月が僕らを護るように照らした。

『そうしたら』

その光に心を奪われて、つい零れそうになったことば。それを月と星たちの視線を感じ、どうにか呑み込むと代わりに絵筆を走らせる。

向かいに佇む教会の屋根に青白い月光が流れて美しく碎ける。

月光花。まるで、月の光に咲き出た一輪の花のようだった。

やわらかな月明かりを全身に浴びて、僕にほほえみかける彼女は……

やっぱり、しんじられないくらいに綺麗で。

そのすがたを、とどめるように、やきつけるように……夢中で描いた。

キャンバスだけではない、なにかにも。

「……よし、これくらいにしておこうかな。

ありがとうございました」

後ろ髪を引き続けるなにかを振り払いつつ、それをおくびにも出さぬよう努めながら

いう。

「え？ もういいの？」

「ええ。つづきは、また、で」

「わかった。また、ね」

「……はい、また」

そう己にもいいきかせながら。

「どんな感じ？ みせて？」

いいつつ、僕の手元を覗き込もうとする彼女。

「……だめです」

させまいと、スケッチブックを高く掲げる。

「ええ？ いいじゃない」

「ちゃんと、完成してからね」

「もう、ぜったいだよ？」

「はいはい。ぜったい、ね」

「さあ、あまり身体を冷やすのはよくない。そろそろ、もどりましょう」

「うん……」

「じゃあ……」

「……うん」

彼女の部屋の前。先程のお返しをしておくことにする。

「ああそうだ。さっきの……『返事』ですけど」

「ん？ ……なんのことかな？」

とぼける彼女にはつきりと告げる。

「僕は、『もう、死んでもいい』」

「え!?!」

「……じゃあ」

「ちよ、ちよっとまって!」

「なんですか？」

「そ、それって、もしかして……あ、あの……？」

「ふっ。さあ？ ……ことばのとおり、ですが？」

「っ!」

「じゃあ、おやすみなさい。また……あした」

「お、おやすみなさい……」

星も月も、示し合わせたのかとおもった。

まるで夢の景色の様な、それは嘘みたいにただひたすらに綺麗な夜空だった。

狂おしいほどせつなくて、どこかかなしくなるほどに。

奇しくもこの夜が、そうだったなんて……

そんなこと、知るべくもない。

しっけていたら……僕は……。

決戦前夜。

僕たちが、D I Oの館に突入したのは……この翌日のことだった。

第5章 Fateful Day

Bluesy morning

すごく、きもちわるい。

どうにも言葉では表現し難いのだが、例えるならば……そうだ。浅い眠りに落ちた時。身体は眠っているのに精神は覚醒している状態。いわゆる金縛り。あれだ。感覚的にはそれに近いかもしれない。

要するに、動きたいのに動けないのだ。意識はこんなにクリアなのに。

いや、それには若干の語弊がある。意識清明ではあるが、視界は真つ暗。目を開けているのか閉じているのかすら判断がつかない。加えて、何よりもわからないことがあった。

僕の身に一体、何が起こったというのだろうか？　それが、よく思い出せないのだ。

ならば、と、五感を研ぎ澄ましてみることにした。意外と視ようとすれば、聴こうとすれば、嗅ぎようとすれば、味わ……。舌の筋肉を動かさないのでレロレロができな、ゆえにこれはさすがに不可能か。さつき発声をしようと試みてみたが、声帯を上手く震わせることができず「う、あ、う、あああああ……」という声ならざる声しか出せずじ

まいだった。……無理だと思つて逆に今すぐチェリーが食したくなつてしまつたではないか。どうしてくれよう。

話が逸れてしまつたが、聴こえたのだ。己の唸り声が。ならば視えもするかもしれない。つまり言いたいのはやろうと思えばいけるかもしれない、ということだ。

そんなわけで、やってみることにした。

……予想通り。意外とやればできるものだ。

薄らぼんやりと僕の網膜が受け取つた刺激を視神経が伝え、脳内に像を映し出す。

僕が居るのは……四方を海で囲まれた『島』だろうか？

島といつても、本当に小さな島だ。ひよつこり、ぶかぶかと瓢箪が浮かんでいるかのような、せいぜい6畳くらいの面積のもので、田舎から上京してきた女子大生が借りるワンルームより狭そうだ。まあそれを口に出そうものなら「東京のマンシヨンの家賃は狭くつたつてべらぼうに高いんだよ!」と、現在絶賛そんな部屋で日々質素儉約をモツトに暮らしているという彼女に猛烈批判をくらいそうではあるが。……よし。からかうための良いネタができた。きつと頬を膨らまして期待通りの反応を示してくれるに違いない。

周囲はうつすらリゾート感すら漂う、波の音やヤシの木に囲まれた海岸だ。砂浜を呑気にカニがひよこひよこ横歩きしている。

一方それと対称的に、島の中央には不似合いな4台のTVモニターが東西南北各々を向いて置かれている。

そして、その前に対峙し、それぞれ画面を睨んでいる男が二人。

(承太郎……、ジョースターさん……、……ダービー……ッ!!)

その光景を認めたとき、全身に衝撃が走る。

ようやく、思い出した。

僕は、敗北したのだ、と。

魂を賭けたゲーム対決に。

申し訳なき、不甲斐なきといった負の感情が入り混じった、苦々しくもやもやとしたものが心の中を浸食していく。

『人形』になつてしまつているのだ。僕も。

勝負前に見せびらかしていた、紳士ぶつてはいるが反吐が出るほどの最低のサイコ野郎であることがうかがえる奴の『コレクション』。元は人間、今や変わり果てた姿で呻き声を発しながらぼつかりと虚空を見つめる彼らの漆黒の眼を思い出す。

しかし、このまま生きた人形として自分も一生棚に収められる羽目になるのだろうか……といった今後に関しての憂いはまったくなかった。

友の背中側に立ち実況をしているようにみせかけ、その実、『なにか』を企てている。

そんな彼の祖父の表情が確認できた。

きつと『最低限の仕事』はできたのだろう。僕は。だとすれば、あとは待つ。それだけだ。

彼らが負けるわけがない。まあ、そういうことだ。

とはいえ、勿論自らが勝つ自信はあつたのだ。が、『相手にフツ飛ばしてもらつてコーズをショートカット』だなんて裏技、独りぼっちプレイ専の僕に喧嘩を売っているとしか思えない。ただし念のため言っておくが、ちつともうらやましくなどはない。ぼっちの利点、それを僕は誰よりも知っている……し、それに、だ。僕だつて仲間の某隠れおたく（注、自身も同類である）ことを素直に認めるとともに、僕的には無上の褒め言葉である）と日本に帰つたら共にゲームに興じる約束をしたのだから。さらなる高みを目指すのだ。彼女とともに。……なんか違うか。

我ながら、ふつとおかしくなる。表情筋を動かすことはできないが。

残されたのは、ぼやけきつた五感のみ。考えることしかできない。まるで眠りにつかつかないか、その直前のような状況下、取り留めもなく思考が四方八方に飛び回る。

そんな中、浮かぶのは……行きつくのは、結局のところ彼女のことばかりだ、と。

旅に出る前、過去の自分に教えてやりたいものだ。

おまえにも、ちゃんとみつかるのだ、と。

それを気づかせてくれる、たいせつなひとに出逢えるのだ、と。暗闇に射しこむ、光。

しかし明るすぎるそれは、否応なく影を創り出す。

様子が、おかしかった。

不安から来るものかと思ったが、それとはまた別の、なにか。

本人に訊ねたが、緊張しているから、と、はぐらかされてしまった。もう少し突き詰めた話があったが結局それは叶わずじまいで……。言いようもない不安に押し寄せ、せめて、と彼女のポケットに気づかれないようにこっそり『御護り』を滑り込ませた。あれが役に立つといいのだが。いや、無論役に立つ局面など来ないのが一番ではあるが。

今朝のことだ。朝食のため集合した面々の前で彼女が驚くべきことを言い始めたのは。

「DIOの館が、みつかった」と。

昨晩深夜、皆が寝静まった頃、イギーが連れて行ってくれたらしい。何故彼女に、というのは簡単なことだった。

ルクソールで皆と再合流してから、彼女はイギーの世話係（彼的にはおれが世話してやってんだ、とか思っていそうではあるが）を嬉々として担当している。

餌をあげたり、おやつを奪われたり、風呂に入れようとして水びたしにされたり……

苦勞しつつも楽しくて仕方がない様子だった。

その甲斐あつてか、素直でない彼の現在の寢床は彼女のベッドの上らしい。うらやましくなんてな……嘘だ。うらやましすぎるに決まっている。

最初からフラットだった彼女の彼に対する真摯な態度。そして日々の努力に加えて、昨日の隼スタンド使いとの死闘も相まって……といったところか。理由は。

彼らの案内で、カイロの端。ひとつの館の前に到着した。

そこは隠者の紫が写し出した写真の映像そのまま、僕たちがずっと探し求めていた場所だった。

なによりの証拠として、ジョースター家のふたりは屋敷を見上げながら確信めいたプレッシャー圧力を感じていたようだ。それこそが、『血の記憶』、というやつなのだろう。

自分も彼らほどではないが、ずしりと、全身にのしかかるような……まわりつくような、嫌な感覚を肌を受けた。反射的に己の抹消に起こった不随意な運動を誰にも悟られないようにひた隠しにしながら、武者震いだ。そう自分に言い聞かせていると、ジョースターさんが全員の総意を代表して呟いた。

「我々の旅は、とうとう終着点にたどり着いたのだ」と。

門番はもちろん不在。

ひとりでに開いた館の扉。

しかし、そこには誰もいなかった。

ただ、長い……本当に長い廊下が、あるだけだった。

だがそう思ったのも束の間、場へ奇抜な恰好をした、ひとりの男がすべりこんできた。その自称・執事は驚くべき自己紹介を始めたのだ。

男の名はテレンス・T・ダービー。

あのギャンブラー、ダービーの弟だった。

兄は兄、わたしはわたし。などと言いつつも兄のことを意識しまくっているブラコン野郎であることが随所に垣間見られた（今冷静になつて考えたら勝負の際に言つてみればよかった。「Exactor、凶星だろう？」と。人の精神力をどうこう言う前に自分はどうかなのか、試してやればよかったのだ。まあ、それはきつと承太郎とジョースターさんが現在進行形でやってくれているのだろうけど）その男は、ジョースターさんとポルナレフを軽く煽つたあと、スタンド「幽波紋『アトゥム神』を出すと、巧みな話術で我々を誘導し、結局思惑にまんまと嵌まる形で一行はふたつに分断されてしまったのだ。……」とつておきの世界へお連れしましょう」そんないちいち鼻につく台詞と共に。

奈落のような穴の先、たどり着いた屋敷の地下にはとても見えないこの島にて、承太郎、ジョースターさん、僕の三人をダービー弟がしたり顔で待ち受けていた。そして「身内でない貴方はいざとなつたら逃げだす」などとこの舌めきつた理由で指名を受けた僕

が最初に闘った結果、今に至る、というわけだ。

「ポルナレフ、アヴドウルさん、イギー、……仁美さん」

現状を理解するとともにコツも掴めてきたのかすらすらと言語が発せるようになってきた。この場には仲間の顔を思い浮かべながら、その名を呟く。

向こうは、大丈夫だろうか……こんな状態の僕が言えたことではないか。などと自嘲する。

皆の事を信じている。が、どうしても嫌な予感が心にどんどん膨れ上がっていく。

もどかしい。こんな状況下で片時も離れてなどいたくないのに。早く……僕は……

どうしようもない焦燥感にただ抗うしかできないでいると、それを妨げるかのように上方向から無遠慮な声が降ってくる。

「お、おお、お兄ちゃん、新入りかい？ ……ま、ママ！ ママッ!!」

「やあ、はじめまして、新入り君。どこか痛いところはあるかい？ ふむふむふーむ、それはいけない、今すぐわしに診せたまえええー」

「ダービーー、ああー、ダアビーー!! さびしいの、わたしの話を！ おねがい、お話を！」

「う、うわああああああ!!」

話しかけられてしまったようだ。例の変な『人形』達に。いや、今は自分も同じよう

なものなのだけでも。

確かヤツの紹介によるとIQ190の天才ゲーム少年タツヒコ君に、医者で殺人鬼（手にかけて数なんと8人）のエリオット氏、華麗なる恋多き女、ソニア嬢……だっただろうか。

「そんなにごわがらなくておくれよう。おでと遊んでおくれよ……ママーッ!!」

「案ずることはない。わしは超一流の外科医だ。……結局殺してしまうのが玉に瑕だがねええ」

「新入りさん？ この際貴方でもいいわあー！ わ、わ、わたしと話をしましょうううー！」

正直あまり（いや、かなり）関わりたくないが、付き合わなければ収集がつかなさそう。これが人付き合いならぬ人形付き合いというやつだろうか。人形も大変だ。

「お、おではタツヒコ。退屈で死にそうだよオ。ゲームしたいけど、今はダービーイさんがやつてるから……お、おでとなぞなぞクイズで勝負しよう。全部解けたらお兄ちゃんの勝ちイイー！ ……ママーッ！」

「わ、わかった。ど、どうぞ……」

「では第一問！ 表と裏が一緒に見える不思議なものは何？」

「続いて第二問！ 何かを見ている時には決して見ることができないが、見える時には

目をつぶっていても見えるものは？」

「そしてそして、第三問！ 貴方が車で走っていると目の前の自転車少年がよろけてカゴに積んでいたバット、グローブ、シューズが転がってきた。貴方が最初に踏んだのは？」

タツヒコ君から息つく間もなく繰り出される攻撃達。なぞなぞ

「答えは……」

それを即座にさらりと迎撃する。

「……一問目が『野球のスコアボード』」

二問目は『夢』。

そして三問目が『ブレーキ』

「ピンポンピンポン！ せいかい！ ややや、やるじゃーんっ！」

「ふう、どんな難題がくるか恐々としていたが。舐めてもらっては困るな」

「で、でもおでは負けないよ、ママーツ！ 今のは肩慣らし。次こそはとっておきさあ！ 制限時間は30秒。あのインシユタインの出した、98%の人が解けないクイズいくつかおーッ」

「!？」

「ある所に 5つの家が 並んで建っていました。それぞれの家は赤、黄色、緑、白、

青の いずれかの一色で ペイントされていて、どの家もほかの家と違った色でペイントされており、それぞれの家には イギリス人、ドイツ人、ノルウェー人、オランダ人、スウェーデン人の家族が住んでいます。

それぞれの 家庭では ほかの家庭とは 異なつた飲み物……コーヒー、水、紅茶、牛乳、ビールの中のいずれかを飲み、異なつた煙草……マルボロ、シヨートホープ、キャスター、セブンスター、ダンヒルの中のいずれかを吸い、異なつたペット……犬、猫、馬、鳥、魚の中のいずれかを飼っています。どの家庭もほかとは 同じ飲み物を飲みませんし、同じ煙草も吸いません。ペットも同様です」

「イギリス人の家族は 赤い家に住んでいます。

スウェーデン人の家族はペットに犬を飼っています。

オランダ人の家族は紅茶を飲みます。

緑の家は白い家の左にあります。

緑の家に住んでいる家族はコーヒーを飲みます。

セブンスターを吸う家族はペットに鳥を飼っています。

黄色い家に住んでいる家族はダンヒルを吸います。

真ん中の家に住んでいる家族は牛乳を飲みます。

ノルウェー人の家族は一番最初の家に住んでいます。

キャスターを吸う家族は猫を飼っている家族の隣に住んでいます。

ペットに馬を飼っている家族はダンヒルを吸う家族の隣に住んでいます。

シヨートホープを吸う家族はビールを飲みます。

ドイツ人の家族はマルボロを吸います。

ノルウェー人の家族は青い家の隣に住んでいます。

キャスターを吸う家族は水を飲む家族の隣に住んでいます」

「では、ペットに魚を飼っている家族はこの国の人？ はい、スターツットウツ!!」

「……」

「10秒経過。ちなみにおでの記録は27秒さあ！ へっへ」

「……」

「20秒ツツ。きしし！ 残り、10、9……」

勝ち誇ったように鼻の穴を膨らませて（目の錯覚かもしれないが）カウントダウンを始めるタツヒコ君に向け、条件を脳内で整理し、瞬時に導き出した解答を静かにこやかに告げる。

「答えは……ドイツ、だね」

「な、なにイイツツ!! せ、正解だーツツ！ 23秒!?! おでより4秒も速いよ、ま、ママーツツ!!」

「ふつ、この旅の道中、密かに幾度となく暇つぶしとして開催されている『ジョースター杯争奪☆クイズ& a m p. などぞ大会』で負けなしの18連勝を誇り、ついに先日『さすらいのクイズ王』の異名を冠したこの僕に死角などないッ!」

ちなみに最下位はぶつちぎりでポルナレフだったりする。なんてどうでもいいか。

「じゃ、じゃあつ、えつとえつと、次は……」

すると、なおも問題を捻りだそうとするタツヒコ君を凄い勢いで押しつける一つの影。

「ちよつと、そろそろ交代よおー! タツヒコだけ、ずるいわあ。そ、ソニアともお話しましようう!!」

派手派手しいドレスを翻して割り込んでくる。

「わ、わかりました。何の話をしますか?」

「もちろん、華麗なる恋の話よおおうつ! 新人さん、貴方も素敵! とつてもイケてるわあ! わたしとアバンチュールな恋をしてみないいいーツ?」

「い、いえ、けつこうです。間に合っていますので」

すぐさま丁重に、必死にお断りする。

「あら、レディのお誘いを蹴るなんて、失礼しちゃうわあ! ジョンもボビーもマイケルも、殿方はみーんな目があつた途端ソニアの虜になっちゃうののいい。こまつちゃ

うのお！ 彼らの元恋人達は何回刺されそうになったかわからないわあ。嫉妬に狂っちゃって、見苦しいつたらありやしない。ほんと女の子ってこわいわああああ」

『他人のものを奪う』それ自体に明らかに優越感を覚えているようだ。例え容姿がどれだけ優れていようとも、そんな貴女の方が僕的にはよっぽど醜くて恐ろしいが……という素直な感想をぐつと呑み込むと、ひとつ思い立ち、訊ねる。

「……そんな貴女の現在の恋のお相手は、あのゲス野郎ダービなのですか？」

「もちろんよおっ。カレは今までにソニアが出会ったダーリンたちの中でも断然素敵！ でもね、お仕事が忙しいからって最近なかなかわたしのお話を聞いてくれないのお。真つ暗な塔の最上階にいるあの御方に夢中なのよお。しかも戻ってきたらいつでも他の女の匂いをするのよおっおうおう……！ さりげなくカレに聞いてみたら『捧げものとして捕らえている女御食事たちを毎晩彼の元にお届けするのも執事の役目なのです』なんていうの。キーーーツ！」

「……なるほど」

「もう執事なんて辞めて、わたしたちのお傍にだけいてくれたらいいの……」
「そうですか。ならば今しばらくの辛抱ですよ」

十中八九、もうすぐ解雇になりますから。とは言わないが。

そこへ割って入る、壮年の男性の声。

「……だ、だ、ダメだよ、おでにクイズで勝つなんて。お、お、おでは一番じゃあないといけないんだ……お兄ちゃんがいなくなれば、またおでが一番だ。そうだよねえーツ、ママーツうううツツ！」

「クスクス……ごめんあそばせ。わたしの虜にならない男なんていらなわあ。それに貴方みたいなお人形が増えたら、ダービーいいがまたわたしのお話きてくれなくなっちゃうじゃないイイイ。恋のライバルは華麗に容赦なく消すのおおおツツ……!!」

「なツ!? は、離せーっ!」

なんとということだ。『死神13』といい、どうして僕はこんなオカルトじみた輩やかとばかり縁があるのだろう。あのときと全く同じだ。頼みの綱の法皇も出せない。

「や、やめろ……」

再び、ギラリと光る刃の切っ先が迫る。

「う、うわああああああーっ!」

切り刻まれる、そう思った。そうしたら今の僕の腹から飛び出すのは真っ赤な腸はらわたの代わりに真っ白な綿だったりするのだろうか……なんてちつとも洒落にならないことを考えていた矢先だった。

意識が、視界が、ブラックアウトし、一瞬途切れた。

「う……」

「花京院！ 大丈夫か!？」

「ハッ！ も、戻ったのか……」

「……もしかして、オラオラですかーッ!？」

「はあ、た、たすかった……」

間一髪。敗者恒例鉄拳制裁の模様が、己の目を、耳を通じて自然に伝わってくることに心底安堵する。僕の『魂』は無事、元通り身体に戻ることができたようだ。

ダービー弟の顔面がみるみるうちにメメタアされていく最中、ジョースターさんが屈んでこちらの様子をうかがう。

「どうじゃった？ 人形になった気分は」

「一言で言おうと……最低ですね」

首をすくめる僕に彼はにやりと笑う。

「やーい、負けてやんの。かっこわるーッ」

「ぐっ……」

「ダービーのイカサマ兄ちゃんと闘ったとき『負ける気はありませんが?』とか、カッコ

つけていってたくせに！ 誰かさんにむけて。ププーッ！」

「う、うるさいな！ 勝負に負けはしましたが、ちゃんと承太郎に繋いだでしょう!? 送りバントはちゃんと決めたんですよ、僕はッ」

あとタツヒコ君には勝った……が、それは言っても栓の無きことか。痛いところを見事に突かれ、つい反論してしまう僕に、ダービー弟をしばき終えた孫と祖父が口を揃える。

「あいつに黙ってて欲しかったら、あとで何かうまいもんでもオゴれよ？」

「……ふっ！ ……しかたがないな」

気付いておもわず笑みもれる。

遠回しすぎる二人の『Don't ^す mind^な』に。

「まったく、ほんとうに……君たちの家、超の付く大富豪でしょう？ 高校生にたからないでくださいよ」

こみあげてくるものに、僕はどうかそう軽口を返すだけで精一杯だった。

感傷に浸っている時間はなかった。先を急ぐべく、僕は先程ソニア嬢から得た情報、DIOがおそらく館の塔の最上階にいるということ二人に伝えた。「人形になってまで……転んでもただでは起きんなあ、おぬし」とジョースターさんに半ば呆れられてし

まったが。

館はまるで迷宮のようであった。入り組んだ廊下と小部屋を何度も行き来しつつも、ようやく地下と一階とをつなぐ階段を見つけた。ここからさらに塔へと続く道を探さなければならぬのか、と思っていたら、スタープラチナが壁に向かって振りかぶる。

「めんどくせえ。一回外に出るぜ。……オラアツ!!」

言うが早いのか、ぽつかりと脱出口が開いていた。飛び出ると、そこは館の中庭のようだった。

新鮮な外気を肺にいっぱいに取り込み、眩しい太陽の光を全身で感じながら改めて建物の全景を窺う。初めて目にした時と全く同じようにそれはひっそりと静かに不気味に、ただそこに佇んでいた。

それを鑑みて、言うべきか悩んでいた事柄を僕は話しておくことにした。

「実は、もうひとつ……。この館には『DIOへの捧げもの』として捕らえられている女性はまだ数名中に存在するようなんです」

「そ、そうか……」

「ですので、穴へ落ちる前、ジョースターさんがアヴドウルさんに叫んでいた、あの作戦……」

「ああ。最悪、館に火を放って奴を太陽の下に炙りだそうと考えておったのだが、それで

は無理だな。助け出してやる時間はとてもないが、無関係の人間を巻き込むわけにはいかん……せめてあとで財団に探し出して逃がしてやるように頼んでおこう」

その言葉を受け、承太郎が腕時計に目をやる。

「しかし、あれから10分なんて、とつくに経過しちまっているが……」

「ああ。この通り。幸か不幸かちつとも燃えとらん」

先程分かれさせられた館の入り口方向を臨むも彼らの姿は見えなかった。既に内部へ突入済なのだろう。

「ということとは……」

「うむ、あまり考えたくないが、あちらも中でなにかあったのかもしれない。だが……」

見上げる。館の一角でやたらとその存在を際立たせている、天に向けて不遜にそびえたつ塔を。

「……急ごう。DIOの元へ。中で必ず会える。信じるのだ、彼らを」

祈るように強く頷き合う。

法皇と隠者の紫を駆使し外壁を伝い登り、塔のふもとにたどりつく。

ひたすらに上を目指して昇っていると、あるポイントで禍々しい気配を中から感じた。

「ジョースターさん！ 承太郎！」

「うむ、入るぞ！」

「……オラアツ！」

承太郎が再びスタープラチナで壁をぶちやぶり、中に入る。

ガラガラと崩れ落ちる瓦礫のすきまから臨んだそこには、仲間……ポルナレフとアヴドウルさんが敵……最悪の敵と対峙していた。

（DIOッ!!）

忘れもしない。あの顔。

忘れるわけがない。数か月前の、あの屈辱を。

……己の、弱さを。

「ジョースターさん！ 承太郎！ 花京院！」

二人が安堵の声を出す。

「安心するんじや……ポルナレフ、アヴドウル……」

「……」

僕らが入った壁の穴から陽の光がさし込む。

それを嫌ったのか、ヤツは上階へと、その姿を消した。

「DIOッ！」

「今のがッ！」

「DIOだなッ！」

追いかけてようとしたところで、アヴドウルさんがいう。

「ヤツを追う前に言っておくッ！」

われわれは今やつスタンドをほんのちよつぴりだが体験した。

い、いや、体験したというよりはまったく理解を越えていたのだが。

に、二対一なのに、勝てる気が、しなかった……」

ポルナレフが続ける。

「あ……ありのまま、今、起こった事を話すぜ！」

『オレは奴の前で階段を登っていたと思ったら、いつのまにか降りていた』

「!？」

「な……何を言っているのかわからねーと思うが、

オレも何をされたのか、わからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじやあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……」

「……」

(……次元が、ちがう……?)

いつか彼女から聞いた、あの情報を思い出す。

(ハッ!)

そこで僕は、この場に、二人しかいないことに気づき、慌てて問う。

「ひ、仁美さんは? イギーも! どこに? ま、まさか!」

顔を見合わせるポルナレフとアヴドウルさん。

「い、いや……。下にいる。ふたりとも」

「ぶ、無事なのか……。よかった……」

そろって、言いにくそうに口ごもる。

「……無事かといわれると……。その、一応……」

「一応……?」

「行こう……。こつちだ」

「仁美さん! イギー!」

二人に導かれるまま、階段を下りたところで、彼女の姿をみつける。

正味、一時間。

離れていたのはたったそれだけ。それくらいにすぎない。

「あ！ みんな！ 合流できたんですね。よかったです……はっ！」

ほっとしたかお、そして、一瞬、気まずそうな顔をしたあと、ポルナレフのうしろに隠れる彼女。

「？ 仁美さん……？ なにをこそこそと……」

「え？ なんでもないよ？」

「なんか、さつきよりさらに顔色が……あっ！」

しかし、そんな短き別れからの再会で……

「……。だから、なんでもないって、いつているのに……」

「……そ、んな……」

僕を待ち受けていたのは、残酷すぎる現実だったのだ。

BURN!!

「アヴドウルー……！」

10分経つても、わしらからなんの連絡もなければ……館に火を放てッ！

わかったな………！」

「ジョースターさん!!」

そんなハウリングだけを残し、敵（ダービー弟。兄弟ソツクリだという印象を受けた。いちいちキザつたらしいあたりが、とても）の策略によりポカツと地面に開いた真つ黒い落とし穴のようなものに承太郎、ジョースターさん、花京院の三人が吸い込まれてしまつてから数分が過ぎた辺りだろうか。

普段、特にカワイイ女の子とお茶をしていたりしたら即刻過ぎ去つてしまうものなのに。奇妙なものだ。こんな時の10分間は途轍もなく長く感じる。

「……いよいよよつてときなのに、あいつと離れちまつたな。」

「だいじょうぶか？」

残された面子で館の前で待機する間、じりじりと纏わりつくような重苦しい雰囲気

吹き飛ばしがてら、オレは保乃に話しかけてみた。

「ポルナレフ兄さん……」

さつきから……今朝からか。この娘の「館を見つけた」という発言にこつちも目玉が飛び出るかと思つたが、同時にずっと、思い詰めたような表情をしているのが気になつていた。

最終決戦。無理もない気はするが。

「はい。だいじょうぶですよ。……信じていますから」

やわらかな表情が、浮かぶ。

この旅で、この娘はずいぶん変わったと思う。

最初は『よく見ると顔立ちは整っているが、性格的にちよつとお力太いお嬢さん』……そんな印象だったが。

(ちえつ、やるなあ、あの野郎……)

ほんとうに、綺麗になつたものだ。

無意識なのだろうが、あいつのことを考えているときは、とても。

すぐにわかる。

「へっ、惚気んなよ！　ところで、ちゃんと、いったか？」

そんな妹代理に、からかいついでに気になつていたことを聞いてみる。

「なにをですか？」

「そりゃあ、おまえ……決戦の前だぞ。愛の告白に決まってるだろ？」

「はあ？ そんなわけないじゃあないですか。いえませんよ、そんなの」

「なんで？」

「……なんでも」

「自信がないのか？ なんてだよ？ あいつがおまえのこと、どんだけ想ってるか……いいかげんおまえもわかってんだろ？」

「……そんなこと、ないですよ。それは、彼が、やさしいからで……」

素直な疑問と感想だったのだが、微妙な反応を示す彼女。

「あーもー、しらねーぞー、後悔しても」

「後悔なんて……」

そういつて、俯く。

「……」

その様子に、どうしても伝えたくなくなった。

いえなくなる。

そんなことも、あるのだから。

「……いつとけ。いいから。」

「……いえない！」
「……いえない！」

しかしオレの言葉は遮られた。

悲痛な表情で紡がれた、彼女のことばに。

「むしろ、もしも、もしもそうだったら、なおさら……。」

「いえない。ぜったいに……。」

「え……？」

「はっ！」

「保乃、おまえ……、どうした？」

「う、ううん！ なんでもありません。ごめんなさい……。」

「……。」

（こいつ、なにか……？）

ぎゅつと唇を噛みしめる、その横顔を一瞥し、内心溜息をつく。

問い質しても、詮無いことであろう。普段穏やかで柔らかな癖に、結局こいつもそのようなのだ。

心のだ真ん中にまっすぐ一本、譲れぬ芯の通った頑固者……この旅の道連れは皆そんな奴ばかりだ。

「……いいか？ よく聞け」

それでも、せめて、と口を開く。

「独りでなにか、しようとするな。」

今はあいつはいねーが、オレやアヴドウルがいる。イギーも。

ちやんと、頼れよ？

オレたちはおまえの兄さんと師匠と先輩なんだからな」

「……はい。ありがとう、……兄さん」

「……っ！」

——うん、ありがとう。おにいちゃん——

『微笑み』に『あの時』がフラッシュバックする。

まったく縁起でもない。オレは感じてしまったかすかな予感を強引に打ち消し、気づかないふりをした。

そうだ。

『妹』を喪うのなんて……もう、二度と御免だ。

「10分経った。」

館の中に入入るぞ、ポルナレフ、保乃、イギー」

「ああ」

「はい！」

関は来たようだ。アヴドウルの号令に立ち上がる。

「ひとつ、確認しておく。我々はDIOを倒すためにこの旅をしてきた……。ひとりを助けようとして全滅してしまうのだけは避けなくてはいけない。

もしもの場合は……わかつているな？ それを、肝に命じるんだ」

「ああ……わかつたぜ、アヴドウル」

「……わかりました」

敵命に軽口で添える。

「生きて出てこれたら、豪勢な夕飯を奢れよ！」

「ふっ、いいだろう」

「私たちにも！ ねっ、先輩！」

「ガウツ！」

必ず果たすべき、願いにも似た、重く堅い約束を。

「よし、入るぜツ！」

*

*

*

勢いよく突入したオレたちであったが、少し進むとすぐに館のその複雑なつくり
に倒されてしまう。

「おい、どうする？ 延々続いてみえるぜ」

「階段が、たくさん……」

まるで、だまし絵の中にいるようだった。

「うむ、ジョースターさんは館に火を放てと言ったが、こんな迷路の中ではこちらが危
険。……よし」

思いついたようにアヴドウルが、炎が6個連なったものを創り出す。

「なんですか？ それ」

「これは生物探知機だ。それぞれが前後左右上下を示し、半径15m以内ならどんなも
のが隠れているかわかる。スタンドのエネルギーもな。これを見ながら進もう」

「では私も……セシリアー！」

彼女が相棒を呼び出す。大まかな位置を探るつもりなのだろう。

「ありがとう。……もどつて。」

ジョースターさんたち、やはり地下方向にいるみたいです」

「うむ。まずは下へ向かおう」

居並ぶ階段の中から一つを選び、下りきつたところでアウドウルが気づく。

「早くも炎に反応だ。左前方になにかいる！」

「なに！」

「……先輩……？」

「クンクン……！」

グアウ!!」

黒豆のような鼻をひくつかせたかと思うとイギーも動いた。『愚者』ザ・フールが主の命でその鋭い爪を柱に向けて突き立てる。

「うぎやーっ!!」

すぐさま転がり出てくる一人の男。

「あっ！」

「迷路が消えた……」

「どうやらこいつがこの幻覚を作っていたスタンド使いらしいな。」

あつという間にイギーがやつつけたが……」

いかに目くらましが有能だろうが、どうやらこのワンコの鋭すぎる嗅覚は誤魔化せなかつたらしい。

「よし、道もわかりやすくあつさりしたな」

周りを見渡し、再び歩き出す。

そのときだった。

「……………はっ！ こ、ここはッ……………!？」

突然。本当に突然、保乃がおもむろにひとり立ち止まる。

「んー？ どうした？」

その様子を不思議に思い、オレは振り返り声をかける。

ほぼ同時に、すぐ隣にいたアヴドウルは壁になにかをみつけたようだ。

「？ ……『このラクガキを……………』……………？」

「……………っ！ ダメ！ あぶないッ！」

保乃がセシリアで三人をまとめて突き飛ばす。

瞬間、オレたちのいた空間に、なんと『穴』があいた。

削りとられた、といった方が正しいかもしれない。

「て、敵!？」

「な、なぜだ!? わたしの探知機にも、イギーの鼻にも……なんの反応もなかったのに！」

「わ、わかりません！ さ、殺気が……。恐ろしいほどの殺意の波動だけが……！」
混乱の中、どこからともなく声がした。

「……女、そのスタンド……めざわりだな」

「ま、また来る！ セシリア、もど……っ！」

保乃がスタンドを己の元に戻そうとした、その刹那だった。

「つつ!? うっ、くっ、あぁーっ!!」

セシリアが『穴』……黒い球体に、呑み込まれ消えた。

彼女の掲げた左腕とともに。

*

*

*

「くっ……う……っ……」

苦悶の表情を浮かべ、崩れ落ちる、彼女。

「や、保乃！」

「う、腕が……!」

黒い球体から、髪の毛長い男が顔を出し、不敵にそれをあざ笑う。

「くくく、まずは……ひとり……」。

もう、その女は使い物になるまい。

おまえの腕とスタンドは、こなみじんになったのだ。

わたしの口の中はどこに通じているのか自分でも知らぬが暗黒の空間になっている。ふつとぼしてやったのだ。

残りのやつらも同じようにしてやる。

ＤＩＯ様を倒そうなどという思いあがった考えは、正さねばならんからな。

……ひとりひとり……順番に順番に」

「うるせえー！ このツッ！ ドグサレがあーツ!!」

腸が煮えくり返る思いで激昂の勢いそのままチャリオツツで攻撃する。

「チツ……」

しかしかわされ、切ったのは男の頬の薄皮一枚のみ。

「ほお……わたしに傷をつけるとは……」。

では……確実に……追いつめて倒すのでしょうか……確実にな」

それだけいうと、あつという間に球体の中に消えた。

本体もスタンドも、消えた。

「と、とりあえず、一旦、退け！」

移動するんだ!! この部屋にいるのはやばいッ！」

アウドウルが昏倒している保乃を肩に担ぎながら叫ぶ。

「ち、ちくしょう！」

転がりもつれるように隣室に飛び込むと、すぐにドアの前を箆筒やソファーといった家具で塞ぐ。

「ガオン!!」

しかしドアもバリケードもまとめて奴……球体に、綺麗に丸く削り取られる。

「お、追って来ているッ！」

「う、上の階にいくんだッ！」

全員で地下を脱するべく階段を駆け上がる。

登り切った先、長い廊下の向こう、オレたちが入ってきたあの扉が見えた。

「出口……」

「保乃がこんな状態では、一度……」

一時退却という文字が頭に浮かぶ。

だが、頷き合い、そちらへ脚を向けようとしたオレ達の耳にか細い声が届く。

「……だ、め……、今、あそこに……いる……」

「な！ 保乃……！」

「はあ、はあ、……だ、めです……あそ、こに、行ったら、みんな……」

どうにかそれだけいうと、再び意識を手放してしまう。

「くっ！ 上だー！」

やむを得ず二階へと移動するも、またもや、だった。

既にそこに待ちうける、丸い『穴』。

「なにイー！」

「さ、先まわりされているッ！」

（やつは……壁に穴をあけなければ通過してこれないらしい！）

そして、暗黒空間からやつ本体が姿をあらわしたときならきつと……）

切りつけることができたのだ。薄皮一枚といえど。

（やつを倒すチャンスがあるはずだッ！）

このまま逃げ回っていても埒は明くまい。いずれは追い詰められて全員ヤツのいうところのこなみじん、だ。それに、なによりも……

「……」

血まみれの、彼女をみる。

「……………ここは、イギーと、オレでなんとかする。アヴドウルはさがってくれ……………」
 一步踏み出すと、階段を背に立つ。

「……………保乃を、頼む」

*

*

*

「……………はあ、はあ……………」

「保乃、しっかりしろ！ 気を、しっかりもつんだ……………」

階段を下り、奴から死角となる踊り場にて担いでいた保乃を下ろす。

時折漏れ聞こえてくる破壊音が現在、まさに直上、二階でポルナレフとイギーが決死の奮闘を繰り広げていることを如実に表していた。

二重に状況は一刻を争う。急ぎ負傷した彼女の応急処置を試みようとする。

(くっ……………！ 血が、止まらない……………！)

彼女の左腕は、肘から下がバツサリと削りとられていた。

上腕を縛り傷を白布で押さえるも、無情にとめどなく流れ続ける赤は止まる気配がない。

（いかん、このままでは……、出血が多すぎる！ どうすれば……）

感じ取ってしまふ。彼女の命の灯が急速に小さくなつていく様を。

ひたひたと確実に迫ってくる死神の足音。

わかりきっているそれを振り払う術もなく、半ば途方に暮れていた。

「つ……！ 駄目だ、許さんからな!!」

それでも、この娘を逝かせるわけになどいかない。

もしもそんな事態になれば……きつと『あいつ』は……

「……し、師匠……」

「!? き、気がついたのか!? あ、あまりしゃべるんじゃあないッー」

蚊の鳴くような呼びかけに、我に返る。奇跡的にも意識をとり戻したらしい。既に呼吸をするのですら辛いであろうに、制止もきかずとぎれとぎれに言葉を発する。

「す、すみませ……、ひと……だけ、御願いが、あつて……」

「……な、なんだ!？」

『あいつ』への伝言だろうか……そう思った。そんなもの言付かりたくもないが、耳を塞ぐわけにはいかない。

しかし、まったくちがった。

どうやらわたしは彼女をみくびっていたらしい。

その口から飛び出たのは耳を疑うような、とんでもない言葉だった。

「……私の、腕の、切り口を、や、灼い、て……ください。師匠の、炎で……。」

そうしたら、血は、とまる……。」

「なッ!? そ、そんなことをしたら、もう元に……。」

それに、どれだけの……! それこそ痛みで死んでしまうぞ!?」

「だ、だいじょうぶ、です……。」

どうせ、腕、くつつけたくても、もう、呑み込まれて、なくなっちゃったし……。

いたいなんて……、そんなの、へっちゃら、です、から」

「ハッ!」

そのとき上階から、ガラガラとなにかが崩れるような一際大きな轟音が鳴り響く。

「ポルナレフ! イギー!」

「は、やく、行かなきゃ、ふたりが……。」

先輩が……!」

「し、しかし……。」

「お願い、します……。」

私は……まだ、死ぬわけにはいかない」

こんな状態とはとても信じられない。強い意思を秘めた、まっすぐな瞳をむけられる。

「くっ!」

「……すみません。こんな……いやな、こと、頼んで……」

そこで、ふつと彼女の表情が緩む。

「でも、私は……」。

……だいたいじょうぶです……ぜつたい、まけません。

師匠、いつも、いつているでしょう?」

苦痛を微塵も感じさせないほどの、やわらかな笑み。

「……恋する女は……つよい、って」

その脳裏にだれの顔が浮かんでいるかなんて、わかりきったことだった。

「……ぐっ!!」

そうだ。わかってしまった。

痛いほどに、伝わる……彼女の『覚悟』。

「……」

ならば自分がとるべき道はひとつだった。

「……マジシャンズ・レッド魔術師の赤オーツ!!」

「……ありがとうございます、師匠……」

*

*

*

「よくも！ クソ犬がッ！」

「このわたしにD I O様の『ザ・フル姿』を破壊させたなアあつーッ！」
『愚者』で造ったニセのD I O。」

奇策が成功しまんまとヤツを騙すことができたかに思えたが、甘かったようだ。

「イギーッ!!」

その悪魔の様なスタンドで丸ごと削りとられてしまう。そう思ったが予想に反し、ヤツはイギーを思い切り素手で殴り飛ばした。

「うげっ……!」

ちいさな身体がその衝撃で壁までふつとぶ。

「よりによってこのわたしに！ よくも！」

砂のニセ者だろうと、D I O様をよくもわたしに攻撃させたなあーッ!!

暗黒空間に呑み込むのは一瞬だッ！ それではわたしの怒りがおさまらんッ！

キサマが悪いんだ！ キサマがッ！」

「こ、このヴァニラ・アイス、まともじゃあねえ……異常だ！

こいつの精神こそ暗黒空間だッ！

こいつの心の中がバリバリ裂けるとす黒いクレバスだッ！

なおも般若のようなツラを下げて、倒れたイギーに迫っていく。

「や、やめろ……ッ！」

何とか止めようと、不覚にも先程けずりとられてしまったつま先。動かすたびに激痛が走るそれを必死に引きずり這っていく。

「蹴り殺してやるッ！ このド畜生がアーツ!!」

「イギーっ！ や、やめろおー!!」

いつも現実つてやつは非情だ。到底間に合うはずもない。

振り上げられる、ヤツの脚……

イギーがやられる。

観念しかけた瞬間だった。

「!? な、なにイイツ!!」

まばゆいピンク色の光が、イギーを包みこむ。

「こ、これは!?!」

反射的に背後を振り返る。

すると片腕を失い、顔面蒼白。

まさに満身創痍……アヴドウルに支えられ、立っているのがやつとな状態。
そんな彼女がそこにいた。

「や、保乃!？」

「ガウウ……」

「させない……」

「な、なぜだ！ 女、貴様のスタンドは、暗黒空間に呑み込んだ……はずだッ!？」

「……セシリアは……私の、精神のかたち……、そのもの……」

明らかに戸惑っているヤツにむけ、彼女は言い放つ。

「……私の心はまだ、死んではいけないッ！」

だからセシリアは甦る、何度でもッ!」

渾身のちからを、想いを、込めて。

「くそ、邪魔ばかりしおって！ この、死に損ないがあつ!!」

敵の身の毛もよだつような雄叫びと視線が彼女に向けられる。

「……チャリオーツ!!」

「ぐはっ！ な、に……!?」

ポルナレフの、チャリオッツが……

こんなに速く、遠くを、攻撃できる、はずが……」

「……させねーよ。」

妹がここまでやってんだ……負けてられねーよな、兄ちゃんがなあっ！」

「くっ、めざわりな……！」

暗黒空間に戻り、まとめて消してやる……!!」

「グウウ……」

そんな台詞を吐いて再び姿を隠したヤツにむけ、イギーが唸る。

「ガアウ!!」

「な、なにイイ！」

『愚者』^{ザ・フール}により部屋中に巻き上げられた砂の嵐。

それは捉えることなどできないはずのヤツの動きの軌跡を完全に露呈させた。

「……この娘は、耐えたぞ。わたしの炎に灼かれる苦しみに……。」

おまえはおなじことが、できるのか……?」

そして、この男が続く。

「我が『魔術師の赤』^{マジシャンズ・レッド}の業火の鉄槌を受けるがいい！」

くらえッ！ ……クロスファイヤーハリケーン・スペシャルーツ！」

アヴドウルの咆哮と共にうねりをあげて襲いかかる炎の渦。

「ふん！ ……こんな炎ごととき……まるごと……！」

しかし、それは全てヤツの口に吸い込まれてしまう。

「くくく……！」

だが、勝ち誇る相手が自らの身体の異常に気づいたのは、その直後のことだった。

「くく……ん？ ……ぐ、あ……な、な……なにイイツ!!」

や、焼ける！

……喉がッ……肺が……ツツ!!

ぐああああ……ツツ!!」

「……？ ……み込めるほど生温いものだ……おもうのか？

生憎だが……いつもとはくらべものにならんくらい……

今のわたしの炎は……熱い……！」

たまらずこちらへ出した、燃え盛るヤツの顔にレイピアを突き刺す。

「……へっ……おれのチャリオッツも、素早いぜ……！」

「……貴様への怒りで、グツグツ煮えたぎっているからなツツ!!」

「うおおおお……ツツ!!」

そのまま、炎をまとった剣でヤツを細切れにして燃やし尽くす!

「ぐああああーッ……!!」

「……やったな」

「ああ……」

「ハッ!!」

安堵の息を吐きかけた。それも束の間、おぞましい事実気付く。

ヴァニラ・アイスだった『灰』が、ヤツの身体を再び形作ろうと集まり始めていることに。

「……ちくしょう、きさまらなんぞに……」

きさまらなんぞに……D I O、さ、ま……」

「まだだ! やつは、吸血鬼に!? 不死身の身体になっているのだッ!」

「……チャリオーツツ!」

アヴドウルの言葉を受けて、すぐさまオレは窓を塞いでいる木の板を壊し、太陽の光を当てる。

「ぬああああ! でいおさ……」

「地獄で……やつてろ……」

とたん、サラサラと、消滅する。

「恐ろしい執念、恐ろしい……敵だったぜ……」

それでもきみには

内臓を思い切り驚掴みにされたかと思つた。

高所からひゆうつと真つ逆さまに落ちていく感覚がして、息が止まる。なんとか吐き出した空気はどうやら声になつたようだが、それはまるで他人が発したもののようによくの鼓膜を震わせた。

「う、うで……う？ え……う？」

彼女の左腕が、ない。

包帯が巻かれているが、たしかに、肘から下が、ない。

そして、服が、血まみれ。顔色は真つ青を通り越して、もはや真つ白に近かつた。

「なにッ?!」

「えっ!?! あっ!」

「……。だから、なんでもないっていつてるのに……」

「そ、そんな……」

仲間達の驚きと戸惑いの言葉も、彼女の眩きも、なにも耳に入つては来なかつた。せり上がってくる衝動とともに全身の血液が逆流していく。

「……ゆ、るさ……ん！ ……どこのどいつだ!? 誰がやった!」

何があつたのかを理解すると同時に、視界が紅一色に染まる。

初めて知つた。人間は恐怖を感じた時以外にも震えるのだということが。出口を持たない怒りを無理矢理閉じ込めようとするためだろうか。身体がぶるぶると小刻みに揺れている。自制しろと虚しくも脳のとどこかが叫んでいたが、無駄だった。抑えつけても抑えつけても炎のような憤怒に全身がわなないて、止まらない。

「お、おちつけ、花京院! もう、いない! ヤツはもう倒したから!」

「そうだ! 保乃の護りのおかげで、全員の力を合わせてなんとか倒せたんだ!」
「じゃあ……D I Oだ! そもそも元凶! 今すぐヤツをツ!!」

(地獄の果てまでも追つて……ぶっ潰してやる……!)

「ま、待てツ」

「か、花京院!」

活火山から勢いよく噴出したマグマがどろどろと流れるかの如く、激情に押し出されるまま駆け出そうとする僕を全員が制止する。

「離せツ! 止めてくれるな! ……許せるか! こんな……ツ!」

(……彼女に……こんなツ!!)

許せない。許せるはずがない。

穏やかで、真つ直ぐで、健気で、可憐で……いつも、だれかのために、懸命な彼女が。

「……おちついてつて、いつているでしょうッ!!」

「……ハッ！」

逆上に憑りつかれた僕を呼び戻したのはその当人の懸命な声だった。

「そんなのじゃ、勝てるものも勝てないよ。」

おねがいだから、おちついて……」

「……くそっ!!」

行き場を失った怒りは固く握りしめた拳に託すほかなく、壁を強く叩きつける。脱力して開いたその手のひらには爪が食い込んで出来た痕が幾つも赤く滲んでいた。

「……すまん」

「我々がついていたにもかかわらず、すまない……」

沈痛な面持ちで頭を垂れる二人の謝罪を慌てて彼女が否定する。

「そんな！ 私がただ単にドジっっちゃっただけです！」

すみません……。でも、大丈夫ですから」

彼女のその言葉に、まとも血液が沸騰する。

「……大丈夫なわけ、ないだろう！」

「うっ……！」

「早く病院に！　なんでまだこんなところにいるんだよ！」
「……だから、大丈夫だよ。」

師匠に手当してもらったから。もう病院なんて行く必要ないし」

(……手当？　アヴドウルさんに……？)

気づいてしまう。また目をそらしたくなるような事実。

(ま、まさか……『灼』いた……のか……？)

よくみると左側を中心にところどころ火傷や焼け焦げたような跡があった。

服や、頬や……綺麗な、髪の毛にも。

(ち、血を止めるため、に……？)

焼灼止血。知識としては持っていた。状況的にやむを得なかったのだろう。理性ではわかっていた。

が、しかし、受け入れることなど到底できるはずはない。

中世ヨーロッパの英雄、聖女ジャンヌダルク。彼女は悲劇的にも終には魔女狩りを称して火炙りの刑に処されたという。このひとが女教皇……『聖女』の暗示だからとでもいうのか。洒落にすらならない。麻酔も無しに。ほとんど拷問に近いだろう。一体どれだけの苦痛が彼女の身に降りかかったのか、もはや想像することすらできない。信じられなかった。そんなものに耐え抜いたというのか、彼女は。

「そ、そんな……う、うそだろう……？」

あ、アヴドウルさんも！ ポルナレフも！ どうして帰さなかったんですか!？」

どうしても直視することができず、わかっているのに僕はつい傍らの二人へと声を荒げてしまう。

「違う！ ふたりは帰っていつてくれた！なのに、私が帰らないってわがまま言ったの！」

それに対し、即時、強い口調で彼女から反論が飛んでくる。

「そういうことだ……」

「……ああ」

(どうかしてくれ、花京院)

困り果てたように沈痛な面持ちでただ頷く、彼らの目が明らかにそう訴えていた。

「もう、大袈裟だよ。これくらいで。無事全員合流できたんだから、早く先に……」

ずっと僕から視線を外したまま、何事もなかったかのように上階に続く階段の方へと踵を返そうとする彼女の肩をぐつと掴む。

「……仁美さん。行きますよ、病院に」

「だから、いやだって……」

「わからないんですか？」

そんな怪我人がいたら……足手まといだと。

むしろ却って、邪魔です」

「……っ！」

もう痛いほどよくわかっているつもりだった。彼女の性格なんて。こうでも言わなければ、とてもではないが言うことなどきかないだろう。

必死に気持ちを押し殺して、冷たく言い放つ。

「……」

しかし、そんな生易しいものではなかった。彼女の頑なさほ。

「……いやー！」

うつむき、唇を噛みしめていた彼女が、叫ぶ。

「いやだ！ 腕なんかなくたって関係ないもの！ セシリアもちやんと使えるし！

私はみんなという！」

「なっ……っ！」

キツと顔をあげ、こちらをみる。

「……私には、まだ……やらなければならぬことがある！ ぜったいに、ひかない！」

「くっ……」

はじめてみた。燃えるような光をもつ瞳に射ぬかれる。

そんな場合じゃないのはわかっていた。

けれども僕はこのとき、たしかに見惚れてしまっていた。

彼女のその、息を？むような綺麗なすがたに。

しかし、同時に、たしかに、感じていた。

いやになるくらい、強く……

(……………だ、めだ……………！)

夢きものはなつ、輝きを。

「……………わかりました」

決意とともに、ゆつくりと、言葉を吐く。

「よかった。じゃあ、行こう！」

「ええ……………」

「……………」

「……………うっ！」

彼女が背をむけたその瞬間、首筋に手刀を浴びせる。

「……………ええ？」

細い肢体がぐらりと揺らぐ。

「……花京院く……ん？ どう、して……？」

同じ様にその瞳も、驚きと、そして哀しみに満ちた色で揺らめいていた。

「い、や……！ わ、たし、は……」

崩れ落ちる彼女を抱きとめる。

「……ごめん」

その頬に、ひとすじの涙が静かにつたつて零れ落ちていった。

「……連れて行つてきます。

アヴドウルさん、どこか病院知りませんか？

できれば……2 km以上遠い方がいいんですが」

もう、戻つて、こられないように。

「……西に。3 kmほどのところに。」

わたしの名前を出すといい。すぐに診てもらえるだろう」

「ありがとうございます。すぐ戻つてきますから、皆は先に……」

「……わかった。気をつけろよ」

「ええ。……そちらも」

「これはいかん！　そこに寝かせて！　……点滴の用意を！」

「はい！　先生！」

目的の建物は幸いなことにすぐみつかった。事情を説明するまでもなく、僕に抱えられた彼女を一目見た途端、医師たちが慌ただしく治療の準備を始めた。当然だろう。それが余計に彼女の状態の深刻さを物語っているようだった。

「……」

白いベッドの上に彼女を横たえる。

もう、何度目になるだろう。

さらさらとした艶やかな黒髪をなで、伏せられた長いまつげの先に光る雫を指先でぬぐう。

「目を覚ましたら、おこるかな？　おこるよな……」

聴こえるはずのない、届くはずもない、懺悔を口にする。

「……すまない。」

でも……、わかって……ほしい」

彼女の気持ちは、手に取るようにわかっているつもりだった。

それでも、もう限界だった。

これ以上『ゆるす』わけにはいかないと思った。
彼女に。

そしてなにより……己にも。

そつと手をとり、にぎりしめる。

あたたかなぬくもり。

この感触を、忘れることのないように。

「……」

ゆつくりと首をふる。

じぶんの中からわきあがる、なにかを必死に振り払い、立ち上がる。

「……いつてくるよ」

刹那、扉が開く。

「それでは、彼女のこと、くれぐれも宜しくお願いします」

「……き、君!？」

治療器具をワゴンいっぱい詰めて入室してきた医師達にすれちがい、ただそれだけを頼み、部屋を後にする。

「も、もういない……」

ハイエロフロント

法 皇の触手を目一杯伸ばし、ロープ代わりに勢いよく窓から飛び出すと一直線に館へと向かう。

まとわりつく、なまあたたかい風を断ち切るように。

*

*

*

目を開ける。

「……」

とびこんでくるのは、まっしろい天井だけ。

だれも、いない。

「……っ！」

しかし、右手にはたしかにのこっていた。

あたたかい、ぬくもりが。

やさしい、感触が。

「……ばか」

「……せ、先生ッ！」

「患者が、いません!!」

nightbird

近寄ってくるやつらならたくさんいた。

女どもはいつも皆きやーきやーうるせーし。

男どもはぶつとばしてやつたらなぜか皆、舎弟にしてくれとかいいだすし。思わなくても誰かいた。

だから、敢えて誰かといょう、なんぎ、思ったことがなかった。はじめでだった。

同年代で、一緒にいてもいいとおもえた奴らなんて。

くつつきそうで、なかなかくつつきやあしない。

めんどくせー、うつとーしいやつらだが……

あいつらという空気は、わるくねえな、と思っている。

気絶させた保乃を抱え病院へと向かう花京院を見送りながらポツリと呟く。

「……………あいつら」

「承太郎？」

「浮かんでしまった言うだけ無駄な文句を呑み込み、帽子を目深にかぶり直す。

「いや、なんでもねえ。行くぞ」

「ああ」

残りの面子でD I Oが消えていった塔の上階へと向かう。少し進んだところで螺旋階段のある大広間に辿り着いた。

さらに上に向かうべくその段差に足をかけた。その矢先だった。

「いてえッ！」

「どうした？ ポルナレフ」

急に謎の悲鳴をあげた男を全員で注視する。

「な、なにかがぶつかってきて……」

「……オラアツ！」

すぐさま星の白金で男の示す視線の先に居たそのなにかを掴む。

「……………これは……………!!」

それは一匹の蟲だった。

「なーんだ、蠅じゃん」

ポルナレフの後、続いて覗き込んだアヴドウルも気づく。

「あッ！ 蠅は蠅でも、この蠅ッ！」

「ああ」

肯く。おれも見覚えがあった。この種類。というか忘れるはずがなかった。おふくろが倒れたあの日、星の白金はこの蠅をスケッチまでしたのだから。

嫌な予感が急激に胸中に広がる。それは残念なことに即、当たってしまった。

「はあ、はあ……」

「ポルナレフ？」

「か、身体中が、イテエ！ それに、寒い……」

「お、おいッ！」

ガタガタと震えながら、倒れ込んでしまった男をアヴドウルが支える。

「す、すごい熱だ！」

「なんだ……？ や、やべえ……」

「ポ、ポルナレーフツ!!」

「……ぐう」

「……は？」

「ね、寝ている……!?!」

『……なんだ、蠅か。ポルナレフ、貴方はそうおつしやいましたが……なんという無知の

極み』

一体何が起こったかさっぱりわからず全員に動揺が走る中、どこからともなく男の声
が聞こえてきた。

「な、なんだ!？」

「何処から!？」

発信源を見上げる。それは天井の一角にぶら下げられたスピーカーだった。

『蠅つてねえ、けっこう危険なんですよ。血を吸うのつて蚊やアブだけかと思つてました? この蠅はね、雌雄ともに哺乳類や鳥類から吸血し、血液を栄養源として生活しているんです。一度の吸血で約40〜150mgの血液を摂取する……まあそれはいいんですがね。その際に媒介するんですよ。寄生虫を介して、こわーい病気をね。聞いたことないですか? 睡眠病。地域によっては催眠病とも呼ばれているようですが』

「す、睡眠病、だとツ！」

「知っているのか? アヴドウル」

「え、ええ……」

その説明によると睡眠病(sleeping sickness)とは、アフリカのサハラ以南領域における風土病で、ある種の蠅が媒介する寄生性原虫によつて引き起こされる人獣共通感染症である。病状が進行すると睡眠周期が乱れ朦朧とした状態にな

り、さらには昏睡して死に至る疾患であり、これが名前の由来となっている……とのことだった。

『わたしのスタンドが生み出す原虫達は蠅を操り、標的の体内に侵入すると睡眠を引き起こす物質……トリプトフォールを放出する、というわけです』

「チッ！」

スピーカー越し、いけしやあしやあと語る敵への苛立ちをぶつけるように手の中の蠅を握りつぶす。

『おっと、そんなことをしても無駄ですよ』

どうやらこの部屋は盗聴だけでなく監視もされているらしい。同時に敵がいう。

『いっぱいいますから』

そしてその言葉はハツタリでもなんでもないらしい。宣言通りどこからともなくブンブンと無数の蠅が飛んできた。

「ならばッ！ わたしが全て焼き払ってくれるッ！」

うおおおお！ クロスファイヤー・ハリケーンツツ!!

マジシャンズレッド
魔術師の赤が蟲達に向け、十字状の凄まじい勢いの火炎を吐き出す。

「……やったか!?!」

それは確かに蠅達を燃やし尽くした。

『ククク、そうそう、言い忘れましたが、蠅たちも普通の蠅じゃあないんですよ』
「!? は、灰が!?」

しかし、ブスブスと煙を上げる燃えカスが瞬く間に元の形に復元したかと思うと、うち一匹が彼に襲いかかる。

「ぐわあああッ!」

「あ、アヴドウルツ!!」

「く、そ……! ね、眠い……ッ!!」

「アヴドウルツ!!」

『この子達は光栄にもD I O様の血液を頂いた蠅を繁殖させたもの。無敵なんです。一匹一匹が』

「吸血鬼蠅ってことか……」

『ああ、もちろん、あのお美しい肌には牙を立てさせてなどはいませんよ。そんなことは断じてあつてはならない。ククク』

「どうでもいい……」

「聞いとらんわい、そんなこと」

「いつもどうやらD I Oの狂信者の一人らしい。虫唾が走る。」

「が、だ。つてことは……」

ならばすなわち、弱点はわかりきっていた。日光に当てるべく、壁をぶちやぶろうと星の白金を振りかぶる。

「おっと、やらせませんよ」

拳を振り下ろすその前にぶんぶんという不快な羽音を立てる集団に取り囲まれてしまう。

「チイツ!! ……オラオラオラオラオラオラオラアツ!!」

「すこしでも刺されたらアウト、ですよ。頑張つて迎撃してくださいね。わたし自身は痛くも痒くもないですが」

言っている端からどこからともなく蠅達はどんどん湧いてくる。しかもどうやら脳にあたる部分をきつちりつぶさないで復活してくるらしい。防戦一方だ。

「ひ、卑怯だぞ! 出てこい! 姿を見せんか! 名を名乗れ!!」

おれの影に隠れつつ、じじいがわかりやすく挑発する。

『どうしてそんな必要が?』

だが残念ながら、敵はそう浅はかではないらしい。その手には乗ってくれないようだ。

『まだ、すこしだけ早いのでね……』

「!？」

『わたしの目的は貴方たちの『時』をいただく。ただ、それだけ。夜。絶対なるDIO様のための時間。それまでの……』

「……時間稼ぎ、ということか」

『まあ冥土の土産に、名前ぐらいは教えて差し上げましょうか。』

わたくしはDIO様の御傍にお仕えする執事の一人、ミント・チョコラータ。

暗示は病気、悪疫をもたらす……セクメト神』

「セクメト神……！」

『いいんですよ。いくらでもやっていただいて。そうして、疲れたらゆつくりと……おやすみなさい。クク、ククク……』

「チツ、こりやあまさにジリ貧ってやつだぜ……」

全部殴り潰したかと思えば息つく間もなく次の波が来る。まったくキリがないかと思えた、そんな中、背中から声が聞こえてくる。

「ふう、やれやれじゃの。しかたがない」

「じじい？」

「ここはこのジョセフ・ジョースターが久方ぶりにいつちよ本気を出すのでしょうかのう！」

いいつつ、懐から一本の瓶を取り出し、蓋を開ける。

「おい、おまえもじゃー！」

「ぎやうツー！」

ちやつかり床に張り付き砂に埋もれて擬態していた犬を引つ張り上げながら。

「ただし……ちよこーつとの間、頼むぞ、孫よ」

「ちっ！ ……つたく、孫づかいの荒いじじいだぜ」

不敵なウインクに、にやりと笑みを返す。

「……しかたねーなあツ!!」

*

*

*

(日が傾きかけている……急がなくては)

背中に照り付ける西日を感じる。

病院を出た僕は屋根から屋根へ、法皇の触手をつたい、街を飛びまわり、急ぎDIOの館へと向かっていた。

外壁までたどり着き、先程出る時も使った穴から再び館内に侵入する。

「しくしくしく……」

すると階段の踊り場でうずくまり泣き崩れる一人の女性がいた。こちらに気づくと

顔を上げ、駆け寄り涙声で訴える。

「しくしく……助けて。助けて下さい！ あたしD I Oから逃げてきたんです。また捕まってしまったら……ああ」

「……」

そのまま、僕へとしなだれかかってこようとする女性。

「……スプラーツシュ!!」

それを思い切り吹き飛ばす。

「ひ、ヒイーツ！ 痛いツ!! な、何をなさるのですか!?!」

「五月蠅い。くだらん茶番に付き合っている暇は今の僕にはない。ついでにいうと自己ワーストレベルに機嫌も悪い。見逃してやるだけ有難いと思え。背中に女性の顔がついている、それが貴様のスタンドか?」

「へえツ!? な、何故わかったのですか!?!」

「手が裏返し……つと、こんなヌケサク相手にしている暇はないんだつた。じゃあな」
一刻も早く皆と合流しなければならぬ。放つておいても特段問題なさそうなので、さつさと立ち去ることにする。

そんな僕に後ろから悔しまぎれの捨て台詞が届く。

「くそっ！ 馬鹿にしゃがってよオ！ へん、とつとと行きやあいさ。花京院、てめー

もビョーキになっちまいな—ッ！」

「……なんだと?」

*

*

*

「オラオラオラオラオラオラオラ……ぐッ!」

『やりますねえ—ッ! 流石は星の白金! 流石はD I O様も認める男、空条承太郎!

でもそろそろ限界ではないですか?』

「……チツ」

額から流れてきた汗が頬を伝う。

どれくらい時間が経っただろうか。もはやそれもわからないくらい拳を振るい続けていたおれに耳障りな敵の勝ち誇った講釈が聞こえてくる。

『そろそろわたしの時間稼ぎも終了時刻になりました。そして前言撤回させていただきます。この程度ならばD I O様の御手を煩わせる必要すらない。わたしが一気に力をつけてさしあげましょう! 蠅達よ、総攻撃のお時間ですよ』

おぞましいことに今までとは比べ物にならない数の大群が四方八方から向かってくる。見渡す限りの巨大な黒が周囲をすっぽり埋め尽くすかのようだった。

「くくく……」

思わず笑ってしまう。

『おや？ どうされましたか。どうしようもない事態に直面すると人間は笑うしかなくなるというのは事実ということでしょうか。それとも、ククク、ただ単にお気が触れてしまわれただけでしょうか？』

「……やれやれだぜ。勘違いすんな。時間稼ぎが終わったのは、こつちの方つてことだぜ」

『……なに？』

「……舞い踊れ砂塵ツ!! サンドコイラルオーバードライヴ黄土色の波紋疾走ツツ！」

「ツ!! なにイイイツ！」

じじいとイギーが巻き起こした黄金色の砂嵐が黒き塊を呑み込み一掃する。

嵐が過ぎ去ったその後には生気を失った蠅達が次々と撃ち墜とされていく。

「どうやらすっかりお忘れのようじゃのう。吸血鬼が苦手なのは日光だけじゃあないつてことを」

『は、波紋、だとおツ?!』

「イギーの愚者で発生させた……この砂はただの砂じゃあない。一粒一粒に波紋を伝わりやすくするこの油をたっぷり染み込ませてある。昔はアメリカンクラッカーに使っ

て武器にしていたりしたんじゃないぞ」

そういうえば昔、よく振り回しているのをみたな……自慢げにいうじいを見ておれの頭にも幼き頃の記憶が甦る。

「とはいえ、これだけの砂粒に全て能力を乗せるのにはちと骨が折れたかの。あーつかれた」

『く、くそツ！ まだだ！ まだ飼育室には予備の蠅達が……ガペツ!!』

するとそこで突然通信が途絶えた。

「なんだ？」

「う、うーん」

「むにや……？」

「ポルナレフ！ アヴドウル！」

そして、ふたりが目を覚ましたかと思うと、再びスピーカーが繋がる。

『……えー、てすてす。聞こえますか？』

そこから響いてきたのはよく知る男の声だった。

『……お待たせしました。遅ればせながら、不肖、花京院典明再び参上。……なんてね』

「花京院！」

「おまえ一体どこに!?!」

『本体の潜伏していた、裏の隠し部屋です。ヌケサクなヌケサクがすべて吐いてくれま
したので』

ザ・サン
太陽の時と同じパターンのもので、セクメト神、その本体それ自体は全く無力、無防
備だったらしい。憎々し気にじじいが嘆く。

「ま、またこやつ、いいところ持つていきおった！ せつかくわし、大活躍したのに……」
『ふっ、さつきの借りを返したまでですよ、ジョースターさん。じゃあ僕もそっちに行き
ますね』

通信が終了する間際、間抜けな敵の断末魔の叫びに似た呟きが流れてきた。

『で、D I O様……万歳……ぐふっ……』

*
*
*

「ゼヒー、ゼハー、くたびれたわい……」

「こんなに波紋練つたの何年ぶりじやろうか……暫く打ち止めじや」

「ご苦労だった、じじい」

「うん……あのさ、承太郎？」

「こんなときくらい……もっと褒めてくれてもよくない？」

「チツ、おれだって疲れたつての。なげーんだよ……つたく」

合流後功労者である承太郎とジョースターさんを労いつつ、落ち着いたところで僕は改めて口に出す。

「すみません、遅くなりました」

「……いや」

皆それを言葉少なに受け入れてくれる中、いつも言葉の少ない男がぼつりと零す。

「やっぱり、もどつてきちまったか……」

「は？」

「なんでもねえ」

問うも答えず、承太郎は逆に僕に問い返す。

「……おいてきたのか？」

「もちろん」

「いいのか？」

「ああ。……当然だ」

「……」

それ以上彼は何もいわなかった。

代わりに天を仰ぐ。

「やれやれ。しかし、敵の思惑通り、かなり時間をくちまったな……」

「ああ。外はもう日が沈みかけていた。急がなければ……」

「……さてと」

「……えっ!?!」

いつこの場から逃げ出そうか……そんなことを目論んでいるであろう小男にぎろりと揃って矛先を向ける。

「なんでてめー、ぶちのめさずにそのままにしておいてやっている思う?」

「迅速にD-I-Oのところに案内しろ、ヌケサク」

「ヒイーツ!」

そうしてヌケサクの尻を叩きつつ辿り着いた、塔の最上階。ひとつだけある部屋。

打ち付けられた板を壊し、窓を開放し西日を入れつつ、警戒しながら侵入する。

すると、中央に、煌びやかに飾られた禍々しい気配を放つ、棺桶があった。

(……この中に、ヤツが……)

「……」

複雑な表情を一樣に浮かべ、全員でそれを見つめる。

それぞれ皆、思うところがあるのだろう。

(後悔はない……)

無論、それは僕も例外ではなかった。

(今までの旅に……)

そして、これから起こるかもしれない事柄に……

……僕は……)

「……」

ふいに浮かびそうになるものに気づかないふりをする。

再び押し込める。……奥底に。

(……そうだ)

(後悔など……ない……)

てきぱきとジョースターさんが配置の指示を出し、全員で棺桶を取り囲む。

「ヌケサク、おまえが蓋を開けろ。開くと同時に、一斉に攻撃する」

「ひい！　でい、DIO様！」

わたしは貴方様を裏切ったわけではけっして……!

貴方様のお力を確信しているからなんですう……!!」

「つべこべ言つとらんで、さつきと開けんかーッ!」

往生際の悪い敵に、ジョースターさんの恫喝が響く。

「でい、D I O様、

……さあ、こいつらをやつつけておくんなましよおおお!」

棺桶の蓋が、ゆっくりと開かれる。

「……え……?」

「……オレ……?」

しかし、入っていたのはヌケサクだった。

今まさに蓋を開けていたはずのヌケサクだった。

「なっ!!」

「ええ!!」

「はあ!」

意味が、わからなかった。

「な、なにイイツ！ どうして!? わしは一瞬も目をはなさなかった!」

「超スピードとか、催眠術じゃあ断じてねえ……………」

「さ、さつきと同じだ……………」

「^{ザ・ワールド}世界!？」

(こ、これが……………!?)

「野郎……………おもしろくなってきたぜ」

瞬間、はりつめたような……………悪寒や怖気、そういった類いの不快な間隔をひつくるめたような戦慄が全身を走る。

「やばい……………」

「なにか……………!」

「やばいぜツ!」

「逃げろーツ!!」

すぐさま窓から全員で外へ飛び出す。

「確かに感じた!」

今……………あのままあそこにいたら確実に一人ずつやられていた!!」

「いったい……………なんだったのだ……………今のは……………」

（気配だけで、今まで出会ったどのスタンドをも超えている凄みを感じたッ！）
庭に、皆で降り立つ。

「まずい。じつにまずい。太陽がほとんどみえなくなっている……」
ジョースターさんが悲痛な表情で、言葉を続ける。

「明日の日の出まで待つ……と言いたいところだが、もう時間がない。

敢えて言わずにおいたが、実はすでに危篤状態だと、……今夜が峠だと、今朝、連絡が……」

「!？」

「ホリイを救えなくては意味がない。挑むしか、ないのだ」

全員で、頷く。

「が、ヤツのスタンド、『世界』に出会ったのにどんな能力なのか欠片も見えない。このままでは全員……」

「……」

「しかし、チャンスは必ず来る！

！
DIOはこれから必ずわしらを追ってくる。日の出前に仕留めようとするじやろう

その間に必ず、ヤツのスタンドの正体をあばくチャンスがあるッ！ それを、待つん

「じゃー！」

(……ヤツの……スタンドの、正体)

D I Oとの決着は、館から市街へと舞台を移して行われることとなった。

その辺にあった全員が乗り込める荷台付きの軽トラックを買い取るべくジョースターさんが運転手と交渉をしている。

先程館の中で、ヤツの『世界』の得体の知れない底のなさを感じた僕らはそれに乗り込み、とりあえずD I Oと距離をとりつつ反撃の機会を待つことになった。

「よし！ 皆、乗れ！」

空を、見上げる。陽が、とうとう、完全に、沈んだ。

薄夜。よるの、はじまり……。

「夜が、奴の時間が、やってきてしまった……」

土地勘のあるアヴドウルさんの運転で、カイロ市街をひた走る。かなりのスピードで、道行く他車の間をどんどんすり抜けながら。

「奴がかもし出しているドス黒い雰囲気は依然として遠くならない……追ってきている

のだ。

奴はわしらを追ってきている！」

頭を抱えるジョースターさんに疑問を投げかける。

「……敵は、僕たちの位置が正確にわかってるんですか？」

「いいや、ヤツの肉体は、わしの祖父、ジョンサン・ジョースターの体。不思議な肉体の波長のようなもので存在は感じるが、近くというだけで、場所は正確にはわからない。わしがDIOの館の近くまで来ながら正確にわからなかったようにな。やつが感じているのはなんとなく、ジョースターが近くにいて、というだけで、わしと承太郎の区別もついていないはずだ」

「……来た！ あれか……」

後方に、さらなる猛スピードでこちらへと向かってくる一台の高級車が見えた。

その距離およそ100mといったところか。

「……………え……………」

目を見張る。

後部座席、深くシートにもたれかかり、足を高く組んでいる男……

……その隣。

僕は信じられないものをみた。

「……………うそ……………だろう?」

見間違えだと思いたかった。

しかし僕はその姿だけは見間違えるはずなど決してない。

「……………ひ、仁美、さん……………」

宿敵を睨みつける、その姿を。

「……………どうしてあなたがここにいるんだーッ!!」

guilt

「……どうしてあなたがここにいるんだーッ!?」

幻でも見ている気分だった。

まるでわけがわからない。

ハイエロフアント
「法 皇 ツツ!!」

しかし、頭思考よりも先に心曲波紋が動いていた。

法皇を全速で後方に向かわせる。

DIOの元へ。……彼女の元へ。

「DIO ツツ!! そのひとから……離れる——ツツ!!」

「……花京院の……!」

——ゲロを吐くぐらいこわがらなくてもいいじゃあないか。安心しろ。安心しろよ、

花京院——

赤き不気味な光を湛えた双眸がぎろりと相棒をとらえた瞬間、数か月前の奴の言葉が

ありありと甦る。

(……………くそ！ 二度と！ 二度と……………負けるものか……………！)

「くらえッ！」

払拭するか如く、必殺の一撃を放つ。

「エメラルド・スプラッシュ!!」

「……………フン……………」

ところがヤツは少しも焦ることなく、おもむろに発射された礫のひとつを指ではじく。それはビリヤードの如く他の礫にぶつかり、命中するはずのものの軌道がすべてずらされてしまう。

「な、なんてやつだ！ シートから少しも腰を浮かさずに指一本でかわすなんて……………」
落胆も驚愕も挟んでいる暇はない。挑むしかないのだ。息つく間も与えぬよう即時追撃を敢行する。

「ならばこれはどうだッ！」

分散していたそれを今度は全て一点に集中して発射する。

「こんなもの……………」

「なにイ！」

が、それも両手で全弾はじき返されてしまう。

「く、くそっ……しかし!」

でも、今はそれでよかった。少しでも気を逸らすことができれば。それだけで。

「……仁美さん! つかまって!! 早くッ!」

反対方向のドアを開け放ち触手を伸ばす。

「……花京院く……っ!」

差し出されたその手を必死に掴む。

勢いを利用しすぐさま躊躇いなく車外へと飛び出す彼女。それをそのまま引き寄せようとした、その時だった。

「うッ!」

急に目の前に現れた。

立ちほだかつていた。

本当に、急に。

『『世界』 ツ!』
ザ・ワールド

(なんだ? いつ、スタンドを出したのだ!?)

いつの間に!? バカな!? 気づかないなんて……)

初めて目の当たりにした『世界』は人型で、デザインはまったく異なるが、どこか
スターフラチナ
星の白金を彷彿とさせるものだった。

それが大きく腕を振りかぶって、法皇を襲う。

「ツ、せ、セシリアッ！」

同様の戦慄が走ったのであろう彼女が懸命に叫ぶ。

「きやつ！」

「ぐあッ！」

想定外の威力なのか、衝撃を完全には防ぎきれずに彼女もろともふっ飛ばされてしま
う。

「チッ……距離がちと離れすぎていたか。射程外にすっ飛んでいった。

まあいい。返してやるよ。ククク……」

「法皇ツ、戻って来いッツ」

離すものか、その一心だけで宙に投げ出された彼女を法皇で僕たちの車の方へと手繰
り寄せる。

「仁美さんッ!!」

突風に吹き散らされたひとひらのはなびらのように舞い込んでくる。そのか細い身
体を荷台の端、間一髪滑り込みながら受け止める。

「花京院くん……」

この腕の中に。たしかに。

「……………ごめんなさい、私……………」

「ツ！ 無事ですか!? どこも何も!?」

呆然としている彼女の視線をとらえて一心不乱に訊ねる。

「……………っ！ 花京院くん！」

みるみるうちに碧の瞳が潤んでいく。それが零れてしまおうとおもった刹那、胸の辺りに心地よい重みを感じた。

「……………よかった。よかった……………」

「な……………!? そ、それはこっちの台詞……………」

寄せられた頬から学生服越しに彼女の体温が伝わる。

振り切ってきたはずのものが、それを引き金にあふれてくる。

「……………ああ、もう……………」

こらえきれず、ぐつと両腕に力を込める。

どうしてだろう。不思議で仕方がない。

ほんの数時間ぶりなのに、何十年も離れていたような感慨を覚えてしまうのは。

どうしてだろう。本当に不思議で仕方がない。

この香りも、このぬくもりも、この感触も……………この腕の中にあるすべてがこんなにも

愛しくてたまらないなんて。

「話は後だ！ なにか来るぞッ！」

その声に瞬時に我に返り後方を臨む。

奴の車が不気味に停車した。と思つた矢先だった。

黒い塊がぼつんと見えた。最初は小さな点だったそれがだんだんと大きくなつてくる。

「あ、あれはッ！」

視認できる距離になり、ようやく気付く。隣の彼女も目を見開く。

「……議員さんッ!!」

ものすごいスピードで飛んできたのは、なんと『人間』だった。

「セシリアッ！」

彼女がすぐさまスタンドをミサイルの様なそれに放つ。

「お、御願ひ！ だ、誰か！ 受け止めてあげてくださいいっ」

「やれやれ……」

「しかたねえなあ」

その声にスツと立ち上がる承太郎とポルナレフ。

「……オラアツ!!」

剛速球で向かってくるそれを星の白金が組んだ両腕でタイミングよく勢いを殺しながら上空方向へとはじく。そう。あたかも排球バレーボールのように。

「ナイスレシーブです、承太郎! ……つてか?」

黄色いつもり野太い声でふざけつつも、高く舞い上がったあと落下してきたところで、ポルナレフがそれをがっしりと受け止める。

「ふつ、ナイスキャッチだぜ、ポルナレフ」

「へへ、スパイクかますのは一応やめといてやったぜ。感謝しろよ、保乃」

「は、はい。ふたりとも、ありがとう」

そして男の首根っこを猫掴みしたまま、ポルナレフが全員を代表して当然の疑問を漏らす。

「つてか……このオッサン、誰?」

それに答えつつも、生身で人間魚雷をしたのだ。当然ながら気を失ってしまっているその男に呼びかける彼女。

「ええと、お、恩人……です。議員さん! しっかりしてください、議員さん!! よ、よかった、生きてる!」

そこで僕達の車も停まった。人気のない閑散とした駐車場だった。一旦態勢を整え

るべきだと判断したのだろう。

「ううーん」

「大丈夫ですか!？」

ほどなくして男の意識も戻った様だった。

「アアッ!　ち、チミはさっきの、ほ、微笑みの爆弾ヒツチハイカーッ!？」

「あ、はい、どうもです。先程から大変御世話になっております」

謎の二つ名に動じることもなく律儀にペこりと挨拶を交わす彼女。

「ゆ、夢じゃあなかつたのか!?　じゃッ、じゃあ、あ、あ、ああアッ、あの悪魔は!?　……
い、いない!」

酷く恐ろしい目に遭わされたらしい。議員と呼ばれた男は自らの頬をつねりながら錯乱気味にオドオドきよろきよろと辺りを見渡す。

「ヒイ!　けど、なんかごっついのがいっぱい増えてるーッ!？」

「あつ、違つ!　このひとたちは……」

「も、もうヤダ、お家帰るーう!!　ゆ、ゆゆゆゆ!　夢だ!　やはりすべては夢なのだ!

早く醒めてーッ!!」

弾かれるように立ち上がるやいなや脱兎の如く路地へと消えて行く彼を荷台から降り見送りつつ彼女は深々と頭を下げる。

「本当にすみませんでした、議員さん……でも本当に、助かりました。有難う」

「ひ、仁美さん！ どうして……！」

そうしてようやく少しだけ思考が回るようになった僕は改めて、その背中に尋ねようとする。

「はあ、聞くまでもないじやろ。そんなもの」

「ああ」

「だな」

「まあ、薄々予想はしていたがな」

すると彼女の代わりに、代わる代わる声を揃える仲間たち。

「このボケ女のこった」

「誰かさんまっしぐら。どうせ館に戻ろうとして、治療も受けずに病院抜け出したんだろ」

「で、そこをD I Oにみつかっちゃまって……」

「あの議員とやらの命を盾に脅されて共にいた、というところか」

「あ……っ、あの、はい。ご、ごめんなさい、また迷惑……」

凶星らしい。縮こまり今度は皆に頭を下げる。というかそのあたりは僕も当然わ

かっていたことなのだが。

「そんなこと面白い。が、ヤス、おまえ……腕、というか、身体いいのかよ?」

承太郎が代弁してくれる。そうだ。そのとおりだった。しかし、一様に頷きその様子を心配そうに窺う全員に対し、彼女はにっこりとこんなことをいう。

「ありがとう。点滴をしてもらいましたから。もう大丈夫」

だが言葉とは裏腹に、弱々しい笑みを浮かべるその顔色はちつとも改善していないどころか、月明かりのせいだ、と信じたいくらいさらに白く、悪化しているとしか思えなかった。

……ここでは余談になるが、その理由は怪我の影響というだけでは決してなく実は他にもあったのだ。とても彼女らしい理由が。

しかし、その事実を含め、この日彼女に何があったのか、すべてを僕が知るのは、間抜けにも『すべて』が終わってからだった。

兎にも角にも、そんな蒼白の表情を目の当たりにして黙っていられるはずもない。僕は詰め寄り叫んでいた。

「大丈夫なわけ、ないだろう!?!」

「……ある」

「戻れ! 戻るんだ!!」

「…………いや」

再び繰り広げられる押し問答。双方一步も譲らない争い。

ヒートアップしていく僕。一方、彼女は静かだった。だが、動かざること山の如しとでもいうべきか。その意志はあまりにも強固すぎた。それでもこちらだつて折れるわけにはいかない。

(だめだ…………！ ぜったいにだめだ！)

なんでだよ…………なんでそこまでツ!!)

「なんで…………」

それを口にしようとしたところだった。彼女がキツと顔を上げたと思つた瞬間、小気味よい音と共に額に衝撃が走る。

「…………いたつ！ で、デコピン…………?!」

「当て身の、しかえし」

額を押さえながら目を瞬かせていると、泣きそうなかおで彼女が僕の痛いところを鋭く深く突く。

「『なんで』？ それこそ、こっちの台詞だよ。なんであんなことしたの？ 私の気持ち

無視して…………」

「そ、それは…………」

「私……っ、おこっているから」

「うっ……」

俯き、さらに必死で言葉を畳みかける彼女。

「自分だって、目がみえなくなつて、とか言っていたじゃない。

私だって、私がここにいたいからここにいるの。私の意思で。

いいよ。べつに。もしもまた置いていかれたつて、またこうして何回でも勝手についていくし。

それくらい、私にだってできる」

「くっ……！　でも……！」

「……」

そして一瞬黙りこくつたかと思うと、ポツリと零れる。

「……もう、いや」

「え？」

「もういや。はなれるの、いや。

……ぜつたいに、いや」

「仁美さん……」

ふるえながら発されたそれが、僕の決心をぐらぐらと揺さぶる。

「……もう、あきらめろ。花京院」

そこのため息まじり投げかけられるひとつの声。

「いいじゃねーか、好きにさせてやれ」

「じ、承太郎！」

「わかってんだろ？ てめーだってもう。『無理』だつてよ」

「っ！ し、しかし……」

「ガタガタうるせーな。なら言うが、てめーこそ、さつき人形になってただろうよ」

「うっ！ そ、それは言わない約束だろう!？」

「人形……?」

首をかしげる彼女にジョースターさんがこそつと耳打ちする。

(あつ！ 秘密にしといてくれるって……くそ！ もう絶対奢らないからな)

ふたりのやり取りが気になりつつも、承太郎に「反論する。」

「そ、それとこれとは話が別だ！」

「別じゃねえ。要は、誰がいつどうなつてもおかしくない……つてことだ。

なら自分の意思を何より尊重させてやるべきじゃあねーのか？」

「……くっ……。わかって、いる……そんなことは……」

押し黙った後、堰き止めておくのにも限界に達した気持ちが決壊する。

「でも！ だからこそ！

もう、これ以上……！」

いやなんだ！ ぜったいにツ！！」

「……花京院くん……」

「わかるだろう？ わかって、くれよ……！」

すると彼女は、一瞬目を細めたあと、微笑みを浮かべながら、いった。

「……わかってるよ。」

『なんで』だなんて、ほんとうは。

おこっている……なんて、うそ。

……ごめんね。

でも、あなたこそ……わかってるでしょう？

私も……おなじきもち、だもの」

まっすぐな瞳で、みつめられる。

(そんなの……)

抗うことなど、できなかった。

承太郎のいうとおりだった。本当は痛いほどもうわかっていた。

はなれるなんて……『無理』だ。

「……。……あー、もう、……わかったよ……」

「……ありがとう」

「……さ、そうと決まれば作戦会議、じゃ」

ジョースターさんがねぎらうかのようにぼんと僕の肩を叩き、場を収める。

「幸いというか……奴が追ってくる気配は今のところない。」

別の車を物色しているのか、それとも他に何かをしているのかは定かではないが、別の居るであろう、その方向を見やる。街は月明かりの下、不気味に静まり返っていた。

「何時でも我々全員を仕留めることができる、という余裕の表れかもしれんな」

「けつ、10秒数えてから追っかけるって、鬼ごっこのもりか？ なめやがって」

アウドウルさんの的を得た私見にポルナレフが息巻く中、ジョースターさんが僕を諫める。

「花京院、さっきの……気持ちはわかるが奴に近づきすぎじゃぞ」

そこにあわあわと割って入る彼女。

「す、すみません！ あれは私のせいでは……」

「いえ、つい……すみません」

頭を下げ合っていると、核心を訊ねられる。

「おまえたち……『世界』を見たのか？」

その質問に、同時に頷く。

「はい。桁違いの破壊力でした」

「ええ……さつき僕は10mの距離から攻撃しましたが、あと少し近づいていたらやられていた。しかし、おかげでジョースターさん、貴方の推理通り、やつスタンドが『接近パワー型』だということが確実にわかりました。承太郎のスタープラチナのような油断など片時もしていなかった。

にもかかわらず、突然、現れた。目の前に。

やはり同じような印象を受けたらしい。彼女も眉間に皺を寄せる。

「本当に……わけが、わかりませんでした。気がついたらすでにそこにいた」

「はい。奴のスタンドにはなにか想像を超える恐ろしい秘密が隠されている……」

「ああ。やはりなんとかDIOの能力の秘密を暴かなければ我々に勝ち目はない。

が、注意深く探るのだ。やつとの場合、石橋を叩きすぎるといふことは決してないか

らな」

「しかし、一体どうやって……」

(……ん?)

全員が思案にくれる中、なにかが頭に浮かんでいるような、そんな様子に気づき、声をかける。

「……承太郎、なにかあるんだろう？」

君の意見を聞こうッ！」

「……」

すると、ゆっくりと彼が口を開く。

「……時間差攻撃」

「……は？」

突飛なそれに全員あつげにとられる中、彼は続けた。

「囷攻撃ともいうな。さつきポルナレフとやってたアレで思いついたんだが……まあそれはいい。『逃げながらヤツと闘う』人間と『追いながらヤツと闘う』人間、分かれれば……」

「挟撃か!!」

察したアヴドウルさんの言葉に承太郎は頷く。

「奴はおれたちジョースター家の気配を頼りに向かってくる。囹はじじいだ」
「わ、わし!？」

「兼、斥候だ。気を引きながら花京院と共に奴のスタンドの秘密を暴け。で、それを……」

彼の視線が動きが一点で止まる。

「……ヤス、てめーが護るんだろ?」

「……うん!」

その返事はまるで水を得た魚のようだった。

片や、再び僕はぼやかれる。

「つーか、さつきみてえに離れたところでやりあわれちやあ、一緒にいようがおれとポルナレフみたいな近距離スタンド使いにやなにもできねーんだよ」

「か、重ね重ね、すまない……」

「ご、ごめんなさい」

それを受けアヴドウルさんが提案する。

「ならば、分かれる組み合わせはスタンドの射程距離別が良いな」

「ああ。おれとポルナレフ。アヴドウルは犬」

今度はポルナレフが呼応する。

「暗殺……だな？」

「そうだ。おれとポルナレフは気づかれないうよう後方から近付いて強襲する。アヴドウル達も別方向から奴を追って得意な距離から援護を頼む」

「そして……全員で奴を討つ」

「……よし、では……行くぞ」

作戦の確認を終えた後、頷き合い、歩き出す。

「……」

皆が先に進む中、おもむろにひとり立ち止まる。

「花京院くん……？」

気付き振り向く、彼女に告げる。

「ここでゆるしたこと、後悔させないでくださいよ。」

「いや、もう、かなりしている……けれども」

「……わかった。させない」

目を閉じ、うなずく彼女。

失われてしまった左腕。

それをかばう素振りもみせぬ、健気な、その姿。

口惜しい気持ちか胸いっぱいになり、唇を噛みしめる。

「どうしてあなたがこんな……」

「……しようがないよ。これは『報い』だから」

「は……?」

消え入りそうなほど微かに発されたその言葉の意味がわからず怪訝な顔をする僕に、すぐさま首を振り訂正する彼女。

「ううん、日頃の行い、つてやつだよ。きつと」

「なにいつてるんですか、まったく」

そこで思いつく。いや、嫌になるくらい思い知った。それを欠片だけ口に出す。

「なら、前科一犯ですね、あなたは」

「えっ!? み、見てた……?」

「え? 何を?」

「い、いや、なんでも!」

何を勘違いしたかぶんぶんとかぶりを振る彼女にいう。

「はあ、よくわかんないけど、見てないですよ。だって、みえないから。あなたの罪は」

「え……?」

こんなにも、狂おしいほどに奪ってしまった。

僕の心を。

「さ、行きますよ」

答えずに歩き出そうとすると、今度は逆に彼女に呼び止められる。

「あの、花京院くん……」

「なんですか？」

「……。なんでもない」

「またか。変わらないな……。ほんとに」

いいかけて、やめる。

相も変らぬ、彼女の悪い癖。

「ごめん。でも、ほんとうに……。なんでもないの」
決意する。

『覚悟』を、決める。

「……僕から、はなれないで。ぜったいに」

「……うん。
もちろん」

THE TIME

僕には友人がない。

……いや、いなかった。

ずっと、ひとりだった。

それがかまわないと、おもっていた。
うまれたときからそばにいた、相棒。

その存在を、ずっと隠して。

ほんとうの自分など、だれにもみせずに。
ずっと、そうして生きていくのだ。

そう、おもっていた。

卑下など、しているつもりはなかった。
むしろ誇らしくおもっていた。

その、はずだった。

しかし、こころの片隅で、ほんの、かたすみで……

やはり、引け目に思っていたのかもしれない。

自分が、異能者であることを。

どうして、僕だけ、と。

すきでこんなふうになされたわけじゃあないのに、と。

そして、D I Oに出会った。

なんとという不運、そして、皮肉だろうか。

密かに、確かに、『いつか』と心の奥底で求めてしまっていた、初めて『みえる』相手が、こんな怪物だったなんて。

——恐れることはないんだよ。友だちになろう——

僕は自分を呪う！

それを聞いて僕はホツとしたんだ。

正直いつて心の底から安心したんだ。まだまだ生きられるんだ！ そう思った。

しかし、屈辱だ。ゆるせない。

これ以上の屈辱はない。

自分がゆるせなかった。

ヤツに精神的に屈した自分を呪った。

あの瞬間、僕は、失ったのだ。

誇りを。『□』を。

取り戻したかった。

……乗り超えたかった。

そう誓って、同行を決めたこの旅で……

僕はみつけたのだ。

はじめて、気持ちの通じあう、仲間を、友を。

この世にただひとり……

……運命の女性^{ひと}を。

そうしてようやく現在^{いま}……

僕はここに立っている。

*

*

*

DIOの得体の知れない底のなさ。

改めてそれを痛感した僕らは、承太郎の意見を採用し三隊に分かれて行動することにした。

「くそ、やつめ！ 飛び道具を覚えおったか！」

ジョースターさんがバックミラーを憎々し気に睨む。

承太郎とポルナレフ、アヴドウルさんとイギーが各々行動を開始するため路地裏に消えた。それを見送ったのち、僕達が乗り込んだ車も発進してまもなく、DIOとの『鬼ごっこ』は再開した。

路上に停めてある自動車、バイク、道路標識、郵便ポスト、ドラム缶……細大問わずあらゆる物が後方から勢いよく飛んでくる。

こちらの動きを牽制する目的か、いや、ただ『射的』を楽しんでいるだけかもしれない。これは狩りなのだ。罪もない野生動物に銃身を向ける金持ちの道楽狩人ハンターにでもなった気分なのだろう。まず、足を奪う。その定石を辿るつもりなのだ。先程体験した、『世界』ザ・ワールドのあの未知の力。その気になれば僕達を仕留めることなど本来容易なはずなのだから。奴にとって僕達はいつでも捕まえられる籠の鳥なのだ。

(ん……?)

そこで、ひっかかった。なにかが。

「任せてください!」

しかし僕が思考を巡らせている間にも脅威は次から次へと迫ってくる。させるものかと彼女が車体をセシリアで覆い、飛来物から護る。

「……また来る!」

「あ、あれはッ!」

「う、うわあああああーッッ!!」

だが、次にそのスタンドが掴み放り投げてきたのは『生きている人間』だった。偶々奴の目に留まったただけであろうに。救急車のサイレンのようにドップラー効果を伴い、悲哀に満ちた甲高い叫び声が猛スピードで接近してくる。

「いけない! ……ッ! ……ごめんなさい!」

彼女がそれをおいそれと見捨てられるはずもない。とっさにセシリアの保護対象をその人物に移行する。が、このままではトラックとの衝突は避けられない。

「くっ! ジョースターさんッ!」

「うむ!!」

瞬時に彼女を抱え、『ハイエロフアント法 皇』の触手を伸ばし車内から辛くも脱出する。

それにすぐさまジョースターさんも続く。同様に『ハイミットパーブル隠者の紫』の薔薇の花のつるの様

なそれを絡ませて近くの建物に飛び移る。

激突の衝撃で独楽のように弾き飛ばされ、乗っていたトラックは壁に激突した。

一方僕達はそのまま上方に移動しひとつのビルの屋上に降り立つ。

「すみません、ジョースターさん……ごめんね、花京院くん」

抱えていた彼女を下ろした途端、しゅんと小さくなり頭を下げる。

なんで謝るんだろう。そんな必要などないのに。

歯がゆくてしかたがない。

そもそも自分の方がよっぽどつらいだろうに。どうして他人のためにばかり無理をするのだろう。もつと自分のことだけ考えていてほしいのに。

このひとはいつもこうだ。

その憔悴しきった、悲痛な表情をそれ以上みていられず、視線を移す。

炎が上がり、まっ黒い煙が立ち昇る車。

それへとゆっくり歩みを進めてくるDIO……因縁のその相手を眼下にとらえる。

「……セシリア、戻って」

何が起こったかわからないまま、走り去る投げ飛ばされた男の無事を確認し、彼女がスタンドを戻す。

羽を休める、薄桃色の美しい鳥。

ずっと頭に渦巻いていた考えが急速にまとまっていくのを感じた。

「花京院くん……………」

「行こう。とりあえず距離をとるぞ！ ……？ 花京院？」

それを、口に出す。

「……………思いつきました。…………ヤツの能力を、見破る方法を…………！」

「…………！」

「……………いつてきます」

二人が息を呑み、目を見張る。かまわずそれだけを言い残し、背をむけ飛び去ろうとした。

「……………」

しかし、裾をひかれる。

彼女だった。

「……………いかないで」

「ッ！」

握りしめるその手に、震える指先に力が籠められるのがわかった。ぐつと胸が締め付けられる。

いわれるとおもっていた、いや、正直にいうと、いつてもらいたかったのかもしれな

い。その言葉。

「……とか、いわない」

だが、ちがった。続きがあつた。

「でも、なら……ついていく。私も」

とんでもない提案が。これもそうだ。いつだって彼女は、僕の想像の斜め上に行く。

「なっ!? だめに決まってるだろう! 危険だ!」

「……そんなの、自分のほうが、でしよう?」

私だって、そんなのひとりで行かせない」

思わず声を荒げるものを射た反論で返り討ちにあつてしまう。

「はなれないでっていったの、あなたじゃない。」

私、はなれないから。ぜったいに」

「くっ……しかしッ! だれかが、やらなければならぬんです!

血路を開かなければ!! このままでは……いずれ全員がッ!!」

「だめ。ぜったいにさせない……」

綺麗な碧色の双眸が放つ、まっすぐな光が僕を貫く。

「……あなたひとりに、そんな役」

「ぐっ……」

有無を言わせないちからを感じた。つよい、意思の、ちから。

いつのまにこんなにも彼女はつよくなってしまったのだろうか。今日は本当に、そればかりだ。

たじろいでいる隙に、横から強烈な援護射撃まで飛んでくる。

「わしもこの娘と同意見じゃ、花京院。ひとりでなど行かせんよ。危険すぎる」

「ジョースターさん……」

まくし立てるように畳みかけるように必死に彼女が言葉を紡ぐ。

「代案が、あればいいんでしょう？ ジョースターさん、敵はジョースター家の方の気配を頼りにこちらへ向かってくる。ならばそれ以外の人間……私や、花京院くんの位置は、わからないはずですよ？」

「うむ、みつからなければ、大丈夫なはずだ。だが、近寄った状態で気取られたら終わり、そう思え」

「じゃあ、ジョースターさんは予定通り前方でDIOの注意をひきつける。

あと、なにかあったときのバックアップをお願いします。

私は花京院くんの近くに隠れていて……護る。

それで、どうでしょう？」

「……うむ」

——あきらめろ、花京院——

親友の言葉が頭をよぎる。

背中を、押してくれる。

「……わかった」

ならば、と覚悟を決める。

「ただし、僕からもあなたに条件がある」

そして、ひとつ伝えておく。

「……なに？」

想い出す。

あの茜色の空を。

夜露に濡れた一輪の美しい花がその蕾が開くかのように……

彼女が僕にくれた、あの笑顔を。

「……あの『約束』を護ること」

彼女の睫毛がぴくりと震える。揺れるその瞳をまっすぐに捉える。

「わかりますよね？　そうでなければ……僕だって、いかせない。ぜったいに」

「……うん、わかった」

あなたは皆を護る。

それはもう、揺るぎはしない。

確固たる信念なのだろう。

だったら、決まっている。

そんなあなたのことを……

……僕が護る。

*

*

*

鉄塔からカイロの街を見下ろす。

生温かい夜の風がゆつくりと僕の頬を撫でていく。

「……法皇、出ろ」

彼を見て、僕は考える。

半年前のあの忌まわしい夜と全く同じだった。

相棒と共に眺めた、この街並みも、風の匂いも。

しかし、ちがう。まったくちがう。

「……頼むな」

語りかけつつ、その触手をめいっばい伸ばす。気づかれないように。すみやかに。どこまでも。張り巡らせる。真つ暗な夜空を彼の碧色で飾る。

そう、まるで、『鳥籠』のように。

いまなら、想える。

真に。

心から、想える。

この能力を持ち、生まれてきて、よかった、と。

法皇を通じて全員の気配を感じ取ることができた。

南西の方角には燃えるような熱き雄大な赤き光と小さくとも誇り高き黄土色の光。

南東の方角には軽薄そうदैてその実一途で実直な銀色の光と寡黙にしかし何よりも強い輝きを放つ白金の光。

少し前方にはすべてを穏やかに包み支える紫の光。

そして、すぐ近くでやさしくあたたかく灯る、薄桃色の愛しき光。僕を照らす6つの星たち。

「……ありがとう」

そして、収束する。

半径20 m。

必要最小限、ぎりぎりの範囲で。その分、濃い密度で。

結んでいく。

繊細に、緻密に、精密に。

『法皇の結界』

どんな些細な糸口も見逃すことのないように。

……かまわない。

この身など、朽ち果てても、かまわない。厭わない。

奴を倒し、自らの誇りを取り戻せるならば。

彼らが、目的を達することができるならば。

……あのひとの笑顔を、護ることができるならば。

「……………花京院……………！」

降り立つ、禍々しき『黒』。

「……………DIO……………!!」

とうとう来たのだ。

この瞬間（とき）が。

「……………くらえッ！ DIOッ！ 半径20mエメラルドスプラッシュをーッ！」

「マヌケが。知るがいい。『世界』の真の能力は……………」

まさに！ 『世界を支配する』能力だということをして！」

「ザ・ワールド
『世界』！」

S h o o t i n g S t a r

寒い。

身体が、冷たい。

僕は……やられてしまったのか。

そう思った。

だが、それは間違いだったようだ。

「はっ!?!」

瞬きすらしたつもりはなかった。にもかかわらず、気がつくとも水浸しで天を仰いでいた。ぐしゃぐしゃに破壊された貯水槽に己が半身を晒していることに気づく。

攻撃を受けたのか？ 何故急にこんなところに？

何が起こったのかさっぱりわからない。そんな中、唯ひとつだけわかったことがあった。

視界の端に僕を覆う薄桃色の光が映る。

「セシリ、ア……う？ 仁美さん……」

僕は、護られたのだ。

彼女への感謝を噛みしめつつも、その一方僕の頭の中は『奇妙な疑問』で占められていた。

（僕の、『法 ハイエロフロント 皇の結界』は触れるものが手にとるようにわかる……）

——張り巡らされた蜘蛛の巣を壊さずに——

その言葉にヒントを得た。

察知能力に優れた、法皇の触手で形成した『結界』で取り囲めば『世界』ザ・ワールドに関して何かわかるのではないかと。

破られる可能性が高いこと。危険が伴う……命懸けの行為であることはわかっていて。

しかしひきかえに、たしかに得た。

この、『奇妙な疑問』。

(だが、今『結界』はDIOに全部一度に、同時に切断された……)
唯一の突破口を。

(なぜ一本一本ではなく、少しの時間差もなく、一万分の一秒の差もなく……)

半径20mの結界は『同時』に切断されたのか？ なぜ……?)

あの日、ホルホースから彼女が聞き出してくれた、もうひとつの鍵が頭をよぎる。
ずっと頭の片隅に何故かひっかかっていた、あるワード。

『次元が違う』

次元。

零次元空間とは、点、で表される。

同様に一次元空間は、線。二次元空間は、面。三次元空間は、立体。そして……

……四次元。

(少しの時間差もなく……四次元空間……)

DIOの『世界』の未知の、能力。

真実に繋がるふたつの糸。

それは、手繰り寄せると繋がっていた。

(……時間……)

辿り着く。

一つの答えに。

(……『時』!!)

(わ、わかったぞ！ な、なんてことだ……それしか考えられない)

(『時間』だ！ やつは『時』を止められるのだ……！)

(つ、伝えなくては……このことをッ!! この恐ろしい事実をみんなにッ！)

すぐさま立ち上がり、一步踏み出す。

雨でもないのに地面に溜まった水滴がびしゃりと跳ねる。

「花京院くん!!」

「花京院ッ！」

いきなり『ふつとんでいた』僕の身を案じてくれたのだろう。血相を変えてこちらへと駆け寄ってくる彼女とジョースターさんに告げる。

「ジョースターさん！ 仁美さん！」

「こいつの『世界』の能力は……時を、止められるということですよ！」

「えッ?!」

「な、なんじゃとツツ!？」

「止められるといつてもおそろく数秒ほど。しかも、連続しては不可能……ッ!？」
焦燥と高揚に押されそこまで一気にまくし立てたところで背筋に悪寒が走る。

「……やるじゃあないか、花京院」

いつのまにか立っていた。正面のビルの屋上に。

真つ赤な唇がにやりと不気味に吊り上がる。背後の宵闇と青白い月明かりがそれを一層際立たせていた。

「小娘もだ。褒めてやるよ。我が絶対なる『世界』の中において、なおその能力を如何なく発揮するとはな……ククク」

発せられたその言葉に動揺しつつも確信する。先程、起こったであろうことを。

DIOは『世界』で時を止めて僕を攻撃したが、彼女のセシリアがそれを阻み、通らなかつたのだらう。DIOの言う通り、時の止まった中でも護れるとは……先読み、かつ自動防御、という特性ゆえだらうか。セシリアの優秀さに改めて感心してしまう。

奴は続けた。嘲るような調子で、しかしぎろりと突き刺さるような視線が彼女に向け

られる

「ときに小娘……先程のドライブは大層興があるものだったと思わないか？」

「思いません。思い出すだけで吐きそうです」

少しの間も置くことなくきっぱりと言い放つ彼女。再び楽しそうにDIOは唇を歪ませる。

「ククク、口の減らん。……だが、反抗的な態度もそこまでだ。すぐに従順な犬になる」

「な、なんだと……？」

「一体……？」

「そのまま返すと……思っていたか？」

「ま、まさか……!？」

忌々しい記憶が甦る。そうだ。僕もそうだった。最初の数か月はなんともなかった。

ある日、脳内に響き渡った『言葉』。

「……目覚めろ、小娘」

「ツ……ええ？ あ……」

「そして『我を護れ』。ククク……」

「あ、……あ、ああああッ!!」

彼女がその『命令』を皮切りに頭を抱え、その場に苦しそうにうづくまる。

「ひ、仁美さん！」

「……」

「仁美さん……?」

そして暫時の後、無言ですつと立ちあがり、恭しく礼をする。

「仰せのままに……D I O様」

「なッ!?」

「保乃!?!」

呆然としつつもジョースターさんが苦々しい表情で叫ぶ。

「くそ、しまった!! やはり埋め込まれておったのだ! 肉の芽ッ! あのとときに!!」

「……月の影が、私に囁く」

僕達があっけにとられているうちに、おもむろに彼女は両の手を天に掲げ、高らかに
諳んじる。

「無数にある仮面を手を取れと。」

居並ぶ中から選び取り、私はそれを被るのです……裏切者の仮面を。

生まれ変わります。恐ろしき娘に!!」

「ッ!？」

「あなたもいかがですか? とてもよい気分ですよ。最高に……ふふ」

「ククク。よし。さあ、こちらへ来い、小娘。手始めにこのわたしが直々に血を吸ってやる。」

名譽あることだぞ。クク、ククククク……」

「そ、そんな! 駄目だッ!! 仁美さん! 行くな! 行かないでくれ」

「……」

「目を、覚ましてくれ……ッ!!」

僕の呼びかけは虚空に響くのみで、その背中は遠ざかっていくばかりだった。

「くそッ! ……させるかッ!! エメラルドスプラッシュ!!」

彼女が1m程の幅を軽く飛び越え、奴のいる隣のビルに移った瞬間、耐え切れずD I Oに碧色の礫を放つ。

「……セシリア」

しかし、それらは全て薄桃色の障壁に阻まれてしまう。

「クク、ククク……フハハハハ! 素晴らしい。我は最強の盾を手に入れたのだ」

「お誉めに預かり、光栄に御座います」

勝ち誇るかのように仁王立ちをする奴の傍らにひざまずく彼女。

「フハハ！ フハハハハ……ん？」

しかし、高笑いもそこまでだった。

「ハッ！」

「な、なにイ！」

気づく。奴の大腿に何か突き刺さっていることに。

「こ、小娘、貴様アツツ!!」

苦し紛れに振り回された強烈な拳をセシリアが防ぐ。

「な、にを!? なにを注射したツ!？」

「……」

その質問に彼女が答えることはなかった。

「く、そ……このわたしを……たばかると、は……」

ふらふらと揺らぎ、怨嗟を唱えた後、その場に倒れ臥す。

「おやすみなさい……『DIO様』」

「はあ……まったく」

溜息をつきながら、僕もビルを飛び越え彼女の元へ歩み寄る。

「ど、どーゆーこと? や、保乃、おまえさん、だいじょうぶなんか……?」

恐る恐る目を瞬かせながらも僕に続くジョースターさんに説明する。

「大丈夫ですよ。彼女は……操られてなどいません」

「え!? わ、わかつていたのか? 花京院」

「ええ。途中から、ですが。僕にだけ伝わる『メッセージ』があつたので」

すぐにわかつた。思い出す。先日、ジョースターさん達と合流する直前、ルクソール

で小さな淑女^{レディ}たちに彼女とやらされた。『リアルおままごと ver3:奪われる男』。

「ありがとう。わかつてくれて」

「ほんと、意外と演技派なんだから」

「そっちの方が迫真の演技だったと思うけど?」

「そりゃあ……」

そうだ。わかつていた。演技だなんて。

信じていた。彼女のことを。

それでも、しかたがないだろう。あんな、他の男の元に歩みを進める彼女の背中を見せつけられたのだから。

言えるわけがない。白い首筋に牙を立てられるその姿を想像してしまい、嫉妬の炎に焼かれて狂いそうになった、だなんて。

「い、いいんですよ、もう」

「?」

「しかし、何を注射したんじや?」

ジョースターさんの質問に、どこに隠していたのか彼女は一本の茶色の薬瓶を取り出す。そのラベルには『劇薬』の文字。

「プロポフォル……鎮静効果のある静脈麻酔薬です」

「ど、どこでそんなもの……つて、病院か!」

ジョースターさんの言葉に頷く彼女。

「はい。こないだ私、ホルホースさんに変な薬かがされたじやあないですか。あのあと、後遺症がないかと調べてくれたんですよ。花京院くんが。町の図書館で」

「そうですね。あなたが結局あの時も病院行きたがらなかつたからです」

「だつて病院嫌……。と、ともかくそのときに本で見た麻酔薬の名前の中にあつたなつて目について。もしかしたらなにか役に立つかもと、拝借させていただけだったので
が」

先程の彼女の台詞の意味をようやく理解する。

「『前科一犯』、ね」

「ちゃ、ちゃんと弁償して戻しておくから……だ、だめかな?」

「わしがやつとくよ。そんなもの。あとでいくらでもな」

「……車に同乗させられた時、刺されそうになったんです。肉の芽」

そして、彼女は当時の状況を僕達に語り始めた。

「けれど、脳に達する前にセシリアが護ってくれたんです。こっそり包み込んで排出してくれた。で、思いついたんです。ああ、このまま刺されたって思わせておいた方が後々いいかもしれない、と」

「それにしたって……むしろには言つといてくれてもいいだろう?」

「だ、だって、危険だからって、止められると思いましたが……」

当然の恨み節に焦りつつも彼女があっけらかんという。

「それにジョースターさん、言っていたじゃあないですか。前にポルナレフさんに。

敵を欺くには、まず味方からって」

「……おまえさん、誰かに似てきたんじゃないのか? まったく、一本取られたわい!」

からからと翁が笑う。少しだけ弛緩した空気のと、全員が表情を引き締める。

「が、安心するのはまだ早い」

「はい、とりあえず一番太い注射筒めいっぱいに入れてみました……いつまで効果があるか。血管に入っていないかもしれないし、『吸血鬼に対しての至適使用量』なんて説明書には書いてなかったのて」

「当たり前でしょう。うーん、日の出まで持つとは到底思えませんね。……しかたがない」

思い立ち、彼女に訊ねる。

「仁美さん、『あれ』できます?」

「あ、あれね。うん」

「と、とりあえずちよつと離れんか? こやつ、いつ起きるかわからんし……」

「そうですね」

「では……ハイエロファント!」

念のため距離をとり、元居たビルの方に戻ると、法皇の触手を伸ばす。

「仁美さん」

「うん!」

ハイエロファントを建物全体にはりめぐらせ、限りなく細くした触手をヤツの近くに出し、その足首に絡み付かせる。加えてむき出しの部分をセシリアでコーティングする。

補縛の技として考えた『鎖』であつた。

「この鎖で僕達が拘束していますので。ジョースターさんは承太郎達を連れて来てもらえますか?」

「ああ、わかった。急いで行って来よう」

そうしてジョースターさんが『ハイミットパープル隠者の紫』の茨をロープ代わりに夜の町へと飛び去った。

そのすぐあとのことだった。

「あ、いけない。忘れるところだった」

おもむろに彼女がポケットから何かを取り出し、こちらに差し出す。

「花京院くん、これ……ありがとう」

赤く輝く石。僕がアスワンで彼女にもらった、『御護り』だ。

——いつ何時も、この石は心に想うその相手のことを護ってくれるだろう——

願掛けではないが、せめて、と気づかれないようにそつと今朝、会話を交わした際に彼女のポケットに放り込んでおいたのだ。いつのまにか気づかれていたらしい。

「あまり役に立ちませんでしたね……」

「ううん。私が今こうしてここにいられるの……たぶんこれのおかげだから」

言いつつ彼女はなにかを思い浮かべるかのように目を細める。

「というか、だめじゃない。これはあなたを護ってもらうためにあげたのに。なので、今更だけどお返しさせていただきます。はい」

「いえ。もう少しあなたが持っていて……」

固辞しようとした僕の言葉を遮るようにドスの効いた声が響く。

「……じゃあ、投げる」

「だ、だめですよ！ わ、わかりました。わかりましたから……」

甲子園のエースさながら振りかぶる彼女に本気を感じ、慌てて止める。しぶしぶ受け取り首にかけながら、ずっと気にかかっていたことを僕はとうとう口に出していた。

「その……だいたいじょうぶですか？ って、そんなわけですよね……すみません」

「え？ なにが？」

「なにがって……。そりゃあ……その、身体の調子と、腕……痛いだろうし、えっと、不便だろうし……」

何と言っているのかわからず、ついしどろもどろになってしまふ。もっとうまく気のきいたことをいってあげられたらいいのに。もどかしい。

「ああ。痛いのは痛いけど、点滴のおかげかもうずいぶん楽になったから。血の気も戻ってきたし。ありがと」

しかし、気にする様子を微塵もみせず、彼女はそういって、微笑を浮かべる。

無理なんてしていない……そんなわけがない。

無力感に苛まされていると、彼女は少しの間をおいて、こう続けた。

「不便かあ。それが別に、いまのところ。

歩きにくいのも慣れてきたし。まだ正直、実感がないのかもね」

「そう、ですか……」

むしろ、敢えて実感させるようなことを僕は言ってしまったのかもしれない。その後悔したが、遅かった。

「あー、でも、ひとつ、思いついた……かな」

すると、ぽつりと呟く彼女。

「……なんですか？」

躊躇い一つも訊ねると、あちらからも躊躇いがちに答えが返ってくる。

「ん……？　もう私、結婚できないなあ……って」

「は？　なんで？」

片腕があろうがなかりうが、彼女は彼女だ。なんの関係もない。

そんな当たり前のことを想っていた。

しかし、どうやらそういう意味とは異なるものだったようで、意外な答えが返ってきた。

「……だって……指輪」

「え……？」

「左手の、薬指。

もう、ないから」

「あ……」

「なんて、ね。……ごめん、なにいつてるんだらうね、ほんとに。ふふ……」
目を伏せ、乾いた声でわらう。

胸が、痛い。

彼女自身も自覚していない、深いかなしみだが、伝わってくる。そんな気がした。
なんとかしたくて、おもわず、突き動かされるように言葉を発していた。

「……まったくだ。なにいつてるんですか。

どうでもいい。そんなの」

「え？ ど、どうでもいいってというのは、ちょっと、ひどくない……う？」

「……右手の薬指だって、足の指だってあるし、腕輪にしたっていいし……なんでもいい」
い

怒濤のように溢れ出す。

「あんなの約束のしるし、つてだけで……」

「だいじなのは、ふたりのきもち、なんだから」

「……っ！」

目をみはる、彼女。

「そっか……そうだね。本当に、そうだね」

そして、ほほえむ。

「そんな心配しなくても、そのうち買ってあげますよ。

『僕がもうすこし、おおきくなったら』ね」

「え?!? そ、それって……!?!」

(しまった。また……)

つづきはまだ、いえない。僕はそっぽを向く。

(あと、えーと、7、8年くらいか。

就職して、経済的に安定するまで。くそ、意外と長いな……)

そう、僕は実は全部おぼえていた。

あの、『ちいさくなっていた』ときにあったこと。

わすれるはずなんてない。

——もしも……いまとおなじ、気持ちだったら……そうしたら——

(この気持ち、変わることなんて、あるわけないだろう。

おおきくなるのが、ちいさくなるのが)

それにしても、なんてませた子どもだったのか。我ながら恥ずかしくなる。

そして、うらやましくも。

なんて素直に表現できていたのだろう。己の気持ちをも。

未来さきのことを、憂うことなど、なしに。

失われた誇りを取り戻して、相応しい人間になることができたなら。

『日常』に、戻ることができたならば……

そうしたら……。

駄目だ。考えない。今はまだ。

そう、決めていたはずなのに。

何度奥底に押し込めようとしても、抑えきれない。

そのくらい本当は、強く心に描いている。そんな……未来。

そのときがくるまで口にするべきではない。

頭では理解しているのに。わかってはいるのに。

このひとを目の前にすると、いつもこうだ。

そうだ。やめよう。本当にあともう少し。もう少しなのだから。

こんなの『おれ、この戦争が終わったなら、故郷の婚約者フィアンセと結婚するんだ』とかそういう、まさに映画等でよくある典型的なあれじゃあないか。

そんな風に思ってしまったがゆえであろうか。

「……やるじゃあないか、小娘」

またしてもいつのまにかぱっちり開いていた。

「え……ッ!？」

「なッ!？」

DIOの両目が。

「ん? これは『法皇』……くくく、なんのまねだ? こんなものでわたしの動きが止められるとでも?」

脆弱な貴様のスタンドごとき、再び一瞬で断ち切ってくれるわ!!」

咆哮とともに『鎖』に手をかけ一気に引きちぎろうとする。しかし、かろうじてその強度の方が勝ったようで、怒りを秘めた恐ろしき獣が自由を手にすることはなかった。

「なに? 動かん……だと?」

「だいじょうぶですか? 仁美さん!」

「うん! これくらい範囲なら、このまま……なんとか」

ひやりとしつつも想定内だ。自分に言い聞かせると共に彼女に声をかけ、改めてスタンドの制御に気持ちを含め直す。

「なるほどな。小娘の能力で補強してある、とそういうことか……」

奴の能力が時を止めるのであれば、セシリアの力は好都合だ。

時間が経過しなければ、強度が衰えることはないのだから。

この鎖を切るのはやつといえども容易ではないはずだ。理論上は。

にもかかわらず、不適な笑みを浮かべる奴の顔を見るにつけ、心にじわじわとわき上がる、不安。

まだ何を隠しているかわからない。楽観などできるわけがない。

ひとすじの汗が、僕の頬をつたい、落ちる。

ジョースターさんが行ってから、何分が経過したのだろうか？

10分？ 5分？

一分、一秒がこんなに長く感じるなんて。

「仁美さん、油断、しないで……」

「もちろん……」

奴の一挙手一投足も見逃さぬよう、立ちはだかるように、建物の端まで躍り出る僕。

すぐ後ろで同様に全精神を集中しているであろう彼女。

なによりも護り抜きたい……そんな存在。

その想いとは裏腹に、この場で唯一光を感じる……そんな彼女の気配に背中を支えられて、どうにか立っている。情けない限りだが、正直そんな思いだった。

改めて奴を見やる。

先程と比較して微動だにしていな……ように見えた。

しかし、否応なしに感じていた。

離れていても肌を焼くように、じりじりと発される負のプレッシャーを。

空には昨晚、みたものと同じ、闇夜にぼつかりと浮かぶ満月。

そう、まったく同じもののはずなのに、まったくちがう。

いつか聞いた『月』のカードの暗示。

未知の『世界』への『恐怖』

それを再び実感してしまいそうになるのをどうにか堪える。

真下で月光を受け、やつの後方、高くにそびえる時計塔。

普段は街のシンボルであったりするのだろうか？

どうしても視界に入ってしまう。

その文字盤を滑る針は、それこそ止まってしまったのではないかと思える程、一向に進む気配がない。

いや、実際幾度となくヤツは時間を止めていたのかもしれないが。僕たちはそれに気づくことができないだけで。

気の遠くなるような時間の中、ふいに奴が声をかけてきた。

「……花京院、おまえにチャンスをやる」

「……は？」

「考え直さないか？ もう一度、わたしの元に戻ってくるというのなら、おまえと……なんならその女も、生かしておいてやる」

「ッ!?! なんだと!?!」

「おまえは優れたスタンド使いだ。先程のわたしの能力を看破した洞察力といい……その小娘の能力も、非常に有用だ。ふたりとも殺すのは惜しい」

「黙れ！ 寝言は寝ていえ！」

吐き気がする。即時言い放つ。

DIIOにとってスタンド使い……いや、己以外の他人、すべては『利用する』。ただそれだけのものなのだろう。価値基準は能力。それが自分にとって有益か否か。それだけでしか図らない、図れない。

それが、黒……悪の悪たる所以なのだろうか。

「小娘……おまえはどうだ？ わたしのものになれ。」

我が崇高なる目的を遂行するため、歯車の一端を担うことを許そう。

与えてやろう。わたしの子を産み、育てるという榮譽をな。女は皆、それを望む」

「なッ!?!」

(子ども……ッ!?!)

「他の女性がどうだかなんて知りませんが、私は、死んでもお断りします」

動揺する僕と対称的に、いつかのように、きっぱりという彼女。

「ふん、生意気な」

言葉と対照的にくつくつと心底楽しそうなD I O。何を思い描いているのか想像しなくもない。

「クク……ククク。本当によく笑わせてくれる。遙か昔に垣間見た『なにか』に似ている……小娘、貴様を見る度、そう喉に魚の小骨が刺さったような感覚を抱いていたが、ようやく思い出したよ。その眼、反抗的な眼……そっくりだ」

遠くを臨むかのようにだった目が一瞬にして見開かれ、一転鋭い眼光が注がれる。

「……いつぞやわたしが強引に唇を奪ってやった、あの田舎娘にな。

そういうえば、この身体の『もと』の持ち主……

ジョナサン・ジョースターの、女だったかな……

ククク。わたしに勝利できるものなど……いないんだよ」

首筋の『星形の痣』。ジョースター家である『証』……それを奴は見せつけるようにこちらに示す。悪寒と嫌悪に堪えられず、思わず叫ぶ。

「いい加減にしろ！ 反吐がでる！」

そもそも、今、追い詰められているのはおまえの方……」

「……追い詰められている……？」

わたしが、か……？ く、くくく、くくく……」

このまま朝が来れば終わり。もしくは吸血鬼の再生能力を上回る火力の攻撃を叩きこめば終わり。そんな状況であるはずのこの期に及んでもなお、余裕綽々といった奴のそのスタンスが崩れることはなかった。

淡々と、だが地の底まで這い寄って伝わるかのような、おぞましい声が静寂に響き渡る。

「……もう一度言う。これが最後だ。

……もどつてこい。花京院」

「……」

目を閉じ、思い出す。

そして……

開き、言い放つ。

「僕は二度と、屈しない！」

おまえにも、弱い自分にも！」

「花京院くん……」

「……そうか。残念だ。」

……クク、ククク……」

「はっ!」

目の前にナイフが突然『現れた』。

「あぶない!」

念のため張っておいた結界からのスプラッシュで相殺する。

(時を止めD I Oが投げたのか!? こんなものを隠し持っていたとは……)

間一髪、奇襲を防げたことにほっとしたのも束の間、彼女が呟く。

「……ちがう! まだ、これだけじゃ……。はっ!」

決死の叫びが闇夜に轟く。

「……だめーっ!!」

「ツ!」

同時に僕は彼女につきとばされ、ビルの屋上から落下する。

いったい何が起こったのか、まったくわからなかった。

落ちながらも僕は近くにあつた結界……法皇の触手を掴む。

次の瞬間、僕はみた。

まばゆい光につつまれる、先ほどまで僕らのいた場所……

……そして、衝撃でふきとばされて、おちていく彼女のすがたを。

主人公

花が咲いたみたいだとおもった。

モノトーンでしかなかった僕のキャンバスを鮮やかな色彩で染め上げたのは、あなた
なのに。

*

*

*

「……あ……。え……？」

「くくく、どうだ、小娘。高压電流の味は？ もう答えられんか」

電流？ 感電？ 全く想定になどなかった、これからも一切無関係を決め込みたくな
るような物騒な単語が頭の中に響き渡る。

「……スタンドが消えたな。死んだか？」

「う、そだ……」

信じたく、なかった。

頭の片隅に浮かんだそれを必死に否定する。

理解することを拒んでいた。

しかし、現実には、答えは、出ていた。

意識がなかるうが、今までは……。

セシリアが消えた。

それが、残酷にもはつきりとすべてを表現していた。

(うそだ……うそだ……うそだ、うそだ……うそだ……うそだ……)

おそるおそる、倒れている彼女のもとへ、かけよる。

「ひとみ……さん？」

傷なんてほとんどない。まるで、ただ眠っているようにみえた。

「……寝ている、場合じゃあ、ないでしょう？」

彼女の口元に手をかざす。

息をして……いない。

「……やだなあ。演技なんて、もう、しなくていいんですよ？」

彼女の右の手首にふれる。

脈が……ない。

「……そうだ。前の、アヴドウルさんのときと同じなんだ……きつと。

……そうでしょう？」

彼女の胸元にそつとふれる。

心臓が……

……うごいて、いない。

「……あ……あ……」

「……うわああ……!!」

「ん……？ 花京院、おまえもしや……」。

そうか。……く、くくく、ふはははは！ これはいい」

奴の言葉が、妙に遠くから聞こえる。

ざらざらと頭の中を不快になでる。

「……滑稽な。だから言つてやったのだ。ふたりでもどつてこいと。おまえのせいだ。従わなかったおまえが悪いのだ。おまえのせいでこの女は死んだのだ」

「どうだ？ 惚れた女が、自分のため、自分のせいで死んだ気持ちには？ くくく」

「まるで安いB級映画のエンディングを観ているようだよ。まあ、いい暇潰しにはなった」

「心配するな。すぐにおまえも同じところに送つてやるよ」

「……これで、ジ・エンドだ！」

*

*

*

「……ハーミットパール&波紋!」

「……なに?」

激情を懸命に抑え呼吸を整える。全力を乗せた紫の茨を放ち、花京院に向けて振り上げられたD I Oの腕に絡み付かせる。

二人を残し飛び去ったものの、どうしても全身に纏わりつく嫌な予感が払拭できず、後ろ髪をひかれるように引き返してきた。

だが、時は既に過ぎたのだ。

「保乃……! くそッ!」

白状する。わしには、本当はわかっていたのかもしれない。こうなることが。

——ともに、ありたいんじゃない? 君は——

さつきあの娘と二人で話した、あの時に。

満面の笑みでうなづく彼女には何の迷いもなかった。いつそ清々しいほどだった。

反面、強く感じた、不吉すぎるその予兆。

しかしそれを、わしは無理矢理打ち消してしまった。

打ち消さずにはいられなかった。いや、打ち消したかったのだ。あまりにも、似ていたから。

決意と覚悟の信念を纏ったその眼を見た時、また想い出してしまったから。

親友とおなじ、透きとおった碧色の、あの瞳を。

「逃げろ！ 花京院！ 仁美を連れて、一旦ひくんだ！」

「ジョセフ・ジョースター……、か。」

「やつの……ジョナサンの、孫……」

「……」

「花京院？ おい！ 花京院？！ くそっ！」

「……」

しかし、何度呼びかけるも全く反応はない。動く気配も。只々、うなだれた、まま。

まるで、そこにいるのに、そこにいないかのように。

「……馬鹿野郎！ 立て！ なにをしているッ！」

無理もない。わかりきっていることだった。そんなこと。

彼女にとって彼女の存在がどれだけ大きなものであるかなど。彼らと共に旅をしたこの50日間。わからないはずがない。

今、どれだけの喪失感が彼の全身を取り巻いているかなんて想像したくもない。

深い深い愛情に相對する、深い深い……。

そして同時に、わかつていた。

彼に伝えなければならぬ。その意志を。

やらせるものか。これ以上。させてなどなるものか。

腹の底から、力の限り叫ぶ。

「……保乃の、想いを、無駄にするな——ッ!!」

「……ッ!」

届いた。かろうじて。

脊髓反射の如くはじかれるようにして彼女を抱きかかえ、花京院が飛び去る。

「ちっ、逃げたか。まあ、いい……。」

あんな脱け殻同然の負け犬、ほうっておいて、なんら問題ない。

それより、ゴミどもと遊んでいたら、少し腹が減った」

睨めつけるような真つ赤な双眸がぎろりとこちらへと動く。

「ちようどいい。ジョースター家の血統……おまえは血を吸って殺すと予告しよう。」

……ジョセフ・ジョースター」

*

*

*

滑稽。ほんとうに、そのとおりだ。

おかしいだろう？

『勇者は悪の大魔王をやっつけて、お姫様としあわせに暮らしましたとき。めでたしめでたし』

心のどこかで、きつと僕はおもっていた。

自分もなれるとおもっていたんだ。

そんなありきたりな物ハッピーエンド語の『主人公』に。

あしもとが、しかいが、ふわふわする。

にげる？

どこへ？

なにから？

ぼくが いますぐ にげだしたいものなんて……

このうでのなかにあるのに。

なぜだろう。こんなにも必死に足を動かしているのに、ちつとも前にすすんだ気がしない。

まるで、暗くて深い海の奥底にでも迷い込んでしまったかのようなだった。

一体どこに向かっているのかなどちつともわからなかった。

闇雲に、ただ無我夢中でじわじわと侵食し迫ってくる『なにか』から逃げていた。

永遠に感じる途方もない闇の中で、もがく力もなく彷徨っていた。

「……花京院！ ……おい、花京院！」

すると、ふいに肩を掴まれ、どうにか、自分の名前を呼ばれたのだと気づく。

「あ……」

「どうした？　すごい光が……。一体なにが……!？」

「……アヴドウルさん……」

その視線が僕の腕の中に移動する。

「はっ！　や、保乃……？　まさか!？」

「……」

もう、なにもかまが、まっくらで、まっしろだった。

すべてがどこか遠くで起きている出来事のように感じた。

……いや、そうだと思いたかった。

そんな僕を指し示す、熱き真っ直ぐな声が届く。

「馬鹿者！　ぼさつとするな！

救急車を呼んでくる！

あきらめるな！　救命活動をしておけ！」

踵を返す彼の姿を見送る気力もなく、崩れ落ちるように地面に膝を付き、彼女を横たえる。

なんどみてもしんじられない。

眠って、いるようにしか、みえない。

「かえって、きてくれ……」

唇を重ね合わせ、息をふきこむ。

(……ちがう。こんなの……ちがう……)

(いつか、あなたと、現実でする、つてきめてたのは……。

こんなのじゃ、なくて……)

(だって、こんなにも……)

……なんの熱も感じない……

……なんの、反応もない……)

(……夢では……あんなに……)

(……こつちが、現実なんて、嘘だろう……?)

(……だって、悪い夢よりも、よっぽど……)

「……ちく、しよ、う……」

全身の力が、抜ける。

絶望という巨大な魔物にすべてを吸い取られ呑み込まれていくかのようなだった。

そのときだった。

——ジョースターさんッ……!——

「……っ?!」

彼女の声が、きこえた。

声のした方を見上げると、遙か向こうに立ち上る紫色の雲にジョースターさんがみえた気がした。

「……ま、まさか! ジョースターさん……!?!」

天を仰いだまま呆然としてみると、地の方から服の裾をひっぱられる感覚に気付く。

「ガウツ（しゃきつとしゃがれ、馬鹿野郎!!）!」

「……イギー……?」

「ぐウ……（てめー、これで、いいのか? 本当に?）」

「……。でも、僕は……」

「クウ……（こいつは、信じてたぜ。いつでも、おまえのこと。……ちがうのか?）」

「…………あ…………」

——花京院くんは、強いよ——

——だいじょうぶ、できるよ。絶対！——

——あたりまえのこと……それだけじゃない？——

いつかの、彼女がくれたことばたちが、こだまする。

——護りたいね、みんなを——

視界を覆っていた霧が、すこしずつ、晴れていく。

「…………すまない。ありがとう」

「ワン（けつ、わかりやーいいんだよ）！」

言葉と裏腹、尻尾を揺らすそのちいさな頭を撫でる。

「いつしよに行くか？」

おまえも……仁美さんのこと、だいすきだもんな」

「パウツ！（ふん！ てめーほどじゃねーよ！ ばーか！）」

「花京院！」

まもなくして財団の救急車を誘いアウドウルさんが戻ってきた。収容され、慌ただしく医師達による蘇生活動の準備が進められる中、伝える。

「……仁美さんのこと、お願ひします」

「なッ……花京院、お、おまえは……？」

「鬨いに……、承太郎たちのところへ、行きます」

「なにッ……！」

「……皆を、護る。彼女の代わりに。」

こんなときにここにいたら、あとできつと彼女に怒られてしまいますから」

「……そうか、……そうだな」

それ以上、彼はなにもいわなかった。ただ優しく強い一言を除いて。

「……死ぬなよ」

「……はい」

力強く肩に乗せられたその手から、燃えるような温かさを感じる。それは僕に教えてくれているようだった。

『生』の重みを。

「よし、いくぞ、イギー！」

「ワアウ（ちつ、あとでなんか奢れよ！ ったく！）」

*

*

*

——もう、やめてください！ あなたは！ ほんとは！ ——

——だいじょうぶ、これ以上、あなたにだれも傷つけさせない——

わけがわからなかった。

なぜ、わかってくれるのか。

どうして、いつもみつけてくれるのか。

ほんとうの僕を。

不思議だった。

なぜ、すべて、受け入れてくれるのか。

そうだ。あなたは、信じてくれた……いつだって。

ずっと不思議だった。

なぜ、彼女は、いつも、あんなにも、無条件で、不変的で、絶対的な信頼を寄せてく

れるのか。

わからない。

でも、僕は……

いつもそれが、うれしくて、しかたがなかったんだ。

わからない。理由なんて。

僕は、彼女ではないから。

でも、ひとつだけたしかなことがある。

彼女が信じてくれた、『僕』。

それを、僕が信じないわけにはいかないだろう？

裏切りたくない。応えたい。彼女の想いに。

彼女の信じてくれた僕でありたい。

「……」

ハイエロフアント

法 皇をみて、考える。

僕は……

花京院典明とは……

……『じぶん』とは、何なのか。

あなたの、瞳にうつった『僕』。

それは……

瞳を閉じ、そして……

ゆっくりと開く。

「……ハイエロファント……？」

そのときそこにあった。
求めていた、こたえが。

*

*

*

「……じじいの、魂……か？　これは……。幻、覚か……」

「おい、どこをみている？ 承太郎。フン……！」

ぼんやりと宙を眺めている男に些か苛立ちを感じ、見せつけるが如く倒れたジョセフの心臓に爪を立て、残った血液をすべて吸い取る。

「！ や、やろう……！」

「しぼりカスだッ！ フッフッフ！」

成功だ。奴は般若の如き憤怒の表情で我の方を見据える。

「こんなことを見せられて頭にこねえヤツはいねえッ！」

「クツクツクツ……最終ラウンドだ！ いくぞッ！」

『世界』！ 時よ止まれッ！」

驚くべきことに、我が時の止まった世界に『入門』してきた承太郎。

「WRYYYYYYYY——ッ！」

「1秒経過ッ！」

少しずつ時の止まっている承太郎に近づく。

「2秒経過ッ！」

しかしまだまだヒョッコ。やつが止めていられる時、止まった時の中を動ける時間はほんのわずか。いつその『時間』を使ってくるか、それがミソだ。

……が、いずれにせよわたしの敵ではない。

不覚にも一時追い詰められたが、『知恵比べ』に勝利し形成逆転。やはり勝利への追い風は常にわたしへとむかって吹いているようだ。

力が漲る。全身から溢れ出して来る。ジョセフの……やはりジョースターの血はこの『体』によくなじむ。今のわたしに、敗北の要素など微塵もない。

「3秒経過ッ！」

次の瞬間、奴が、戦況が動く。

「4秒……！」

「……オラァ！」

「ウイリヤアッ！」

拳を打ち合う。パワーはわずかに、ヤツが……上。

「ウグウ！」

拳が裂ける。しかし、瞬時に回復する。

「7秒経過！」

まだまだパワーを感じる……まだまだ止めていられるぞ……

ところで承太郎……おまえはもう動けないはずだな……クククク……！」
急停止した男にほくそ笑む。

「8秒経過！」

実にスガスガしい気分だッ！

歌でもひとつ歌いたいようなイイ気分だ！ フフフハハハハ！

100年前に不老不死を手に入れたが……これほどまでにッ！

絶好調のハレバレとした気分はなかつたなあ……！

最高に『ハイ！』ってやつだアアアアアハハハ！

承太郎の背後に回り込む。

「9秒経過！」

新記録だ！ しかし時をとめていられるのは今は9秒が限界といったところか……！

時は動き出す！

「WRYYYYYYYY——ッ！」

「う、ぐっ！」

「スタンドのパワーを全開だッ！ 承太郎、さつき頭にきているとかぬかしていたなッ

！

おまえの怒りなどそんなもの！ フンッ！ 無駄無駄無駄無駄——！」

承太郎にラツシュを浴びせ、ふつとばす。

「ふん、はるか彼方にとんでいきおったわ……！」

追いかけて、飛ばした先……橋の上にとどりつく。

ピクリと動く承太郎。まだ息があるようだ。

「間髪入れず、最後の攻撃だッ！ 真正正銘最後の時間停止だ！

これより静止時間9秒以内にッ！ カタをつけるッ！」

横たわる男に宣告する。

「『世界』！」

奴に動き出す気配はない。死んだふりでもして、ギリギリまで時間を稼ぎ我が油断を誘っているのか。本当に動けない可能性もあるが。

「くく……あれだ。いずれにせよ、これで……」

承太郎の視界外に、いい『もの』があることに気づき、悠々と目的のものの前まで移動する。

「8秒経過！ 時を止めようが、もう遅い！」

脱出不可能よッ！ 無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アーツ！！

ウリイイイヤアアーツ！ ぶつつぶれよオオツ！」

そして、それ……近くに止まっていた、戦車のように馬鹿でかい車輪をもつ自動車を持ち上げ、そのまま勢いよく地に伏したままの承太郎に投げつける。

「9秒経過！」

やった……！ おわったのだ！ 『スタープラチナ』はついに我が『世界』のもとにやぶれさったッ！ 不死身ッ！ 不老不死ッ！ スタンドパワーッ！ フハハハハ！
これで何者もこのD I Oを超えるものはいないことが証明されたッ！ とるにたらぬ人間どもよ！ 支配してやるぞッ！ 我が『知』と『力』のもとにひれ伏すがいいぞッ！」

言いつつ、その死に様を確認してやろうと車を軽く持ち上げる。

「10秒経過！」

フフフ、そして時を静止させることも10秒を超えた。どれ、ちょうどいい。

承太郎の死体から血を吸いとつておこう……吸いとる血が残っていたならな……ん？」

しかし、あるはずのものは、そこには存在しなかった。

「なッ!? これは……砂……!? はッ！」

時は動き出す！

「な、なんだ……これは……。どこへ隠れたッ!? 承太郎ッッ!?」

苛立ちと共に辺りを見回していると、ゆっくりと我が耳に届く。

「………こつとも簡単にひつかかるなんて、滑稽だね」

不愉快極まりないその言葉に振り向くと……あの男が立っていた。

「花京院……!?!」

「……」

『法皇』の花京院典明。

半年程前だっただろうか？

それすらも、よく覚えてはいないが。

スタンド使い同士はひかれあう。

エンヤの言葉ではないが、まあ、そういうことなのであろう。

夜の街をいつもどおり空中散歩していたら、珍しい、『物』を見つけた。

これは面白い。いい拾い物をしたものだ、と。

東洋人風情が、こんなところをたまたま、生意気にも旅行などしているのが悪いのだ。

己の不運を呪うがいい……いや、幸運の間違いか。

戯れに声をかけてやったら、まさに蛇に丸のみをされる前の蛙のように……ゲロを吐くほど震えあがっていた。あの情けなく滑稽な姿はよく覚えている。

『思い出』と共に抑えきれない嘲笑がこみ上げてくる。

「ククク……まさかもう一度現れるとはな。あの女のかたきでもとりにきたのか？」

「フハハハ……そのような輩を返り討ちにしてやることこそ至高！」

それともあれか？ 自殺を志願するついでの特攻……というやつか？ 死なば諸共

と？ 無駄無駄……おまえだけだ。死ぬのはな」

いや、既に死んでいるに等しい。あの女の亡骸を腕に、魂の抜け殻のように打ちひしがれていた。そんな亡霊に一体何ができるといふのか。

そうだ。亡霊など、怖くはない。

どんな人間も……

死んでしまえば、それまでだ。

「あの砂はおまえの仕業か？ おまえが手品まがいのことをしだした時には少々驚いたが……とるにたらん。なんの意味もなさん。やはりゴミはゴミよ！ 道化師にはふさわしいショーだったがな！」

それにしても呆れてしまう。我を倒す、という、甚だ夢見がちで完全に達成不可能な目標に、未だ固執している愚かさに。

案山子のようにただ立ち尽くすのみ。返事をしない男に向け曇みかけるように吐き捨てる。

「そんなふうなのにこの姿を現すとは……全く、なんの学習もしていないのだな。せつかく、このDIOが幾度となく学ぶ機会を与えてやったというのに……片腹痛いわ」
館でも、車上でも。そして、ほんの数分前にも。

光栄なことに、三度も我が『世界』を拜ませてやったにもかかわらずだ。

骨身に、脳髓に、心底染みわたったであろうに。まだこうして性懲りもなくわたしに立ち向かってくるとは……

やはりどこまでも愚鈍で、滑稽な男よ。

「……再び思い知れ！ 『世界』!!」

（驚かせおつて……が、こいつは放っておいてもなんら問題ない。

……死なない程度に痛めつけておいて、先に承太郎を殺るか。

雛鳥とはいえ、時止めの可能性が僅かにでもある承太郎をな。

せつかくだ。花京院にはその死に様をみせつけて……絶望の淵に再度叩き落した後にとどめをさすとするか。くくく……)

幽波紋すら出さず、わたしからほんの5mほどのところで突っ立っている間抜けな男。

先達てはあの小娘に邪魔立てされたが、今度こそ、と、そのどてつ腹に拳を突き立てるべく歩みを進める。

「……………ん？」

しかし、雷撃のようにそれは訪れた。

突如、我が身を貫く『違和感』。

「な……………なんだ？ からだのうごきが、に、にぶいぞ……………」

身体が『なにか』にからみつかれているような……………そんな感覚だけがあった。

「ち……………ちがう……………動きがにぶいのではない……………う、動けんツ！」

ば、ばかな！ ま、まったく……………か、体が動かん!？」

もがけばもがくほどにその自由さは失われる。とうとう声帯を震わせることすら叶わなくなり、あまつさえいつのまにか自らの身体が宙吊りになっていることに気づく。

(な、なにが起きた!?! いかん……………じ、時間が!!)

時が動き出す！

「……………まったく。蘊蓄が長過ぎてうんざりしたよ」

(なっ、なにイイ——ッ！)

「そして、やっぱり……滑稽だね」

(ば、ばかな！ 花京院……!? どういう、ことだーッ!?)

「なあ？ D I O……」

O v e r . . .

静かだ、と思った。

しかし、誰よりも強い、と。

「時間というのは絶え間無く流れているもの、連続しているもの、という認識があるだろうか？」

誰もその存在など知らない森の奥深くの蒼い川。

「でも実際は、違うんだ。例えるとしたら、映画のフィルムのコマ送りのようなものと考えるとわかりやすいかもしれない」

澄んだ水が澱み無く滔々と流れる。そんなイメージ。

「まあ、要は、あるんだよ。『すきま』が。時間と時間のあいだには。実はね。だれにも認識できないだけで」

男は語る。

「ところで、僕のハイエロフアントは、好きなんだ。『せまいところ』に、潜むのが」

目を閉じ、淡々と。

「だからかな。入ることができるようになったんだ。そこに。ほかのだれも感じることすらできない、その『すきま』に」

ただ、ひたすらに。

「たとえ貴様が時を止めようが関係ない。まったく異なる次元、にいるんだからね。とらえることなど、不可能なのさ」

それが逆に如実に表しているような気がした。

「吸血鬼って、日光の他にも苦手って言われているものがあるよね？」

そう。今の貴様の格好そのまま……十字架さ。

「どうだい？ 気分のはどは？ まあ、あれは迷信だ、という話もあるけれど。」

C r u c i f i x ……十字架に磔にすること……

『Hierophant Crucify (法皇の磔刑)』とでも名付けようかな」

男の、哀しみを。

『法皇の結界』を時間軸……すなわち『四次元』方向に拡大して、誰にも察知することすら不可能にしたもの……といえればわかりやすいかな。みえないけれども、うごけないだろう？ 時間の概念を超越したところで捕縛しているわけだからね」

苦しみを。

「まあ、名前も、理屈も……このさいどうでもいい。そんなもの」
痛みを。

「……重要なことは、僕は貴様をゆるさない。それだけだ。貴様は……」
そして……

「僕が……裁く!!」

底知れぬ、怒りを。

「その身ごと、すべての罪を洗い流すがいい！ この法皇の怒りが引き起こす大洪水で……」

「Emerald Deluge!!」

怒濤の如く押し寄せる、碧色に輝く激流がDIOを呑み込み、その身を砕く!!
「ぐわああああ!!」

眩く碧き大津波。それが過ぎ去った後、そこに在ったものはやはり『静寂』だった。

「……………ぐっ……………な、ぜ……………!？」

なぜだーッ！ なぜ!? 花京院、おまえ……なぜ!? こんな!」

その頭半分だけを残し、ばらばらになったD I Oが叫ぶ。

「……これ以上、おまえに説明する義理などあると思うのか？」

最後に、ただひとつだけ教えてやろう……」

ただひとつと花京院は告げる。

「貴様に対し、僕が、どれだけの怒りを感じているか、だ」

「ぐうっ……!?!」

「そして……それは僕だけではない」

それを合図におれはザッと、地面を踏みしめる。

「……あとは、まかせるよ」

「じよ、承太郎ッ!?!」

「おまえに対する慈悲の気持ちはまったくねえ。

テメーをカワイソーとはまったく思わねえ。

しかし、このままおめーをナブって始末するってえやり方は、おれらの心にあと味のよくねえものを残すぜ!」

這いつくばるD I Oに向け、言い放つ。

「その身体が治癒するのに何秒かかる? 10秒か? 20秒か?」

治ったと同時にスタープラチナをためーにたたきこむ！ かかってきな！

西部劇のガンマン風にいうと『ぬきな！ どっちが素早いか試してみようぜ』というやつだぜ……」

「こ、こけにしやがって……しかし……しかし！ 承太郎……やはりおまえは人間だ……」

血走る眼で怨嗟を呟く、奴の身体が瞬く間に再生していく。

『勝利して支配する』それだけよ……それだけが満足感よ！ 過程や方法など……どうでもよいのだアーツ!!」

そして立ち上がったと思うやいなや、汚い血の塊をおれに飛ばしてきた。

「ツ!?!」

「どうだ！ 血の目つぶしだツ！ 勝ったツ！ 死ねいツ！」

「……そうくると思ったよ。この外道」

それを案の定、とばかりにすぐさま花京院がスプラッシュで吹き飛ばす。

「なツ!?!」

「やれやれだぜ。本当に救えねえ奴だ。……オラアツ！」

刹那、おれは星の白金で全力、渾身の一撃をたたきこむ。

「うぐおおおおあああ!?!」

なああにイイイイイツ！」

拳をぶち込んだその場所を楔に、奴の体にひびが入り縦に割れていく。

「ば、ばかなッ！ ……こ、この、D I Oが……！」

どこで……だ、どこでおれは……間違えた……？

か、花京院……！ お、まえか……！！

おまえを、見逃したことで、こんな……こんな！ く、くそがあーッ！

き、きさまらなんぞに……。この、このD I Oがアアアアアアッ！」

「てめーの敗因はたったひとつだけ……D I O。」

たったひとつのシンプルな答えだ……」

「『てめーはおれ達を怒らせた』」

「……やったな」

「ああ」

「花京院、あいつは……」

「……」

「……そうか」

その沈黙に、表情に、すべてを悟る。

「しかし、おまえ、本当にどうやって？」

それは……ハイエロフアント、か……？」

光った……という形容ではもうとても足りない、神々しい輝きをたたえた彼の傍に佇む『それ』を指さし問う。

「高速情報伝達の分野で新技術が発見された。米国某大学の研究チームが論文発表した、情報の『存在を隠す』技術さ」

それに対し花京院はゆっくりとぼつりぼつり、語り始める。

「時間とは、光の不変の速さで決定される変化の基準……というのは知っているよね？」

特殊な物質をプリズム……ああ、前にそんな話も彼女としたな。

あの場にいたポルナレフはもしかしたらおぼえているかもしれない。

まあ、あいつは途中から聞いてなかったから期待薄だが……。

三人で虹をみた、あのとき……」

ここではない遙か遠くを見つめながら。

「……きれいだった。きれいだったんだ。ほんとうに……」

「花京院……」

天を仰ぐと頬を打ってくる気がした。

眼には視えない、満点の星空に降り注ぐ哀しみの雨が。

「……すまない、話が逸れたね。」

君がそんな顔、しないでくれよ。……ありがとう。

ええと、どこまで話したかな。そう。その特殊プリズムを媒体として、光を蓄積、分散させると、速さも変化する。光の速度を上げ下げして歪みを生じさせれば、時間領域で光線にギャップが生まれる。

すなわち、わずかな時間の『すきま』が生まれるわけだ。

論文では、この隙間を利用した光通信技術によって、周囲にまったく気づかれない形で情報を伝達できる。情報の存在そのものを隠蔽する。そんな画期的な新技術の可能性が示唆されているんだが……それにヒントを得て、ね。

エメラルドの結晶をプリズムとして、光エネルギーに変換したハイエロファントの触手を時間と時間のすきまに送り込む。まあ、そんなことができるようになったんだ……」

「……物理には、あんまり興味がねえな」

「ふっ……そうかい」

懐から一本取り出し、火をつける。

いたたまれなかった。

聞いてやることしかできない己の無力さに。

紫煙がゆらゆらとまっくらな天に向け昇っていく。

「『じぶん』とはなにか……考えた」

それでも、聞いてやらねばならない。そう思った。

こいつの静かな慟哭を。

「僕の生き方を受け止めて、叱って、涙を流してくれて。

僕は僕でいいのだ……そう僕を信じてくれたひとを想って……」

「こいつを昔と同じように、だれにも気づかれないようにしてやろう、と、思った。

DI Oを討ち、あのひとのように皆を護る。そのために」

「乗り越えたい。DI Oを。『世界』を……その一心だった」

「そうしたら、ハイエロファントはこの新たなすがたに……

そしてこの能力を得た」

「『時間』を『乗り越えて』、『気づかれない』『すきま』に『触手』を『侵入させる』。そ

んなちからを」

「『成長』、したのかな？」

「彼女がくれたんだ……」

「『世界』に挑んでいくちからを……僕に」

*

*

*

ふわふわと体が宙に浮いている感覚だった。

どこか非現実的で、実感など欠片もなかった。

例えるなら……そう、まるで夢の中で起きた出来事のように。

それは僕が、ただ単に拒んでいただけかもしれない。

とてもではないが受け入れることなど到底不可能な現実を。

僕は気づき、承太郎に指し示す。

「あ、ほら、きたよ。功労者が」

叢の陰から一匹の犬が飛び出し、こちらめがけて駆けてくる。

「ああ。あれか。おれの『そっくりさん』……」

思い出したように呟く承太郎に自分も回想しつつ、そのからくりを説明する。

「イギーの『愚者』で創った砂の承太郎を、僕のハイエロフアントでマリオネットのように動かしたのさ。しかし、遙か向こうからこの橋の上に君がぶつとばされてきたときにはたまげたよ。あわてて回収したけどさ」

「バウ（おいおい、やったじゃねーか！　へっ、おれのおかげだな。感謝しろよ！）」

千切れそうなほどにその尾を振りながら飛び掛かってくる小さな体を受け止め、頭をなでてやる。

「はいはい、そうだね。あの砂の影武者のおかげで『磔刑』をしかける時間が稼げたからなあ。助かったよ、イギー」

「ワン（しゃーないから、コーヒーガムで許してやる。箱いっぱいな）！」

「わかったわかった、しかたないな」

そのやり取りを見ていた承太郎が啞え煙草をふかしながら呆れたように零す。

「……いつのまにそんなに仲良くなつたんだ。てめーら」

「ふっ……さあね」

「おーい！」

さらに通りの向こうからもうひとり仲間が姿を現す。

「ポルナレフ！ 無事だったか！」

「承太郎！ 花京院！ イギー！ ヤツは?！」

駆け寄ると彼は足を引きずりながらも懸命に訊ねる。

「ほれ。このとおりだ」

百聞は、とばかりに承太郎がDIOの縦に割れた死体を見せる。

「うおっ！ やったじゃねーか！ ええと、その……、ほかの、みんなは?！」

「……」

その質問にうまく答えることができそうもなかった僕に代わり、承太郎が間に入ってくれる。

「あいつが……」

「っ?! ……そうか……」

哀しみだけではない、何か思うところがあるかのような、そんな複雑な表情を浮かべてポルナレフは俯く。

「それと……行くぞ。こつちだ」

ヤツの死体を引きずりながら、踵を返す承太郎に誘われ、皆で移動する。

「ジョースターさん?! ……くっ!」

たどり着いたその場所には血液を吸い出され、ミイラのような変わり果てた姿の彼が倒れ伏していた。

思わず面喰つてしまっている僕達と対照的に、承太郎は落ち着き払った様子でその体をそつと抱え上げる。

「勘違いすんな。じじいは……死んでねえ。まだ」

「え？」

「なくなつたもんは戻しやあい。きつちり返してもらう。もともとじじいの血だ」

「なんだって!？」

「言葉通りだ。だから細切れにせずに残してやったんだぜ……」

その言葉の意を問おうとした瞬間、突如僕の全身に衝撃が走る。

「……ハッ!」

悪意? 殺意? そういった黒い感情の塊のようなものに包まれる。

(なんだ? この、『ぞわつとした感じ』……まさかこれは……)

そして僕の目に飛び込んでくる。ヤツの死体が妖しくうごめく様が。

「……せめて、みちづれだ! 死ねッ!」

「なにッ!？」

ここと切れたはずであつたD I Oの腕が動き、鋭いその刺突が承太郎を貫こうとする。

「いかん！ 承太郎！」

咄嗟にその間に割り込み、彼を突き飛ばす。

刹那、僕の眼に映ったのは己の腹にめり込もうとする腕だった。

「花京院——ッ！」

鼓膜に仲間たちの悲痛な叫びが響く。

が、それとは裏腹に僕の心の中は平静でどこか不思議な安堵感と満足感で占められていた。

(……いいんだ、これで。よかった。これで、胸をはって彼女に逢いにゆけ……)

しかし、どうやら……僕はそれを許してはもらえないようだった。

また、こえがきこえた。

——だめ——

「……え……？」

——よくない。させない——

「せ、セシリア……!!? 仁美、さん……!!」

僕は再び、護られていた。

薄桃色の綺麗な鳥に。

「……私の心が生きている限り、セシリアは甦る、何度でも……か。

あいつらしいわ。ほんとに」

それを見てやっぱりどこか腑に落ちた様子でポルナレフが呟く。

「……オラァー！」

間髪入れずしぶとくも蠢く『腕』にスタープラチナの拳が叩き込まれる。

そうして、DIOは今度こそ、動かなくなつた。

勢いそのまま駆け出す。

野次馬を掻き分け、赤色灯が揺らめく財団の救急車に飛び込むと、約束通り彼女の傍についていてくれた仲間の背中に声をかける。

「アヴドウルさん！」

「花京院！ 無事だったか!? でい、D I Oは？ どうなった!？」

返事の代わりに大きく頷く。

「そ、そうか！ やったな!!」

「そ、それよりも……」

そして、震える声をどうにか絞りだす。

「仁美さんは!？」

僕の投げかけが届くと同時にサツと彼の顔に影が差す。

「それが……さつき、一瞬だけ心拍が戻ったんだが、また……」

「……そう、なんですか……」

ほんの少し開かれたかにみえた希望の扉がぱつぱつと閉ざされた想いで、再び闇の底にぐらりと崩れ落ちる。

「……あきらめてんじやねーよ」

すると直後、頭上から蜘蛛の糸の如く叱咤が降り注いでくる。

「じ、承太郎……?」

顔を上げるとジョースターさんとDIOの身体の一部を抱えた承太郎が立っていた。

「ジョースターさん!?! か、変わり果てた……姿に……」

アヴドウルさんを始めたとした周囲の戸惑い及び疑問にどこ吹く風で、承太郎はずいつと医師達の前に躍り出る。

「おい、医者。こっちの身体の血をこのじじいに戻せ」

「はあ?!」

「む、無理ですよー。血液を全身に送る心臓が止まっているんですから……」

彼らが口々に出した返答に少し考えたと承太郎はいう。

「……どっちも、要は心臓を動かしゃあいいんだな?」

それなら、さつきコツはつかんだ……。オラア!!」

おもむろに横たわる二人のそばに屈みこむと、スタープラチナの両の拳でその心臓を直接掴む。

「あ……あ……う、う……い……た!!」

するとなんと、ジョースターさんと彼女のバイタルを示すモニター……ずっと直線を示していたその波形に変化が訪れた。

「! し、信じられん! いそげ! エピネフリン……!」

それを皮切りに慌ただしく医師達が動き出す。

「……………う……………ッ」

そして、ほどなくしてDIOの身体から抜き取った血液を戻された『ジョースターさん』が目を開けたのだった。

「ジョースターさん！」

「……………」

「……………じじい？」

「……………フツ、フフフ……………ククク……………」

「!？」

「……………フハハハハハ！ 残念だったな！

おかげで甦ったぞ！

だからきさまらは甘いといったのだ！ さつさと塵にかえすべきだったのだ！

さあ、順々に血祭りに……………いイ!？」

「……………『法皇の磔刑』」

「ぎゃっ！ な、なにこれッ!? う、うごけん！」

「よし……………もう一度、今度こそくたばれ。……………オラアッ！」

「ひいッ！ やめてッ！ う、嘘ッ！ 嘘びよん！」

わしじやよ！ わし！！ ほんものだって！！

ジョセフ・ジョースター！ NY在住、不動産王！ 好きな映画は……ッ……！！」

「……そのまま、ぶん殴つちまえばよかったのに」

「おい！ ポルナレフ！ ジョーダン！ ちよつとした茶目つ氣つてやつじやろお！」

「やっていいジョーダンと悪いジョーダンがあるでしょう。ジョースターさん……」

「あ、アウドウルまで……ご、ごめん！ ごめんつてばッ！！」

「チッ。……くっ……！！」

「まったく。……ぷっ！」

「ふっ！ 死にかけたというのに……、全く変わらないんですね」

「へへ……！ にくめないじじいだぜ！ ほんと！」

「アウウ……（けっ、やつぱつきあつてらんねー）」

皆の笑い声が響く中、もうひとりの小さな仲間はどうも、報酬……たらふくの好物を前に大変ご満悦であった。

翌朝、D I Oの身体は夜明けと同時に日光に当て、完全に消滅させた。

日本のホリイさんも、今までの危篤状態が嘘のようにその容体は快方へ向かっているとのことだった。

これで、終わったのだ。やっと。

……そう、思った。

しかし、それは大きな間違いだったのだ。

すぐに僕は思い知ることとなる。

これは、これまでの出来事は……

ほんの『序章』に過ぎなかったのだということに。

「……なかなか、起きねえな」

「ああ。けつこうこのひと、ねぼすけさんだからかなあ……」

まっしろい病室、まっしろいベッドの上、眠る彼女。

繋がれたモニターからはその心臓の拍動を示す、規則正しい音が聞こえてくる。

その心地よい音に耳をすましていると、承太郎がぎよつとするようなことを言いだした。

「………いつ、目が覚めたら、おれに惚れてるかもな」

「はあ!? なんで?!」

「なんせ心臓……ハートをわしづかんでやったからな」

「……な、なんだ。」

ふっ、いくら承太郎でも、それだけは……譲れないな」

「……安心しろ。おれははじめから花京院、おまえに負けている」

「はあ? よくいうよ。ひとつのこと、あんな完膚なきまでにブチのめしておいて」

「ふっ。ああ……そうだったな。そうだったのにな」

「……え?」

「ちっ、なんでもねえよ。そう思うなら、さっさとおまえがしつかり掴んどけ。」

もう離すな。馬鹿が」

「ああ、まっただ。だ。」

そうさせてもらうよ。ありがとう、承太郎……」

「……ほら、早く起きてくださいよ。伝えたいことがあるんだ」

その日僕は、D I Oを乗り超え、取り戻した。

あの日失った、己の大切なものを。

しかし、その代償は途轍もなく大きすぎた。

僕は、失ってしまったのだ。

なによりもたいせつなひとを。

彼女は、目を覚まさなかつた。

その日も、次の日も。そしてその、次の日も……

Baby, you're still alive

僕は、知らなかったのだ。なにも。

なにひとつ『わかって』などいなかった。

知ってなど、いなかったのだ。

彼女のことを。なにひとつ。

1月16日。僕たちにとつての『運命の日』。

あの日、カイロ市街ではいくつか事件が起きていた。『場当たりの通り魔の犯行で真犯人は未だ捕まっていない』………というところに一般的にはなっている、要するにDIOが引き起こしたであろう殺傷事件が。

その中でもとりわけ大きく紙面やメディアに取り扱われたものに、暴走車による無差別大量の人身事故があった。

夕暮れの帰宅ラッシュ。学生やOL、サラリーマン……家路に着こうとする者、あるいはアフターファイブを楽しむ者とする者、多種多様の思いを抱えた多種多様の人々で

繁華街の路上はごった返していた。そこへ道路を走行していた犯人の運転する車が突如ガードレールをぶち破り歩道上に乗り上げたのだ。ボンネットには哀れにも一番近くに居たというだけで犠牲となった二人が跳ね上がった。それでも車は止まることなく、走り続けた。そのスピードは時速80kmオーバーにものぼり、歩行者は次々と、まるで刈り取られる稲穂のように鉄の塊に蹂躪されていった。そして脇目など振るそぶりもなく、勢いそのまま車は走り去っていった。

後に現場から2km程離れた町はずれで、抜け殻……乗り捨てられている黒塗りのロールスロイスのみが発見されたものの、車両の所有者であるF氏は「見知らぬ男にハイジャックされた」などと犯行を否認している。とのことだった。

しかし、不幸中の幸いかつ、最も驚くべきことは軽傷重傷含め最終的に犠牲者の数が58人にもものぼったこの大事件で、奇跡的にも死者が0であったことであろう。目撃者、被害者の証言と合わせてもありえないことだとコメントター、専門家が目を白黒させて謳っていた。

一方で、僕達にはすぐに……ようやくわかった。

彼女の『闘い』を。

護りきつたのだ。あの悪魔から。彼女は。

あの日失われるかもしれないほどの命を。

自らに流れる血。

その誇りを貫いて。

……己の身、ただ、それだけを犠牲にして。

僕は、なにひとつ、わかってなんていなかった。

無知、それが時にどれだけ重大な罪と悔恨の誘因となるのかということすら知らずに。

「検査の結果、彼女の脳は、細胞の壊死により広範囲がその機能を失っている。

いわゆる……植物状態、というやつです。

かろうじて、息はしているが、意識を取り戻すことは……

相当の奇跡でも起こらない限り……その、難しいかと。

そもそも、今、心臓が動いていることすら、奇跡的な状況なのです。

とりあえず、ご家族に……日本に、早く帰してあげるべきかと思えます」

締め上げられるかのように僕に掴まれ、くしゃくしゃになつていた白衣の裾が緩む。

苦虫を噛み潰したような、それでいて淡々とした医師の言葉は、もはや途中から意味を

なさないかたち、ただの鼓膜を震わす音の波となってしまうた。僕の脳の方が理解することを拒んでしまったためかもしれない。

ふらふらと吸い寄せられるようにして糸が半分以上切れたマリオネットの如くベツドへとぎこちなく近づく。

「……起きて、くださいよ」

何もかもが白い部屋。僕の眩きだけが虚しく響く。

「返事を……してくれ……」

まぶたの裏に浮かぶ。

ひとりじゃあない。

そういつてくれたのは、僕に教えてくれたのは、与えてくれたのは、彼女なのに。

なんて皮肉なんだろう。

絶対的な孤独感と絶望感。

それを今僕に与えているのは、ほかの誰でもない、このひとだ。

「やくそく……した、じゃあないか……！ しんじて……いたのに!!」

爆ぜる。どこにも行き場のなくなってしまうそれは暴発して滲出して、もはや抑えることなどできなかつた。

「花京院！ やめろ！ おい……！」

「……僕の……せいだ……。僕のツ……！」

「違う！ おまえのせいなんかじゃあねえ！」

「そうだ。すべての元凶は、ヤツだ……。君の責任などでは決して……」

ポルナレフとアヴドウル（間）さんの優しい言葉も激情に囚われていたこの時の僕に届くことはなかった。

「……ちがう……。僕は、あのととき……。」

なんども、……止めるチャンスは、あつたのに……！

そもそも……。ぼくが、あんなことを……

……あんなこと、いわな、け、れば……！」

とめどなく様々入り混じったマーブル模様の映像が、感情が、怒涛のように押し寄せ
る。吐き出されるのは到底懺悔にもならない。意味も道理もない後悔と自戒の津波。

「……僕の、せいなんだ……だれか、僕を、裁いてくれ……」

「ちがうぞ！ 花京院！ それは、ちがう！ これを……」

僕の慟哭を切り裂くように扉を開け放つてジョースターさんと承太郎が現れる。

「ホテルの、彼女の部屋で……みつけた」

差し出された白い封筒のその裏面隅っこには彼女の名が彼女らしく慎ましやかに署

名さされていた。

震える手でそれを受け取り開くと、今となつては見慣れてなじんだ筆跡の丁寧な文字で彼女の思いが伝わられていた。

「て、てが、み……?」

「……読んでみる」

みんなへ

こんな手紙を残していたら、怒られるかもしれませんがね。

でも、どうしても伝えておきたいことがあるので、筆を取りました。

現在1月16日早朝、時計は午前5時を回ったところ。昨晩深夜、イギー先輩に連れられて、あの館をみました。朝日が昇れば、決戦にむかうことになるかと思いません。

無事に戻つてこられたら、この手紙は破り捨てるつもりです。

なので、今、これがみんなの目に触れているということは……

……私は、そこにはいないのかと、思います。

ぜつたいにまた戻ってくる。もちろんそのつもりです。

でも、万一のときのため、こうして保険をかけておきます。

よわい私を、どうかゆるしてください。

伝えたいことというのは、2つあります。

ひとつめは、「ありがとう」です。

この旅に参加できて、よかった。

たいへんなことも、もちろんたくさんあったけれど、それ以上に、とても楽しい旅でした。

本来、そんな場合じゃあなくて、不謹慎かもしれないけれど……

でも、やつぱり、振り返ると、うん……、たのしかった。……そればかり。

私にとって、はじめて心から接することのできた、友だち、いや、それ以上かな。

おじいちゃん（なんて呼んだら怒られちゃうかもですが）、お兄さん三人と（先輩もね）、一応……弟（？）……年齢だけだなあ）……だいすきな家族がいつきに増えた、そんなかんじでした。うれしかった。

たとえ、結末がどうであろうとも、それはなにも、変わらない。

みんなと出逢えたこと、心から感謝しています。
ありがとう。

もうひとつは、「御願ひ」です。

私があるにいない理由。それを、あまり気にしないで。ということです。

こうなる運命を変えられなかった、私が悪いんですから。

ですが、みんなはやさしいので、悔やんでくれていたりするかもしれない。

もしかしたら「自分のせいだ」とか、おもっているひとがいるかもしれないけれど……。

そうじゃあないから。絶対。そうは、おもわないで。

私には、これから起こるかもしれない事柄に、ひとかけらの後悔もない。

むしろ、この血に伝わる誇りを貫くことができ……

たいせつなひとたちを護ることができたのなら、しあわせです。

とはいえ、そういわれても、きつと自分のこと、責めるのをやめない……

そんなひとがいるかなっておもいます。

だから、そのひとに、もうひとつ、御願ひをします。

後悔はないですが、もちろん、生きて帰れたら『やりたいこと』が、私にもありまし

た。

大学で、興味があることをもつと勉強して、それと関係した仕事に就いたり……友だちと、遊んだり、飲んで語り合ったり……

……いつかはだいきなひとと結婚して、あたらしい家族を、つくつて……
もしも、自分のせいだと思ふのならば……

そんなふうに、私のぶんまで、自分のやりたいことをして。

せいっぱい、人生をまっとうしてほしいのです。

しあわせに、生きてください。

ほかのみんなはちゃんと、彼が私の御願いをきいてくれているか、しつかり見張つていてくださいね。

以上、勝手な私の勝手な御願いでした。

最後に……。

こんなことになって、ごめんなさい。

約束、いっぱい……まもれなくて、ごめんね。

でもね、誤解しないでほしいの。

まえの私、とは違うんだよ？

あなたが、おしえてくれたから。

じぶんを粗末にしたわけじゃあ、決して、ない。

私は、私が、そうしたい、とおもったことをしただけ。

だから……どうか……ゆるしてね。

本当にありがとうございます。

だいすきなみんな！

みんなのしあわせを、心から願っています。

保乃宮仁美

「……つ、馬鹿が……」

「……わかつて……いたのかも、しれないな……」

「彼女の、カードは、直感や『予知』をつかさどる。あの日の、あの娘のあの、行動や言葉の数々……今、思えば、我々の知らないことを『彼女は知っていた』のかもしれない……」

「すげー必死だったもんな……。頼れって、言ったのに。独りで……馬鹿野郎が！」

「……帰ろう。日本に……」

そうして、僕は日本に帰ってきた。

しかし、そこにあつたのは空白の日々。ただそれだけだった。

空虚でからっぽな僕は、まさに抜け殻のようだった。

なにもする気も起きず……家にも帰る気にならず……

空条邸にお世話になりながら、ただ、彼女のところにいた。せめて、そばにいたかった。

……何にもならないと、わかっていながら。

彼女の御家族が到着したと聞いたときも、僕はけつきよく会えずじまいだった。逃げたんだ。

あわせる顔なんて……とてもじゃないが、あるはずがない……そう、おもった。

そんな僕に、残酷な宣告がなされた。

「れ、冷凍……保存!？」

「……心臓も、呼吸も、いつ停止してもおかしくないそうさ。

かろうじて、薬と機械で繋ぎ止めているのだ、と……。

そうなれば……。そのまえに、財団の最先端の技術で……」

「……嫌だ! 許せるか! そんなこと!!」

「か、花京院!」

「仁美さん……？」

おもわずその場から飛び出し、気づけばまた彼女の病室に来ていた。あいかかわらず、彼女はただ、眠っているようにしかみえなかった。

定期的、無情で機械的な音を発する、彼女の生命をどうにか維持してくれている数多の装置。それへとつながる無数の人工的な管が彼女の細い身体に絡みつくかのよう伸びている。ただそれだけを除けば。

「……いいかげん、起きてくださいよ。じゃないと……あなた、あんなに寒い嫌いなのに、すぐく寒いとこにいれられちゃうんですよ」

雪のように白く、滑らかな彼女の頬にそつとふれる。

そうだ。駄目だ。そうなったら。そんなことをしたら……

「……もう僕は、こうすることすら、赦されない」

瞬間、気づく。気づいてしまう……

「はは、そうだ……」

自嘲する。苦々しい笑みがこぼれ出る。

……ほくだけ……だ。

すべて、ほくだけの……。

どれくらいそうしていただろうか。
また、こえがきこえた。

「……そんなこと、ないよ」

(ひ、仁美さ……!?)

眼を見開く。確かに彼女は眠ったままだ。

でも彼女だ。間違えるわけがない。

聴きなれたこえ。やわらかに僕の名を呼ぶ、その調べ。

「私だって……花京院くんがこうして、きてくれるの……うれしい。

あなただけじゃないよ。

私も……私が、うれしい……から」

「……だけど、私がここにいたら……」

……やっぱり、いけないとおもう。

だから……少しだけ、眠ることにするね」
「……あのとき、みてたよ。」

乗り越えられたね。ちゃんと。

すごく……すてきだった」

(仁美さん！ 僕は……！ 僕はッ!!)

身体が自分のものでないかのように思う様に動いてくれない。せめて、と必死に声帯を震わせようとものがいてみるがそれすらうまくいかない。僕の声にならない声は虚しく霧散して、消える。

「……。……これ……御護りといっしょに……。よかったら、……もっていて」

それはふわりと舞い降り、僕の手のひらにそっとふれる。

「元気で。じゃあ……おやすみ……」

(ま、まって！ まってくれ!! まだ……!)

「ハッ！ ゆ、ゆめ……、か……」

もちろん、そう思った。

が、しかし、おいかけたくてがむしゃらに彼女のほうにのびた手。

その、握りしめた拳をひらくと、たしかに、それはあつた。

「これは……」

ひとひら、舞いおどる。

彼女の心そのまま。

きれいな薄桃色のいちまいの羽。

ふたたびそれを、握りしめる。

「……またそつちだけ……なんてひとだよ……」

それは、すうつと、僕の胸元に吸い込まれ、みえなくなつた。

「……」

思い立ち、おもむろに僕は彼女の黒く長い綺麗な髪をかきわけ、そこを飾るちいさな花を見つけ出す。

柔らかな彼女の耳たぶからそつとそれをとりはずすと、自らの首の紐を手繰り寄せ『御護り』を取り出し、石の両隣をまだぬくもりののこる花で飾る。

それらは、ならんでいっしよに、きらきらとやわらかな光をはなっていた。

「……おやすみ、なさい」

「……花京院」

立ち尽くす僕の背中に声が投げかけられる。いつも通りのぶつきらぼうな調子は病室の壁を反射し少しエコーがかかって聞こえた。

「……承太郎、か」

彼はそこら辺にあつた面会者用のパイプ椅子を無造作に掴むと引き寄せ、その上に腰を落ち着ける。

「……ひどい、話だよ。まったく。」

じぶんだけ、いいたいこと、全部いっちゃってさ。

こつちには、ひとつもいわせてくれないんだよ？

ずるいよな、ほんと……」

僕は口を動かす。

彼は、黙っていた。

「無理、いくなよなあ。」

そんなの、無理に決まってるじゃあないか。

しあわせに、なんて……

そんなの……あなた、なしで……僕が、なれるとか、本気でおもっているんだろうか……彼女は」

ただ、黙って、そこにいてくれた。

その優しさに甘えてとうとう決壊してしまう。

「……わからないよ。」

ちつともわからなくなってしまった。

彼女のことならなんでもわかる……

そんな風に高を括っていた……罰なのかな……。これは」

あの日から。そして手紙を目の当たりにしてからずっと燻っていた。言葉にすらできなかつたそれが少しずつ顔をもたげ、溢れ出してくる。

「あの日……彼女には……なにがわかっていたんだろう。」

……どうして、なにもいってくれなかつたんだろう。

僕は、そんなに……頼りなかつたかな……」

両の拳に力が籠る。

「なにを……おもっていたんだろう。ずっと……

せめて……しりたくないよ……」

「……いいいたいこと、か」

長い沈黙の後、溜息をつきながら、珍しく躊躇いを振り切るかのように承太郎は口を開く。

「実は、おれはずつと気になっていた。『わかつていた』……と仮定すると、だ。『おまえになにも残さない』。この不自然なあいつの行動がな。だから、調べた。あの部屋を」
「は!?! そ、そんなことを!?!」

眼を瞬かせる僕にほんの少し口の端を持ち上げる。

「気になることは徹底的に追究しねえと気がすまない性分だな。……知つてのとおり」
「あ、ああ。それはもちろん、とてもよく知っているけれども……」

彼の敬愛する刑事コロンボもきつとこんな感じに違いない。彼は胸ポケットからゆつくりと『証拠品』を取り出し、僕に提示する。

「で、だ。実はあの手紙のほかにも、屑籠から、こんなものをみつけていたわけだ」
それは破られてバラバラになっていたのであろう、紙片をつなぎ合わせたものだった。
そこにはやつぱり見慣れた筆跡の文字達が並んでいた。

「花、京……?! ……、これ!?!」

そこまで書いて、破いた……一枚の便箋。

「もつと、よくみろ……」

そういわれ、注意深く、紙をもう一度みてみる。

継ぎ目のせいで、わかりにくい……

「……な、み……だ……？」

便箋には、水滴でふやけたような跡があり、文字の端がわずかに滲んでいた。

「こいつは、おまえに手紙を『かかなかった』んじやあなくて、『かけなかつた』。そういうことだ」

親指で後ろ手に眠る彼女を指し示す。

「……どうし……て……？」

「どうして、か。わかんねーか？ おまえも当事者じやなきや、すぐわかるだろうによ、そんなこと。あんなの、こいつのいいたいこと、『全部』では、なかつたわけだ」

「どういう……ことだ……？」

再びため息をつきながら承太郎はいう。

「やれやれだぜ。」

縛りたくなかつたんだ。こいつは。花京院、おまえを」

「……ッ！」

「書けば、あふれ出ちまう。じぶんの想いを、伝えたら、伝えちまつたら……おまえのこ

とだ。余計、ずっと気にする……でもおもったんだらうよ。このボケ女が、考えそうなことだ」

立ち上がり、つかつかとベッド脇へ寄ると、あくまで軽く、でもその中に様々な想いを内包させているであろう手刀を彼女の頭に振り下ろした。

「こいつが隠したがっていたことだからな。

おまえに伝えるべきかどうか、迷っていたが……。もうしらん。

……おれは腹を立てているんだぜ。

独りで全て抱えこんで、勝手に犠牲になりやがって……。

というわけで、ぶちまけてやることにした」

「承太郎……」

「……まあ、すべておれの、推測にすぎないがな」

「……当たっていると思うぜ。それ」

第三の更なる声に驚く。壁にもたれていつの間にかこの男も立っていた。

「ほ、ポルナレフ！」

「……こいつ、言っていたんだよ。

『ぜつたいに、いわない……いえない』ってさ。

そーゆうことね……って、たった今、意味がわかった」

眼を細め天井をみつめる。思い返しているのだろう。その視線がゆつくりと彼女へ、そしてこちらへと移る。

「馬鹿だなあ。ほんと。こいつも……花京院、おまえも」

「ああ……ほ、んとに……ばかだ。ばかだろ……こんなときまで……」

じぶんのことじゃあなくて……ひとのこと、ばかり。

視界が霞む。

そうだ。彼女はそんなひとだ。僕はよく知っているはずだったのに。

そんな簡単に単純明解なことがどうしてわからなくなってしまうのだろうか。

「……そんなことしたって……無駄なのに……」

やつぱり、このひと、ちっともわかってない……」

僕が、あなたのことを、あきらめられるわけ、ないだろう。

そうだ。まだ……

なにひとつ、おわってなど、いない。

「なあ？　こんなときくらい、我慢しないで、わがまま、いったってよかったのにな。いや、いわせてやれよ？　ちゃんと……こいつが起きたら、さ」

「そーいうこつた。さつきおれにいった愚痴は、こいつに直接いえ。たたき起こすん

だったら、協力してやる」

にんまりとふたりが声を揃える。

「……………あきらめるわけ……………ねーよな？」

「……………承太郎！ ポルナレフ！」

……………すまん。……………ありがとう……………」

そこへ、もうみつつ、力強い声が降ってくる。

「おい！ わしらを仲間はずれにするな！」

「まったくだ」

「ガルルル！」

「ジョースターさん、アヴドウルさん、イギー!!」

「話は最後まで聞かんか！ わしらだって、この娘を目覚めさせたいのはおなじなん

じゃぞー！」

「わたしはきいたことがある。『命が終わったものは……………いかなるスタンドでも治せない』という文句を。だから、彼女の命を終わらせるわけにはいかないのだ。絶対に。裏を返せば、それは『治す』スタンドが、実在する。少なくとも、いた。そういうことだからな」

「決まったな」

「ああ……」

僕はおおきく息を吸い込むと、高らかに言い放つ。

「探し出す！」

たとえ、地球の裏側にいようとも、草の根をわけてでも……かならず！」

周りを見渡す。

「ふう、ようやく眼に生気が戻ったのう」

「まったくだ。ずっと死んだような眼えしやがって」

「らしくねーったら、ありやしなかつたぜ！」

「やつと復活、だな」

「ワン！」

ジョースターさん、承太郎、ポルナレフ、アヴドウルさん、イギー……

おもいだす、彼女のことばを。

——あなたには、みんなが、いるじゃない——

(ああ、そうだ。ほんとうに、そうだね……)

でも、あなたが……

あなたがない。

だから、探すよ、僕は。

いつまでも。

どこまで、でも。

こうして、僕の旅は再びはじまった。

失ったたいせつなものを取り戻すための旅が。

花京院典明は失ったたいせつななにかを取り戻す旅に出るようです。

第6章 CHANGE THE FUTURE !!

ヒミツ

まんまるな毛玉が道路の真ん中にくらがっている。

そう思った。はじめは。でもよく見たら、ちがっていた。

動いている。

……生きている。

考えるよりも前に身体が勝手に動いていた。けたたましいクラクションが私の耳をつんざく。不思議なことに見える景色はなにかもがスローモーションで、ゆっくりゆっくり、でも確実に近づいてくるトラックのヘッドライトと目が合った。まるで昨日図書室で読んだ本に出てきた怪物『メデューサ』に睨まれたみたいだと思った。だって、早く、早く、動いて。にげなきや。そう命令するのに足は全然いうことをきかなくて、アスファルトの一部になったみたい固まってしまった。

ああ、やつちやつた。身体からさーっと血の気がひいていって、すくいあげて腕の中に閉じ込めた、もこもこの毛玉……子猫のぬくもりだけがやけに生あたたかかった。

私、死んじゃうのかな。父さん、母さん、ごめんさい。兄さんにまた怒られちゃう

な。やだな……そんな私の考えごとは泣き叫ぶみたいに響き渡るブレイキの音にかき消された。同時に私の身体は宙を舞って、世界が一回転する。背中から着地。でもぜんぜん痛くない。なんでだろう？ 痛みを感じる頭の回路のどこかがおかしくなってしまうのかな？

そんなふうに着地を瞬かせる私の瞼に映ったのは、薄桃色にきらめく、淡くやさしい光の羽だった。

セシリアが、はじめて私を助けてくれた日。

母に教えられて、私は、嬉しかった。自分に与えられた、護る力。だれにもいえない、私の秘密。自分に流れるこの血を……誇らしく、思った。

でも、あの日。クラスメイトを護れなかった、あの日。周りの人達は口々にこういった。

『信じられない』

『なにが起きたの？』

『なぜケガ一つしていないの？』

『幽霊に憑りつかれてるんだって』

『あの子に近づいたら不幸になる』

『化け物だ』

『気持ち悪い……』

申し訳なかった。あの娘、家族、今までこの力を受け継ぎ、伝えてくれたひとたちに。そして、哀しかった。

ただただ、哀しかった。

わかってもらえるわけなんてない。そんなのわかっていたことなのに。

そっか。家族以外の、他人と、心を通わすなんて、私には、もう一生無理なんだ。

そう、悟った。

転校して、誰もが『それなり』に仲良くしてくれたけれど、深く関わろうとはとても思えなかった。心配をかけないよう『それなり』に優等生を貫いた。もともと家族にはおみとおしだっただろうけど。

独りは苦にならなかつた。むしろ気楽。それよりも嫌だった。自分のこの力を侮辱されるのは、もう二度と。

嫌だった。恐かった。もう信じて傷つくのは。しょうがない、別に構わない、諦めていた。そのほうが、楽だった。

でも、たぶん、ほんとうは、憧れていた。

両親のように。祖父母のように。

もともとは他人でも、信頼しあえる……愛し合えると。

そんな相手が、いつか自分にも現れるんじゃないか……淡い期待を、抱いていた。そして、この旅でみんなにであった。

ひとと心の底から、深く関わること。

それは時に苦しくても、つらくても、そのぶん……どんなに素敵で、幸せなことか、わかった。

……あのひとが、おしえてくれた。

みんなは不思議。

私にとって、特別で、本当に大切な仲間。

ずっと、考えていた。

自分が、この力を授かった、意味を。

それが、今、やっとわかった気がする。

きつと、この瞬間のため。みんなを……彼を……救う、そのために。

だれも、死なせない。

奪わせない。終わりになど、させない。

あなたたちの、命も……未来も。

必ず護る。

……たとえ、なにと引き換えにしたとしても。

「……さん？」

「……仁美さん？」

呼びかけにハッと我に返ると、目の前をひらひらと横切っていく大きなてのひらに焦点が合う。そしてその隙間から心配そうにこちらを覗き込む彼の顔がみえた。

「花京院くん……」

「顔色、悪いですよ。だいじょうぶですか？」

「……そう？ ……緊張してるからかな。いよいよだもんね」

せいっぱい、笑顔を創る。一世一代の、演技を。

（仮面をかぶるのよ、か……）

そんなこともあったな、なんてつい先日のことを懐かしくおもいだしてしまう。

「だいじょうぶだよ！ ごめんね。ありがとう」

「でも……」

「おーい、道は？ どっちじゃー？」

「あ、すみません、こっちです！」

なにかを言いたげな彼から、飛んできたジョースターさんの声を口実に慌てて背をむける。

やはり、だめだ。これ以上話していると……彼のかおをみていると、すべてぶちまけて、頼ってしまいそうになる。いや、そうじゃあなくても、気づかれる。このひとは、気づいてしまう。

(だめだ……ぜったいに、だめ。私は、あなたを……)

時は巻き戻る。

昨夜のことだ。夜更け。皆が寝静まった頃、私はなにかに引つ張られる感覚で目を覚ました。

「イギー先輩……?」

「ワン……(起きろ、後輩。ついてきな……)」

「えい! ま、まっつてください!」

先輩を追いかける。ホテルを出ると、闇のヴェールに包まれ町全体も眠りについていくかのようだった。昼の活気と打って変わって静まり返っている繁華街。静寂に神秘性を感じる余裕もなく、どことなく背中に寒気を覚えながら裏路地を駆け抜けるとある

場所にたどり着いた。

「(ハ、ハ)は……!!」

それはまさに連日、私たちが穴が開いてしまうほど凝視し続けた写真の建物……全員が探し求めていた『終着駅』だった。

「ガル……(わかったか? 長居は危険だ。戻るぜ)」

「……はっ」

部屋に戻り、どうするべきか、悩みつつ腕時計に目を落とす。文字盤では長針と短針が丁度、垂直を成そうとするとところだった。午前3時。この時分では報告したくとも皆確実に眠っているだろう。

それになにより、夜は吸血鬼……D I Oの時間。

首を振り、翌朝一番で報告することに決める。

そしてきつと『決戦の日』となるのだろう。

気が高ぶっており到底眠れる気などしないが寝ておくべきだ。ベッドに横になる。

すると不思議なことに、私の意識はすぐに、深い深い夢の中へといざなわれていった。

「……………マスター……………」

どこからともなく、呼ぶ声が聴こえる。

「マスター、起きてください。わたしのマスター……」

それが私を『覚醒』させる。

眼を開けると、そこにはひとりの『おんなのこ』が立っていた。

薄桃色の羽をもつ、まるでファンタジーやRPGに出てくる花の妖精のような……

「え？ あ、あなたは……？」

「わたしは、セシリア。あなたのスタンド、です。マスター」

「せ、セシリア!？」

「時間がない……伝えなければいけないことが、あります」

「え……？」

「これを、みてください。あなたには、とても、つらい現実かもしれないけれど……どう

か、目をそらさないで……」

彼女がそういうと、あたまの中に映像が流れ込んでくる。

凄惨な光景が、次々と……。

蝋燭が照らす薄明かりの中、男は闇に吞まれ消えた。その両の腕のみを残したまま。

(え?! し、ししよ、う……?!? な、なにが、起こったの……?)

砂埃とともに、おびただしい鮮血をまといながら、その小さな身体を横たえる一匹の獣。

(い、イギーせんぱい……? う、うそ……)

赤く光る満月と星々に見守られながら、冷たい水にその半身を浸しゆつくりと瞳を伏せる青年。

(か……?!? あ、……あ……! いや! いやああああ——ツツツ!!!)

「ハッ!」

「これが、彼等の未来。……そのままの、未来……」

「……い、やだ! そんなの、いや!」

「こんなの……私は……、たえられないッ……!」

信じられない。信じたくなんてない。全身が小刻みに震え、心臓が早鐘を打つ。

かぶりをふり、おもわずその場にへたり込む私に至極冷静に彼女は伝える。

「おちついてください。まだ、きまったわけでは、ないのです」

「え……?」

「これは、あくまで……あなたが、『いない』未来。あなたがいれば、変えられる、変わる……かもしれない……未来。そのために、わたしがいるのです。マスター」

「どういう……？」と？」

「わたしの存在意義は、マスター、あなたを護ること。」

ですがこれが実際に起これば、あなたの心はきつと……死んでしまう。

だから、えらんで、もらいにきました。

どうしますか？ あなたは……どうしたいですか？」

思考を挟み込む間などあるわけがない。すぐさま答える。

「そんなの……、そんなの決まってる！ 変えたい！ 変えて、みせる!!」

「そうですか。あなたはという存在は、小さい。」

しかし、その存在は確実に周りに影響を及ぼす。

落ちた小さな石が、泉全体に波紋を起こすように……

だからそのまま、あなたはあなたが最善だと思ふことを、すればいい。

そうすれば、きつと……『なにか』が、かわる」

「セシリア……」

「だけど、忘れないで下さい。加えた力は必ずみを生み、何処かへ解放を求める。

……何かを得る為には、何かしらの代償が、必要だということを」

背筋に一本、棒を射し入れられたかのようだった。自分が息をのむ音が脳内に響く。「わかりますよね？ 代わりになにが起こるか、わからない。わたしには、変えられる、かもしれない……ということしか、わからない」

渦巻く様々な感情を押し込みたくてひとつ空嚙下をすると、もはやからからになってしまった喉を叱咤しどうにか訊ね返す。

「……ひとつ、きいてもいい？」

「なんででしょう？」

「他のひとに影響は？ その、たとえば……師匠を助けたことよって、ポルナレフ兄さんが、とか」

「完全に、ではないですが、おそらくそれはない。意志を持つて運命を変えようとした者に、代償は求められるもの。あなたがこのことを口外したりすれば別ですが」

「そっか……」

「あなたの行動で『未来』は未知のものに確実に分岐する。しかしトリガーであるあなたの身に、なにが起こるのか……わたしにもわからないのです」

彼女はすこし俯いたあと、こちらをまっすぐに見据える。

「はつきりいます。要は、もしも三人を『死』から救うことができたとしても、代償として、最悪、あなたが、代わりに……。それでも、やりますか？」

「もちろん！ 最悪なんかじゃないよ。そんなの。それぐらいで済むなら……御の字、だよ……」

あのひとは、きつと……すごく怒るだろうけど。ふつと浮かんだそれは彼女の言葉に制される。

「……駄目です」

「え？」

「そんなつもりでいくのなら、わたしが、いかせません。このまま、あなたを闘いが終わるまで目覚めさせない……そんなことだって、わたしにはできるんですよ？」

「そ、そんな！ いやだ！ やめて！」

「言ったでしょう？ 最善を尽くせ、と。あなたも含めて『全員を護る』そのつもりで。そうでなければ、いかせません」

そうして彼女は初めて美しい微笑を浮かべる。そのまなざしに冷え切ってしまった体に少しだけ熱が灯る心地がした。

「そっか……ごめん、セシリア。」

わかった。私は負けない。あきらめない。ちゃんと、みんなで、帰れるように……。「わかりました。ならば、あなたのために、わたしも最期まで、力を尽くしましょう……」

「ハッ!! ……夢……じゃ、ない。よね……」

覚束ない足取りで窓際に立ちカーテンを開け放つ。まだ、夜明け前だった。

「……やつぱり、か」

自分には、わかつていた。このときがくると、わかつていた。

母さんからきいていた、『護る一族』の魂の宿命。

この血の運命。さだめ

あなたのちからは、いつか出逢う『だれか』を護る、そのためにある。

そして……

あなたのいのちは、いつか出逢う『だれか』を護る、そのために……

……散る運命にあるかもしれない、と。

セシリアは、来たるべき時に『夢』で、教えてくれる……と。

たいせつなひとの命の危機を。

そして選ばせて、くれる。

己が護るべきもの……護りたいもの……を。

……たいせつなひとか……自分か……。

心の死か……それとも肉体の……。

そんなの、考えるまでもない。

母は、こうもいつていた。

あきらめてはいけない。

抗いなさい。

闘いなさい。

勝ち取りなさい、と。

『覚悟』はどうに決めていた。

「あ、れ……？ ……っ!!」

……はずだった。

しかし、そうはいつても、こわい。こわくて、たまらなかった。意志と裏腹に震えがとまらない。

もしも失敗してしまったら、三人が……

たとえ、成功したとしても、もしかしたら、じぶんは……

「……だから、駄目だつてッ!」

とめどなく訪れる、しつこく脳内に巣食う『ネガティブな悪魔』を払うべく自分の両手でおもいきり頬を張る。

今日だけは。今日だけでいい。私は『自信』をもたなくてはいけないのだ。

ぜつたいに負けるわけにはいかないのだから。

必死に、己を奮い立たせる。

「……」

しかし、どうしても、不安は拭えなかった。すぐにでもこの部屋をとび出して、あのひとのところについて……抱きしめて、もらいたかった。

でも、それは、かなわない。

これは、私が、『ひとり』でなんとかしなければいけないのだ。さつきセシリアもいつていたが、それ以前に本能でわかっていた。

だれかに悟られてしまったら、終わりだと。

でも、これだけは。どうしても、万一のときのため、伝えたい、伝えなければいけないことがあった。まっさらな便せんとペンを取り出し、文字を綴る。

「……つく……」

なみだが、こぼれる。

たった二文字だけ書いたつきり、止まってしまったそれを勢いよく破り屑籠の奥底に押し込む。

できなかつた。

だめだ、とおもった。

どうにか『手紙』が完成する頃には夜が明けていた。決戦のときが、きたのだ。

机の真ん中にそれをそつと置き、部屋をあとにする。

こつちも、破り捨てる。必ず。

そう心に誓いながら。

「……しようがない。貴方がたもお入りください」

「あつ！」

「ジョースターさん！」

「承太郎！」

「花京院くん！」

三人が敵の創り出した『穴』に引きずりこまれてしまう。

落ちながらもジョースターさんが懸命に叫ぶ。

「アヴドゥル……！ 10分経つてもわしからなんの合図もなければ……館に火を

放てッ！ わかったなー……！」

「ジョースターきーン!!」

「……くっ！」

(しまった……花京院くんと離れちゃうなんて。

い、いや、まだだ！ あの映像では、まだ……昼の間は……)

思い出したくもないが、必死にあの映像を、美しく残忍な夜の光景を思い出す。

(……。むしろ、師匠と先輩。ふたりといっしょで、よかった。

師匠はわからないけど、たぶん先輩は昼のあいだに……。

あれが順番どおりだとしたら、先に、師匠が……?)

「……いよいよってときなのに、あいつと離れちまったな。だいじょうぶか？」

館の前で待機する中、声をかけてくれるひとがいた。

「ポルナレフ兄さん……」

『あいつ』。だれのことを言っているかなんてわかりきっていた。そのかおをおもいかべながら、答える。

「はい。だいじょうぶですよ。……信じていますから」

「へっ、惚気んなよ！ ところで、ちゃんといったか？」

「なにをですか？」

「そりゃあ、おまえ……決戦の前だぞ。愛の告白に決まってるんだろ？」

「……」

あいかわらず、このひとは意外と肝心なところでは的確に痛いところを突いてくれる。チャリオッツの主だからだろうか。

「はあ？ そんなわけないじゃないですか。いえませんよ、そんなの」

「なんで？」

「……なんでも」

（いえるわけない……そんなの。もしも……）

「自信がないのか？ なんだだよ。あいつが、おまえのことどれだけ想ってるか、いいかげんおまえもわかってんだろ？」

「……そんなことないですよ。それは、彼が、やさしいからで……」

「あーもー、馬鹿だな。しらねーぞー、後悔しても」

「……後悔、なんて……」

胸が、いたい。

「……いつとけ。いいから。つつーか、男の方から言えってるんだよな……」

ほんと、なにやってんだ、あい……」

「……いえない……!!」

(最低だ、そんな……!!)

「むしろ、もしも、もしもそうだったら、なおさら……。いえない。ぜつたいに……」

「え……?」

「はっ……!!」

「保乃……? おまえ、どうした?」

(し、しまった! つい……!)

「う、ううん! なんでもありません。ごめんなさい……」

「……いいか? よく聞け……」

「……」

「独りでなにか、しようとするな。」

今はあいつはいねーが、オレやアヴドウルがいる。イギーも。

ちゃんと、頼れよ?

オレたちはおまえの兄さんと師匠と先輩なんだからな」

「……! はい、……ありがとう。……兄さん……」

普段はおちやらけていることが多いけれど……なんだかんだ、やつぱり、このひとは

『お兄ちゃん』なのだ。

瞳の中にある、喪う哀しみを知り……それでもなお深い愛情を抱くことのできる……
つよく、やさしい光。

(……あたたかい、なあ)

「よし、道もわかりやすくあつさりしたな」

先輩が、館の迷路の原因である柱の裏に潜んでいた敵スタンド使いをあつさりやつつ
けた。

そのあとのことだ。

本来の姿を現した周囲を見渡し、私はすぐに『あること』に気づく。

「! はっ! こ、ここはッ……!?!」

(こ、ここだ! あの映像! 師匠が……ここだ!?)

「んー? どうした?」

懸命に精神を研ぎ澄ます。どんどん、どんどん、膨らんでくる、迫ってくる。どす黒
く渦巻く、悪意、殺気、負の感情。その中心。

(ま、まがましい……気配! ……くるッ!!)

「? 『このラクガキを……』?」

「……ッ! ダメ! あぶないっ!」

セシリアで三人を突き飛ばす。すると三人のいた空間に、なんと、穴があいた。削りとられた、と表現した方が正しいかもしれない。

「て、敵!」

「な、なぜだ! わたしの探知機にも、イギーの鼻にも……なんの反応もなかったのに!」

「わ、わかりません! さ、殺気が……。恐ろしいほどの殺意の波動だけが……。虚を突かれざわつく私たちの耳に、どこからともなくおぞましい波長を纏った低音が響く。」

「女……そのスタンド、めざわりだな……」

「ま、また来る! せ、セシリア!」

追撃に備えるべくスタンドを戻そうとした、その刹那だった。

「つつ!! うっ、くっ、あぁーっ!!」

セシリアが黒い球体に、呑み込まれ消えた。

……私の左腕とともに。

「くっ……う……っ」

(し、しまつ……た……)

「や、保乃！」

「う、うでが……」

(あ、あつい……、腕が……もえるように……！

……あ、……ぐ……、い、しき……が……)

「出口……」

「保乃がこんな状態では……一度……」

(はっ……だ、ダメ……!!)

再びまっくろな殺意の波動を感じ、朦朧としていた意識をなんとか繋ぎ止める。

「だめ……、今、あそこに……いる……」

「な！ 保乃……!？」

「はあ、はあ……だ、めです……あそこ、に行ったら、みんな……」

「くっ！ 上だー！」

(！ あ、あ……！ ……こ、この場所は……せ、先輩の!?)

担ぎ込まれた館の二階。網膜にうつろに映る天井、壁、柱……それは夢でふたつめに

視たそれと確かに同一のものだった。

そして同時に決意を秘めた声が私の鼓膜を震わせる。

「……………ここは、イギーと、オレでなんとかする。

アヴドウルはさががつてくれ。保乃を、頼む……………」

(兄さん……………せ、先輩……………！)

どうにかしたかったが、なにもできなかつた。

身体が、うごかない。

血が、ながれていく。

(……………さ、むい……………ねむ、い……………)

「……………はあ、はあ……………」

(……………やつぱり、そんなにかんたんにはいかない、か……………)

「……………保乃、しつか……………、……………気を……………！」

師匠の声が、ぼんやりとしか、きこえない。

目もかすんで、もう、あまりみえない。

(……………わたし、……………ここで……………しぬのかな……………)

すべてがフェードアウトしていく。瞳を閉じ、諦めて意識を手放そうとした刹那、弱い私をこの世にどうにか繋ぎ止めるかのようにあのひとの言葉が響く。

——約束してください——

「はっ！」

(い、やだ……、だ、だめ……。まだ……死ねない！

ここで私が死んだら、先輩が……。そして……)

おもいかべる。

だいすきな、なによりもたいせつな、ひと。

(生き、なきや。どんなことを、しても……。あのひとの、運命を変えるまで……)

(……私は、死ねない……ッ!!)

瞬間、上着のポケットからなにかが零れ落ち、きらりと光る様が見えた。

吸い寄せられるようにして右手でどうにかそれにかせると、温かなぬくもりを感じる
とともに懐かしく優しい声が私の頭の中で囁く。

——いいか、仁美。痛くて、辛くて、苦しい……

そんなふうになっちまったときはな、こうするんだ――

(……おじいちゃん……)

ゆつくりと静かに深く、呼吸を整える。幼き頃、祖父が教えてくれた、そのままに。

(……あ……)

すこしだけ、でも確かに体が楽になる。そうして鮮明になった意識は今自分がどうするべきなのかを教えてくれた。

「し、師匠……」

「!? き、気がついたのか!? あ、あまりしやべるんじやあないッ!」

「す、すみませ……、ひと……だけ、御願いが、あつて……」

「……な、なんだ!?!」

「……私の、腕の、切り口を、や、灼いて……ください。師匠の、炎で。そしたら、血はとまる……」

「な!?! そ、そんなことをしたら、もう元に……。それに、どれだけの……。! 痛みで死んでしまうぞー!」

「だ、だいじょうぶ。どうせ、腕、くつつけたくても、もう、呑み込まれて、なくなっちゃったし……。いたいなんて……。そんなの、へっちゃら、です、から」

「ハッ！」

そのとき上階から、ガラガラとなにかが崩れるような一際大きな轟音が鳴り響く。

「ポルナレフ！ イギー！」

「は、やく、行かなきゃ、ふたりが……先輩が……！」

「し、しかし……」

「お願い、します……私は……まだ、死ぬわけにはいかない」

「くっ……！」

ぼんやりと、すぐくつらそうな師匠の顔がみえた。当たり前だ。仲間を灼く……そんなの誰だって御免だ。実直で、誰よりも仲間想いなこのひとのことだ。なおさらだろう。

「……すみません……こんな……いやな、こと、頼んで……」

しかし、自分には確信があった。それを、伝える。

「でも、私は……」

だいじょうぶです。……ぜつたい、まけません。

……師匠、いつも、いつているでしょう……？」

ふたたび想いうかべる、彼のかおを。

「……恋する女は……つよい、って」

「……ぐっ!!」

「……」

「……マジシャンズレッドオーツ!!」

逡巡のあと、相棒を呼ぶ、こえ。

きつと、汲んでくれたのだろう。自分私よりも先に気付いてくれた、よく知っている

……私の、想いを。

「……ありがとうございます、ごさいます、師匠……」

貴方が師匠で、よかった。

本当に手のかかる、出来ない弟子で、ごめんなさい。

この旅で、ほんのひとかけらでもいい。

貴方の弟子にふさわしい、炎のように輝く、立派な魂を持つひとに……

(私は、近づけたのかなあ……)

「蹴り殺してやるッ! このド畜生がアーツ!!」

「イギーッ! や、やめろおー!!」

(ま、まに、あつた……)

先輩のからだをセシリアで包み込む。

「な、なにイッ!?!」

「こ、これは!?!」

「ぐ……………」

左のほうを動かしてしまおうと激痛が走る。

そして、片腕がないとバランスがとれないのか、ひとりで立てず、師匠に支えてもらっている。

(……………あたまが……………フラフラする……………)

きもち……………わるい……………いたい……………

でも……………まけられ、ない……………!?!)

「や、保乃!?!」

「ガウウ……………(こ、後輩……………。てめえ……………)」

「させない……………」

「な、なぜだ、きさまのスタンドは、暗黒空間に呑み込んだ……………はずだツ!?!」

力を振り絞り、叫ぶ。

「……………セシリアは、私の、精神のかたち……………そのもの。」

……私の心はまだ、死んではいないッ！

だからセシリアは甦る、何度でもッ！

「くそ、邪魔ばかりしておつて！ この、死に損ないがあつッ！」

「……チャリオッツッ!!」

「ぐはっ！ な、に……?! ポルナレフの、チャリオッツが、こんなに速く、遠くを、攻撃できる、はずが……!?!」

「させねーよ。妹がここまでやってんだ……負けてられねーよな。兄ちゃんがなあつ!!」

「……ああ……!」

「くっ、めざわりな……暗黒空間に戻り、まとめて消してやる!」

「ぐうう……（出しゃばつてんじやねーよ、てめえ、後輩……）」

小さな体から漏れる、威厳に満ちた咆哮。

「ガアウ!!（後輩は後輩らしく、だまって先輩の背中みてな!!）」

（せんば、い……!）

「な、なにイイ!」

「……この娘は、耐えたぞ。わたしの炎に焼かれる苦しみに……。」

おまえはおなじことが、できるのか……?」

「我がマジシャンズブレッドの……業火の鉄槌を受けるがいい！」

くらえッ！ ……クロスファイヤーハリケーン・スペシャルーツ！」

「ふん！ こんな炎ごととき……まるごと……」

うねりをあげて襲う炎の渦……それが全て？ み込まれてしまう。

「くくく……！」

しかし……

「くく……ん？ ぐ、あ……な、な……なにイイツ！！

や、焼ける！

……喉がツ……肺が……ツツ！！

ぐあああああーーツ！！」

「……？ み込めるほど生温いものだ……おもうのか？

生憎だが……いつもとはくらべものにならんくらい……

今のわたしの炎は……熱い……！」

「……へっ！ ……おれのチャリオッツも……素早いぜ……！」

「……貴様への怒りでグツグツ煮えたぎっているからな……！！」

「うおおおおおーッ!!」

(し、師匠……! ポルナレフ兄さん……!)

また目が霞む。

でも、それは今度は、ちがう理由のせいだった。

「イギー、無事か？」

「ガウウ…… (ふん! んな、やわじゃねーよ)！」

「うむ、怪我はしているようだが、大丈夫のようだな」

「ぐう……。 (……ばかやろう。おれなんかより……)」

「ポルナレフ、おまえも足が……。保乃と街に戻り、病院に行け」

「ああ? アヴドウル。おまえのほうがいいだろ。おまえが行け」

「はあ? おまえが怪我人だろう!」

「おまえが行く方が合理的だ!!」

押し問答を繰り返す、そんなふたりにいう

「ふたりとも、なに言い争っているんですか? 私もこのまま進みますよ。いつしよに。」

もちろん」

「はあ?!」

息びったりだ。

(やっぱり。ほんと仲良しなんだから……)

いつもそうだ。このふたりは、喧嘩するほど……のお手本みたいだ。そんな場合ではないのに、つい、笑みがもれそうになってしまう。

「おまえこそ、なにをいつている!」

「まったくだぜ! そんな青っ白いかおしやがって。あとはオレたちにまかせて、おまえは戻れ!」

「もう血は止めてもらつたし、問題ないです。ちよつと時間が経てばすぐ治りますつて。私、こう見えて結構、丈夫なんですよ」

彼にもそういえば似たようなことを言った気がする。そう、私は意外とほんとに怪我には強いのだ。昔から。

『おじいちゃんの教え』のおかげで。

(……実は波紋戦士なの、私だつたりして)

「そんなわけないだろ!」

「戦力を迂闊に分散するほうが危険ですよ。私は本当に大丈夫ですから。とりあえず、

ジョースターさんたちを早くみつげましょう。あっちももしかしたら、苦戦しているかもしれない」

「しかし……」

「……私は、ひとりでは帰りません。絶対に」

そう。ひとりで帰るわけには……いかない。

「はあ……言うことをききそうもないな、この頑固者め」

「やばそうだったらすぐ連れて帰るからな！」

「しかたがない。進もう。上の階に。DIOのところへ。」

ジョースターさんたちもきつとそこへむかっている。おのずと合流できるだろう」

「様子をうかがってくる。保乃はここで少し休め。イギー、頼むぞ」

ポルナレフ兄さんと師匠、ふたりが力強く階段へ足を踏み出し上階に向かうのを見送ったあと、壁にもたれてへたりこむ。

「はあ、はあ……」

（や、やつぱり、まだ……ちよつと、きつい……かな……。）

けど、私だけ帰されちゃうわけにはいかない……）

「ウー……（なにやってんだよ、後輩……）」

するとあきれ果てたような唸り声が聞こえた。

「イギー先輩……」

「……クウ……（……馬鹿だな、やつぱり、おまえ）」

「……そうかも、しれませんがね」

「……グウ（また、説教くらっちゃうな。あいつに）」

「……そうですね……」

「キユウ……（あんま女が男に心配かけさすもんじゃねーよ。

あいつ、死んじゃうんじゃないかねえか？ おまえになんかあったら）」

「……。そんなこと……ないですよ。」

彼は……ちゃんと、……つよいから。だいじょうぶ」

そう。ちゃんと、もういちどたちあがれるひとだから。

「……ワン（つたく。しゃあねえ、じゃあ……ちよつとだけ、優しくしてやるよ）」

先輩は、そういつて頬をなめてくれた。

「ふふ、ありがとうございます……」

「ぐあう……（馬鹿だな。本当に、馬鹿だ……）」

「……はい」

噂をしていたら、ほどなく本人が階段を降りてこちらにやってきた。

「仁美さん！ イギー！」

「あ！ みんな！ 合流できたんですね。よかった……はっ……い！」

三人が無事だったことにほっとする。が、同時に焦る。

「(ほ、ポルナレフ兄さん、隠して！ みつかったら怒られちゃう！)」

「(はあ!? 馬鹿か、おまえは！ ばれないわけねーだろ！)」

「? 仁美さん……? なにをこそこそと……」

「え? なんでもないよ?」

「なんかさつきよりさらに顔色が……? あっ!」

「(……ばれ、ちゃった。そりゃ、そうだよね……)」

でも、それでも、彼にはなるべく知られたくなかった。

「う、うで……? え……?」

「なにっ?!」

「えっ!? あっ!」

「……だから、なんでもないっていつているのに……」

「そ、そんな……」

「……ゆる、る、さ……ん！　どこのどいつだ!?　誰がやった!?!」

（は、はじめて……みた……）

こんなに怒っている彼を。つい、場違いな感情が生まれてしまう。
すこしだけ、うれしい、と。

「お、おちつけ、花京院！　もういない！　ヤツはもう倒したから!」

「そうだ！　ひ、仁美の護りのおかげで全員の力を合わせてなんとか倒せたんだ!」

「……じゃあ、D I Oだ！　そもそもの元凶！　今すぐヤツをツ!!」

「ま、待てツ」

「か、花京院!」

「離せツ！　止めてくれるな！　……許せるか！　こんな……ツ!!」

（で、でも、とめなきや!）

ほんとうに今すぐ独りでもD I Oのところへいってしまいそうな剣幕だった。必死に叫ぶ。

「おちついてって、いってるでしょうツ!!」

「ハッ!」

「そんなのじゃ、勝てるものも勝てないよ……。」

おねがいだから、おちついて……」

「……、くそっ!!」

「……すまん」

「われわれがついていたにもかかわらず、すまない……」

「そんな！ 私がただ単にドジっっちゃっただけです！

すみません……。でも、大丈夫ですから」

そんなふう言ってくれる兄さんと師匠にたまらず返す。が、そんな私にすぐさま彼の言葉がびしやりとおちる。

「……大丈夫なわけ、ないだろう！」

「う……」

「早く病院に！ なんでもまだこんなところにいるんだよ！」

「だから……大丈夫だよ。師匠に手当てしてもらったから。もう病院なんて行く必要ないし」

それを聞いた彼は目を見開いたかと思うと、その顔色がみるみるうちに蒼白になっていく。

（ハッ！ しまった！ 口がすべっ……）

余計なことを言ってしまったことに気づき、すぐに誤魔化そうとしたが無駄だった。

「そ、そんな……う、うそだろう……？」

(……なんであれで、わかっちゃうのかな……)

察しが多すぎて困ってしまう。その洞察力が今だけは恨めしかった。

「あ、アウドウルさんも！ ポルナレフも！ どうして帰さなかったんですか!？」

「違う！ ふたりは帰れていってくれた！ なのに私が帰らないってわがまま言ったの！」

「……そういうことだ」

「ああ……」

彼の詰問に対する私の反論に二人が言葉少なに頷く。重くなってしまったその雰囲気は払拭すべく私は大きな声でいう。

「もう、大袈裟だよ。これくらいで。無事全員合流できたんだから、早く先に……」

しかし、それは優しく肩を掴まれる感触と静かな彼の声に遮られる。

「……仁美さん、行きますよ、病院に」

「……だから、いやだって」

「わからないんですか？」

そんな怪我人がいたら……、足手まといだと。

むしろ却って、邪魔です」

「!?」

(あしで……まとい……?)

瞬間、叫んでいた。

「……いや! いやだ! 足手まといなんかじゃない!

腕なんかなくなつて関係ないもの! セシリアも使えるし!

……私はみんなという!

「なつ……!」

「……私には、まだ……やらなければならないことがある! ぜったいにひかない!」

「くっ……」

わかっていた。

私にでもわかる。

そのことばが……心にもない、ことなんて。

いつもとおなじ。心配からくるものだなんて。

でも、ひくわけにはいかない。

やらなければならぬこと。

あなたの……命がかかっているのだ。

ひけるわけがない。

俯いたまま、彼がいう。

「……わかりました」

「よかった。じゃあ、行こう！」

「ええ……」

「……」

「うっ！」

ほっとして歩き出した。

その瞬間、首筋に衝撃が走る。

一瞬、なにがおこったのか、わからなかった。

「……え……？」

ふりむくと、なきそうなかおをした、彼がいた。

「……どう、して……？」

「い、や……！ わ、たし、は……」

（……あな、たを……）

急速にうすれていくいきのなか……かれのこえだけがひびいていた。

「……………めん」

目を開ける。

「……………」

とびこんでくるのは、まっしろい天井だけ。

だれも、いない。

「……………」

しかし、右手にはたしかにのこっていた。

あたたかい、ぬくもりが。

やさしい、感触が。

「……………ばか……………」

ほかにことばになんてできなかつた。

ひとしずくの涙だけが、ただしずかに頬をつたつてながれておちていった。

BLACK & WHITE

「せ、先生ッ！」

「患者が、いません!!」

懸命に治療にあたってくれた医師や看護師に心で謝罪と感謝をしつつ、意識を取り戻した私は即刻病室を抜け出した。ベッド脇に置いてあつた医療器具がたくさん詰まつたカートの中、目についたあるものをこっそりとバッグに入れて。

「セシリア! ……くっ! はなれ、すぎ……?」

階段の踊り場で身を隠しながら、急ぎ仲間の下に戻るべくその方法を考える。しかし現在地も館の方向もさっぱりわからなかつた。頼みの綱の相棒も射程距離外か、反応がない。

窓から外を見る。すでに陽は西に傾きつつあつた。時間がない。
夜。

彼の『運命の時』まで。

「……ッ!!」

振り払うべく、思い切りかぶりを振る。再び震え始めた奥歯を抑え込むように噛みし

める。

どうするべきかはわからないが、立ちどまっている暇などはないことだけはわかる。気ばかりが焦り、闇雲にでも勘だけを頼りにでも走り出そうか……、そう思い、立ち上がった瞬間だった。

「いてえー！」

誰かと思いい切りぶつかってしまふ。慌てて謝る。

「す、すみません……あつ！」

「あつ！ げげッ！ お、おめーはー！」

「ほ、ホルホース……さん?!」

顔を上げてみて驚く。包帯だらけでわかりにくいのが、確かにあの人だった。反射的に身構えてしまふ。

「ど、どうしてこんなところに……?」

狼狽しつつもどうにか訊ねると、眉根を寄せた相手から皮肉を込めた回答が返ってきた。

「あん？ 見ての通り、誰かさんの愛しの愛しのダーリンにこつぴどくやられましたからねえ。おめーがそれを聞くかよ……」

「い、いや、てつきり、もっとD I Oの目の届かない、遠くに逃げたのかと……」

「ここは現地の人間だけが知る、腕のいいモグリの病院だからな。灯台下暗し、ってやつさ。それに今あいつはジョースターたちの相手に躍起になってやがる。おれのことなんざ気にも留めてねえよ」

「そう、ですか……」

「お嬢ちゃんこそ……ハッ！ その腕……!?!」

「……」

何も言う気などなかった。無言で左側を隠す。

「だから言ったんだ。可哀想に……」

投げかけられる、憐みの視線と言葉。

「……いいんです、べつに。どうってことないですから」

それについて八つ当たりめいた苛立ちを覚えてしまう。だが、そんな時間も惜しいことをすぐに思い出し、立ち去ろうと踵を返す。

「じゃあ私、急いでいますので。……? あ……!」

が、そこで思い立つ。と同時に先日の暴挙を改めて思い返す。それを考えたらこの人物に頼りたくはなかった。しかし、自分の感情由来の些末なことにこだわっている状況ではないのは明白だ。背に腹は代えられない。

「あ、あの！ ここから館へって、どう行ったらいいんですか？ 貴方なら知っています

よね!？」

「はあ!? お嬢ちゃん、なにしに行く気だよ。そんな体で……」

「鬩いに戻るに決まっているじゃあないですか」

少し考えるように首をぐるっと回し白く高い天井を仰いだかと思うと、溜息混じりに男は言った。

「……いやだね。おれに、なんの義理もメリットもねえ。忘れたのか? おれはおまえらにこんつなに、ひでーめにあわされたんだぜ?」

「で、でもそれは、お互い様でしょう?!」

「まあな。しかし、それ以前の問題だ。あそこに戻るなんざ、確実に……死にいくようなもんだ。女を死地におくるなんてーのはおれの趣味じゃあねえ」

「そんなの、かまわない! いいから教えてください!」

「話から察するにお嬢ちゃん、ここに無理矢理おいていかれたんだらう? どうせあの野郎花京院によ……。おめーに安全な場所にてほしいんだらう? わかってやれよ。男心つてもんを、少しはよ」

「……っ! わかっています! そんなこと……!!」

感情が高ぶり、思わず声を荒げる。

「でも……、いや、だからこそ……!」

私は……行かなければならない！」

「……もしも、彼を、うしなったら、私は、もう……」

「……御願ひ、します」

頭を下げる。深く深く。いつのまにか漏れて出てしまった心からの言葉とともに。

「……」

気が遠くなるかに感じられた沈黙の後、男はポツリと呟いた。

「……東に、三キロ、だ」

「あ……」

「金、持つてるか？ 通りでタクシー拾って『アズハル大学東門裏』までつて言えば、ものの10数分で着く」

「は、はい、ありがとうございます」

戸惑いつつも礼を言うとテンガロンハットの位置を直しながらにやりと笑う。

「これは、『貸し』だ。きっちり返してもらおう。」

で、今度こそお嬢ちゃんにはおれのものになってももらうからな？」

「……このお礼は何らかで必ずします。」

でも、貴方のものに、というのはやっぱり絶対に無理なので、お断りしますね」

「へっ！ 恩知らずめ……。さ、とつとと行きな」

「ふふ。はい！　ありがとうございます。ホルホースさん！」

駆け出した私の背中に、微かに、届くか届かないかの声が投げかけられる。

「……ちゃんと、返しに戻ってくるんだぜ。お嬢ちゃんよ……」

それに敢えて応えることなく、私は前だけを向き直し、その場所を後にした。

教えてもらったように通りに出てタクシーを捕まえようとする。だが生憎、人々の移動が最も激しい帰宅ラッシュの時間帯らしい。ヘッドライトは行きかうばかりで無情にも停止してはくれず、乗降場を見つけてそれに並んでみるも長蛇の列はちっとも進んでいない。自分の心理状態が差し迫り切っているからなおさらなのかもしれない。

苛立ちをどうにか紛らわせた空を見て。しかしオレンジ色の時刻なんて疾うに過ぎてしまったらしい。一面の濃いパープルが目飛び込んできて、まったくの逆効果だった。

もはや居ても立つても居られなかった。行列を抜け出し、走り出す。もかくように足を動かしながら、こうなったら……、と一つの案が浮かぶ。決して褒められた方法ではないことなんてわかりきっていた。でも今の私に手段など選べという方が無理だ。何度も言うが背に腹なんて代えていられるわけではない。

ここだ。若干早めのスピードで車が何台も行きかう見晴らしの良い直線道路。その中で視界の端、こちらへ向かってくる一台の黒塗りの高級車に目をつける。

ごめんなさい、とまとも心中謝罪しつつ、タイミングを見計らってそれが横を通り過ぎる瞬間を狙い、勢いよく飛び出し思い切りふつとばされてやる。

思惑通り見事宙を舞う、自分の身体。

「あわわわわ！ ひ、人を撥ねてしまっ……！」

「な、何をやっとするんだーッ！ 運転手ッ！ 人身事故などッ！ このフィリップの華麗な経歴に傷をつける気かッ！ 上院議員はイメージが大切なのだぞ！ イメージがーッ!!」

倒れ臥した私に運転手と呼ばれた人が慌てて駆け寄ってくる。その後方にはパワーウインドウを開け、覗く顔を真っ赤にさせて怒鳴る中年男性。この状況で自らの保身についてしか案じないとは如何なものか。勝手極まりない当たり屋紛いの私には言われたくないだろうけど。とか思いつつも、台詞で関係性や人柄を瞬時に察知した私はすぐさまむくりと立ち上がると、つかつかと後部座席の中年男性に詰め寄る。

「ヒイツー！」

「………轢きましたね?」

「うッ」

「私、貴方の車に轢かれました。フィリップ上院議員さん。議員さんは大変ですね。イメーツジが大切でもんね。このことが明るみに出たら次の選挙に響いちゃうかもしれませんね」

「グウツ！」

相手が息を呑むのを確認し、声を緩める。

「黙っててあげますから、一つ私の御願いを聞いてもらえますか？」

「な、なんだ？ 金か？ カネだな。わかった、そんなものならいくらでもくれて……」

「要りません」

「え？」

「車に乗せてください。連れて行って欲しいんです……アズハル大学裏門まで。今すぐ

！ 急いで下さいッ!!」

「はあ？ な、なんだチミは？ 対立候補の回し者か？」

「いいえ。私はただの変な……一般人です。」

ただ……とつても急いでいる。それだけです」

改めてしっかりと頭を下げる。

「申し訳ありませんが、ちよつと運が悪かったと思つて……御願いできませんか？」

「有難うございました！ 助かりました！ 本当に申し訳ありませんでした。この御恩は必ず！」

「まったく、なんでわしがこんな……わしは上院議員だぞ」とかなんとかぶつくさいいつつ、なんだかんで結局ちゃんと送ってくれた。しかもすっかり急ぎ気味で。流石は上院議員。実はけっこういい人なのかもしれない。次の選挙では是非清き一票を投じて差し上げたいものだ。……選挙権さえあれば。残念ながらこの街の住人ではないので無理だが。仕方ないので代わりに日本に帰ったら故郷の銘菓でも贈ろう。……帰れたら。そんなことを思いつつ車に向けて一礼したのち、頭を上げた瞬間だった。私が彼達を巻き込んでしまったことを心から悔やんだのは。

「……宵闇の空中散歩は良きものだ」

突然のことだった。走り去ろうとした車両のボンネットに降ってきた。

「いつも我に『おもしろきもの』を与える」

声と共に、一人の男が。天そらから。

「なッ!?!」

「ククク、初めまして……だったか？ 貴様とは。小娘？」

「ま、まさか、貴方は……!?!」

私が見たことがあるのは後ろ姿。しかも写真の中のそれだけだった。しかし、話に聞

いていた、真つ赤な目、ウエーブのかかった金髪。ギリシヤ彫刻の様な、その様相。そして何よりも、この圧迫感^{プレッシャー}。目線を合わせているだけで、寒気や怖気、悪寒、そういつた類いの嫌な戦慄が全身を駆け巡る。その感覚が私に目の前の男が誰なのかを確信させた。

「デイ、D I O ツツ!？」

「少し話をしようではないか。鼠共を追いかけながらな……ククク」

D I O がその幽波紋^{スタンド}を出す。その拳が呆然としている運転手へと振るわれようとする。

「ツ!? いけない! セシリアツ!」

フロントガラスは粉々に砕け散ったが、諸共彼の頭が西瓜のように無残に割られるのは防ぐことができた。本当に、どうにか、かろうじて。

「な、なんて力……!」

その破壊力はまるで承太郎君の星の白金のパンチと互角かというほどに強烈なものであった。

「ひえええええつ」

「フン、小癩な。ならば……」

血の滴るような真つ赤な唇の端が釣り上がったかと思えば、次の瞬間、右手に運転手、

そしていつのまにその腕を後部座席に伸ばしたのか、左手で議員が頭を鷲掴みにされていた。

「えッ!? ぎ、議員さんッ! 運転手さんッ!」

不思議で仕方がなかった。片時も私は奴から視線を外してなどいなかったのだから。一体何が起こったのかさっぱり理解できず啞然としている私に顎で命令する。

「……小娘、さつさと車に乗れ。気づきもしないうちに今度はこの憐れな豚共の頭をぐちゃぐちゃに潰されたくなければな」

「くっ……!」

渋々従う私を横目に、DIOは運転手を路肩に投げ捨てたかと思うと議員を運転席に押し込みながら凄む。

「わかるな? 貴様が運転しろ」

「ひ、ヒイヒイッ! ゆ、夢! 夢なのだ、これはーッ!」

「いいから早くしろ」

「は、ははは、はいーッ!!」

「あの車だ。追い付け」

(みんな……!)

黒い河のような渋滞の間をぬってロールスロイスが闇を切り裂き、轟々とうなりを上げながら疾走する。

遙か前方を走るトラックの荷台の上、小さくだが仲間達が見えた。

あんなにも追い付きたかった彼らの姿がそこにある。だが決してこんな形ではない。

こんなことになってしまふとは……歯齧みをしているとD I Oがまさに単刀直入。前置きもなく切り出してきた。

「さて小娘、貴様に言いたいのはただ一つだ。ジョースター共を裏切り、このD I Oの元に来い」

「ッー 誰が……!」

反射的に出た私の拒絶の言葉を待つこともなく、なおも畳みかけるように奴は続ける。

「貴様もスタンド使いならば我の力は目の当たりにしてすでに重々感じているだろう。あちら側にいたら貴様は死ぬ。確実に。片やこちらに来れば我の傍で永遠の安心を得られる……比べるまでもないと思うが?」

「……そうですね。比べるまでもないですね」

すうつと息を吸い込み、お腹の底から言い放つ。

「貴方の傍で生きるぐらいなら、死んだ方が、ずっとずっとマシです」

ただし、その前に、ただひとつ。あとひとつ。たったひとつだけ。

『それ』を果たすまでは、死んでも死んでやらないけれど。

「クク……ククク。笑わせてくれる。貴様のその眼、遙か昔に垣間見た『なにか』に似ているな……気に喰わん」

台詞とは裏腹に何故か愉快そうに高笑いをしたのち、運転席に向けてドスの効いた声を投げる。

「おい、もつと飛ばせ。離されているぞ」

「む、無理ですよ。この時間、見ての通りこの辺りは渋滞でギチギチなんですう」

議員の恐る恐る震えながらの反論に対し、奴はあっさりと、しかしとんでもない要求を始めた。

「あちらが開いているではないか」

指をさす。その先は……

「ほ、歩道……」

「ま、まさか……」

そのまさか、だった。

「行け」

「あ……あ……」

「や、やめてください、議員さん！ 聞いては……」

私の制止は恐怖に憑りつかれた議員に届くことはなかった。

「……行け」

「うわはははあーっ!!」

有無を言わさぬそのプレッシャーの前に精神が壊れてしまったのかもしれない。無理もない。議員にアクセルを床まで踏みこまれたロールスロイス。急激に回転数を上げられたエンジンの爆音はまるで怪物の雄叫びのようだった。命ぜられるまま急発進すると、宙を浮くようなスピードで、縁石もガードレールもものともせず、人並みでこつたがえしている歩道に猛進を始めた。

「駄目——ッ!!」

一体何人が犠牲になるのか、数え切れるわけもない。旅の初日の飛行機事故。あの悪夢が頭をよぎり、咄嗟にセシリアを車体前方に向けて放つ。できるかぎり、広く。できるかぎり、強く。シールド状に展開する。全員を完全に護ることなど到底不可能だった。そんなことはわかっていたが、何もせずに指をくわえて見ていることなどもっと不可能だった。

黒い猛牛の突進をもちに受け、人々が次々と薙ぎ倒され吹きとばされていく。

何の罪もない人々が。

能力的にも状況的にも自分の許容量などとうに超えていた。チカチカと点滅し、回転する視界。せり上がってくる胃の中身をなんとか呑み込む。

「はあ、はあ……な、なんてことを……!」

「ククク、なかなかに見事ではないか。何人かは死なずに済んだかもしれない」

DI Oは本当になんてことでもないような調子でさういうと、シートに深くもたれかけたまま優雅に足を組み拍手をする。

「だが、引き換えに相当消耗したようだな。解せん。何故そこまでする？ 知りもしない人間だろう?」

「わ、わからないんですか……?」

「何を嘆く必要がある? そんな者共の命が失われようがいまいが、我には何の影響もない。理解できん感情だ」

「り、理解できないのは……」

こつちの方だ。できるわけがない。しかし、それはもはや声にならなかつた。

わからなかつた。まったくわからなかつた。

どこまでも果てしなく続く深淵の闇。そんなものの入り口にほんの少し触れてしまった思ひだつた。

負けまいという心と裏腹に齒の根がちがちと音をたてはじめる。こんなにもだれ

かを怖いと思つたのは初めてかもしれない。

「小娘、貴様とて己の進む道に石ころが転がっていたら蹴り飛ばすだろう？ 同じだ。邪魔であるなら排除すればよい。それだけのことだ」

そして、前方と後方を交互に指しながら低く深く凍てつくような声で淡々と言い放つ。

「……もうすぐだ。そのへんに転がっている者共……ジョースター一味も全員、あれとすぐに同じ様になる」

ぎくりとする。

まるで油をさし忘れたからくり人形のようにぎこちなく首を回し、うしろを見る。

黒いはずのアスファルトが倒れたたくさんの人の血でできた海で紅に染まっていく。

頭を映像が一瞬よぎる。フラッシュバックする。

『それ』もおなじ。真つ赤だった。

昨晚視た『彼の最期』も。

「どうした？ 顔色が悪いぞ。先程の威勢は何処へ行つた？ クク、ククク……やはり『対話』というのは重要なのだな。おかげで見えてきたよ。小娘、貴様の『怖れること』

がな」

心底楽しそうな様子で。まるで子どもをあやすような、試すような口調で囁く。

「ククク、安心しろ。安心しろよ。それなら話は別だ。譲歩してやるよ。少しだけな」

「じよ、譲歩……?」

「貴様がこちらにつけば奴らの……そうだな。ジョースターの血を引く者以外は見逃してやつてもよい。……と、こういうのはどうだ、小娘?」

「そ、んなこと……、だ、れが……」

ワタシガウラギレバ、アノヒトヲマモレル?

ソウスレバ、カレハ、シナナイ?

ズツトズツトコレカラモ、ワラツテ、イキテイラレル?

まさに悪魔の囁きだった。絶対にありえないはずのその考えが、次々と浮かんでぐるぐると頭から離れない。必死に耳を塞ぎ抗おう、振り払おうとしても纏わりついてくる。

(嫌……!! 嫌だ!!)

「交渉は成立か? ククク、まあべつにどちらでもかまわん。これは親愛の証だ……受け取れ」

「ぐ……ッ!?!」

動揺による僅かな隙を目の前の敵が見逃してくれるはずはなかった。腕に何か突き刺さる灼熱感と同時に這い上がってくる悍ましい感覚。話に聞いていた肉の芽だ、と気づく。その進行自体はセシリアが辛うじて、脳に到達する寸前でくい止めてくれているようだが。

しかし、抗い続けることができるだろうか。一瞬でも、あんな考えが浮かんでしまうような私に……ふっとそんな弱い自分が頭の片隅に居座り、常闇へと引きずり込もうとする。

心すべてが侵食されて、呑み込まれてしまいそうだった。その寸前だった。

「……D I O ツツ!! そのひとから……離れろ——ツツ!!」

まっすぐに射し込んできたそれが、私をそこから救ってくれた。きれいなみどりいろの光が。

「……花京院の……!!」

「……っ! 花京院くん!!」

「エメラルド・スプラッシュ!!」

瞬く間に私の中の『黒』を消し去ってくれる。

「仁美さん! 捕まって!」

声が届く。

「……いいから、早くッ!」

差し伸べて、くれる。

「その手を、伸ばして!!」

ああ、そうだ。いつもそうだ。そうなのだ。

ぜったいにそうだ。

目が覚めた。

私を変えたいのは『それ』ではない。そんな方法では、駄目なのだ。

きつと『本当の未来』でだって、あの結末になつてしまふとしても、絶対に『なにか』一矢報いている。必ずその志は果たしている。気高き誇りを貫いて。『それ』を変えた
いのではない。

信じている。

成し遂げる。このひとはぜったいに。
乗り越える。かならず。

私は必死に手を伸ばした。法皇の、彼の元へ。

引き寄せられたその瞬間、笑ってしまいうくらい簡単に肉の芽がセシリアによって排出されるのが横目で見えた。スタンドは精神が具現化したもの。それをまたも実感させられた。成し遂げるため、何が一番たいせつなのか……それも。

「……………めんなさい」

彼に受け止められた自分の腕をみると赤い痣。しっかりと握りしめてくれていた証がついていた。

「……………っ！ 花京院くん！ ……よかった。よかった……………」

我慢できずに崩れ落ちるように彼の胸に頬を寄せる。心臓の鼓動が心地よい。

彼の体温が伝わる。あたたかい。冷え切った身体に急激に血が通っていくみたいだった。

「ちよっ!? そ、それはこっちの……………ああ、もう……………」

彼はそういうと困ったかおをして、でも、ぐっと私を抱きしめてくれた。

さつきまであんなふうに思っていたにもかかわらず、現金すぎて自分で呆れてしま

う。でも、それでも……

もう、死んでもいい。そうおもってしまった。

「仁美さん！ どうして……！」

DIIOを振り切り、命からがらといった様相で路地裏に消えるフィリップ上院議員を全員で見送った後、彼に訊ねられる。

「はあ、聞くまでもないじゃろ。そんなもの」

「ああ」

「だな」

「まあ、薄々予想はしていたがな」

すると私の代わりに、代わる代わる声を揃える仲間たち。

「このボケ女のこった」

「誰かさんまっしぐら。どうせ館に戻ろうとして、治療も受けずに病院抜け出したんだろ」

「で、そこをDIIOにみつかっちゃまって……」

「あの議員とやらの命を盾に脅されて共にいた、というところか」

「あ……っ、あの、はい。ご、ごめんなさい、また迷惑……」

意外な反応に目を瞬かせながら皆の顔を見る。この状況だ。寝返った。そう疑われても仕方がない。にもかかわらず、その表情は一樣に優しく、だれひとりとして私のことをそんな風に思ってもいけないようだった。それが申し訳ないのと同時に、とても、有難かった。

「そんなこといい。が、おまえ……腕、というか、身体いいのかよ？」

噛みしめていると承太郎君にそう問われたため、患部、左腕を撫でながらありのままを答える。

「ありがとう。点滴をしてもらいましたから。もう大丈夫」

無論痛いし、完調とは程遠い。しかし先ほどに比べたら雲泥の差だ。痛み止めその他の薬品の効果か、もしくは、病は気から、ではないけれど脳からの指令でアドレナリンというものがどンドン出ていて、感じなくなっているだけかもしれないが。だって、今はそんなことどうでもいいというか、それどころじゃあない。正直その一言に尽きる。

しかし、私の発したその答えはまたしても彼の逆鱗に触れてしまったらしく、物凄い剣幕で詰め寄られる。

「大丈夫なわけ、ないだろう!？」

「……ある」

「戻れ！ 戻るんだ!!」

「…………いや」

詰問をされつつも、改めてそのかおをみたらなんだかほつとして、いろいろなものが込み上げてきた。

「なんで…………」

何か口にしようとした彼に向け、キツと顔を上げ、その額の前で親指を支点に、弓のようにしならせた中指をぶつける。おもいきり。力の限り。小気味よい音が夜にはじけた。

「…………いたっ！ で、デコピン…………?!」

「当て身の、しかえし」

額を押さえる彼に告げる。

『『なんで』？ それこそ、こっちの台詞だよ。なんであんなことしたの？ 私気持ち無視して…………』

「そ、それは…………」

「私…………っ、おこっているから」

「うっ…………」

悟られないよう、誤魔化すように、心にもないことをいう。

「自分だって、目がみえなくなつて、とか言っていたじゃない。

私だって、私がここにいたいからここにいるの。私の意思で。

いいよ。べつに。もしもまた置いていかれたつて、またこうして何回でも勝手についていくし。

それくらい、私にだってできる」

「くっ……………！ でも……………！」

「……………」

でも、そこまでだった。限界だった。

「……………もう、いや」

「え？」

「もういや。はなれるの、いや。

……………ぜつたいに、いや」

「仁美さん……………」

こんなの、ただの駄々っ子のわがままじゃあないか。わかっているのに抑えられなかった。感情の堤防が決壊してしまう。

「……………もう、あきらめろ。花京院」

そこのため息まじり投げかけられるひとつの声。

「いいじゃねーか、好きにさせてやれ」

「じ、承太郎!」

「わかってんだろ? てめーだってもう、『無理』だつてよ」

「っ! し、しかし……」

「ガタガタうるせーな。なら言うが、てめーこそ、さつき人形になつてただらうよ」

「うっ! そ、それは言わない約束だらう!」

「人形……?」

首を傾げた私に、ジョースターさんがこそつと教えてくれる。

「こいつ、さつきダービー弟とのゲーム対決で負けて、魂とられて、そっくり人形になつ

とつたんじや」

「ええっ!」

離れている間にそのような危険な事態になつていたとは。無事で本当によかつたと胸を撫でおろす。花京院くんそっくり人形、だと……?! そう聞いてうっかり浮かんでしまった、なんともよこしまな想いとともに。

「……保乃、おまえ、今、ちよつとほしい……とかおもつたじやろ?」

「なっ! こ、心読まないでくださいッ!」

恥ずかしいことに、我が煩惱はばつちり表にだだ漏れだつたらしい。呆れたようにジ

ト目を向けたあと、からかうように微笑むと、ジョースターさんは一転して真面目な表情になる。

「……ともに、在りたいんじゃないかな？ ……君は」

「はい……！」

躊躇いなく、頷く。

「……わかった。わしはもう、なにもいわん」

「ありがとうございます」

そして、黙っておくのは嫌だった。正直に懺悔しよう。伝えておかねば、そう思い続けて言葉にしようとする。一瞬でも抱いてしまった、私の中を通り過ぎた『裏切り』について。

「あの、ジョースターさん、私……あたっ！」

しかし、前髪を捲られおでこをぺしっと叩かれ、それは遮られた。

「よし、変なもんは刺されとらん。ならばよい」

「ッ！ でも、私……」

「なにもいわんでよい。わかつとるよ。DIO……奴は本当に人の心の隙をつくのが上手い。何を言われたかなんて想像がつく」

「……はい」

「でも、おまえさんはちゃんとこつちに立つとる。そういうことじゃろう？」

「はい」

「うむ」

「信じて、くれるんですか？」

「あたりまえじゃろう。このジョセフ・ジョースターをなめるな」

「す、すみません」

「それに……思い出すんじゃないやなあ。おぬしの目を見ると、いつも。なんでかはわからんが」

「え？」

「いや、なんでもないよ。じじいのノスタルジックで感傷的な戯言じゃ」

なにかを想い出すように遠くを眺めたあと、いたわるように、悲痛な顔でいう。

「はあ、しかし、若い娘にこんな……。本当に、すまない」

「そ、そんな！ ジョースターさんはなにも……！」

「この闘いが終わったら、財団に言つて、特注の義手を作ってもらおうな」

「はい！ ふふ、お揃いですね。楽しみだなあ」

笑い合つたあと、もうひとつ口に出す。私の方もずっと抱いていたその郷愁のようなものに関係した、ある事柄を。

「そうだ。この闘いが終わったらといえは……」

ジョースターさんに会ってみたいほしいひとがいるんですが」

「ん？ なんじゃそりやあ？ 遠回しな愛の告白か？ それは言うべき相手がちがうじゃろ……」

「ち、違います！ そうじゃあなくって！」

「冗談じゃ。わかるとるよ。あいかわらずじやのう……」

わしも君に関して、実はずつと気になつとることがあるんじや。

なんというか、奇妙な縁、を感じる……というか……」

「そうなんですか？」

……実は、私も、なんですよね……」

「ふつ。……やはりか」

「ふふ。……はい」

「しかし、なんとも言葉では言い表し難くてのう……」

「……ええ。それも同感、です」

「うむ。では、帰ってから、必ずな」

「はい。……かならず」

「そ、それとこれとは話が別だ！」

私がジョースターさんと話している間も、花京院くんは引き続き承太郎君と言い争っていた。

「別じゃねえ。要は、誰がいつどうなってもおかしくない、ってことだ。

なら自分の意思をなにより尊重させてやるべきじゃあねーのか？」

「ぐっ！ わかつて、いる……そんなことは……。」

……でも！ だからこそ！ もう、これ以上……！

いやなんだ……ぜったいにツ！！

……わかるだろう？ ……わかつてくれよ！」

「花京院くん……」

「……わかつてるよ」

これも。いつもそうだ。

このひとは、いつも私のことを……

私より、……だれよりも、心の底から案じてくれる。

それがいつも、申し訳なくて……

でも、それ以上に。

いけないとわかっているけれど……

ほんとうに、うれしくて。

どれだけ救われたか……わからない。

護る、なんて、とんでもない……

ずっと、ずっと護られていたのは……

……私の方だ。

「……おこっている、なんて、うそ。

……ごめんね。

でも、あなたこそ……わかっているでしょう？

私も……おなじきもち、だから。

護れなかった、なんて、いやなの。

おねがいだから、いっしょに、いさせて……！」

すなおなきもちを、ぶつける。

「……」

ながいながい沈黙。そのあと、ようやく彼が言葉を発する。

「……。ああ、もう、……わかったよ」

「……ありがとう」

「承太郎君も……ありがとう」

先程の礼を言っておこうと変わらぬ学ランの背中に声をかける。

「ああ？ なにがだよ？」

すると、いつものようにぶっきらぼうな応えが返ってくる。

「さっつき……」

「勘違いすんな。おまえのためじゃねえ」

「……そっか。そうだね」

「ちゃんと、みていてやれ。目え、離すな」

「うん、……もちろん」

そうだ。こんなところでこのひとに、親友も、お母さんも、『喪う経験』なんてさせない。改めて心で誓う。

加えて私には確信があった。私が彼を『護る』ことに成功すれば、それは必ず勝利につながる、と。

それに、こんなふうにいいつつも、きつと承太郎君のことだ。なぜか思い出してしまった。

日本を発つ前の、あのやりとりを。

「ふふ。やつぱり……『ありがとう』」

「……ふん」

私がそういうと、承太郎君は帽子を深くかぶり直しながら、ぼそりとつぶやく。

「……すまん」

「? なにが?」

「……なんでもねえ。つたく……やれやれだぜ」

「……ほんとうに、やつぱりおまえは、底なしのポケ女だ」

「……はじめから、ずっと……おもっていた。

そして、わかっていたことだが……な」

「……よし、では……行くぞ」

全員で作戦を話し終えた後、頷き合い、歩き出す。

皆が先に進む中、彼が急に立ち止まったのに気づき、振り返り様子をうかがう。

「花京院くん……?」

「……ここで許したこと、後悔させないでくださいよ。

いや、もう、かなりしている……けれども」

俯く彼。心がぎゅつと苦しくなる。左腕に移る彼の視線。その瞳が哀しげな色に変わる。

「どうして、あなたがこんな……」

「ううん……」

師匠と先輩、ふたりの命の代償がこれくらいですんだのだとしたら、安いものだ。

むしろ、よかつたのだ。そう思った。

「……しようがないよ。これは『報い』だから」

「は……?」

それでも心底哀しそうな彼を正視できずに、つい言い訳めいたことを口走ってしまふ。その言葉の意味がわからなかったのだろう。怪訝な顔をする彼に、すぐさま首を振り訂正する。

「ううん、日頃の行い、ってやつだよ。きつと」

いい事をしたら、そのぶん、きつといい事がある。それはほんとうなのだろうか?

ならば、一日一善……いや、百善でも、千善だつていい。なんだつてする。だから……
どうか、このひとを……

「なにいつてるんですか、まったく」

そんなふうに『なにか』に向けて密かに祈っていると彼の言葉で我に返る。

「なら、前科一犯ですね、あなたは」

「えっ!? み、見た……?!」

そうだった。窃盗及び当り屋及び脅迫……? そもそも一犯どころではないことに今更気づく。こうして追いつけたのだから後悔はしていないが。しかしそれもこれも、もしやいつもの千里眼でこのひとは全ておみとおしなのだろうか……? そんな疑念を抱いたが、流石にそうではなかったらしい。きよとんとした顔で訊ね返され、慌てて口をつぐむ。

「え? 何を?」

「い、いや、なんでも!」

必死に誤魔化す。

「はあ、よくわかんないけど、見てないですよ。だって、みえないから。あなたの罪は」
「え……?」

それ以上、彼は答えてはくれなかった。

「さ、行きますよ」

颯爽とひるがえる、碧色の背中。それをみて、また未練がましくも浮かんでしまう。

「あの、花京院くん……」

「なんですか?」

「……。なんでもない」

「またですか。変わんないな。ほんとに」

「ごめん。でも、ほんとうに……なんでもないの」

ゆっくりと首を振る。

『帰れ』

それに対して、言ってしまうおうか、と、ついまたおもってしまった。

『あなたがいつしよに帰ってくれるならば』……と。

でも駄目だった。

そんなことをしたら、とんでもなく悲惨な結末になる……そんな嫌な予感があった。

そしてなにより、もう、痛いほど、わかりきっていた。

このひとの、命よりも大切な、『生きる』目的。それを奪ってしまうことになる。

そんなことをしたら、どうなるか、なんて。

だから、やっぱり、いえなかった。

その代わり……

「僕から、はなれないで。ぜったいに」

「……うん」

もちろん。

はなれない。はなれるわけがない。
かならず私が、あなたを護る。

フメツノフェイス

おもいだす。

夕闇の中、並んで歩いた、あの日。

——ありがとう。……仁美さん——

はじめて、名前を呼んでくれた、あの日。

旅についていきたいと決めた理由。

『ホリイさんを助けたい』。

私も本当はそれだけじゃあなくて……

『追々』。そんな言葉で誤魔化した、理由。

あなたのことを利用されたのが、ゆるせなかったから。

あなたをこれ以上傷つけられなくなかったから。

あなたにもうあんな哀しい眼をさせたくないから。

あなたのまっすぐで綺麗な瞳をもっとみていたいから。

あなたのことが……なんだか気になってしょうがないから。

いえるわけがない。我ながら一体どこのストーリーカードだ。でも勝手に湧き上がってき

て止まらなかったのだから仕方がない。いえないけど。

じぶんでもびつくりした。はじめてであったひとなのに、どうしてそんなふうにおも
うのか。

『なぜ』なのか、あるときはわからなかったけど……いまならわかる気がする。

ひとめぼれ。

たしかにそれもそうなんだけど、それ『だけ』じゃあなくて……。

もしかしたら、ずっと。

あなたと出逢う『まえ』から、私は……

あなたに……恋をしていたのかもしれない。

初夏のある、暖かい日のことだった。一般的には休日のお昼時。私はバイト先の洋菓
子店『シャンティ』にて甘い香りに包まれつつ労働に勤しんでいた。

ばたばたと午前中のピークを終え、一息ついたそのときだった。カランカラン、とい
う高らかな音が鳴り響く。

レジ業務の合間の隙をみて進めていた作業、店内ポップ用の彩とりどり華やかな色画
用紙を切る手を止めて、まさにベル効果というやつなのだろうか。その音に対して反射

的に発してしまふようになっていた挨拶を口にしかけると同時に顔を上げると、ドアを押し開け入ってきたのがとてもよく見慣れた人物であることに気付く。

「いらつしや……あ、母さん！」

「こら、今はお客様、でしょ？ ふふ、頑張ってるみたいね」

「無事着いたんだね」

この日は、上京して一人暮らしを始めて三か月足らず。まだまだ不安でいっぱいだった当時の私の様子を見に実家から母が訊ねて来てくれた日だった。

「うん。さつき着いたところ。あ、そうそう。急がなきゃ。待つてもらってるんだった。ケーキ、おいしいの、いくつも見繕って。店員さん」

「お客様、お言葉ですが、うちのケーキどれもおいしいです……なんて」

軽口を言いかけて、ふとその言葉の端に引つかかるものを覚える。

「ん？ 待つてもらってる？ だれかにあげるの？」

訊ねると、母は頷き、意味ありげになつこりと微笑むと自らの頭の上に乗っているものを指差す。見覚えのあるのも当然のそれは先日入った初めてのバイト代で私が母の日に贈ったものだった。

「ええ。飛ばされたこの帽子を取ってくれた、親切な『ちからもち』さんにね」

「なにそれ？」

「いいの。さ、早くして」
「うん」

よくわからないが、どうやら親切をしてもらったひとにお礼をするようだ。

ふーん、今時いいひとがいるものなんだなあ。見知らぬ困っている人を助けることができるなんて。そんな感想を抱きつつ、ショーケースの中、各々どれもこれも魅力的なそれらを断腸の思いとともにトングでそつと選び取る。

「はい。お待たせいたしました」

「ありがとうございます」

宝石のようにケーキがつまった箱を差し出すと、財布をバッグにしまいながら、母はなんともなしに突拍子のないことを言い出した。

「そうそう。あなた、もうすぐ逢えるかもね」

「は？ だれに？」

怪訝な顔をする私にウインクとともに返ってくる衝撃の言葉。

「『みどりいろのおうじさま』よ。ちっちゃいころから言っていたでしょう？ ふふ」

「へっ!! ちょ!! せ、それ、しよ、小学生の頃の夢の話でしょ!?! な、なんでそんな突

然!?! しかもいまさら……」

「さあ？ そのうちわかるんじゃない？」

「も、もう……!」

そうだった。母はこんなふうになにもかもしっているみたいにな思議なことを時にいうのだ。そして、それはほとんどの場合的中してしまうのだからやっぱり不思議だ。

(……つてことは……? いやいや、そんな……わけ……)

「じゃあ、おしごと頑張つてね」

「うん、夕方には帰るから」

「あ、そうだ。今晚のおかずながいい? 久しぶりに母の愛のこもった手料理を食べさせてあげるわ」

「じゃあ……、ロールキャベツ」

「みどりいろ……? わ、我が子ながら、なんて単純な娘……」

「か、母さんのせいでしょうっ!」

母は店を出たあとすぐに、軒先でだれかと話しているようだった。

窓、曇りガラスのむこうには、うつすらと、でもなぜか、はつきりと。

昔、夢で見たような……

きらきらしたみどりいろがみえた、きがした。

どうしてだろう？ 半年以上も前のことを、なぜか、おもいだしてしまった。

あのシルエツトが彼だ、なんてそんな偶然あるわけないとわかっている。

もしそうなら、そんなの偶然じゃあなくて……と、同時について浮かんでしまったそんな似合わないドラマチックな展開も。

でももう、この際そうだって、密かに、信じてしまっても、いいかな？

私にとって彼は、運命のひとつだって。

そうおもうだけで、しあわせだから。

なにかわかっていたんだったら、母さん、あのととき店の中まで連れてきてくれたらよかったですに……そんな見当違いの恨み言と思ひ出し笑いを遠い日本に向ける。

そうしたら、もつとまえから、『彼』を想っていられたのに。まあ、どうせ私のことだから、緊張してしまつて話しかけたりとかそんなこと、なにもできなかったらどうけど。

ああいうふうに、じゃあなく出逢つていたら、どうなつていたのかな？ またそんな、夢みたいなきごとをかんがえてしまう。

ちいさいころから、夢に見ていた、焦がれていた、みどりいろ。

スタンドと本体は一心同体……ほんとうだね。

あなたのハイエロフロントは、あなたのところ、そのもの。

とても、きれい。

だいすき。

ずっと、きらきら、かがやいていてほしい。

作戦会議によって私たちはカイロの町を三隊に分かれて動くこととなった。ジョー
スターさんと花京院くんと共に各々路地裏に散っていく仲間を見送ったのち自分たち
も車に乗り込む。

ドアに手をかけながら、ふいに空を見上げる。夕闇のグラデーション、オレンジ、ピ
ンク、パープル……それらは代わる代わる瞬く間に過ぎ去り、今天を染め上げる一面の
黒に呑み込まれてしまった。
ブラック

『そのとき』が、くる。

(……させない。ぜったいに)

このときのため、『あの運命』を変える。そのために……

「はい」

「はい」

「……はい」

きつと私は、そのために生まれてきたのだから。

「うぬううッ!!」

「きゃあああ!」

「く……ッ!?!」

DIOの放つ攻撃、人間ミサイル……を避けきれず横転し横滑りした軽トラックはビルの激突した。

「ジョースターさん!」

「うむ!」

しかし無事だった。気がついたら彼に抱えられ、ハイエロフアント法の皇の触手で上方に向かっていった。

「ご、ごめんね。ありがとう……」

「いえ……」

自分の判断ミスで貴重な移動手段が破壊されてしまった上に、また彼に助けられてしまった。こんなときにまで相変わらずの、自らの荷物つぷりにいい加減うんざりしてしまう。

上空に飛んだ勢いそのまま、ビルの上に三人で降り立つ。覗き込むように下を窺うと

DI0がゆっくりと私たちの乗っていた車へと歩みを進めてくるのがわかった。彼は隣に佇んで、それをじっと注視していた。そのただならぬ様子に気付く。

「……花京院くん……？」

「行こう。とりあえず距離をとるぞ！ ……？」 花京院？」

そして、彼はいった。

ゆっくりとサングラスをはずしながら。

「……。思いつきました……ヤツの能力を、見破る方法を……！」

「……ッ！」

垣間見えた表情、そのかおで、その瞳で……私は直感、確信した。

(きた……。『これ』、だ。きつと、『これ』、で……)

——さつき、ダービー弟にやられて——

——なにを焦っておる!? おまえらしくもない——

そもそも、慎重な彼が、今日はちがった。いつもと。

気持ちはだれよりも熱い。それでも、冷静で、慎重で、本来真つ先に突つ込んでいくようなひとではない。違和感だらけだった。さつき聞いた人形の件も、車でのことも。

そして、なにより……たぶん、ほんとうは気づかれていた。いつもの彼ならば。

……私の『隠し事』に。

ならどうしてかって、そんなの簡単なことだ。同時にこのひとは、常に全体……周りのことを慮ってしまおうひと。

D I Oを倒すためなら、じぶんは捨て石になってもいい。そうおもっている。

わかってしまった。それが。

「……いつてきます」

(……させない)

飛び去ろうとする彼の、服の裾をひく。

もう何度目になるだろうか？ この、だいすきな長めの緑の学生服に私が必死に手を伸ばすのは。

「……いかないで……とか、いわない」

握りしめるその手に、ぐつと力を籠める。

「でも、なら……私も、ついていく」

「なっ!! だめに決まっているだろう! 危険だ!」

「……そんなの、自分のほうが、でしょう? 私だって、そんなのひとりで行かせない。なにをいつているんだろう、そう思った。」

「はなれないでっていったの、あなたじゃない。私、はなれないから。ぜったいに」

「くっ……しかしッ！ だれかが、やらなければならぬんです！ 血路を開かなければ!! このままではいずれ全員がッ!!」

「だめ。ぜったいにさせない……」

彼に向け、ぴしやりと言いつつ放つ。

「……あなたひとりに、そんな役」

「ぐっ……」

まっすぐに、その目をみる。

自分をだいにしろ……そう私にいったのは、いつてくれたのは、ほかでもない。

……あなたではないのか。

そして、私には強力な味方がいてくれた。

「わしもこの娘と同意見じゃ。花京院。ひとりでなど行かせんよ。危険すぎる」

「ジョースターさん……」

説得すべく、必死に絞り出した考えを、伝える。

「代案が、あればいいんでしょう？ ジョースターさん、敵はジョースター家の方の気配を頼りにこちらへ向かってくる。ならばそれ以外の人間……私や、花京院くんの位置は、わからないはずですよ？」

「うむ、みつからなければ、大丈夫なはずだ。だが、近寄った状態で気取られたら終わり、

そう思え」

「じゃあ、ジヨースターさんは予定通り離れてD I Oの注意をひきつける。あと、なにかあったときのバックアップをお願いします。私は花京院くんの近くに隠れていて……護る。それで、どうでしょう?」

「……わかった」

一瞬の逡巡のあと、彼はそう呟いた。

そして今度は私が逆にしつかりと彼に視線をからめられ、とらえられる。

「ただし、僕からもあなたに条件がある」

「……なに?」

「……あの『約束』を護ること」

ひゅつと心臓をわしづかみにされた気分だった。息を呑む。

「わかりますよね? そうでなければ……僕だって、いかせない。ぜったいに」

それをおくびにもださなないように、懸命に心の奥底に抑えつけ、どうにかいう。

「……うん、わかった」

(……私の、嘘つき)

ビルの屋上、鉄塔の上に立ちD I Oを迎え撃つ花京院くん。

私はその鉄塔の直下の陰に隠れて、セシリアに彼を……

……たとえ私にながあつても、『彼だけ』は、必ず護るよう、御願いしていた。

(ほんとうに、ごめんなさい)

——ならば、約束してください——

私は、約束破りの大嘘つきだ。

——だれかを護るのは、自分のことを護つてからにしてください。——

いつか彼とかわした『約束』が、あたまのなかにひびく。

茜色の空の下、あなたがくれた、約束。

あたたかくて、やさしい、約束。

うれしかった。すぐうれしかった。

破りたくなんてなかった。ずっとたいせつにしていたかった。

怒るよね、きつと。

嘘や秘密をなによりも嫌う、まっすぐなあなた。

これでもう、私のことも大嫌いになつてしまふかな？

でも、それでもかまわない。

悪夢の様な『黒』に呑み込まれることなく、堂々と、真正面から対峙する『碧』。

(ごめん。でも……だめなんだ)

そう。絶対にだめなのだ。

だって、私が護りたいのは……『だれか』なんかじゃあない。

『あなた』なのだから。

きらわれたって、かまわない。

うそつきでもかまわない。

約束破り、それでいい。

あなたを護れるのならば、それだけでいい。

心を救ってくれた、とか、いつもなんども、とか。それはもちろんほんとう、なのだ

けど……それはぜんぶ、あとづけの理由なのかもしれない。

すきななの。

死んでなんて、ほしくない。

生きていて、ほしいの。

こんなところで失われるなんて、がまんできない。

無我夢中で、とりもどしたかったの。

あなたのみらいを。

しあわせを。

ただ、それだけだった。

「……触れば発射される『法皇』の『結界』はッ！　すでにおまえの周り、半径20 m！　おまえの動きも『世界』の動きも手にとるように探知できる！　何をしたか手に取るようにわかる！」

ビルの谷間、電柱……敵を取り囲むようにはりめぐらされた、彼の『法皇ハイエロファント・グリーンの緑』の触手。

きらきらとエメラルド色に輝くそれは、真つ暗な夜空にとても映えて……

いままで私が生きてきたなかで、いちばん綺麗だとおもうほど美しい光景だった。

「くらえッ！　DIOッ！　半径20 mエメラルドスプラッシュをーッ！」

「マヌケが。知るがいい。『世界ザ・ワールド』の真の能力は……まさに！　『世界を支配する』能力だということを一！」

そして、過去最高に強い、殺意の波動を感じた瞬間だった。

「『世界ザ・ワールド』！」

（いけない！　花京院く……ッ！）

(はっ！ ど、どっ!?)

気がついたら彼の姿が消えていた。

必死に探すと、彼のすがたは隣のビルの貯水槽のところにあつた。

みつけると同時に、ある事実に気づき、息が止まる。

(あ、あ、……あそ、こ、は……!!)

まさにあの映像通りだった。

衝撃で壊れた貯水槽から漏れ出た水に浸された……彼。

おもわず叫び出しそうになる。

しかし、次の瞬間、彼が驚いたように起き上がるのがみえた。

(……あ、ああ……!!)

(……い、きてる……!)

(……生きている!!)

変えられた。変えられたのだ。

あの……『最悪な未来』を。

一瞬のあと、呆けている暇はないのだ。と我に返る。敵は健在。それはなにも変わっていないのだ。加えて、なによりも、だ。

このあととはもう、なにが起こるかなんて、ちつともわからないのだから。

「この鎖で僕達が拘束していますので。ジョースターさんは承太郎達を連れて来てもらえますか？」

「ああ、わかった。急いで行つて来よう」

『車の中で肉の芽に刺されて手下になつていいると思つてました？ 残念、あれは演技でしたーッ!! 吸血鬼にも静脈麻酔薬つて効くのかな？ 効くよね？ 効くといつて！

大作戦』（なんて名前だ）がどうにか上手くいつてDIOを昏倒させることができた。仲間に招集をかけるべくジョースターさんが『ハイミット・パール隠者の紫』の茨をロープ代わりに夜の

町へと飛び去った。そのすぐあとのことだった。ポケットの中にそのままだったものの存在を思い出す。

「あ、そうだ。忘れるところだった」

「(そぞ)そとそれを取り出し、彼に示す。

「花京院くん、これ……ありがとう」

赤く輝く、御護りを。

「あまり役に立ちませんでしたね……」

「ううん。私が今こうしてここにいられるの……たぶんこれのおかげだから」

目を閉じ思い浮かべる。大好きな祖父の顔を。

体中に流れる血液が穏やかにあたたかく脈打つ心地がした。

——いつ何時も、この石は心に想うその相手のことを護ってくれるだろう——

そして、これを譲ってくれたお姉さんに教えてもらった言葉を反芻すると、彼に苦言とともに差し出す。

「というか、だめじゃない。これはあなたを護ってもらうためにあげたのに。なので、今更だだけどお返しさせていただきます。はい」

「いえ。もう少しあなたが持つていて……」

「……じゃあ、投げる」

やっぱりか。予想通りの彼の言葉を遮るようにおおきく振りかぶる。

「だ、だめですよ！ わ、わかりました。わかりましたから……」

慌てて受け取りしぶしぶ首にかける横顔をほほえましく、そして愛しくみつめていると、彼の口が躊躇いがちに開く。

「その……だいたいじょうぶですか？ って、そんなわけないですよ……すみません」

「え？ なにが？」

「なにがって……。そりゃあ……その、身体の調子と、腕……痛いだろうし、えっと、不便だろうし……」

「ああ。痛いのは痛いけど、点滴のおかげかもうずいぶん楽になったから。血の気も戻ってきたし。ありがと」

いつも饒舌な彼がしどろもどろに言葉をくれる。気を遣わせて申し訳ないという思いと共に、そのきもちがなんとも心に染み入る。

「不確かあ。それが別に、いまのところ。」

歩きにくいのも慣れてきたし。まだ正直、実感がないのかもね」

どこか、何故かふわふわとひどく夢見心地で。

「そう、ですか……」

「あー、でも、ひとつ、思いついた……かな」

(左手が、なくなっちゃって、困ること……か。もちろんたくさんあるに決まっているんだけど……)

それにもかかわらず、なぜこんなことがまっさきに思いうかんだのかよくわからない。

(……私、ほんとうに得意だな、現実逃避)

「……なんですか？」

「ん……？　もう私、結婚できないなあ……って」

「は？　なんで？」

「……だって……指輪」

「え……？」

「左手の、薬指。

もう、ないから」

「あ……」

「なんて、ね。……ごめん、なにいつてるんだろうね、ほんとに。ふふ……」

本当に、なに彼を困らせるようなことをいつているんだろ、私は。笑って、しまう。そんな私をよそに、彼はすこしも笑わずに、こういった。

「……まっただ。なにいつてるんですか。」

「どうでもいい。そんなの」

「え？ ど、どうでもいいって言うのは、ちょっと、ひどくない……？」

「……右手の薬指だって、足の指だってあるし、腕輪にしたっていいし……なんでもいい。」

「あんなの約束のしるし、ってだけで……だいじなのは、ふたりのきもち、なんだから」

「……っ！」

目を見はる。

「そっか……そうだね。本当に、そうだね……」

（ほんとうに……そのとおり、だね）

「そんな心配しなくても、そのうち買ってあげますよ。」

『僕がもうすこし、おおきくなったら』ね」

「え?! そ、それって……!?!」

それだけいうと彼はそっぽを向く。

（おぼえていて、くれていた、の……？）

こみあげてくるものを、必死にこらえる。背中に心でそつと眩く。

（ありがと……『典明くん』）

『そのうち』。それって、いつのことだろう？

ああ、どうしよう。前言を撤回しなければ。

(それまでぜったいに死にたく、なくなっちゃったじゃない……)

このままで終わるはずがない。そんなこと、わかっではいたつもりだったが……

「仁美さん、油断、しないで……」

「もちろん……」

昏睡からまもなく、DIOは目覚めてしまった。

奴は静かだった。しかしその実、発される獣のようなオーラを抑えつるべく必死にスタンドを制御する。物凄いプレッシャーだった。すこしも気が抜けない。

じりじりと気の遠くなるような膠着状態が続く中、ふいに奴が声をかけてきた。

「……花京院、おまえにチャンスをやる」

「……は？」

「考え直さないか？ もう一度、わたしの元に戻ってくるといふのなら、おまえと……なんならその女も、生かしておいてやる」

「ッ!? なんだと!？」

「おまえは優れたスタンド使いだ。先程のわたしの能力を看破した洞察力といい……そ

の小娘の能力も、非常に有用だ。ふたりとも殺すのは惜しい」

「黙れ！ 寝言は寝ていえ！」

彼がその提案を両断したあと、くるりとこちらへ矛先が向く。

「小娘……おまえはどうだ？ わたしのもものになれ。」

我が崇高なる目的を遂行するため、歯車の一端を担うことを許そう。

与えてやろう。わたしの子を産み、育てるという榮譽をな。女は皆、それを望む」

「なッ!？」

「他の女性がどうだかなんて知りませんが、私は、死んでもお断りします」

吐き気がする。即時言い放つ。

「ふん、生意気な。クク……ククク。本当によく笑わせてくれる。遙か昔に垣間見た『なにか』に似ている……小娘、貴様を見る度、そう喉に魚の小骨が刺さったような感覚を抱いていたが、ようやく思い出したよ。その眼、反抗的な眼……そっくりだ」

遠くを臨むかのようにだった目が一瞬にして見開かれ、一転鋭い眼光が注がれる。

「……いつぞやわたしが強引に唇を奪ってやった、あの田舎娘にな。」

そういえば、この身体の『もと』の持ち主……

ジョナサン・ジョースターの、女だったかな……

ククク。わたしに勝利できるものなど……いないんだよ」

(なんて……ひとだ……!)

奥歯をかみしめる。首筋の星形の痣、その『身体』がジョースター家の人間であることとの証……それを奴は見せつけるようにこちらに示す。奴の耐えがたい、まさに悪魔の如き所業の証でもあるそれを。

見ていられない、反射的に目をそらすと、彼が叫ぶ。

「いい加減にしろ! 反吐がでる!

そもそも、今、追い詰められているのはおまえの方……」

「……追い詰められている……?」

わたしが、か……? く、くくく、くくく……」

淡々と、だが地の底まで這い寄って伝わるかのような、おぞましい声が静寂に響き渡る。

(こ、わい……)

DI Oの真つ黒な深い闇。そのあまりの底の見えなさに、私は再びいつのまにか怯え、萎縮してしまっていた。

「……もう一度言う。これが最後だ。

……もどつてこい。花京院」

しかし、ためらうことなく、彼は言い放つ。

「僕は二度と、屈しない！」

おまえにも、弱い自分にも！」

「花京院くん……」

そんな場合じゃないのに見惚れてしまう。その凜としたすがたに。

(すごい……すごいね)

改めて、つよく自覚する。自らのきもちを。

(ああ、すきだ。

私、やっぱり、このひとのこと、すきなんだ……)

弱いところももちろんある。でもそれを乗り越えようとおもうことのできるひと。

まっすぐにじぶんの信念を貫くその美しいすがた。

そばで、みていたい。いつまでも、となりで……

(……ずっと、いっしょに……生きて、いきたいよ)

しかし、残酷な現実を突き付けられたのは、その、すぐあとだった。

「そうか……残念だ。」

……クク、ククク……」

「はっ!」

目の前にナイフが突然『現れた』。

「あぶない!」

彼がそれを防いでくれる。しかし……

「……ちがう! まだ、これだけじゃ……。はっ!」

(う……しろ!? ハッ!!)

とてつもなく強い殺意の波動を感じ、振り返る。

そこで私が見たもの、それは……

街のネオンをかたちづくる、きらびやかなビルの看板。

その裏側から、その動力を得るため、伸びる電線……ヤツが投げナイフで切つて、むき出しになった、その火花散る、電極。

それが貯水槽から漏れ地面を濡らす水に、今まさに触れんとするところだった。

「……だめーっ!!」

「ッ!」

とつさに柵の上に立っていた彼をつきとばす。そして、自分もそれを乗り越え飛び降

りようとした。

……でも、間に合わなかった。

身体にすさまじい電流が走る……

なんて、そんな感覚、わからなかった。それほど一瞬で、あっけなく……

私の意識は、途絶えた。

こうしてD I Oは、あつさりど。時を……私の時を……止めてしまったのだった。

後悔はない。

……なんて、私は、やつぱり大嘘つきだ。

本当は、ああすればよかった、こうすればよかった、ばつかり。

みんなのいうとおり、馬鹿だよね。ほんとうに。

彼が私のことどうおもってくれているか、なんて、そんなの私は彼じゃあないから、わからないけれど……

そうだったら、つて夢みていた。ずっと。

今は考えないようにしようって、おもっていた。

けど、なんども……そうかも、しれない、つておもってしまいそうになって……でも、それがどうであれ、おんなじなんだ。

よわい私は、どうしても考えてしまった。

もしも、しつぱいしたらつて。

最悪な形で、私が……死んだら……

そんなとき、彼に、私のこんなきもち、知られてしまっていたら、つて……

あのひとは、やさしい、情愛深いひと。

きつと、縛ってしまふ。

与えてしまふ。ずっと消えない、罪の意識を。

私の存在が、彼のしあわせの、邪魔をする。

そんなの、いやだ。

この世のだれよりも、しあわせになつてほしいのだから、いえない。ぜつたいにいわない。

そう、おもっていた。

でも、もしも。

もしも、彼が、私とおなじきもちを抱いてくれていたとして……

私が、このきもちを伝えたら……

よろこんで、くれたかな？

わらって、くれたかな？

だったら、いえばよかったのかな……

けつきよく、どうするのがよかつたんだろう？

わからない。

だけど、ほんとうのほんとうに、すごく、わがままで、しょうじきなきもち……

やっぱり、いいたかつたな……

いえば、よかつたな……

……だいすきだよ、つて。

わたしの、さいしよで、さいごの……

すべては、もう、おそいのかもしれないけれど……

第7章
BLANK
ROOTS
DAYS

妹が、ながい眠りについた。

突然、何を言っているのか、わからないと思う。

かくいう俺自身も、訳が分からなかった。

「仁美ね、あの娘、もう……起きないん、だって……」

大学生活もあとわずか。卒業間近のある日、寒い……そう、とても寒い冬のある朝のことだった。

早朝、部屋中に鳴り響く電話の呼び出し音でたたき起こされた俺は、受話器から流れこんできた母の言葉で寝耳に水、いや、氷水をぶっかけられた……そんな思いだった。

死んだわけではない。

でも、もう、二度と目覚めもしないのだ、と。

無我夢中で下宿を飛び出し、両親の待つ病院に向かった。

……正直このあたりは、はつきりと思いつけない。

そして、両親の口から一通り聞いた事情も、まるでどこか別世界の夢物語のようで

……

知ってはいた。

我が家に伝わる……もうずっと長いこと、妹に絡み付いている……血の事情。

母はこうもいった。

これは、あいつの運命。

がんばったのだ。と。

ほめてやってくれ。と。

……なにをいつているのか、わからなかった。

なにが運命だ。

そんな言葉で、すべて片付けていいのかよ。

まだ、生きているんだろう？

なんで、あきらめるんだよ。

たとえそれがあいつの意思だとしても……あきらめないで、くれよ。

その言葉は、生まれて初めて目にした、気丈に振舞おうと必死な両親のすがたを前に吐き出される術を失った。

たったの六カ月ぶり。白いベッドの上、再会した妹は何も変わっていないように見えた。

昔から昼寝が好きで、その寝顔もガキの頃となんら変わつちやあいなかった。なのに、その身体には機械へとつながる沢山の管が伸びて……

まざまざと突き付けられた気がした。

これは、現実なのだ。

これが、現実なのだ……と。

自分も、諦めざるを、受け入れざるをえないのか……

失意のまま、実家へと戻ってきた。

そんなときだった。

我が家のインターホンが鳴ったのは。

*

*

*

「探し出す！……かならず！」

彼女の病室にて仲間たちと決意を固めた。そのあとのことだ。

「ただ、ひとつだけ、問題があつてな……」

ため息をつきながら、言いにくそうに眉間に皺を寄せるジョースターさんを僕は促す。

「問題、とは？」

「うむ。彼女の御両親と先日話ができたのだが、難色を示しておるんじゃ……延命処置、冷凍保存に」

「えっ!? そうなんですか……」

「ああ。ありのまま、そのままでいさせてやりたい、と。もしものがあつたとしても、それが、運命。悪戯に時を延ばすのは彼女の本意ではないと」

「そ、そんな!」

「御二人はすごく、落ち着かれていたよ。わかつていた、と。むしろ、逆に痛々しいほどだった」

「……」

その言葉にじくじくと再び胸のあたりを蝕み始める痛み。それを抱えつつも考える。

彼女の家系、護る一族。伝わる血脈。そこに、あの日彼女が懸命にひた隠しにしていた『秘密』。その答えがあるのだろうか……いや、それ以前に、だ。

「もう一度説得してみるのが……」

僕は訊ねる。

「ジヨースターさん、ご家族は、今？」

「ああ。一度、家に戻ると。実家の方に」

ある、想いを込めて。

「……僕が、行きます」

全員が息を呑む音が聞こえた。

「行って、お話してきます」

「……花京院……」

「……僕が、行かなければ」

そうしてやってきた彼女の故郷は、決して都会ではないがのんびりとした風情のある港街だった。

(……この、話も、よくしていたな)

——なんにも、ないとこだよ。魚がおいしい。それくらいかな。……でもまあ、私はすきだけど——

そんなふうには、けなしながらもどこか誇らしげに話す、彼女のことをおもいだす。説得。そして、聴きたかった……御両親に、僕の知らない彼女のことを。

だが、それとは別に、僕には重要な目的があつた。『それ』を、果たさなければならぬ。

真冬の海から吹きすさぶ潮風が僕の頬を激しく撫でつけていく。

(覚悟は、している。僕はそのために、来たのだから……)

港が一望できる小高い丘の上。そこに彼女の実家はあつた。

丁寧に手入れされていることが窺える、今は葉を落としている季節の木々たちが休む庭の小道をくぐり抜けると、『保乃宮』……彼女の苗字の書かれた表札が見えた。

扉の前に立ち、大きく深呼吸をしたのち、意を決して、呼び鈴を押す。

「はい。どちらさま……あつ！」

「こんにちは。突然の訪問、申し訳ありません。

僕は、花京院典明と申します。

お嬢さん……仁美さんのことでお話があつて、参りました」

そこまで言い、顔をあげて驚いた。

「あ、貴女は……！」

そこにいる女性には見覚えがあつた。半年前、初夏に出会つた御婦人だ。あの……飛ばされた帽子の。

「……やっぱり、貴方だったのね」

「え……？」

複雑な表情を浮かべつつも、微笑みながらいう。

「そうだろうと、おもつた。あのときは、ありがとう」

「い、いえ……」

お母さんの不思議な言葉、及び通常では起こり得ないであろう、奇跡的な偶然に戸惑いを覚えつつも、なぜかどこかすぐく納得をしている自分がいた。

いつかうちの母が言っていた『美味しいケーキ屋の一生懸命な可愛い店員さん』は、やっぱりあなただったのか、と。

「ごめんなさい、少し待っていてね」そういいながら、仁美さんのお母さんは家の中に戻つて行つた。

改めて見たら、よく、似ていた。何故初見でわからなかつたのか。髪の色こそ違えど、顔立ち、そして雰囲気こそっくりだった。

将来、彼女もあんなかんじになるのかな、などとぼんやり想像する。『将来』。その

ワードにまたしても胸の痛みをおぼえてしまいながら。

そのまま待っているとほどなくして、お母さんがひとりの男性を連れて戻ってきた。

お父さんだ、と気づき、アスワンの病院で彼女とした話をおもいだす。どれだけ先の話だ、などとあのときはまさかこんなにも早く対面することになるなんて、それこそ夢にも思わなかったが。

「初めまして、花京院君。仁美の父です」

「は、初めまして……」

「立ち話も、なんだ。どうぞ。あがつて」

「あ、ありがとうございます。お邪魔します」

拍子抜けしてしまうほど、お父さんの態度は平静そのものにかみえなかった。正直、門前払いをくらっても、と思っていたほどだったのに。

居間に通されたところで、だれかが階段を降りてくる足音が聞こえた。

「……おまえ、か……」

低い声で呟く。年の頃は20代前半で、背格好は僕よりすこし高いくらいだろうか。

(お兄さん、だよな……?)

旅の途中、何度か話題にのぼった事のある彼女のお兄さん。彼は、黒髪で目鼻立ちがはっきりしており、どこへいっても、女性の目をひきそうな、整った容姿の男性だった。

彼女がいつていた。なるほど、このひとはクオーターといわれたら、すぐわかる。

お兄さんは僕を睨み付けながら、いった。

「なにを、しにきた……?」

「……お話をしに、きました」

「言い訳でもしにきたつて、いうのかよ?」

鋭い眼光。それを、しっかりと真つ向受け止める。目をそらすわけにはいかなかった。た。

「いえ。釈明の余地など、ありません。彼女が……あんなことになったのは、すべての責任です」

深く、頭を下げる。

「……申し訳、ありませんでした」

「な、んだ、と……!」

瞬間、左の頬に衝撃が走り、僕はふつとばされていた。

「……ッ……」

「おい!」

「あつ!」

「何か……何か、弁解してみろよ! 頼むから!」

俺は、俺はッ……！！ ……くそっ！！」

「待ちなさい、義経ッ！！ ちよつと！ か、花京院君、だいじょうぶ！」

お母さんの制止も聞かず、行き場のない怒りを抑えられない。そんな様子でそのままお兄さんは部屋から出ていった。

ふつとばされた僕を、お父さんが起こしてくれようと手をさしのべてくれる。

「……すまないね。息子が。どうもあいつは血の気が多くて。誰に似たのやら。大丈夫かい？」

「はい。構いません……」

どうやら切れているらしい。動かすたびに口腔内に広がる、錆びた鉄の味。同時に、胸中に広がる思い。

そうだ。これこそが、当然の反応だ、と。

「……僕は、そのために……ここへ来たんですから」

「……」

「……。わたし、救急箱取ってくるわね」

立ち上がるお母さんを見送り、なにかを考え込むように押し黙っているお父さんにむけていう。

「お父さんも、どうか……責めて、ください。僕を……」

しかし、極あつさりとした物言いで彼からは予想に反した答えが返ってきた

「責める？　ぼくが君を？　ありえないね」

「どうして……ですか？　僕は、娘さんを……」

「花京院君、間違えてはいけない。おそらくいろんな人に何度も言われていると思うけれど、ぼくも敢えて言わせてもらう。悪いのは、君と娘を傷つけようとしたやつだ……君ではない」

「……それでも……」

「それにね、ぼくは、君のきもちをわかつてあげられる数少ない人間のひとり……かもしれない。もちろん、すべてではないけれど」

「え……？　どういう、ことですか？」

「その前に。さ、傷をみせて。しみるわよ」

救急箱を手に、僕の傷の手当てをしてくれる。そんなお母さんを指し、お父さんは言った。

「なぜなら、ぼくも以前、命を救われたことがあつてね……このひとに」

「えっ！」

「懐かしいわねえ……ふふふ」

「ふふふ、じゃあないよ。まったく。ひきかえに、だかなんだか、このひとは生死の境を

さまよう羽目になつてね……」

「え……!?!」

「ひどいのよ。このひとつたら、目を覚ましたわたしのこと、怒鳴つたんだから。」

……あなたがわたしに怒つたのは、あのときが、初めてだったわね」

「そりや怒るさ。当たり前だろう……。聞けば、この一族、代々たいせつな存在を護つてそんなことになつていゝるんだつてき。亡くなつた方も大勢いるそうだ。そして極めつげに、それを良しと皆おもつていゝるつていゝね……」

「そ、そんなんですか……!?!」

「護る一族だかなんだかしらないけど、こまつたひとたちさ。護られるほうはたまつたもんじゃない。こつちの身にもなれつて話だよな。……あんな気持ち……」

「……!」

「と、いうわけで、ぼくは君を責めるつもりなど、毛頭ない。むしろ、申し訳なく思う。娘の行動が結果的に君を、ものすごく苦しめて……つらかつただろう?」

「……ぼ、くは……」

「……まつたく……ほんとうに……、馬鹿な、娘だ……」

一筋の涙がお父さんの頬を伝う。

「……く……つ……!」

そうして、僕も泣いた。涙があふれて、とまらなかつた。

「……恥ずかしいところを、みせてしまったね。すまない」

「い、いえ、こちらこそ……。すみません」

「来てくれて、よかつた。実は、ぼくたちは君に言っておかなければいけないことがあるんだ」

「なんででしょうか？」

お父さんは、目を伏せ、僕に告げる。

「……娘のことは、忘れるんだ。気にせず、君は自分の人生を生きなさい」

「なっ!？」

「そう。貴方には、貴方の人生がある。娘に縛られる義務は……ないわ」

「……いやです」

「……。さつきも言ったが、君が責任を感じる必要はまったくない」

「無理です……」

脊髄反射の如く、言葉が勝手に溢れ出す。

「そっだ……できない!」

そんなこと、僕には不可能なんです」

気づいたら、ただ、叫んでいた。

「彼女を忘れて生きるなんて、そんなの……僕にとっては、死んでいるも同然だ!!」

「花京院君……」

「……すみません。でも、それだけは……お願いします。」

「どうか、僕から……彼女への想いを、とりあげないでください……」

「……」

暫しの沈黙のあと、お父さんはほつりと呟いた。

「……だよねえ」

「……は？」

懐から一通の封筒を取り出し、彼は続けた。

「ここに娘が書いた手紙がある。君たちには見せるなど書いてあるので、見せるわけに

はいかないが……おおまかに、内容は家族への感謝と、謝罪。それと、『たのみごと』だ」

「い、いいんですか？ 僕が聞いても……」

「言うな、とは書かれていないわ」

「……」

お母さんはしれつとそういった。おもわず絶句する。

「その、『たのみごと』のひとつめは、『君と仲間たちを責めないでほしい』ということ。

「これはいいんだ。もとからそんなつもりないからね」

「むしろ、みなさんには旅ですごくよくしてもらったみたいで。特に、花京院君、貴方には。とても楽しくて、幸せな旅だった……って。むしろ感謝しても、しきれないわ。あの子が、こんなにだれかということを楽しんだのは、初めてだったし……」

「……」

「問題は、もうひとつの……」

『君に、自分のことは気にしないで、忘れるように言ってくれ』というものだ」

「え……!?!」

「きつと、貴方はやさしいから、ずっと自分を責めるだろうと。」

それはどうしても、耐えられない……って。

貴方に自分の存在なんか縛られないで、幸せになってほしいからって」

その一言により『コロソ承太郎』の推理は、見事的中していたことがわかったのだ。た。

「可愛い娘のたのみだからね。一応言っただけ……無理だよなあ。本当に、馬鹿な娘だよ……」

「あのひとは……。ほんとに、まったく……」

もつと、自分のことを考えろって、いったのに……。

こんなときまで、やっぱりひとのこと、ばかりだ……」

また、目の前がぼやけてきてしまう。

「花京院君、ありがとう。」

娘を、そんな風に想つてくれたこと、本当に感謝しているよ」

「あなたに出逢えて、あの子は、だれよりもしあわせだったはずよ。本当にありがとう。それだけで、もう、十分。あなたはまだ、若いわ……今すぐに、とは言わないから、ゆっくり……年月をかけてでも、自然に思い出にしてくれたら、それでいいんだからね」

やさしい、僕のことを心底考えてくれている……そんな言葉たちに包まれる。この親にして、この子あり。まったく、その通りだ。

しかし、それをのむわけには、いかない。いや、のむ気なんて、さらさらなかった。

「僕も、お二人に伝えておきたいことがあるんです」

「なんだい？」

「……過去形に、しないでください」

彼らが息をのむのがわかった。わかつていた。が、やめるわけにはいかなかった。

「僕は、あきらめません！ 彼女の目を覚ます方法を、みつけてみせます。雲を掴むような話で、手がかりもなにもない。いつみつかるか、わかりません。でも、僕は、決して、あきらめない。たとえ、何年、何十年かけても、必ず……！」

「しかしね、花京院君……」

「あの娘は、それを……」

「これは、彼女のためでも、なんでもない。僕自身のためなんです！ だから！ ……お父さんとお母さんだって、ほんとうは……！」

「そうだ。押し殺していることはわかりきっていた。それをこじ開けるのが彼らにとつてどんなにつらいことかも。それでも。」

「どうか……、御願います……！」

「……」

長い長い沈黙。

そのあとで、ゆつくりと、ふたりは顔を見あわせ、微笑む。

その目には、光るものが浮かんでいた。

「……そうか……そうだね。ありがとう。期待して、いるよ」

「ごめんなさい……ありがとう。ほんとうに、しあわせものだけ、あのこ……」

目頭を拭いながら、お母さんは、加えていう。

「でも、貴方自身の生活を犠牲にするのだけは駄目。」

学校や他のことをちゃんと優先したうえで、ね。それは約束して？

あと絶対に、危険なことはいらないで。

何かあつたら、貴方の御両親に申し訳ないし……それに、あとで、仁美に怒られちゃう」

「ふっ……そうですね。わかりました。お約束します。ありがとうございます」

「それでは……今後の詳細はまたご連絡させていただくことになると思います」
「わかった。すまないが宜しく頼むよ」

玄関先、御両親に見送られていると再び低い音で辺りに声が響く。

「……おい」

「あ……」

いつのまにか、お兄さんが柱の陰に立っていた。

「さつきは、すまない。……わかつては、いるんだ……」

「……はい」

頷く。こちらこそ、わかつていた。無理もないことだ。

——うーん、どうなんだろうね。自分ではわからないなあ——

いつか教えてあげたいものだ。お兄さんとの仲を訊ねた時、そんな風に何故だか渋い表情でうつむいた彼女に。

残念ながら僕には兄弟姉妹はいない。羨ましいな、と思つていると。ぼつりと彼は呟いた。

「俺も……探す」

「……え？」

「所詮、俺は一般人にすぎない。できることなどたかがしれている。そうかもしれない……」

ゆつくりとこちらに歩みを進めると、ざつと一步踏み出す。

「が、しかし！ 諦めん！」

たったひとりの妹だ……諦めてたまるか！

俺も俺なりに力を尽くす。だから……!!」

そして、まっすぐな視線で僕を見据える。

「……妹を……あの馬鹿を、ぜったいに叩き起すぞ！」

「はい、必ず……！」

彼女とそっくりおなじ、美しく輝く光を秘めたその瞳で。

「じゃあ、これで、手打ち、ということだ」

「……ちっ」

そうして、僕が差し出した手を、お兄さんはがっしりと握り返してくれた。その手は

とても熱く、力強さに満ちていて……

千人の味方を得た、そんな気分だった。

「ふふ、仲直りの握手……だね」

「よかった、すっかり仲良しね！ ふふ」

そんな僕らにお父さんとお母さんが似たような顔を並べて言う。さすが夫婦ということろか。

「な、なに言つてんだよ。そ、そもそも親父とおふくろだつて悪いんだろ!? 俺が独りでどれだけ……つて、聞いちやあいねえ……」

「あ、でもあんまり二人が仲良しだと、仁美妬いちやうかも！ もう！ 兄さんだけですわいッ！ つて。そういうえば、あつたわよね！ ほら、あの娘が飼っていたハムスターが……」

「ああ。世話をしている本人にはちつともなのに、遊んでいるだけの義経にばかり懐く！ つて、あれだろう？ 懐かしいなあ。あのときは泣いて拗ねて、大変だったなあ」

「へえ……!」

（なんだそれは……そんなの、かわいすぎるだろう……）

とつてもそれらしい、幼い彼女の姿を想像して、つい口の端が緩んでしまう。

彼女もここにいたら……

同時に感じてしまったそれをどうにか胸の奥に押し込めながら。

「うるせえよ！ 一つの話だよ！ ……つたく！ おまえもなんか言つてやれ！」

そう言つていただけたので、言つてやることにする。

「だいじょうぶです。御心配には及びません。」

お兄さんは確かに素敵な方ですが……僕は娘さん一筋なので」

「花京院、おまえもか!! ちげーよ! そういうことじゃあねーよ! ハムスター扱いすんじゃあねえつて……ああもう……くそ、なんで俺の周りこんなやつらばっかなんだよ!!」

そして、このお兄さんもどうやら非常にからかいがいのある人のようだ。さすが兄妹。

「ふーん、そうなのかい? それはいい心掛けだ」

しかし、そんな僕にむけて、お父さんがにやりと笑う。

「でも、お嫁には、やらないよ。……まだ、ね。ふふふふ……」

「うっ! い、いやその、僕たちは、ま、まだ、そういう関係では……」

「まだ……ね」

「……はい。まだ」

「もう！ なに言ってるのよ、お父さん！」

そして、お母さん……

「できすぎているお婿さんじゃない！ あの娘にはもったいないわ！」

あんなボケ倒した、貧乳な娘をもらつてくれる……そんな奇特でこんな素敵なひと、もういないわよ！」

「い、いえ……」

（な、なんだろう……なんか、やっぱりちよつとずれて……）

天然もどうやら遺伝するようだ。確実に由来はこの方な気がする。

「それに、彼女のは実際のところ、そんなに貧しくなんて……ハッ！」

つられて、うっかり口がすべる。

「……実際……？」

「うっ!？」

「……ほう？ 花京院君、どうして君はご存知なのかな？」

うちの娘の、あれ、が、実はそんなに貧しくもない……というのを……」

まずい。お父さんの戦闘力の急激な上昇を感じた。まずい。

「お、おやしツ……！ ちよ！ おちつけ!!」

「ち、ちがうんです！ けっして意図的というわけではなくッ！」

その、幸運な偶然が重なって、というやつでツ……!!

と、とにかく……すみませんッ……!!」

「ぷっ……!!」

「くっ……!!」

「ふっ……冗談だよ」

(はあ、はあ……殺気で死ぬかと思った。ほ、ほんとに冗談か?)

お父さんから、さつき一瞬、『なにか』が見えた気がしたけど……

気のせいだよな……?)

「……よかったよ。娘の『相手』が、君みたいな男で。

もしも、誰かに娘をやらないといけないとしたら……やっぱり君がいいな」

「お父さん……」

「また……来たまえ。ひとりでも。もちろんふたりでも」

「すまん、本当に……」

「いつでも待つてるからね」

「……はい。またきます」

こうして僕は、彼女の実家をあとにした。決意を新たに。

(仁美さん。あなたのご家族は……あたたかかったよ。

あなたが、あなたである理由……)

彼女の、ルーツ。

それが、なんとなく、わかった気がした。

*

*

*

「……非常にきもちのいい、素晴らしい青年だったね、花京院君は」

縁側、ひとり冷たい夜風に吹かれ佇む妻の背中をシヨールで纏いながら声をかける。

「ええ。さすが我が娘。見る目だけはあるわね。ボケていて胸は貧しいけれど」

「……そこは譲らないんだね、きみは」

苦笑する。彼女は僕から再び背を向けると、冴えた空気により一際輝きを増す満月に目を遣りながら、ぼつりと吐露する。

「ねえ、あなた？ わたしは、ひどい母親ね」

「どうしてだい？」

「あの娘のこと……わかっていたのに、止めなかった」

「……」

「止めたかった……でも、止められなかった……」

俯く彼女の美しい金色の髪が月明りを反射し輝く。

「電話で聞いたあの娘の声、すごく、晴れやかで……」

——母さん、私も、わかったよ。

母さんや、おばあちゃんや、ご先祖様……みんなの、きもち。

帰ったら、聞いてね。

話したいことがたくさんあるよ——

「……とめられる、わけがなかった!」

闇夜に慟哭が轟く。

「それが、自分のしあわせ。そう思って自分もしたこと……」

それに、母親ですもの。あの娘のきもちは手に取るようだった。

だから、それが、あの娘のしあわせだって、そう、じぶんにいいきかせて……ッ」

涙と共に、とめどなく堰切ったように溢れ出す。『一番の理解者』。それゆえの深き、

苦しみと哀しみが。

「でも、つらいものね……こんなに……」

ごめんなさい……こんな……あなたに、だまって……」

そつと、ふるえるその肩に腕を回し包みこむ。

「わかっている、わかっているよ。」

「ぼくこそ、すまない、きみひとりにそんなに……抱えさせて……」

「あなた……」

「でも、ひとつだけ。ぼくたちは、まちがっていた。教えられたね。息子に……彼に」

「ぶつけられた、熱く、まつすぐな想い。久しく忘れていた碧く美しいそれに、分別、理解、諦観……そんな言葉で封じ込めていたものを目覚めさせられた。」

「諦めては、いけなかった。まだ、諦める必要なんて、なかったのだ、と。」

「……信じよう。彼らを」

「……ええ」

Brotherhood

運命に導かれ集結した、スターダストクルセイダース 星屑十字軍。

大きすぎる犠牲を払いながらも、宿敵D I Oとの闘いに終止符を打った。

それからおよそ、ひと月が経とうとする頃だった。

あの日以来、主がいなくなつた『館』。それを全員で調査中のことだ。

街へと密かに繋がる通路までも存在する、広大な地下空間、仕掛けの施された多数の隠し部屋……その内実は外観よりも数段複雑怪奇で、全容の解明は至難を極めた。

そんな中、地下、奥深くの部屋で、承太郎とジョセフはあるものを見つけた。

絵画や書架により存在を巧妙に隠された、金庫。その、さらに鍵のかかった、煌びやかな箱の中にそれは存在した。

「これは……？ 弓、それに、矢……か？」

「なんじゃ？ これだけやたらと嚴重じゃが……」

「ツ?! おい、じじい！ これを見ろ」

承太郎が一緒に入っていた本を開いて差し出す。

「どれ？ ……」

古びた羊皮紙には驚愕の事実が刻み込まれていた。

「な、なんじゃと!? こ、これはッ!」

「ああ。あいつら、なんでもん持ってやがる……」

「ほ、本当に……? お、恐ろしい……! こんなものが存在するなんて……」

DIO、奴らの目論んでいた、悪の所業。まさにそれに相応しい。相応しすぎる『道具』。

背筋を戦慄が駆け巡った後、彼らの脳裏に同時に浮かんだのは同種の嫌な予感だった。

「はっ! おい、このこと、花京院には……」

「言えるか。こんな……知ってしまったら、あいつは……」

「……僕が、どうかしたかい……?」

「ハッ!」

噂をすれば、ではないが、当人がいつの間にか背後に佇んでいた。

「何かみつけたんだな? どうして隠すんです? 教えてくださいよ!」

「ち、ちがう! これは……」

「『それ』ですか……」

洞察力溢れる彼の慧眼がぎらりと光る。『喪失』による深く濃い哀しみのヴェールで縁取られてしまったその瞳が。

「いかん、じじいー!」

「あつー!」

承太郎の制止虚しく、ジョセフが咄嗟に隠そうとした『それ』を、男はその能力でその手に収める。誰も感知すること能わぬ、静の力で。

「その気になった、僕と法ハイエロファント 皇に把握できないものなんてない。甘くみてもらっては困るね……っ!? な、んだと……ッ!?!」

その目が文字に落とされた刹那、碧色に輝く触手が、黄金の弓矢を掴む。

そして、主の姿も消えていた。

「なッ!」

「しまった! 待てッ!」

「待つんだ、花京院ッ!」

書にはこう記されていた。

弓と矢は、求める者の前に、現れる。

引き寄せる。力を求める者を。

そして、選ぶ。

唯、運命に従つて。

矢で射られたもの。

行き着く先は、二つのみ。

死。

もしくは……

それを、免れたもの。

それは、選ばれしもの。

目覚めるだろう。

力を、もつものとして。

*

*

*

(……これを、使えば……)

(スタンド使いを……創り、出せる……?)

(……『治す』……スタンド使いも……?)

気がつくくと、僕は弓と矢を掴み、駆け出していた。

「……これさえ、あれば……」

(……病院……。ここだ……。ここなら……)

幽波紋は本体の精神……心のあり方を如実にあらわす。その力にふさわしい人間に
スタンド
 当たる可能性は高いはずだ。

頭の中は冷静そのものだった。そんな『確率』を考えられるほどに。

しかしその一方で、澄みきった真つ暗な闇のような感情に心の中が一面覆われていく
 のを感じた。

目的のものが、生み出されるまでに、果たして何人が……。

いくつの命が、犠牲になるのだろうか?

自分の行いが間違っていること……。

白か、黒か……なんて……

そんなことは、わかっていた。

しかし、おさえることなどできなかつた。できるわけがなかつた。

そんなこと、どうしても、よかつた。

正しかろうがなんだろうが、もう、どうしても。

彼女の目が、覚めるなら。

もういちど、逢えるなら。

あの、笑顔を、みられるなら。

そのためにならば……。

……僕は悪魔に、魂を……売ろう……

中庭に一人でいた医師をみつける。

休憩中だろうか？ ベンチでうとうとと昼寝をしているようだった。

弓を引き絞り、『標的』に狙いを定める。

「くっ……」

喉が、カラカラに乾いていた。手が、震える。

……このひとにも、家族が、いるのだろうか？

恋人は？ 親友は？

たいせつなひとは……？

おもいだす。

彼女の時が止められた瞬間の自分の、あの……

（今度は僕が……それを誰かに、味あわせる……というのか……？ あれを……？）

あんな、絶望を。

（くそ！ おもうな！ そんなこと、考えるなよ！ 馬鹿野郎！

僕は、彼女を……！ それさえ……。

他人なんて、どうでも、いいじゃあないか……くそッ!!）

——ごめん、いきなり迷惑かけるかも——

——ほ、他の人は……だいじょうぶだったのかな？——

——じゃあ、よかった——

頭の中を、旅での彼女のことばが、表情が、ぐるぐるまわる。

他人でもなんでも、できる限り、いや、それ以上のことをしても護ろうとしていた、彼女。

(……怒る、よな。やさしい……あなたは、どう、おもうのかな……？　こんな、僕を……)

(でも、それでも……それでも、僕は、あなたをッ……!!)

躊躇いを振り切ろうとする僕に仲間たちの声突き刺さる。

「ウォン!!」

「いた!　いたぞ!!」

「やめろ!　花京院ーッ!」

「はっ!!」

(もう、今しかない!　やれ!　やれよ、くそ!)

必死に矢を放とうと齒をくいしばる……

その瞬間だった。

『……させない』

僕の胸元から目が眩むようなまばゆい光が放たれる。光源は、あの『御護り』だった。彼女が、僕にくれた、あの。

「なッ!?!」

薄桃色のその光はとてもよく知るかたちになり、自分の前に立ちはだかる。

「……せ、セシリア……?」

そして、こえがきこえた……

『……だめ。させない。』

あなたに、そんなこと……ぜったいに、させない』

「ひ、とみさ、ん……?」

カラン、という音を立てて、手のなかのものがすべて、すべりおちる。

「……僕は……、僕は……! うわああああー!!」

仲間たちが、大地を踏みしめる音。

ゆつくりと僕の周りに集まる。

「……すまない。……どうか……していた……」
「……」

誰も、何も言わず、ただ、肩を叩いてくれた。

「行こう。さがすぞ。手がかりを……」

「ジョースターさん、少し彼を借りてもいいですか？」

「ああ。もちろん。頼むよ、アヴドウル」

項垂れる僕に、投げかけられる言葉。

「少し、付き合ってくれるか？ 花京院」

「……え……？」

「君に、会わせたい人がいるんだ」

庭を散歩するかのようには迷いのない足取りで路地を進む彼についていく。

途中、沈黙に押しつぶされるような思いで、僕は重い口を開く。

「……っ、僕は……」

「何も言わなくていい。わかっている。……皆」

「……」

「それに、わたしも……君の立場なら、きつと同じことをした」

「アヴドウルさん……？」

その表情にありありと浮かぶ、寂寥感。どこか遙か遠くを見ている……こんな彼の顔を見たのは、初めてかもしれない。

それ以上二の句が継げぬまま歩みを進めていくと、ある一軒の店の前で立ち止まる。

「さ、ここだ。ま、わたしの店なんだがね」

いいつつ、入り口のドアを押し開ける。天井から張り巡らされた暗幕を押し広げ奥へと進んでいくと、そこには一人の女性が佇んでいた。

「ただいま。姉者」

女性に親し気な微笑みを向けた後、僕の方に向き直る。

「紹介するよ、花京院。姉だ。」

最近、わたしが不在の間、店の管理をしてくれているんだ。

DIOを倒した今、ここも安全になったことだしな」

「そうなんです。初めまして。花京院典明といます。」

アヴドウルさんにはいつも大変お世話になっております」

そんな風に挨拶をする僕に、にこにこ笑顔を浮かべアヴドウルさんは言う。

「フフ、どうだ？ 器量良しで驚いただろう?!」

「フツ。……ええ」

加えて、どことなく神秘的な雰囲気を纏った方だ、そんな印象を受けた。

「久々に帰ってくるなり、なにをいうかね、あんたは……。」

初めまして。あたしはアイシス、という。

「こちらこそ、弟がいろいろ世話になっているみたいだね。ありがとう」

「いえ……」

「……、エジプトでの非常に日本らしい挨拶の応酬に、つい苦笑してしまう。

「……ん？」

すると、なにかに気づいたように、その視線が僕の胸元に移動する。

「どうかされましたか？」

「花京院。あんた、その首飾り……もしや、だれかにもらったものかい？」

「え!? こ、これを、知っているんですか？」

驚きとともに訊ねるとさらに驚きの答えが返ってくる。

「ああ、知っているものにも、売ったのはあたしだからね」

「ほ、本当に!?!」

「おお! なんと! すばらしい偶然だな!! 姉者は時折、様々な街を巡る露天商もし

ていてね。水晶をはじめとしたパワーストーンを扱っているんだ」

微笑を浮かべながら、アイシスさんは思い出をかみしめるよう語る。

「……よく覚えているよ。ふふ。たしかあれはアスワンだったね。あのお嬢ちゃん、あまりにそれを一生懸命みていたもんだから……、つい商売忘れて、タダ同然で譲っちゃったんだよ」

「そ、そうなんですか……」

改めて僕の顔を凝視するとアイシスさんはしみじみという。

「そうかい。あんたがお嬢ちゃんのこと……。元気かい？ あの娘は。会いたいねえ。こっちに来ていないのかい？」

「あ、姉者……！」

慌てるアヴドウルさんを制し、どうにか口を動かす。

「……彼女は……ここには……」。

いまは……『とおく』に……います」

それを聞き、ぼつりと呟く。

「……そうかい。やはり、か」

「……？ どういう、ことですか？」

「おしえてやったんだ。『それはたいせつなひとを護る石。あんたがそばにいないとき

でも、それはそいつをずっと護ってくれる』……ってね。それを聞いたときのあの娘の表情が、なんとというか……印象的だったから」

「そう、ですか……」

あんなときから、もう、彼女は『こうなること』を予期していたのだろうか。痛みと慈しみの入り混じった複雑な感情を抱きしめながら『御護り』を手にとり、じつとみつめる。

「おや？　紐に通している……花型の、それは？」

「ああ、彼女の……イヤリングです」

せめて、そばにと。そう願って、連ねた。

すると、驚いたように、ならんで輝くそれらと僕をまじまじとみつつ、アイシスさんは訊ねる。

「……あなたがあの娘にあげたものかい？　それは」

「はい。そうですが……？」

意図が良くわからなかったが、とりあえず事実と伝えると、重ねて問われる。慎重に、言葉を選ぶように。

「『もういない』んじゃないやなくて、『とおく』には、『いる』んだね？　そして、あなたはそれを、まだつけている……ってことは……そういうことでいいかい？」

いうまでもないことだ。ただ、頷く。

「……じゃあ、だいじようぶだ。安心しな」

アイシスさんは僕の眼を暫し見据えた後、強く頷き返すと胸の中心の赤い石を指差した。

「その石は、『ガーネット』。あの娘に聞いたかね？ 『十字軍』（クルセイダース）が、遠征の時に持って行ったって」

「ええ。うれしそうに話してくれましたから……」

おもいだす。あの……しあわせな……ときを。

「とらえようによつては……と思つて、敢えて言わなかつただけだね。」

実は古い伝承で、ガーネットは大切な人間との別れの時に交換しあうものだったそうだ。『再会』の誓いとして」

「え!？」

「持つ者に変わらぬ愛情……不変の愛、永久の愛と幸福をもたらすといわれる、深い絆の石……大切な人間との愛情を深める『一途な愛』を象徴する石なのさ」

アイシスさんは続けた。

「そして、ガーネットはネガティブなエネルギーを退ける……」

破邪……古くから護符として用いられてきた。

たとえ人生の暗闇にあらうとも、忍耐力、精神力を強め、心の目を開かせる。

洞察力を高め、物事の本質が理解できるように促し、変化をもたらす。

そして、成果の実り……夢や願いを達成させてくれる。

……いまのあんたにぴったりだね」

「破邪……」

思い当たるまでもない。先ほど身をもって実感したばかりだった。弓矢によって引き起こされた内なる悪魔。その邪悪な誘惑からこの石は護ってくれたのだ。僕を。

「そうか。僕は、また……」

護られて、ばかりだ。いつも。僕は、彼女に。

護りたかったのに。だれよりも。僕が、あなたを。

胸に巣食う己への嫌悪感が、深い後悔が全身を侵食していく。

それ以上言葉を発することもできず奥歯を噛みしめ俯いていると、ぴしやりと放たれる声で我に返る。

「花京院、違う。それは、違うぞ」

アヴドウルさんが首を横に振る。

「勘違いしている人間も多いんだが……石の力は万能じゃあない。持っているだけで幸運になれるって？ そんなわけないじゃあないか。占いもそうだが……これらはあく

まで背中を押してくれたたり、きつかけを与えるものに過ぎない」

それにアイシスさんが同調する。

「だいたい人間なんて、儂くて弱くて、揺蕩う生き物さ。道に迷いそうになったとしても、それでもちやんと大切なもんを選び取ることができたならば……それはすべて自分の力。石はそれを助け、導く。それだけさ」

「……たいせつな、もの……」

反芻する。現れてくれた、久方ぶりにみた美しい彼女の分身。きこえた愛しい、変わらない澄みきったそのこえ……想いを馳せていると、話はそれだけにとどまらなかったらしい。目の前をひらひらと動くアイシスさんの手に気付く。

「で、話が逸れちゃったけど……わかってるかね？」

その耳飾りの花の石……それもガーネットだよ」

「え!? でも……」

「ああ。ガーネットは他に混じるものによって色が変わるからね。

そのピンクの石はローゼライトって種類の……これもりっぱなガーネットさ。

すごいね。あんたら。知らずに贈り合うとはね……」

天を仰いだあと、丸くした目をゆっくりと細める。

「あきらめないで、がんばりな。心配しなくていい」

そして、僕にしつかりと告げた。

「花京院、あんたはかならず……またあの娘にあえるよ」

「っ！ はい……！」

『御護り』をぐつと握りしめる。ほのかな、でも確かなぬくもりと輝きを手のひらに感じ胸が熱くなる。

「……姉者。そこでひとつ相談があるんだが」

そこで、ほんと、肩に手を置かれる。

「占ってやってほしいんだ。この男の、『さがしもの』の在処を」

「アヴドウルさん……」

「姉者は凄腕の占い師……というかわたしの師でもあるひとだからな。自分でも占ってみたのだが、君たちふたりに関わりと、思い入れが深すぎるからか……どうしても上手くいかなくてね。というわけで姉者、御願ひしてもいいだろうか？」

「もちろん、いいよ。さ、そこに座りな」

勧められた、机を挟んだ対面の椅子に腰かける。

「では花京院、ねがいを中心に強く想いながら、その水晶をみなさい」

「はい」

いわれたとおり、目の前の台座に鎮座した、すきとおる球体をじつと見る。

吸い込まれてしまいそうな感覚に包まれる。

「……美しく飾られた宝石箱が、みえる」

暫しの沈黙のあと、ぽつりぽつり、アイシスさんは言葉を紡ぎ始める。

「パズルがついているね。……欠けている……ピースが、ふたつ。鍵となる……おなじ星の輝きを放つ、それらのかけら……その在処は……」

おもむろに人差し指を天に掲げる。

「ひとつは、あんたたちふたりにもつとも関わり合いが深い国に」

加えて、中指を。

「もうひとつは、ミッシングリンク……失われた連環、見えない繋がり。一見無関係に見える、実はある共通項により繋がっている……そんなふうには、彼女と隠れた所縁がある国に」

「……ふたつ……の、ピース……」

「……と、こんなところか。すまないね。いまいちぼんやりとしかみえなくて」

「いえ！ なんの手がかりもなかった今までに比べたら！ ありがとうございます。考えてみます」

礼をいいつつ、立ち上がる。

「ありがとう、姉者。また連絡する」

「ああ、いい知らせを待っているよ。それまで帰ってこなくていい」

「がはは！ 相変わらず手厳しいな、姉者は！」

「ふん、なにをいうかね。この放蕩弟が。」

ま、気が済むまで、好きにやんな」

「……ありがとう。すまないが、頼むよ」

扉を押し開け、店を出ようとする僕らにアイシスさんは付け加える。

「そうそう。あとこれも、伝えておく。はつきりと出ていた……」

「なんですか？」

「昨日の敵は今日の友。以前の敵対者が助言をくれるだろう。」

そして、昨日の友は今日も友。仲間があんたに幸運をくれる……」

「……星々がひとときに集結するとき、『箱』は開くだろう」

アヴドウルさんとともに急ぎ仲間の下に戻ると、僕達は早速それを報告した。

「ふーん……ふたつの国……仲間との協力……ね」

すると、この男が珍しく深刻な面持ちで呟いた。

「……なら、オレはそろそろ、国に、フランスに帰ることにするぜ」

「ずっと、考えていたことではあつたんだ。

例の矢も、まだ何本かあるらしい……ほつとくわけにはいかんだろ？

それに関する調査も、こいつの『さがしもの』も……

こうやって固まつて探すより、その方が効率もいいはずだ」

そんなポルナレフの主張は、……もつともだった。

そうして暫時の別れの日。それは、あつという間にやってきた。飛行場で旅立つ男を見送る。

「……時間だな」

「ああ」

「元気でやれよ」

「くれぐれもひとりでも無茶をするんじゃないぞ！」

「わーつてゐるって！ 定期的に連絡入れるからさ」

一步、二歩と進んだところで振り返る。

「あばよ！ しみつたれたじーさんとそのケチな孫！」

「それで、いつつもいつつ暑く暑い男に、くっそ生意気な犬!!」

「……それと……ふっ！ なんつーかおしてんだよ！」

僕の方へと視線を投げる。

「またどーせすぐ会えるだろー？ ……つたく……。」

おにーちゃんとお別れが、そんなな寂しいのかな？」

「……そんなはずがあると思うか？ せいせいしている。真新しい、買ったてのトランクスに初めて足を差し入れた……どう見てもそんな清々しい表情だろう。おまえの目は節穴か。……あのひとと同じだな」

「……へっ！」

駆け戻つて来て、僕にいつかのようにヘッドロックをかます。

「いいか？ おめーのその、しけたつら、オレが絶対もとに戻してやる！」

超GOODでHAPPYなNEWSを兄ちゃんが必ず、届けてやつからよ！

首長くして待つてな!!」

「Au^オ r^ル r^ヴ e^{ヴォ} v^ワ o^ワ i^{ール} r^ル ・ a^ア b^ビ i^ビ e^ビ n^ビ t^ァ ・ t^ト, f^フ r^レ ・ r^レ e^ル!! あばよ！ また会おう

ぜ！ 兄弟！！」

「……おまえみたいな兄、持った覚えはない……って、ずっと、言っているだろう……!!」
腕を、払いのけつつ言う。

不覚にも少しにじんできました視界を悟られることのないように。

「……へっ！ すなおじゃねーやつ!!」

「フツ……またな、兄弟!!」

「Y E A A H !!」

そうして、僕達はハイタッチし、リズムよく手を合わせていく。

いつかの……あの、深い海の底でしたのと同じように。

こうして、僕達は拠点を各々の地に移し、調査を続けることになった。
だれかになにかあつたら世界中どこでも、すつとんでかけつける。
もちろん、そんな風に互いに強く誓い合いながら。

C a l l i n g

ゴールデンウィーク直前……しかしながら曇った心と裏腹の卯月晴れ。そんなある日のことだった。

「あの、わたし、花京院君のこと、好……」

今回は昼休みの屋上。

「申し訳ありません」

どこだつて同じだ。時刻も、場所も。

これが放課後体育館の裏だろうが、早朝の校長室だろうが。

「は、早っ！ え、えっと、どうして？ 彼女はいないって聞いて……。あ、あの、お友達からでも……」

答えなんて、決まっている。誰であろうと、同じなのだ。

「いえ。僕には……想う、ひとがいるので。貴女の御気持ちには、どうあつても御応えすることはできません」

相手は、あなたではないのだから。

変わるはずがない。変わつてなど、くれない。

「そ、そうなんだ……」

ひきつる表情。傷付けてしまったのだろう。

「……わかりました。ごめんなさい……」

「こちらこそ……」

うつむきがちにその人はこの場から去っていく。

「……はあ」

共通点は、クラスのみ。特段会話を交わした記憶もない。よって僕には何の罪もない……はずだ。それでも罪悪感はずえず溜息が漏れる。

すると僕の内心に応えるかの如く、屋上の出入口がある建物の上から声が降ってきた。

「……あーあ。つたく、罪な男だぜ」

馴染みのあるそれに心臓が飛び跳ねて停止しそうになる。

「うわああつ!! じ、承太郎!? き、聞いてたのか!?!」

彼は長身をひらりと翻し僕の隣に舞い降りると、心外だとばかりに……いや、撤回する。そうでもないかもしれない。いつものようにぶつきらばうな調子で苦言を呈す。

「聞こえたんだ……昼寝の邪魔しやがって」

「というか、何故君がここに……?」

「願書の関係でな。書類を取りに来た。いい天気なんで、在学中を懐かしみつつ、一眠りしていたというわけだ」

あの旅の後、春に高校を出席日数ぎりぎり、なんとか無事卒業した承太郎は、今秋米国の大学を受験予定だった。まあ、実のところ、進級関連については、僕も人のことはまったく言えない身なのだが。

『後始末』がひと段落し、再び僕らが日常に戻る……登校することができたのなんて、すでにほぼ学年末だった。よく考えたらDIOに肉の芽で意識を乗っ取られた転校前あたり、要は秋以降、ほぼともに授業を受けていない我が身に降りかかる怒涛の補修&追試攻撃（いや、実際のところ恩赦なのだから感謝すべきなのかもしれない）を華麗に次々とパスした僕を誰か褒めて欲しいものだ。誰の為かって、自分の為であるのだが。

「はあ……そうかい。そいつは失礼したね」

呑気に欠伸をする男に向けて不服ながらも一応の謝罪の辞を述べると、彼は帽子をかぶり直しつつかんなことをいう。

「ふん……べつに、いいんじゃないやあねーのか？ そんなに操を立てねーでも。そもそもぐーすか寝てやがるあいつが悪い」

「……。残念ながら、興味ないね。全くもって。……じゃあな」

背を向ける。

「……おい。待て」

歩き始めようとする僕になおも飛んでくる低い声。

「……なんだよ？」

首だけで振り向きつつ返事をする。

「冗談だ。すまん。そんなに怒んなよ」

「……。はあ、わかつているよ。そんなこと」

「いいや、目がマジだった。つたく、おまえ、あいかわらず、あいつのことになると弱い
のな」

「……うるさいな」

忌々しくも口の端でちいさく笑うと、男はさらに続ける。

「今日放課後、うちに来れるか？　じじいが来ていてな。おまえに会いたがっている」

「ジョースターさんが!?　そうなのか！　もちろん、お邪魔させてもらうよ」

そこで、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴る。

「おっと、じゃあまたあとで」

「おう」

階段へ続くドアを開ける。東の間の別れの直前、届く眩き。

「……つたく、罪な女だぜ」

「ふっ……」

まっただよ。

そんな届くはずのない僕の嘆きは閉まる扉の音に遮られ、消えた。

教室に戻り、授業を受ける。5限目、6限目と、滞りなく終了し、さて、空条邸に向かおうかと立ち上がったところで声をかけられた。

「おい、花京院。ちよつといいか?」

クラスメイトの木村だった。彼は気さくかつ陽気でおちやらかした性格をしており、軽率な行動が目立ち失敗も多いが周囲にからかわれつつ、なんだかんだでクラスの人気者。そんな人物だった。今は故郷のフランスにいる、あの『電柱頭』彷彿とさせるような。最近なぜか僕に話しかけてくるが多く、不思議に思っていたのだが。

「なんだい?」

「()じやあ、話せねえ。少し、顔貸せ」

「申し訳ないが、今日はこれから用事があつてね。またにしてくれるかい?」

「……時間はとらせねえ。頼む」

そんな彼が、今日はめずらしく真面目な顔をしている……いや、怒っている？
溜息と共に、伝える。

「……仕方ない。手短に頼むよ」

「……で、どうしたんだい？」

連れだつて校舎裏に移動したところで改めて問うと、木村は逡巡した様子を見せつても、重い口を開いた。

「……なんで、断つたんだ？」

「は？」

「決まつてるだろ?! さやかちゃんのことだ!」

「さやかちゃん……? ああ……」

昼休みの……そういう名前だったのか。それすら知らなかった。そんな我ながら若干見当違いの事柄を考えているうちに、男は息を巻く。

「花京院、おまえ彼女いないんだろ? いいじゃねえか! なんでだよ!」

先ほどのあの人が、なぜ僕に恋人がいない（いないんじやあなく正確には眠っているだけだ。……と、いえたらいいのに）ことを知っていたのか、疑問に思っていたが、納

得した。そういえばこいつがしつこく聞いてくるので「いない」とだけ言った覚えがある。

「……君には、関係ないだろう」

そうだ。そもそもこいつに対しての説明義務など全くない。……はずが、男は追撃を仕掛けてくる。

「想い人ってなんだよ?!」

「……」

(しつかりあの人から聞いているんじゃないか……)

そういえば二人して五限目の授業を欠席していた気がする。

いつたい、なんだというのか……。

(……まあ、なんか、わかっってきたけど)

「誰だよ!? クラスのやつか?」

そんな僕をよそに彼は追及を続ける。

「さやかちゃん以上の女の子なんていねえ! 付き合ってみたら絶対おまえも好きになるって! すっげえいいこなんだから!」

(おまえ『も』ね。ああ、やっぱりか……。なんだよ、こいつ……)

どうしたものか、対処を考えていると、目の前の男は衝撃的な言葉を吐いた。

「いるってんなら、連れてこいよ！」

「……ッ！」

呼吸が、止まりそうになる。まるで深海にテレポートしてしまったかのようなだった。包み込まれる。真つ暗な感覚に。

「……」

「な、なんとか言えよ！」

必死に感情を抑えつつ、懸命に口を動かす。

「今は……無理だ……」。

……彼女は……、……夢の国、にいる。……いや、氷の国……かな……？」

「なんだよそれ！ ふざけんな！」

「……ふざけてなど……いない……」

(……冗談だったら……、……どんなに……)

……連れてこられるなら……、……どんなに……)

とおい……何処からなのかも定かでない光。つよければつよいほど、つくりだす影はふかく、くらく、ぐるぐると自分を取り巻いていく。

「……もう、やめて!!」

すると悲鳴のような甲高い一声が場の膠着を切り裂いた。

「ハッ！ さ、さやかちゃん!？」

さつきから何者かの気配を感じると思っていたが、例の、さやか嬢のものだったようだ。

「やめてよ！ なんなのよ！ そんなことしたって、わたしが余計みじめになるだけじゃない！」

「うっ……………」

「木村の…………バカーツ！」

「あっ！ ま、まって…………！ さやかちゃん!!」

涙ながらにそんな捨て台詞を残し、さやか嬢は駆けていく。

そして、この馬鹿はというと、さらに馬鹿なことを言いだした。

「…………花京院！ 何してんだよ！ 追いかけるよ！」

「はあ？ なんで僕が…………」

木村は泣きそうな声で続けた。

「なんだよ！ いいじゃんかよ！ ちくしょう！ ただ…………彼女に、幸せになつてほし

いんだよ。たのむよ…………」

声をつまらせながら言う男にどうにか訊ねる。

「…………君は、君の気持ちを、伝えたのか？」

「っ！……そんなこと、できるわけないだろ！ 無理って、わかっているのに……オレは、あきらめるしかないのに！」

(……なん、だと……?)

「オレじゃあ、ダメなんだよ……おまえじゃなきゃ……！」
項垂れる木村。

「……いいかげんにしろッ！」

そして、とうとう僕の感情は爆発した

「なにが、あきらめるしかないだ！」

なにが、無理ってわかっているだ！

ふぎけるなど……? それはこつちの台詞だ！」

一度決壊したそれは、留まることを知らなかった。

「追いかけたら、つかめるかもしれないところに、いるのに……。」

僕が君なら、闘う前からあきらめるなんて、しない。

ぜったいに、誰にも、譲らない……。」

「……いいじゃないか。君は伝えられるだけ……。羨ましい、かぎりだ……。」

「花京院……。」

「まあ、そもそも僕には関係ないことだ。君の自由さ。じゃあ、失礼するよ」

(ああ……余計なことを、言ってしまった……)

重苦しい気分を抱えたまま校舎の角を曲がったところで、またもやなじみのある声が聞こえた。

「よお……お疲れだったな」

「うわああつ！　じよ、承太郎ツ!?　また聞いていたのか?！」

指でキーホルダーをくるくるまわしながら彼はなんてことないことのように答える。

「おふくろに買物頼まれたんでな。車だし、ついでに迎えにきてやった」

「そ、そうか。ありがとう。しかし……暇なのか?　承太郎……う?」

なんたるデジャヴ。本日二回目。この親友の神出鬼没っぷりには本当に驚かされてばかりだ。

「まったく、なんだっていうんだ……まいてしまうよ、本当に……」

駐車場に向かって、並んで歩く。

「おい……」

「なんだい?」

「……。泣くなよ?」

「……。泣くかよ」

「そうだ、涙を流す理由など、ない。」

「僕だって、伝えてやるんだからさ。いつか、ぜったいに」

「……。ああ。そーだな」

「承太郎が僕の背中をばしつとたたたく。」

「……。つたく。やつぱり……。なんつー罪な女だ……。あいつは……」

「ふつ……。ほんとうにな……」

連休明け、教室のドアを開けると僕を待ち構えている人物がいた。

「おはよう！ 花京院！ そして……。すまん!!」

「えっ？ あ、ああ、木村か。おはよう。いや、もういいよ。別に」

「むしろほじくり返したくもなく、固辞する僕の言葉も聞かず、やつは続ける。」

「……。本当に、すまない……。おまえの気も知らずに……。オレ……。」

「おまえの……。好きな人が……。まさか……。その、亡くなっているなんて……」

「……。はあ!! し、死んでなどいないッ！ 貴様、縁起でもないことをいうな！」

（冷静によく考えたら仕方のないことなかもしれないが、僕的には）とんでもないことを

言う勘違い野郎に、つい声を荒げる。

「えっ？ そうなの？ だ、だつてこないだの……」

「彼女は……、……事故……で、眠っているだけだ！」

「そ、そうなのか……」

「用事はそれだけか？ ならさっさと自分の席に戻れ！ ったく……」

しかし、予想に反する言葉とともに、食い下がる男。

「い、いや、ちよつとまってくれ！ その、礼を、言いたくて……」

「……礼？」

「実は……あれから、伝えたんだ。ちゃんと。おれの、きもち。

……今は無理……つて、断られた」

「そうだったのか……」

「……でも、きもちの整理ができたら、かんがえてくれるつて。

……まつてくれるか、つて。オレ……がんばるよ。あきらめない。

おまえのおかげだ。……だから……」

「……ありがとう」

「……そうか。……がんばれよ」

「ああ……」

そうして、若干の照れくささを誤魔化すように木村は言う。

「そつちも、その、早く、ええと……起きるといいな、彼女さん」

「……そうだな」

「オレも会つてみたいなあ。どんなひと？ 花京院ほどのやつがそこまで、つてことは、

さぞかし……」

「どんな、か……」

瞳をとして、おもう。

あざやかにうかびあがる、そのすがたを。

「……ふつうの人だよ。たぶん、君にとつては」

「え？ そうなの？」

「僕にとつては……、僕にだけは、『とくべつなひと』だけど、ね」

「へへっ……。なるほどね」

「フツ……」

「キスでもしてみたら？ そしたら起きるかもよ」

「……もう、とつくにした」

「なっ!? 花京院おまえつてやつは！ まさか寝込みを!? なんてことを！ このスケ

ベー」

「ち、違うッ！ 勘違いするな！ あれは、人命救助的な……その……あれだッ！」

「……プツ！ 意外と純情……」

「う、うるさいな！ 悪いか！」

結局、この後しばらく経ってからだが、件のふたりは無事、お付き合いをするようになつたらしい。

（まったく……なんで僕がこんな……。でも、まあ……）
仰ぎ、思う。

（……ありがとう、か。たまにはこんなのも、悪い気分では……ないかな。あなたのせいで、僕は少々、お節介になつてしまったのかもなあ）

呼びかける。遙か悠久の蒼に。

空は繋がっているんだもんね。そういつていた、他ならぬあなたにむけて。
（……ねえ、仁美さん？）

きこえていますか？ 僕の愛しい『眠り姫』。

Survive

居間に続くふすまを開けると座椅子にゆつたりと腰掛けて英字新聞を広げながらくつろぐそのひとをみつめた。

「おはようございます、ジョースターさん」

「おはよう、花京院」

来日された彼を囲んで、昨晩は久方ぶりに承太郎と三人で飲み語りしたのだ。

気づいたら明け方近くだった、かつ、さすがに高校生が堂々と酩酊状態で帰宅するわけにもいくまい（学校関係者に見つかりでもしたら、今度こそ停学退学、よくても反省文に追われる羽目になるだろう）。ということ、折よく連休に突入したところでもある。僕も空条邸にお世話になったわけだ。おはよう、というには遅すぎる。もう、こんにちは、というべき時刻ではあるのだが。

「どうじゃ、よく眠れたか？」

「ええ……。おかげさまで。ありがとうございます」

本当に。こんなにも深い睡眠を得ることができたのは久方ぶりのことであつた。感謝の意を伝えるとジョースターさんは一瞬目を細め、宙を仰いだかと思うと己の腹部を

さすりながら僕にこんな提案をした。

「……ううむ、ちと腹が減つたのう。ホリイもおらんし。おぬし、なんか買うのに付き合つてくれんじやろうか？」

「ああ、はい。構いませんよ。行きましょう」

「いやあ、日本の店員さんはキュートでいいのう。あの素敵なスマイルが0円というのがまた……！」

某ハンバーガーショップで買い出しを済ませた帰り道。御機嫌な様子のジョースターさんという。

「ふつ、たしか日本はお嫌いじゃあなかつたんですか？」

「昔の話じゃ。プリチーナおなごはこの国でも共通して愛すべきものよ！ にしし！」

「まったく……！」

調子がよくて、にくめない……そんな相変わらずの愛すべき様子に苦笑し、肩をすくめてみせる。

するとそんな彼がもう一言、ぽつりと付け加える。

「それに……！」

「ん？」

「日本人じゃからな。君も。……あの娘も」

「……」

「なつかしいな……」

そうして、さしかかる。

あの石段のある道に。

「……少し、寄り道をしよう。もうちよつと付き合つてくれるか？」

「……はい」

息せき切つてかけのぼつたそれを、一段一段、今度は二人でゆつくりと上がっていく。

「……」

のぼりきつたその先の景色は、『あの日』と、まったく同じで。

『なにもかわらない』ように、みえた。

「……ここで、僕は……」

「……」

「……ずっと……考えていたんです……」

目を閉じる。

「……僕と出逢わなければ……」

おもいだす。あのときを。

「そうしたら……いまも、きつと、彼女は……」

猫と遊んでいた、あの、たのしそうな……。

「変わらぬ、日常を……」

壊したのは……ほかのだけれどもない……

僕だ……と。

「……」

そのときだった。

背中に衝撃が走った。

「痛っ！ な、なにをするんですか!? ジョースターさん!!」

「勘違いするな。今のはわしがやったのではない」

「は?」

「代理じゃ。彼女の、な」

「……なっ!？」

「ほんとうに、なにをいつておるのか。おまえさんは。

出逢わなければ……か。では、そうならば……」

「……しあわせ、だったというのか? あの娘は」

「……っ……!」

息が止まる。

そのとおりだ。事実なのだから。

肯定すべきだ。認めなければならぬ。

なのに、僕の口はその言葉を、どうしても発することができなかつた。

堅く口をつぐんだままの僕の眼をまつすぐにとらえ、ジョースターさんは続ける。

「そして……花京院。おまえも、だ」

「っ!」

「そのほうが、よかつたと?」

「そう、おもうのか? ほんとうに?」

「そんなわけ……! っ……それでも……!」

決壊してしまった。堰き止められていたなにか、があふれ出る。

「……わかつていたんです！ きつと、僕は……」

なのに、気づかないふりをしていた……」

ずつと、口にすら出せなかつたそれが。

「じぶんでも、……矛盾している、と」

「彼女のことを、愛しくて、なによりもたいせつで……。でも……、ならば……！ もつと早く、帰せばよかつたんだ！ 日本に……日常、に。彼女の性格も……何度も、痛いほどよくわかつていて……いつか、こうなることなんてわかりきつて、いた……」

「僕には、覚悟があつたはずなんです。生きて帰ることができないかもしれない。だが、それでもいい。奴を倒し、誇りを、強さを、取り戻すことができるならば。……と」

「しかし、……願つてしまった。

ともに、生きて帰りたい、と……

……そして……」

「離れたら、もう、それが、最期かもしれない……

こわかつた。そんなの、いやだつた」

「……そばに……いて、ほしかつた……んだ……。

僕を……みていてほしかつた。

ただ……いっしょに、いたかつたんだ……」

「……やっぱり僕は……なんて弱い……。最低だ……」

「……」

「……」

僕の吐き出す懺悔をジョースターさんはただひたすら黙って聴いてくれた。そしてそのまましばしの沈黙が流れたあと、彼はゆっくりと語り始めた。

「……なあ、花京院よ。」

生きていく、というのは、なかなかにしんどいものじゃなあ。

……もしかしたら……死ぬよりも」

ここではない、とおくの天そらを見つめて。

「出逢いがあるぶん、別れがある。」

なにかを得るために、なにかを失う……そんなのもザラじや。

わしも伊達にながく生きとらん。数え切れんほど、経験したよ。

……なかでも……ひとつ……。

こころの中、お天道様みたいにひとときわ煌めきながら、影になつとる……そんな魂の記憶もある」

胸に手をあてながら、いう。

「あれが最期になるなんてなあ……。

なによりもたいせつな……花京院、おまえを護りたかった。

ただ、それだけじゃよ」

「……」

「……………か」

相変わらず言葉を発することができない僕をよそに、あたりをみまわし、ジョースターさんはさらに続けた。

「だいたい、おまえがそんなこといつたら、わしも同罪……いや、もつと重罪じゃ。旅の仲間として彼女を勧誘に行こうと言い出したのは、そもそもわしなんじゃからな。彼女の能力を利用しようとする……」

目を伏せて、俯く。

「にもかかわらず、結局、本来なんの関係もないはずの、あの娘だけが……。こんなおいぼれがピンピンしておるのに、な……」

「そんなこと……」

「いいや。……だが、……だから、か。決めたんじゃ。わしは生きるぞ」

そして顔を上げると、こちらにウインクをする。

「新たな目標が、できたからな」

「目標……?」

「……あの娘の、花嫁姿をみるまでは、わしは死なん。……死ねん」
「……ッ！」

「花京院、おまえも共犯だ。だから、おまえが……」

「その隣に立つて、『しあわせ』に、してやるんじやろ？」

「っ！……はい……！」

こぼれないように、空を見上げた。

景色は、やつぱり、なにもかわってはいなかった。

それでも、たしかに、この胸には吹きぬけていった。

黄金色の風が。

「……おせえよ……」

「てめえら、買い出しにどんだけ時間かかってんだよ……冷めてんじゃねーか。つたくすつかり冷たくなってしまったポテトをつまみながら、承太郎がいう。」

「いやあ、すまんすまん」

「ちよつと、寄り道、をな」

「ええ……寄り道、をね」

「ふっ……やれやれだぜ」

M a n n e q u i n v i l l a g e (前)

「じゃあ、身体に気をつけて」

「おまえもな。じゃあな」

まだ残暑も厳しい夏のある日のこと。いつもどおりそっけない言葉を残し親友は承太郎行ってしまった。

彼は見事、希望するアメリカの大学に合格した。留学……というのも元々がハーフかつ祖父がニューヨーク在住の彼にとっては違う気もするが。

今日はそんな彼が米国へ発つ日であった。飛び立つ航空機を見ながら、思う。

(……やはり、寂しいものだ)

それぞれに新たな道をゆく。あたりまえのことだ。プラスな意味の別れではあるが、寂寥感^{じりょうかん}は否めなかった。

(ずっと、ひとりだったのにな……)

こんな感傷が自分にあるとは知らなかった。おもわず笑ってしまう。会おうと思えばすぐに会える。物理的な距離が大きくなるうとも、彼と親友であることになにも変わ

りはない。そんなことはわかつているはずなのだが。

少し重い足取りで家路につく。が、真つ直ぐ帰る気になれず、すこし遠回りをすることにした。

帰宅してやることがないわけでは決してないはずなのだが。そもそも人の心配ばかりしている場合ではない。僕も高3……一応世間でいう受験生なのだ。試験が終わるまでは決して終わりのない、受験勉強というものが家で待っている。休みの度に日本全国、可能であれば海外へとちよいちよい調査に出かけているため、家で腰を据えてできるときには机に向かつておかねばならないわけではあるのだが。勉強や他のこともちやんとやる、と約束したからにはおろそかにするわけにもいくまい。

とはいえそんなに無理をする気はない。志望校も決めているし、模試も合格圏内だ。すこしぐらいいはまあ、いいか……と自分を甘やかすことにする。

(あ……ここ)、やっと、完成したんだ。喫茶店、昼はカフェで、夜はバーもやっているのか)

そして、一軒の店の前で立ち止まる。建設工事なのは知っていたが、何ができるのかは知らなかった。普段と違う道を通ると、新たな発見があるものだ。

店の入り口には営業中の札がかかっていた。せつかくだから、入ってみるか。とドアを押し開けようとしたところで壁の貼り紙に気づく。

「『占い、人生相談、承ります』……?」
(どうしよう。胡散臭い……)

やはりやめておこうか。躊躇していると後頭部に衝撃が走る。

「ぬあッ! 行ってッ!!」

同時にずしりと重みを感じる。なにかがはりついている?

「な、なんだ……!?!」

はりついている『なにか』をつかんで引きはがす。髪の毛が数本もついでいかれた。ちくしょう、返せ……!! 返せよ……!! もしや敵のスタンド使いに攻撃を受けたのかと思っただが、ちがった。

「くそ、いてて……。あつ! お、おまえはッ……!」

「わん! (よお、相変わらずしけたツラしてんじゃねーか。けけけ!)」

「い、イギーーツ!?!」

「ど、どうしておまえがここに?!」

「わふ! (さあ、どーしてだろうな? けけけ)」

「ん? 待てよ、おまえ確か……」

今は仲間のうちの彼と行動を共にしていたはず……と思い至ると同時に気付く。

「……はっ!? 占い!? まさかッ!」

急ぎドアを押し開け、中に入る。カランカラン……とベルの音が響くと同時に聞きなれた声が僕の鼓膜を震わせる。

「やあ。いらっしやい」

「やっぱり……」

「ふふ、待っていたよ、花京院」

にやりと笑う、喫茶店のマスター。それはまさしくあの、彼であった。

「アヴドウルさん……」

「な、なんで、ふたりとも日本に!?!」

「まあまあ、座れよ」

促されるまま、カウンタ―に腰掛ける。

「さ、ご注文は? 何にする? しかたがない! お客様第一号だからな。マスターの

奢りだ! 特別だぞ!」

(な、なんだ? このハイテンションは……)

聞きたいことは山のごとくあつたが、ついその勢いに押されてしまう。

「じゃあ……紅茶を。ストレートで。茶葉の種類は、おまかせします」
「よし、わかった！ 少し待っているろ」

待っている間、周りを見回す。なんともアヴドウルさんらしい、イメージそのまま。アジアンテイストを基調にしつつも、店内は落ち着いた雰囲気であった。カウンターの向こうの壁には夜のバー用のものなのか、ウイスキー、リキュール、ブランデーといった様々な酒瓶がずらりと並んでいた。

そして、すみにはちゃんとイギーのものとと思われる、クッションでできた小さな家が置いてある。いつのまにか寢床に戻り、家主は昼寝をはじめたようだ。

（それにしても、いつのまにこんな……）

「ほら、お待ちせ」

「ありがとうございます。いただきます」

一口含んだ途端、茶葉のいい香りがいっぱいにひろがる。

「……」

あの旅のときと、少しもかわらないものが、ここにもあった。想い出が、よみがえる……。

（好きだったな……あなたも……）

あのひとは、紅茶もいつでもミルクティーで……。

——まったく、こどもなんだから——

なんて、よくからかっていた。……ほんとうは思ってもいなくせに。
そうしたら、彼女は……

——失礼な……私の方が年上なんだよ！——

なんていつて、怒って……

でも、この紅茶を飲んだらすぐに、

——おいしいね——

と、僕にあの笑顔をくれて……

「……あいかかわらず、絶品ですね。アヴドウルさんの紅茶は」

「そうかい？　ありがとう」

「さて、それはそうと……聞かせていただきましょうか？」

「ん？　なぜ我々がここにいますか。ということだったかな」

「はい」

「カイロでの調査もひと段落したからな。休暇がてら、大好きな日本で念願だった喫茶店を開店することにした……というだけだ。あっちの店は姉者に任せておけば安心……というか実は姉者の方が人気で、居場所がなくなってしまったのでな。がはは！」

「……」

「まあ、そういうことだから、これからはご近所さんだ！ よろしく頼むぞ！」

「……まったく」

とはいえ、この美味しい紅茶がいつでも飲める……という口実のもと、

……ふたりにいつでも会うことができる、というのはとてもうれしかった。

様々な話をしていたらいつのまにか日は暮れ、いい時間になっていた。

「じゃあ、僕はそろそろ帰ります。また、来てもいいですか？」

「ああ。もちろんだ！ いつでも待っているよ」

立ち上がり、会計をしようとするが、「言っただろう？ 今日には奢りだと。次からは

ちゃんともらうから」と、固辞されてしまったのでついお言葉に甘えてしまった。

「……」

去り際、ドアの前で立ち止まり気になっていたことを尋ねる。

「アヴドウルさん、……ほんとうは？」

「……なんのことだ？」

「ほんとうは、なにか別の理由があるんでしょう？ ここに来た」

するとアヴドウルさんはわしわしと頭をかきながら、困ったような顔でこういった。

「はあ、やはりわたしは隠し事が苦手なようだ」

「ふっ、そうですね」

「……かわいい不肖の弟子のいうことはきいてやらんといかんだらう？ 師匠としては」

「!？」

彼女の『手紙』の一文を思い出す。

——ほかのひとはちゃんと彼が私のお願いをきいてくれるか、しつかり見張つていてくださいね——

「あ……！」

いつのまにかイギーが真下にいた。僕にとびかかってくるちいさな身体を受け止める。

「ガウー（帽子野郎が日本にいなくなったら、てめーが寂しがんだらうってな。しよーがねえからおれたちが近くにいてやんよ！）」

「ふたりとも……」

熱くなった目頭から零れようとするものを抑えながら、どうにか呟く。

「まったく、みんなそろって、過保護なんだから……」

こうして開店した、喫茶店『Heel 2 U』（……なんて名前だ。というかなぜ僕はすぐに気づかなかったのか……不覚だ）。ここを舞台に、僕らは様々な珍事件を体験、解決していくこととなるなんて……

このときの僕に、そんなの予想できたわけもない。

Mannequin village (後)

寒さも厳しくなってきた晩秋のある日。放課後、勉強道具をかかえて、僕はあの店の前にいた。

あれから、時間のある日はここで紅茶をいただきながら勉強をするのが日課になっていた。もちろん、あの件に関する調査の報告をしたり聞いたり、打ち合わせをしたりも。しかし、あいかわらず『例の件』に関して目立った進展はないままだった。

(……もうすぐ一年、か……)

「こんにちは」

ドアを開けるとベルの音が響く。店内に一步踏み入れると、ひよこひよこ一匹の犬が歩いてきた。

「やあ、イギー」

「わん！(またきたのかよ！ 暇なやろーだ！)」

「ふふ……そうだね」

そんな悪態をつきながらも彼の尻尾はゆれていた。おもわず微笑んでしまう。イギーを抱え上げ、頭をなでつつ問う。

「あれ？ アヴドウルさんは？」

「バウ（買い出しだ。客なんて来やしねーのに何を買ひ足すつてんだかな。けけけ）なるほど、店内はあいかわらず閑古鳥が鳴いていた。

（……僕以外にお客さん、来ているのかな？ うーむ……）

開店から3ヶ月。紅茶はいわずもがな、カクテルも絶品。大通りにも面していて、立地も悪くないはずだ。上手くやれば流行りそうなものだが。

「がう（まー、そんなに客が来てもうつとーしいからおれはかまわんけどな。むしろ静かでもいい）」

「そりゃ、おまえ的にはそうだろうけれどなあ……」

そんなことを話していたら、店主が帰ってきたようだ。

「ただいま。おお、花京院。来てくれていたのか」

「おかえりなさい、アヴドウルさん」

「どうですか？ お店の方は」

気になつていたことを、ストレートに聞くことにした。

「まあ、みてのとおりだ。なかなか来んのだ。だれも。なんでだろうな……」

「それは……やっぱり店の名前が……」

地獄……そりゃ敷居が高くもなるだろう。なぜせめて『H a i ^幸 l』の方にしなかった

のか、このひとは。

「二度来てくれた人は、けっこうまた来てくれているんだがな。2、3人。おまえ含め」
「しかも人生相談とかつてのが、まずいんじゃないやあ……」

胡散臭く感じてしまったことを思い出す。

しかし、そういいかけたところで、またもベルの音とともにドアが開いた。

「おお、噂をすれば！ いらっしやい。安田君」

僕を除く、数少ない常連さんが来てくれたようだ。三十代前半くらいだろうか。穏やかそうで、人のよさそうな男性だった。

「こんにちは、マスター。今日は実は……あの……」

「どうしたんだい？」

「表の貼り紙……人生相談って、可能なんですか？」

「どうやら、あれが役に立つこともあるようだ。僕は前言撤回を余儀なくされたのであった。」

*

*

*

「実はぼくの親友、兼同僚が……」

「奇跡を起こす教団?！」

我が店の貴重な常連客、安田君。わたしは彼の人生相談を請け負うことになった。

久方ぶりの本業。返事にもつい力がこもってしまいつつ、その心のうちに耳を傾ける。偶々居合わせた花京院とともに。「ならば、僕は今日はこれで失礼するとしましょう」と、そんなふうに着立上がりかけた彼を、安田君が別に構わない、と留めたのだ。

「はい。なんでも、その教祖様が手を触れれば、どんな怪我も病気もたちどころに治ってしまう……と」

「明らかに胡散臭いじゃあないか。それこそそんなもの」

つい溜息が漏れてしまう。

「親友もぼくも最初はそう思っていたんですよ。でも、目の当たりにしてしまっただけです。『教祖様』が手をかざすと、信者の身体が光に包まれて浮かび上がって……」

「なにかトリックがあるんじゃないんですか? ほら、マジックとかでよくある……」

花京院の指摘に安田君が応える。

「それが、ぼくたちがそういうとちゃんと調べさせてくれたんですよ。でも、光源もピアノ線もなんの仕掛けもなく……そして、信者の生々しかった傷があつという間になくなっていったんです」

それも一度だけではない。またあるときは息も絶え絶えな寝たきりのご老人が、教祖

が手をかざした瞬間、これまたあつという間にピンシヤンし始めた、とのこと。

「ふうむ……」

「そもそもこのきつかけは、ぼく、雑誌のルポライターをしていまして。親友と取材にいったんですよ。その教団に。それで……」

安田君は悲痛な顔で続ける。

「実は親友は3年前に離婚して、男手ひとつで娘を育てているんです。みづきちちゃん、というんですが、その、娘さんが病気に……まだ8歳なのに……腎臓を患ってしまって、毎週毎週大人でもつらい透析治療を受けているんです」

「なんだと!? そんな幼子が……」

「根本的な治療法としては移植手術しかないそうなのですが、適合するドナーがなかなかみつからないままで」

「……」

「親友はずっと責めていました。自分のせいだ、と。仕事仕事で、みづきちちゃんにかまっであげられていかなかった自分の。もっと早く気づいてあげられていたらと……」

「なんと……」

「その儀式、順番待ちがものすごくいらしいんです。教団に寄付するお布施の金額でその優先順位が決まるとのこと、言われるがまま薄給をあいつはすべてつぎ込んでいて

……傍からみたら不毛にしか思えないんですが、本人にしたらきつと藁にもすがる、そんなきもちなんだと思います」

無力さを噛みしめるように力なく項垂れる安田君。

「口で言っても、聞かなくて……それでもどうにか止めるしかない、とはわかってはいるんですが。」

ああ、ぼくは、どうしたらいいんでしょうか？ 親友として」

「そんなの……儀式なんてまやかし、インチキ、偽りだという確たる証拠を掴み、それを突き付け親友さんの目を覚ましてあげる。……以上しかないでしょうね」

それに対し、冷静に至極もつともなことを言い放つ花京院。

「それは、そうなんですけど、なかなか尻尾がつかめなくて」

「で、それこそ藁にも縋る思いでわたしに相談した、と」

「はい、すみません。どうすべきか、占ってもらえでもしたらなあ……と」

言いつつ、安田君は鞆をこそこそと漁り始める。

「あ、そうだ。参考までに、これが儀式の……その『教祖』の写真です」

そうして、彼は雑誌をとりだし、あるページを開き差し出す。ふたりでそれを覗き込んだ瞬間、衝撃が走った。

「な、ッ！ こ、こ、これは!! ス……っ!？」

写っていたのは、これまた胡散臭い派手なジャケットを身につけたチョビ髭の中年男性……いや、装いなどどうでもよかった。問題は背後の、それ……。

写真の男の背中からはまぎれもなく『スタンド』が出ていた。

(ま、まさか……この教祖、本当に『治す』……!?)

瞬間、ガタンと立ちあがる花京院。

「僕が……行きます」

眼鏡(最近勉強中のみ、かけはじめたらしい)の位置を直しながら言う。

「その教祖とやらの毛穴の数まで調べあげてみせましょう! ……得意分野だ!!」

「ほ、本当ですか!?! え、えっと、しかし君は一体……? と、得意分野……?」

「あ、こいつは……」

明らかに不信の念を抱いている安田君。無理もあるまい。なんと説明したものか考えていると、先になにかに気づいたように彼がいう。

「あ! 高校生探偵かい? 今流行りの!」

(は、流行っているのか……? というか、流行りの問題か……?)

そんな疑問を浮かべている自分をよそに、たなびく前髪をかきあげつつ、それに乗っかる男。

「ええ……まあ、そんなところですよ。」

……じっちゃんの名にかけて、真実はいつもひとつ!」

(そ、それはなんかいろいろ混じっている! 混じっているぞ、花京院!!)

なんともよくわからない展開に圧倒されつつも、いう。

「な! し、しかし、花京院、おまえ学校は!? 受験前の大事な時期だろう!」

「……そんなもの!」

すると、突然、バツ! と上着を勢いよく脱ぐ花京院。そして、傍らで欠伸をしているヤツにきらりと目をつける。

「アウ……?」

「イギーにこうして、この、学生服を……」

「ぎゃわん!」

「……被せて替え玉にツツ!!」

「グアウアウ!! (やめろやあーっ!! いい加減にしがれ、この色ボケがあーっ!!)」

「……そんなわけで、僕達にお任せください」

「あ、ありがとう……だ、大丈夫かい? 頭から血が……」

「か、花京院……」

「いいか？ 学校が休みの間だけだぞ？ 万一おまえが浪人でもしたら『みはり』役としてのわたしの立場がだな……」

「はいはい、わかっていきますって」

そうしてわたしは花京院ともにやつてきた。教団本部があるというY県の山奥に。ちなみにイギーはへそを曲げてしまったのか、ついてきてはくれなかった。

「さ、では……行きますよ！」

「あつ！ お、おい！ いきなり突っ込む気か!? おまえは本当にあの娘のこととなると全く……」

常の冷静沈着さはすっかり鳴りを潜め、この大胆さ。実はこっちが本性なのではないか、とは、もう薄々感じていたことではあるが。

「大丈夫ですよ。今あの建物には教祖ひとりしかいない。すでに法ハイエロフアント皇を張り巡らして探索済みです」

「そ、そうか」

心配は杞憂なようだ。その用意周到さに息を巻く。

「言う通り、さっさと済ましてしましましょう。それでは……」

につこりと微笑む。そして、ぎらりと前方を睨む。

「……いざ、突入!!」

「えええ!!」

やっぱりこつちが本性だ……そう思いつつ、勢いよく建物に飛び込む男の背中を必死に追いかけるわたしであった。

「しっ! いました……」

どうにか追いつくと、ある部屋の前で窓からそつと様子を窺う花京院。それに倣い、自分も覗き込み、耳をすます。

「ひひ……ちよろいもんですねえ……。労せずこんな大金が……。ひひひ……」

中には金勘定をする、写真の男。

『教祖様』のイメージからはかけ離れた、下賤な姿がそこにはあった。

「それにしても世の中、おつむの弱い馬鹿なやつらばかり。『なんでも治す奇跡の力』なんてものがそうそうあるわけじゃないでしょうに」

「な、なんだと!?! ということはやはりインチキ……はっ!?!」

気付いたら、忽然と消えていた。

隣にいたはずの男の姿が。

「……エメラルドスプラーツシユ!!」

「ぐべらっ!!」

そして次の瞬間、吹っ飛んでいた。似非教祖様が。

「ひいーっ! い、痛い! 痛いイイイ……! な、なんだチミはツツ!」

つかつかと歩み寄り、胸倉を掴んで凄む。

「……痛いかい? なら、治せばいいじゃあないか……できるんだろう? おまえのそ

の『奇跡の力』で……え?」

「で、できませんよ! そんなこと、できるわけないでしょおお!!」

「……そうか……。また、はずれ、か……」

「花京院……」

俯く男。その力が、少しだけ、ゆるむ。

「!? 危ない!!」

その一瞬の間をつき、教祖がスタンドを出し眩い光を放つ。

「貴様……!」

「チツ! なにがなんだかわかりませんが……おまえたちも能力者ですかねえ? なんにせよ、知られたからには生きて帰せませんねえ……!」

そのスタンドは職人のようなエプロンをつけ工具を手にした……そんな出で立ちの爺の姿をしていた。

「『なんでも治す力』なんて持つちゃあいませんが……ミーにはこの力がある……!!」

「闇の仲間はどう呼ぶぞんす……ミーのことを『人形遣い、パペッター田中』とね!!」

「ば、『パペッター田中』……!?」

(……ま、間抜け……)

笑つてはいけない。そんな場合ではない。が、おもわず吹き出す。

「な、なんぞんすか! そろつて笑つてんじやあねえぞんす! 馬鹿にすんじやねえぞんす! い、今後悔させてやりますからねえ! ゼペット! 『造れ』!」

いうと、また光とともに人型のなにかが出現する。

人形遣い。その名から推測するに、あれは人形なのだろうが、遠目から見るとそれは本物の人間と見紛うほどの精巧さであった。

「バトルパペット戦闘型人形! コンタクト接合!!」

人形が『ゼペット』と呼ばれたスタンドが操る紐に繋がれる。

「光るだけの玩具じゃあないとこを見せやるぞんす……!!」

いうと、人形は高く飛び、舞い踊る。そして蜘蛛の様に天井に張り付いたかと思うと、こちらに向けたその腕がぽきつと折れ、銃口が現れた

「……死ねいッ!!」

そこから雨霰の様に降り注ぐ銃弾。

しかしそれは瞬時にどろどろに溶解する。あたかもチョコレートの如く。

「チツチツ！ わたしのスタンドも、こう呼ばれている……」

人差し指を振りつつ、高らかに宣言する。

「始まりを暗示し、始まりである炎をあやつる『魔術師の赤』マジシャンズレッドとな！」

「ふっ……さすがです。アヴドウルさん！」

「なっ！ ち、ちくしよう！ ま、まだぞんす！」

再び人形を繰ろうとした、そのとき、ヤツが異変に気づく。

「……あ……あれ……？ 動けん……!？」

「……捕まえたぞーんす。……なんてね」

「……うつつてるぞぞんす、花京院」

「アヴドウルさんこそ……」

「……ハッ！」

「気づかなかったようだな！ 貴様にもう逃げ場はない……!！」

いつのまにか法皇の結果が、ヤツを、スタンドを、そして人形をも取り巻いていた。

「救いを求める人々の純粋な願いを踏みにじり、私利私欲を肥やすその悪行……とても

見過ごせるものではないな！」

わたしも『魔術師』をかまえる。

「ひ、ひいひいひい！」

「法皇の裁きと……」

「魔術師の断罪を……」

「「受けるがいい!!」」

緑と赤の激流が、敵をのみこむ！

「ぎゃああああああ!!」

「ひいひい！ ごめんなさい！ 許してほしいざんすツ!!」

「謝罪は僕達にはなく、信者の皆さんに言うんだな。もちろん、きちんとお金はすべて返して、だ」

「案ずるな。ちゃんと専門の警察に連れて行ってやる。自首して、罪を悔い改めるんだな」

「無論、その闇の仲間……とやらの話もあとでゆっくり聞かせてもらおうからな」

「は、はいいいひいッ！ もちろんですうっううう!!」

ペーペーと床に頭をこすり付ける元教祖。

「しかし、人形を造り出して自在に操るスタンド……か。世の中にはまだまだわたしの

知らないスタンド使いが存在するのだな」

「…………え、ええ…………」

これにて一件落着…………かと思われたそんな中、心ここにあらずといった様相でそわそわと花京院が訊ねる。

「ええと、ときに、田中…………とか言ったな。ひとつ聞く。貴様の造り出せる人形だが、外見を…………その、任意の設定に変更することは？」

「は、はあ…………？ もちろんできるんですが。じゃないといろんな信者人形造れませんし。写真などがあればその通りに…………」

「ほ、本当に!? で、では…………」

そうして懐から取り出すはもちろん…………

「お、おいつ！ な、なにを!?」

たまらず止めると咳払いをしつつ花京院は言った。

「ごほん、か、勘違いしてもらっては困りますね。これはあくまでこのスタンドの能力の調査の一環。財団から、その報告も依頼されているでしょう？」

「まあ、そうだが…………」

「よし！ ということで、さあ！ できるもんならやってみろっ！ 悪いと少しでも思っているならば、せめて僕にそれくらいしてみせろ！ さあ！ さあッ!!」

「花京院、おまえ……。期待していた分、落胆が大きいのはわかるが……」

そんな半ばやけつぱちな男の勢いに押されるパペッター田中。

「は、はい、では……」

田中の合図で、翁のような、やつスタンドが手をかざす。

「お、おお！　そ、そっくりだ!!」

光に包まれたと思った瞬間、そこには一体の、人間にしか見えない人形が静かに佇んでいた。

顔立ちも服装もあの旅のときのまま……。『彼女』に十分瓜二つ……。に、傍目からは見える、それが。

「……あまい……ッ！」

しかし、どうやらこの男的には全く不十分だったらしい。

「あのひとはこんなじゃあないッ！　やりなおせッ！　もつと鼻を1. 2ミリ高く！　目じりの角度を1. 5。上方に！　まつげを0. 2ミリ長く！　髪の色はトーンは

……」

「は、はいいいいい！」

「……」

「……ふう！　……完璧だ……！」

鬼編集が駄目出し修正すること数十分。ようやく満足する出来に仕上がったらしい。

「……ではこれは、重要な証拠品として僕が押収を……」

いそいそと完成品を抱え上げようとする男に元教祖が言う。

「あ……でも、その、言いづらいんですが、ミーの能力、せいぜい30分で……なのでたぶんそろそろ……」

「な、なにイツ?! ……あッ!」

言うやいなや、フツと消えてしまふ。

「あああああ! ひ、仁美さん(人形)ーッ!!」

「そりやあそうだろ……まあ、比較的長い方じゃあないか? ……持続時間『B』つと」

報告書の下書きとして、メモにペンを走らせつつ、うちひしがれる男に呆れつつ、いう。すると、おもむろに立ち上がり、叫ぶ花京院。

「ええい! もう一度だ! いっそかまわん! こうなったら少々借りるだけでも……」

30分もあればじゆうぶ……」

「……いいかげんに、しろっ!」

おもわずそのへんにあったスリッパで錯乱男の目を覚まさせんと、頭をはたく。スッパーンという小気味よい間の抜けた音だけが、その場に響いていた。

「本当に、申し訳ない……」

パペッター田中を財団の警察に突き出した後、安田君に結果を報告すると、早速、親友宅に向向いて状況を説明しに行く……という彼。その頼みで、我々も同行することになった。

「あんな詐欺にひつかかってしまつて……」

ひととおり話を聞いた彼は、迷惑をかけた、という冒頭の謝罪の言葉に続き、俯き、何かを決意したかのように自嘲気味に吐露した。

「それに、病気にも、なにもしてやれない……」

おれには……やはり父親の資格なんてない。

……みづきは……母親のもとに行かせることに、します」

「お、おまえ!!? そんな!!」

安田君が言いかけた、そのときだった。

「いやー!」

スパーンと襖が開いて、そこには小さな少女の姿があつた。

「そんなことない!」

お父さん、いつも、みづきのためにいっしょうけんめいだもん!

みづき、しってるもん！」

「み、みづきちゃん！」

「病気なんて、へっちゃらだよ！ だから……だから……！」

「お父さんとはなれるなんて、いや！ そのほうがぜったいにいや！

みづき、お父さんといっしょにいるっ！」

「……っ！ ……みづき……！」

抱きしめ合う、親子の美しい姿。

「うう……」

「ええ話や……」

隅で目尻を拭いっつ、花京院とともにいう。

「御心配には及びません。財団に相談してみましよう」

「ああ、そうしよう」

「財団？」

首を傾げる安田君。

「SPW財団だ。君たちも聞いたことはあるだろう？」

「……あ、あの大財閥の!?!」

「そ、そんな凄い方と知り合いつて、貴方たち、一体……」

あつけにとられる二人。それに応える。

「何者……ですか？　そうですね、そのへんに偶々いた流行りの高校生探偵と……」
「フツ、そのへんに偶々あつた美味い紅茶を出す喫茶店のマスター……それだけさ」

「……」

去り際。花京院が振り向き、父親にそつと告げる。

「はやく、みつかるといいですね。貴方のさがしもの、も」

「あ……」

（……花京院……）

今さら、気づいた。

こいつは、多少なりとも重ねていたのだ、きつと。彼と自分を。

なかなか求めるものがみつからない。そんな苛立ちも、焦りも、無力感も手に取るようだったに違いない。

そして、そんな彼につけこむ輩への怒りも……

（……こんなことでは、やはり『みはり役』失格だな……）

「さ、行きましょう。おや、どうしました？　アウドウルさん？」

「いいや……」

あの娘が起きたら、怒られてしまうな……そんな想像をして、つい笑いがもれる。

「ほんとうに……はやく、みつけてやらんとな……」

「ん？ ええ、そうですね」

「さあ！ 帰るぞ！ イギーも待つてる！

店によっていけ！ 何を飲んでいく!?! 今日奢りだ！ マスターのな!!」

「はあ、結局いつもそうじゃあないですか……」

そんなんじゃあ、お店つぶれちゃいますよ？ まったく……。フツ！」

*

*

*

結局、空振り三振。とんだ無駄足だった。……なんて僕にはとても言えない。

SPW財団のネットワークは医療面もさすが見事なもので、あつという間にみづき嬢のドナーを見つけてしまった。安田さんは、親友の為に！ と積極的に渡米と治療の費用をその人脈を使用し広く募集。成果は上々で、病状が安定する翌春にすでに移植手術が行われることが決定したらしい。

そして、成果、と言えばそれだけではなかった。

彼が『Heil 2 U』を自身の雑誌で紹介してくれたのだ。

以後口コミでも評判が広がり、(悩みを解決してくれる上に、美味しい紅茶やお酒がいただける……と)店はそれなりの賑わいを示すようになっていった。同居人(犬)は不満気なようだが……。

「忙しくて手が回らんようになってきた……花京院、おまえ、うちでバイトとして働かないか？」

「……受験が終わったら、考えます」

HAPPY BIRTHDAY

「それじゃあ、お疲れ。おやすみ、承太郎」

「ああ」

僕は、今再びエジプトにいる。大学の夏休み、長期休暇を利用して。

『あれ』から、あいかわらさず僕は承太郎や仲間たちとともに、DIOの残党を討伐しつつ、あの例の弓と矢のことや、スタンド及びスタンド使いの情報を、集めていた。

ちなみに、もちろん彼女や彼女のご両親と約束したように学業もきちんとこなしている。出席日数がぎりぎりなのは秘密だが。

僕は、ただひたすらに探し続けていた。彼女を『治す』ことのできる、スタンド使いを。

しかし、求めるものは未だ、手がかりすらみつかつてはいなかった。

就寝前に日記、というほどでもないが、今日一日の成果を記しておくのが日課になっていた。いつの日かこれが役に立てば、と、日付を記したところで、ふと気づく。

（あれ？ 明日、いや、あと少しで今日だけど……誕生日じゃあないか、僕）

もうすぐ、二十歳になる。なってしまう。

あのときの、あのひとの年齢を追い越してしまうのだという事実には、時の流れの残酷さを痛いほどに感じてしまう。

(たとえ何歳になろうが、関係ない。あきらめるつもりなど、毛頭ないのだから) この気持ちも、時が経てば少しずつ風化してしまうのかもしれない。

それが、恐かった。

しかし、そんな心配など無用だったようだ。

まだ二年？ もう二年？ わからないけれど……

僕のこころのなかにあるこの想いは、鮮やかなまま、色褪せることなどなかった。

あのときのまま、いや、行き場を失った想いは、募って、ふくらんでいくばかりだった。

「いったいどうやったら、会えもしねえ女を、そんなに想い続けてられんだよ……か」前に親友が、めずらしく少し酔っているときに溢した言葉を呟いてみる。

(そんなの、僕の方が知りたいよ)

別に無理をして忘れていないわけではない。

忘れられない。それだけだ。

女々しい思いに支配されそうになる。

もう寝てしまおうと、目を閉じる。

(……逢いたい。こえが、聴きたい……)

「……かきよういんくん……」

「……花京院くん？」

「……はっ！」

呼ばれるこえで、目をあける。

聴き間違うものか、この、こえ。

ずっと聴きたくてしかたのなかった、このこえを。

「……ひゃっはっはっ」

求めてやまなかった、愛しきひとのすがたがそこにはあった。

「あまり、変わらないね。あ、でもすこし、背が伸びた?」

「あ……!? え??」

僕は、この事態にとても混乱していた。

ちなみに彼女の言う通り、たしかに僕の身長はあれから2cm伸びて180cmの舞台に到達していた。

しかし、僕が驚きと戸惑いで声も出ない様子をどうやら彼女は違う風にとらえたらしい。

「あ、あれ? も、もしかして、忘れちゃった?」

あの、私……えつと、前に一緒に旅をさせてもらっていた者なんだけど」

(……そうくるか。相変わらず予想の斜め上をいく……)

おかげで再会の感動とかそういうのがどこかへいつてしまったではないか。

「わかりますよ。あなたも、ちつとも、変わらないな……仁美さん」

どうやら、本気で忘れられていると思っただけらしい。僕のことばに、心底ほっ

としたような、そしてすごくうれしそう、そんな表情をうかべる。

(忘れるわけ、ないだろう。忘れられるわけ……)

あいかわらずだ。ほんとうに、このひとはちつともわかっていない。

そのくせ……いつも。

「……夢、か」

(というか、ここ、日本の僕の……?)

出した結論を呟く。あたりを見回し確認できたのは、先程目を閉じる前に見ていた見慣れないカイロの宿の一室ではなく、つい先日日本を出立したときのままの見慣れた我が家の見慣れた部屋だった。

(やっぱり夢か。しかし、それにしても、やけにいつもよりリアルだ。この天然具合……)

彼女が夢に出てくることなんて、しょっちゅうだった。

それはあの旅の思い出をなぞるものであったり、『あの瞬間』のフラッシュバックであつたり……もしくは、とてもではないが、だれにもいえないような内容であつたりもした。

しかしどれも結末は……。

でもそれでもよかった。

悪夢でも、なんでも。逢えるなら。

「ここはあなたの夢。だけど、夢じゃあないんだ。私は」

そして、またよくわからないことを言い出す彼女。

訝しげな表情の僕をよそに、彼女はつづけた。

「セシリアに御願いして、連れてきてもらったの。どうしてもあなたに、伝えたいことがあつて」

「伝えたいこと？　なんですか!？」

おもわず詰め寄る。警告、誰かに危険が迫っているとかそういう類いのことだろうかと思つた。

「……っ！　えっと、あの……ね」

しかし、しばし言いよんだ後、彼女の口は僕にとって予想外の言葉を紡ぎだした。

「……お誕生日、おめでとう」

*

*

*

まっしろで、なにもない。

ここが私の、いま、いる場所。

どのくらい時間が経ったんだろう？ ああ、瞬間から。

もう、まったくわからない。

みんなは……あのひとは……どうしているのかな？

元気だったら、それでいい。

「マスター」

一羽の小鳥がふわりと私の肩でその薄桃色の羽を休める。

そう、私はひとりじゃあない。

相棒、セシリアがいる。だから……さびしくない。

彼女がいうには、ここは私の意識の底の底で、この『私』はその、意識のかけら。脳に不可逆的な損傷を負ったことで、表……現実には出られなくなった意識。

『現実の私』がずっと『夢』をみているようなものらしい。

セシリアは『夢』と関わりが深いスタンド。

だから、私の代わりに外の世界を視ることができそう、時にその様子を教えてください。

「どうだった？」

「ええ。家族も、仲間たちも、かわりはありません」

「そっか、よかった」

「相変わらず、みな、あなたを目覚めさせる方法を探してくれているようです」

「……そうなんだ。もう、いいって……言っておいたのにな……」

涙が一筋、こぼれる。

うれしい反面、やはり足枷になっているのだ。自分は。

(もう、いつそのこと……)

「……馬鹿なことを考えないでください」

「っ！ ご、ごめん……」

「いえ……」

「そうだよね！ 生きていて、こうしてみんなのこともわかるんだし。それで充分って思わなきゃいけないよね」

「……」

「もつと、外のこと教えて！ 今って季節は？ 何月くらい？」

あれ……？ 私って……どれくらい眠ってるんだっけ……？」

「……あれから、約二年半。季節は夏。現実世界では……」

「え!？」

その日にちをきいて、胸がどきりと音をたてる。

「どうしたんですか?」

「明日だ……誕生日」

*

*

*

わたしはセシリア。彼女の、スタンド幽波紋。

主を護る。それが使命。それはずっと、変わらない。

あれから、マスターはずっと、この世界にいる。

心が、かなり弱っている。

無理もない。いつまで続くのか、わからない。永遠に感じられる時間を、なにもない、ここで、孤独に過ごしているのだから。

なんとかかしたい。なんとかか、しなければ。

ここでの心の死は、すなわち……。

現実世界の様子を伝えるのは逆効果なのかもしれない。しかし、それくらいしかいまのわたしにできることなど思いつかなかった。

そんな中、現実の日時を伝えるとき、主の顔に、久しぶりに生気が戻った。……かと思えば、また沈んでしまったようだ。

「誕生日？ 誰のですか？」

問うも彼女はうつむいたまま、答えは返ってこない。

「……いえ、わかりました」

しかし、聞くまでもなかった。

彼女の想い人……命を懸けて護ることを選んだ、『彼』の、であろう。

「二年半か……。お祝い、するねって、約束……したのにな……」

彼女の頬に再び、涙がったう。

「ご、ごめん！ なんでもない、なんでもないから！ そうだ！ ここから！ 伝わらないけど、せめておめでどうって思うことに……」

慌ててそれを拭い『わらう』彼女に問う。

「……伝わらなくて、いいんですか？」

「……セシリア？」

「伝えたいんでしょう？」

「……ううん、そんなの……」

望んではいけないこと。そうかもしれない。それでも。

「教えてください。正直な気持ちを」

「……」

「いいから」

「……、た、い……」

大粒の涙が、一粒、また一粒と零れ落ちる

「おめでとう、つて……いい、たい……！」

……逢いたい、よ……！」

彼女の、心の底からの言葉とともに。

それをみて、わたしは心を決める。

「……行きますか？ 伝えに」

「え……？」

「記憶には、残らない。それでも、いいなら」

*

*

*

「……お誕生日、おめでとう」

「……はい？」

なにかの舞台から飛び降りるかのようにな、おもいきつてそういうと、彼からはそんなにかが豆鉄砲を食ったようなりアクションが返ってきた。

「あ、あれ？　もしかして違った!?!　も、もう、零時すぎてるよね!?!　今日じゃなかったっけ?!」

あわてふためきつつ、訊ねる。

セシリアに無理を言つて、ありつたけのスタンドパワーを使ってここに連れて来てもらったのに。間違えていたとしたら間抜けすぎる。なにより彼に失礼だ。

「そうです……。そうですけど……」

「よ、よかった。だよね。そうだよね！」

ほつと胸をなでおろす。

「……それだけ？」

「うん」

「それだけのために……?」

「う、うん。ごめん……」

でも、どうしても……!　どうしても、伝えたく……て……ッ!?!」

いいおわる前に、私はすっぽりと彼のうでのなかにおさめられていた。

「まったく、あなたたってひとは、やっぱりだ。

どうして……こう、いつも……!」

「……」

涙がこみ上げてくる。

ずつと、ずつと、求めていた。あたたかい……。

変わるこののない、だいすきな、彼。

この……こえ。まなざし。ぬくもり。

逢いたかった。ずつと。

逢いたくて、しかたがなかった。

こうしてまた、抱きしめてもらえるときがくるなんて。

(ああ、いけない。やっぱり私、またもらってばかりだ……)

今回は私が彼の誕生日を祝いにきたはずなのに。

「ごめんね、プレゼント、なにもなくて」

(あそこ、なにもないからなあ。時間だけはあるのに)

お祝いすると約束した、あの星降る夜。

なにをあげようか、がんばってかんがえると、きめたのに。

(今の私にあげられるものなんて、なにも……)

そんなふうには落ち込む私に、投げかけられる。

「またそんな、すつとぼけたことを……」

「す、すつとぼけ!?! ひ、ひど……」

「僕の、ずつと、ほしかつたものが……」

いま、このうでのなかにあるのに?」

「え……つ!? そ、それって……?」

「あーもう、わかりました! はつきりいます……」

ひとつ、ふかく息を吸い込む彼。

そして、じつと、まっすぐに瞳をとらえられる。

「仁美さん、あなたに逢いたかった。」

僕がほしくてしようがなかったのは、ずつと……あなた、ただだから」

「……花京院く、ん……」

「これ以上ない……最高の贈り物です。」

ありがとう。逢いにきてくれて」

「……っ!」

涙があふれて、とまらない。

どうしてだろう。

うれしいのに、うれしくてしかたがないのに、どうしてこんなになしいのだろう。どうして、こうなってしまったのだろう。

どうして私は……彼のそばでいま生きられないのだろう。どうして……

「泣かないでくださいよ。せつかく、逢えたのに……」

「そうだね。つて、自分だって……」

お互いの、涙をそつとぬぐう。

そうして、また、きつく抱きしめ合う。

どうしたらいいんだろう。

後悔したくない。……もう二度と。

「……」

おもいうかんだ。うかんでしまった。

ひとつだけ。あつた。

いまの私にあげられるもの。

……いや、私があげたいものが。

ここは『彼の夢』。……でも、『私』は……
相棒の言葉が、響く。

——記憶には——

(……だからって……いう、わけでもないし……)

(……だからって……いい、わけも、ない)

わかっていた。そんなこと。

ほんとは、こんなこと……だめに、きまっている。

「……っ！」

(……でも……それでもっっ！)

堰切つて、あふれだしてしまった想いは、とめることができず……

私の背中を、押した。

「……じゃあ、もらって、くれる？」

「？なにを？」

「……私の、こと」

*

*

*

「い、いま、なんて?！」

聞き間違いかと、おもった。

「……あなたが、望んでくれるなら。」

その、私は……あなたに……もらって、ほしい……」

しかし、僕の胸にかおをうずめ、耳まで真っ赤に染めながら、彼女はそんなことをいう。

「そ、それは……! その、ど、どういう……?」

「な、なんかいいも、いわせないでよ……!」

「す、すみませ……」

「つ……、私だって……。ずっと……!」

「……………あなたしか、いない……………！」

「あなたのことが、す……………！ つ……………!？」

その言葉を彼女は最後までいうことができなかつた。

……………僕が、塞いでしまったから。

もう、言葉など必要なかつた。

僕たちは互いに求めあい、与えあつた。

もうなにも考えられなかつた。

……………このひとのこと以外、なにも。

すがた、こえ、かおり、あまき、やわらかさもぬくもりも。

五感を総動員して彼女のすべてを感じた。

そして彼女に刻み付けた。

僕のすべてを。

熱く、激しく、深く……。

このまま、とけあって、まじりあって……

ほんとうにひとつになつてしまえば、いいのに。

そうすれば……

もう、はなれなくて、すむのに……

とろけるような時間は、あつというまにすぎていく。

おわつてほしくなかった。いつまでも、さめないままできてほしかった。

時が止まってくれたらいいのに。

……というのはなんて、皮肉だろうか……

「また、ここで……逢えるかな？」

「……」

彼女はだまったまま、あいまいに微笑む。

「……そうか。じゃあ、ひとつ……約束して、ほしい」

「……うん。なに？」

「……あきらめないで。僕も、あきらめない」

「……っ！」

「信じてほしい。」

かならず、迎えに行くから」

「……うん、……うんっ！ 信じて、る!!」

強くうなずき、彼女は泣きながらも、笑顔をくれる。

僕のだいすきな笑顔を。

「……じゃあ、『また』」

「うん、『また』……」

そうして、彼女の姿は消えた。

「……セシリア！ いるんだろう！ セシリア！」

すぐさま、僕は叫ぶ。

「……頼む！ 消してしまわないでくれ！」

僕から、奪わないでくれ!! この、記憶を！

頼む、から……!!」

「……お久しぶりです。花京院」

すると、久方ぶりにみる、薄桃色に輝く美しい鳥が僕の前に舞い降りた。

「奪うだなんて……わたしはなにも、いじわるでやっているわけではないのですよ」

「セシリア……」

「あなたも痛いほどわかっているでしょう？」

夢が幸せであればあるほど、目覚めたときの喪失感は……。

あなたは、それに、耐えられるのですか？

あなたに、そんな思いをさせるのは、彼女の本意ではない。

これにより、あなたをさらに、縛ってしまうことも……。

だから記憶は、消させていただきます」

「そんなことは、よくわかっている！ それでも僕は……!!」

「これは、わたしが……」

貴方のためではなく、彼女のためにやったことなのです。

弱くなり消えてしまいそうだった彼女の心を、護るために。

利用してしまい、申し訳ないですが」

「それに、もしも、貴方がいつか彼女を目覚めさせることができたとしても……」

そのとき彼女はこのことを、忘れてしまっているのです。

今のあの彼女はいわば幽霊のように儚い存在。

そんな状態での記憶など、いうまでもありませんね。

だから、貴方も忘れるべき……」

「……」

「……なのですけれど。」

夢。それとわたしは深い関わりがある。

……が、本分ではないんですよ。

花京院、貴方がいつぞや闘った『死神』ほどにはね」

「っ！」

「ですから……『失敗』してしまうかもしれませんね。

そこまで強く想われては。こまりました。ふふ」

「セシリアー！」

「わたしも、『信じて』いますよ、花京院。

なるべく早く、迎えに来てあげてくださいね。

わたしの親愛なる主を」

*

*

*

「おはよう、承太郎」

「よお……ほら」

なにか袋を投げてよこされる。

「え？　これは？」

「花京院、おめー、今日誕生日だろ？」

そういえば昨日なにやら街で買っていたのはこれか。

いつもそっけない親友の、さりげない心遣いに嬉しくなる。

「……ありがとう」

「それにしても……どうしたよ？」

「今日はやけに、なんつーか……いいツラしてんじやねーか」

「……そうかい？」

想いを馳せる。あの、しあわせなときに。

そして、鋭いのは相変わらずな、この親友。

「なんかいい夢でもみたか？」

「……ああ。そうか。そう、かもね」

「は？　なんだそりゃ？」

「フツ、なんだろうね？　じゃあ、いこうか」

夢。

すべては、ただ僕の願望がかたちになったもの、誕生日がみせた夢だったのか。それとも……。

どちらでも、かまわない。

どちらにしても、かわらない。

僕は、あきらめない。

かならずあなたを、迎えに行く。

*

「おかえりなさい。マスター」

「ただいま、セシリア」

いつものぼしょ、にもどってきた私。

いつものようにふわりふわりと佇んでいる相棒に、恐る恐る、問う。

「……………あ、あの……………」

「どうしました？」

「……………みてた？」

「なにをですか？」

「えつと……………、その……………」

*

*

言い淀んでいると、相棒はとんでもないことをいう。

「ああ、あなたと花京院のセツ……」

「わああー……！ は、はつきりいわないでー……!!」

「……マスター、わたしはあなたのスタンドなんですから……」

「そ、そっか、そうだよね……」

「いや、あの、まさかね、その……。そんな展開になるとは……」

「なりますよ。そりゃあ。」

愛しあう若いふたりの約三年ぶりの逢瀬なんですから。

織姫と彦星の三倍ですよ。三倍！ そりゃあもう、激しく熱くもえあが……」

「わあーああー!!」

「別にいいじゃあないですか。」

ほんとうにやったわけでもなし……」

「や、やつ……!?!」

「あなたは意識、彼も意識。心と心がつながっただけなのですから」

「そ、そう……なの、かな？」

「そうですよ。現実のあなたの処女膜は無事です。」

「近い将来、ほんとうにするとときに花京院によからぬ疑惑をもたれる心配はないので安

心してください」

「しょっ!？」

「ああ、でもあなたはもう一度、あの破瓜の痛みに耐えねばいけないわけですね。

ご愁傷さまです。痛かったでしょ？」

「……………う、うん、まあ」

たしかに、あれは、痛かった……………。

彼はすぐやさしかった(……………はず。他なんて知らない……………知る気もない……………ので、わからないけれど)のに。腕が呑み込まれたあの時より、炎で焼いてもらったあの時よりも痛いことが、この世の中にあるなんて。

でも、それいじょうに……………

そんなのどうでもいいくらいに……………

……………うれしかった。

おもいだして、ついにやけていると、相棒がまたとんでもないことをいう。

「それでも二回目以降はすぐに快樂に変わっていったようで……………よかったですね。そっ
ちの相性も良くて」

「わ……………っ!!？」

だからなんでいちいち、ぐ、具体的なことというの!!? な、生々しいツ!!
セシリア、そんな性格だったっけ……………?」

「重ねていいですが、わたしはあなたのスタンド。」

「スタンドと本体は一心同体……」

「……私のせいーッ!?!」

「ふふ。瞳に生気がもどりましたね、マスター。安心しました」

「あ……」

「……よかったですね」

「うん。ありがとう。セシリア」

（しあわせすぎるよ……ほんとうに）

「ただ、あの、御願ひ、セシリア……」

「なんですか?」

「母さんには……内緒にしといて」

「ふふ、どうしましょうかね」

「逢えた。それだけでも、じゅうぶんだったのに。あんな……」

「ありがとう。」

「信じて、まってるね。」

pilgrim

(ハイ)か……)

待ち合わせの場として彼から指定のあったアスワン市内、鄙びた学校の図書室のドアを開ける。

歩みを進める度、自らの靴音だけが響き、舞い散る埃が窓から差し込む日光を反射しきらきらと輝く。室中は無人であった。唯、一人の少年を除いては。

「……おひさしぶりなのです。みどりのお兄さん」

今回のエジプト訪問の主目的、僕は『彼』との再会を果たしていた。

「やあ、ひさしぶりだね……ポインゴ君」

*

*

*

『昨日の敵は今日の友』

アヴドウルさんのお姉さん、アイシスさんのお告げによると、以前の敵対者……すなわち、ぶちのめしたDIOの元配下達の中に『さがしもの』をみつけたするための鍵を握

る者がいる……そういうことになる。

「あいつら今、どーしてんだあ？　ってか、何人いたっけ……？」

国へと帰る前のポルナレフの台詞である。

「そうくると思ったよ。ほら」

そんな彼の疑問は織り込み済みであった。僕は手帳を取り出し、即刻調べた『奴らのその後』をまとめたページを開く。

- ・ 塔：再起不能（介護施設入所中）
- ・ 月：消息不明（海の藻屑？）
- ・ 力：財団管理下の動物園へ。調教中。
- ・ 悪魔：消息不明
- ・ 節制：再起不能（入院中）
- ・ 吊男：地獄在住（推定）
- ・ 皇帝：消息不明
- ・ 女帝：再起不能（入院中）
- ・ 車：消息不明
- ・ 正義：肉の芽死

- ・恋人：再起不能（入院中）
- ・太陽：再起不能（入院中）
- ・審判：再起不能（入院中）
- ・テフヌト女神：再起不能（入院中&齒科医院通院中）
- ・ゲブ神：自決。
- ・クヌム&トト神：改心。
- ・アヌビス神：河底？
- ・バステト女神：再起不能（入院中）
- ・セト神：ふつとぼしすぎて消息不明
- ・オシリス&アトウム神：精神崩壊。
- ・ホルス神：爆発。

とはいえ、このように、半数以上が消息不明だったり、すでにこの世にいなかったり、そもそも猿だとか刃だとか、人格崩壊したとかでコミュニケーション不可だったり
……。

しかし数少ないというか、現在ある唯一の手がかりなのである。諦めるわけにはいかない。

僕はそのときそのときで空いていた仲間とバディを組み、居所がわかっているものか

ら順に、しらみつぶしに当たっていった。

「よお……」

「お、おまえらは!?!」

そうしてまずやってきたのはシンガポールのとある病院。

「アゴをつなげる手術は無事終わったみてーだな」

割承った張本人郎がしれつと言う。

「ふ、ふん。ついでに整形までしてやったぜ。ハンサム顔が2割増しだろう?　へへ

……」

「元を覚えてねえ」

「……」

そんなラバーソールにいつツツコミを入れる。

「いや、おまえなら、わざわざそんなことしなくたって、好きな顔に化けられるんじゃないかなかったのか?　ほら、僕の時みたいに」

「あ……」

「「……」」

「そ、そんなこまけーこたあ、いいんだよ！　なんだよ、今さらよお」

「情報が欲しい。スタンド使いの情報が。居場所、その種類や能力……おまえの知る限りを教えてくださいませんか？」

「……」

ヤツはしばらく黙りこくったのち、にやりとこういった。

「……いいぜ。他ならぬアンタらの頼みだ。教えてやる」

瞬間、迸る殺気。

「……なんていうと思うかよッ！　死ねッッ!!」

男がスタンド……ゲル状の黄色い肉片を飛ばしてくる。

「……スタープラチナ・ザ・ワールド」

「いつてえええええ！　な、なんで!?　急に!?!」

敵かな一言が聞こえるやいなや、せつかく整形したはずの男の顔がまたも無残に変形していた。

流石は頼りになる男。手が早い。……そういう意味ではない。無論、物理的にだ。

「変わんねーな、てめー。いいか？　もう一度だけ言う。知っているスタンド使いの情報を教えろ」

「ひいひい！ し、しらねーよお！ おれが知ってるのはあの館で会ったことあるやつくらいだよ！ 能力なんてなおさらだ！ 前にも言っただろ！ 例え仲間でも、教え合ったりしねーもんだって！ 実際闘った事のあるアンタらの方がよっぽど詳しいんじゃないあねーのか!？」

「そうか……」

確率が低いことなどわかりきってはいたが、やはり落胆の色が滲んでしまう。

そして、どこまでも懲りない男。

「……油断したなッ！ 今度こそ、死ねッツ!!」

「オラアツ!!」

「ぐあああああ!!」

「ほんとに変わんねーな……」

変わんねーといえば、続いて向かったパキスタン、カラチにて面会したこの最低野郎も、であった。

「ひやはは！ やった！ あの看護師の耳の中に入った！ 動くなよお！ 動く……あれ?」

「……甘いね」

久方ぶりに小さくした法ハイエロフアント皇の細長い触手で、男のスタンドをぐるぐる巻きにしてやる。

「う、動けない……!?! オレの方が!?!」

「ふん、あいかわらずの勉強……今度は『復習』不足、というやつだな」

承太郎が隣でにやりと笑う。

そして僕は、ステイリーい・ダンっといえ、非常に重要な案件があることを思い出す。

「そうそう。貴様に関しては本件とはまた別で、個人的な用事があるんだった」

「ハッ!」

「聞いているよ? 貴様がジョースターさんを盾に……彼女に無理矢理何をしようとしたか。まさか忘れたとか、言わないよね?」

にっこりと法皇を構える。

「未遂とはいえ、ひとのもの(※予定)を奪おうとしたその罪……万死に値する。賠償責任は果たしてもらおう……」

「ぎゃひーッ!!」

「……」

仕置き後、さらさらと取り出した紙に文字を綴り、ぴらぴらと男の眼前に突きつける。

「はい、これ。ツケの領収書だよ」

「花京院、おまえ、それが言いたかったただけだろう？ だれに聞いたよ……」

今度は呆れたように呟く承太郎。

「ん？ そんなの言うまでもないだろう？」

「ああ、そうだな。聞くまでもねーな……」

改めて転がっているダンに訊ねる。

「よし、知っていることを洗いざらい話せ。スタンドのこと、矢のこと……なんでもいい」

「ひい！ お、オレが知っているのはスタンドのことをDIOに教えたのも、あの矢を持ち込んだのもあのばあだってことくらいで……」

「ふむ、あの婆さん、その道にかなり通じていたようだから……」

「こいつの手にかからなければ、あのお婆さんの持つ情報は非常に魅力的だったんだが……」

「嘆いていてもしかたねえことだ。次行くぞ」

「ああ」

そんなふうにしおらしい態度で改心したかにみせかけて、襲い掛かって来る者が続いたが……

「ひいひい！ こ、来ないでくれ！ オレはなににも知らねえ！ もうこりこりだ！

あんたたちやDIOになって、二度と関わりたくなんてないんだよお!!」

こんなふうには怯えきって逃げまどう男……『太陽』のアラビア・ファッツもいた。話にならないのはどちらも同じだったが。

「え!!? オレの出番、またこれだけ!!?」

そして、ある意味まさに『はなし』にならなかったのがこの女性……

「ふあはひは、はひほしあ……」

「……とりあえず、早く歯医者に行け」

「ひようひやろう！ ひよほひよほまへのへい……」

「……」

『テフヌト女神』のミドラー。『歯なし』で話にならなかった（は？ さむい？ よかったな。暑気払いになって）。

歯は一生モノだ。その大切さが身に染みてわかったただけだった。

そんな中、まあ、かろうじて話にはなったのが、他の女性陣だった。

思い返してみると、何故か女性スタンド使いとばかりやたら縁のあった彼に同行してもらったの面会になった……のだが……。

結論から言うと、僕的には正直もうあまり振り返りたくない。そんな訪問になってしまった。

「……ちゆみみーん、か」

「はい。ちゆみみーん……です」

直接耳にしてはいないが、あの戦闘にて散々聞かされたのだろう。ジョースターさんと彼女が揃ってしばらくの間何かにつけて口にしていたため、僕にも結局うつってしまった。そんなやたらと感染力のある女性の口癖（あるいはスタンドの鳴き声なのだろうか？ 定かではないが）をふたりで確認しつつ、病室のドアをノックし開ける。

ひとり佇む女性。その姿は当時とは似ても似つかぬものであった。

「他のスタンド使い？ 知らないね。あたいはホルホース様に言われるまま、あんたた

ちを襲っただけだ」

「ちなみに、そのホルホースなんだが……消息が掴めない。何か知らないか？」

「知らないよ。あの人いろんな街にアジトを持っていて、世界中飛びまわってばかりだったからさ」

うつむき、呟く。その頬に涙が一筋、流れる。

「……でもいつかきつと、あたいを迎えに来てくれるはずなんだ……」

……そうに、きまつてるんだ……」

「……このお嬢さんも、ある意味被害者なんかもしれんのう」

「ええ……」

そう零したあと、ジヨースターさんは優しく女性に囁く。

「ネーナさん、じゃったな。他人の皮を被るのは、やめたんじやな。」

その方が、実にキュートじゃあないか！ 自信を持ちなさい。きつと君の『本当』を好いてくれる男がすぐに現れるよ」

「……」

しばし黙って俯していた女性だったが、ふいに顔をあげた。

「……おじさま……！」

「……へ……？？」

その眼はなんだか輝いていた……ぎらぎらと。そして、その口からは甚だ衝撃的な一言が飛び出す。

「あたいの次の恋の相手は……おじさまにする!!」

「はあ!?!」

先程までの殊勝な様子とは180。うって変わったその態度。『女心と秋の空』とはまさしくこのことか。

「き、気持ち嬉しいが、わ、わしには妻子がおるし、その、君は娘、いや、孫ほどもも年下……」

「大丈夫! 年の差も、奥さんのことも、気にしないわ!」

後ずさる男。詰め寄る女。

「さあ、ダーリン……誓いの熱いベレーをツツ!!」

「ひいひいっ! に、逃げるぞ、花京院ーツツ!」

「はあ、はあ! こ、怖かったよう! 喰われるかと思つたよう!」

「な、泣かないでくださいよ……」

迫りくる巨大な口にガオンされる直前、紫の茨を窓から伸ばし命からがら逃げ切った(無論念の為僕も同時に逃げた)、僕にすがりついてくる情けない色男に苦言を呈す。

「まったく、自業自得、というやつですよ。女性にあんな歯が浮くような台詞をほいほい言うから……」

「はあ!! お、おまえにだけは言われとうないわ!」

「は? 僕は彼女以外の女性にそのような発言をした覚えはまったくありませんが……?」

「あー、そうですか! そうですね!!」

「あ、今後するつもりも一切ありませんよ? 言うまでもないですが」

「わかるとるわ! ふーんだ! ばーか、ばーか!!」

「何怒ってるんですか……。完全八つ当たりじゃあないですか。そして、その悪口レベル……小学生か……」

「……このむつつりすけべ! 変態紳士! ストーカー!!」

「なにいい!? それは聞き捨てならん! そこになおれ! 成敗だ!!」

「べえーだ! やーいやーい! ここまでおいでーだ!」

そうして、再び僕達はベナレスの街を走り回る羽目になったのだった。

「……い、いたい……ッ! 身体中が……動けん……ッッ!!」

「……だから無理するなって言ったのに」

翌々日、案の定、遅ればせながら彼の全身を襲った筋肉痛から復帰するのを、宿で介抱しつつ待つ羽目になった……これもまた言うまでもないことだろうか。

「知らねーよ！ 知ってても教えねーよ！ このピチクソがあー！」

続いてやってきたのはルクソール。そのスタンドで鉄製のスプーンをフワリと引き寄せ、『バステト女神』のマライヤはプリンを食べつつ汚い言葉を吐く。

「レディ……失礼するよ。ハーミットパープル！」

「あ、このスケベジジイ！ 勝手に頭覗いてんじゃねーよ！」

「心外じゃなあ……。……本当に知らない、か」

そうして、やっぱり懲りていなかったこのひと……。

「にしし。DIOよりわしの方がいい男だってわかつたろ？」

「……フン。どうかしらね。ま、待遇によつてはあんたの愛人になってやつてもいいわよ。」

「ほ、ほんとに!?!」

満更でも……というか、その鼻の下が伸びきっている……そんな彼の様子に慌てる。

「な、なにいつているんですか!! ちよつと!! 駄目ですよ、ジョースターさん! そ

れって不倫ッ……」

「じよ、ジョーダンじゃって」

「フン、カタいことお言いでないよ。そうだ！ 花京院、アンタといえは……あたしは感謝されたつていいぐらいじゃあないのかい？ きやはははは！ うれしかつたくせにさ。あ・れ♪」

「な!?! な、な、なにを根拠に……！ そんな……」

「ふふん、知ってるんだよ？ あたしからは見えていたからね……身体は正直つてヤツだねえ」

「はッ！ ま、まさか!?!」

「アンタあるとき……」

「ぬああああああ！ そ、それ以上言うなあーッ！」

加えて、『ブルータス、おまえもか』。追い打ちの如く、しれつと味方のはずのこのひとも後ろから袈裟切りにされる。

「ああ、あれ？ 気づいてないの、あの鈍感娘だけじゃろ……」

「うわあああああー！」

「まあ、思春期にはよくあることじゃ……気にするな」

「う、うるさいよ！ なんだよ、そのイイ顔は!!」

「ししし……」

「し、知らないなら用はないッ！ もう帰る！」

「あら残念。じゃあこれ、連絡先。……待ってるわ、ジョセフ」

「い、いいの……？」

「……（こらッ!!）」

結局有益な情報はひとつもなかったうえに不名誉極まりない暴言を吐かれ、弱みを握られ……

「はあ……」

隣でメモを片手に御機嫌の彼の顔をため息まじりに見る。

（このひと……飛行機の災難だけでなく、女難の……）

そして、一抹の不安を残しただけであった……。

そんな僕の予感当たった様な……当たっていないような……。

それを僕が知るの、まだ先の話になるわけだが。

ちなみに、この困ったプレイボーイ、ちゃっかりもらった番号に本当に電話したらし

けさ!!」

「? ……それだけでなんでこんなトラウマを……?」

「し、しらん! しらん! さ、次に行くぞ!!」

何度重ねて問うも、結局頑なに詳細を教えるはくれなかった。

ようやく見つけたと思ったら、こんな転職(?)をしていた者もいた。

「……ええと、たしかこの辺だったはずだが……」

助手席にて、地図を広げる。

「すまん、わたしはあのととき共にいなかったからなあ……」

懐かしい、切り立った崖に囲まれている細いカーブの続く山岳地帯を運転しつつ、申し訳なさそうな表情を浮かべるアヴドウルさんにこちらこそ謝る。

「いえ。むしろ、それなのに付き合わせてしまつてすみません」

「ガウ(ま)ったくだ。おれまでこんなさみー山に連れてきやがつて……)」

「はいはい、すまんすまん、おまえの鼻、頼りにしたくてな」

後ろの座席で不満げに毛布にくるまつているもうひとり同行者を引き寄せ抱き上げる。

「……おまえも寒がりなんだな。毛皮がある癖に」

「ぐうう……（フン、しゃーねーな……）」

あのまま餓死している可能性もあるが。けっこう僕達はひどいことをしたものだ。とはいえ、あの時僕は彼女をあんな目に遭わされて正直それどころではなかった気もする。というかそもそも先に殺しに来たのはあっちだった。それにしたって白いカルシウム片になっていたらどうしよう……などと思いつつ、激情のまま『運命の車輪』の暗示の男を縛りつけた岩場の周辺を探索する。

「いないか、さすがに……。うーむ」

幸い、だかなんだか、現場には誰もいなかった。ついでに骨も。

どうしたものか、と思索していると、声をかけられた。

「……旅の方か？ 誰かをお探しかな？」

「ええ、実は、このあたりに……あつ！ おまえ!!」

「おや?」

その姿を見て目を丸くする。

「その太い腕のわりに貧弱な体つきはッ！」

するとあちらもこちらのこと気づいたようだった。

「ああ、君たちか」

「な、なんだ？ その格好は……」

頭は剃髪、そして身に着けているのは、オレンジ色の袈裟のような……。

「ああやって放置されたあと、わたしは運命の出会いをしたのだよ……」

——おぬし入門者か？ 方法をまちがえてはいけない——

そうして連れて行かれた先は大層立派な寺院だったらしく……

「優しかった。皆……」

「あ、ああ、そうなのか。そ、それはよかった……のか、な？」

「そんなわけで、君たちに受けたアレ……カトウーがきっかけでわたしは修行僧として開眼したのだ。俗世の欲望にまみれて君たちの命を狙った……そんな心卑しき己を今、悔い改めているところだ」

悟りとはかくも素晴らしいものなのか。

「さあ、修行だ……では失礼するよ」

「あ、ああ……頑張れよ……」

めでたしめでたし……？

いや、全く肝心の情報はやっぱり得られないままであったが……。

「修行に終わりはない……」

そして、能力的に大きな期待を抱いていたものの逃げ足の速さは相変わらずで行方知れずだったこの男、『セト神』のアレッシーをようやく発見したのもこの頃だった。

「やっと追い詰めたぜ！　ったく、おめえには大変お世話になりましたっつてもんだ！　おかげですっげーイイ……いや、ひっでー目に遭ったんだっつーの！」

顔を見るなりやつぱり逃げ出したアレッシーを久々に現地集合で共に行動することとなったポルナレフと迷路のようなルクソールの町を追いかけ挟み撃ちにする。

「待て！　危害を加える気などない！　話を聞け！」

「ひいひいひい！」

それでも逃げようとする男の首根っこを捕まえつつ詰問する。

「いいか？　正直に答えろ。そうしたら離してやる」

「は、はいっ！　な、なんででしょうか!？」

「貴様の能力で昏睡状態の人間を若返らせれば……どうなる？　意識を戻すことは可能

か？」

「え？　む、無理ですよ。あくまでオレのセト神は『若返らせる』それだけだ。老化によつて衰えたものであれば別ですがね。子どもにはなるが、眠ったままだ。それだけですよ」

「……………そうか……………」

「……またも空振りに終わった……………約束通り奴を解放したのち、足取り重く宿へ戻る道すがらのことだった。」

「……………」

「隣の男がある一軒の家の前で立ち止まり、その窓を見上げる。」

「(そういえば、こゝは……………)」

「気づいて振り返る僕に言う。」

「ああ、すまん。……………さ、いこーぜ」

「いつもどおりの笑顔を作り、歩き出そうとするポルナレフに告げる。」

「……………会っていなくて、いいのか?」

「うるせーな。だれにだよ……………」

「そのときだった。」

「あ……………!」

「家の中から、誰かが出てきた。」

「あのとときの女性だった。」

「……………やさしそうな、男性とともに。」

「……」

ふたりは笑顔でみつめあいながら、連れ立って街の雑踏へと消えていった。とうに過ぎ去っていつてしまったその背中を見つめ、ただひとこと、男はぼつりと呟く。

「……よかったわ。しあわせそーで」

「……。ポルナレフおまえ……、かつこいいな」

「……うるせー」

僕はそれ以上何も言わず、ただ、彼の背中を叩いてやった。

そういえば、もうひとり、期待していた能力……と言えば、だ。

「……ぼぶー……チツ、ただの赤ん坊の振りも楽じゃねーぜ……」

一人で会いに行かざるを得なかった、その『赤ん坊』の元へ向かい、周囲に誰もいないのを見はからってそつと声をかける。

「……おい、マニツシュボーイ」

「うぎやああ！ あ、あんたはッ！」

とりあえず、まず重要事項を確認する。

「あれから、貴様のスタンド、デス13……悪用などしていないだろうな？」

「あ、あたりまえですよ!! あの味はわすれられねえ……。うつぶ! 思い出すと、また……。もう、こりこりですよ。ただの赤ん坊してるほーが何倍もました」

事実こみ上げている模様。その様子に心底の反省を感じ、涙を呑んで非道なお仕置きをした甲斐があつたものだ、と満足感とともに頷く。

「よし、ならばいい。今日は聞きたいことがあつてきた」

「な、なんですか……?」

「ひとつは……おまえの能力で昔、僕の腕の傷を消したことがあつただろう? あのよ
うに、現実で負つた損傷を治す……そんなことは可能なのか?」

「ええと……。む、無理だと思えます。あれができたのは、あの傷がもともとぼくのナイ
トメアワールドの中でついた傷だったからで……」

「まあ、そうだよな……。そうだとお思っていたが」

「はい、すみません……」

「いや。あと、他に、だれでもいいんだが、スタンド使いの居所や能力に心当たりは?」

「いえ、居場所や能力までは……。あの館でしか、ぼくは他のスタンド使いになど会つた
ことがないので」

「そうか……」

「あ、でも……」

「なんだ!？」

「い、いえ、全然、どうでもいいことかもしれないですが……」

「いい。言ってみろ!」

「は、はい! ええと、実はあの館でぼくとおなじような赤ん坊を何人か見かけまして。あいつらもスタンド使いなのかなーって。ぼくみたいな超天才児めったにいないでしょうに、なんか気になって……」

(赤ん坊……?)

「……そうか、協力に感謝する」

「は、はい、滅相もないです。そ、その節は本当に申し訳……」

「いや、もういい。今考えると……みせてもらったからな。いい夢も」

「へ?」

「なんでもない。……いい子で暮らせよ」

そして、ふたたび『いい夢』をみたあと……

アスワンで出会った兄弟の、弟の方と僕は改めて面会していた。

「ずいぶん背が伸びたなあ。見違えたね」

「そうですか？ えへへ……きつと成長期なのですよ」

おどおどしていたあの頃と、その表情も全く異なるものであった。

「わざわざ連絡、ありがとう」

「いえ……じゃあ、さっそく、お見せするです」

ポインゴ君がそのスタンド……一冊の書物を出し、開く。

この少年には、実は手がかりを求め一番最初に会いに行っていた。

しかし、あの事件直後は、この『予言の書』は真つ白なまま、なにも現してはくれなかった。

そして、約3年後の現在、とうとう反応を示した……と先日、約束通り連絡をくれたのだ。

「これ、なのです……」

そこにはこんな漫画が描かれており、このように締めくくられていた。

『二人の少年の力によってお姉さんは……』

なんと、ぱっちり目を覚まし、ちぎれた左腕も元通り！ やったね！』

「ど、どこにいるんだ！ その少年たちは！」

「そ、それが詳しい予言がまだ浮かび上がってきていないのです。まだ遠い未来の出来

事だからか……よくわかりませんが」

「そうか……」

「この絵の感じからすると、金髪と黒髪みたいですね、はい。

どちらも、なんだかやたらと個性的な髪型ですね……」

「ほんとうだ……」

頭に浮かぶ。

(『ふたつの国』の、『ふたつのピース』か……?)

「すみません、あまり役に立てなくて。でも、トト神の予言は絶対なのです。はい。

……だから、お姉さんは、必ず……!」

「ああ、それがわかっただけでも大きな収穫だ。ありがとう!」

「それはこちらの台詞なのです」

「……え?」

「あのとき……お兄さんにどきどきしながら声をかけたとき……一歩踏み出せた。それで、ぼくはすこしだけ変わった気がするのです」

少年はにつこりと笑う。

「ぼくが世のため、誰かのために、この能力は使うべきだと気づけたのも……」

そして、今オインゴおにいちゃんと仲良く、自分らしく暮らしているのも……

きつとお兄さんと、そして、お姉さんのおかげなのです。

だから、必ず、お姉さんを起こしてあげてほしいのです！」

「ああ、もちろんだ」

強く頷く。

「また、あのコロツケパンを、お姉さんと食べたいのです……」

「うん……僕もだよ」

そして少年に礼と別れを告げ立ち去ろうとした。そのときだった。

「あのー！ あと、これは言うべきか迷ったのですが……」

こないだカイロの街へ行ったとき、実はあいつをみかけたのです……」

「……なに!？」

「久しぶりだな……ホルホース」

そして、それから半年後、少年の目撃情報を頼りに居所を掴んだ男に会いに行った。

「てめえは！ 花京院!？」

「オレもいるぜ!」

「ほ、ポルナレフまで!? お、おいおい、おそろいで何の用だ? おめーらがD I Oを倒

した、つてーのは風の噂つてやつできいたぜ。もうおれにはアンタらを狙う理由なんてこれっぽっちもねえ。追われる理由もねえはずだが？」

明らかに腰が引けつつも虚勢を張る男に問いかける。

「おまえに聞きたいことがある」

「聞きたいこと？ そんなのに答える義理もあつたかねえ？」

馬鹿にしたような調子でうそぶく男に対し、呆れたように吐き捨てる仲間。

「けつ！ あいかわらずだぜ、こいつ！ しかも、結局ピンピンしてやがる。ゴキブリ並みの生命力だな……ある意味尊敬するわ」

「……便器舐めさせられてたどつかの誰かさんに言われたかないね」

「う、うるせー！ 忘れろ！ あんなの!!」

あの嫌な記憶が甦つたのだろう。苦虫を噛み潰したような顔をする彼をよそに、こちらに向け軽口を叩く。

「しかし、コイツとのコンビたあずいぶん色気ねえじゃあねーか。

花京院、愛しのハニーは？ どうしたよ？ いっしょじゃあねーのか？」

「あつ！ そ、それは……！」

慌てるポルナレフ。それを制し、僕は重い口を開く。

「……彼女は……」

「……そうか」

それを聞くと男は帽子を目深にかぶり直しながら、ぽつりと呟く。

「嬢ちゃん……やっぱりか……」

聞き捨てならないその言葉について反応してしまう。

「なに？ ホルホース貴様、何か知っているのか？」

すると奴は天を仰いだのちこちらを見据え、ばつが悪そうに切り出した。

「……あの日、病院で、嬢ちゃんにばつたり会って……」

館の場所を教えてやったのは、他でもない……

「……この、おれだ」

「おまえ、が……!?!」

ずっと不思議だった。あのときどうして、彼女はもどつてくることができたのか、が。

……もどつてきて『しまった』のか、が。

すべてを断ち切り、おいてきた。

そのつもりだったのに……

「なぜだ!?! 僕が……ッ! ……なんの、ために……ッ!!」

気がついたら掴みかかっていた。

「……」

「お、おちつけ!! 花京院!」

わかっていた。

こんなの八つ当たりにはすぎない……そんなことは。

だが、抑えることなどできなかった。

「……花京院。おまえには、悪かった、と思っている。

……が、負けちまったんだ。おれは。

嬢ちゃんの……あの、一途で情熱的な……澄んだ眼に……

頼みを断れば、それが曇つちまうのはわかりきったことだった。

必死だったぜ。おまえに見せてやりたかった。本当に」

「……」

「……すまなかった」

「……。わかって、いる。……こちらこそ、すまない」

「花京院……。うっし! そんなわけで、だ!!」

ねぎらうように僕の背中を叩きつつ、ポルナレフが明るく仕切り直す。

「ホルホース、おまえに聞きたいことってのは、オレら、あいつを『治せる』スタンド使

い捜してんだわ。何か知らねーか?」

「『治す』スタンド使い、か……。そんな強い力を持つスタンド使いなんて……」

そう発した後、考え込むように押し黙る

暫しの間の後、男は僕たちに問う。

「……DIOが『なにしようとしていたか』は知っているか？」

「DIOの目的？ スタンド使いを集め、その頂点に立ち、世界を支配する……本人がそう言っていたのを聞いたが、そのことか？」

答えると、含みを込めた言葉が返ってくる。

「ああ。まあ、表向きは、そうだ」

「表？ ってことは裏があんの？」

ポルナレフがそれを突っ込む。

「らしい……が、そこまではおれも知らん。だが、奴には秘密裏に何か大きな目的があつて、味方になるスタンド使いを増やそうとしていた。これは確実だ。で、その方法のひとつが……」

先んじて解答する。

「弓と矢」

男は頷くと続けた。

「ああ。それは知つていやがったか。じゃあ知つているか？ もうひとつ。強力な、しかも味方になる確率の高いスタンド使いを増やす『方法』を」

「なに……?」

「やつには……『子供』がいる。それもひとりやふたりじゃあねえ」

「なッ!？」

「気づいたか? スタンドには遺伝するタイプがある。おれや……おまえらもか? そうじゃあねえ方が多いのかもしれないが。ジョースター家のやつらはその代表例ってもんだらう?」

「……」

思い当たる。

(そうだ……彼女の一族も……)

「DIO……あいつの『身体』は、ジョナサン・ジョースター。」

それを利用して、手駒になるスタンド使いを増やそうとしていたみてーだな」

「な、なんて野郎だ! 人の身体で……!!」

ポルナレフが語気を強める。まったくの同感だった。吐き気がこみあげてくる。

「ちなみに、エンヤ婆も言ってたぜ……あと30若ければ! ってな……」

「……あのババア……」

「まあ、ババア、若い頃はこつちからお願ひしたくなるくらいに絶世の美女だったらしいがな」

「マジかよ……」

「それはともかく……だ。そんなわけで、DIOにとって、ふつう、女は『食料』にすぎなかった……が、スタンド使いの母親となりや話は別だ。確率考えたのか知らんが、自身もスタンド使いの女は特にな。嬢ちゃんもそんな風に誘われてなかったか？」

「そういえば……」

——他の女性はどうだか知りませんが、私は死んでもお断りします——
きつぱりと一刀両断していた、あの凜としたすがたを想い出す。

「ま、どっかのキザ野郎ひとすじな頑固一徹嬢ちゃんは例外として……」

実際そんなのに協力的な女ばっかだったのが、またぞつとする話でな」

——女は皆……それを望む——

そして奴の言葉を思い出し、身の毛がよだつ感覚がした。

「もしかしたら……いや、どっかに確実にいるDIOのガキたち……」

やつらがそんなとんでもねースタンド使いになっっているかもしれねーってことだ。

まあ、問題は……」

お手上げ。そんな様子で両手を天の方向へ向ける。

「そんなやつらがおまえらの『お願い』を叶えてくれる……」

……なんて、到底思えねーことだな……」

「……」

(それどころか……)

まだ形にもなっていないような、大変漠然としていておぼろげな……

しかし確かに、胸中には穏やかではないざわめくものの存在を感じていた。

「おれが知ってるのはそれくらいだ。まあ、でももし、またなんかわかつたら連絡してやる」

それだけいい残し去ろうとするホルホースに、もう一つ浮かんだ疑問を訊ねる。

「ああ。感謝する。しかし、なんでまた急にそんなに協力的に……？」

「あん？ そんなの決まってるじゃあねーか。おれは……」

振り返りテンガロンハットを脱ぎ捨て言い放つ。

「世界中の女性の幸せを、心から望んでいる男だからだ」

「あ……」

「……けっ！ どつちが気障野郎だよ！」

隣でにやにやとポルナレフが笑う。

「嬢ちゃんのこと……あきらめんじゃあねーぞ、花京院」

「ふっ、愚問だ。おまえにいわれるまでもない」

「けっ、ならいい。……じゃあな」

(……『子供』か……)

この、たったの一年すら経たないうちの、ある日のことだった。

僕が『彼』から耳を疑うような知らせを受けたのは。

Love & Chain

事の始まりは唐突極まりない一本の国際電話だった。

「よお、花京院」

「ああ、承太郎。げん……」

「結婚することになった」

「は？」

「ガキができた。そういうことだ。一応知らせておく」

「はぁーッ!? ちよ、ど、どういう……」

「以上だ。また連絡する。じゃあな」

そして言葉通り容赦なく通話は切断され、加えてそれ以降、何度かけ直すも僕の耳に届くのは無機質な電子音のみで、彼の声を聞くことは叶わなかった。

そういった理由で僕は今、親友に会うため急遽手配した米国行きの飛行機に揺られ雲の中に居た。

彼があんな調子なのはいつものことなのだが、流石に心配になったのだ。心なしか、

ほんのわずかだが『いつもとちがう』そんな気がした。一応、友人歴約5年。それくらいはわかる。が、彼について、もつと知っておくべきことを自分は知らなかったのだろうか。

そもそも、結婚……なんせ相手が必要なことなのだ。当然ながらまず浮かんだ疑問は「一体誰と？」というものだった。恋人は「それっぽいのならいっばいいる」とか本気なのか冗談なのかさっぱりわからない、これまた通常通りの仏頂面のポーカーフフェイスで言っていたのがまだ記憶に新しい。それくらい、ほんのわずか数か月前に会ったときには全くそんな兆候などなかったはずなのだ。

とはいえ、実は僕にはひとつだけ、心当たりというか、気になっていたことがないわけではなかった。

あれは確か、もう数年前になる。雪がしんしんと降り積もる、寒い夜のことだった。

……花京院、おまえ……どうやったら……

あのとき、直感的に思った。

ああ、こいつにも、たいせつなひとができたのか、と。

が、軽く探りを入れたらやっぱりいつも通りの調子ではぐらかされたため、それ以上

尋ねるのも無粋か。きつといつか話してくれるだろう……などと、思っていたのだが。

そして『あのこと』も。

いつもそうなのだ。あいつは。

(まあ、直接会って聞くしかないか。なんで電話つながらないんだろう？ なにやってんだよ、承太郎……)

「……か……」

聞いていたアドレスを頼りに、彼のアパートメントにたどり着く。窓から明かりが漏れている様子が確認できた。どうやら在宅中のようだ。と、とりあえずほっとしつつ、彼の部屋の前でインターホンを鳴らす。

すると暫しの後、鍵を開ける音がし、チェーンの隙間だけ扉が開いた。

「やあ、承太郎。僕だ。はは、おもわず来ちゃったよ。……って、あれ？」

そこで僕はドアの陰にいるのが友人ではないことに気づく。

「……じよ、承太郎の、お知り合いですか？」

そこには心細い面持ちの見知らぬひとりの女性が立っていた。

「は、は……」

面食らいながらも、慌てて言い直す。

「失礼しました。突然の訪問、申し訳ありません。僕は花京院といいます。承太郎は不在でしょうか？」

「あ、いえ、少しお待ちください」

「そう言い残すと、女性は奥へと引つ込んでいった。

ドアの前で待つ間、思う。

（もしかしたら、いや、しなくとも、今の方が？　というか、予期しておくべきだった……）

「婚約中であるならば、共に暮らしていてもおかしくはない。そりやあそうだ。

扉が再び開く。今度は大きく。そこから現れたのは今度こそ、見知った顔だった。

「花京院、やつぱりおまえか。なんでこんなところにいるんだよ……」

「ははは、なんでだろうね？　まったく……！」

「まあ、上がれや。なんて、僕の恨み節もどこ吹く風でリビングに通される。それどころか……」

「来るなら連絡ぐらいしろよ」

「したよ！　何回も!!　電話に出なかったのはそっちだろう!？」

「ああ。そうか。しばらくこの家に居なかったからな。それでだな」

「……」

万事がこんな調子だった。まるで暖簾に腕を押ししているかのようだ。言い換えるならば糠に釘。呆れて絶句する僕に承太郎はやっぱりしれつと訊ねてきた。

「で、どうしたんだ？ 急に」

「はあ？ どうもこうもないよ。あんな爆弾みたいな発言落つことしといて、しかも音信不通とか……気になるに決まっているじゃあないか」

「……それだけのためにわざわざ？ 暇人か……」

「暇じゃあないっ！ 失敬だな、この……！ く、くそ、来るんじゃあなかった……！」

「ふっ……すまん。冗談だ」

口の端でわずかに笑いながら、傍らの女性に声をかける。

「紹介する。……おい、シャル」

促され『シャル』と呼ばれたその女性は会釈し自己紹介をする。

「……シャーリーンです」

「こいつは花京院。日本の、おれのダチだ」

続いて紹介を受けて、僕も改めて親友の婚約者ファイアンセに挨拶をする。

「初めまして。僕は花京院典明といいます。よろしくお願いします」

「……っ。よろしく……お願いします」

（あれ……？）

不思議に思っているのも束の間だった。シャリーリン嬢はくるりと背を向け、何をするかと思えば、壁に掛かっていたハンドバッグとコートを手に取った。

「承太郎。じゃあ、わたし帰るわね」

「ああ」

「え？ いえ、突然来たのは僕の方なんですから。僕がおいとましますよ」

人騒がせ極まりない友人の無事はわかったのだ。火急の目的はもう果たされた。今回3日間はこの近隣ホテルに滞在予定であることだし、また出直してくればいいだけの話だ。どうやらこの二人同棲しているわけではないようだが、だからって馬に蹴られたくはない。とつとと退散せねば……そんな僕の細やかで密やかな配慮は悲しいかな完全に空振りに終わり、彼らはこんなことを言い出した。

「いえ、どうせすぐに帰るつもりだったので」

「そういうことだ。じゃあな」

「ええ、じゃあね。花京院さん、ごゆっくり」

「えっ!?!」

ふたりのあまりのクールさに驚いてしまう。

「い、いや、じゃあ、せめて送ってさしあげろよ、承太郎。もう暗いし……」

この辺り、治安は決して良くはないだろう。しかも、この女性、妊娠……をされてい

るのではないのか？　そもそも、よく考えたら何故僕だけがひとりこんなにオロオロしなければならぬのだろうか。釈然としない。

(な……なんだ？　この雰囲気。とても婚約中の恋人同士とは思えないのだが……喧嘩中か？)

　もしも自分だったなら……と想像してみる。

(……うん。できうる限り、片時も離れたくない。離したくない……離すものか) 相変わらず、夢でしか逢えない最愛のひとのことを想う。

(いいなあ。仁美さんと婚約とか、結婚とか。そんなの、死んでもいい……いや、うそだ。よくない。逆に絶対死にたくない。死んでも死にきれん……)

　そんなふうには思考が逸れきっている僕をよそに淡々と彼らの話は進んでいた。

「いえ。家近いので。だいじょうぶです。じゃあね」

　そう言つて、シャーリーン嬢は部屋をあとにする。

「あつ！　い、いいのか!?　承太郎!？」

「だいじょうぶだ。ほつとけ」

「でも……!？」

　そうはいわれても、自分が突然訪問してしまったことに責任の一端は確実にある気がする。

しかも……あの、表情。

「やはり気になる。僕、行ってくるよ。すぐ戻る」

「ちっ、おせっかい野郎め……」

「……シャーリーンさん！ 待ってください」

「か、花京院さん……!?!」

追いつき、声をかける。振り返ったその人は案の定、眼頭をハンカチで押さえていた。
(やっぱり。泣いているじゃあないか……)

「……なにかあつてはいけないので。僕で申し訳ないのですが、送ります」

「……優しいんですね」

「いえ、僕が突然お邪魔してしまったのがいけませんでした。貴女の御気持ちを害してしまいましたね」

「っ！ ち、ちがうんです……。ちがうんです……。すみません……」

そういうと、シャーリーン嬢はぼろぼろと涙を零しながら理由を話してくれた。

「わたし、わからないんです。承太郎の、考えていることが……」

「え？」

「その、結婚のことも、この子のことも。本当は、どう、おもっているのか……」

「で、でも、婚約中なんですよね？」

「はい、たぶん……」

「た、たぶんって……。えっと、その、なにか彼から言葉とか……？」

「この子のことを伝えたときに、『そうか、じゃあ一緒になるか』と、それだけ」

「そ、それは……」

あまりにあつさりしすぎだろう。承太郎らしいともいえるが。

「だいたい、あの男がそんなミス（子どもができるような……だ。些か言葉が悪いけれど）をするとは思えない。すなわち、『そう』なつたからには、『そう』なつてもよかつた。ちゃんと責任をとるつもりがあつた。イコール、それはこの女性のことを、彼は、彼なりにとても『愛している』……そういうことだ。と、僕なら推測できる。」

しかし、当の女性の立場からすると、大層不安になるだろう。それもよくわかる。

「そもそも……わたしたち、ちゃんと付き合っていたわけでも、たぶんないから……」
「え!？」

「二度も、愛してる、はおろか、すきだ、も、ないんですよ？　それで婚約者とか……わらっちゃういますよね」

シャーリーン嬢は、今にも泣きそうな顔で、笑う。

「けど、わたしは彼のことを、ずっと、すきだったの……言葉なんてなくても、それで

も、よかったんです。子どものことも、わたしはすごくうれしくて……」
ぼつりぼつり、言葉を紡ぐ。

「承太郎はそもそも……だれにも、本当の心をみせない。いつもそんなかんじだった。でも、言葉はすくなくないけれど、やさしいひと。」

そんなことは、わかっていたから、信じて、いて……」

(……よかった。それはわかってもらえていたか……)

相変わらず誤解を受けやすい親友のことを、ちゃんと理解してくれていることに安堵する。

「なのに、今日、貴方が来たときの承太郎が、とても、嬉しそうで。話しているときも楽しそうで……あんな彼、みたことがなくて。ああ、これがほんとうの承太郎なんだ、つて。しかも『友だち』だ、なんて。わたしは、そんなこと、いちども言われたことないのにつて……」

曇つていく。そして、再び頬を涙が伝う。

「花京院さん、貴方に嫉妬したんです。……おかしいですよ。本当に、ごめんなさい」
それを隠すように、ペこりと頭を下げる。

「シャーリーンさん。あいつは……」

(しかし、これは、僕が言っても意味のないことだ……)

躊躇っているうちに目的地に着いてしまったようだ。

「あ、これがわたしの家。もう大丈夫です。ありがとうございます。初対面なのにいろいろ愚痴つてしまつてごめんなさい。忘れてくださいね」

そういつてシャーリーン嬢は建物の中へ消えていった。

「……戻つたよ」

「ああ。どうだ？ あいつ、なかなかいい女だろう？」

ソファにもたれ背中越しに、ロックグラスを傾けながら僕にいう。

「ああ。非常に君がすきそうな感じの方だね……」

対面に座り、彼の目を見ながら、問う。

「承太郎……ちよつと、いいかい？」

「なんだよ？」

「シャーリーンさんに……どうして、もっとやさしくしてあげない？」

「……」

目をそらすかのようにグラスの中身を煽り、無言を貫く男に続ける。

「……わかつているよ。」

君は、自分にいつなががあるか、わからないとおもっている。なにかあったときのために、そうしているんだろう？

彼女たちに迷惑をかけたくないと、そう考えて」

なおも、押し黙る。氷だけが静かにカラリと音を立てた。

「……そして、これでもなお、言ってくれないのかい？

僕が気づいていないとでも思っているのかな？

君が『あるとき』以来、なにか重要な案件を独りで抱えていることを」

「!？」

グラスを持つ手がぴたりと止まる。

「君はいつもそうだ。

僕たちをも巻き込みたくない。自分でなんとかする。

そう思っているんだろう？」

想い出す。ひとりですべてを背負ったまま『運命』に立ち向かった強く儂いその姿を。

同時にずきりと胸を抉られ、そしてぽっかりと穴が開く、生々しい感覚。

「だれかさんに、そっくりだ。

僕が好感を抱く人間って、どうして皆こうなのかな？

もう、二度とごめんだ。あんな……」

「花京院……」

「僕たち、仲間じゃあないか。もつと信頼してくれよ。」

君にも、君のたいせつなひとたちにも、手出しはさせない……かならず」

——私が護る——

彼女もここにいたら、こういうだろう。きつと。そう。そうだ……

「……すまん。おまえらを信頼していなかったわけじゃあねえ」

すると彼は長い沈黙の末、ポツリとこう言った。

「『あれ』は、危険すぎる。おぞましすぎる。」

だから……おれは誰の目にも触れないよう、『あれ』を燃やした」

滅多に動じることなどない、強い精神の持ち主である彼の青い瞳が揺らぐ。その珍しい様子にこちらもつい息を呑むと、それに気づいたかのように、彼は補う。

「言わずにおいたのは、おまえらにそれを言う必要がない……そう思ったからだ」

「……え？」

「誤解するな。おわつた、と……。そういう意味だ」

立ち上がり、もうひとつ空のグラスを柵から取り出し、再び腰掛ける。

「口に出して広める方がリスクが高い。だから、これからも言わずに済めばいいと思っ
ている」

ボトルをゆつくりと傾け、琥珀色の液体を注ぎこちらへと差し出す。

「……が、万一の時が来たら、伝える。必ず。花京院、おまえにしか、言えん」

「承太郎……」

「そのときは……、まあ、頼むわ。……親友」

「……わかった。そんなときが来ないことを僕も祈ろう。

そして、もしものときは……、任せてくれ。……親友」

受け取り、互いのグラスをゆつくりと合わせる。

「フツ……」

それを皮切りに、どちらともなく一気に中身を飲み干す。

「……美味しいね」

「だろっ?」

銘柄が気になり、卓上に堂々と鎮座する酒瓶に手を伸ばす。

「ハバナクラブ15年グランレゼルヴァか。これ、かなりの高級品だろう?」

「まあな。問題ない。じじいのコレクションから拝借した」

「ふっ……なるほどね」

問題なくはない気がするが。嘆く祖父の姿を想像して、少しおかしくなる。

こっっそり微笑ましく思っていると、承太郎はすつと指を差す。

「そのラベルの女……いるだろ？」

「ん？ ここに描かれている女性の像のことかい？」

「ああ。それ、どつかの港街に実際に立っているブロンズ像らしいんだが……」

ひよいとボトルを奪い取ると、再びなみなみと僕および自分のグラスに注ぎつつ、語る。

「“ヒラルディア” っていうてな。いつ帰ってくるともわからねー旅に出た夫を辛抱強く待ちつつつけた、って女の物語がモチーフになっているんだと」

そして、にやりとわらう。

「……お似合いだろ？」

「ふっ。……そうかもね」

もう一度、景気づけにグラスを合わせる。小気味よく響いた音色に押され、僕はもうひとつ彼に気になっていたことを訊ねることにした。

「で、だ。どうしてだい？ 教えてくれなかったのは」

「なにをだよ？」

「もちろん、シャーリーン嬢のことさ」

「……ああ？ そんなの、それこそ……いう必要ねえだろ」

「ちがうね。君は僕に明らかに隠していた」

「……」

「当ててあげようか？ 考えすぎかとも思ったけど、明らかに普段と違う君の態度で確信したよ……」

言い放つ。確信を持って。非常に彼らしい、その『理由』を。

「承太郎。君は……僕に、遠慮している」

「ッ!？」

「仁美さんの目が覚めるまではと。すきなひとのこと、黙っていてくれたんだろう？」

僕のつらさが、増さないように……と、そう思つて。君は、そういうやつだ」

「……」

「僕はだいたいじようぶだから。幸せそうな誰かをみると、たしかに羨ましいし、彼女のことを想い出して、胸が苦しくなる。でも、それ以上に、彼女のことを想い出せて……それだけでも、うれしいから」

「花京院……」

「それに安心してくれ。すぐに追いついて、追い越してやるよ。」

僕たちも、君たち以上にしあわせになんて、すぐになつてやるからさ。

そんなの心配せずに、先に、とつとと……しあわせになつていてくれよ。

僕も……僕らも。君がしあわせなら、けっこうしあわせ、なんだからさ」

(ね、そうでしよう? ……仁美さん?)

瞳を閉じ、想う。

——もちろん!——

そんなこえが、どこかから、きこえた気がした。

「……ふん。……つたく、考えすぎだ……。このお節介野郎……共が……」

素晴らしいながらも、俯く親友の目に光るものが見えたのは、きつと見間違えではないだろう。

「……それは、まったく……失礼したね」

「じゃあ、またな」

「ああ。またな」

僕の滞在期間はあつという間に過ぎ、帰国の日となった。

あれから、このぶつきらぼうな彼が婚約者にどんな愛のことばをささやいたのか……そんなの、僕には知る由もない。

しかし、空港で彼とともに見送ってくれたシャーリーン嬢の顔は、別人のように晴れ

やかで……

そして、とても、しあわせそうだった。

*

*

*

ダチを乗せた飛行機が青い空をまっすぐに進んでいく。

その様子を眺めつつ、煙草をふかそうか……そうおもったが、やめた。箱を取り出し、ごみ箱へと放り投げる。

「……どうしたの？」

そんなおれをみて不思議そうに呟く、隣の女にいう。

「……腹に、よくねえだろ」

「……っ！ 承太郎……っ……っ！」

見開かれたその瞳がどんだん潤んできて、いまにも零れ落ちそうになる「やれやれだぜ。そんなんでちゃんと母親やれんのかよ。ったく……」

おもいだす。あの、春の日を。

「まあ、おまえが泣き虫なのは、最初から……か」

(つたく、本当に似合いの酒だぜ。花京院、おまえに……)

(……そんで、おれにも、な)

あいつはいつも、ひとりだった。

カラカラに乾いた、湿った空気とはまったく縁がなさそうな、なにもかもが、だだっ広いこの大陸。

そんな中でもなおさらいつそう、明るく楽しいキャンパスライフとやらを皆満喫している……そんな大学の一室で。

「ハイ、ジョジョー！」

「きゃー！ 今日もイカしてるわ、ジョジョー！」

「一緒に帰りましょう、ジョジョー！」

「今日、家でパーティーがあるの！ ジョジョもこない？」

「……やかましい！ うつとーしいぞ！」

「きゃー！ わたしに怒ったのよ！」

「わたしよ！」

「わたしだってば！」

「きいーツ！」

「……」

無言で席を立つ。

「あー、行っちゃった……」

「あんたがうるさいからよ！」

「あんたがでしょ！」

女というものは万国共通、こんなふうはどこへ行ってもキヤーキヤーと群がってくる、うっとーしいものであるのだろうか。うんざりしてくる。

そんな中だったからだろうか？ 余計に際立ってみえた。共通に選択している科目が多いのか知らんが、よく見かけた……そのたび、いつもだった。

じめじめと、教室の片隅で暗いかおばかりしている、あの女が。

それはそれで、うっとーしい……

そんなふうに、おもっていた。

おれが大学進学を機に渡米して、約半年が経った。

日本では、そろそろ桜の蕾が色づきだす……そんな季節になる頃だろうか。こちらで

の生活にも、一人暮らしにも、ようやく慣れてきた。そんなときだった。

「もしもし? やあ、承太郎。元気かい?」

「よお。花京院」

日本にいるダチから電話がかかってきたのは。なんでも、知り合いがこちらの病院で大きな手術をするため、その激励にアメリカに来るということだった。

「お見舞いついでに君の仏頂面を拝むのも悪くないかなと思つてね。都合はどうだい?」

そんなふうには、1つ年下にもかかわらず生意気な口をたたくやつに言い返してやる。

「あん? てか、こないだ会つたばっかじゃねーか。てめーこそ、暇人かよ。大学受かつたばっかだろ? なんか準備とかねーのか?」

そうなのだ。受験という見えない鎖に縛られていたこの男、つい先日無事、サクラが咲いた……と、そんな報告はじじい経由で聞いていた。

ちなみに卒業式を冷やかしいってやったが、なんだかんだたくさん人間の人間に囲まれていて……まあ、それなりの高校生活を送っていたようだ。

「準備? 別に。実家から通うし、これといって今やることないんだよ。

暇人とは心外だな。ようやく得た自由な時間を、いかに有効活用しようか……: そんなふうには目下画策しているところさ」

「……ああ、なるほどな」

もうひとつの『鎖』の存在を思い出す。

こいつをがんじがらめに……それでいて、なによりもやさしく……こいつを縛っている、それを。

さがしもの、のてがかりを得る。そんな目的がこいつのなかでほとんどを占めているのは確かだろう。

(それにしても……)

「てめーがそこまで深入りする『知り合い』ってのは、めずらしいじゃあねーか。女か?」
気になったことを聞いてみた。そんな可能性は『あいつまつしぐら』な、この男のこ
とだ。限り無く0に近いだろう……と思いつつ、軽口を叩く。あわてふためき否定する
必死の声が受話器の向こうから飛んでくるに違いない。

……と、そんなおれの予想は珍しく外れたようだ。

「ふふ。まあね。君にも紹介するよ。すぐく素敵なレディさ。将来性にあふれた……
ね」

「なん……だと……?」

「あーっ！ 花京院のお兄ちゃんだ！ ほんとに来てくれたんだ！ わーい！」

「こんにちは。体調はどうだい？ みづきちゃん」

「……」

あの電話から2週間後。予告通り訪米した男に付き合いやつて来た、スピードワゴン財団ゆかりの病院の一室。そこには一人の少女がいた。

「紹介するよ、承太郎。みづきちゃん（7歳）だ。どうだい？ 言った通りだろう？」

「……まあな」

そんなわきやーない。そんなことはわかっていたが……

不覚にも、なぜだかホツとしてしまった、そんな腹いせに悪態をつく。

「……色気がねー女が趣味なのは知っていたが、ここまでとはな」

「はあっ!? なんだと!？」

すると今度こそ、いつもどおりの安定の反応が返ってくる。

「仁美さんのあの無垢と純粹さのなかに見え隠れする一途な情熱とそれゆえの高潔な色気が理解できんとは……! 君の趣味嗜好こそ僕には理解不能だね。まあ、わかってもらっても困るといえば困るがな!!」

「ふっ……」

「まったく……」

そんなおれたちにくすくすと笑う声が届く。

「お兄ちゃんのおともだち？ 仲良しだね！」

瞳をきらきらと輝かせる少女。

「ふん……。仲良くなんてねーよ」

くしやりとその頭を撫で、伝える。

「……手術なんだってな。……まあ、がんばりな」

「うん！ ありがと、お兄ちゃん」

そこでガチャリとドアが開く。

「あー！ お父さんだ！ 花京院のお兄ちゃんがお友だちと来てくれたよ!!」

「おお！ 花京院君！ ひさしぶり！ その節は本当に……」

「いえいえ。僕はなにも」

話から推測するにこの少女と知り合いになったのは、やはりいつもどおりの成り行きお節介の結果らしい。

なんともこいつらしいな、と思いつつ、ドアノブに手をかける。

「じゃあな。花京院、終わったらしい。屋上で……モク吸ってる」

「ああ、わかった」

「ふう……、ん？」

ああいうのは性に合わん。そんな気持ちとともに煙を吸い込んでいると、一人きりだった屋上に誰かが入ってくる気配を感じた。

向こうからは死角となっているのか、どうやら影で煙草をふかしているおれの存在に気がついていないらしい。

(女か。……あれは!?)

見間違えかと思った。が、確かにそれは教室でよくみかける……辛気臭い、あのかおだった。

女はふらふらと端まで歩いていき、柵を越える。

「……そっちには……もう道はねーぜ」

「ツ!？」

そこに、声をかける。

「死にたいならよそでやんな。迷惑だ」

「あ、あなたは……!?!? あ……ああ……っ!」

あつというまにその大きな目、いっぱいにあふれてくる。

「……泣くぐらいなら、すんじゃねーよ……」

女はへなへなと力なくその場にへたり込み、泣き崩れる。

「……………どうして、とめたの……………？ ほっといて、ほしかったのに……………」

「なにいつてんだ。そんな、たすけてくださいって顔してよ……………」

見たままの感想を口にした途端、その表情がカツと変わる。

「つ！ たすけてなんて、いつていない！ だいたい、おなじこと。あなたは、無駄なこ

とをした……………意味なんて、ないんだから……………ッ！」

そうして、あつという間におれを押しつけ、去っていつてしまった。

「……………チツ。わけがわからん……………」

閉まりゆくドアをみつめ、呟く。

「やれやれだぜ……………」

ほんとうに、いけすかねえ女だ、と。

「承太郎、すまん。待たせた」

「……………ああ、花京院か」

暫時の間の後、再びドアが開いたかと思うと、そこから覗いたのはダチの顔だった。

おれを認めた瞬間、その顔が、心配そうに歪む。

「……………どうした？ なにかあったのか？」

「ああ？ なんでもねえよ。なんでだよ？」

質問の意味が分からなかった。不思議に思い、問い返す。

「なんでつて……気付いていないのかい？」

すると花京院はその形の良い眉をひそめ、いった。

「君のそんなにかなしそうな顔をみるのは、『あのとき』以来、ひさしぶりだからさ」

それ以降、あの女は大学に姿を現さなかった。

「……おい。あいつ、最近見ねえな」

気になったわけじゃあねえ。本当に死なれたんじゃあさすがに寝覚めが悪い、それだけだ。

あの女の前の席にいつも座っていた丸眼鏡の男に聞く。何度か話していたのを見たことがあった。

「あ、じよ、承太郎か。珍しいね。君が話しかけてくるなんて。あいつつて？」

「おまえの後ろの席の女だ」

「ああ、シャーリーンのことかい？ 彼女なら……」

続く男の言葉におれは耳を疑った。

「休学したよ。入院するんだって」

「は……？」

「あの子、なにか難しい病氣らしいよ。ああ、ぼくはハイスクールでクラスが一緒だったから……とはいえ、そんなに詳しいわけでもないけど」

男は両の掌を上に向ける。極あつさりとした口調を伴って。

「高校時代から学校休みがちだったし、お金持ちのお嬢様であんな風に綺麗で頭もいい。非の打ち所がない才媛なのに、天はなんとやら……ってやつなのかな？ 可哀想だよ
ね」

瞬間、おれは確かに覚えていた。

怒り、を。

が、その原因も矛先もさっぱりわかりはしなかった。

「………よお」

「きやつ！」

そして気がついたら、おれはあの病院に来ていた。

「じよ、承太郎？ な、なんで……？」

目を瞬かせる女にむけていう。

「……みにきた」

「は？」

「死んでねーか、みにきた」

「そ、そう……。おあいにくさま。まだ生きているわ。このとおり」

「そうか」

「……」

「……」

「ならいい。じゃあな」

「あ……！ ちよつと！ な、なんだったの……？」

以来、あいつの生死確認のために、こんなふうにはらりと病室を訪ねるのがおれの日課になった。そんな日がしばらく続いた、ある夏の日のことだった。

「あ！ 承太郎のおにーちゃん！」

「おまえは……」

病院の廊下でおれに気付いて駆けてくる、ひとりの少女。

（花京院の二号……）

——「ちがうツ!!」——

時空(？)やらなんやらを超越した息のそろったツツコミが届いた気がするが、無視することにする。

「みづき、だつたか」

「うん！ 今日、退院なの！」

「そうか。……よかつたな」

「うん！ みんなが応援してくれたから、頑張れたよ！」

「……おまえが、すげー。ただ、それだけだ」

「えへへ、ありがとう。元気になったし、もういくらでも遊んでいいんだって！ また、

日本でもお兄ちゃんたちと会いたいな。遊んでくれる？」

「……気がむいたらな」

「わーい！ ぜつたいだよ！」

「ふっ、ああ。またな」

「またねー！」

駆けていく少女のポケットからなにかがひらりと落ちる。

「おい、落ちたぞ」

「あ、それ……」

「よお」

「あ、こんにちは、承太郎」

「……手、出せ」

「え？」

戸惑う女の手を引つ張り、その掌のうえにそつと乗せる。

「……やる」

「これは……？ 鳥……？」

「折り鶴」

「おりづる……？」

「日本で、見舞い相手にやる、『おまもり』みたいなもんだ」

「へえ……。……かわいい」

まじまじとそれをいろんな角度からみつめ、そうつぶやく女にいう。

「ほんとうは千羽やるもんなんだがな。まあ、おれが折ったんだ。一羽で充分だろ」

すると、珍しく、大げさなくらい目を見開く女。

「えっ!? 承太郎が!? これを? 自分で!？」

「ちつちえーダチに、そこでもらったんでな」

——おりがみ。花京院のお兄ちゃんが退屈しのぎにつてくれたんだ。承太郎お兄ちゃんにもあげるね——

「ふ、ふふ……」

「……おい、わらうな」

「だって、意外……すぎて……！ けっこう器用なのね……」

「……精密な動きは得意分野なんでな」

「なにそれ……ツ、ふ、ふふ……！」

「……」

はじめて、みた。

「わらったかおは……まあ、辛気臭くねーじゃねーか」

「えっ!? つ……あ、あなたこそ」

「……あん？」

「承太郎、あなた、わらわないのね」

意外なその言葉にびくり、と体が勝手に硬直する。

「ずっと、気になってた。」

いつも沢山の人に囲まれているのに、見たことないもの。

誰というときも。

あなたの……わらったかお。

……どうして？」

「……おれは……」

わらわない、のではない。わらう気がしねえ、それだけだ。

……あれから、ずっと。

はじめからきまつているような、あのふたり。

だれよりそばにいるべきあいつらを、引き離れた。

花京院の『ほんとうの笑顔』を奪った。
たいせつなダチ

代償か運命だか、神様だか閻魔様だか知らねーが……

ゆるせねえ……ゆるされねえ。

あいつらが、また、わらいあう、その日まで……

……おれは……

「……承太郎？」

「……」

「ごめんね。もう、きかない。でも、ひとつだけ……」

黙り込むおれに、女はそつと囁く。

「あなたがわらえる日、かならず来るわ」

耳をくすぐる、心地よい音色。

「だって、生きているんだから」

その声は、おどおどしている普段のそれとも、群がってくる耳障りな女たちのそれとも、全く違った。

「あなたは、だれかのことで心を痛めることのできるひと。

だれかを心からおもえる……そんなやさしいひとだから」

穏やかで凜とした、澄み切った青空のようだった。

「わたし、心から願っているわ。はやく、その日がくることを。

だから、そんななお、しないで……」

「おまえ……」

「……承太郎、わたしね、長く生きるには失敗する確率の方が高い……そんな手術を受けるしかないんだって」

そして、あいつははじめて語り始めた。じぶんのことを。

「再発したら、手術しかない。それに、ずーっと怯えて毎日生きている心地がしなかつ

た。なのに、結局こう。あの日、あなたと屋上で出逢った日、そのことをドクターに告げられたあとで……」

伏せられた瞼の長いまつげが震える。

「完全に、八つ当たり。本当に……ごめんさい。

でも、もう、だいじょうぶだから。手術、受けるから。もう、逃げない……」

見上げるまっすぐな視線が、おれの瞳をとらえる。

「だって、わたしも、もっと、生きたいから

……あなたの笑顔が……みてみたいから……

だから、……ありがとう、承太郎」

それから、季節は夏が終わり、秋が来て……

刻一刻と迫っていた。『手術』の日が。

「……こわい、こわいの……!」

それに従って、こいつのかおは……曇っていくばかりだった。

「しぬのなんて、こわくなかった……でも、こわくなった……」

誰にでもいつかは訪れるはずのもの。そのはずなのに……

「あなたが、こんなに、あいにきてくれて……

どうしても……ばかだから……期待して……

そんなこと……あるわけないのに。

……あなたがやさしいひと……それだけなのに……」

『死』というものに対する絶対的な恐怖。

「でも……こわいの……こわくてたまらないの……

どんどん……あなたをすきになって、そのぶん、どんどん、こわくなって……

もう、あえなくなるかもしれないのが……こわいの……つらいの……。

これ以上あなたをすきになるのに……もう、たえられない……!」

おれはあいつのそれを、拭ってやることができなかつた。

「やっぱり、わたし、よわいの……にげだして、しまいたくなる……」

呆れるほどに、どこまでもおれは無力だつた。

「だから、もう、こなくて、いいから。こないで……ほしいの……」

どうすることもできず、ただ、立ち尽くすことしか、できなかつた。

「もう、かまわないで……」

「……わかつた」

ただ、うなづくことしか、できなかつた。

こうして、冬を前におれたちは別れた。

年の瀬。日本に帰省したおれは、『ダチ』を呼び出した。

深々とまつしろい粉雪が舞い散る……そんな夜だつた。

「めずらしいな。君がそんなふうになるなんて」

ひたすらに、酔いたい。今夜はそんな気分だつた。

酒に強い、という己の性質はこういうときこんなにも厄介なものかと思ひ知る。

「……花京院、おまえ……」

それでも、朧げに霧がかかった様な頭の中、すこしだけ訪れてくれた酔いにまかせて隣の男に疑問をぶつける。いや、ほんとうは、わかつていた。こたえのわかりきつていた『疑問』などではなかつたのかもしれない、それを。

「どーやったら……会えもしねー女を、ずっと、想つていられるんだ……?」

「承太郎……?」

「しかも、『忘れろ』とか言われといて……なんでそこまで想えるんだよ……」
「……さあね。僕にもさっぱりさ。」

たしかに忘れることができれば、楽になるのかもしれない。
でも……やっぱり、すきなんだから、しかたないよなあ」

花京院はいった。

「忘れたくないし。忘れられない。」

僕のなかでそれが一致しているし。だからほかはどうしようもない。それだけだよ」
なんてことのないように。あたりまえのことのように。

「だいたい、忘れろとかいわれたって、僕からしたらなにいつてんだって話さ。どうするかなんて僕の自由だろう？　僕の意思なんておいてけぼりで、まったくもってあのひとほんつと、自分勝手なんだからさ。そんな彼女の言い分に従う義理なんて、これっぽっちもないね。だから僕も好き勝手に想ってる。それだけさ」

「……そうか。好き勝手に、か……」

「ああ。それだけ」

やっぱりかなわねーな、そうおもった。

「ほんつと、女つてのはどいつもこいつも……勝手なもんだぜ……」

「まったく、……同感だね」

新たな年が来て、米国に戻ったおれは一番に、向かった。
あいつの元に。

「おい」

「え？ 承……？ な、なんで……？ 夢？ 幻？」

「寝ぼけてんじゃねーよ」

泣きはらしたような真つ赤な眼、腫れきった瞼。

案の定だ。

気にくわねー。その表情をまつすぐにみつめ、いう。

「いいか？ おわったら、かならず、もどってこい」

「……え？」

「……おれのところに、もどってこい。……いいな？」

「う……ん……っ！」

「まあ、できれば……その泣き虫も、なおしてこいや」

「……無理。だれのせいよ……っ！」

そんな風に、実は自分があらゆるきっかけをつくった張本人だなんざ露知らず。

「で、どうなんだい？　せつかくだから聞かせてくれよ」

「ああ？　なにをだよ」

「もちろん、君とシャーリーン嬢の馴れ初め話……というやつさ」

昨晚、今まで散々『ポケ女』とのかをからかかってやっていた仕返しでも目論んでいるのか……花京院は心底楽しそうにおれに聞いてきやがった。

「すごいよなあ。あの空条承太郎の……頑なな君の決意を覆すほどのなにか、だなんてよっぽどじゃあないか。そんな壮大なラブロマンスには大変興味があるなあ。ぜひ拝聴願いたいものだ」

「……おまえだけには、ぜってー、いわねえ……」

*

*

*

承太郎とシャーリーン嬢に見送られつつ帰国した、あの日から約半年ほど経ったある

日。再び一本の電話が僕の元に舞い込んだ。

「…………産まれた!？」

「ああ。女だ」

「そうか、やったな！ おめでとう、パパ!!」

「チツ…………うるせーな…………」

「フツ…………」

わかりにくいですが確実に照れている。そんな受話器の向こうの彼を想像してつい笑み
がもれる。

「名前は？ もう決まっているのかい？」

「ああ」

「へえ、なんだい？」

「…………じょりーん」

「え？」

「…………徐倫。」

空条、徐倫…………だ」

「ああ…………」

（…………そうか。

……『ジョジョ』……か)

彼を『受け継ぐ』者。

「……いい名前だ」

「……だろう？」

「ふふ、早くお目にかかりたいなあ。君の『天使様』に」

「ふん。ああ、そうだ。花京院、ひとつおまえに言っておくことがある」

「ん、なんだい？」

「てめーの……三号にはさせんからな」

「なんの話だよ……」

ながい愛

「出張で、そちらに行く」

とおれが告げると、

「じゃあぜひ。また、少しでも会えれば」

とやつがいう。

ある週末の晩。おれは待ち合わせのバーに向け、歩みを進めていた。

付き合いで参加せざるをえない飲み会のせいで、時間は押しに押ししていた。恨めしい気持ちで腕時計に目を落とす。

夜も更けて来たというのに、まだまだ通りは人の波であふれかえっていた。宵街をゆく人々の顔は、嬉しそうだったり楽しそうだったり、またはその逆だったり……その表情はネオンと相まって街をさまざまな色に染めていた。

自分は、どんなかおをしているんだらうな。

そんなことを思いながら、目的地へ急ぐ。

「よう。すまん。待たせたな、花京院」

ドアを開けると、すでにカウンター席にひとり佇む待ち人の姿があった。

「いえ。ご無沙汰してます」

声をかけると振り返り、にっこりとおれに応える。

「……お兄さん」

「ちっ、何度も言ってるんだろ。おれはおまえの兄さんになった覚えねーよ。……まだな」

「ふっ。そうですね。……まだ」

挨拶代わりにいつもどおりの軽口を交わす。

「どうだ？ 元気にしていたか？」

「ええ。まあそれなりに、ですかね」

「……すまん、愚問だったな」

「いえ。こちらこそ、あいかわらさずいい知らせをお届けできず……すみません」

「なにいつてんだ。わかってるよ……馬鹿野郎」

そう。わかっていた。

こいつが、どれだけ、あいつのために、ずっと努力をしてくれているか。なんて。

もう、痛いほどに。

あの馬鹿な、本当に馬鹿な妹が眠りについてから既に五年の月日が経とうとしていた。

しかし、目の前のこの男は、なにひとつかわることなく、妹のことを想ってくれているようだった。

こうして、俺が東京に行く用事があつたり、逆に、こいつがうちの地元に来ることがあるたび、こうして酒を酌み交わしているわけだが……。

(初見では、スカした気障な野郎かと思つたもんだがな……)

こいつも、初めて会つた際の俺に対する印象は最低だつただろうから人のことは言えないが。

初対面の印象、それはとんだ間違いだつた。

知れば知るほど、こいつは、花京院真摯で気持ちのまつすぐな……本当に、いいやつだった。

妹のことを抜きにしても、知り合いになれてよかつたと思うるほどに。

だからこそ、申し訳ない思いでいっぱいになる。

妹があんな『手紙』を残した気持ち、今やおれにもとてもよくわかつていた。

「……もう、いいんだぜ？」

これも、もう何度言ったかわからない。加えて、あいつの兄である自分がこいつにもう会うべきではないのではないか、と思ったことも言ったこともあるが……。

「何度も言っているでしょう？　僕は、自分のやりたいことしか、やっていない。」と

そう言われては、なにも言えなくなってしまう。

「まったく……頑固な野郎だ」

そもそも、もうすでに、こいつと会うのを毎回楽しみにしている自分がいる。

そんなわけで、ついつい、こんな奇妙な関係が続いている、というわけだ。

もちろん、もしも、こいつに『妹とちがう想う相手』ができて祝福してやれる。

いや、むしろ、そのほうがいいのではないかとまで、最近では思うようになっていた。

こいつは、しあわせになるべき人間だ……ならなくてはいけない。心底そう思う。

でも、きつと、こいつは自分ではそうはおもわないのだろう。

それも、もう、とてもよくわかっていた。だから……

*

*

*

お兄さん……義経さんは、会うたびいつもこうだ。

あんなことを言っておきながら、いつこうに結果を出せていない僕が悪いのに。

きつと、この状況を『申し訳ない』と、思ってくれている。それが、よくわかる。

わかりやすいのは兄妹そろって、おんなじだな……なんて思う。

そんなことはないのだ。

僕は本当に、やりたいことをしているだけなのだから。

いや、正確にいうと、僕の『やりたいこと』なんてあれからずつと、ただひとつしかない。

その唯一の目的のためにする努力なんて、苦痛でも、なんでもないので。

やたらと皆心配してくれるが、僕にとってはなんてことないのだ。そこに關しては。

つらいことなんて、そんなの、ただひとつだけだった。

そもそもこうしてちよいちよい会っているのも、気を遣ってのことだと思われているだろうが、そうではないのだ。

義経さんは、それこそ、初対面では直情的な印象を受けたが、全くそんなことはなかった。

普段は物静かで理知的で……話していて、結構自分とウマが合う、と感じた。

だから、こうして会える機会を実は毎回僕は楽しみにしているのだった。このひとはただ、家族やたいせつなひとに対する情がとて強いだけなのだ。たいせつなものを護るためには、つい、ああなつてしまうのだろう。やはり兄妹。ほんとうに、よく似ている。

「ああ、そうだ」

そんなことを思っていたら、義経さんはなにやら袋を取り出し、僕に渡す。

「これ。親父とおふくろがおまえに。大学の卒業祝いだそうだ」

「えー！ そんな……！」

「おめでとう。無理せず、がんばってね。だそうだ」

お父さんとお母さんの顔を思い浮かべる。

こんな僕にもかかわらず、彼らはいつも、やさしかった。

心がふつと温かいものに包まれ、つい声が詰まってしまう。

「……ありがとうございます」

「ふつ、おれにいなよ」

「そうですね。明日にでも電話しておきます」

「そうしてやってくれ。春からはおまえ大学院行くんだっけか？ まだ勉強すんのか

「よ」

「抱えている研究テーマがけっこう興味深くて、今やめるのはもったいないかと。それに……」

「それに？」

「……社会人になつたら自由になる時間が減っちゃうじゃないですか」

すると、呆れ半分の顔でため息交じりに言われる。

「おまえの頭ん中はそればかりか。社会なめてんじゃねーぞ。まったく。つて、おれがいうのもなんだがな……」

「ふつ。では、いずれ僕も避けては通れない……社会人の心得をご教示いただこうかな、先輩に」

「なんだよ、それ」

「最近、どうですか？ 仕事の方は」

「そうだな……ああ、そうだ。それが、ちよつと不思議なことが起こっていてな」

「不思議なこと？」

義経さんは警察官をしている。が、彼の次の言葉は、全く予想の範囲外のものだった。「座敷わらし、つて知っているか？」

「は？ あの、妖怪の？ 古い家に住んでいて、幸せを運んでくる……とか、そんな感じ」

でしたっけ？」

スタンドならともかく、そういうものは専門外だ。曖昧な知識を頼りに言う。

「ああ。そうだが、それだとちよつとニュアンスが違うな……妖精、いや、小人、か？」

「あの、話がさっぱり見えないんですが……」

「まあ、最後まで聞け。順を追って話すか」

そうして彼は、その不可思議な事件について話してくれた。

「おれが今、県警から派遣されて、田舎の小さな派出所の所長を住み込みでしているのは知っているよな？」

「ええ。以前聞きました」

「その今住んでいる派出所兼、住居なんだが、これがまた、おんぼろでな。幽霊が出てもまったく不思議ではない、そんなところではあるんだが……。まあ、それはともかく。そこにおれは独りで、暮らしている。にも、かわらず、だ」

そこで一息、グラスの中身で喉を潤したあと、いう。

「身に覚えのない出来事が、次々に起こるんだ。

脱ぎ捨てて、置きっぱなしだったはずのスーツがすっかりハンガーにかけてあったり

……」

「それは、無意識に自分でやったんじゃないか……？」

「アイロンまでかかっていたんだぜ？ パリツとな」

「え!？」

「迷子になった子どもを探しまわった日があつたんだ。山やら森やらに入つてやつとこさ見つけて……そんなわけで靴は泥だらけさ。よく覚えてる。それが翌朝には新品みたいにピカピカに磨かれていたり……」

天井を仰ぎつつ、彼は眉根を寄せる。きつと隣の僕も同じような表情だつたに違いない。

「あとは書類を書いている途中で寝ちまつたことがあるんだが、全部判子が押してあつたりな。そのときは自分に毛布もかかつていた。最近では、パトロールから帰ってくる、風呂が沸いていたりもする。細かいことを言ったらきりが無い。そもそも、気づいていないだけで、もつとあると思うしな」

「それは……たしかに不可思議ですな」

「だろう？ さすがに気になつてな。」

おれは実は夢遊病とかなのかもしれない……まずそう思つた。

だから、自分の寝ているところをビデオで撮つてみたんだよ。

もちろんがちがちに戸締りをしてな。

ちなみにその日は目覚めたら朝食が置いてあつた。

すぐにビデオをみてみたよ。そうしたら……」

「ど、どうだったんですか……?」

そろって神妙な面持ちで、彼の言葉を待つ。

「……おれはずつと寝ていたんだ。ちゃんと。もうわけがわからん。

害はない……というか、むしろ正直助かっている部分もある。

もういいかと思ひ、開き直って、そのままなわけだが……」

「い、いいんですか? そのままで……」

「仕方ないだろう。いい対策が思いつかん。

まあ、おれもあの家の人間だ。花京院、おまえや仁美の『あれ』は見えないが……。

不思議な現象に対する免疫はある方だしな。

それとも、ほかに確かめる方法が、なんかあるか?」

「うーん。いい、かどうかはともかく、ひとつ方法を、思いつきましたか……」

「なんだ?」

「僕が、見張ってみますよ。こっそりと」

というわけで、僕は今お兄さんの職場兼、自宅にむかって愛車を走らせていた。

高速を下りたあと、山や峠道をいくつもこえて、のどかな田舎町……それこそジブリの話にでもでてきそうな……にたどり着く。その町の中心部に派出所はあった。

なるほど、おんぼろ……たしかに趣のある昔ながらの日本家屋だった。

「よお。すまん。遠くまで」

「いえ、どうせ今暇なので。大学もあとは卒業式だけですし」

そうなのだ。中途半端に時間を持て余していたので、ちようどよかった。

それに……なにか『予感』があつた。

自分が行った方がよい。という。

「なにもないところだろうか？」

義経さんは冷蔵庫からビールを取り出しながらこういった。テーブルには彼が自作したであろうつまみが置かれている。あのひとも料理上手だしな……と、ふっとまたそんなことをおもいだしてしまう。

「いいじゃあないですか。のんびりした風情で。ただ……」

「ただ？」

「……この土地の人たちはびっくりしただろうなと。急にこんな都会的でスタイリッシュなお巡りさんがやってきて」

クオーターで美形の……つい笑ってしまふ。

「うるせえな。まあ、たしかに最初は浮いていたがな。」

もうすぐここにきて1年経つ。こつちも皆の顔はおぼえたし、ようやくあつちもなじんでくれたつてところだ。でもおれの任期は2年だから……来年の春にはまた異動だ。ようやく、つてとここのなにな」

「そうなんですな」

警察官は異動が多い、と聞く。しかもこのひと、実は何を隠そう某有名大学の法学部卒で、俗にいう『キャリア』というやつなのだ。余計にその頻度は高いのだろう。

「でも、この任期が終わって、本庁に戻ったらまた昇級でしょう？ きつと」

「まったく興味ねえ。おれはこういう、『町のお巡りさん』の方が性に合ってたんだよ」

「ふつ、それはそうかもしれないね」

義経さんらしいな……とおもわずまた笑みもれる。

「町のお巡りさん、かあ……どんな感じですか？」

「……、おだやかそうだから、そうそう事件なんて起こらなそうですが」

「それがそうでもないんだぜ。農作物が荒らされた、とか多いな。」

……犯人は主にイタチだが。あと、スイカ泥棒とか」

「ふつ」

「笑うなよ。そんなのはいいんだが……」

子どもが山で迷子になった話はしたな。そういう深刻な事件も時にあるし。

あと、けっこうここ、旅行者が通りかかるんだ。そいつらが悪さしたりすることがあるんだよ。

それに、大雨とか台風が来たりすると、ひとり暮らしのお年寄りが多いから……：：：気をつけとかにやいかん。結構大変なんだぜ。こっちはひとりだし」

「なるほど……」

それはたしかに大変そうだな。真面目で責任感のあるこのひとには特に。

そんな話をしていたらつまみもあらかたなくなり、けっこうな時刻になっていた。

「さて、じゃあ今日は風呂入ってさっさと寝るか」

「そうですね」

「本当に、すまん。方法は、おまえに任す。くれぐれもほどほどに、適当に、でいいからな？」

「はい、わかっています」

草木も眠る、丑三つ時……：：：要は午前二時頃だ。

僕は寝たふりをしつつ、ハイエロフアント法皇を家中にこっそり張り巡らして様子をうかがっていた。

(今のところ、異常なし……か。ん……?)

すると、台所から、異常……というか気配を感じる。

(きたか……あ、あれは!!)

流しにある、先ほど僕らが使った食器(あえて洗わず、置きっぱなしにしてみた。大成功だ)の周りに『なにか』がいる。

(やはり……スタンド……か)

なんとなくそんな気がしていた。僕の予想は的中したようだった。

(なんだあれ……? メルヘンやファンタジーやあるまいし)

体長およそ20センチくらいだろうか。小さな、人……? さながら白雪姫の小人のような、ちようど人数もそれくらいの集団が協力して食器を洗っていた。ひとりがスポンジをもち、またあるものは洗剤をかけ、さらに別のものが蛇口をひねる、といった具合だ。その様子はまるで、おとぎばなしの一場面をみているかのようだった。

(さて、どうしたものか)

小人たちを取り押さえるのはたやすいが、それでは根本的な解決にならないだろう。

このスタンドは、おそらく、遠隔操作型。いや、というより、この感じは……

(セシリアと同じく、半自立型のそれに近そうだな)

あの美しい鳥と、それを繰る、愛しきひとの綺麗なすがたをおもい浮かべる。

(ハッ！)

おもい描いたそのすがたに見とれている自分に気づき、呆れてしまう。

そもそもそんな場合ではなかった。

(いかんいかん。ええと……『本体』の居場所を突き止める方が、この場合、適切だな)
食器洗いが終わると今度は流しの掃除……といった具合に家事をひとしきりしている。

そんな働き者な彼らを傍観すること小一時間。

作業はやつと終わったようで、通気口から彼らは次々引き揚げていく。

(よし、尾けるか……)

細長く風糸のようにしたハイエロファントの触手を一人の小人の脚にこっそり巻きつける。

そして彼らの姿が見えなくなった頃合いを見はからい、ゆつくりとそれを追いかけることにする。

おもむろに僕が起き上がると、義経さんに声をかけられた。やはり律義に起きていたらしい。

「……なにかみつけたんだな？ おれも行く」

一瞬迷ったが、危害を加えるようなタイプのスタンドではなさそうだ。

「……わかりました」

ふたりにそつと家を出る。

ハイエロファン・テイル・ストリングス

『法皇の尾行紐』を手繰りつつ、事情を説明する。

「なんだと？ そんな能力者が、この村に？ 誰だ……？ とうか、なんのために……？」

「……お疲れさま、みんな。ありがとう」

辿っていった先は、酒屋の軒先にある自販機前の簡素な木のベンチ。

そこに腰掛けていたのは、一人の少女だった。

「あの娘……みたいですね」

「わかった……」

「こんばんは。ちよつといいかな」

「ハッ！ お、おとおお、お巡りさん!? ど、どうしてここにッ!?」

「君は……岩野さんのとこの、なつみちゃんじゃあないか。こんな夜更けになにを？」

「な、なんでもないです！　そ、その、あの！　じゅ、受験勉強に飽きたので、ちょっと散歩に……」

しどろもどろ。その少女……なつみ嬢の狼狽しきった様子は、それはもう、見ていて可哀想になるくらいだった。

(……なんだか、だれかさんのことを彷彿とさせるな。このあわてつぷりとわかりやすい感じは……)

だいたい事情が呑み込めてしまった僕はお兄さんに申し出る。

「あの、義経さん。少し、僕とこのお嬢さんでお話をさせていただいてもいいでしょうか？」

「え!?　し、しかし……」

「当事者じゃないほうが、話しやすいこともありますから」

「そうか……。じゃあ、頼む」

そして、少女に挨拶をする。

「こんばんは」

「こ、こんばんは……」

「なつみちゃん、こいつはあやしいもんじゃねえ。安心しな。」

花京院。じゃあ、おれはあそこにいるから。終わったら呼んでくれ」

そういつてお兄さんが少し離れた場所に移動する。

それを見やり、声をかける。

「さて……率直に聞きます。あの、小人たちの主は、貴女ですよね？」

「えっ!? な、なんでそれを!？」

「これ、……見えますよね？」

百聞は一見に如かず。僕はハイエロフロントを出す。

「そ、それは! あ、貴方も……?」

「ええ、君と同じような『能力』を持つ者……です」

「そ、そうなんだ……わたし以外にも、いたんだ……」

「その力は……生まれつき、もって生まれたものですか？」

矢に射られたわけではなさそうだが。一応聞いておく。

「ええと、いつだったかな？」

こどものころ『なつみ、手伝ってやるよ』……って出てきて以来？」

「頼むと家事やらなんやらをしてくれるんですか? 彼らは」

「はい。だれかのお手伝いをしてくれるんです。すごく便利で、いつも助かっています」

にっこりとなつみ嬢はいう。

(便利……か)

一般的（スタンド使いなのに一般というのもなんか妙だが……）には、スタンドとはそういうものなのかもしれないな……などと思う。

「そつちのは？ どんな能力なんですか？」

そんなことを考えていたら逆に問い返された。

（聞いたって全く答えないのもフェアではない、か……）

「そうですね……遠くまで行けたり、いろいろ調べてきたり、とかが得意ですかね」

「へえー。それも便利ですね。こつちは離れると何をしてきているのかわからないですよ。」

そつか。わたしの、この子たち、それでみつかつちやつたんですね……。

ハッ！ まさか、お巡りさんも!？」

「いえ、彼は違います。いろいろ事情があつて、これらの存在をご存知ではありませんが……」

「……ほ、ほんとうに……!？」

「で、どうしてこんなことを？」

まだ戸惑っている様子だが、本題に入る。

「……」

しかし、少女は返事をくれそうもなかった。

「……仕方がない。当ててさしあげましょう」

「えっ!？」

「……君は、彼に……恋をしているツ！」

「うっ！」

「だから、気づかれないように、あんな……違いますか？」

しばしの沈黙のあと、なつみ嬢は泣きながら答えた。

「う、うう……。わたし……。わたし……。ごめんなさいー！」

「やっぱり……」

「……だって、いつも、お巡りさん、ひとりで大変そうで……。」

せめて……。なにか、役に立ちたいって……。おもって……。」

「……」

(気持ちはわからんでもないが……。どう考えても心霊現象にしか思われないうだろう……)

相手が義経さんだったからまだ良かったものの、一般の人にあれをやったらホラー以外のなものでもない。下手したらノイローゼものだろう。

しかし、まだ続きがあるらしい。なつみ嬢はぼつりぼつりと話してくれた。

「それに……」

「それに？」

「恩返し……したくて……。お巡りさん、わたしの、恩人、だから……」

「恩人？」

「去年の秋のことです。観光で来たつばい、大学生くらいの男の人たちに、わたし、ナンパされて……。断ったんですけど、しつこくて……。車に無理矢理乗せられそうになっ
たんです」

「なんてことを！ ありえん。男の風上にも置けないやつらだ」

（旅行者が悪さを……。そういえばそういつていたな……）

先ほどの彼の話を思い出す。

「すごく怖くって……。もうダメだって、そう思ったときに、お巡りさんがきてくれて助け
てくれて……。とっても素敵でした。そのときから、わたし、お巡りさんのこと気になり
だして……」

なつみ嬢は頬を染める。

「それから、お仕事しているところとかに、すごく、目がいつてしまって……」。

そしたら、わかつたんです。

お巡りさんはいつも一生懸命、この村のこと、考えてくれて、みんなのこと、護って
くれているって。それでも、ほんとうに……。だいすきになってしまつて……」

恋する女の子は……と、あの旅で皆が散々言っていたが、こういうことなのかなと思
う。

義経さんのことを想って話すときのなつみ嬢の目は輝いていて、別人のように見え
た。

（あのとときの、彼女も……そうだったのかな？）

僕にとつては常に……最初からずっと可愛かったから、正直わからん。

たしかにどんどんそれは増していった気もするけれど、それは僕のきもちに比例した
ものだと思っていたし……）

ちなみにそれを親友^{ポルナレフ}Bに言うと、

「そりゃあ、あいつはおまえをみているとき、常にそういう状態なわけだからなあ……」
とかなんとかいわれた。だとしたら……

（……嬉しすぎるじゃないか。どうしよう）

とか考えてついにやりとってしまう。

が、またしてもそんな場合ではないことを思い出す。

「だったら、こんな回りくどいことせずに普通にアプローチしたらいいんじゃないで
すか？」

「だって、だって。お巡りさん、あんなに大人で、かつこよくって……わたしなんて高校

生のガキだし……相手にされるわけないですよ」

「……今は、ね。たしかにそうかもしれない。でも、まだまだ先はながい。

諦めなければ、いつかチャンスは、あるかもしれないよ？」

昔、あの旅で、敵スタンド使いに、『小さい子ども』にされたときのきもちをおもいだす。

「そ、そうですか!? 脈、あると思います……?!」

「さあ、それはなんとも。僕にはわかりませんね」

「ええー……?」

ガツクリとうなだれる、そんな少女に言う。

「……まあ、でも、これだけは言えます。

貴女には見る目がある。

彼を選んだ貴女の選択は絶対に間違っていない。ってことだけはね。

せつかくだから、まずは、勇気を出してぶつかってみることを僕はおすすめますが」

「う……」

「とりあえず、ああいうことは、もうやめましょうね。

彼も困ってしまうし、貴女もこんな夜更けに危ないし……いいですか?」

「はい……。ごめんなさい」

「……それは彼に、直接言いましょう」

「で、でも……」

「貴方の力になりたかった、と素直に言えば大丈夫ですよ。彼はやさしいから。」

……頑張ってくださいね」

「終わりましたよ。貴方はお嬢さんを家まで送って差し上げるんでしょう？」

自分の役目を滞りなく果たした僕は義経さんに声をかける。

「あ、ああ」

「じゃあ、僕は先に帰っていますね。ごゆっくり」

*

*

*

「あ、あの人はいつたい……？ お巡りさんのお友だちですか？」

「ああ……。そうだな……」

頷く。

「『友だち』……だな」

そして、加える。

「……あと、弟になる予定の……変なやつだよ」

「おかえりなさい。どうでした？」

なつみちゃんを無事送り届け、我が家に帰ると花京院がにまにまとした顔でおれを待ちかまえていた。

「ああ……ごめんなさい、もうしません、つてさ」

「それだけじゃないでしょう？」

「……」

——本当にごめんなさい！　これから、二度ともうこんなことはしません……でも、ときどきでいいので、わたし……お巡りさんのお手伝いをしに行ってもいいですか？　あなたの力に、なりたいんです！　——

と言われたが……言わない。こいつには。絶対に。

「義経さんもスミにおけないなあ。あんな純粋な女子高生を」

「うるせえ」

「彼女のきもちには気づいていたんでしょう？」

「まあ……な」

「どうするんですか？ お付き合いを……？」

「するか！ 三十路近いんだぞ、おれは……。」

いくつ年が離れていると思って……犯罪じゃねーか……」

(こいつ、警官になんてことを……)

「ええー？ いいじゃないですか。」

たかだか、えーつと10歳差でしょう？

それにそもそも愛に年の差なんて関係ない。やあ、至言ですね」

そんな風に減らず口を叩くやつに言ってる。

「ああ？ じゃあ、花京院、おまえが付き合え。」

おまえの方が歳は近いし、おなじスタンド使いだろ！

おあつらえむきだ！ そうしろ!!」

『二人で話をさせろ』こいつがああいったとき、とうとうそのときがきたか……一瞬そ
う、思った……のに。

「はあ？ 無理ですよ。僕は貴方の妹さんにしか興味ないので」

全然違ったようだ。

(こいつ……またきっぱり言い切りやがった……)

「……おまえ、兄にむかってよくそんなことが堂々といえるな……」

「隠す必要なんてないじゃあないですか。よく知っているでしょう？ そんなこと」

「まあ……そうだが」

「ほら」

言いくるめられそうになる、自分をどうにか叱咤しつつ、いう。

「いや、というか、だ！」

盲目的にうちの妹のことしか見ないからいけないんじゃないのか？

前にも言ったが、ちよつとは……」

「……また。そういうと思って……」

実は、自分でも……どうだろうかと考えてみたんですけどね。ためしに。

失礼な話で申し訳ないんですが、まあ、仮定の話として」

「は?!」

「だって貴方や皆がそうやってしつこく……」

他に目をむけようとしなからだ！ とかいうから、一応……」

「一応って……」

(……本当に……なんて変に真面目なやつだ……)

呆れているとなおもやつは続けた。

「なつみ嬢は、スタンド使いで……」

どことなく彼女と似ているところがありそうだし……。

もしも、彼女以外の方に恋をしなければならぬのであれば……。

あなたのいうとおり、もしかしたら『おあつらえむき』な相手なのかなと」

「……」

自分で勧めたくせに。

……にもかかわらず、やっぱり……ききたくない。そう、おもってしまった。

そんなおれに、どこか遠くをまつすぐにみつめながら、零す。

「……でも駄目でしたね。

全然違った。

自分でも驚くほどに。

なつみ嬢がどうか、そんなんじやあなくて……

ほかの誰でもきつと同じで……」

「どうしても思い出してしまう。

ささいなことから彼女のことを……。

どうしても想ってしまう。

……彼女だったら、どうおもうかな？　なんていうかな？

……彼女とは、ちがうんだな……とか、考えてしまう」

「……やつぱり……彼女じゃなきや駄目なんですよ。」

僕はどうやら、スタンド使いだ……とか、そういうの関係なく……

彼女のことを、彼女だから、こんなに、どうしようもなく、すきなんだ。

彼女が、いいんだ……」

「花京院……」

「……と、いうことを、結局再認識してしまっただけでした。

困ったもんですよ。

だいたい、どうして無理に他の人のことをすきにならなきやいけないんですか？

相手の方にも失礼だし。そんな意味も必要もない。

僕がこのままでいいって言っているんだから、いいんですよ」

「そ、そうか……」

残念なような、ホツとしたような……。

そんな複雑極まりない心情がふたたび胸をよぎる。

こいつに、しあわせになつてほしい。

できることなら、やつぱり……あの馬鹿な、うちの妹と。

……そんな勝手な、おれの本音が。

「……まあ、そもその話、それ以前に、僕なんてアウトオブ眼中……というやつですよ。なつみ嬢は誰かさんに、そりゃあもう夢中なんですから」

そして、なおもからかうように、おれに言ってくる花京院。

「あ、あれくらしいの歳の恋愛なんて、そのうちすぐに冷めるさ……」

「そんなことはない。それこそ年齢なんて関係ないですよ。」

だつて僕が仁美さんのことをすきになったのも17歳のときですよ。

以後、ず——つと。冷めるどころか、こんなざまですが？」

「それはおまえが……いや、おまえたちが特殊なんだよ……」

そういうと、なにやらとても嬉しそうな表情を浮かべる。

「……お誉めにあずかり、光栄です」

「誉めてねえつての……。ふっ！」

そんなわかりやすい様子に、つい笑みがもれてしまう。

「ふっ！ まあ、なつみ嬢の貴方への想いが、僕たちのそれとちがうかどうかなんて……

そのうちわかるんじゃないですか？」

「……先はまだ、ながいんだから……」

*

*

*

ほんとうに、自分で言っておきながら、まったくもってその通りで……確かにまだまだ、ながかった。

しかし、その先に……

とうとう僕はみつけたのだ。

まったく偶然に、義経さんと訪れた彼の地で。

『さがしもの』の片割を。

第8章 光芒

HERO

「……花京院くん」

「あ……！」

「あのね、もう……さがさなくてもいいよ」

「は？」

「ほら、さがしものつてさ、一生懸命探しているときには出てこないものじゃあない？」

「……さがしていないときには、ひよっこりでてくるくせにね」

「だから、あんまり、さがさないほうが、いいよ。じゃあ……」

「ひ、仁美さん!? ま、まって! まってくださ……ッツ!!」

そこで、目が覚めた。

「いって……」

手を勢いよく伸ばしすぎて、ベッドから転がり落ちるといっておまけつきで。

とつさに受け身はとったものの、おかげさまで全身にそこはかとなく感じる痛みとともに、非常にアンニュイな朝を迎える羽目になってしまった。

「……ほんとに、勝手なんだから……」

「よし。いいだろう」

「有難うございます」

あれが夢なのかなんなのか……よくわからないままの非常にもやもやとした気分とは裏腹に、仕事の方はすこぶる順調であった。自らが大学院生として所属するラボの教授に書き上げて提出していた論文の講評をしてもらう。

「というか、いい出来だ。この短期間でよくも……。相変わらずだな。どうにかケチを

つけてやろうと思つたのに、あてが外れた」

「ふふ、御期待に沿えず申し訳ありません」

どうやらお墨付きをいただけたようだ。

この方、『世界の山村』。そんな二つ名を持ち、この分野では第一人者のひとりであると世界に名を馳せており、ノーベル賞候補にもなった実はなかなか凄い人だったりする、我らが尊敬すべきボスなのだ。

そして同時に『鬼の山村』。そんな風に学部生からあだ名されている自他ともに厳しい方であったりもする……のだが、言葉が少ないだけで根っこは優しい人間には慣れつつこの僕としては可愛いものだ。今は遠きアメリカで愛娘に翻弄されているであろう友の仏頂面を思い出してしまい、つい笑みがもれる。

「それでは投稿しても?」

「ああ。そうしなさい。一発アクセプトとはさすがにいかんだろうが……リバイスが返ってくるまでは少しのんびりしていいぞ」

論文が科学雑誌に受理されるまでには基本、投稿後、査読者の返事をいただき、その指示に従い修正、追加実験を重ね……といったまだまだ長き道のりを経なければならぬのだ。とりあえず、そういった初回の反応が返ってくるまで最低2〜3週間は待機……要はそういうことだ。

「ただし、追加実験と次の学会での発表や学位審査の準備は……」

「はい、ついでに済ませてあります」

「……ふっ！ 本当に可愛くないやつだ。お疲れさん」

「はい。では失礼します」

教授室を退室し、研究室に戻る。

片隅に設えられた給湯室で入れた珈琲を片手に与えられた席につき、パソコンを立ち上げ、投稿の手続きを滞りなく済ましていく。

細々とした入力に辟易しつつ、完了のEnterボタンを押したころには宵の口。ラボ仲間に挨拶をしたのち、退出。大学の門をくぐり抜け、帰宅の途に就く。

もはや通い慣れたそれを歩く道すがら、ぼんやりと夜空に煌めく明星をみあげつつ、想い出す。

「……さがさなくて、いい……か」

奇しくもその日のことだった。

僕に、彼女のお兄さん、義経さんからこんな電話がかかってきたのは。

「イタリア？」

「ああ、研修でな」

「へえ。海外研修まであるんですか？ 警察官も大変ですね」

「いや、強制じゃあない。割と自由意思を尊重されているやつだ。で、その前に休暇もとれた。」

あいつのことだけじゃあなく……別件でも気になることがある国でな。

調べものをするのにちようどいいと思ったんだ。渡りに船、というやつだ」

「気になることって……もしかして、おじいさんの？」

「ああ、じいさんのこと、仁美に聞いてるんだっけか？」

「ええ」

想い出す。あの、病院での夜、彼女が話してくれた『むかしばなし』（実話）。

「そうだ。せつかくだから可能な範囲で探してみようと思うんだ。」

記憶を戻すきつかけがないものか……

ちよつとはじいさん孝行になりやあいいんだが」

「なるほど……」

「一応おまえには伝えておこうかと思つてな。」

なにか気になることがあればついでに調べてくるぜ？」

そういわれ、瞬時に浮かんだ案を口に出してみる。

「……しかたないな。じゃあ、僕もついていってあげますよ」

「は？」

「奇遇ですね。僕もちょうど『東の間の休息』を勝ち得たところなんですよ。

他に予定は入っていないし。それに……」

「それに？」

「義経さんひとりじゃあ危なつかしいですからね」

「はあ!? おまえ、俺のことなんだと思ってるんだよ!」

兄妹でもさすがにここは反応がちがった。

「まあ、それは冗談として。これもなにかの縁つてやつかもしれないし」

「それはそうかもしれないが……。おまえ、去年あたりにも行つてなかったか？」

「……え？」

「ヨーロッパだよ。あれはフランスだっけか？」

友人のところへ。気になることがあるので。……とか言つてたじゃあねーか」

「……そうでしたっけ？」

あちら方面の友人……すなわちあいつのことだろうが。

つい先日、国際電話で話をしたときの、相変わらずのあの能天気な声を思い出す。

(去年……?)

しかし、ど忘れしたのかさっぱり記憶になかった。

「おい、あまりにいろいろな国巡りすぎてわけわからなくなったのか?」

「失敬な。この僕に限って、そんなことあるわけないでしょう」

我ながら珍しいことだと思いつつ、応える。

「ま、どちらにせよ、おじいさんのことは僕も気になっていたんですよ。なので、お付き合います」

「そうか?」

暫しの間のあと、義経さんは心なしか弾んだ声で呟いた。

「……じゃあ、行くか」

そうして僕と義経さんのふたりはローマ、フィウミチーノ空港に降り立った。とりあえず街の中心部へ向かうべくタクシーを拾おうということになり、乗り場へと移動する。

しかし、そこには僕達と考えも到着便も同じ利用者が殺到しているためか、順番待ちの長蛇ができていた。その列の最後尾に並ぶ。

「ところで、どうやっておじいさんの記憶の手がかりを?」

「まあ、まずは地道な聞き込み……だな」

いいながら義経さんは胸ポケットからひらりと一枚の写真を取り出す。

「ばあさんと出逢ったとき身に着けていた服が、どうもこの、ローマ製らしくてな。

このあたりにいた……のかもしれん。

それにしたって、この写真の男知りませんか？　なんて、どんだけ確率低いんだって

話だが。

なんせ50年以上経っているしなあ……。

あとは当時の行方不明者リストとか、事情話して資料を探してみる予定だな。

まあ、今回だけでみつかるとは思っていない。気長にやるさ」

「そうですね」

頷きつつ、若い二人の男女が写る、差し出されたそれをまじまじと見る。

「それにしても……そっくりですよね。義経さん、若い頃のおじいさんに」

「ん？　ああ、だろう？　隔世遺伝ってやつだな」

「瓜二つ、ですね。双子みたいに。髪の色以外。そして、仁美さんは、おばあさんによく

似ている……」

「そうだな」

「……。なんか、この写真……見ているとモヤモヤするんですが。

なんだろう、このお兄さんに盗られた感……!」

「はあ?!」

「だって! こんなに寄り添っちゃって! この愛おしそうな表情!

くそう! ちぎっていいですか? こう、ここで! 半分にツ!

「ば、馬鹿! や、やめろ! 借り物なんだ! ばあさんに俺が殴られる!」

「……嘘ですよ。冗談に決まっていますでしょう?」

「いや、花京院おまえ、ぜったいマジだったろ?」

やめろよ。ばあさんの戒めのげんこつ、まじでいてーんだから……!」

「ん? おっと、失礼!」

そんな風後ろを気にせず話をしていたためか、走ってきた一人の少年とぶつかって
しまう。

「いえ、こちらこそ。前方不注意でした。申し訳ありません」

丁寧な頭を下げる……まだ齡10歳程だろうに、やたらと大人びた様子が印象的だっ
た。

少し長めの黒い前髪が目元を隠しており、表情はわかりづらいが。

(日本人? いや、違うか)

丁寧に頭を下げた後、再び走って行こうとする。しかし……

「……待ちな」

「義経さん？」

きつめの声色で少年を呼び止める。

「君。その、ポケットのものを出しなさい」

「……」

「いいから。出すんだ」

すると、少年はなおも無言でスツとポケットに手を入れ、そこからひとつの財布をとり出した。

非常に見覚えのある、それを。

「あッ！ それは僕の！」

「どういうことか、説明してもらおうか？」

詰め寄るお兄さん。しかし、少年が飄々とした態度を崩すことはなかった。

「嫌だなあ。そんなに怖い顔しないでくださいよ。」

これは今しがたそこで『拾ったもの』ですが？

「おや、貴方の財布でしたか？ それはよかった。ではお返ししますね」

「そんな嘘が、通用すると？」

「そちらこそ、ぼくが『スツた』……そんな証拠でもあるんですか？」

にここにこと顔色ひとつ変えずにそんなことをいう。

「それでは、これでぼくは失礼します」

「あつ！ 待て!!」

そして、あつという間に去って行ってしまった。

「ちつ、現行犯だが……未遂だしな……」

追跡を迷う、そんな義経さんにいう。

「さすが、おまわりさんですね」

「うるせーな、花京院。おまえがぼーっとしてんのも悪いんだぞ。」

「たく、どっちが世話焼けんだって話じゃあねーか」

「ふふ、面目ない」

「というか、おまえもちよつとは怒れよ。なんで俺ばつか……」

海外で財布をなくすのは、実は初めてではない（懐かしき、インド……カルカッタのあの雑踏）とか言ったら余計怒られそう。言わないでおこう。

（しかし……）

先程一瞬間間見えた少年の瞳を思い出す。

「あんな少年がどうして……なにか事情があるんでしょうか？」

すれている、そんな風な濁った印象はまったく受けなかった。頭も良さそう。

それが余計に不思議だった。疑問を口に出す。

「さあな。この辺り、悪さをする年少者が多いとは聞いていたが……時々あるけどな、親が子に命令して……とかそういう胸糞悪い話。

もう少し事情を聞きたかったが……」

(……親、か)

「気を取り直して、行くか」

「はい」

そのときの僕は迂闊にも気づかなかった。

「……あれは！ あ顔は……ッ!!」

こちらに向けてじっと注がれる『ひとつの視線』に。

その後は、無事にタクシーを捕まえ、滞在中お世話になる宿泊場所にたどり着くことができた。

「なかなかいいホテルだろう？ なんでも100年以上の伝統を持つ由緒正しいホテルらしいぜ」

「へえ」

「そして、この『ネーロ』が名物だと」

「イカスミパスタ……ですね。本当に真つ黒なんです。おお、美味い」

見た目に反して非常に美味なそれにレストランで舌鼓を打っていると、ガタツと誰かが立ち上がる音。

「まあ!! 貴方!」

隣の席に今しがた案内され腰掛けた、上品そうな老婦人だった。

「そんなはず……ああ、信じられないわ!」

それとも魔法使いはお年を召さないのかしら……!」

「え、ええと……」

「落ち着かれてください、御婦人。このひとがなにか?」

詰め寄られる義経さん。に、助け舟を出す、僕。

「はっ! わ、わたしだったら……ごめんなさいね。」

貴方が昔そのトリトーネの泉で出会ったわたしの初恋の相手にそっくりで……!

「っい……」

「え!? そ、そうなんですか?」

「ああ、懐かしいわ……。」

魔法をかけてあげるよ……。つて! とろけるようなキスをくれて。

そしてら途端に意識が薄れてきて……。本当に魔法みたいだったわ!」
うつとりとそのときを思い返す御婦人。

「ま、魔法?」

「というか……。おじいさん、けっこうやり手な方だったんですね」

「……。ばあさんには、とても言えん……。」

そして、さらに奇怪なことを言う。

「でも、今思い出しても不思議……。」

鳩が口から出てきてね。それでわたし我に返ったの」

「は、鳩お?」

「おじいさん、手品師かなんか……?」

もはやすでに僕たちの頭は疑問でいっぱいだったが、なにはさておき、本人確認をするべきだ。

例の写真を取り出す義経さん。

「その初恋の方……。というのは、この男でしょうか?」

「そうよ！ まあ！ なあに、この女性……！」

「そ、その男性に関して、名前とか、なんでもいい。

知っていることを教えていただきたいのですが……」

「名前なんて……。そんなの聞く暇もなく、

『あなたがどうシニヨリーナ。君とのひとときは忘れないよ……』

って、それだけ言い残して、やたら背の高いトツポイ殿方と老紳士とさっさと行つてしまつたから……」

「そうですか……」

「ありがとうございます。よし、いくぞ」

「はい」

「あつ！ 貴方あの方の……！」

まあ、また……あのときとおなじね」

奇跡的にもいきなり重要な証言を得て確信を持った僕達は、引き続き街で地道な聞き込みを始めた。

が、以後は特にこれといった情報は得られず、今日はそろそろ引き上げようか……と、いうときだった。

大きめのスキル音を立てながら、数台の黒塗りのベンツが僕達の傍に止まる。

そこから、わらわらと降りてくる人間たち。彼らに囲まれ、凄まれる。

「シニョール？ 我々と来てもらおうか？」

一斉に拳銃を構える黒服たち。その数およそ10人と少しといったところか。

「義経さん、さがつ……」

ハイエロフアント

法 皇を出そうとした、そのときだった。

「さがつている、花京院」

僕を制し、袖口に仕込んでいたそれをスツと取り出し指に挟み構える義経さん。

ひとつ深呼吸して、叫ぶ。

「……射抜け！ シャボン・ダーツ！」

そうして、その手から発射された……名前の通り、7本の虹色にきらめく膜を帯びたダーツが、波打ちながら、……明らかに自然の物理法則に逆らった動きで……障害物を避けつつ、物凄い速さで黒服の男たちの服と壁を縫い付けていく。

「ぎゃつ！」

「ぐおっ！」

「うおおおおお！」

「ひでぶ！」

「あべし!!」

さらに、あたかも猫のような構えを取ったかと思うと、まさに風の如し……
あつという間に残りの数人をぶちのめしてしまった。

「あ………？ え………？」

残されるはあつけにとられる僕。

そして、衝撃で一樣に気絶してしまっている黒服どもだった。

「……しまった。久々すぎて加減が。全員のしちまったか……」

「……えええー!?!」

「言ってなかったか？」

「き、聞いてないですよ!」

酒場で夕食をとりつつ、先程の件について、義経さんを問い詰める。

「じいさん、気功だか拳法だか、そーいう『なにか』の達人だったらしくてな。小さい頃から鍛えられてんだよ、俺」

「……」

（そういえば、おじいさんが『大男』と闘っていた、つて……）

ということとは、まあ、たしかにそういうことではあるのか……）

「人間の記憶にはいくつ種類があつてな。いわゆる『思い出の記憶』は『エピソード記憶』っていうらしい。で、それとは別に……例えば、スポーツや楽器の演奏とかで、何度も練習をして『コツをつかむ』感じ……そういうものを『手続き記憶』っていうんだ」と

「ふむふむ」

「うちのじいさんの場合、エピソード記憶はなくても、そういう手続き記憶は今もしっかりと保っているみたいでな。しみついた習性ってやつかね？ いろいろ習ったぜ。おかげで売られた喧嘩には負け知らずさ」

仕込みダーツを取り出し、僕に渡しつつ、いう。

「じいさん、ダーツゲームも好きでな」

「い、いや、そういう問題……なんででしょうか……？」

「このダーツには特殊な石鹼水がしみこませてある。理屈は不明だが……これが『力』を伝わらせるコツなんだと」

「へえ……」

うつすらと虹色にゆらめくそれを電灯に透かしてみる。

そして、隣で美味そうにビールを煽る人を見て、心の底からの感想を呟く。

「……どこが一般人だよ……」

——所詮……俺は、一般人にすぎない——

この人と初めて出会ったときのあの台詞を思い出す。

「ああ？ おまえらに比べたらよっぽどだろう？」

「どつちが。貴方にいつぞやぶん殴られたと噂の仁美さんのストーカー、よく生きてましたね」

「ああ？ そんなことまで聞いてんのか!? あいつ、余計な事を……」

「つてか、僕もよく無事で……」

気がついたらぶつとんでいた。あの時を思い出す。

「もちろんあんときは『力』はのせてねえよ……ちゃんと。感謝しろ」

「……それはどうも」

それでも十分痛かったが。

「この『力』な、仁美も習いたがってたんだが……」

女の子はおしとやかに！ とか言って、じいさん俺だけに教えてくれてな。

あ、でもひとつ、できるんだぜ」

「え!?!」

「やってなかったか？」

痛い痛い、飛んでいけ……みたいなやつ」

「あ、あの『おまじない』ですか？」

「そうだ。……やっぱ知ってたか。あれもじいさん仕込みだぜ？」

「……」

あれは、本当にただの『おまじない』ではなかったのだ。

「……どおりで、よく効いたわけだ」

右手をじつと見る。

(理由はそれだけじゃあない……だろうけど)

想い出す。ふれた手のぬくもりを。

「しかし……、奴ら、一体何の用だったんだろうか……」

「ええ……」

あの黒服連中、『大男』の関係者なのか、それとも……。

あの後、当然の如く、現地の警察の方々が集まってくるのが見えた。

義経さんの立场上、研修前に騒ぎはまずい、ということをやむなく放置・逃走を図ったわけだが。

「すまん。俺がやりすぎたな」

「いえ。大丈夫ですよ。また来るでしょう」

「ああ、用があるなら、な……」

そして、翌朝。

やはり、『用』はあつたらしい。

昨日と同じ黒塗りベンツ。

助手席から降りて来たのはウエーブのかかった髪、精悍そうな男性。後部座席のドアをあける。

その人に支えられながら姿を現したのは、ひとりの御老人だった。

老君は義経さんを一目みるなり、手を取り、涙を浮かべながらこういった。

「つー、シーザーさん……ツツ!!」

ああ、やはり、生きて……いらつしやったんですね……!!」

「……えっ?!」

*

*

*

「先日は申し訳なかった。うちの若い衆が……」

そうして俺と花京院が黒ベンツで連れられた、その先は、事務所だった。

なんと、いわゆる『マフィア』の。

「空港で君たちを見かけて……。丁重におもてなしをした上で、お連れするように、と部下に命じたのをどうやら勘違いしたようで……」

「は、はあ……」

俺たちがかもしも一般市民であつたならば勘違いでは済まなかつたような気もするが。

「して、君は、シーザーさんの……?」

「シーザー……、であるかはわかりませんが……」

「素晴らしいつ、写真を差し出す。」

「おお！ まさしく!!」

隣のこの方は細君か？ なんとお美しい！ さすがはシーザーさんだ！

か、彼は今!? 御健在なのかい?!」

力強く頷く。

「わたしは、この写真の男の、孫にあたります。」

祖父は健在で、今日本におります」

「そ、そうか！ そうなのか……。」

「……奥方……そして、こんな立派なお孫さんが……」

「実は祖父は……」

涙ぐむ老君に、事の経緯を簡単に説明する。

「そうだったのか……記憶喪失……それで……」

「はい、それで我々は手がかりを探しに……」

お伺いしてもいいでしょうか？ 貴方は……祖父の？」

「ああ。わしはサルヴァトーレ・マランツイーノ、という。」

シーザーさんの若い頃の、その、なんといったらいいかな……

まあ……その、『舎弟』……かな」

「『舎弟!?!』」

花京院と声を揃える。

「彼はわしの……いや、我が貧民街の、ヒーローだった……」

そして、老君はうれしそうに、かみしめるように語ってくれた。祖父との若かりし日

の思い出を。

「誰よりも強くて、頭もよく、鋭く研ぎ澄まされたナイフのようだった。」

でも、実は誰よりも仲間想いで……街のはみ出し者が集まってできたチームの、自然

にリーダーのような立場になられてね」

「チ、チーム？」

「いや、まあ、実は……盗みや喧嘩、けっして大きな声では言えないようなこともたくさ

んしたよ。しかし、餓えた者、弱き者からは決して奪わなかった。むしろ悪だくみで私腹を肥やしている輩から、苦しめられている弱きものに奪ったものを振舞う……そんな感じだね」

「へえ。いわゆる義賊……というやつだったんですね」

花京院が感心したように呟く。

「ああ。暴力も、理由なしには決して振るうことはなかった。

すべて仲間や身内を護るため……そんな一本、筋の通った人だったよ。

今のわしの在り方はすべてシーザーさんから学んだと言っても過言ではない」

「そう、なんですか……じいさんが……」

老君の様子に、くすぐったいような、それでもやはりこちらまで誇らしい気持ちになる。

「しかし、ある日チームを抜ける……と。

やることができただんだ、と晴れ晴れしい表情で……

それでも、時に街で顔を合わせたらいつも声をかけてくれて……でも……」

そこで急に彼の表情が曇る。

「その数年後、突然消息を絶ったんだ。ぱったりと。

以後、彼の姿を見た者は誰もおらず……」

「それが……」

「あのとき、か」

じいさんの身に『なにか』が起こって、ばあさんと出逢った……あのとき。

「彼は、死んだのだ……そんな噂が流れた。

信じられなかった。……信じたくなかった」

そして、パツと再び晴れ渡る。

「それが今日は、なんてことだろう！ 最高の気分だよ。

君たちのおかげだ……」

だが、しかし、そのときだった。

荒々しくドアが開けられる。

「失礼します！ ボス！ 襲撃です!!」

「なに!?!」

「急ぎお逃げ下さい!!」

お客人も！ こちらへ!!」

別の出入り口へと誘おうとする。が、

「だめだ！ 外も！ 囲まれている!」

わらわらとわいてくる黒服どもに退路を断たれ、完全に挟み撃ちにされてしまう。

「マランツイーノ！ 貴様もここまでだ！」

追い詰められた老君に一齐に銃口が向けられる。

「ボス、危ない！」

それを側近の……あのウエーブの髪の男性がその身を挺してかばおうとする。

「まとめて死ねえい！」

（いかん！ あ……！）

ふたりに躊躇なく引き金が引かれんとする……その刹那だった。

「ぐえっ……」

「うわっ！」

「ぎゃっ!!」

『なにもしないのに』襲撃者たちが突然、倒れる。次々と。

「……え？」

「な、なんだ……魔法か……？」

皆が目を丸くしている中、隣でひとり涼しい顔をしている『魔法使い』にこそつと訊ねる。

「おまえの仕業か……」

「気づかれないように、かつ、速やかに。ですよ」

いいつつウイנקをする花京院。

「外にいた連中もまとめてお帰りいただいています。

嫌な気配がしたので……『結界』をはって置いて正解でした」
にここにこそそんなことをいう。

「な、何が起きたかわからないが……命拾いしたようだ。

君たち、大丈夫かい？」

「ええ。マランツイーノさん、貴方こそ」

「こんな襲撃はしょっちゅうなんですか？」

「……まあ、こんな家業をしていると……仕方がないことさ」

老君は眉根を下げる。

「引き留めて、とんだ騒ぎに巻き込んでしまったね……すまない。

さ、もう早く行きたまえ。

君たちになにかあつてはシーザーさんに申し訳が立たん。

彼の無事がわかったただけでわしは満足だ。……本当に、ありがとう。

これからも息災でおられるよう、願っているよ……」

*

*

*

「……」

何とも言えない気持ちを抱えつつ、義経さんと共に事務所を出た。そのときだった。

(……ん？　なんだ……？)

視線を感じた。

「……そこだー！」

その出処に向けて義経さんがダーツを投げる。

先程の連中の残党か……と駆け寄って見てみるも、そこに居たのは意外な人物であった。

「君は……!?!」

まぎれもない。空港で出会った……あの、黒髪の少年だった。

「また君か。なんなんだ、一体……」

義経さんが解放してやると、やっぱり彼は飄々とうこう言った。

「ぼくの名前は……ジョルノ。」

ジョルノ・ジョバーナ……」

「……貴方たちの、力を借りたい」

「先程、マランツイーノさんへの刺客を追い払ったのは……貴方の仕業でしょう？」
僕を指し示す少年。とんでもない『情報』とともに。

「逃げていくやつらが言っていたのをぼくは聞いた。」

『深入りすんな。本番は明日だ』と

「な、なにイツ!？」

「これは、やつらは明日また来る。」

「しかも今日以上の勢力をもって……そういうことですよね？」

「……なん、だと……?？」

「もう一度、追い返して欲しいんです。やつらを。」

貴方たちなら簡単でしょう?」

それでもあくまで白を切る、僕。

「……なんのこゝろかな？」

僕たちは偶然この騒ぎに巻き込まれた、ただの一般人だよ」

「……か、花京院……」

しかし少年はそれを意に介さず続けた。

「やつらは……ギャングの風上にもおけない……汚い金と権利の亡者共だ。

ゆえに邪魔なんだ。マランツイーノさん一派が……

強きを挫き弱きを助ける……そんな、彼らのことが。

古き良きギャングの伝統を重んじる、誇り高き彼らのことが……」

疑問に思い、問う。

「ジオルノ君、といったね。君は……何者だい？ 彼らの、息子さんかなにかかい？」

「いえ。ただの一般市民ですよ。……まだね」

含みのある言い方をしたのち、俯く。

「しかし、さる『理由』があつて、ぼくは、彼らをなんとしてでも護りたい。

でも現状、ぼくには、その力が、ない……」

心底悔しそうに、拳を握りしめる少年。

「だから頼んでいるんだ！ 貴方たちにツ！」

「……。頼む人間を間違えているよ。」

僕たちはただの旅行者にすぎないのだから……ではね」

そんな彼に事実を伝える僕。だったのだが……

「……わかった」

「はあ!? よ、義経さん!？」

隣から予定外の言葉が飛んでくる。

「あ、貴方、立場的にまずいでしよう!？」

「大丈夫だ。まあ、ばれねえだろ……たぶん」

……よく考えたら予想通りではあるが。さすが兄妹。

などと、どこかで諦めつつ止めるも、そんなことをいう。

「どちらにせよ、じいさんをあんだけ慕ってくれている人をそのままほっとくわけにかねえ……花京院、おまえだって、どうせどちらにせよこっさり助ける気だったくせによ。俺の手前あんなこといつてるだけでさ。……ありがとうな」

「ぐ……」

(くそう……なんだよ……)

こんなところもやはり兄妹……そんなことを不覚にもおもってしまう。

「……話は聞かせてもらったぜ!」

そこへさらに飛んでくる、聞き慣れた能天気な声。

「あッ! あんたは!」

「よお! 久々ッ!

「このオレも、しゃーねーから手伝ってやろう!」

そんなふうには高らかに宣言する男に告げる。

「……ポルナレフ、遅いぞ」

「おい、花京院……相変わらず、なんでオレにだけそんなに冷たいんだよ……」

「そうなのだ。こちらへ赴くことが決定したあの日にこいつにはすでに連絡済みだった。」

「おまえがこつち来るって聞いたから、急いで飛んできてやったのによお。」

「それが久々に会った親友に対する態度か？　ったく……」

「ふっ！　……まあ、ナイスタイミング……といつてやらんこともない」

「だろ！　ヒーローはいいところに遅れてやってくるもんだ。へへ」

「そんな大口を叩きながらにやりと笑ったのち、少年を見ながら零す。」

「しっかし、花京院、おまえボインゴといい、意外とガキんちよに縁があるよなあ……」

「そこに聞き捨てならないと、静かな反論が入る。」

「ガキんちよ……ではありません。ジヨルノと呼んでください。」

「花京院さん、この若干失礼な方は……？」

「ああ、僕の不肖の仲間がすまなかったね。」

「こんなだけどいざというときは意外と頼りになる男だから」

「おい……、こんなんっておまえ……」

「つたく。で、あとは……」

ぶつくさ言いながらももう一人に目をやる。

「あ、そうだ。紹介する。ポルナレフ。」

会うのは初めてだよな？ 仁美さんのお兄さんの義経さんだ」

「おお！ やっぱり！ あんたが噂の！ よろしくなー！」

「あ、ああ。どんな噂だか気になるところだが……」

ポルナレフ、あんたにも妹がとても世話になつたと聞いている。

一度会つて礼を言いたかつたんだ。ちようどよかつた」

「おいおい、そんなかしこまんないでくれよ！」

オレの方こそつてやつだしな。あいつのおかげで何度命拾ひしたか！

たしか同い年だろ？ 仲良くやろーぜ、義経にーちゃん！」

陽気な調子で右手を差し出す。

「ふっ……、そつちこそ噂どおりだな。ああ、よろしく」

がっちりとは結ばれるふたつの手を微笑ましい気持ちで見る。

(ふっ……)

こうして、役者は揃つた。

「よし、そうと決まれば、一旦宿に戻って作戦を話し合うか。

夜からの張り込みに備えて寝ておくべきだしな」

「ああ」

「ジヨルノ君、じゃあ、あとは俺たちに任せて帰りなさい。いいね」

「そうそう。ガキンちよはイイ子でさっさと寝るんだぜー」

「また結果はちゃんと報告するから」

「……はい」

そうして男三人、連れ立って、歩きはじめ。

「じゃあ飯食いながら作戦会議だな！ オレ、ピッツアがいいな」

「いいねえ。なら本場のマルゲリータにイタリアビールなんてどうだい？」

「おお！ いいねー!!」

「まったく、討ち入りに備えようってときに、二人とも呑気なんだから。

……シチリアワインの種類も豊富な店をお願いしますね」

「ぷっ！ 花京院……おまえ……」

「ふっ！ どの口がいう……」

「ん？ 腹が減っては戦はなんとやら……というやつですよ」

「……」

その最中、ふと思い、振り返る。

そこには先ほどと変わらぬ場所で佇む少年のすがた。

「……」

その瞳は、なおもまっすぐにこちらをじっと見つめていた。

Golden road

「で、どうしたものかね？ あの親分さんたちを護りきるためには、だ」

ほとんど空になったジョッキをテーブルに置きつつ、義経さんが閑話休題。本題へと話を戻す。

昼食とも夕食ともつかぬ半端な時間であるからであろうか。夕暮れの、まだ客の数もまばらな食事処兼バーのような店の一角に僕達三人は腰を落ち着け『作戦会議』を開始していた。

「うーん、どうすつかね。しかも、なるべく本人らにバレないようにこつそりやるんだろ？ うお！ あつちい！ けど、うんめえー！」

運ばれてきた焼きたてのピッツァ（シンプルなマルゲリータにポルチーニ茸をトッピング。これがいいんだよ、これが！ ……とはリクエストした本人談。さすがヨーロッパの民……なのか？）。その天まで伸びるかのような熱々のチーズと格闘しつつもポルナレフがいう。

「ハフハフ！ なら、もう近づかせる前に全部片付けちゃうのが一番じゃね？」

「うむ。となると、外で待ち受ける形がいいか。にしても、どこで……」

「ふつ、そうくると思いましたよ」

これぞ待つてました、である。こうなるであろうことを半ば予期していた僕は、あらかじめ防衛対象建築物の間取りを法ハイエロフアント皇で把握しておいたのだ。メモを取り出しサラサラとペンを走らせ、必要な情報を描き出す。

「あの建物に出入口はふたつ。正面の正規の入り口と、ここ、裏口……抜け道からつながるもののそれです」

凶面のポイントを指しつつ、覗き込む二人に示す。

「今日の『下見』の様子からして、あちらもそれは調査済でしょう。少数精鋭で暗殺にくるのか、はたまた昼間以上の大所帯で数にものをいわせてくるか……敵側がどのような手段を用いてくるかはわかりません。ちなみに、直接わざわざ乗り込んで来たことからもわかるように、この建物の窓はすべて防弾ガラス完備。スナイパーによる遠距離からの狙撃は考慮に入れなくてもよいかと。よって、どちらにせよ、まずここを目がけてくるのは確実でしょうから……」

「なるほど、その2点の進入路を見張ればいいってわけだな」

「ええ。僕が少し離れた場所から建物全体を含め正面入口を見張ります。で、貴方達二人には裏口をお願いしたい」

「なに……?」

すると、顔を見合わせたあと口を揃える義経さんとポルナレフ。

「駄目だろ。それじゃあ花京院、おまえが独りで危ねえじゃねーか」

「おめー、オレ達がいねーときみしくて泣いちやうんじゃね？」

「……過保護か。そして、誰が泣くか！」

「なんだろう？　これが、『兄』という種族に共通する習性とでもいうのだろうか。苦笑しつつ返す。

「僕のごとは御心配なく。適材適所、というやつですよ。三人の中で遠距離かつ広範囲担当できる能力を持つのが僕、と理由は唯それだけです」

「まあ、そうだが……」

「うーん……」

しばし眉間に皺を寄せて『兄』達は唸っていたが、結局それ以上の代案は出なかったようだ。しぶしぶであるがどうにか了解を得ることに成功する。

「しゃーねえ。それでいくか」

「くれぐれも無茶すんじゃあねーぞ」

「もちろん。そちらこそ気を抜かないでくださいよ？」

「精鋭が忍び込んでくるとすれば裏の方が確率高いんですから」

「うーん。精鋭か……どんな奴がくるんだろうな？」

「だいじょーぶだつて！ オレらにかなうやつなんてそうそういねーだろ」
腕を組み唸る義経さん。そこにかけられるお気楽男ポルナレフの声。

「……まっさか、刺客でスタンド使いが来ちやうわけでもあるまいし！」

「……………」

一人陽気な男のその台詞に、義経さんとともに頭を抱える。

「おい、ポルナレフ……………」

「教えてやろうか……………」

「ん？ なにを？」

「そういうのを、日本では……………」

『『フラグを立てる』っていうんだよ……………』

スタンド使い同士は引かれあう…………もう、幾度となくこの身に染みて実感している、あの言葉がまたも僕の頭にこだましていた。

一抹の不安と確信めいた予感を抱えたまま、日付の変わる少し前、宵闇に紛れて僕達は再び護衛対象…………マランツイーノさんの事務所までやってきた。

周囲はシンと静まり返っている。どうやらまだ『お客様方』は到着していない様子だ。

「それでは手はず通り、配置につくとしまししょう」

皆に声をかける。それに呼応し響く仲間の声。

「ああ」

「おう！」

「はい」

（……ん？　なんか返事の数が……）

違和感。その元をたどる。

「「つて、はあ!?!」」

その存在に気づいた僕たちの、呆れきったユニゾンが闇夜に響く。

「おい……」

「ちよつと待て……」

「おや？　どうかされましたか？　皆さん」

「……ジョルノ君……」

「じよ、ジョルノ!?!」

「どうして君がここに……」

「来るなつて言つただろう！」

そんな僕たちの声もどこ吹く風か。しれつと少年はいった。

「ぼくもここで見守ります。当然でしょう？」

依頼主はこのぼくなのですから。顛末を見届ける義務がある」

「はあ!? 駄目だ! 帰りなさい。どんな危険があるかもわからないんだぞ」

「そうだけ。おめーを護つてやれる余裕は……」

「かまいませんよ。ぼくはただ居るだけなので。どうぞお気になさらずに」

全員で必死の説得を試みるも、それを柳の如く柔らかに受け流す少年の態度は巖と石のように頑なで、とても聞き入れてもらえそうもなかった。

「参つたな……」

「どうするよ……」

「はあ、しかたがないな……」

ここで長々と押し問答をしている時間もない。やむを得ず、妥協案を提示することにする。

「僕の傍にいるといい。比較的安全だろうから」

そんなわけで僕は成り行き上、ジヨルノ君と共に事務所全体が見渡せる、現場から少し離れた小高い丘の上で監視を開始していた。

相変わらず建物は静寂を保っていた。これが嵐の前のなんとやら……というやつであらうか。

「……」

ちらりと隣の少年を見る。

いつギャング同士の抗争がおつ始まつてもおかしくない。そんな状況なのだ。恐怖心を感じるものではないのだろうか？ 一般的な少年ならば。

しかし、その表情からは不安げな様子すら微塵も読み取ることができない。これまた相変わらずの年齢に似合わぬポーカーフェイスを貫いている。

不思議に思い、少年に尋ねてみることにした。

「ジヨルノ君、ひとつ聞かせてもらいたい」

「なんですか？ 花京院さん」

「理由さ。どうしてそこまで彼らのことを護りたいんだい？ 『一般人』の君が、だ」

「……どうして、そんなことを聞きたいんですか？」

「別に。まあ、同じく『一般人』の好奇心、かな。まあ、いいじゃあないか。おしやべり

も。ただ待つだけの時間は長いものさ」

「……」

暫しの沈黙、逡巡を経たその後、少年はぽつりと言葉を紡ぎだした。

「……恩人、なんです」

「マランツイーノさんがかい？」

「いえ、彼の傍にいつもいる……」

「ああ、あの……」

主を、その身を厭わず献身的に支えている……そんな様子が印象的だった。あの側近の方の精悍な顔つきを思い出す。

「あのひとのおかげでぼくは……『にんげん』になれた」

少年の表情が、やわらかくなる。年相応の、それに。

そうしてジオルノ君は語ってくれた。凄惨ともいえる、その生い立ちを。

彼との深い『友情』を。

「……」

(この少年も、形は違えども……)

ずっと、『ひとり』だったのだ……)

そして、救われたのだ。きつと。

かけがえのない出逢いによって。

思い浮かべる。

あの旅であつた、仲間たち、そして……

「……なんですか？ 同情などいりませんよ？」

黙り込んだ僕に、そんなことをいう少年。

「同情なんて、これっぽっちも。」

若干『同調』はしているけれどね」

「え……？」

「いや、なんでも」

不思議そうな顔の少年に確信を告げる。

「……『たいせつなひと』、なんだね。彼は、君の」

「……。変なひとですね。花京院さん、貴方は。」

普通、自分の財布をスラうとした悪ガキの言うことに、そんな……。

とんだお人好しだ」

「ふっ、そうかい？」

前はこんな人間じゃあなかったはずなんだけれどね。僕は。

変わっちゃったんだよね……きつと。

……底抜けにお人好しなだれかさんのせいで」
頭に想い描く。『だれかさん』のかおを。

「……」

そんな僕の顔をじっと見た後、少年はいう。

「……なるほど。その方が、『たいせつなひと』、なんですね。花京院さん、貴方の」

「……さあね」

「ふっ、まったく。本当に変な方だ。」

おかげで、つい余計なことまで話したくなってしまう……」

そして少年は、その瞳を星の様に輝かせる。

「ぼく、ジオルノ・ジョバーナには、夢がある」

「……夢？」

「ぼくは、強い憧れを抱いている。」

……彼のような、真のギャングスターに」

力強く、まっすぐに。

「彼は、この世界にぼくを関わらせたくないと言っている。」

でも、なりたいたいんだ。必ず……なってみせる。

あなたのおかげで、あなたのようになれた……と。

いつか、伝えたいんだ。だから……」

「ああ。わかっているよ。」

「護ろう。……必ず」

「……来たな」

監視開始から二時間ほど経過した頃だった。その数およそ50人といったところか。銃を手に武装した連中が隊列を組んでぞろぞろと正面入り口前に集まってきた。

(さすがに多いな……なに!?)

とはいえ、それくらいなら想定の内観だ……などと考えていた僕に衝撃走る。

(全員……同じ、顔!?)

「……ポルナレフのせいだ」

「花京院さん?」

「いや、……こつちの話」

案の定のフラグ回収。そして、あの言葉の重みを改めて実感する。

連中の一体をこつそり調べてみたところ、スタンドエネルギーを感知。『実体』ではないようだ。おそらくは分身のようなものを生成するスタンド使いの作業なのだろう。

(少数精鋭で数にものをいわせてきたか。なんかそんな気はしていたけれど……)

しかし、この事態『自体』が僕を慌てさせることはなかった。

このようなタイプのスタンドに対しては、中に混じっているであろう『本物』を見つけて出すか、もしくは全員一気に叩けば問題ないはずだ。

——オー、ノオーツ!!——

とか言われつつ、脳の中で闘ったあの旅の一幕を思い出す。

今さら気づいたが、あれは御老公^{ジョースターさん}お得意のダジャレだったのだろうか？ 今度会ったら聞いてみよう……そんな至極どうでもいいことを考える余裕があるほどに。

(しかたがない。時間はかかるが、また一体ずつ調べるか……)

思い出にふけていた……そんな僕への戒めだったのだろうか。

「すみません、花京院さん」

「……ん？」

「ぼく、行きます！」

「あっ！」

何を思ったやら、そう言い残し、なんと突然少年が敵の渦中へと一目散に駆けだした。

「な、なにイツ！ なぜ!!」

「戻れ！ 戻るんだ！ ジョルノ君ツツ!!」

止める暇など全くなかった。

「……敵……」

「……排除……」

彼の接近を奴らが気取らぬわけもない。ガチャリとその銃口が一斉に少年の方を向く。

「くっ！ やむをえん！」

緊急事態^{トラブリュ}発生。予定変更だ。一気に叩く案を採用することとする。

「くらえッ！ 半径20mの……エメラルドスプラッシュをッ!!」

密かに張り巡らしていた『法皇の結界』から群衆に向け碧色の嵐を叩き込む。

次々と煙のように姿を消していく分身体。

「……。しまった……」

消えてしまった。全員。

それはすなわち……

「そこに隠れているヤツ……出てこい！」

(くっ！ やはりか……)

倒したのは全員、分身。本体はそこにはいなかったらしい。

野太い声が見えやると分身と全く同じ顔の男……

「……このガキの命がおしかつたらな！」

そして捕獲され、頭に銃口を押しつけられている、少年の姿があった。

*

*

*

「大丈夫だろうか、あいつら……」

花京院とジオルノと分かれたのち、オレと義経にーちゃんは予定通りのポイントに潜み、屋敷への隠し入り口を見張っていた。小一時間程たった頃、ぼつりと発された一言に返事をする。

「だいじょーぶだろ。花京院がついているし」

「それは、そうなんだが……」

それでもまだやつぱり難しい顔をしている相手に素直な感想を述べる。

「義経にーちゃん、ほんとに過保護で心配性なんだなあ……」

「ああ？ そんなことねーよ。」

ただ、あのかっこつけのお人好し……クールぶっているくせに、いざつて時は平気で自分を犠牲にしかねんからな……つたく」

「ふーん……」

それを聞いて、つい感情が表に出てしまっていたらしい。不思議そうな顔で問われる。

「……なんだよ、その顔は」

「ん？ うれしいのさ。にーちゃんが花京院のことすげー理解してくれてるってことが」

「い、いや、だってあいつ、要領いい癖にやたらと実は不器用だしさ……」

「そーそー。そんな弟分を持つと気苦労が絶えないわけよ……とか言ったら肘鉄がとんでくるから本人には言えんけど」

「ふっー！」

噴き出す義経にーちゃんに、改めて頭を下げる。

「花京院のこと、これからもよろしく頼むな」

「……ちっ！ ポルナレフ、おまえこそだろ。過保護なのはよ。」

しかたねーから頼まれてやるか。そのうち俺にとってもほんとの弟になるらしいからな。あくまでしかたねーからだからな」

「そっか……そーだな」

そして、またも、甦ってくる記憶。

「なんだよ？ またにやにやして」

「いや、思い出し笑いつてやつさ。

やつぱ、義経にーちゃんは、『いいにーちゃん』だったんだな、つて。懐かしいな。昔仁美が話すの聞いてたときに思ったとーりだ。へへ」

今と同じように夜風に吹かれながら列車で交わした、あの会話。

「はあ？ からかうなよ。

……だったら、よかつたんだがな。

いい兄なんかじゃあない。

なんにもしてやれてねえからな……俺は。

ガキの頃から……ずっと、な」

「にーちゃん……？」

「いや、なんでもねえ」

そういつたきり、黙りこくってしまった相手に、またも素直な感想を述べる。

「……。わかるかもしれないわ。オレ。……たぶん。ちよびつと」

「なんだそれ……」。

……ああ、そうか。おまえ、そうだったつけな。……すまん」

「いーや」

『なにか』に気付いたらしい。そんな彼に本音を零す。

「あーあ、まったく、兄貴ってやつはつらいよなあ」
「……………だな」

そうこうするうちにどうやら『いい時間』になったようだ。
ざわざわと周囲に集まってくる無数の気配。

「……………ッ！ おい、ポルナレフ！」

「……………ああ、来やがった……………！」

敵を視認したところですのですぐにオレは異常に気づく。

「は!?!」

「同じ顔……………の集団!?!」

そして、もうひとつ。

「こいつら……………スタンドじゃあねーか!」

オレの驚きの叫びに対し、花京院からスタンドに関してだいたいの事柄は聞いているのだろう。隣から疑問が投げかけられる。

「え? でも、俺にも見えるぜ?」

「え? そうなの!?

ええと……そうだ。スタンドにはなんかそういう普通の人にも見えるタイプがあるんだよ」

前に何度か遭遇したことのある、スタンド使いでない人間にも見えるスタンド。ということは、敵はなかなか強力なパワーを持っている、ということかもしれない。

「とにもかくにも……だ！ スタンドはスタンドでしか倒せねえ！

オレに任せて下がってくれ」

義経にーちゃんを制し、戦闘態勢を取るべく躍り出る。

「……チャリオーツツ!!」

相棒、銀シルバーチャリオーツの戦車を出すと、一気に勝負をかけるべく甲冑を脱ぎ捨てさせる。

「行くぜ！ 先手必勝！ ……うおおおおお!!」

レイピアをかまえ、フルスピードで突きのラッシュをぶちかまし、並み居る敵を次々と薙ぎ払っていく。

「……おお！ すげえ！ 全員消えたぜ！」

「へっ！ ざつとこんなもんよ！」

「……やるな。一瞬であの数を」

しかし、場のすべての兵隊を片付けたところで、闇夜から拍手とともに不気味な声が聞こえてくる。

「なにイ!？」

「……スタンド使いの護衛がついているという情報はなかったな」

声のした方向に目を凝らすと、そこには一人の……一見、優男風の、女性かと思紛うような真つ直ぐな長い黒髪の男が立っていた。

男はオレとチャリオッツを見比べつつこういった。

「貴様のスタンドのスピード、かなりのものだ。12体ほどに見えた」

「ふん。……ゾツとしたかい？」

理由あつて修行をしておいたのさ。あの旅が終わつてから、また、な」

「ほう……」

「こちらも負けじと訊ねる。」

「あの分身……黒づくめ達はてめーのスタンドか？」

「さあ？ どうだろうな。くくく……」

「……敵……」

「……排除……」

敵の男に気をとられている間に、またも湧いてくる黒服共。

「チツ！　また……！」

「排除!!」

その手に握られたマシンガンが一斉掃射される。

「くっそ！　チャリオッツ!!」

弾丸をすべてレイピアではじき飛ばす。が……

「我が存在を忘れてもらっては困るな」

（しまっ……）

その一瞬の隙について死角から放たれた、長髪の男の飛び蹴りがオレに炸裂しようとする瞬間だった。

「あぶねえ！　ポルナレフ！」

「ツ!?　義経にーちゃん!」

掌底で、見事敵の攻撃をはじき返す。

「おまえは、スタンドの方頼む！」

さらに背後にすつと立つ。オレの背中を『護る』ように。

「……このロン毛野郎とは、俺がやるぜ」

「私の蹴りを止めるとはなかなかやるではないか。貴様もかなりの使い手だな。その構え……どこ流派かな？」

「さあ？ 俺もそれがわからずに困っている」

「なんだそれは？ 意味がわからん」

「だろうな」

「まあいい。それでは我も本気でお相手するのでしょうか」

言うなり、敵の全身に不気味な紋様が浮かび上がる。

「なんだ!? 奴の肌に変な模様が!」

「このタトウーは我がスタンド、ヒアンコ・ロリカ白き鎧。

纏えばその拳は大地を砕き、蹴りは空を裂く。

……このようにな」

壁を手刀で一閃すると、あたかも布をハサミで裁断したかの様にスパッと切れ目が入り、ガラガラと崩れ落ちていく。

「自分を強化するスタンド、つてことか……?」

あつけにとられていたオレをよそに、これまた妹に負けず劣らず、の懐かしき香りのする天然発言が飛び出す。

「話の腰を折つてすまんが……模様? ……見えん……」

「あ、そ、そっか、そうだよね……」
「が、しかし……だ。」

なら、……俺には関係ねーな」

そして、再び、敵に向け構える。

「くく、くくくく……」

すると、またも不気味に笑う男。それに真つ向対峙しつつ、にーちゃんが問う。

「何がおかしい？」

「くくく……『見えない』といったな、貴様。スタンド使いでもない身分で我に挑むとは笑止千万。尻尾を巻いて逃げ帰ったほうがよいのではないか？ 『一般人』は」

「……」

「スタンド使いとは、神聖なる騎士。選ばれし民、貴き強者である。」

下賤な弱き民……一般人とは決して相容れぬ。

その間には海より深く山より高い……

どんなに努力しても越えられない壁があるものよ。

スタンド使いは搾取る側。一般人は搾取される側。

その差は覆ることのない……もとより決定している事柄なのだ。諦めろ」

「なっ!？」

反吐の出そうな台詞に、おもわずオレの方が反応してしまいそうになる。

そんな中、うつむいたままポツリと義経にーちゃんは呟く。

「……いいよなあ」

「は？」

「そうやって考えられる人間が『そう』だったなら、きっと、よかつたんだろうな……」
どこか遠くの空を仰ぎながら。

「その存在を、運命を受け入れつつも……」

ひとりで、ずっと、ずっと苦悩して……

そして今なお、逃げずに立ち向かっている。

生憎、俺のよく知っているスタンド使いはな、

みーんな馬鹿で、真面目で、不器用で……

でも、そのぶん、だれよりも、つよくて、やさしい。

……そんなやつらでな」

「……にーちゃん……」

そして、わかっている敵に対し、静かに、それでいて、熱く燃えるような怒りを込めた視線を向ける。

「……余計に負けるわけにはいかねーな。」

てめーみたいにくスなスタンド使いにはな」

「ふん。いくぞ……」

「ああ、……来い！」

睨み合う両者。

(すげー気迫だ……)

変わらずわらわらと湧いてくる分身共をいなしつつ、オレはその闘いを見守る。

「うおおおおオオ!!」

「うりゃああああ!!」

勝負は、一瞬で決まった。

オレの眼にも止まらぬ速さで二人が交錯する。

(ど、どっちだ!?)

「……………ぐふ……………」

ゆつくりと崩れ落ちる、敵。

「……だからいったらどう？」

スタンド使いとか、そーじゃねーとか……」

「……そんなの、『俺には関係ねー』、つてな」

「すげーじゃん!!」

「へっ! どうだ? 『一般人』もなかなかやるだろう?」

「……いや、すまん。めっちゃ水を差すようだけど、義経にーちゃん、全く一般的ではねーからな」

「うるせえな。……ああ、俺こそすまん。もう、『力』使い果たしちゃった。……動けん……」

そういつてへたり込む。

「はあ!」

「な? ほら、普通だろ?」

「つたく! はいはい、お疲れさん!

あ! またわらわら来やがった! ほんつとしつけーな! ……つて、あれ?」

呆れ半分に、苦笑しながら義経にーちゃんを起こそうと手をさしのべようとすると、

また現れた黒服分身共。それに対しチャリオツツのレイピアを向けた時だった。

「消えた……!?!」

「ああ、倒したんだろ。あつちが」

「……ああ、なるほどね」

それに安堵し、すっかり油断していたオレは気づくのが遅かった。

「くそ……。許さぬ……!」

せめて……貫け、我が槍^{ピルム}……!!」

辺に乱射され散らばった銃弾。

その一発を拾い上げ、最後の力をふりしぼるかの如く、それを指で弾く敵の姿に。

「Palla finale!!」

猛烈な勢いで飛んでくる弾丸が、座り込んでいるにーちゃんの頭を狙う。

「しまった! 義経にーちゃん! あぶねえ!!」

「ぼ、ポルナレフーツ!!」

*

*

*

「チツ、スタンド使いがマランツイーノのやつに肩入れしていやがるとはな……。スタ

「くッ！」

分身たちの持つ銃の引き金が一斉に引かれようとする。その刹那だった。

「……………なに？　どれが本物かわからない？」

ぼくにはわかりませんが」

再び、おもむろに立ち上がる少年。

「なんだと？　このガキ……………」

てめーから先にあの世に行きてえみたいだな……………」

「いけない！　ジヨルノ君!!」

「……………いけない？」

いいえ。花京院さん、そんなことはありませんよ。

これでいい。これだから『いい』んじゃないありませんか」

にやりと、不敵な笑みを浮かべる。

「おかげで……………ぼくはどうとう手に入れることができました」

「……………え……………？」

「先程ぼくを捕まえた人は『本物』だった。

分身からは感じない生命エネルギーを感じたから」

言いつつ、彼は懐からカフスポタンを取り出す。

「これは、あの時貴様から拝借スツしたたもの。そして……」

刹那、ボタンがふっと消え、その指先には一匹の『七星輝く天道虫』。

「な?! 手品……?」

「……『物』は、持ち主の所へ戻る」

小さな昆虫は、その羽を震わせながら、一直線に一人の男の元へと飛び移り、その肩にとまる。

「え……あ!?!」

『本物』は、おまえだツ!!」

戸惑う相手に少年がビシッと指をさす。

「……無駄ア!!」

同時に、少年からまばゆい『なにか』が飛び出し、敵本体に強烈な一撃を繰り出す。

「ぐふあー!」

勢いよく壁までふつとぶ敵。

それとともに、『分身』たちは一斉に消えた。

「そ、それは……!?!? そ、それに……!」

僕の眼にとびこんできた、『驚くべきこと』はそれだけではなかった。

「ジヨルノ君、か、髪が!」

少年の漆黒だった髪の色は、明るいブロンドのそれに瞬く間に変わっていた。「き、君は……！　まさか……君も、……す、スタンド使い……？」

混乱だらけの頭の中、どうにかひとつの結論を導き出す。そうだ。どこまでも僕は迂闊だった。

——マランツイーノさんへの刺客を追い払ったのは貴方でしよう？　——

なぜわかったのか。

ジヨルノ君に『僕』がやつらを追い払ったことが。

答えは簡単だった。

(……みえていたから。か……)

「……ありがとう、花京院さん。」

そして、すみません。黙っていて」

少年の傍らに寄り添うのは、まぎれもなく……

黄金色に輝く人型の『幽波紋』スタンドだった。

「ぼくの『これ』と貴方の『それ』……。

同種、のものであろうということはわかっていた。

花京院さん……強力な能力者である貴方の傍に居れば……

存在だけはずっと……うっすらと感じていた……

『こいつ』が具現化してくれる。……真にぼくのものになる。

そんな気がしていた……」

「……そして、それは正しかった」

ザツと、少年はその相棒とともに、ふつとんだ刺客のほうに向き直る。

「みせよう!! 『黄金ゴールドエクスペリエンス体験』!!」

少年のスタンドの起こした現象。それはまさに言葉では言い表し難い『体験』であった。

その黄金の両の拳で地面を殴る。

すると何も無いところ……いや、アスファルトが大樹に変化する。その幹は瞬く間に

メキメキと伸び、刺客を磔にした。

「うわぁー!」

そして少年は身動きできぬ相手に、そつと……しかし、悪魔をも震え上がらせるかの如き低音で囁く。

「……聞け。」

この組織は神の庇護を受けている。

その意に背き、これに害をなす愚かな者に……その鉄槌は下る」

「……Capisci?」

「そういうわけで、だ。何度来ようと……」

「……無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄……無駄ア!!」

容赦なく浴びせかけられる拳の弾幕。

それはまさに親友の『あれ』承太郎を彷彿とさせるほどのものだった。

「……終わりましたね」

再起不能……を若干通り越している可能性の高い、敵を尻目に少年がしれつと言いつつ。

「ああ。言いたいことは山ほどあるけど、とりあえず……」

それに対し、僕はにっこりと『微笑み』を返す。

「おしおきだよ……!!」

「……えッ?!」

加えて、いうやいなや、少年の頭に思い切り、拳骨を落としてやる。

「……。痛い、のですが……」

「ああ、そりゃあそうだろうね！」

まったく、いったい何を考えているんだッ!

上手く、君のスタンドが目覚めてくれたからよかったものの……!

一歩間違えたらどうなっていたかッ!

「……」

「怪我どころじゃあ済まない……最悪死んでいてもおかしくなかったんだ！」

わかっているのかい? そのところは!!」

「……」

「彼を護るため、力が欲しかった……その気持ちは、すごくよくわかる。しかし……君に何かあったら、彼はどんな気持ちになると思う? 君ならわかるだろう? 僕は諸事情

あつて、途轍もなくよくわかってしまえるがね! いいかい? 二度としてはならない

! あんな真似……ッ!

「……」

一気にまくし立てたのち、呆けている少年に気づき、いう。

「ちよつと……聞いているのかい？ ジョルノ君？」

「……あの、質問、いいでしょうか？」

「……なんだい？」

「怒つて、いますか？」

「ああ。そうだね。」

他にどう見えるのか、候補があるならば教えていただきたいものだ」

「……もしかして、ですが……それは……ぼくの、ために？」

「は!? ……しらないね、そんなの。自分で考えたまえ」

「わからないですよ……そんなの。」

「だって、初めてだ……これが『叱られる』というものなのか……」

「と、とにかくだ！ そんなのどうでもいいんだ！」

「重要なのは内容だ！ そののところ！ わかったのかい？」

「ええい！ わかったら返事をしたまえッ！」

「……はい。わかりました。」

「花京院さん、貴方が、やっぱりとんでもなくお人好しで、お節介で……」

「……そして、『いいひと』だ、ということが」

「ジヨルノ君……」

「あと、貴方の言いたいこともちゃんとかわかっていきます。

今後はなるべく、自身の安全にも配慮した方法を心がけようと思います」

「……ああ、そうしてくれたまえ。……ふっ！」

やっぱりひとつも変わらない……少年の飄々とした態度に、つい、おもわず笑みが漏れ出てしまう。

「はあ……、しかし、驚いたよ。君の能力は一体……」

改めて少年にそう問いかけた、そのときだった。

「おーい！ 花京院っ！ ジヨルノーっ！」

声ともに向こうから駆けてくる足音と伸びてくるふたつの長い影。

「ふたりとも大丈夫かー？」

「は!? ぼ、ポルナレフ、おまえこそ！」

呑気な声に似合わず……、街灯の明かりに照らされ、かろうじて見える男の腕からは真つ赤な鮮血がとめどなく流れ落ちていた。

「へへ、ちよつとしくじつちまって流れ弾にな……」

「ちがう！ ……俺を庇ったんだ。すまない……」

「もー！ にーちゃん、そんな顔すんなよ！ だから平気だつて。

このくらいかすり傷よ。なめときやなおるさ」

「そんなわけあるか！ しかも、まだ中に弾丸が……」

「なにッ!? 馬鹿！ 早く病院行くぞ！ すぐ手術で摘出を……」

しかし、慌てる義経さんと僕をよそに、あつけらかんとしている当人。

「えー、やだなあ。……痛そうじゃん、手術とか。

弾で傷塞がってんだからよくねえ？」

「いいわけないだろう……」

「弾で……? 傷が……?」

すると、そう呟いたのち、神妙な顔でなにかを考え込んでいる少年の様子に気づく。

「ジヨルノ君？」

「……。ちよつとみせてください、ポルナレフさん」

「あん？」

そういつて、少年がその腕に触れた瞬間だった。

「いつてえーッ!! ……つて……、あれ……?」

「腕にめり込んでいた銃弾を変化させ、組織修復に必要な部品……細胞を創って傷を塞

ぎました。

ポルナレフさん、貴方自身の言葉がいいヒントになった。

ぼくの『黄金体験』は……」

「ま、まさか……まさか!! 君のスタンドは……」

「生命を、創り出せるのか!?!」

「き、傷が……! しかも、そ、その髪……!?! どうした!?!」

「つてか、そ、それ、スタンドじゃあねーか!

な、『治す』スタンド使い!?! ジョルノが!?!」

「ほ、ほんとうに!?! 俺には全く見えんが……そうなのか!?!」

あまりの急展開に、目を白黒させるポルナレフと義経さん。

それに対し、冷静に返す少年。

「ええ。どうやらそういうことも可能なようですね。

ためしにやってみたらできました。

まだ研究、改良の余地がありそうですが」

「……おい、オレは実験台かよ。いや、いいけどさ……」

加えて、そんなふたりの比ではない狼狽っぷりの人間がもうひとりいた。

「あ……………う……………え!? あ……………!!」

……………自分だが。

「お、おちつけ! 花京院! おい!! しつかりしろ!」

視点の定まらない僕を義経さんが揺さぶる。そんなの無理な相談、というやつだろ
う。が、どうにか、いう。

「ジヨルノ君、た、たのみが! たのみがあるんだ!!」

僕のこい……………な、仲間が……………怪我が、仲間が……………ツツ!!」

「だからおちつけて……………」

まあ、きもちわかるけどよお……………!!

チクショー!! やったな、花京院ツツ!!」

ポルナレフが歓喜の叫びと共に僕の背中をばしばし叩く。容赦ないその痛みが僕に
これが夢ではないという事実を教えてくれた。

「よくわかりませんが……………お仲間の怪我を治せばいいんですか?

もちろん、別にかまいませんよ」

(……………やった。……………やった……………!!)

ようやく、みつけたのだ。……………僕は。

そう、おもった。

しかし……その矢先だった。

少年のポケットから滑り落ちる、『なにか』。

「あ、ジオルノ君、手帳かなにか、落としたようだよ……」

「ああ、本当だ。ありがとうございます」

拾い上げて、気づく。

「!?」

挟まっていた一枚の写真が目に入る。

そこに写る、ひとりの、男……。

(こ、これ……は……!)

「じよ、ジオルノ君……この、男は……?」

「ああ、そのひとは……」。

ぼくが生まれて間もなく、エジプトで死んだ……

写真でしか見たことのない……名前すら知らない……」

「……ぼくの、ほんとうの父親、とのことですよ」

「日本か。実はぼく、物心つく前にはいたらしいんですが」

「へえ、そうなのか」

「いいとこだぜー。女の子は皆やさしーし、かわいーし！」

「おい、ポルナレフ、過剰放送はよせ……」

「えー？　そういう、にーちゃんもイケメンだもんなあ……」

女の子よりどりみどり選び放題だろ？　いいなあ」

「んなわけあるか……」

「ああ！　でも、うちの妹が一番かわいいって？　もう、このシスコン！」

「ああ?!　それこそ、んなことあるかッ!!　あんのボケ妹のどこが……」。

花京院の趣味を疑うね！　俺は！」

「あらあら！　もう、照れちゃってえ！」

まあ、たしかに仁美はかわいい！

けど、うちの妹、シエリーにはちよびつと及ばないかな！ ナハハハハ！」

「……。ポルナレフ、おまえにだけはぜってー、シスコンとか言われたくないぜ……」

「……まってくれ……」

「ん？ 花京院？」

「……どうした？」

「……ジヨルノ君、さっき頼んだことは……忘れてほしい」

「は!？」

「な、なにいつてんだよ！ 花京院！」

おまえ、治こすスタいンド使っいのこと、どれだけさがして……」

「そういうわけには……いかない。」

「いかないんだッ……!!」

「……か、花京院？」

「頼める、はずなどない……」

「……そんな資格、僕には……」

「……花京院さん……?」

「その写真の男……君の父親は……D I O。……ディオ・ブランドー」

「は!？」

「なッ!？」

「……君の父親を死に至らしめたのは……、……この、僕だ」

「……え……?」

「好きにするといい。君にはその権利がある。」

僕を、恨むなら恨んでいい。復讐にも、来るといい。

弁解をする気はないし、そもそも奴を倒したことに、後悔など、ひとかけらもない。しかし……、結果的に……僕は君にそれだけのことをしたことになるのだから」

「そんな覚悟など……とうにしている」

「……もう二度と、僕から連絡することはないだろう」

制止の声を振り払い、重くて仕方がない身体をひきずりどうにかホテルへと戻り、ベッドに潜り込む。

「……………仁美さん……………」

「仁美さん……………！」

「つ……………ごめん……………。……………ごめん……………!!」

夢の中の彼女は、微笑んで、首をふって……………

そして、つつみこむように、僕を抱きしめてくれた。

「よお」

「おはよう、花京院」

「……………おはよう……………います」

翌朝、部屋のドアを開けると、見知った二つの顔がそろって心配そうな表情を浮かべつつ出迎えてくれた。

「さ、明日から、義経さんいよいよ研修でしよう？

ポルナレフは、今日フランスに帰るんだよな？

僕の方が早い便だから見送りには行けないが……」

その気遣いを払拭したくて、敢えて、矢継ぎ早にいう。

「花京院、待つてくれ」

それを、やんわりと制される。

「おめーに会いたいわってやつがいるんだ」

「え……？」

「……ジヨルノ……君……」

そうして、彼らに連れられた先に居たのは、金の髪の毛の、少年。

僕の後ろの二人を指しつつ、言う。

「そこのおふたりに……あのあと事情は聞きました」

そして、僕をじつと見たあと、こう問うた。

「花京院さん、ひとつ……尋ねたい。

貴方は、自分を恨め……と言った。

しかし……貴方は……貴方こそ、ぼくが、憎くはないんですか？」

「……僕が？ 君を？ ……なぜ？」

「なぜって……ぼくの父は、貴方のたいせつなひとを……」

「そうなんでしょう？」

「……」

「おふたりも、いいひと、だ……」。

ぼくを氣遣つてか、どうしてもはつきりとは教えてくれなかった。

でも、そんなこと、少し考えれば……明白なことだ」

うつむく少年に、伝える。

「……。何かと思えば……そんなことか。そんなの言うまでもないだろう……」

「……」

「……あくまで『仮に』だが……もし、それが事実だとしたら、どうだというんだい？」

「え……？」

「親は親……君じゃあない」

「……君は、君だ」

「……ッ！」

「それになにより、知り合つて間もないが……聡明で、まつすぐで、揺るぎない夢を持ち、それに向けて邁進している。ジョルノ君、そんな君に、恨みどころか……実は僕はすでに、かなり好感を抱いてしまつていたりする」

「花京院さん……」

「まあ、そんなわけで、……元気で。」

「……じゃあね」

そうして背をむけ歩き出そうとした。

そんな僕に放たれる言葉。

「……まつてください！」

「ぼく、行きます。日本に」

「……え？」

驚き、振り向くと、まつすぐに僕を見据える青い瞳。

「そして、貴方のたいせつなひとの怪我を、治す」

「……ど、どうして……？ 僕は君のお父さんの……」

「どうして……だと？ そんなの、決まっている……」

「義理と人情を重んじ、受けた恩義はきっちり返す……」

そしてなにより……生まれた友情を、決して裏切らない」

「それが、真のギャングスターってものだからです」

「じゃあ、無駄なことは嫌いなんです。時間の無駄。

さっさと行きましょう、日本へ」

戸惑う僕を尻目に、照れ隠しも兼ねてかそんなことをいい、さっさと歩きだす少年。

「……ああ。……ありがとう」

「へへっ！」

「……だとも」

まだ呆けていた僕の肩をバシッと一発ずつ叩き、ジョルノ君の元へと駆けていく二人。

「……ふたりも……。ありがとう」

「ああ、そうだ」

ふと立ち止まり、振り返り、僕に問う少年

「ところで、うつかり聞き忘れていたんですが……」

花京院さん、肝心な貴方の『Amore』の怪我ってどんなものなんですか？

治すイメージをかためるために聞いておきたい」

それを受け、『兄達』はいう。

「ああ、そういえば」

「そこ言っでなかったな……」

「はあ？　ちよつとふたりとも、しつかりしてくださいよ……」

揃いも揃ってなんともうつかりしたものだ。長兄とはそんなもん……とか聞いたことがあがる。

しかたがない。あまり口に出したくもないが、彼女の現状を説明する。

「脳の細胞が破壊されて、意識不明……昏睡状態なんだ。

それを、治してほしい……」

「え……？　の、脳……？」

瞬間、けつしてうろたえることのなかった……少年の顔色が初めて変わる。

「言いづらいんですが、腕とか脚とかならともかく……」

ぼくの『黄金体験』が創るのはあくまで部品。

脳細胞を新しく創って、それを埋め込むだけでは、おそらく『別人』に……
それでもよければいつでも協力しますが、あまりおすすめしない……
すみません、期待させるだけさせておいて……」

そうして、僕たち三人は再び、ローマ、フィウミチーノ空港にやってきた。

「じゃあ、義経さん、研修頑張ってくださいね」

「ああ。来週には俺も帰国するがな。」

花京院、おまえはアメリカに寄るんだろう？」

「ええ。ジョースターさん達に会ってきます。」

今回の件、無用な心配と誤解を生まぬよう、直接きちんと報告しておきたいですし」

「そうだな。じゃあ、また日本で、だな」

「ええ」

続いて、もうひとりに目をやる。

「ポルナレフ、おまえも元気だな」

「おお。ジョースターさんと承太郎によろしくな！」

「ああ」

すると、ポルナレフは珍しく躊躇いがちに、なにかを言いかける。

「……なあ、花京院？」

「ん？」

「……いや、なんでもねえ」

「え？　なんだよ……言いかけてやめるなよ」

「いーんだよ！　……またな！」

しかし、それ以上やつは答えず、詰め寄ろうとしたタイミングで搭乗を促すアナウンスが流れてしまう。

「ああ、もう！　じゃあ、なにかあったらすぐ言えよ！　絶対だぞ!!」

「へへ。わーったって。ありがとな」

「……じゃあ」

そして、振り返ろうとしたところで、またも心配顔の義経さんに問われる。

「その、……だいじょうぶか？　花京院」

「どうして？　沢山の収穫があった旅じゃあないですか。」

そもそもその目的はおじいさんの記憶の情報収集だったわけだし」

「まあ、そうだが……」

「むしろ、ジオルノ君に無駄に気を遣わせてしまつて申し訳ないというものですよ。何

気にもものすごく気にしていたようですし……」

「ああ……そうだな。また俺からも声をかけておくよ」

「ええ。頼みます」

「そもそも……この出会いは、決して無駄などではない。

……そんな気がする」

予感がした。

——二人の少年の力によってお姉さんは……ぱっちり目を覚まし、ちぎれた左腕も元通り——

予言の書にあった金髪の少年。それはきつと……

「それに……」

「それに？」

「……非常に奇妙な御縁の……」

新しい『友人』ができましたし」

「……ふっ！ そうだな」

離陸した機体が、ゆっくりと高度を上げていく。

「……」

窓から臨む、果てしなく続くかのような空。

分厚い雲を突き抜けたその先で、僕の頬を照らした。

黄金色に輝く、ひとすじの光が。

僕の予感……

それが確信に変わったのは、これからそう遠くない日のことだった。

またも実に奇妙な縁でつながった……

もうひとりの新たな『友人』との出会いによつて。

——星々の光がひとところに集結するとき、『箱』は開くだろう——

そして、実のところこのとき（……いや、厳密にはずっと前から……）、僕のあずかり知らないところで、とつくにある闘いの火蓋は切られていたわけなのだが……

それはまた、別の話。

*

*

*

「……ちくしょう、覚えてやがれ。

マフィアは一度受けた恨みは忘れねえ……

報告して、ファミリー総出で、必ずおまえらを……」

「……」

「ん？ ねえちゃん……なんだよ？ 見せもんじゃあねえぞ、コラ！」

「ええ、安心して。すぐに消えるわ。

大丈夫。だれもないから……」

「え……？」

「あたしと出会って……」

「あたしのこと『おぼえている』人なんて、だれも」

「ツ!? ……うわあああああツ!!」

「……本当に、あまいんだから。あいかわらずね」

豊満なその胸の上で揺れるネックレス……『はんぶんだけのハート形』。
鎖を引き寄せ、女はそれを手に取ると愛おしそうに口づける。

「……ジャン……」

GO! NUDE! GO!!

NY。言わずと知れた大都会のど真ん中、マンハッタンのミッドタウンにて。エンパイアステートビル、ロックフェラーセンターをはじめとする、この国が世界に誇る、雲を掠めようかというほどの摩天楼の代表格。

立ち並ぶそれらを次々に素通りしながら僕と親友は歩いていった。すれ違う数え切れぬほどの人の波。その誰も彼もがそれぞれの目的を持って歩くその道を僕たちも同様にある場所を目指し進んでいた。

「……………ここだ。花京院」

「……………ここか。承太郎」

絢爛豪華たるエントランスをくぐり、超高層ビルにふさわしい……………これまた超高速の直通エレベーターに乗り込み最上階まで一気に昇る。

一般的にはこの街の不動産業界を牛耳る大企業の会長。

とはいえ僕にとっては、親友の祖父であり、かつ、戦友。そのひとに会うために。

「よお、じじい、連れてきたぜ」

「御無沙汰しています。ジヨースターさ、ん……………」

「オー！ ノオーツ！ 無理無理！」

ダメに決まつるとるじやろ！ そんなことツ！」

承太郎がノックもそこそこに会長室のドアを開ける。

すると、僕を迎えてくれたのは広々とした部屋に響き渡る大声、そして、その元凶……：激しく口論をする二人の人間の姿であった。

「無理？ 駄目？ 業界の風雲児、ジョセフ・ジョースターの御言葉とはとても思えませぬね。冒険心まで失ってしまったのですか？ 貴方らしくもない。寄るなんとやらには勝てないものなのですかね？ だから最近では貴方の考えは古いだなんて言われてしまふんですよ、ジョースター卿」

「ああ？ なんじやと?! このくそ生意気な若僧めが！」

片方はよく知るこの部屋の主。そしてもう一方は見知らぬ、実業家風の男性であった。

30代後半といったところであろうか？ 細いシルバーフレームの眼鏡に、ワックスでパリツとセットされた髪型（洗練度合では僕の髪型も負けていない自信はあるが）。さらに、コーデイネートの難しいブリティッシュシユスタイルのスーツをアスコットタイなんて合わせて、サラツと着こなしている。遊び心を忘れずに、だがビジネスパーソンとして相手に失礼に当たらない絶妙なフォーマル感を演出している……見事なものだ、な

どと、つい感心してしまっていた。

「ふん、その若僧に貴方は3年後必ず『すまん、おまえが正しかった』……というツ！」
「わしの十八番を微妙にパクるなツ！」

「さて、なんのことやらですね。まあ、検討しておいてください。

本日はお客人に免じて、わたしの方から引いてさしあげます。

いいお返事を期待していますよ。では、失礼」

「ふーんだ！ ばーか、ばーか！」

あいかわらず子供のような悪態をつくこの大財閥の会長（御年76歳）。

憤怒で赤い顔をした彼を尻目に、すれ違いざま整った涼しげな顔をこちらへ向ける青年実業家。

「やあ。お久しぶりです。空条君」

「ああ」

どうやら承太郎とは顔見知りのようで、軽く挨拶を交わしている。

「それと……」

それが終わると、今度は僕の方をじつと見る。

……まるで、観察でもするかのように。

「あの、なにか？」

「おっと、失礼……つい、ね。

君が『花京院典明』君、ですな」

「……なぜ僕の名を？」

「さあ？ なぜだろうね？」

疑問に思いそう訊ねるも、微笑を浮かべつつはぐらかされる。

「では、また」

「あ……」

追撃を試みようとするも、そんな隙を与えてくれず、彼は颯爽と出て行ってしまった。
「すみません、ジョースターさん。お仕事中に。」

彼は？ 日本人とお見受けしましたが……？」

「ああ。あいつはSPW財団の……」

「いいんじゃない！ あんなやつ！ エリートだかんだかしらんが……

ほんつと、いけすかん！ まったく！ 血圧が上がってしまっわ」

まだ興奮冷めやらぬ、そんな様子で孫の言葉を遮る祖父。一息つくど頭をかき、にかつといつものように太陽の様に笑いなから言い直す。

「はあ、変なところをみせてしまったな。すまんすまん。

あらためて、よく来た。花京院！ ひさしぶりだな」

「ええ。おひさしぶりです。ジョースターさん」

そんな再会の挨拶もそこそこに、辛い、および若干のあきれ声をいただく。

「聞くに、おぬしまたとんでもなく奇妙な事件に遭遇したみたいじゃのう」

「ふつ。まあ、巡り合わせ、というやつでしょうかね」

「お疲れさん。まずは無事でなにより、じゃ」

「はい。ありがとうございます」

そして、一転真剣な顔つきになり、問われる。

「で、……だ。おぬし……本当にDIOの息子と……？」

「どうなんだ？ 危険は……？」

「ええ。会いました。しかし、全く問題はないと思います」

「ああ？ 何を根拠にだよ。まだガキなんだろう？」

あつさりと言う僕に対し、訝しげに呟く承太郎に返す。

「根拠かい？ あるよ、もちろん」

確かに感じた。

彼……ジョルノ君の眼の奥に、君たちに宿るものと同じ……

ジョースター家の、黄金の光を」

黒ではない。白のなかにいるという、あの、懐かしい感覚。

そして……

「……それになにより、『いいやつ』でした。彼は。

なので、なんの心配もいりませんよ」

「……ふん」

「……そうか。ま、おぬしがそういうなら、そうなんじやろう」

「はい。ポルナレフも同じ印象を受けたようでしたし……『どーせちよこちよこピザ食べにイタリアには行くし、まあ、任せとけ！』……とのことでした」

「ふっ、あいつらしいのう」

「ただ……イタリアンマフィアで、スタンド使いが組織化して動いているファミリーがあるようで……その方が僕には気になりました」

「ふむ……財団に調査を依頼しておくでしょうか」

「頼みます」

「ところで、じゃ。花京院おぬし、もうすぐ大学院を卒業するんじやろ？」

「ええ。その予定……です」

言われて、そういえばここ数日怒涛の展開でそれぞれどころではなく（とかいつたら教授にぶちのめされかねないので言わないが）、メールチェックを怠っていたことに気づく。そろそろ投稿した論文の結果報告が届いているかもしれない。

「やはり、あの話はダメかろう?」

「ここに就職ってお話ですか? 有難いお話ですが、全くの専門外ですし……」

そう。再三、ジョースターさんからは事業の一旦を任せたい、という旨のお誘いをいただいていた。

「それに……やはり、僕は日本に居ようと思います」

アウドウルさんのお姉さんのお告げ。そして、ボインゴ君のスタンドに現れた、予言。先日のお兄さんとの訪問で、彼女のおじいさんはやはりイタリア出身で『シーザー』さん……という名前であることが判明した。今後はお兄さん曰く、地道に足取りを辿っていくとのことだったが。

まあ、そもそも、そうほいほい彼のことを知っている人物がその辺にころがっているべくもない。一回の訪問であれだけの情報が得られただけでも奇跡的であると言える。

兎にも角にもお告げの隠れた繋がり、ミッシングリンクの国がイタリアを指し、そしてそこでみつけたジョルノ君が一人目の金髪の少年だと仮定する。

とすると、もうひとりの黒髪の少年は日本にいるはずなのだ。僕と彼女に一番関わりが深い国……とくれば、そりゃあ日本、ということになるだろう。

無論、今までも長い年月、ただ何もしないで手をこまねいていたわけではないが、残

念ながら空振りばかりだった。しかし、そうと決まればまた本腰を入れて……と決意を新たにしたいわけである。予感という程度のかすかなものだが、現状それにすがるしかない状況だった。

「そうか。まあ、いつでも待つとるからな」

「……ありがとうございます」

離れていても全く変わらず、こうして気にかけてくれる……このひとの面倒見のよさとあたたかい厚情に改めて感謝の念を抱いていた。

「ゴホツゴホツ！」

そんな中、急に咳き込みだすジョースターさん。慌てて訊ねる。

「大丈夫ですか?！」

「あ、ああ……大丈夫じゃ。」

実は最近、あまり体調がすぐれんな。さすがに歳かのお……」

「なんですって?!? 病院へは?」

「う……」

ばつが悪そうに口ごもる彼の代わりに孫が答える。

「行けつつつてんのに、行きやしねえ。嫌いなんだと」

「はあ!？」

呆れた声をあげる僕に、しどろもどろと言いつづるのを始める。

「だ、だつてさあ、医者なんて、何かあったらすぐ切るとかいやし、

あれをするなこれをするなつてすぐ怒るしさあ……」

そんな様子に孫とため息をつく。

「やれやれ……。ほらな。知っているだろう？」

「はあ……そうだったな、そういえば」

あの旅の道中、ベナレスでの一件をおもいだす。

(さがした……なあ……)

街中を駆け回つて、ちゆみみーん……敵の寄生型スタンドに襲われていたこのひと

と、彼女を。

さがしまわつてばかりだ。当時から、そして……いまも。

(はっ、いかんいかん……)

想い出にふけりそうになってしまった頭を呼び戻す。

「駄目ですよ！ あのとときだつて、ぎりぎりまで放つといたからあんな目にあつたんでしよう？」

早期発見、早期治療というやつです。さっさと行つてください！」

「はいはい。ふっ、まったく、口うるさいやつじゃ。かわらんのお……」

「おあいにく様です。ちゃんと、御自愛してくださいよ。ほんとに……」

「わかった、わかった。ありがとうな」

「失礼いたします」

そんな中、再び部屋にドアがノックされる音が響く。

「やや！ 体調がお悪いとお伺いしました。お加減はいかがでございますか？ 会長

！」

へへへこしつ入ってきたのは中年の小太りの男性だった。

「スコレットか。あいかわらず早耳じやのう……」

「お気をつけくださいね！ 貴方様あつてのこの会社なのですから！ あ、こちら手土

産です」

掌を高速ですり合わせる。摩擦で指紋がなくなるのではないか……そんな勢いで。

そんな僕たちの視線を感じたのか、おっさんは気づいて言う。

「おっと！ お、お客様がいらつしやいましたか。」

そ、それではわたくしめはこれで……」

「へーい」

軽くあしらうジョースターさん。

そそくさと退出していく男を目の端に置きつつ、気を取り直して、といった様相で僕

に微笑む。

「さて、花京院。今日はうちに泊まるといい」

「え？ いいんですか？ 急な訪問になってしまったのに……」

「なにを言っておる！ 遠慮するな！ 水臭い！」

「ふっ、ではお言葉に甘えさせていただきます」

「承太郎も来るじゃろ？」

「そうするか。ああ、そうだ、花京院。」

徐倫のやつが、おまえを連れてこいとうるさい……。

なので明日はうちに来い」

「ふっ！ はいはい。光栄です。よろこんで」

「よし、そうと決まればもう、今日は仕事終わり！ かーえろつとー！」

「いい、いいんですか？ そんな適当な……」

「いいの、いいの！ じゃ、行くぞ」

そして、その日はまるでお城のような豪邸、ジョースター邸で互いの近況や懐かしい話に花を咲かせつつ、これまた豪勢なディナーをいただき、眠りについた。

その、夜更けのことだった……

——ジョースターさんツ!! ——

「……はっ!」

あのひとのこえが、きこえた気がした。

(今のは……ま、まさか!!)

部屋を飛び出る。

と、そこでドアを開けようとしていた承太郎と鉢合わせる。

「……花京院!」

「承太郎! どうした?!」

「……じじいが……倒れた」

「あなた、しつかりして! あなたっ!」

すぐさまBGたちの手により、病院に運びこまれたジョースターさん。

奥さん……スージーQさんが縋り付きながら必死に呼びかける。

「おばあちゃん……おちつけ」

それにそつと寄り添う、承太郎。

「……………うう……………」

「一命は、取り留めました……………が、今なお危険な状態です。

ご家族の方は、こちらでお待ちください」

担当の医師が沈痛な面持ちで告げる。

集中治療室で管理をしつつ、検査の結果を待つ、とのことだった。

「おばあちゃん、なにがあつた？」

待合室で、少し落ち着くのを待つて、承太郎がやさしくたずねる。

「お風呂から出た後……………あのひと、もう一仕事片づけて自分は寝るから、さきに寝ていて

くれ。つて……………」

とぎれとぎれにだが、スージーQさんは状況を説明してくれた。

「言われた通りに、わたし、先に休んでいたんだけど……………」

しばらくして、ガタンつて……………物音がしたから……………ベッドから飛び起きて書斎に行つ

たの……………」

そうしたら、あのひとが倒れていて……………！ ああ……………」

「くツ……………」

（体調がすぐれない……………とは聞いていたが……………くそっ！）

手のひらをぐつと握りしめる。隣で承太郎がスージーさんに聞く。

「……じじいのやつ、そんなに悪かったのかよ?」

「少し、調子が……とは言っていたけれど。そこまでは……」

躊躇いつつも僕も重ねて質問する。

「あの、スージーさんが駆けつけられたときには、もう意識が?」

「え? いいえ、まだ……。あ! そうだわ!」

何かを思い出したように目を見開く祖母に孫が問う。

「どうした?」

「ひとつだけ、気になることが、あつて……」。

あの人、言っていたの、苦しそうに……」

「……なんて?」

「ほかにだれも、いなかったのよ。もちろん。なのに……」

「……『なんじゃ、こいつらは』……って」

「「……なにイ!?!」」

ICUで、横たわるジョースターさんをガラス越しにみつめる。

その身体からは、たくさんの管がのびていて、それは機械につながっていた。命を、つなぎとめるための機械に。

否応なしに、『あの光景』をおもいだしてしまい、二重に胸が引き裂かれそうになる。様々な検査を行っても、原因となる異常はみつからなかつたらしい。ただ、心臓、肺、脳、肝臓、胃腸……といった多数の臓器の機能が異常なほど低下している。それだけで

……

まるで『呪い』でも、かけられたかのようだと。

そして……

——なんじゃ、こいつらは——

その言葉が示す、意味。

「承太郎……」

「ああ……頼む」

（……みつけて、みせる……！）

調べる。相棒、ハイエロフアント法皇で。

「……」

脳裏に浮かぶ。あの、いつかの石段の上での……彼の力強い言葉と笑顔。

——あの娘の花嫁姿をみるまで……わしは——

「……」

(……逝かせなど、するものか……！)

(……僕が、護る!!)

「ッ！ ……これは！」

夜半……静まり返った特別集中治療室。機械的な電子音のみが規則的に響く。

「……貴方に恨みはありません。でも……」

それを切り裂くように、音もなく現れた、ひとりの女が呟く。

「ごめんなさい、さようなら……ジョセフ・ジョースターさん」

ゆつくりと生命維持装置のスイッチにその指が触れようとする。

そのときだった。

「させるか!!」

「スタープラチナ・ザ・ワールド!」

「こ、これはッ!」

ハイエロファントが、みつけた。

微かな、痕跡。何者かのスタンド攻撃の。

邪悪な、エネルギーの欠片、を。

「きまりだな。やはり、スタンド使いの刺客……」

「ジョースターさんの暗殺を目論んで……?」

「おそらくな」

「自立型、遠隔操作型、か……?」

「わからん……が、じじいは生きている。まだ」

「ああ。来るだろうな、……また」

「ああ。そこを……捕らえる!!」

そのあとすぐ、承太郎とともに、僕は病室に潜んで『待ち人』を待っていた。すると予想通り、『やってきた』わけだ。

「はっ!」

(……ああ、止まっていたのか)

久方ぶりに味わった『時止めの世界』から帰還すると、既にふんじばられた女性がそこに横たわっていた。

「あぶなかった……」

「今、この女……」

「ああ、なにもないところから、現れた……よな?」

「とりあえず気を失わせて縛っておいたが」

「まさか、この女性も、時を? しかし、そうであれば……」

「ああ。ちがう。なら、こんな回りくどいことせんでも、とつくにじじいはあの世行き

だ。

しかも確かにこいつも止まっていた。つまり別の能力があるってことだ」

「そうなるな……」

「とりあえず、こいつにはいろいろ情報を吐いてもらわにやららん。起こすか」

「そうだな。何を隠し持っているかわからん。用心しろよ」

「ああ。……おい、起きろ」

承太郎が気絶している女性の頬をべしべしと叩く。

「はっ!」

目を開ける女性。すぐに様子に気づいて騒ぎ出す。

「きゃー! 捕まっちゃいましたの!?! なんてこと!?! 不覚ですわ!」

「起きたか……」

「わ、わたくしをどうするとうのですか!?!」

響く金切り声と対称的に、承太郎が厳かに問う。

「いろいろ喋ってもらうぜ。」

「てめーは何者だ? スタンド使いだな?」

「じじいに何しやがった? そもそも、なぜ、じじいを狙う……?」

「しかし……」

「承太郎……、聞いていないみたいだよ……」

「ま、まさか……！　今からわたくしにあんなことやこんなことを……!?」

わたくしにそんなことをしていいのは放浪者ワンダラーさまだけです！

やるならやってみなさい！　このけだものども！

そんな行為にわたくしの心は、決して屈しません!!

なにをぼさつとしているのですか？　やるならひとおもいに!!

さあ、早く!!」

「……」

「承太郎、やってあげれば？　僕、席はずすからさ……」

「やるかよ。おれには妻子がいる。……し、めんどくせえ。」

いくら体と顔は良くて、うつとーしい女は嫌いなんだよ……知ってるだろ？」

「知っているさ。冗談に決まっているだろう」

そんな僕に反撃とばかりに口を開きかける承太郎。

「なら、おまえが……」

「僕だって嫌だ」

言い終える前にきつぱりと言い放つ僕に呆れたように呟く。

「早えよ……」

「無理だ。死んでも御免だ。……知っているだろう?」

「ああ……そうだな。よく知っている。」

「つか、自分が嫌なこと、ひとにやらせようとすんなよ……」

そんな風に僕達が変な押し付け合いをしているうちに、敵の女性の妄想は果てしなく広がっているようだった。

「ああ……なんてことでしよう……!」

このいかがわしい二匹のオークにメチャクチャにされてしまうなんて……

可哀想なわたくし……」

そんなことを言いつつも、陶醉するその眼はぎらぎらと輝いている……ように見えた。正直恐い。

誰がオークだ……という反論をすることすら躊躇っていると承太郎が言った。

「おい。『放浪者』とやらは、そんなにいい男なのか?」

「もちろん! まあ、あなた方もオークにしては、見られるほうかもしれないわね。」

でもそんなの足元にも及ばない、高貴で他に類を見ない宇宙一の殿方ですわ!」

「ほお………どんどころがすげーんだ?」

「ミロのヴィーナスも真つ青なほど整われたそのお顔立ちも。慈悲深く、全知全能、わたくしのことをなんでも理解して下さるその御心も。その、秘めたるお力も。それに、

ベッドでのテクニクも……きやつ、言ってしまったわ!」
「……」

再びドン引きしつつも、承太郎の意図を察し、僕も援護する。

「ほお。なんと、そんなに素晴らしい男性がこの世に存在するとは……。

一度お会いしてみたいものですね」

「駄目ですわ! 彼にはそんな趣味はありませんから」

(……僕にだってないってーの……)

そんな言葉を必死に飲み込みつつ続ける。

「……で、どんなお力を秘めていらっしやるんですか?」

「ふふ……聞いて驚くがいいですわ! 彼のスタンドにかかれば……」

鼻高々。そんな様子で言い放つ。

「どんなスタンドも、閉じ込められて役立たず、ですわ!」

「……ゲコーツ!!」

「!?!」

「はっ!」

核心を突いたまさにその瞬間だった。

「なにッ!?!」

窓の隙間から一匹のカエル……が飛び込んでくる。

「これは!？」

『『スタンド』!!』

「ケロちゃん!!」

「ケロツ!!」

女性の元に降り立つと、ケロちゃん（仮）は器用にも啜えていたナイフで拘束する縄を引きちぎった。

「……ああ『放浪者』様！ 助けにきてくださったのですね。

いつだってあなたはわたくしの白馬の王子様……!」

いますぐ、愛しきあなた様のもとへ参りますわ！

ループ・ワープ・フープ!!」

そういつつ、出現させたアマゾネス……女性戦士のようなスタンドとともに空中に指で円を描く。

「それでは……ごめんあそばせ、オークさんたち♪」

そして、完成した光る輪の中に飛び込むと、敵の女性の姿は瞬く間に消えてしまった。「ちっ、もう少しあの女から情報を得られそうだったが……

敵の男の方はまだ頭が回るようだな。

あの輪っか……ワープのような能力が、あの女のスタンド能力か……」

「そのようだな。しかし、それ以上に気がかりなのが男の方だね」

「ああ。『どんなスタンドも役立たず』か。ちつ、厄介そうだな……」

「うむ……なんとなく想像はつく。互いに用心しなければな」

もうひとつの気がかりを言う。

「あと……」

「なんだよ？」

「『スタンドはひとりひとつずつ。その能力もひとつずつ』。

仮にその男がそういうスタンド使い、だとすると、

ジョースターさんを狙ったスタンド使いはまた別に居るということになる」

「いったい敵は何人いやがるんだ……」

「やれやれだね。……つてところかい？」

「……ちつ」

「さ、まあ嘆いていても始まらない。

千里の道も一歩より、というじゃあないか。

……たとえ千人いても……どんどんやればいいのさ。時間もない」

「……ああ」

「じゃあ、そんなわけできつそく行くかい？ 親友」

「……は？」

一瞬怪訝な顔をする承太郎に、人差し指をみせる。

「ふっ……ああ、行くか」

「すまない。ぼくが頼りないばかりにきみばかりをこんな目に……」

「そんな！ わたくしはあなたのためなら……！」

「きみと離れている間、わずかな時が幾千日にも感じられたよ……」

「わたくしもですわ……ああ、お会いしたかった……！」

『ヴァナディース
戦女神』！

『放浪者』さま……」

「……」

「……」

たどり着いた先には人目をはばかることなく睦みあう、男と女。

物陰からその様子を見せつけられていた僕は、辟易しつつ隣に今後の方針を述べる。

「……よし。とりあえず『法皇の磔刑』で、いいかな？」

「おちつけ。居酒屋で生ビール頼むみたいに秘奥義をかまそうとするな。

……わりと同感だがな」

「いや、だつてさあ！　ここ屋外だよ!？」

自粛しろつての。自宅でやれよ！　ステイホーム！

人に見られたらどうすんのさ！　実際僕たち見てるしさ……

見たくもない。目に余る！　ギルティーだろ！　どう考えても!？」

「まあ『誰かに見られたらどうしよう』」

それがさらなる興奮を生む……という話だがな」

「けしからん！　人前でいちやいちやと……」

憤慨する僕に言う承太郎。

「んなこと言いつつ、いつかあいつとやろう……とか思つてんじゃねーのか？」

「ああ？　思うわけないだろう。」

彼女のそんなすがたをみていいのは僕だけだ。

……いや、まてよ。そういうシチュエーションで……

という仮定のみを採用したバーチャルプレイであればそのリスクなしに……」

「……」

「ん？ どうした？ 承太郎」

「いや。おまえの長年蓄積されまくった、そーいう衝動をすべて一身にうけるわけか……。目が覚めたら大変だな、あいつ」

「はあ!! 人をそんな色魔のようにな！」

「……ま、自業自得、というやつだがな、あいつの」

なぜだか楽しそうににやりと笑う。

「さ、本格的に始まる前に……行くぞ」

「そこまでだッ！」

「あつ！ お、オークさんたち!! どうしてここに!？」

「気づかなかったようだな！ 僕の……その『紐』に」

「ハッ！」

よく見ると……きらりと光る。

髪の毛ほどの細い紐状の法皇の触手……『ハイエロフロント・テイルストリングス法皇の尾行紐』を女性のスタンドの兜

の角のようなものに密かに絡めておいたのだ。

「それを、辿ってきた。それだけさ」

「……追い詰めたぜ！」

「出歯亀かい？ 趣味が悪いね。」

人の恋路を邪魔するものは……って聞いたことないのかな？

お代は高くつくよ。くくく……」

男はこちらをみると不敵に笑いつつ言う。『放浪者』は女性（どうやら『戦女神』と呼ばれているようだ。本名なわけではないので暗殺集団によくあるコードネームというやつか）が先程目を輝かせつつしていた説明通り、整った顔立ちをしていた、が、恋の魔法のフィルターを除去すると、幾分頼りなさげな優男……といった印象だった。

「変化！」

男が言うのと、掌に乗っていたケロちゃん、もとい先程のスタンドガエルが、みるみるうちにその形を変えていく。

「たしか、『スタープラチナ・ザ・ワールド』……だったよね？」

「!!」

「吸引ツ!!」

そして、壺のように変形した自身のスタンドを掲げつつ、言う。

「す、『星の白金』!？」

「なにイツ!？」

すると、なんと瞬く間に『星の白金』がその中に吸い込まれてしまった。

「ぼくのスタンド、『ポット・オブ・コルナゴ』……名前さえわかれば、そのスタンドを吸い込み、閉じ込め無力化することができる」

「しまった! あのとときか……!」

「お手柄だよ。『戦女神』」

「いやん! やりましたわ!」

「くっ!」

「これで、君のスタンドは……ぼくに囚われ役立たず、さ……!」

「チャンスですわ!」

言いつつまたも女性とそのスタンドが円を描き、その中に消える。

「これで寡黙なワイルド風イケメンオークさんは戦力外!」

あとはインテリ系中性的イケメンオークさんを仕留めれば!」

その褒めているのかけなしているのか定かでない枕詞はなんなんだ……というツツコミはさておき、姿無きまま、女性のこんな声だけが聞こえてきた。

「ふふふ! いつ、どこから攻撃してくるか、わからないでしょう?」

その恐ろしさに戦慄するといいですわ!」

それに対し、感想を洩らす。

「ふむ。確かに貴女はある意味（異性に対する食欲さといった点で）恐ろしいが……その能力はそんなに恐ろしくはないかな」

「あらー！ いくらお顔がよろしくても……」

大口叩くだけの見栄っ張りな殿方は女性にあんまりおモテになりませんことよ？

つて……えッ!？」

異常に気づいた『戦女神』の焦った声が聞こえてくる。

「な、なんですの？ 見えない何かが……う、うごけな……い……!？」

「御生憎様です。」

実は僕、だれも気づくことすらできない……

そんな所に罠をはれちゃったりするんですよね」

慌てて姿を現した、動けぬままの女性に言う。

「先程『尾行紐』を辿っている間、貴女のスタンド能力を調査・分析させていただきました。

約3メートルごとにちよいちよい亜空間(?)から姿を現していた点から、それがワーブ可能な限界移動距離なのでしょう。つまり貴女のスタンドは近接型。そして、わざわざジョースターさんの傍に姿を現したところをみると、狙撃系の能力はない……戦法は

直接攻撃のみなのでしよう。消えた地点を中心に、それを半径とした僕方向への半球状に、ガードがてら罫を張り巡らしておく……以上で事足りる。簡単なお仕事でした」

「くっ……………」

悔し気な女性にもうひとつ重要な事柄を言っておくことにする。

「そうそう。それと、あまりモテなくとも、僕は一向にかまいませんよ?」

「僕がモテたいと想うひとは……………この世で唯一、ただひとりだけ、なので」

「……………女性を傷つける趣味はない。じつとしていてくださいね」

「あーん! キー! ですよ!!」

こちらは勝負ありといったところだろう。歯噛みをする女性に勧告する。

「いけない! 『戦女神』! 今……………」

「おい…………。よそ見すんな。おまえの相手はおれだ」

すかさずバックアップに回ろうとした敵の男の前に承太郎がザツと立ちはだかる。

「くっ! ……………ふっ、ふふ、なんのつもりかな」

汗をかきつつも、動揺を抑えるかのように男は虚勢を張る。

「忘れたのかい？」

『星の白金』は今ぼくの壺の中。

君はまったくの無力だつてことを」

「フン……」

その男の言葉を受け、帽子を目深にかぶり直しつつ言う承太郎。

「やれやれだぜ。」

……空条承太郎をなめんなよ？

スタープラチナがいねえ……

そんなことにビビり上がるとおもうなよ……」

「ふふん！ つよがりもほどほ……」

しかし、男のその次の言葉は途中でかき消された。

「ふぐあつ!？」

プロボクサーも真つ青であろう。インファイター顔負けのステップで懐に大胆に踏み込んだかと思うと、眼にも止まらぬ速さのボディブローが敵の男の腹に突き刺さつていた。

「……そんな、ば、かな……」

な、生身で……」

崩れ落ちる男に上がる悲鳴。

『放浪者』さま！ はっ……!?!」

「うるせえ。もう一度、ねてな」

「きゃん!!」

そして、今度は素早く女性の背中に回り込み、当て身を首筋に繰り出す。

「……ふっ。さすが、『空条承太郎』だね」

スタンドがなくとも『やるときはやる』。

親友がそんな非常に頼れる男であることを改めて実感した瞬間だった。

「ジョースターさん!」

気絶したままの刺客の二人を改めて拘束し直し、急ぎ、病室に戻る。

「よかった。無事か……えっ?」

ほっとしたのも束の間だった。

「……いい御身分ね、J O J O」

背後から降ってきた女性の声にぎよつとして振り返る。

「なにイツ!？」

「ツ！ あ、あんたは……！」

またしてもいつの間にか立っていた。また違う『見知らぬ女性』が。尾けられている気配など微塵も感じなかったのに。このような状況だ。最大限の警戒網を張っていたにもかかわらず。

ワンレングス、というやつか。長い黒髪の女性……年齢は20代くらいであろうか。服装は真っ赤なワンピース。首にマフラーを巻き、サングラス（なかなかのハイセンスだ。あの旅以来、サングラスをコレクションすることが趣味の一つとなってしまうこの僕が言うのだから間違いない）をかけている。

一体何者かなどさっぱりわからないが、唯一只者ではないことだけはわかった。実力者独特の威風堂々としたオーラのようなものがビシバシと伝わってくる。

「くツ！ 新手法ツ!？」

ジョースターさんを狙う一味の仲間か、と、瞬時に臨戦態勢を整える。

「花京院、違う。大丈夫だ。敵じゃあねえ」

「え？　そうなのか……？」

しかし、承太郎に制され、目を瞬かせながらも出していた法皇をひっこめる。

「やれやれだぜ……じじいはマジで死ぬかもしれないな。別の意味で」

「は……？」

珍しいこともあるものだ。うつむきそう呟いて冷や汗を浮かべる親友及びあつげにとられる僕の横を、女性はつかつかとハイヒールを鳴らしながらさっさと通り過ぎ、ベッドサイドに歩み寄る。

「本来護るべき孫に逆に護られるなど……ふがいない。それでも波紋戦士の端くれですか」

女性はサングラスを外し、冷やややかな……例えるならまるで、養豚場の豚でも見るような目でジョースターさんを一瞥すると、同じくらい低温の嘆き節をぶつけながらおもむろに首のマフラーをしゆるつと取る。

「……さっさと起きなさい、JOJO」

先程からのこの女性の言う『ジョジョ』はどうやら承太郎のことを指しているわけではないらしい。そうか。そういうえばジョースターさんも『ジョジョ』なのだ。というかもともとはジョースターさんの方が先に『ジョジョ』なんだよな……など、よく考えたら当たり前のことに今更気づいたが、それどころではなかった。

「ぐええーッ!!」

女性は手にしたマフラーでジョースターさんをビシバシと殴り始めた。容赦などひとかけらもなく。躍動感に満ち溢れたそのマフラー捌きは、僕にまるでそれが生きていくかのような錯覚を起こさせた。……が、感心している場合でもなかった。

「や、やめてください、病人になにを……ッ!」

止めようとするも承太郎に肩を掴まれ、再び僕の方が止められる。

「やめろ。ほおっておけ。近寄るな」

「は? なんぞだよ、そんなわけには……」

言いかけたところで、はたと浮かんだ疑問を先に口に出す。

「承太郎、いったい誰なんだ? この方は。知っているみたいだけど……」

「このばば……いや、このひとは……」

返ってきたのは、耳を何度疑っても足りないような答えだったが。

「……じじいのおふくろだ」

「はあーッッ!?!」

Mother

「お、お、お母さん!? ジョースターさんの!?」

僕の驚愕の叫びに対し、コクリ、承太郎はただ無言で頷く。

「つてことは承太郎、君のひいおばあさん……? 冗談だろう? だって、せいぜい僕らのちよつと年上くらいにしか……」

「若づくりだ。実際はひやく……」

途端、スパーン! という小気味よすぎる音だけが僕の鼓膜に響く。

「じよ、じようたろう——ツツ!」

承太郎がやられた。気が付いたらやられていた。刺客の男を先ほど強烈なワンパンであつさりーラウンドKOした彼が目にもとまらぬ攻撃、たつた一発で。

女性は倒れ伏す承太郎および立ち竦む僕を意にも介さぬ様子でジョースターさんに囁く。

「起きなさい、J O J O。さもないと、もう一度『ヘルクライムピラー地獄昇柱』よ……」

やばい。名前からしてもうやばい。絶対落ちたら死ぬやつだ、それ。朝起きない息子に対してお母さんがいう脅し文句のレベルを遥かに超えている。「ラジオ体操始まるわ

よ」的なノリで、過去に幾人もの挑戦者の命を奪っている修行場とか引き合いに出されても。あくまで名称からの推測に過ぎないが。

「……起きない。思った以上に重症のようね」

正直ちよつと、いやかなり怖い。あの時恐怖を乗り越えたはずの僕でも怖いものは怖い。だが、もう僕しかないのだ。僕が頑張るしかない。

「そ、そうですよ！ 医師によると今夜が峠で、絶対安静と……って、あれ？」

己を鼓舞し、恐る恐る割って入ってみてようやくやく気づく。横たわるジョースターさんをよく見ると、先程まで真っ白であった頬に僅かに赤みがさしており、乱れ荒かった呼吸も幾分穏やかになっていた。

「負のエネルギーを打ち消す波紋を流し込みました。これで少しは楽になったはず」

「は、波紋の力……」

そういえば旅の途中アメリカンクラッカーを片手にジョースターさんが語ってくれたことがあった。特殊な油を塗ることで物質に『波紋』を送り込むことができる、またそれを通じて他者に力を伝えたりすることも。そういう感じだろうか……なんか最近似たような話を聞いた気もするが。兎にも角にも、まさか先程のマフラーでの容赦なき折檻にそんなふう息子を思う母の愛が込められていようとは……つんでれ？

「……いつはじじいの波紋の師匠でもあつてな……」

まだダメージが残っているらしい、よろよろと起き上がった承太郎も歩み寄り、ぼやく。

「にしたって、あんな荒つぼくやる必要ねえと思うがな」

「久しぶりね、承太郎。それと……」

ちらとこちらに視線が移った為、会釈と自己紹介をする。

「はじめまして。僕は、花京院典明といます」

「……『リサリサ』と」

そう呼べ、ということだろうかとどうにか理解する。まさにクールビューティ。承太郎の冷静、かつ言葉足らずな面はこのひと由来なのかもしれない。

「ふうん……」

リサリサさんはさつと僕を一瞥すると向き直り部屋の隅を指差す。

「時間がありません。先に賊を締め上げることにはしましょう」

言いつつふんじばつて転がしておいた刺客の二人にマフラーを飛ばすと、厳かに命令した。

「……話さない。包み隠さず」

するとなんと刺客の女性『戦女神』ツアナデューズが立ち上がり、口をパクパクと動かし始めた。気

絶したまま。波紋にはこんな使い方もあるらしい。便利すぎる。

「よくぞ聞いてくださいましたわ！ 滲み出る気品からお分かりかと思いますが、わたしはとある名家の超お嬢様ですの」

「……わかんねーよ」

「そして、自分で言うな……」

そんな場合でもないが、ついツツこむ、僕と承太郎。

「幼馴染である『放浪者』^{ワンダラー}さま……いいえ、もうそんな名前ではよびません。ここにいる素敵すぎるダーリンと婚約が決まり、幸せいっぱい夢いっぱい……そんな日々を過ごしていました」

それをあっさり流しつつ、元『戦女神』は続けた。

事の発端は半年前。元気だった弟が、急に病に倒れたこと。

名医と呼ばれる医者に片っ端から診てもらうも原因不明、もちろん治療法も不明。

そのままでは余命はもって一ヶ月。わかったのはそれぐらいで……家族全員で絶望に打ちひしがれていた。

「そこに現れたのが、ヤツでしたわ」

——事情は伺いしました。お困りでしょうか？ わたしが診てみましょう——

「誰も何もできなかった病状がヤツが来た途端一気に快方に向かいました。当然ですね。呪い……病原体を植え付けた張本人なのですから」

まんまと信用を得て、家に入りこんだある日のこと……

「わたくし以外の家人が、皆倒れました。ジョセフさんと違って、一般人である彼らの命などヤツの手中……」

そうして、ヤツは言つたそうさ。

——わたしは『闇の呪術医』^{ダークプリースト}。

ひとつ頼みをきいてほしい。

なに、ある人物に『届け物』をお願いしたい。それだけだ。

君の能力をもつてすれば至極簡単なこと……

それだけだ。それだけで君と君のたいせつな家族はまた日常を取り戻せる。

いい取引だと思わないか？ くくく……くくくくくく——

そう言い残すとヤツぱつと姿をくらまし、後日、郵送にて例のスタンド『呪いの人形』達が送られてきた、ということだった。

「最愛の婚約者だ。ハニーの様子がおかしいことになど、すぐにぼくは気づいてね」

男の方の刺客、元『放浪者』が補足する。

「どうにかしてあげたかったのだが……」

ヤツのスタンドは、遠隔自動操作の群集型で……どのような形でもいい。

呪いの人形達を送り込み病原体を注入。標的に不治の病を発病させる。

……そんなことはわかるのに、肝心の名前がわからない。

するとぼくはとんだ役立たずだね」

自嘲気味に吐き捨てる。

「せめて、彼女の手助けを、とおもった……それがこのザマさ。情けないかぎりさ」

「……わかった。もういいわ」

リサリサさんがそういつて手を打つと、刺客達はすぐに意識を取り戻した。

「ハッ!？」

「……は……!？」

辺りを見回すと、男は観念したのかうなだれて降伏の意を示す。

「……くっ! ぼくの負けだ……殺せ!」

「やめて! ダーリンはわたくしのために!」

轟く、彼らの悲痛な叫び。

「……余計な事はいわなくていいよ、ハニー」

恋人を制し、男はこちらに決死の形相をむける。

「許されることではない。そんなことはわかっているが、お願いだ。ぼくはどうなってもいい。彼女だけは……」

「いいえ！ それはわたくしの方ですわ！ 彼はもともとなんの関係もない……」

「……やかましい！ うつとーしいぞ！」

そこへ場を切り裂くように一喝が入る。

「……いいいたいことはそれだけかい？」

「ならば……」

そして、友と声を揃える。

「教えてもらおうか。ヤツ……『闇の呪術医』とやらの居所を」

「要するにそいつをおれたちでぶちのめせばいい。そうすれば、じじいも、女の家族も治る……それだけだろうが」

「ふっ、そうさ。実にシンプルな話だ」

「君たち……」

僕達の言葉に目を瞬かせる、刺客達。

「青いわね、貴方たち……」

次いで、溜息と共に囁かれる。

「……でも、嫌いじゃあないわ」

口の端にわずかに微笑を浮かべるリサリサさん。おもわずこちらにもやりとしてしまう。

人形が送られてきた宅急便の消印等から割り出したという黒幕の潜伏先の情報を彼らから受け取った。その瞬間だった。部屋にけたたましい警告音が響く。

「いけない……！」

発信源はジョースターさんに繋がった生命維持装置であった。

「わたしはここを離れられないようね。手にかかる『坊や』の面倒をみななければいけないから」

リサリサさんは再びマフラーを引き寄せると、しかし今度はジョースターさんの額に手のひらと共にふわりと乗せる。慈しみのこもったその仕草の中に、この女性の本質を僕はようやくく少しだけ垣間見た気がした。

「どうやら貴方達に譲るしかないみたいね。敵をぶちのめす、素敵な役は」

「しかし、ばば……リサリサ。おまえ……」

「そうですよ！」

この刺客達が嘘をついているとも思えないが、全て丸ごと罨である可能性も否定でき

ない。というか、その可能性の方が高いだろう。敵がまたここを襲撃してくるとみて、それに備えておくべきだ。

リサリサさんがいかな波紋の達人であろうともスタンド使いでない以上スタンドはみえない。ジョースターさんを回復させながら、みえない敵から彼と自身を護り抜く……流石にそれは至難の業であろう。

「気遣いは無用です。さっさと行きなさい」

取り付く島もない様子に帽子の位置を直しつつ、承太郎が言う。

「やれやれだぜ……花京院、頼みがある」

「なんだい？」

「おまえにここに残ってほしい。なんつーか、どうもキナ臭い感じがしてな」

「同感だ。まだ裏がある。そんな感じだね」

頷き合う。そして、考えを告げる。

「……が、その頼みをききいれることに関しては、却下かな」

「なに？」

「承太郎、君が残れ。僕が行く」

「は!？」

「当然だろう？ どちらが『当たり』かわからない。片方が残らねばならないならば、こ

んなどきくらいジョースターさんの傍にいてやれ。リサリサさんもスージーさんもその方が心強いはずだ」

「心配するな。サツと行ってサツと締め上げて速やかに帰ってくるさ。僕の得意分野だ」

承太郎にそう笑いかけると代わってリサリサさんが立ち上がる。

「花京院……でしたね。何故そこまで？ わたしたちの身内でもなんでもない貴方が」

飾り気のないストレートなそれにこちらも真つ向直球を返す。

「残念ながら、ジョースターさんは僕にとつてはもう、身内みたいなものなので」

「貴方……」

「加えて言うならば、まあ、人生の師匠というやつでもあるかな。あ、本人にはオフレコ
でお願いしますね。では、行って参ります……リサリサせんせい師匠」

「……か……」

やってきたアラスカ州のとある奥地。そこはとても神秘的で静かな土地だった。

雪の残る森の木立を異国情緒あふれる列車がゆっくりとくぐりぬけていく。

車窓からは枝で羽を休める小鳥たち、そしてリスやコヨーテといった野生動物の姿も臨むことができた。

動物大好きな『だれかさん』を連れて来たら、さぞかし喜ぶだろう……そんなことを考えているうちにたどり着いた、いくつもの山を越えて降り立った小さな街の小さな無人駅。

傍には湖があり、霧が立ち込める湖畔には白鳥や鴨の優雅なシルエットが浮かぶ。

(暗殺者集団のボスが潜むアジトがあるだなんて到底思えないな……)

『闇の呪術医』……はたしてどんな人間なのか。

男か女かもわからない。常にフードを被った不気味な姿だったという。

航空機および列車を乗り継ぎ、ほぼ丸一日かけて僕は教えられた街にたどり着いた。

のどかな石造りの街並みを一瞥しつつ、急がば回れ。まずは情報収集か……と、歩き出そうとした僕に、背中から聞き慣れたふたつの声が飛んできた。

「……つれないな、花京院。わたしたちは仲間外れか？」

「バフー！」

「あー！」

そして、振り向くと見慣れたふたつの姿。

「アヴドウルさん！ イギー！」

「承太郎から連絡を受けてな。ジョースターさんの危機である……文字通り急いで飛んできたよ」

「グウウ……（けつ、つたく、なんでおれまで……）」

「ふたりとも……！ ありがとうございます」

そして、友のさりげない計らいに感謝の意を唱える。

（承太郎……ありがとう）

「では、時間も無い。さっさと行くとしよう」

「ええ」

心強い味方を得、あらためて街を歩きださんとした、そのときだった。またも声をかけられる。

「ねえ？ 何か探しもの？」

「むっ！」

「……ぼくが、占ってあげようか？」

声のした方向に視線を向けると、簡素な椅子に腰掛けた一人の……フード付きのマン
トをすっぽりと頭からかぶった人物が目に入る。なるほど言葉通り、足元には、看板代
わりなのだろうか。これまた簡素な『易』と書かれた木板が置いてある。傍らに真っ白
な長い毛並みの狼のような犬がピッタリ寄り添っているのが印象的だった。

「占い……」

ちらと隣のひとを見る。

「……生憎だが、まにあっている。わたしは占い師だ」

言いつつ、ずい、と一歩踏み出すアヴドウルさん。

すると、フードの人物はこんなことをいう。

「へえ……奇遇だね。でも、聞く価値あると思うよ。だって……ぼくの占い、外れたこと
ないから」

「ほお？」

「やってみようか？　ぼく、視えるんだ。その人のご先祖様が。そして、聴けるんだ。そ
の声を。占い師さんなら知ってるでしょう？　そういうの」

「巫術……か。無論知っているが……」

餅は餅屋。そうつぶやく専門家に問う。

「アヴドウルさん、巫術とは？」

「ああ。降霊術……と言う方がわかりやすいか？ 占いには多数種類がある。わたしは主にタロットで占うが、方法に霊視を用いる占い師も存在する。降霊術には懐疑的な意見も多いが……古来より、そういった民衆の宗教的機能を担う職能者は確かに存在し、人々のアドバイザーや心理カウンセラーの役割を担っていたと考えられている。実際世界の様々な地域において、そのような職能者が政治や軍事などの諸領域で活躍した歴史がある……というのは周知の事柄だろう？」

言われてみれば、邪馬台国の『卑弥呼』などは、日本においてもそのような霊能者とうたわれる人物が国の実権を握っていた時代がある、といういい例か、などと思いつる。「そうそう。さすがだね。まあ、そんなところ。産まれ故郷では巫女とか潮来って呼ばれてたかな」

（え……？ ということは、この人物は……）

フードの人物の言葉を受けふと思う。が、僕がその疑問を口に出す間もなくさっさと話は進んでいた。

「百聞は一見に如かず。ねえ、占い師さん、ぼくと勝負しない？」

「……なに？」

挑発的なその台詞に、ピクリ、アウドウルさんの眉間にしわが寄る。

「あなたに勝ってみたくなくなっちゃった。」

そうだなあ……じゃあ、あなたもしらない、その前髪の長い君の秘密とか、どう？
「ご先祖さまに聞いてみようか？」

「は？ 僕の？ なんで？」

立つ気も皆無な矢面に何故立たねばならんのか。だいたい個人的に、そういったスピリチュアル関係のものは専門外だし興味の範疇外だ。メルヘンやファンタジーじゃあるまいし。

「……それがわかったら、ぼくの勝ちってことでいいよね？」

「ふん、いいだろう。やってみたまえ」

「ちよ、ちよつと、アヴドウルさん！」

しかし、やっぱりそんな僕の抗議の声はあっさり流される。

「よし、じゃあ、ちよつと待っててね」

言うのと、自称占い霊媒師はぶつぶつと呪文のようなものを呟き始める。

「……ご先祖様、教えて……」

そして、突然、あたかも『そこにいるだれか』と話をしているかのように相槌を打ち始める。

「はじめましてー。……ふむふむ。そうなんだー」

「ち、ちなみに、どんな方が僕の……？」

決して信じているわけではないが、一応聞いておく。

「ん？ なんかねー、知的な感じのお侍さん」

(……。侍、か……)

我が家系は元をただすと割と身分の高い武士だった、という話を父に聞いたことがあつたような……。

いや、くだいようだが断じて信じているわけではない。

「……へええー！ ほおー！」

固唾を飲んで見守っていると、にやにやと何やら今度は感嘆の声を上げ始める。

「な、なんだ……？」

「ふーん。君、見かけによらず一途なんだ。

ずっと想ってる……すぐくすきなひとがいるんだね」

「あ、当たっている……！」

「ワン（おお！ すげー！）！」

「み、見かけによらずは余計だ……！」

口々に感想を述べる僕らをよそに、占いは続く。

「それはもちろん、とてもいいことだけど……、

君、最近ハマっていることにプチトマトの栽培があるよね？」

その苗に彼女の名前をつけて丹精込めて育てているんだって?」

「なツ!! 馬鹿な!! 何故僕のトップシークレットを!」

無論誰にも話したことなどない。にもかかわらず……だ。

が、しかし、隣からは驚きではなく、何故か納得の声。

「ああ、やってそうだ。花京院、おまえなら」

「グウ……（ああ。すげえそれっぽいな）」

「え……? そ、そうなの……?」

仲間に抱かれているイメージに少なからずショックを受けつつも、これ以上の損害を阻止すべく自らの正当性を主張する。

「い、いいじゃあないか、べつに。誰だってやるだろう! ほ、ほら、あれだ! RPGをプレイするにあたり主人公に自分の名をつけた場合、当然ヒロインは好きな女子の名にするだろう! 常識的に考えて!! それと同じだツ!!」

「うーん、わからんでもないが……」

「ガウ……（とりあえず、全然常識的ではねーな……）」

そんな必死の自己弁護も虚しく、無情にも追撃の一手が入る。

「うん。まあ、そこまでなら百歩譲って許そう……だが、しかし! それだけではな—
いッ!!」

「ツ!？」

「毎日毎日その実を愛でながら、

『仁美……きみをまるごと、たべてしまってもいいかい?』

なんて語りかけて、来たるべき日に備えてのリハーサルだかなんだかをするのはどうかと思う。……つてさ。君のご先祖様が」

「うわーあーツツ!! よ、よけいなお世話だ!!」

頭を抱える僕。嘆く仲間。

「うっ! い、いや、これもすべては愛のなせる……」

「イギ……(毎日かよ……同情するわ。よく枯れねーな、トマト)」

「うわあー、はこつちの台詞だよ。しかもいくら逢えなくて寂しいからって、旅行時に自分で自作(しかもやたらとクオリティが高い)彼女ぬいぐるみを持つていくのは……しかも寝る前に、今日一日あったことを話しかけたり抱きしめたり、さらには……ええ? ……うわあ……」

「……ぬわーツ! ストローツプ!!」

「うう、不憫な……。花京院、おまえ、そこまでこじらせて……」

「グウウ……(この変態野郎……)」

「ちよ! アヴドウルさん! い、イギーまで!!」

ふたりとも、そんな可哀想なものをみる目で見ないで!!」
 孤立無援……三対の冷ややかな憐みの視線が突き刺さる。

(く、くそ、なんだ、この公開処刑は……)

そもそも一体僕がなにをしたというのだ。

別に誰にも迷惑などかけていないはずなのに。あまりに理不尽だ。

「ええい! そんなのイカサマだ! トリックだ! でたらめだーッ!!」

おもわず叫ぶ僕にしれつと言う占い霊媒師。

「でたらめなんかじゃあないよ。それは君が一番よく知ってるでしょ? ご先祖様が嘆いてたよ? あははははは!」

「ぐううつ……」

「ごめんごめん。おわびにいいことおしえてあげるね。」

『もうすぐ君の長年の努力は実る。代償行為はほどほどに、まあ頑張れ』

……つてき。ご先祖さまはなんでもおみとおしだから」

「え、ほ、ほんとうに……?」

「……。実るつて……」

「パウ……(トマトのことじゃね……?)」

「よし。そんなわけで、ぼくの勝ちー！ 信用してくれた？」
「ぬう……」

「まあ、少しは……」

釈然としないながらも渋々認めると、占い霊媒師は立ち上がり、僕達を促す。

「じゃあ、案内してあげる。こっちだよ。ついてきて」

「は？」

「あなたたちの探してる……場所」

「ここだよ。この塔の最上階に君たちの探している人間は居る」

案内されたのは町外れの古びた大きな塔だった。

(……『当たり』か)

足を踏み入れる前に、確かに、僕は法ハイエロファント 皇で把握していた。

上方にある、二人の人間の気配……。

そして、ジョースターさんの様子を調べた、あのとき見つけたものと同じ……邪悪な
スタンドエネルギーを。

「はっ!？」

そちらに気をとられていた一瞬のことだった。

急に寒風が吹きすさび、入り口の扉がボタンとひとりでに閉まる。

同時に眩く、霊能者。

「……でも、あんなこと言つといて残念だけど……」

君、もう、だいききな彼女にはあえないかもね。ごめんね」

「は……?」

「……なに……?」

「君たちは……ここで死ぬ予定なんだから!!」

言いつつ、バツ！ とフード付きマントを脱ぎ捨てる。

「なにイ!」

「あらためて、はじめまして、占い師さん……いいえ、『炎の魔術師』さん。御高名はか

ねがね」

姿を現したのは、スカートの裾をつまみ、うやうやしくお辞儀をする、ひとりの少女。

「君は!」

「何者だ!」

「ぼくは『氷の魔術師』フロストメイガスなんて呼ばれていたりしてね」

(……『氷の魔術師』!?)

挑戦的な笑みをこちらに向け、少女はいう。

「ねえ、もういつかい勝負しない？」

再びアヴドウルさんを指しながら。

「こんどは、ほんとうの『魔術師』の名が相応しいのは、どっちなのか……」

（やはり罠か……。まあ、わざと乗ってやったわけだけでも）

言っておくが負け惜しみではない。時間が限られている現在のこの状況における最適解。

虎穴に入らずんば虎子を得ず……敵の居所を知るための苦肉の策だ。

あとは無事この場を乗り切れば万事解決、作戦大成功……そういうことだが。

「みせてあげるね。綺麗でしょう？　ぼくの、『白き雪の女王』スノウホワイト」

粉雪を纏った少女のスタンドは、結晶が散りばめられたドレスを纏う、氷で彫像した雪の国のお姫様……まさにそんなイメージだった。

そして、巫女とかイタコとか言い出した時点で日本人女性かと推測はしていたが……
（日本人……？）

正体を現した少女は金色の髪に北欧系の顔立ちをしており、あまりそれとは思えな

かった。

(あなたと……逆つてところかな?)

イタリア人のクオーターであるも、日本人にしかみえない……そんなひとを僕はよくしっていた。

そんなふうにもたまたまうっかり思考が逸れていた僕を置き去りに、すでに『ふたりの魔術師』の間には激しい火花が散っているようだった。

「言い忘れていたけど、ぼく、スタンドも使えるんだ。すごいでしょう?」

「……ふん、わたしとて凄腕の占い師、兼、凄腕のスタンド使いだ」

「あ、アヴドウルさん、それは自分で言つては……」

そうだった。このひと意外と自分の範疇の事柄に関しては一本気ゆえ譲らないところがあるのだった。

「せっかくの御指名だ。無下に断るのも大人げない。

花京院、ここはわたしに任せてくれ。

このお嬢さんに真の魔術師とはなにか……少し指南するでしょう」

「……わかりました」

「わかっていると思うが……手を出すなよ?」

「はあ……。よくわかっていますよ、そんなことは」

溜息を突きつつ、一步下がる。

「……アオーン！」

そこで、部屋に高らかに響く、白き狼の雄たけび。

ふたつの赤い眼がギロリとこちらを睨んでいた。

その背後に浮かぶは機械犬……ロボットのようなスタンド。

「やはりあの狼も、か。……ん？」

すると急に、ガタガタと、建物全体が振動し始める。

「なんだ……？」

「!? ガウツ！（馬鹿！ 避ける!!）」

言いつつ、イギーが僕を突き飛ばす。

すると次の瞬間、僕が立っていた場所の後ろの壁はぐしゃりと崩れ、窓ガラスが粉々に砕け散った。

「なにイ!? な、何が起こった!? 見えなかった……」

「パウ……（見えなくて当然だ。聞こえなかったのかよ？ あいつのスタンドの気味

悪い鳴き声）」

「声？ 音、音波か!？」

人間の可聴周波数は約20〜2万Hz、それに比べ犬は約65〜5万Hzと広いそう
だ。それでイギーは攻撃に気づけたわけだ。音波は衝撃波を生む。それを利用し、壁や
ガラスを砕いたのだろう。

「グウウウウ……」

狼が、唸る。

「グルルルル……（ああ？　なんだと？　舐めやがって……）」

それに呼応して唸り返す、仲間。

『会話』を終え、僕に宣言する。

「ワン！（おい、しかたねえからこいつの相手はおれがやってやる。有難く思いな）」

「……わかった。気をつけろよ」

「バウ……（チツ、生意気な狼野郎が。花京院、手、出すんじやあねえぞ）」

「はいはい」

その姿に、ひとつ思い至る。

「ふっ、なるほどね。これが『犬は飼い主に似る』ってやつか」

「ガウ！（ああ？　だれがだれの飼い主だつて？　うるせーぞ、変態）」

「はあ!!　だ、誰が変態だ！　訂正を要求する！」

「ケケケ……（事実だろ？　さっきの話、後輩にいつかバラされたくなきや、あとでコー

ヒーガムな。けけけ……」

「くっ！ そんな卑怯な脅しになど誰が屈するか……！」

「だいたい、仁美さんにバレようが僕はいっこうにかまわんツ！」

『……ばか。花京院くんのえっち。へんたいっ……』

……とか、ほおを赤らめた彼女に罵られるのもまた一興……」

「グフ……（……すまんかった。もう何も言うな。頼むから……）」

そんな中、あちら側でも鬨いの火蓋は切って落とされたようだ。

「雪達磨輪舞！」
スノーマンランド

少女の掛け声とともに、そのスタンドが手に持つ杖を一振りする。

すると雪が舞い踊るとともに、現れたのは三体の雪だるま。

ぴよんぴよんと周囲を跳ねつつ、なんと流暢に自己紹介を始めた。

『『我ら、雪の王女の忠実なるしもべ！ その名も……』』

『……ダール！』

『……ヴィツシュ！』

『……ユーー！』

「なんなんだ、その150km越えのストレートを軽く投げられそうな名前は……」

「変化球もキレツキレだろうな。……たぶん」

「よおーし！ いっけーッ！ 『トリプルスリー』 ツッ!!」

そんな僕達の呆れた眩きを意に介さず、魔女っ娘が叫ぶ。

「いや、それは投手でなく打者の……」

僕の決して追いつくことのできないツツコミは虚しく空を切り、雪だるま達より一斉に投擲されたMAX155kmの縦スラ……もとい雪玉がアウドウルさんにむけて放たれる。

「……甘いッ!!」

しかし、それをものともせず、赤き魔術師が発する、現代の魔球ジャイロボー……間違った。燃え盛る火球が雪玉を迎撃。勢いそのまま、容赦なく雪だるま達もドロリと溶かす。

そもそも火対氷……そりやそうなるだろう。相性的に最悪な相手に敵も何故喧嘩を売ったのか。

「ああつ！ ぼくのダールたんに、ヴィツシュたんに、ユーたんがッ!! も、もう許さないよー!」

顔をしかめつつ、魔法少女が再び力を貯め始める。

「千本氷針!」

高らかにそう叫ぶと、数え切れないほど無数の氷の棘が彼を取り囲む。

「ハアツ!!」

それが突き刺さる前に熱波で相殺するアヴドウルさん。

「まだまだあ!!」

「ぬっ!?!」

が、まさかの波状攻撃。第二波のすべては防ぎきれず、その一本が彼の顔を掠める。

「む……」

頬に一筋、流れ落ちる鮮血。

「あ……、っ！ す、すごいでしょう？」

「っ、次は、もっと当ててるから！」

「……」

「あ、当たったら痛いよ！」

だから……もう、降参しなよ!! そうしたら、許してあげるからっ!!」

悲痛な表情で訴える少女。

その手は、小刻みに震えていた。

「アヴドウルさん！ この娘……!」

それに気づき、声をかける。

「……ああ」

すると、わかっている、というように頷くと、彼は『魔術師の赤』マジシャンズレッドをひっこめた。

「……もう、やめなさい」

「!?」

「きみは……初めてなのではないのか? 誰かと闘うのは」

「ツ!!」

「人を傷つけたくななど……本当はないのだろうか?」

「ど、どうして……!?!」

「先程から見ていて、わかる」

アヴドウルさんはゆっくりと、諭すように少女に語りかける。

「それに……、占い師は、占いのしかたに、すべて出るものだ。術者の『人柄』が。悪戯心は多分にあれども、相手の心を真には傷つけないよう、きみはちゃんと気を配っていた」

「あ……」

(そういえば……)

——いいこと教えてあげるね——

アヴドウルさんの言葉に、先程の占い合戦(という名のただのつるし上げだったが

……僕にとっては) 時の少女の様子を思い出す。

「きみは……ほんとうは、やさしい娘だ」

揺らぐ相手の瞳をまっすぐにとらえ、熱きその眼差しを向ける。

「……う……、うるさい！ ……うるさいっ!!」

必死にかぶりを振る、少女。

「そんなこと……ない……!」

そんなこと、ないもの!

ぼくにだって、できる!

やらなきや……じゃなきやあ……

ぼくが、やらなきや、いけないんだ……!

……ぼくしか……いないんだから!

「……?」

「はっ!」

そこで気づく。

正面にある大階段。それをカツリカツリと何者かが降りてくる音に。

「……何を遊んでいる? 『氷の魔術師』?」

「……あ! ……あ、あ……!」

その人物を確認した瞬間、少女の顔に明らかな怯えの表情が浮かぶ。

「だ、『闇の呪術医』様……!!」

(こいつが!?)

その人物は真つ黒なローブに身を包んだ、高潔そうな雰囲気の高貴な貴婦人であった。

「……また失敗か？」

いつも言っているだろう……

『人は成長してこそ生きる価値あり』と

威厳を帯びた重みのある言葉が部屋に響く。

「わたしを……これ以上幻滅させるな」

それだけを言い残すと『闇の呪術医』は踵を返し、階段を再び上っていく。

「待てッ!」

「……ダメ! 行かせない!!」

追おうとする僕達を阻む、少女の言葉。

「……『凍り逝く棺獄』!!」

そして……無数の巨大な氷柱。

「なにっ!?!」

少女を中心として発生する猛吹雪。視界がみるみるうちに白い霞みで覆われていく。

呼吸をするだけで肺が縮こまる感覚。それほどの凍気が部屋中に満ちていく。

「ここではすべてが、凍りつく……ぼくの、この氷の檻のなかでは！」

「なっ!?!」

「……もう、ここから脱出する術なんてない！」

ぼくも……おまえたちも！ 全員、凍り漬けになつて死ぬんだ！ ここで!!」

そう叫んだあと、階段の方を仰ぎ、眩く。

「……『闇の呪術医』さま……」。

ううん、母さま……」

「!?!」

(……は、母親!?!)

「これで……ぼくを、みとめて、くれますか？」

*

*

*

「チッ！」

急激に部屋の温度が下がっていく。

いつかの、あの『鳥野郎』との闘いを思い出し、余計に背筋に寒気が走るようだった。

「おれは何故こういううすら寒い敵とばかり縁があるのだろうか……反吐が出そうだ。次々と襲い来る衝撃波を煙に巻きつつ、おれは狼野郎に話しかける。

「おい、狼さんよ……てめーの御主人サマ、やべーことやりだしたぞ？　止めんのもペツトの役目じゃあねーのか？」

「……わかつたような口をきくな。犬っころが。

……彼女が望むことを叶える……それがワタシの正義……」

「ふん、堅物野郎が……」

「Guile、……やれ」

そんな様子を体現しているかのようなメカメカしいの敵のスタンド。花京院の言うようにこいつはどうやら『音』を操るスタンドのようだった。

『キィ——！！』

スタンド機械犬が耳障りな音を発する。また攻撃が来ると、身構えていると、予想外の出来事が起きた。

「ちよこまかと、目障りな犬め。直接、噛み殺してやる。これだけ大気中に水分があれば十分だ。これが主人とワタシの絆のなせる技……」

物騒な物言いと共に、どこからともなく大量の霧が現れたかと思うとヤツの姿がそれに覆われ、みえなくなっていく。

「……」

姿も気配も完全に消える。ピンと張り詰めた空気のみがその場に残っていた。

「終わりだ……死ぬ、犬っころ」

そして、鋭い殺気とともにその牙がおれの身体に突き刺さろうとする。

「……ばればれだぜ？」

「なにイ!？」

それを『愚者』^{ザ・フル}の体当たりで弾き飛ばし、押さえつける。

「……カウンターだぜ。形勢逆転だな」

「ぐっ……す、砂で……? きさま……超音波霧化において、固体が霧化の妨げとなるこ

とを……知って……?」

「さーな。そんな小難しいことは知んねーよ。

砂振りかけりや沈んで霧がなくなるんじゃねーかって思ったただけだ。それより……」

間近で狼の姿を改めて眺めて、驚き氣づく。

「おめー……、雌かよ?」

「悪いか……」

睨みつけてくる相手に感想を述べる。

「いや、もったいなーな、と思っつてな。

けっこう好みだぜ。気のつえー綺麗な雌は」

「……ほざくなー！」

「諦めてちつと、おとなしく……」

「……超 Super shock sonic boom 音 衝 撃 波!!」

「……しねえか。つたく、とんだじゃじゃ馬だぜ」

*

*

*

「いかん！ 『魔術師の赤』！」

ふざけている、というか使いこなせていない。いや、無意識にセーブしていた、と言う方が正しいかもしれない。かくにも、この娘の潜在能力、秘めたるスタンドパワーは実は相当のものであるというのは先程から肌で感じていた。

その全力を放出し、自らの命と引き換えに相手全員を仕留める『凍り逝く棺獄』……恐ろしい技だ。

このままでは本当にこの娘含め全滅してしまう。どうにか状況を打開するべく、わたしはスタンドを出す。

「クロスファイヤーハリケーン!!」

氷の柱を火炎で溶かし、創りだす。ここから脱出するための道を。

「よし! ……なに!？」

しかし、溶かす端からまたすぐに再び凍り付いてしまう。

「くっ!」

(かくなるうちは……!!)

「……花京院! ……ここはわたしに任せて、先に行け!」

「アヴドウルさん!? なにを!？」

「……わかつているだろう?」

こちらから、炎で冷気を遮断し続けなければこの経路は維持できないこと。

そして、この娘を殺せば無論この檻は消える。が、自らの意思ではない……言わば洗脳に近い。他者に闘いを強制されている。そんなこの娘を手にかけることなど、わたしたちにはとうていできまい……という、敵のどこまでも卑劣な目論見を崩してやるには、これしかない、と。そんな自明の理を。

「しかし……!」

「アオーン!」

「チツ! グアウ (『愚者』) !」

「グウウウ…… (こいつの相手してやるやつがいるだろ? ……しゃーねーからおれも残っ

「やるぜ）」

「イギー……」

「グアウ……（ふん、飼い狼に似合いのとんだおてんば姫さんだぜ。ったく、ロクなめに遭わねーな、ほんとおまえらといると。さみーの嫌いだつつつてんのによ……おい、アヴドウル！ 帰ったらコーヒーガム箱一杯じゃあ済まねーぜ。覚悟しときな？）」

「ふっ……なら二箱だな」

「ワン！（商談成立だ）」

「ふたりとも！」

「バウ（ぼさつとしてんじゃあねーよ！ 花京院！）」

「行け、花京院。だれかが行かねばジョースターさんが！ ここで全員がやられるわけにはいかない」

「ッ！ ……はい！」

断腸の思いで階段へと歩みを進める男。

「……」

振り返り、言う。

「アヴドウルさん、イギー、……信じていますから」

「ふっ、もちろんだ」

「バウ（ばーか！　　ったりめーだ。とつとと行けつての）！」

*

*

*

「おい……いい加減にしろよ？」

「……うるさい」

あいかかわらず、数だけはひつきりなしに飛んでくる音波と衝撃波。しかし、避けるまでもなかった。

漫ろで、覇気のない、そんな攻撃など。

「……」

おれは『愚者』をひっこめつつ、狼にいう。

「やめだ、やめ。ぜんっぜんやる気ねえじゃねーか」

「……そんなことは、ない！」

「……おまえに、なにがわかる……！」

「……」

その表情に明らかに見て取れる『苦悶』そして『迷い』。しかたがないので、言ってみることにする。

「おれは今、あそこの暑つ苦しい熱血野郎と、まあ、一緒に住んでやっているわけだが……。最近気づいたことがある。そーゆー犬の仕事かつ特権、つてやつだ。教えてやろうか？」

「……な、んだ？」

「……『わがまま』をいうこと、だ」

「!? わが、まま……?」

「いつてやれよ? なあ？」

めんどくせー、愛しの飼い主さんによお!

てめーの望みつてやつをな!」

「あ……、わ、ワタシは……。ワタシは……!」

しなやかで真つ白い毛皮を翻し、主に向けてまっすぐに駆けていく。

「千那^{ちな}! もう、やめてくれ!」

……ワタシは……キミに、生きていて、ほしい……!」

その美しいすがたはすぐに雪と同化して、みえなくなった。

高らかに響く、その嘶きのみを残して。

*

*

*

もう、10年にもなるだろうか。

母に連れられ、家を出た。

……父と、弟たちを置いて。

理由は、『知らない』。

一度だけ、聞いてみたことがある。

すると母は、とても、悲しそうなかおで首をふった。

だから、……『知らない』。

二年余り、ふたりきりで過ごした。

学校の勉強も、巫女の修行も、なんにでも……

きびしいけれどやさしい……そんな母と。

でも、ある日のことだった。

母は、変わった。

日本を出て、次々と、住んでいる場所を移った。

母はずっと『なにか』をさがしているようにみえた。

でも、何を訊ねても返ってくる答えはこうだった。

——千那、おまえはしらなくていい。なにも、しらなくていい。

ただ、わたしにしたがっていれば、それでいい——

なにもわからなかった。

でも、ひとつだけ、わかっていた。

母さまにはもう……

ぼくしか、いない。

それだけは……。

なにかあっても、じぶんだけは味方である。

そう、心に決めた。

でも、それは、逃げていただけだったんだ。

今思えば、母の心は、『なにか』がきっかけて壊れる寸前だったのだ。

臆病なぼくは、それに踏み込むことができなかつた。

ただ、怖かつた。

母に、疎まれてしまうのが。見捨てられてしまうのが。見限られてしまうのが。みとめて、ほしかった。

ずっとどこか、遠くをみている母に。

ここにいるのだ……傍にいるのだと……

ぼくの存在を……。

それだけだったんだ……。

身を切るような極寒の中、ぼくは自らの力が全て放出されていくのを感じていた。

——やつらを、殺せ——

そう、命じられた。

疑問になど思うまい。そう、努めた。

しかし、自分には、さっきまでのほんの短いやり取りで、すでにわかってしまっていた。た。

このひとたちは、悪いひとたちではない。……むしろ……。

じぶんはきつと、まちがっている……そんなことも。

(でも……！　それでも……っ!!)

「……ウオン!!」

「アセナ……!?!」

虚ろになりかけていた意識の中、吹雪を乗り越えて飛びついてきた、だいすきな友だち……の声で我に返る。

「……グウウ……!」

「なぜ? なぜだ?! 君まで……!」

袖を唾えられ、引かれる。

必死にぼくに何かを訴えかける、友だちの瞳。

それが全てを物語っていた。

「わかつている……わかつている……!」

耐えられず、目を逸らす。

「でも、……もう、とめられないんだ……!」

力が抜け、その場に崩れ落ちる。視界がぼやけて、霞む。

「ごめん……みんな……。ごめんなさい……」

ぼくのせいで、みんな……死んじゃう……。ごめん……。なさ……」

「……いいや、誰も死なせはせん!!」

そこに届く、熱く力づよい、声。

「はっ！」

顔を上げ、目を開く。

そこにあつたのは、広く、そして大きな背中だった。

「全員、護つてみせよう！」

そして、溶かしてみせよう！

きみのその凍てついてしまった心を……わたしの炎で!!

「ッ!？」

「この、わたしの命に代えてでも！」

(このひとは……)

「……うおおおおお!!」

(……ほんきで……っ！)

「……どうして？ どうして、そこまで……？」

あなたなら……ぼくを……ころせばいいだけじゃあないか……なんで……？」

(……いやだ！ ……いやだ、いやだ……いやだ!!)

(……このひとを、死なせたくない！)

「もう、やめ……て……！ やめてえー!! いやー!!」

*

*

*

少女の叫びが部屋中に轟いた。

その瞬間、嘘のように雪も氷も消えていた。

「……生きているんだ……、ぼく……」

『炎の魔術師』さん、あなたも……よかった」

わたしは倒れ臥した、少女に歩み寄る。頷くと、彼女はこんなことを呟いた。

「……でも……生きていても……ぼくには、もう……なにもないんだ……」。

母さまもきつと……もう……」。

ぼくにはだれもない……なんの価値もない……」

「馬鹿なことをいうな。そんな人間など、いない。

……隣をみてみるんだな」

「え……？」

「クウーン……」

「……アセナ……」

「そんなふうに着り添ってくれる友がいるんだ。

価値がないなんて、彼に失礼だと思わないか？」

うつろなその目をまっすぐにとらえ、伝える。

「それに、きみには、あるじゃあないか。

わたしにも負けないほどの占い……降霊術の才能が。

きみはまだ若い。いくらでもやり直せる。

もしも、その才能を伸ばしたい……

そう望むのならば、わたしが後見人となり修行の場を紹介してあげよう。

いつでも、連絡したまえ」

メモを渡し、立ち上がり階段へと向かう。

すると後ろから届く、悲痛な願い。

「おねがい……母さまを、とめて……！」

「……まかせておきなさい」

それをしつかりと受け止める。

「よし、では、行くぞ、イギー！」

「バウ（へっ！） ったく、ほんつと……あつつくるしーやつだぜ！」

LOVE PHANTOM

『闇の呪術医』ダークアップリリストが消えて行った上階に向け、僕は螺旋階段をひたすら駆け上がった。た。

（アヴドウルさん、イギー……）

送り出してくれた仲間の顔が頭によぎる。

（……必ず！）

永遠に続くかに見えた階段は終わり、最上階に辿り着く。

つきあたり、立ちはだかる荘厳な観音開きの扉を押し開けるとそこは教会のような場所、どこかある種、神聖で厳かな雰囲気醸し出していた。

そしてすぐに、正面の祭壇に立ち尽くす目的の人物の姿を発見する。

「動くな！ もう逃げ場はない！」

ハイエロフアント
法 皇の結界で周辺を取り囲みつつ、勧告する。

「観念するんだな！ ジョースターさんにかけて呪い……スタンド攻撃を今すぐ解除してもらおう！」

ゆっくりと振り向く『闇の呪術医』。その口がぱくぱくと動く。

「……………くい……………」

「は……………」

まるで機械人形のように。

「……………ジョースター家、にくい……………ジョースターのせいで……………」

ジョースター……………ジョースター……………わたし……………ジョースター……………わたしの……………」

「お、おい……………」

「……………ああ……………！ わたしの！ わたしの……………せいで！！

わたしわたし……………すべてわたしのせいで！ あのひとが……………！！

あああああ！！」

「ここ、この女性は、すでに……………!?!」

焦点の合わぬ、空虚な目。こちらの呼びかけに応えることなく、わけの分からないことを喚き散らすその姿……………追い詰められ精神を病んでしまっている、まさにそれだった。

「あああああ……………！ アアアア……………あああああ……………！ ……ああ、ああ……………あ……………」

ぶつとりと何かが切れたかのように崩れ落ちる。

「いけない！」

駆け寄ろうとした瞬間、気づく。

「とうとう完全に壊れたか」

「はっ!？」

背後から降りかかる、冷徹な声に。

「意にそぐわぬ……愛娘を贄にする所業に耐えきれなかったとみえる」

鮮やかに彩られたステンドグラスの天窓を透して差し込んでくる一筋の陽光。

同時にそれと対称的な……真つ黒なシルエツトがひらりと舞い降りてくる。

「残念だ。この女もBeyond the regret……後悔の一線を越えることはかなわなかったようだな」

目元から上を黒き仮面で覆い、同じく黒のライダースーツに全身を包んだ、長身? 軀の人物であった。

低く響く声があたりを静かに震わせる

「What's done cannot be undone. それが絶対的な真

実にもかかわらず、な」

「貴様は何者だ? 一体何が目的でこのようなことを!!」

「おれか? そうだな……『ZERO』とでも呼んでもらおうか」

(……ZERO!?)

「小者の依頼もこの女の事情も正直どうでもよかったのだが……あのDIOを倒した

ジョースター一味には少々興味が、な」

口の端でにやりと笑いつつ、答える男。

「……………ツ!? 貴様、DIOの関係者か?!」

「さあな。そうともいえるし、そうでないともいえる。なににせよ、お前たちの噂はよく知っている。ぜひとも手合わせ願いたい」

「……………なに?」

「強き者との邂逅……………それこそが我が目的。血沸き肉踊る闘争こそ、我が美学」

それを聞いた瞬間、頭に、そして全身に……………熱く血液が循環していく感覚が駆け巡る。ゆつくりと静かに煮えたぎるその感情を言葉にする。

「貴様……………なにを言っているか、わかっているか?」

「無論」

「……………そんなことのために? 事情など推して知るべくもない。こちらにとつては是非善悪などいわずもがなだ……………しかし、あの女性には確かな深い傷と理由があった。それだけはわかる。貴様はそのような心を利用したのか? なんの罪もない娘さんまで巻き込ませて……………そして、そんなことのためにジョースターさんを?」

「僕の、たいせつな仲間……………無粋な手出しはやめていただくこう!」

「…………いい眼だ。期待できそうだな」

「法皇……………」

「出る。『影舞者』」
シヤドワダンサー

「……………」

「……………」

どちらが機先を制するか……双方伺い合い、睨み合う。

相手から否応なしに伝わってくる。不気味さ、そして、底の知れなさが。強力かつ凶悪な能力の持ち主であろうことは容易に推測できた。明らかに『何か』を狙っていることも。（実のところそれはお互い様なのだ）そして、奴の能力の発動条件が不明な以上、こちらから動くことは命取りになりかねない……本能がそう告げていた。

じりじりとした、数分が数秒のことに感じられるような時の中、静寂を切り裂くが如く勢いよく扉が開く。

「花京院！ 大丈夫か!?!」

「ガウツ（生きてつか、変態!）」

「アウドウルさん！ イギー!」

「ぬう！ 貴様が黒幕かッ!!」

一目見て状況を察したのであろう。『ZERO』に攻撃を仕掛けようとするアヴドウルさん。

「……マジンヤンスレッド
魔術師の赤オオ!!」

怒りに燃える、深紅のスタンドの猛突。

しかし、それに少しも動じる様子なく、『ZERO』は不敵に言い放つ。

「くくく、おまえからか？ ならば……」

「……いけないッ！」

「後悔と……踊れ」

魔術師の赤のつま先から伸びる影が急に大きく広がり、アヴドウルさんの全身をすべて飲みこんでしまった。

「うわあああああ！」

「しまった！」

やられた、そう思った。

「あ、アヴドウルさん！」

「……」

しかし『影』から解放された彼には、これといって変化はないように見えた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「バウツ（おい!）！」

だが、それはあくまで、『見かけ上』だけだったのだ。

「……すまない……わたしの未熟故……おまえに……。……ああ……」

心ここに在らず。まさにそれを体言したような様相で、なにやら眩く。

「アヴドウルさん!? な、なにを!？」

「ワン（あ、アヴドウル……?）」

必死に呼びかける僕達の声は虚しく響くだけだった。

「き、聞こえていない……のか?」

普段とは全く異なる虚ろなその眼は『ここにはいないなにか』を見ており、その口から発せられる言葉は『ここにいないなにか』にむけられているようだった。

「……わかった。おまえが、そう望むなら」

そして、おもむろにそう言うやいなや、ゆらりと懐からナイフを取り出し、己が首筋にあてがう。

「な、なに!？」

「グウウ！（まずい！ 『愚者』 ツツ!!）」
ザ・フル

すぐさまイギーがスタンドで間一髪、壁に押さえつける。

「ぐ、ぐぐぐ……」

「パウツ！（チツ！ おれが抑えとくから、さっさとどうにかしろ!! 花京院!!）」

「くそツ！ エメラルド……ツ!？」

（しまっ……!）

しかし、不覚にも動揺の最中、敵の姿を見失ってしまう。

「……遅い。貴様も……」

「ハッ!」

背後から、轟く不気味な声。

「後悔と、踊れ……」

「!？」

「ガウツ（花京院!）」

刹那、浸食してくる黒……ブラックアウト。視界が暗転する。

が、それは一瞬のことだった。

一面覆いつくしていた闇が緩やかに、そして完全に消失していく。

そして、気づく。

「ツ!? あ、あなたは……!!」

「……かきよういんくん」

目の前に現れた……『あのひと』の姿に。

「え……!?!」

「かきよういんくん……」

「そ、そんなはずは、ない……。あるわけ、な……」

戸惑う僕を置き去りに、『彼女』は言葉を紡ぐ。

僕が長い間渴望していた、あの……そのままの声音で。

残酷すぎる、言葉を。

「ねえ、たすけて。かきよういんくん。

どうしてかな? すごく、痛くて……つらいの……」

己の失われた左腕、それをじっとみつめながら。

「……わたしのいる、ここは……どうして、こんなに……、暗くて、寒くて……さみしい

の?」

うつむく彼女の頬に一筋の涙が伝う。

「ねえ、どうして? かきよういんくん……」

「そ、それ、は……ッ!」

強大なみえないなにかに全身が押し潰されるかのような感覚を受ける。

「……ごめんね。わたし、もう、たえられない……」

「え……?」

「……あきらめよう?」

「な……ッ!」

「……楽に、なりたい。もう、終わりにしたいの。貴方の手で……終わらせてほしい」

立ち尽くす僕に向け、一步踏み込む。

「でも、独りは、嫌。恐いの……だから、お願い……」

「一緒に……逝って、くれるよね?」

「……ッ!」

「……………ねえ？ かきよういんくん……………？」

「後悔……………犯してしまった過ちについて抱く負の感情。決して実現できないにもかかわらず、違う結果であれば、と抱いてしまう願望。誰しもが抱く執着。忘れられぬ過去、捨てきれぬ過去」

どこかとおくを見ている男の前に、黒き仮面の騎士は滔滔と言葉を発する。

「それは、もつとも深く、そして強固な想い。その影を……………決して逆らうことなどできぬ影を我がスタンドは引きずり出し、かたちにして、躍らせる……………我が意のままに」

そして、侮蔑ともなんともれない笑みを浮かべ、問いかける。

「常人は己が罪を突き付けられ続けることに耐え切れず、その末路は自害か、はたまた発狂か。

さて、おまえはどちらだろうな？ もはや、この声届いてはいないか？」

「……なるほどね。やはりそういうスタンドか」

「何……!?!」

仮面の男……『ZERO』に向け、戻ってきた男……僕は、静かに言い放つ。

「き、貴様、どうやって……?!」

「……さすがは、僕だ」

「は……?!」

「みためも、こえも……完璧だ。ほんものと、寸分の違いもない……」

愛しいあのひと、そのまま。

「でも……ちがう」

首を振る。しつこくまとわりつく『なにか』を断ち切るように。

「ちがうんだ……」

ずっと、おもっていた。

……たすけて。……いたい。……くるしい。……つらい。……こわい。

あのとき、そんなふうについてくれたら……どれだけよかっただろう、と。

いつも、ただ、わらって。ひとりで、すべて。

そして……

「ぜったいに、いつてはくれないんだ……あのひとは」

弱い僕が、ずっと、心のどこかで欲していた言葉。

「……『一緒に死のう』だなんて。決して……」

真実^{ほんとう}はただひとつだけ。置いていった『手紙』。

「……だから、さっきの『あれ』は……僕の『願望』が生み出した幻にすぎない。だとしても……、だからこそ……！ そんなものに従うわけにはいかない」

——しあわせに、生きてください——

「……僕は決して、あきらめない」

動揺を隠しきれない『ZERO』に向けて、続ける。

「それにしても、貴様には礼を言わなければな。ありがとう。本当にひきしぶりに、とても『いいもの』をみせてもらったよ」

大きく一步、踏み出す。

「しかし、人の心を覗き込み、弄んだその罪……許すことなどできない！
全て洗い流すがいい!!」

「エメラルド・デリユージュ!!」

法皇の引き起こした碧色の洪水が漆黒の影を呑み込む。

「……くっ!」

しかし、手ごたえはあったものの、在るはずの姿はすでにそこにはなかった。
逆光に妨げられつつも見上げると、再び天窓にその姿を認めることができた。

「ふっ、貴様……やるな……」

またも響き渡る重低音があたりを包む。

「我が求めるは強者。

後悔を乗り越えることのできる、強き精神の持ち主。

……時がくれば、この縁、必ずやまた……」

そうして奴の姿は、光の中へと消えた。

「……そんな時、こないことを祈るよ」

「アヴドウルさん、大丈夫ですか?!」

『ZERO』が去ると共に、倒れ臥した仲間元へ駆け寄る。

「あ、ああ。大事はないようだ。」

「すまない、花京院。ぬかってしまった」

「いえ、よかったです。無事で」

そして信じられないものを見るような顔で訊ねられる。

「それにしてもおまえ、よく囚われずに……」

「ふっ、負けるわけにはいきませんから」

「ん……?」

「僕の方だけ、気づけないわけにいかないでしょう? 『偽者』に」

「……ああ。そうか、そうだった。あれはたしかシンガポールだったか……彼女の偉大なる『恋の力』に舌を巻いたのはあのときが初めてだったなあ」

「ええ……」

あざやかに浮かび上がってしまった胸の疼きをどうにか奥底に押し込めつつ、懐かしそうに目を細めている人に聞いてみる。

はたと、思った。

最もたいせつなひとの影。

「アヴドウルさんこそ、どんな方の？ 聞かせて下さいよ」

大人なこのひとの、そんな『いいひと』の話をそういえば耳にしたことがなかった。

「ふっ、生憎だが、君の期待するような艶っぽい話にはとんと縁がなくてな。親友さ。とても古い、な」

「へえ……」

遠くをみつめる……その横顔に向けていう。

「それがもしも謙遜でないのなら……」

今まで貴方が出会った女性は総じて見る目がない方ばかりだった。

……そういうことですね」

「ふっ！ まったく……！」

「ふふっ」

「さあ、戻ろう。これでジョースターさんも元気になるはずだ」

ほどなくして、ジョースターさんが昏睡状態を脱したとの知らせを受けた。

体力も驚くほどメキメキと回復し、不自由な入院生活なんて耐え切れるか！ と即、無理矢理退院してしまつたそう。

人騒がせなじじいだ。などと言いつつも、電話口から流れる心底ほつとしたような親友の声を聞き、こちらもようやく胸をなでおろした。

「よかつた。リサリサさんも大丈夫かい？　かなり『波紋』を使われたのだろうか？」

「ああ？　あいつなら……帰つた。多分」

「は?!」

予想通りまた来た別の刺客を文字通り一捻り（やれやれ、おれが残る必要なかつたぜ……とは承太郎談）した後、ジョースターさんが『回復』したとみるやいなや、だつたそう。

「こつちにはもうおらん。まあ、いつもどおり、というやつだ。またどうせひよっこり現れる。なんか用があつたらな」

「そ、そうなのか……」

「あと……じじいになんかあつたときには、必ず、な……」

神出鬼没。でも、そうやって見守っているのだろう。

「そうか……」

母にとつてはいつまでも、どうあがいたって、息子は息子なのだ。きつと。ずっと。
「まあ、もうこんな事件無いのが一番ではあるけどね」

「ああ。そうだな」

『ZERO』の正体や思惑。『闇の呪術医』……あの女性の事情。

加えて『何か』ひっかかるような感覚。

すつきりしない面が残るものの、とりあえず全員無事、一件落着とあいなった……

……そのはずだったのだが。

承太郎との通話を終え、さあ、ジョースターさんのところへ戻ろうと受話器を置く。

もういらつしやらないのか。少し聞いてみたいことがあったのに。丁度そう思ったところだった。

「……花京院」

唐突に背後から呼ばれた。

「うあああああつ!?!」

「波紋に興味が湧きましたか?」

「り、リサリサさん!?!」

振り向くとそこに在る、つい今しがた消えたと聞いたはずの姿に驚く（こんなところもひ孫……承太郎に脈々と受け継がれているようだ）。しかもどうやら全て御見通しらしい。流石は師匠の師匠せんせい。目を瞬かせつつも頷く。

「ええ……、まあ」

「貴方の中に才を見ました。それに……」

「花京院、貴方はどこか似ている。わたしの一番優秀だった……愛弟子に」

そのお弟子さんのことを思い出しているのだろう。表情がすこしだけ柔和なものに変わる。

「いつでも訪ねて来なさい。望むなら修行の方法を教えてあげてもいい。死ぬほど厳しく辛く苦しく、最悪本当に死ぬ。その上、会得できるか否かは貴方の努力次第ですが」

「し、死……」

かなり恐ろしいことをそんな風にさらっと言つてのけると、リサリサさんは真つ赤な

トレンチコートを翻し、風と共に去っていった。

「……よく無事に戻りました。ありがとうございます、花京院。J O J Oを救ってくれて」

最後の最後まで、やっぱり『つんでれ』のまま。

そして事件から数日後、日本に帰国前のことだ。

僕はジョースターさんから呼び出しを受け、その元へ馳せ参じた。

「やあ、花京院。よく来てくれた」

まだベッド上ではあるものの、顔色はもうかなり良いようだ。ほっとしつつ、訊ねる。

「一体どうしたんですか？ 僕一人で来い、だなんて」

「ん？ おまえさんに、改めて紹介したい男がおつてな」

そういうと、ドアが開く、と、同時に入ってくる一人の人物。

「こんにちは」

「貴方は！」

初日にここを訪れた際、ジョースターさんと熱く口論をしていた男性だ。

今日はシルクハットに蝶ネクタイ……といった出で立ちだったが、奇抜ともいえるその恰好が不思議ととても馴染んでいた。

彼は帽子を取り、優雅な一礼とともに自己紹介をする。

「わたしは新留・D・スピードワゴン……SPW財団幹部の一員を担わせていただいている」

「スピードワゴン?!」

驚きの声を上げる僕にジョースターさんが補足してくれる。

SPW財団、創設者である初代スピードワゴン……彼は生涯独身だったが、世界を回った際に知り合った戦災孤児を何人か養子に迎えており、現在は彼の意思を継いだその子孫らの手で財団は運営されていていっているらしい。初代スピードワゴン死去後も遺言に基づいてジョースター家の闘いを陰から支える団体となっている、と。

「いつの時代も変わらずジョースター家の力になり続けてくれており、感謝の言葉もない」

誇らしげに頷いた後、改めて彼を指す。

「で、こいつは初代の孫にあたる、日系イギリス人なのだ。ほんに生意気なのが玉に瑕なんじゃがな。まったく幼い頃から変わらん」

「ん? 齒に物を着せぬ物言いは昔からでしょう、ジョセフおじさん。貴方にいつまで

も現役でいてほしいが故の叱咤、というやつですよ」

「よく言うわい……余計な『お節介』だっつーの」

「ふふ。それは我が一族の、血のつながりを越えた伝統的家訓……というものでしてね」
「爺様に性格は似ても似つかんがな。そのエリート風吹かす感じ。まあ実際優秀なのがまた憎たらしいんじゃないが」

「おや、貴方だつて似ても似つきませんよ？ 空条君の爪の垢でも煎じて飲んでみたらどうですか？ あのフラットさは尊敬に値します」

「ぐう……っ！」

どうやら、今回の舌戦も再びジョースターさんの完敗のようだ。

「さて、本題に移りましょう。わたしは出自から、現在、日本財団支部……目黒支部長を任されていてね」

言いくるめられ歯齧みをする人をよそに、スピードワゴンさんはくるりと僕の方に向き直る。

「……率直に言う。花京院典明君、君を我が財団特別研究所の主任研究員に是非とも迎えたい」

「えッ!？」

「スタンドに関する知識や考察力、洞察力は皆からの折り紙付き。これほど適した人材

はいまい……と実のところ以前から目をつけさせていたのだ。おじさんにずっとお願いしていたのだが……」

「だって、花京院にはうちの会社に来て欲しかったんだもん。ちえーっ！　しかし……いい話じゃろう？」

ウインクとともに僕に投げかける、ジョースターさん。

「……でも、僕は……」

躊躇いつつも口を開くと、意外な言葉が返ってきた。

「ああ、勘違いしないでほしい。言い方が悪かった。

優秀なスタンド使いだ……と、いう点はもちろんなのだが、それは正直二の次……わたし個人としてはどうでもよいことであつたりする。今回改めてわたしが勧誘に来た理由は別にあるのだ」

『僕がスタンド使いであること』。それ以外に思い当たる節もなく首を傾げていると彼は続けた。

「本来ならばこれは秘匿事項なのだが……どうせ近日中に知らせが行くし、もう構うまい。君の博士課程論文、世にも珍しい、一発アクセプトだ。おめでとう」

「は!?!　ど、どうして……?」

「どうやら傑作なことに、あの頭の固い上の連中でさえも誰も文句がつけられなかった

らしい」

僕の驚く顔を心底楽しそうに眺めつつ、彼はシルクハットを器用にぐるりと回すと種明かしをする。

「何故知っているかって？ 所縁あつて、わたしも審査担当の一人だからさ。君の研究は、光の速度の観点から未知の見地に切り込み、量子力学分野に新たな一石を投じている……もしかしたら時間の因果率すら覆すことができるかもしれない……そんな夢のような可能性を秘めた、素晴らしいものだった。久方ぶりに鳥肌が立ったよ」

意外過ぎる『正体』……僕とのつながり、を。

「君のような人間と共にふたたび夢を追いたい……恥ずかしながら、居ても立っても居られなくなつてしまった、というわけさ。昔から、わたし自身も少しかじっている身だね。R・ストラトス……聞き覚えは？」

「その名は!？」

これまたなんという謙遜。大学院で僕が専攻している、光化学……特に量子物性科学を志す研究者で彼の名を知らない者はいないだろう。若き頃から彼が築いてきた業績は数えきれない。

「有名知名というものは必ずしもよいものではない。余計なフィルターをかけられたくないのですね。研究界ではその名で通している。そして、ヤマムラ……君の現在のラボの

ボスだろう？ 彼とはかつて同じ研究室の釜の飯を食った仲さ。彼からも君のことはよく聞いて知っている。大変前途有望な若者だ、と」

「あ……」

「我が財団は世界最先端の医学、理化学、考古学を始めとし、果ては超常現象の解明まで……様々な部門を専門として人々の生活と福利厚生のために動いている。

そして、創設者ロバート・E・O・スピードワゴンの誇り高き魂と志を受け継ぎ、その数多の専門知識と技術と物資、人脈……あらゆるツールを通じて、ジョースター家ならびに『黄金の精神』を持つ者たちの闘いを支え、見守っている……今も、そして、これからも」

きらりと輝く光が込もった慧眼が僕を正面から見据える。

「花京院典明君。君ほど我が財団に相応しい人間は二人としまい。

是非、我が研究室で、その才能をいかんなく発揮してほしいと願う。

……いかがだろうか？」

「……はい！ ぜひ、前向きに検討させていただきます」

「ああ。ありがとう。嬉しいよ。いい返事を期待している」

くしやりと目を細めながら、すつとその手を差し出す。

それをがつつちりと掴みながら、僕は初めて知る。

ずっと続けていた、ひとつのことが認められる。
それは、かくもうれしいものなのか……と。

「……目的は果たしました。

スピードワゴンはクールに去るとします。

では、また」

「よかったのお、花京院」

「……はい。ありがとうございます。ジョースターさん」

紳士が宣言通り軽やかに場を去っていったあと、礼を言う。

「わしゃ、なーんもしとらんよ」

「ふっ……」

するとやつぱりそんなことをいってはぐらかされる。いつもどおりだ。そして、逆に頭を下げ返される。

「だいたい、そりゃあわしの台詞じゃ。あらためて……ありがとうな、花京院」

「なんですか、もう。水くさいこと言わないで下さいよ、ジョースターさん」

「……そうじゃな。ふっ！」

「そうですよ。まったく！」

「あのとき……きこえとったよ。お前さんの声。……うれしかったぞ」

「うっ……」

—— 僕が……護る ——

思い出し、急に照れくさくなってしまった僕は、誤魔化すようにまくし立てる。

「そ、そもそもですよ！ 貴方が波紋の鍛錬をサボらず続けていれば今回みたいなことには……」

「えー？ だって、面倒だし、きついしさあ……」

「はあ？ まあ、そりやそうでしょうが……」

「それに……」

言い訳はそれだけではないらしい。ジョースターさんは一転、真面目な表情を浮かべる。

「……わしが歳をとれば、妻も歳をとる。

それが、あたりまえのこと。そうあるべきじゃと……おもつてな」

「ああ……」

（そうか。スージーさんと、ともに……）

「ほんとうに……貴方らしいな」

今度はあちらが急に恥ずかしくなったのかもしれない。慌てて取り繕うジョースターさん。

「ま、まあ、これからは健康維持程度には元通り鍛錬をしようかの。リサリサにまたしばかれるのこりごりだし。寝とつてもわかるくらい痛かったわ。ピンシャンしたままほつくり逝きたいしなあ……」

「……ふっ！　そうですな」

「しかし、本当にまいったわい。今度ばかりはもう駄目かと思つたよ。ジョースター家の男は皆短命。わしにもとうとうお迎えがきたか……つてな」

「はあ、縁起でもない。そんなこと言うもんじゃありませんよ」

「もう長く生きたほうじやと思つたが、やはりあるもんじやな、心残りが」

「そりやあそうですよ。貴方になにかあつたら、御家族や部下の皆さんがどれだけ……」

「いや、家族のことや、会社のこと……はそんなでもない。信じているからな。わしがおらんことを悲しんではくれるだろうが、まあうまくやつてくれるだろう」

にっこりと微笑んだあと、俯して長く息を吐く。

「長い間わしの心に引つかかつておることが、3つある。

ひとつめは、ずっと昔になくしてしまつた……親友に投げた最後の言葉」

(ああ……)

——きもちの熱い、まっすぐな、いいやつじやった——

いつかジョースターさんが語ってくれた、あの『彼』のことだろう。

「ふたつめは……花京院、おまえと、あの娘のこと」

「……」

「そして、3つめ……」

そこでなぜか、言葉を切るジョースターさん。

「……おまえさん、ききたいか？」

「なにをですか？」

「わしの、トツプシークレット……じゃ」

「は？」

「承太郎ですら、知らん。頭の固いアヴドウルのやつに知れたら大目玉を喰らうことが
必至じゃ……」

「……それは、とても興味深い、というのが本音ですね」

「ならば、おぬしにひとつ、たのみがある……」

「……日本にいる『ある女性』の様子をみてきてほしいんじや」

「どうした？ 花京院、浮かない顔だな？」

「い、いえ……」

ある意味光栄ながら、とんでもない宿題をジョースターさんに出されてしまった僕。

帰国の日、ジョースターさんと承太郎に暫しの別れを告げた後、アヴドウルさんと飛行場に向かった。

「な、なんでもないんです」

隣でいぶかしげに首を傾げている人に対し、どうにか誤魔化す。

(言えるわけない……)

一応は男の約束。洩らすわけにはいくまい。

ちなみに無論、あのあと小一時間、説教をくらわせておいた。

おまえに言ってもじゆうぶん大目玉じゃったわい……とかなんとか恨み節をいわれたが、知らん。

——それでも……恋をしてしまったんじゃよ……——

しかし、そんなふうにつむいてポツリと呟く彼を前に、それ以上なにもいえず……結局引き受けてしまったのだった。

「そうか？　なら行こう」

難題にこつそり頭を悩ませつつ、アヴドウルさんたちと共に出国手続きを終わらせ、ゲートをくぐろうとした。

そのときだった。

「アヴ様ーっ!!」

「きみは……!」

『『氷の魔術師』!』

「えー?　やめてよ。もうその名前とはさよならしたの!」

千那だよ。ぼくのほんとの名前」

「ああ、そうだな。千那……どうした?」

アヴドウルさんが促すと、息せき切ってかけてきた少女、千那嬢は、改まった様子で言う。

「……お礼が、いいたくてさ」

「お礼?」

「二人がお願いしてくれたんでしょ?」

ぼくのこと、ほんとは悪くないよって。

おかげさまでこの通り、自由の身になりました。……ありがとう」

ぺこりと頭を下げる少女。二人で顔を見合わせ、返す。

「さあて……なんのことだか」

「ふっ……！　ですな」

「ふふっ！」

「しかし……その荷物は……？」

そこで、少女の背中に背負われている大きなリュックおよび手にした大型キャリーバッグに気づき、僕は訊ねる。

「ん？　ああこれ？　ぼくも、日本で暮らすことにしたから」

「は!？」

アヴドウルさんと仲良くハモったところで、おもわず重ねて問う僕。

「ひ、独りで……？　君、まだ中学生くらいだろう？　大丈夫なのかい？」

「はあ？　失礼な！　これでもぼく17歳だよ!!」

「え!?!　そうなのかい!？」

「まったく……まあ、花京院、君にとっては例の彼女以外、誰もかれもカボチャみたいなもんなんだろうから仕方ないけどさー」

「ぐっ！　め、面目ない……」

的を射た呆れきった考察に反論の余地もない（しかし改めるつもりは毛頭ない）僕を

よそに、千那嬢は続けた。

「母さまも、日本の財団縁の病院で看てもらえることになったし。今はまだ、外界に無反応なままだけど、生まれ故郷に戻ってゆっくりと心を癒してあげられたら。ぼくも一から出直して……そして、いつかこの力を困った人の支えにできたらって思つて」

「そうか……そうだな」

力づくよく頷く、アヴドウルさん。

「それに……父さまと弟たちを、捜したい。

ぼく、一度だけ、みてしまつたんだ。

母さま、家族の写真を見て……あれはたしかに涙だつた。

きつと、自分から出て行つたのに、あわせる顔なんてないって……思つてる。でも、ほんとは……」

うつむく、少女。

「会わせてあげたいんだ。

そうしたら、母さまも、きつと……」

「……ああ。それがいい。これからはきみが、おもうように生きるんだ」

「……うん！」

あたたかい瞳でやさしい言葉を投げかける彼に、躊躇いがちに頬を染めて少女は告げ

る。

「あのね、それで、さ……。あのとき、ぼくの後見人になってくれるっていったじゃない？ 修行するなら……。えつと……。ぼく、あなたのそばがいいなあって……」

「なっ!!」

「……。だめ、かな？」

「だ、だめではないが……」

「ほんと!? わーい! やったあ!

よろしくね。アヴ様っ!!」

「あっ! こ、こら! そんなにくつつくんでは……!!」

「……。ふっ! やっぱりアヴドウルさんもスミに置けないな!」

仲睦まじい、ふたつの背中を眺めつつおもう。

(仁美さん……。どうやら、あなたに念願の妹弟子ができたようだよ)

Messenger of delight

(はあ、それにしてもなぜ僕がこんな……)

日本に戻った僕は自宅に戻る暇もなく再び次の目的地に向かう新幹線に乗り込んだ……ため息をつきながら。

今日できることは明日に延ばすな。気の進まない事案こそ、積極的にさっさと済ましてしまふべきだ。件の女性を見つけ出して、遠くからそつと様子を窺い、その安否を確認する……以上でミツシヨコンプリント。簡単なことじゃあないか。と、自分を叱咤する。

どうしても浮かんでしまう。

……どうせまたそれだけでは済まないであろう。

という経験則から来る不吉な予感。それをどうにか頭の片隅に押しやりながら。

あの旅よりもさらに前、もう14、5年にもなる、一夜だけの過ち……だそうだ。焼け木杭に火をつけようとか、そういう気はさらさらない。会う気はない。ただ、気になつてしかたがない……とのことだった。

——息災で、あればいい。後生じゃ、花京院！——

とまで言われてしまえばどうしようもない。

あのジョースターさんが人生において、奥さん以外で関係をもった、唯一の女性（※自己申告）。果たしてどのような方なのだろうか。

「杜王町……か」

平日の昼下がりがゆえか、駅前には人の通りはまばらだった。なんの変哲もない、ほどよく栄えた住みやすそうな地方都市だ。ただ、さすが東北、気温が低い……まあ、アラスカほどではないが。などと晩秋の北風に抗いつつ、一步足を踏み入れた。

（……？　なんだ……？）

瞬間、たしかに微かな『なにか』を感じる。この街全体に違和感……異質な雰囲気とでもいうべきか。

ちなみにここでは余談となってしまう、その『原因』に関して僕があまり知ることになったのは、またもやかなりあとの話だった。

実はこの街にとんでもない事態が起こりつつあり、数年後再び仲間たちと激闘を繰り広げる羽目になるなんて……この時の僕は知る由もない。

（さて、と……）

気を取り直し、今後の行動について考えてみる。

所持している情報は、女性の名前、およびこの街の出身であるということ、そして、ジョースターさんが隠者（ハミット・パウル）の紫で念写した写真……以上。圧倒的な情報不足をどう補うか。腕の見せどころだが。

とりあえず正攻法でいくか、と、困った時の市民の味方。『POLICE』とわかりやすい看板が掲げられた駅前交番でまずは聞いてみることにした。

「こんにちは。すみません。少々お訊ねしたいのですが」

「ああ、どうされましたかな？」

対応してくれたのは、一人の男性警官だった。この街のことなら任せておけ……いかにもたたき上げ、といった風な、経験豊富そうなベテラン警官だ。もしかしたらもうすぐ定年、そんな感じかもしれない。

『トモコ』さんという、この女性を探しているのですが、御存知ないでしょうか？」

写真を差し出しつつ、問う。

「……なぜ、こいつを探している？」

すると、声のトーンががらりと変わる。じろりと睨みつけられる僕。

「……え？ ええと、知り合いの古い知り合いでして……」

そして、穏やかだったその表情が一変する。

「ああ？ てめー、朋子になんの用だ!？」

「は!？」

「てめーが、ストーカー、つてやつだな？ 誰が教えるか！ とつとと失せな！」

「なツ!？ ちよ、ちよつとまってくだ……」

「ガタガタしつけえぞ！ 公務執行妨害で逮捕してやろうかツ!!」

「ええー!？ し、失礼しましたッ……!」

命からがら、どうにか逃げ出す。

(……本当に何故僕がこんな目に……)

しかし、とんだいいがかり、かつ罵声を浴びせられたのは無駄ではなかった。

あの急な激昂っぷり。彼は『トモコ』さんの関係者に違いない。

(よし……)

毎度お馴染み、細く長い『ハイエロフロント・テイルストリングス法皇の尾行紐』をそつと先程の老警官にくつつけておくことにする。

これで準備完了。彼の勤務時間が終わってあとを尾けよう。それまでどうやって時間をつぶそうか……などと考えてながら周囲を見回すと目に入る。

(ゲームセンター、か。どうせ暇だし。久々にやるか)

『YOU WIN!』

画面いっぱい、大きく派手に浮かび上がる文字を眺めつつ、思う。

(ふっ、歯ごたえのない。これで37連勝か)

「す、すげー! 何者だ!？」

「こ、このゲームでエキスパートモードクリアしている人初めてみた……!」

「しかもノーダメ……パーフェクト! ばねえ……!」

あくまで普通にプレイしていたはずなのに、背後にいつのまにやらざわつく人だからできてしまっていた。

「……」

うっかり悪目立ちをってしまったようだ。反省しつつ気まずさを覚えつつ、無言で席を立ち、店を出ようとした。

「なあ、あんた……ちよつと、顔かしてくんねーっすか?」

すると、声をかけられる。

黒くばしつと決めたリーゼント……こだわりのありそうな髪型(僕の方が洗練されてはいるが)が特徴的な、ぶどうが丘中学、そう書かれた校章のついた学ランを着用している少年に。

「……いいだろう」

店の裏に移動する。

「で、要件は、なんだい？」

中学生にしては大柄なその背中に問いかける。財布をスられるのはよくあるが、真つ向から奪われたことは一度もない。傲慢にもならないが。

「……あんたの腕を見込んで、お願いがあるんす」

姿に似合わぬ小さな声で呟く少年。

その眼はどこかで見たことのあるような……澄んだもので、カツアゲだとか因縁つけようだとか、そんなものとは縁遠そうにみえた。

彼はさらにこう言い放った。意外な一言を。

「おれの、ゲームの腕を鍛えてほしいッ!!」

「……は？」

「ここだ！　ここで決めるんだ！　秘技、サイクロンスマッシュャーッッ！」

「うお！　すげえ！　また負けた……いやあ、けどほんと助かったつす。ダチと昼飯一ヶ月分かけて、今度勝負する約束しちゃいまして。これで対策は完璧つす。へへ」

無邪気に隣でにやりと笑う、少年。

「でも負けっぱなしは性に合いませんね。俺意外と負けず嫌いなんすよ。次はこれで勝負、どうすか？」

「エフメガか……いいね、受けて立とう」

「くっそ、かなわねえ！ ボンビー！ 格ゲーもレースゲームもシューティングも野球ゲームも積みゲームも、桃鉄まで！ 鬼か！」

「くくく、あの敗戦を経た僕に、もはや死角などぬあーいッ！」

あの苦々しい……人形になった時の何とも言えない、あの気持ち悪さを思い出す。

「あの敗戦？」

「いや、こっちの話。……ん？」

偶然知り合った少年の名は、東方仗助君。彼の家で何の因果かゲーム大会に興じるこ
と数時間。霜月のそれ、最近めつきり短くなってしまった日はとつぷりと暮れ、窓から
伺える景色はすっかり暗くなってしまっていた。

「すまないね。僕としたことがつい時間を忘れて……すっかり長居をしてしまった。そ
ろそろおいとまするとしよう」

「えー、まだいいじゃないっすか。勝ち逃げなんてズルいつすよ！」

「はは、まいったな。僕としてもそうしたいのはやまやまだけれども……もうすぐお家の人帰って来るんじゃないのかい？」

「大丈夫つすよ。おふくろ海外出張中でしばらく留守だし。じーちゃん今日は仕事終わるの夜中だし」

そこでひっかかる。

「ん？ お父さんは？」

「ああ。おれ、おやじは、いねーんつす」

「え？ そうなのかい？ ……すまない」

「またも僕としたことがなんとも迂闊な発言をしたものだ。後悔しつつ、謝る。」

「別にいいつすよー。氣いつかわないでください。どこにいるのかも、顔も知らねー。生きてんだか死んでんだかってくらいだし。産まれた時からおれの家族はおふくろとじーちゃんだけつすから」

「あつけらかんとした調子の影に、ほんのわずか……言葉と反対の感情が滲んだのに気づく。それを悟られぬためか、少年はさりげなく話題を逸らす。」

「そーいや、花京院さん、東京の人つすよね？ どうしてこの街に？ 仕事とかつすか？」

「ああ、そうだ……自分でもうっかり忘れていたが、実は頼まれてこの人を探しているん

だ」

例の写真を差し出す。するとたちまち目を見張る、仗助君。

「まじつすか……」

「え？」

「知ってます。おれ、このひと」

「ほ、ほんとうかい!？」

そして、少年の口から衝撃的な発言が飛び出す。

「だって、この写真の女の人……おれのおふくろですし」

「……な!？」

ジョースターさんの探し人……それはこの少年、仗助君の母親だった。

(ま、まさか……)

「じよ、仗助君。つかぬことを聞くけど……君、今何歳かな？」

「え？ 13つすけど」

(……。あ、合ってる……)

瞬時の計算。時期的にはつちり合致している……なんとということだ。目を逸らしたくなるような、あるひとつの結論がぼんやりとみえてくる。できることなら我は関せず、今すぐ逃走してしまいたい。しかし乗りかかってしまった泥船……沈むとわかって

いようが今さら降りるわけにもいくまい。

ならば、あるはずだ……『あれ』が。

「仗助君、重ね重ね申し訳ないが、その、君の……首筋を見せてはもらえないだろうか？」
「は!?」か、花京院さん、そーゆー趣味の人なんすか……? すんません、おれそつちのケは……ふつーに女子が好きつす」

「はあ!? ぼ、僕にもないッ! ちゃんと! しつかり! がつつり! どつぶり! ずつぶし! 夢中な意中の女性が僕にだっているわッ!」

「……冗談つすよ。どーでもいいけど、ただだけすきなんすか、そのひとのこと……」
あらぬ誤解を招かぬよう、質問を変える。

「おほん、君、首の後ろに、その、アザとか、ないよね? ないといってくれるとありがたいんだが……」

「ああ? これのことつすか?」

背中を向けシャツの首元をひっぱりつつ言う。

(ああ、やつぱり……)

僕の願いも虚しく、おぼろげだった推測がくつきりと形になってしまった。

仗助君の首筋には、確かにあった。

ジョースター家の血をひく、という確たる証拠。

星形の痣が。

「なんなんすか？ 一体……はっ！ も、もしかして！ 花京院さんがおれの親父……」

「……んなわけあるかッ！ 君が産まれた当時、僕まだ小学生だぞ！」

「はは、冗談っす。わかってますよ。花京院さんにおふくろ探しを頼んだヤツ……それがおれの父親なんでしょう？」

「うっ……」

僕などがこのような重要な事実を伝えてしまつていいものなのか。迷つたが、まつすぐこちらを見据える少年に、もう隠し通せはしまい。と、正直に頷く。

「……ああ」

「そっか……生きてんっすね」

しみじみとそう呟く、少年に訊ねる。

「会つてみたい、かい？」

「……しよーじき、あまり、気がすすまないっすね。今さらどんな顔していいかわかんねーし。ああ、とくに母親には、ぜったい会わないでほしいっす……泣くから」

彼はいつた。まつすぐ、強い光のこもつたまなざしをむけて。

「申し訳ないっすけど……おれもおふくろも今の生活に満足してます。

だから、気にしないでくれとだけ、伝えてほしいっす」

ほんのすこしだけ揺れて滲んだ色の瞳で。

「む、息子!?!」

「……はい」

宿泊先として抑えたホテルの部屋に着くなり、僕は即、連絡を入れた。

「しかし、本人はそつとしておいてほしい、と。

ですので、今は……。

つて、あれ? ジョースターさん? ジョースターさん!?!」

受話器を当てた僕の耳に届くのは、ツ、ツ……と響く、電子音のみ。

「……切れた」

そして、それ以降、何度かけても彼に電話はつながらなかった。それほどにシヨックだったのだろうか……それとも。

一抹の不安を感じつつ、一夜が明けた。

同様に仗助君の様子も僕は非常に気がかりであった。せめて彼にもう一度会ってからこの地を去ろうと、翌朝、僕は彼の自宅に向かった。

「仗助君、おはよう」

「花京院さん……うす」

少し離れた地点で登校前の彼に声をかける。

「大丈夫かい？ その、なんというか、すまない……」

「大丈夫つすよ。ふつ、なんであんたが謝るんすか。こつちこそすんません。なんか妙なことになつちまつて……」

「そつちこそ。なんで君が謝るんだよ」

「ふつ、そうすね」

つい、苦笑し合つてしまう。なんともいえない奇妙な縁に。

「もう帰つちまうんすか？」

「ああ」

「そつか。また、来てくださいよ。よかつたら」

「そうだね。ぜひそうさせてもらうよ。そのときはまた、一勝負しよう」

「はい！ 鍛えとくつす」

がっちりと再会の約束と握手を交わした瞬間だった。

「……ん？」

ギヤギヤギヤギヤ！ と物凄いスキル音を立てながら、猛スピードで一台のベント

が滑り込んでくる。

「な、なんだ……?」

急ブレーキの音が鳴り響いた後、バン! と勢いよくドアが開く。

そこからとびでてきたのは、まさかというか……やっぱりというか……このひとだった。

「花京院ツツ!!」

「じよ、ジョースターさん!? どうして!？」

「来るなどか言われても……そういうわけにいくかつ! 居ても立っても居られんくつて来てしもうたわい!!」

すかさず、少年の方に向き直る。

「仗助君、じゃな……?」

「……」

「……わしを、殴れ」

「……は!？」

「きみのことを……知らんかったとはいえ、到底ゆるされることではない。わしはそのためだけにここに来た。さあ!」

「じよ、ジョースターさん!? じよ、仗助君!？」

ひとりオロオロする、僕。何故僕だけが（以下略）。

「……そうすか……じゃあ遠慮なく……」

「ぐはあッ……!」

そういうやいなや、息子の強烈なパンチが父の頬に入る。

「……でも僕は垣間見た気がする。ジョースターの血統を。」

「つ、強いな……さすががわしの息子、じゃ……」

「……手加減してやったんだよ。これでも」

ふっとんだ父親を起き上がらせるべく、手をさしのべる息子。

「すまん……ありがとう。これからもお母さんのこと、よろしく頼むな」

「……言われるまでもねーよ」

「ああ、そうじゃな……」

（ふう……）

心配などまったく無用だったようだ。すこしだけ、ふたりの距離が近づいたかに見えた。

そんな、ときだった。

「会長！　そして、その息子……!!」

……ふたりそろって、死ねえーッ!!」

突如、飛び出てきた一人の男……その手に握られた拳銃が火を吹く。

「!?　いかん！　仗助君ッ！」

「……なッ!?!」

「いけないッ！」

（しまったッ!!）

そこですか……こうなるまで気づけなかった、自分を責める。

『ZERO』の言葉。ずっとなにかがひっかかっていた。

——小者の依頼など——

そうだ。あの発言はヤツにジョースターさんの暗殺を依頼した人間が別に存在する

……そういうことだ。

「くっ！」

必死に法皇を伸ばす。

「ぐわあッ！」

しかし、全ては逸らしきれず、凶弾一発が仗助君を庇ったジョースターさんの腹部を

貫通してしまう。

「く、くそつー！」

せめて、と、犯人を取り押さえる。

「き、貴様は!?」

法皇で捕縛した、その顔を確認して驚く。

「ちくしょう！　なんでだ!?　う、動けねえ！」

会社でジョースターさんにへーこら胡麻を擦っていた、スコレットとかいうあの小太りのおっさんだった。

「跡取りのいねえ会長の後釜を狙ってやろうと思つて、ずっと我慢して媚びへつらつていたのに、全然相手にしやがねー！　こうなつたらいつそつて思つて……大金はたいて頼んだのに役立たずなあいつらは失敗しやがるし！　しかも実は息子がいるだど？　そんなのオレ様の会長の座がまた遠ざかるじゃねーか！　生かしておけるか！　ちくしょう!!」

「……ツ!!　この、外道が!!」

「ぐふツー！」

自己中心的極まりない。聞くに堪えぬ言い訳を見苦しくまき散らす男に全力で当て身をくらわし、青い顔で集まってきたボディガードたちに突き出す。

こんな人間のことは、今どうでもいい。

「ジョースターさんッ！」

必死に駆けよる。

「お、おやじ……………」

「……………仗助君……………」

そう、呼んでくれるのか……………？

うれしい、もんじゃな……………」

「……………いい、冥土の土産になりそう、じゃ……………よ」

「……………ジョースターさんッ!!」

僕の叫びも虚しく、ゆつくりとその瞳が閉じられていく……………。

しかしその一方、極めて冷静な言葉が僕達に降りかかる。

「……………馬鹿親父。花京院さんも。落ち着いて、よくみてみるよ」

「……………え？」

「……………あれ？ 痛くない……………血も止まって？ つてか、傷が……………ない」

「もう、治した。……………おれが」

「なにいいーッ！」

「な、『治す』スタンド使い!? うちの息子が!？」

「ああ。おれ、治せるんすよ。昔から。じいちゃんの骨折とかも治したことあるし」
やっぱりあつけらんかんと言う仗助君。

「人だけじゃあなく、物も直せるぜ……ドラアッ!!」

言うなり、スタンド……人型のそれで、手頃な近くにあつたジョースターさんの乗つてきた高級車を殴つてバラバラに破壊する。

「オーノーッ! わしのベンツが!! ってあれ?」

しかし、それは一瞬で元の形に戻る。

「ついでに、さっきの乱暴な運転でパンクしてたから直しといた」

「そ、そうか。さ、サンキュー。便利じゃの……」

殴つたものを、修復する……復元する……どうやらそんなスタンドらしい。

信じられないものを見たかのように、ぺたぺたと車を触りに行つたジョースターさんを傍目に見つ、彼は僕に訊ねる。

「花京院さんもあの緑色の……おれのとおんなじもんなんでしょう? 能力は人によつてちがうんすね」

そうだ。事情は知らないかもしれないが、彼もスタンド使いでもまったたく不思議ではない。

そりやあそうだ。さすが、やはりこれもジョースター家、ということだろうか。

いつかのデジャヴ。怒涛の展開による混乱で二の句を継げずにいると仗助君がぼつりと零す。

「……ありがとうつす。おれ、死んじまったもんは治せねーんすよ。花京院さんが緑色ので弾丸逸らしてくれたから」

「ああ……」

「……おやじ……がしんでたら……おれ……」

うつむく、少年。

やはり、親子なのだ。ふたりは。

「……よかった」

そんな感慨露知らず、当の父親のこれまたあつかんとした声が聞こえてきた。

「なー、息子よ！ わし、腕も義手なんじやが、これも治せるんか？」

「無くなつちまったもんも無理だつての。材料がなきや元に戻せねーよ。腕の切れ端、もってきてくれりやできるけどよ」

「はあ!? 50年前の……しかも活火山の火口ど真ん中じゃぞ! 無理じゃろ……」

「ああ。無理だな。諦めな」

「ちよ、ちよつとまった! じゃ、じゃあ……!」

もうぬか喜び……高く舞い上がって真つ逆さまに落ちるのは勘弁願いたい。

逸る気持ちを抑えつつ、彼女の状況を説明する。

暫し考えた後、仗助君は口を開いた。

「うーん、それは……微妙つすね。脳がすでに死んじまっているとしたら……」

「そう、なのか……」

またか……と肩を落としかけた僕に、仗助君は続ける。

「でも……要はさつきも言ったもことになる『材料』……花京院さんのカノジヨさんの場合、脳の細胞つすかね? 細かいことは医者じゃねーんでよくわかんねーすけど。それにあたるものさえあれば周囲に合わせて『元に戻す』ことは……可能と思うっすけど」

「……『材料』……?」

そのワードに、おとずれる、ひとつの光明。

「……はっ!!」

脳裏に浮かぶ。

『もう一人』の『黄金の少年』の顔。

あの予言は、やはり正しかったのだ、とも。

EPIC DAY

「状態は良好。解凍による悪影響はないようです。諸数値、冷凍前のデータと変化なし。バイタルも安定しています」

「そうですか。よかったです……」

SPW目黒支部直轄の総合病院の一室にて、受け取った医師の言葉にひとまず安堵の溜息をつく。

僕はついに『再会』を果たしていた。

ベッドの上、低温装置から解放された彼女は、なにひとつ変わらぬ姿そのまま。やっぱり、ただ、眠っているようにみえた。

「では我々は一旦これで。別室で控えていますので、終わりましたらまた御連絡ください」

ジョースターさんから連絡を受けた支部長より、子細はすべて僕達に任せるよう仰せつかっている、とのことだった。無論、術前術後の管理をはじめとしたバックアップは任せておけとも。近未来の上司の配慮に感謝しつつ退室していく医師団に礼をする。

「ありがとうございます。よろしく願います」

「成功をお祈りしています。それでは」

扉が閉まり、部屋には僕と彼女だけが残される。

ほんとうに、あのときのままだった。

時は、止まっていた。

シーツに揺蕩たゆたう綺麗な黒髪。固く睨られたままの瞼。透きとおるような白い肌にふつくらと浮かぶやわらかな桜色の唇は果実の様に瑞々しくつやめいていた。

硝子細工に手を伸ばす子どものように、薔薇色の頬にふれる。指先からあたたかさが伝わってくる。

「……」

幾星霜幾星霜、夢に見た。夢だった。夢に過ぎなかった……今日、この日まで。

ながいあいだ待ちわびた瞬間が来るかもしれないというのに、自分でも驚くほど落ち着いている。そんな気がした。まだ実感が湧かない。そのせいかもしれない。

「あ……これ？」

が、己の手をみて初めて気づく。それが震えていることに。

自らが抱える漠然とした不安に。

彼ら、仗助君とジョルノ君の能力を信じていないわけではない。しかし、やはりどこかでその思いが拭えないのか。

ほんとうに、目覚めるのか……

……成功したとしても、彼女は彼女のままなのか。

「……ッ！」

払拭するかの如くそれをぐつと握りしめる。

(僕も、あいかかわらず、弱い……)

この果てしなく長く感じられた歳月で、自分も少しは強くなつたつもりでいたが。

彼女のことが絡むといつもこうだ。

「まったく、あなたのせいですよ……仁美さん？」

返事はないとわかっていながら、つい、恨み言をこぼしてしまう。

(……そうだ。考えるな。もうすぐだ。もうすぐで、あなたに……)

「……ハッ！」

室内に響き渡るノックの音で我に返る。

次いで返事も待たずドアが開き、そこから見慣れた顔が長身を屈めて入ってくる。

「……よお」

「承太郎!! 来てくれたのか!」

ついネガティブな方向に陥りかけていた思考に歯止めをかけてくれたのは、親友の思

いがけぬ来訪だった。

「かきよーいーん！」

加えて、大きな親友の影から飛び出してくる。小さな幼い少女が。

「じよ、徐倫ちゃん!？」

「……すまん。来るといつてきかんかった」

父のその台詞に、まるでドングリを詰め込んだ小動物のように頬を膨らましつつ訴える。

「だって！ このまえパパ、かきよーいん、おうちにつれてきてくれていったのに!!

きてくれなかったんだもん！ またひとりだけずるい!!」

「ああ、そういえば……」

例のジョースターさん暗殺騒動のゴタゴタのため、結局空条家へ顔を出す、というあの約束を僕は反故にしてしまっていたのであった。

「ごめんごめん。久しぶりだね。また大きくなつて」

「えへへ……!」

「文句ならおれたちじゃなくて、じじいに言え……」

少女のお団子頭を撫でつつ、正当な主張をぼやく承太郎に訊ねる。

「奥さんも一緒に日本に？」

「ああ、シャルは今実家だ。おふくろといえる」

「あのね！ ママね、ホリイママといっしょに、じよりーんのおきもの、えらんでるの！ みつつになったおんなのこがきるんだって！」

娘がたどたどしくも父の少ない言葉を補足してくれる。

「三つ？ 着物？ ……ああ、七五三か」

自分には縁遠いそのイベントに、この時期そんなのもあつたな、と思ひ至る。

「うん！ ジャパンのきもの、とてもきれいですてきね。でも、たくさんありすぎて、ちよつとつかれちゃった……」

「ああ。着せ替え人形、御苦労なこつた。こいつの体はひとつだつてーのに何十枚も家中に広げ回して、大変なことになっている。しまいには本人ほつぽらかして、奴等だけがはしゃいでやがる始末だ」

やれやれだぜ。言外にそういうかのように、帽子をかぶり直す承太郎。

ホリイさんとシャーリーンさん。女性同士、色とりどり華やかな反物に囲まれて、あれやこれやと楽し気な様子がありありと思ひ浮かぶ。

「ふふ。それは、非常にいいことだね」

談笑していたら再び扉が開く。と同時に今度は明るい声が飛び込んでくる。

「よう！ わしらも来たぞ！」

「うす！ どうもつす」

ジョースターさんが、その息子……待ち人その一を連れてきてくれたようだ。

「やあ、仗助君。わざわざすまないね」

「いえいえ。東京観光できて、おれ的にはラッキーって感じなんで」

非常に彼らしい。そんなふうには思わせないナチュラルな気遣いに少しばかり気分が軽くなる。

「……ジョセフグランパーっ！」

「おうおう！ 徐倫ちゃん！ 今日も可愛いもう！」

「グランパ、おひげがくすくすいいー」

隣では飛びついてくる曾孫の身体を受け止め、抱擁と頬ずりをする……そんなご満悦な様子の翁。

「……」

そこに注がれる、それを儂く吹き飛ばすかのように向けられる無言の圧力と刺すような視線。

「はっ！ じ、承太郎ッ!! え、ええとね、あのね……」

どうやら例の件、釈明をまだ彼には済ましていかなかったようだ。相も変わらず辛辣な孫は取り繕おうとする祖父を厳かに突き放す。

「おれは知らん……が、これだけはいつておく。

もちろん、おれは全面的におばあちゃんの味方をする。以上だ」

「ぐうっ！」

「あれ？ どーしたの？ グランパ、ないてるの？ じよりーんのハンカチかしてあげよっか？」

「ううっ……！！ わしの天使……！！」

「グランパ、いたいー」

「よお。空条承太郎、だ」

「ち、ちわす。東方仗助っす……」

失意の祖父をそのまま放置しつつ、承太郎はその威圧感に圧倒されきみな仗助君に声をかける。

「おまえの、……甥だ」

「……まじすか」

そういえば戸籍上はそうなるのか……奇妙な人間関係に困惑していたら、またも勢いよくドアが開き陽気な声が響く。

「よーお！ ひっさびさー！ お待ちかね！ 連れてきたぜえ！」

「おー！ ポルナレフ！」

「よっ！ ジョースターさん！ まだ生きてたんだな！ へへ……」

「つたく……口の減らん！ おまえも元気そうでなにより、じゃ」

やはり相も変わらぬ調子の男。

その傍らには、もうすっかりあの黄金の髪が馴染んだ少年の姿があった。

「こんにちは、花京院さん」

「やあ、ジオルノ君。遠くまですまないね」

「いえ。言ったでしょう？ 別に貴方のためではない。借りはさっさと返したい主義なだけだ」と

「ふっ！ そうだったね」

「こちらまあいかわらず、のようだ。」

「……」

そんなジオルノ君をじつと見る承太郎。

「……なんでしようか？」

「……ジオルノ、だったな。おまえの父親を、おれは……」

「ああ。それ以上言わなくてかまいません。問題ない。」

「ぼくはぼく……だ、そうなので。ね」

「……そうか」

そして、こちららに向けて言う。

「ふん……。花京院、てめーの言ってたことは本当らしいな」

「……だろう？」

「はっ！」

そこで何かに気づく翁。

「どうしたー？ ジョースターさん？」

「そ、そうか。ジョナサンじいちゃんの……ってことは、ジョルノ君、君……わしの……。いや、なんでもない……」

どうやら奇妙な関係には、さらに上があったようだ。

実はこれにとどまらない、さらなる奇跡のような縁、がこの場を集結しつつあるわけれども。

開け放たれたままのドアから次に顔をのぞかせたのはこのひとだった。

「やあ！ まにあつたか！」

「アヴドウルさん！」

「えへっ！ ぼくもいるよ！」

……いや、このひとたち、だった。

「ち、千那！ ついてきたのか!？」

「ほくだけじゃあないよ！ ほら！」

「ワン（おれ様の鼻を誤魔化そうだなんて100年はええぜ）！」

「ウオン！」

そろつて吠える、二匹の獣に慌てる保護者、アヴドウルさん。

「い、イギーにアセナまでッ！ こ、ここ病院だぞッ！」

「バフ（かてーこというんじゃねーよ、アヴドウル！ いっつもてめーはよ）！」

「千那！ こら！ ダメじゃあないか！ 連れてきたら！」

「えー、だつて、とうとう！ なんでしょ？ イギーが超行きたがつてるから、なんとかしてやつてくれてアセナが……」

「ガアウ（う、うるせー！ 言つてねえよ！ ばーかばーか!!）」

続けて少女はこちらにむけてにやにやと言う。

「それに気になるじゃん。ちゃんと見届ける義務があると思うんだよね。占った身としてはき。あんなにも（変態的に）愛する彼女が目覚めたとき、花京院がどんな反応するのかき……ふふ」

「ぐっ……。よ、余計なお世話だ……」

「おいおい、だれだよ？ この娘。かわいーじゃん！」

そこへ乱入してくるポルナレフ。

「えへっ！　かわいいーだつて！　貴方、見る目あるねっ！」

「へへ！　だろー！　オレ、そこには自信あんだよね」

早くも意気投合したようだ。

「で、君は……？」

その問いに応え、改めて少女は元氣よく自己紹介をする。

「初めまして！　この度アヴ様に弟子入りすることになりました。占い師見習い氷室千那、17歳です。よろしく！　住む所もお店のお隣に無事決まりました。ほんとうはアヴ様と一緒に住みたかったのに、それはダメだつて……」

「……わーっ！」

「「「な、なにいつ!」「」」

一同に衝撃走る。慌てて少女の口を塞ぐ彼に向け、続けざまに仲間たちから冷ややかな視線が贈られる。

「アヴドウル、おまえ、未成年をそんな名目でかどわかして……」

「犯罪だろ。常識的に考えて……」

「ロリコン占い師、爆誕……ですね」

「安心しろ、留置場の居心地は意外と悪くない」

「ノーっ！　ちがーうっ！」

「しかし、ずいぶん集まったもんじやの……」

「……部屋がせめえ」

そりやそうだ。特別性の個室とはいえ、すでに総勢10名(+2匹)……狭いに決まっている。

「あの……もう始めてはいけませんか?」

控えめに、ジヨルノ君……この場でもしかしたら最もしっかりしているかもしれない少年(年齢9歳)が手を挙げる。

「い、いや、もう少し待ってほしい。肝心の身内が……」

僕が口を開きかけた、そのときだった。

「すまん! 花京院、遅くなった!」

息せき切って一人の男性が駆けこんでくる。

「義経さん!」

「おお! 義経兄ちゃん!!」

そう。もちろん僕はこのひとも報告をしていた。

「本日は妹の為に申し訳ありません。俺が家族代表で見届けさせていただきます。宜しくお願ひします」

皆の方に向き直り、深々と頭を下げる。

その真摯な様子を見た途端、様子がおかしくなった人物が約一名……

「し、しし、ししし……しししし……！」

目を見開き、ありえないものでも見たかのように固まるそのひとに怪訝な顔で孫と共に声をかける。

「じじい……？」

「ジョースターさん……？」

「……シーザあーああーああ!?!」

「「え?!」」

「ゆ、ゆうれい? 地縛霊か!? な、なんまいだー!」

「はあ!?!」

「な、なんじゃ? そのまつ黒い髪は! 死んじまったシヨックでか? それともあの世ではそういう規則でもあるんか……? ええい、すまん! とにかくわしが悪かった! 迷わず成仏してくれ!」

「お、落ち着いてください! ちがいます! 俺、死んだことないです! ほ、ほら、足

もありませんつて!」

「こ、このひとは仁美さんのお兄さんですよ!　　とうか……」

混乱の中、たしかに僕はこの耳で聞いた。それをどうにか彼に確認する。

「じ、ジョースターさん、今、『シーザー』つて……貴方、『シーザー』さんのことご存知なんですか?!」

「ご存知もなんも、シーザーはわしの親友じゃ。花京院、おまえさんには何回か話したこ
とあるじゃろう?」

「じ、じゃあ、あのジョースターさんの『失くしてしまった親友』つて……?」

「ああ。シーザー・A・ツェペリ……まさにそのひと、だ」

義経さんはそれを受け、僕と顔を見合わせ、頷く。

そして、しつかりと、たしかめるようにジョースターさんに伝えた。

「……『シーザー』は、俺とこの妹の、祖父です」

「な、なんだと!?　君とこの娘の!?!」

「ということとは、ま、まさか……」

「はい。死んだと思われていたようですが、祖父は生きています。

……生きて、いるんです」

「し、シーザーが!?　ああ、ほ、本当に、ほんとうなのか……?!」

「ええ。本当です」

「あ、会えるのか!? 会わせて、もらえるだろうか?」

「もちろんです。あ、しかし……その、実は記憶が……」

その経緯を簡単に説明する義経さん。

「記憶が?!」

ああ、それで、か……。

生きているなら、わしに知らせてくれぬわけがないものな……」

納得したように呟くジョースターさんに、言いにくそうに、続ける。

「貴方のことを……祖父は、わからないかもしれません」

「……かまわん。そんなもの、かまうものか!」

会わせてくれ、会わせて、ほしい……! あいつに……!」

「……はい! こちらこそ、是非、お願いします!」

「……ッ! シーザー……」

「おやじ……」

「もう、グランパはほんとうになきむしさんなのね。はい、ハンカチ」

「よし、では……今度こそ、よろしいでしょうか？」

「ああ、頼むよ」

僕がそういうと少年たちが一歩前に出る。

ふたりは目を見合わせると、互いに向けていう。

「君の能力については聞いています」

「おれも聞いてるっす」

「……すげーっすね！」

「……素晴らしい能力だ」

ふたつの声が綺麗にユニゾンする。

「……ふっ！」

「よかった。君となら、なんだって治せそうだ」

「ああ……同感だ！」

どうやらこちらも息びったり、のようだ。

「では、安心したところで、はじめるとしましょう、仗助君！」

「おお！ 行くぜ、ジョルノ！」

(……ああ……)

いよいよ来るのだ。この時が。

期待と不安の入り混じった高揚で、心臓が激しく脈打つ。

祈るような気持ちで見守る。

「ぼくが『創り』……!」

「……おれが『戻す』ツ!!」

ジヨルノ君と仗助君がスタンド幽波紋を出し、彼女に向けて拳を放つ。

「……無駄ア／ドラーアツ!!」

瞬間、彼女の体がまぶしい輝きに包まれる。

「……よっし!」

「……終わりました」

(は、早い……)

すぐに光は消え、見た目には大きな変化はない……というのは大きな間違いだった。

あの日失われた彼女の左腕が元に戻っている。

「おそらく、もうすぐ目覚めると思いますが。左手も創っておきました」

「ついでに、骨折とか火傷のあととかそのほかのちっちゃー傷とかもぜんぶ治しときましたんで。あ、余計だったっすか？」

「いい、いや、そんなことはないよ」

淡々と語る彼らにあっけにとられつつ返答する。

その刹那、だった。

「ん……」

彼女のまぶたが、ぴくり、と震え、その眼が光を映し出した。

「あ……、花京院くん……」

動き出したのだ。彼女の時が。

実に7年ぶりのことだった。

「どうしたの？ 花京院くん」

ゆつくりと身体を起こし、二、三回瞬きをすると、小首をかしげ、ふわつとほほえむ。碧色の澄んだ瞳がこちらをみつめていた。

「ひ、とみ、さ……」

ことばがすぐにでなかった。

（あ、あ……おきた……起きたんだ、ほんとうに……ああ……！ ……いや、でも……）
なにも変わっていないのか？ 記憶は？

そんなふうには戸惑っていた。

「花京院くん？ ええと……花京院くん、だよね？ あれ……？」

しかし、その一瞬の隙に僕の不安や感慨をぶつとばすようなことをこのひとはいいだした。

「ちよつとだけ、老けた……？」

「……はあ?!」

「い、いや、だって、ほら！ あのマリーアントワネットはフランス革命の時、逃亡の際に一晩でブロンドの髪が白髪になっちゃったりしたんだよ。そんな風にストレスって

人間の身体をびっくりするくらい変えちゃうって……決戦の影響でそんなことになっちゃったとかじゃ……？」

「……。そんなわけ、ないでしょう……」

「ブツ！」

「ぶはあー！」

「ぶっ！ あははは……!!」

「くっ……くっくっくっ！ はっはっは!!」

どうやら全員、そこで我慢の臨界点に到達したようだ。場が爆笑の渦に包まれる。

「み、皆……!!……！ じよ、承太郎まで……!!……!?!」

こいつがこんなふうにならば、あの旅以来、久しぶりじゃあないだろうか。

「こりゃあいい。安心したぜ。」

このボケ女、そのまんま……ボケたまんまだ」

破顔一笑。おもむろに立ち上がると、自分の娘を抱え上げながら言う。

「よし。全員、帰るぞ」

「はっ！」

「そーじゃな」

「そうだな」

驚きの声を上げる僕をよそに、頷きながらジョースターさんとアヴドウルさんが呼応する。

「えー？」

「今からがいいところ……」

「……うるせえ。いいから行くぞ」

「いつてえーッ！」

「は、はーいッ！」

承太郎は上がりかけた抗議の声を電柱頭の尻にかましたローキックで文字通り一蹴したのち、僕の方を首だけで振り返る。

「……あんま、無理せんな。で、無理すんな、おまえも。またあとでな」

「……ああ。ありがとう、承太郎」

「あー！ 仗助君、ジョルノ君!! 本当になんていったらいいか……ありがとう。また、あらためてお礼をさせてほしい」

「いいつすよ、そんなの。へへ！ よかつたつすね、花京院さん。じゃあ、失礼するつす」

「ふっ、これで貸し借りなし、ですね。では」

ぞろぞろと出ていく皆。その中に、このひとの姿もあつた。

「ちよ、ちよつと！ よ、義経さんまで?!」

「いーんだよ。俺は親父たちに連絡したり医者に今後のことを頼んだりで忙しいんだ」
慌てて引き留めるも、後ろ手を振りながら、そんなことをいう。

「……おまえに、まかせるよ。花京院」

「義経さん……」

そうして、瞬く間に嵐は去つた。

ふたりきり。

静けさを取り戻した部屋は急に広くなったような気がした。

「あれ……? お兄ちゃん? なんでいるの?」

「とうか……承太郎君? みんなも、老けて……?」

彼女は相変わらず見当違いな……いや、よく考えたら至極当然の疑問を浮かべながら、怪訝な表情のまま皆が出て行つたドアを呆然と見遣つていた。

その横顔を盗み見つつ、一体何から説明したものやら、頭を抱える。

いろいろ考えていたはずなのに、さっきの一言ですべてぶっとんでしまった。なんてことだ。

というか正直に白状すると、本当にひさしぶりにすきなひとを目の前にして、僕は緊張……しているのかもしれない。

『ほんもの』はこんなにもちがうのか。僕は思い知る。

正視なんてとでもできやしない。彼女のながいまつげが揺れる。そのたび、たったのそれだけで心が躍るように飛び跳ねる。

情けなくも僕がうるさく鳴り響く鼓動に邪魔され躊躇っているうちに、彼女が先に口を開いた。

「ごめんね。なんだか、すごくながい夢をみてたみたいで、まだ頭がぼんやりしてて……。ええと……あれ……そもそも、私なんで……？　ここは……？　あ……！　そ、

そうだ。私……！　あ、あれから、どうなったの!？」

どうやら眠る前の状況をようやく思い出したらしい。

ひとつ深呼吸をし、覚悟を決める。

「……驚かないで、聞いてください。

仁美さん、あなたは……眠っていたんです。7年間」

「えっ!？」

「ここは、日本のSPW財団の病院です。あのとき、DIOの策略によってあなたは高圧電流に撃たれ、心臓が停止して……その影響で、脳の機能が失われ、眠りについた。そして、命をつなぎとめるため、先程まで冷凍保存されていたんです」

息を呑む彼女に言葉を探しながら少しづつ伝える。

「先日、ようやく仗助君とジョルノ君……さっきの彼ら、『治す』能力を持つスタンド使いがみつかつて、やっと、今、めざめた……と、そういうわけです。急にこんな……信じられないとは、思いますが……」

「……そっかあ。そうなんだ。7年……か」

呟き、うつむく彼女。

(シヨック、だよな。いきなり7年も経っているだの、心臓停止だの冷凍保存だの……そりゃあ……)

くそ！ もっと……早く……！)

不甲斐ない自分に憤っていると、次の瞬間、彼女はバツと顔をあげると矢継ぎ早に僕に問うた。

「で、そんなことより！ DIOは？ ほ……、ホリイさんは!? 間に合ったの!? ちゃんと……、だいじょうぶだったの……?」

「そ、そんなことって……」

あまりの言い草に思わず声を失いながらも、彼女の真剣なまなざしに押され、答える。
「はあ……、だいじょうぶ。安心してください。」

DIOは、消滅しました。

ホリイさんも、ちゃんと無事でしたから」

「そ、そうなんだ！」

……よかった！ よかったあ……！」

ほんのすこしの涙と満面の笑みをうかべながら、心底ほっとした表情をみせる。

「……」

(……変わらない、な。)

このひとは本当に、すこしも、変わっていない)

それを確信し、安堵する。……と同時に、ある感情がふつふつとわきあがってくる。

「……よかった……ですか？」

「はっ!! あ、あの……」

そんな僕の様子に気がついたらしい。今度は彼女が、焦りの色を浮かべだす。

「どうして、あんなことをしたんですか？」

あんな……、手紙までご丁寧に、残して……」

「そ、それは……。ほ、ほら、ただ、あれは、その……なにかあったときに、つて……」
しどろもどろ造られていく彼女の言い訳をぴしやりと遮る。

「誤魔化さなくていいです。すべて、ききました。」

セシリアの真の能力『二世一代の予知夢』のこと。

そして……あなたの一族に伝わる、『血の運命』^{さだめ}のことも」

「ッ!？」

「わかっていた……というのか？」

わかっけていて、あんなことを……？

自分の命より、僕の……？」

「……」

溢れ出したそれに押され、往生際悪く黙ったまま視線を逸らす彼女を僕はベッド後ろの壁と両腕で囲い込む。

「……どうして!？」

僕が……ずっと、どんな……きもちで……ッ!」

「……っ!……ごめん!……ごめんね……。」

でも……、私は……それでも……」

零れだす。弱々しく。でも、強く。

「……だって、しょうがないじゃない。私にとって……」

私のより……あなたの方が、どう考えてもだいじだったんだから」

そうしてまっすぐに僕をみつめる。あきれてしまうくらいに清々しく、晴れやかに。気高く美しく凛とした姿で。

「きつと、私はこのために生まれたんだって。

だから……それで、本望だった」

「っ!! そんなの! 僕だっておなじだ!!」

あなたを失ってまで、生きていたくなんて、ない!!」

吐露する。心からの叫びを。

「……ひどい、ひどだ。ほんとうに。」

逆だったかどうか、とか、ちよつとは考えてみてくださいよ……」

「ぎゃ、く……っ……」

しばしの沈黙のあと、笑顔とともに彼女の目からとめどなくあふれた雫が頬を伝い落ちる。

「あは、……ほんとだ……。ひどいね。」

……ほんとうに……ひどい……ね……私……」

「……まったくだ。やっと、わかったか。

僕は……とても、怒っているんですからね」

「……そうだよね。

あの……、どうしたら、ゆるしてくれ……」

「ゆるしません」

「うっ……」

「……といたいところですが『あること』を約束してくれるなら……とくべつに、ゆるしてあげてもいいかな。僕、今日とても機嫌がいいんですよ。なんせ、僕の積年のねがいが叶った日、なもので」

「ね、がい……？ ……っ！」

感情のまま、つよく彼女を抱きしめる。

「……ずっと、さびしかった。ただ、ひたすら……」

永遠かに思われるような黒い闇。色彩の無い日々。

「あなたに、逢いたかった。

あなたを、みつめたかった。

あなたの、こえがききたかった。

あなたに、ふれたかった。

あなたの、ぬくもりを感じたかった。

あなたを、抱きしめたかった。

……そして、とても……どうしても、いいたいことが、あつて……」

ながいながいあいだ、ずっと。

ただただ、それだけ。

「それが、今日は……」

こうして、また、逢えて……

みつめたら、みつめかえしてくれて……

笑顔や、泣き顔を、くれて……

あたたかい……なにもかわらない、あなたが、ここに……

この腕の中に、いる……。

やっと、伝えることが、できる……」

五感すべてでその存在を実感する。かみしめる。

「……最高だ。」

やっと、叶うんだ……」

「花京院くん……」

「……だから、しかたがないので、ゆるしてあげます。」

ただし、ひとつ、約束してください
「約束……?」

こぼれてしまいそうにうるんだ瞳。

それをしつかりととらえて、告げる。

「……」生僕のそばにいて。

もう、はなれないで。

いや、はなさない……ぜったいに」

「……僕と、結婚してください」

あいのうた（前）

「へい、らっしやい！」

カラカラと引き戸を開けて暖簾をくぐると威勢のいい掛け声に迎えられる。夕暮時の居酒屋はがやがやと仕事帰りの人間でごった返していた。店内をぐるり見回し、僕は目当ての人物達をみつめる。

「おーい！ 花京院！ こっちこっち!!」

同時に飛んできたその声に手を上げて応える。言われずとも一発でわかったが。そり立つ電柱頭はこういうとき非常に良い目印である。

「やあ、承太郎、ポルナレフ。すまん、遅くなった」

「いや、むしろ早かったな。先にやってるぞ」

挨拶代わりにジョッキを掲げる承太郎。言う通りその中身は既に空っぽに近かった。「ヤキトリうっめー！ くーっ！ なんでこんなにビールに合うんだ！ 日本に来たらこれを食べんと始まらない！ うん！」

その隣でポルナレフも口周りに白ひげのような泡をつけて大層ご満悦な様子だ。促され席に腰を落ち着けつつ、ふたりに訊ねる。

「あれから皆の様子は どうだい？」

「ああ。ガキどもはうちの実家だ」と、承太郎。ポルナレフがその子細を補足する。

「男同士、すっかり意気投合したみてーだ。仗助の持つてきたゲーム、エフメガ……だっけ？ ジョルノのやつ静かにめっちゃツボったみたいでな。負けん気つえーのなんの！ 超盛り上がってたぜ」

ありありと容易に想像できてしまうその様子に思わず笑みを浮かべていると、さらなる追加情報もたらされる。

「ちなみに明日はジョースターさんの引率でねずみの国に行くらしいぜ」

すると僕の向かい側で承太郎もぼそりと呟く。

「……ふん、ちつとは父親らしいこともさせんな」

「そうか……」

楽しんでほしい。めいっばい。ようやく始まることのできた父と子にも、長い間苛烈な環境で強く生き抜いてきた大人びた少年にも。

「ああ、そうだな。それがいい」

心から頷きながら、僕はその人物が場にいらないことに気づく。

「あれ？ でもそのジョースターさんは？」

「……説教中だ。ロリコン魔術師が」

「なるほど……」

「説得力ねえなあ、その二つ名……」

とはいえ、お題目としてはそんなことを言いつつもあの往年の名コンビのこと。罵り合いつつ、あちらはあちらで杯酒解怨……結局は一献傾けて水に流しているのだろうということは想像にたやすいけれども。

「で、花京院よお、おまえこそゾーだつたんだよ？　へへ、しつかり射止めてきたかあ？　チャリオーツ！　……なんちて！」

どうやらすでにほろ酔い状態らしい。ポルナレフが串で己がスタンドの突きを真似しつっおどける。

「……それが、じつは……」

一方、僕はそれと対照的に、徐々に冷静さを取り戻すにつれ次第に重くなってきた口をどうにか開く。

「花京院、おまえ……」

「いきなり、それかよ……」

返ってきたのは息のぴったり合った呆れ果てた声。半ば予想通りのそれに僕は改めて打ちのめされる。

「皆までいな！　いまや僕も自分でも、よくわかつて……でも、でも！　仕方がな

いだろう！ 抑えられなかったんだ!!」

「……で、気がついたらプロポーズしていたってか？」

「ぐっ……!」

彼女と僕の『感動の再会』。

……その顛末、だが……

「……僕と、結婚してください」

「ッ!? け、けっこ……へっ!? えっ!? ええっ!? あ、え?! け、けっ……!?! ふえ

えっ!」

彼女の狼狽っぷりは、そりやあもう、すごかった。

瞬間湯沸かし器、例えるならばまさにあれだ。煙が出そうな勢いで首から上が耳たぶまで余すところなく熟したトマトの如く真っ赤になったかと思うと、そのまま一点をみつめて硬直してしまった。口から出るのはうわごとのように発されたそれらで、もはや言葉になどなつてはいない声だけだった。

そんな彼女を現世に呼び戻すかのようにコンコン、という音が実内に響き渡る。

「お、おほん……、失礼します。おほん、無事意識が戻られたと伺いました。非常ツツに申し訳ないのですが、異常がないか簡単な検査をさせて下さい」

咳ばらいを繰り返しながら、ばつの悪そうな表情で入ってきたノツクの主は沢山の医療機器をひっさげた医師と看護師だった。

「いやです。……なんて、そんなわけにはいきませんね。では仁美さん、今日のところは僕はこれで。この人たちは信頼できるお医者さんたちなので、安心してしつかり診てもらってくださいね。じゃあ、また明日」

「あ、ちよつとまつ……！」

そうして、彼女の制止もきかず僕は鼻歌まじりにスキップで病室を出た。

……出てきてしまったのだ。

有頂天。自分でも異常なくらいにテンションが上がっていた。

だってしかたがないだろう？

うれしかったんだ。本当に。

しかし己のいいたいことだけをいって満足してしまい、そのまま帰ってきてしまうと……なんて男だ。別にあのときの仕返しをしたわけではない。断じて。

彼女の戸惑いと混乱はいかばかりか。よく考えたらそうなのだ。

いきなり7年間もあなたは眠っていた、とかいわれ、挙句の果てにいきなり恋人でも

ない男から結婚を申し込まれる、という。

「こんなはずでは……ちがうんだ！ いや、そう想っていることにみじんも嘘偽りはないけれど……きちんと段階を踏む予定だったのに！」

「だから、無理すんなといっただろう」

「まあ、気持ちにはわかるけどなあ」

承太郎とポルナレフ

友人達の呆れと叱咤と憐憫を背中に一斉受けつつ僕は、行き場のない懺悔と後悔を拳に込めて壁に向けて打ち付ける。

「やっぱり僕、もう一度行ってくる」

耐え切れずおもむろに立ち上がりかけた僕を彼等はまたもそろって制す。

「よせ。今日はもうやめとけ」

「そーだぞ。ちよつとはあいつにもひとりで考える時間つてもんを与えてやらにや」

「……そうかな？ そうだよなあ。ああー！」

成す術なし。ぐらり崩れ落ちそのままテールに突っ伏し唸り声を上げる僕にポルナレフがやっぱり軽い感じ、だが真理を突く。

「つーか、べつにいいんじゃないやねー？ どーせそのうちいうことだろ。おんなじじゃん」

そして、承太郎も。

「だな。ったく、やれやれだぜ。だいたい今までに比べたら、んなもん些細な悩みだろう

が。せいぜいそれも楽しみな」

「っ！ そうか……そうだな。ほんとうに、そうだ……」

「……よかつたな、花京院」

「ああ。ありがとう。承太郎、ポルナレフ……」

ふたりが差し出す杯に、グラスを軽く合わせる。

「さ、のもーぜー！」

「ただ、あのボケ女、変に馬鹿で真面目だからな……ああ、そのあたりそっくりだな、おまえら。くくく、おもしろーことになんなきやいいな」

「や、やめてくれよ……」

承太郎の予言はよく当たる。

それもやはり昔からちつとも変わってはいなかった……

*

*

*

一睡も、できなかつた。

まあ今まで散々、私は眠っていたらしいので全く問題無いだろうけれど。そもそも体調的には何も異常を感じなかつた。むしろ調子が良いくらいだ。

「すごい、なあ……」

白い天井に向け、手のひらを掲げ、結んで、開く。

あの日、漆黒に呑み込まれ、失ってしまったはずの左腕。完全に元に戻っていて、驚いた。何の違和感も無い。

(世の中にはすごいスタンド使いさんがいたんだなあ……)

と、思いかけて、気づく。胸の疼きとともに。

(いや、ちがう。きつと、必死になって、さがして、みつけてくれたんだよね……)

「おはようございます。検査の時間ですよ」

「はい、おはようございます」

爽やかな朝にびったりな眩しい笑みを携え担当の看護師さんがドアから顔を覗かせたため、自分も挨拶を返しむくりと起き上がる。

今日も一日かけていろいろな検査が行われるらしいが、おそらくなんの問題も見つからないと思う。しかし、死にかけてずっと植物状態だったわけだし冷凍保存関係のこともある。自分で言うのもなんだが大変レアなケースであろうし、データの採取等も必要なのだろう。これでも元々一応理系の大学所属(長い休学で現在は除籍になっているかもしれないけれど)で研究員を志している身でもある。科学の進歩というものに少しで

も貢献できるなら勿論協力したい。

そして改めて自覚及び感謝をする。たくさんの人達の力のおかげで、自分が今、生かされているのだ、という事実には。

「次は、心電図をとりますね。楽にしてください」

「はい」

「こういうときいつも思うが、楽に、といわれると、逆に緊張してしまうのは何故なのか。」

「……」

とはいえ、だんだん慣れてきて、また物思いにふけてしまう。

「……きやあぁーッ!!」

「あつー！ ちよつー！ どうしたんですか!? は、波形が！ 急に！ 心拍が！ 計測不能にッー！」

「ハッ！ いや、な、ななな、なんでもないんです！ ご、ごめんなさいッー！」

「もう……落ち着いてね。はい、もう一回はじめからー」

「は、はい、すみません、看護師さん……」

また、おもいだしてしまった。

——…一生そばに…僕と、結婚…——

夢の、つづきをみているのかとおもった。

しかし、考えてしまう度、目の前が滲んできてしまう。まるで、海の底にいるみたい
に。

こんな調子では『再検査』になつてしまふのではないだろうか？

『情緒不安定』そんな理由で。

全方位、多種多様に渡る検査が終わるころには、すでに窓から西日が差し込む時間になつていた。

採血後の腕の絆創膏を撫でつつ病室に戻ると、ずっと会いたかったひとの姿があるのに気づく。

「お兄ちゃん……」

その顔を見た途端、また鼻の奥の方がツンと痛くなつてきてしまう。おもわずうつむくと、くしやりと頭を撫でられる。

「馬鹿が。皆に心配かけさせんじゃねーよ」

「…………ごめん」

「父さんと母さんは？」

「今こつちに向かっている。ぬか喜びさせちやいかんと思つて、おまえが起きてから知らせたからな」

「そうなんだ。もうすぐ、会えるんだ……」

「ああ」

兄義経と久しぶりに積もる話に花を咲かせていると、ふいにノックの音が響いた。

「はい…………っ!？」

その姿をみた瞬間、石になつてしまつたかと思つた。

「こんばんは」

「よう！ 来たぜー!!」

「おお、花京院にポルナレフ！」

昨日も思つたが『いつのまにか』どうやらすでに全員顔見知りらしい。二人を見た兄の顔が綻ぶ。

「仁美さん、どうですか？ 調子は」

「うっ！」

対極的に私はというと、彼の視線がこちらに向けられた途端、稲妻に打たれたかのよ
うな衝撃が全身を駆け巡る。どうしようもなく、眼を合わせることもすらとてもできず、
瞬時におもわず布団をかぶる。

「う、うん。だ、だいじょうぶ……」

どんな顔をしていいのか、さっぱりわからなかった。

「お、おい！ 仁美、おまえ!？」

「……いえ、お邪魔してしまいましたね。出直しましょう。また来ます」

「か、花京院!? ちよ、待て!」

制止の声と、ドアを開ける音。足音が遠ざかっていく……

「ありやまあ。照れちやってんのかねえ?」

「いや。こいつ……」

「……」

押し潰されそうな胸を抱えつつ、そろそろと顔を出して様子を窺う。

「……にやッ!？」

瞬間、ガツン、と頭に衝撃が走る。

「いった……! な、なにするの?! おにい……っ、兄さん!」

何年かぶりに受けた、兄からの鉄拳制裁。我が家伝統『戒めの拳骨』だ。

「それはこっちの台詞だ。なさけねえ……」

ずきずきと痛む頭を押さえながら衝撃に星が飛び出たあとの目を白黒させている私を睨みつける。

「これ、覚えてるよな？」

「そ、それは！」

兄が取り出したのは一通の封筒だった。

あのととき、私が家族に宛てた『手紙』。

「笑い飛ばしてやろうと思って、持ってきた」

いいつつ、私の傍にそれを投げ落とす。

「『にているけれど、ちがう』か。まったく、その通りだな」

そして、言い放つ。

「仁美、おまえなんかとは……花京院あいつは全然ちがうよ」

「……ッ！」

「あつ！ おい！ 義経兄ちゃん!!」

そのまま勢いよくドアを開け、出ていく兄。

「……」

奥歯を噛みしめたまま言葉を発せない私にこのひとの声が届く。

「やれやれ。ほんとの兄ちゃんは厳しいねえ」

「……ポルナレフ兄さん」

「つたく、実は可愛くてしかたねーくせにな。ほんつと過保護」

「え？」

「いや、なんでも。おまえとの久々の再会をゆつくり祝いたかつたんだが……しやーねーからオレは手のかかるダチ達んどこに行くわ。おまえはちつとのんびりしな」

「……はい」

「ただ……『にーちゃん代理』からも、ひとつだけな」

私の頭をぼんぼんと叩きつつ、微笑む。

「我慢しないでいーんだぞ？」

おまえに『ぜつたいにいえない』ことなんか、もう、なんもねーんだから」

「あ……」

「じゃーなっ」

そうして背中越しに手を振りながら部屋を出る、もうひとりの『兄さん』。ゆつくりと扉が閉まる。

「……っ！」

ひとりきり。

「……つく、ひつく……」

はばかりることなくなったそれは、次から次へとあふれて、とまることはなかった。

翌日。私があんな態度をとったにもかかわらず、彼はまたもや来てくれた。

「仁美さん、おは……」

「うっ！ あ、あの！ わ、私ッ……！ ご、ごめん!!」

「あっ！」

昨日も考えて、覚悟は決めた。

……つもりだったが、本人を目の前になると駄目だった。

コントロール不能な心と体を抱えたまま、夢中で駆け出し辿り着いた屋上に逃げ込む。

「はあ……」

いい天気だった。私のぐしゃぐしゃな心とは裏腹に。たくさん洗濯物やシーツが風にはためいていて、とても気持ちよさそうだ。

溜息をつきながら、よろよろとどうにか見つけた端っこのベンチに腰掛ける。

(ああ、もう……。なにやっつてんだろう、私……)

自己嫌悪で窒息してしまいそうになりつつ、膝を抱えてうずくまっていた。そんな私に背後から厳かなる呆れ声が投げられる。

「……なにやっつてんだ。おまえは」

「はっ?!」 じよ、「承太郎君?!」

まったく気配を感じなかった。相変わらずだ。

「よお。久々だな。おまえと話すのも」

「うん。ひさしぶり……。って、私の感覚的にはたったの3日ぶりなんだけどね」

「ああ。そうだったな」

おそるおそる、気になって仕方がないことを聞く。

「あの、か、花京院くんは……?」

「帰らせた。今は話したくねーんだろ? おまえ」

人ひとり分空けた隣に腰掛けつつ、今度は承太郎君が黙り込む私に訊ねる。

「で? どうしたよ? なに逃げてんだ?」

「なんでだろう……。ね?」

「チツ! いいじゃねえか。惚れた男に迫られてんだから。何を拒んでんだよ……。わけがわからん」

「……」

「……」

永遠かに思われる沈黙に音を上げるように、根負けした私はとうとう『自白』する。

「……花京院くんって、かつこいいいよね」

「あん？ まあ、そうだろうな」

「外見もだけど、中身は、もつと……」

「……惚気てんのか？ おまえ」

「モテるよね。ぜったい」

「ああ。実際、激しくモテていた。

高校の卒業式では女子の集団から華麗に逃亡していたな。ハイエロフロントまでつかって」

「ぐっ！ そうだよ、ね……」

「自分で聞いといてへこむな。ほんと、なんだってんだよ、おまえは……」

「……」

「……」

再び訪れる長い沈黙の果て、ぽつり零す。

「……承太郎君、『吊り橋効果』って、知ってる？」

「はあ？」

「心理学の、危機を乗り越えた男女の間には……つてやつ」

「……ああ。知っている」

「でも、たいてい、そんなの……思い込みや、勘違い……なんだよ？ そんなので、私は、彼を……」

握りしめた小刻みに震える拳に一粒の涙が落ちる。

その瞬間だった。

「……黙ってきいてりゃあ、いい加減にしろよ」

「え……？」

「くだんねーこと、グダグダと……。おまえいつからそんな、うつとーしい女になったよ

？ ああ？」

「……ッ！」

静かに落ちた雷にぎくりと心臓が跳ねる。

「花京院は7年間、本当にずつと……あきれるくらい、おまえのことばつか考えていたぜ。ありがたく思いな。おれたちは一応、おまえのいうとおり、ちゃんと見張つててやったからな」

「あ……」

「そばでみていたおれたちには、よくわかる。よく知っている。だから、なんもしらねーおまえに、あいつの想いをそんな風にいわれりや……おれも、腹が立つつてもんだぜ」
帽子のツバの下、窘めるように真っ直ぐにこちらを見据える、蒼き双眼。

「くっ……わ、私だつて！ 好きでなんもしらねーわけじゃあ……」

「そりやそうだがな。それ以前の問題だ。ひとのことばつか、あーだこーだいいやがつて……じゃあ、じぶんはどうだつてんだよ？ ああ？」

「じ、ぶんの……？」

「おまえもあの馬鹿に、起き抜けにいろいろぶつとんだこといわれて混乱してるんだろーからな……ちつとは同情するが、しかし……」

それが、ふつとゆるむ。

「……だいなもん、見失つてんじゃねーよ。てめえの命も惜しくねえつてくらい、おまえ、あいつに惚れてんじゃあねえのかよ？」

「あ……」

「よくかんがえろ、馬鹿が……じゃあな」

「……はあ……」

目を閉じてから、どのくらいの時間が経ったのだろうか？

静寂の中、冴え切った空気を吸い込んで、吐く。

まどろみすら、今夜もどうやら訪れてはくれなかったようだ。

宵闇の中、ぐるぐると、あたまをめぐる。

反芻する。

皆がくれた、ことば。

——おまえはあいつとは、全然ちがうよ——

——だいじなもん、見失ってんじやねーよ——

——ぜったいに、いえないことなんて——

(……私の、きもち、か……)

サイドテーブルの引き出しから取り出し、握りしめる。

兄のもつてきてくれた『手紙』。

……想い出す。『あのとぎ』を。

そして、彼がくれた、たくさんの……

「……」

ゆつくりと、目を開ける。

起き上がり、カーテンを開き、窓の外を臨む。

遙か山際がだんだんと白くなってゆき、紫がかつた雲が細くたなびいていた。

夜が、明けていく。

*

*

*

「……いない!？」

しばらくは、そっとしておけ。

皆そろって、口々にそう言われた。

しかし、やっぱりまたここにきてしまった。足が勝手に……いや、嘘だ。

彼女の混乱が落ち着くまで少し距離を置く。確かに、その方がいいのかもしれない。

そう頭では理解しようとした。が、無理だった。

逢いたかった。どうしても。

今日も面会開始時間きつかりに病院に突入した僕。逸る気持ちを抑えきれず、今なら競歩で金メダルが獲れるのではないか、そう錯覚するほどのスピードで彼女の病室に向かう。

ナースステーションを横切ろうとした時、そんな僕を見咎めたのか看護師に呼び止められた。

「病院内は走らない」そう怒られたら、「走つてはいない」と答えよう。そんな一休さんのトンチめいたことを呑気にも考えていた報いだろうか。

僕の耳に飛び込んだきたのは「彼女ならいませんよ」そんな思いもよらぬ、瞬時に背筋が凍りつくような一言だった。

耳を疑いつつも、もはや我慢などできるわけがない。彼女の病室に駆け込む。

すると、ベッドはもぬけの殻。唯一目に入ったのは屑籠の横にぼつんと佇む、くしゃりと潰され丸まったメモだけだった。

拾い上げ、恐る恐るそれを開くと、さらにとんでもない一文が目に入りサツと血の気が引く。

『探さないでください』

すぐさま皆に連絡するも、空振りばかりだった。

「はあ？ 消えた？」

「そ、そつちに行つてないか!? 承太郎ツツ!!」

「来てねえよ。まあ、一応探してみても……ほつといても、そのうち戻つてくんだろ。つーか、花京院おまえ、またあいつんとこ行つたのかよ。ちつとは落ち着け」

承太郎だけではなく、他の仲間も一様にそんな反応だった。彼女の御両親にも電話してみたが……

「こつちには来ていないけれど……」

「そ、そうですか。いったいどこへ……」

「だいじょうぶよ。心配いらないわ。どうせあの娘のことだから、またくだらないことでも気にしてるんでしょ。落ち着いて、待つていて。なにかわかればすぐ連絡するから」

「お、お願いします」

「ごめんなさいね。まったく、本当に馬鹿な娘なんだから」

今度は皆そろつて、「落ち着け」である。

「……落ち着いてなど、いられるかっ!!」

逆に聞きたい。この事態を受けて何故そのように心穏やかでいられるのか。
(ええい！)

しかし、闇雲に探しても見つかるわけもない。必死に心当たりを模索する。

「あ……」

すると、たったひとつだけ、僕の頭の片隅にその可能性が浮かぶ。

「まさか……！」

*

*

*

新幹線、高速で流れていく車窓の景色をぼんやりと見つめる。

(せめて誰かに直接言つてからの方がよかつたかな？ でも、止められるだろうし……)
だが、どうしても行かなければいけないのだ。あの場所に。そして、一刻も早く決着をつけなければならぬ。誰にも頼るわけにはいかない。これは私自身がどうにかしなければ意味のないことだった。

「あ……」

手が震える。嫌な鼓動が胸をつく。

それでも……

もう、逃げたくなかった。

（変わってないなあ……）

いくつもの在来線を乗り継ぎ、最寄りの駅に到着する。

もう二度と、この地に足を踏み入れることは叶わないかもしれない。

そんなふうに思いながら自分が逃げ出すようにここを発つて以来、実際かなりの年月が経つてしまった。にもかかわらず、記憶に刻み込まれている風景とあまり相違ない……変わらぬ街並みを眺めながら、目的地に向けて噛みしめるように歩を進める。

（……寒い……）

二重の意味でぶるりと身を縮こませる。本日、この地域は快晴……も、とつても早めの、今季最大の真冬並みの寒波到来。新幹線内で見た流れるニュースにて、そんな寒がりにとっての超絶悲報を受け嫌な予感はしていたが。

沿岸部のこの街。行く手を阻む、潮風を含んだ冷たい木枯らしに立ち向かいつつ、たどり着いた目的地……『病院』の前。

まだ、ここに『あの娘』がいるかなんてわからない。いや、普通に考えて、いない確率の方が高いだろう。しかし、だからこそ、ある意味これは賭けだ、と思っていた。

今日、もしも自分が彼女達に会うことができたなら。そうしたら……

「……セシリア、お願い」

相棒を呼び出し、頼む。

「……あれ？」

だけど予想に反して飛び立った彼女が羽根を休めたのはほんのすぐ近くで……

「あ、あんた、もしかして……!?!」

「え……?」

驚いたように自分を呼び止める声に振り返り目を見張る。

「あ……!」

「……ひさしぶり」

そこには、私が会わなければならない、『ひとりめ』の女性が立っていた。

——なにを、しにきたの? ——

思い出す。

傷付いた友人のため、露わにした……ぶつけられたあの感情。

冷たい、怒りに満ちた、あの眼差し。

「ここで待つていて」そういわれて、病院内のロビーで独り待つ。
「……お待たせ」

永遠かのように感じられた十数分ののち、かけられた声に顔をあげる。
すると友人に押される車椅子に座る、あの娘の姿があつた。

私があのととき『護れなかつた』あの娘の。

(……後遺……症……)

目の当たりにすると、また、ずしりとそのあまりの重さに押しつぶされそうになる。
躊躇っている間に、彼女の方に先を越されてしまう。

「ひさしづり」

「ひ、ひさしづり……」

目的を果たすべく、必死に振り払うようにどうにか言葉を発する。
「ずっと、あの、会いにこなくちやって、思つてて……」

私、貴女に、その、あやま……」

「……そうよ！」

「……っ！」

しかし、それは言い終えることができないまま、遮られる。

「仁美あんた、なんにも言わずに転校しちゃって……。」

わたし、怒ってるんだよ。

ずっと、あんたに言いたいことがあったのに……」

「……。そうだよね……」

深く息を吸い込み、あらためて覚悟をする。

そうだ。私はそのためにここに来たのだから。

逸らさぬよう、彼女の眼をまっすぐにみつめ、お腹に力を入れて構えていた。……が

……

「……ありがとう」

「……え？」

「助けてくれて、ありがとう」

しかし、彼女の口から私に放たれたのはやはり思ってもみない言葉だった。

目を瞬かせている私に、彼女は続けた。

「あんた、あの時あたしを最後まで助けようとしてくれた。

それに……一生懸命、護ってくれようとしたんだよね？

だから、その、お礼」

「……そんな！　ちがう!!」

私は、なににもできなかつた！　ごめんなさい……」

悔恨がありありと蘇る。唇をつよく噛みしめ、深く頭を下げる。

「なにいつてんの。あんたがいなきやもつとひどいことになつてたつて。電車に轢かれてバラバラ……もしかしなくてもこの世にいなかつたかもね。なんて……やっぱり、気にしてたか。そうかなつて。あんた、やさしいこだったし……」

すると、彼女は穏やかな光を湛えた瞳をまつすぐにむけ返し、こう言つた。

「こつちこそ、あたしのせいで嫌な目にたくさん……ごめんね」
かぶりをふる。

「そんなこと……ない……だつて……、私の、せいで……」

「……。ちよつと、みてて」

そういうと、彼女は器用に車椅子の車輪を回し、廊下の壁際に移動する。

「……よ、いしよつと!」

そして、手すりに捕まりよろめきながらも、しっかりとその両脚で、立ち上がつてみせてくれた。

「あ……」

「……ほら。長い長い時間かかつたけど、こつちまできた。

二度と、立つのは難しいって、諦めた方がいいって、言われたこともあるんだけど」
にっこりと満面の笑みを、こちらに向ける。

「とうか、そもそも別に全然あなたのせいじゃないじゃん。

……って、ただ言っても聞きやしないだろうし。

がんばったんだ。ちゃんとこうして、あなたにこういわなきやいけないから」

「……あたしはだいじょうぶだから、きにすんな！　って」

「つー！　う……！」

「もうやっぱり泣いた……。やめてよ、もう……」

「ご、ごめん……」

瞬間的に溢れ出してきたそれを懸命に拭っていると、もう一人……隣に黙って佇んでいた彼女の親友が、声を絞り出す。

「……ごめん！　わたしが、あんな……ひどいこといったから！

わかってたのに！　あなたのせいじゃないなんて……ごめんなさい……ッ！」

嗚咽まじりに、頭を垂れる。その表情には強い後悔の色が滲んでいた。

「ううん。きもち、すごく、わかるから……」

たいせつなひとが、傷付いたときのきもち。

おもいだす。じりじりと照り付ける砂漠の太陽の下。己が身を焼かれたかの如く、い

や、そのほうが遥かにましだとすら思えるような……

彼の目が傷つけられてしまったときの、あのきもち。

想いが強ければ強いほど、なにかにぶつければやりきれない。そんなきもち。

「ずっと、謝りに行く勇気がなくて……ごめんさい……」

「ううん……。ううん！　もう、じゆうぶん……だよ……」

私は、本当に、どこまでも浅はかだった。思いもよらなかつた事実の唐突に気づく。

元来、穏やかでおっとりしていた……そんな彼女だ。私に放つたあの一言に対し、きつと長い間、苦しい自責の念に苛まされてきたに違いない。

わかつてもらえるわけがない。

そう、嘆く。そんなふうには殻に閉じこもって自分のことしか見えていなかった私が、だれよりも一番、わかつていなかっただ、ということ。

「はいはい、ということ、仲直り仲直り。辛気臭いのなし！」

どうやら明朗なものも相変わらさずのようだ。車椅子に座り直し、彼女が涙ぐむその親友と私の肩を抱き引き寄せる。

「それに……実は、わるいこと、ばかりじゃあなかつたんだよね……」

「え……？」

はにかんで、私に向け左手の甲をスツと上げる。

その薬指には一際存在感を示すシルバーの指輪が嵌まっており、先端ではダイヤモンドが誇らしげに輝きを放っていた。まじまじとみつめる私に彼女は言った。それよりもさらに美しい表情をうかべて。

「来年、結婚するんだ。」

相手は……この病院の、リハビリの先生」

「えっ!」

「……今、すごーく、しあわせ。」

だから、ね?」

「っ、うん! おめ、でとう……っ!」

「うん。……ありがとう」

そして、とうとうその目にも浮かんだそれ、および、照れくささを誤魔化すかのよう
に、彼女は慌てて話題を変える。

「そ、そうだ! 仁美、あんたこそ。」

今日は、一緒じゃないの? あの人。彼氏さんでしょう?」

「かれ……し?」

その発言に首をかしげる私と焦って止める彼女の親友。

「ちよつと! それ、秘密って……」

「あれ？ そうだったっけ？」

『僕が来たことは仁美さんにはオフレコで御願いますね』って、言われたじゃない……』

「あ、そうだった。あはは……まあ、いいじゃない！」

からからと笑う彼女のフォローをするべく、その親友は私に教えてくれた。

「もう……。あのね、実は、聞いていたの。わたしたち。あんたが来ること。勿論まさか今日だなんて夢にも思わなかったけど」

「ええ?! どうして?」

「もう何年も前に、ここに、あんたの知り合いって人が来たんだ。前髪がふわっと長い男の人」

「あんたも事故かなんかで大変だったんだって? よかったね。目が覚めて」

「そのひとが……」

『あのひとは、いつか、ここに来る。』

だから、そのときは……どうか、貴女たちの正直なきもちを話してあげてくださいね』
……っつて」

ふたりと別れ、ひとり病院の屋上に佇む。

小高い丘の上に建てられたこの病院。ゆえに、ここからはパノラマサイズの海が一望できた。

空と海。一面に拡がる茜色。

『あのとき』とおなじ、その色そのままに、眩しくきらめいていた。

いつのまにか。

ごく自然に。

どんどん自分のなかでおおきくなっていった、たしかなきもちにようやく気付いた『あのとき』と。

「……」

あいたかった。いますぐに。

ううん。ほんとうはもう、ずっと。

「……帰ろう」

階段に続く扉の方へと振り返った……そのときだった。

「あ……」

私の眼は映し出した。

ゆつくりとひらいていく、それを。

そして……

「……やっぱり、ここだった」

いつかのように、輝く夕陽に包まれて……

こまったようにほほえむ、あのひとのすがたを。

「……みつけた」

あいのうた（後）

僕は、とうとうみつけたのだ。

……今度こそ。

美しいオレンジ色の夕陽にすっぱりと包み込まれた白い病院の屋上。ひとりたたずむ彼女は現れた僕の姿をみとめると大きくその眼を見開いた。

「花京院くん？ な、なんで……？」

「それはこつちの台詞ですよ。なんですか、あの置き手紙……」

探さないで下さいって……勘弁してくださいよ。もう、ほんとうに……」

心底の恨み節をぶつけると彼女から信じられない言葉が漏れる。

「え!? ご、ごめん。あれ？ でも、これは違うか、つてそつちは捨てたはず……書いてたのに。『事情があつて外出します。本日中には戻りますので心配しないでください

い』って」

「はあ?!」

「他の、なかった? テーブルの上。湯呑を文鎮代わりにしといたんだけど」

「み、みて、なかった……」

がつくりと全身の力が抜ける。迂闊だった。あの衝撃の一枚を先に発見しまったがゆえ、他のところなど目に入っていなかった。入るわけがないに決まっているだろう。

彼女の性格をよく知る家族や仲間達はともかく、病院関係者達までもが慌てていないことを不思議に思っていたが、理由がやっとわかった。

どうしてこのひとが絡むと自分はいつもこうなのか。

格好悪いことばかりだ。……恋なんて。

あまりの失態に顔を覆って密かに猛省しているうちに彼女に訊ねられる。

「どうしてわかったの? ここだって」

「え? ああ、なんとなく。ここかな……と」

ありのままを答える。すると、こまったように……

「……もう。なんでだろう? なんでいつも……」

……でもすぐく、うれしそうに、つぶやく。

「私、あの旅が終わったら行くって決めていたところがあつて……それが、ここ」

そうして、彼女はおしえてくれた。

ここに来た『理由』を。

「このままじゃあ、駄目だとおもったの」

遠くの空を仰ぎながらそういつて首を振ると、まっすぐに僕の方へと視線を移す。

「はじめてふたりで話したとき、私あなたのこと、すごいなつておもった」

もうずいぶん前のことになつちやつたから、忘れちやつたかもしれないけど。なんて苦笑しながら、こちらへと歩みを進める。

そんなわけ、ないだろう。

忘れるなんてありえない。あなたとの交わした言葉。表情も仕草も。どれだけ時間が経とうとそれだけがあざやかで。いつだつてありありと想い浮かべることができる。

そうだ。あの、さいしよの日。初めて一緒に並んで歩いた日。確かにそういつていた。そういつてくれた。

彼女は僕に。「すごいよ」と。

敷き詰められた鄙びたタイルを確かめるように僕も一歩一歩踏みしめる。彼女の元へと。

「だつて、私がつつとできていなかったこと……怯えて目を背けていたこと……ううん、もっと、比べ物にならない程の恐怖に、あなたは逃げるどころか自ら立ち向かおうとし

ていて……」

ふたりの距離がなくなるたびにふわり、彼女のやさしい香りがはじける。胸が苦しくなるくらい甘い甘美な感覚に全身が包まれていく。

「……そして、ちゃんと乗り越えた」

およそ15cm。僕のとでも気に入っている、ほどよい身長差で彼女はたどり着いた僕をみあげる。

「私も、あなたみたいになりたかった。すこしでも近づきたかった。でも……」

しかし、そこでぐつと唇を結び、くるしそうにうつむいてしまう。

「憧れて尊敬しているだけ。それだけじゃあ駄目だとおもった。」

隣に立つために……

せめて、なにか一歩踏み出さなきゃって、じゃないと……」

そして改めてこちらを見据えたかと思うと、深々と頭を下げた。

「避けたりして、ごめんなさい。」

こないだの、あなたの、ことば……

うれし、かった……

ほんとは、すぐく、うれしかったの……」

それをきっかけに、堰切ったようにあふれて零れてくる。

彼女の想いが。

「でも……同時に、いいのかな、って。私はあなたをこんなにもながいあいだ……つらい、罪の意識に縛りつけて苦しめたのに。そんな人間が、あなたと……なんて、ゆるされるわけ、ない。そう、おもった……」

「そもそも『逢えなかつた時間』が、あなたの中での私を美化してしまっているんじゃないかって。実際の、私たちの一緒に過ごした期間なんて二ヶ月足らずで……ほんとうの私なんて知られたら、嫌われちゃう、幻滅されちゃうって……こわかつたの……」

「もともとそんななのに、それに加えて、7年も過ぎていて……」

あなたはもうすぐ社会人で、まえよりさらにもっと……すぐくすてきに、なっていて。

私なんて大学に戻るかもわからない。なにも、ない。

あなたに、私は……ふさわしくない。そう、おもった」

「きつと、そんなことないって、あなたはそういつてくれるとおもう。」

あなたは、とてもやさしいから。

でも……いいえ、だから、いやだった。そんなの私が、耐えられない。

これからも罪悪感や責任感の鎖で、あなたを縛るなんて……」

「断らなきゃって。それがあなたのためだって、わかつてたけど……」

でも、あなたを、あきらめることも、できなくて……

だから、逃げてた。

あなたにまた甘えて、嫌なおもいをさせて……ごめんなさい」

「……」

沈黙。

「……でも、いや……」

そのしばしのあと、強くかぶりをふりながら彼女はとうとう打ち明けた。

僕はようやく聞くことができたのだ。

「……やっぱりいや!!」

彼女の『はじめてのわがまま』を。

「あなたとはなれるなんて、私には、できないッ!」

「私、がんばるから……!」　まだ、全然至らないところばかりだけど、がんばって、だれにもまけない、あなたにふさわしいひとに、なるから!　いままでのぶんも、いっぱい、いっぱい……しあわせに、するから!」

「罪悪感でも思い込みでも責任感でも勘違いでも、なんでもいい!」

わたしのこと、すきでいて!」

わたしの、そばにいて！

ずっと、いっしょに生きていきたいの……あなたと!!」

「御願い……っ!」

「……ばかだなあ。ほんとうに、ばかだ……」

自然とそんな言葉が自分の口をついて出た。

いっばいになったなにかが僕の奥底から波の様に押し寄せて溢れてしまう。

「どうして、そんなふうに、おもうかなあ? まったく……」

やっぱりあなたは、ちつともわかつちやいない」

おもわず漏れ出る。くすりと、笑う。

「……気づいたんです。僕は。」

わかったんです。僕は『わかっていなかった』」

きよとんとしている彼女を尻目に僕は相棒……法皇を呼び出す。

「これ、みえますよね?」

「うん、もちろん。」

ひさしぶり、なのかな? ハイエロフロント……」

僕の意図はわからないまま、でもそう呼びかけると、彼女はあたたかなまなざしをむ

け『友だち』の頭をそつとなでる。

「そつか、『成長』したんだよね。」

ふふ、あなたも、もつとかつこよくなつたね」

「……そう、いうとおもつた。」

いや、やつぱり、それ以上……かな」

いつもそうだ。このひとは僕の予想の延長線上をかるく超えてくる。

「おぼえていますか？ 僕は、ずつとこう思っていた。」

『ハイエロフアント・グリーン法皇の緑』がみえないものとわかりあえるはずなどない、と」

「……うん。おぼえているよ」

すこしだけさびしそうに頷く彼女。それを制し、いう。

「……それは、まちがっていた。関係ないんだ」

「え……？」

今度はこちらの番だった。吐露する。ながいあいだすこしずつ、鍾乳石みたいに沢山積もり積もつたそれを。魂に刻み込まれたかのような慕情。みつけたこたえ。この胸にずつとつかえていた熱いかたまり。

僕の想いを。すべて。

「だって、わかっているつもりだったけれど……わからないことだらけだから。

僕は……あなたのこと。

そして、わかっていない。あなたも……僕のこと。

わかっているけど、わかってないんだ。全然」

「でもね、あたりまえなんだ。それでいい。いいや、それが、いいんだ……」

「わかりあいたいのには、わからない。

そのために、想って、悩んで……。

だからこそ、ほんのすこしだけでもわかりあえたら、それは奇跡みたいに尊くて……」

「誰だってそうなんだ。

みえるとか、みえないとか……そんなの関係なかった。

ひととひとが完全にわかりあうことなんて、本当は不可能なんだ」

「それでも……僕はあなたのことを、だれよりもわかっていきたい。

そして……だれよりも僕のことを、わかっていてほしい」

「だいじなことは、わかりあいたいとおもうこと。

そのために、努力しつづけること……。

それでいいんですよ。

いいんだ。ぜんぶわからなくなっちゃって。

わからないまま、でも、わかりあいたい、ずっといつしよにいたい。そう、願うこと「眼がみえなかった……僕が闇に包まれていたあの夜。

あなたはいつてくれた。僕とわかりあいたいとおもっている。と。

僕もそうだ。あなたとだれよりもわかりあいたい。心の底からそうおもっている。

僕は、ひとりじゃあないと……そうあなたが教えてくれたから、気づけた……」

ただただ、だまつて。でも熱を帯びた表情で。相槌を打つのも忘れるくらい静かに耳を傾けてくれているそのひとに、続ける。

「だいたい、ですよ？ 思い込みや勘違いでこんな、7年以上も……逢えすらもしないひと、想いつづけていられませんよ。というか、そこまでいけば思い込みも本物な気がするけれど……」

そこでおもいついて、すこしだけ意地悪をいうことにする。

「仁美さん……あなたこそ、どうなんですか？ あの50日間の奇妙な冒険によって熱に浮かされた心の、ひとときだけの幻……あなたの、僕への思いこそ、そうなのではないですか？」

「はあ!? そんなわけない！ なめないで!! 私がどんなきもちで、あのときツ……!!

……あ……」

瞬時に予想通りの反応をしたのち、しまったというかおをして口をつぐむ。爆発しそうにこみあげてくるでしょうもないほどの愛しさをどうにか呑み込みながら、ひとつひとつ、伝える。

「……そういうことですよ。まったく失礼な話だ。

あなたこそ、僕を……この花京院典明をなめないでいただきたい……！」

「罪悪感や後悔……それはたしかに、あったよ。押しつぶされそうなほどだった。

いつそ僕が死んでいたら……いっしょに死んでしまえたら……って何度も思った。

……でも、できなかった。

なぜだと思う？

あなたはそれを望まない……わかりきっていたから。そんなこと」

「やりたいことをして精一杯生きてほしい……あなたは、そういった。

……だからそうした。

唯一したいこと、そのために生きてきたんだ。

……あなたに逢いたい。

ただ……それだけのために」

「たしかに苦しかった。長かった。

でも、7年の間、つらかったこともひとつだけで……。

罪の意識……とかそんなものではなく、

あなたに逢えないこと。

ただ、それだけだったんだ。

だから僕のために、身をひく……なんて、とんでもない話だ。

これ以上、さらに僕につらいおもいをさせるというんですか？ あなたは「

「だいたい、ふさわしいとか、ふさわしくないとか……誰がきめるんです？

ほかでもない僕が、あなたがいい。あなたがたじゃなきやだめだ。といっているの？」

「あなたが眠っている間……たくさんのひとに出会いました。

スタンド使いにも、そうじゃあないひとにも。

いいひと、そうじゃあないひと……数え切れないほど」

「でも、……いつもこの心のどまんかには、あなたがいた。

……あなたしか、いなかった」

「……『ほんとうの私』か」

「出身はY県。東京都在住の……国立女子大在籍。専攻は生物遺伝子化学。

誕生日は秋。11月22日……僕たちの出逢った、あの日。

血液型はA型。おそろい。

身長163cm、体重は45kg。推定。当たっている自信はある。

……というか軽すぎる。これからはもつと食べましようね。

嫌いなものは特になく、なんでも美味しそうに食べる。甘いものが好き。

動物、とくに犬・猫が好き。子どもはちよつと苦手。

冬、寒いのが大の苦手、かといって暑いのも。

……って、人間みんなそうだろうけどね。

家族構成は両親と兄……家族のことが大好き。

そしてあの旅の仲間のことも家族同様におもっている。

よく知らない人と話すのは苦手。ひとりでいるほうが楽。

……でも本当は少し寂しかった。

趣味は読書やらゲーム……あなたが眠っている間に、いいハードもソフトもたくさん発売されています。楽しみでしよう？ 今度いつしよにやりましようね。

ぼーっとするのが好き。お昼寝も好き。旅の移動中はよく寝ていたね。

そのくせ暴走車スタンドの突撃をよけるわ、崖から転げ落ちてても、腕が千切れても割と平気だわ……女性にしては運動神経良過ぎ……傷の治り早過ぎ……。ずつと不思議だったけれど、波紋の力の一環かもしれないことが僕の中で先日判明。納得。

料理の腕もピカ一。あの味噌汁を僕は毎日飲みたい。

一方絵は苦手……本人談。今度検証予定。嫌がろうとも描いてもらおう……くくく

……。楽しみだ。

珈琲はミルクを入れる派。わかっていない。でも僕の煎れたものはブラックでも飲める……。実はこれはかなり嬉しい。

スタンドは女教皇の暗示……Guardian Cecilia of cosm
os……通称セシリア。

先を視せて『護る』スタンド……

生涯一度だけ、たいせつなものの命を護るために必要な予知夢をみせてくれる。

それに現されるように性格は保守的、思慮深い……。そして、自己犠牲的。

しないといけないことには真面目で向上心は高い。半面融通が利かないこともあり。

困ってしまうくらい素直で、叱責や他者のアドバイスをきちんと受け入れる。

知識欲もあり、途中から誰もが聞くことを諦める僕の蘊蓄も楽しそうに聴いてくれる

……。

他人のことには一生懸命。気を遣いすぎる。考えすぎる。

なのに、自分のことは適当。意外とめんどくさがり。

常軌を逸するくらい鈍感で天然……。でもときどきびつくりするくらい鋭い。

このあたりはよくわからないな……。でもそんなところもおもしろい。

底抜けにおひとよし。うっかり屋さん。よく階段を踏み外す。あぶなっかしくて目

がはなせない。

他者へのおもいやりや慈しみが……ほしいことばを、いつも僕にくれる。

おだやかで温和だけれども、家族やセシリア、仲間……たいせつなものにはものすごく誇りをもっていて、これらをけなされたり傷つけられたりするのをなによりもきらう。

その部分に関してのみ、短気で直情的。ああ、兄妹そっくりだね。

おなじく、ふだんはふわつとしてるのに、なにかを護るつとぎだけ、確固たる意志と信念を発動。頑固で譲らない。表情が変わる……。それがすごくきれいで……」

「……まちがっているところ、ありますか？ なんならまだ挙げますか？」

「どうです？ わかっているところ、ありませんか？ なかなかわかつてるでしょう？」

「いま挙げた、僕をよく知っている……これだつて『ほんとうのあなた』だ。

ほんの一部かもしれない、でも、それだけでも、7年以上、僕の心をとらえて、はなしてくれなかった。

すきになるのに……すきでいるのに……それでじゅうぶんではないのかな？」

「まあ、正直なところ、美化……たしかにそれは、あるのかもしれない。

あなたがなにをしたつて可愛く、愛おしくみえてしまうのは。

でもそれは、僕のなかにひとつ。あなたへのゆるぎないきもちが、たしかにある。だ

からだ」

「事実、僕たちの共に過ごした時間は、少ない。

さつきいった、まだ知らないあなたの方が多し。そうかもしれない。

でもそれをしるのも、しつてもらうのも楽しみだと思いませんか？

僕はあなたの、いいところも悪いところも、たくさん知りたい。

いいところをすれば、当然、もつとすきになるとおもうし……

悪いところも、たいていは、しょうがないな、なんていいながら許容してしまっただけ……。

なおしたほうがいいことは、一緒に努力して、あらためていけばいい。

僕はそうおもう。あなたは、ちがうのかい？」

「そもそも……期間はけつして長くはなかつたけれど、あの旅で培つた僕らの絆はそんなに薄つぺらいものだっただろうか？ いまでも一生のうちでいちばん濃厚な……50年分くらいの重みはあつたと思うけど」

「だって、あの旅で僕は、たいせつなものをたくさん得たんだから。

仲間、親友、誇り、強さ……。

そして……かけがえのない『あなた』という存在を。

失いかけたけど……ちゃんと、取り戻したんだ。僕は……」

「この空白期間は、たしかに、残念だった。

申し訳ない。僕の力不足で……。

でも、これだって、いくらでも取り戻せる。

きつとこれからのための充電期間だったんだ。

焦らなくていい。ゆっくりでいいじゃあないか。

先はまだ長い。楽しみがたくさんある。

「まわり道したぶん、ふつうよりもっともつとたいせつにできる……そう、おもわないかい？」

「ええと……あとはなんだったかな？ まだなにかあったっけ？」

否定してあげるよ。ことごとく。

あなたが考える不安や、これから僕といられない理由なんて。

いくらでも。これからも、いつだって」

「だって、僕はどうしたって、あなたといたいんだから。

……ずっと。いつまでも」

ながいながい僕の『詩』。

「……花京院く、ん……」

それをひとしきり聴き終えた彼女の口から愛僕しくをてやまぶない音こがほろりと流れる。

「先日の、僕のあのことば……」

あれは近い将来、あらためて、またいわせてもらうつもりだけれど。

あなたが目覚めたのがつい、うれしすぎて……

ちよつとぶつとびすぎたなど……反省したんですよ」

目を閉じ、おおきく息を吸い込んで、ひとつ吐く。『覚悟』を決める。

「もつといま、ふさわしいことばがあると……そう、おもつて。

あと、だいじな……いいそびれたこともある。

だから……いいなおさせて、もらってもいいですか？」

「……う、ん……」

僕をみつめる。

零れてしまいそうに潤んだ、エメラルドよりも美しく、きらきらひかる、みどりいろ

……

……僕の、だいすきなその瞳。

それをまつすぐにとらえつつ、告げる。

「保乃宮仁美さん。結婚を前提に、僕とお付き合いをしてください」

「……罪悪感でも、思い込みでも、責任感でも、勘違いでもなく……」

「ただ……あなたが好きだから。」

ただ……あなたと、いっしょにいたいから。ずっと……いつまでも」

「あ………！」

「……返事は？」

「っ！ はい………！」

よろしく、おねがい………します！」

「……はい。よろしくおねがいします」

ふたりして、丁寧に頭を下げる。

……あのさいしよの日のように。

これじゃあまるで、あのときからこうなることが決まっていたかのようにじゃないか

……

そんなふうに見えてしまい、きつと彼女も同様なのだろう。おもわず互いに笑みがこぼれてしまう。

「………で………、ですよっ………」

「んっ………」

「……それだけ？」

「え？ ……ああ！ そっか。」

私もたいせつなこと、いいわされるとこだった……」

「ほんとですよ。ひどいなあ……やっぱり」

そうして、どこまでもド天然で思わせぶりの彼女が紡いだのは……

予想通り、期待外れなこの言葉。

「……私のこと、起こしてくれて、ありがとう」

「……。それか……。」

うん、まあ……そうなんだけど、さ……」

「ふふっ、それと、……もうひとつ。」

私も……いわせてもらっても、いいかな？」

加えて、期待以上の……

「……ずっと、ずっと……あなたに、いいかったこと」

「……もちろん」

「…………だいすきだよ」

「花京院典明くん、私……あなたがすき。だいすき！」

「ああ！ 僕も、すきだ。だいすきだよ！ 仁美さん……！」

どれだけいいあつても、たりない。なんどもなんどもふたりで魔法みたいにくりかえして。

どちらからか、なんてもうさっぱりわからない。それくらい夢中でつよく、痛いくらいに抱きしめあつて、みつめあつて、わらいあつて、ゆつくりと瞳を閉じて……

……そして、僕たちは『はじめてのキス』をした。

現実で、両者の合意の元……という意味で、『はじめて』。

……おかしなものだ。

それは、とてもあたたかくて、やわらかくて、甘くて……

ゆつくりと目をあけると、はずかしそうな……

でも、ともうれしそうにほほえむあなたがいて。

「……これだよ……。これだよ……」

「……ん？ なにか？」

「いいえ。……なんでも」

夢とおなじ……

いや、夢よりもはるかに素敵なものだった。

全身くまなくすべて、隙間なく余すところなく満ち足りていく。やさしくゆるやかに手足のはしばしまでとろけていくかのようだった。

「ふふ……」

まるで雲の上に乗っているかのような、ふわふわと身体が浮く極上の感覚に身を任せると、ふいに今度は彼女がくすぐすわらう。

「どうしたんですか?」

「ん? あの約束は、護れたな……って」

「……あの約束?」

たずねると、そつと耳元をくすぐる天使の息吹。

「……おかげさまで。」

私の、はじめてのキスは……

……ちゃんと、だいすきなひとと、できました」

「……っ!」

それだけいうと、くるりと身を翻して空と海の見える手すりの方へと駆けていく。

隠そうとしても、バレバレである。

耳まで真っ赤に染めた彼女の背中にむけて、きつと同じようなかおをした僕はささや

く。

「……ああ。そうだね。僕もですよ」

ほんとうは、とつくの昔に。

あの旅の途中……夢の世界の観覧車の中で。

そんな、僕だけが知っている秘密をいつか白状しなくちやあいけないな。

そうしたら、いつたいどんなかおをみせてくれるのだろうか？

……なんて、たのしみが、またふえてしまった。

はじまるのだ。ほんとうに。やつと。これから。

じんわりと湧いてくる実感。こんなのもみせられっこない。こつそりと我ながらしまりがなすぎるくらいにやけていると、遥か向こうの景色を眺めていた彼女が手招きをする。

「ねえ、みて！ もう夕陽が、沈みそうだよ。海のむこうに……」

「ふっ、本当ですね」

茜色に頬を照らされ無邪気にはしやぐ愛しいひとの隣に立ち、指差す方向を臨む。

澄みきった空気。海から吹く風が火照った身に心地よい。

彼方の水平線に太陽がゆっくりとその身を沈めていく……

その刹那だった。

「……………あつ！」

僕たちはたしかに、みた。

「あ、あれは！ まさか……………！」

「わあ……………!!」

太陽が完全に隠れんとするその瞬間、まばゆい緑色の閃光を発し、瞬く様を。

「一瞬だったけど……………すごかったね」

信じられないものをみてしまい、あつけにとられたままの僕にふわりとほほえむ。

「……………きれいな、みどりいろ。……………そっくり」

花が咲いたみたいだった。

そっちほうが、よっぽどきれいだ。

眩しさに目をほそめつつ、僕は誤魔化すようにいう。

「……………『グリーンフラッシュ緑閃光』ですな」

「へえ！ 名前まで素敵……………」

ふふ、なんだか、すごくあなたっぽいな……………」

緑閃光……………グリーンフラッシュ。その名の通り、太陽が緑色に輝くように光を放つもの。
の。

夕陽が完全に沈む直前、または朝陽が昇った直後に、一瞬だけみられる美しい自然現

象だ。

秋晴れの澄んだ空、積雪した山地や沿岸部、水平線や地平線、気温や空気の透明度など……場所や時期、さまざまな気象条件が合致しなければ滅多にお目にかかれない大変希少な光景である。

それゆえか、とある地域にはこんな伝説があるそうだ。

これを、ふたりみることができた恋人同士は、永遠に……

「……ああ。そうだ。僕も……もうひとつ……」

たくさんのお跡が重ならないと、決して起こらない……そんな事象。

それを目の当たりにしたおかげで、たいせつな、伝えておきたかったことをおもいだす。

「ん？ なに？」

「……こないだ、あなた、いったでしょう？」

僕を護るため……そのために、あなたは生まれてきた……と」

「うん。……そうだよ。そうだもん」

「……ちがうよ、それは。全然ちがう」

「え？」

「……僕を愛して、僕に愛されて……」

「あなたは……僕と、しあわせになるために生まれてきたんだから」

Epilogue

「……そうか。つたく、だからいったじゃねーか」

「……ああ。じゃあな」

電話を切り、独りごちる。

「……やれやれだぜ。ほんとうに、ひとさわがせなやつらだ」

「……帰ったぞ」

「あつ！ パパ、おかえりー！」

「おかえりなさい」

「おかえり、承太郎」

襖を開けると目に飛び込んでくる、和室を飾る畳の上の色とりどりの艶やかな着物たち。

「まだやってんのかよ……」

「だって！ シヤルちゃんセンスよくって！ 素敵なのがどんどん見つかったらうんだものー！」

「ふふ、ホリイママこそ！ あつ、これも素敵ー！」

「承太郎もみてみて！ 徐倫ちゃん、どれが似合うかしらー！」

「……どれでもいい」

かけられた母親の問いに思ったままを返す。

するとなにおかしいのか妻がくすくすと笑みを浮かべる。

「ふふ、そうね。『どれでも』可愛いものね」

「……ああ」

「ほんとね。もう！ 徐倫ちゃん、何着せても可愛くってッ！

きやー！ もう！ 女の子っていいわっ！ わたしも娘が欲しかったのに！」

「……ちつとはおちつけ、おふくろ」

座卓の傍に胡坐を組み新聞に手を伸ばしたところで、二人の大きな少女の着せ替え人形と化した娘がおれの顔を覗き込み、訊ねてくる。

「ねえ、パパ？ かきよーいんは？ かきよーいんはこないの？」

「あいつか？ ああ。おらん」

「えー？ どうして？ おしごと？」

「あいつは……、そうだな」

目に浮かべる。親友グチとその……

「……どこまでも世話のやけるお姫さんの、お迎えだ」

それを受け、母親がバツと立ち上がる。

「承太郎、そ、それは……！ もしかして、仁美ちゃん、目が……？」

黙って、頷く。

「そう！ そうなのね！ ああ、なんてことかしら！

花京院君、仁美ちゃん！ よかった！ よかった……！」

誰も、何も伝えてなどいない。

ただ、あいつは事故で眠っている。と、それだけだ。

しかし、鈍そうでいて勘の鋭いところのあるこの母親のこと。なにかしら、ずっと感じるころがあつたのだろう。眼に光るものが浮かぶ。

「えー？ かきよーいんのおひめさま……？ ……やだ！ おおきくなったらじよりーんがおよめさんになるんだよ！」

一方、まるっこい頬をますますまるめ、不満げに訴える娘の頭に手を乗せつつ、いう。
「そう、いつてやんな。今日は、花京院にとつて……」

(……そして、おれにとつても……)

「あ……！」

「承太郎……！」

「あー！ パパ！ パパ、笑ってる！ かわいい！」

「……うるせーな」

「ねえ、パパ……？」

いいつつ、紙面を広げたおれの膝の上にもぐり込んでくる。

「あのね、じよりーんね、かきよーいんのこと好きだけど……」

そして、こそつと耳打ちする。

「……でも、パパのことは、もつとすき。

ずっと、そんなかおしててくれるなら……

およめさんに行くのやめて、ずっとパパのそばにいてあげてもいいよっ！」

「……ちっ！」

「まあ、それも……わるくねえな」

*

*

*

「おかえりなさい、アヴ様！」

「ただいま。留守番すまないな。千那」

「どうだった？ 花京院とあの娘」

「ああ。ふふ、だいじようぶさ。あのふたりなら」

「そっか。そうだよね。」

あんなに（変態的に）すきなひとだもんね……」

そういうったあと、なにやらぼつりと少女は零す。

「……ちよつとうらやましいな。ぼくも、いつか……」

「ん？ どうした？」

「……なんでもないよっ！ 覚悟しといてね、アヴ様っ!!」

「な、なにを覚悟したらよいのか、よくわからんのだが……？」

「いいのー！」

彼女はそれ以上こたえず、話題を変える。

「あ、そういうえば、彼女が目覚めた、あのときね。

あの、空条さん？ だっけ。

あのひとの後ろに、視えたよ。ご先祖様」

「おお、そうなのか。どんなひとだったんだ？」

「ええとね、アメフト選手みたいに体が大きくて……でも、すごくやさしそうな、紳士さんと美人な奥様」

「ほお……」

「そのひと、いつてたよ。

『エリナ、ありがとう。きみのおかげで……

みんな……、たいせつな……ぼくの誇りだ』

って」

「ツ!? ……そ、それは……まさか！」

「わらつてた。ふたりで、しあわせそうに」

「……そうか」

ジョースター家の一族。

その首筋には皆、一様に星形の痣があるという。

空条徐倫

ジョルノ・ジョバーナ

東方仗助

空条承太郎

ジョセフ・ジョースター

そして……

きつとあそこに……たしかに『いた』のだ。彼も。

——星々の光がひとつに集結するとき、『箱』は開くだろう——

(姉者の予言は……さすがだな)

その顔を思い浮かべるとともに、近いうち吉報を報告がてらカイロの方の店に顔を出さねば。ついでに、久方ぶりにまた諸国をのんびり巡るのもよいかもな、などと思う。

すると、カランカラン……というベルの音が鳴り響く。

「マスター！ やってる?！」

「今日も来ちゃったよ！ 一日の終わりはやつぱりここの紅茶でしめないと！ 働いた

後の御褒美つてやつだね！」

「ねえ、マスター。わたしとうとう運命のひとに出逢っちゃったかも！」

絶対恋人になりたい！　ので、お願いアドバイスくださいッ！」

「お、おお！　……ふっ！」

「どうやら、わたしがゆつくりと旅に出られる日は……まだまだ訪れてはくれないようだ。」

「フキユ〜（ちっ、あいかわらず騒々しいな、この店はよ……つたく〜）」

「クウーン！」

「ワン！（まあ、おれは、かわいー雌とこうして呑気に昼寝できりやー、それでいいんだけどな〜）」

*

*

*

白を抜けると、一面の青。

「……ジョルノ、どーだった？　日本は」

窓の外に果てなく広がる蒼穹。声をきつかけにそれから隣の座席に視線を移しながら、そこに腰掛ける自称『ぼくの保護者』に聞かれた質問にありのままを答える。

「ええ。まあ、なかなかいい体験にはなりましたね」

「んなこといつちやってえ！ 超楽しそうだったじゃん」

「……なんのことでしようか？」

「ぶっ、ツンデレ……。ま、おめーも年相応だつてわかつて兄ちゃんは安心したわ」

「……髪の毛をぐりぐりしないでください。」

そして、貴方はぼくの兄などではありません、ポルナレフさん」

「かっかつか。なーんか似てきたな。オレに対する扱いが。師匠に」

「師匠？ だれのことでしょうか」

「へっ、わかってるくせに」

「……。……あんなふうアモーレに恋人にデレデレなひとを、ぼくは師と仰ぐ気はありません」

言いつつ、右手をじつとみる。

まだ残っている気がした。

——いつか、君がこまったとき……かならずや、力になると誓おう——

最愛の女性を傍らに空港まで見送りに来てくれたそのひとが、そういつて差し出す手を握り返した。

その、ぬくもりが。

「……そんなことをしたら、また『借り』になってしまいうじやあないですか」

それでも、やっぱり来てくれてしまうのだろう。あのひとは。

「……どーした？ んな、ニヤけて」

「いいえ、なんでも。あと、にやけてなどいけません」

「ぷっ！ ……はいはい」

性懲りもなくぼくの前髪を掻きまわしつつ笑う。

そんなひとにふと思いついた事柄を聞き返してやることにする。

「ああ、そういえば……貴方には、『そーいうひと』はいないんですか？

いいかげん、貴方もいい歳でしょう？」

「え？ オレか？ そうだなあ……」

「……オレは、駄目なんだよなあ……」

「ポルナレフさん……？」

その表情が……銀色の影が、そつと揺れた気がした。

「……ん？ いや！ だつてさあ！ オレが誰か一人のものになつちやつたら全世界の

レディが泣いちゃうじゃん？ だから、オレはひとりがいい……ひとりでいいのさ」

しかしそれは一瞬で……

「おおっ！ 見ろ、ジヨルノ！」

あのアテナダントさんの脚、グンバツじやね!?

むふふ、声かけてみよーかなあ！」

「……」

わざとらしく声を高める彼に、伝える。

「……忘れられては困りますが、貴方にもぼくは借りがある」

「っ!？」

「……完済させていただく。かならず」

「……へっ！ たたく、生意気なガキんちよめ！」

「だから、ぼくはガキんちよめなどではないと……」

不本意な呼称に異議を唱えようとするも、やはり聞いてはいないようだ。笑いながらこんなことをいう。

「くく！ 将来、おめー大物になるぜ」

「ええ、なりますよ。もちろん」

「けっ！ そしたら、オレ、おまえの左団扇で暮らしてーな。呑気にな。予約しとこーかな」

「ふつ、ならば貴方には……ファミリーを和ませる……そんなマスコットの役割を担ってもらおうとしましょうか。ポルナレフさん？」

「へへ……！　なんだよ、それ……」

「……んなの、死んでもごめんだぜ！」

*

*

*

「あいつ、おせえな……」

おれは今、孫を待っていた。

待ち合わせ場所はホテルのロビーカフェ。

しかし、なかなか待ち人は現れない。生真面目が過ぎるあいつにしては珍しいことだった。腕に目を落とすとすでに時計の針は約束の時間から四半時は過ぎた位置を示していた。

(それにしても、ボーナスでじいさん孝行しようだなんざ、義経もちつとは粹な事するようになったじゃあねーか……)

きつい修行でベソをかいていた孫の幼き頃を懐かしく思い浮かべながらも、年々自分

の若い頃に似てくるその姿を誇らしく思う。

(おれも、歳くつちまうわけだよなあ……)

「……」

(……50年、か……)

自分のなかには、どこかに、ぽっかりと空洞がある。

みえそうで、みえない……ぼやけて、霞みがかつた……あの広く大きな背中。
足りない、かけらたち。

それが何なのかすら、わからないまま……

もう、ながいこと。

(ま、……贅沢つてもんさ)

とうに諦めたことだった。

この50年、しあわせだった。もちろん現^{いま}在も。
すぎるほど、しあわせなのだ。おれは、ずっと

愛する家族……妻、娘……そして、孫たちにまで恵まれて。

未来につながりゆく、受け継がれてゆく……魂。

そう。これ以上、なにを望むというのか。

「……おつとー！」

そのときだった。

横を通り過ぎようとしたひとりの男が座っているおれにぶつかる。

「……ふん。こんな人が多いところでデカイ肩いからせてぼーつとんとんじやないわーい」

「はあ!? なんだと……この野郎！ てめーからぶつかってきたんだらうがー！」

とんだ言いがかりをつけてくる男に、おもわず立ち上がる。

そつちの方こそ、やたらとガタイがいい……同年代くらいの初老の欧米人だった。

どこかの富豪なのかもしれない。身に着けているスーツなども一級品であった……が、どこか軽そうな……

若い頃は大層トツポイ感じだったにちがいない。

理不尽極まりないその言い草は勿論ではあるがそれのほか……その男をみた瞬間、なぜか、直感で思った。

こいつ、いけ好かない……と。

記憶にない男に対し、なぜそんなふうにおもったのか……自分でも戸惑っていた。

「……おおーつとおツ!!」

すると、信じられない出来事が起こる。

「……ぶはっ!!」

男がよろけてテーブルにぶつかつた瞬間、虹がみえた。

噴水のように卓上のグラスから水が噴き出し、おれの顔に勢いよく降り注ぐ。

「……なっ!?!」

(な、なんだ……? ……『手品』……?)

いや……この……、感じ……、この、エネルギーは……)

「オーマイゴッド! 急に水が!!」

こりやーいったいどうしたことじやろうかあ!?

たいへんじやのーう!

ま、これが水もしたたるイイ男ってやつかのう! ししし……!」

「て、てめえ! くそッ! ふざっ……」

「……しかたがない」

しかし、どこまでもふぎけているのかと思いきや……

男は今までどうつてかわつた真剣な表情で懐から『なにか』を取り出す。

「……『それ』……、使つていいぞ」

そして、いけ好かないそいつが投げてよこしたのは、一枚の……

「……………」『これ』、は…………ツ!？」

「わ、わかるのか…………!？」

「……………」

沈黙ののち、どうにか、口を開く。

「……………しらねーな。」

しらねーよ、こんな、古びた、布つきれなんて……………」

「……………。そうか。そうじゃな……………。そうだよな……………」

「まあ……………」

「……………田舎者イナカモンのおまえには、お似合いだがな」

「……………え!？」

「こんなもん……………、後生大事に持つてんじゃねーよ……………!　　つたく……………」

「なあ? ……JOJO?」

「お! おお!!」

ああ! ああ!! そうだとも!!」

「……シーザー!!」

「……JOJO!!」

「まいったのー、心残りが、すべて解消してしもうたわい。

わし、もうすぐ死ぬんじゃないか……」

「へっ! らしくねーな。そんなこと心配してんのかよ、JOJO!」

生きてる限り、楽しみなんてまだまだたくさん出てくるもんさ」

「……そうだな。また、新しくみつければいいんじゃない……な」

「なら、手始めは……シーザー、おまえの孫娘の花嫁姿かのう! にしし!!」

「ああ!?! なんだと!?!」

んなの、許した覚えねーぞ!!

くそー! あいつ、おれのエンジェルを!!」

「え……………」

「まあ、その…………ちつとは骨のある野郎だったのは認めてやらんこともないが……

いーやー! しかし、おれの目の黒いうちは、指一本触れさせん!

んなことしてみろ! 真つ黒に感光させてやるぜ!」

「まじか…………」

憐れ…………花京院。ほんに不憫な男じやのう…………。ぷっ!!」

「…………アツ! そうだ、J O J O! リサリサ先生ツ!! 先生は御息災かツ?!」

「い、痛い痛い! おちつけつてーの!! ふっ…………ああ。勿論。嫌になっちゃうくらいな」

「そ、そうか!! 今度会わせてくれ! あ、ついでにエアサプレーーナ島にも行きてえな
!」

「はあ? あいかわらずマゾじやのう。もうわし思い出したくもない…………」

「おい! ずっと思い出せなかつたおれの身にもなれよ」

「そっか。そーじやつたな! ししし…………!」

「へっ！ ……つたく！」

「よし！ そうと決まったら、善は急げ、じゃ！」

とつとと行くぞツ!!」

「はあ!? い、今から!？」

あツ！ おい、まてよツ!!」

いうがはやいか、すでに駆けだしている……親友、の、その背中に向け、呟く。

「へっ！ 前言撤回。ちつとも変ってねーな、J O J Oのやつ!!」

*

*

*

キーンコーンカーンコーン……と鐘の音が鳴り響く。

「……よしきたツ！ では僕はお先に失礼するツツ！ お疲れ様！」

その叫びと共に夕刻のオフィスの巻き起こる、一陣のつむじ風。

「……戻りましたー、って……うおっ?! あっちいー!! い、今のは？ フェーン現象

?」

「ちがうちがう。主任よ。アンタの尊敬してやまない、主・任」

「しゆ、主任……？ は、はっや……！ あれ？ あのひとが定時上がりなんて、珍しいすね」

「ああ、今日はしかたないんじゃない？ 奥さん有給とって早退してるし」

「あ、そっか、そうでしたね。それもまた珍しい……」

「そうね、いつつ遅くまでふたりで研究してるものね……いちやいやと。本人らに自覚はないけれど」

「ええ。でも、またそれで結果出しちゃうのがすごいですよね。」

「聞きました？ 愛の結晶代わりの新しい論文、あの『ネイチャー』にアクセプト決まっただらしいですよ」

「知ってる知ってる。研究所初の快挙だって、支部長のおんな浮かれ顔初めて見たわ」

「ほんと、我が部署の名物ばけもん夫婦ですよね……」

「……ふふつ、わたしたちの自慢の、ね！」

*

*

*

茜色のぬくもりを背中に感じながら、家までのびる、ながいながい坂道を、歩く。かみしめるように、ゆっくりと。

どうやって、伝えようか……そんなことを考えながら。
ふしぎなものだ。

まだ夢みたいなのに、こんなにもちがうものなのか。
ふわふわしているのに、なんだか一歩一歩がとても、『おもいもの』にかんじた。

「……あー」

坂を登り切り、門に手をかけた瞬間、猛スピードで滑り込んでくるのに気づく。

我が家の愛車が。

慣れきったハンドル操作で（普段よりも二割増しの速さで）機敏に駐車を終えるなり、
飛び出てきたひとに声をかける。

「おかえりなさい！ おしごとお疲れさまでした！」

「……ふっ！ ……ただいま」

すると、なぜだかうれしそうにふわりとわらう彼。

（うっ……！）

その表情に、いつまでたっても慣れない私。

性懲りもなくこっさり胸を高鳴らせていると、私の手元に視線をうつした彼にいわれる。

「あ！ もう！ これからは買い物は僕がするっていったのに！

だめじゃあないか！ ほら、荷物貸して！」

「えー？ 荷物って……牛乳だけだよ？ だいじょうぶだよ……もう。

……ありがとう」

私の手の中のものをやさしくすべて奪い取ったのち、逸る気持ちを抑えきれない様子でいう。

「で、その、……い、行ってきたかい？ びよ……病院」

「……もちろん。」

ちやんと、行ってきたよ」

「そ、それで……!? ど、どうだった?！」

「……うん、あのね……」

「……三ヶ月……だって」

「ほ、ほんとに?!」

「……うんっ！」

「やった……！ やったツツ!! ばんぎー!!」

「きやつ！　ちよ、だ、だめだって！　こ、ここまだ外つ！　ご、ご近所さんに……」
「かまわんツ！　かまうもんか!!　こんなおめでたいことを前に、そんなこと気にしてられるかツ！」

「ふっ！　もう……！」

「ここに……いるんだ。ほんとうに……僕たちの……」

「……うん」

やさしく、そつとあてがわれたてのひらのぬくもりに、こころまでじんわりとあたためられていく。

実感とともにふつつつと湧いてくる、よろこび。

「……待ち遠しいよ。来年の今頃には3人家族になるんだね」

「……あ」

「……ん？」

「……ごめん。それ、ちがう……」

「は？」

「……そうじゃないの」

「な、なに？　どういうこと？」

「えつと……『3人』……じゃあ、ないみたいなんだ」

「…………へ？」

「『ふたり』いるの。ここに」

「え!? そ、それって! ま、まさか……」

「うん。……双子、なんだって」

「ほ、ほんとうかい!？」

「ん、……ほんとう」

「…………す、すごいな! どうしよう!

もう、嬉しさも幸せも……なにもかも完全に二倍増しじやあないか!!」

「あつ! ちょ!! だ、だから、ここ外だって!!」

再びぎゅつと抱きしめられる。

「…………ああ、はやく、あいたいな。」

男の子かな? 女の子かな?」

「ふふ、……両方、だったりして」

「そ、そうか! その可能性もあるのか!」

「…………うーん。なんか、そんな気がするんだよね……」

お腹に手をあてつつ、応える。

「ふつ! きみの直感はあてになるからなあ。」

……そうかもね。

まあ……元気なら、どっちでもいい」

「……ん、私も……」

「……仁美」

そうして、彼はこちらにむけてくれる。

出逢ったあの頃となにひとつかわらない……

私のだいきな、きらきらとかがやく、まつすくなまなざしを。

「……ありがとう。」

きみは、いつもくれる。……僕に、たいせつな……」

微笑み涙ぐむ、彼のすがたをみて、じぶんもこみあげてくる、あたたかい……。

「……ふ、ふっ……!」

「……どうしたの?」

「ううん。またおんなじこと考えてたなあつて。」

そんなの、こちらこそ、だよ……。

ほんとうに、ありがとう……典明くん」

そう。あなたはいつも、私にくれるの。

「ああ、また、ふえちやったなあ……」

「ん？ なにか？」

たくさんの、かけがえのないもの。護りたいもの。

そして……

「……私の生まれた理由」

To be continued……

……in their gained radiant days , forever !!

*

*

*

「……そんなわけで、長い長い旅路の果てに、男は失ってしまった『たいせつななにか』

をちゃんと取り戻すことができたのでした。めでたしめでたし。チャンチャン」

僕の『おはなし』を聴き終えたのち、心優しい彼はいいにくそうに口を開いた。

「……………えつと……………、あのさ、父さん？」

「なんだい？」

「その『男』ってさ……………父さんのことだよね？」

「さあ？ ご想像にお任せするよ」

「いや、想像も何も、普通に話の中で何回も『花京院典明』って父さん言っちゃってたじゃん……………」

「そうだっけ？ ふふ、忘れてしまったな」

「はあ、まったく……………」

「ちなみに、この男の現在だけ……………」

取り戻した『愛するひと』と結婚して、かわいすぎる子どもたちを授かって……………」

世界中のだれよりもしあわせに暮らしているらしいよ？」

「ああ、そうだろうね……………すごくよくしってる。多分世界中で二番目か三番目くらいにやりとそんなふうに戻してくる利発な彼に、伝える。」

「……………だから、心配しなくていい」

「……………え？」

「きみは、母さんによく似て真面目で周囲に気を遣い過ぎてしまうから……今は『能力』のことが、重荷になっている。そうかもしれない」

「……」

「でも、あきひと明仁。きみにも……現れる。いつの日か、ちゃんと」

「このおはなしの『男』みたいに……ね」

「……ッ！」

「……ありがとう、父さん」

「ん？ なんのことやら。」

さ、すっかり遅くなってしまったね。

もう眠れるだろう？」

「うん」

「よかった。じゃあ……ゆっくりおやすみ」

「おやすみなさい」

軽い足取りで階段をのぼる音が小さくなっていく。

静けさを取り戻した部屋に、そのあとそつと響く、カチャリ、とドアノブを回す音。

「……やっぱり聞いていたのかい？」

「……ん」

「盗み聞きはよくないな」

「ふふ、ごめんね。」

……ありがと」

「……なんのことやら。」

まったく、親子そろって同じことをいうんだから」

「ふふ……」

「ふっ……！」

どちらともなくソファにいつものようにふたりならんで腰かけると、僕の肩にそつと頭をもたげる。

抱き寄せて心地よい重みとあたたかさを感じながら、長くて艶やかな黒髪をさらさらと指ですいて楽しんでいると、上目遣いでみつめられる。

「ねえ、典明くん？」

「なんだい、仁美？」

「さっきのね、ひとつだけ、訂正を要求します」

「訂正？ なにかな？」

「訊ね返すと何故だかとも誇らしげに咲きほこる。

「……世界でいちばんしあわせなのは、私だよ？」

「僕……僕だけの、一輪の花。

「ふっ！ そうなの？ でも、僕もそこは……ゆずれないな」

「私も、ゆずれない……ふふ」

「決しておわることはないふたりの口論の果てに、彼女からひとつの提案がもたらされる。

「しかたないなあ。じゃあ、ふたりともいちばん……ってことで。どうかな？」

「ああ……」

「……それは実に、いいアイディアだ」

「失敗しても、失っても……」

「乗り越えようと……」

「取り戻そうと……」

あきらめなければ、いつかきつと。

あせらなくてもいい。自分らしくでいいんだ。
いつか、みつかるから。

きみにも、『たいせつななにか』が。

花京院典明は、失ったたいせつななにかを取り戻して……しあわせに暮らしているよ
うです。